

栃木県埋蔵文化財調査報告第 383 集

横倉遺跡・横倉戸館古墳群

—快適な道づくり事業費（交付金）一般県道矢畑横倉新田線横倉工区に伴う発掘調査—

2016. 3

栃木県教育委員会
公益財団法人とちぎ未来づくり財団

よこくら いせき よこくら とだて こふんぐん
横倉遺跡・横倉戸館古墳群

—快適な道づくり事業費（交付金）一般県道矢畑横倉新田線横倉工区に伴う発掘調査—

2016. 3

栃木県教育委員会
公益財団法人とちぎ未来づくり財団

序

横倉遺跡・横倉戸館古墳群は、栃木県の南東部にあたる小山市に位置しています。遺跡周辺は茨城県との境となる西仁連川によって開析され、古来より人々の生活に適した豊かな台地が広がっています。

このたび、栃木県県土整備部が実施する快適な道づくり事業（補助）一般県道矢畑横倉新田線建設工事に先立ち、路線内に所在する横倉遺跡・横倉戸館古墳群の取り扱いについて、関係各機関と協議の上、記録保存を目的とした発掘調査を行いました。

発掘調査では、旧石器時代から近世に至る数多くの遺構や遺物が確認されました。特に、古墳時代前期に築造された古墳の発見は、栃木県における古墳時代の始まりを考えるうえで、貴重な例となりました。

本報告書はその調査成果をまとめたものです。本書が県民の皆様にとりまして、郷土の歴史を理解する一助となるとともに、各方面において広くご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成にいたるまで、多大な御指導・御協力をいただきました栃木県県土整備部、小山市教育委員会をはじめとする関係機関、並びに関係各位に対しまして、厚くお礼を申し上げます。

平成 28 年 3 月

栃木県教育委員会

教育長 古澤利通

		誤	正	
P i	7行目	3月28日	3月27日	
	18行目	3月28日	3月30日	
	22行目	3月28日	3月30日	
	28行目	3月28日	3月30日	
P ix	図版三	(直上から)	(真上から)	
P x	図版一八	航空写真完掘	完掘航空写真	
P x	図版二四	古墳時代 円墳 1	古墳時代 方形周溝墓 3 円墳 1	
	図版二四	航空写真完掘	完掘航空写真	
P3	20行目	平成26年4月30日	平成27年3月30日	
P5	32行目	平成27年3月31日	平成27年3月30日	
		平成28年3月31日	平成28年3月30日	
P9	本文1行目	県中央部南東端	県南部	
P22	P-94挿図番号	第264図	第265図	
	P-207挿図番号	第259図	第265図	
P36	SI-76Pit深度 旧Pit番号	P13	P5	
		P12	P6	
		P11	P7	
		P10	P8	
		P9	P9	
		P5	P10	
		P6	P11	
		P8	P12	
		P7	P13	
		(P5～P13の番号は新旧で不変)		
		P42	35行目	第81図37
P50	7行目	隆体	隆帯	
P58	19行目	第42図	第40図	
P71	11行目	SK-145	P-145	
	12行目	146・147・151・168	146・151・168 (147をトル)	
P102	7行目	第74図1～13	第74図1～12	
P142	17行目	第108図	第109図	
P144	11行目	第112図右の	第112図右下の	
P149	9行目	(遺構図23)	(第25図1)	
P156	19行目	確認されない	明瞭ではない	
	35行目	技法状	技法上	
P191	第9表第149図1の重量欄		6.43(g)	
P198	12行目	図版一九	図版一八	
P205	2行目	9層からは	9層及び墳丘下⑨層からは	
	5～6行目	6・7層は、	⑥・⑦層は、	
P218	12行目	「U」字型	「U」字形	
P236	5行目	8点	9点	
P238	本文1行目	第23・24表	第24・25表	
P253	8行目	20cm程の	径20cm程の	
P256	9行目	主軸方向へ	北方向へ	
	10行目	主軸底面に	連結部底面に	
P261	4行目	図示していないが	(トル)	
P262	3行目	N-8°	N-38°	
P263	セクション図C-C'	表土	SA2覆土	
	4行目	N-60° -W	N-60° -E	
P266	5行目	主軸長が3.8m	主軸長が3.0m	
		副軸長が3.0m	副軸長が3.8m	
	10行目	第213図	第214図	
P269	22行目	図示していないが	(トル)	
P269	31行目	大型の	大形の	
P281	第42表 出土位置の欄	No.1	SK96b No.1	
P286	4行目	第229～239・243図	第4・229～239・243図	
	37行目	(・整地層)	(整地層)	
P316	4行目	3は肥前系の丸型碗	4は肥前系の丸形碗	
P321	8行目	礫を含む多孔質安山岩	多孔質安山岩	
P328	16行目	最堆積	再堆積	
P333	第259図 SK-18図内	SK-94	P-94	
	11行目	図示していないが	(トル)	
	17行目	図示していないが	(トル)	
	29行目	図示していないが	(トル)	
P334	33行目	図示していないが	(トル)	
	3行目	図示していないが	(トル)	
P335	図 SK-24図内土層 (土層説明も)	1	I	
		2	II	
		3	III	
		4	1	
		5	2	
		6	3	

		誤	正
P336	3行目	図示していないが	(トル)
	23行目	図示していないが	(トル)
	9行目	図示していないが	(トル)
P338	33行目	図示していないが	(トル)
	38行目	図示していないが	(トル)
P339	10行目	図示していないが	(トル)
	13行目	図示していないが	(トル)
P342	29行目	第260図	第265図
P351	36行目	第5表	第75表
P406	26行目	1)	1)
P407	33行目	IntCal132) OxCal4. 23)	IntCal13 ²⁾ OxCal4. 2 ³⁾
P408	2行目	2)	2)
	9行目	4)	4)
P413	31行目	図版2-91	図版2-9
P414	26行目	表4	表5
P421	写真16 キャプション	古代	古墳時代
P423	本文8行目	他の頁岩や流紋岩	流紋岩
	4行目	SK-101の	中世の土坑SK-101の
P424	5行目	279図	108図
	28行目	第13図	第14図
P425	11行目	(S-64ピット群)	(第43図S-64ピット群)
P426	35行目	第280、	第280図、
P427	6行目	構築の住居	複数回構築の住居
	17行目	(第76表)	(第76～79表)
P428	27行目	ゾーン②が多い	ゾーン①～②が多い
P429	9行目	(第281図)	(第281～283図)
	19行目	第70図	第81図
P430	20行目	第91図	第102図
	20行目	第102図	第113図
P439	29行目	少礫	小礫
	31行目	縦方向	横方向
	6行目	やや大型のハソウ	長頸壺
P443	第286図中キャプション	SZ-66 (横倉戸館10号墳) SZ-67 (横倉戸館9号墳)	SZ-66 ()をトル SZ-67 (横倉戸館10号墳)
	10行目	およびSZ-66の	および墳丘下、SZ-66の
P444	19行目	第193図2	第195図2
	21行目	第193図5・8・9	第195図5・8・9
	21行目	第193図1・2・6	第195図1・2・6
	24行目	第193図13・14	第195図13・14
P445	11行目	掘立柱建物	掘立柱建物跡
	15行目	第282図	第288図
P446	19行目	第293図	第231図
	38行目	(第232図35、図版四三)	(第243図5、図版七五)
P448	10行目	図版七五	図版七六
	12行目	第247図3	第247図4
写真図版三	上段キャプション	(直上から)	(真上から)
写真図版一八	二段左キャプション	航空写真完掘	完掘航空写真
写真図版二四	キャプション	円墳1	方形周溝墓3 円墳1
写真図版五四	下段キャプション	不掲載遺物	未実測遺物
写真図版五八	下段写真内番号	101-24	101-27
	二段左写真内番号	125-9	125-8
写真図版六一	二段右写真内番号	125-8	125-9
	三段左写真内番号	137-5	137-8
写真図版六二	四段右写真内番号	(空欄)	146-11
写真図版六三	三段右写真内番号	178-14	178-15
写真図版六八	二段中央写真内番号	170-6	170-7
	三段左写真内番号	195-17	196-51
写真図版七一	四段左写真内番号	195-17	196-51
	二段中央写真内番号	232-8	232-36
	四・五段左写真内番号	232-44, 232-48, 232-45, 232-49, 232-50	233-44, 233-48, 233-45, 233-49, 233-50
	六・七段左写真内番号	232-44, 232-48, 232-45, 232-49, 232-50	233-44, 233-48, 233-45, 233-49, 233-50
写真図版七五	五段左写真内番号	242-2	242-3
	七段中央写真内	243-3針金	243-5銅線
写真図版七九	下段キャプション	近世の出土土器	近世の出土遺物

例 言

1. 本報告書は、栃木県小山市横倉地内に所在する横倉遺跡・横倉戸館古墳群の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、快適な道づくり事業費(交付金)一般県道矢畑横倉新田線横倉工区に伴う記録保存調査であり、栃木県県土整備部からの委託事業として栃木県教育委員会の指導のもとに、公益財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 本遺跡の発掘調査および整理・報告書作成にかかわる期間ならびに担当者は次のとおりである。

平成 25 年度 発掘調査(発掘)

期 間 平成 25 (2013) 年 4 月 1 日～平成 26 (2014) 年 3 月 27 日

担当者 調査課

課 長 芹澤 清八

係 長 江原 英

嘱託調査員 市川 岳朗

嘱託調査員 齊藤 達也

整理課

嘱託調査員 大野 淳史

普及資料課

嘱託調査員 猪瀬亜紗美

平成 26 年度 発掘調査(整理)

期 間 平成 26 (2014) 年 4 月 1 日～平成 27 (2015) 年 3 月 30 日

担当者 整理課

係 長 江原 英

平成 26 年度 発掘調査(発掘・整理)

期 間 平成 26 (2014) 年 5 月 1 日～平成 27 (2015) 年 3 月 30 日

担当者 整理課

係 長 江原 英

調査課

嘱託調査員 大木 丈夫

平成 27 年度 発掘調査(整理・報告)

期 間 平成 27 (2015) 年 4 月 1 日～平成 28 (2016) 年 3 月 30 日

担当者 整理課

嘱託調査員 齊藤 達也

4. 本書の執筆および編集にかかわる作業は第三章 3 節の遺物および第 V 章の縄紋時代を江原が、それ以外は、旧石器を芹澤清八、弥生土器を藤田典夫・亀田幸久・中三川渉、古墳時代の土師器および鉄製品を中村享史・内山敏行、古代の土師器を津野仁・池田敏宏、中世および近世の陶磁器(又は遺物)を池田敏宏・武川夏樹、以上の方々の協力を得て江原の補助のもとに齊藤が行った。
5. 遺構写真は現場担当者が、遺物写真は小川忠博に委託し、一部を齊藤が撮影した。遺物の X 線写真撮影は車塚哲久、遺跡航空写真は中央航業株式会社が撮影した。
6. 発掘調査から報告書作成に至るまで、下記の委託業務を行った。

(発掘調査)

海老沼建設株式会社(表土除去・埋め戻し)、中央航業株式会社(基準杭打設、三次元写真解析図化、RC へリコプターによる空中写真撮影)、株式会社パレオ・ラボ(樹種同定および放射性炭素年代測定 AMS 法)

株式会社火山灰考古学研究所（テフラ分析）

（整理・報告書作成）

穴澤義功（鍛冶関連遺物の整理・分析）、小川忠博（遺物写真撮影）、日鉄住金テクノロジー株式会社八幡事業所 TAC センター（鉄関連遺物の分析調査）、パリノ・サーヴェイ株式会社（岩石肉眼鑑定）、中央航業株式会社（全体図作成）、株式会社ラング（石器実測）

7. 発掘調査に伴う現地作業の実施にあたり、下記の方々のご協力をいただいた。（敬称略、五十音順）

阿久津 慧	阿久津よしい	阿部 孝志	池沢 恵子	稲村 吉光	岩本 文子
梅原美代子	大澤 光弘	大関 薫	大関 すい	大関スイ子	片野 廣
岸 信子	佐藤 常幸	島田 敦子	鈴木 勇	鈴木 久美	鈴木 順子
瀬下 勇夫	高橋 友美	滝田 三好	田ノ岡大典	土井 悦子	中島 悦子
野口 勝好	藤森 歩見	藤森 勝紀	本橋 茂夫	山中 タイ	横山 政雄

8. 整理作業・報告書作成に際し、次の方々にご協力をいただいた。（敬称略、五十音順）

赤羽根潤子	石田 静枝	生内 千春	君島みどり	熊谷 早苗	佐久間京子
田村 範子	長 道子	斗沢 史子	和田 恵美		

9. 発掘調査の実施ならびに報告書作成にあたり、下記の諸機関ならびに諸氏からご教示およびご協力をいただいた。（敬称略）

栃木県県土整備部栃木土木事務所 小山市教育委員会 栃木県考古学会

小山市文化財保護審議委員会

秋山 隆雄	石橋 宏	上野 修一	海老原郁雄	大関 佑一	川又隆一郎
栗原 淳	小林 謙一	今平 利幸	眞保 昌弘	鈴木 君江	鈴木 隆雄
鈴木 芳英	竹澤 謙	野口 静男	橋本 澄朗	藤貫 久子	

10. 本遺跡の概要については、既に栃木県教育委員会文化財保護行政年報 36、公益財団法人とちぎ未来づくり財団 埋蔵文化財センター年報第 24 号において報告しているが、本書をもって正式報告とする。

11. 本遺跡の出土遺物および記録類については、公益財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センターが保管している。

凡 例

1. 横倉遺跡・横倉戸館古墳群にかかわる遺跡略号および遺物注記は、OY (Oyama) -YK (Yokokura) である。

2. 遺構

- 1) 遺構実測図中に示した方位は国土法座標の北を表示する。
- 2) 各遺構の縮尺は基本的に竪穴建物跡・土坑を 1/80 とし、これに外れるものは適宜明記した。
- 3) 遺構の表示は SA (土塁)、SB (掘立柱建物跡)、SD (溝跡)、SI (竪穴建物跡)、SK (土坑)、P (ピット)、ST (壺棺墓)、SU (遺物集積)、SX (性格不明)、SZ (古墳・方形周溝墓) とした。
- 4) 各遺構の番号は、原則として現地調査時のものを使用している。ただし、古墳については小山市教育委員会と調整の上、横倉戸館古墳群の古墳番号を新たに発番した名称も併記する。

SZ-1 = 横倉戸館 8 号墳

SZ-27 = 横倉戸館 9 号墳

SZ-67 = 横倉戸館 10 号墳

- 5) 土層堆積図中の番号は必ずしも堆積順序を示すものではない。
- 6) 遺構図版中のスクリーントーンは以下を示す。

焼土



粘土



砂



3. 遺物

- 1) 実測図は、縄紋土器・弥生土器は 1 / 3、その他の土器は 1 / 4、石器は 1 / 3、鉄製品は 1 / 3、ガラス製品は 1 / 2 を基本とし、図中にスケールを示した。
- 2) 実測図中の遺物番号は、遺構実測図および観察表、写真図版に対応する。
- 3) 遺物観察表中の胎土は肉眼観察によるもので、鉾物・砂粒の量についても一定の含有量を定めた基準を設けてはいない。
- 4) 遺物の色調は「新版標準土色帖」(財) 日本色彩研究所 色票監修を参考とし記入している。
- 5) 遺物図版中のスクリーントーンは以下を示す。赤彩に関しては、赤のトーンで表すこととする。

黒色処理



目次

序

例言

凡例

第 I 章 調査の経緯

- 第 1 節 調査に至る経緯 1
- 第 2 節 調査の方法と経過 3

第 II 章 遺跡の環境

- 第 1 節 地理的環境 9
- 第 2 節 歴史的環境 10

第 III 章 検出された遺構と遺物

- 第 1 節 調査成果の概要 16
- 第 2 節 旧石器時代の調査と遺物 23
- 第 3 節 縄紋時代の遺構と遺物 26
 - 1. 竪穴住居跡 26
 - 2. 溝跡・土坑・ピット 56
 - 3. 縄紋土器 73
 - 4. 土製品 148
 - 5. 石器 156
- 第 4 節 弥生・古墳時代の遺構と遺物 198
 - 1. 方墳 198
 - 2. 方形周溝墓 218
 - 3. 円墳 223
 - 4. 土器棺墓 230
 - 5. 溝 232
 - 6. 性格不明遺構 233
 - 7. 弥生・古墳時代遺構外遺物 235
 - 8. 横倉戸館 1 号墳の調査 238
- 第 5 節 古代の遺構と遺物 244
 - 1. 竪穴建物跡 244
 - 2. 古代遺構外遺物 250

第6節 中世の遺構と遺物	253
1. 掘立柱建物跡	253
2. 地下式坑	255
3. 土坑・ピット	274
4. 中世遺構外遺物	284
第7節 近世以降の遺構と遺物	286
1. 土塁・堀跡	286
2. 溝跡	308
3. 土坑・ピット	315
4. SZ-1 墳頂部集石遺構	318
5. 近世以降遺構外遺物	323
第8節 時期不明の遺構	328
1. 溝跡	328
2. 集石遺構	330
3. 土坑・ピット	332
4. 時期不明遺構外遺物	349
第9節 横倉遺跡・横倉戸館古墳群出土鍛冶関連遺物について	351
第IV章 理化学分析	
1. 横倉遺跡・横倉戸館古墳群のテフラ分析	368
2. 横倉遺跡・横倉戸館古墳群から出土した炭化種実	383
3. 横倉遺跡・横倉戸館古墳群の植物珪酸体分析	386
4. 横倉遺跡・横倉戸館古墳群出土遺構より採取した土壌のリン・カルシウム分析	390
5. 放射性炭素年代測定	396
6. 横倉遺跡・横倉戸館古墳群出土鉄関連遺物の分析調査	399
7. 横倉遺跡出土試料の ¹⁴ C年代測定と較正年代	406
8. 横倉遺跡・横倉戸館古墳群発掘調査に係る岩石肉眼鑑定業務	411
第V章 総括	423

挿図目次

第1図 遺跡位置図	2	第10図 調査区設定図	23
第2図 調査区位置図	4	第11図 遺物出土状況図	24
第3図 グリッド位置図	6	第12図 石器実測図	25
第4図 トレンチ配置図	7	第13図 SI-76 遺構実測図(1)	28
第5図 栃木県の地勢概念図	9	第14図 SI-76 遺構実測図(2)	29
第6図 小山市の地勢	9	第15図 SI-76 遺構実測図(3)	30
第7図 周辺遺跡分布図	11	第16図 SI-76 遺構実測図(4)	32
第8図 基本層序	16	第17図 SI-76 遺構実測図(5)	33
第9図 横倉遺跡・横倉戸館古墳群 全体図	17	第18図 SI-76 炉実測図	34

第 19 図	SI-76 遺物出土状況図	35	第 78 図	ゾーン②遺物実測図 (5)	110
第 20 図	SI-76P10 遺物出土状況図	36	第 79 図	ゾーン②遺物実測図 (6)	111
第 21 図	SI-76 遺物実測図 (1)	37	第 80 図	ゾーン②遺物実測図 (7)	112
第 22 図	SI-76 遺物実測図 (2)	38	第 81 図	ゾーン②遺物実測図 (8)	113
第 23 図	SI-76 遺物実測図 (3)	39	第 82 図	ゾーン②遺物実測図 (9)	114
第 24 図	SI-76 遺物実測図 (4)	40	第 83 図	ゾーン②遺物実測図 (10)	115
第 25 図	SI-76 遺物実測図 (5)	41	第 84 図	ゾーン②遺物実測図 (11)	116
第 26 図	SI-73 遺構実測図	43	第 85 図	ゾーン②遺物実測図 (12)	117
第 27 図	SI-73 炉実測図	44	第 86 図	ゾーン②遺物実測図 (13)	118
第 28 図	SI-73 遺物出土状況図	45	第 87 図	ゾーン②遺物実測図 (14)	119
第 29 図	SI-73 埋設土器遺物出土状況図	46	第 88 図	ゾーン②遺物実測図 (15)	120
第 30 図	SI-73 遺物実測図 (1)	46	第 89 図	ゾーン②遺物実測図 (16)	121
第 31 図	SI-73 遺物実測図 (2)	47	第 90 図	ゾーン②遺物実測図 (17)	122
第 32 図	SK-73b 遺物出土状況図	49	第 91 図	ゾーン②遺物実測図 (18)	123
第 33 図	SK-73b 遺物実測図 (1)	51	第 92 図	ゾーン②遺物実測図 (19)	124
第 34 図	SK-73b 遺物実測図 (2)	52	第 93 図	ゾーン②遺物実測図 (20)	125
第 35 図	SK-73b 遺物実測図 (3)	53	第 94 図	ゾーン②遺物実測図 (21)	126
第 36 図	SI-85 遺構実測図	55	第 95 図	ゾーン②遺物実測図 (22)	127
第 37 図	SI-85 遺物実測図	56	第 96 図	ゾーン②遺物実測図 (23)	128
第 38 図	縄紋時代土坑遺構実測図	59	第 97 図	ゾーン②遺物実測図 (24)	129
第 39 図	縄紋時代ピット遺構実測図	59	第 98 図	ゾーン②遺物実測図 (25)	130
第 40 図	縄紋時代土坑遺物実測図	62	第 99 図	ゾーン②遺物実測図 (26)	131
第 41 図	SK-74・83b・134・209・103a～c 遺構実測図	63	第 100 図	ゾーン③遺物実測図 (1)	133
第 42 図	縄紋時代土坑・ピット遺物実測図	64	第 101 図	ゾーン③遺物実測図 (2)	134
第 43 図	S-64 遺構実測図	65	第 102 図	ゾーン③遺物実測図 (3)	135
第 44 図	P-128b-e 遺構実測図	66	第 103 図	ゾーン③遺物実測図 (4)	136
第 45 図	SZ-1 墳丘下遺構実測図 (1)	68	第 104 図	ゾーン③遺物実測図 (5)	137
第 46 図	SZ-1 墳丘下遺構実測図 (2)	69	第 105 図	ゾーン③遺物実測図 (6)	138
第 47 図	SZ-1 墳丘下遺構出土遺物実測図 (1)	70	第 106 図	縄紋時代遺構外遺物実測図 (1)	139
第 48 図	SZ-1 墳丘下遺構出土遺物実測図 (2)	71	第 107 図	縄紋時代遺構外遺物実測図 (2)	141
第 49 図	ゾーン①遺物出土状況図 (1)	74	第 108 図	縄紋時代遺構外遺物実測図 (3)	143
第 50 図	ゾーン①遺物出土状況図 (2)	75	第 109 図	縄紋時代遺構外遺物実測図 (4)	145
第 51 図	ゾーン①遺物実測図 (1)	77	第 110 図	縄紋時代遺構外遺物実測図 (5)	145
第 52 図	ゾーン①遺物実測図 (2)	79	第 111 図	縄紋時代遺構外遺物実測図 (6)	146
第 53 図	ゾーン①遺物実測図 (3)	81	第 112 図	縄紋時代遺構外遺物実測図 (7)	147
第 54 図	ゾーン①遺物実測図 (4)	82	第 113 図	横倉戸館 1 号墳遺物実測図	147
第 55 図	ゾーン①遺物実測図 (5)	83	第 114 図	横倉戸館古墳群遺物実測図	148
第 56 図	ゾーン①遺物実測図 (6)	84	第 115 図	土製品実測図 (1)	150
第 57 図	ゾーン①遺物実測図 (7)	85	第 116 図	土製品実測図 (2)	151
第 58 図	ゾーン①遺物実測図 (8)	86	第 117 図	土製品実測図 (3)	152
第 59 図	ゾーン①遺物実測図 (9)	87	第 118 図	土製品実測図 (4)	152
第 60 図	ゾーン①遺物実測図 (10)	88	第 119 図	土製品実測図 (5)	153
第 61 図	ゾーン①遺物実測図 (11)	89	第 120 図	石器実測図 (1・石鏃)	157
第 62 図	ゾーン①遺物実測図 (12)	90	第 121 図	石器実測図 (2・石錐)	157
第 63 図	ゾーン①遺物実測図 (13)	91	第 122 図	石器実測図 (3・石匙)	157
第 64 図	ゾーン①遺物実測図 (14)	92	第 123 図	石器実測図 (4・楔形石器)	159
第 65 図	ゾーン①遺物実測図 (15)	93	第 124 図	石器実測図 (5・二次加工剥片)	159
第 66 図	ゾーン①遺物実測図 (16)	94	第 125 図	石器実測図 (6・二次加工剥片)	161
第 67 図	ゾーン①遺物実測図 (17)	95	第 126 図	石器実測図 (7・二次加工剥片)	163
第 68 図	ゾーン①遺物実測図 (18)	96	第 127 図	石器実測図 (8・二次加工剥片)	165
第 69 図	ゾーン①遺物実測図 (19)	97	第 128 図	石器実測図 (9・二次加工剥片)	166
第 70 図	ゾーン①遺物実測図 (20)	98	第 129 図	石器実測図 (10・使用痕ある剥片)	167
第 71 図	ゾーン①遺物実測図 (21)	99	第 130 図	石器実測図 (11・石核)	167
第 72 図	ゾーン①遺物実測図 (22)	100	第 131 図	石器実測図 (12・石核)	168
第 73 図	ゾーン①遺物実測図 (23)	101	第 132 図	石器実測図 (13・二次加工剥片等)	169
第 74 図	ゾーン②遺物実測図 (1)	104	第 133 図	石器実測図 (14・打製石斧)	169
第 75 図	ゾーン②遺物実測図 (2)	106	第 134 図	石器実測図 (15・打製石斧)	170
第 76 図	ゾーン②遺物実測図 (3)	108	第 135 図	石器実測図 (16)	171
第 77 図	ゾーン②遺物実測図 (4)	109	第 136 図	石器実測図 (17)	171

第 137 図	石器実測図 (18)	172	第 196 図	SI-75 鍛冶関連遺物実測図	247
第 138 図	石器実測図 (19)	173	第 197 図	古代遺構外遺物実測図	250
第 139 図	石器実測図 (20)	173	第 198 図	古代遺構外鍛冶関連遺物実測図	251
第 140 図	石器実測図 (21)	174	第 199 図	SB-108 遺構実測図	253
第 141 図	石器実測図 (22)	175	第 200 図	SB-120 遺構実測図	254
第 142 図	石器実測図 (23)	176	第 201 図	SK-77 遺構実測図 (1)	255
第 143 図	石器実測図 (24)	177	第 202 図	SK-77 遺構実測図 (2)	256
第 144 図	石器実測図 (25)	178	第 203 図	SK-77 遺物実測図	257
第 145 図	石器実測図 (26)	179	第 204 図	SK-82 遺構実測図 (1)	258
第 146 図	石器実測図 (27)	180	第 205 図	SK-82 遺構実測図 (2)	259
第 147 図	石器実測図 (28)	180	第 206 図	SK-82 遺物実測図	259
第 148 図	石器実測図 (29)	181	第 207 図	SK-86 遺構実測図	261
第 149 図	石器実測図 (30)	182	第 208 図	SK-86 遺物・鍛冶関連遺物実測図	262
第 150 図	SZ-1 現況コンター図	199	第 209 図	SK-87 遺構実測図	263
第 151 図	SZ-1 遺構実測図 (1)	200	第 210 図	SK-87 遺物実測図	263
第 152 図	SZ-1 遺構実測図 (2)	201	第 211 図	SK-95 遺構実測図	265
第 153 図	SZ-1 遺物出土状況図 (全体図)	202	第 212 図	SK-95 遺物実測図	265
第 154 図	SZ-1 遺物出土状況図 (1)	203	第 213 図	SK-96a 遺構実測図 (1)	267
第 155 図	SZ-1 遺物出土状況図 (2)	203	第 214 図	SK-96a 遺構実測図 (2)	267
第 156 図	SZ-1 遺物出土状況図 (3)	204	第 215 図	SK-96a 遺物・鍛冶関連遺物実測図	268
第 157 図	SZ-1 遺物出土状況図 (4)	205	第 216 図	SK-106 遺構実測図	269
第 158 図	SZ-1 遺物出土状況図 (5)	206	第 217 図	SK-115 遺構実測図	270
第 159 図	SZ-1 遺物出土状況図 (6)	207	第 218 図	SK-115 遺物実測図	270
第 160 図	SZ-1 主体部実測図	208	第 219 図	SK-116 遺構実測図 (1)	271
第 161 図	SZ-1 区分図	209	第 220 図	SK-116 遺構実測図 (2)	272
第 162 図	SZ-1 遺物実測図 (1)	209	第 221 図	SK-116 遺物実測図	273
第 163 図	SZ-1 遺物実測図 (2)	210	第 222 図	中世土坑遺構実測図 (1)	275
第 164 図	SZ-1 遺物実測図 (3)	211	第 223 図	中世土坑遺構実測図 (2)	277
第 165 図	SZ-1 主体部遺物実測図	212	第 224 図	SK-202 遺構実測図	279
第 166 図	SZ-1 主体部金属製品実測図	212	第 225 図	中世土坑遺物実測図	280
第 167 図	SZ-66 遺構実測図	219	第 226 図	中世土坑金属製品実測図	280
第 168 図	SZ-66 遺物出土状況図	220	第 227 図	P-97 ~ 99b・109 遺構実測図	282
第 169 図	SZ-66 区分図	221	第 228 図	中世遺構外遺物実測図	284
第 170 図	SZ-66 遺物・鍛冶関連遺物実測図	221	第 229 図	SA-2、SD-3 遺構実測図 (1)	287
第 171 図	SZ-66 主体部遺構実測図・鍛冶関連遺物実測図	222	第 230 図	SA-2、SD-3 遺構実測図 (2)	289
第 172 図	SZ-27 遺構実測図 (1)	224	第 231 図	SA-2、SD-3 位置図	291
第 173 図	SZ-27 遺構実測図 (2)	225	第 232 図	SA-2 遺物実測図 (1)	293
第 174 図	SZ-27 遺物実測図	225	第 233 図	SA-2 遺物実測図 (2)	295
第 175 図	SZ-67 遺構実測図	226	第 234 図	SA-2 遺物実測図 (3)	296
第 176 図	SZ-67 遺物出土状況図	227	第 235 図	SA-2 遺物実測図 (4)	297
第 177 図	SZ-67 区分図	228	第 236 図	SA-2 遺物実測図 (5)	298
第 178 図	SZ-67 遺物・鍛冶関連遺物実測図	228	第 237 図	SA-2 金属製品・ガラス製品実測図	299
第 179 図	SZ-67 鍛冶関連遺物実測図	229	第 238 図	SD-3 遺物実測図	299
第 180 図	ST-72 遺構実測図	230	第 239 図	SD-3 鍛冶関連遺物実測図	299
第 181 図	ST-72 遺物出土状況図	231	第 240 図	SD-4 遺構実測図	309
第 182 図	ST-72 遺物実測図	231	第 241 図	SD-4 遺物出土状況図	310
第 183 図	SD-117 遺構実測図	233	第 242 図	SD-4 遺物実測図	310
第 184 図	SX-119a 遺構実測図	233	第 243 図	SZ-1、SA-2、SD-3・4 遺物実測図	312
第 185 図	SX-119a 遺物出土状況図	234	第 244 図	SK-121 遺構実測図	315
第 186 図	SX-119a 遺物実測図	234	第 245 図	SK-121 遺物実測図	316
第 187 図	弥生・古墳時代遺構外遺物実測図 (1)	235	第 246 図	SK-130 遺構実測図	317
第 188 図	弥生・古墳時代遺構外遺物実測図 (2)	236	第 247 図	SK-130 遺物実測図	317
第 189 図	横倉戸館 1 号墳実測図 (1)	240	第 248 図	SZ-1 墳頂部集石遺構実測図	318
第 190 図	横倉戸館 1 号墳実測図 (2)	241	第 249 図	SZ-1 墳頂部集石遺構遺物実測図 (1)	319
第 191 図	横倉戸館 1 号墳遺物出土状況図	242	第 250 図	SZ-1 墳頂部集石遺構遺物実測図 (2)	320
第 192 図	横倉戸館 1 号墳遺物実測図	242	第 251 図	SZ-1 墳頂部集石遺構遺物実測図 (3)	321
第 193 図	SI-75 遺構実測図	244	第 252 図	SZ-1 墳頂部集石遺構金属製品実測図	321
第 194 図	SI-75 遺物出土状況図	245	第 253 図	近世以降遺構外遺物実測図 (1)	324
第 195 図	SI-75 遺物・鍛冶関連遺物実測図	246	第 254 図	近世以降遺構外遺物実測図 (2)	325

第 255 図	近世以降遺構外金属製品実測図	325	第 273 図	時期不明遺構外遺物・金属製品実測図	350
第 256 図	SD-70a・b 遺構実測図	329	第 274 図	鍛冶関連遺物構成図 (1)	352
第 257 図	SU-118 遺構実測図	330	第 275 図	鍛冶関連遺物構成図 (2)	353
第 258 図	SU-118 遺物実測図	331	第 276 図	鍛冶関連遺物実測図 (1)	354
第 259 図	時期不明土坑遺構実測図 (1)	333	第 277 図	鍛冶関連遺物実測図 (2)	355
第 260 図	時期不明土坑遺構実測図 (2)	335	第 278 図	鍛冶関連遺物実測図 (3)	356
第 261 図	時期不明土坑遺構実測図 (3)	337	第 279 図	横倉遺跡・横倉戸館古墳群 遺構変遷図 (縄紋時代)	425
第 262 図	時期不明土坑遺構実測図 (4)	339	第 280 図	SI-76 P7 土器出土状況図	427
第 263 図	時期不明土坑遺物実測図	340	第 281 図	地区別土器類別比率	429
第 264 図	時期不明土坑金属製品実測図	340	第 282 図	地区別土器類別比率 (型式判断分)	429
第 265 図	時期不明ピット遺構実測図 (1)	341	第 283 図	包含層遺物分布図	431
第 266 図	時期不明ピット遺構実測図 (2)	341	第 284 図	包含層石器分布図	433
第 267 図	時期不明ピット遺構実測図 (3)	343	第 285 図	横倉遺跡・横倉戸館古墳群 遺構変遷図 (古墳時代)	441
第 268 図	時期不明ピット遺構実測図 (4)	344	第 286 図	古墳時代遺構出土遺物構成図	443
第 269 図	S-107 遺構実測図	345	第 287 図	横倉遺跡・横倉戸館古墳群 遺構変遷図 (古代)	445
第 270 図	S-124 遺構実測図	345	第 288 図	横倉遺跡・横倉戸館古墳群 遺構変遷図 (中世・近世以降)	447
第 271 図	S-131 遺構実測図	347			
第 272 図	時期不明ピット遺物実測図	347			

表目次

第 1 表	周辺遺跡一覧表	15	第 37 表	SK-96a 遺物観察表	268
第 2 表	遺構一覧表	19	第 38 表	SK-96a 鍛冶関連遺物観察表	268
第 3 表	石器観察表	25	第 39 表	SK-115 遺物観察表	270
第 4 表	不掲載石器観察表	25	第 40 表	SK-116 遺物観察表	273
第 5 表	SI-76 遺物観察表	41	第 41 表	中世土坑遺物観察表	280
第 6 表	縄紋時代土坑計測表	71	第 42 表	中世土坑鍛冶関連遺物観察表	281
第 7 表	縄紋時代ピット計測表	72	第 43 表	中世土坑金属製品観察表	281
第 8 表	土製品遺物観察表	154	第 44 表	中世土坑計測表	283
第 9 表	石器観察表	182	第 45 表	中世ピット計測表	283
第 10 表	不掲載石器観察表	192	第 46 表	中世遺構外遺物観察表	285
第 11 表	SZ-1 遺物観察表	216	第 47 表	SA-2 遺物観察表	300
第 12 表	SZ-1 主体部遺物観察表	217	第 48 表	SA-2 金属製品観察表	307
第 13 表	SZ-1 主体部金属製品観察表	217	第 49 表	SA-2 ガラス瓶観察表	307
第 14 表	SZ-66 遺物観察表	222	第 50 表	SD-3 遺物観察表	308
第 15 表	SZ-66 鍛冶関連遺物観察表	223	第 51 表	SD-3 鍛冶関連遺物観察表	308
第 16 表	SZ-66 主体部鍛冶関連遺物観察表	223	第 52 表	SD-4 遺物観察表	310
第 17 表	SZ-27 遺物観察表	225	第 53 表	SZ-1、SA-2 遺物観察表	313
第 18 表	SZ-67 遺物観察表	229	第 54 表	SA-2、SD-3 遺物観察表	313
第 19 表	SZ-67 鍛冶関連遺物観察表	229	第 55 表	SA-2、SD-4 遺物観察表	314
第 20 表	ST-72 遺物観察表	232	第 56 表	SK-121 遺物観察表	316
第 21 表	SX-119a 遺物観察表	234	第 57 表	SK-130 遺物観察表	317
第 22 表	弥生・古墳時代遺構外遺物観察表	237	第 58 表	SZ-1 墳頂部集石遺構遺物観察表	322
第 23 表	弥生・古墳時代遺構外ガラス玉観察表	237	第 59 表	SZ-1 墳頂部集石遺構金属製品観察表	323
第 24 表	横倉戸館 1 号墳遺物観察表	243	第 60 表	近世以降遺構外遺物観察表	325
第 25 表	横倉戸館 1 号墳金属製品観察表	243	第 61 表	近世以降遺構外金属製品観察表	327
第 26 表	SI-75 遺物観察表	248	第 62 表	SU-118 遺物観察表	332
第 27 表	SI-75 鍛冶関連遺物観察表	249	第 63 表	時期不明土坑遺物観察表	340
第 28 表	古代遺構外遺物観察表	252	第 64 表	時期不明土坑金属製品観察表	340
第 29 表	古代遺構外金属製品観察表	252	第 65 表	時期不明ピット遺物観察表	347
第 30 表	SK-77 遺物観察表	257	第 66 表	時期不明土坑計測表	348
第 31 表	SK-82 遺物観察表	260	第 67 表	時期不明ピット計測表	348
第 32 表	SK-86 遺物観察表	262	第 68 表	時期不明遺構外遺物観察表	350
第 33 表	SK-86 鍛冶関連遺物観察表	262	第 69 表	時期不明遺構外金属製品観察表	350
第 34 表	SK-87 遺物観察表	264	第 70 表	時期不明遺構外遺物観察表	350
第 35 表	SK-95 遺物観察表	266	第 71 表	横倉遺跡・横倉戸館古墳群鉄関連遺物観察表 (まとめ)	357
第 36 表	SK-95 金属製品観察表	266			

第 72 表	横倉遺跡・横倉戸館古墳群鉄関連遺物観察表 (1) …	364	第 76 表	型式別土器集計表 ……………	428
第 73 表	横倉遺跡・横倉戸館古墳群鉄関連遺物観察表 (2) …	365	第 77 表	包含層ゾーン①出土土器集計表 ……………	435
第 74 表	横倉遺跡・横倉戸館古墳群鉄関連遺物観察表 (3) …	366	第 78 表	包含層ゾーン②出土土器集計表 ……………	436
第 75 表	横倉遺跡・横倉戸館古墳群鍛冶関連遺物主用要素一覧表 (まとめ) ……………	367	第 79 表	包含層ゾーン③出土土器集計表 ……………	437

図版目次

図版一	航空写真 1 調査区モザイク写真 調査区現況全景 (東から)		SI-76P73 土層堆積状況 (南から) SI-76P92・93 土層堆積状況 (東から) SK-60,SI-76P58・59 完掘 (東から)
図版二	航空写真 2 調査区全景 (東から) SI-76 周辺 (北東から)		図版一〇 縄紋時代 竪穴住居跡 5 SI-73 完掘 (南東から) SI-73 遺物出土状況 (北から) SI-73C-C' 土層堆積状況 (北から) SI-73 炉 1 焼土面 (西から) SI-73 炉 2 完掘 (北から) SI-73 炉 3 焼土面 (北から) SI-73 炉 3A-A' 土層堆積状況西半 (北から) SI-73 炉 3 粘土部アップ (南から)
図版三	航空写真 3 調査区中央部全景 (直上から) 横倉戸館 8 号墳 (SZ-1) および SA-2 (土壘)、SD-3 (堀跡) (東から)		図版一一 縄紋時代 竪穴住居跡 6 SI-73P2 土層堆積状況 (南から) SI-73P3 土層堆積状況 (南から) SI-73P7 土層堆積状況 (南から) SI-73 埋設土器土層堆積状況 (東から) SI-73 埋設土器完掘 (南東から) SK-73b 完掘 (北から) SK-73bM-M' 土層堆積状況・3 次面遺物出土状況 (東から) SK-73b2 次面遺物出土状況 (北から)
図版四	航空写真 4 調査区 SA-2 盛土下遺構群全景 (北西から) SZ-1 墳丘断ち割り状況 (北西から) 平成 26 年度調査区東側全景 (北東から) 平成 26 年度調査区西側全景 (東から) 平成 26 年度調査区西側全景 (北西から)		図版一二 縄紋時代 竪穴住居跡 7 SI-85 完掘 (南から) SI-85A-A' 土層堆積状況 (南から) SI-85B-B' 土層堆積状況 (東から) SI-85P1 土層堆積状況 (北から) SI-85P2 土層堆積状況 (南から) SI-85P6・7 土層堆積状況 (南西から) SI-85 焼土 A 土層堆積状況 (南から) SI-85 焼土 B 土層堆積状況 (東から)
図版五	旧石器時代 E13d グリッド基本土層平面状況 (西から) E13d グリッド基本土層 (南から) E11a グリッド旧石器調査区 (南から) E11a グリッド旧石器遺物出土状況 (南東から) E12c グリッド旧石器調査区 (南東から) E12d グリッド旧石器調査区 (東から) E12d グリッド旧石器調査区 (南東から) E12d グリッド二次加工剥片出土状況 (西から)		図版一三 縄紋時代 竪穴住居跡 8 土坑・ビット 1 SI-85 焼土 C 土層堆積状況 (南から) SI-85 遺物出土・焼土検出状況 (東から) SK-12 完掘 (南から) SK-46 完掘 (南から) SK-47 土層堆積状況 (南東から) SK-56 完掘 (東から) SK-68 確認状況 (東から) SK-68 土層堆積状況 (北東から)
図版六	縄紋時代 竪穴住居跡 1 SI-76 完掘 (東から) SI-76 完掘 (北東から) SI-76 平成 26 年度調査区完掘 (北東から) SI-76F-F' 土層堆積状況 (南東から) SI-76F-F' 土層堆積状況・遺物出土状況 (南東から)		図版一四 縄紋時代 土坑・ビット 2 P-49 土層堆積状況 (東から) P-69 土層堆積状況 (東から) SK-74 土層堆積状況 (南から) SK-83a・b,SZ-27 土層堆積状況 (北から) SK-134 土層堆積状況 (北から) SK-209 完掘 (北から) SK-103a 完掘 (南から) SK-103b 土層堆積状況 (西から)
図版七	縄紋時代 竪穴住居跡 2 SI-76 完掘 (西から) SI-76 炉 A-A' 土層堆積状況 (北から) SI-76 炉 B-B' 断ち割り土層堆積状況 (東から) SI-76 炉完掘 (北から) SI-76 遺物出土状況 (北東から)		図版一五 縄紋時代 土坑・ビット 3 SK-103b 完掘 (南西から) SK-103c 完掘 (南から) S-64P11 完掘 (南から)
図版八	縄紋時代 竪穴住居跡 3 SI-76 遺物出土状況 (北から) SI-76 遺物出土状況 (東から) SI-76 遺物出土状況 (東から) SI-76P7 土層堆積状況 (南から) SI-76P7 遺物出土状況 1 (東から) SI-76P7 遺物出土状況 2 (北東から) SI-76P7 遺物出土状況 3 (東から) SI-76P4 土層堆積状況 (東から)		
図版九	縄紋時代 竪穴住居跡 4 SI-76P5 土層堆積状況 (南から) E14c,S-64 ビット群全景 (南西から) E14c,S-64 ビット群全景 (南東から) SI-76P40 土層堆積状況 (北から) SI-76 東側ビット群全景完掘 (南西から)		

- S-64P14 土層堆積状況 (南から)
 S-64P18 土層堆積状況・完掘 (南から)
 SK-65 完掘 (南東から)
 P-128b～e 土層堆積状況 (東から)
 P-128b・d 土層堆積状況 (東から)
- 図版一六 縄紋時代 土坑・ピット 4
 SZ-1 墳丘下遺物出土状況 (北西から)
 SZ-1 墳丘下遺構群 (北から)
 SK-148 土層堆積状況 (西から)
 SK-150,P-151 土層堆積状況 (西から)
 P-152・153,SK-154・155 土層堆積状況 (西から)
 SK-156・157 土層堆積状況 (南から)
 SK-162a セクション (北から)
 SZ-1 墳丘下東側遺物出土状況 (南西から)
- 図版一七 縄紋時代 土坑・ピット 5 包含層
 SZ-1 墳丘下遺物出土状況 (北から)
 D3 グリッド包含層遺物出土状況 (東から)
 D3 グリッド遺物集中地点 (東から)
 E5a グリッド遺物出土状況 (南東から)
 E5a グリッド遺物 (器台) 出土状況 (南から)
 E6a グリッド全景 (北から)
 E6c グリッド全景 (南から)
 E6c グリッド遺物出土状況 (東から)
- 図版一八 古墳時代 方墳 1
 SZ-1 完掘 (北東から)
 SZ-1 航空写真完掘 (北西から)
 SZ-1 完掘 (北西から)
 SZ-1 完掘 (北から)
 SZ-1A-A' 西側周溝土層堆積状況・SD-3 重複状況 (北東から)
- 図版一九 古墳時代 方墳 2
 SZ-1A-A' 東側周溝土層堆積状況 (北から)
 SZ-1B-B' 墳丘盛土状況 (南から)
 SZ-1B-B' 土層堆積状況 (南東から)
 SZ-1C-C' 墳丘盛土状況 (西から)
 SZ-1 周溝内土坑 (北から)
 SZ-1C-C' 土層堆積状況 (南西から)
 SZ-1b2 区遺物出土状況 (西から)
 SZ-1d 区遺物出土状況 (北から)
- 図版二〇 古墳時代 方墳 3
 SZ-1g1 区遺物出土状況 (北西から)
 SZ-1g1 区遺物出土状況 (低位置北から)
 SZ-1g1 区遺物下土層堆積状況 (南から)
 SZ-1h 区遺物出土状況 (東から)
 SZ-1b2 区遺物出土状況 (南東から)
- 図版二一 古墳時代 方墳 4
 SZ-1a・b1 区遺物出土状況 (南から)
 SZ-1a 区遺物出土状況 (北東から)
 SZ-1 主体部完掘 (南東から)
 SZ-1 主体部完掘 (南から)
 SZ-1 主体部 B-B' 墳丘盛土状況 (南東から)
 SZ-1B-B' 墳丘盛土状況 (南東から)
 SZ-1 主体部 B-B' 土層堆積状況 (南西から)
 SZ-1 主体部遺物出土状況 (南東から)
- 図版二二 古墳時代 方墳 5 方形周溝墓 1
 SZ-1 主体部遺物出土状況 (南から)
 SZ-1 調査状況 (北から)
 SZ-66 完掘 (南東から)
 SZ-66C-C' 土層堆積状況 (南から)
 SZ-66B-B' 土層堆積状況 (北西から)
- 図版二三 古墳時代 方形周溝墓 2
 SZ-66D-D' 土層堆積状況・SZ-1 重複状況 (西から)
- SZ-66 遺物出土状況 (東から)
 SZ-66 東コーナー部遺物出土状況 (東から)
 SZ-66 東コーナー部遺物出土状況 (北東から)
 SZ-66 東コーナー部遺物出土状況最下位 (北東から)
 SZ-66 西コーナー部遺物出土状況 (南から)
 SZ-66 西コーナー部遺物出土状況 (東から)
 SZ-66 主体部完掘 (南から)
- 図版二四 古墳時代 円墳 1
 SZ-66 主体部土層堆積状況 (南から)
 SZ-66 主体部遺物出土状況 (西から)
 SZ-27 航空写真・完掘
 SZ-27B-B' 土層堆積状況 (北から)
 SZ-27D-D' 土層堆積状況・SK-103a 重複状況 (西から)
- 図版二五 古墳時代 円墳 2 土器棺墓 1
 SZ-67 完掘 (南西から)
 SZ-67B-B' 土層堆積状況 (南東から)
 SZ-67 遺物出土状況 (南東から)
 SZ-67 調査状況 (南から)
 ST-72 確認状況 (東から)
- 図版二六 古墳時代 土器棺墓 2
 ST-72 完掘 (南西から)
 ST-72B-B' 土層堆積状況 (北東から)
 ST-72 完掘 (東から)
 ST-72 土器内土層堆積状況 (南から)
 ST-72 土器内完掘 (南から)
- 図版二七 古墳時代 土器棺墓 3 溝跡 性格不明遺構
 ST-72 掘方完掘 (南から)
 SD-117 完掘 (北から)
 SD-117B-B' 土層堆積状況 (東から)
 SD-117A-A' 土層堆積状況 (東から)
 SX-119a 全景 (西から)
 SX-119a 焼土検出状況 (西から)
 SX-119a 3・4 次面遺物出土状況 (西から)
 SX-119a 遺物下土層堆積状況 (西から)
- 図版二八 横倉戸館一号墳 1
 調査区全景 (北から)
 調査区全景 (北西から)
 東側低地面から墳丘を臨む (東から)
 1 トレンチ完掘状況 (西から)
 1 トレンチ完掘・土層堆積状況 (北西から)
 1 トレンチ完掘・土層堆積状況 (北から)
 2 トレンチ完掘状況 (北から)
 2 トレンチ完掘・土層堆積状況 (北から)
- 図版二九 横倉戸館一号墳 2
 2 トレンチ土層堆積・土器出土状況 (北から)
 2 トレンチ土器出土状態 (北から)
 3 トレンチ完掘状況 (北から)
 3 トレンチ完掘・土層堆積状況 (北東から)
 4 トレンチ完掘状況 (北から)
 4 トレンチ完掘・土層堆積状況 (北から)
 4 トレンチ土層堆積状況 (西から)
 調査風景 (西から)
- 図版三〇 古代 竪穴住居跡
 SI-75 完掘 (南から)
 SI-75A-A' 土層堆積状況 (南西から)
 SI-75 カマド A-A' 土層堆積状況 (東から)
 SI-75 カマド B-B' 土層堆積状況 (南から)
 SI-75 カマド完掘 (南から)
 SI-75 遺物出土状況 (東から)
 SI-75 南東コーナー部遺物出土状況 (北東から)
 SI-75 南西部遺物出土状況 (西から)
- 図版三一 中世 掘立柱建物跡 地下式坑 1

- SB-108 全景（北から）
 SB-108P3 土層堆積状況（東から）
 SB-108P4 土層堆積状況（南から）
 SB-120 完掘（南から）
 SB-120P6 土層堆積状況（南から）
 SB-120P9 土層堆積状況（南から）
 SK-77 完掘（北から）
 SK-77A-A' 土層堆積状況（東から）
- 図版三二 中世 地下式坑 2
 SK-77 竪坑部（北から）
 SK-77：2・3室（北から）
 SK-77：4室（北東から）
 SK-77 遺物出土状況（北東から）
 SK-77 遺物出土状況（北東から）
 SK-77 遺物出土状況（北東から）
 SK-77 調査状況（南東から）
 SK-82 完掘（南から）
- 図版三三 中世 地下式坑 3
 SK-82：2室（北から）
 SK-82A-A' 上位土層堆積状況（南西から）
 SK-82A-A' 下位土層堆積状況（南から）
 SK-82D-D' 土層堆積状況（西から）
 SK-82 遺物出土状況・D-D' 土層堆積状況（東から）
 SK-82 遺物出土状況（南東から）
 SK-86 完掘（北から）
 SK-86 スロープ部（北西から）
- 図版三四 中世 地下式坑 4
 SK-86 ピット完掘（北東から）
 SK-86 ピット土層堆積状況（東から）
 SK-86B-B' 土層堆積状況（東から）
 SK-86：2室（東から）
 SK-87 完掘（南西から）
 SK-87 竪坑部（北東から）
 SK-87C-C' 土層堆積状況（北から）
 SK-87B-B' 土層堆積状況（南から）
- 図版三五 中世 地下式坑 5
 SK-95 完掘（北西から）
 SK-95 竪坑部（北西から）
 SK-95B-B' 土層堆積状況（北西から）
 SK-95 スロープ部土層堆積状況（北西から）
 SK-95 遺物出土状況（南東から）
 SK-96a 完掘（南西から）
 SK-96a：1・2室（西から）
 SK-96a：1室（南東から）
- 図版三六 中世 地下式坑 6
 SK-96aA-A' 土層堆積状況（北から）
 SK-96aB-B' 土層堆積状況（南から）
 SK-106 完掘（南西から）
 SK-106 北部完掘（南から）
 SK-106A-A' 土層堆積状況（西から）
 SK-106B-B' 土層堆積状況（南東から）
 SK-106A-A' 土層堆積状況南側アップ（北西から）
 SK-115 完掘（南から）
- 図版三七 中世 地下式坑 7
 SK-115：1室（南から）
 SK-115：1室北西端（南東から）
 SK-115.SZ-27 重複部土層堆積状況（南から）
 SK-115B-B' 土層堆積状況（南西から）
 SK-116 完掘（北東から）
 SK-116 竪坑部（西から）
 SK-116C-C' 土層堆積状況（北西から）
 SK-116B-B' 土層堆積状況（南から）
- 図版三八 中世 土坑・ピット 1
 SK-78 平成 25 年度調査区完掘（南西から）
 SK-78B-B' 土層堆積状況（東から）
 SK-78・202 重複状況（東から）
 SK-78P3・6 完掘（北から）
 SK-78P4・5 土層堆積状況（北から）
 SK-83a 完掘（東から）
 SK-83a 土層堆積状況（北から）
 SK-88・89 完掘（北から）
- 図版三九 中世 土坑・ピット 2
 SK-89 完掘（北東から）
 SK-89 土層堆積状況（東から）
 SK-89 遺物出土状況（北西から）
 SK-89 遺物出土状況（北東から）
 SK-96b 完掘（北西から）
 SK-96bA-A' 土層堆積状況（北から）
 SK-96bB-B' 土層堆積状況・SK-96a 重複状況（西から）
 SK-96b 遺物出土状況（西から）
- 図版四〇 中世 土坑・ピット 3
 SK-101 完掘（南西から）
 SK-101B-B' 土層堆積状況（西から）
 SK-114 完掘（南西から）
 SK-119b 完掘（西から）
 SK-119b 土層堆積状況（東から）
 SK-126b 完掘（北から）
 SK-126b 土層堆積状況（北から）
 SK-78・202 完掘（東から）
- 図版四一 中世 土坑・ピット 4 近世 土塁・堀跡 1
 SK-202A-A' 土層堆積状況（北から）
 P-97 完掘（南西から）
 P-98 土層堆積状況（西から）
 P-99a・b 土層堆積状況（東から）
 P-98・99a・99b 完掘（南から）
 SK-89 調査状況（東から）
 SA-2.SD-3 完掘（北から）
 SA-2.SD-3 完掘（南から）
- 図版四二 近世 土塁・堀跡 2
 SA-2D-D' 土塁盛土状況（北西から）
 SA-2C-C' 土塁盛土状況（南東から）
 SA-2.SD-3D-D' 土層堆積状況・SZ-1.SA-2.SD-3 重複状況（北から）
 SD-3D-D' 土層堆積状況アップ（北から）
 SA-2.E10c グリッド粘土確認状況（南から）
 SA-2b 区遺物出土状況（南西から）
 SA-2a 区遺物出土状況（南西から）
 SA-2B-B' 盛土遺物出土状況・SD-4 重複状況（南西から）
- 図版四三 近世 溝 1 土坑 1
 SD-4 全景（南西から）
 SK-121 土層堆積状況（南から）
 SK-121 出土状況（西から）
 SK-121 針金アップ（北西から）
 SK-121 針金 2 アップ（北から）
 SK-121 土器底部出土状況（南から）
 SK-121 掘方完掘（南から）
 SK-130 完掘（北西から）
- 図版四四 近世 土坑 2 時期不明 溝 集石遺構
 SK-130 土層堆積状況（北から）
 SK-130 遺物出土状況（北西から）
 SZ-1 頂部推定稲荷社跡（東から）
 SD-70a 完掘（南から）
 SD-70aA-A'～D-D' セクション土層堆積状況（南から）
 SD-70a F-F' セクション土層堆積状況（北から）

- SD-70b 完掘・土層堆積状況（北西から）
 SU-118 確認状況（東から）
 図版四五 時期不明 土坑・ピット 1
 SK-11 完掘（南から）
 SK-13 完掘（南から）
 SK-14 完掘（南東から）
 SK-15 完掘（南から）
 SK-18 完掘（南から）
 SK-19 完掘（南から）
 SK-20 完掘（南から）
 SK-21 土層堆積状況（東から）
 図版四六 時期不明 土坑・ピット 2
 SK-22 完掘（南から）
 SK-24 西土層堆積状況（東から）
 SK-28 土層堆積状況（南から）
 SK-29 土層堆積状況（南から）
 SK-40 土層堆積状況（東から）
 SK-44 完掘（東から）
 SK-45 完掘（南から）
 SK-57 完掘（南から）
 図版四七 時期不明 土坑・ピット 3
 SK-80 土層堆積状況（北から）
 SK-81 土層堆積状況（南から）
 SK-90 土層堆積状況（東から）
 SK-91 完掘（北から）
 SK-206 完掘（北東から）
 P-207 完掘（北東から）
 SK-211 完掘（北から）
 SK-84 土層堆積状況・完掘（南から）
 図版四八 時期不明 土坑・ピット 4
 SK-100 土層堆積状況（北西から）
 SK-102 土層堆積状況（北から）
 SK-125 土層堆積状況（東から）
 SK-122・123 完掘（東から）
 SK-122 土層堆積状況（南西から）
 SK-123 土層堆積状況（南から）
 SK-126a 完掘（東から）
 SK-126a 土層堆積状況（北から）
 図版四九 時期不明 土坑・ピット 5
 SK-129a・b 完掘（東から）
 SK-133 土層堆積状況（南から）
 P-204,SK-205 セクション（北西から）
 SK-210 完掘（北から）
 P-62 土層堆積状況（東から）
 P-94 土層堆積状況（南東から）
 P-104・105 土層堆積状況（南から）
 SK-25 完掘（南西から）
 図版五〇 時期不明 土坑・ピット 6
 SK-26a・b 土層堆積状況（南東から）
 P-92a・b 土層堆積状況（南東から）
 P-93 土層堆積状況（南西から）
 P-110 土層堆積状況（南東から）
 P-111a・b 土層堆積状況（南東から）
 P-112 土層堆積状況（南東から）
 P-113 土層堆積状況（南東から）
 SK-208 土層堆積状況（南から）
- 図版五一 時期不明 土坑・ピット 7
 SK-215,P-216・217 完掘（北東から）
 SK-215,P-217 土層堆積状況（北から）
 SK-215,P-216・217 調査状況（北西から）
 P-128a 完掘（東から）
 P-132 土層堆積状況（南から）
 S-107 ピット群全景（西から）
 S-107P1 完掘（南から）
 S-107P2 土層堆積状況（南から）
 図版五二 時期不明 土坑・ピット 8
 S-107P3 土層堆積状況（南から）
 S-107P4 土層堆積状況（南から）
 S-124 ピット群（南東から）
 S-124P1 完掘（北から）
 S-124P2 土層堆積状況（南から）
 S-124P3 土層堆積状況（南から）
 S-124P4 土層堆積状況（北から）
 S-124P5 土層堆積状況（南から）
 図版五三 時期不明 土坑・ピット 9 その他
 S-124P6 土層堆積状況（南から）
 S-124P7 土層堆積状況（南から）
 調査前現況（北東から）
 調査前現況（東から）
 調査区西側遺構確認状況（東から）
 調査区東側遺構確認状況（南西から）
 調査状況（南東から）
 調査後現況（北西から）
 図版五四 旧石器時代の遺物
 図版五五 縄紋時代の遺物 1
 図版五六 縄紋時代の遺物 2
 図版五七 縄紋時代の遺物 3
 図版五八 縄紋時代の遺物 4
 図版五九 縄紋時代の遺物 5
 図版六〇 縄紋時代の遺物 6
 図版六一 縄紋時代の遺物 7
 図版六二 縄紋時代の遺物 8
 図版六三 縄紋時代の遺物 9 弥生・古墳時代の遺物 1
 図版六四 弥生・古墳時代の遺物 2
 図版六五 弥生・古墳時代の遺物 3
 図版六六 弥生・古墳時代の遺物 4
 図版六七 弥生・古墳時代の遺物 5
 図版六八 弥生・古墳時代の遺物 6
 図版六九 弥生・古墳時代の遺物 7
 図版七〇 弥生・古墳時代の遺物 8 古代 1
 図版七一 古代 2 中世 1
 図版七二 中世 2
 図版七三 中世 3 近世 1
 図版七四 近世 2
 図版七五 近世 3
 図版七六 近世 4
 図版七七 近世 5 時期不明 1
 図版七八 集合 1
 図版七九 集合 2

第I章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

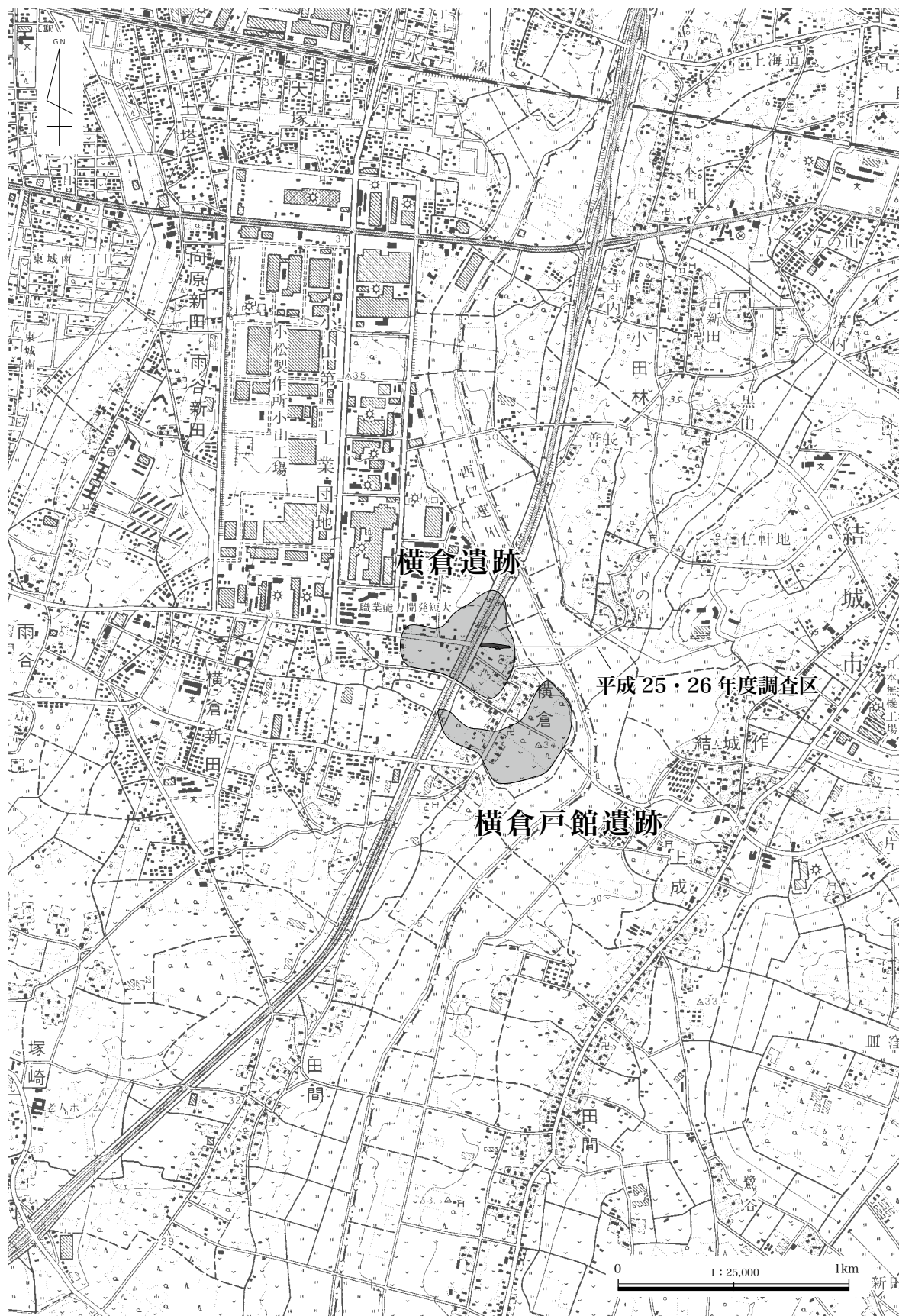
栃木県県土整備部（以下、「県土整備部」という。）では、「人にやさしい県土60分構想」のもと「人の移動の安全性・快適性・定時性」を目指して交通網の整備を進めており、広域道路網の充実強化や地域を支える道路の充実等を推進している。これらの政策のもと、県土整備部・栃木土木事務所管内においても、一般県道矢畑横倉新田線の整備事業が予定されることとなり、事業地内に所在する埋蔵文化財の有無について栃木県教育委員会文化財課（以下、「県教委」という。）に照会した結果、路線内に周知の埋蔵文化財包蔵地である横倉遺跡（県遺跡番号No.6955）、横倉戸館古墳群（県遺跡番号No.6956）が含まれていることが確認された。さらに、小山市指定史跡である横倉戸館1号墳（県遺跡番号No.6956-1）の隣接地であることも確認された。横倉遺跡は新4号関連の調査が平成2年に行われ、中世の遺構群が確認されており、今回の事業地内においても遺構の検出が予想され、また踏査により土塁や古墳と想定される高まりが確認されたこともあり、本調査が必要と判断された。横倉戸館古墳群は、7基の古墳が確認され、うち6基が小山市指定史跡として保護されている。そのうち、横倉戸館1号墳の指定範囲が事業地内に接することも明らかとなった。横倉戸館1号墳については、市指定史跡ではあるものの、測量調査が行われたのみで古墳の規模や範囲が確定していなかった。これらの状況を踏まえ、県土整備部と県教委、小山市教育委員会（以下、「小山市教委」という。）で協議が進められ、横倉戸館1号墳範囲確認の調査が必要との判断に至った。

平成24年4月12日に県教委・県土整備部・栃木土木事務所・財団法人とちぎ未来づくり財団（現 公益財団法人とちぎ未来づくり財団。以下、「財団」という。）の4者による協議が行われ、県土整備部が小山市教委へ指定地の現状変更許可申請を行った上で、県教委が確認調査を実施し、1号墳の範囲を確定した上で事業の調整をし、財団が調査を行うこととなった。さらに、事業の遂行にかかる史跡指定地の取り扱いについては、小山市文化財保護審議会にも諮ったうえで調整することとした。そして、6月下旬に開催予定の小山市文化財保護審議会に調査成果をまとめるため、5月に確認調査を実施することとなった。

確認調査は平成24年5月23日～平成24年5月31日まで、重要遺跡範囲確認調査の一環として実施した。現況の墳丘に対し、道路予定地内へ向けて放射状に4本のトレンチを設定し、掘り下げを行った。その結果、第3トレンチ内より土師器壺がつぶれた状態で出土し、土器の形態から本古墳の築造年代が古墳時代前期末～中期初頭に相当することが判明した。また、4本のトレンチにより、周溝幅5.5～5.8m、径16.2mの円墳となる可能性が高いこと等が確認された。そして、小山市文化財保護審議会の開催後の平成24年7月3日にトレンチの埋め戻しを行い、確認調査は終了した。

この調査結果を踏まえ、県土整備部は古墳の保護を図る道路の設計を行った。なお、当遺跡は今回調査地に隣接する地点が新4号国道バイパス建設に伴って平成2年度に調査が行われ、遺構・遺物の存在が確認・報告されている点から、隣接地である台地上における確認調査は行わなかった。但し、台地の東側にあたる低地においては平成24年に県教委による試掘・確認調査が行われ、遺構が確認できなかったことから本調査の対象地からは除外することとなった。発掘調査には1年を要すること、その後の整理作業についても調整が進められた。

平成25年4月1日付けにて、栃木県と財団が埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、小山市横倉地内に所在する横倉遺跡・横倉戸館古墳群の発掘調査（安全な道づくり事業費（交付金）一般県道矢畑横倉新田



第1図 遺跡位置図

線横倉工区に伴う発掘調査）が実施されることとなった。契約内容は、委託期間が契約締結日である平成25年4月1日から平成26年3月27日までである。調査面積は1,803㎡であった。

その後、調査の進展状況から、古墳時代前期の方墳であることが判明したSZ-1（横倉戸館8号墳）の旧歩道部分の調査について、平成25年10月9日に県教委・栃木土木事務所・小山市教委・財団で現地協議を行い、古墳にかかる部分について旧歩道予定地の調査を行うこととなった。これにより、平成25年11月29日付けで契約変更を行い、平成25年度の調査面積は138㎡増加し、1,941㎡となった。平成26年3月31日に栃木土木事務所に引渡しを行い、平成25年度の調査は終了した。

調査では、縄文時代の遺構75（竪穴住居跡3軒・溝跡1条・土坑33基・ピット38基）、古墳時代の遺構7（古墳4基・土器棺墓1基・溝跡1条・不明遺構1基）、平安時代の遺構1（竪穴建物跡1軒）、中世の遺構32（掘立柱建物跡2棟・地下式坑9基・土坑10基・ピット11基）、近世以降の遺構6（土塁1基・堀跡1条・溝跡1条・土坑2基・推定稲荷社跡1基）、時期不明の遺構69（溝2条・集石遺構1基・土坑35基・ピット31基）および遺物包含層等が確認された。平成25年12月21日には現地説明会を開催し、約200名の参加があった。また、新聞報道もなされ、成果が県内外に周知された。また、遺構・遺物総量をもとに平成26・27年度の2カ年で整理・報告書刊行作業を進める方向で調整された。

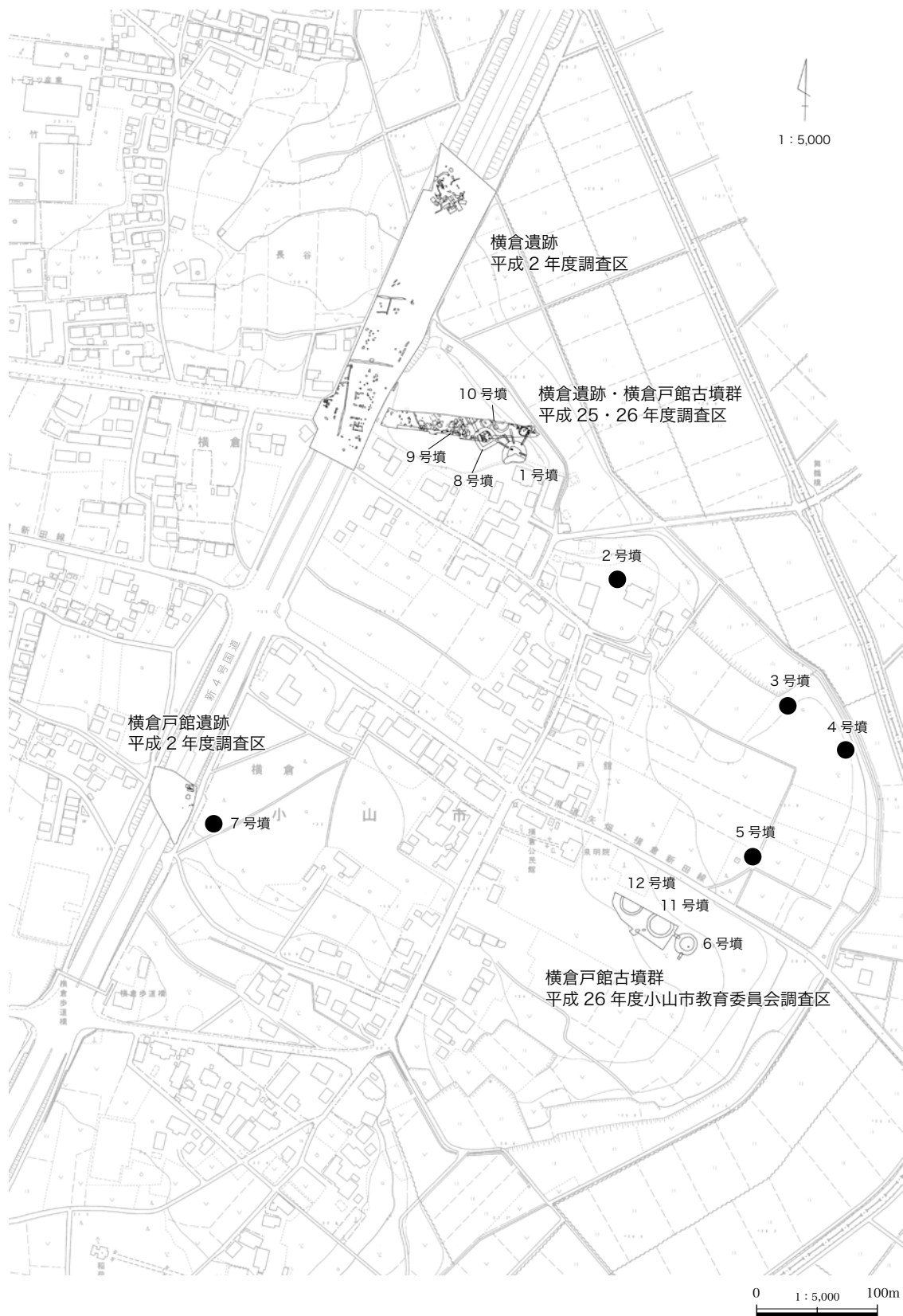
平成26年5月に道路の設計変更があり、前年度末調査の歩道部分を掘削する必要性が生じた。県教委・県土整備部で調整を進めたところ、道路工事と並行して平成26年度内に1カ月程度、本調査を行うことで調整が進められた。これを受けて、栃木県と財団は平成26年4月1日付けで埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、小山市横倉地内に所在する横倉遺跡・横倉戸館古墳群の発掘調査（安全な道づくり事業費（交付金）一般県道矢畑横倉新田線横倉工区に伴う発掘調査）が実施されることとなった。契約内容は、委託期間が契約締結日である平成26年4月1日～平成27年3月30日の整理作業および平成26年5月1日～平成27年3月30日の発掘調査および整理作業の2契約で、現地での調査面積は歩道部分や標識設置地等の181㎡であった。

発掘調査は平成26年9月1日～平成26年9月30日の1カ月間実施した。平成26年10月2日に栃木土木事務所に引渡しを行い、平成26年度の調査は終了した。調査の結果は、平成25年度の調査で確認した15遺構と、新たに土坑9基（縄文時代2基・時期不明7基）とピット5基（すべて時期不明）が確認された。この歩道部分の調査終了をもって、本事業にかかる現地の発掘調査はすべて終了した。さらに、平成27年度には平成26年度に引き続き、整理・報告書刊行にかかる契約を平成27年4月1日付けで締結した。そして、年度末の3月における報告書の刊行をもってすべての業務について終了となった。

第2節 調査の方法と経過

平成24年度に実施された、本調査区に隣接する横倉戸館1号墳の確認調査は、4本のトレンチを設けて実施している。表土除去は重機で行い、各トレンチの精査・掘削は人力によって行われた。遺構の図化は、平面図・断面図・エレベーション図・遺物出土状況図等を必要に応じて作成した。調査区の全体図は、平板を用いての作図を行っている。遺構の写真は35mmモノクロフィルムおよびデジタルカメラを用い、各担当者が撮影を行った。

平成25年度と平成26年度の調査法は基本的には同じで、古墳・土塁部分を除いて表土除去を重機で行い、遺構の精査・掘削は人力によって行われた。遺構の図化は、平面図・断面図・エレベーション図・遺物出土状況図等を必要に応じて作成した。調査区の全体図は、基本的には平板を用いての作図を行っているが、平



第 2 図 調査区位置図

成 25 年度は中央航業株式会社へ委託し、航空写真測量を実施している。遺構の写真は 35 mm カラーリバーサルフィルムおよびデジタルカメラを用い、各担当者が撮影を行った。

遺構・遺物の位置を示すグリッドは、中央航業株式会社へ委託し、平面直角座標系第 IX 系、世界測地座標 $X = 31220 \cdot Y = 240$ 地点を A1 杭とし、10m×10m のグリッドを設定した。南北方向へは A、B、C とし、東西方向は東へ向かうにつれ 1、2、3 とした。A1 を原点とするグリッドは A1 グリッドとし、さらに 5 m×5 m の小グリッドを設け、北西側から A1a・A1b、南西側から A1c・A1d とした。

航空写真撮影は中央航業株式会社へ委託し、ラジコンヘリコプターから 6×6 cm カラーリバーサルフィルム・モノクロフィルム・デジタルカラー写真データの成果を得た。

なお、今回実施された調査では、平成 2 年度調査分の遺構番号とは別に、新たに番号を付した。番号は SZ や SD 等の遺構の性格別にではなく、連番で割り付けている。

現地での調査は、平成 25 年 5 月 23 日より開始した。まず、調査区内の草刈りを行った上で、古墳や土塁の現況を記録することを目的として航空写真撮影および現況測量図作成を中央航業株式会社へ委託し、実施した。その後、調査区内に 26 本のトレンチを設定し、遺構確認面までの深さおよび遺構の密度を地点ごとに確認した。6 月 17 日から重機による表土除去を行い、除去後は人力による遺構確認面の精査および調査を順次行った。この際、SZ-1（横倉戸館 8 号墳）および SA-2（土塁）周辺は、現況で盛土の高まりが判明していたため、重機による表土除去は行っていない。

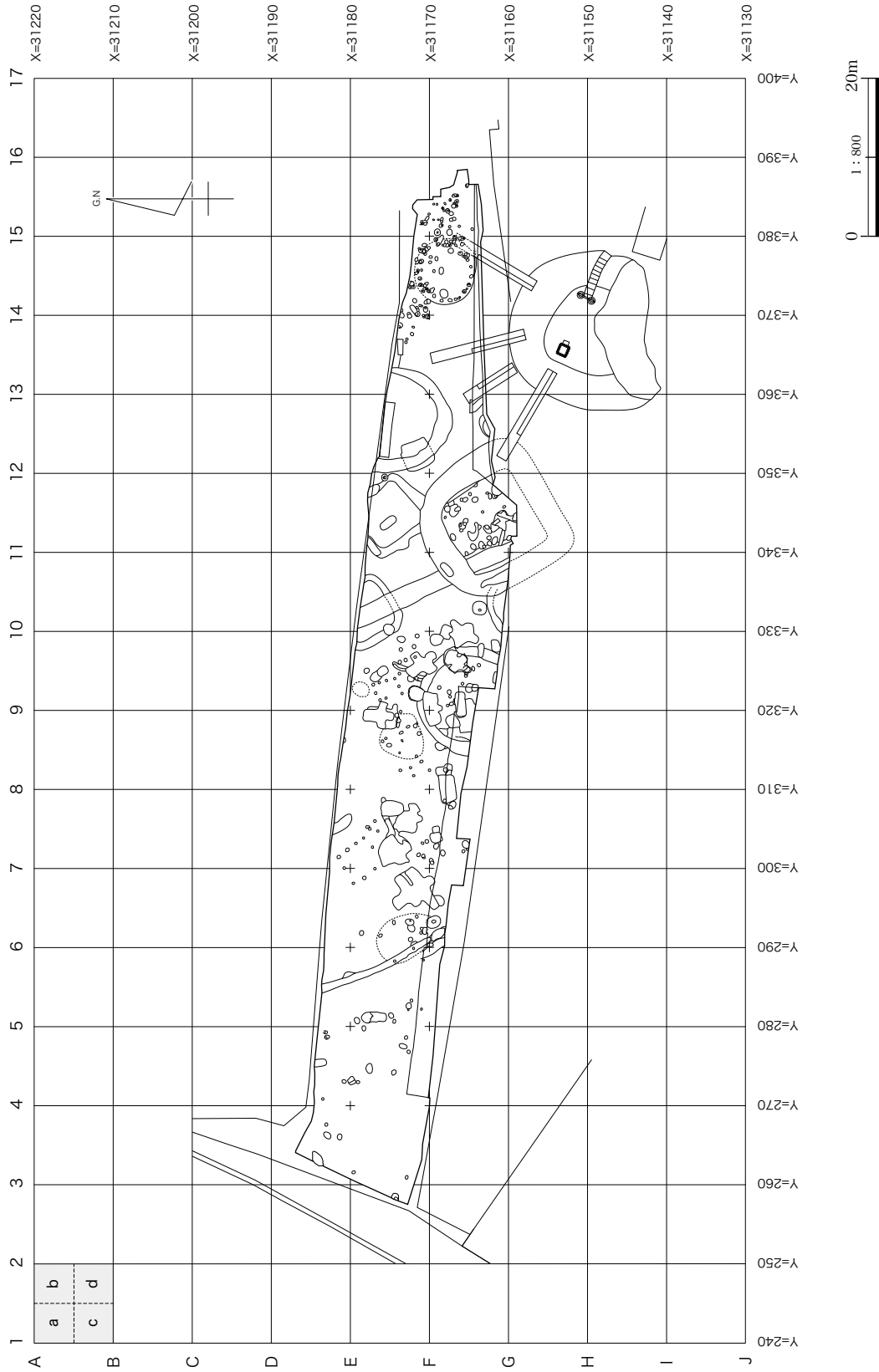
遺構の調査については、盛土の残存が認められた SZ-1 および SA-2 は土層確認用のベルトを残し、人力での表土除去を行い、必要に応じて記録類の作成を行った。その後は、盛土の断ち割りを行い、土層確認後に記録類の作成を実施した後に盛土の除去を行った。SZ-1 については、盛土除去の最中に主体部を確認したため、主体部の調査後に残る盛土の除去を行った。また、SZ-1 および SA-2 は、表土除去後の航空写真撮影も行っている。

遺構確認面で検出した遺構については半截または必要に応じて複数箇所、土層の観察・記録を行い、必要に応じて平面図・セクション図・エレベーション図等の作成を実施した。

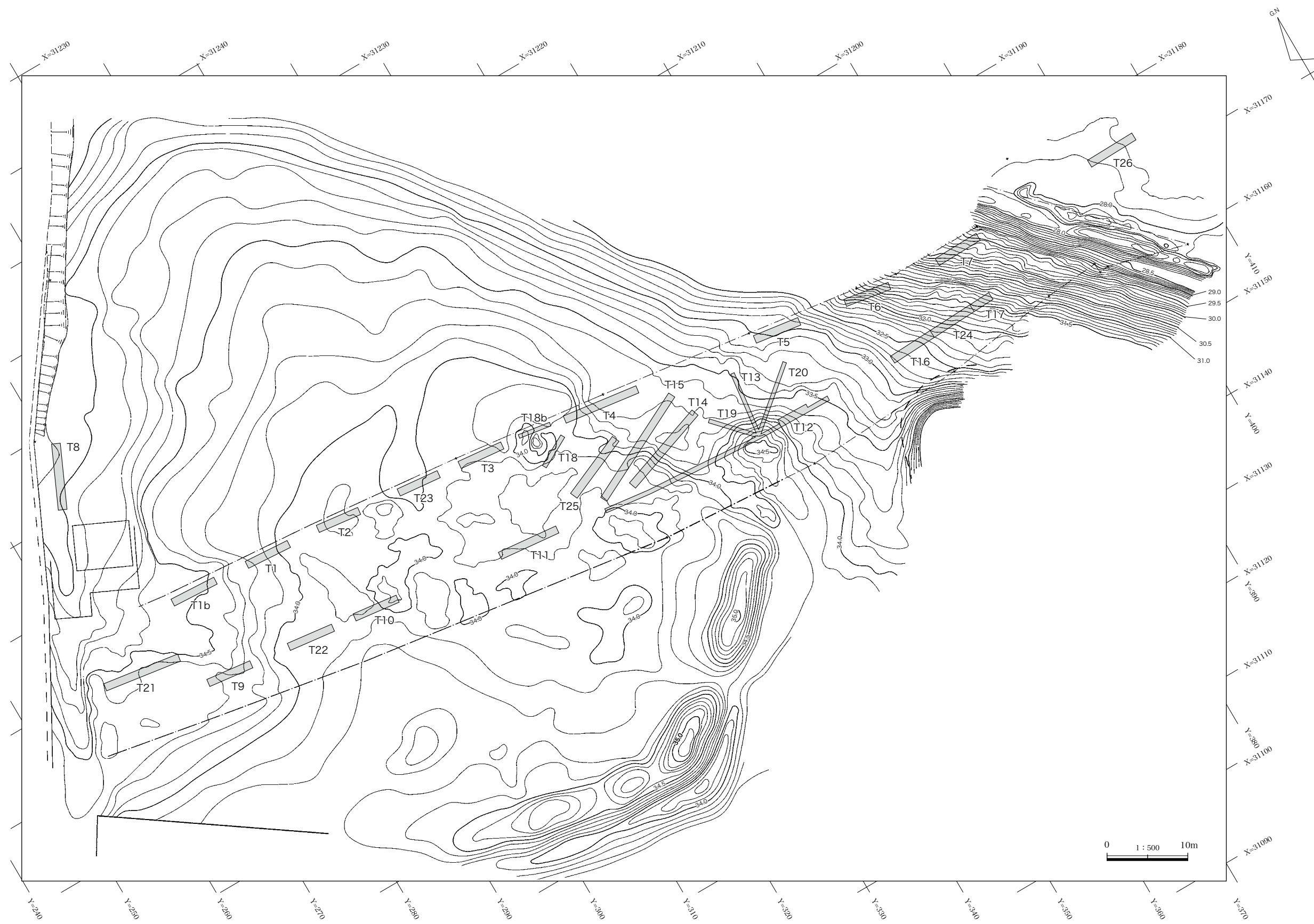
また、この調査において遺構覆土中のテフラ分析やリン・カルシウム分析、珪酸体分析等の理化学分析にかかる委託事業を行っている。

平成 26 年度の調査は、基本的には前年度の続きとなり、平成 26 年 9 月 1 日に重機による表土除去を行った。横倉戸館 1 号墳に接する所については、史跡指定地の範囲を再度栃木土木事務所・小山市教委で確認した上で、調査を行うこととした。9 月 8 日から遺構の精査および調査を開始し、順次記録作成を行った。9 月 16 日にはこの該当箇所部分の表土除去を行い、遺構の掘り下げおよび記録類の作成を進めた。遺構調査は、半截または複数箇所の土層の観察・記録を行い、必要に応じて平面図・セクション図・エレベーション図等の作成を実施した。9 月 30 日にすべての調査が終了し、10 月 2 日に現場の引き渡しを行った。

整理作業は、平成 26 年 4 月 1 日～平成 27 年 3 月 30 日と平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 30 日までの 2 カ年に実施された。この際、土器付着炭化物の分析や岩石の肉眼鑑定、出土遺物の写真撮影、鍛冶関連遺物の整理等については委託を行っている。



第 3 図 グリッド位置図



第4図 トレンチ配置図

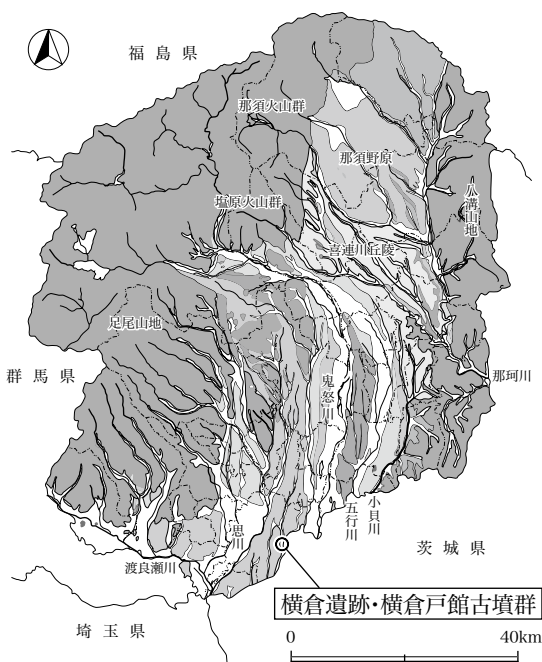
第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

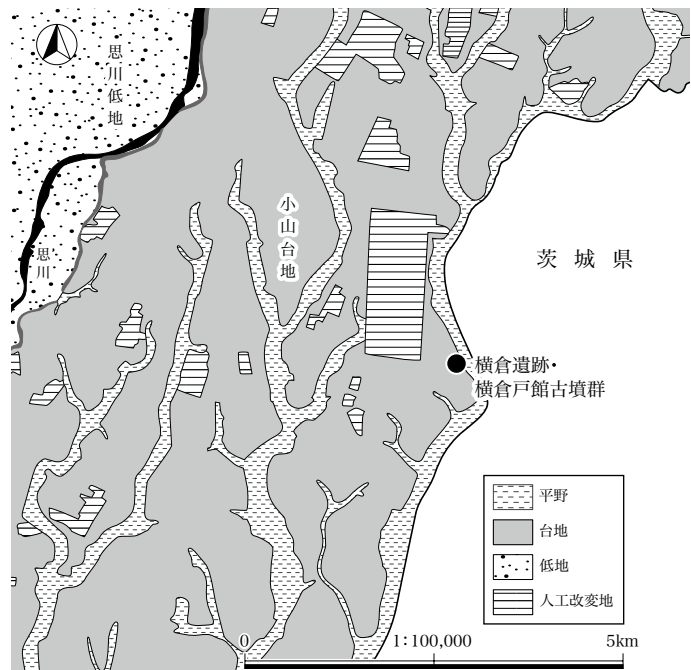
横倉遺跡・横倉戸館古墳群が位置する小山市は県中央部南東端に位置し、東側は茨城県境にもなっており、真岡市と茨城県結城市と接する。南側も茨城県境になっており、下都賀郡野木町と茨城県古河市と、北側は下野市、さらに西側は栃木市と計6つの市町と接している。小山市は、東京圏から北に約60km、県都として本県の中央部に位置する宇都宮市からは南に約30kmの距離に位置する。市域を東西20.25km、南北21.40km、総面積171.76㎏を数え、人口は平成28年1月1日現在で166,380人を数える。

市の西端には東京都中央区から青森県青森市へ至る国道4号が、東端を埼玉県越谷市から栃木県宇都宮市へ至る新4号国道バイパスが南北に通り、これに群馬県前橋市と茨城県水戸市を結ぶ国道50号が直交する。小山市は東西南北に走る各鉄道路線があり、南北へ連なる東北新幹線およびJR宇都宮線を軸として、JR水戸線・JR両毛線が小山駅から発着する。JR水戸線は茨城県側、JR両毛線は群馬側へ運行しており、道路と合わせて北関東における交通の要衝地となっている。

小山市内および周辺の地形は主に低地と台地からなる。この台地は、小山市の西側を流れる思川・巴波川等と東側を流れる鬼怒川・田川の間形成されており、宝木段丘面に属している。栃木県側が「小山台地」、茨城県側は「結城台地」と呼ばれており、この台地内には小河川によって開析された小支谷が樹枝状に広がっている。本遺跡が位置する地点は、東側の江川（西仁連川）に面して舌状に突き出している。台地幅は南北約500m、標高30～35mで、台地周縁部は谷部へ向かって傾斜する。調査区および周辺の現況は住宅や畑、雑木林になっており、谷部は水田となっていた。今回の発掘調査区はこの台地の北端部にあたる位置である。



第5図 栃木県の地勢概念図



第6図 小山市の地勢

第2節 歴史的環境

小山市は、昭和56年から開始された『小山市史』編纂事業に伴い、市内の遺跡分布調査が実施され、多数の遺跡が確認された。その後、市の発展に伴う開発事業の増加に比例し発掘調査例も増え、内容が明らかになった遺跡も少なくない。さらに、小山市には国指定史跡5件・県指定史跡2件・市指定史跡が存在する等、有史以前から古代そして中世・近世にかかわる歴史的つながりが見て取れる。また、小山市東部は茨城県結城市との県境となり、各時代において両市は密接な関係が認められる。

横倉遺跡は、旧石器から近世に至るまでの遺跡である。平成2年度に実施された、新4号国道バイパスに伴う発掘調査では中世の集落および墓域が調査された。横倉戸館古墳群は墳丘が残存する古墳が7基判明しており、そのうちの6基が小山市指定史跡に登録されている。平成26年度には、小山市教育委員会によって6号墳西側約8m地点で開発に伴う調査が行われ、古墳時代中期の円墳が2基調査されている。

旧石器時代

小山市域における旧石器時代の遺物を出土する遺跡は、すべて小山台地上に立地している。一里山遺跡・本郷北浦遺跡・西ノ台遺跡(1)・宮内遺跡・乙女不動原北浦遺跡・前畑遺跡・寺野東遺跡・横倉戸館遺跡(26)・八幡根東遺跡(12)・本郷前遺跡(10)・塚崎遺跡(49)・金山遺跡(50)・田間東道北遺跡(31)等があげられる。

特に、寺野東遺跡では、文化層が3枚調査されており、赤城-鹿沼軽石層より上位で剥片等が、浅間板鼻軽石の上下から多数の石器が出土している。八幡根東遺跡からは浅間板鼻軽石付近において9カ所ユニットが確認され、ナイフ形石器や削器・彫器が出土している。金山遺跡からは、やや小形のナイフ形石器とブロック・礫群がソフトローム上位から、田原ローム層から4カ所、宝木ロームのAT層より上位で3カ所・下位で2カ所と複数時期の遺構・遺物が確認されている。横倉遺跡は、新4号国道バイパス建設に先立つ調査において、出土層位は不明ではあるが剥片および石核が出土している。横倉戸館遺跡は、出土層位は不明ながら剥片や石核が認められている。また、茨城県結城市では才光寺遺跡から尖頭器が出土している。

縄紋時代

小山市域における縄紋時代の遺跡は、西仁連川および大川の周辺に多く分布している状況である。

[草創期～早期] 草創期の遺構・遺物はこれまでほとんど知られておらず、詳細は不明であったが、今回の調査においても撚糸紋期以前の遺物は確認されていない。早期撚糸紋期になると、小山市からも遺構・遺物が確認されている。横倉戸館遺跡・金山遺跡等から撚糸紋系土器が出土している。条痕紋土器が出土した遺跡としては、北坪遺跡・八幡根遺跡・小田林遺跡(21)・横倉遺跡・権現遺跡(33)・千駄塚浅間遺跡・乙女不動原北浦遺跡等があげられる。

遺構としては、間々田六本木遺跡から撚糸紋系土器を出土する住居跡が1軒調査されている。乙女不動原北遺跡から炉跡が1基、小田林遺跡から条痕紋期の炉跡12基が確認されている。

[前期] 乙女不動原北浦遺跡・間々田六本木遺跡から関山式期の住居が調査されている。黒浜式期になると、遺跡の分布が多くみられるようになり、横倉宮ノ内遺跡(29)・金山遺跡・塚崎遺跡・東谷遺跡・萩山遺跡(43)・小田林遺跡等各遺跡で住居跡が確認されている。また、中曾根遺跡・香取前遺跡(36)・雨ヶ谷宮遺跡(45)・本郷前遺跡・乙女不動原北浦遺跡B地点等の各遺跡からも遺物の存在が知られている。

[中期] 雨ヶ谷宮遺跡からは中期から後期にかけての住居跡や袋状土坑等が、乙女不動原北浦遺跡C地点からは竪穴住居跡が検出されている。いずれも、一定規模の集落跡だが、小山市北東部に位置する寺野東遺跡



第7図 周辺遺跡分布図

は住居跡 70 軒以上、土坑 700 基以上を調査しており、大規模集落であったことが判明している。

[後期～晩期] 後期および晩期は、後期前半までは一定数の遺跡が認められるが、後期中葉以降は著しく減少する。周辺では、溜ノ台遺跡(40)から後期初頭の住居跡が1軒調査され、雨ヶ谷宮遺跡でも後期前半の竪穴住居跡が調査されている。また、横倉戸館遺跡からは称名寺式期の埋設土器が2基調査されている。寺野東遺跡では、後・晩期の住居跡 70 軒、複数の水場遺構に加え、後期前半～晩期にかけて形成された環状盛土遺構が確認され、多量の遺物が出土している。乙女不動原北浦遺跡では後期安行式期～晩期前半の住居跡や晩期前半の土壌墓群が調査されている。また、結城市では本町遺跡・鷹部屋遺跡・東浦遺跡から後期前半の遺物、後期後半～晩期では鹿窪坂の上遺跡が調査され、松木合 A 遺跡からは遺物が表採されている。さらに、鬼怒川東岸に位置する上山川地域からは遮光器型土偶の出土が知られている。

弥生時代

本県では、弥生時代の遺跡・遺物は少なく、小山市域においても同様である。特に、前期～中期にかけてが少ない。中期の遺構は、溜ノ台遺跡から中期後半の住居跡が2軒確認されており、野木町清六Ⅲ遺跡から再葬墓群が調査されている。

後期になると若干ではあるが集落の調査例は増すが、小規模であり、遺物の出土量も少ない状態である。遺構としては、西山遺跡で住居跡1軒、八幡根東遺跡で住居跡2軒・土坑1基、金山遺跡で住居跡1軒、田間東道北遺跡で集石遺構・土坑1基、乙女不動原北浦遺跡で住居跡2軒・土坑1基、亀田遺跡で住居跡1軒、喜沢海道間遺跡で石製品工房跡、野木町清六Ⅲ遺跡から再葬墓群が調査されている。更に、塚崎遺跡・善長寺遺跡(23)・権現遺跡・香取前 B 遺跡で遺物が知られている。

古墳時代

[前期] 本遺跡周辺の集落として、萩山遺跡・西山遺跡(39)・寺野東遺跡・溜ノ台遺跡・下犬塚遺跡(18)・小田林遺跡・善長寺遺跡・西浦遺跡(48)・神鳥谷遺跡・塚崎遺跡・金山遺跡・治松遺跡の各遺跡が調査されている。特に、住居跡15軒の住居とそれらを囲む溝が調査された下犬塚遺跡、住居跡51軒を調査した小田林遺跡、住居跡を41軒調査した善長寺遺跡等は拠点的な集落と考えられる。本市の南東部から小銅鐸が出土しており、西浦遺跡出土と推定されている。結城市では四ツ京遺跡(2)から遺物が知られている。また、横倉戸館5号墳の東側へ2m地点より、S字口縁甕や台付甕・壺・器台等が採集されており、集落が存在する可能性がある。

前期の古墳は周辺では確認されておらず、下野市三王山古墳群の三王山南塚1号墳・2号墳(ともに前方後方墳)と朝日観音1号墳(方墳)が確認されている。また、溜ノ台遺跡・治松遺跡・金山遺跡・牧ノ内古墳群からは方形周溝墓が調査されている。

[中期] 中期の集落は、向野原遺跡(11)・西山遺跡・横倉戸館遺跡・八幡根遺跡(13)・本田遺跡(19)・溜ノ台遺跡・善長寺遺跡・田間東道北遺跡・萩山遺跡・西浦遺跡・塚崎遺跡・金山遺跡・亀屋遺跡・五料遺跡・成沢遺跡・喜沢海道間遺跡・乙女不動原遺跡・乙女不動原亀田遺跡等が調査されている。特に、成沢遺跡は1辺約57mの方形区画が住居跡を囲んでおり、「豪族居館」とされている。

小山市域は、手工業生産に係る遺跡が多く調査されている。石製模造品の製作を行っていたと考えられている遺跡は、亀屋遺跡(71)・向野原遺跡・西山遺跡・八幡根遺跡・善長寺遺跡・田間東道北遺跡・西浦遺跡・塚崎遺跡・金山遺跡が該当する。これらのうち、亀屋遺跡以外は西仁連川流域に位置しており、中期後半頃と位置付けられている。製鉄関連の遺跡は、西浦遺跡から鍛冶工房跡が調査されており、喜沢海道間遺跡では鍛冶関連の遺物が出土している。

中期の古墳群は、田川流域では築古墳群や松木合古墳群が知られており、近年では梁古墳群に隣接する西高椅遺跡で中期の帆立貝形古墳1基および中期から後期にかけての円墳が40基以上調査されている。鬼怒川流域では向原富士見浅間塚古墳・林愛宕塚古墳・備中塚古墳等の林・備中塚古墳群、思川流域では鶴巻山古墳群・茶臼塚古墳が代表的な寒川古墳群、桑57号墳を代表とする喜沢古墳群があげられる。中期末には、姿川流域に摩利支天塚古墳が築造された。また、近年に横倉戸館6号墳の西側に隣接する地点から中期中頃の円墳が2基調査されている。

[後期～終末期] 後期に位置づけられる集落は、八幡根東遺跡・八幡根遺跡・善長寺遺跡・田間東道北遺跡・金山遺跡等が調査されており、八幡根東遺跡からは土師器を焼成した土坑が検出されている。

小山市域では、西仁連川流域には西山古墳群(38)・塚崎古墳群(46)・北茂呂稻荷塚古墳があげられる。思川流域には、後期初頭に築造された琵琶塚古墳をはじめとし、飯塚古墳群や外城古墳群(64)・宮内古墳群(67)・牧ノ内古墳群等多数の古墳群が築造されており、非常に多くかつ広範囲に分布する様相がみられる。終末期になると、築13号墳や上山川愛宕山古墳(9)等、田川流域に多く分布する。

奈良・平安時代

横倉遺跡・横倉戸館古墳群付近は、下野国寒川郡に属していたと考えられている。小山市域の集落としては、寺野東遺跡・本郷前遺跡・八幡根遺跡・八幡根東遺跡・西山遺跡・溜ノ台遺跡・金山遺跡・乙女不動原北浦遺跡・宮内北遺跡・宮内東遺跡等が調査されている。特に、金山遺跡では460軒もの住居跡が調査されており、中心的な集落であったと考えられる。

小山市西部に位置する千駄塚浅間遺跡は、寒川郡衙と推定されており、掘立柱建物跡や基壇建物跡が検出され、瓦や炭化米等が出土している。

小山市周辺における生産遺跡は土師器焼成遺構や窯跡、鍛冶関連遺跡等が調査されている。八幡根東遺跡では、土師器を製作していたことが判明している。窯跡は、下野市に所在する下野薬師寺跡へ瓦を供給していた乙女不動原瓦窯跡が調査されている。鍛冶関連遺跡は、金山遺跡・大境遺跡(54)が判明している。両遺跡は、いずれも西仁連川流域に位置しており、茨城県側においてもこの流域で鍛冶関連遺跡および遺物が知られている。

また、結城市には下総国結城郡の郡衙推定地とされている峯崎遺跡や結城廃寺跡、結城廃寺への瓦を生産していた結城八幡瓦窯跡等があり、古代における結城郡の中心地であったことがうかがわれる。

中世

中世の横倉遺跡・横倉戸館古墳群周辺は、横倉郷と称されていた。横倉遺跡は、平成2年の調査によって台地上に土壙墓群・低地部に掘立柱建物からなる集落であることが判明しており、13世紀～16世紀の遺物がみられる。周辺では、横倉宮ノ内遺跡で屋敷地と大規模な土壙墓群が調査されている。屋敷地は14世紀～15世紀、土壙墓群は16世紀と推定されている。さらに南方の田間東道北遺跡からは館跡(宿尻館)の溝が見つかり、また、溝の外からは14世紀～15世紀の土壙墓群が伴っている。金山遺跡からは、掘立柱建物や井戸跡、そして多数の地下式坑等が調査されている。特に、金山遺跡で確認された地下式坑は平面が十字型や扇型、「V」字型や「Y」字型等様々な形態の地下式坑が調査された。

小山市一帯は鎌倉時代以降、関東において代表的な武士団である小山氏の本拠地となる。市内には、小山氏に関連する遺跡が数多く残されている。横倉遺跡から北西4kmに位置する神鳥谷曲輪跡(62)は、鎌倉時代の小山氏の居館であったと推定されている。鷲城(63)は、14世紀以前までは小山氏の本城とされていたが、再興後は祇園城(59)を本城としていた。この両城をつなぐ城として、長福城(60)が築かれた。さらに、

祇園城から東4 km地点には、小山政光築城と伝わり、小山氏の支族である結城氏の居城となった中久喜城(17)が所在する。また、宿尻館(32)から西2.5 km地点には、小山政光長村の三男宗光の居城であった塚田館(47)が位置する。

結城市の城館をみても、中久喜城から北東5 km地点に結城氏の本拠地である結城城が、さらに中久喜城から3 km程南西方向へ行くと結城氏初代の結城朝光築城と伝わる城の内館が所在する。鬼怒川の東岸に所在する東持寺館は、結城氏一族の山河氏の鎌倉時代の居館と推定され、戦国時代には結城大地の南端部に位置する山川綾戸城へ移る。西仁連川沿いには、城主不明の三蔵神社館跡(34)があり、土塁や池が残存している。

結城市の西端部には、南北に走る細い道が存在しており、現地では鎌倉街道と呼ばれている。この古道は、結城市南茂呂周辺から結城城まで続くと推定されている。また、本遺跡の対岸に位置する作野谷南遺跡(27)の調査が行われており、15世紀後半に鎌倉街道沿いで営まれた宿場跡が調査された。

小山秀綱の家臣団に横倉郷と関係が深いとみられる人物がいたことが判明しており、横倉藤蔵とその一族の横倉豊前である。横倉藤蔵は、天正13(1585)年に小山市土塔周辺で勃発した戦いにおいて、宇都宮国綱勢を一時的に突き崩していたが、菅田伊予守によって討取られたとの記述がみられる。横倉豊前については、天正4(1576)年頃に、小山秀綱が佐竹義重の重臣であった岡本禅哲に送った書状からみられる。これによると、実城(本丸カ)で火災が発生し、陣屋(小山氏の屋敷カ)と大膳(小山大膳太夫カ)・中務(小山一族カ)・刑部太輔(小山一族カ)の屋敷以外の建物がすべて焼失するという大火災であった。その火災の火元となったのが多賀谷河内と横倉豊前の屋敷周辺であったとのことである。

近世

近世における横倉遺跡・横倉戸館古墳群付近は、下野国寒川郡横倉村と呼ばれていた。横倉村は、中世は小山氏の領地であったが、小山氏の滅亡後は結城氏・蒲生氏により治められ、幕府領となったのちの元和5(1619)年に奥平忠昌が宇都宮藩から古河藩へ入封した時から、古河藩の所領となる。延宝3(1675)年から一時は幕府領となるが、天和2(1682)年に堀田正俊の時に再び古河藩領となる。しかし、元禄10(1698)年に行われた元禄の旗本地方直しによって旗本領となり、明治維新を迎えた。また、小山市西部には日光街道が通り、小山および間々田には宿が置かれていた。

発掘調査例では、雨ヶ谷宮遺跡で溝に区画された土壇墓群が、雨ヶ谷西坪遺跡から掘立柱建物や井戸跡等から構成される集落と、土壇墓群が調査されている。出土遺物から江戸時代後期頃と推定される。

参考文献

- 秋山隆雄 1988『西山遺跡発掘調査報告書』小山市教育委員会
- 秋山隆雄 1997『牧ノ内Ⅰ-方形周溝墓・住居跡編-』小山市教育委員会
- 秋山隆雄・栗原 淳 2010『下犬塚遺跡Ⅱ』小山市教育委員会
- 岩上照朗・津野 仁・斎藤 弘 1993『大境遺跡』栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
- 岩上照明 1994a『寺野東遺跡-発掘調査概要報告-』栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
- 岩上照朗ほか 1994b『田間東道北遺跡』栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
- 岩上照朗ほか 1994c『塚崎遺跡』栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
- 岩上照朗ほか 1995a『横倉宮ノ内遺跡』栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
- 岩上照朗ほか 1995b『長福城跡』栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
- 内山敏行 1997『横倉戸館遺跡』栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
- 内山敏行ほか 1997『八幡根遺跡』栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
- 江原英・初山孝行 2007『寺野東遺跡』同成社
- 大金宣介ほか 1993『成沢遺跡』栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
- 小山市教育委員会 1997『小山市遺跡分布図・地名表<改訂版>』
- 小山市史編さん委員会 1980『小山市史』史料編 中世、小山市
- 小山市史編さん委員会 1981『小山市史』史料編 原始・古代、小山市

- 小山市史編さん委員会 1984『小山市史』通史編Ⅰ 自然、原子・古代、中世、小山市
 小山市史編さん委員会 1986『小山市史』通史編Ⅱ 近世、小山市
 片根義幸 1997『関ヶ谷地区遺跡群Ⅰ』栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
 片根義幸・亀田幸久 1998『関ヶ谷地区遺跡群Ⅱ』栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
 亀田幸久編 1996『八幡根東遺跡』栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
 小筆一成編 1995『横倉遺跡』栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
 斎藤 弘編 1996『西浦遺跡』栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
 篠原浩恵 1998『雨ヶ谷宮遺跡・雨ヶ谷西坪遺跡』栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
 竹澤 健ほか 1990『溜ノ台遺跡』栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
 津野 仁 2014『横倉戸館1号墳』『栃木県埋蔵文化財保護行政年報36』平成24年度（2012）、栃木県教育委員会
 津野 仁編 1993～1997『金山遺跡Ⅰ～Ⅴ』栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
 寺内久永 2013『作野谷南遺跡』公益財団法人茨城県教育財団
 野口静男 1986『喜沢海道間遺跡発掘調査報告書』小山市教育委員会
 野口静男 1996『千駄塚浅間遺跡』小山市教育委員会
 野口静男ほか 1991『亀屋・西黒田遺跡発掘調査報告書』小山市教育委員会
 福田定信ほか 1992『下犬塚遺跡発掘調査報告書』小山市教育委員会
 三沢正善 1982『乙女不動原北浦遺跡発掘調査報告書』小山市教育委員会
 三沢正善・大塚昌彦 1987『乙女不動原北浦遺跡B地点発掘調査報告書』小山市教育委員会
 結城市史編さん委員会 1980『結城市史』第四巻 古代中世通史編、結城市
 結城の歴史編さん委員会 1995『結城の歴史』結城市
 結城市教育委員会 1984『結城市遺跡分布図・地名表』
 和田雄次 1989『一般国道4号改築工事地内埋蔵文化財調査報告書2 結城地区 本田遺跡・善長寺遺跡・小田林遺跡』財団法人茨城県教育財団

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	時代	種別
1	西ノ台遺跡	旧石器～平安	散布地
2	四ッ京遺跡	古墳～中世	包蔵地
3	公達和尚塚古墳	古墳	古墳
4	天神山塚古墳	古墳	古墳
5	城の内遺跡	中世	館跡
6	繁昌塚古墳	古墳	古墳
7	沼尻向遺跡	縄紋	包蔵地
8	須久保塚古墳	古墳	古墳
9	上山川愛宕山古墳	古墳	古墳
10	本郷前（鷹ノ巣前）遺跡	縄紋～平安	集落跡
11	向野原（上野原学園北）遺跡	古墳	集落
12	八幡根東遺跡	旧石器～平安	集落跡
13	八幡根遺跡	縄紋～中世	集落跡
14	上ノ宮遺跡	奈良・中世	包蔵地
15	上海道遺跡	奈良	包蔵地
16	本田北遺跡	中世	包蔵地
17	中久喜城跡	中世	城館跡
18	下犬塚遺跡	旧石器～平安	集落跡
19	本田遺跡	縄紋・古墳	集落跡
20	神明塚古墳	古墳	古墳
21	小田林遺跡	縄紋～古墳	集落跡
22	小田林古墳群	古墳	古墳
23	善長寺遺跡	古墳～中世	集落跡
24	塚越遺跡	縄紋	包蔵地
25	横倉松山遺跡	縄紋～近世	集落跡
26	横倉戸館遺跡	縄紋～近世	集落跡
27	作野谷南遺跡	中世	集落跡・墓跡
28	中曾根遺跡	縄紋・古墳・奈良	包蔵地
29	横倉宮ノ内遺跡	縄紋～近世	集落跡
30	横倉本郷遺跡	縄紋～平安	散布地
31	田間車道北遺跡	縄紋～中世	集落跡
32	宿尻館跡	中世	館跡
33	権現遺跡	縄紋～古墳	包蔵地
34	三蔵神社館跡	縄紋～奈良	包蔵地
35	田間前畑遺跡	縄紋～平安	散布地

No.	遺跡名	時代	種別
36	香取前遺跡	縄紋～中世	包蔵地
37	水書氏屋敷跡	中世？	館跡
38	西山古墳群	古墳	古墳
39	西山遺跡	縄紋～平安	集落跡
40	溜ノ台遺跡	縄紋～近世	集落跡
41	往還北遺跡	古墳～中世	散布地
42	稲葉郷遺跡	縄紋～近世	散布地
43	萩山遺跡	縄紋～古墳	集落跡
44	雨ヶ谷中島遺跡	縄紋～平安	散布地
45	雨ヶ谷宮遺跡	旧石器～古墳	集落跡
46	塚崎古墳群	古墳	古墳
47	塚田館跡	中世	城館跡
48	西浦遺跡	縄紋～古墳	集落跡
49	塚崎遺跡	旧石器～奈良	集落跡
50	金山遺跡	旧石器～近世	集落跡
51	六軒古墳群	古墳	古墳
52	東野田愛宕塚古墳	古墳	古墳
53	八ノ割遺跡	縄紋～平安	散布地
54	大境遺跡	平安	製鉄関連
55	小山遊園地古墳群	古墳	古墳
56	足尾塚古墳	古墳	古墳
57	烏久保古墳群	古墳	古墳
58	烏久保遺跡	縄紋～中世	集落跡
59	祇園城跡	中世	城館跡
60	長福城跡	中世	城館跡
61	長福城跡古墳	古墳	古墳
62	神鳥谷曲輪	中世	城館跡
63	鷲城跡	中世	城館跡
64	外城古墳群	古墳	古墳
65	外城遺跡	縄紋～近世	集落跡
66	外城中台遺跡	古墳～平安	散布地
67	宮内古墳群	古墳	古墳
68	粟宮宮内北遺跡	縄紋～平安	集落跡
69	粟宮宮内東遺跡	縄紋～平安	集落跡
70	西黒田遺跡	縄紋～奈良	集落跡
71	亀屋遺跡	縄紋	集落跡

第三章 検出された遺構と遺物

第1節 調査成果の概要

横倉遺跡・横倉戸館古墳群は、西仁連川に面する小山台地縁辺の、舌状台地に位置する。台地縁辺の標高はおよそ 33.0～34.0m を測り、東に向かってやや急激に傾斜し、低地へと降りる。低地の標高はおよそ 28.0m 前後で、東へ約 180m で西仁連川へ至る。

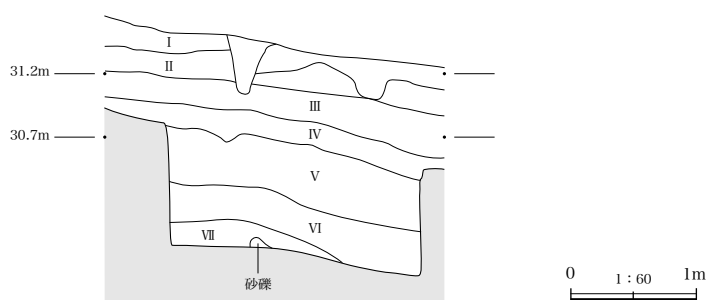
今回の調査区は、台地平坦面から低地にかかる、東西に長い調査区となっている。西側は平成2年度に行われた発掘調査区に隣接しており、この発掘調査では台地上から中世の土壇墓群、低地からは掘立柱建物群からなる集落が調査された。今回の調査区南東部には小山市指定史跡の横倉戸館1号墳が所在する。

調査の結果、縄紋時代では、竪穴住居跡3軒・溝跡1条・土坑35基・ピット38基、古墳時代では方墳1基・方形周溝墓1基・円墳2基・土器棺墓1基・溝跡1条・不明遺構1基、古代では竪穴建物跡1軒、中世では掘立柱建物跡2棟・地下式坑9基・土坑10基・ピット11基、近世以降では土塁1基・堀跡1条・溝跡1条・土坑2基・推定稲荷社跡1基、時期不明遺構は溝跡2条・集石遺構1基・土坑42基・ピット36基が調査された。また、遺構は確認されなかったが、旧石器時代に帰属すると思われる石器が少数確認された。

出土遺物は、縄紋土器・弥生土器・土師器・須恵器・土師質土器・陶器・磁器・石器・石製品・鉄製品・銅製品・土製品・ガラス玉・ガラス瓶である。

基本層序 横倉遺跡・横倉戸館古墳群の基本土層は、旧石器時代の調査区設定箇所である E13d グリッドを掘り下げて観察を行った(第8図、写真図版五)。標高は 31.9m である。この地点での基本土層は 7 層を確認した。I 層は現在の表土である。II は白色粒を少量、ローム粒を微量に含む層である。調査区全体に広がる黒色土層であり、今回調査において確認した古墳の周溝はこの層を掘り込むことから、古墳時代以前の旧表土であると考えられる。III 層はローム粒を微量に含む黒褐色土層。縄紋時代中期から後期にかけての包含層と思われる。IV 層は III 層よりやや灰色がかった黒褐色土層。しまりは強く、粘性がややある。一部ソフトローム状を呈し、斜面下方では灰褐色に近い様相を示し、粘性は強くなる。一方、台地平坦面では堆積は薄く、またはみられず、ソフトロームと漸位的になる。縄紋草創期から早期にかけての包含層と考えられる。V 層はハードローム層。VI 層は暗色帯。VII 層は砂を含むハードローム層。やや粗い砂を多く含むとともに 5 cm 程度の少礫が混ざる。また、赤みを帯びた少礫や砂の硬化ブロックも混入する。ここでは鹿沼軽石層はみられなかったが、台地平坦面では IV 層下より約 30 cm から 40 cm 下位で鹿沼軽石層がみられた。

台地平坦面でも、ローム面上に I～III 層まで確認されたが、斜面に比べ層厚は薄い。各時代の遺構確認面は III 層からローム漸位層上面にかけてで、多くの遺構はローム層を掘り込んで作られている。



第8図 基本層序

第2表 遺構一覧表

縄文時代の遺構

竪穴住居跡

遺構No	グリッド	形状	重複関係	規模 (m)		深さ (m)	挿図番号
				長軸	短軸		
SI-73	E5・6	楕円形	SK-86・P-104・P-105より旧	7.50	5.34	0.20	第26～31図
SI-76	F14・E14	円形	SK-60より新	8.78	7.38	0.70	第13～25図
SI-85	E8	不整形円形	SD-70・SD-70b・SK-90・SK-91・SK-206より旧	5.76	5.00	0.14	第36・37図

溝跡

遺構No	グリッド	形状	重複関係	規模 (m)		深さ (m)	挿図番号
				幅	深さ		
SD-147	F11	直線的	SZ-1・SD-3より旧	0.44	0.20		第45図

土坑

遺構No	グリッド	形状	重複関係	規模 (m)		深さ (m)	挿図番号
				長軸	短軸		
SK-12	E4	不整形円形		1.24	0.82	0.06	第38・40図
SK-46	D3	不整形円形		0.67	0.45	0.13	第38・40図
SK-47	E4	不整形円形		0.84	0.68	0.18	第38・40図
SK-56	D4	隅丸長方形		(1.51)	0.83	0.11	第38・40図
SK-60	F14	不整形	SI-76P58・P59より旧	1.48	0.62	0.06	第13・16図
SK-65	E14	隅丸長方形	S-64P1より旧	1.59	0.57	0.24	第43図
SK-68	E4	不整形		0.50	0.40	0.18	第38・40図
SK-73b	F6	楕円形	SI-73 bより新? (同時期か)	1.78	1.46	0.20	第26・28・32～35図
SK-74	E6	不整形円形		0.55	0.48	0.16	第40・41図
SK-83b	F8	方形?	SZ-27・SK-83aより旧	1.84	1.34	0.28	第41図
SK-103a	E8	不整形円形	SK-103b・SK-103cより新、SZ-27・SK-82より旧	2.13	1.98	1.16	第41・42図
SK-103b	E8	不整形円形	SK-103aより旧、SK-103cより新	0.23	0.13	0.84	第41・42図
SK-103c	E8	不整形円形	SK-103a・SK-103bより旧	0.49	0.39	0.36	第41・42図
SK-134	F9	不整形円形	SA-2より旧	1.59	1.06	0.34	第41・42・149図
SK-135	F11	楕円形	SZ-1より旧	1.20	0.66	0.18	第45・47図
SK-136	F11	楕円形	SZ-1より旧、SK-148より新	1.18	0.61	0.14	第45・48図
SK-137	F11	不整形円形	SZ-1より旧、P-138より新	0.95	0.80	0.24	第45・47図
SK-139	F11	楕円形	SZ-1より旧	0.80	0.61	0.28	第45・48図
SK-143a	F11	不整形	SZ-1・SK-162bより旧、SK-143bより新	2.19	0.44	0.14	第45・46・48図
SK-143b	F11	不整形	SZ-1・SK-162b・SK-143aより旧	(0.48)	0.68	0.06	第45・48図
SK-148	F11	不明	SZ-1・SK-136より旧	1.15	0.91	0.40	第45・47図
SK-149	F11	円形	SZ-1・SK-162aより旧	0.69	0.55	0.24	第45・46図
SK-150	F11	楕円形	SZ-1・P-151より旧	0.67	0.53	0.20	第45・46図
SK-154	F11	円形	SZ-1・P-152・P-153より旧	0.90	0.64	0.14	第45・46図
SK-155	F11	円形	SZ-1・P-152より旧	0.57	0.54	0.30	第45・46図
SK-156	F11	円形	SZ-1より旧、SK-157・SK-171より新	0.89	0.75	0.16	第45・46図
SK-157	F11	不整形円形	SZ-1・SK-156・SK-159より旧、SK-171より新	1.53	1.17	0.26	第45・46図
SK-158	F11	楕円形	SZ-1より旧	0.86	0.64	0.20	第45・46図
SK-159	F11	不整形円形	SZ-1より旧、SK-157より新	0.78	0.56	0.22	第45・46図
SK-160	F11	楕円形	SZ-1より旧	0.79	0.45	0.30	第45・46図
SK-162a	F11	不整形円形	SZ-1より旧、SK-149より新	1.44	1.08	0.52	第45～47図
SK-162b	F11	円形	SZ-1より旧、SK-143aより新	0.44	0.40	0.16	第45～47図
SK-168	F11	円形	SZ-1より旧	0.72	0.67	0.14	第45～47図
SK-171	F11	不明	SZ-1・SD-3・SK-156・SK-157より旧	0.73	0.57	0.10	第45・46図
SK-209	F8	不整形	SZ-27より旧	1.92	0.56	0.20	第41・42図

ピット

遺構No	グリッド	形状	重複関係	規模 (m)		深さ (m)	挿図番号	
				長軸	短軸			
P-49	D4	円形		0.27	0.16	0.51	第39図	
S-64	P1	E14	円形	S-64P 2・SK-65より新	0.36	0.34	0.20	第43図
		E14	楕円形	S-64P1より旧	0.35	0.26	0.15	第43図
	P3	E13・E14	楕円形	S-64P14より旧	(0.45)	0.44	0.19	第43図
	P4	E14	円形		0.43	(0.17)	0.22	第43図
	P5	E14	円形		0.50	0.48	0.33	第43図
	P6	E14	楕円形		0.72	0.55	0.20	第43図
	P7	E14	隅丸長方形	S-64P8より旧	(0.20)	0.23	0.22	第43図
	P8	E14	円形	S-64P7より新	0.27	0.26	0.22	第43図
	P9	E13	円形		0.24	0.22	0.30	第43図
	P10	E13	楕円形		0.33	0.23	0.34	第43図
	P11	E13	楕円形		0.74	(0.40)	0.39	第43図
	P12	E13	円形		0.47	0.41	0.32	第43図
	P13	E13	楕円形		0.34	0.28	0.19	第43図
	P14	E13・E14	円形	S-64P3より新	0.56	0.48	0.25	第43図
P15	E13	円形	S-64P16より旧	0.27	(0.15)	0.29	第43図	
P16	E13・E14	円形	S-64P15より新	0.31	0.26	0.17	第43図	
P17	E13・E14・F13・F14	円形		0.68	0.59	0.43	第43図	
P-69	E13・E14	E14	楕円形		0.65	(0.43)	0.21	第43図
		E13	円形		0.43	0.40	0.26	第39・42図

第三章 検出された遺構と遺物

P-128b	E9	不整円形	P-128d → P-128c・P-128e → P-128b → P-128a の順となり、SK-114・SZ-27・SA-2より旧	0.57	0.38	0.30	第44図
P-128c	E9	楕円形		0.63	0.42	0.56	第44図
P-128d	E9	楕円形		0.56	0.38	0.60	第44図
P-128e	E9	不整円形		0.93	0.60	0.42	第44図
P-138	F11	円形	SZ-1・SK-137より旧	0.45	0.43	0.08	第45図
P-140	F11	円形	SZ-1より旧	0.58	0.55	0.16	第45図
P-141	F11	不整円形	SZ-1より旧	0.81	0.61	0.22	第45図
P-142	F11	不明	SZ-1より旧	0.48	0.31	0.16	第45・48図
P-145	F10・11	楕円形	SZ-1より旧	0.50	0.39	0.24	第45・47図
P-146	F11・G11	楕円形	SZ-1より旧	0.73	0.50	0.16	第45・47図
P-151	F11	楕円形	SZ-1より旧、SK-150より新	0.40	0.30	0.16	第45～47図
P-152	F11	円形	SZ-1より旧、SK-154・SK-155より新	0.40	0.34	0.14	第45～47図
P-153	F11	円形	SZ-1より旧、SK-154より新	0.44	0.39	0.18	第45・46図
P-161	F11	楕円形	SZ-1より旧	0.36	0.28	0.14	第45・46図
P-166	F11	楕円形	SZ-1より旧	0.40	0.27	0.28	第45・46図
P-167	F11	楕円形	SZ-1より旧	0.40	0.32	0.12	第45・46図
P-169	F11	円形	SZ-1より旧	0.29	0.29	0.12	第45・46図
P-170	F11	楕円形	SZ-1より旧	0.36	0.24	0.24	第45・46図

古墳時代の遺構

古墳

遺構No.	グリッド	形状	重複関係	墳径 (m)	埋葬施設	挿図番号
SZ-1	F10～12・E11	方墳	SA-2・SD-3・SZ-66より旧、墳丘盛土下の縄文時代の溝・土坑・ピット、SD-117より新	15.5	土坑墓1 周溝内土坑1	第150～166図
SZ-27	E8・E9・F8・F9	円墳	SK-103a～c・SK-28a・SK-128b・SK-83b・SK-209より新、SK-114・SK-82・SK-87・SK-115・SK-102・SK-133・SA-2より旧	13.6	消滅	第172～174図
SZ-66	E11・E10・F11	方形周溝墓	SZ-1・ST-72より新	8.0～9.0	土坑墓1	第167～171図
SZ-67	E12・E13・F12・F13	円墳	SI-75より旧	15.6	消滅	第175～179図
横倉戸館1号墳	G12～G14・H12～H14	円墳		16.2	不明	第189～192図

土器陪墓

遺構No.	グリッド	形状	重複関係	規模 (m)		深さ (m)	挿図番号
				長軸	短軸		
ST-72	E11	楕円形	SZ-66より旧	0.82	0.74	0.33	第180～182図

溝跡

遺構No.	グリッド	形状	重複関係	幅 (m)	深さ (m)	その他	挿図番号
SD-117	F9・F10	曲線状	SZ-1・SA-2・SX-119aより旧	0.6～0.8	0.6～0.7		第183図

性格不明遺構

遺構No.	グリッド	重複関係	範囲 (長軸×短軸、m)		その他	挿図番号
			西焼土	東焼土		
SX-119a	F10	SK-119b・SA-2より旧、SD-117より新?	1.12× 0.72	0.49× 0.33	土器との関係は不明	第184～186図

古代の遺構

竪穴建物跡

遺構No.	グリッド	形状	重複関係	規模 (m)		深さ (m)	挿図番号
				長軸	短軸		
SI-75	E12・F12	不整方形	SZ-67より新	3.62	3.56	0.08～ 0.44	第193～196図

中世の遺構

掘立柱建物跡

遺構No.	グリッド	形状	重複関係	規模 (m)		深さ (m)	挿図番号
				長軸	短軸		
SB-108	E6・7	台形	SK-95より旧	4.20	3.80	0.08～0.4	第199図
SB-120	E9	台形	SK-86より旧	3.16	2.40	0.20	第200図

地下式坑

遺構No.	グリッド	形状	重複関係	規模 (m)		深さ (m)	挿図番号
				長軸	短軸		
SK-77	E6・F6	「キ」字状	SK-100より旧	6.10	5.90	1.50	第201～203図
SK-82	E8・F8・E9・F9	「E」字状	SK-103a・SZ-27より新	4.20	2.30	1.60	第204～206図
SK-86	E8・E9	「十」字状	SI-85・SB-120より新	4.50	3.40	1.50	第207・208図
SK-87	F9	「干」字状	SZ-27・S-121P5より新、SA-2より旧	4.20	2.60	1.40	第209・210図
SK-95	E7	変形「十」字型	SD-101・SB-108より新	4.30	4.10	1.30	第211・212図
SK-96a	E7	変形「十」字型	SK-96bより旧	3.80	3.00	1.30	第213～215図
SK-106	D7・E7	長方形?		2.90	1.30	1.1～2.0	第216図
SK-115	E9・F9	「十」字状	SK-128d・SK-128c・SK-128b・SK-128a・SZ-27・SD-114・S-124P3・S-124P4より新、SA-2より旧	4.25	3.40	1.30	第217・218図
SK-116	F9・F10	「十」字状	SK-126bより新	4.30	3.10	1.40	第219～221図

第1節 調査成果の概要

土坑							
遺構No	グリッド	形状	重複関係	規模 (m)		深さ (m)	挿図番号
				長軸	短軸		
SK-78	E8・F9	隅丸長方形	SK-202 より新	3.25	1.30	0.84	第 222 図
P1	E8・F9	不明		0.35	0.17	0.21	第 222 図
P2	E8・F9	不明		0.44	0.13	0.16	第 222 図
P3	E8・F9	楕円形		0.53	0.42	0.11	第 222 図
P4	E8・F9	円形		0.30	0.29	0.34	第 222 図
P5	E8・F9	円形		0.47	0.44	0.26	第 222 図
P6	E8・F9	円形		0.35	0.29	0.14	第 222 図
SK-83a	F8	不整形	SK-83b・SK-202 より新	2.04	1.55	0.75	第 222 図
SK-88	F8	不整形	SK-89 より旧	2.00	1.40	0.43	第 222・225 図
SK-89	F8・9	不整形長方形	SK-88・P-204 より新	3.55	2.10	1.00	第 222・225 図
SK-96b	E7	不整形長方形	SK-96a・SK-101 より新	2.80	1.80	0.77	第 223・226 図
SK-101	E7	長楕円形	SK-95・SK-96b より旧	4.56	0.57	0.64	第 223 図
SK-114	E9	長楕円形	S-124P1・S-128a より新、SK-115 より旧	4.52	0.53	0.92	第 223 図
SK-119b	F10	長楕円形	SX-119a より新、SA-2 より旧	2.02	1.58	0.38	第 223 図
SK-126b	F9・10	方形	SK-126a・SA-2 より旧	1.66	1.35	0.52	第 223・225 図
SK-202	F8	不整形長方形	SK-78・SK-83a より旧	4.16	2.20	0.50	第 224・225 図

ピット							
遺構No	グリッド	形状	重複関係	規模 (m)		深さ (m)	挿図番号
				長軸	短軸		
P-97	E7	円形		0.43	0.35	0.44	第 227 図
P-98	E7	円形		0.31	0.29	0.45	第 227 図
P-99a	E7	不整形	P-99b より新	0.51	0.28	0.14	第 227 図
P-99b	E7	不整形	P-99a より旧	0.25	(0.18)	0.07	第 227 図
P-109	E7	方形		0.30	0.27	0.34	第 227 図

近世以降の遺構

土塁							
遺構No	グリッド	形状	重複関係	規模 (m)		盛土高 (m)	挿図番号
				南北軸幅	東西軸幅		
SA-2	E9・F9・E10・F10		E9・F9・E10・F10 に位置する、SD-4・SK-127 以外の遺構はすべて旧	25	7.4～10.4	0.6	第 229～237 図

堀跡

遺構No	グリッド	形状	重複関係	幅 (m)	深さ (m)	その他	挿図番号
SD-3	E10・F10・F11	直線状	SZ-1・SD-117 より新、SD-4 より旧	2.4～3.6	1～1.4		第 229～231・238・239 図
SD-4	E9・E10	方形?	SA-2・SD-3 より新、SK-127 より旧	1.2～1.4	0.8～0.84		第 240～242 図

土坑

遺構No	グリッド	形状	重複関係	規模 (m)		深さ (m)	挿図番号
				長軸	短軸		
SK-121	E9	不整形円形	SA-2 と重複するが不明	0.35	0.34	0.22	第 244・245 図
SK-130	F9	長方形?		1.40	0.35	0.84	第 246・247 図

推定稲荷社跡

遺構No	グリッド	重複関係	範囲 (m)		その他	挿図番号
			長軸	短軸		
SZ-1 墳頂部	F11	SZ-1 より新	3.8	3.40		第 246～250 図

時期不明の遺構

溝跡							
遺構No	グリッド	形状	重複関係	幅 (m)	深さ (m)	その他	挿図番号
SD-70	D5・E5・6	直線状	SI-73 より新	0.5～1.85	0.48～0.79		第 256 図
SD-70b		直線状	SI-73 より新?	0.65～1.1	0.16		第 256 図

性格不明遺構

遺構No	グリッド	重複関係	範囲 (m)		その他	挿図番号
			長軸	短軸		
SU-118	E9	SA-2 より旧	0.65	0.40		第 257・258 図

土坑

遺構No	グリッド	形状	重複関係	規模 (m)		深さ (m)	挿図番号
				長軸	短軸		
SK-11	D4	円形		0.48	0.44	0.15	第 259 図
SK-13	E4	不整形円形		0.63	0.56	0.17	第 259 図
SK-14a	D4・E4	不整形長方形	SK-14b より新	0.58	0.54	0.30	第 259 図
SK-14b	D4・E4	不整形長方形	SK-14a より旧	(0.36)	0.36	0.14	第 259 図
SK-15	E5	円形		0.71	0.64	0.10	第 259 図
SK-18	E5	円形	SK-94 より旧	0.82	0.66	0.06	第 259 図
SK-19	E5	楕円形		0.56	0.34	0.11	第 259 図
SK-20	E5	円形		0.71	0.61	0.06	第 259 図
SK-21a	E5	不整形楕円形	SK-21b より旧	(1.85)	1.35	0.11	第 259 図
SK-21b	E5	不整形円形	SK-21a より新	1.33	1.22	0.41	第 259 図
SK-22	E4	楕円形		0.43	0.34	0.09	第 259 図
SK-24	E2	不整形長方形		0.86	(0.77)	0.85	第 260 図

第三章 検出された遺構と遺物

SK-25	F7	不整形円形		0.70	0.62	0.12	第267図
SK-26a	F7	不整方形	SK-26bより新	1.40	1.09	0.43	第263・267図
SK-26b	F7	方形	SK-26aより旧	0.85	(0.77)	0.32	第267図
SK-28	D4	楕円形		0.63	0.51	0.09	第260図
SK-29	D4	楕円形		0.52	0.37	0.41	第260図
SK-40	D3	不整形		2.15	1.16	0.35	第260図
SK-44	D3	楕円形		1.00	0.71	0.12	第260図
SK-45	D3	不整形円形		0.32	0.29	0.12	第260図
SK-57	E3	楕円形		0.53	0.32	0.07	第260図
SK-80	E5	円形		0.35	0.31	0.07	第260図
SK-81	E4	不整方形		0.59	0.49	0.06	第260図
SK-84	D8	方形		0.62	0.28	0.52	第261図
SK-90	E6	楕円形		1.09	0.75	0.30	第260図
SK-91	E6	不整方形	SI-73より新	0.92	0.53	0.84	第260図
SK-100	E6・F6	不整形	SK-77より新	1.69	0.49	0.29	第261図
SK-102	F8	円形	SZ-27より新	1.18	1.06	0.44	第261図
SK-122	E9	不整形円形	SK-123より新	1.57	1.02	0.30	第261・263図
SK-123	E9	不整形円形	SK-122より旧	1.06	1.09	0.54	第261図
SK-125	E9	楕円形		0.93	0.76	0.11	第261図
SK-126a	F9・10	楕円形	SK-126bより新	1.62	1.37	0.62	第261図
SK-127	E9・10	円形	SA-2・SD-4より新	1.37	1.34	1.04	第261図
SK-129a	F9	円形	SK-129bより旧	1.11	0.93	0.32	第261・263・264図
SK-129b	F9	円形	SK-129aより新	0.81	0.53	0.25	第261・263図
SK-133	F9	不整形円形	SZ-27より新	1.84	0.65	0.48	第261図
SK-205	F7	不整楕円形	SK-89・SK-204より新	1.12	0.72	0.22	第262図
SK-206	F6	不整楕円形		1.83	1.12	0.23	第260図
SK-208	F7	不整楕円形		0.87	0.62	0.22	第267図
SK-211	E5	円形		0.31	0.28	0.11	第260図
SK-210	F12	不整形		1.64	0.82	0.32	第262図
SK-215	F7	隅丸正方形	SK-217より新	0.88	0.81	0.31	第267図

ピット

遺構No.	グリッド	形状	重複関係	規模 (m)		深さ (m)	挿図番号
				長軸	短軸		
P-62	D3	楕円形		0.38	0.33	0.23	第265図
P-92a	F7	円形	P-92bより新	0.49	0.49	0.34	第267図
P-92b	F7	長方形	P-92aより旧	(0.37)	0.35	0.18	第267図
P-93	F7	円形		0.52	0.46	0.31	第267図
P-94	E5	円形		0.25	0.20	0.20	第264図
P-104	E8	楕円形	P-105より旧	0.52	0.36	0.17	第266図
P-105	E8	円形	SK-86・P-104より新	0.57	0.57	0.26	第266図
S-107	P1	円形		0.32	0.29	0.28	第269図
	P2	円形		0.36	0.35	0.42	第269図
	P3	円形		0.30	0.26	0.22	第269図
	P4	円形		0.22	0.21	0.23	第269図
	P5	円形		0.35	0.35	0.11	第269図
	P6	円形		0.34	0.32	0.26	第269図
P-110	F7	円形		0.35	0.34	0.11	第267図
P-111a	E7	円形	P-111bより新	0.34	0.40	0.21	第267図
P-111b	E7	円形	P-111aより旧	0.31	(0.24)	0.12	第267図
P-112	E7	楕円形		0.52	0.40	0.29	第267図
P-113	E7	円形		0.34	0.34	0.13	第263図
S-124	P1	円形	SK-114より旧	0.54	0.45	0.29	第270図
	P2	円形	-	0.45	0.35	0.22	第270図
	P3	円形	SK-115より新	0.28	0.28	0.23	第270図
	P4	円形	SK-115より新	0.39	0.25	0.18	第270図
	P5	円形		0.52	0.46	0.17	第270図
	P6	円形		0.48	0.43	0.13	第270図
	P7	円形		0.48	0.44	0.30	第270図
P-128a	E9	不明	SK-114・SK-115より旧、S-128b～S-128eより新	1.08	0.45	0.17	第268図
S-131	P1	円形	P-131P5より新	0.43	0.37	0.32	第271図
	P2	不整方形		0.56	0.25	0.28	第271図
	P3	円形		0.43	0.43	0.41	第271図
	P4	円形		0.33	0.26	0.16	第271図
	P5	楕円形?	P-131P1より旧	(0.40)	0.42	0.40	第272図
P-132	F9	円形		0.44	0.43	0.21	第268図
P-204	F7	楕円形	SK-85より新、SK-205より旧	0.76	0.36	0.16	第262図
P-207	E8	円形		0.28	0.26	0.39	第259図
P-216	F7	円形		0.44	0.41	0.34	第267図
P-217	F7	楕円形	SK-215より新	0.32	0.26	0.37	第267図

第2節 旧石器時代の調査と遺物

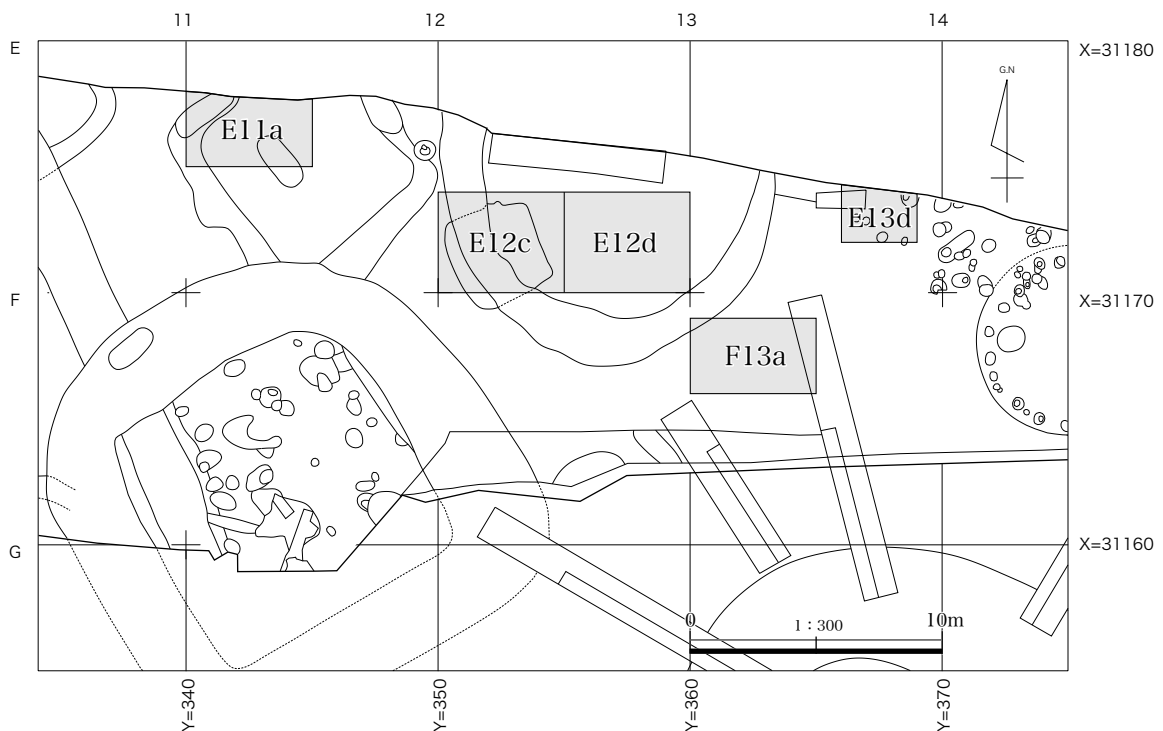
横倉遺跡では、前回調査にあたる新4号国道バイパス建設に先立つ調査において、遺構は確認できなかったが、珪質頁岩・黒曜石を主体とした剥片・石核が出土している。

前回の調査における成果をもとに、台地縁辺部にあたるE11aグリッドに東西4.5m×南北2.5m、E12cグリッド・E12dグリッドに東西4m×南北4m、E13dグリッドの北辺中央部に東西1.5m×南北2m、F13aグリッドに東西4m×南北3mの調査区をそれぞれに設けて掘り下げを行った(第10図、写真図版五)。E13dグリッドは標準土層観察の為1m程掘り下げ、それ以外のグリッドでは基本層序第Ⅵ層に相当する暗色帯まで掘り下げを行った。E11a・E12c・E12dの各グリッドの調査区内からチャート製の剥片および黒曜石製の剥片が出土している。しかし、残念ながら旧石器時代に係る遺構やブロック・遺物の集中等は認められず、二次加工が施された剥片はみられたものの、明確な製品は確認できなかった。

今回の調査において確認できた、旧石器時代と考えられる遺物を示すと、E11aグリッドからはチャート製の剥片4点、頁岩製の剥片1点である。E12cグリッドからは黒曜石製の剥片1点である。E12dグリッドからは黒曜石製の剥片1点、チャート製の二次加工剥片が1点、出土地点不明のチャート製の剥片1点である。SD-3壁面のローム層中から、黒曜石製の剥片が1点出土している。また、他時代の遺構覆土や包含層からの出土遺物が3点確認でき、すべて二次加工を施した剥片石器であった。

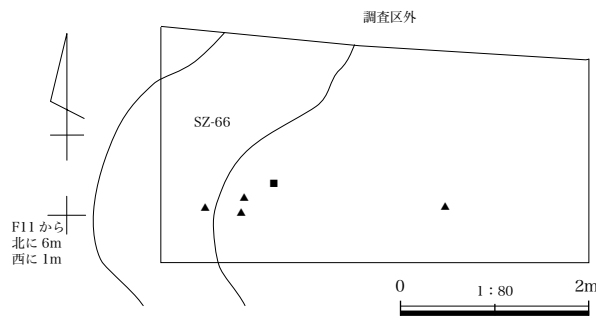
ここでは以上計13点のうち、5点を図示する(第12図、第3表)。なお、第3節で示す縄紋時代の石器の中にも旧石器の可能性のあるものも認められる。1はE5aグリッドの、縄紋時代の包含層中から出土した二次加工剥片である。頭部から左側縁部に、微細な使用痕が残る。また、不定形な剥面の右側面から折り取られている。石材は流紋岩である。

2は調査区内より出土した二次加工剥片である。不定形な剥面の周縁に表裏面から剥離による加工を施す。特に、下端は剥離が連続することにより鋸歯状を呈す。また、表面の下端部は自然面を残す。打点部は表面

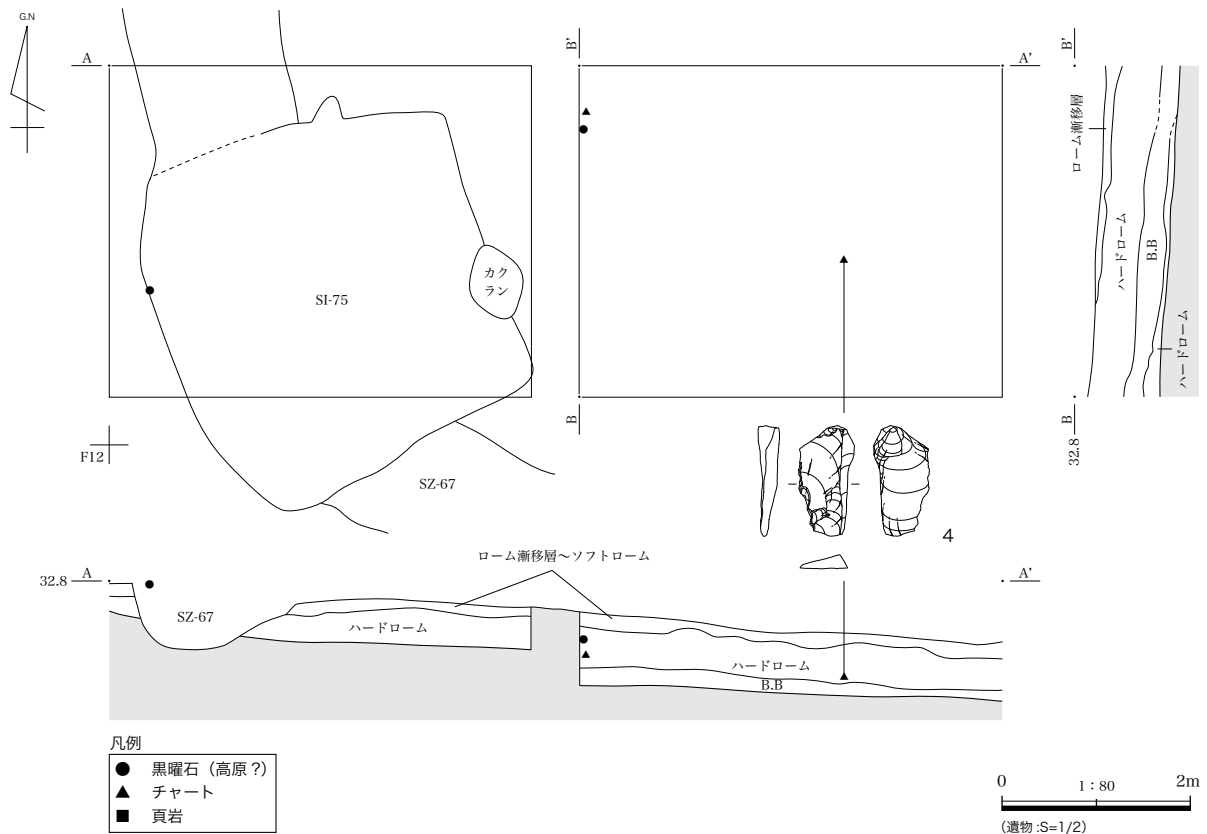


第10図 調査区設定図

E11a グリッド



E12c・E12d グリッド



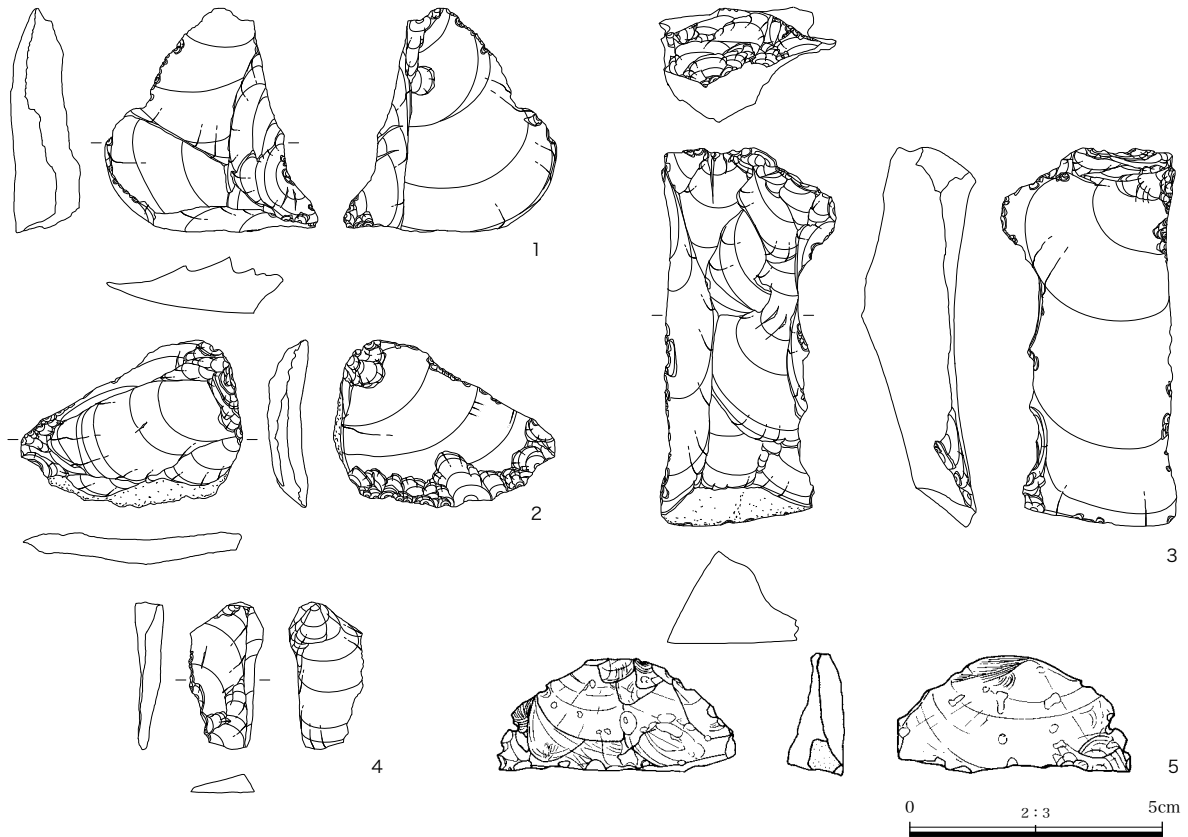
第 11 図 遺物出土状況図

の右上端であるが、表裏面からの加工により除去されている。石材は頁岩である。

3はD3dグリッドの縄紋時代包含層中より出土した二次加工剥片である。両側縁がほぼ平行する、断面三角形の剥片である。左側縁部に、細かな使用痕が残る。右側縁部には、器体に対し90°方向からの剥離が認められることから、石核自体はかなりの大型品であったことが推定される。上端の打面部には、細かな打面調整の痕が認められる。下方端部は自然面を残す。石質は頁岩である。

4はE12dグリッドにおける、旧石器の調査において出土した二次加工剥片である。出土層位は暗色帯より上層のハードローム層である。左側縁には細かな加工を施す。右側面縁部には使用痕が認められる。石質はチャート（赤色）である。

5はSD-3壁面のローム層中より出土したやや幅広な剥片。打点は上端で、下端は裏面から折られている。石質は高原山産の黒曜石の可能性はある。



第12図 石器実測図

第3表 石器観察表

No.	器種	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	石材・材質	出土位置	備考
1	二次加工剥片	4.40	3.69	1.29	15.80	流紋岩	E5a	頭部から左側縁使用痕、剥面右側面から折り取られる。
2	二次加工剥片	3.13	4.35	0.69	9.46	頁岩 (新第三紀)	調査区内	剥面周縁に二次加工。
3	二次加工剥片	7.50	3.31	1.84	41.41	珪質頁岩	D3d	左側縁部使用痕、打面部調整。
4	二次加工剥片	2.89	1.43	0.56	1.95	Che チャート (赤色)	E12D	左側縁二次加工、右側縁使用痕。
5	剥片	2.25	4.66	1.14	9.58	黒曜石 (高原山産?)	SD-3	

第4表 不掲載石器観察表

整理番号		出土位置	種類	計測値 (cm / g)				特徴・備考	石材・材質
箱番号	仮番号			最大長	最大幅	最大厚	重量		
126	77	E12d プレ	FL	1.8	2.0	0.6	1.75	一側縁使用痕?	チャート
126	78	E12c no.1	FL	2.7	2.1	1.3	4.08		黒曜石 (高原山?)
126	79	E12d no.1	FL	1.3	1.2	0.3	0.40	碎片状	チャート
126	80	E12d no.2	FL	1.5	2.5	1.5	2.51	断面三角形	黒曜石 (高原山?)
126	81	E11a no.1	CH	1.2	1.4	0.2	0.48		チャート
126	82	E11a no.2	FL	1.7	1.3	0.5	1.05		チャート
126	83	E11a no.3	RF	2.4	2.1	0.8	2.91	両極剥片、一部二次加工、楔形石器?	チャート
126	84	E11a no.4	FL	2.4	1.1	0.5	1.16	縄紋時代磨製石斧の破損部分か?	頁岩
126	85	E11a no.5	FL	1.2	1.1	0.5	0.46		チャート
127	3	E12d プレ区	楔形	2.4	1.4	0.7	3.60	上下側縁に二次加工	泥質チャート

第3節 縄紋時代の遺構と遺物

1. 竪穴住居跡

SI-76（第13～25図、第4表、図版六～八・五五・五六）

位置 本住居跡はE14・F14・E15・F15グリッドで確認され、谷部へ向けて台地の傾斜がやや強くなる場所に位置している。また、本住居跡の南約3mには横倉戸館1号墳が隣接する。

調査の経緯 本遺構の調査は、谷へかかる斜面部包含層の調査後、ローム面近くで多くのピットが確認されたことを契機とする。当初住居主体部近辺を土置き場としていたこともあり、これら斜面下方でのピット等については、土坑（SK-50～53・58・63）およびピット群（S-54ピット群、S-64ピット群、S-59ピット群）として調査を行った。その後住居主体部のプランが確認され、覆土の掘り下げ、遺構の精査と共に、これらピット群として扱った遺構についても、この住居跡と関わる事が推定された。これにより、整理段階において調査時に付した土坑およびピット群としての呼称を変更し、新たに本跡に帰属するピットとして番号を改称した。なお平成25年度での調査では一部未調査であったプラン南側について平成26年度に調査を行い、より形態を明らかにすることができた。

規模・形状 住居跡の形態については、明瞭な掘り込みがプランの1/3程度にとどまっていることもあり、確定できないところがある。ここでは東側を入口とする楕円形のプラン案を示す。つまり検討不十分であるが、入口についてをP59・60～64近辺とし、ここから炉を通りP5近辺を奥壁とする案で、この場合主体部の軸長は8.78m、主軸直交長は7.38m、主軸方向はN-83°-Wとなる。主体部南西側は掘り込みが明瞭で、垂直に近く立ち上がる壁の高さも最大70cm程度ある。この壁も北側および東側へ向かうに従い、壁高も低く角度も緩やかに斜め下方側では不明瞭となる。なお南側の壁についてもP16の南辺りまでは明瞭であるが、これより東側では不明瞭で、図の破線で示した辺りでは掘り込み自体も不明瞭となっていた。

明瞭な南西側の壁直下には壁柱穴が明瞭に認められる。ここでのP3-P5-P6-P8-P10-P12-P13-P14-P15-P19-P62と巡る柱穴群は、相互の間隔も25～30cmと比較的均等であり、深さも22.4～66.3cmと良好な形態例が多い。P3より北側にかけては重複も目立ち、均等な壁柱穴群を抽出するのはやや難しいが、P3-P40-P32-P29-P42-P47-P51-P53-P59と弧状に巡るピット群を第一の案として示しておく。東側のピット群について、どこまで本住居跡関連とみるか問題となるが、P85辺りまで関わる可能性もある。やや離れた位置にあるP75等も含め、ここでは便宜的にSI-76のピットとして扱っておく。入口ピット群や北側のP40～54辺りでの重複を考えれば、単純に1軒ではなく複数回の構築や、より北側での別の住居等の遺構を想定することもできる。P58・59のピットはP60覆土を切るような土層堆積が確認されたことも、本住居跡の改築・重複を示している。なお斜面下方のピットについては、床面が概ね水平に東側へ延びていたとすれば、本来はより深い穴であったと考える。

床面 主体部プラン内南西側では床面は明瞭で、一部貼床状に硬化した部分も認められた。概ね炉近辺より東側はローム面は下がることから、住居東側では黒色土を床面としていた、あるいは土を整地しての床面としていたことが想定されるが、調査時には明瞭に捉えられていない。

覆土 明瞭に確認できたのは主体部南西部で、9層に分けられた。1層・5層・8層には、ローム粒・ロームブロックが多量に含まれており、壁際での堆積から壁面の崩落や周堤土の流入に伴う埋土と考えられる。全体に広く堆積する2～4層は緻密な土で、しまりは強く、自然堆積と判断される。

また、本住居跡に基本土層Ⅱ層が住居跡内覆土を覆う状況が確認でき、一部では基本土層Ⅱ層が住居跡内覆土となっている箇所が観察できた。

炉 本住居跡の中央付近に炉跡が検出された。直径50cm前後のやや歪んだ円形を呈する。掘り込みの形態は断面逆台形状で、底面は良く焼けており、北半分の周囲に厚さ5cmの焼土面が広がる。

遺物出土状況(第19図) 本住居跡からは比較的多くの遺物が出土している。床面あるいは床面より若干上位で第21図4の注口土器、第25図2に示した垂飾の玉類、同図1の土製蓋が出土している。また第22図4の大形の深鉢底部が逆位で出土している。破片の出土では中期の破片や前期の破片も混入しているが、堀之内2式が量的にも多く大きめの破片が多いことから、住居跡の時期を示していよう。

注目されるのはP7から出土した深鉢で、ピット底面から中位にかけて、深鉢の個体を意図的に分割した上で口縁側の方向を90度、180度変えながら設置している状況が確認された。ピットは長軸40cm、短軸35cm、深さ31.7cmのピットで、覆土は人為堆積と想定されるものの、土層自体の観察では他ピットと明瞭な差異は認められていない。

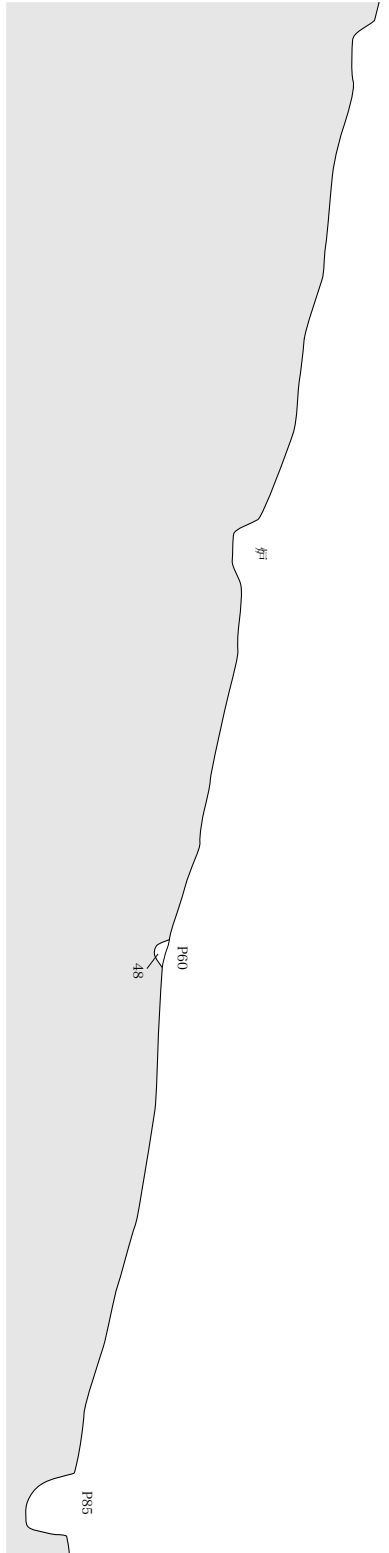
出土遺物 SI-76からは総数290点の土器が出土している。これには、出土状態の項でも記したように、床面～床面近くから出土した資料もあるが、やや上位から出土したものも含んでいる。一方さらに上位の包含層出土資料(ゾーン③)の中にも、本来この住居に帰属する資料が含まれている可能性もあろう。とりわけ張出部ピット群と想定される東側のピット群近辺から出土した資料は、当初住居跡としての判断・調査前に包含層出土土器として取り上げており、第103～105図中のF14・F15グリッド出土土器については、当該遺構との関わりも充分想定される資料と言えよう。

第21図1は、口径22.5cm、高さ22cmが残る深鉢である。外面はにぶい褐色～にぶい黄燈、内面は黒褐色を呈し、胎土には石英・白色粒をやや多く、他に灰色粒、角閃石等も含む。鉱物はやや多めだが粒径は小さい。上からみるとやや歪みがあり、とりわけ図正面側の突起部がやや外側に開くような形態となっている。沈線→縄紋LR→無文部ミガキで、概ね沈線外側無文部に縄紋は残されていないが、沈線上には縄紋が載る(被さる)ところも幾つか確認される。外面下半も良く磨かれている。内面も良く磨かれているが、一部凹凸を残し、また削り取りの痕跡かのような砂粒移動の線状痕跡も一定程度認められる。やや乾いた段階における、幾分硬質な工具による調整であることをうかがわせる。内面の焦げは下半で顕著であるが、比較的上方にもおよび、口縁付近でも炭化物の付着がある。外面も煤・炭化物の付着が顕著で、こちらは上方から下位までまんべんなく付いているように観察される。

遺構の項で記したように、この個体は大きく3片に分かれて出土している。復元後でも口縁～頸部遺存でみて1/4弱が欠損しており、即ち4パーツ(以上)に分割され、そのうち3パーツを柱穴内に設置したということになる。実測図中央より左側にある割口部分(②と③の分割線)、とりわけ口縁端部およびその下2.5cm程度のところ、更に文様帯下端区画線の直下辺りで傷あるいは3mm程度広がる欠失部があり、分割時の「打点」であった可能性がある(第280図)。一方右側の割口(③と①の分割線)では口縁端部、ここから7cm程下位、8～11cm程の部分、更に口縁から15cm程下位の部分、で表面側がやや大きく開く割口・欠失部があり、やはり個体分割「打点」の可能性をうかがわせる。特に中位のところで、くさび入れのような線状・溝状に連続する凹部(僅かな凹みではある)が形成されている点は注意される。割れ円錐の原則からすれば内面でも開くような割れ口が想定されるが、右側口縁下5cm程度のところで若干開く凹部を認めることができ、分割に関わる痕跡となる可能性がある。内外面一部にみられる摩滅～表面の剥落(多くが径1～3cm程度の円形に近い)についても分割後の転用に関わる可能性があるであろうか。

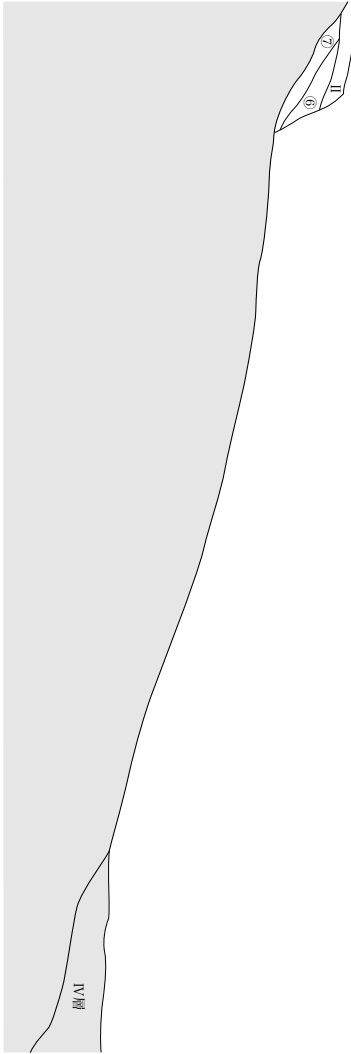
31.7 A.

. A.



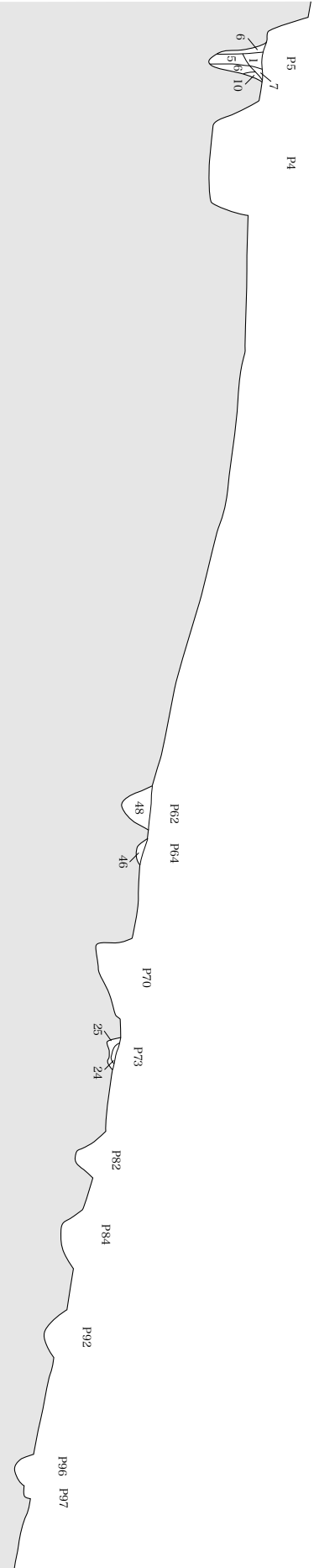
31.7 B.

. B.



31.6 C.

. C.

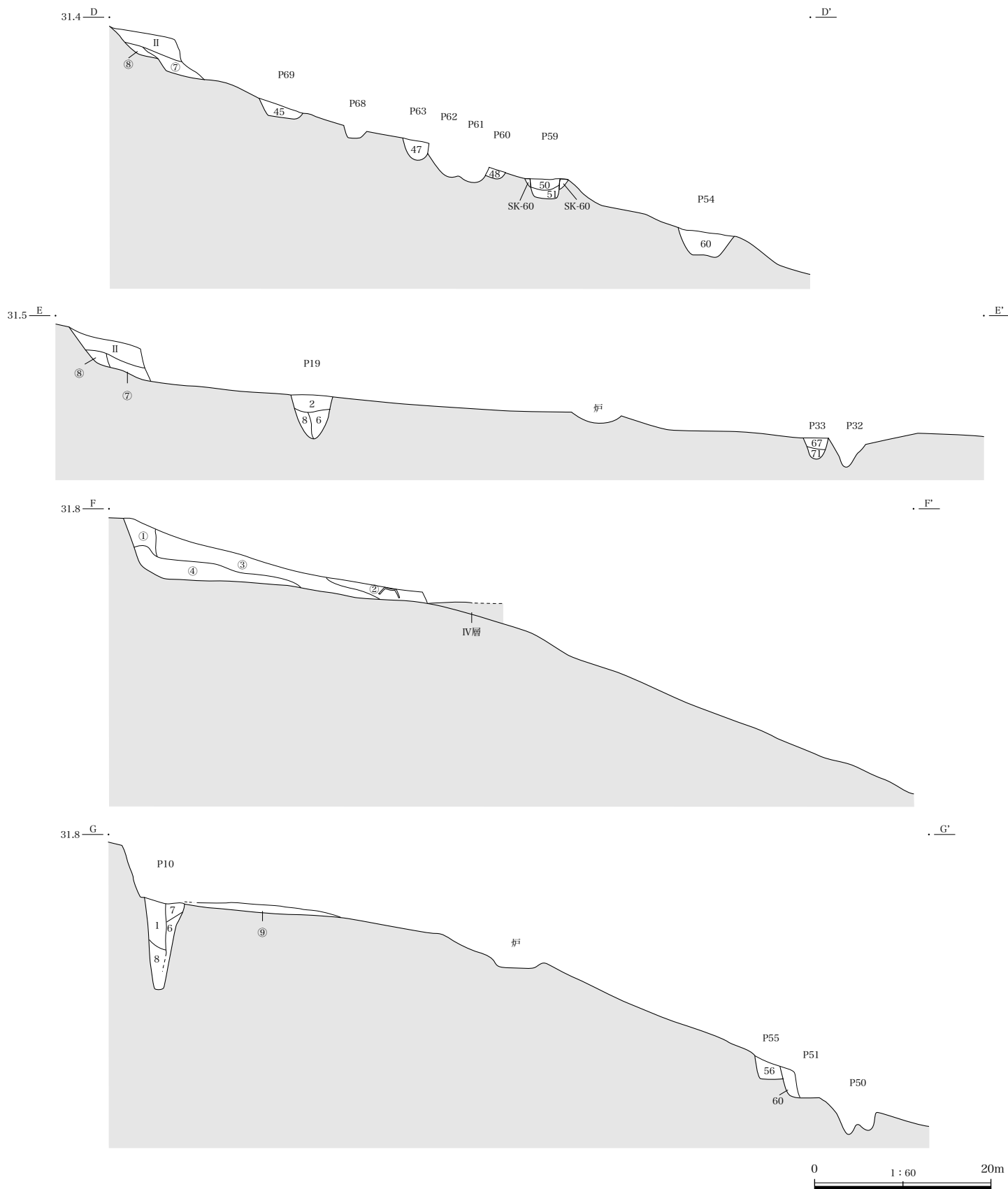


第三章 検出された遺構と遺物

第13図 SI-76遺構実測図(1)



第 14 図 SI-76 遺構実測図 (2)



SI-76 セクション 土層説明

- | | | | |
|---------|---------------------------------|---------|--|
| ① 暗黄褐色土 | ローム粒・ロームブロック多量、炭化粒やや多量。しまりやや強い。 | ⑤ 暗灰褐色土 | ロームブロック多量、ローム粒やや多量。しまり弱い。 |
| ② 暗灰褐色土 | ローム粒やや多量、ロームブロック微量。しまり強い。(緻密な土) | ⑥ 淡灰褐色土 | ローム粒・ロームブロックやや多量、炭化粒微量。しまり強い。 |
| ③ 暗灰褐色土 | ローム粒・炭化粒少量、ロームブロック微量。しまり強い。 | ⑦ 暗褐色土 | ローム粒・ロームブロック多量。しまり強い。 |
| ④ 黒褐色土 | ロームブロック・炭化粒少量、ローム粒微量。しまり強い。 | ⑧ 暗灰褐色土 | ローム粒少量。しまりやや強い。 |
| | | ⑨ 明灰褐色土 | ロームブロック少量、ローム粒微量。しまり極強い。(不均一にロームブロックを含む) |

第 15 図 SI-76 遺構実測図 (3)

同図4の注口土器は外面褐灰色～灰黄褐色、内面は褐灰色を呈し、鈎物は少なめで白色粒を少量含み、全体に硬質緻密な感がある。沈線→縄紋LR→無文部ミガキで、内面はやや丁寧なナデ調整、突起や注口部も良く磨かれている。底面は粗いミガキ調整だが、中央は面が荒れている。明瞭な網代痕跡はみられないが、通常の土器底部のような平らな面をなしていない点も注意される。縄紋は節が細かくやや浅い施紋。注口部先端下位およびその周囲でやや摩滅・剥落・傷がある。器表面全体に細かい傷・摩滅があるが、使用時についてたものか、その後についてたものかは判断できない。

2は頸部が屈曲するやや小形の深鉢である。粗い無節縄紋L→頸部の垂下隆線→隆線脇ナデ・口縁部および頸部の横位区画沈線の施文順が観察される。内面口縁直下に沈線状の凹部となっているところもあるが、全周しないようで、調整時の強い凹部作出とみた方が良さそうである。3は当初第22図1と同一個体と考えたものである。可能性は残るが判然とせず一応別に示しておく。

第22図1は数片の破片から径を復元したものである。口縁部破片とその下に摺影で示した体部破片は接合せず、配置には検討を要する。また更に離して示した3の破片について、当初同一個体と考え復元配置したが、胎土等も若干の違いが認められ、最終的には別個体と判断しておく。4に示した底部破片は、1や3と類似しているものの、復元の径や立ち上がり角度からすれば、同一個体との判断は難しい。

第22図1は縄紋LR地上にやや太い沈線で懸垂文様を描くものである。胎土には石英・灰色粒の他、褐色粒を多く含んでいる。口縁沈線直下の段部分は、体部縄紋や沈線施文後に粘土が足されて調整されており、この時期の資料では他にあまり例をみない。内面は良く磨かれている。外面に炭化物の付着が観察される。外面はにぶい黄燈～灰褐色を呈し、内面はにぶい燈色を呈する。

2は縄紋LRのみ施紋の深鉢で、比較的薄手、胎土には石英・白色粒を多く含む他、角閃石や褐色粒も含まれている。口縁直下内面には、図で示していないが沈線状の凹部がある。内面文様との判断もあろうが、縁が明瞭では無い部分もあり、調整状の痕跡とも考えられる。口縁下6～13cmのところに変色し、炭化物(焦げ?)の付着も観察される。内面はにぶい燈色～にぶい黄燈色、外面は褐灰～灰黄褐色を呈している。外面口縁付近にも炭化物の付着がある。

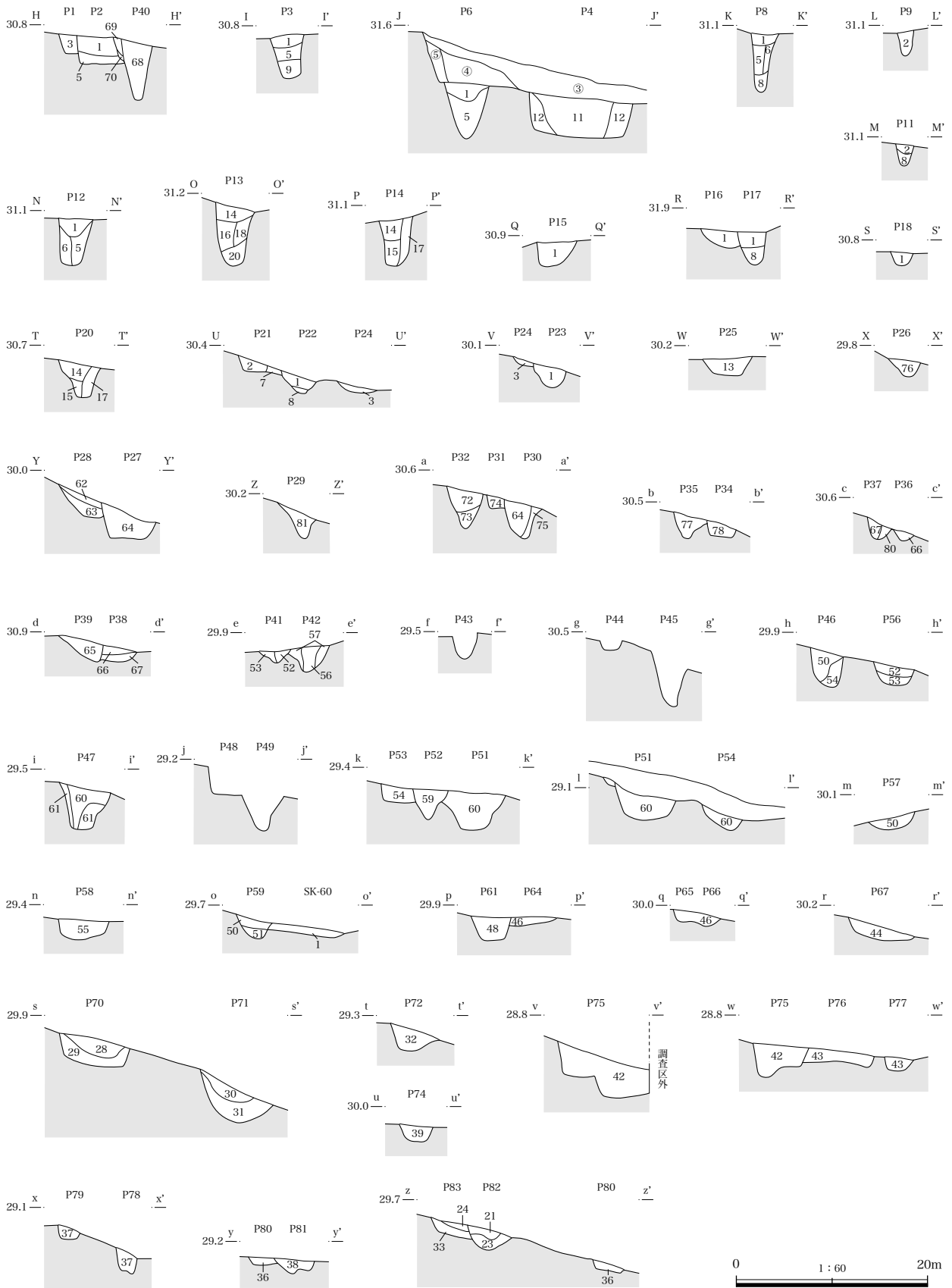
3の破片はにぶい燈色基調、不透明白色粒を多く含む胎土で、外面一部が煤けている。

4の資料は、住居跡のほぼ床面上、逆位で出土したものである。内外面にぶい燈色、底部内面は焦げの付着・変色もあって灰褐～褐灰色を呈している。胎土には石英・黒色粒を少量含む。摺影全周させていないが、全周はいずれも底面からの高さ9センチで、割れ口はなめらかで摩滅している。意図的に磨られているようにも見える。外面は粗いミガキ調整および上方では縄紋LRが施されているが、全体に摩滅著しく縄紋も不鮮明になっている。底部もかなり荒れており、外面も含めあばた状の剥落部がかなり多い。内面も荒れているが、外面程では無く、ミガキ調整も観察できる。

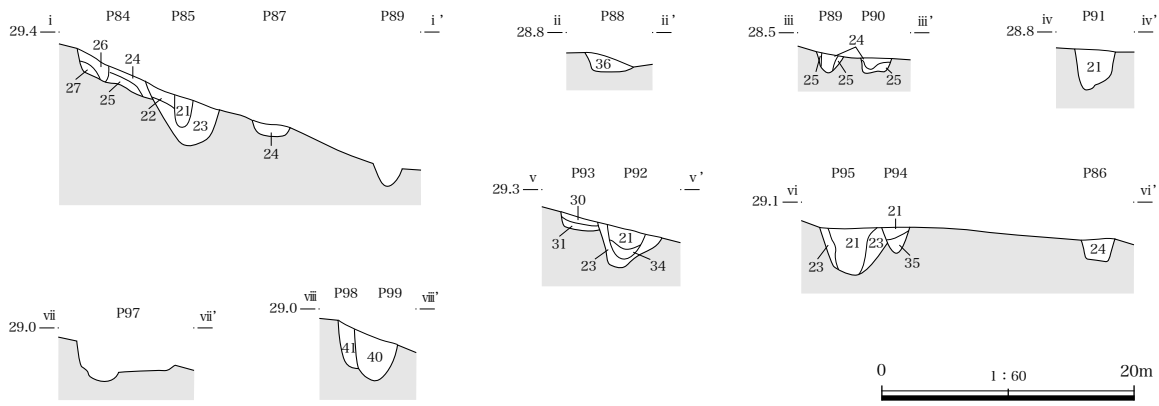
5～11は柱穴出土資料である。5・7は混入の黒浜式であるが、6・8～11は第21図1・4と同じ堀之内2式であり、概ね住居跡の時期を示すものと言える。12の「床下」資料は包含層出土の阿玉台IV式または加曾利E I式の資料である。

13は称名式の把手で「動物形把手」とされるもの。正面8の字文の上位孔は貫通孔、側面等に縄紋RLがところどころ加えられている。14は頸部から巻き上がる隆帯の端部に浅い円形凹部および、3cm程だが浅い沈線が施されている。16もおそらく綱取式系の頸部破片で隆帯下端に沈線、体部に列点充填が確認される。列点・刺突の形態はやや細めで、あまり例をみない。17以下は明らかに堀之内式と言える資料で、しかも屈曲する頸部までを無文とするものが目立つ。24はやや異質な資料で、口縁端部がやや広めで若干窪む面状と

第三章 検出された遺構と遺物



第16図 SI-76遺構実測図(4)

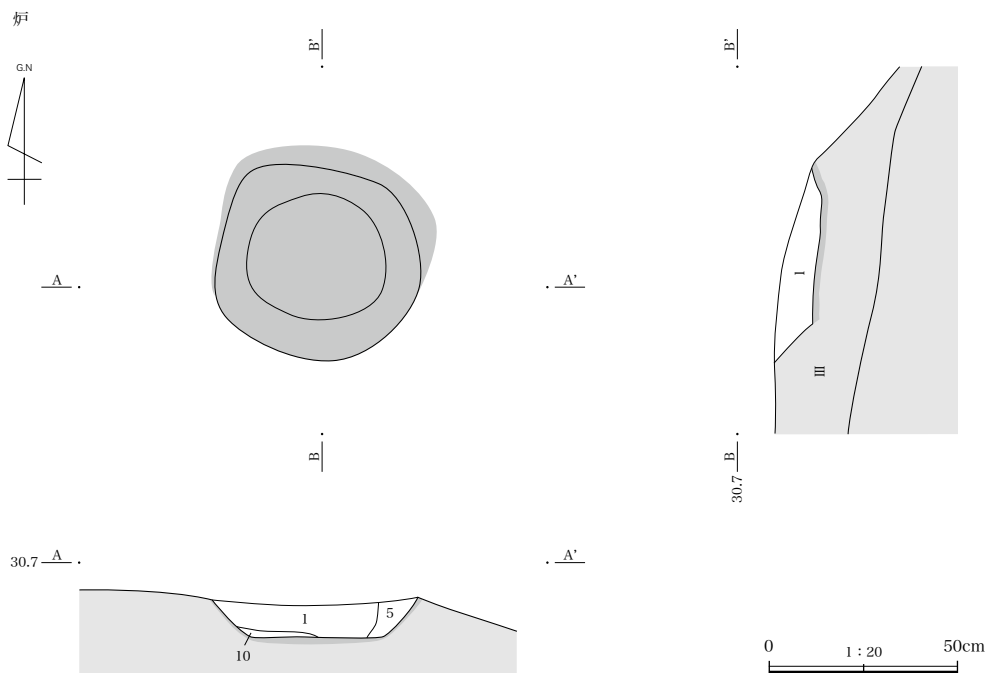


SI-76 P1~P100 土層説明

1	灰褐色土	ロームブロックやや多量、ローム粒・炭化粒少量。しまりやや強い。	37	黒褐色土	ローム粒やや多量。しまり強い。
2	灰褐色土	ローム粒・ロームブロック多量。しまり強い。(埋め戻し?)	38	暗灰褐色土	ローム粒少量、ロームブロック微量。しまり強い。
3	暗灰褐色土	ローム粒・ロームブロックやや多量。しまり強い。(埋め戻し?)	39	淡灰褐色土	ローム粒少量、ロームブロック微量。しまりやや弱い。
4	暗灰褐色土	ローム粒少量、ロームブロック微量。しまりやや弱い。	40	黒色土	ローム粒少量、ロームブロック微量。しまり強い。
5	暗灰褐色土	ローム粒多量、ロームブロックやや多量、炭化粒微量。しまり強い。	41	黒色土	ローム粒・ロームブロックやや多量。しまりやや弱い。
6	黒褐色土	ロームブロック多量、ローム粒やや多量。しまりやや強い。	42	黒色土	ローム粒・ロームブロック微量。しまりやや強い。
7	暗灰褐色土	ローム粒少量、ロームブロック微量。しまりやや強い。	43	暗褐色土	ローム粒・ロームブロック多量。しまり強い。
8	暗褐色土	ローム粒多量、ロームブロックやや多量。しまりやや弱い。	44	淡灰褐色土	ローム粒多量、ロームブロック少量。しまりやや弱い。
9	灰褐色土	ローム粒多量、ロームブロック少量。しまり強い。	45	淡灰褐色土	ロームブロックやや多量、ローム粒少量。しまりやや強い。
10	暗褐色土	ローム粒やや多量、ロームブロック少量、炭化粒微量。しまりやや強い。	46	淡灰褐色土	ローム粒・ロームブロック多量。しまりやや強い。
11	暗灰褐色土	ローム粒少量。しまり強い。	47	淡灰褐色土	ローム粒・ロームブロック多量。しまりやや弱い。
12	淡灰褐色土	ローム粒・ロームブロックやや多量。しまり強い。	48	黒褐色土	ローム粒多量、ロームブロック少量。しまりやや強い。
13	灰褐色土	ローム粒・ロームブロック多量。しまり弱い。	49	黒褐色土	ローム粒やや少量、ロームブロック微量。しまりやや弱い。
14	暗灰褐色土	ローム粒やや多量、ロームブロック・炭化粒微量。しまりやや強い。	50	黒褐色土	ローム粒やや多量、ロームブロック微量。しまり強い。
15	暗褐色土	ローム粒多量、ロームブロック少量。しまりやや弱い。	51	暗灰褐色土	ローム粒・ロームブロック多量。しまり強い。
16	暗灰褐色土	ローム粒やや多量、ロームブロック少量。しまりやや弱い。	52	暗灰褐色土	ローム粒少量。しまりやや強い。
17	黄褐色土	ローム粒・ロームブロック多量。しまりやや強い。	53	灰褐色土	ローム粒・ロームブロックやや多量。しまり強い。
18	灰褐色土	ロームブロック少量、ローム粒やや少量。しまり弱い。	54	暗灰褐色土	ローム粒・ロームブロック多量。しまりやや弱い。
19	暗黄褐色土	ローム粒多量、ロームブロックやや多量。しまりやや強い。	55	黒褐色土	ローム粒少量。しまりやや弱い。
20	暗黄褐色土	ローム粒多量、ロームブロック・少礫やや多量。しまりやや強い。	56	暗灰褐色土	ローム粒・ロームブロック少量。しまり強い。
21	黒色土	ローム粒少量、ロームブロック・炭化粒・白色粒微量。しまりやや強い。	57	灰褐色土	ローム粒多量、ロームブロックやや多量。しまり強い。
22	黒褐色土	ローム粒やや多量、ロームブロック少量、炭化粒微量。しまりやや強い。	58	暗褐色土	ローム主体。しまり強い。
23	暗褐色土	ローム粒多量、ロームブロックやや多量。しまりやや強い。	59	暗灰褐色土	ローム粒やや多量、ロームブロック・白色粒微量。しまり強い。
24	暗灰褐色土	ロームブロック少量、ローム粒やや少量、炭化粒・白色粒微量。しまりやや強い。	60	淡灰褐色土	ローム粒多量、ロームブロックやや多量。しまり強い。
25	暗褐色土	ローム粒多量、ロームブロック少量。しまり強い。	61	暗褐色土	ロームブロック多量。しまり強い。(ローム主体、灰色土ブロックを含む)
26	灰褐色土	ローム粒・ロームブロックやや多量。しまりやや強い。	62	淡灰褐色土	白色粒やや多量、ロームブロック少量、ローム粒やや少量。しまりやや強い。
27	暗褐色土	ローム粒多量、ロームブロック少量。しまり強い。	63	暗褐色土	ローム粒・ロームブロック多量。しまりやや弱い。
28	黒褐色土	ローム粒やや少量、ロームブロック・炭化粒・白色粒微量。しまりやや強い。	64	黒褐色土	ローム粒・炭化粒少量、ロームブロック微量。しまり強い。
29	暗黄褐色土	ロームブロックやや多量。しまりやや弱い。(ローム主体、黒色土ブロック混じる)	65	暗灰褐色土	ローム粒少量、ロームブロック微量。しまり強い。
30	暗灰褐色土	白色粒やや多量、ローム粒少量、ロームブロック微量。しまり強い。	66	暗灰褐色土	ローム粒・ロームブロックやや多量。しまりやや強い。
31	暗褐色土	ローム粒多量、ロームブロックやや多量、白色粒少量、炭化粒微量。しまり強い。(やや淡い暗褐色土)	67	淡灰褐色土	ローム粒多量、ロームブロックやや多量。しまり弱い。
32	黒褐色土	ローム粒多量、ロームブロックやや多量。しまりやや強い。	68	淡灰褐色土	ローム粒やや多量、ロームブロック少量。しまり強い。(黄味色やや強い)
33	暗褐色土	ローム粒・ロームブロック多量。しまりやや弱い。	69	灰褐色土	ロームブロックやや多量、ローム粒やや少量。しまり強い。
34	黒褐色土	ローム粒・ロームブロック少量。しまり強い。	70	暗褐色土	ローム粒多量。しまりやや強い。
35	暗褐色土	ローム粒多量、ロームブロック少量。しまりやや強い。(ローム主体)	71	淡灰褐色土	ロームブロック多量、ローム粒やや多量。しまり弱い。
36	黒褐色土	ロームブロックやや多量、ローム粒少量。しまりやや強い。	72	灰褐色土	ローム粒多量、炭化粒やや多量、ロームブロック少量。しまりやや弱い。
			73	黒褐色土	ローム粒やや多量、炭化粒微量。しまり弱い。
			74	暗褐色土	ローム粒・ロームブロック多量。しまり弱い。
			75	暗灰褐色土	ローム粒多量、ロームブロックやや多量、炭化粒・白色粒微量。しまり弱い。
			76	灰褐色土	ローム粒やや多量。しまりやや強い。
			77	灰褐色土	ロームブロックやや多量、ローム粒少量。しまりやや弱い。
			78	淡灰褐色土	ローム粒・ロームブロックやや多量。しまり弱い。
			79	暗褐色土	ローム粒・ロームブロック多量。しまり強い。
			80	淡灰褐色土	ローム粒・ロームブロック多量。しまりやや強い。
			81	黒褐色土	ローム粒多量、ロームブロック少量。しまり強い。

第17図 SI-76 遺構実測図 (5)

なる点、密な沈線による半円弧状文様等、南三十稲場式に類似している。胎土は石英・白色粒等を少量含む胎土で、さほど異質な感を受けない。色調は内外面にぶい黄燈色。突起頂部と連続する剥落が内面隆起部に認められる。外面沈線施文後にミガキが加えられていることも特徴の一つとなろうか。



第 18 図 SI-76 炉実測図

第 23 図には体部破片および堀之内 2 式をまとめて示す。いずれも石英・白色粒等を含み、色調はにぶい燈色～褐灰色あたりが多い。1・2 は頸部が屈曲する深鉢の頸部～体部破片の同一個体で、頸部の区画隆線、沈線、体部文様の蕨手蛇行文および上位に付される円形浮紋がある。縄紋 LR→沈線→円形浮紋の順は確認される。7 も質感や胎土、沈線や縄紋の特徴から同一個体と判断される。以下 15 までは縄紋地に沈線で体部文様が描かれる資料群である。同図 16～19 は堀之内 2 式の口縁部破片である。いずれも沈線→縄紋 LR 充填だが、18 の縄紋はかなり節の細かい縄紋で特徴的である。20 以下は体部破片で、21 は縄紋 LR→沈線、22 は沈線だけの資料だが、堀之内 2 式と推定する。29・30 は注口土器で、28 も注口土器の可能性もある。30 は図示しなかった 1 片も含め、内外面の剥落部が多く、かなり器面が荒れている。31 は底部近くに縄紋 LR が充填される横帯があり、鉢または注口土器となるうか。底部の網代も細かく密である点、特徴的である。

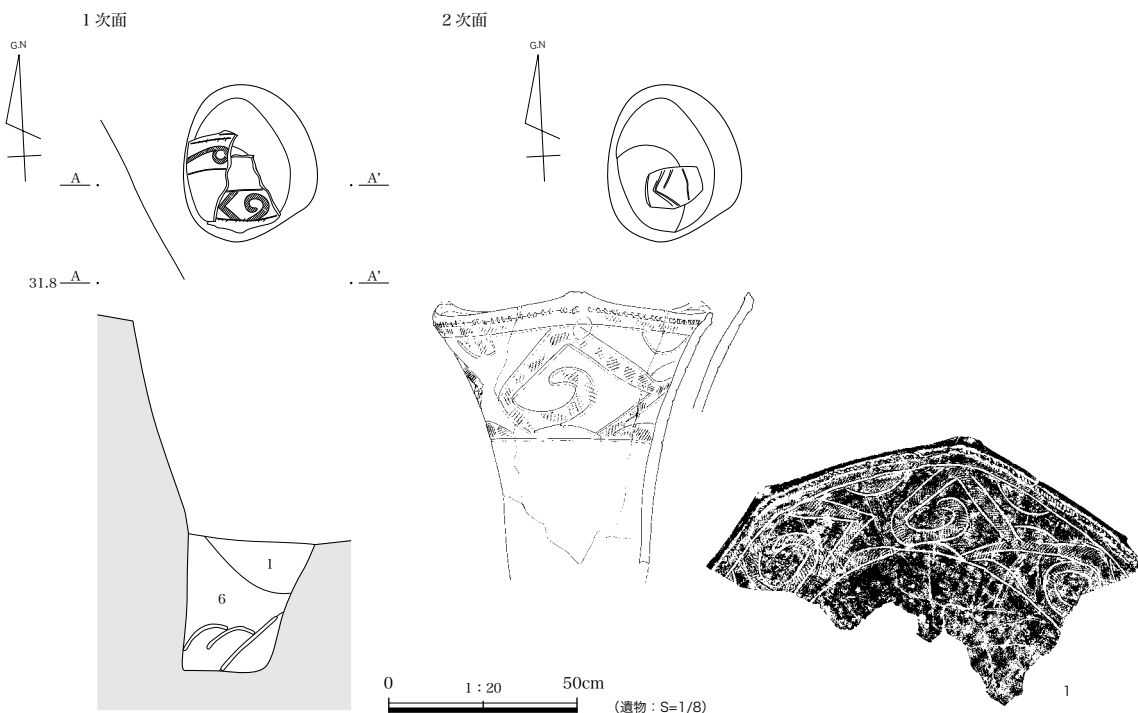
第 24 図には SI-76 からの出土としたもので、後期以外の混入の中期以前の資料をまとめた。これらの時期の包含層出土資料とみても良い。1～7 は撚糸紋系で、石英粒を多く含む特徴が認められる。色調は褐灰色または灰褐色を基調とするが、6 はにぶい褐色、7 はにぶい黄燈色を呈している。原体は L 基調で 7 は R、6 は L または 1 の可能性がある。

8～37 は黒浜式で、繊維を多量に含み、色調は若干暗い色調（灰褐色）のものもあるが、にぶい燈色基調のものが多い。8～11 が有文で残りは原体のみ確認できるものである。12・13・15 は撚糸紋を 1 本または 2 本巻き付けているもので R が目立つ。17 は LR に R2 本を付加している。18・19 も R2 本の付加条。20 は RL に結節が加わる。22 は撚糸紋 R、23 は LRL (LR?) に R の付加。24 は末端の圧痕、25 は結節が確認される。26～36 は単節あるいは無節の縄紋で、LR がやや目立つ。29 や 30 は反撚りか。33 は RL と R の 2 種が確認できるもの。37 は擦痕のみの例である。

38・39 は無繊維の土器で、無節 L の縦方向施紋が観察される。38 は灰褐色、39 はにぶい褐色を呈し胎土中の鉱物は少ない。中期初頭の可能性が考えられるが、質感等気がかりな点も残る。

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物

P7 遺物出土状況



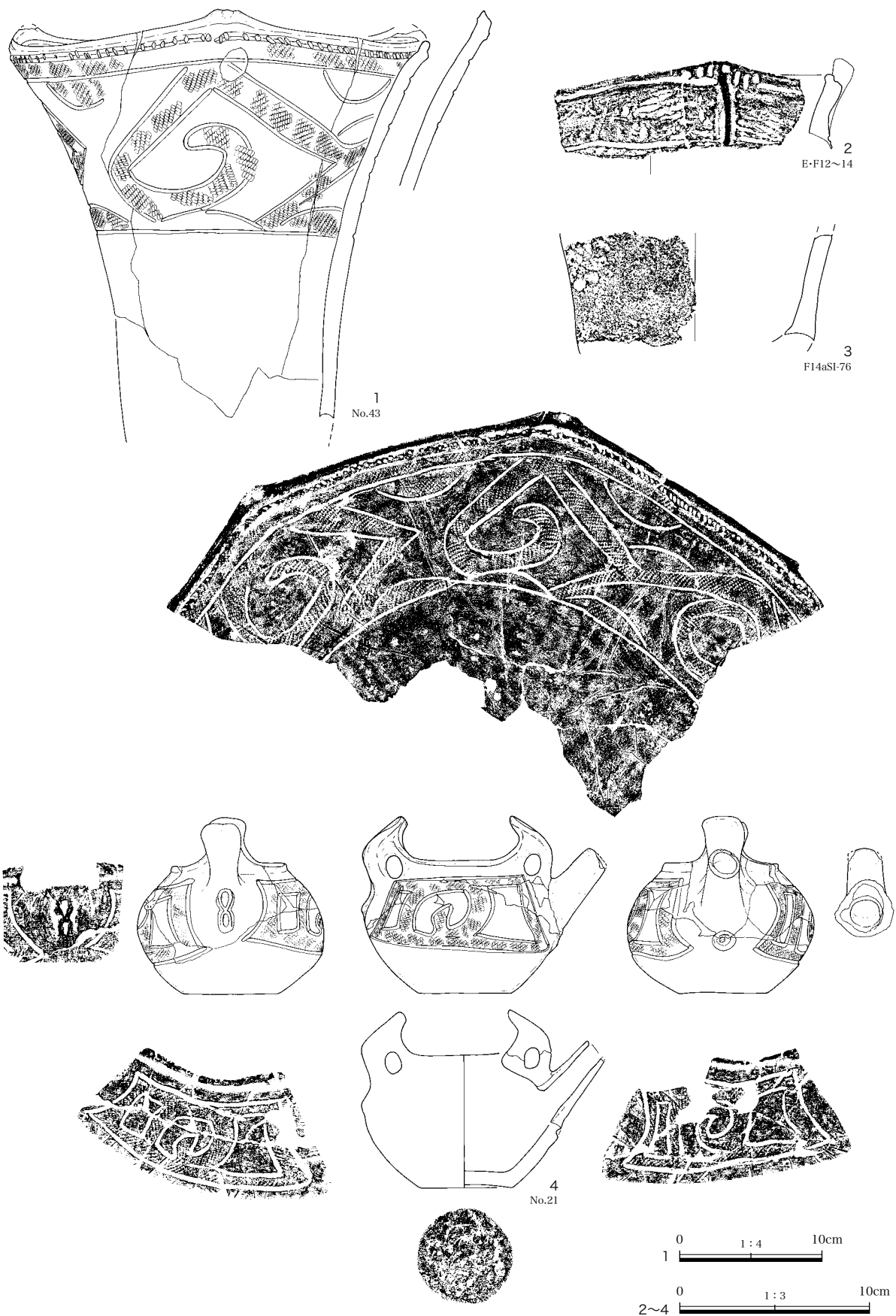
第 20 図 SI-76P7 遺物出土状況図

SI-76 Pit 深度

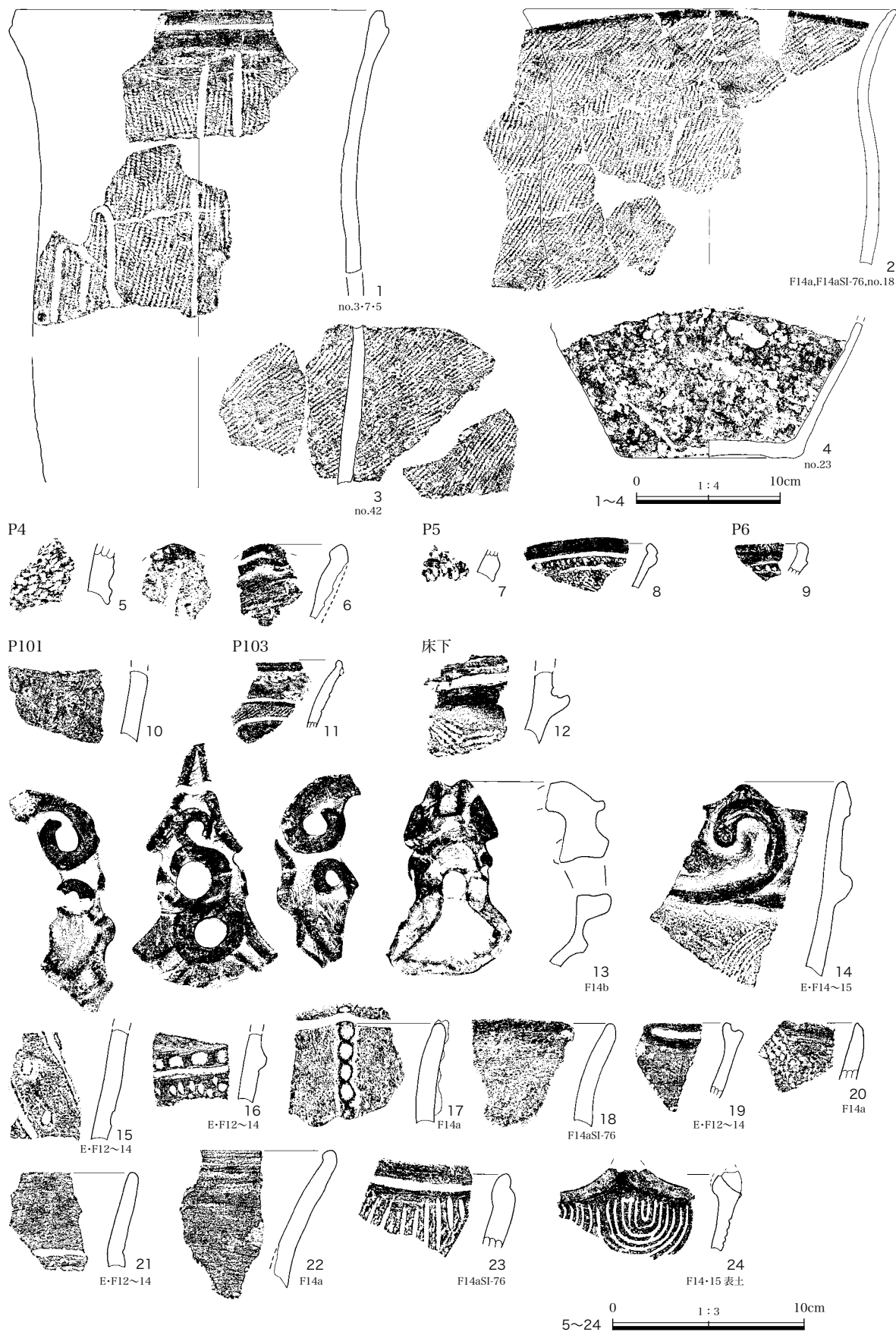
Pit 番号	深度 (cm)	旧 Pit 番号
P1	19.5	P1
P2	22.8	P2
P3	48.8	P3
P4	37.4	P4
P5	52.2	P13
P6	59.0	P12
P7	31.7	P11
P8	62.5	P10
P9	62.0	P9
P10	60.9	P5
P11	23.5	P6
P12	22.4	P8
P13	49.9	P7
P14	66.3	P103
P15	53.2	P102
P16	28.0	P17
P17	36.0	P16-1
P18	15.1	P15
P19	50.9	P14
P20	45.6	P104
P21	18.8	P21
P22	16.6	P22
P23	23.5	P20
P24	14.6	P19
P25	19.0	P18
P26	18.0	S-64 P18
P27	40.4	S-64 P7
P28	31.0	S-64 P6
P29	46.3	S-64 P23
P30	41.0	S-64 P17
P31	6.5	S-64 P16
P32	44.0	S-64 P15
P33	34.0	S-64 P14
P34	10.3	S-64 P20

Pit 番号	深度 (cm)	旧 Pit 番号
P35	26.1	S-64 P19
P36	11.0	S-64 P22
P37	26.0	S-64 P21
P38	17.1	S-64 P12
P39	42.2	S-64 P11
P40	51.8	S-64 P13
P41	17.6	S-59 P17
P42	29.3	S-59 P16
P43	31.0	S-59 P15
P44	10.0	なし
P45	42.3	S-59 P7
P46	50.5	S-59 P11
P47	43.0	SK-63
P48	28.6	S-59 P14
P49	53.8	S-59 P13
P50	53.8	S-59 P20
P51	42.4	S-59 P19
P52	38.4	S-59 P21
P53	26.8	S-59 P22
P54	37.8	S-59 P18
P55	26.7	S-59 P23
P56	31.0	S-59 P10
P57	20.2	S-59 P9
P58	21.3	S-59 P12
P59	10.0	S-59 P8
P60	12.8	S-59 P6a
P61	24.4	S-59 P6b
P62	28.9	S-59 P6c
P63	24.6	S-59 P4
P64	12.8	S-59 P5
P65	14.1	S-59 P3
P66	7.2	S-59 P2
P67	16.0	SK-58
P68	15.0	なし

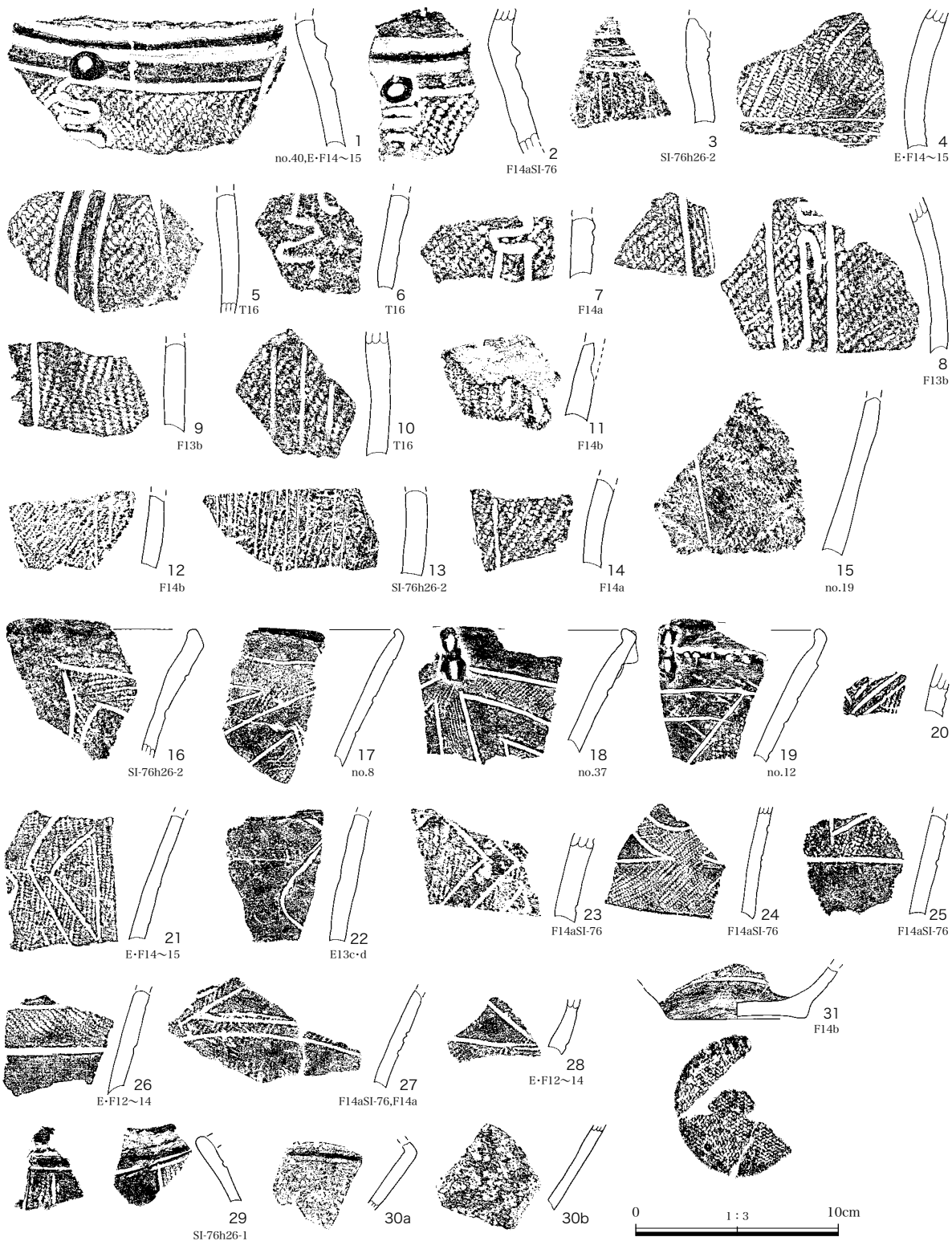
Pit 番号	深度 (cm)	旧 Pit 番号
P69	23.9	S-59 P1
P70	29.0	SK-52
P71	36.0	SK-53
P72	22.7	S-54 P4
P73	13.2	S-54 P5
P74	17.7	S-54 P19
P75	35.0	S-54 P22
P76	22.0	S-54 P25
P77	19.5	S-54 P24
P78	24.0	S-54 P16
P79	14.5	S-54 P15
P80	12.3	S-54 P17
P81	12.5	S-54 P18
P82	23.8	S-54 P7
P83	23.8	S-54 P6
P84	18.0	SK-51
P85	37.0	SK-50
P86	17.2	S-54 P14
P87	10.4	S-54 P3
P88	14.2	S-54 P12
P89	18.0	S-54 P2
P90	12.9	S-54 P1
P91	32.8	S-54 P13
P92	47.8	S-54 P9
P93	11.3	S-54 P8
P94	31.5	S-54 P11
P95	58.3	S-54 P10
P96	26.0	S-54 P20
P97	31.0	S-54 P23
P98	34.5	S-54 P21a
P99	29.5	S-54 P21b



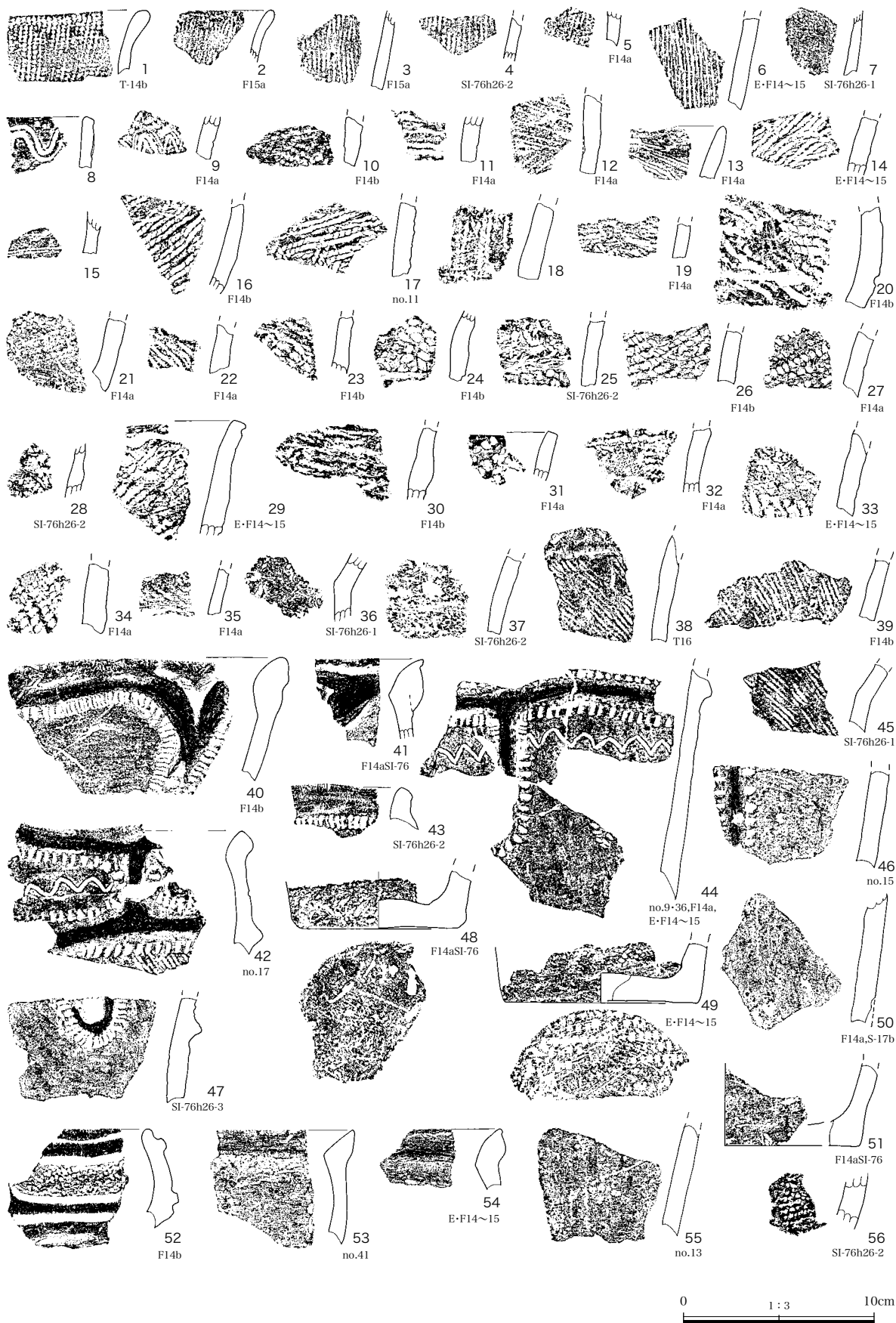
第21図 SI-76遺物実測図(1)



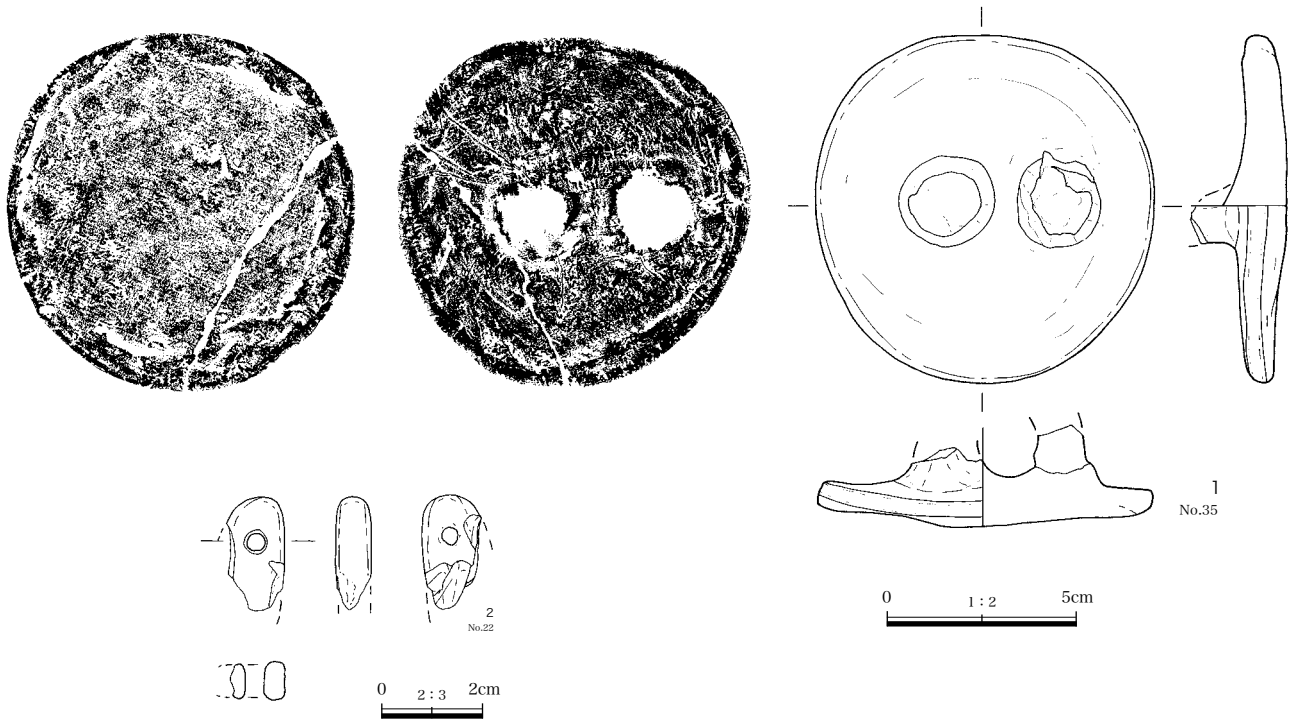
第22図 SI-76 遺物実測図 (2)



第23図 SI-76 遺物実測図 (3)



第24図 SI-76 遺物実測図 (4)



第25図 SI-76 遺物実測図 (5)

第5表 SI-76 遺物観察表

掲載番号	種類器種	材質	重量(g)	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	備考
2	玉類	変質蛇紋岩(滑石)	2.75	2.2	1.2	0.78	左および下方欠損。下方割れ口近くは傷も多い。両面穿孔だが、主に表面側からの穿孔。表裏側面とも丁寧に研磨されている。

40～55は中期の土器で、にぶい褐色、にぶい黄褐色のものが多い。胎土では雲母の他、石英・白色粒をやや多く含む点が特徴で、この中では新しく加曽利E式と特定できる52についても概ね同じ特徴を示している。56は縄紋LRが施される破片で、縄紋の特徴や雲母を含まない点等、中期とは推定できるものの他と比べてやや異質である。

第25図1は土製蓋で、住居跡のほぼ床面上から出土した。つまみ部＝突起頂部以外は完存である。文様・装飾は施されていない。全体の形状はやや歪んだ円形で、つまみ部＝橋状突起の位置も中心となっていないこと、厚みに差があり一定の厚さの板状となっていないこと等やや雑な作りと言える。調整も外面ではやや丁寧なミガキが認められるが、内面(裏面)では緑の粘土がはみ出し粘土褶曲が残される等、丁寧な調整とは言えない。褐灰色を呈し、胎土には白色粒を多く含む他、石英や角閃石を少量含む。

第25図2の玉も住居跡床面から出土した資料である。調査当初はヒスイ硬玉かと思われたが、変質蛇紋岩(滑石)と判断された。下端～側面にかけて欠損している。欠損面でも若干の摩滅部分がある。穿孔は両面かと思われるが、一方(図左側)の孔径の方がやや大きく、主にこちら側からの穿孔とも推測される。遺存部はかなり入念に研磨されているが、素材の目、凹部も僅かだが確認できる。またどの時点で付されたのか不明だが傷状の線状痕跡も一部に認められる。

SI-73 (第 26 ～ 31 図、図版一〇・一一・五五)

位置 E8 グリッドに位置する。包含層の調査過程で確認されたもので、プラン・掘り込みはやや不明瞭だが、炉と埋設土器が認められたことから住居跡と判断した。

規模・形状 確認できた平面形は長軸 7.5 m・短軸 5.34m の、南北軸の楕円形を呈している。基本土層Ⅲ層を掘り込んで構築される。壁の高さは 0.2m、主軸は N-30° -W である。全体的に不明瞭で、やや緩やかな傾斜をする。床面は全体的に軟質であり、硬化面は確認できなかった。7 カ所柱穴を確認し、SD-70a と重複するピットが 2 基ある。重複しないピット (P1 ～ 5) の深度は、床面から 0.132 ～ 0.236m である。SD-70a と重複するピット (P6・7) は、溝の底面から 0.095 ～ 0.194m 程の深度であるが、SI-73 と SD-70a との深度の差は 0.2m 程あるため、本来はおおよそ 0.3 ～ 0.5m の深さの柱穴であったと思われる。

また、本遺構の南東側に位置する SK-73b との重複関係は不明な点があるが、出土遺物からの検討では、伴う可能性があることを明記しておく。

重複 西側を SD-70a (=SK-206)・SD-70b に、中央や南側を SK-90・91 によって一部破壊されている。

覆土 埋土は 2 層に分けられ、ローム粒や炭化粒等を全体的に均一に含み、自然堆積と考えられる 1 層と、ローム粒等を含み、強くしまることから貼床の可能性がある 2 層が堆積する。本遺構は平面プランをはっきりとは捉えられなかったが、包含層 (Ⅲ層) と対比しての土層観察から区別された。

炉 (第 27 図) 本遺構からは 3 カ所の炉跡が検出された。炉 1 は、SD-70a に西半分を破壊されている。南北へ長い長楕円形で、残存する規模は長軸 0.9m・短軸 0.35m、確認面からの深度は 0.20m である。覆土は焼土粒や焼土ブロックを多く含む 1 層と、それらをあまり含まない層の 2 層である。焼土層である 1 層の形成時に 2 層が流入し、形成されたと考えられる。

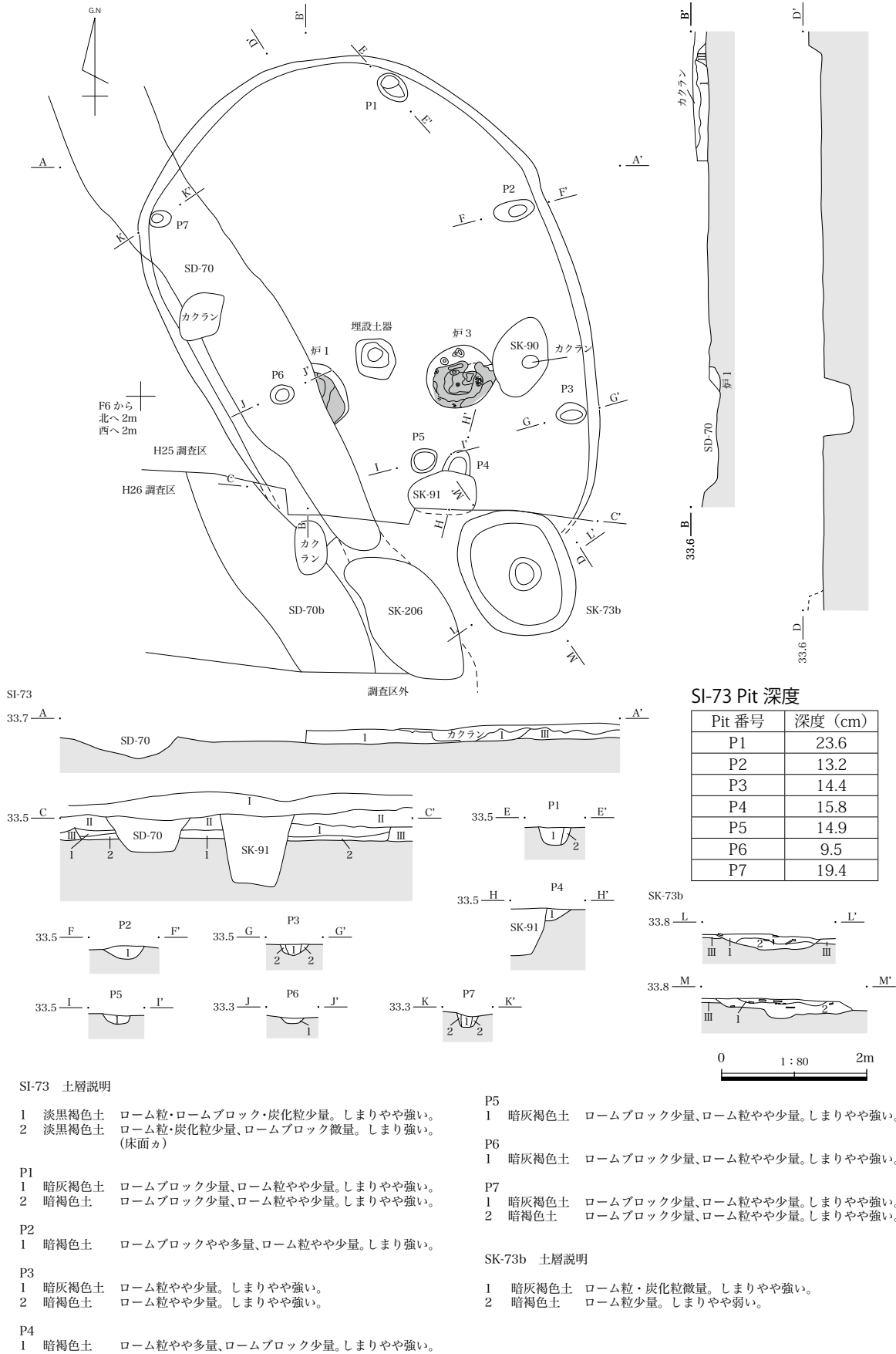
炉 2 と炉 3 は重複しており、炉 2 は炉 3 の埋没後に構築された。炉 2 は、長軸 0.50m・短軸 0.28m の歪な長方形を呈し、0.08m と非常に浅い掘り込みをもつ。覆土は焼土粒を多く含む赤褐色土の 1 層である。

炉 3 は、東側の一部を SK-90 に破壊される。平面形は長軸 0.95m の円形である。床面からの深度は 0.44m で、覆土は淡褐色土・暗褐色土・暗灰褐色土の 4 層からなる。4 層の上面で焼土面が形成される。また、4 層の上面では部分的に白色の粘土が見受けられ、炉に粘土を貼り、補強した可能性がある。

埋設土器 (第 30 図) 炉 1 と炉 2・3 の間に位置する。長軸 0.65m・短軸 0.52m、確認面からの深度 0.35m の歪な円形土坑に土器を正位に埋設している。土器内には焼土粒・炭化粒の混入する 1 層と炭化粒が混入する 2 層が分層できた。土器埋納時の埋土は 2 層ともしまりの強い暗褐色土であった。

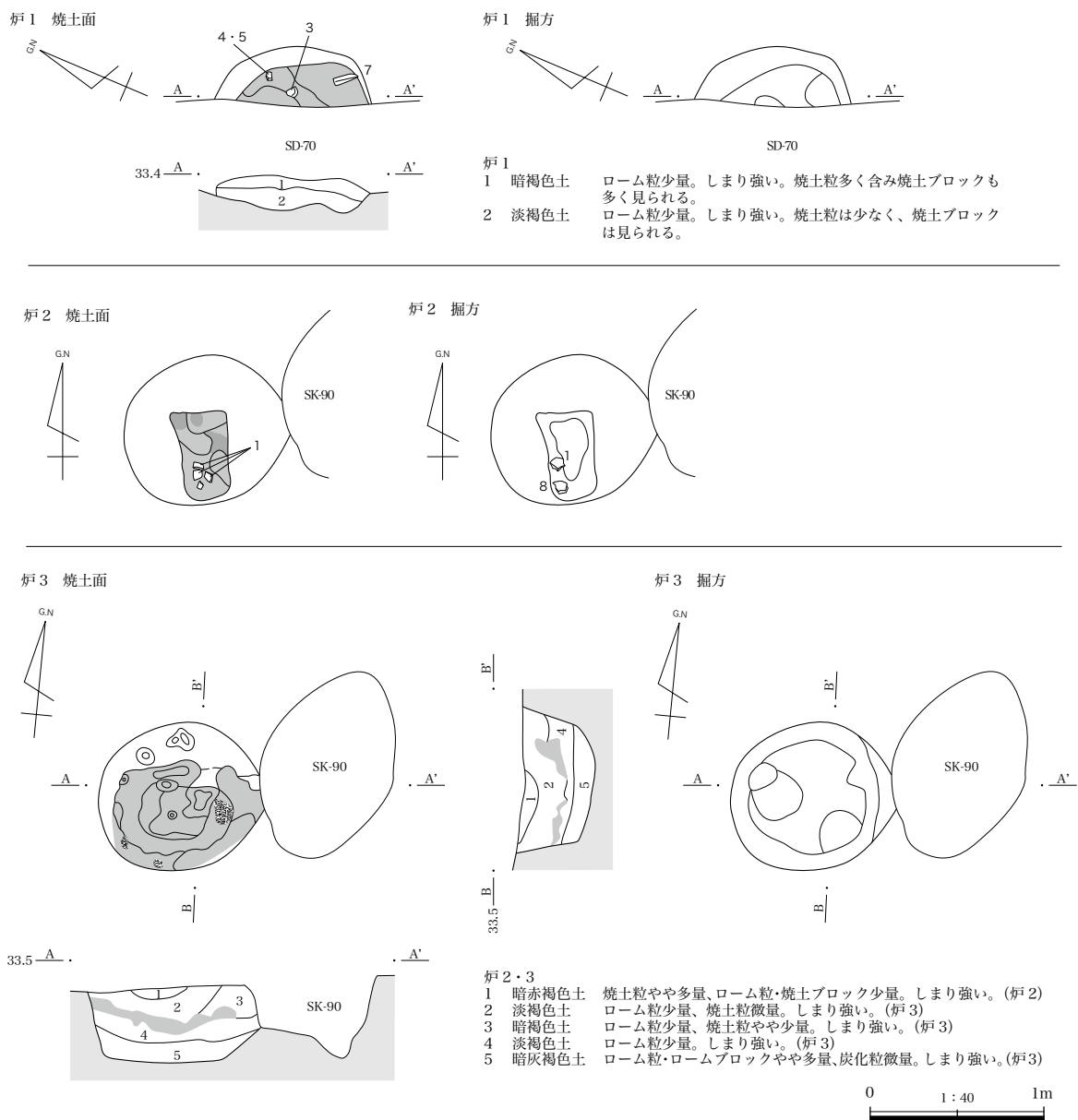
出土遺物 SI-73 からは 80 点の土器が出土している。但し明瞭な掘り込み・覆土の確認された遺構ではなく、包含層出土土器との区別も明瞭ではない。当初包含層出土として取り上げたものも本遺跡内でやや多く (第 28・50 図)、住居跡に帰属するものも多いことが推測できる。以下では遺構出土として取り上げたものを示す。加曽利 E 式が少数 (第 31 図 3 ～ 5) あるものの、ほぼ称名寺式の新しい部分～堀之内 1 式で占められる。P4 出土の破片 1・2 についても、小片で不明瞭だが称名寺式～堀之内 1 式の特徴を示す。

第 31 図 9 はやや薄手で丁寧な磨きがみられるもので、鉢形の注口付き浅鉢となる。8 は比較的大きめの突起で下位の孔のみ左右に貫通する。内面は比較的平坦な面に J ～ O 字状の帯状意匠が描かれる。14 は 2 本沈線による帯状部意匠が描かれる土器で、拓影では分かりづらいが、破片左下に第 81 図 37 にみられるような沈線に沿う刺突列が確認される。15 は縄紋地上に深く幅のある沈線で渦巻文が描かれるもので、不徹底で僅かながらも沈線間の磨きによる磨消しがなされる。やや高さのある円形浮文も特徴的である。18 は全体の意匠不明ながら、J 字状の隆線＋沈線が描かれる。19 は浅い条線施文の土器。20 は底面 5 cm より上の部分



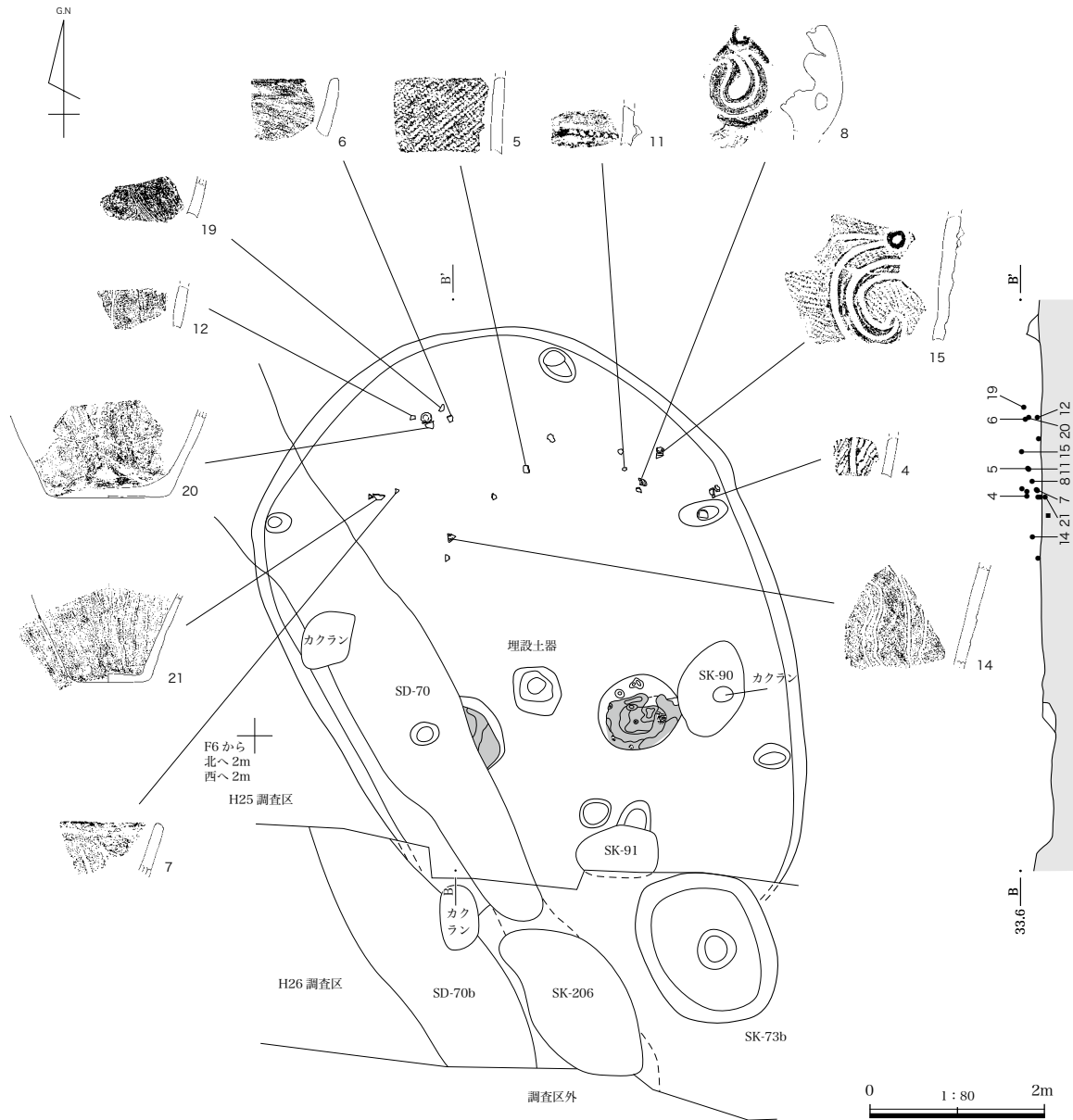
第26図 SI-73 遺構実測図

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物



で焦げの付着が確認される。

埋設土器（第30図） 外面はにぶい赤褐色～にぶい燈色、内面はにぶい燈色を呈し、胎土には白色不透明粒をかなり多く含む他、石英・角閃石・灰色粒も少量含む。底面上23～32cmあたりの外面が帯状に黒変し、炭化物の付着（煤？）も一部に観察される。一方内面では底面上4～15cm程度の範囲で黒変・炭化物（焦げ）の付着がある。体部沈線は幅広でやや浅く、左下がり沈線→右下がり沈線を基本とするようにみえるが、逆の順のところもあり、一定範囲毎に格子を完成させているのかもしれない。隆帯下の沈線は体部の沈線いずれよりも先行している。また隆帯上の刻みは直下の沈線を切っている。つまりJ字隆帯・隆帯下沈線→体部沈線の順と推定できよう。波頂部に位置するJ字文は2単位で、遺存の良い方では左側の隆線から連続的に巻き込むように表現されているようにもみえるが、欠損部があり確定しない。またJ字上端は欠損しており、器体頂部より更に上部へ若干の突出がある突起かもしれない。J字端部には刺突がある。反対面のJ字文はや



第28図 SI-73 遺物出土状況図

やや小ぶりなようで（拓影でも示していない）、隆帯幅も狭い。J上端の刺突は確認されるが、J字下方～左側は欠損しており形状不明。こちらも更に上部へ突出の突起と連続的な表現がなされていた可能性もあるが、欠損により不明である。

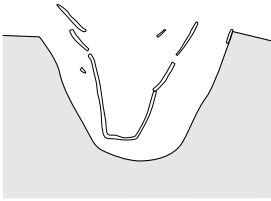
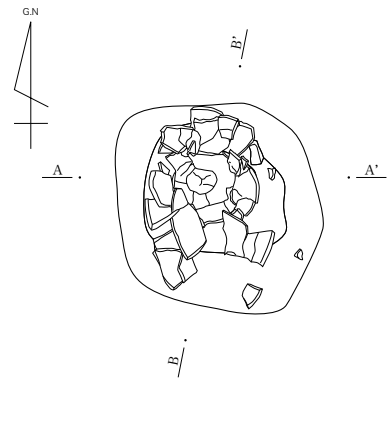
図正面から90°の面における波頂部の突起（実測図の左右に示した拓影）は、剥落により形状不明である。やや小さめの円形突起、前面に突出する瘤状突起等も考えられるが推定し得ない。小さなJ字～C字突起が付されていた可能性もあろうか。

頸部隆帯より上位、口縁付近は良く磨かれているが、これより下位の調整はやや粗い削り・ナデ調整である（整形時の一次調整のまま）。一方底部付近、底部から15cm程度の範囲では縦方向のヘラ状工具によるミガキ調整が観察され、一部の沈線はこれにより少し消されている。図で示した点線の細い帯状ラインは、このミガキ調整の一部を示したものである。

埋設土器 1・2次面

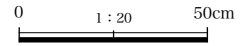


埋設土器 3・4次面

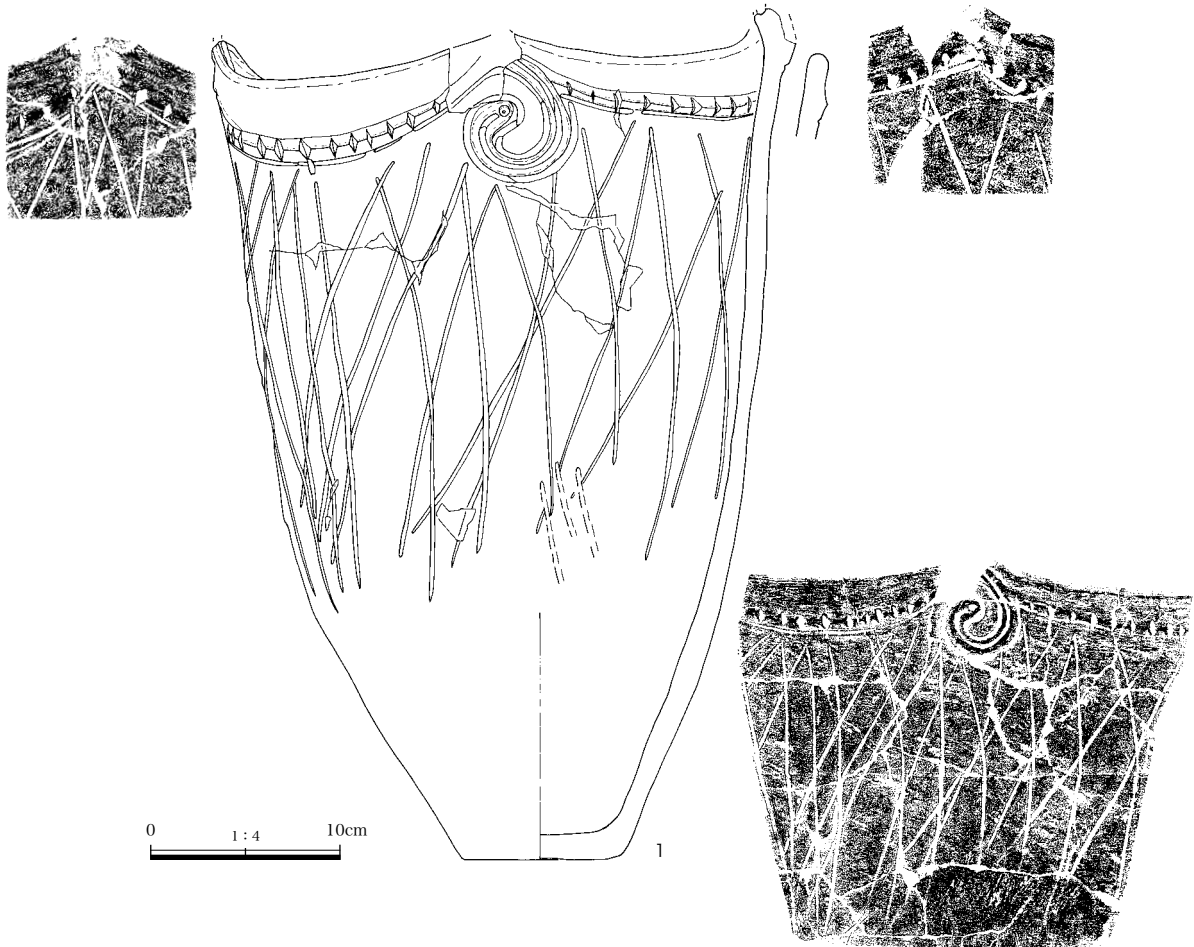


埋設土器

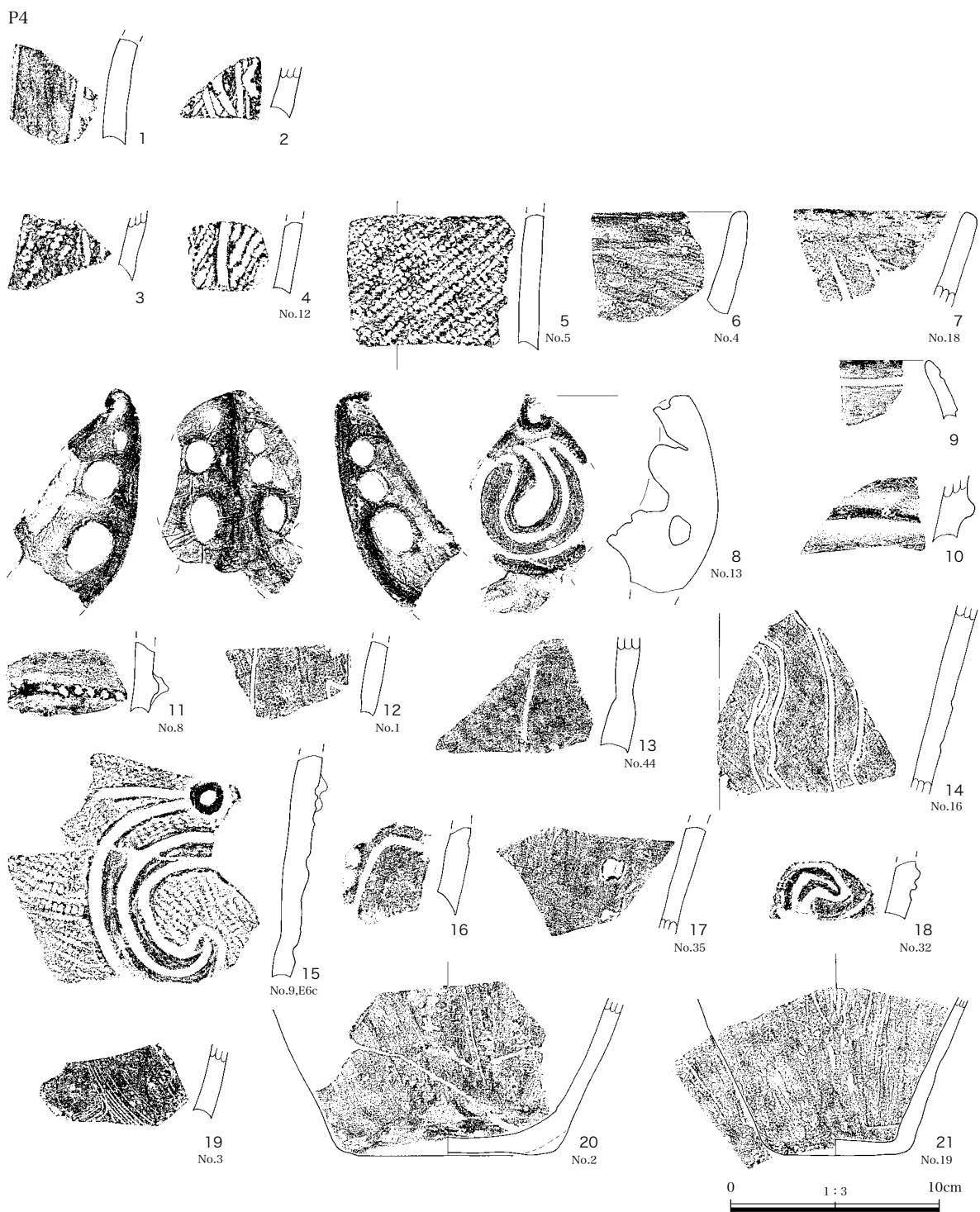
- 1 暗灰褐色土 ローム粒少量、焼土粒・炭化物粒微量。しまり強い。
- 2 黒灰褐色土 ローム粒・炭化粒少量。しまり強い。
- 3 暗褐色土 炭化粒少量、ローム粒微量。しまり強い。
- 4 暗褐色土 炭化粒少量、ローム粒微量。しまり強い。



第 29 図 SI-73 埋設土器遺物出土状況図



第 30 図 SI-73 遺物実測図 (1)



第31図 SI-73 遺物実測図(2)

SK-73bは、長軸 1.78m×短軸 1.46mの楕円形を呈する。確認面からの深さは 0.2mである。土坑中心部には径 0.44m、深さ 0.28mの浅い円形の落ち込みがみられる。SI-73と重複し、本遺構がSI-73より新しいように思われるが、直接覆土調査の観察を得ての所見ではない。遺物からは同時期の遺構とも考えられるが、その場合住居跡入口部関連の掘り込みの可能性もあろう。覆土には炭化粒が含まれるが、焼土等は確認できなかった。自然堆積と思われる。

遺構内全体から周辺にかけて、多くの土器片が出土する。第 33 図 1 は口縁が強く外反するやや小形の土器である。縦位の分割線と横方向帯状意匠が特徴的な土器で、示したように接合しない破片が数点ある。外面はにぶい黄燈、内面は灰黄褐色を呈する。胎土には石英・白色粒等を含むがさほど異質な感はない。外面一部に煤が付着し、内面下方一部には焦げの付着も認められている。内面～口縁端部にかけてヘラ状工具によるミガキが丁寧になされている。外面沈線施文後のミガキも丁寧である。このミガキは全体にまんべんなくなされており、帯状部に偏ったミガキではない。沈線はやや浅めだが、他の称名寺式と比べさほど異なる感はない。

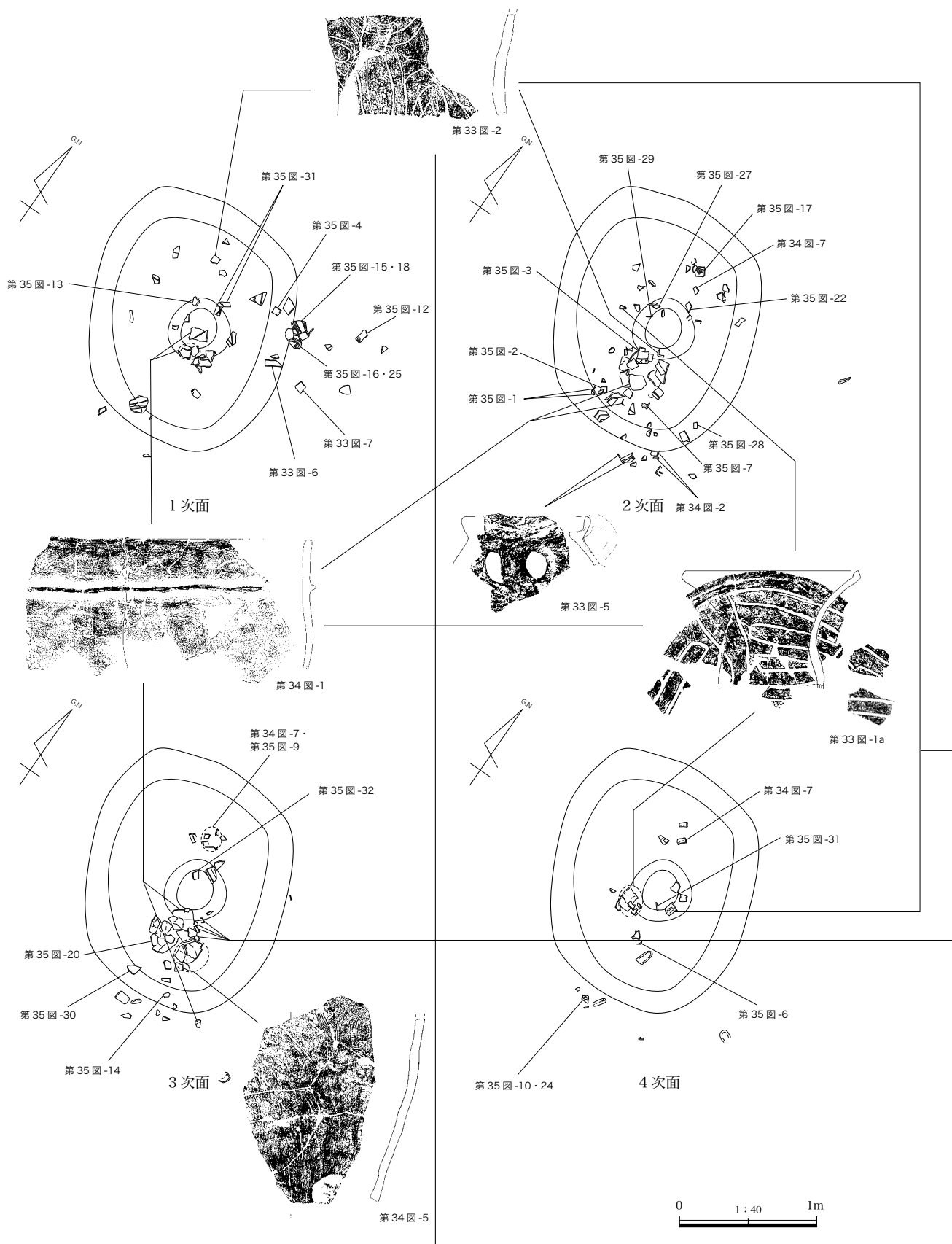
第 33 図 2 はにぶい黄燈色を呈する体部破片で、胎土には石英・角閃石をやや多く含む。上端・下端とも輪積痕での割れで、図示とは上下逆の可能性も考えたが判然としない。意匠はかなり乱雑だが J 字意匠を残しているようにもみえる。沈線は浅い施文で、一部半截竹管状工具によるところが観察できる。沈線はかなり交差している部分がある。列点刺突も浅い施文で、交互充填では無く、また一部帯状部での施文である。沈線施文後にやや粗いミガキが加えられている。

第 33 図 3 は浅い条線施文の土器で、J 字状の意匠や渦巻状の部分もあり、全体で帯状構成の可能性さえうかがわせる。にぶい黄燈色で石英・雲母を少量含む。4 は幾つかの大形破片から図上形態復元したもので、下半がやや膨らむ器形となるようである。2～4 状の条線で J 字文等の意匠を描いているものの、全体の文様構成は良く分からない。帯状表現のようにみえるところもある。燈色～にぶい黄燈色で、胎土には石英・白色粒をかなり多く含む。5 は体部が大きく球形？に膨らむ壺形土器で、内面の蓋受け状の突出部も特徴的である。頸部には 4 単位の突起が付されるのが一般的であるが、本例では 1 単位のみは確認されるものの単位数が異なる可能性もあろうか。小形・薄手であることもこの種の壺形土器としてはやや異質である。内外面ともやや粗いミガキ調整が観察される。6・7 は縄紋の施される土器で、7 は粗製土器的でかなり節の粗い縄紋が施されている。

第 34 図 1 は灰黄褐色を呈する深鉢でナデ～粗いミガキ、外面はやや丁寧なミガキ（隆帯施文後）が認められる。胎土には細かな不透明白色粒をやや多く含む他、石英・黒色粒をそれぞれ少量含んでいる。隆帯はやや断面に丸みを帯びるもので、比較的高さがある。やや波打つような形で巡らされ、幅も少し不定なところがあり、丁寧さに欠けるようにもみえる。3 はにぶい黄燈色の体部下半～底部で、1 と同一の可能性もある。底部近くまで丁寧なミガキ調整が観察される。2・4・5 は条線施文の土器で、5 はやや浅い施文。4 はややランダムなもの格子目文を表現している。破片右端の頸部隆線上は突起となるようで、この位置から左上に沈線および刺突列が観察される。刺突は頸部隆線上のもの同一工具・同一工程で、比較的深い施文である。

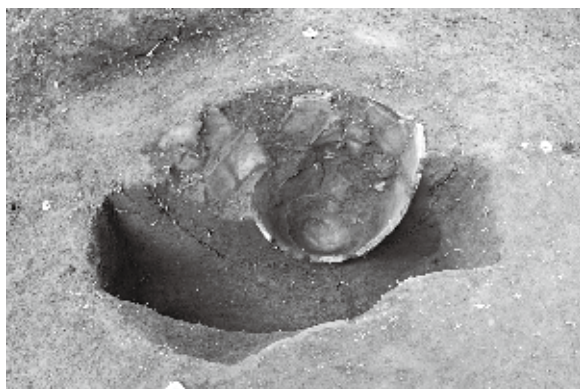
6 は浅い沈線で文様を描き内部に刺突列点（原則 2 列）を充填するものである。列点は垂直に近い円形刺突部分と短沈線状に引いている部分とがある。厚手の土器で褐色粒（シャモット？）をやや多く含む胎土も特徴的である。9 は条線施文（または削り調整状）後にミガキを加えている土器で、底部の作り、底部外面でのミガキ等も含め丁寧なつくりの感がある。

第 35 図 1 は内湾口縁への縄紋施紋が確認されるもので、加曾利 E 式前半か。2 は浅い沈線施文だが丁寧な

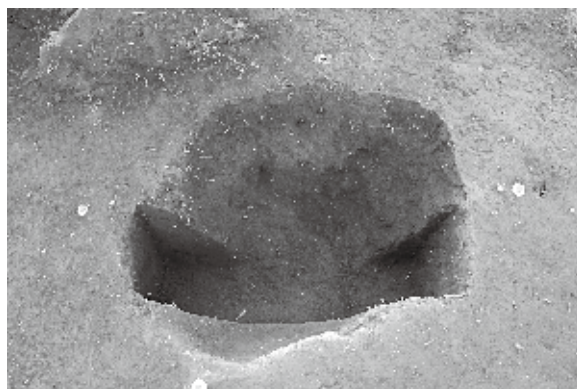


第32図 SK-73b 遺物出土状況図

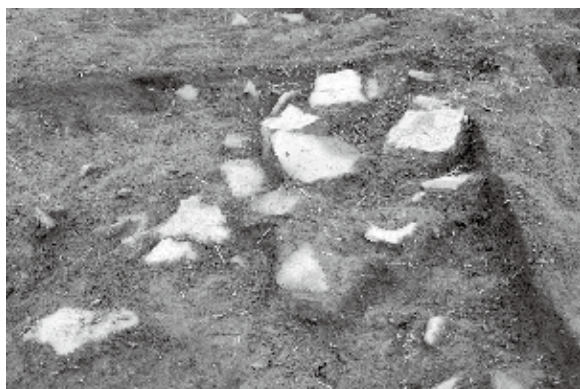
帯状部表出のようにも観察される称名寺式。第35図3は沈線による大柄な意匠のようで、列点等から第34図6と同一個体の可能性も考えられる。質感・胎土も類似している。5は平らでやや薄い粘土板状で突起を作出しているもので、沈線等が加えられず、貫通部分はあるものの明瞭な円形「孔」装飾とはなっていないものである。10もやや特徴的で細い隆線状の凸部がある。第82図2にみられるものと同種の横位区画刺突列+条線による格子目文という特徴のもので、外面に煤・炭化物の付着が顕著である。8も注目される資料で、色調はにぶい黄燈色、胎土には白色粒・褐色粒をやや少量含む。体部文様は帯状構成が比較的維持される称名寺式文様だが、口縁部文様として明瞭な枠状区画の沈線、隆帯上の刺突列、また内面にも隆体上の刺突列+横位沈線という新しい形質を備えている。口縁部付近は内面も含め良く磨かれている。12も破片左側にみえる逆C字状隆線+沈線およびこの上位に付される円形浮文が注意される資料である。13ではやや扁平なC字状隆帯の上位に8の字浮文が付される。18は明らかに沈線→縄紋→無文部ミガキとなっている。おそらく15～17も同種の施文順で、厚手で深い沈線施文等共通する部分が多い。20は列点充填例だが帯状部の内部外側いずれにも充填されており、図地の効果がなされていない。沈線もかなり浅い施文である。24以下も浅い沈線施文例が多いが、26のみやや深めで明瞭である。28および26は頸部に横位一次区画帯のある系統で、色も赤味がやや強いこと（にぶい褐色）等共通する部分がある。



SI-73 埋設土器 掘方断面（東から）



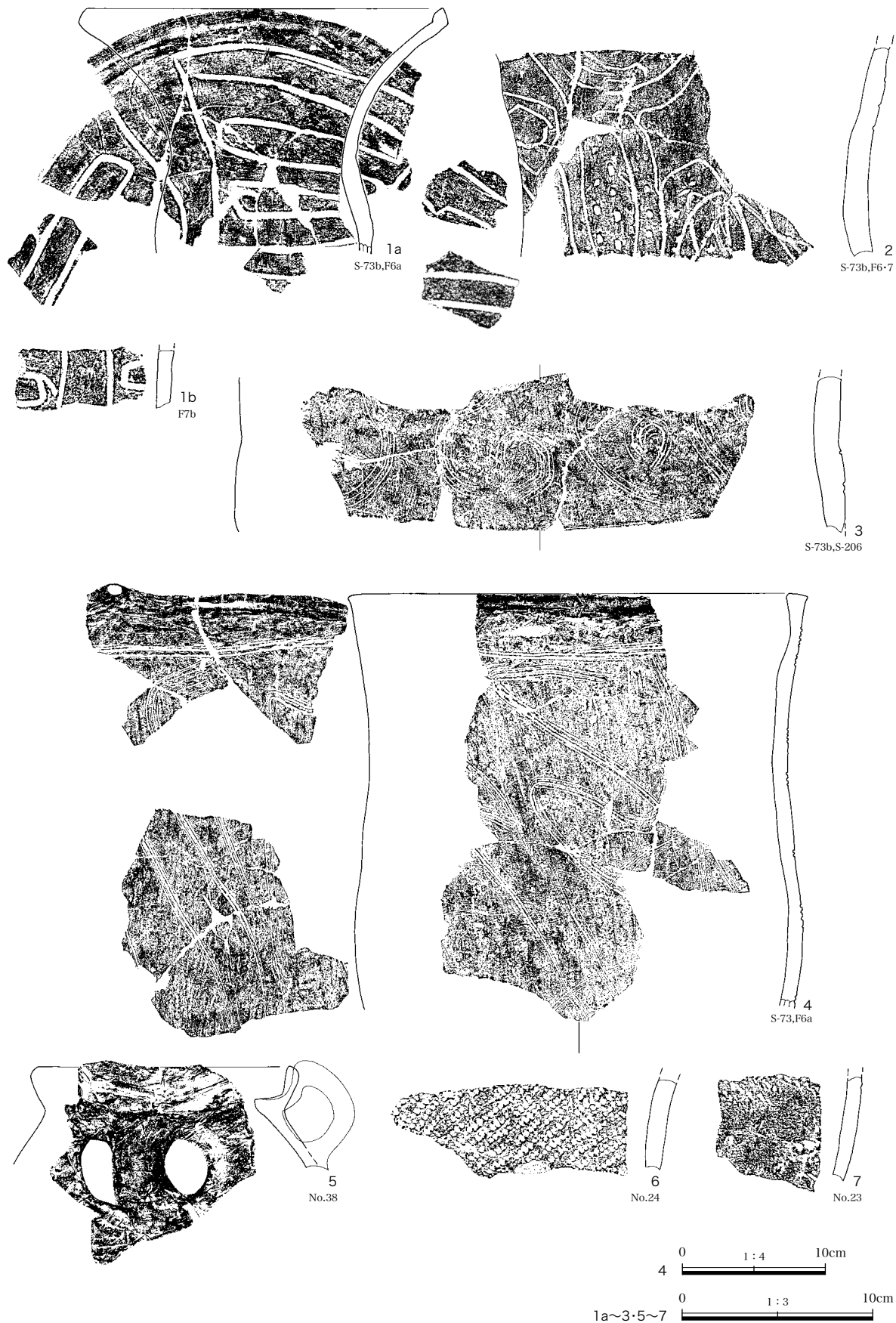
SI-73 埋設土器 掘方完掘（東から）



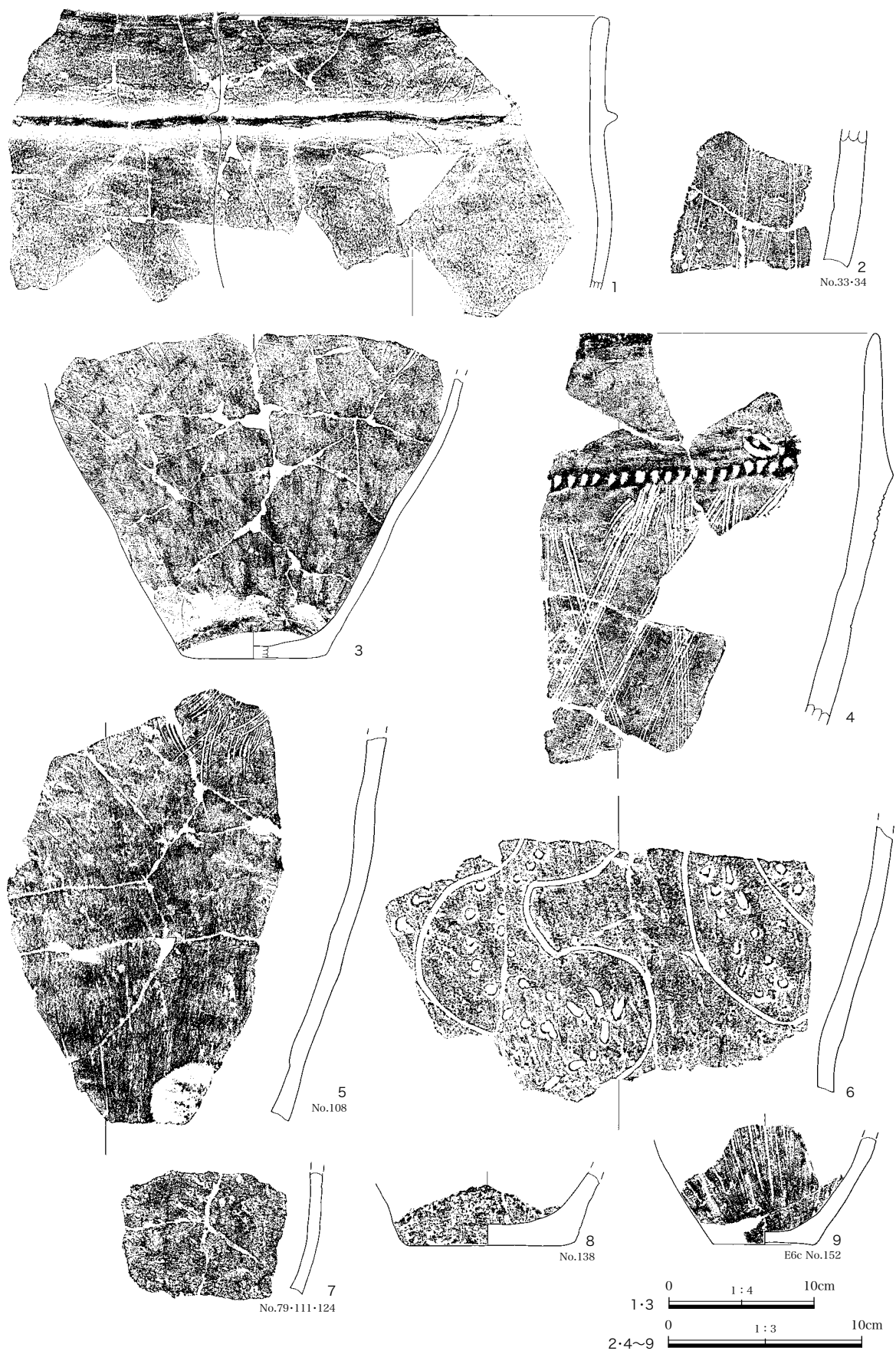
SI-73b 2次面土器出土状況アップ（北東から）



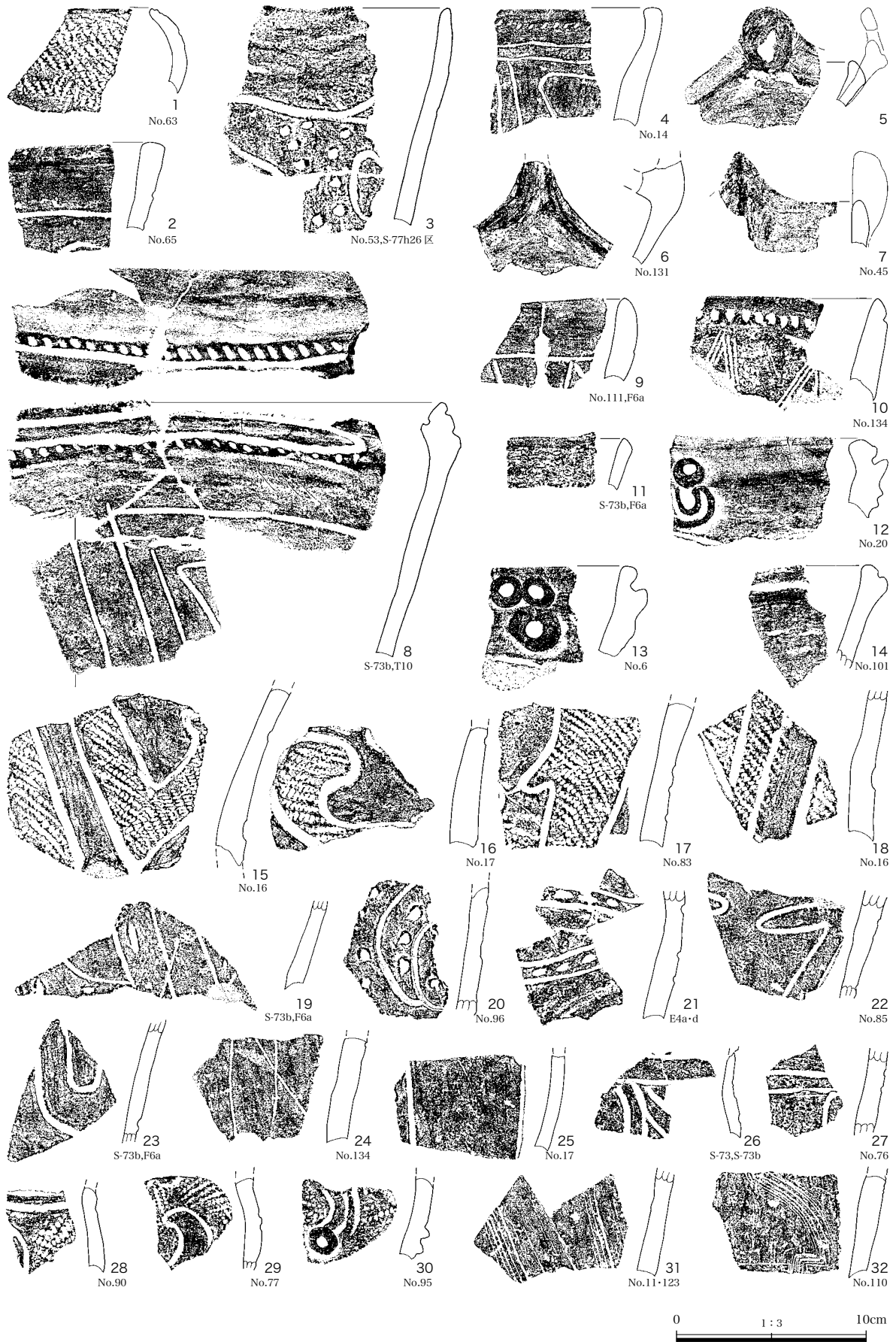
SI-73b 3次面土器出土状況（北から）



第33図 SK-73b 遺物実測図 (1)



第34図 SK-73b 遺物実測図(2)



第35図 SK-73b 遺物実測図 (3)

SI-85 (第 36・37 図、図版一二・一三)

位置 E8 グリッドに位置する。SA-2 土塁下位の包含層調査過程で確認された。

規模・形状 不整形円形を呈している。掘り込みは不明瞭であり、プランも確定し得ない。平面および包含層の断面観察から、やや黒味の強い部分が認められ、焼土の堆積があったことから住居跡と判断した。周囲は中世の地下式坑や攪乱も多く、これらが遺存状況に影響している可能性がある。この報告でも住居跡として扱うが、問題も多く残している点を明記しておく。

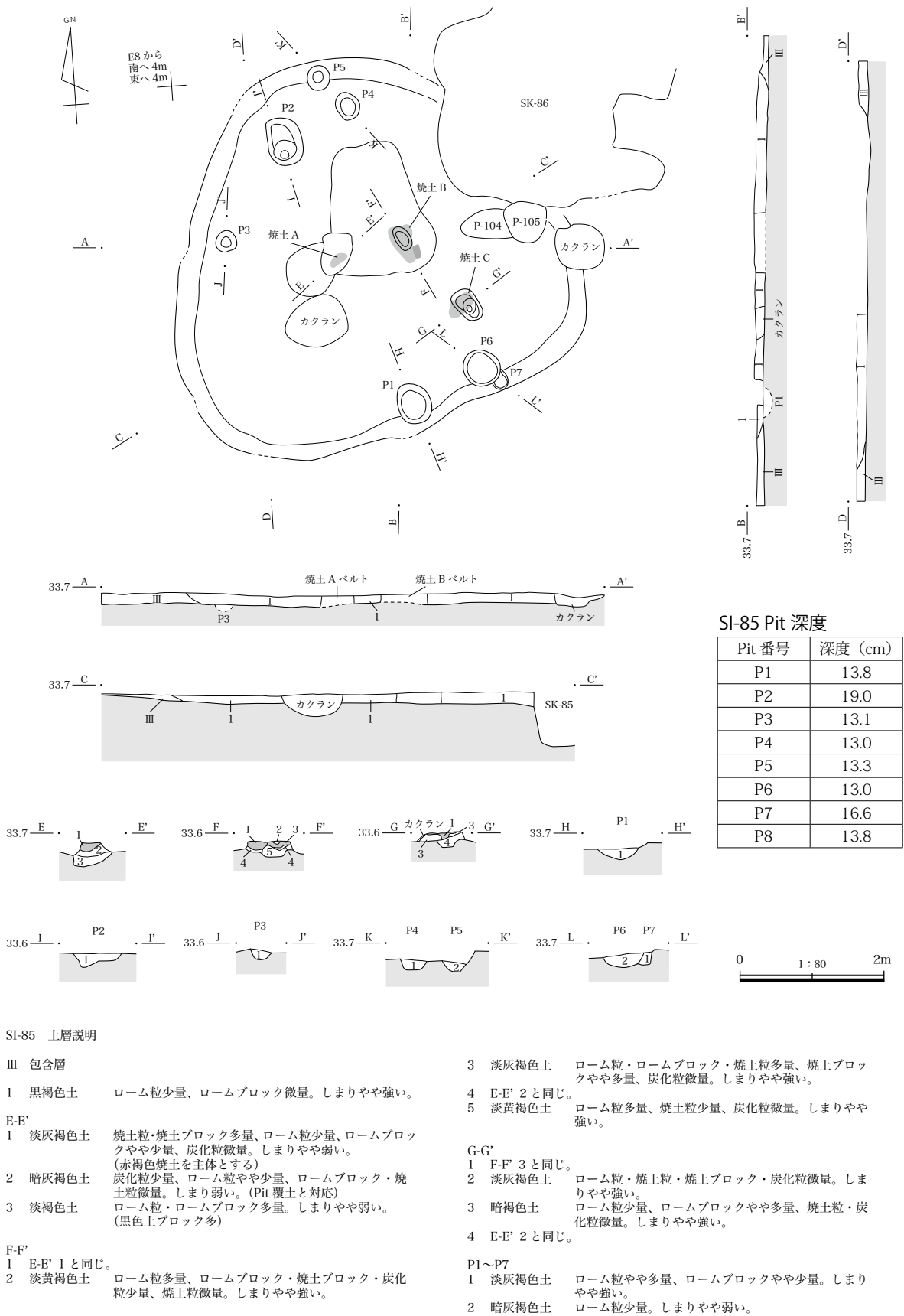
概ね判明した住居範囲から、仮に北東から南西方向を軸とすれば、軸長 5.76 m、直交軸 5.0 m となる。床面はロームに達しておらず、概ね平坦であるが硬化面は認められていない。北東側を中世の地下式坑 SK-86 に切られている。

ピットは 8 基確認された。いずれも浅く 13～19 cm の深さである。

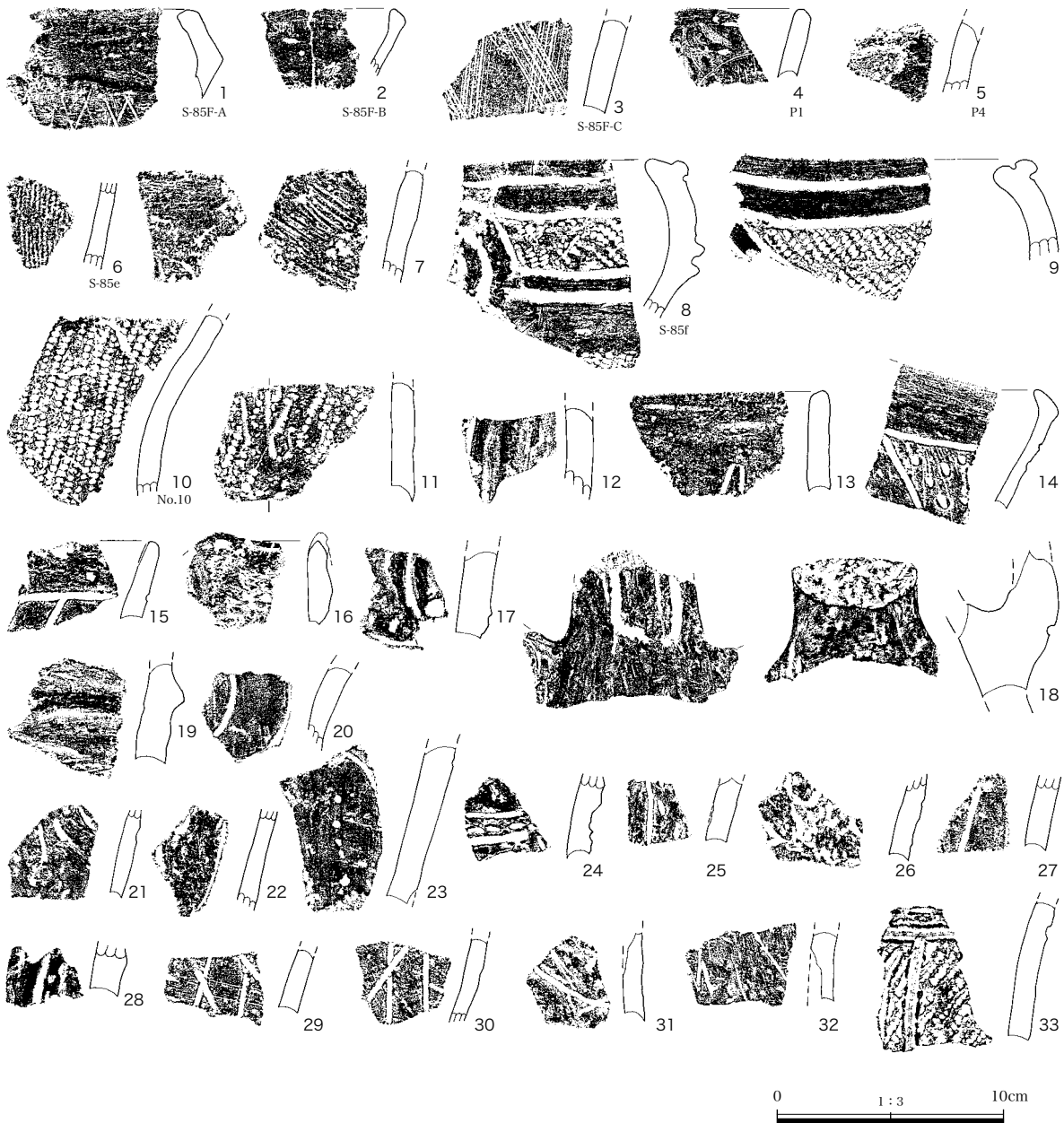
炉 炉として認めて良いか問題だが、焼土跡が 3 カ所確認された。いずれも床面よりやや浮いた状態で確認されており、床面での焼成ではない可能性も高い。あるいは床面がより上位である可能性もあるか。焼土 A は 28×15 cm、厚さ 12 cm、焼土 B は 60×22 cm、厚さ 15 cm、焼土 C は 40×20 cm、厚さ 8 cm である。焼土 B は比較的厚く堆積している。

出土遺物 (第 37 図) 127 点出土しており、このうち 33 点を示す。1 は焼土跡 A から出土した破片で、屈曲部下に格子目文が浅い沈線により描かれる。2 は良く磨かれた無文部が確認される口縁部破片で、形態からは堀之内 2 式と推定される。3 は焼土跡 C から出土したもので、やや浅い施文の条線により格子目文が描かれる。4 は浅い沈線による文様が描かれるもので、堀之内 2 式となるか。内面に炭化物の付着がみられる。P1 の出土。5 は P4 の出土で無文の破片。堀之内 2 式か。6 以下が覆土出土のものである。薄い覆土であることから床面に近い出土だが、後世の遺構構築が多いところでもあり、また包含層との区別も明瞭では無かった。

6 は撚糸紋 L が施される草創期後半撚糸紋系の土器。この種の土器としては赤味のある色調 (燈色) で、鉾物もやや少ない傾向にある。7 は条痕紋系で表面条痕内面擦痕の例。繊維はやや少量である。8～12 は中期加曾利 E 式 (前半) で、褐灰色または燈色の色調で胎土には石英・雲母をやや多く含む。8 の文様は縄紋 RL→隆帯貼付→沈線の順による。13 以下は後期の土器だが、典型的な称名寺式は 14・20・22・25 ぐらいで、残りは堀之内 1 式もしくは判断に迷うものが多い。14 は列点充填部の外側が丁寧にミガキ調整され、帯状部意匠効果が示される。17 は分かりづらいが、口頸部にノ～C 字状の隆線沈線が加えられる綱取式系の土器で、円形浮文も認められる。28 の破片も同種の文様であるいは 17 と同一個体かもしれない。18 は両耳壺の把手部分と推定されるもので、比較的太めの沈線が施される。29～32 では浅い沈線により格子目文等が描かれるもので、称名寺式の新しい部分～堀之内 1 式にかけてのものとなる。33 は縄紋 LR→沈線による文様が描かれるもので、頸部に横位一次区画がある系統の土器か。



第36図 SI-85 遺構実測図



第 37 図 SI-85 遺物実測図

2. 溝跡・土坑・ピット

縄紋時代の土坑・ピット

今回の調査において、縄紋時代に帰属すると考えられる溝跡・土坑・ピットは、溝跡1条・土坑35基・ピット38基が該当する。土坑は、平面形が円形・不整形円形・楕円形・長楕円形・方形・不明のものがある。円筒状土坑や袋状土坑と考えられるものも少数調査されている。ピットは、円形・楕円形・不整形円形のもの確認されている。

調査区全体をみると、調査区西側の台地平坦面での確認がやや目立つが、まとまりをもたずにやや散漫に分布する状態である。但し、SZ-1の墳丘下からは溝跡・土坑・ピットがややまとまりをもって検出されている。

SK-12 (第38・40図、第5表、図版一三)

位置 E4a グリッドに位置する。

規模・形状 長軸 1.24m×短軸 0.82m の不整形の土坑である。確認面から底面までの深さ 0.06m と非常に浅い。底面はおおよそ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

覆土 ロームブロック・ローム粒を少量含む黒褐色土層と、ローム粒をやや多量、ロームブロックをやや少量含む暗褐色土の、しまりの強い2層からなる。

出土遺物 (第40図) 出土している1点を図化した。1は条線施文の後期土器体部破片。

SK-46 (第38・40図、第5表、図版一三)

位置 D3d グリッドに位置する。

規模・形状 長軸 0.67m×短軸 0.45m の不整形の土坑。確認面から底面までの深さは 0.13m と浅い。底面は東側がやや深くなる。土坑壁面は外傾して立ち上がる。

覆土 ローム粒をやや多量、ロームブロックをやや少量含む、しまりのやや強い明褐色土の単一層である。

出土遺物 (第40図) 4点出土しており2点図化した。1・2ともミガキ調整痕跡のみ確認される後期の土器である。

SK-47 (第38・40図、第5表、図版一三)

位置 E4d グリッドに位置する。

規模・形状 長軸 0.84m×短軸 0.45m の不整形の土坑である。確認面から底面までの深さは 0.18m と浅い。土坑底面はやや凹凸があり、土坑壁面はやや外傾して立ち上がる。

覆土 やや少量のローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土。しまりは強い。

出土遺物 (第40図) 14点出土しており5点図化した。1～3が中期加曾利E I～II式で、縄紋のみの2では結節が確認される。4・5が後期の土器で、5では縄紋LR→沈線→磨消し・ミガキが観察される。

SK-56 (第38・40図、第5表、図版一三)

位置 D4d グリッドに位置する。

規模・形状 北側が調査区外へと至る、隅丸長方形の土坑。確認できた範囲で、長軸 1.51m×短軸 0.83m で、確認面から底面までの深さは 0.11m 程である。土坑底面はほぼ平坦で、やや外傾して立ち上がる。

覆土 ローム粒を多量、ロームブロックを少量含む明灰褐色土の単一層で、しまりはやや強い。

出土遺物 (第40図) 18点出土しており5点図示した。1にはぶい黄燈色基調だが破片下方では変色および炭化物付着が認められる。沈線は比較的幅があり深い、浅く雑なところもある。沈線施文後のミガキもさほど丁寧ではない。胎土には褐色粒を多く含む他、白色粒を含む。文様は縦長のJ字文が確認され、称名寺式文様をとどめているように見える。

2～5は称名寺式の新しい部分～堀之内1式の特徴を有しているもの。3の沈線は比較的太く明瞭である。

SK-60 (第13・16図、第5表、図版九)

位置 E14 グリッドに位置する。SI-76のP59と重複し、本遺構の方が古い。

規模・形状 長軸 1.48m×短軸 0.62m の不整形の土坑である。壁面は緩やかに立ち上がる。底面は平坦であるが、東へ向かって傾斜している。

覆土 ロームブロックをやや多量、ローム粒を少量含む灰褐色土の単一層。覆土中には炭化粒を少量含む。

出土遺物 本遺構からは遺物は出土しなかった。

SK-65 (第 43 図、第 5 表、図版一五)

位置 E14 グリッドの S-64 ピット群のほぼ中心部に位置する。

規模・形状 長軸 1.59m×短軸 0.57m、深さ 0.24m を測る。土坑の南西側 3 分の 1 程でロームを掘り残して高くなっている。北東部は南西側より深く掘り込まれている。底面の様相は、南西側は歪な丸底を呈し、北東側はほぼ平坦に北東側へ傾斜する。

覆土 ローム粒を少量、ロームブロックをやや多量に含む単一の灰褐色土である。

出土遺物 本遺構からは遺物は出土しなかった。

SK-68 (第 39・40 図、第 5 表、図版一三・五五)

位置 E4d グリッドに位置する。

規模・形状 長軸 0.5m×短軸 0.4m の不整形土坑である。確認面から底面までの深さは 0.18m を確認した。底面は中心部より周囲が低くなる。土坑壁面はやや外傾して立ち上がる。

覆土 ローム粒を多量、ロームブロックを少量含む単一の暗褐色土で、しまりは強い。

出土遺物 (第 40 図) 出土している 2 個体を図化した。1 は称名寺式～堀之内 1 式のおそらく格子目構成となる土器で、沈線は比較的太く明瞭である。

第 42 図 SK-68-2 はにぶい橙色基調 (内面はやや暗くくすんでいる)。胎土には細かな白色粒を多量に含んでいる。内外面ミガキ丁寧。注口部周辺が良く磨かれている。注口上位が付される口縁部は体部とは接合せず、若干接合角度に問題があるかもしれない。口縁突起裏面に凹点が付されている。接合しない大形破片では縦位の隆線と、おそらく横位橋状となる突起が推定される剥落部がある。注口部突起と 90 度または 180 度ずれた位置に対応することが考えられる。

SK-74 (第 40・41 図、第 5 表、図版一四)

位置 E6 グリッドに位置する。

規模・形状 長軸 0.55m×短軸 0.48m の不整形土坑である。土坑壁面は外傾して立ち上がり、底面はやや丸みを帯びる。確認面から底面までの深さは 0.16m を測る。

覆土 1 層はローム粒がやや多量、ロームブロックがやや少量混入するしまりのやや強い黒褐色土で、2 層はローム粒が多量、ロームブロックがやや少量混入するしまりの強い暗褐色土である。

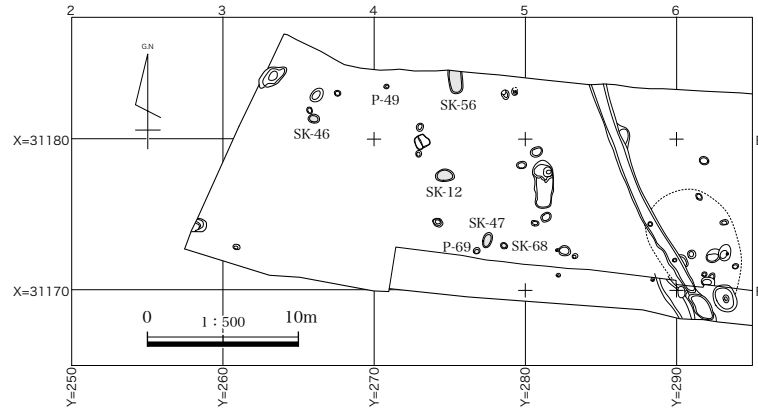
出土遺物 (第 40 図) 出土している 1 点を図化した。1 は隆帯下に条線が施されるもので、隆線幅・高さともある点が注目される。

SK-83b (第 41 図、第 5 表)

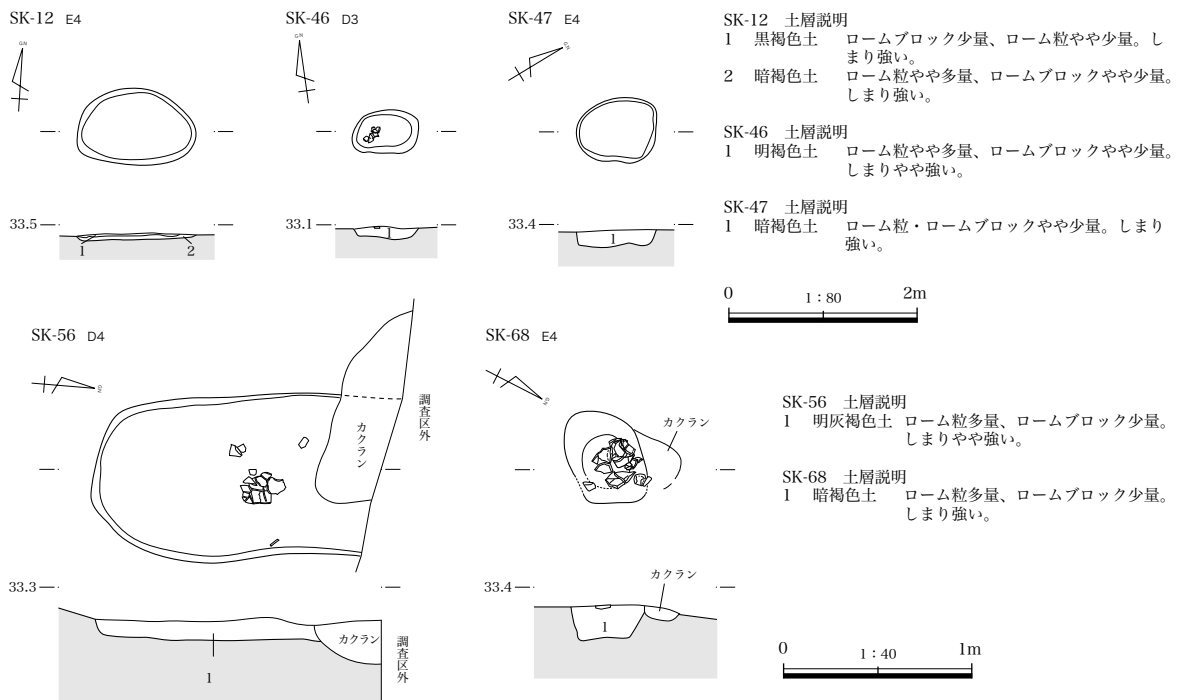
位置 F8 グリッドに位置する。

規模・形状 古墳時代の円墳である SZ-27 の周溝および中世の土坑である SK-83a と重複しており、遺存状況は悪い。北側にも浅い掘り込みがあり、別遺構の可能性はあるが、便宜的に同一遺構として扱った。残存する規模は、南北軸で長軸 1.84m×短軸 1.34m の方形と思われる土坑である。壁面は外傾して立ち上がり、床面はほぼ平坦である。調査区壁面での確認から、深さは 0.28m であった。

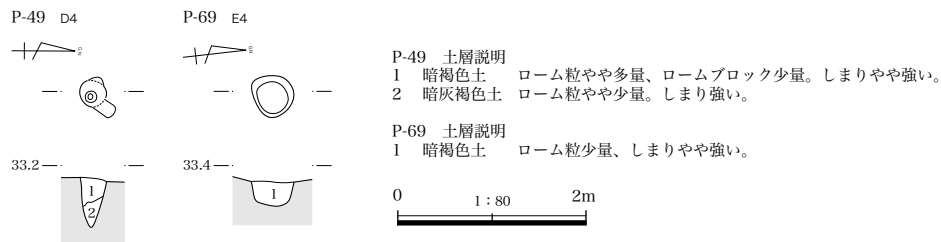
部分図



SK-12・46・47・56・68、P-49・69



第38図 縄紋時代土坑遺構実測図



第39図 縄紋時代ピット遺構実測図

覆土 暗褐色土の単一土層である。覆土上層には標準土層第Ⅱ層が堆積する。

出土遺物 図示していないが、加曽利E式1点・堀之内式2点・縄紋のみ2点・無文2点・条痕紋1点・小片が8点出土している。

SK-103a (第 41・42 図、第 5 表、図版一四)

位置 E8 グリッドに位置する。

規模・形状 南半分を SZ-27 の周溝および中世の地下式坑である SK-82 によって壊される。長軸 2.13m × 短軸 1.98m の平面不整形円形の円筒状土坑である。底面はほぼ平坦で、確認面から底面までの深さは 1.16m である。北壁は内傾しており、袋状とも言える。

覆土 4 層に分けられる。1 層はローム粒およびロームブロックをやや多く含む茶褐色土。黒褐色土が多く混じり、白色粘土塊を部分的に少量含む。2 層はローム粒・ロームブロックを多量に含む暗褐色土。3 層はローム粒・ロームブロックを少量含む黄褐色土。黒色ブロックおよび黒色粒を微量に含む。4 層はローム粒を少量含む黄褐色土。3 層よりやや明るい色調であり、ロームブロックと黒褐色土が混じる。SZ-27 の周溝との重複部分では極多量にロームブロックを含む。壁面等の崩落土を含んでいると思われる。3 層が厚く堆積しており、人為的堆積の可能性も考えられよう。

出土遺物 (第 42 図) 48 点出土しており 18 点図化した。遺物の取り上げでは SK-103 としてまとめており、遺物の SK-103a・103b・103c の区別はし得ない。但し、所見では SK-103b からの出土はほぼみられなかったように思われる。1～8 は黒浜式で、繊維をやや多く含み、軟質な感を受ける土器である。1 や 4 では石英粒をやや多く含む。1～4 の縄紋は単節だが、4 は 0 段多条もしくは前々段反撚りの原体を用いている。5 は無節もしくは直前段反撚り、6 は不鮮明だが付加条 2 種で RL + L か。7 は擦痕のみ観察されるもの、8 は無節 L か。9～12 は中期の土器で、11・12 の浅鉢では赤色顔料の付着が確認される。ミガキも丁寧である。13～17 は後期の土器で堀之内 2 式が目立つ。18 は当初後期の可能性を考えたが、縄紋 RL の縦方向回転施文、雲母をやや多く含む胎土等、加曾利 E 式の可能性が高い。

SK-103b・SK-103c (第 41 図、第 5 表、図版一四・一五)

位置 E8 グリッドに位置する。

調査の過程 SK-103b は、SK-103a 完掘後、SZ-27 を含む調査の過程で確認され、SK-103c は SK-103a・103b 調査後に確認された。この状況から、SK-103c → SK-103b → SK-103a が想定されるが、確実ではない。

規模・形状 SK-103b は、長軸 0.36m × 短軸 0.24m の平面不整形円形の袋状土坑である。大部分を SK-103a および SZ-27 周溝と重複しており、全体は不明であるが、残存する底径は 1m 程、確認面からの深さは 0.84m である。SK-103c は、長軸 0.49m × 短軸 0.39m、深さ 0.36m の不整形円形の土坑。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面は丸底を呈する。

覆土 SK-103b の土層についてみていく。1 層はローム粒・ロームブロックを少量含む暗灰褐色土。2 層はローム粒を多量、ロームブロックをやや少量含む暗灰褐色土。3 層はローム粒をやや少量、ロームブロックを少量含む黒褐色土。4 層はローム粒をやや多量、ロームブロックを少量含む淡灰褐色土。5 層はローム粒をやや多量、ロームブロックを多量に含む。すべての層に炭化粒が含まれており、1 層は少量、2～5 層は微量ではあるが観察された。堆積状況から、2 層から 5 層まで自然堆積で埋没した後、1 層の人為的堆積で完全に埋没したと考えられる。

SK-103c の土層についてみていく。1 層はローム粒をやや多量、ロームブロックを微量に含む暗灰褐色土。2 層はローム粒・ロームブロックをやや多量に含む淡灰褐色土。3 層はローム粒をやや少量、ロームブロックを微量に含む暗灰褐色土。1・2 層は白色粒および炭化粒を微量に含む。すべての層はしまりがやや弱い。

出土遺物 本遺構からの確実な出土はない。

SK-134 (第41・42図、第5表、図版一四)

位置 F9 グリッドに位置する。SA-2の盛土除去後に確認された。

規模・形状 長軸 1.59m×短軸 1.06mの不整形の土坑。やや外傾して立ち上がり、底面は平坦。確認面から底面までの深さは0.34mであった。

覆土 第1層はローム粒がやや多く、ロームブロックが少ない暗褐色土、2層はローム粒が少なく、ロームブロックを多量に含む黄褐色土、3層はローム粒がやや少なく、ロームブロックをやや多く含む茶褐色土の3層である。これら覆土はすべてに白色粒が微量に含まれており、しまりはやや硬い。

出土遺物 (第42図) 出土している2点を図化した。1は縄紋RLのみ施文の中期加曾利E式、2は無文だが後期の土器であろう。また、覆土上層からは石製垂飾(第149図1)が1点出土している。この石製垂飾は、縄紋時代前期の可能性が高く、出土土器と整合しないことから、土坑の時期判断は困難である。但し、周辺の土坑や包含層から、前期の土坑である蓋然性も高いと考えておく。

SK-209 (第41・42図、第5表、図版一四・五五)

位置 F8 グリッドに位置する。土坑の大半をSZ-27の周溝によって壊されており、詳細は不明である。

規模・形状 残存していた規模は、長軸 1.92m×短軸 0.56mの不整形土坑である。底面は北部へ向かって緩やかに傾斜する。確認面から底面までの深さは0.2mと浅い。

覆土 ローム粒をやや多く、ロームブロックを少量含む黒褐色土の単一層である。

出土遺物 第42図1は浅黄橙色～くすんだ色(にぶい黄橙色)を呈する深鉢。4単位?の波状縁で波頂部から頸部区画隆帯へ垂下する隆帯、隆帯脇沈線が確認される。拓影図正面部分では隆帯が剥落しているが、右に示した別破片では2条の隆帯が確認される。口縁直下の横位隆帯上には刺突が施されている。体部の縄紋は0段4条のRLで若干浅めの施文である。胎土には雲母・褐色粒および石英を少量含む。3～5は後期の土器で、4は称名寺式、5は称名寺式末～堀之内1式となるうか。6・7は当初1とも同一の可能性を考えたが、縄紋や胎土から別個体の中期破片とする。図示した遺物以外では加曾利E式12点・称名寺式3点・堀之内式2点・縄紋のみ7点・無文4点・条痕紋2点・小片13点・礫1点が出土している。

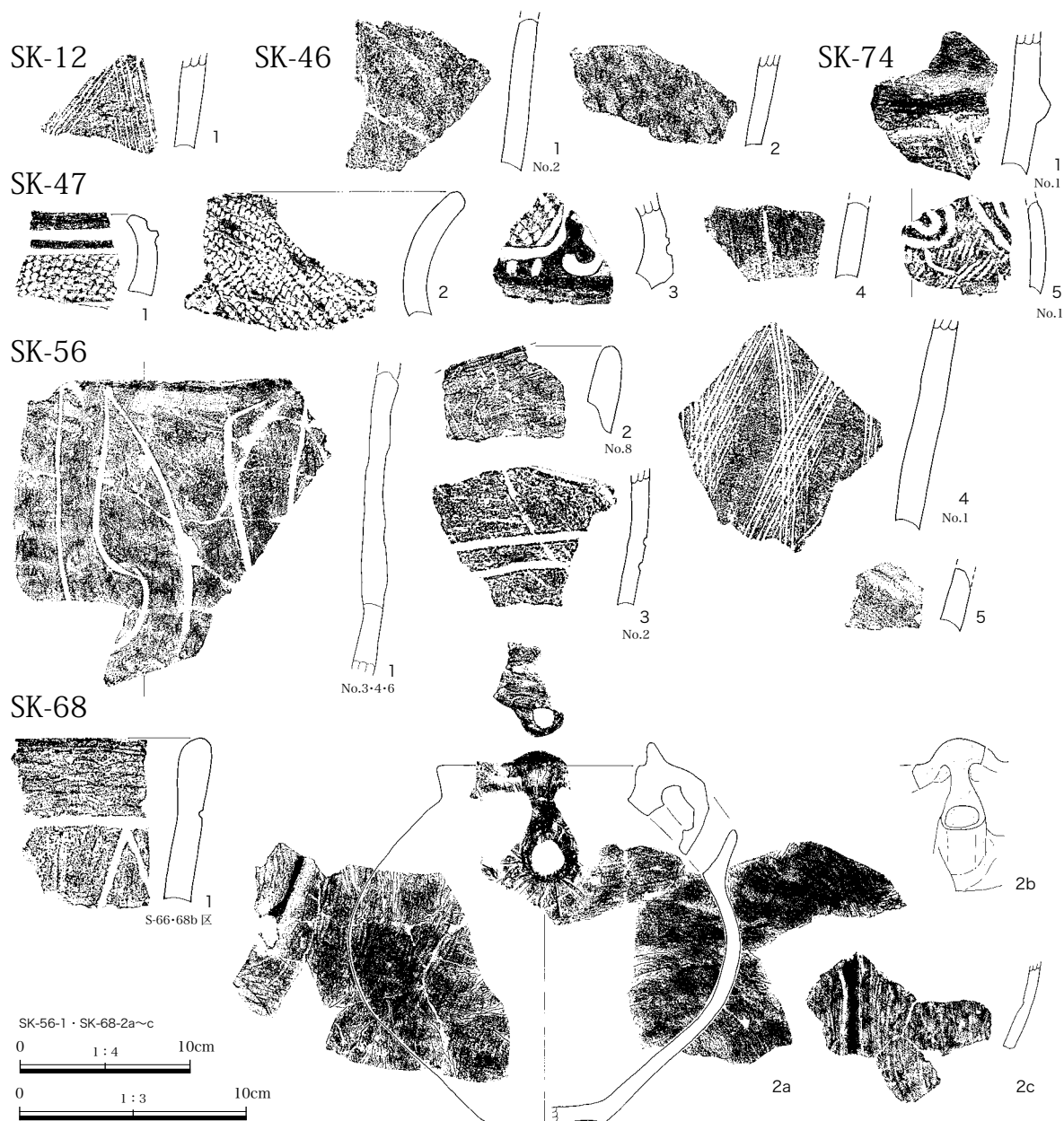
P-128b・P-128c・P-128d・P-128e (第44図、第6表、図版一五)

位置 E9 グリッドに位置する。

規模・形状 P-128b～128eは、SZ-27周溝および中世の土坑であるSK-114、地下式坑のSK-115、時期不明のP-128a、さらにP-128b～128eで重複し合っているため、正確な規模は不明である。P-128aも縄紋時代の可能性が残るが、時期不明として扱った(第268図)。土層観察から、P-128d→P-128c・P-128e→P-128b→P-128a→SK-114→SZ-27と整理される

P-128bの残存する規模は、長軸 0.57m×短軸 0.38m、深さ 0.3mの不整形の土坑。外傾して立ち上がり、底面はほぼ平坦である。P-128cの残存する規模は長軸 0.63m×短軸 0.42mの平面楕円形の土坑である。形態は、深さ 0.56mの漏斗状を呈す。P-128dの残存する規模は長軸 0.56m×短軸 0.38m、深さ 0.6mの平面楕円形の土坑である。壁面はほぼ垂直だが、上端部で外傾する。

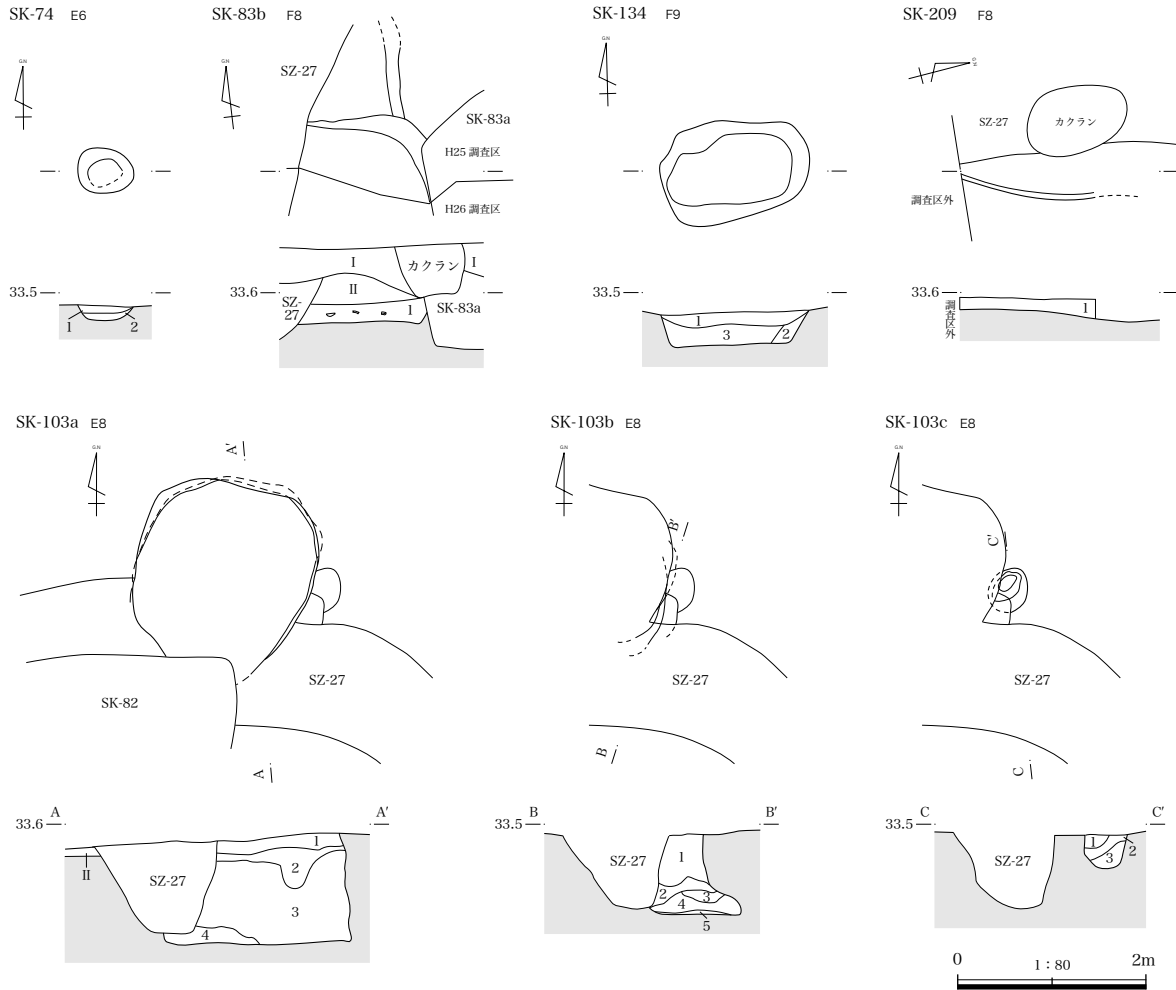
P-128eの残存する規模は長軸 0.93m×短軸 0.6mの不整形の土坑である。壁面は、SZ-27の周溝およびP-128a・128bに壊されており、観察はできていない。底面は丸底気味であり、確認面からの深さは0.42mである。



第 40 図 縄紋時代土坑遺物実測図

覆土 P-128bの覆土をみていく。ローム粒微量、ロームブロックをやや少量含む、淡灰褐色土の単一層である。覆土中からは白色粒が微量ながら観察された。P-128cの覆土をみていく。ローム粒やや多量、ロームブロックを微量に含む、暗灰褐色土の1層。2層はローム粒を少量、ロームブロックをやや多量に含む黒褐色土。3層はローム粒やや少量、ロームブロックを微量に含む、暗灰褐色土。すべての覆土中から白色粒が微量ながら観察された。P-128dの覆土は4層に分層できる。1層(B-B'5層・C-C'2層)はローム粒やや多量、ロームブロックをやや少量含む淡褐色土。2層(C-C'3層)はローム粒・ロームブロックを少量含む淡灰褐色土。3層(C-C'4層)はローム粒・ロームブロックを多量に含む淡灰褐色土。4層(C-C'5層)はローム粒やや多量、ロームブロックをやや少量含む淡灰褐色土。2・3層の覆土中から微量ながら白色粒が観察された。P-128eの覆土は、ローム粒・ロームブロックをやや多量に含む暗灰褐色土の単一層で、白色粒が微量ながら観察された。

出土遺物 図示していないが、黒浜式1点・加曾利E式1点・小片1点が出土している。但し、これは



SK-74 土層説明

- 1 黒褐色土 ローム粒やや多量、ロームブロックやや少量。しまりやや強い。
- 2 暗褐色土 ローム粒多量、ロームブロックやや少量。しまり強い。

SK-83b 土層説明

- 1 暗褐色土

SK-134 土層説明

- 1 暗褐色土 ローム粒やや多量、ロームブロック少量、白色粒微量。しまりやや強い。
- 2 黄褐色土 ロームブロック多量、ローム粒少量、白色粒微量。しまりやや強い。
- 3 茶褐色土 ロームブロックやや多量、ローム粒やや少量、白色粒微量。しまりやや強い。

SK-209 土層説明

- 1 黒褐色土 ローム粒やや多量、ロームブロック少量。しまりやや弱い。

SK-103a 土層説明

- 1 茶褐色土 黒褐色が多く混じる。ローム粒・ロームブロック中量、白色粘土塊部分的に少量。しまり強い。
- 2 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。しまり強い。

- 3 黄褐色土 ロームブロック疎らに含む。ローム粒少量、黒色ブロック・黒色粒微量。しまり強い。
- 4 黄褐色土 3より明るい色調。SZ-27と切り合う部分にロームごく多量。ロームブロックと黒褐色土が混じる。ローム粒少量。しまり強い。

SK-103b 土層説明

- 1 暗灰褐色土 ローム粒・ロームブロックやや多量、炭化粒少量。しまりやや強い。
- 2 暗灰褐色土 ローム粒多量、ロームブロックやや少量、炭化粒微量。しまりやや強い。
- 3 黒褐色土 ロームブロック少量、ローム粒やや少量、炭化粒微量。しまりやや強い。
- 4 淡灰褐色土 ローム粒多量、ロームブロック少量、炭化粒微量。しまりやや強い。
- 5 暗灰褐色土 ロームブロック多量、ローム粒やや多量、炭化粒微量。しまり強い。

SK-103c 土層説明

- 1 暗灰褐色土 ローム粒やや多量、ロームブロック・白色粒・炭化粒微量。しまりやや弱い。
- 2 淡灰褐色土 ローム粒・ロームブロックやや多量、白色粒・炭化粒微量。しまりやや弱い。
- 3 暗灰褐色土 ローム粒やや少量、ロームブロック微量。しまりやや弱い。

第41図 SK-74・83b・134・209・103a～c 遺構実測図

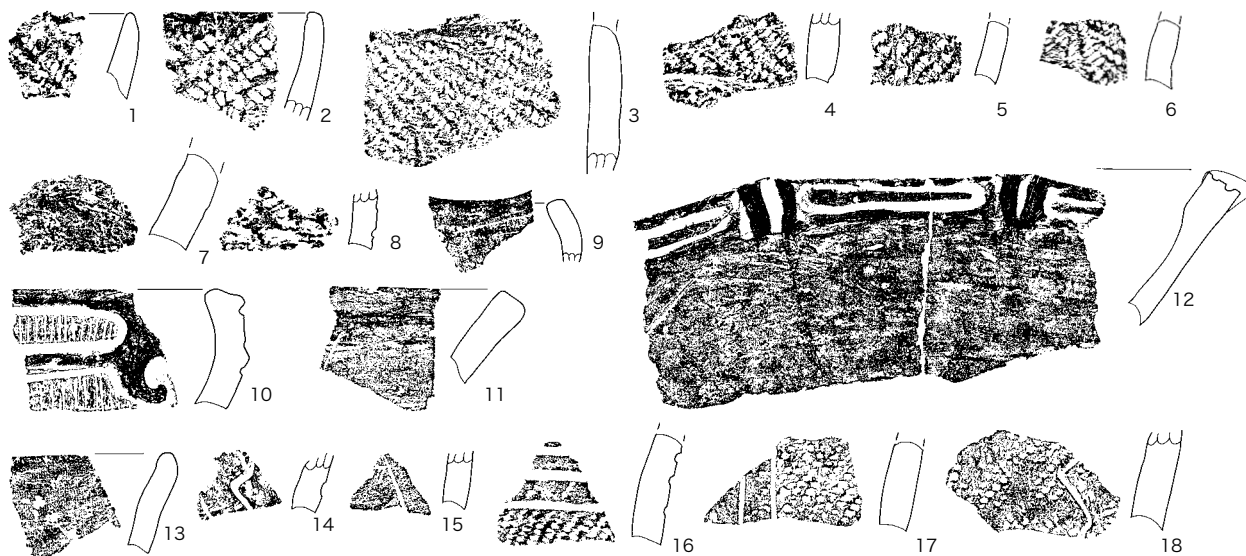
P-128 としてまとめて取り上げたものであり、P-128b～128eのいずれに帰属するのかは判断できない。

P-128eからは図示得ていないが、黒浜式1点・加曾利E式1点・称名寺式1点・堀之内式1点・小片2点が出土している。

P-49 (第39図、第6表、図版一四)

位置 D4c グリッドに位置する。

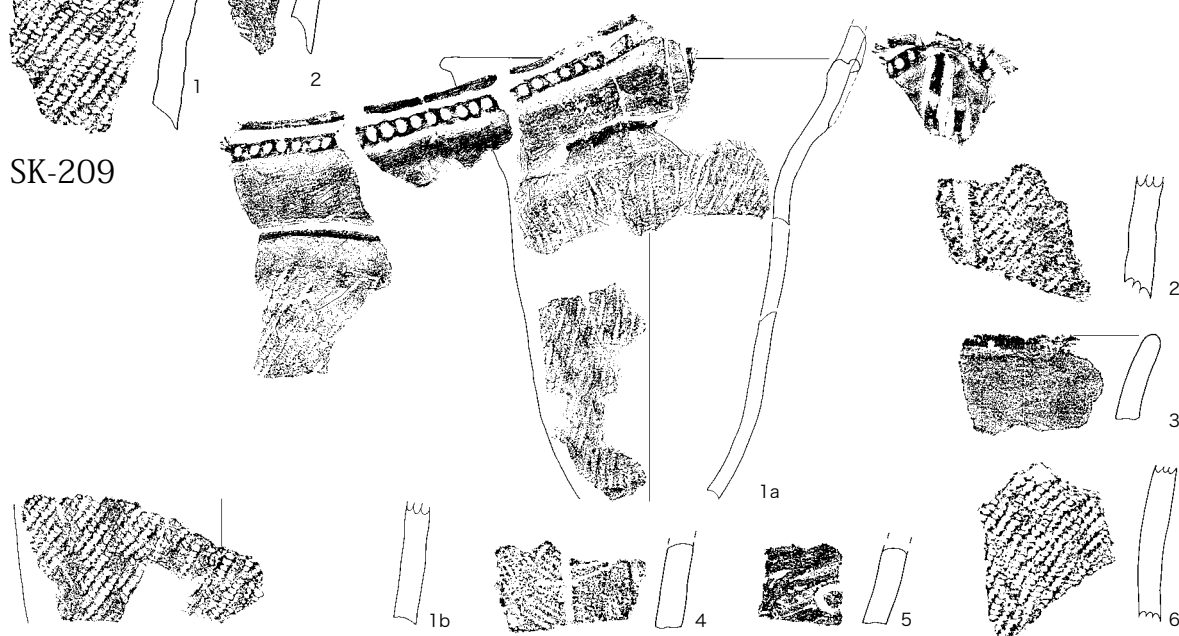
SK-103



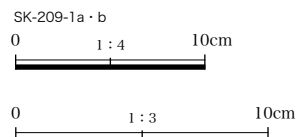
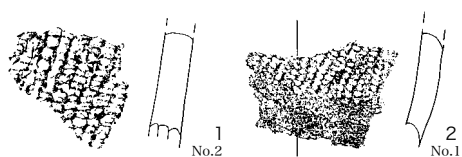
SK-134



SK-209



P-69

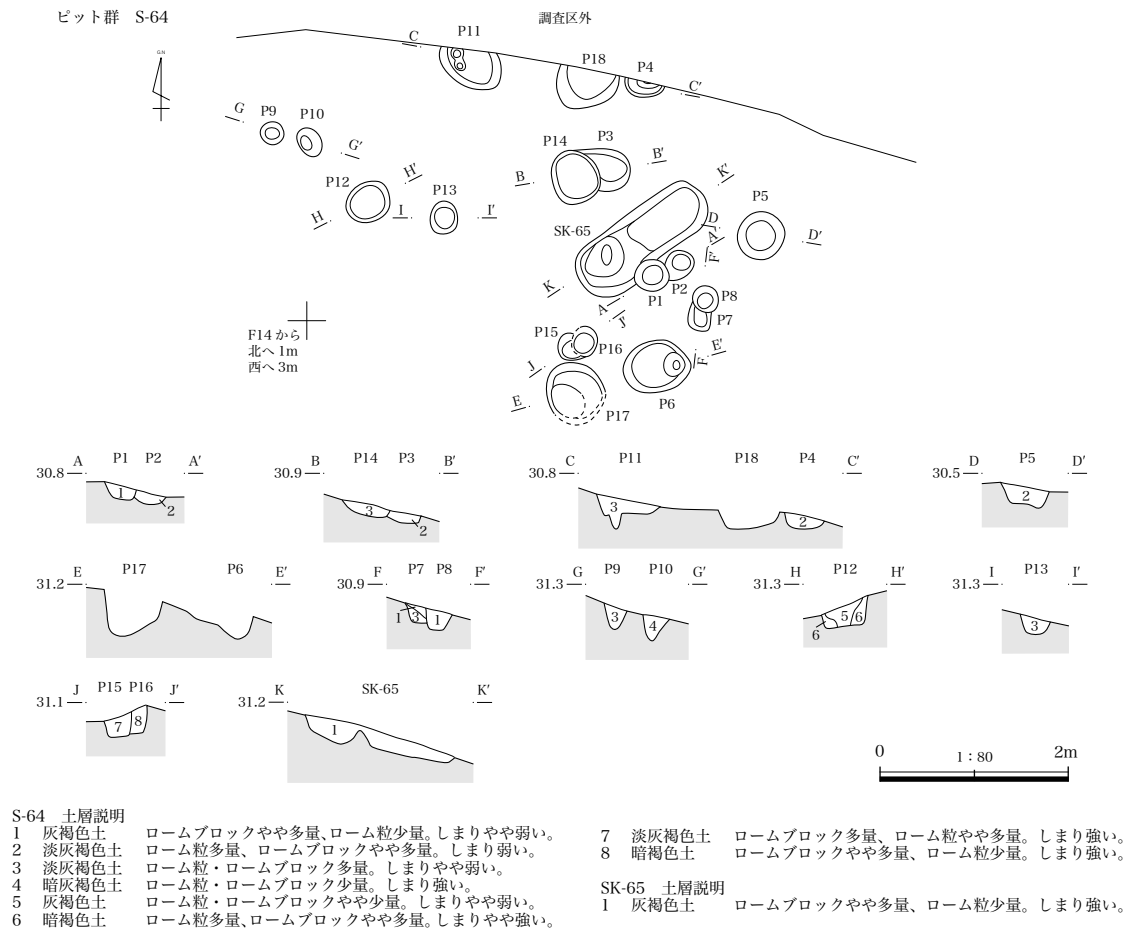


第42図 縄紋時代土坑・ピット遺物実測図

規模・形状 長軸0.27m×短軸0.16mの円形のピットである。形態は円錐状で下端は狭くなる。確認面から底面までの深さは0.51mと深い。周囲からは同形状・同規模のピットは確認できなかった。

覆土 1層はローム粒をやや多量、ロームブロックを少量含む、しまりのやや強い暗褐色土、2層はローム粒をやや少量含むしまりの強い暗灰褐色土である。

出土遺物 図示していないが、無文の土器片が1点出土している。



第43図 S-64 遺構実測図

P-69 (第39・42図、第6表、図版一四)

位置 E4d グリッドに位置する。

規模・形状 長軸0.43m×短軸0.4mの円形のピット。掘方は円柱状を呈し、底面はやや丸みを帯びる。確認面から底面までの深さは0.26mでやや深めである。

覆土 ローム粒を少量含む暗褐色土の単一層である。

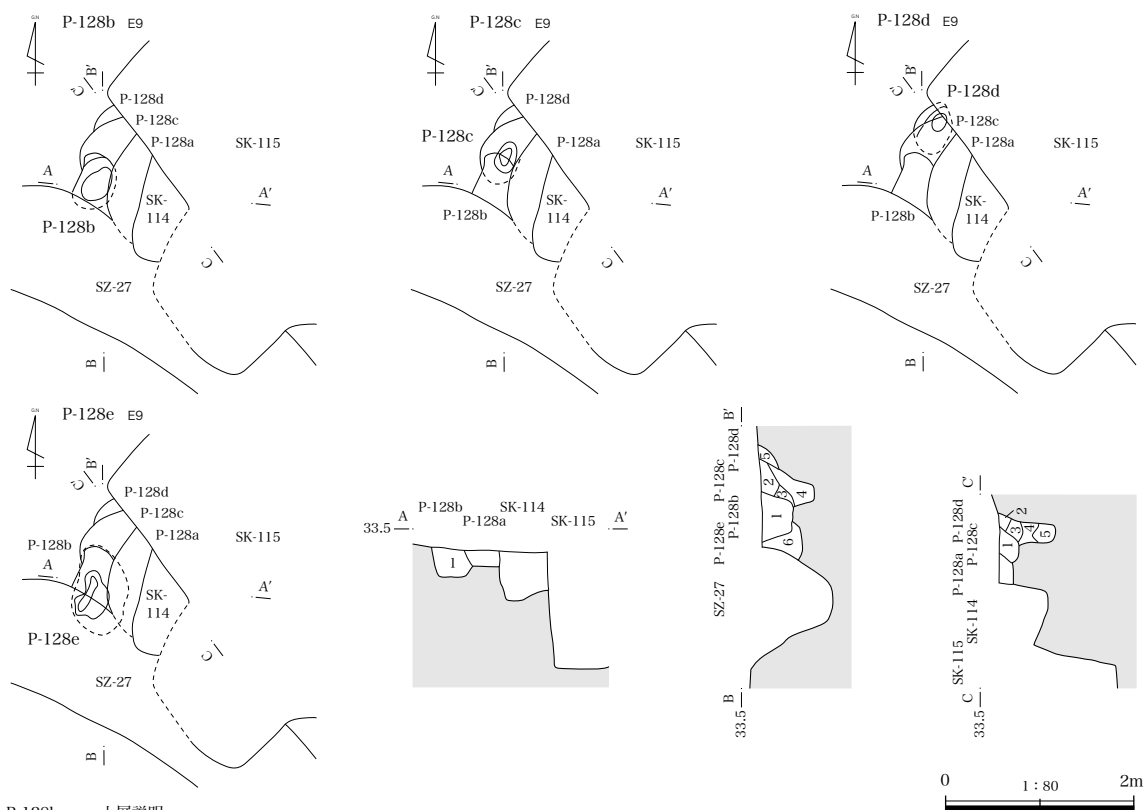
出土遺物 (第42図) 出土している2点を図化した。1・2とも中期加曾利E式で、1の縄紋は0段多条の原体を用いている。

S-64 ピット群 (第43図、第6表、図版一五)

E13c グリッドで18基が集中して検出された。東へ下がる斜面で、南東にはSI-76が位置している。

ピットの平面形は、円形・楕円形・隅丸長方形等多様であり、規模も含め均一ではない。以下、形態分類をして説明する。それぞれについてみると、平面円形のピットは、P1・4・5・8・9・12・14～17が該当する。すべて小形のピットであり、最小径は0.15m、最大径は0.68m。深さは0.17～0.3m前後に集中するが、最も深いもので0.43mを測る。これらのピットの壁面はやや外傾して立ち上がり、底面は丸底状のもの・平坦なものが主体的であるが、P9のみ形態が円錐状を呈する。

平面楕円形のもの、P2・3・6・10・11・13・18が該当する。すべて小形で、長軸0.3m前後×短軸0.26m前後のもの、長軸・短軸が0.4m以上のものの2種に細分することが出来る。深さは両者ともまちまちで、



P-128b~e 土層説明

A-A'

1 淡灰褐色土 ローム粒やや多量、ロームブロックやや少量、白色粒微量。しまりやや弱い。

B-B'

1 淡灰褐色土 ローム粒やや多量、ロームブロックやや少量、白色粒微量。しまりやや弱い。
 2 暗灰褐色土 ローム粒やや多量、ロームブロック・白色粒微量。しまりやや弱い。
 3 黒褐色土 ロームブロックやや多量、ローム粒少量、白色粒微量。しまりやや弱い。
 4 暗灰褐色土 ローム粒やや少量、ロームブロック・白色粒微量。しまりやや弱い。
 5 淡灰褐色土 ローム粒やや多量、ロームブロックやや少量、白色粒微量。しまりやや弱い。

6 暗灰褐色土 ローム粒・ロームブロックやや多量、白色粒微量。しまりやや強い。

C-C'

1 暗灰褐色土 ローム粒多量、白色粒やや多量、ロームブロック微量。しまりやや弱い。
 2 淡褐色土 ローム粒やや多量、ロームブロックやや少量。しまりやや弱い。
 3 暗灰褐色土 ローム粒・ロームブロック少量、炭化粒微量。しまりやや弱い。
 4 淡灰褐色土 ローム粒・ロームブロック多量、炭化粒微量。しまりやや強い。
 5 淡灰褐色土 ローム粒やや多量、ロームブロックやや少量。しまりやや強い。

第 44 図 P-128b~e 遺構実測図

最も浅くて0.15m、最も深くて0.6mである。底面の形態は土坑の平面形の規模や深度に係らず、円柱状や丸底、平坦なもの等多様である。P10のみ、形態が円錐状である。また、P11は、北西側の底面に径0.1m程の小ピットが2基並んで検出された。

隅丸長方形は1基のみ検出し、P7が該当する。北側がP8と重なっており、正確な規模は計測できないが、長軸は推定で0.2m・短軸は0.23mを測る。断面逆台形で、底面はほぼ平坦である。

これらのピット群は組み合わせによってはいくつかの建物跡等であった可能性を残す。P5・6・11・12の4ピットを結ぶと、長軸3.4m・短軸1.8mの1間×1間の長方形の建物跡と想定できる。また、これにP7やP18を加え考えて楕円状に巡る配置を考えることもできる。この場合、長軸4.0m×短軸3.4mの楕円形の建物跡との想定もできよう。

更に、P14・17・18が南北に並ぶようにもみえ、あるいはP1・8～10・13も東西方向へ並ぶようにもみえる。建物跡もしくは柵列跡の可能性も考えられよう。ピット同士の重複もあることから、2つ以上の建物跡があった可能性もあろうか。

SZ-1 墳丘下遺構（第45～48図、第5・6表、図版一六・一七）

SZ-1（横倉戸館8号墳）墳丘下からは溝跡1条・土坑19基・ピット14基を調査した。

SD-147は東側を攪乱に、西側をSD-3によって破壊されている。残存する長さ2m、確認面からの幅50cm、深さ20cmである。出土遺物は3点ある（第47図）。

検出された土坑の平面形は、円形・不整円形・楕円形・長楕円形・不整形の5種に分類できる。円形土坑は6基調査しており、SK-149・154～156・162b・168が該当する。すべて小形の土坑で、直径0.4m～1.0m、深さ0.14m～0.4mである。底面はほぼ平坦なもの・やや不整形で凹凸が確認できるもの・皿状のものがあげられる。

不整円形土坑は4基調査した。SK-137・157・159・162aが該当する。SK-137・59は小型土坑、SK-157・162aは中形の土坑である。小形土坑は、長軸0.78～0.95m、短軸0.56～0.8mで、深さは0.2m前後である。底面はほぼ平坦である。中形の土坑であるSK-157・162aは長軸1.4～1.5m・短軸1.1m前後を測り、深さ0.26～0.52mである。底面は両者ともほぼ平坦であった。SK-162aは掘り込みが明瞭で、この土坑群の中では深さもある土坑である。出土遺物（第47図）から称名寺式期と推定される。

楕円形土坑は6基でSK-135・136・139・150・158・160が該当する。すべて径0.5～1.2mの小形土坑である。底面の形状は皿状や逆台形、不整形なものが見受けられる。

不整形土坑はSK-143a・143bの2基が調査されている。SK-143aは三日月状の平面形を呈しており、長軸2.19m×短軸0.44m、深さ0.14mである。底面は北側へ傾斜する形状をしており、東へ向かって細身になる。SK-143bは、SK-143aに北側を破壊されている。平面形は一部が南東部へ張り出している。残存する底面は皿状であり、深さは6cmと非常に浅い。

ピットの平面形は、円形5基・不整円形1基・楕円形7基・形態不明1基と、楕円形と円形が大部分を占める。円形ピットはP-138・140・152・153・169が該当する。すべて小形で、径0.4～0.9m、深さ0.14～0.3mである。底面は丸底のものが主流で、少数だが平坦なものも見受けられる。

不整円形はP-141の1基のみである。長軸0.81m×短軸0.61m、深さ0.22mを測る。底面は丸底である。平面形が楕円形を呈するピットは、P-145・146・151・161・166・167・170が該当する。すべて小形で、最小のピットは長軸0.36m×短軸0.24m、最大でも長軸0.73m×短軸0.5mである。深さは0.12～0.28mと浅めである。平面は平坦なものや丸底のものがあ、平坦なものは断面が逆台形になり、丸底のものは断面「U」字状を呈する。P-142は、東部をSZ-1の周溝に破壊されているため平面形態が不明であるが、おそらく楕円～長楕円形を呈したのであろう。現存する長軸は0.48mで、短軸は0.31mを測る。深さは0.16mと浅く、丸底のピットである。

出土遺物 以下、SZ-1の下層にて検出した遺構からの出土遺物について、遺構ごとに明記していく（第47・48図）。

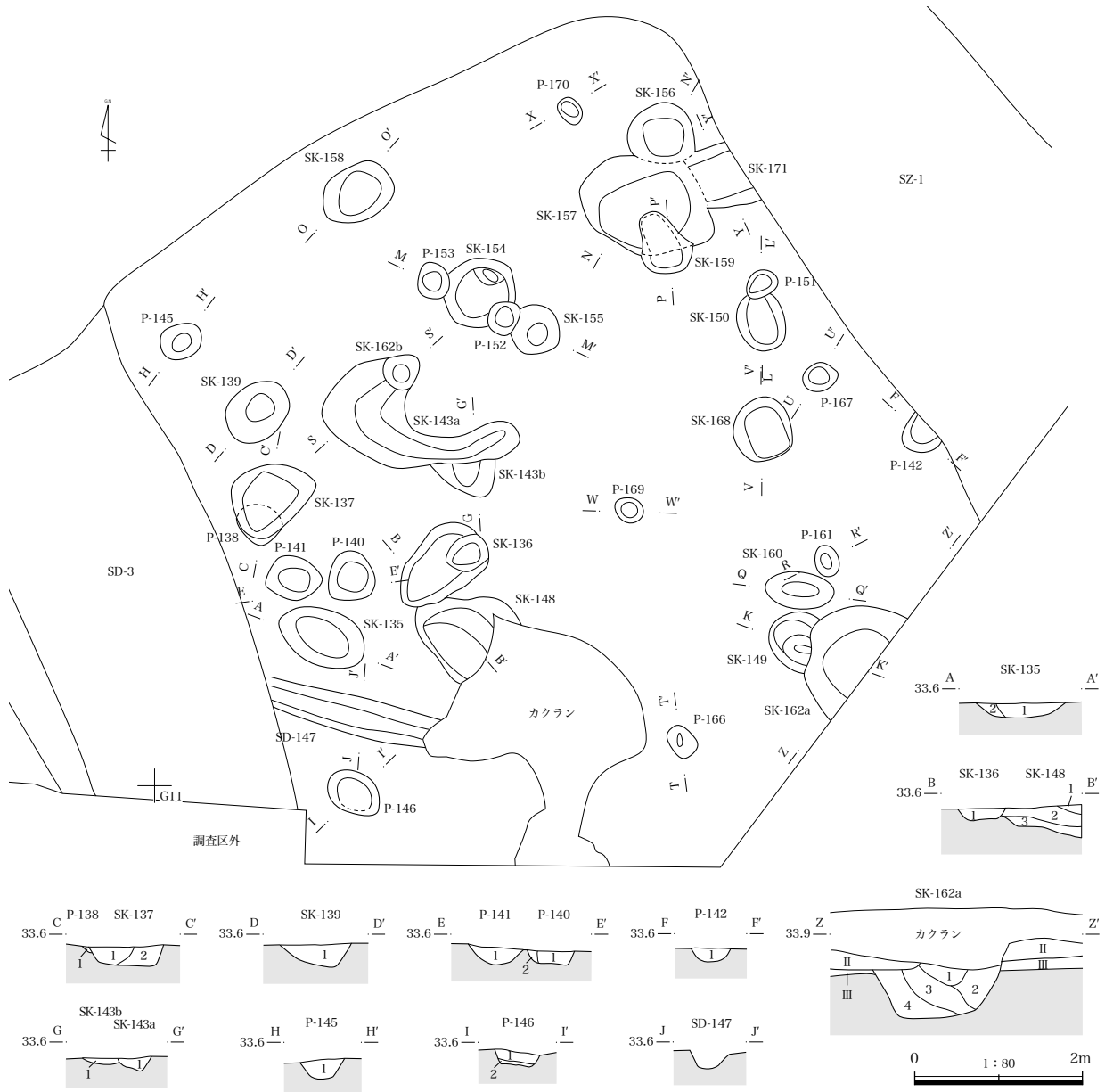
P-145（第47図）：出土している1点を図化した。1は中期加曾利E I式で口縁部文様の一部か。

SD-147（第47図）：8点出土しており3点図化した。1は黒浜式の有文土器で細く鋭い工具による施文、2は付加条2種で細いLの付加が確認される。破片上位には結節も認められる。3は無節Lの施される小片。

SK-135（第47図）：出土している1点を図化した。1は黒浜式で単接RLもしくは反撚りか。

SK-137、P-138（第47図）：出土している1点を図化した。1は黒浜式でRLの施文。

P-146（第47図）：8点出土しており4点を図化した。1は黒浜式で有文の条線施文、2はLRの単節、3は0段多条のLRもしくは前々段反撚りおよびRの2種を結んで施したのか。4はRLである。



SK-135 土層説明

- 1 暗褐色土 ローム粒やや多量、ロームブロックやや少量、しまりやや弱い。
- 2 暗灰褐色土 ローム粒少量、ロームブロック・炭化物粒微量。しまり弱い。

SK-136 土層説明

- 1 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。炭化物粒少量。しまりやや弱い。

SK-137 土層説明

- 1 暗灰褐色土 ローム粒やや多量、炭化物粒微量。しまりやや弱い。
- 2 暗褐色土 ローム粒多量、ロームブロックやや多量。しまりやや強い。

P-138 土層説明

- 1 黒褐色土 ローム粒少量。しまり強い。

SK-139 土層説明

- 1 暗灰褐色土 ローム粒多量、ロームブロック少量、炭化物粒微量。しまり弱い。

P-140 土層説明

- 1 淡灰褐色土 ロームブロック少量、ローム粒微量。しまりやや弱い。
- 2 暗褐色土 ローム粒・ロームブロックやや少量。しまり弱い。

P-141 土層説明

- 1 暗褐色土 ローム粒多量、ロームブロックやや多量、炭化物粒微量、焼土粒微量。しまりやや強い。

P-142 土層説明

- 1 淡灰褐色土 ローム粒少量。しまりやや強い。

SK-143a 土層説明

- 1 暗灰褐色土 ローム粒やや多量。しまり弱い。
- 2 暗褐色土 ローム粒やや多量、ロームブロック少量。しまり強い。
- 3 暗黄褐色土 ローム粒多量、ロームブロックやや多量。しまりやや強い。

SK-143b 土層説明

- 1 暗褐色土

P-145 土層説明

- 1 暗褐色土 ローム粒やや多量。しまりやや弱い。

P-146 土層説明

- 1 暗褐色土 ローム粒やや多量。しまりやや弱い。
- 2 暗灰褐色土 ローム粒やや多量。しまりやや弱い。

SK-148 土層説明

- 1 暗灰褐色土 ローム粒・ロームブロック少量。しまり強い。
- 2 暗灰褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。しまり強い。
- 3 暗褐色土 ローム粒・ロームブロックやや多量。しまりやや強い。

SK-162a 土層説明

- 1 淡灰褐色土 ローム粒少量。しまりやや強い。
- 2 暗褐色土 ローム粒やや少量、炭化物粒微量。しまり強い。
- 3 暗灰褐色土 炭化粒やや多量、ローム粒微量。しまり強い。
- 4 暗褐色土 ローム粒やや多量、ロームブロック・炭化物粒少量。しまり強い。

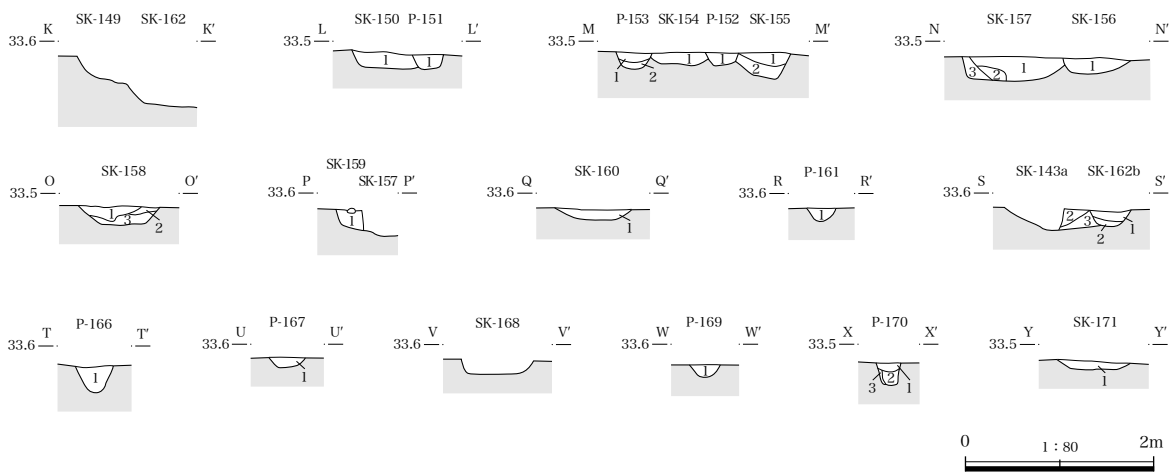
第45図 SZ-1 墳丘下遺構実測図(1)

SK-148 (第47図): 9点出土しており5点図化した。1~3が黒浜式で、1は燃糸Rまたはr、2は燃糸r、3は無節Lと観察される。4はJ字状の意匠が浅い沈線で描かれる土器で称名寺式であろうか。沈線施文後のミガキは丁寧である。

P-151 (第47図): 出土している1点を図化した。1は黒浜式で無節L施紋、比較的繊維が少ないように観察される。

P-152 (第47図): 6点出土しており2点図化した。1は波頂部突起の破片で、左右側面が貫通し、これとは繋がらずに上位の孔も確認される。2では沈線の左側がやや調整粗く対比的な表現となっている。1・2ともおそらく称名寺式であろう。

SK-168 (第47図): 出土している3点を図化した。1~3は黒浜式の有文土器で、2・3では格子目状の表現となっている。



SK-150 土層説明
1 明茶褐色土 ローム粒・白色細粒少量、ロームブロック微量。しまり弱い。

P-151 土層説明
1 暗褐色土 白色細粒少量、ローム粒微量。しまり弱い。

P-152 土層説明
1 黒褐色土 ロームとの混土。黒色ブロック (1cm 大) 微量。しまりやや弱い。

P-153 土層説明
1 黒褐色土 ロームブロック少量、ローム粒・炭化物粒微量。しまり強い。
2 暗褐色土 ロームブロック中量。しまりやや強い。

SK-154 土層説明
1 暗褐色土 ロームブロック部分的に少量、褐色土粒・白色粒微量。しまり強い。

SK-155 土層説明
1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒中量、白色細粒微量。しまりやや弱い。
2 茶褐色土 ロームブロック (1cm 大) 少量、ローム粒微量。しまり強い。

SK-156 土層説明
1 暗褐色土 ローム粒・白色細粒微量。一部ロームが層状に堆積。しまり強い。

SK-157 土層説明
1 黒褐色土 ロームブロック多量、ローム粒・白色細粒微量。しまり強い。
2 暗褐色土 ロームブロック多量、白色細粒少量。しまりやや弱い。
3 黒褐色土 ロームブロック中量、ローム粒微量。しまりやや弱い。

SK-158 土層説明
1 黒褐色土 白色細粒少量、ローム粒・ロームブロック微量。しまりやや弱い。
2 暗褐色土 黒色ブロック少量、白色細粒微量。しまりやや弱い。
3 暗褐色土 黒色ブロック中量、ローム粒・白色細粒微量。しまりやや強い。

SK-159 土層説明
1 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック少量、白色細粒微量。しまりやや強い。

SK-160 土層説明
1 暗褐色土 ローム粒多量。しまり弱い。

P-161 土層説明
1 淡灰褐色土 ローム粒やや多量。しまり強い。

SK-162b 土層説明
1 暗灰褐色土 ローム粒少量、しまりやや弱い。
2 黒褐色土 ローム粒やや少量。しまり弱い。

P-166 土層説明
1 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。しまり弱い。(カクランの可能性あり)

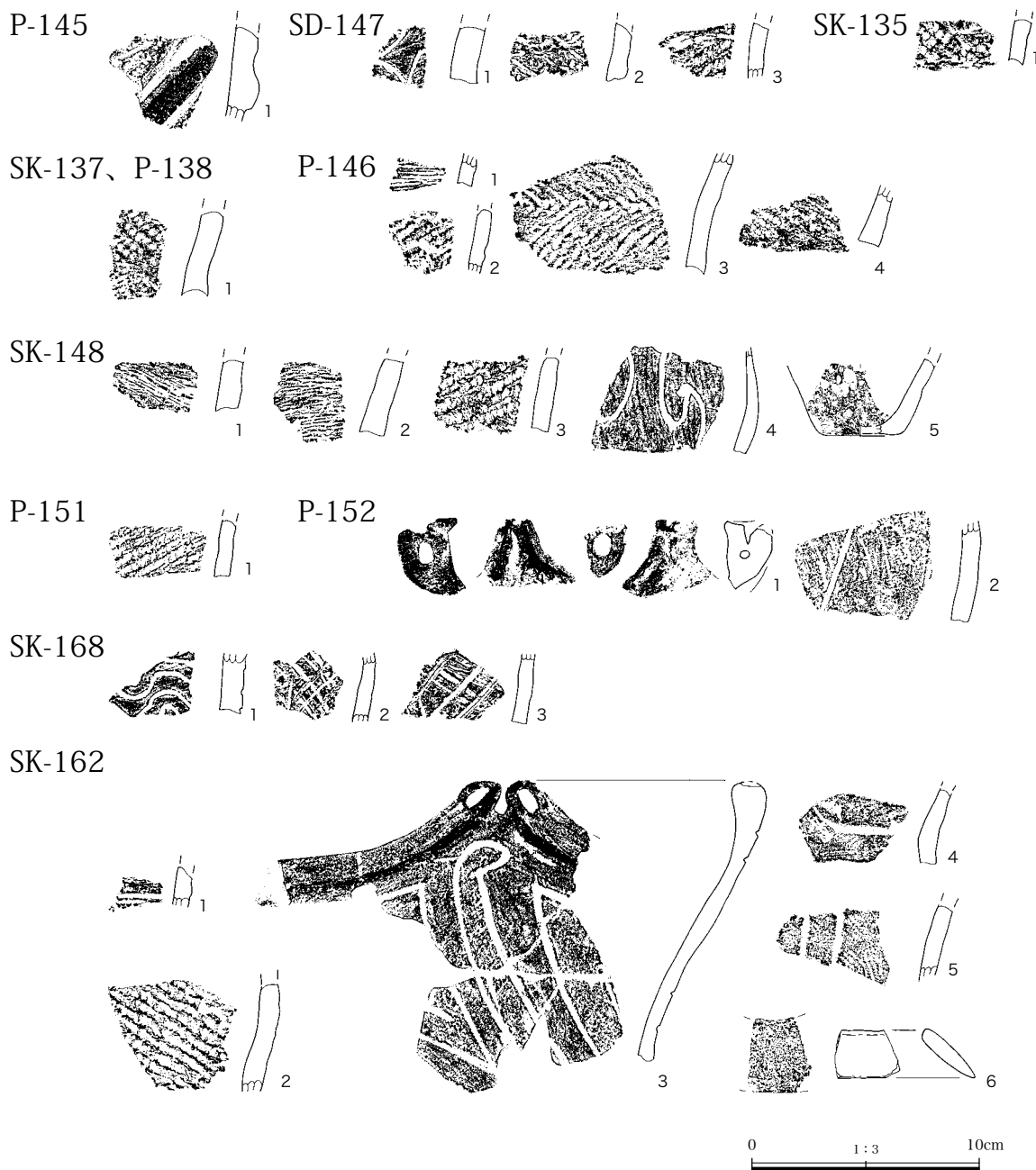
P-167 土層説明
1 暗灰褐色土 ローム粒多量、ロームブロックやや多量。しまりやや強い。

P-169 土層説明
1 淡灰褐色土 ローム粒多量、ロームブロック少量。しまりやや弱い。

SK-170 土層説明
1 灰褐色土 ロームを層状に含む。しまり強い。
2 暗褐色土 ローム粒・白色細粒微量。しまり強い。
3 暗褐色土 白色細粒極微量。しまり強い。

SK-171 土層説明
1 暗褐色土 ロームに黒褐色が層状に混じる。白色細粒微量。しまりやや強い。

第46図 SZ-1 墳丘下遺構実測図 (2)



第 47 図 SZ-1 墳丘下遺構出土遺物実測図 (1)

SK-162 (第 47 図) : 32 点出土しており土器 5 点、土製品 1 点を図化した。1 は黒浜式有文の小片、無節 R 施紋の黒浜式。3 はやや大形の破片で、波頂部突起の頂部左右に円形刺突 (凹部) がある。沈線施文後の充填は内が、帯状部の内外でミガキに若干の差があり、帯状効果が示されている。外面一部に炭化物の付着が確認される。内面のミガキも丁寧である。4 も沈線施文の土器で 3 と同一個体の可能性もあるが判然としない。5 は節の細かい縄紋施紋があり、堀之内式か。6 は本来土製品の項で示すべきもので、貝輪状土製品と称しているものである。表裏面とも良く磨かれ、外面には白色付着物があるようにもみえるが判然としない。にぶい黄燈色、胎土には石英・白色粒の細かい粒子状鉱物が認められる。

SK-136 (第 48 図) : 10 点出土しており 5 点を図化した。1 ~ 4 が黒浜式で、1 は LR に細かい R が付加され

ているもの、2も同じ付加条1種、3は擦痕のみの破片、4は摩滅で判然としないが結節が加えられた原体施紋か。5は後期の土器で堀之内2式か。

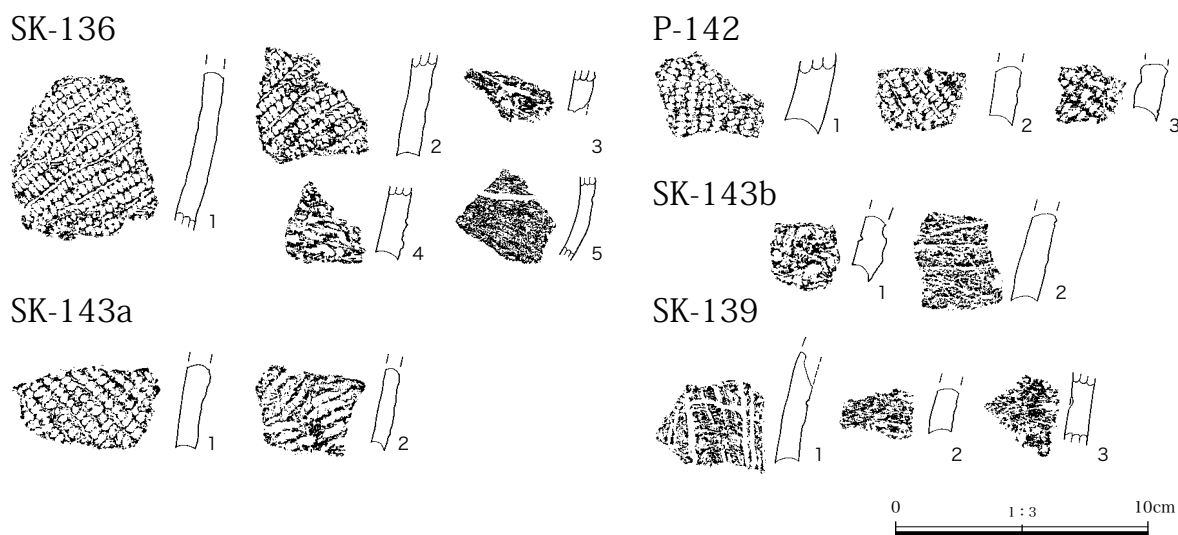
P-142 (第48図)：3点出土しており3点図化した。1は無繊維の土器で中期か。2は付加条1種でRLに細いL?が加えられている。3は単節RLか。

SK-143b (第48図)：8点出土しており2点図化した。いずれも黒浜式で1は末端環、2は細い0段L?の付加条がみられるもの。

SK-143a：6点出土しており2点図化した。いずれも黒浜式で1は単節RL、2は無節Lがみられる。

SK-139 (第48図)：5点出土しており3点図化した。いずれも黒浜式で1は擦痕状の調整面上に縦方向の線が確認されるもの。沈線施文のようにみえるが、撚糸紋もしくは絡状体を引いている可能性もあり判然としない。2は無節L?、3は不鮮明だが擦痕のみとみられる。

以上の出土土器から、SK-152・162は称名寺式期の土坑、SK-145が加曾利E式期の土坑、SK-135～139・142・143b・146・147・151・168が黒浜式期の土坑と判断される。SK-136とSK-148については両者の土器が出土しており、判断が難しいが、量比等から黒浜式期の可能性を示しておく。遺物の出土していない土坑・ピットについてもいずれかの時期となる可能性が高い。



第48図 SZ-1 墳丘下遺構出土遺物実測図 (2)

第6表 縄紋時代土坑計測表

遺構No	調査 グリッド	規模 (m)			形状	長軸方向	出土遺物
		長軸	短軸	深さ			
SK-12	E4	1.24	0.82	0.06	不整円形	N-85° -W	条1
SK-46	D3	0.67	0.45	0.13	不整円形	N-72° -W	無2、小片2
SK-47	E4	0.84	0.68	0.18	不整円形	N-35° -E	加E3、称2、堀1、縄3、条1、小片3
SK-56	D4	(1.51)	0.83	0.11	隅丸長方形	N-8° -W	称3、堀2、無10、小片3
SK-60	F14	1.48	0.62	0.06	不整形	N-67° -W	
SK-65	E14	1.59	0.57	0.24	隅丸長方形	N-50° -E	
SK-68	E4	0.50	0.40	0.18	不整形	N-51° -E	称1、無1
SK-73b	F6	1.78	1.46	0.20	楕円形	N-25° -W	称11、堀16、無32、条2、小片25
SK-74	E6	0.55	0.48	0.16	不整円形	N-78° -W	称1
SK-83b	F8	1.84	1.34	0.28	方形?	N-2° -W	加E1、堀2、縄2、無2、条1、小片38
SK-103a	E8	2.13	1.98	1.16	不整円形	N-10° -W	黒14、加E5、称2、堀2、縄1、無2、小片22、石器2
SK-103b	E8	0.23	0.13	0.84	不整円形	N-20° -E	
SK-103c	E8	0.49	0.39	0.36	不整円形	N-32° -E	
SK-134	F9	1.59	1.06	0.34	不整円形	N-77° -E	縄1、無1、石器1

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物

SK-135	F11	1.20	0.66	0.18	楕円形	N-37° -E	黒1
SK-136	F11	1.18	0.61	0.14	楕円形	N-50° -E	黒6、堀1、小片33、石器1
SK-137	F11	0.95	0.80	0.24	不整円形	N-50° -E	<137・138> 黒1、無1、小片4、石器1
SK-139	F11	0.80	0.61	0.28	楕円形	N-41° -E	黒4、縄1
SK-143a	F11	2.19	0.44	0.14	不整形	N-42° -W	<143・144> 黒3、小片3
SK-143b	F11	(0.48)	0.68	0.06	不整形	N-30° -W	
SK-148	F11	1.15	0.91	0.40	不明	N-22° -E	黒3、称1、小片5
SK-149	F11	0.69	0.55	0.24	円形		黒2、小片3、石器1
SK-150	F11	0.67	0.53	0.20	楕円形	N-12° -W	
SK-154	F11	0.90	0.64	0.14	円形		
SK-155	F11	0.57	0.54	0.30	円形		
SK-156	F11	0.89	0.75	0.16	円形		無1
SK-157	F11	1.53	1.17	0.26	不整円形	N-28° -W	石器1
SK-158	F11	0.86	0.64	0.20	楕円形	N-65° -E	
SK-159	F11	0.78	0.56	0.22	不整円形	N-23° -E	石器1
SK-160	F11	0.79	0.45	0.30	楕円形	N-85° -W	
SK-162a	F11	1.44	1.08	0.52	不整円形	N-25° -E	<162> 黒2、加E3、称2、縄1、無8、小片16、石器2
SK-162b	F11	0.44	0.40	0.16	円形		
SK-168	F11	0.72	0.67	0.14	円形		
SK-171	F11	0.73	0.57	0.10	不明	N-23° -W	
SK-209	F8	1.92	0.56	0.20	不整形	N-10° -E	加E12、称3、堀2、縄7、無4、条2、小片13、礫1

第7表 縄紋時代ピット計測表

遺構No.	調査 グリッド	規模 (m)			形状	長軸方向	出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ				
P-49	D4	0.27	0.16	0.51	円形		無1	
S-64	P1	E14	0.36	0.34	0.20	円形		P1
	P2	E14	0.35	0.26	0.15	楕円形	N-34° -E	P2
	P3	E13・E14	(0.45)	0.44	0.19	楕円形	N-85° -W	P3
	P4	E14	0.43	(0.17)	0.22	円形		P4
	P5	E14	0.50	0.48	0.33	円形		P5
	P6	E14	0.72	0.55	0.20	楕円形	N-84° -E	P8
	P7	E14	(0.20)	0.23	0.22	隅丸長方形	N-15° -E	P9
	P8	E14	0.27	0.26	0.22	円形		P10
	P9	E13	0.24	0.22	0.30	円形		P24
	P10	E13	0.33	0.23	0.34	楕円形	N-29° -W	P25
	P11	E13	0.74	(0.40)	0.39	楕円形	N-33° -E	P26
	P12	E13	0.47	0.41	0.32	円形		P27
	P13	E13	0.34	0.28	0.19	楕円形	N-1° -W	P28
	P14	E13・E14	0.56	0.48	0.25	円形		P29
	P15	E13	0.27	(0.15)	0.29	円形		P30
	P16	E13・E14	0.31	0.26	0.17	円形		P31
	P17	E13・E14・ F13・F14	0.68	0.59	0.43	円形		P32
	P18	E13・E14	0.65	(0.43)	0.21	楕円形	N-75° -E	P33
P-69	E4		0.43	0.4	0.26	円形	縄2	
P-128b	E9		0.57	0.38	0.3	不整円形	N-28° -E	<128> 黒1、加E1、小片1
P-128c	E9		0.63	0.42	0.56	楕円形	N-14° -E	
P-128d	E9		0.56	0.38	0.6	楕円形	N-18° -E	黒1、加E1、称1、堀1、小片2
P-128e	E9		0.93	0.60	0.42	不整円形	N-8° -W	
P-138	F11		0.45	0.43	0.08	円形	<137・138> 黒1、無1、小片4、石器1	
P-140	F11		0.58	0.55	0.16	円形	黒1、小片1	
P-141	F11		0.81	0.61	0.22	不整円形	N-7° -E	
P-142	F11		0.48	0.31	0.16	不明	N-45° -W	黒2、縄1
P-145	F10・11		0.5	0.39	0.24	楕円形	N-76° -E	加E1
P-146	F11・G11		0.73	0.5	0.16	楕円形	N-43° -W	黒4、小片4、石器1
P-151	F11		0.4	0.3	0.16	楕円形	N-51° -E	黒1
P-152	F11		0.4	0.34	0.14	円形		称12、無1、小片3、石器2
P-153	F11		0.44	0.39	0.18	円形		
P-161	F11		0.36	0.28	0.14	楕円形	N-84° -W	黒2
P-166	F11		0.4	0.27	0.28	楕円形	N-41° -W	堀1
P-167	F11		0.4	0.32	0.12	楕円形	N-65° -E	
P-169	F11		0.29	0.29	0.12	円形		
P-170	F11		0.36	0.24	0.24	楕円形	N-36° -W	

出土遺物凡例

黒	黒浜式、加E	加曾利E式、称	称名寺式、堀	堀之内式、縄	縄紋のみ、条	条線文、無	無紋の縄紋土器、小片	縄紋土器小片
---	--------	---------	--------	--------	--------	-------	------------	--------

3. 縄紋土器

概要と整理の方法

横倉遺跡から出土した縄紋土器は総数 14,346 点である。縄紋時代の遺構内覆土からも一定量出土しているが、遺構外の包含層部分からの出土が大半を占める。調査区内からまんべんなく出土しているという調査所見を記せるが、古墳時代以降の遺構構築や植林・竹林や広葉樹の影響等もあって、必ずしも良好な状態とは言いがたい。プライマリーな包含層状態であったところは調査区内でも東側の斜面の一部に限られる。とりわけ台地平坦面、調査区西側では包含層も薄く、表土直下でローム漸移層となる部分が多い。層準では表土からも多く縄紋土器は出土しているが、ローム面より上位の「包含層」(第8図Ⅱ・Ⅲ層、第49図2・3層)から出土している。極めてまとまった集中地点のようなところはみられていないが、調査区北西隅部分(台地西側新4号近く)等比較的破片がやや多く集中するところもある(第49図)。つまり感覚的な所見ではあるが、包含層内で遺物集中の粗密があることが確認され、このことが集落内の遺構配置・遺物廃棄位置・布置関係を考える上で重要な視点となる可能性がある。

また縄紋時代以外の遺構覆土からも縄紋土器が多く出土している。とりわけ古墳周溝覆土、地下式坑覆土、土壘盛土中等からは、遺構に関わる土量が多いこともあって、遺物の出土はかなり多い。また古墳墳丘下では縄紋時代の土坑が幾つか確認されたが、この確認に至る面までの間(古墳旧表土～包含層中)で一定量の縄紋前期遺物が出土しており、当該期の包含層と捉えることができよう。

土器の整理としては、まず水洗注記後に遺構別、地点別および型式別に分類した。地点では調査区を大きく3つに分け、台地平坦面の調査区西側をゾーン①、調査区中央台地平坦面～斜面にかかる位置をゾーン②、調査区東側の斜面部分をゾーン③とした。後にも触れるが、縄紋前期の遺物はゾーン②に多く、③でやや多量、中期は①・②でやや多量、後期は②・③で多量という傾向がうかがえた。とりわけ後期堀之内式期の土器はゾーン③で目立っており、住居跡 SI-76 の位置でもある斜面部が当該時期における活動域であったことを示している。一方、明瞭な遺構は捉えられなかったものの、中期の活動域が台地平坦面にあることも示されよう。

土器の分類では、型式分類を行いながら、接合および図示すべき土器の選別を行った。選別に際してはできるだけ遺跡の特徴を勘案し、型式・細別時期・系統・器種を代表するような典型例と共にやや異質な例が漏れないように選別した。型式毎・地点毎の傾向等については別表を参照されたい。調査区包含層全体でやや多い型式を大まかに示すと、黒浜式、加曾利 E I 式後半～同Ⅱ式、称名寺式新段階、堀之内 1 式、同 2 式(古・中段階)である。加曾利 B 1 式以降晩期までの土器は認められていない。他に少数認められたのは、草創期後半(早期)撚糸紋系、早期条痕紋系、前期後半浮島式、前期末～中期初頭の土器、中期前半阿玉台式である。後述する縄紋時代の石器や土製品等も概ね上記型式に伴うものと考えられる。

なお土器資料の提示に際し、各 1 点ずつの詳細な観察結果は示し得ないが、注目される資料をはじめ、図や写真で表現し得ない特徴等を可能な限り記述する。また施文手法や文様の種別等に注目した細別型式以上の細分類はし得ていないが、図版配列の中で系統、類型、器種等に注意して版組みを行い提示している。

ゾーン①の土器

草創期～前期の土器(図版五六)

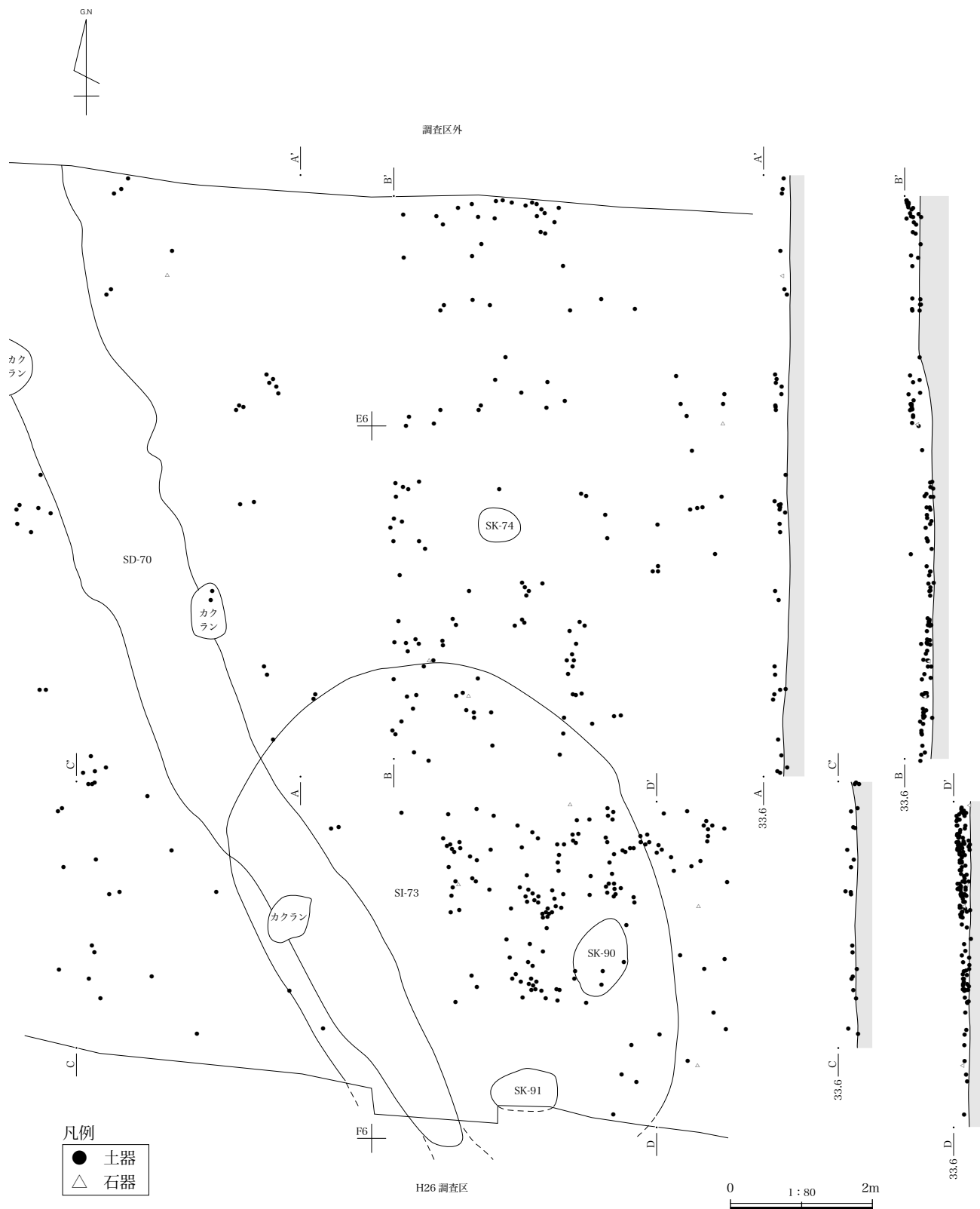
第 51 図では草創期後半(早期)～前期の資料を示した。このゾーン①における早期・前期の資料は少ない。1・2 が撚糸紋系の土器で、やや硬質かつ石英をやや多く含む特徴がある。原体は 2 が撚糸紋 L、1 は不鮮明

D3、D4c グリッド



第 49 図 ゾーン①遺物出土状況図 (1)

D5d、E5b・d、D6c、E6a・c グリッド



第50図 ゾーン①遺物出土状況図(2)

で不明である。3～7は早期後半条痕紋系の土器だが、文様部分は確認できず、細別型式は判断できない。3～7はいずれも表裏面とも条痕だが、多くが貝殻ではなく木口状工具によるものと推定される。厚手で繊維を多く含む。7の条痕はかなり浅い。

8～22は前期中葉黒浜式である。軟質な質感、暗い褐色基調で繊維を多く含む特徴がある。有文破片は少なく(10)、縄紋原体のみ確認される破片が殆どである。原体末端ループ(12)、擦糸紋(18・19等)が確認される。23は前期後半浮島式で、貝殻複縁による施文が確認される。石英を多く含む点も特徴となろう。

24～26は縄紋のみ確認されるもので、灰色基調で繊維は含まずやや厚手であること等から、前期末～中期初頭の可能性が考えられるものである。24は縦方向の結節も確認される。他の地区出土の中期初頭例と類似しており、この時期と推定した。27～30はゾーン①内で平成26年度調査区出土の資料である。27～29が黒浜式、30が縦位の結節が確認される縄紋のみ施紋の土器で、中期初頭が推測されようか。

中期の土器

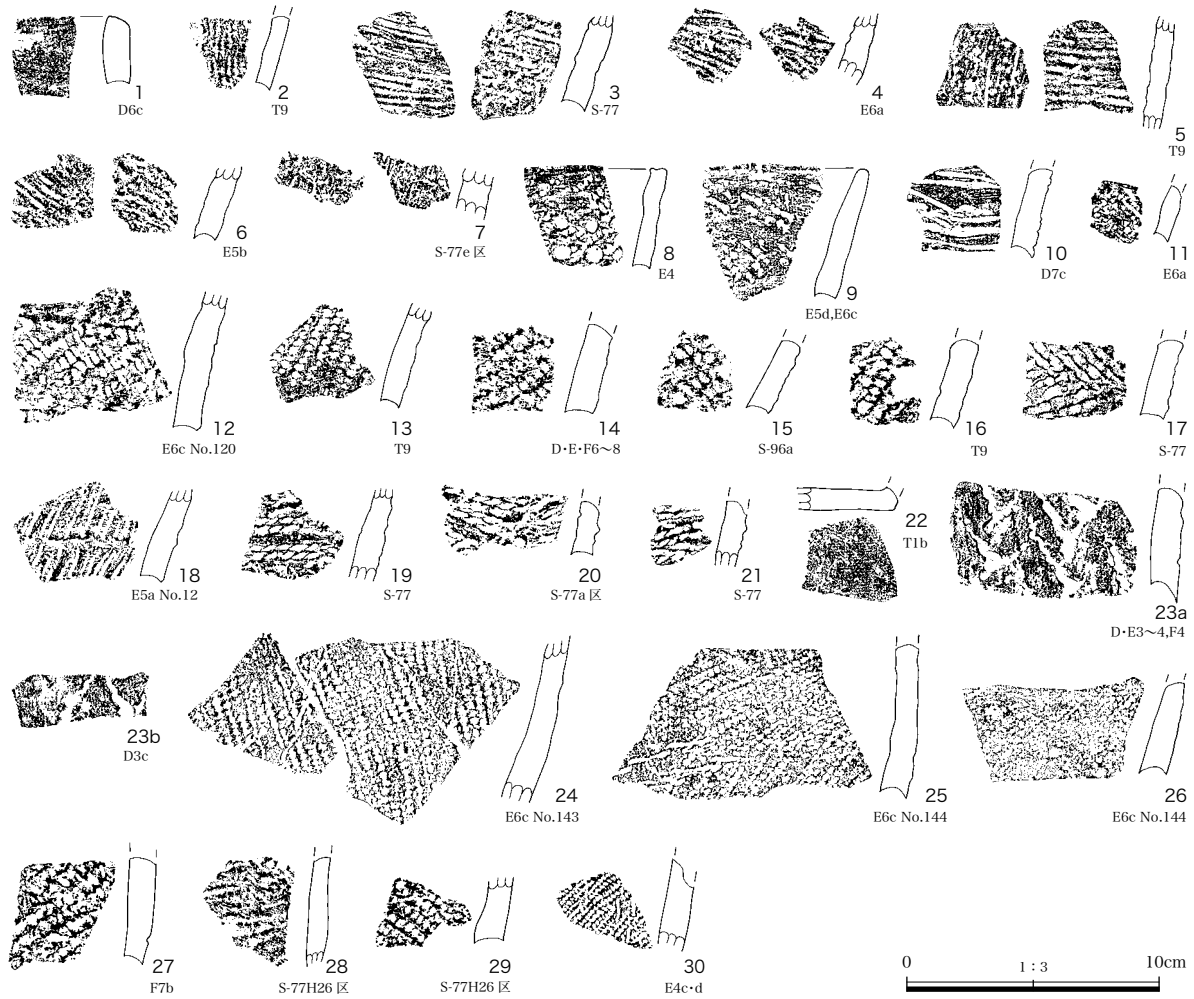
第52・53図には中期前葉～後葉の資料をまとめた。原則的に口縁部および口縁部文様を有する破片を第52図に示した。勝坂式・阿玉台式の資料は殆ど無く、刻み列や隆体上の刻み、隆帯上縄紋がある第53図1・2・6、交互刺突文がある第52図1等も加曾利EⅠ式期に入るものと推定する。

加曾利EⅠ式口縁部文様をみると、地縄紋上に渦巻文および渦巻文間の長方形～長楕円形的な区画文が、隆帯およびこの脇の沈線で描かれるものが多く、加曾利EⅠ式新段階～同Ⅱ式に相当するものが主体となる。第52図3・4はクランク状表現の系統、この他やや異質なものとしては、口縁直下から縦方向の縄紋の条がある第52図30、やや幅広い口縁部文様が推測される33等がある。小片が多く全体の形状は不明だが、頸部無文帯を擁するものは少ないようで(35)、口縁部文様帯直下から体部文様が展開される例が多いようである(第52図40・41、第53図6・8)。

体部文様は縄紋地上に懸垂文・蛇行懸垂文が多く描かれる。2本沈線で体部文様が描かれ、この間が丁寧にナデ消される例はあまりみられない(第53図14等では部分的)。第53図14は小渦巻文が曲線的な文様構成の間に配されており、大木8b式文様とも言い得る。やや薄手で硬質な感があること等、やや他とは異なる。第53図20・21は上記までの例と大きく異なり、大きく磨消縄紋無文部が描かれるもので、おそらく加曾利EⅢ式となろう。沈線→縄紋→無文部ミガキの工程が観察される。第53図22～26は鉢・浅鉢である。22のみ外反系、内外面ともよく磨かれている点は、一般的な加曾利EⅠ式鉢と同様である。26は内面にやや高く突出する受け口状の帯状部を有しており、やや異質である。第53図28～35は平成26年度調査区から出土した加曾利EⅠ式で、32がやや幅広い口縁部文様帯内に沈線を充填する特徴的なものである。全体に口縁部文様に沈線充填例が少ないことは、寺野東遺跡例等との比較・引き算から、細別時期の限定性が捉えられる可能性があり注意される。

称名寺式(図版五九)

第54～67図には称名寺式をまとめた。このうち、径を復元し得た個体を第54～57図に示す。称名寺式の古い部分・中位の部分はほぼみられず、加曾利EⅠ式系のもの(加曾利EⅤ式)についても古い様相を示すものは無い。一方、主に第68図以後に示す堀之内Ⅰ式は変化が連続的で、区別の困難な例も多い。体部小片はもとより、口縁部破片等でも判断の迷う例、検討を要する例があるが、当初の分類を基本的に踏襲する図版の提示とした。具体的な例を示せば、第59図1・2、第67図3等の例は称名寺式の文様構成から大きく異なっており、堀之内Ⅰ式と判断すべき例となろうか。綱取式系も区別が難しい(第60図15、第61図22等)。



第51図 ゾーン①遺物実測図(1)

第54図1はやや大形口縁部破片で、帯状部内に列点が施されるものである。内面のミガキが丁寧で、また外面では列点が施される外側帯状部が良く磨かれている。列点はやや疎らで垂直に近い刺突のところもある。緩い波状縁の頂部には横S字状の凸部とこれに沿う沈線・刺突が施される。鋤先状文の一部で描き直しがみられることも特徴的である。

第54図2は、やや小形薄手で明るい色調(明褐灰色)の土器である。口縁端部の突起からやや右側に下がった位置にある環状凸部までの間に沈線が施されている他、頂部より左側にも沈線が加えられている。体部はくびれ部より下位に斜行する2本の沈線がある以外、摩滅が著しく文様は判然としない。

第54図3は大波状縁突起を擁する大形破片で、薄手で色調はにぶい黄褐色を呈する。胎土には白色粒をやや多く含み、内面のミガキ調整は丁寧である。口縁端部の沈線・刺突施文後のミガキも丁寧である。口縁端部の沈線は突起の左側のみ施文されている。口縁下の文様部では、2本沈線間で若干調整の粗い部分と幾分磨いている部分とで帯状部の効果を示しているようにも見える。沈線自体は浅い施文であるが、帯状等分割構成は維持されているように見える。第54図4の大形破片は、口縁部文様が特徴となるもので、沈線は比較的深い施文である。第54図5は頸部で屈曲し、主に体部下半のみ文様が描かれる系統の土器であろう。口縁部の突起周囲および左側一部のみ沈線が描かれるが、この屈曲する口縁部自体は下位に比べ良く磨か

れている。第 54 図 6 の破片は、浅い沈線施文が確認されるが、文様構成は不明なものである。破片左下にみえる部分は J 字文の先端部となろうか。第 54 図 7 はやや大形の破片 3 点から径の復元を試みたもので、浅い沈線（半截竹管状工具による平行沈線部分と 1 本描き部分とがある）と刺突による文様表現が認められる。刺突は口縁下から直線的に垂下する 2 列の部分および、波頂部付近の密集部が確認される。内面は削りに近い調整で、外面もやや粗いナデ～ミガキ調整である。

第 55 図 1 はやや大形の口縁部破片 2 点で、胎土は緻密で重量感がある。沈線は比較的深い施文である。2 は幾つかの破片があるもののあまり接合せず、全体の文様構成は不明なものである。列点は比較的深く明瞭で、この列点充填の帯状部は調整がやや粗く、この外側帯状部が丁寧なミガキ調整となっている。文様表現は全体にやや縦長構成となるようである。3 の土器も近い性質が観察されるが、2 に比べやや薄手で、沈線がやや深めとなっている他、色もややくすんだ灰色基調で異なる。拓影で示した破片では上下逆で示したのものもあるかもしれない。4 は口縁部一部の破片で全体の文様は不明だが、内外面に刺突を伴う円形浮文が隆帯に接して付されており、特徴的な土器である。

第 56 図 1～5 は体部のやや大形破片で、径の復元をなし得たものである。1 の列点は細長く、この充填帯状部でも列点が無く隣接帯状部と同じミガキ調整がなされているところも観察される。3 の列点はやや幅広で浅く、この部分での粗い調整が隣接帯状部のミガキと対比的効果を生じている。5 は沈線のみで表現されているもので、やや浅く雑な施文である。沈線施文後のミガキは殆ど確認されない。胎土に石英・白色粒を多く含む点も特徴となろうか。

6 の体部下半～底部破片では、内面での焦げが顕著に確認される他、外面でも煤の付着が少量認められる。沈線はかなり浅い施文である。7 は幅の狭い 2 本沈線に縄紋充填が確認されるもので、底部付近での L 字状に閉じた構成はかなり異質であり、異系統の可能性をうかがわせる。但し、胎土や調整では、やや白色粒を多く含むものの、さほど異質な感は受けない。9 は比較的薄手の土器で、立ち上がり角度からすれば鉢のような器形あるいはかなり大きな深鉢の下半と推定される。石英・白色粒・雲母をかなり多く含む胎土も特徴的である。

第 57 図には称名寺式の口縁部破片をまとめた。縄紋充填例は少なく（1～4）、列点充填例が多くを占める。

5 は口縁直下から縄紋が施されておりやや異質である。2 本沈線による帯状部意匠表現を基本とするが、かなり乱れている表現例もある（20・24 等）。

第 58 図には沈線間列点が無いものや、突起の類いをまとめた。突起は波状縁波頂部の表側に稜線を有し、内面側の平らな円形となる部分に刺突およびこれを連繋する円弧状沈線が描かれている例が目立つ（10・11・13～15）。称名寺式後半から堀之内式にかけて、この C 字状沈線が側面や表面側に移行し、口縁部文様帯の沈線に変化してゆく様相が捉えられているが、本遺跡でも適例ではないが確認される（第 54 図 3・4、第 68 図 29・30 等）。第 60 図の上位にもこの種の突起を示している。大形破片が少なく不明な部分も多いが、大きく上方に突出する突起を有するものは、強く屈曲する頸部を有し、口縁からこの頸部区画線までを無文とする系統のものも多いようである。

第 59 図には列点をランダムに施すもの、沈線のみによる帯状部意匠表現が描かれるもの等を示す。第 59 図 1 は帯状部も無く、意匠も典型例からはずれ、列点充填もランダムで交互充填の原則からも逸脱している等、かなり異質な表現例である。同図 3 等のように、比較的標準的な表現である称名寺式の銚先状モチーフが確認されるものもある。9 では縦長の乱れた構成、2 のような口縁下区画線から意匠不明なモチーフが描かれるもの等、時期としては堀之内 1 式と考えた方が良さそうな例も多い。



第52図 ゾーン①遺物実測図(2)

第 60 図の 13～24 はいわゆる綱取式系の口縁部文様を有するものである。第 61 図等にも同種の土器群を示す。いわゆる加曾利 E V 式系の口縁部文様との区別も困難であるが、直線あるいはノの字状や C 字状に垂下する隆帯上に、円形刺突とこれを連繋する沈線を伴うものについては「綱取式」の表現例と認められようか。第 60 図 16 はやや異質な土器で、垂下する山形状の波頂部隆帯の両脇に、逆方向 J 字状の意匠がやや太めの沈線で描かれる。

第 61 図に示した諸例は、殆どが頸部隆帯以下にモチーフを持たないもので、縄紋施紋 (1)、条線施文 (5・7・10 等)、粗く磨かれた無文 (21・22 等) 等の例がある。形態的にはほぼ垂直もしくはやや外傾して立ち上がるものが多いが、若干内湾するものもある (5)。内傾するものは、両耳壺の可能性もある。

第 62 図には鉢鉢以外の器種をまとめた。第 62 図 3～9 は両耳壺の突起部分で、幅狭の例が目立つ。この報告中で両耳壺の大形破片・復元個体はない。データとして示し得ないが、称名寺式全体量からすれば、両耳壺の数が寺野東遺跡等と比較してかなり少ない点は注意される。おそらく称名寺式中段階土器群の少ないことが、この両耳壺の量比にも表れているのであろう。第 62 図 10 以下 26 までの破片は鉢または注口付き鉢で、ここでも堀之内 1 式に含めるべきものを示している可能性がある。28 はかなり歪みのある形態で、ひさご形注口土器の口縁の一部か。30～33 は小形の鉢?、27 はねじれ状の凸部がある棒状の破片で、釣り手の一部の可能性があるであろう。型式も異なる可能性がある。35 は磨消縄紋のある破片で、球形に近い壺や注口付きの可能性が考えられるが、判然としない。

第 63～67 図は称名寺式の体部破片を示す。ほぼ口縁部破片と同種の分類群が確認される。带状部の意匠表現例で磨消縄紋の破片は少なく (第 63 図 1～19)、列点または沈線間無文のままの破片が多数を占める。無文の場合でも調整の違いで带状部を表現している例もある (第 66 図 36 等)。加曾利 E V 式～綱取式系の頸部隆帯部分、あるいは意匠を微隆起線で表現する第 63 図 21～35 のような例も確認されるが、量的には少ない。第 63 図 43～45 は列点充填の幅の狭い带状部で文様表現がされるもので、これも称名寺式終末期にしばしばみられる表現例である。

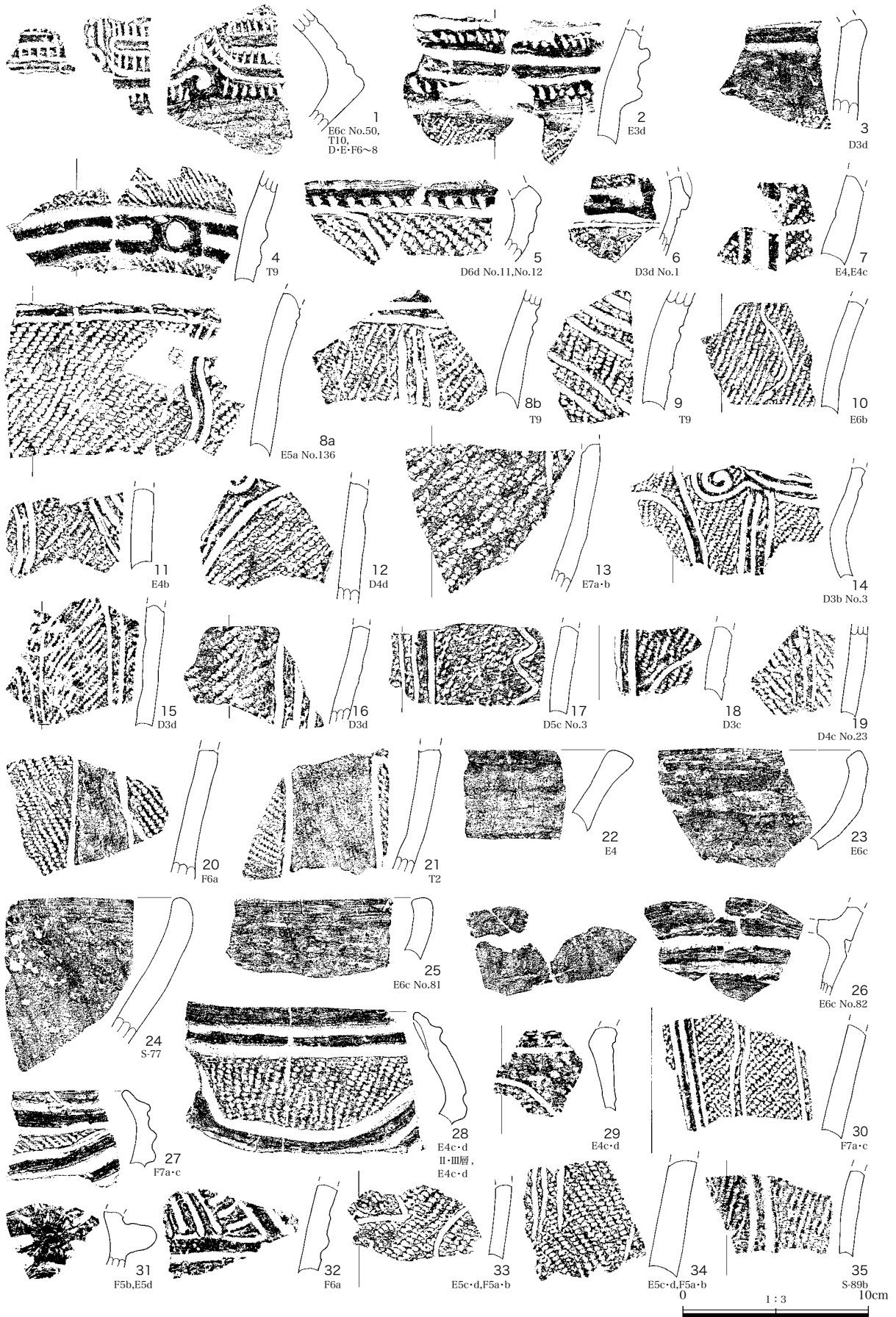
短い条線充填例もある (第 65 図 22～26)。第 65 図 14・19 等は列点がランダム且つ密に充填されるもの。同図 28 もこの例で、交互充填の原則も守られていない。20 は細かい刺突が充填され、おそらくは狭い带状無文部での文様表現がなされるもので、堀之内 1 式になるかもしれない。第 65 図 31～34 は細かい刺突のみ確認される破片で、31・32 等は器形も含めて考えると三十稲場式、あるいはそれと関わる土器と推定される。

沈線のみ表現例 (第 66・67 図) も多種多様な文様群が確認される。J 字状や渦巻文モチーフをうかがうことができる破片もあるが、R 字状モチーフ等がかなり乱れた形で描かれる第 67 図 1～3、また格子目状沈線の第 67 図 23 等はこの地域の称名寺式末～堀之内 1 式の特徴を示している。また沈線の描き方をみると、称名寺式古～中段階で多くみられる幅の広い沈線、あるいは反復施文による深い施文例はかなり限られ、浅い沈線、先端鋭角な工具による沈線表現等が目立っていることも確認される。

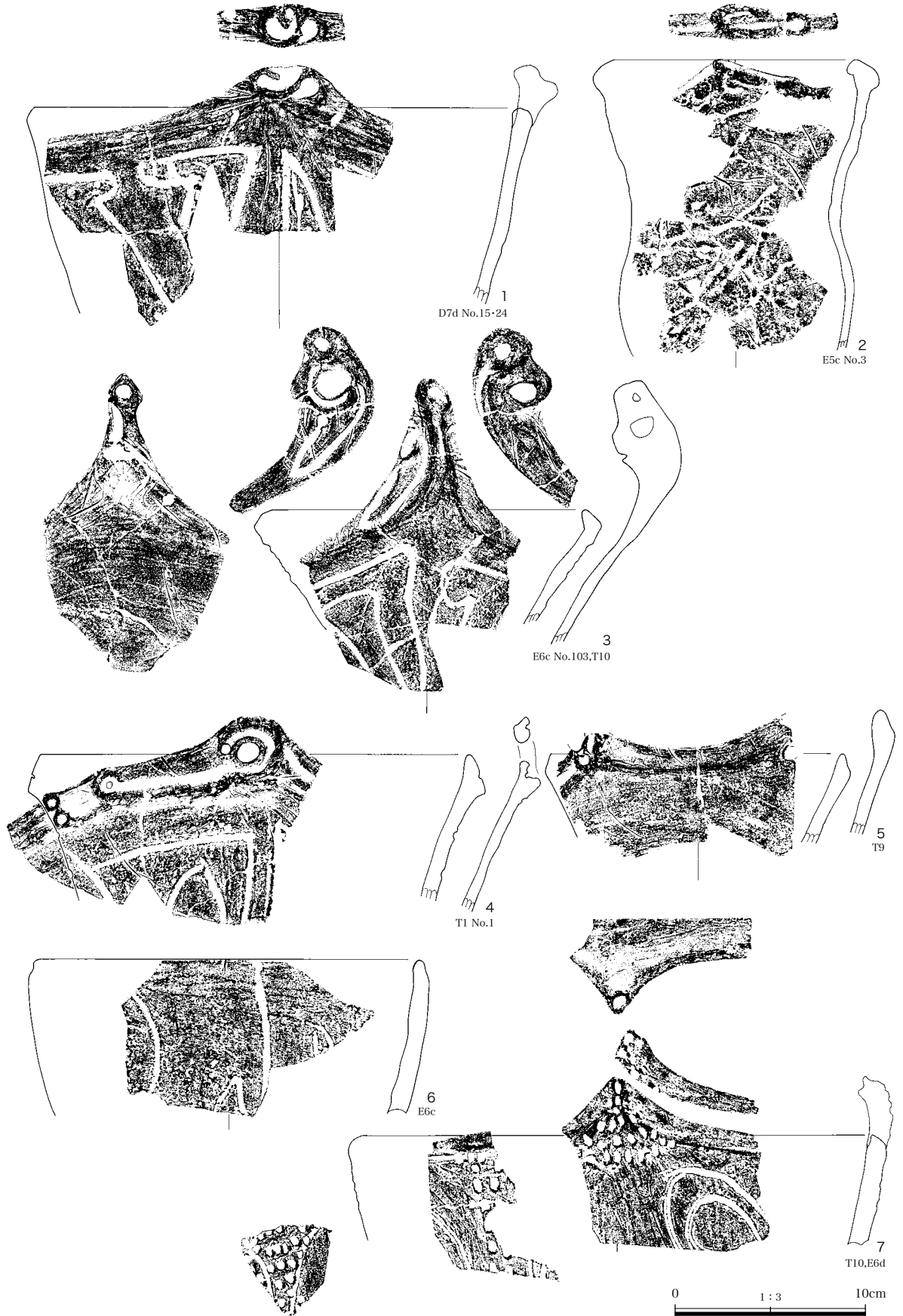
堀之内式

堀之内 1 式の口縁部破片を第 68・69 図に、同式の体部破片を第 70・71 図に、堀之内 2 式破片を第 72 図に示す。称名寺式の項目でも説明したように、相互の区別が難しいものも多く、ここで図示したものでも称名寺式との判断に修正すべきと考えている破片もある。

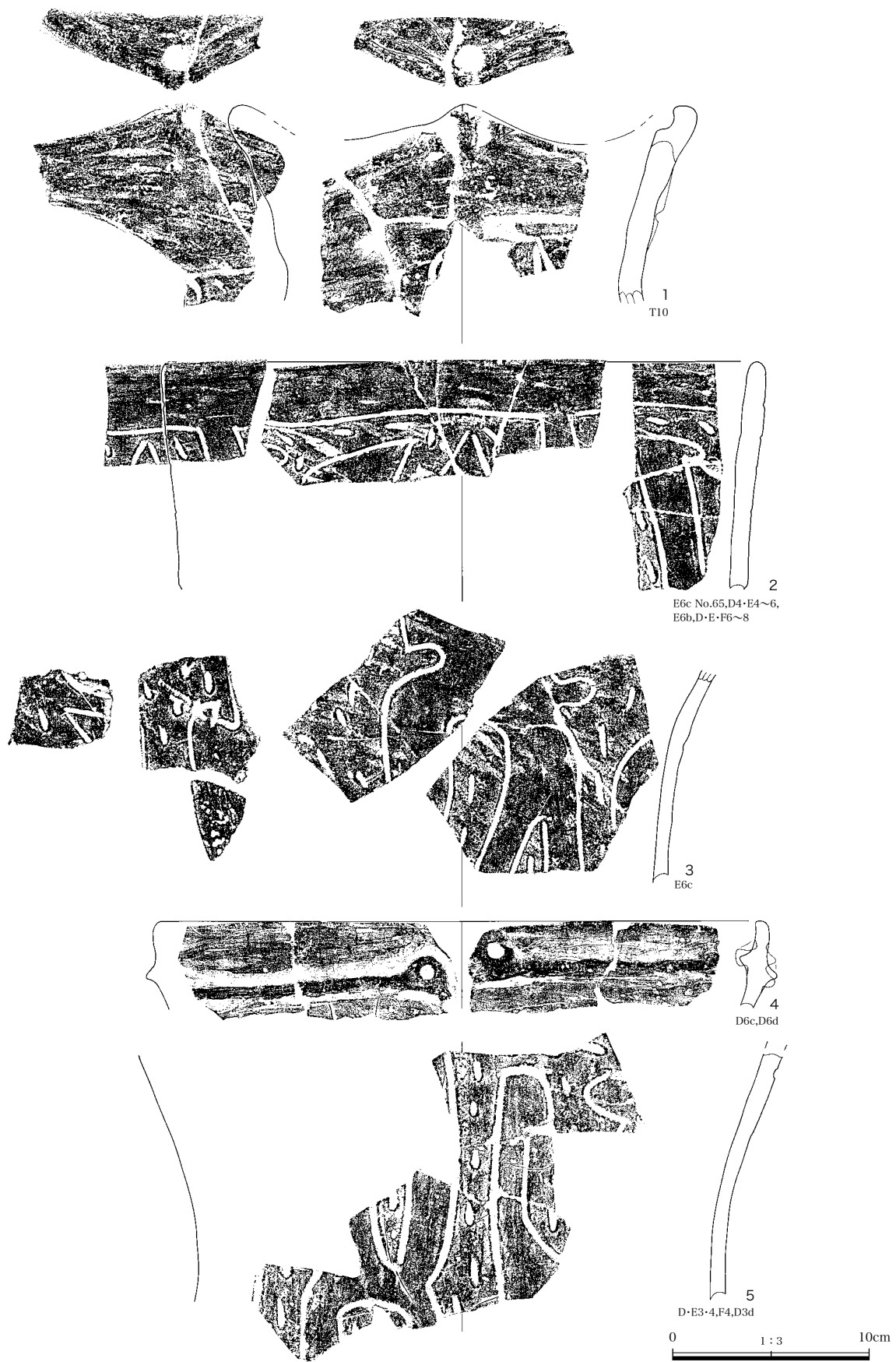
綱取式系の口縁直下～頸部隆帯までを無文とする第 68 図 2・4 のような系統、口縁部に沈線・刺突等の文様を有し、頸部区画線までを無文とするもの (第 68 図 6・9・16 等)、口縁部沈線のすぐ下から懸垂文等の



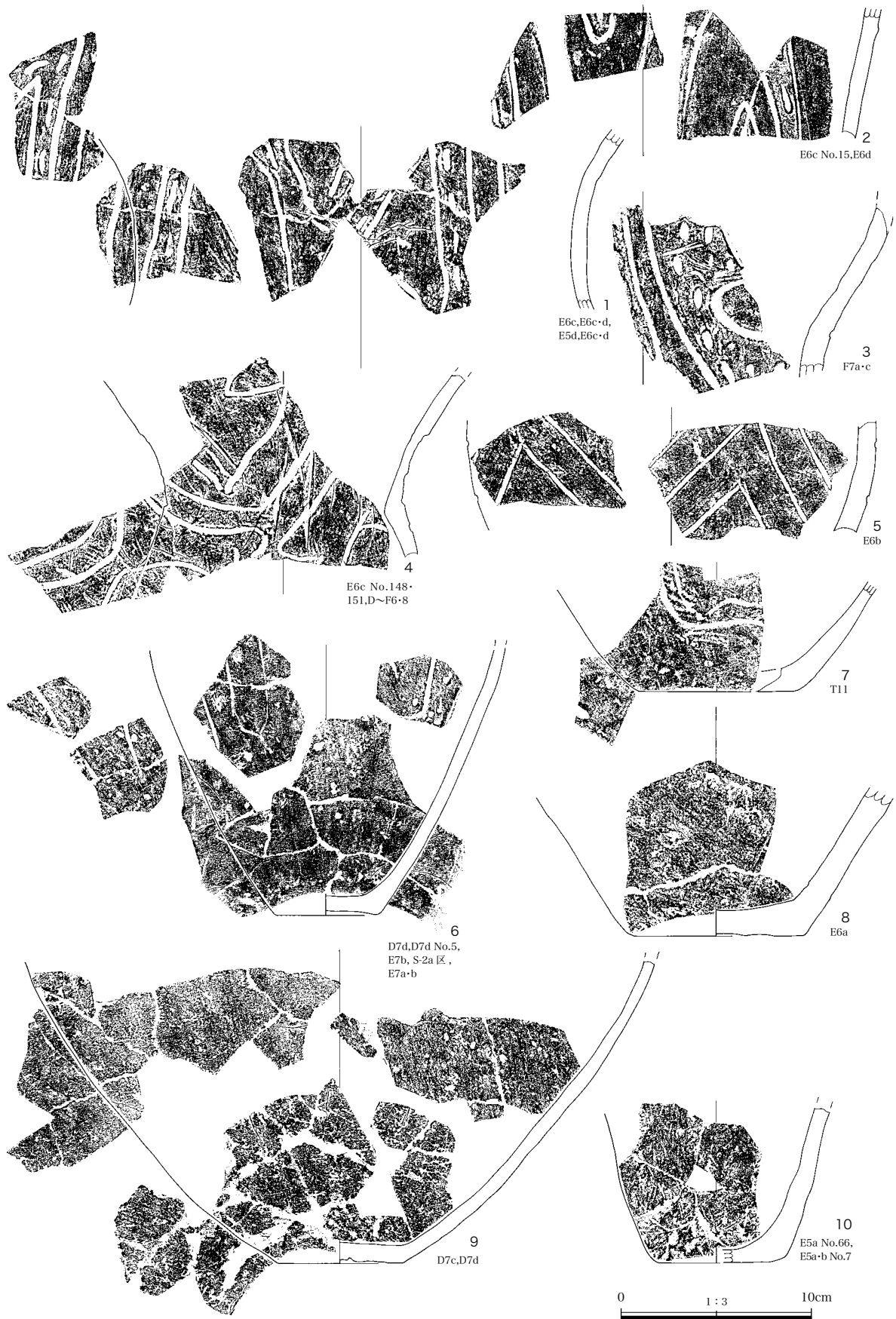
第53図 ゾーン①遺物実測図(3)



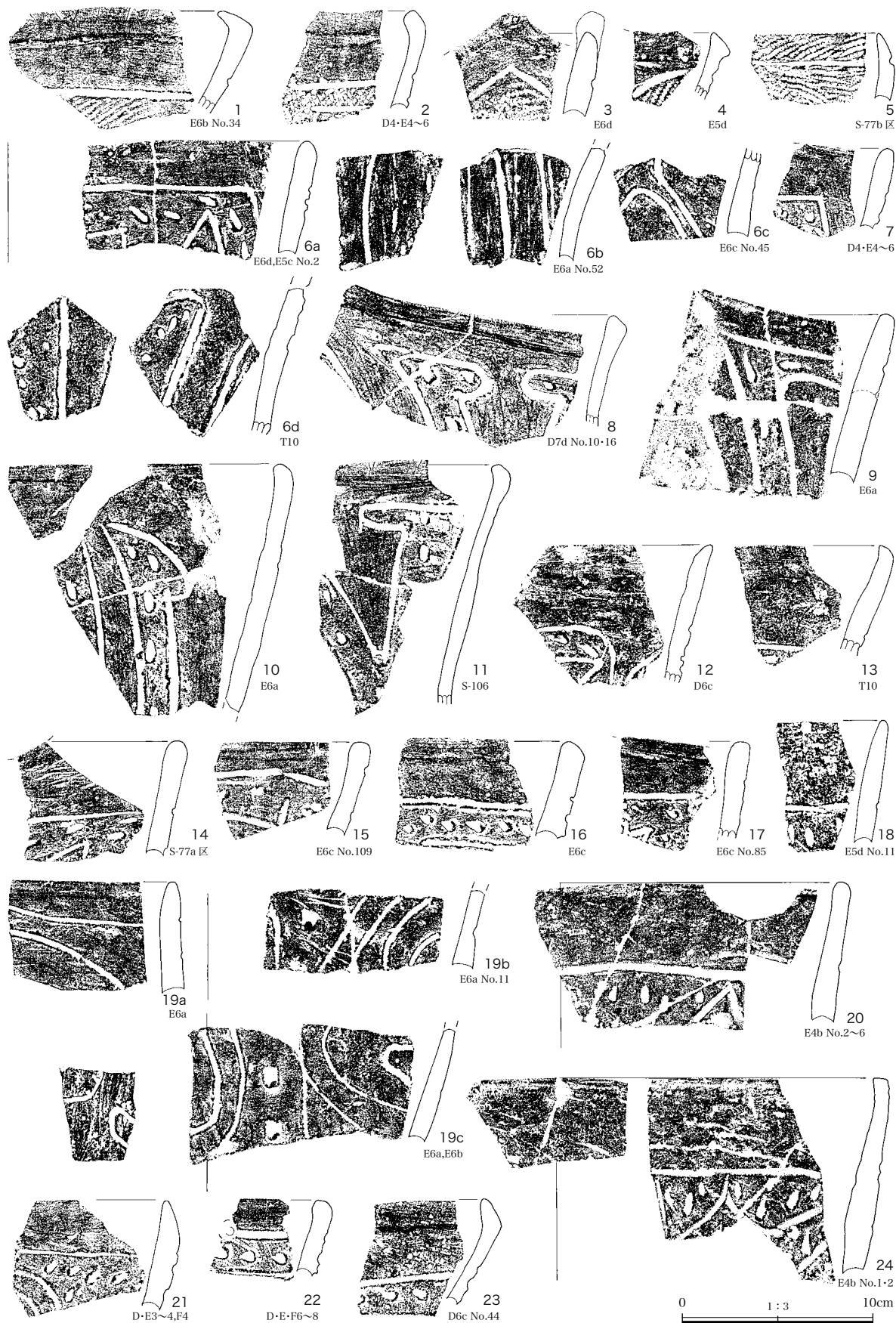
第54図 ゾーン①遺物実測図(4)



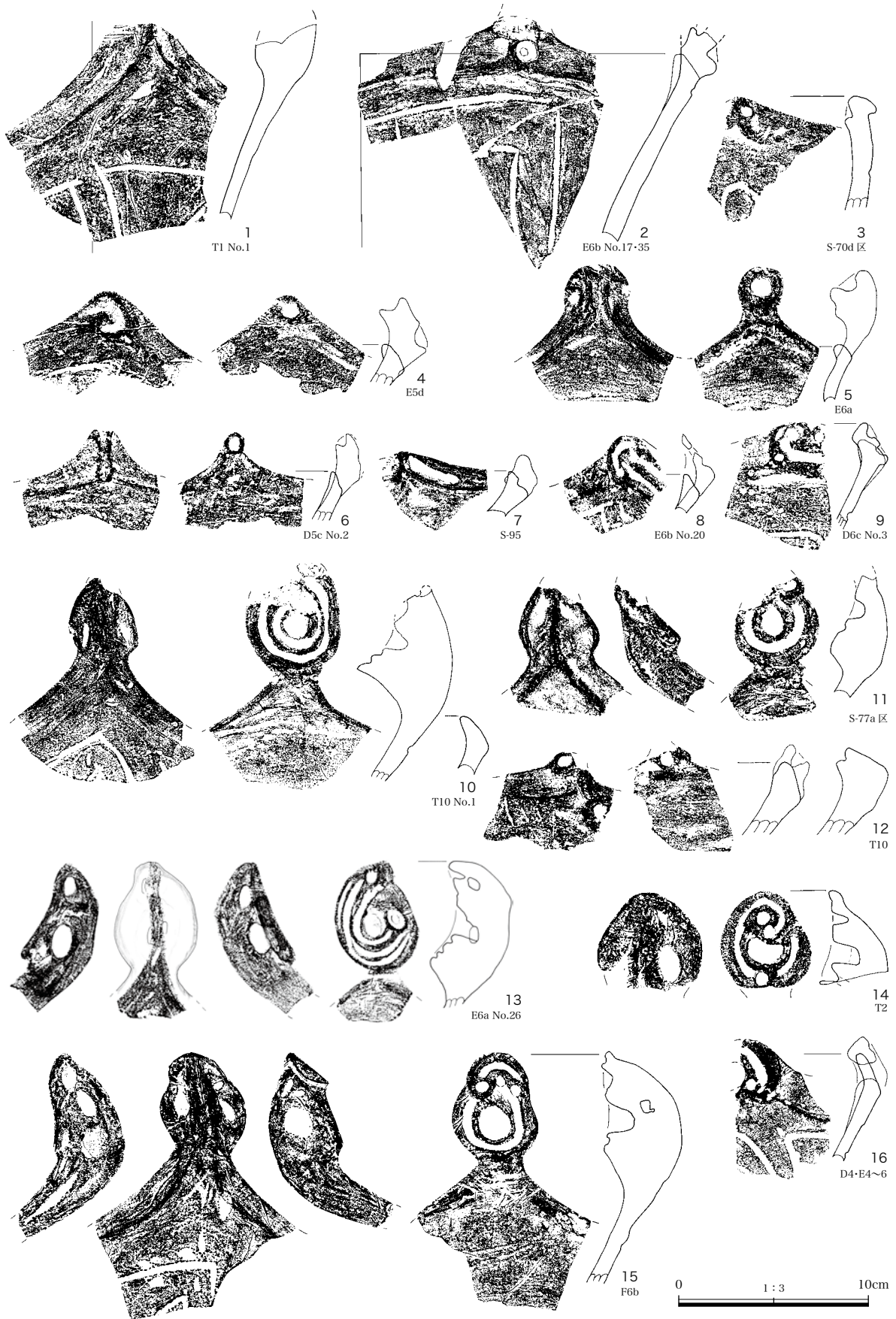
第55図 ゾーン①遺物実測図(5)



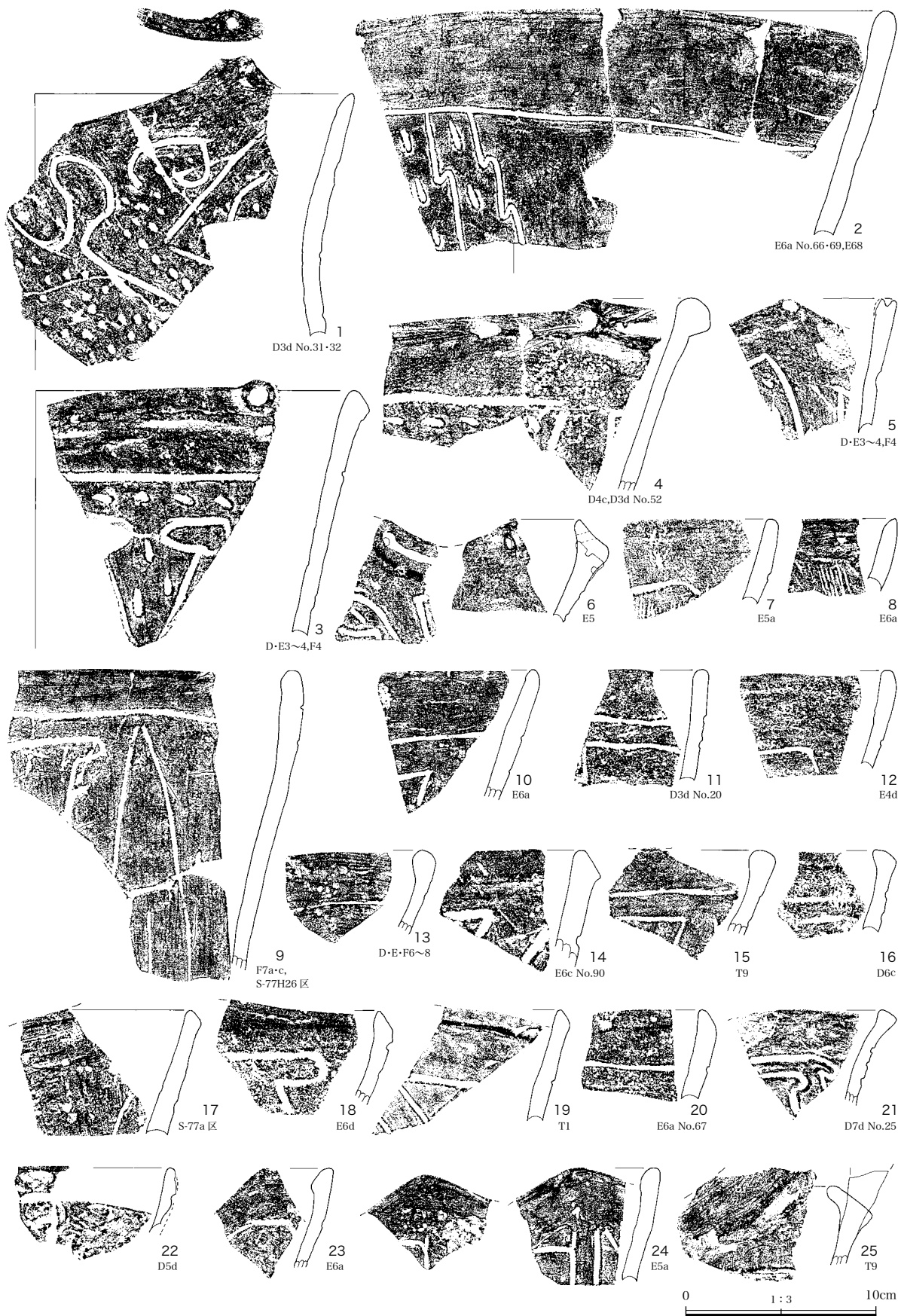
第56図 ゾーン①遺物実測図(6)



第57図 ゾーン①遺物実測図(7)



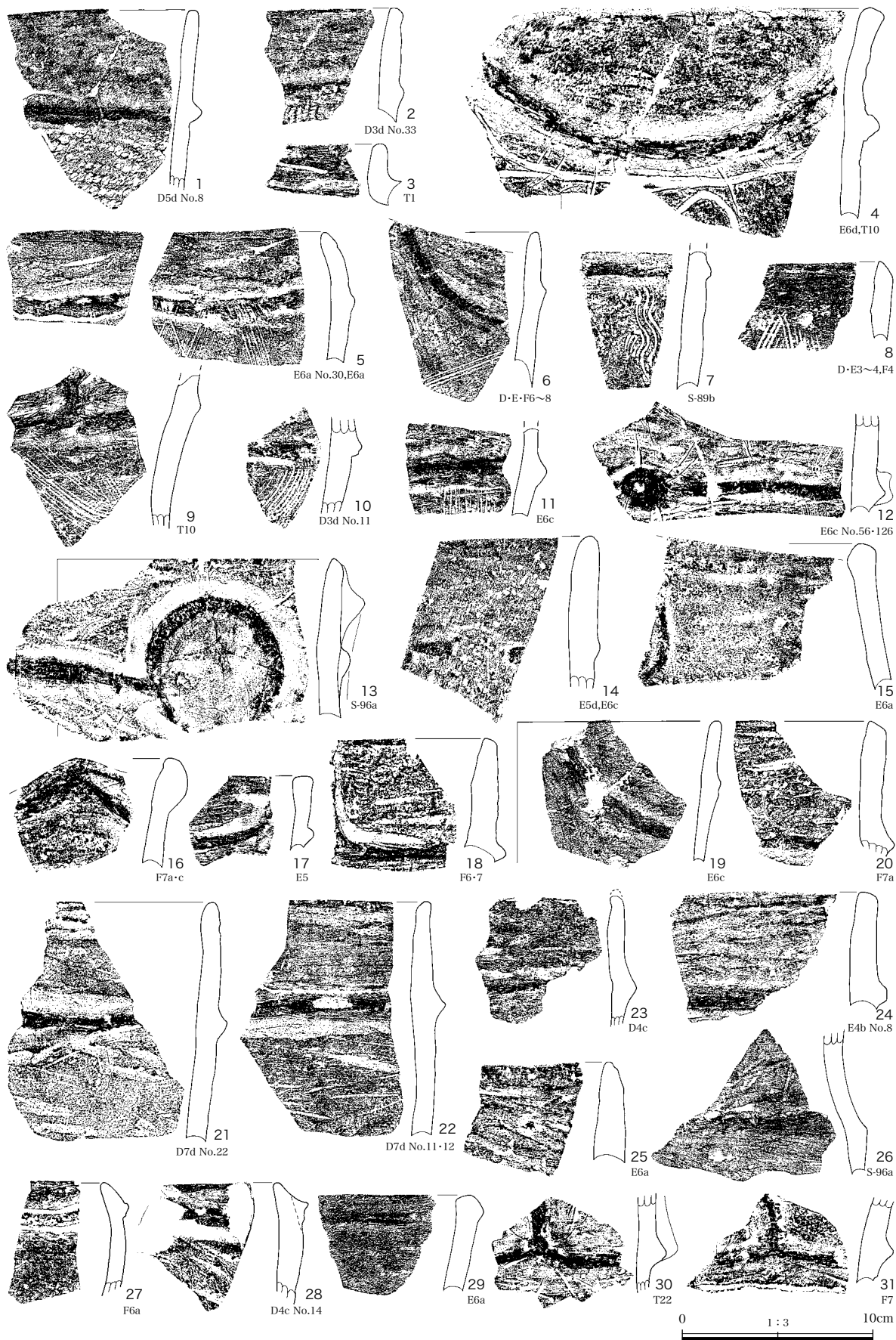
第 58 図 ゾーン①遺物実測図 (8)



第59図 ゾーン①遺物実測図(9)



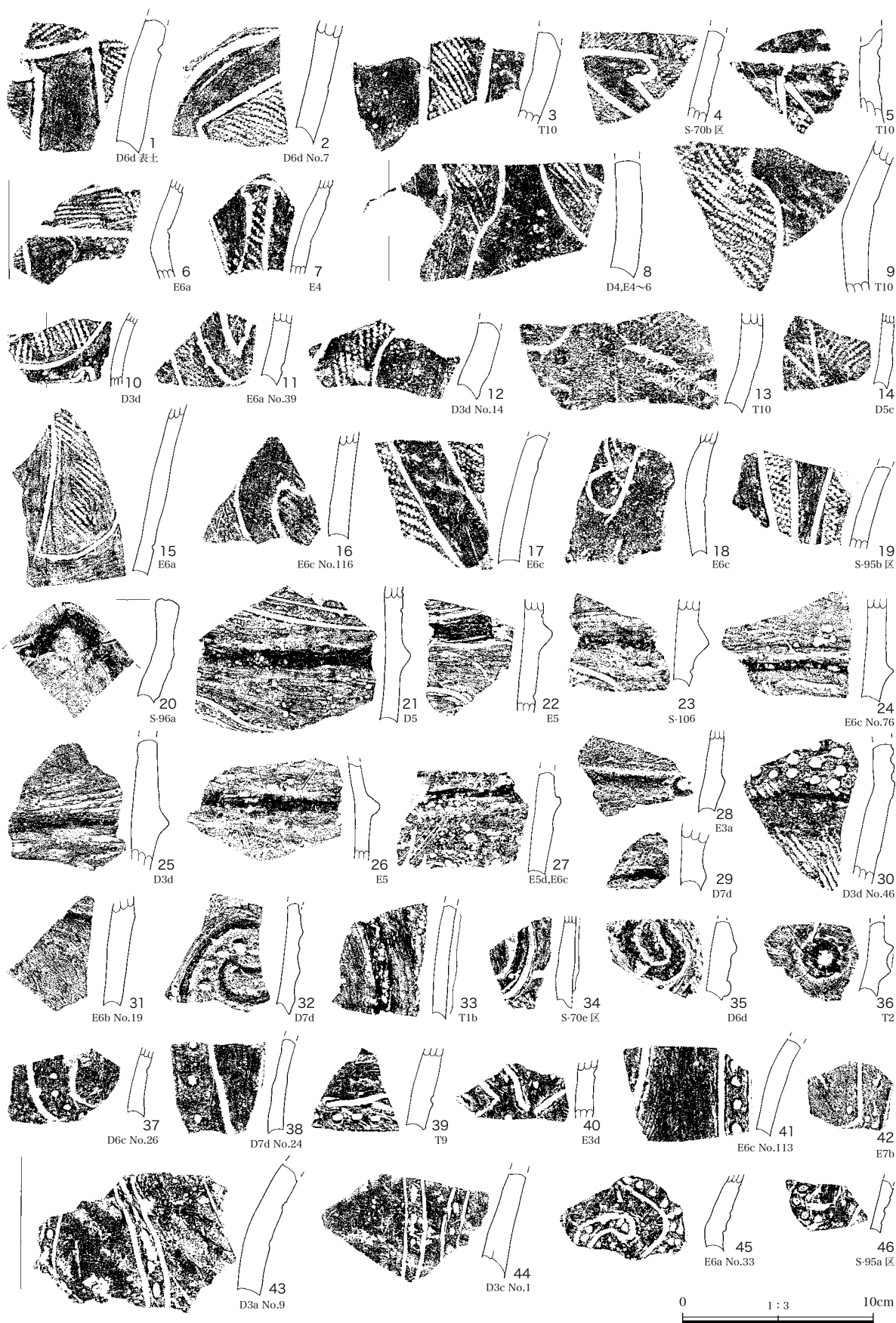
第60図 ゾーン①遺物実測図(10)



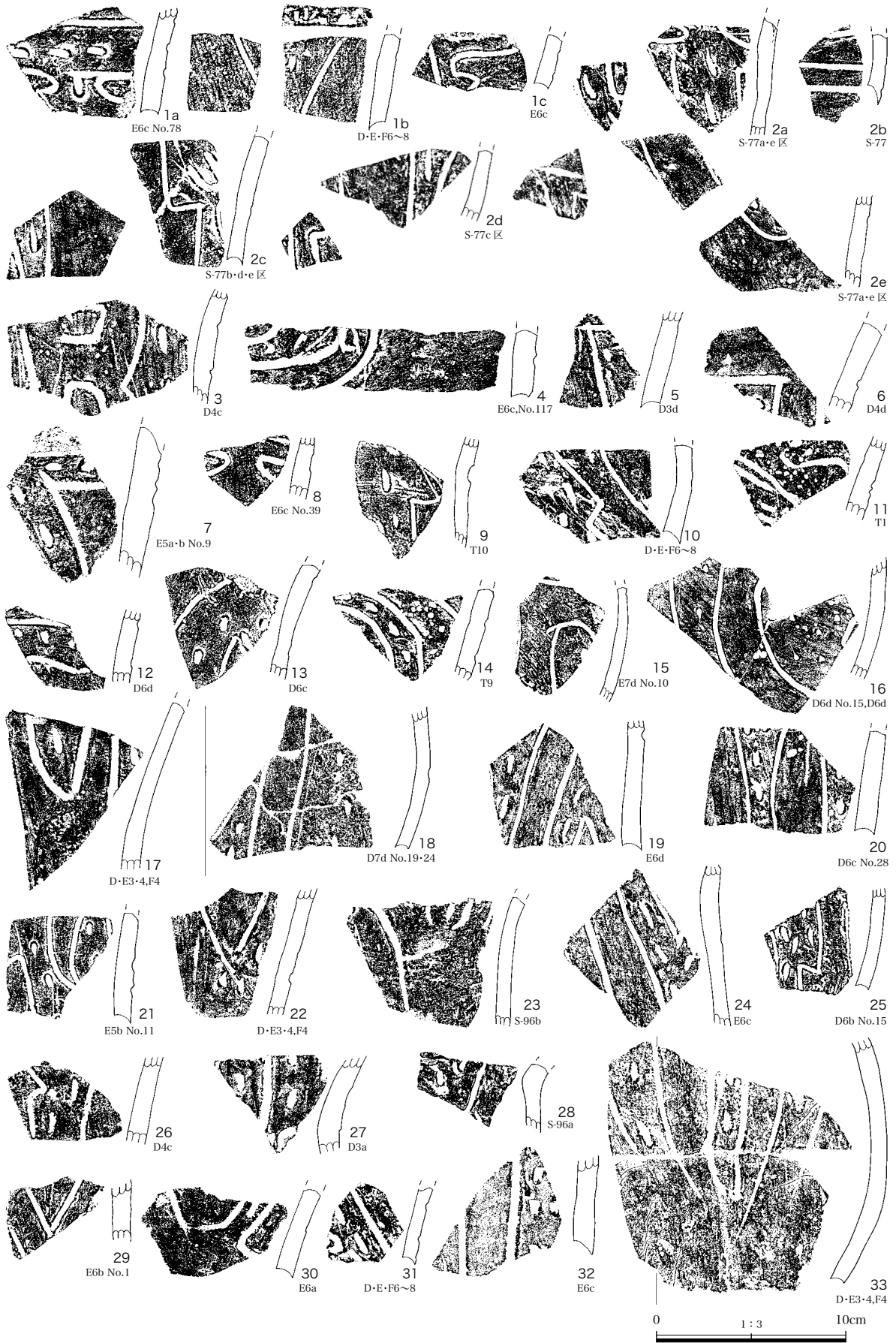
第61図 ゾーン①遺物実測図(11)



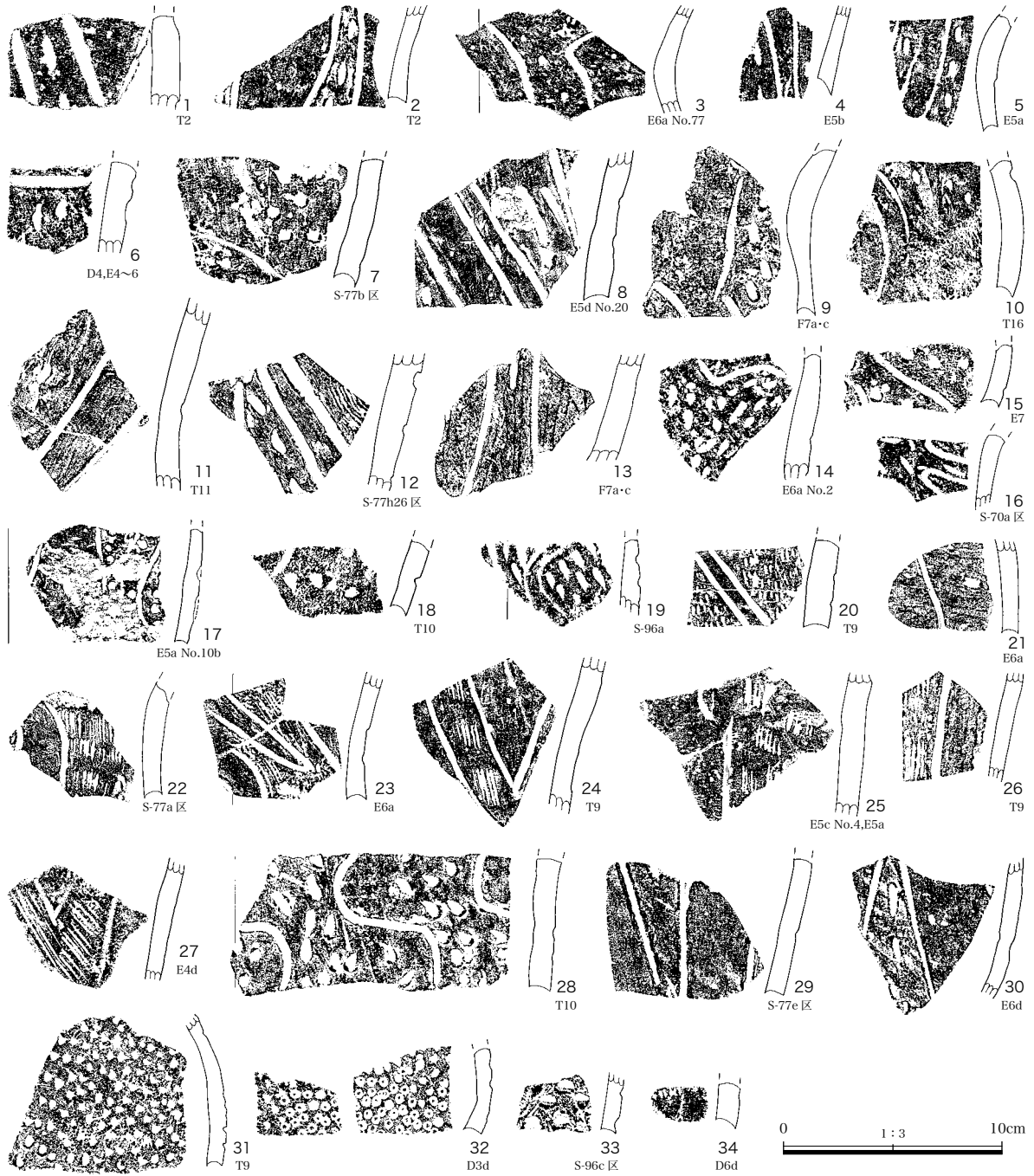
第62図 ゾーン①遺物実測図(12)



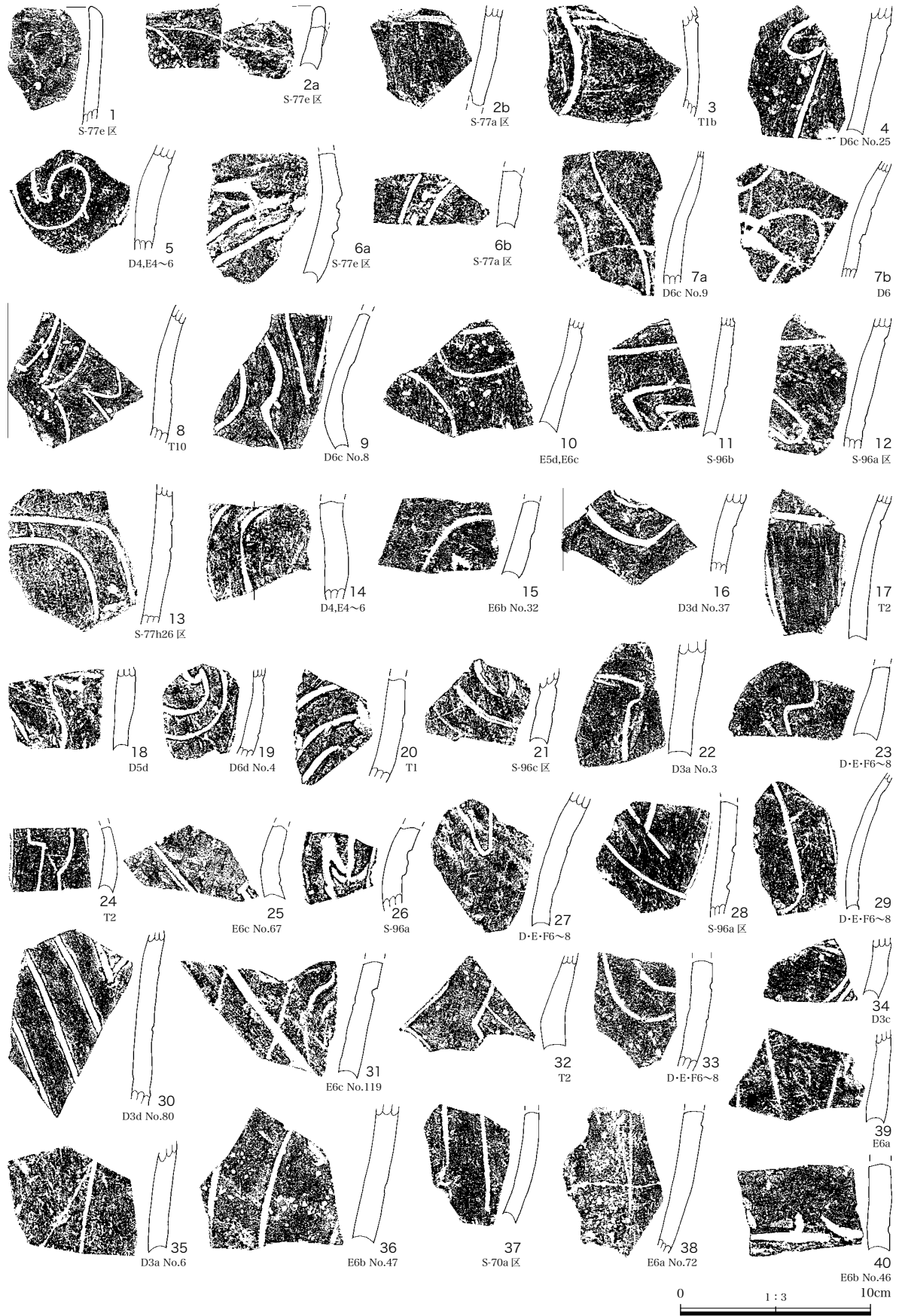
第63図 ゾーン①遺物実測図(13)



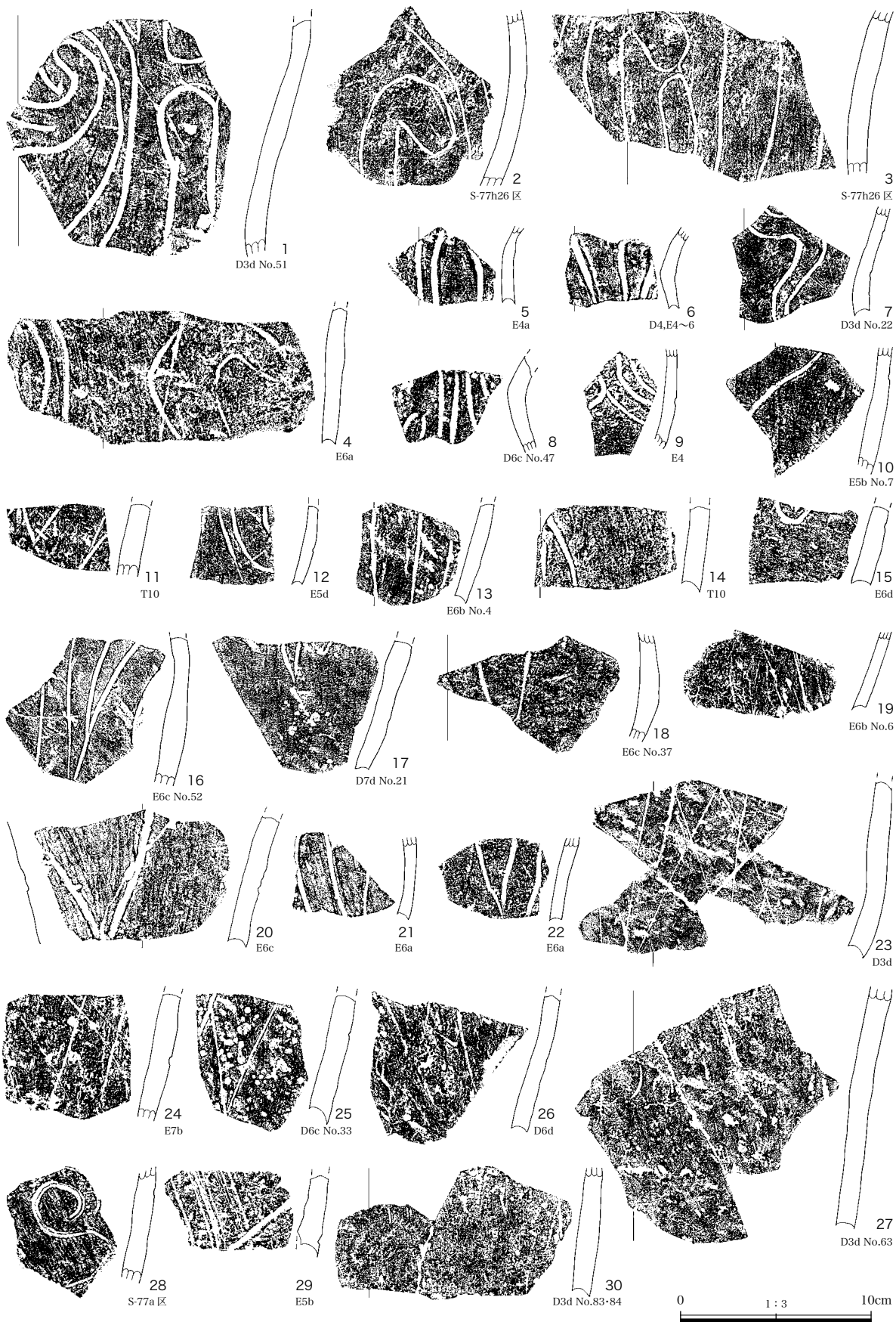
第64図 ゾーン①遺物実測図(14)



第65図 ゾーン①遺物実測図(15)



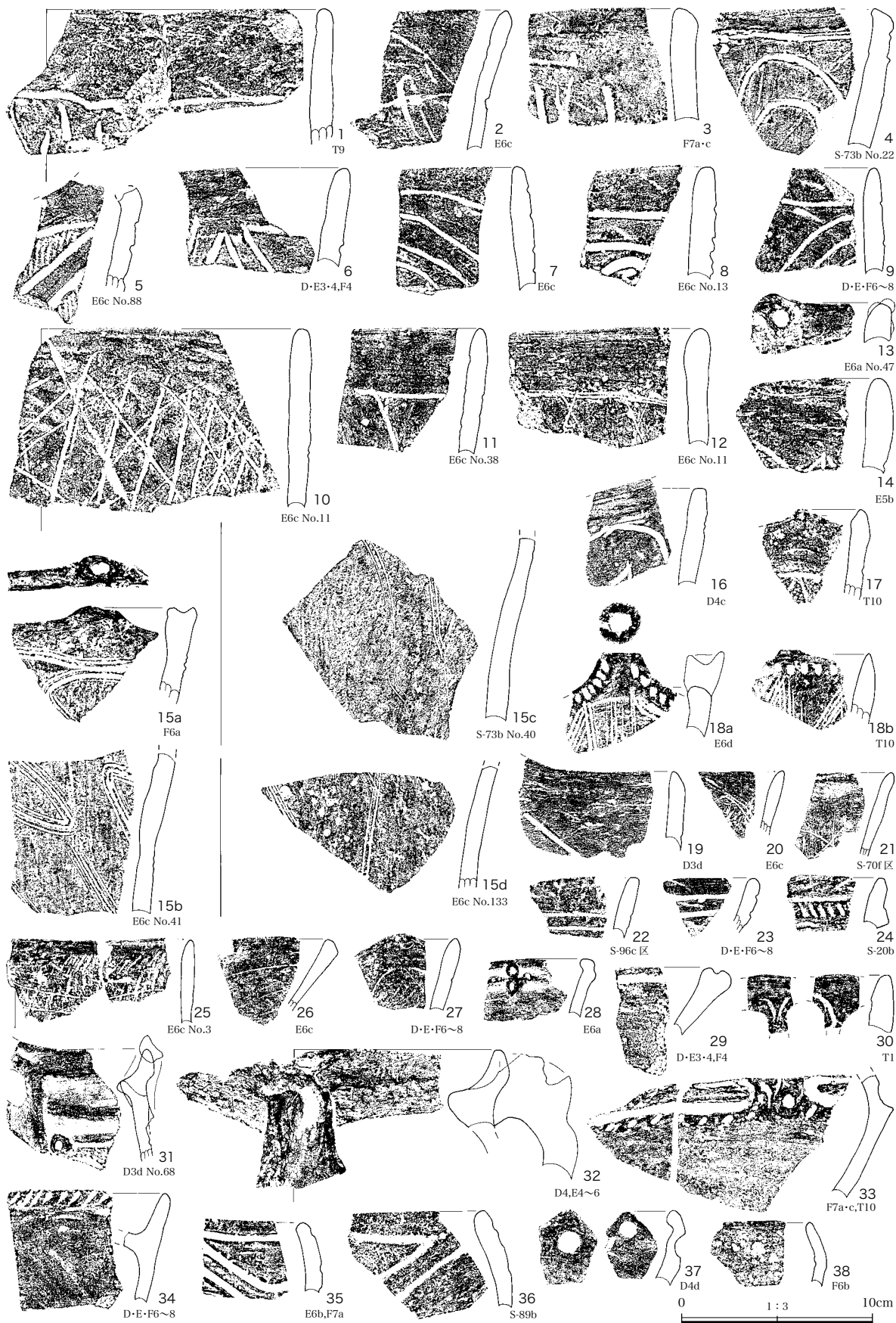
第 66 図 ゾーン①遺物実測図 (16)



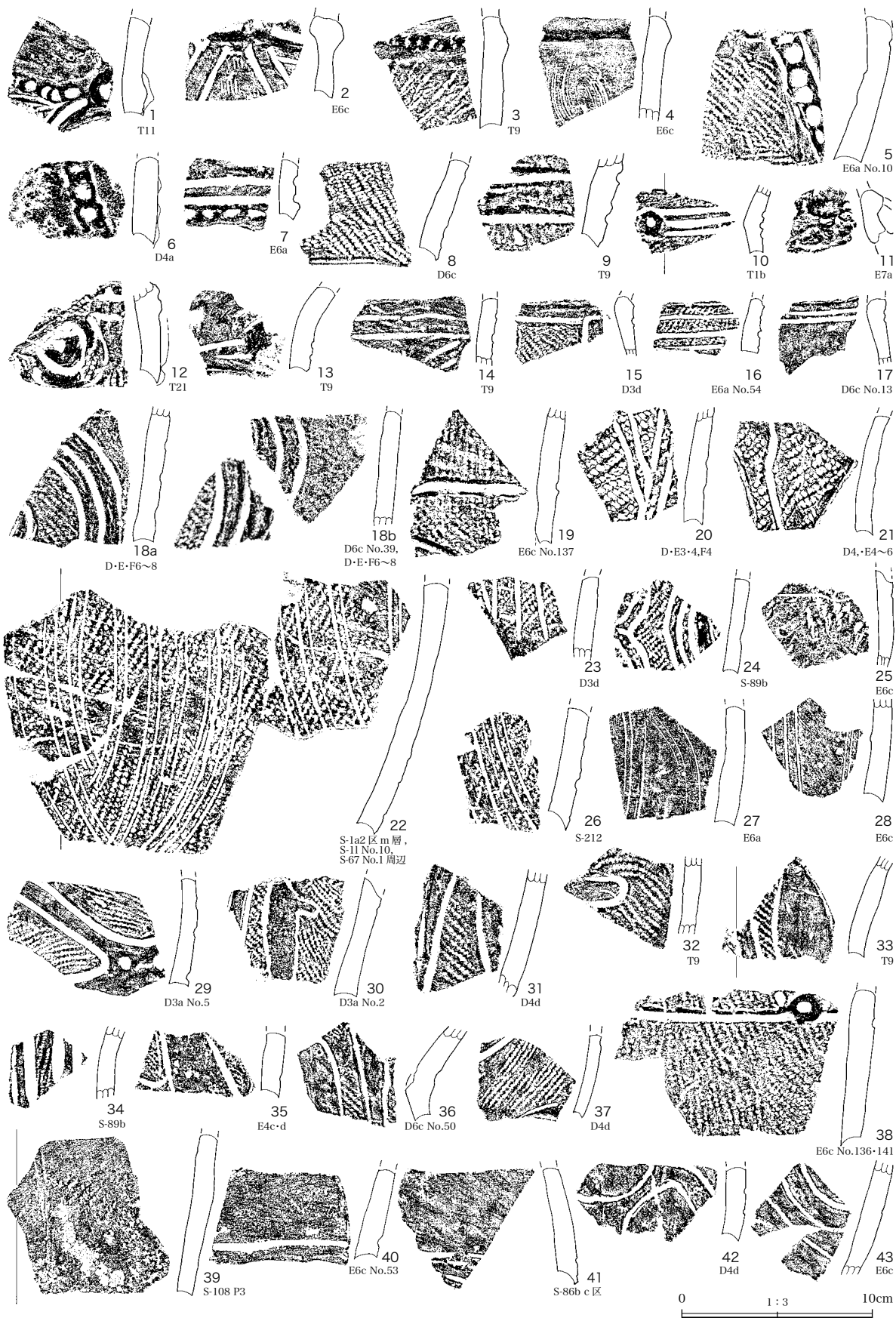
第67図 ゾーン①遺物実測図(17)



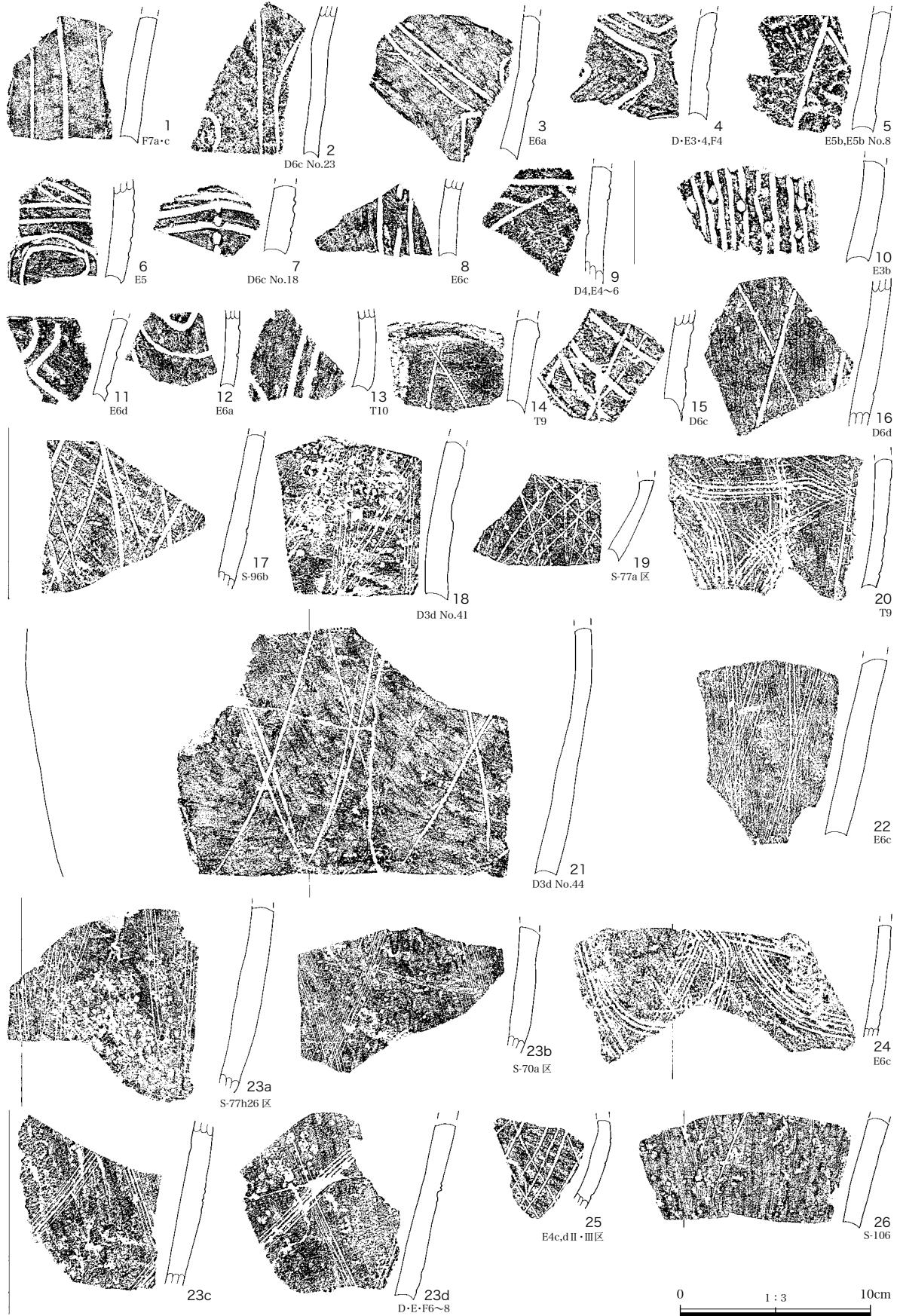
第 68 図 ゾーン①遺物実測図 (18)



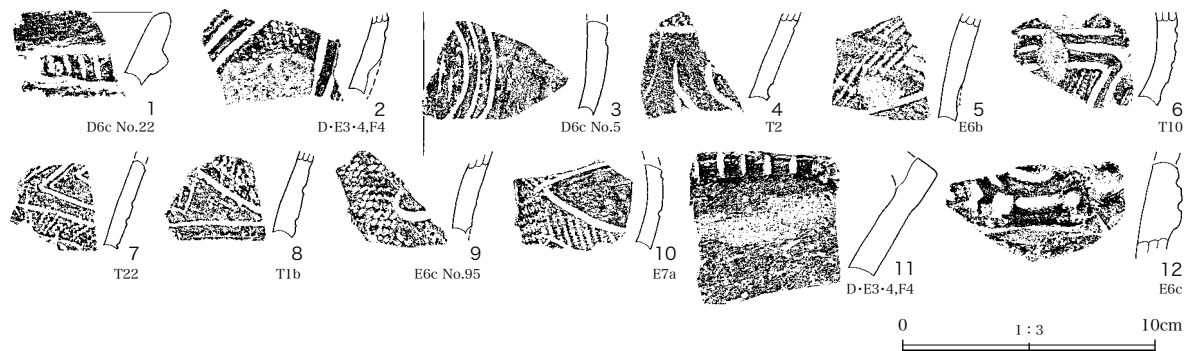
第69図 ゾーン①遺物実測図(19)



第70図 ゾーン①遺物実測図(20)



第71図 ゾーン①遺物実測図(21)



第 72 図 ゾーン①遺物実測図 (22)

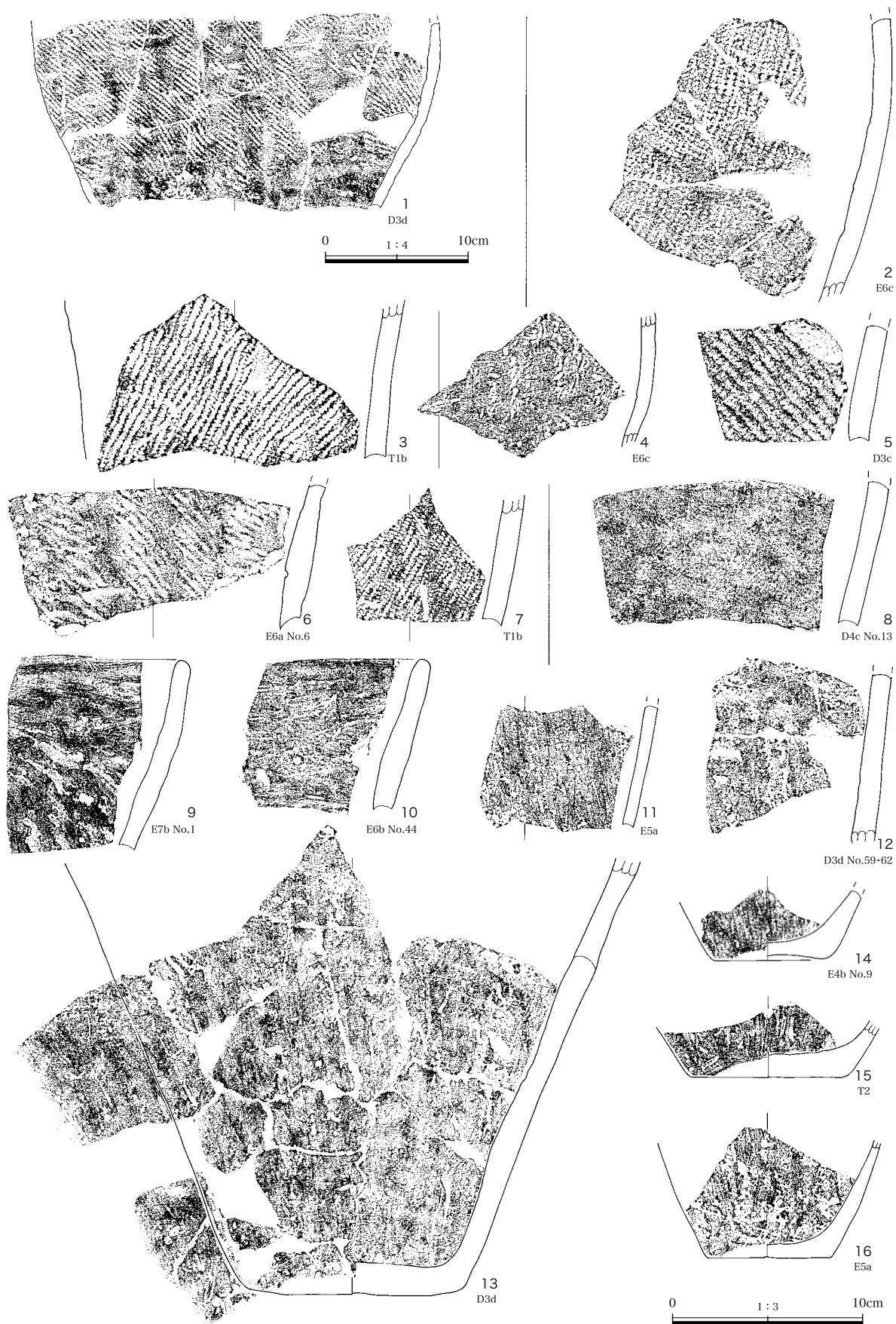
体部文様が展開するもの (第 68 図 32・33 等)、口縁部横位区画沈線下に格子目文、斜行文等が描かれるもの (第 69 図 1～12・15) 等が確認され、概ねこの地域の堀之内 1 式を構成する諸類型・系統の土器群が認められるようである。

第 69 図 20 以下はかなり薄手で繊細な沈線による文様が主に施されるもので、縄紋地上に浅い沈線が認められる第 69 図 25・26 等は堀之内 2 式に近似している。同図 31 以下は深鉢以外の器種。31 はひさご形系譜の注口土器でいわゆる「千鳥窪類型」。32 は 4 単位の突起を有する大形の壺形土器、33・35・36 は鉢または注口付き鉢、34 も鉢と推定されるが、口縁直下の刺突列や内面の凸部等やや異質である。

第 70・71 図には堀之内 1 式の体部破片をまとめた。縄紋地上に沈線による文様が描かれるものでは、磨消を伴うもの (第 70 図 18・29・30 等)、多重沈線のもの (22・24 等)、浅い沈線例 (27・28) 等の種別が確認される。明瞭な沈線施文後縄紋充填の 33 をはじめ、多重沈線施文例等、堀之内 2 式とすべき例も含む。第 71 図には、主に縄紋を有さないもので、沈線のみ施文の例と条線施文のものがある。小片が多く沈線例の意匠は多く把握し得ないが、称名寺式系譜の文様 (第 71 図 1・8 等) と、斜行文等の綱取式文様との関わりが推測されるもの (同図 3・4) とがある。条線施文では格子目状の例が目立つが、第 71 図 24 のように、曲線的あるいは定型的な図形意匠ではない表現例も認められる。

第 72 図には主に堀之内 2 式の破片をまとめた。10 のような明瞭な縄紋充填の文様が描かれる例は少ない。11・12 は鉢または注口土器で、堀之内 1 式でもやや古い要素を認めてよいか。

第 73 図には縄紋のみあるいは無文の土器、底部破片等をまとめた。この分類項に含まれる実際の破片出土量はかなり多く、ここでは大きめの破片や特徴的な破片等に限定して示す。縦方向縄紋施文の 1 や 6 等は中期の可能性が高い。一方、粗くやや凹凸を残すようなミガキに近い調整が認められる 9・10 は称名寺式後半～堀之内 1 式に比較的多くみられる特徴を示す土器である。



第73図 ゾーン①遺物実測図(23)

ゾーン②の土器

ゾーン②は調査区中央の台地平坦面で、古墳・中世の地下式坑、近世の土塁・溝等が比較的多く確認されたところであり、古墳墳丘下等一部を除き、縄紋時代包含層としては良い遺存状況とは言えない。他のゾーンと極めて大きな差異は無いが、前期の出土量が比較的多いこと、中期初頭～中期前半の土器が少量だが認められること等は、この区域の特徴とすることができよう。

草創期～前期（図版五六～五八）

第74図1～13が草創期後半撚糸紋系の土器である。縄紋例もあるが(6・7?)、比較的密な撚糸紋施紋例が目立つ。灰色～やや白っぽい色調で胎土に石英等の小礫を含む。2・6・7はやや赤味のある色(にぶい燈色)、3～5は白っぽい色(にぶい黄燈色)を呈している。原体は撚糸Lが主で撚糸Rは2・10・11のみ。7・8は縄紋RLの可能性もあるが判然としない。13は唯一確認されている沈線文系の破片で、横位沈線、斜行沈線、円文?が確認される。14～32は胎土に繊維を多量に含む条痕紋系土器である。総じて厚手のつくりで、明褐色や燈色基調(17・19)と暗褐色系の暗めの色調、あるいはややくすんだ色(にぶい黄褐色、14・24等)の例とがある。文様は確認されず、型式判断は困難である。14は同一個体としたが、a・bの口縁部破片とc～fの体部破片とは別個体の可能性も残る。14～19は表裏条痕、20は表条痕、裏面が擦痕・無文、21・23～32が表条痕裏無文、22が表裏条痕、25は裏面浅い条痕、28の裏面はミガキ、25の裏面は擦痕。26の条痕は細かい線状痕跡で木口状工具による条痕調整のようである。他の条痕も、明らかな貝殻条痕と言えるものは無いように観察される。

第75～79図には黒浜式に分類したものを示す。繊維を多く含み、暗褐色～黒褐色基調、比較的薄手のつくりで、やや軟質な焼き上がりのものを基本とする。有文のものを第75図および第76図の1～10に、以下縄紋原体のみ確認される破片を示す。群類別等の分類項目を設定しての記述とはしないが、原体種別も含めて考慮した版組配列としており、以下概ねこの順で記述する。本来的には有文土器や原体の比率等詳細な検討を必要とするが、横倉遺跡第1次調査区出土土器や、金山遺跡等の周辺遺跡出土の黒浜式と概ね類似する様相と捉えられよう。

有文では沈線を主とし、刺突(～押し引き)列(第75図1・2・16)が少数ある。沈線は横位平行沈線を主とするが、縦位沈線列(11・12)、矢羽根状～米字状(第75図69・第76図1～6)、格子目状(第76図7)、いわゆるコンパス文(第75図21)、弧線文(第75図17)等も確認される。沈線施文は半截竹管状工具による平行沈線施文が多く、1本描きの例は少ない(第75図39?・第76図7?)。第75図15の縄紋は結節、16には線状の粘土が確認される。

縄紋のみ施紋例は、原体の種別による分類をなし得る。配列では若干前後しているが、概ね原体別の分類を示すよう努めた。第76図11～30は撚糸紋施紋例で、2条のRを巻き付けているものが目立つ(14・19・24・27等)。31～53は付加条で、細い1段または0段の原体を、2段の原体に同方向に巻き付けている1種が多い(32～41)。31～33はおそらくLRに0段rの付加、34は0段多条のLRにRの付加、35は不鮮明だが、無節Lに0段r?の付加のようである。49はLR+R、44～52は付加条2種で、やや幅のある1段の付加が目立つ。52はLR+RとRL+Rの羽状構成で、RLは0段多条もしくは前々段反撚りと推測される。付加条軸繩の圧痕(2段単節が主)も比較的明瞭である。53は3種、いわゆる網目状撚糸紋で、1段Rの原体を2方向に巻き付けている。第76図54～69、第77図1～19は結節のものをまとめた。結節の種別には幾つかあるが、不鮮明なものも多い。第77図20～50は末端環付き(ループ)、末端圧痕が

観察されるものをまとめた。多段ループの例は殆どない。単節・無節例が多いが、45～49は0段多条や前々段反撚りの可能性もある。44は直前段合撚である。

第78図1～45は当初単節縄紋としたものをここに示す。但し詳細にみると単純な単節縄紋と共に、前々段反撚りもしくは0段多条例が比較的多くみられる。1～5・11～19のようなLR例と、6～10・32～36のようなRL例とがある。20および34はRLだが、厚手で石英・白色粒・繊維を多く含む。内面ナデ調整だが、早期末～前期初頭の可能性もある。31は前々段反撚RLLである。45は二種原体の施紋例。40は繊維が少なく薄手でやや他と異なる。46以下は無節縄紋と分類したが、0段多条や前々段反撚りの可能性も残る。最終段R(46～50・52～55)、L(56・58～64)両者がみられる。51はLとR両者がみられるが整った羽状を呈してはいない。57は条が深く明瞭であり、単節の可能性もある。本図中の土器では、全体的にやや明るい燈色に近い色調例(17・33等にぶい燈色)が多いが、18・19のようににぶい黄褐色の例も少数ある。

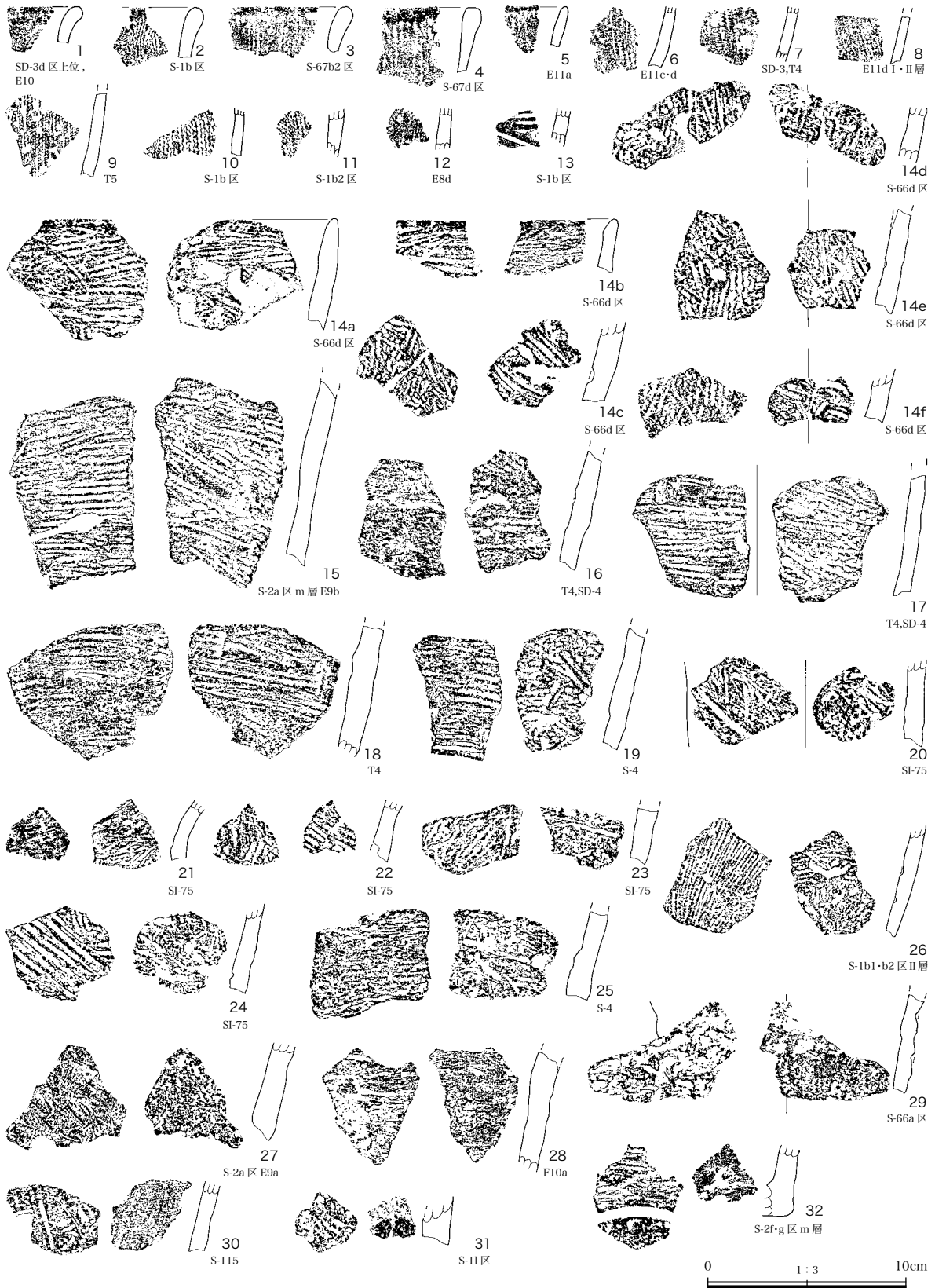
第79図には無節、異種原体の羽状構成例、直前段合撚の例、異条の例、擦痕例等をまとめた。本図中の土器もにぶい黄褐色～灰色が多く、少数明るめのにぶい燈色が確認される。

無節としてはL(6・27)R(4・20)がある。1はRまたは反撚のRR、5はLまたはLLである。2種原体の併用では、RLとLR2種併用(7～9・23・28・33)があり、7・28は0段多条もしくは前々段反撚か。1段無節ではLとRの併用(10～14・16)がある。段数の違う原体併用例ではRと0段多条RLの併用(17)がある。前々段多条ではRL0段多条(29?)、LR0段多条(30)がある。24・31・32・34はおそらく同一個体で、早期末～前期初頭の可能性がある。39はRまたはRR、41は結節がみられる。

18が前々段反撚LRRで、26もその可能性がある。35は縦方向に粘土の細い紐状凸部があるもの、36・37は組紐または直前段合撚(R/RL+LR)、38・40は直前段合撚(異条)もしくは付加条、42はRと別に末端の圧痕?があるもの、43は反撚RRのようである。

44は異質な例で、繊維をあまり含まず色も明るめ(褐灰色)でやや硬質な感がある。胎土には石英をやや多く、雲母を微量に含む。原体は撚糸Rか。45は擦痕で石英をやや多く含み、これも幾分異質である。早期かもしれない。47は条線状の調整痕が確認され、早期後半条痕紋系と当初の判断を訂正する。46はR?原体の上にやや広く粘土が被さっているもので、追加成形施文を示すものか。48・49は同一個体で条線施文、繊維を多く含み、石英・雲母をやや多く含む他とは異なる感がある。50～55は底部破片で、若干上げ底、底部端部まで縄紋施紋等この式の特徴を示している。50はLR+末端環、51は0段多条LRもしくは反撚、52もLRとRLが確認され、いずれも0段多条または前々段反撚か、54の外面は擦痕のみ、55ではナデ調整のみ確認される。

第80図には繊維を含まない前期後半～前期末、中期初頭と分類した破片群を示す。1はやや幅のある口縁隆帯上に原体圧痕(RL)、端部に細い刻みを有する特徴的な破片である。明るい灰色に近く(にぶい黄燈)、石英を少量含む硬質な感を受ける土器である。2は貝殻文ロッキング施文の浮島式。3は無節L施文の土器で石英を多量に含み硬質な感のある土器。4～7・9は横位の縄紋結節が確認される破片。8・10は縦位の結節が認められるものである。11は縄紋施紋後に沈線が施される。懸垂文のようだが、加曾利E式とは異なる質感である。13以下は縄紋のみまたは無文の破片で、縄紋の特徴・胎土・質感等から加曾利E式以降とは考えにくく、根拠は弱いものの中期初頭と判断した。石英を多量に含んでいる。12・17はやや赤味のある色調(にぶい燈色)で、雲母を少量含んでいる。第81図7・8もこれらに近い特徴があり、第81図に示した他の土器に比べやや古い可能性がある。第80図18は表面のミガキも顕著な土器でやや他とは異なる。



第 74 図 ゾーン②遺物実測図 (1)

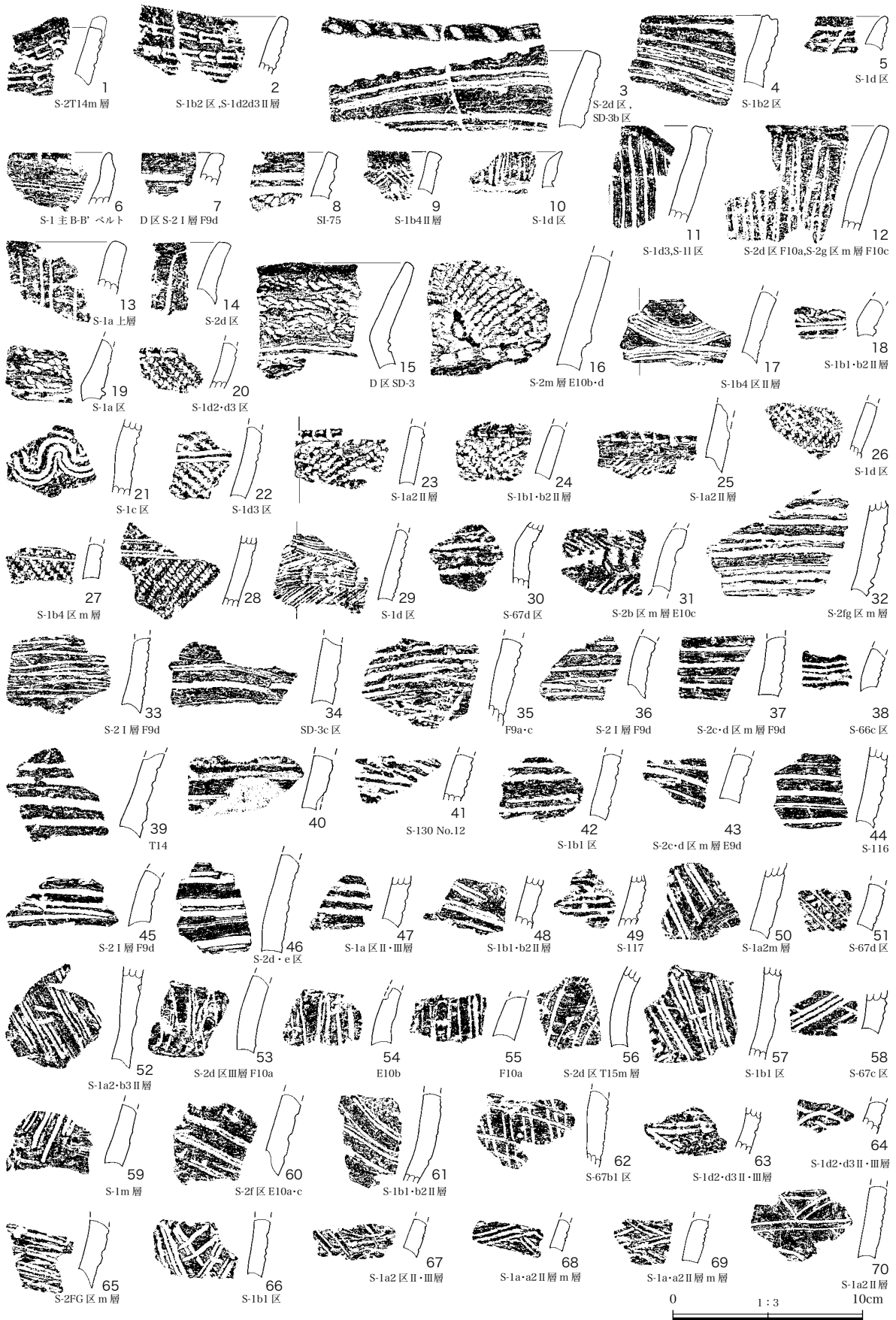
中期

第81図は中期前半阿玉台式を主に示す。1は同一個体の破片群で、文様・胎土・質感等からすべて同一個体としたが、1k・1l・1m等の破片は別個体の可能性も残す。図示した以外にも破片はやや多く、比較的に入念に接合を試みたが、接合思わしくなく復元困難であった。文様構成も不明な点が残し、口縁直下の楕円区画文は問題無いものの、以下の頸部までの区画文部分の構成が判然としない。体部もY字状～直線的に垂下する隆帯部分とトの字状に突出あるいは屈曲しながら垂下する部分とがあり、体部文様全体の構成は不明とせざるを得ない。赤味の強い色調（暗赤褐色）を呈し、雲母をやや多量、石英等も多く含み、やや硬質な焼成感がある。

第82～85図には中期後半加曾利E式に分類し得たものを示す。隆帯上刻み等の勝坂式的要素を有する4・6や、隆帯上縄紋の阿玉台式の要素を有する5もあるが、いずれも加曾利E I式期のものと判断する。口縁部文様帯の縄紋地上に隆帯表現のS字状文、渦巻文を有するものが目立ち、クランク文や区画文内沈線充填例等は殆どみられない。第82図7は楕円区画文内沈線充填の数少ない例。口縁端部にも頂部渦巻文を擁する沈線を施している点は、特徴的である。第83図4～7は円形刺突を密に充填するもので、やや珍しい。全体の文様構成が明らかな大形破片や復元個体は無く判然としないが、幅広い口頸部文様帯を構成しているものや頸部無文帯を有するものは殆どみられない。第83図1は、区画文内に縄紋が施されている。口縁上位に大きく突出するような突起を擁しているものも無く、平縁例あるいは平縁部分が目立つ点も確認される。第83図24は口頸部無文とする例、27・28は口縁端部に沈線を有し、広い口縁部文様をもたないものである。26はやや幅の広い沈線による口縁部渦巻文・楕円区画文、体部懸垂文という新しい様相を示す構成だが、施文順は0段多条の縄紋→磨消となっている。第84図には体部破片を示す。1～11は頸部または頸部より上位の破片で、隆帯によるクランク文表現が推定される5や、隆帯上刻みのある1等が注目される。体部文様では単純な懸垂文、蛇行懸垂文が目立ち、大木式文様のような曲線的な意匠例は限定的である(15)。磨消は殆どみられないが、22は弧状の3本沈線間のみ縄紋部がナデ消されている。第85図6～22は浅鉢である。文様のあるものでは屈曲部より上位に沈線・刺突による文様表現例があり、外傾外反例では口縁端部に沈線1条を主とする文様が描かれる。単純に外反するもの(18・19)、やや内湾するもの(20・21)も確認される。

称名寺式（図版五九）

第86図には称名寺式の径を復元し得たものを示す。第86図1は、幾つかの破片群が確認されたものあまり接合せず、図上復元も厳しかったものである。比較的幅のある沈線→縄紋LR→無文部ミガキの順でJ字文・鋸先文等が描かれる。内面ミガキも丁寧である。第86図2は、やや明るめだがくすんだ色(にぶい黄褐色)を呈するやや小形の深鉢上位破片。沈線は浅い施文、列点ではやや深めの施文部もあるが、総じて浅めである。帯状部のうち列点が施されていない無文部の方がやや調整丁寧な感があるが、その差はさほど明瞭ではない。内面のミガキは丁寧である。3はやや赤味のある色(にぶい燈色)を呈する土器である。沈線はやや太く深めのところもあるが、全体的には浅い施文。口縁端部から内面のミガキは丁寧、文様施文部では、交互充填的にミガキの丁寧な帯状部とそれ以外とが顕されている(口縁端部無文部に隣接する部分の調整がやや粗い)。角閃石・白色粒を含み、やや厚手で重みのある点も特徴となる。4は沈線のみ施文の土器で意匠も不明である。5は上半1/2程度遺存の個体で、突起は大柄な突起1単位のみ確認される。沈線のみ意匠表出例で、やや乱れはあるものの、鋸先状～R字状のモチーフが描かれている。突起内面には凸部および円形凹部でS～8字意匠が表現されている。



第 75 図 ゾーン②遺物実測図 (2)

第87～88図には称名寺式の口縁部破片をまとめて示す。第87図1～7は縄紋施紋のあるものだが、7のように口縁部突起および突起周囲での沈線文様があるものも含む。8～14は列点充填のあるもので、8・10は垂直に近い刺突文となっている。17は条線充填例、18以下は沈線のみで充填施文の無いものである。口縁部突起およびその近辺での凹点・沈線施文例もある(33・35等)。第88図には突起部分あるいは突起部分を擁するものをまとめた。貫通孔周りの主に裏面に沈線・窠文連繫沈文を施しているものが目立つが、これが表面側に移行し、あるいは綱取式系C字・J字文様と複合的な例もみられる(12・15等)。

第89図1～26は主に加曾利E V式系あるいは綱取式系の破片である。第89図6はゾーン①の第61図4に類似した土器で、やや粗いミガキ、小礫(褐色粒・灰色粒)を含む胎土等が特徴的である。綱取式系突起文様ではJ字文(14)、直線垂下(15)、三角形状(16)等の種別がある。

第89図27以下は深鉢以外の器種である。27・31・34等は称名寺式期の注口付き鉢として問題ないが、29や32等は形態も不明で器種も確定し得ない。33はやや小さめだが4単位の橋状把手を有する壺形土器で、把手上の8の字状文様が特徴的である。28は内面ミガキも丁寧で赤色顔料の残りもみられる等、浅鉢と考えられるもので、時期は中期に遡るかもしれない。

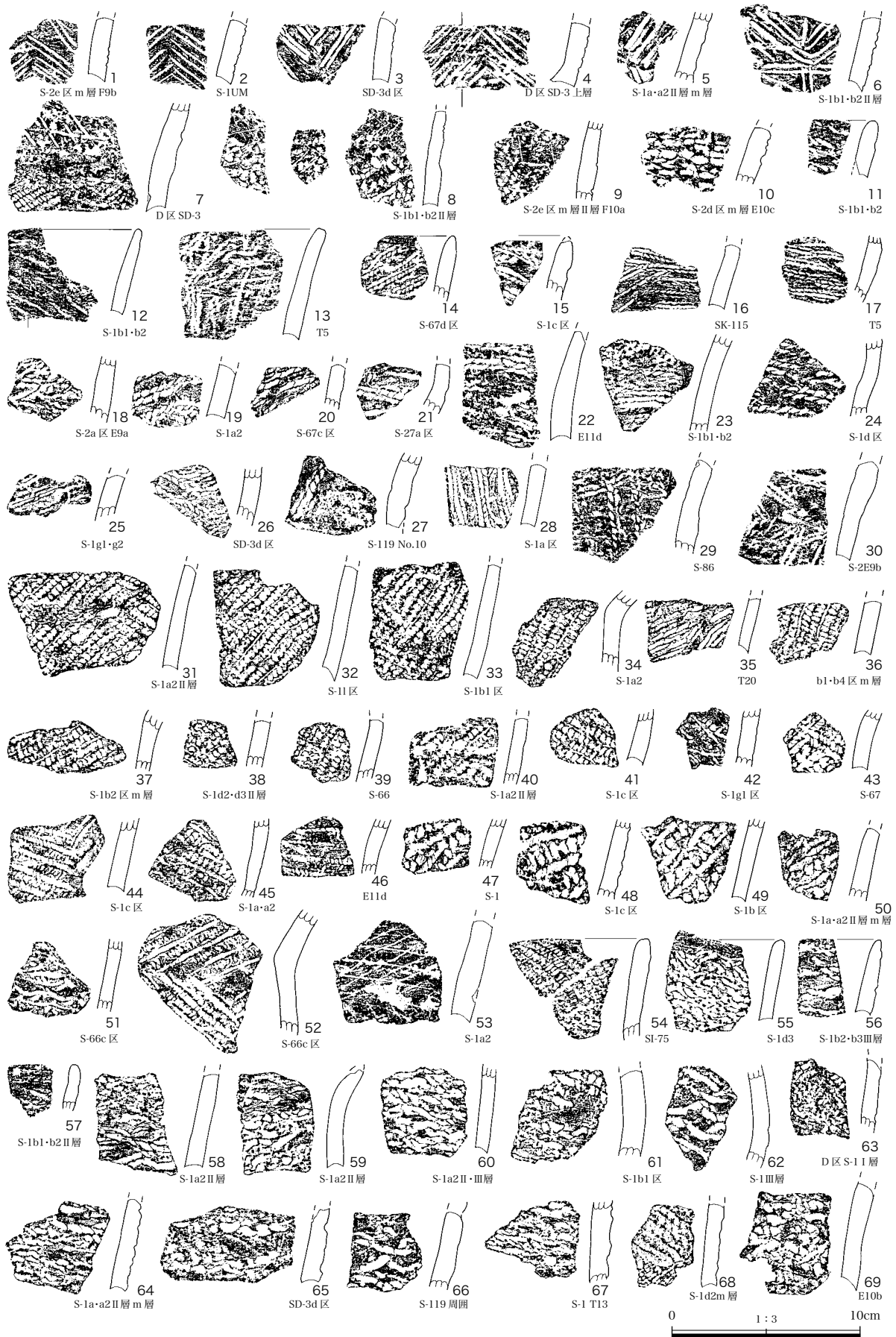
第90～92図は体部破片である。径を復元し得たものが少なく、全体の意匠構成は不明なものが多い。基本的には文様要素での分類配列で、縄紋充填、列点充填、条線充填、充填なく沈線のみ施文の例、という順での配列としている。第92図3・4では縄紋LRの充填がある。また第92図2・5・7・8等、隣接する帯状部相互でミガキの程度を変えて、帯状部意匠の効果を示しているものも認められる。同図37は爪形状の刺突列がV字状に展開し、その左右でやや空間をおいて沈線も施される、やや特異な文様である。やや暗い色調、角閃石を含む胎土等、土器自体もやや異質な感がある。38も3本沈線、区画内短条線充填等が特徴的である。39は褐灰色を呈しやや薄手で、角閃石雲母を少量含む胎土等、他と比べてかなり異質である。沈線に沿って細かい刺突が施されており、三十稻場式(新)の土器と推定できる。

堀之内式

第93図1は複数の破片が確認され、ある程度図上復元し得たものの、接合思わしくなく、全体の文様構成は不明な点が残るものである。やや調整粗く残された帯状部に列点が充填される。意匠はJ字文を主とするようだがV字状の部分もあり、全体の構成は判然としない。横位一次区画の隆帯に接して文様が描かれており称名寺式文様の原則的な表現法とは言えない。第93図2も幾つかの破片から径を復元したものの、左から2番目の破片では口縁直下の段下に明瞭な沈線が施されており、この破片が別個体となる可能性も残る。この破片および左側に示した破片では縦方向の条線が観察されるが、他の破片では摩滅もあって不明瞭である。第93図3は縄紋地上に沈線が描かれるものだが、やはり復元思わしくなく、文様構成・配置は不明である。沈線および口縁直下の刺突列施文より後に縄紋RLが施されている。3bの破片では口縁直下の刺突列が低い隆線上に施されており、堀之内2式に一般的な紐線およびその上の刺突に近い様相を示している。

第94図は口縁よりやや間をおいて横位一次区画の沈線あるいは隆帯が施されるもので、体部文様では沈線による格子目文(1・11)、称名寺式文様の崩れたもの(2)等が確認される。10・12～28では突起部および突起部周囲の文様が確認できるものを示している。円文・凹点・貫通孔を軸に、これを囲むようなC字・J字・直線等の沈線が描かれる。第88図に示した称名寺式の突起・文様と類似しているものも含むが、裏面への沈線表現が希薄となる等シンプルな形態となっており、おおよそ区別し得る。第94図28は4単位突起壺形土器の突起部分上位か。これら突起を擁する土器群は更に形態を変え、第95図に示したような土器群＝口縁直

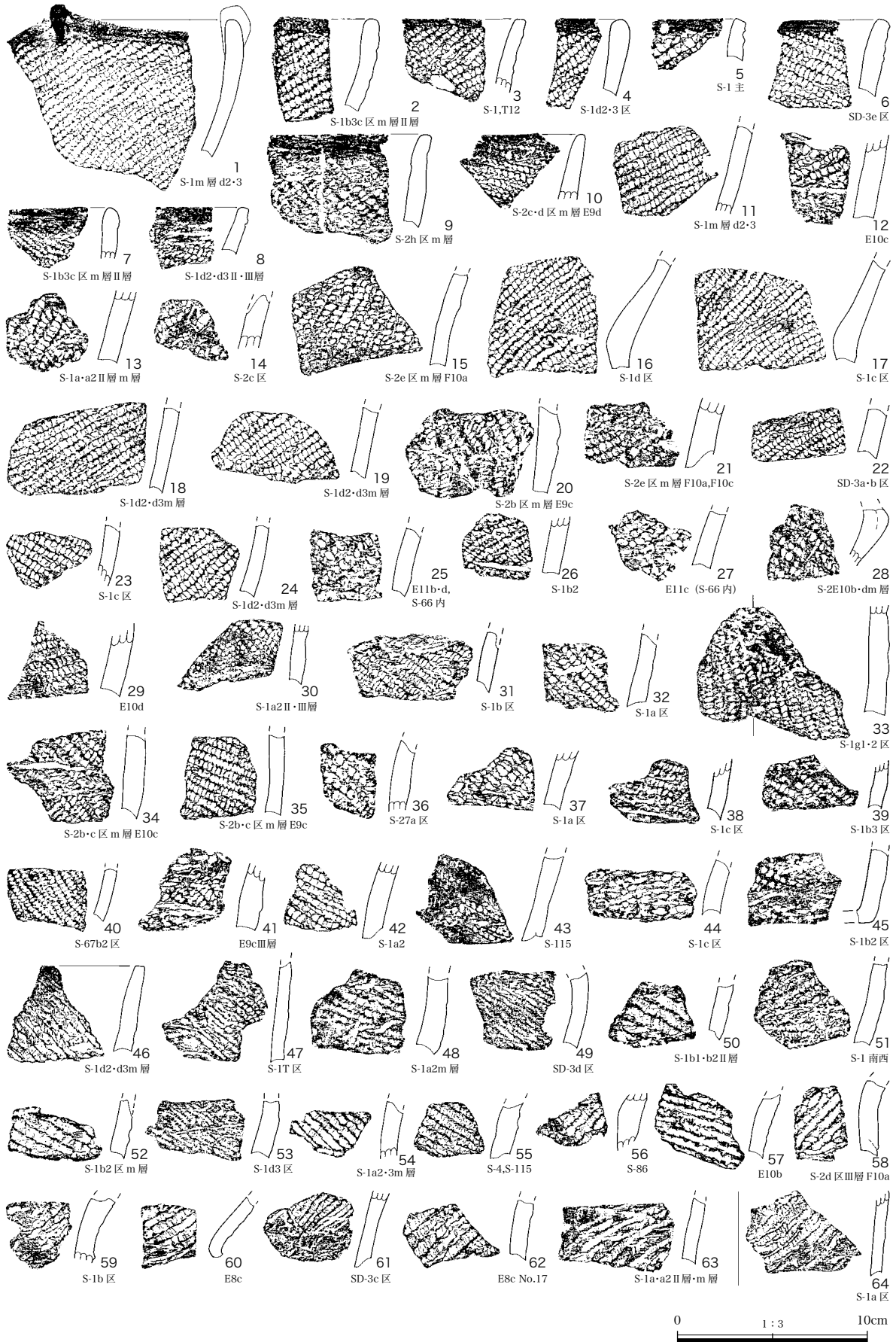
第三章 検出された遺構と遺物



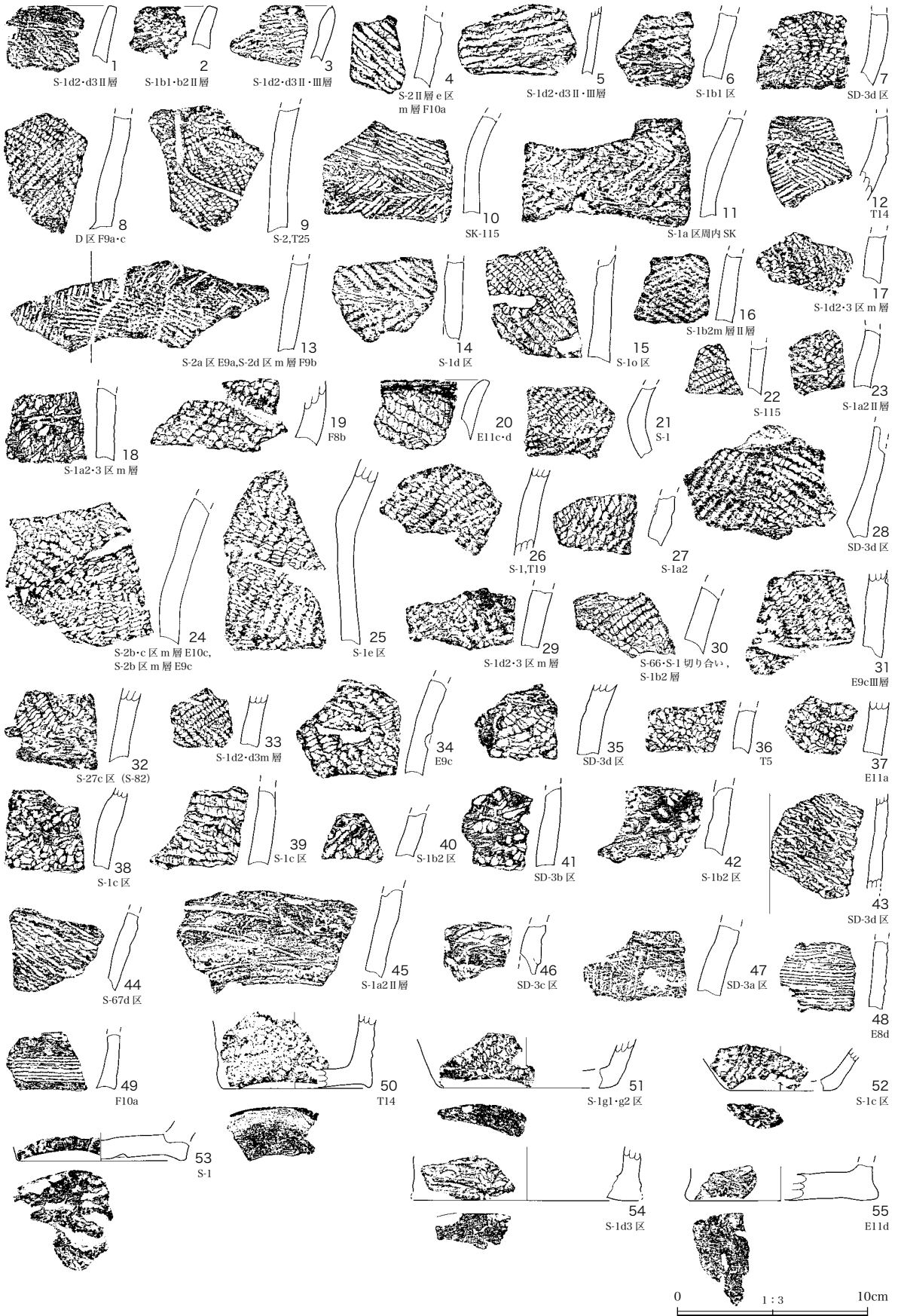
第 76 図 ゾーン②遺物実測図 (3)



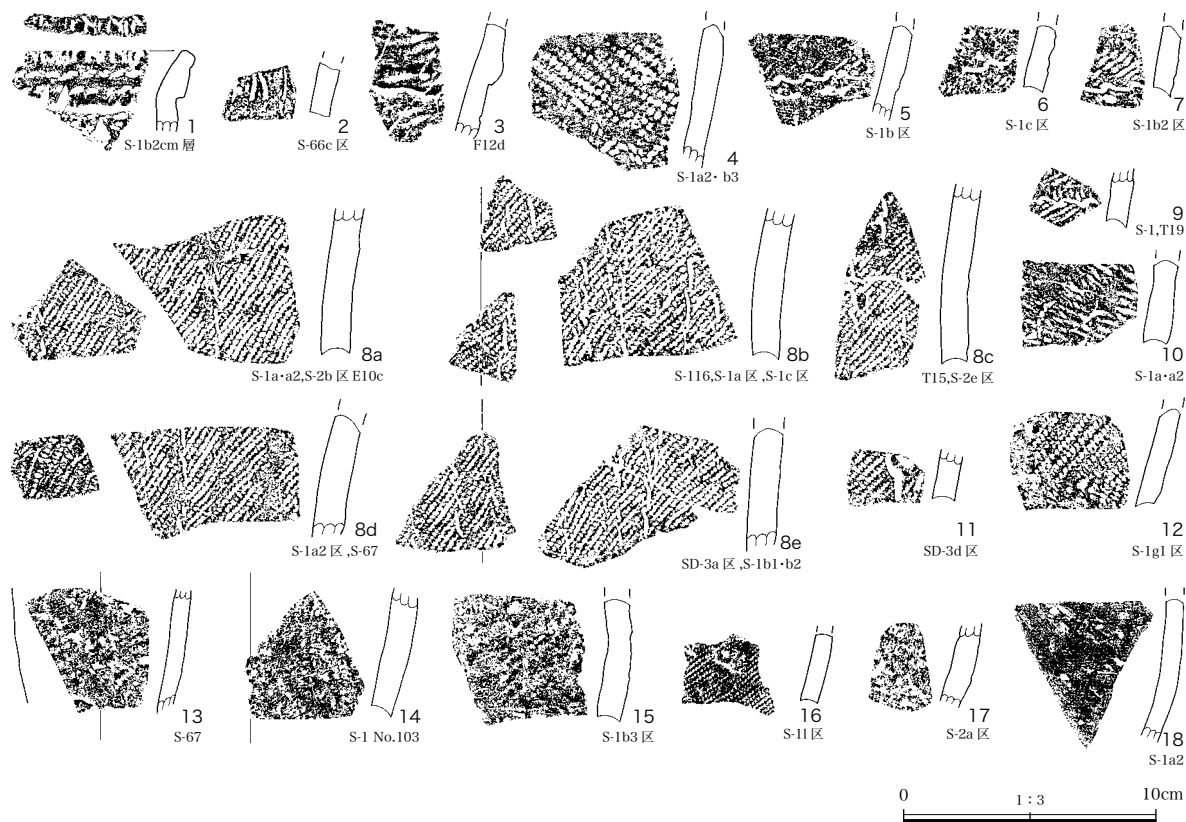
第77図 ゾーン②遺物実測図(4)



第78図 ゾーン②遺物実測図(5)



第79図 ゾーン②遺物実測図(6)

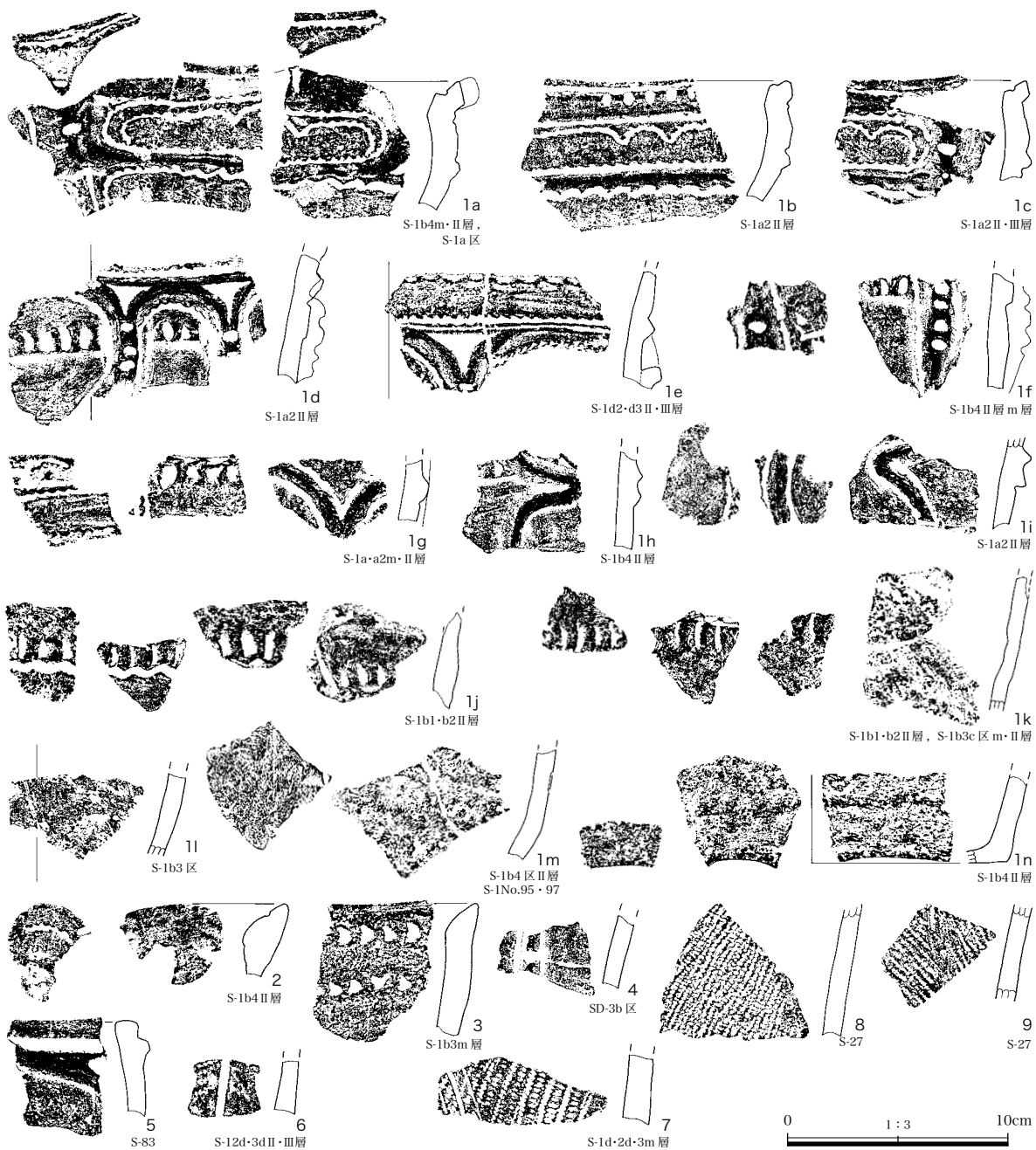


第 80 図 ゾーン②遺物実測図 (7)

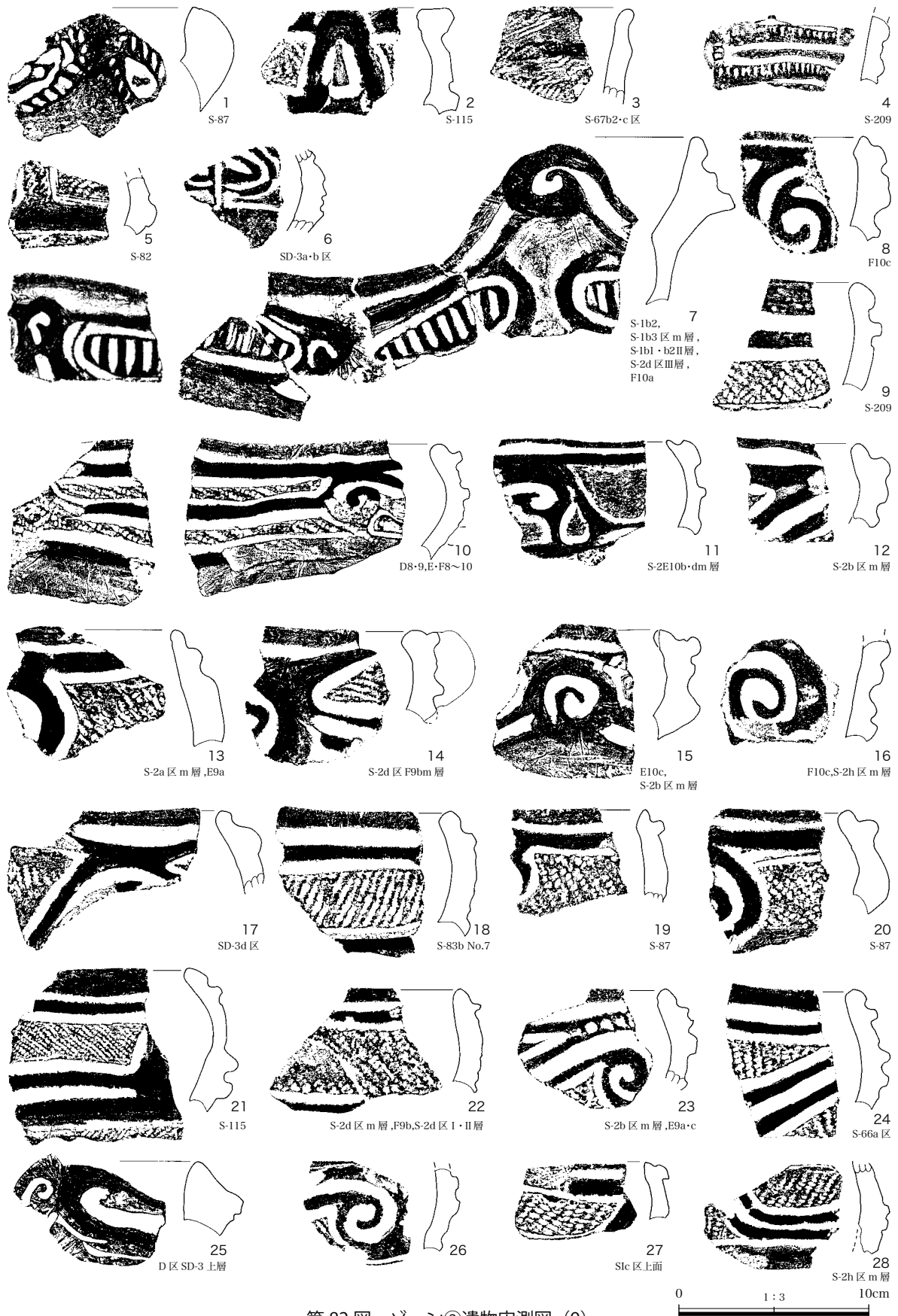
下から縄紋を施し、この上に沈線で文様を描く朝顔形深鉢や、頸部が強く屈曲し口縁に向かって外反する土器等、堀之内 1 式後半～ 2 式期土器群へ変化していく状況がうかがえる。

第 95 図 1 は粗い調整痕のみ認められる土器でかなり厚手である。2～4 は口縁直下に刺突列を巡らすもので、2 は第 93 図 2 と同一個体かもしれない。9 以下は縄紋地に沈線による意匠が描かれる土器で、9 では隆線も伴っている。15 はやや厚手で異質な感があり、異なる型式の可能性もある。16～40 は概ね直線的に外反する朝顔形の深鉢である。沈線は浅くやや先端が細い工具によるものが目立つ。明確な磨消縄紋がみられるのは 29・31・32・34 等だが、30 のように幾何学的な文様、繊細な施文・質感等から堀之内 2 式と判断できるものもある。37～40 は縄紋のみ施紋のやや粗製の土器。36 は縄紋の結節回転が観察される。37 は「紐線」相当部が僅かだが隆起し、この部分に縄紋が加えられる。41 は頸部が屈曲する鉢、42 は蓋受け状の部分があり壺となろうか。43・44 は小片で器種も判然としないが小形の土器か。45～49 は注口土器である。50 はやや彎曲する棒状の部品で、橋状突起の一部や釣り手の一部とも考えたがよく分からない。単独の土製品の可能性もあるが、図右上部の裏側では剥落部があり、何らかの器体に接続していた可能性が高い。44 は壺等の器種となる可能性もあろうか。47・48 は磨消縄紋のある「蕃神台類型」の注口土器となろう。

第 96～98 図には体部破片をまとめた。第 96 図上位には沈線施文のみで、称名寺式文様からは逸脱しているような破片を主にまとめている。3・6 のように列点を有するものもあるが、等間隔帯状構成での充填ではない。22～25・29～34 等は頸部に横位一次区画線を有する土器で、縄紋地に複数条の沈線を施してい



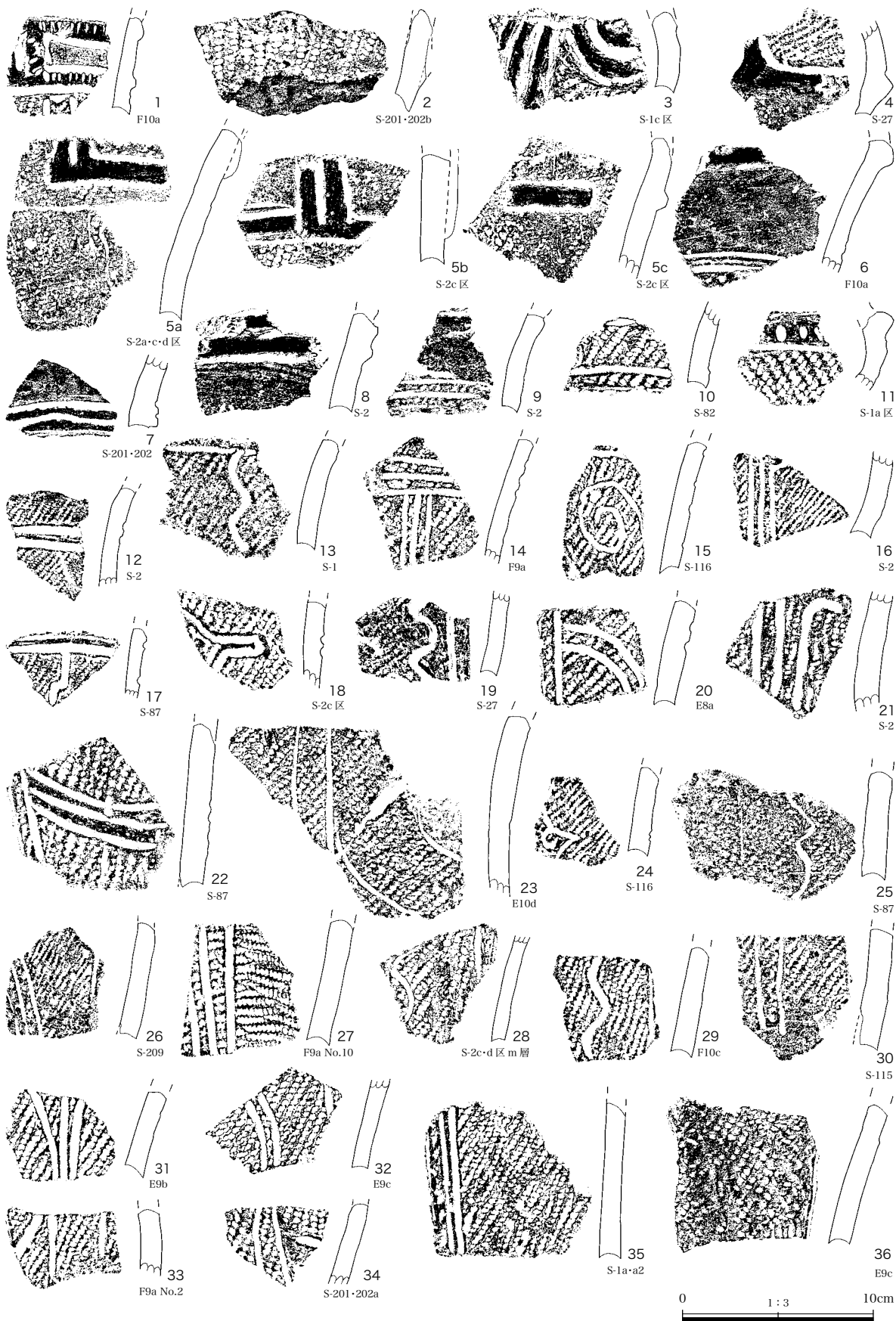
第81図 ゾーン②遺物実測図(8)



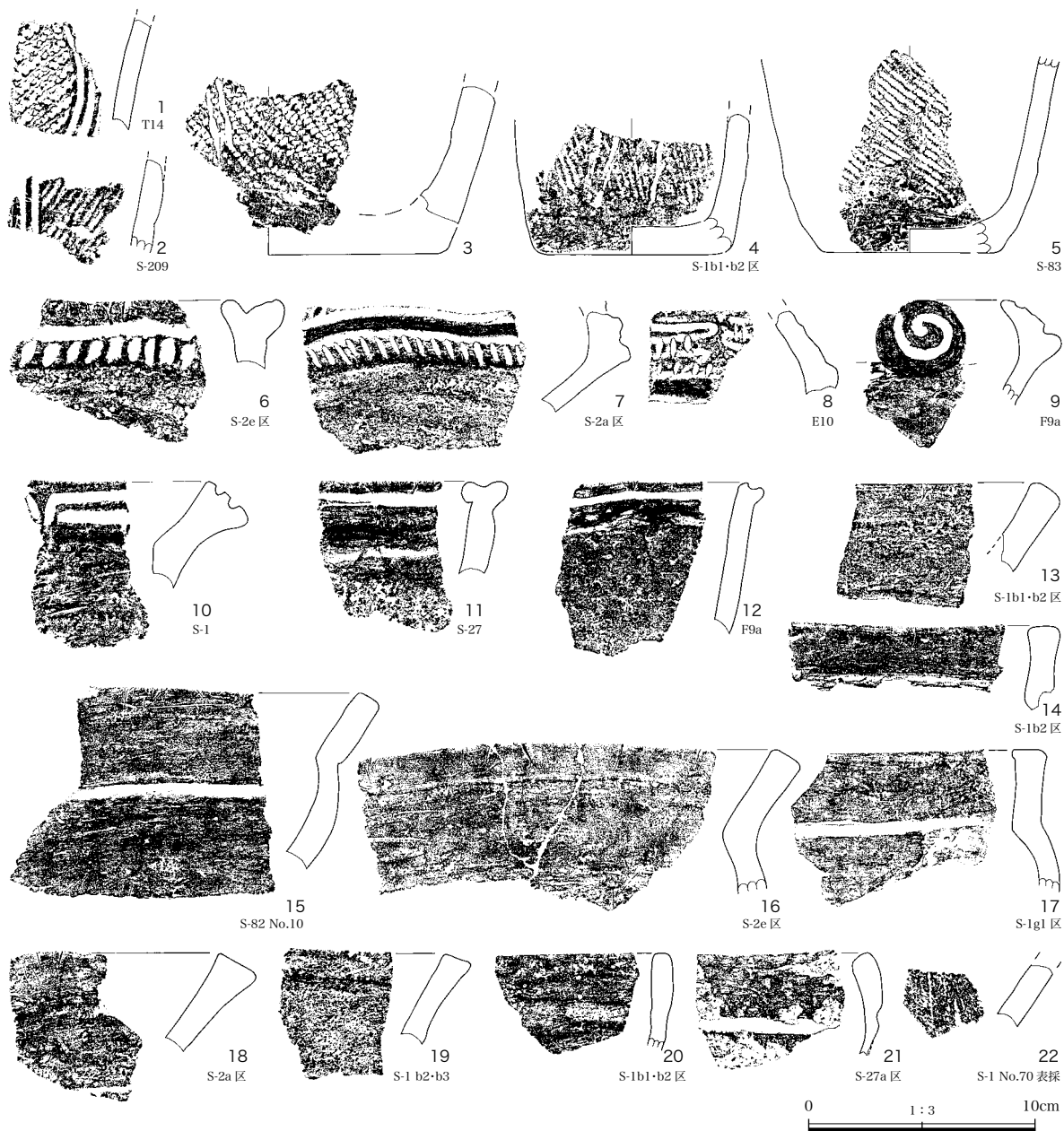
第 82 図 ゾーン②遺物実測図 (9)



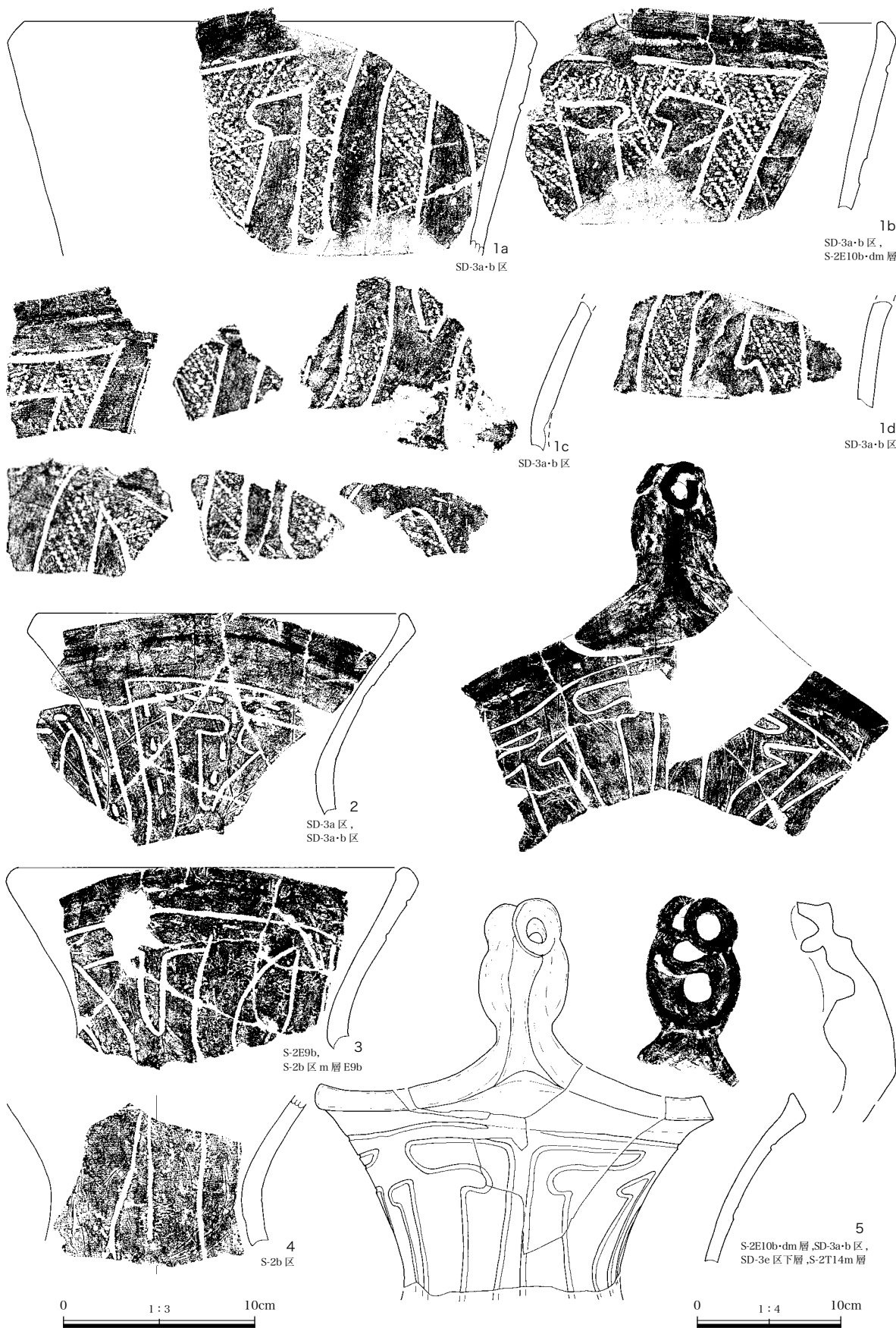
第83図 ゾーン②遺物実測図(10)



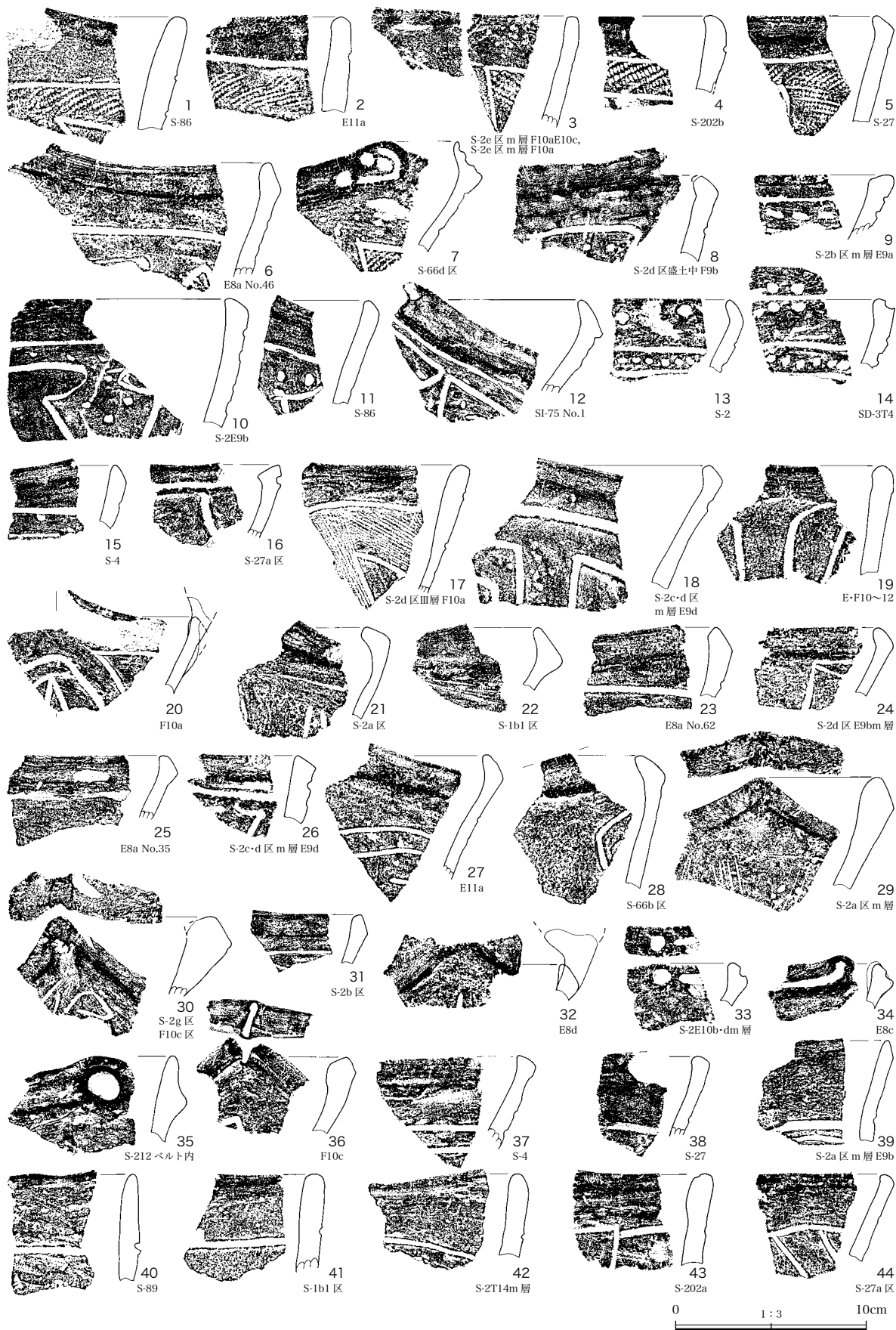
第84図 ゾーン②遺物実測図(11)



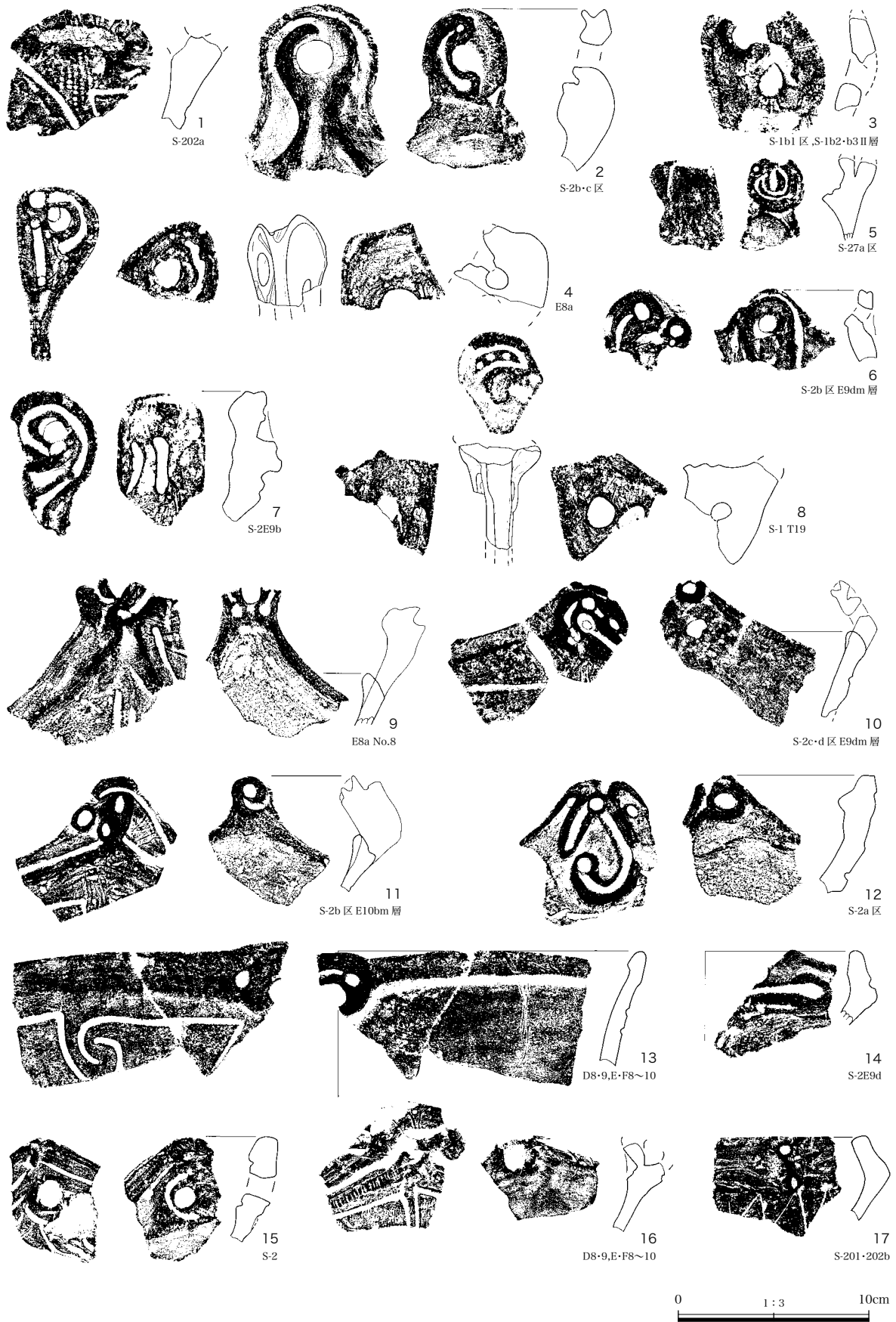
第85図 ゾーン②遺物実測図(12)



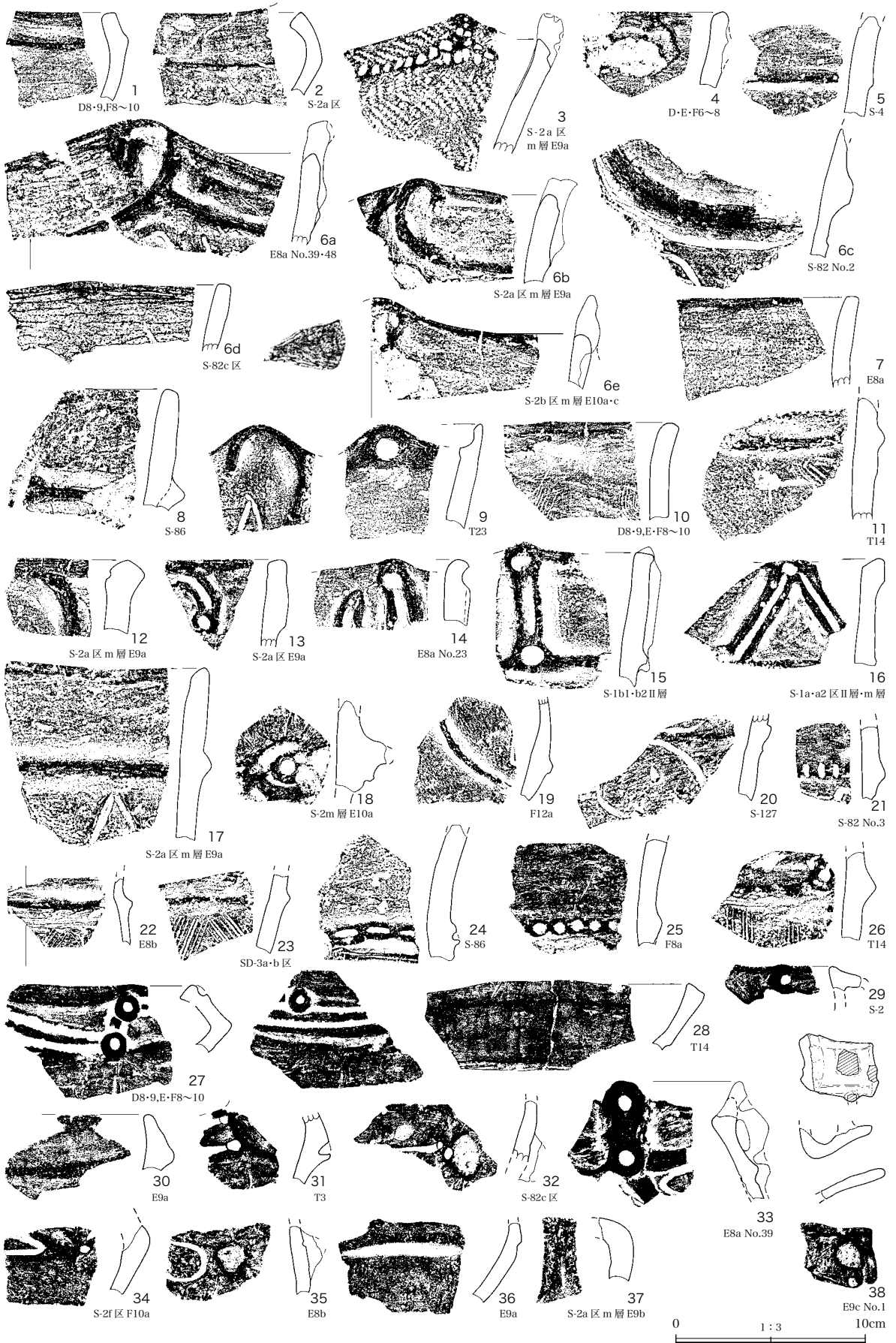
第86図 ゾーン②遺物実測図(13)



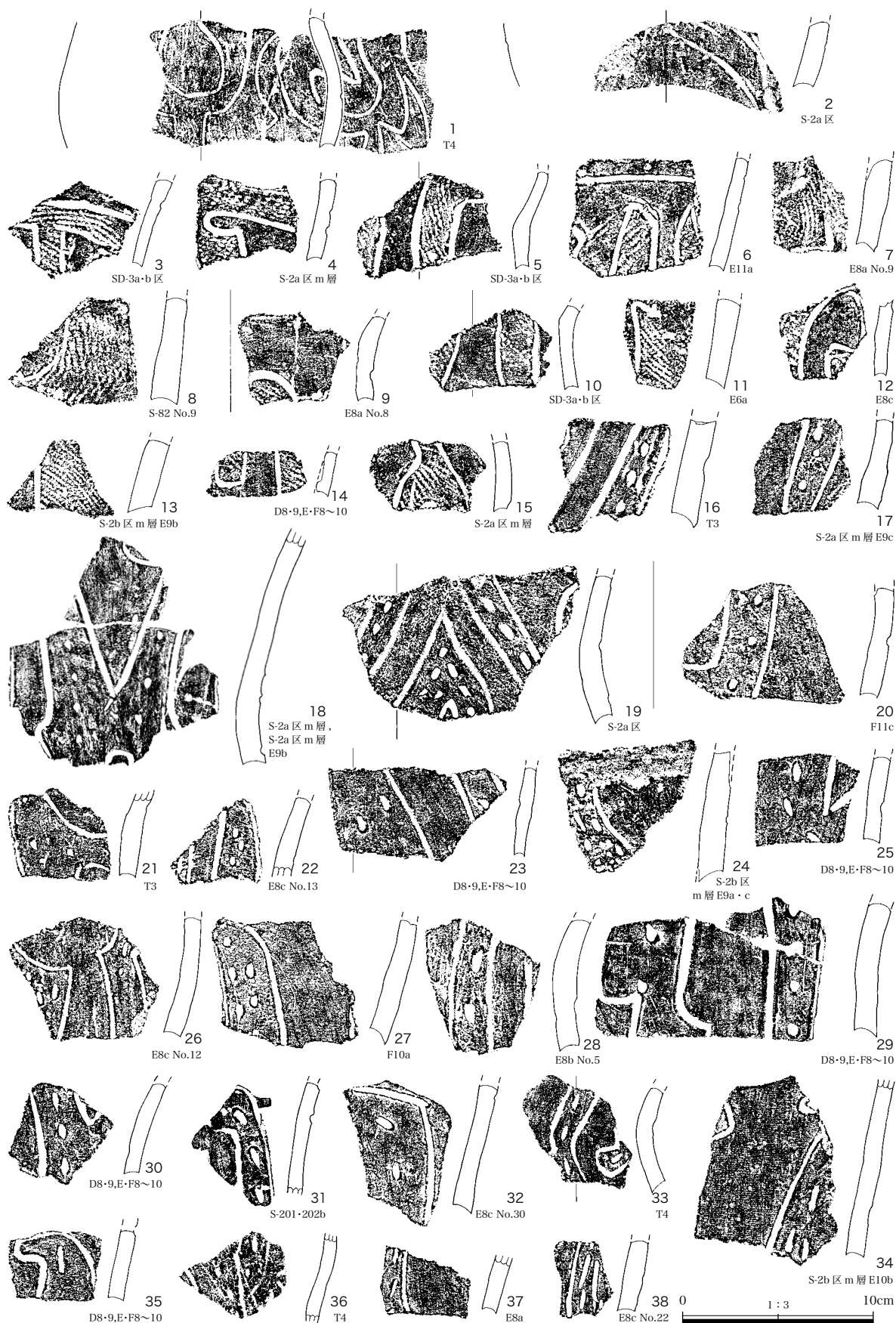
第 87 図 ゾーン②遺物実測図 (14)



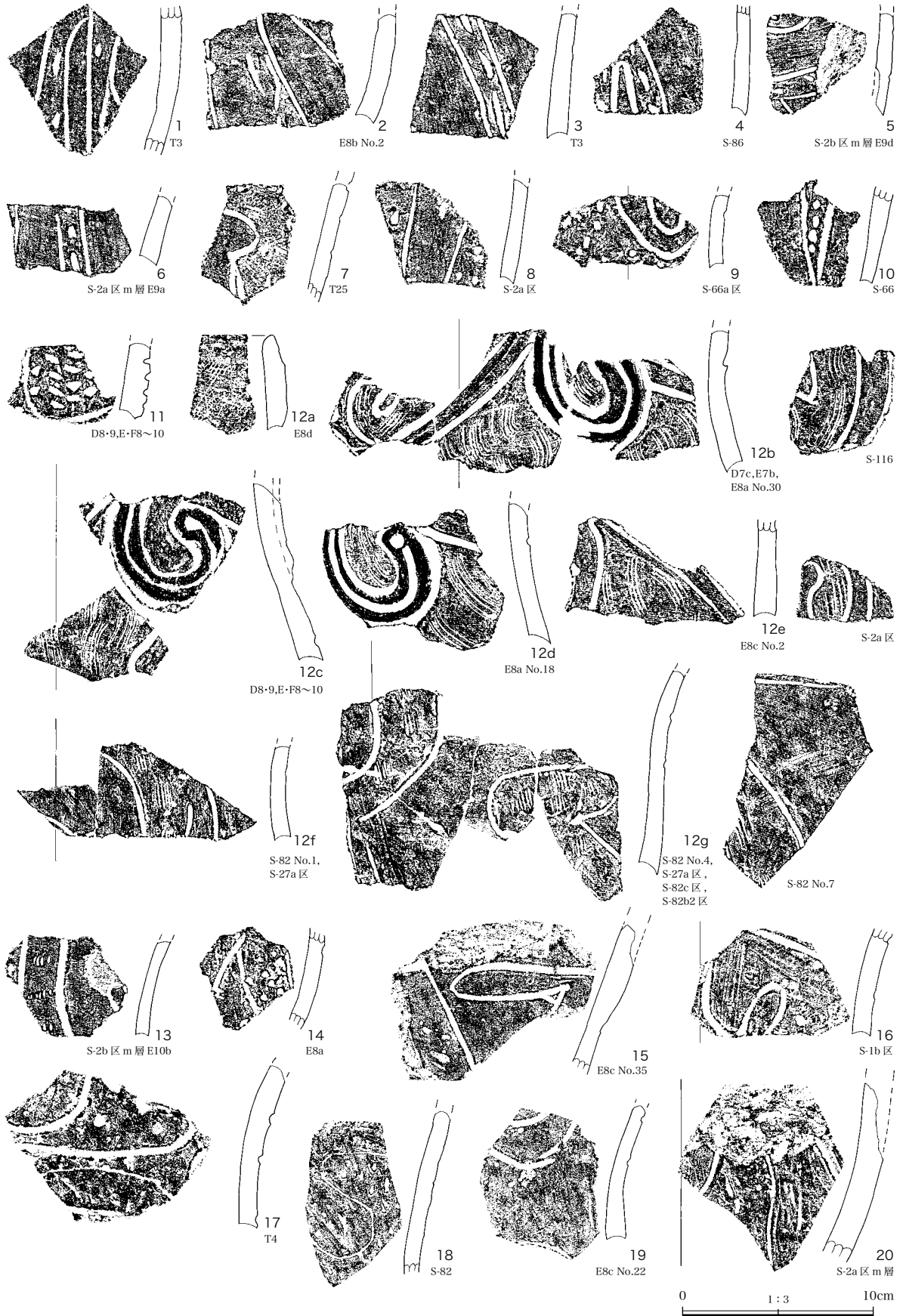
第 88 図 ゾーン②遺物実測図 (15)



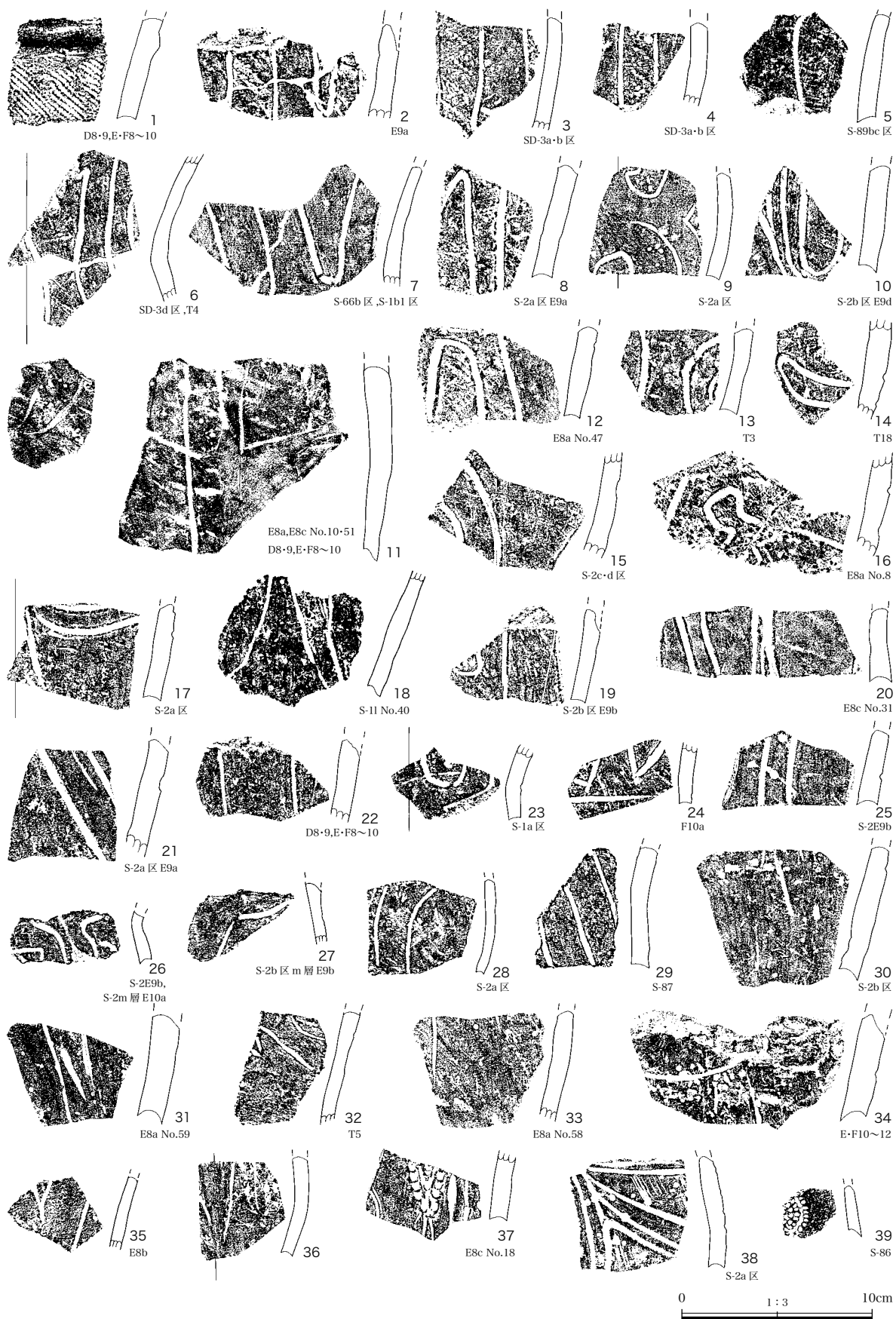
第89図 ゾーン②遺物実測図(16)



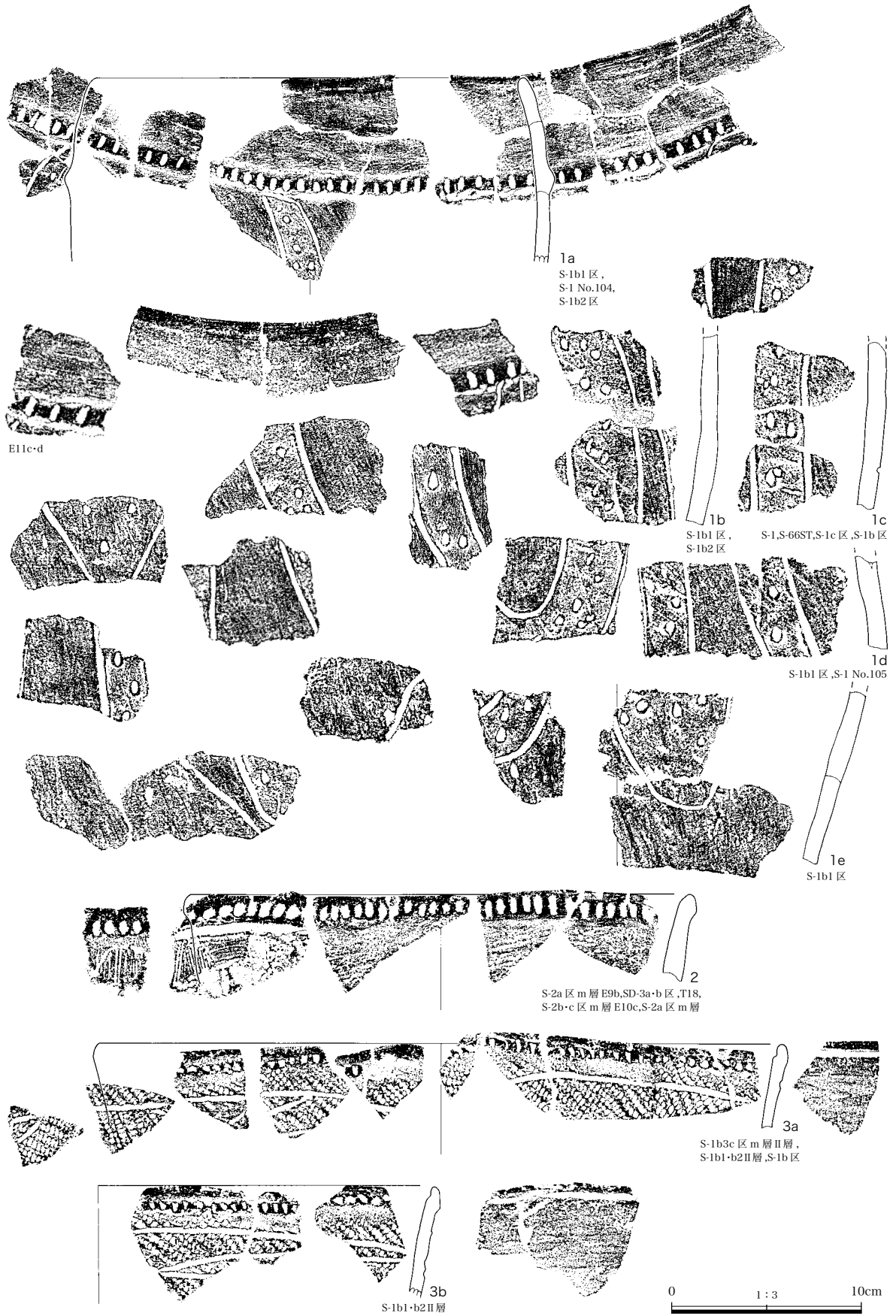
第90図 ゾーン②遺物実測図(17)



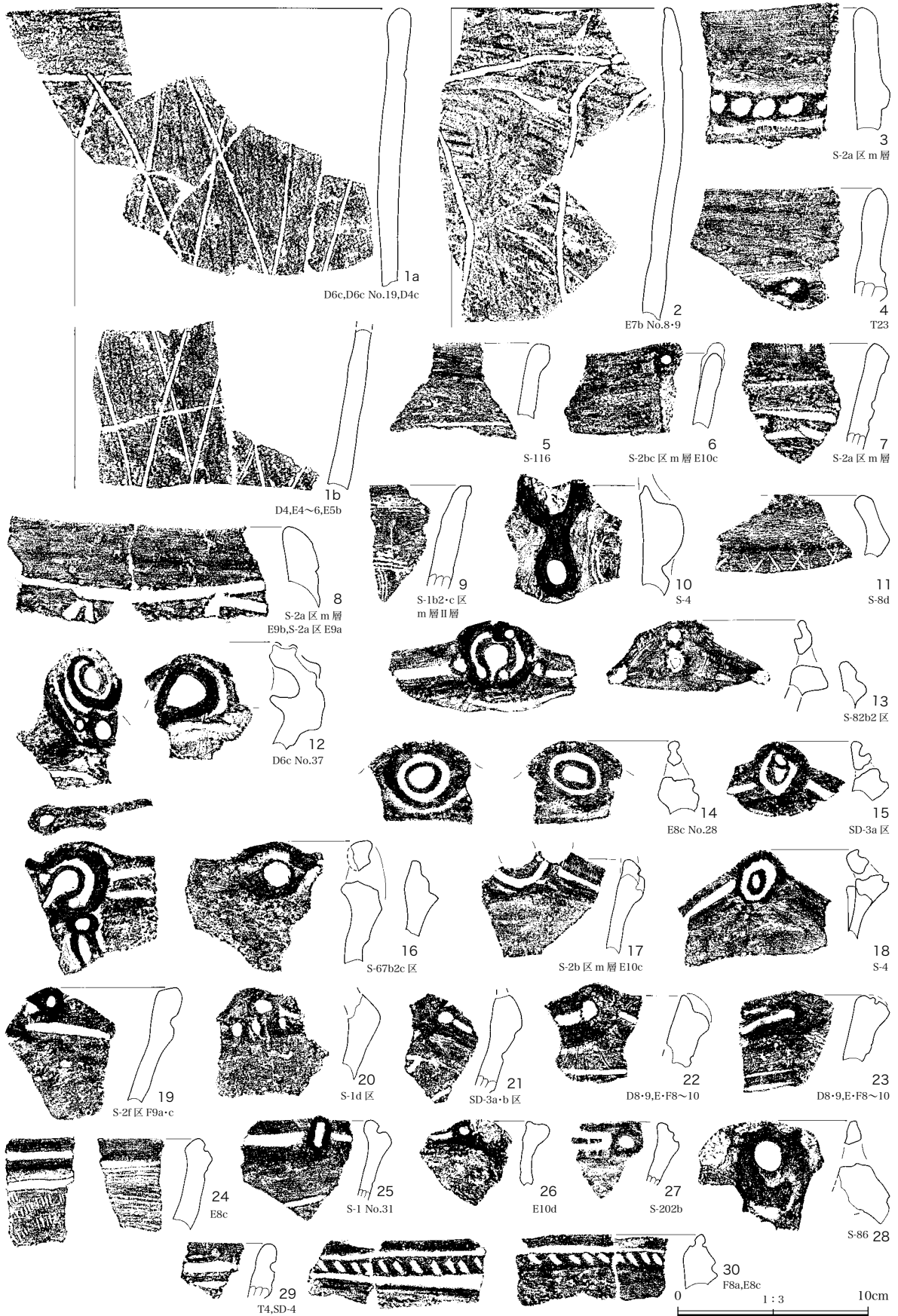
第91図 ゾーン②遺物実測図(18)



第92図 ゾーン②遺物実測図(19)



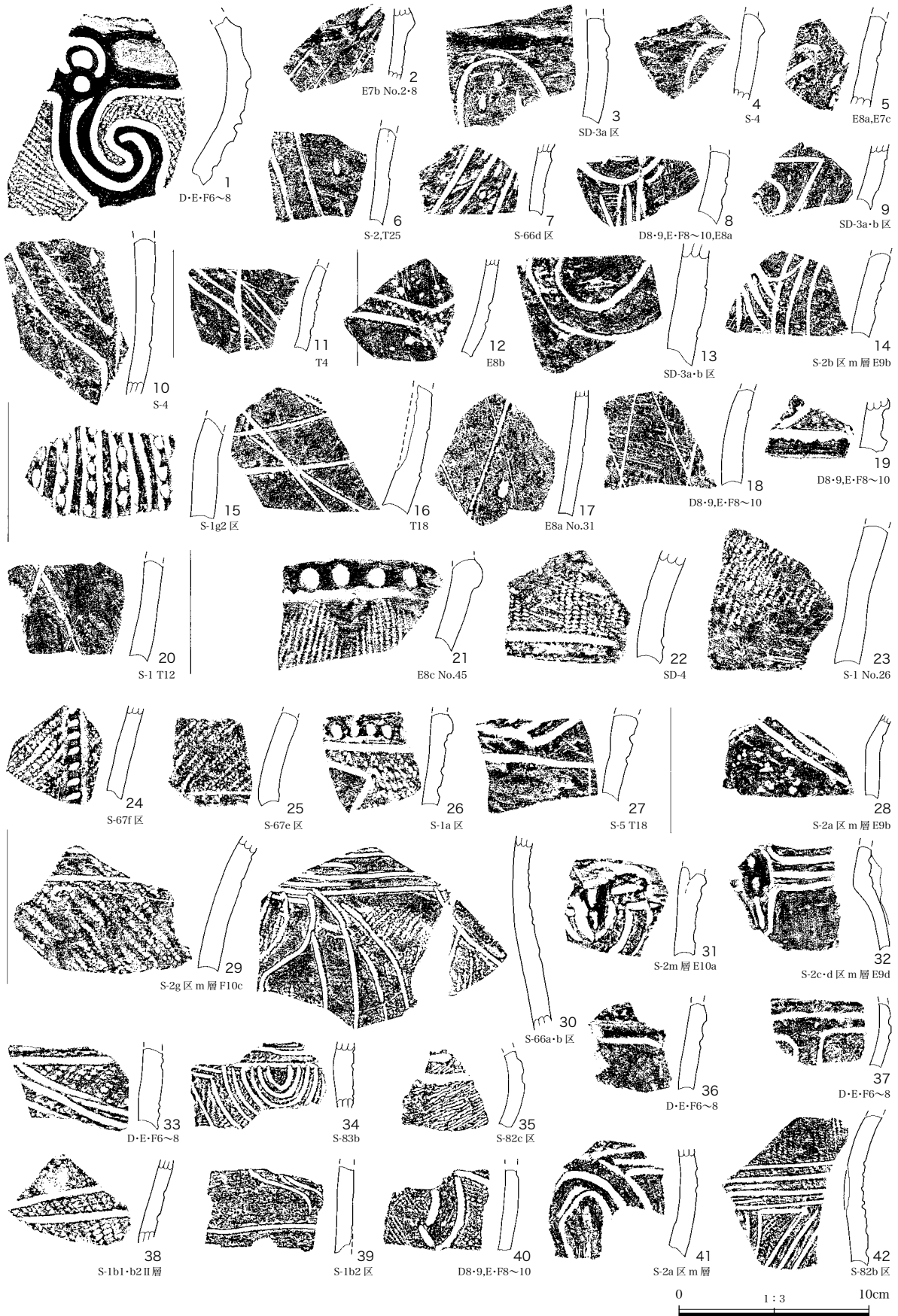
第93図 ゾーン②遺物実測図(20)



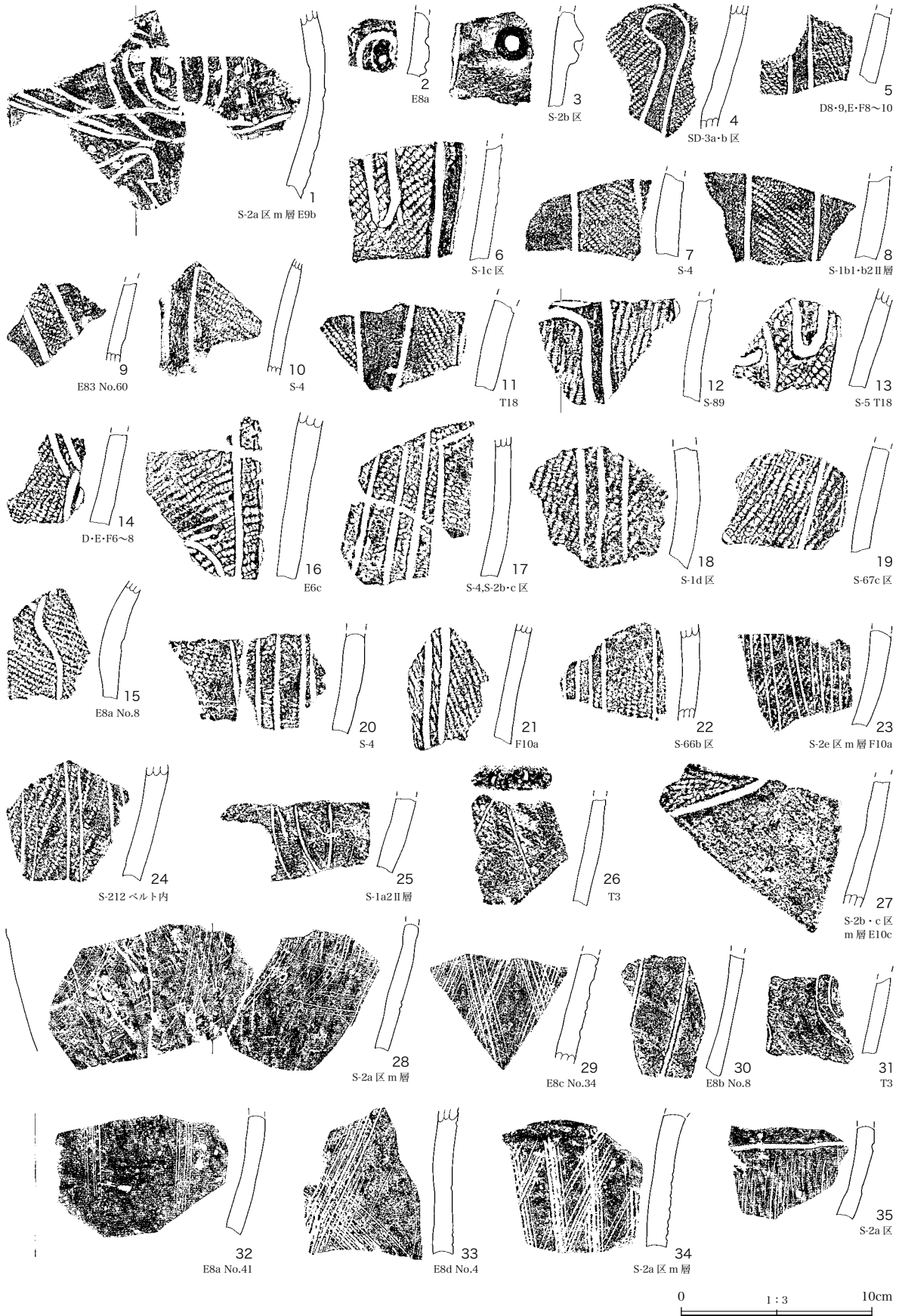
第94図 ゾーン②遺物実測図(21)



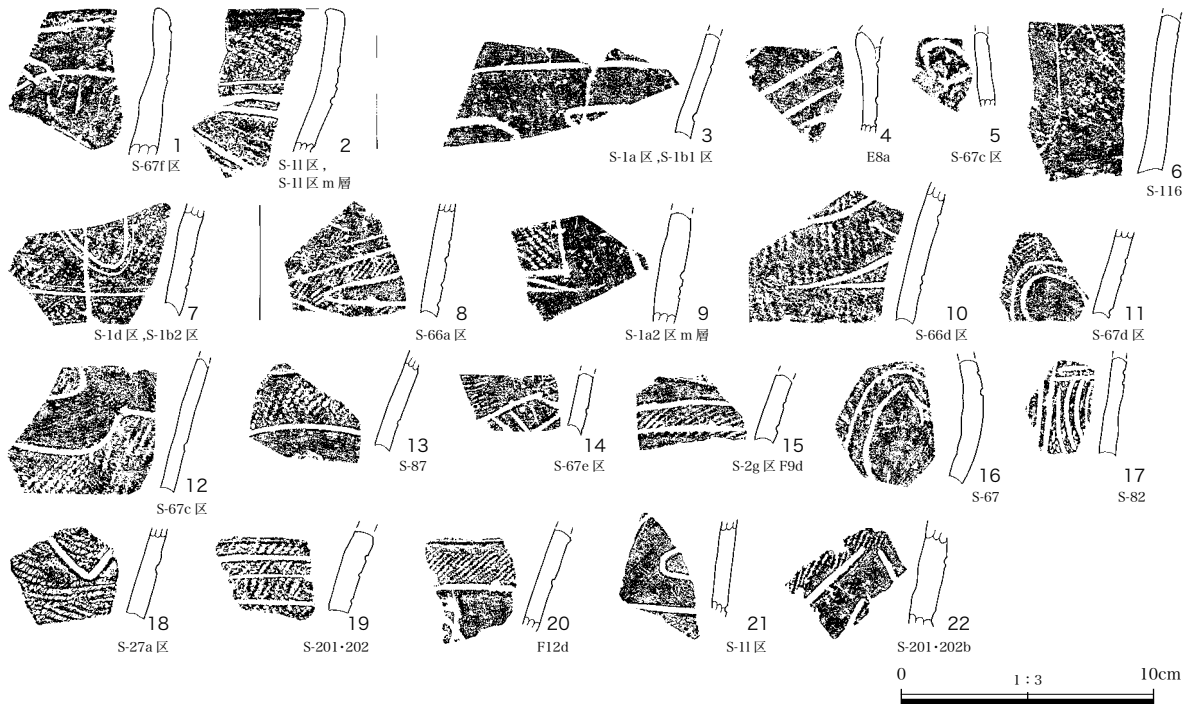
第95図 ゾーン②遺物実測図(22)



第96図 ゾーン②遺物実測図 (23)



第97図 ゾーン②遺物実測図(24)

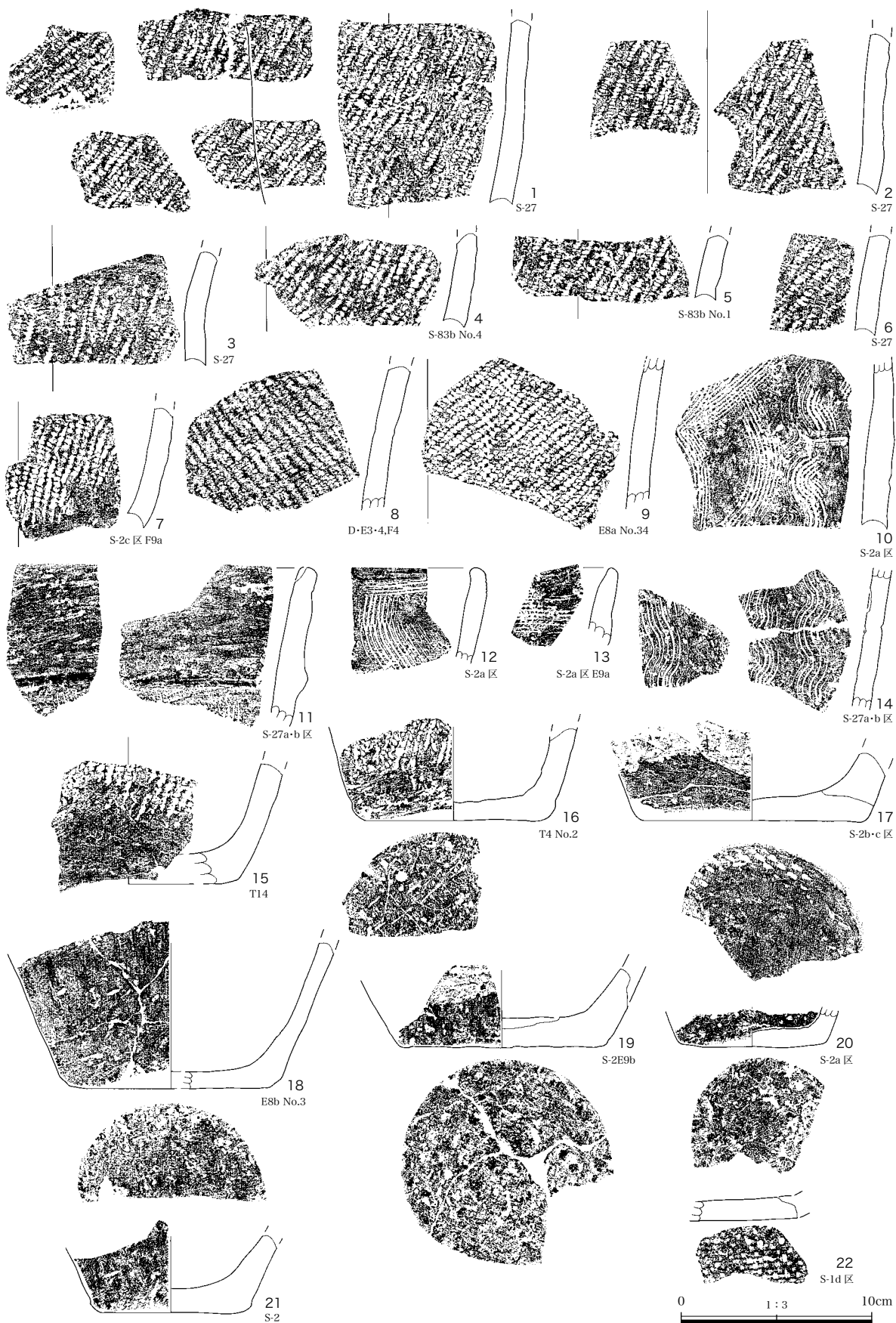


第98図 ゾーン②遺物実測図(25)

るものが多い。第97図も含め単沈線表現のものと複数条表現のもの、磨消を伴うもの等の区別ができ、一定程度図中の配列上で表している。複数条表現のものでは、堀之内2式と推定できる例もあるが区別は難しい。磨消のあるものは、縄紋→沈線→無文部ミガキによるが、第97図9は縄紋充填と観察される。13・14では磨消が不徹底で、縄紋の圧痕が残される。8・11は同一個体の可能性が高い。第97図1はJ字文・斜行文等が確認される体部中央～下位の破片である。折影でわかりにくい、J字文等主文様表現の外側空白部で短条線が充填されている。主文様部・短条線施文部いずれも同程度にミガキが加えられている。第97図28～35は主に条線表現のもので、格子目文を描く例が目立つ。

第98図は概ね問題なく堀之内2式と判断できる資料で、磨消縄紋表現例が主体となる。1は内面に赤色顔料が一部確認される。2・7では地縄紋の上に半截竹管状工具による浅い沈線施文が確認される。10は1本描き沈線だが磨消は不明瞭。8・12・20等は沈線→縄紋充填→無文部ミガキで、典型例に近い堀之内2式となろう。16はJ字状の意匠が確認されるもので、浅く縄紋充填がなされている。頸部屈曲の鉢となろうか。

第99図は縄紋のみ、または無文、底部破片等をまとめた。図示したものは少数だが、出土量ではかなり多数を占める。11は頸部に横位区画隆線があり、加曾利E V式～綱取式系の土器となろうか。底部で網代痕跡を観察できるものは限定的で、22は数少ない例となる。17は縁辺にのみ網代痕が残されているもので、中央は磨き消されている様子が観察される。



第99図 ゾーン②遺物実測図(26)

ゾーン③の土器

ゾーン③は E12・F12 グリッド～E15・F15 グリッド出土資料で、位置としては谷へ向かう斜面で、比較的包含層の堆積が安定しているところである。層位的には縄紋包含層の内、上層では後期の土器群、下位で草創期～前期の土器群が出土する傾向を所見として捉えているが、明確に示し得る記録をとり得てはいない。他のゾーンと比べて加曽利 E 式、称名寺式がかなり少ない点は注目されよう。

草創期～前期（図版五六・五八・五九）

第 100 図 1～9 は撚糸紋系である。全体に明るめの灰色基調で硬質な感がある。また石英等の鉱物・小礫をやや多く含む傾向にある点も、他の地区と同様である。とりわけ第 100 図 1・2・6 の破片で石英が多く含まれていることが観察される。原体は撚糸 L が 1・2・5・6・8・9、残りは R となる。10～14 は条痕紋系で、厚手で繊維を多量に含む。表裏とも条痕の例が多いが 12 の内面は擦痕である。15 は表面縄紋 RL、内面条痕の土器で、本遺跡では唯一の「縄紋条痕」例となる。16 は表面擦痕、内面無文の例で、胎土には繊維と共に石英粒を多く含む。

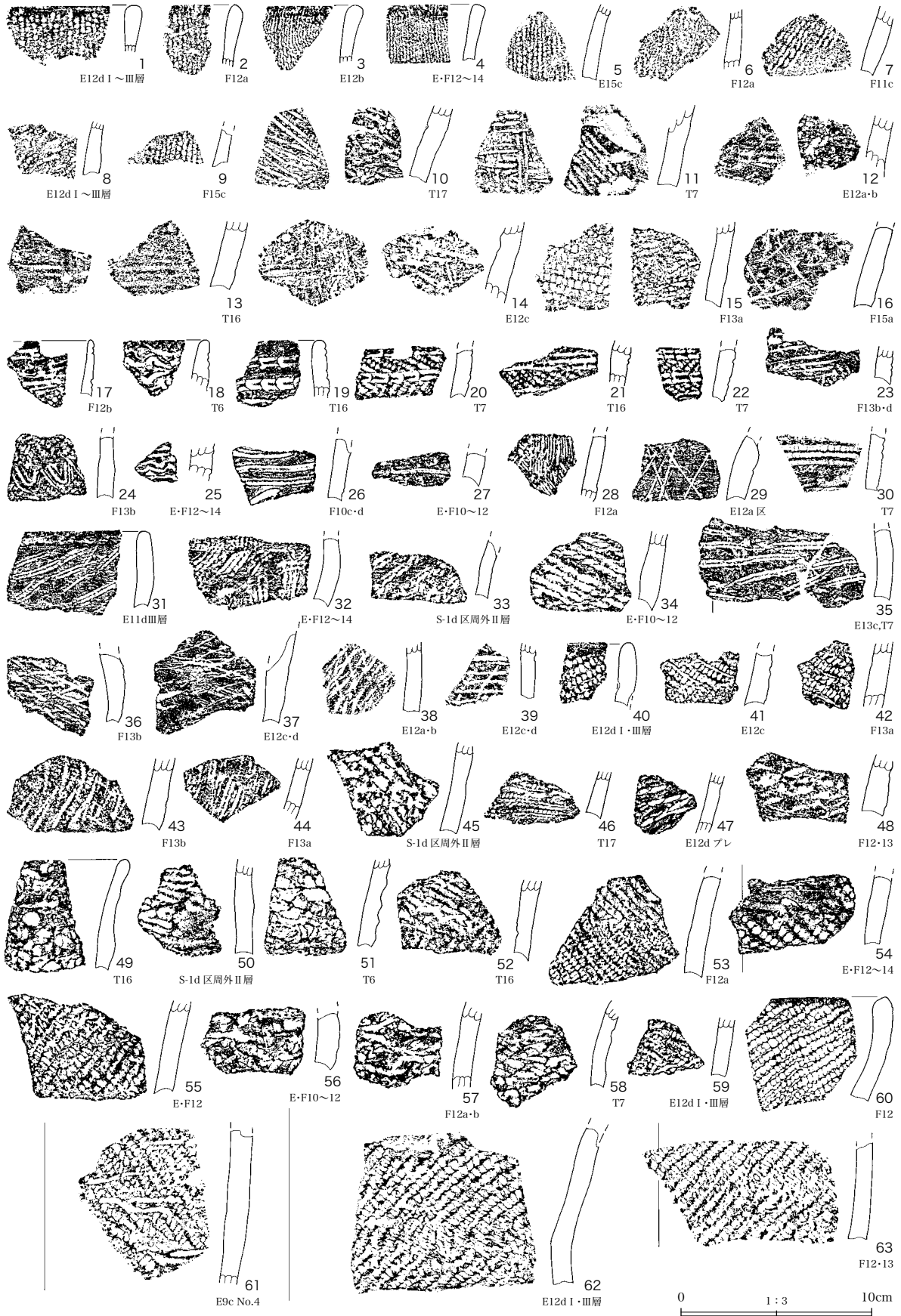
第 100 図 17 以下に示したものは黒浜式である。17～30・39 までが有文例、それ以外は原体施文のみ確認できるものである。有文では沈線、押し引きがあり、21 や 30 も不明瞭だが、沈線内に「とめ」がある押し引きと観察される。30 は繊維の含有が微量～少量で、色調も明るめ（褐灰色）を呈しており異質な感がある。17 の沈線はコンパス文状の施文、28 は条線、29 は沈線による格子目文である。31～39 が撚糸紋・付加条の例で、L2 本（31・32・35）、L と R の 2 本（33）、R2 本（34）、R を格子目に巻く付加条 3 種（37～39）、の例がある。39 は破片上方に沈線が確認される。40 は LR に付加される原体が不明瞭（0 段か）、41 は RL + r、LR + l の羽状構成例、42 は RL + r、43 は LR + R、46 は RL + r である。48～52・57～59 は結節や原体端部圧痕等が確認されるもの。53 は 2 種の原体（R、RL）を用いている例。55 は 0 段 3 条 LR か。56 は 0 段多条もしくは前々段反撚で破片上方に原体施紋後の粘土の覆いが確認される。60 以下は単節例だが、62 では方向を変えている（原体も異なる？）部分がみられる。61 は石英粒を多く含む胎土が特徴的で、原体は RL、時期も早期末～前期初頭の可能性がある。

第 101 図 1～22 は単節・無節の例を主に示す。1～4 は LR で、2 は 0 段多条である。5～13 は L または R の無節のようにみえるが、6・12 等は反撚りの可能性がある。9 は R の縦回転施紋例。10 は直前段合撚＝正反の合か。14・15 は R および RL の 2 種原体使用例、16・17 は擦痕の例である。

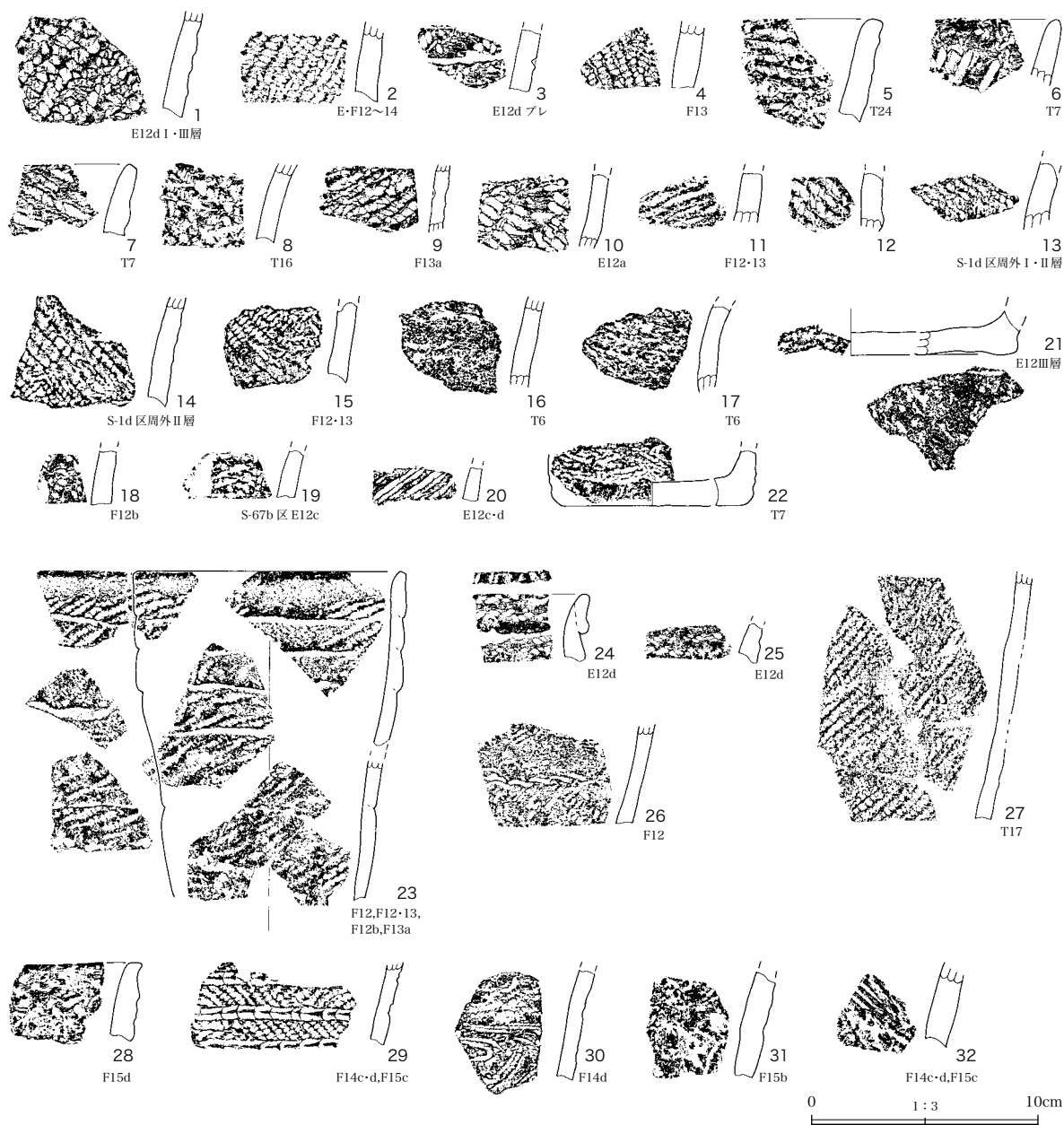
第 101 図 23～27 は無繊維の土器で、23～25 は灰黄褐色、26 はにぶい黄燈、27 は褐色を呈する。石英・雲母・角閃石を多く含むが、とりわけ 27 では多く、小石状の大きな粒も認められる。原体はいずれも LR の横位回転で、23・26 では結節、24・25 では原体圧痕が確認される。24 口端部の刻みも特徴的である。23・24 では輪積み痕を残した成形だが、内面は比較的丁寧にナデられている。

28～32 はゾーン③の内、平成 26 年度に調査した区域から出土した前期黒浜式である。28 は結節、29 には LR 地上に押し引き沈線、30 は 2 本巻き 2 種の撚糸紋（L/L・R/R）、31 は擦痕、32 は無節 R が観察される。

第 102 図には中期から後期初頭の資料をまとめる。1～5 は阿玉台式で、2・3 はやや古い資料か。1 は隆帯上縄紋（無節 L）、直下角押文で通常阿玉台 IV 式とされるもの。6～9 は加曽利 E 式で、ゾーン①・②と概ね対比できる型式だが、出土量はかなり少ない。11～16 の称名寺式も他のゾーンと比べると著しく少ない。13 は口縁下に横位区画隆帯、その下位に列点充填の称名寺式文様が表現されるもので、やや他と異なる。



第100図 ゾーン③遺物実測図(1)

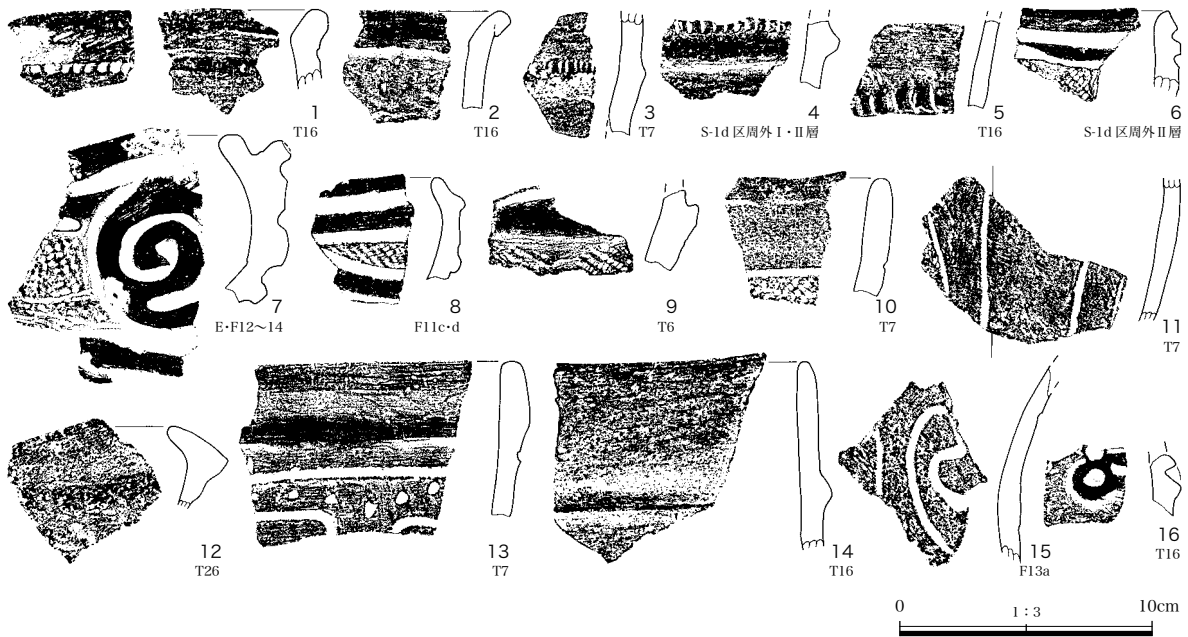


第 101 図 ゾーン③遺物実測図 (2)

12 は口縁が大きく外側に開き、1 または 2 単位の波状縁となろうか。15・16 の体部破片はいずれも沈線のみ施文だが、15 では狭い帯状部内の方が丁寧に磨かれていることが観察される。16 は円形浮文のすぐ上に焼成後の穿孔がみられる。主に内面側から穿孔されており、内面の穿孔径の方が大きい。

第 103 図には堀之内式の復元個体を示し、以下口縁部破片、体部破片の順で示す。明るい燈色基調のものやや暗い灰色基調の例とがある。第 104 図 41・42 のような煤附着例も確認される。

第 103 図 1 は 2 つの大形破片が確認された個体で、やや粗い縄紋 LR 地上に、1 本描きまたは半截竹管状工具による 2 本描きの沈線で文様が描かれる。波頂部から垂下する隆帯上に押捺が加えられるが、口縁端部にかかる口縁直下部分および、下端の頸部区画にかかる下 2 つの凹部では刺突が加えられ、8 の字状の表現 (8



第 102 図 ゾーン③遺物実測図 (3)

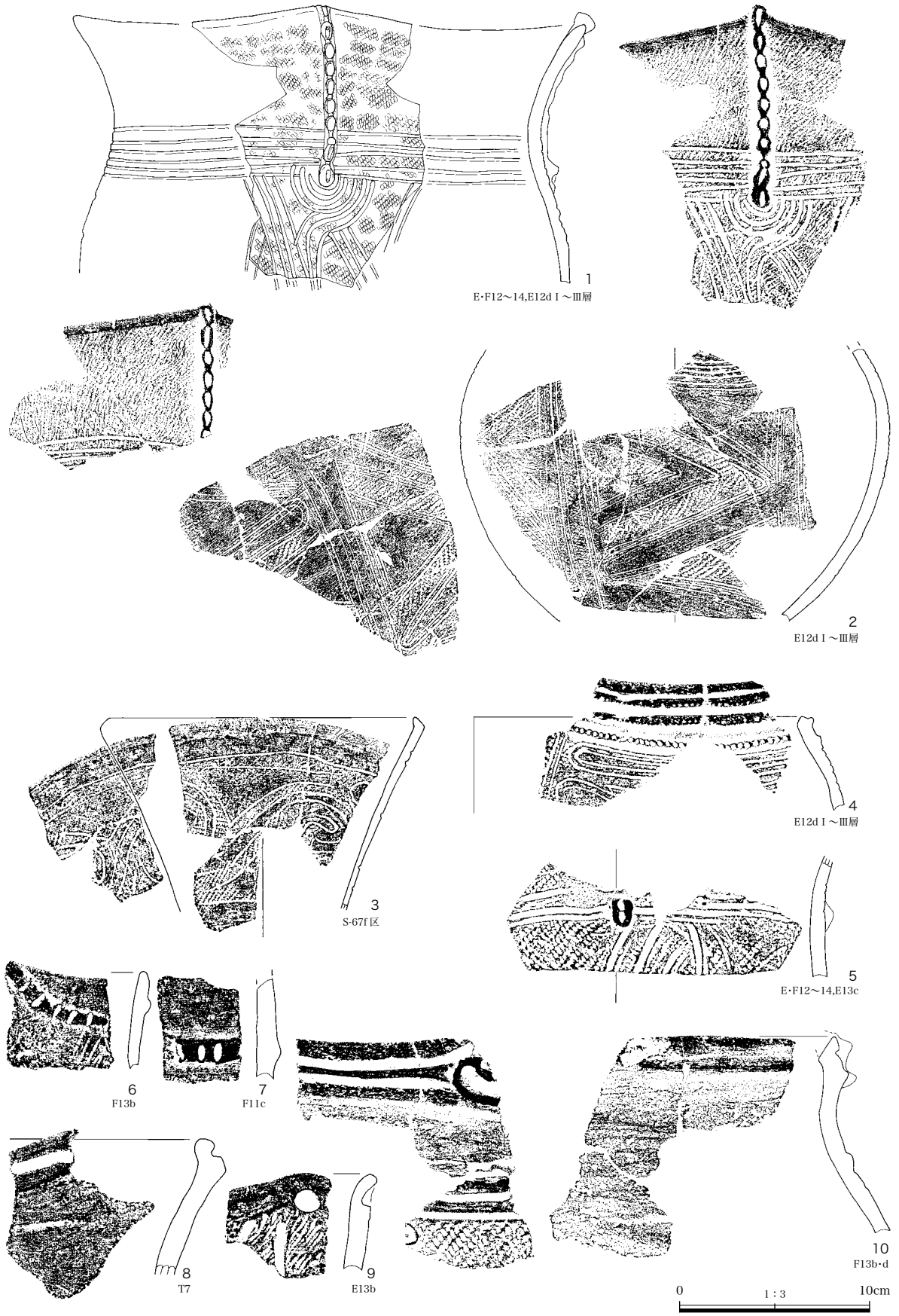
の字中央交点も凸部状に前面に突出) になっている点に注意される。色調はにぶい黄燈色で、内面は良く磨かれている。

第 103 図 2 はにぶい黄燈色を呈する大形破片で、二次焼成による黒変および煤付着が認められる。胎土には石英・白色粒を多く含む特徴がある。破片左上位はかなり摩滅している。半截竹管状工具による 2 本描き沈線→縄紋 LR→無文部ミガキで、沈線はかなり浅い施文。破片上位に一部みえる横位多重の沈線が、屈曲する頸部の区画線かと推定される。斜行文の組み合わせで三角形の文様構成を表現しており、頸部区画より上位が不明なもの、注目される個体である。

第 103 図 3 はにぶい黄褐色を呈する大形破片。外面煤・炭化物付着が確認される。沈線→縄紋 LR→無文部ミガキだが、ミガキは不徹底で、帯状部以外の縄紋はみ出しが消し切れていない。沈線は浅めで 2 本沈線による帯状部の幅が不定なところも目立っており、やや雑な作りという印象を受ける。内面のミガキは丁寧、下方は変色している。

第 103 図 4 は口縁が内傾する土器で、やや大形の注口土器となろうか。縦方向の区画線、その間の平行沈線で描かれる流水文状の表現が特徴となる。5 は縄紋 LR 上に沈線表現がなされるもので、単独的かのように付される 8 の字突起が注意される。6 は頸部隆帯下に条線?がある土器で、薄手の作り、石英粒をかなり多く含む胎土、隆帯上の細長い刻み等、他と異なる特徴を示している。異系統の可能性もあろうか。10 は拓本でも示されるように破片右上の口縁裏側で剥落が認められ、突起が付されていた可能性がある。口端部内面には稜(稜による縁带状の作出)が観察される。

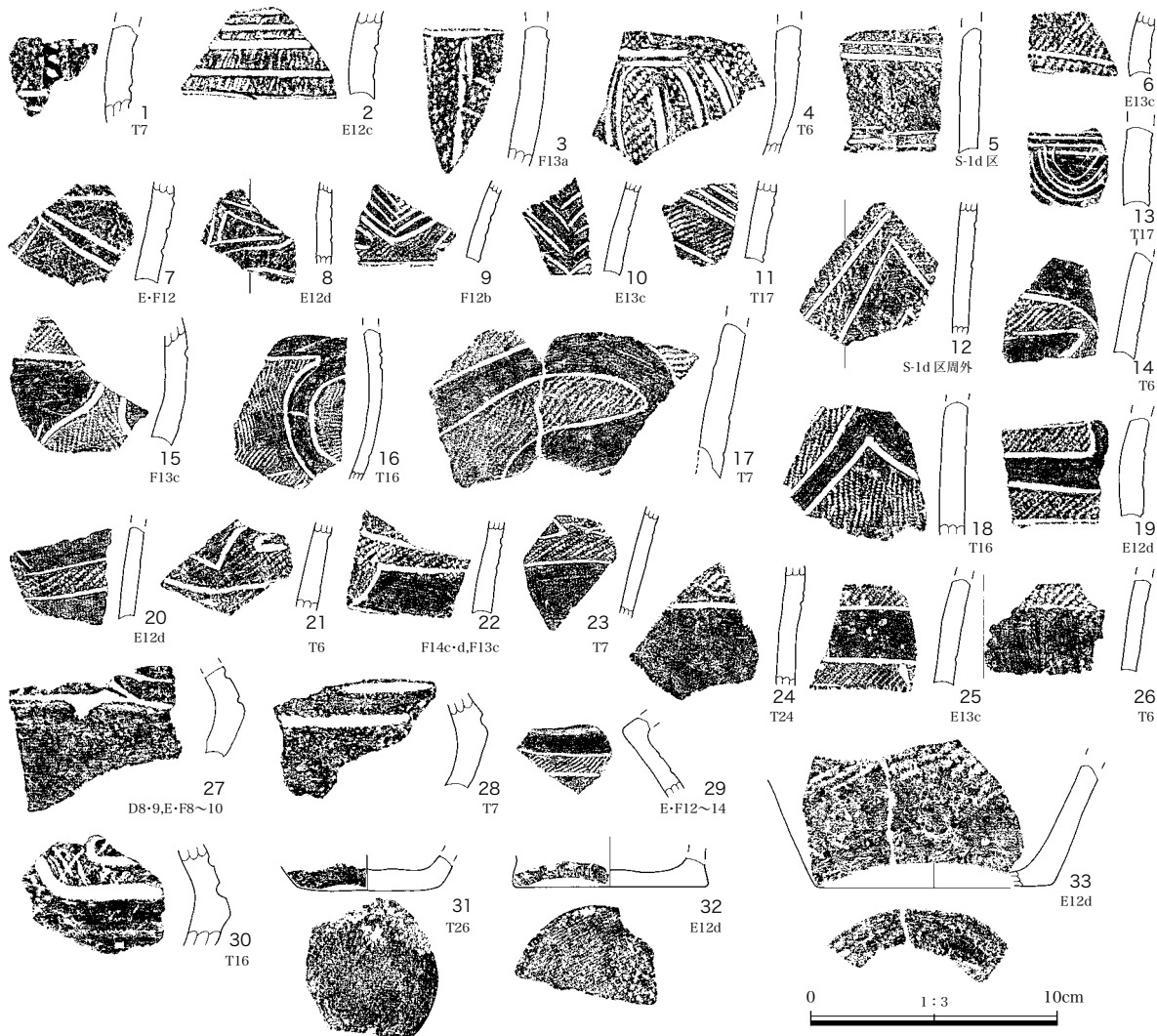
第 104 図 上段に堀之内式口縁部破片を示すが、堀之内 2 式または 2 式に近い時期の破片が目立つ。8 のような縄紋→沈線の例と、15・16 のような沈線→縄紋→無文部ミガキの工程が観察されるものがある。18～22 は縄紋のみの破片で、20 のようにやや粗い縄による粗製的なものもある。23～25 は注口土器で、25 の把手部分の角度は図より内傾すると考えた方が良くもしいない。26 以下は体部破片で、縄紋地上に沈線で文様が描かれるものが主体である。28 は刺突充填例だが、円形竹管をやや角度をもって刺すように施



第103図 ゾーン③遺物実測図(4)



第104図 ゾーン③遺物実測図(5)



第105図 ゾーン③遺物実測図(6)

文しており、左上の一部では円形に近い刺突、それ以外では半円状の凹部となっている。48の頸部区画を有する破片では、区画より上位の頸部が良く磨かれている点、頸部に剥落しているが、8字添付文が付されていたことが観察できる。

第105図には堀之内式の体部破片を示す。やや特徴的な例では8がある。復元した径はかなり小さく、小形土器や深鉢以外の器種も考えられるが判然としない。平行沈線による文様も特徴的である。16もやや異質で、横位区画?と連続する弧状無文部(円文?)は丁寧に磨かれている。かなり薄手で白っぽい色調も特徴的である。27・28・30は鉢または注口付き鉢で、堀之内1式でもやや古いものが多いようである。29は蕃神台類型の注口土器。底部では32のみ明瞭な堀之内2式特有の張出底である。

遺構外出土遺物

本項目では、縄紋時代以外の遺構および時期判定のできない遺構から出土した遺物を、各遺構から抽出し、掲載した。SK-11～SK-79の遺構および当初遺構としてとりあげた資料を第106・107図に示す。

SK-11：5点出土しており2点図化した。1は体部に縄紋RL、口縁端部に沈線が巡らされるもので、堀之内式とも思われたが、加曽利E式の蓋然性が高い。2はミガキの顕著な堀之内内式である。

SK-13：2点出土しており1点図化した。1は胎土に石英・雲母を多く含む加曽利E I式。

SK-18：出土している1点を図化した。1は条線施文で称名寺式もしくは堀之内内式。

SK-19：2点出土しており1点図化した。1は黒浜式で、撚糸R2本巻きと観察される。

SK-20：出土している1点を図化した。1は堀之内内式で、破片上位に縄紋LRが観察される。

SK-21：20点出土しており2点図化した。1は堀之内内式で、縄紋LRと浅い沈線が観察される。

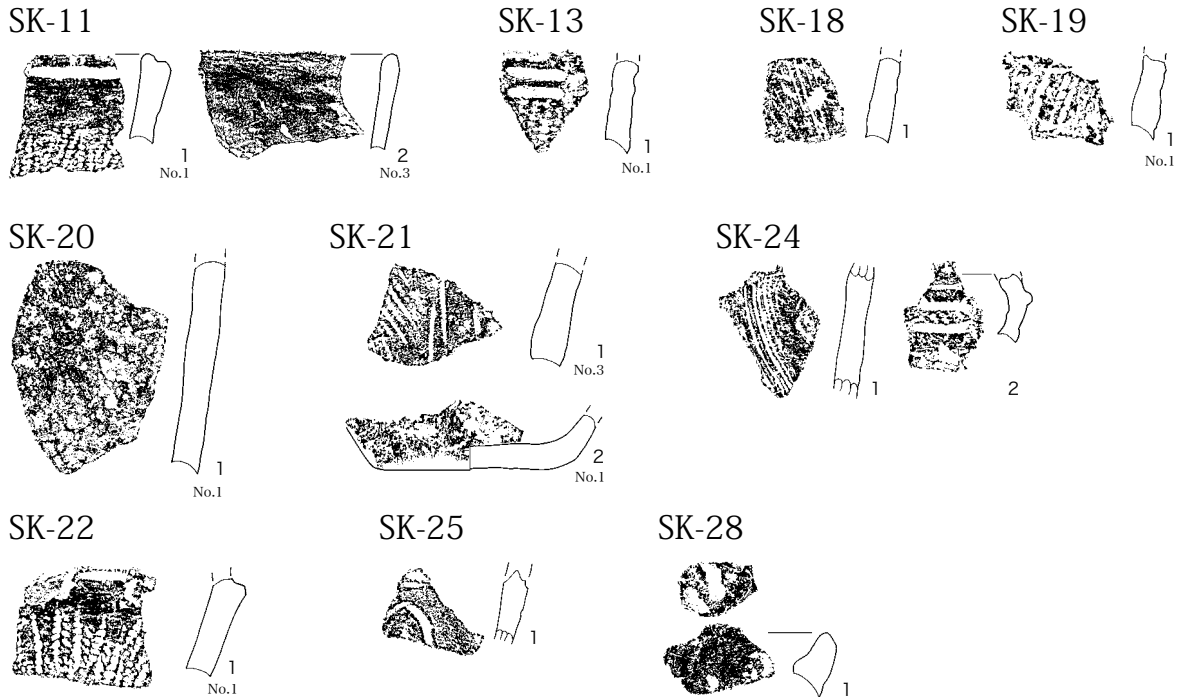
SK-22：出土している1点を図化した。1はRL+L付加の土器だが、繊維は含まれておらず、隆線の特徴からも加曽利E I式～同II式と思われる。

SK-25：2点出土しており1点図化した。1は沈線のみ施文で、おそらく堀之内1式。

SK-28：出土している1点を図化した。1は口縁突起部分で、おそらく堀之内1式。

SK-26a：土器は36点出土しており14点図化した。他にSK-26で13点、SK-26bで4点の出土がある。1～5は加曽利E式（前半）で、扁平な渦巻文が描かれる1はやや注目される資料か。6以下が後期で9・10のみ称名寺式の可能性がある。10は帯状の隆帯、この上位沈線区画内？に縄紋RL。一部に煤炭化物付着が確認される。隆帯上・内面とも良く磨かれている。器種形態等不明な点が残る。

SK-40：15点出土しており3点図化した。1は加曽利E I式、2・3は称名寺式～堀之内1式で、2の格子目文沈線はやや浅い施文である。



第106図 縄紋時代遺構外遺物実測図(1)

SK-41：調査途上で遺構ではないと判断した欠番のものである。11点出土しており3点図化した。1・3は堀之内2式、2は沈線と列点が確認され、称名寺式か。

SK-44：出土している2点を図化した。1は加曾利E I～II式、2は堀之内2式。

SK-79：当初単独の土坑として扱ったSZ-66方形周溝墓主体部と判断した土坑である。6点出土しており2点図化した。1・2は同一個体の可能性もある。いずれも比較的丁寧なミガキ調整が確認される。

第108図には、SK-86～125の遺構および当初遺構として扱ったところの遺物を示す。

SK-86：中世の地下式坑で、241点出土しており1点図化した。1は覆土出土片とP1出土片とが接合した加曾利E I式の口縁部破片である。示していないが同一個体の小片2点がある。縄紋RL→隆帯→沈線・隆帯上ミガキで、頸部にも僅かだが縄紋RLの痕跡が確認される。このことから「頸部無文帯」は無いと考える。口縁部と口頸部に同種同方向の隆帯渦巻文が重ねて配置されている点が注目される資料となろうか。

SK-90：15点出土しており2点図化した。1は条線、2は沈線施文で、いずれもおそらく称名寺式末～堀之内1式初頭の範囲であろう。

SK-92b：2点出土しており1点図化した。1は口縁部に沈線および円形浮紋・刺突が施されるもので、堀之内1式となろうか。

SK-93：2点出土しており1点図化した。1は沈線による帯状部表現がうかがえるもので、破片右端に見える線状痕は、充填の短い条線かもしれない。

SK-101：37点出土しており4点図化した。いずれも称名寺式末または堀之内1式である。1は第35図8と同一個体で、8の左上に接合することが判明した。図の修正は加えないが、明記しておく。2は浅い沈線による表現があるもので、部分的には帯状部表現をとどめているようにもみえるものの、かなり崩れている構成ともとれる。3は沈線および円形竹管垂直刺突が確認されるもので、列点充填部外側が良く磨かれている。4は磨消＝無文部ミガキが顕著なもので、石英・雲母の多量含有も特徴的である。

SD-70：230点出土しており4点図化した。1・2が加曾利E II式、3・4が後期堀之内式である。

SK-91：2点出土しており1点図化した。1はやや雑な施文の沈線が確認されるもので、示していないが同一個体の小片1点がある。全体の意匠等不明だが堀之内1式であろうか。

SK-114：記録不備で総点数は不明であるが、図化は3点である。1は半截竹管による沈線施文の黒浜式で、この式としては赤味の強い色（にぶい赤褐色）を呈している。2は頸部の低い隆帯より下位に沈線および刺突を施しているもので、堀之内1式となろうか。3は比較的幅のある沈線による表現がなされるもので、堀之内1式の可能性が高い。

SK-165：当初遺構扱いであったが、欠番となった場所から出土したものである。3点出土しており2点図化した。1・2とも黒浜式で、1では沈線による表現があるようだが、不鮮明でよく分からない。

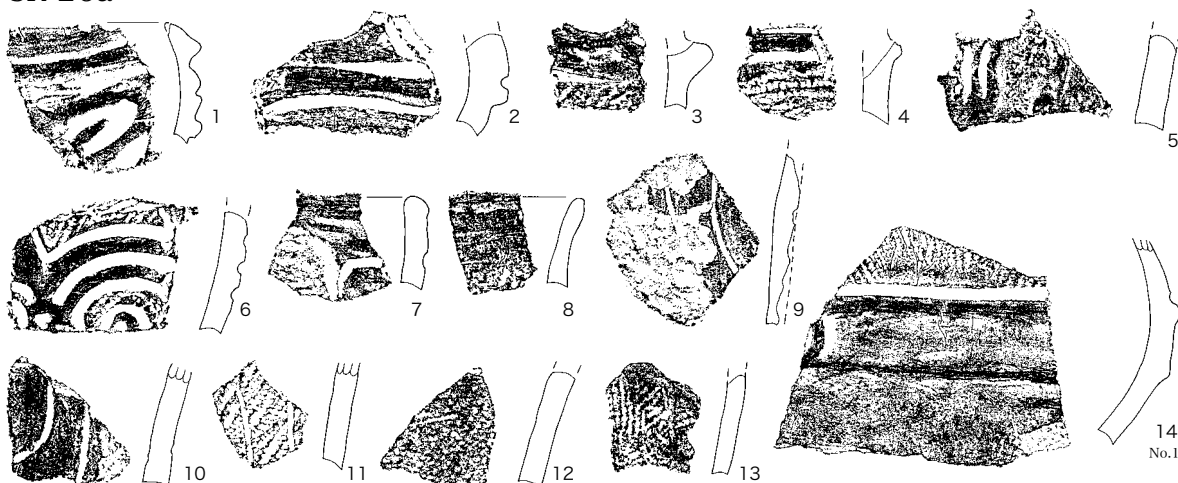
SK-119b：SK-119は中世の土坑で、周辺含め27点出土しており4点図化した。1・2は黒浜式の付加条原体の土器で、2は撚糸R1本巻き、1はR?の2本巻き付加である。3は加曾利E式で口縁部の簡略的な構成の文様＋頸部無文帯の配置が注目される。4も加曾利E I式の土器か。

SK-125：6点出土しており3点図化した。1は黒浜式の沈線施文の土器。2は無節Rとみられるが反撚りの可能性もある。3は単節LRだが節幅が狭く0段多条もしくは前々段反撚りの可能性が高い。

第109図にはSK-208等、5遺構の出土土器を示す。

SK-208：2点出土しており1点図化した。遺構は、中世の土坑である。1は縄紋地（無節R?）上に沈線による文様を加えられるもので、堀之内1式新段階もしくは同2式。

SK-26a



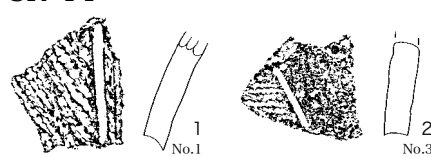
SK-40



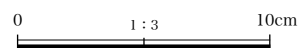
SK-41



SK-44



SK-79



第107図 縄紋時代遺構外遺物実測図(2)

SK-210：6点出土しており2点図化した。1は黒浜式だが不鮮明で原体不明。2は格子目状に沈線が確認されるもので、堀之内式と推定される。

SK-133：7点出土しており1点図化した。1は黒浜式で無節R?に撚糸紋R、Lが付加されている。

SK-129：中世以降の土坑で、2点出土しており1点図化した。また、SK-129bから2点出土している。1は底部に近い無文の土器で良く磨かれている。内面に焦げ・炭化物の付着もみられる。

SK-126b：16点出土しており9点図化した。SK-126全体では17点の出土がある。1～4は黒浜式で、1は有文の口縁部破片。破片下端近くはやや幅広で浅い沈線、上位の浅い線状痕も沈線となろうか。2は器面に凹部や凸部があるもので、凹部は沈線施文のようにもみえるが判然としない。3は厚手で褐灰色基調のやや大形破片で、繊維をやや多く含む他、雲母や石英もやや多めである。内面上位はミガキに近い比較的丁寧な調整。外面の沈線はナデ調整後に比較的深く施文されているもので、3～5cmの長さで2本1単位の線が密に施されている。線の左右端部が揃っていることから2本1単位1工程での施文であろうが、いわゆる半截竹管状工具による細い線とは異なり、また線と線の間(5mm位ある)も丸みを持たない等、施文手法については検討を要する。4は無節Rの破片、5は直前段合撚りでLRとRLをLに撚り合わせているもので、繊維の含有が少ない点も特徴となる。6は縦方向の結節縄紋が確認される中期初頭の破片。7は区画内に半截竹管

状工具による沈線充填がある口縁部破片で、加曾利 E I 式となろうか。8 は RL 縦方向施紋に蛇行沈線が加えられるもの。9 も RL 縦方向縄紋に沈線が施されているもので、加曾利 E I ~ II 式の資料となろう。

第 110 図には SK-96a 出土の土器を示す。SK-96a は中世の地下式坑で、SK-96 全体では 371 点の縄紋土器が出土している。1 は約 1/2 遺存の浅鉢である。内外面ともに燈色基調だが、1 次焼成時の黒変部分がある他、底部内面近くは褐灰色を呈している。胎土には石英・白色粒をやや多く含むが、粒径は小さめなものが多く比較的緻密で硬質な感を受ける。内外面・底面とも入念に磨かれているが、3 ~ 5 mm 幅のヘラ状工具によって、ミガキ調整痕跡は明瞭に観察される。成形時の輪積み痕跡も接合痕として確認できる。口縁付近の屈曲部分で外面はなだらかとなっているが、内面では稜が作られている。

調査区内出土遺物

調査区内出土資料を第 111・112 図 1 ~ 15 に示す。出土グリッド等が不明なもので、踏査時の資料、排土中の資料、重機掘削時の出土遺物等を含む。ゾーン①、②とした調査区中央~西側の資料が多いようにも思われるが判断し得ない。

1 は条痕紋系土器で、木口状工具による条痕と推定される。表裏条痕で、断面右側に外面を示している。2 ~ 17 が黒浜式で末端・環の圧痕 (7・8)、付加条・撚糸紋 (9・10)、R と L の 2 種原体 (11)、0 段多条もしくは前々段反撚り (12) 等が確認される。13 が無節 L、14 以下は単節縄紋 (16 は反撚りか) である。

18 は縦方向の縄紋・結節が観察されるもので、中期初頭と推測される。ゾーン②第 80 図 8 や第 108 図 SK-126b-6 と同一個体の可能性がある。19 は阿玉台式頸部~体部の破片。20 ~ 26 は加曾利 E 式で、さほど時間幅が無いように思われる。24 は頸部無文帯を有するもの、25 は破片左端近くの隆帯剥落部で、縄紋 RL が明瞭に観察される。25 の破片下端近くでは RL の縦方向回転の一部もみられる。小石状の大粒な石英粒をかなり多く含んでいる。

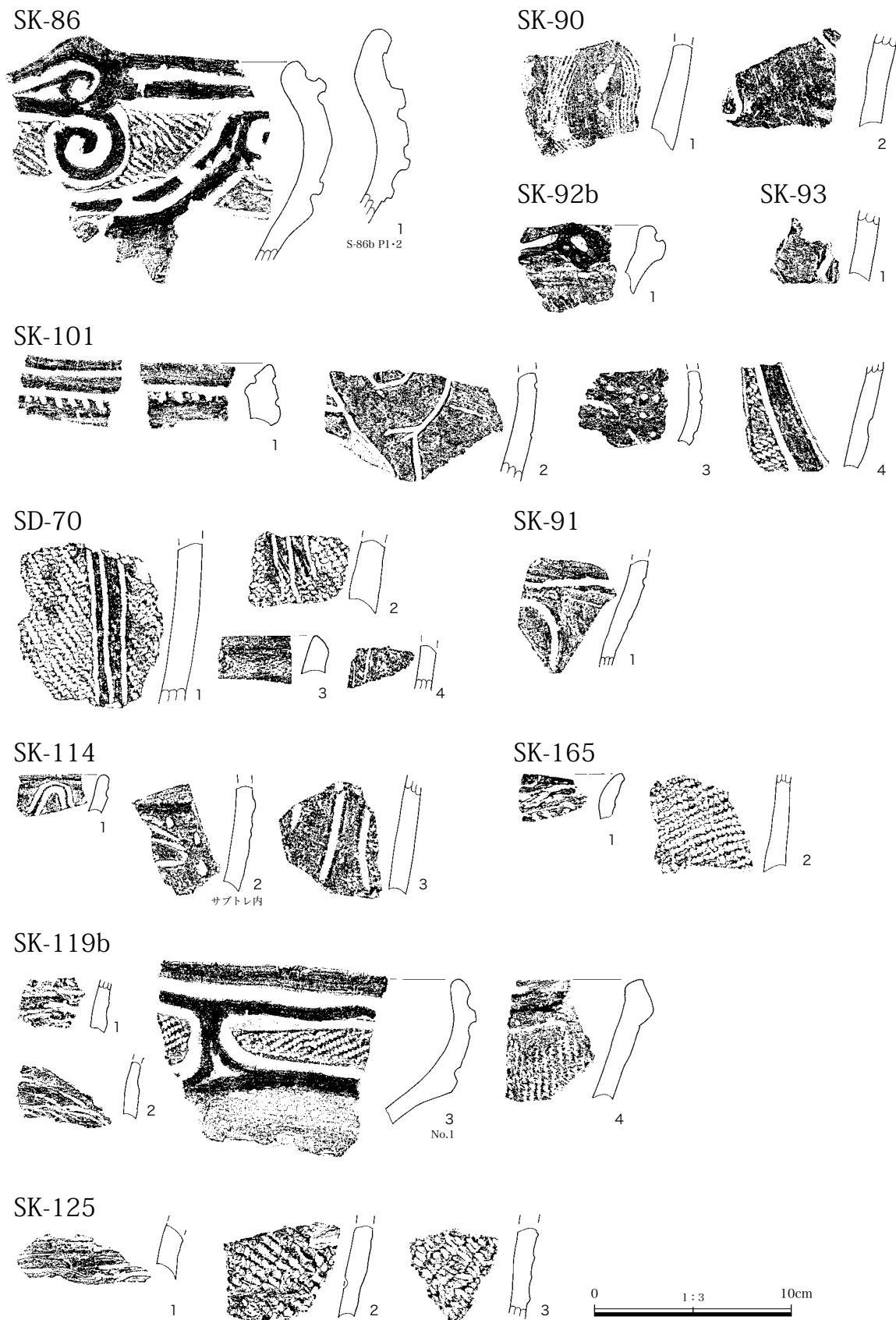
26 以下は後期の資料である。にぶい燈色、にぶい黄燈色あたりの色調のものが多く、石英や白色粒を多く含む胎土の例が幾つかある。26 は加曾利 E 系の破片だが、隆帯脇の調整がシャープさに欠けること等、後期の特徴を示す。27 以下に称名寺式を示すが、帯状沈線間に縄紋を充填する例は限定的で、列点充填または沈線のみが主体である。35 のような等間隔帯状構成のものも少なく、不均等な幅の例 (33 等)、交互充填とならない例 (41) 等、構成の乱れているものが目立つ点は注意される。41 の列点は楕円形の竹管状工具による垂直に近い刺突が観察されるもので、他に例をみない異質な施文である。

42・45 はいわゆる綱取式系の破片で、堀之内 1 式期となる可能性もある。42 は突起下に J 字状の意匠が隆帯および隆体上の沈線によって描かれる。隆帯そのものは低いが、沈線端部の刺突は深くなっている。頸部隆帯に加えられる押捺はやや浅めである。44 の円形刺突はかなり深い。

第 112 図 1 ~ 15 は堀之内式で、同 2 式となる資料が多い。燈色~褐灰色あたりの色調で硬質緻密な感を受けるものが多い。2 や 12 では小石状の石英粒を含んでいる。1 ~ 4 が頸部に第一次区画を有するもので、3 は意匠内に短い条線を充填している。8 は縄紋地上に沈線が描かれるものだが、内面の凹部も沈線とみることができ、堀之内 2 式となろう。9 の紐線直下に描かれる集合沈線は縄紋 LR 施紋後で、紐線上の刻みもやや雑な施紋であること等、やや異質な資料である。14 は隆帯上に刻みを有するもので、隆帯上・無文部とも良く磨かれており、深鉢以外の器種となる可能性もあろうか。

T 8 出土土器

今回の整理において、原則トレンチ出土資料はグリッド、ゾーンに戻して整理しその区分毎に示しているが、



第108図 縄紋時代遺構外遺物実測図(3)

T8のみメインの調査区からやや離れていることもあり、ここで別途示す。出土土器総点数は不明だが、型式別の傾向等はゾーン①包含層資料と大きな差異は無さそうである。

ここで示す資料はいずれも後期の資料で（第112図）、1～4が称名寺式、5以下が堀之内式となろう。4の列点は円形竹管の垂直刺突で、比較的密な施文である。10は薄手で黒味の強い色調（褐灰色）で、やや異質な感を受けるが、器面が荒れており文様は不明瞭である。11も薄手で灰黄褐色のやや異質な質感の土器で、密な細かい刺突充填から三十稲場式と捉えられるものである。やや小形で胴が膨らむ形となろうか。

調査区外

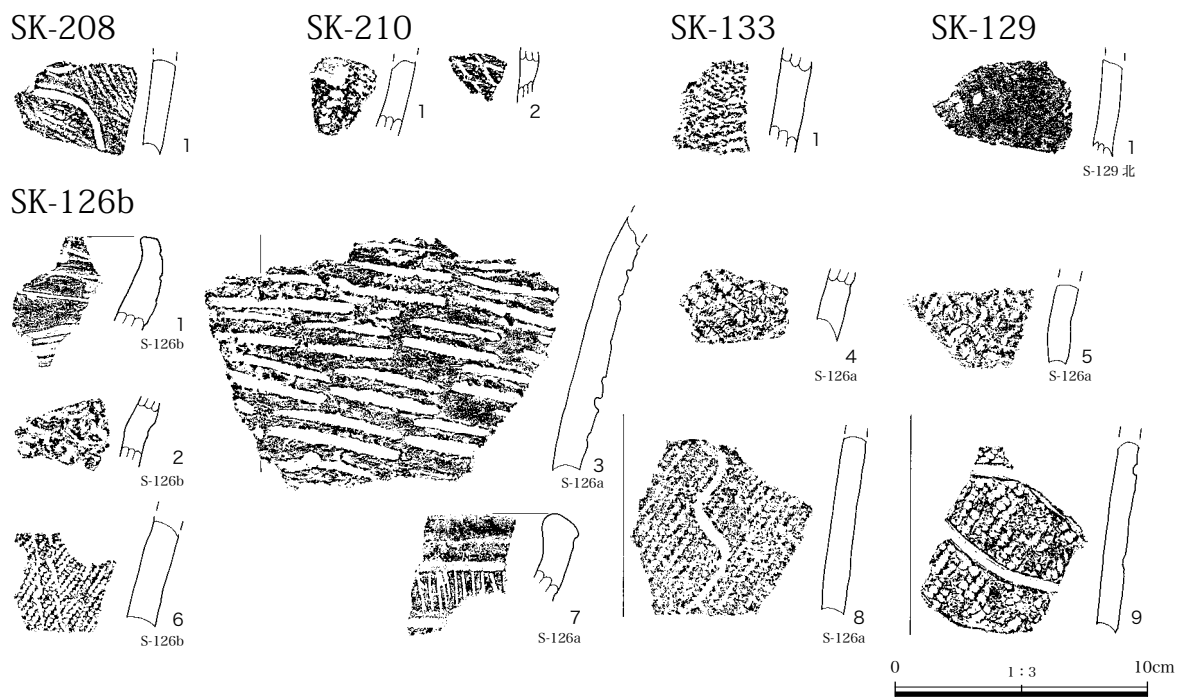
遺跡内の調査区外（調査区隣接地等）から採集した資料を第112図に3点示す。1・2は加曾利E式（前半）で、3は繊維を多く含む単節縄紋施紋の黒浜式である。

第112図右の2点は調査時に駐車場として利用した場所から採集した資料である。今回の調査区のある台地からは数m下位の低い段丘面であるが、ほぼ隣接する新4号国道関連での発掘調査時には中世の遺構群も確認されている段丘面であり、周辺の畑地からも比較的多くの遺物が認められている。土師器や近世陶磁器の資料も採取しているが、ここでは縄紋時代の資料2点のみ示す。いずれも後期称名寺式である。1は沈線および帯状区画内の条線が確認されるもの、2は比較的幅のある沈線が確認できるものである。

第113図には横倉戸館1号墳出土縄紋土器を示す。戸館1号墳の確認調査時にトレンチから出土した縄紋土器が約20点あり、ここで10点を示す。1は黒浜式で無節R・付加条が加えられているようにもみえるが判然としない。2・3は中期の資料である。2の破片右端の隆帯は剥落しており主文様は不明であるが、隆帯脇の細く細かい爪形文は破片下端でも僅かだが認められ、破片割れ口直下に文様帯下端区画が推定される。4は細かい節の縄紋が充填される堀之内2式深鉢の破片、5は小片で不鮮明だが、堀之内1式の破片か。6は縄紋LR施紋の黒浜式で、補修孔は内外から穿れている。7も黒浜式で底部外面が比較的丁寧に磨かれている。8～10は堀之内式で垂下する部分や、斜行部分の無文部等で文様が表現されている。縄紋が磨消されず残っているところも観察される。

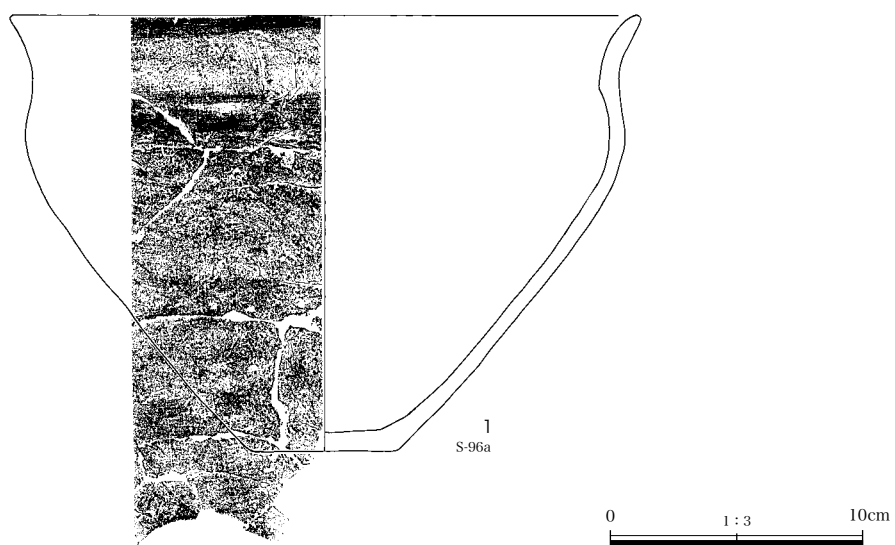
第114図には横倉戸館古墳群表採の土器を示す。調査区外の戸館古墳群内の踏査時に採集した資料の内、縄紋土器3点をここに示す。遺憾ながら詳細な場所を記録しておらず、5号墳の可能性が高いものの、不確かである。

第114図1は加曾利E I式でかなり厚手で大きな土器となろう。文様表現の隆帯もかなり高さがある。2は称名寺式末～堀之内1式の土器で、隆帯上に浅い押捺、下位に楕円形の浅い刺突充填が確認される。3は黒浜式で沈線により斜方向～矢羽根状の意匠が描かれる。



第109図 縄紋時代遺構外遺物実測図(4)

SK-96a

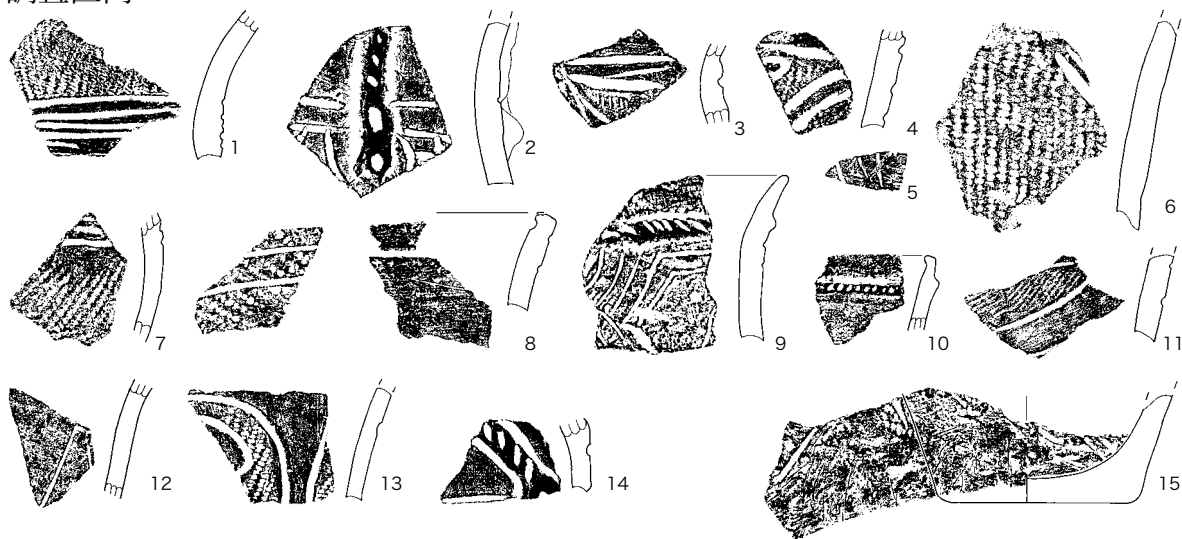


第110図 縄紋時代遺構外遺物実測図(5)

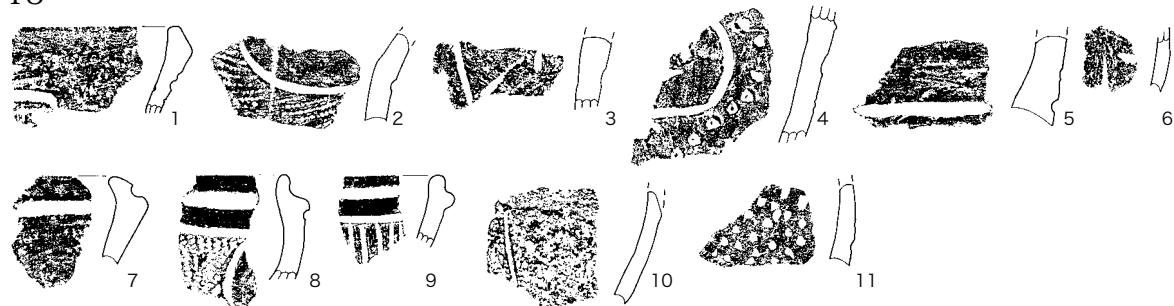


第111図 縄文時代遺構外遺物実測図(6)

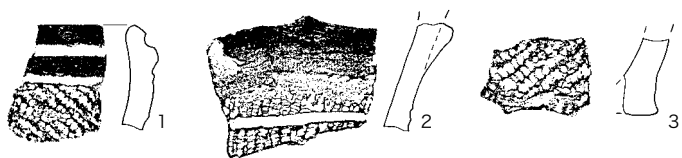
調査区内



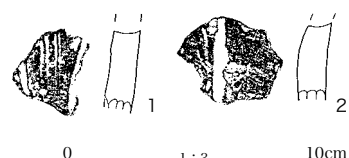
T8



調査区外

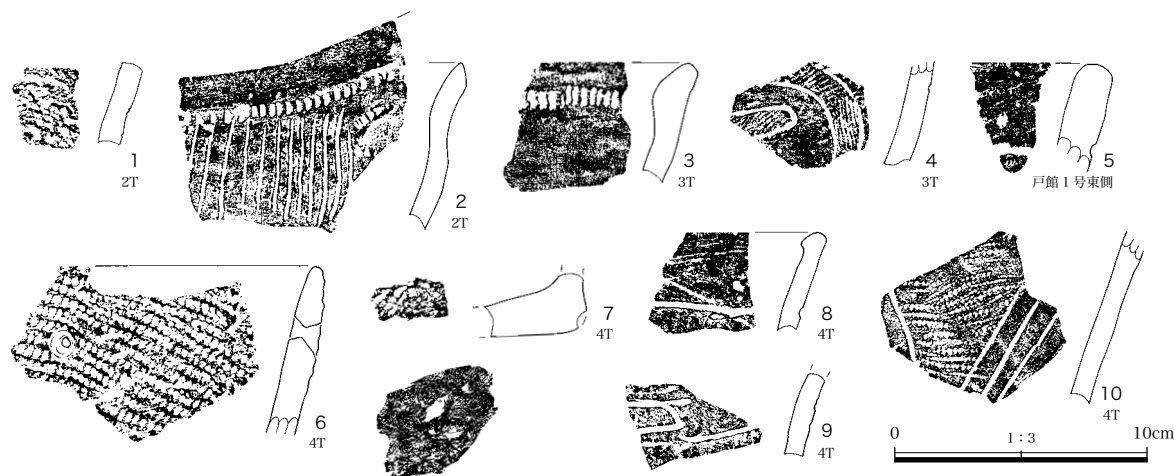


北P表採



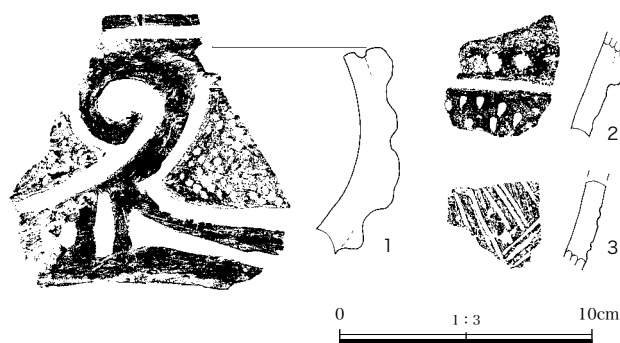
0 1:3 10cm

第112図 縄紋時代遺構外遺物実測図(7)



0 1:3 10cm

第113図 横倉戸館1号墳遺物実測図



第 114 図 横倉戸館古墳群遺物実測図

4. 土製品

概要と整理の方法

横倉遺跡から出土した土製品としては、器台、蓋、貝輪状土製品、棒状土製品、土製円盤、焼成粘土塊がある。ミニチュア土器についても、ここで扱う。縄紋土器同様、遺構外の包含層から出土したものや、縄紋時代以外の遺構覆土から出土したものが大半を占める。特徴的な出土状態を示したものは無く、また土器や石器と異なる出土状態や傾向は認められない。

整理では、土器と区別しつつ、土製品の種別分類も行い、その後図化を進めた。以下では、それぞれの土製品について、観察表と併せて若干の記述を付すことで概要提示とする。それぞれの点数が少ないことから、分類は行わない。

器台（第 115 図、第 8 表、図版六〇）

4 片の出土を確認したが、1・2 は同一個体と判断しており、個体数としては 3 点となる。1～3 は器壁 2 cm 程の厚さがあり、やや小さめの 4 も含め厚手の作りである。4 点の質感・胎土等、大きくは類似しているが、更に付け加えれば、中期土器の質感に近く、類例等を含め考え、4 点とも中期の所産と推定できよう。詳細な検討を経ていないが、加曽利 E I 式あるいはその前後のものであろう。

1・2 は調査区西端近くの包含層から出土したもので、2 片は 2.2 m 程の距離を経て出土している。ローム面よりやや上位の包含層中である。径の復元をなし得なかったが、20 cm を超える大きさが推定される。但し 1 の縁部分が整った弧をなしておらず、平面形正円とならない可能性もある。接合せず、両者の個体の中での位置対応関係は不明である。

やや分かりづらい図示だが、図での上側の沈線は破片右割れ口近くで L 字状に上位に屈曲し、更に S 字状に回って右方向に延びる描線と観察される。2 の破片でも単純な平行弧線ではなく、L 字状に屈曲し、更に小さく弧状となる部分もあり、全体像は不明ながら、かなり図形的な文様が描かれていることも推測できる。

3 も、径を復元しなかったが、弧の推定からは 30 cm 程度の大きさが考えられる器台である。破片上端近くに透かし孔とみられる割れ口の無い部分があり、側面での形状からは円形の透かし孔が推定される。4 は器台の底面設置部と推定される破片である。

蓋（第116図、第8表、図版六〇）

SI-76 出土で1点があり（第25図）、これに第116図の例を加える。但し第116図3はひさご形注口土器器体部破片と判断することから、遺跡内の合計は10点の出土点数となる。完存に近く、形態の判明する例はSI-76の1点と第116図1の計2点のみで、残りは小片である。総じて薄手の作りで硬質な感を受け、土器との対応では称名寺式・堀之内1式の作りや質感に近い。色調では1～3が燈色・にぶい燈色に近いが、残りは白っぽい色（浅黄燈色等）を呈している。有文例は1のみで、残りはブリッジ部分や貫通孔の認められるものはあるものの、図形的な文様表現は認められない。総じて表裏面とも良く磨かれているが、7の内面調整はやや粗い。

SI-76の1（遺構図23）は頂部把手つまみ部を欠損するが、残りは遺存しているほぼ完形の例である。既述のように、やや雑な作りという印象を受ける。

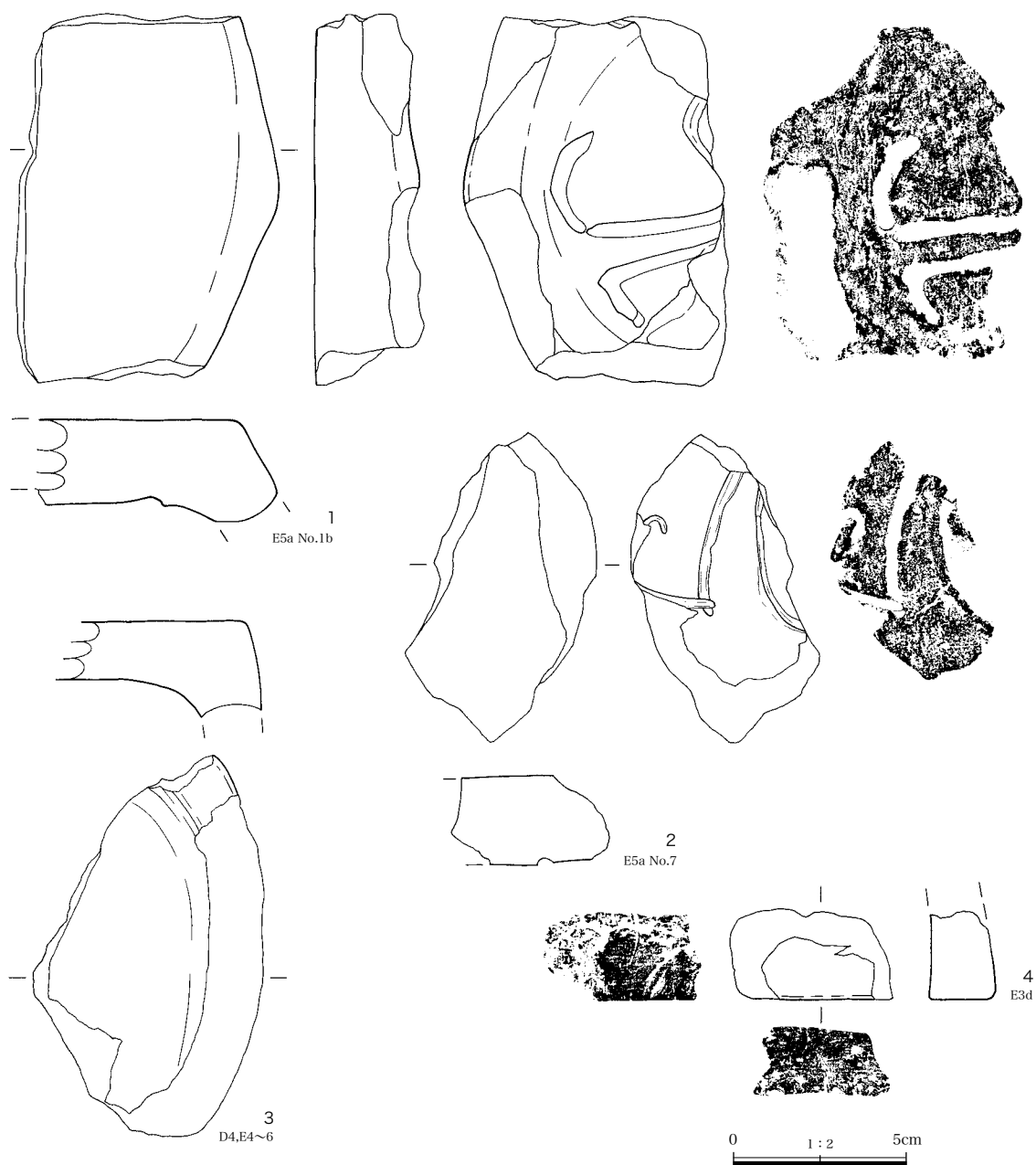
第116図1はやや注目される資料で、図での左側縁が欠けており、やや楕円の平面形となるようである。中央左右に貫通孔があり、これを繋ぎする凹部、この凹部の上下～側縁にかけてのほぼ前面に、微隆起線・凹部および刺突による文様が展開している。一見ランダムな凹部の配置にもみえるが、貫通孔を結ぶラインを挟んでシンメトリーに近い配置ともみることができる。2では貫通孔1カ所が確認される。5や7等と共に、頂部に至る角度が比較的ある形態例である。8では破片上右端が厚く盛り上がり、橋状把手に近い部分であることを推測させる。5は割れ口部分から把手が推定できる破片で、9も割れ口部分から把手付きの可能性はある。残りは平坦な面のみみられるもので、その遺存部分からは、把手の有無は判断できない。

ミニチュア・棒状・貝輪状土製品（第117図、第8表、図版六〇）

1～3はミニチュア土器として示すものである。小形の土器との区別は明瞭では無く、便宜的なものである。土器図版中に示したもので、ミニチュアとすべき例があるかもしれない。後晩期のミニチュア土器は、通常一般の土器文様を描かないものがみられるが、本遺跡出土例は量も少なく、土器文様との差異はよくわからない。2点は無文で、微隆起線がみられる2についても全体の文様構成は不明である。胎土等での特徴は、やや鉍物が少ない傾向はあるものの、大きく土器と異なるような特徴はみられない。1は口縁に山形状の突起を有しているもので、突起右側縁から口縁直下にかけて細かい刻み列が観察される。摩滅で不鮮明だが円弧、C字状の僅かな隆起部に連続する刻み目とも捉えられようか。2は壺形に近い形態で、この大きさの破片としては高さがある隆起線を有している。3はミニチュア土器とすべきか判断に迷う例で、蓋等の土製品かもしれない。器体が比較的歪んだ弧をなしており、波状あるいは右縁部が内側にやや内折する、口縁上面が円とならない形態である可能性もある。古代の住居跡SI-75出土であり、縄紋時代の製品ではない可能性もあろうか。

4・5は貝輪状土製品で、確認できた2点を示す。小片で判断できなかった例もあろうが、堀之内2式までと時期がほぼ限定できる遺跡で確認し得たことは注意される。詳細な比較検討はしていないが、質感・作り等は寺野東遺跡出土例と類似している。4は径10cm程度と推定される破片。厚さはやや不定で、破片上端近くはやや厚く、割れ口からは2枚の板状粘土を合わせたの成形方法が確認される。5はやや高さがある例で、同じく径10cm程度のものとなろうか。上端を上面からみると比較的明瞭なくの字状屈曲が確認され、模倣元の素材形態を示している可能性がある。

6は棒状土製品と分類したものだが、図の裏側では剥落面のようにみえる部分もあることから、土器突起の剥落したもの等の可能性もある。他遺跡で出土している棒状土製品では骨角器模倣例が目立ち、それらと比べるとかなり細い点も気がかりとなる。7も明確な種別の特定ができない例で、図での上端はイキであるが、



第 115 図 土製品実測図 (1)

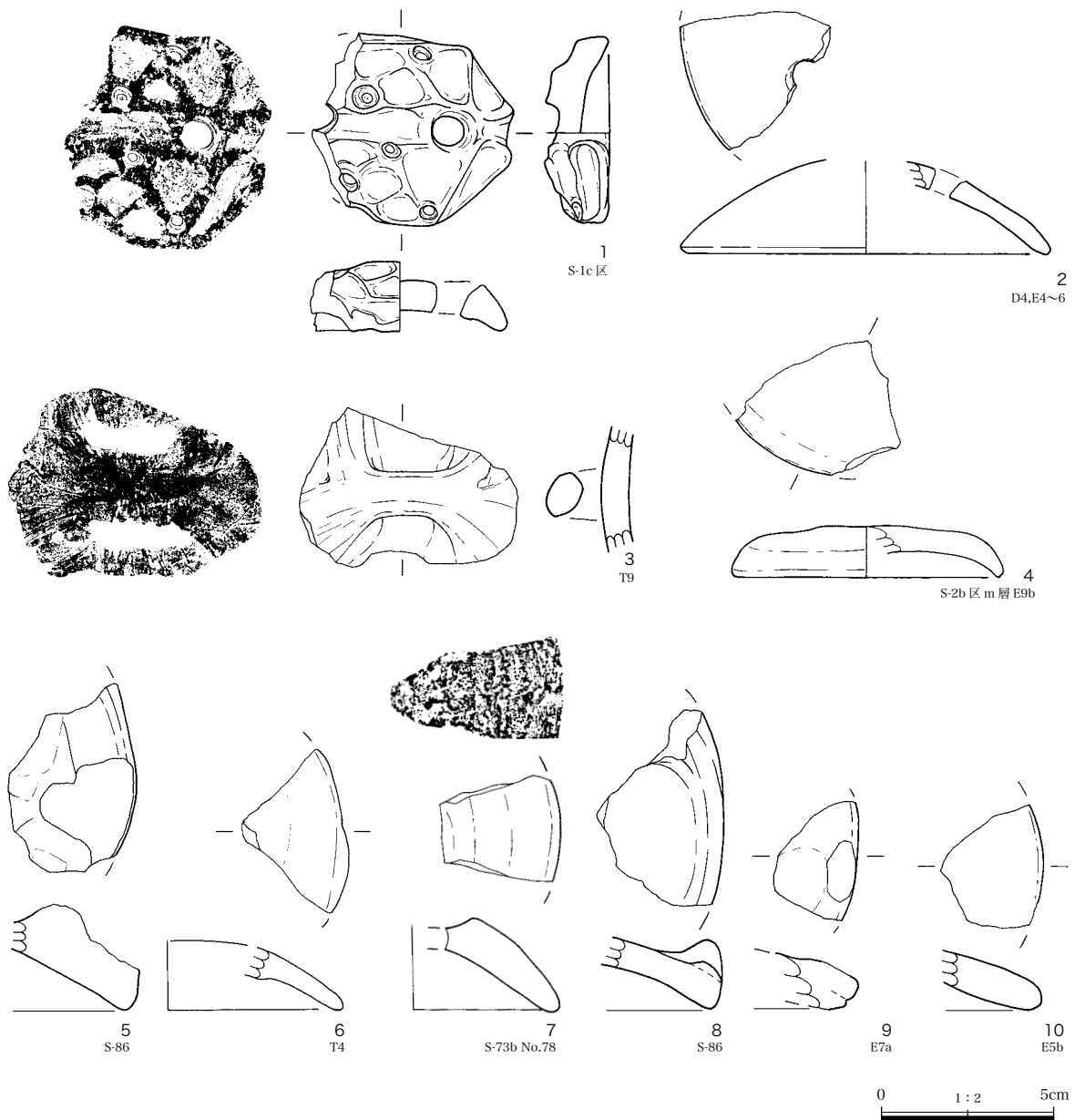
下端は割れ口で更に長く延びるようである。接合痕跡や粘土の褶曲が観察され、焼成粘土塊とすべきかもしれない。

8も種別の特定がし得ない土製品である。ミニチュア土器や貝輪状土製品の可能性を考えたが判断できない。上面からみて整った弧をなしておらず歪んでいる。

なお貝輪状土製品として遺構内出土例があり(第 47 図、SK-162-6)、遺跡内の総出土数量としては 3 点となる。

土製円盤 (第 118 図、第 8 表、図版六〇)

確認し得た土製円盤 5 点を示す。確実な判断をし得なかった例もあるとは言え、かなり限定された数であ



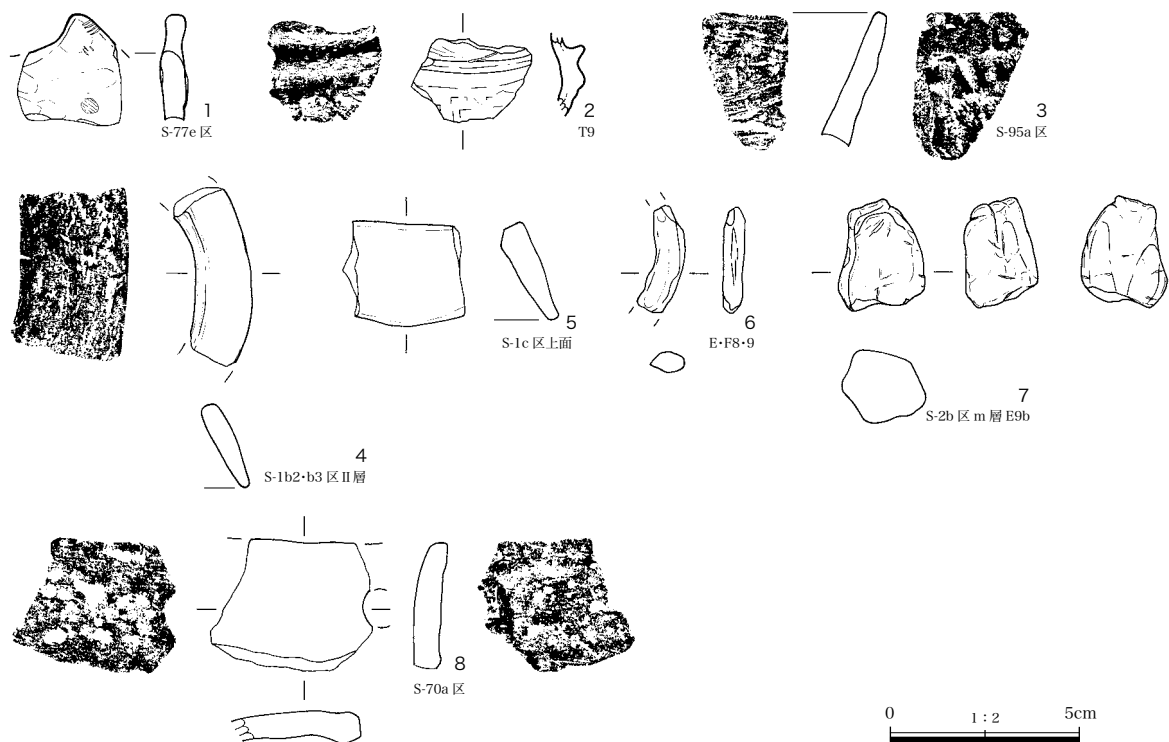
第116図 土製品実測図(2)

る点は注意すべき事象と言えよう。例えば、概ね同時期の集落である芳賀町上り戸遺跡では200点を超える数量が確認されている。

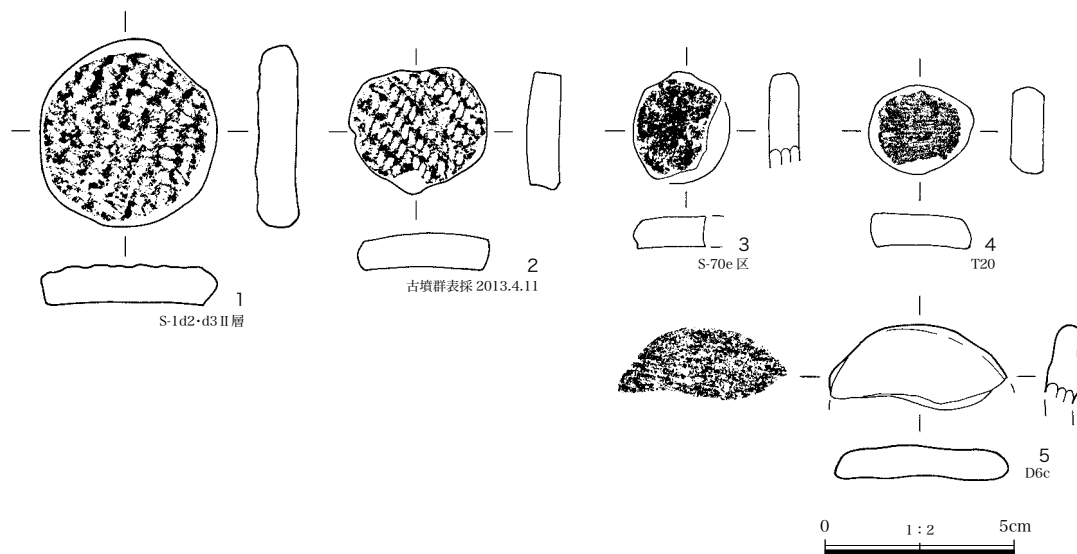
1・2は繊維を多量に含む黒浜式である。3は無文で時期の特定が難しいが、胎土・質感からは中期後半～後期前半の可能性が考えられる。4は表裏とも丁寧なミガキ調整が観察され、称名寺式もしくは堀之内式のものであろう。5は外面縄紋または条線のようにみえるが摩滅で判然としない。特定できないが、中期後半～後期前半の範囲内ではあろう。

焼成粘土塊(第119図、第8表、図版六〇)

焼成粘土塊20点を示す。総数は23点出土している。燈色・にぶい燈色等、赤味がありやや明るい色調を



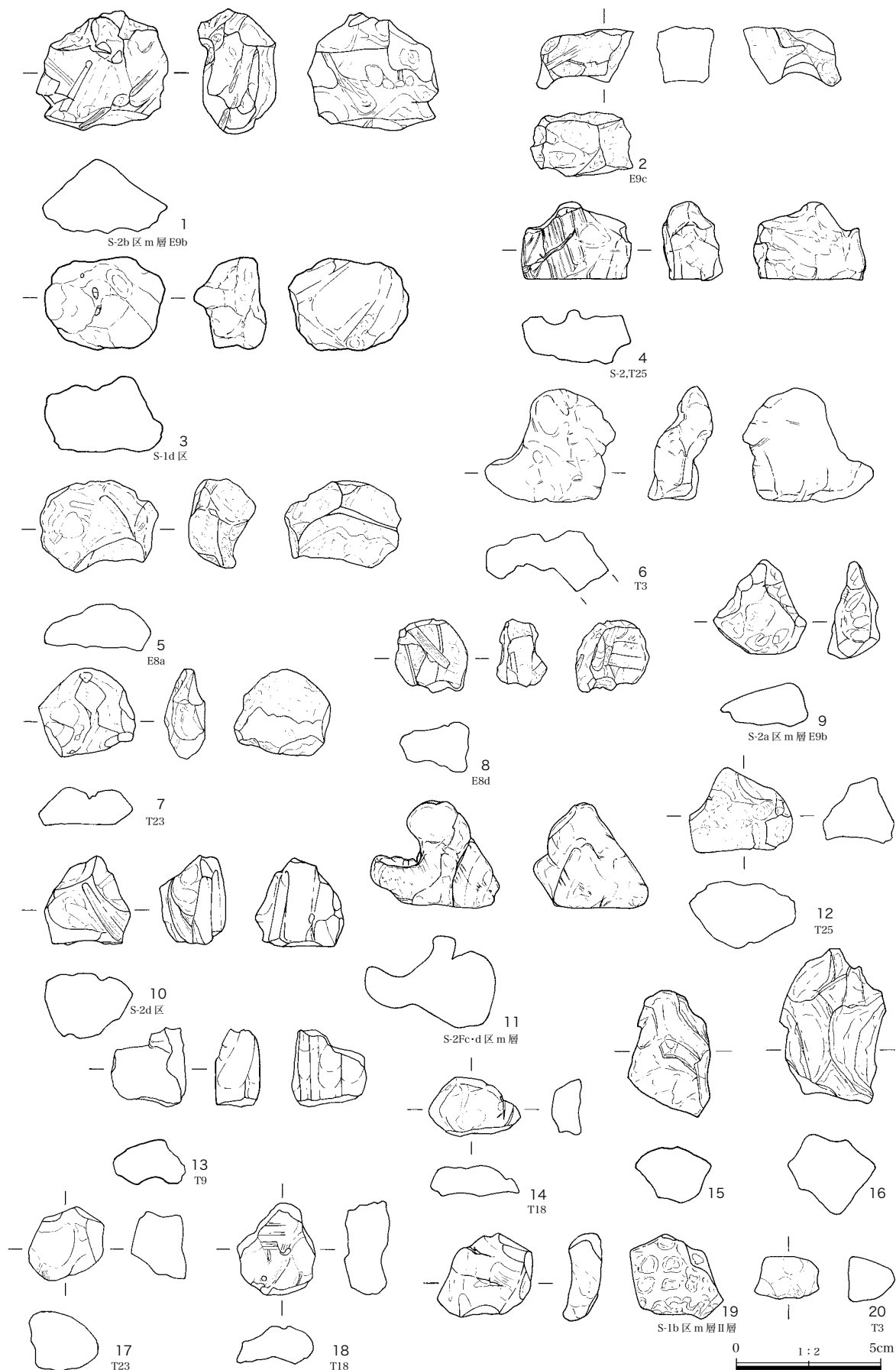
第117図 土製品実測図 (3)



第118図 土製品実測図 (4)

呈するものが目立つ。胎土において土器との大きな差異はあまりみられないが、鉍物の含有が少ない傾向は認められよう。炭化物や煤の付着、もしくは焼成による黒変が認められるものがある（1・8）。芯棒状の凹部痕跡があるもの（2・11・13）、平らな面を有しているもの（4下端、6内面、7内面下半、12下端、17）も観察される。

15・16は高温焼成をうかがわせるもので、かなり軽く空隙があるように観察できること等、他とはかなり異なる。あるいは古代の鉄生産に関わる遺物等の可能性もあろうか。



第119図 土製品実測図(5)

第8表 土製品遺物観察表

掲載番号	種類 器種	計測値 (cm)	色調 (内・外)	特徴・備考	出土位置
第115図1	器台		外：7.5YR5/4 にぶい褐色 内：5YR5/4 ～ 5/1 にぶい赤褐～褐灰	2と同一。表面・側面は丁寧に磨かれている。裏面はやや粗いナデ～ミガキ調整。内面に比較的幅広く明瞭な沈線。胎土には白色粒を多く含む他、石英、雲母、角閃石等を含む。側縁ほぼ中央では割れ口ではない部分があり透かし孔部分か。	E5a no.1b
第115図2	器台		外：5YR5/4 にぶい赤褐 内：5YR5/4 にぶい赤褐	1と同一。単純な平行弧線ではなく、L字状に屈曲し、更に小さく弧状となる部分もある。	E5a no.7
第115図3	器台		外：7.5YR6/4 にぶい橙 内：7.5YR6/4 にぶい橙	破片上端近くに透かし孔とみられる割れ口の無い部分がある。表面側面内面とも良く磨かれ、胎土には少量の白色粒・灰色粒を含む。	D4・E4～6
第115図4	器台		外：5YR5/4 にぶい赤褐 内：5YR5/4 にぶい赤褐	側面・底面のミガキが丁寧で若干側面の内側面の調整が粗い。白色粒・褐色粒を少量含む。	E3d
第116図1	蓋	高さ：2.0 長径：5.6 短径：5.2	表：10YR6/4 ～ 5YR6/6 にぶい黄橙～橙 裏：10YR5/3 にぶい黄褐	石英・白色粒を多く含む胎土。やや楕円の平面形で中央左右に貫通孔。微隆起線・凹部および刺突による文様。遺存 4/5。 重量：35.7g	S-1c 区
第116図2	蓋	高さ：2.7 径：10.8	表：7.5YR3/1 黒褐 裏：7.5YR4/6 褐	遺存 1/9 程度か。表裏面やや粗いミガキ。	D4・E4～6
第116図3			表：7.5YR5/4 にぶい橙 裏：7.5YR4/2 灰褐	注口土器体部。	T9
第116図4	蓋	高さ：1.5 径：(7.8)	表：10YR4/1 褐灰 裏：10YR5/2 灰黄褐	1/4弱遺存。表裏やや丁寧なミガキ。白色粒多。	S-2 b 区 m 層 E9b
第116図5	蓋	高さ：(3.0)	表：10YR6/4 にぶい黄橙 裏：10YR6/4 にぶい黄橙	把手部剥落。表やや粗いミガキ、裏丁寧なミガキ。	S-86
第116図6	蓋	高さ：1.8 径：(10.2)	表：10YR6/3 にぶい黄橙 裏：10YR6/3 にぶい黄橙	表裏ナデ～ミガキ。	T4
第116図7	蓋	高さ：(2.4) 径：(3.8)	表：10YR7/3 にぶい黄橙 裏：10YR7/3 にぶい黄橙	表裏粗いミガキ。白色粒やや多。	S-73b no.78
第116図8	蓋	高さ：(2.0)	表：10YR6/4 にぶい黄橙 裏：10YR2/1 黒	図上端把手部の剥落。表裏ややヘラ状工具によるミガキ。石英・白色粒多。	S-86
第116図9	蓋	高さ：(1.6)	表：7.5YR4/2 灰褐 裏：7.5YR6/4 にぶい橙	把手部剥落。表裏ミガキ。	E7a
第116図10	蓋	高さ：(1.8)	表：10YR6/3 にぶい黄橙 裏：10YR6/3 にぶい黄橙	表裏やや粗いミガキ。	E5b
第117図1	ミニチュア 土器		7.5YR6/4 にぶい橙	口径 4 cm 程度と推定される破片。突起右側縁から口縁直下にかけて細かい刻み列。内面は粗いナデ。	S-77 E6
第117図2	ミニチュア 土器		10YR5/4 にぶい黄橙	肩部上位に鏢状の隆起部。内外面粗いナデ調整。	T9
第117図3	ミニチュア 土器		7.5YR6/4 にぶい橙	蓋等の土製品の可能性もある。外面粘土粒の凸部や押さえ調整による凹部が残る粗い調整、内面もやや粗いナデ調整。	S-95a 区
第117図4	貝輪状 土製品	高さ：2.3 厚さ：0.6	外：10YR6/4 にぶい黄橙 内：10YR5/4 にぶい黄褐	径 10 cm 程度と推定される。遺存 1/6 程度。外面削り～やや粗いミガキ、内面ナデ調整で、石英粒を少量含む。厚さやや不定。角度 63°	S-1 b1b2to II 層
第117図5	貝輪状 土製品	高さ：2.7	10YR6/4 にぶい黄橙	内外面ともやや粗いナデ～ミガキ調整で、胎土には白色粒・角閃石を少量含む。	S-1c 区上面
第117図6	棒状土製品	長径：2.8 短径：0.8	7.5YR5/3 にぶい褐	胎土には鉱物をあまり含まず、土器とは若干の違い。 重量：1.5g	S-27 EF8・9
第117図7	土製品?	長径：2.8 短径：2.2	7.5YR6/4 ～ 5YR6/6 にぶい橙～橙	作り調整はかなり粗く、大きくは2枚の板状～棒状粘土を合わせているようで、その接合痕跡や粘土の褶曲が観察される。 重量：10.7g	S-2b 区 m 層 E9b

第117図8	土製品?	長径:4.3 短径:3.4	10YR7/4 にぶい黄橙	内外面ナデ調整で、外面はやや丁寧である。右端で一部確認できる孔は焼成前の穿孔である。胎土には白色粒・角閃石・褐色粒等を含み、土器胎土に近い感がある。 重量:12.2g	S-70a区
第118図1	土製円盤	長径:4.9 短径:4.7	10YR5/3 にぶい黄褐	縄紋は前々段反燃か。周縁研磨は比較的明瞭。 重量:25.3g	S-1 d2d3 II層
第118図2	土製円盤	長径:3.2 短径:3.1	10YR5/4 にぶい黄褐	縄紋前々段反燃り。繊維は少量。 重量:10.7g	古墳群表採 2013.4.11
第118図3	土製円盤	長径:2.7 短径:2.1	7.5YR5/4 にぶい褐	無文、粗いミガキ。 重量:6.0g	S-70e区
第118図4	土製円盤	長径:2.7 短径:2.4	10YR4/2 ~ 4/1 灰黄褐~褐灰	内外面とも丁寧なミガキ調整。 重量:7.4g	T20
第118図5	土製円盤	長径:4.2 短径:2.2	7.5YR5/6 明褐	縄紋摩滅で不鮮明。石英白色粒をかなり多く含む。 重量:4.7g	D6c
第119図1	焼成粘土塊	長径:4.3 短径:3.9	7.5YR6/4 ~ 3/1 にぶい橙~黒褐	線状痕。煤けている。 重量:31.7g	S-2b区 m層 F10c
第119図2	焼成粘土塊	長径:3.0 短径:1.8	10YR5/2 ~ 2.5YR6/4 灰黄 褐~にぶい橙	芯棒状の凹部面あり。 重量:9.9g	E9c
第119図3	焼成粘土塊	長径:4.1 短径:3.1	7.5YR6/4 にぶい橙	やや幅広いの凹部面あり。 重量:16.5g	S-1d区
第119図4	焼成粘土塊	長径:3.8 短径:2.7	7.5YR5/2 灰褐	芯棒状の凹部面あり。図右側平坦面。 重量:13.4g	S-2 T25
第119図5	焼成粘土塊	長径:4.0 短径:3.1	7.5YR6/4 にぶい橙	凹部面あり。 重量:18.7g	E8a
第119図6	焼成粘土塊	長径:4.1 短径:3.9	2.5YR6/6 橙	裏面やや平らな面。 重量:17.3g	T3
第119図7	焼成粘土塊	長径:3.2 短径:3.0	10YR6/3 にぶい黄橙	裏面土器に近い平らな面。 重量:8.4g	T23
第119図8	焼成粘土塊	長径:2.5 短径:2.5	7.5YR6/2 ~ 6/4 灰褐~にぶい橙	煤?カーボン付着。線状痕。 重量:6.0g	E8d
第119図9	焼成粘土塊	長径:3.2 短径:3.2	10YR6/4 ~ 5YR6/4 にぶい黄橙~にぶい橙	下端線状痕あり。 重量:8.9g	S-2a区 m層 E9b
第119図10	焼成粘土塊	長径:2.9 短径:2.9	5YR6/1 ~ 4/6 褐灰~赤褐	線状痕あり。 重量:14.1g	S-2d区
第119図11	焼成粘土塊	長径:4.2 短径:3.6	7.5YR6/6 橙	芯棒状部分、平らな面あり。軽い。 重量:19.8g	S-2F10cd m層
第119図12	焼成粘土塊	長径:3.6 短径:2.9	5YR5/4 ~ 5/6 にぶい赤褐~明赤褐	平らな面あり。やや軽い。 重量:15.1g	T25
第119図13	焼成粘土塊	長径:2.7 短径:2.1	7.5YR6/4 にぶい橙	芯棒状部分あり。 重量:8.2g	T9
第119図14	焼成粘土塊	長径:3.1 短径:2.0	7.5YR6/1 ~ 6/3 褐灰~にぶい褐	隆帯剥落状。 重量:4.6g	T18
第119図15	焼成粘土塊	長径:4.4 短径:3.1	5YR6/4 にぶい橙	高温焼成か、黒変部あり。 重量:12.8g	不明
第119図16	焼成粘土塊	長径:5.2 短径:3.2	5YR6/4 にぶい橙	高温焼成か、黒変部あり。 重量:29.8g	不明
第119図17	焼成粘土塊	長径:2.5 短径:2.3	7.5YR4/1 ~ 4/3 褐灰~褐	一部平らな面。線状痕。土製品の可能性あり? 重量:9.9g	T23
第119図18	焼成粘土塊	長径:3.2 短径:2.7	10YR6/3 ~ 2.5YR6/4 にぶ い黄橙~にぶい橙	条線状線状痕。 重量:8.7g	T18
第119図19	焼成粘土塊	長径:2.9 短径:2.7	7.5YR6/4 ~ 5/6 にぶい橙~明褐	平らな面あり。右上口縁に近い。 重量:6.7g	S-1b区 m層 II層
第119図20	焼成粘土塊	長径:2.0 短径:1.4	2.5YR6/4 にぶい橙	やや平らな面あり。中近世? 重量:3.6g	T3

5. 石器

概要と整理の方法

今回の横倉遺跡から出土した石器は総数 514 点である。これには礫・破砕礫・原石等が含まれており、これらを除いた剥離や研磨等加工の確認される狭義の石器は 462 点となる。またチャートを主とする石材による剥片石器が比較的多く出土しているが、二次加工や使用痕の確認ができない剥片・碎片も多く出土しており、これらを除くと更に数は限定される。明らかに加工や使用の痕跡がない原石や礫については、調査時に悉皆的に遺物として取り上げておらず、遺漏・サンプリングエラーも多いことが考えられ、実数については不明である。遺物として取り上げたものについては、加工のみられない原石等についても観察および石材鑑定を行い、搬入・石材選択等を考える上での参考とした。但し後にも触れるように、包含層出土資料では時期の特定が難しく、また古墳時代以降の遺構も多く検出されていることは注意すべき点となろう。明らかに古墳時代以降の石製品は、各時代の項目中で扱い、ここでは縄紋時代の石器を原則として扱う。

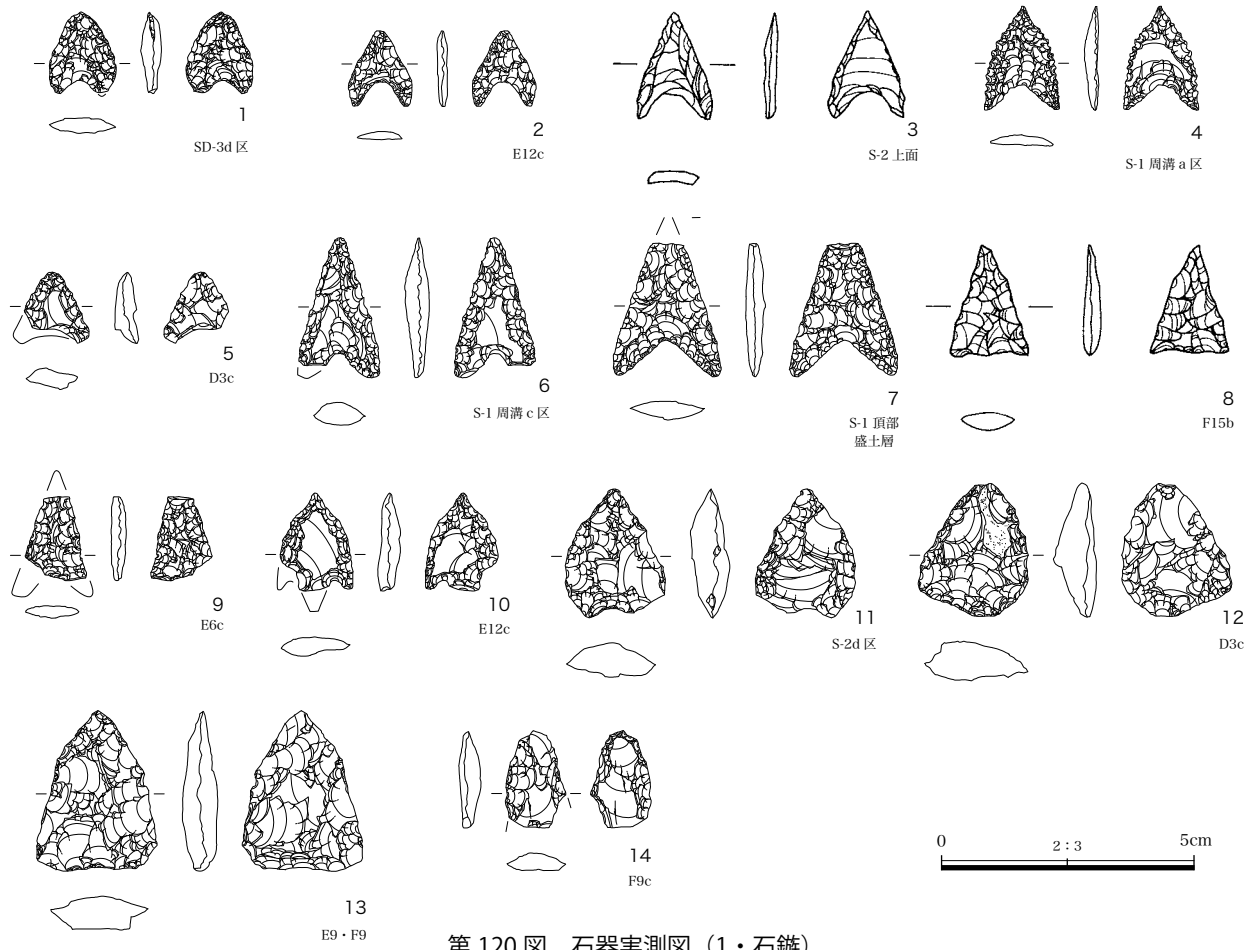
なお、遺構出土資料も含め、極めてまとまった集中地点や特徴的な出土状態を示したような部分はみられていない。但し第 25 図 2 の玉が住居跡ほぼ床面上から出土していること、第 149 図 1 の垂飾品が土坑内から出土している点は注意されよう。また、SZ-1 方墳墳丘下から黒曜石の石核・剥片がややまとまって出土している（図版一六・一七）。ここでは前期黒浜式がややまとまって出土しており、剥片類についても当該期の可能性が高いものとして注目される。

詳細な検討は行っていないが、地点別の数量等は概ね土器の出土量と対応するようであり、石器全体として、あるいは特定の器種の地点別の偏り等は確認されない。

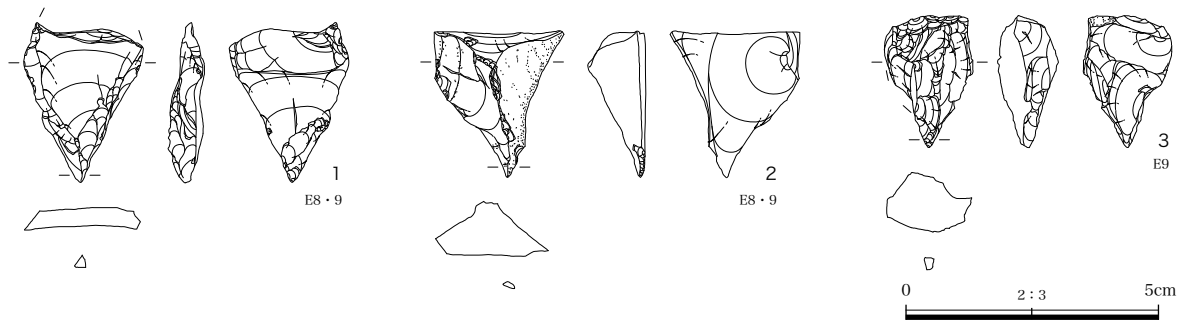
石器の整理としては、まず水洗注記後（一部未注記）に遺構別、地点別および器種別に分類した。数の少ない器種については地点別等の分別は行っておらず、以後に示す図版中でも遺構別・地点別等の図示はしない。剥片石器類については、資料を選択した上でその殆どについての図化・製図を株式会社ラングに委託した。打製石斧や磨石等の定型的な石器（主に礫石器）については、小片を除き、可能な限り図化した。数が多いものでは細かな形態分類等が可能なものもあるが、図版の配列や観察中の記述等での反映にとどめ、分類の提示とはしない。なお、これらの図示資料および図示し得なかった資料の石材の鑑定については、パリノサーヴェイ株式会社に委託しており、その結果を各観察表等に示すと共に、第 IV 章にて分析の成果報告を掲載しているので参照されたい。

石鏃（第 120 図、第 9 表、図版六〇）

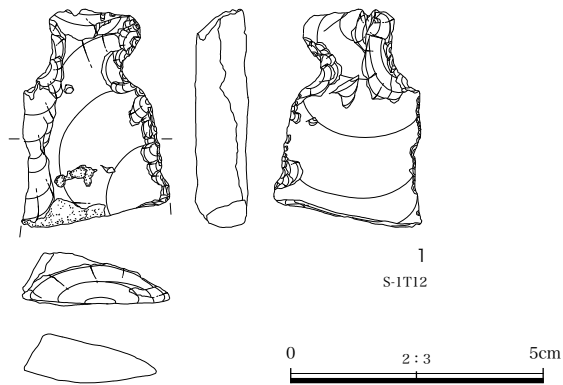
遺跡内から 14 点の出土がありすべて図示した。これらは、調査区内および縄紋時代以外の遺構からの出土である。14 は下位を欠損しているもので、石鏃とはならない可能性もある。形態としてはいわゆる凹基無茎鏃が主体を占める。有茎は 10 の 1 点のみ、基部が直線的な平基として 8・13 の 2 点ある。12 はやや大きめで茎に近い突出部を有しており、厚みを残していることも含め、未製品の可能性がある。全体形状では二等辺三角形形状を呈するものが多いが、4 や 13 のような五角形に近い形や、5 のような正三角形に近い例もみられる。技法状の検討は不十分であるが、基本的に両面の連続的な押圧剥離加工によるものである。石材はチャート主体であるが、それ以外のものとして、流紋岩（2）、ホルンフェルス（3）、珪質頁岩（5）、泥質チャート（6）、頁岩（8）が認められている。



第120図 石器実測図 (1・石鏃)



第121図 石器実測図 (2・石錐)



第122図 石器実測図 (3・石匙)

石錐（第 121 図、第 9 表、図版六〇）

確実な石錐としては 3 点が確認された。3 については石錐ではない可能性も残る。2 点が SK-86 地下式坑内から、残り 1 点が SK-114 からの出土で、いずれもゾーン②包含層出土と捉えられる。形態的にはいずれも幅のある逆三角形のもので、細長くなるものや、明瞭なつまみ部が形成されているものは無い。刃部や側縁の加工も入念で連続的なものは無く、いずれも加工を施さない縁辺・面が認められる。石材は 1・2 がチャート、3 が珪質頁岩である。

石匙（第 122 図、第 9 表、図版六〇）

確認されたのは 1 点のみである。玉随製で縦長剥片を素材としている。下方を欠損しているが、つまみ部周辺および主に右側縁で入念な加工がみられる。

楔形石器（第 123 図、第 9 表、図版六一）

確認された 6 点をここで示すが、典型例と異なるものも多く、確実な判断には詳細な検討が必要である。3 が頁岩である以外はチャート製である。両極剥片素材を原則とし、2 や 4 のように縁辺への加工が丁寧なものと、1 のように二次加工があまりみられないものがある。

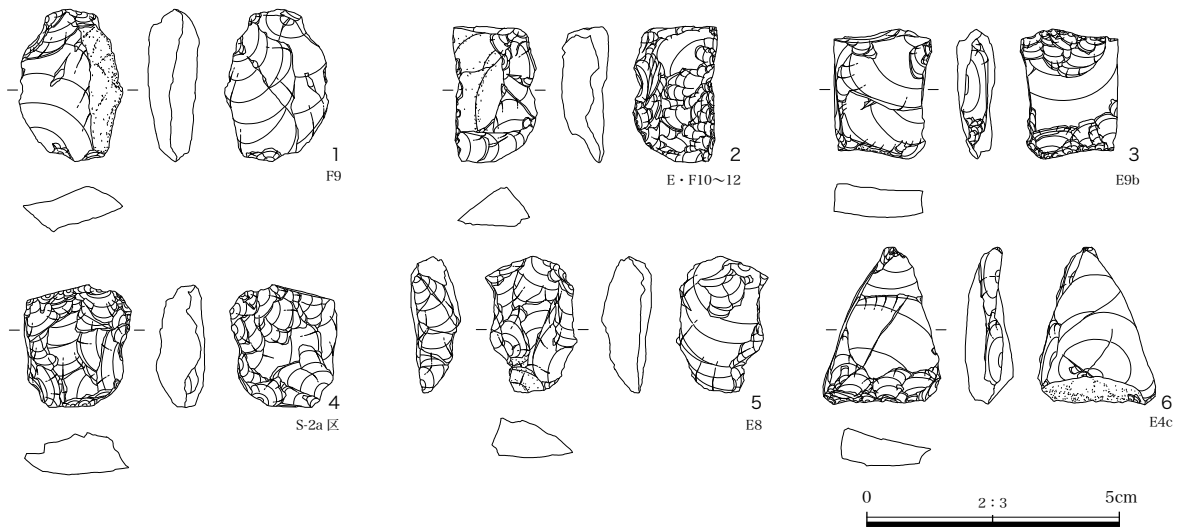
二次加工剥片（第 124 ～ 128 図、第 9 表、図版六一）

遺跡内からは 113 点確認され、うち 36 点を図示した（第 124 ～ 128 図）。基本的に剥片の縁辺に二次加工を加えているものである。これらの中には、旧石器の可能性もある例も含んでいる。遺構集計表等の表中では整理中の略号 R.F. をそのまま用い示している。当初の分類ではスクレイパー類としたものも含み、また微小剥離痕が確認されるものでは、使用痕のある剥片との区別が難しいもの、また複合しているものもある。遺構内からの例はチャート製の 2 点（第 125 図 1・2）で、それ以外は包含層から出土している。包含層出土例についてはまず石材で分別し、更に形態等に注意しながら図の配列を行った。礫面、剥離加工面の状態、平面断面形態や技法上の分類もすべきところであろうが、検討不十分で課題として残されている。石材としては、黒曜石（第 124 図）、チャート（第 125 図、126 図、赤色チャート等も含む）、頁岩（第 127 図）、ホルンフェルス（第 128 図 1・2）、砂岩（第 128 図 3 ～ 10）がある。

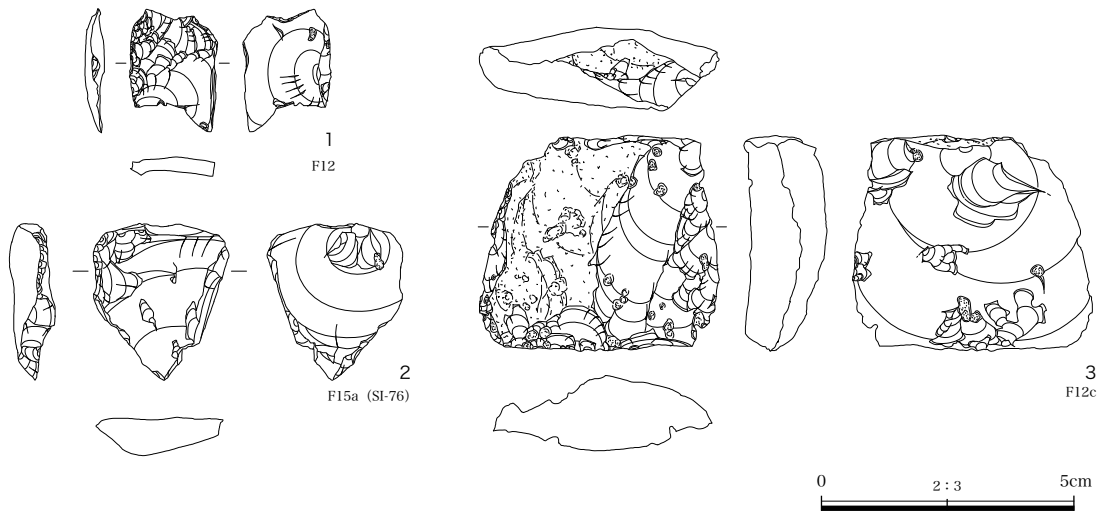
平面形態は多様であるが、長方形、台形、三角形等がある。縦長剥片を素材に一または二縁辺に押圧加工を施す例がやや目立つ（第 125 図 4・9・11、第 127 図 2・3、第 128 図 4 等）。かなり刃部に近い形状の連続剥離がみられるものでは、搔器削器との区別が難しいものもある。第 126 図 2 のように片面ではあるが、縁辺ほぼ全周に加工が施されている例もある。上記と近い形態だがあまり加工がみられないもの（第 125 図 5 等）、逆に部分的ながら両面に観察できるもの（第 125 図 6、第 128 図 8 等）もある。一方片面に礫面を残すような剥片素材で、縁辺一部を加工しているもの（第 126 図 1、第 127 図 4、第 128 図 1）も認められる。数はさほど多くはないが、素材の中央で厚みをとるような加工が施されたものも観察される（第 125 図 7、第 128 図 3 ?）。

使用痕ある剥片（129 図、第 9 表、図版六一）

剥片の縁辺一部に微小な剥離痕跡が確認されるもので、意図的な加工とは異なる刃こぼれ状の剥離を有するものである。二次加工と区別が難しいものも多い。遺構表等では整理中の略号 U.F. をそのまま用い示している。20 点確認され、うち 7 点を図示した。剥片自体は不定形で使用痕の部位等も含め定型的なパターンを



第123図 石器実測図 (4・楔形石器)



第124図 石器実測図 (5・二次加工剥片)

見いだすのは難しいが、鋭利鋭角な縁辺の一部に微小剥離痕が観察される。石材は6が無斑晶ガラス質安山岩、7が珪質頁岩、それ以外はチャートである。

石核 (第130・131図、第9表、図版六二)

石核は25点確認され、うち7点を図示した。第130図1が玉随、2・3が黒曜石、第131図1・2がチャート、3が無斑晶ガラス質安山岩、4が無斑晶質安山岩である。黒曜石は気泡が多く、高原山産の可能性が高い。礫面を残すものが多いが、第130図1のようにすべて剥離面となっているものもある。縄紋時代の遺構から出土したものは無く、すべて遺構外包含層または古墳・溝等縄紋時代以外の遺構から出土した。第130図2・3および第131図2がSZ-1方墳頂部および墳丘下包含層出土である。ここからは図示し得なかったが、黒曜石の剥片類9点も出土している。

剥片・碎片・原石（第 132 図、第 9 表）

剥片として分類したものは 34 点、碎片が 117 点ある。多くを図示し得ないのみならず、細かな検討もなし得ていない。石材はチャートが多くを占めるが、それ以外でも黒曜石・安山岩・貢石・砂岩・流紋石・玉髄・脈石英・ホルンフェルスがある。剥片では両極技法が推定されるものもある。基本的に加工痕の認められないものであるが、二次加工の素材剥片あるいはそのまま使用したことが想定し得るものさえある。一方、剥片剥離工程中に生じた、礫面を残すような非目的な剥片・碎片もある。打製石斧等の礫石器剥片は原則確認できない。なお SZ-1 墳丘下包含層から出土した剥片について若干の補足図化を行った（第 132 図）。1～3 が二次加工剥片、4 が使用痕ある剥片である。

打製石斧（第 133～135、第 9 表、図版六二）

遺跡内からは総数 28 点が出土している。図示した以外でも小片の出土がある。また図示した中でも打製石斧との判断に問題を残すものがあり（第 133 図 4・5、第 134 図 5・6）、カウントの上では注意すべきである。多くが分銅形であるが、少数短冊形・撥形がある（第 134 図 7・8）。第 133 図 5 や第 134 図 5・6 等はかなり不定形で打製石斧とするには問題も残るが、ここで扱っておく。また刃部やくびれ部の作出方法や使用痕跡、欠損部位等に注目した分類も可能であるが、項目立てを以ての分類は行い得なかった。大きさ等の統計分析も行っていないが、長さ 8～11 cm、幅 6～8 cm のものが多く、長さ 12 cm を超える大形のものはほぼみられない。

石材では輝石安山岩がやや多く、ホルンフェルス、粘板岩、流紋岩質凝灰岩等がこれに次ぐ。多くの打製石斧で片面または両面に石材の礫面を残しており、基本的に完成形に近い扁平な礫を素材としていることが推定される。形態として左右対称例もあるものの、抉れ部や刃部の形態等が若干異なる、左右非対称のものも多くを占める。抉り部の敲打は明瞭で入念なもの（第 134 図 1・14、第 135 図 1・2）と粗いもの（第 133 図 7、第 134 図 9、第 135 図 3）とがある。

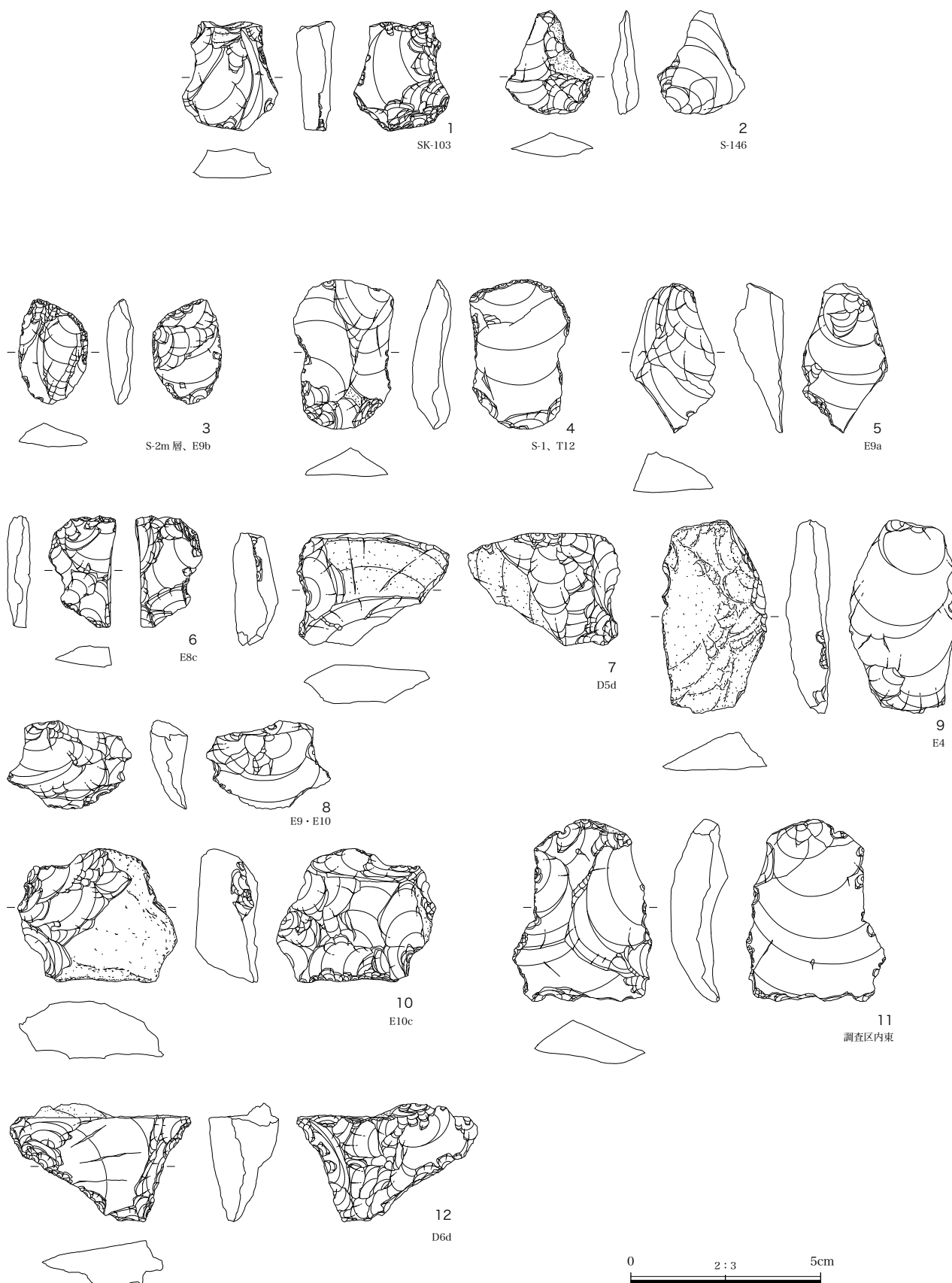
遺構内出土資料としては、第 133 図 1 が SI-73 から、第 133 図 2 が SI-76 から出土しており、いずれも後期初頭～前葉の資料として齟齬はない。第 133 図 3～7 は SZ-1 方墳墳丘下包含層出土のものである。遺構外包含層出土のものを第 134・135 図に示すが、原則として西側のグリッドから東側のグリッドに向け順に示す。ゾーン分類との対応では第 134 図 2・4・5、第 135 図 4 がゾーン①、第 134 図 1・3・6～13 がゾーン②、第 134 図 14、第 135 図 1～3 がゾーン③である。後期の土器を多く確認し得たゾーン③では、定型的でやや大きめの分銅形が主体となる点は注意されよう。

スタンプ形石器（第 136 図、第 9 表、図版六二）

遺跡内から 4 点出土しており、すべて図化した。包含層から草創期後半撚糸紋系の出土があることから、これに対応するものであることが推定される。やや大きめの礫の一端部に平坦な面が作られるもので、上端や側縁に加工がみられるものもある。1～3 は比較的定型例に近いが、4 については形態がやや異なる。下端面の磨痕の程度が 1～4 でかなり異なっていることも注意される。

礫器・搔削器（第 137 図、第 9 表、図版六二）

ここで礫器としたものは、原則として礫素材または原石に近い形で礫面を残す剥片を素材に、部分的な剥離加工を施しているものである。打製石斧等の定型的な器種では無いものであり、一部の資料についてはやや大形の搔削器への分類が可能なものも含めている。確認された 10 点を図示した。形態が多様であると共に、



第125図 石器実測図(6・二次加工剥片)

剥離加工の工程等も統一的・定型的な要素を見いだしがたい。

3や5等では鋭角な縁辺への加工が明瞭で刃部作出と言えるが、2・4・10等、加工が不明瞭なものも多く、礫器あるいは搔器との確実な判断には検討を要する。それら加工不明瞭なものについては加工痕のある剥片・礫とすべきであろうが、ここでは便宜的に当初の分類のまま示している。

石錘（第138図、第9表）

石錘としたものは3点の出土で、すべて図示した。3点のうち定型的な石錘は3のみであり、当地域における縄紋中期～後期前半の集落跡としては極めて少ない。小形の円形もしくは楕円形で扁平な礫素材に、端部の1カ所もしくは2カ所に打ち欠き紐かけ用の抉り部を作っている。

磨製石斧（第139図、第9表、図版六二）

遺跡内から出土した5点すべてを示す。縄紋時代の集落跡出土磨製石斧としてはやや少ないと言えるかもしれない。1・2が縄紋時代の遺構出土（2のSK-157はSZ-1墳丘下で確認された土坑）、残りがSZ-1墳丘下包含層から出土したものである。4は便宜的にここで扱ったものの、磨製石斧として良いか問題を残す。

1はかなり大形で、一般的・定型的な例と比べて大きく、他器種とも考えたが、形状や作りは他の例とさほど変わらない。下端刃部は比較的鋭角で、磨られたような跡も観察される。SI-76堀之内2式期住居跡から出土の資料である。

2は乳房状石斧の上端と判断したもので、1/2以上を欠損していると想定すれば、これも比較的大形の部類となる可能性がある。敲打の痕跡は殆ど残されていない。SZ-1墳丘下土坑のSK-157から出土。この土坑からは他に遺物は出土していない。

3は輝石安山岩でも、やや緻密で重量感があるように見受けられる石材を素材としている。刃部は断面鋭角で整った弧状をなし、僅かにみられる微小剥離は使用痕（刃こぼれ）の可能性が高い。研磨不十分なものの完成品として使用していたことが想定されよう。

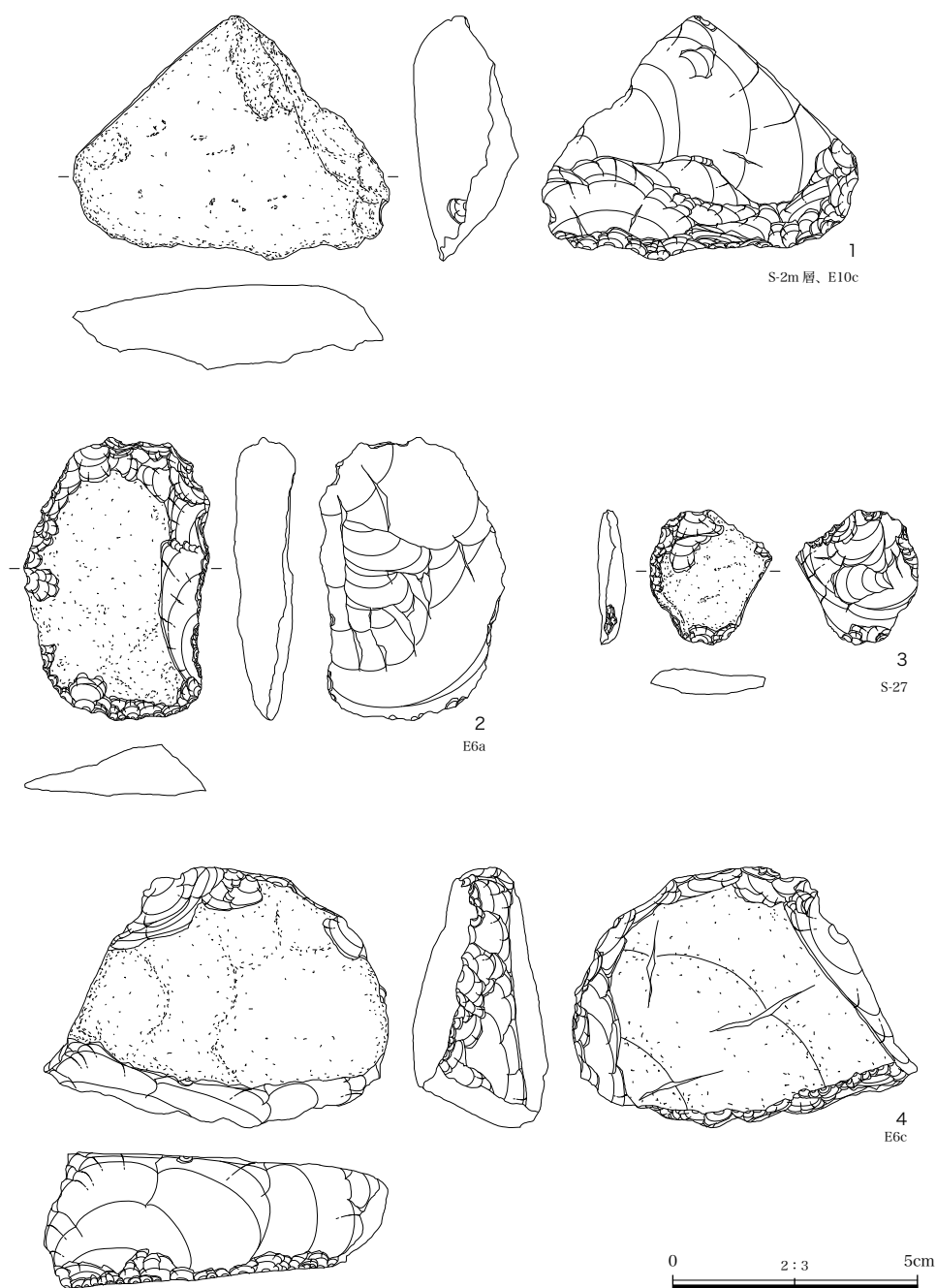
4は表裏～左側面で磨り～研磨が観察されるものの、定型的な磨製石斧の敲打→研磨とは異なっており、敲き石や磨石兼敲き石と考えた方が良いかもしれない。あるいは、欠損面と考えた下端が比較的平坦な面をなしており、スタンプ形石器の可能性もあろうか。

5も欠損部が多いものの、おそらく定型的ではない資料である。上端から側縁の剥離加工～敲打、正面の敲打～研磨の状態から磨製石斧と判断した。右側～側面では剥離加工後の敲打が明瞭である。研磨不十分な状態で完成品とは考えにくいだが、欠損を考えれば使用された可能性がある。あるいは製作時欠損の可能性もあろうか。

磨石類（第140～146図、第9表、図版六二）

遺跡内から出土した磨石類は総数74点である。ここでは遺存状態の良い72点を図示した。磨り痕が不明瞭な小片については、磨石との判断（自然礫との区別）に問題が残る例もある。図示にあたっては、遺構内と遺構外包含層に分け、遺構外包含層については、ゾーン①～③の順に、更にこの中では西側のグリッドから順に示している。第140・141図にはSZ-1墳丘下の遺構および包含層出土のものについて示す。

全体をみると、一般的な磨石とは異なる形態や特徴を有するものがあり、分類項の名称を与えないが、それらを第140図の一部および第146図にまとめて示す。これらは、砥石に近い扁平な礫素材のもの、棒状礫素材で敲き石兼磨石あるいは敲き石のもの等である。磨石兼凹み石等と分類されることもある例（第140図2・



第126図 石器実測図（7・二次加工剥片）

第142図7・第144図4・5等）についてはあえて分類せず磨石図版中に示した。いわゆる多孔石は、石皿・多孔石類として別途示すが（第148図）、本項で扱う磨石類との分別に困難を伴うようなものもある。また、一部に打ち欠きや敲きに伴う剥離が認められるものもあり（第140図2・第143図6・第146図9・10等）、これらを磨石兼敲き石とすることもできよう。更に全体の平断面形状、研磨・磨り面の位置や面数・程度等による分類も可能であるが、観察表中の記述にとどめる。

定型例以外のやや注意すべき例を示せば、やや不定形で長さのある礫を素材とするものが一定数みられる

(第 140 図 3、第 141 図 10・11、第 143 図 4)。また既述の小形・薄手で扁平な礫素材のもの(第 140 図 5・6、第 146 図 1～3・8)も注意されるが、これらについては砥石としたものとの弁別に課題を残している。当初の分類のままここに示すが、第 146 図 1～3 については、石材等からも砥石と判断した方が妥当となろう。

第 146 図 11 に示した敲き石は、棒状礫素材の磨石兼敲き石とは異なり、凸多面体敲き石等と呼称されているものである。本例は側面の稜を挟んで 1.5～2.0 cm 程度幅、全周にわたって顕著な敲打痕が認められる。正面や裏面の中央部分は原石のままで手が加えられていない。中期前半の集落跡に伴う例が多いとされる。

砥石(第 147 図、第 9 表)

砥石としては 2 点を示す。先に示した磨石の扁平薄手のものとの区別は難しいが、ここで示す 2 点はそれらの例に比べ、より入念な研磨痕跡とも観察される。定型性に欠けること等の問題もあり、検討が必要であろう。

石皿・多孔石・台石類(第 148 図、第 9 表)

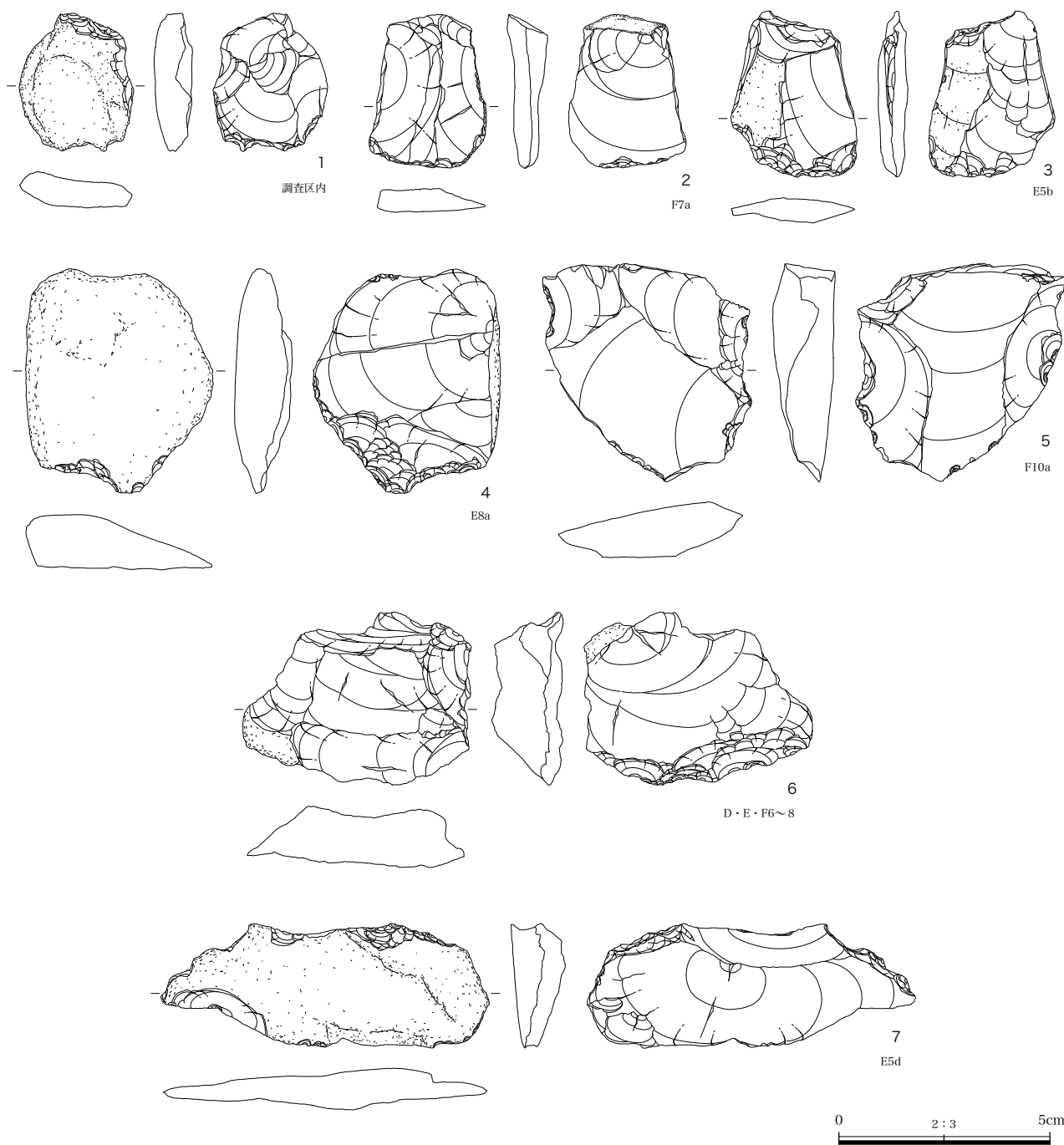
石皿類としたものは 17 点確認され、ここでは 14 点を示す。すべて破片であり、全体の形状が分かるものは無い。厳密には石皿、石皿+凹み孔のあるもの、石皿面の磨面が無い多孔石等の分類が必要であるが、小片が多いこともあり器種分類としてはまとめて扱う。磨痕、凹み、敲打等の痕跡複合については個別の観察に記す。多孔石等の凹みがある面でも磨痕が認められる例が多い。多孔質の輝石安山岩等の石材を多く用いていることもあり、磨痕跡はさほど明瞭ではない。

石製品(第 149 図、第 9 表、図版六三)

石棒類および垂飾品が想定される石製品は 8 点が確認された。垂飾石製品第 149 図 1(委託 67)が縄紋時代の土坑から出土、また堀之内 2 式期の住居跡 SI-76 から出土した玉(第 25 図 2)については、遺構の項で示している。2 は称名寺式期と推定される縄紋時代の住居跡 SI-73 出土(詳細な出土位置は不明)。3 は堀之内 2 式期の住居跡 SI-76 覆土出土(詳細な出土位置は不明)。これ以外の 4～7 は古墳周溝覆土やグリッド出土である。

石棒では中期に顕著な典型的な大形の石棒はなく、小形の例に限られる。3・5 は研磨痕跡から石製品類としたものの、磨製石斧の一部等の可能性も残り、注意が必要である。一方、磨石類の項で示した第 146 図 5 も石棒の可能性がある。

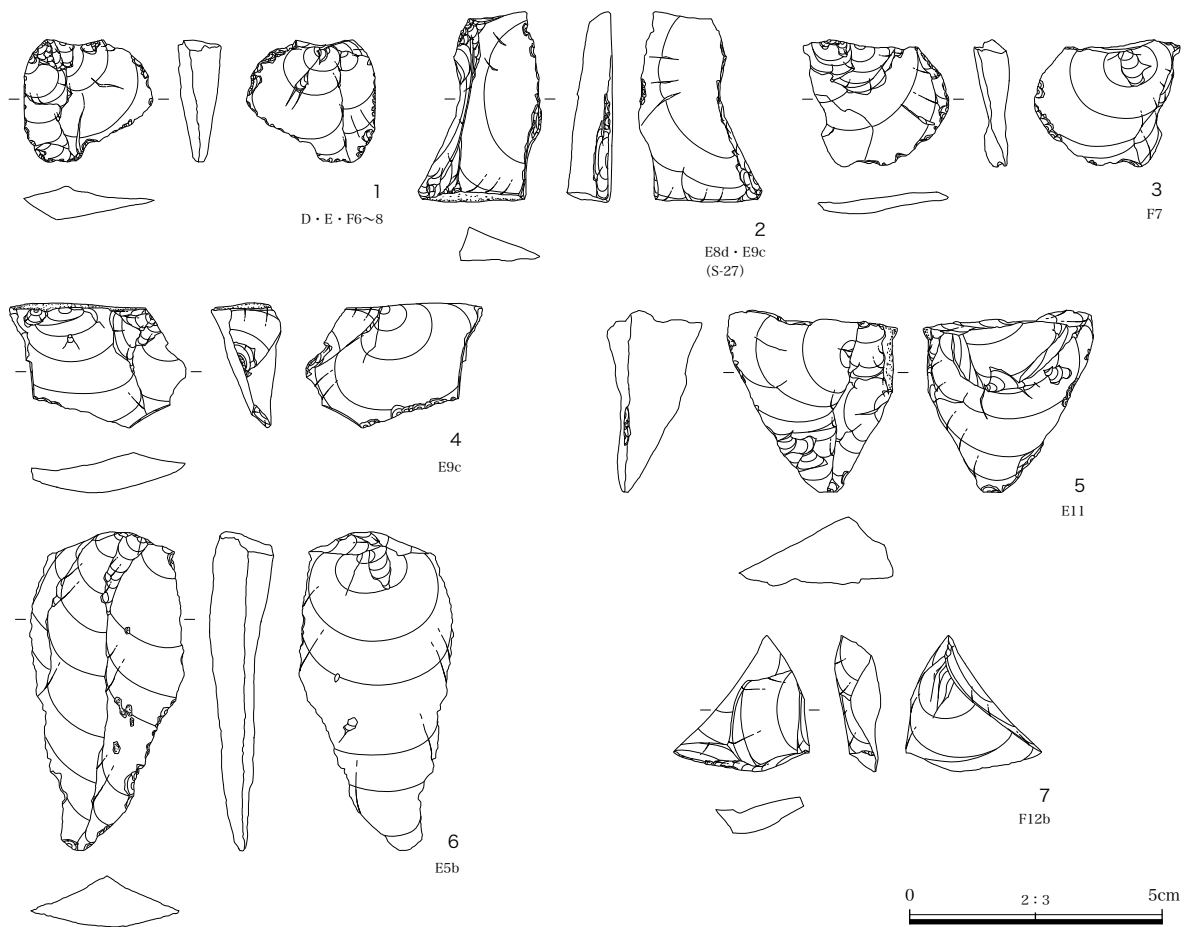
第 149 図 1 は下端を欠損している垂飾品である。明瞭な敲打+研磨整形によるものであるが、表面での敲打痕は殆ど消され、丁寧な研磨調整による平滑な面が確認される。一部研磨の細かい線状痕(横～斜め方向)も認められる。裏面は敲打痕がある程度残されている。横断面図で示されるように、表面は弧状をなすが、裏面はほぼ平坦である。つまみ部は剥離もしくは敲打によることが想定され、挟り部(側面)も良く磨かれている。伴出遺物は小破片少数のみで時期の特定はし得ない。類例の探索検討は不十分であるが、前期の可能性が高い垂飾品と推定される。



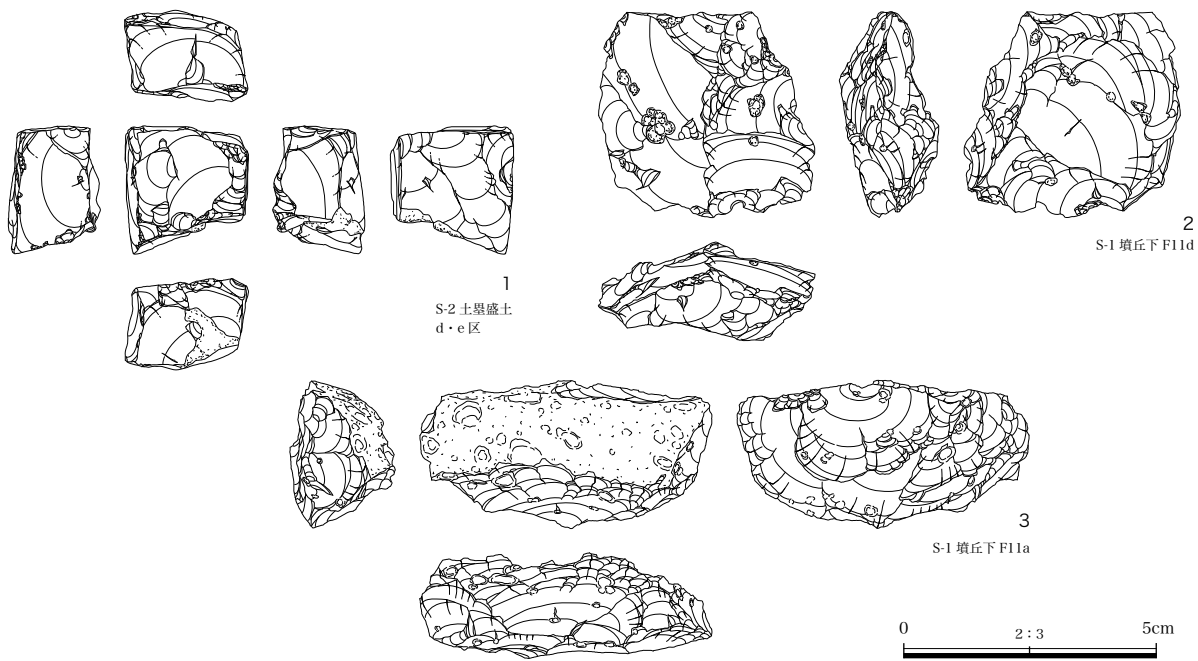
第127図 石器実測図 (8・二次加工剥片)



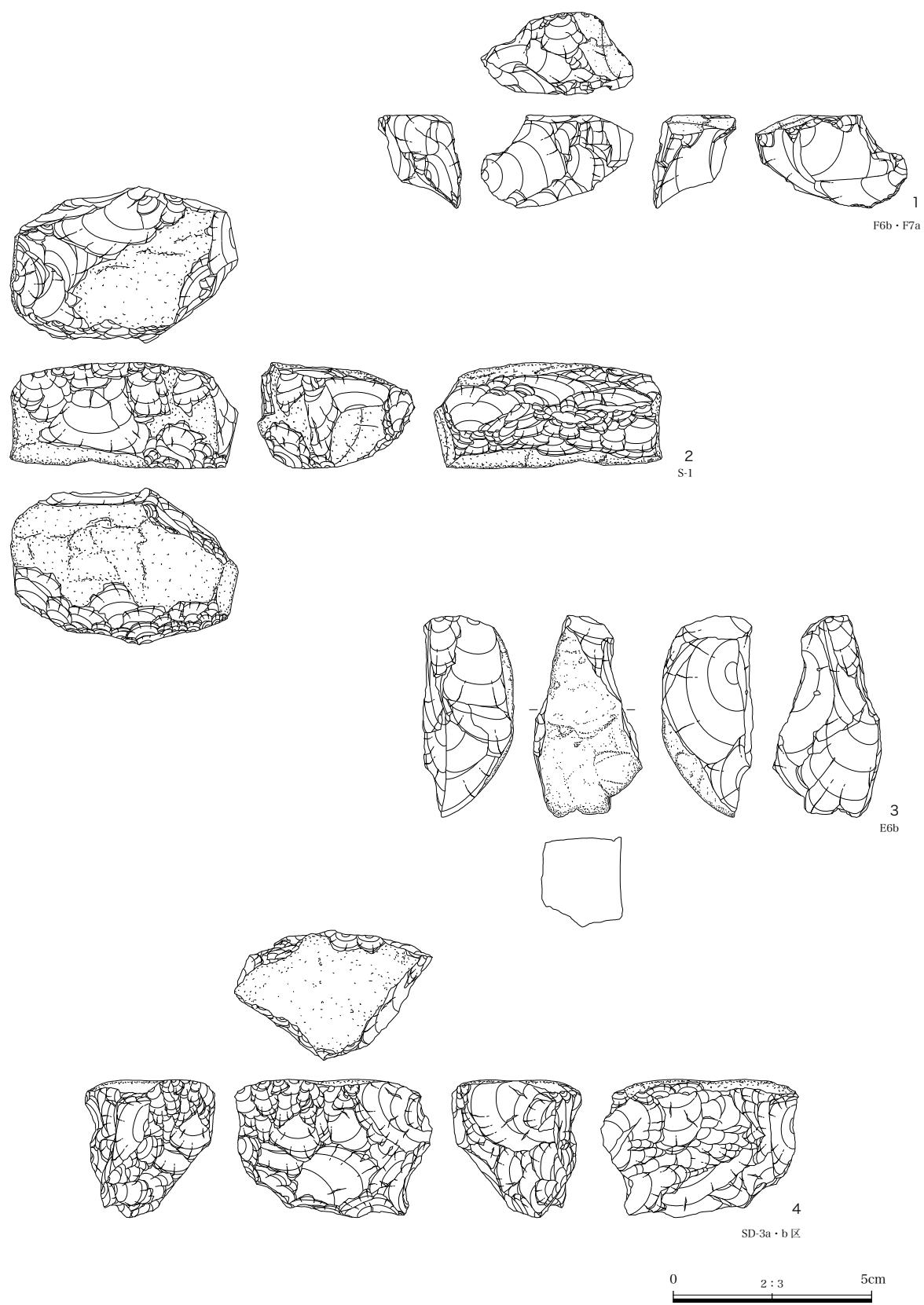
第128図 石器実測図 (9・二次加工剥片)



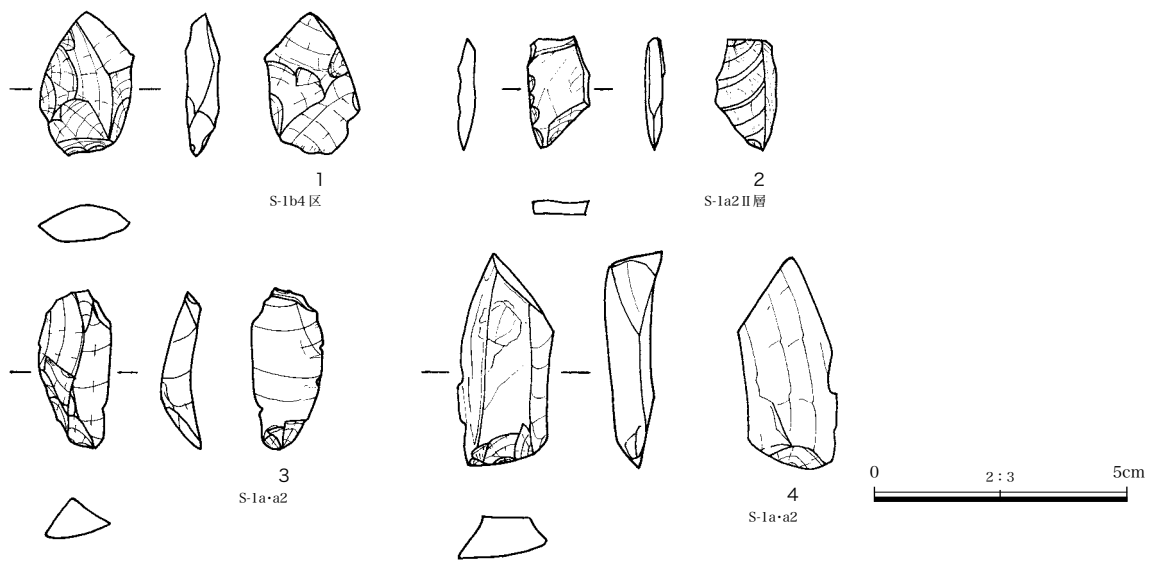
第129図 石器実測図 (10・使用痕ある剥片)



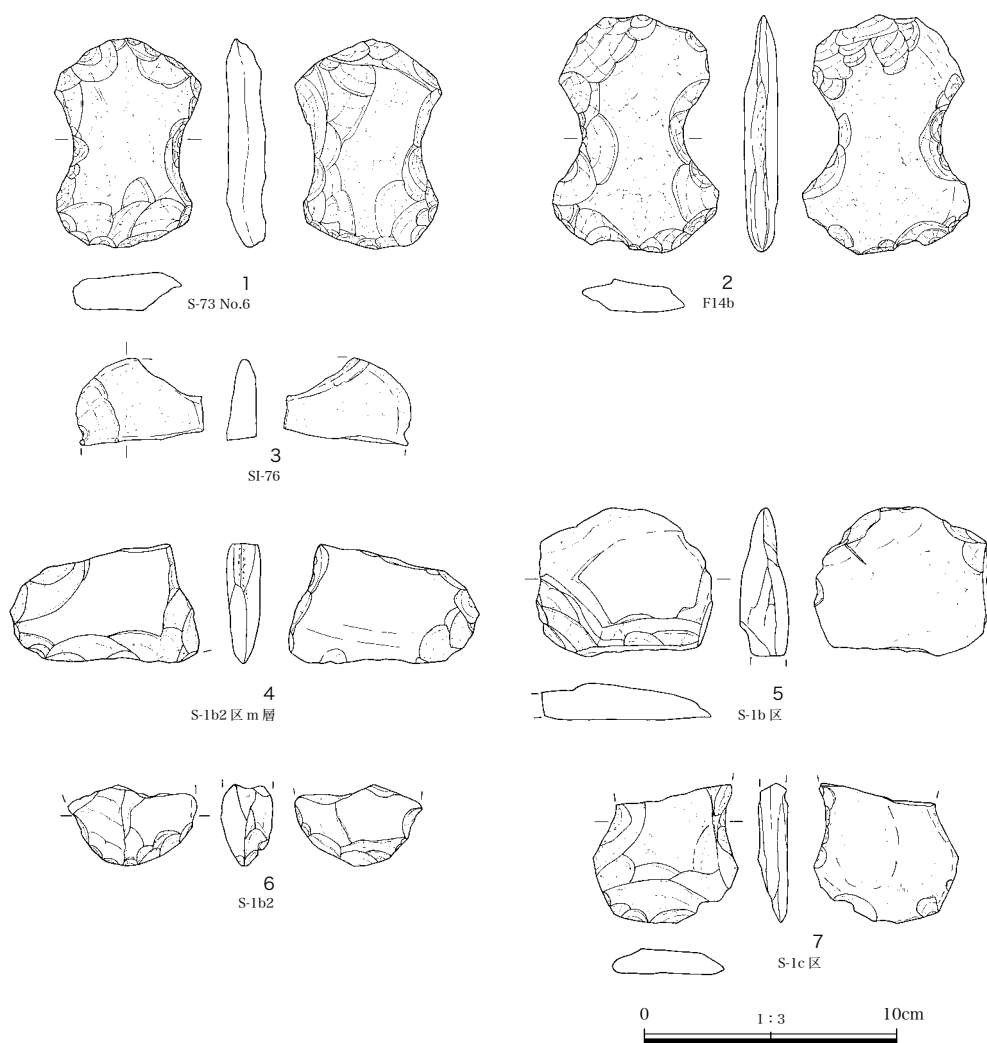
第130図 石器実測図 (11・石核)



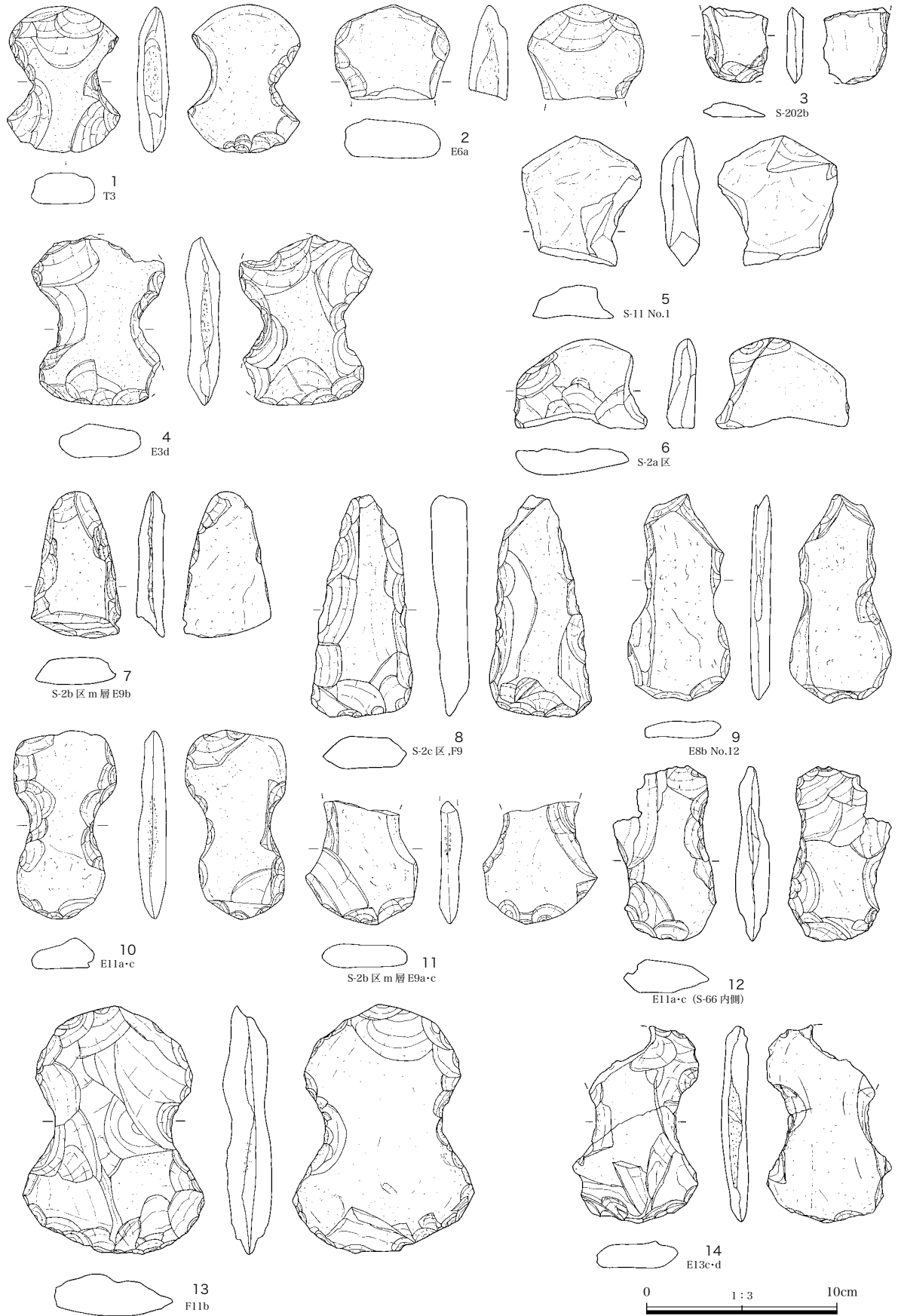
第131図 石器実測図(12・石核)



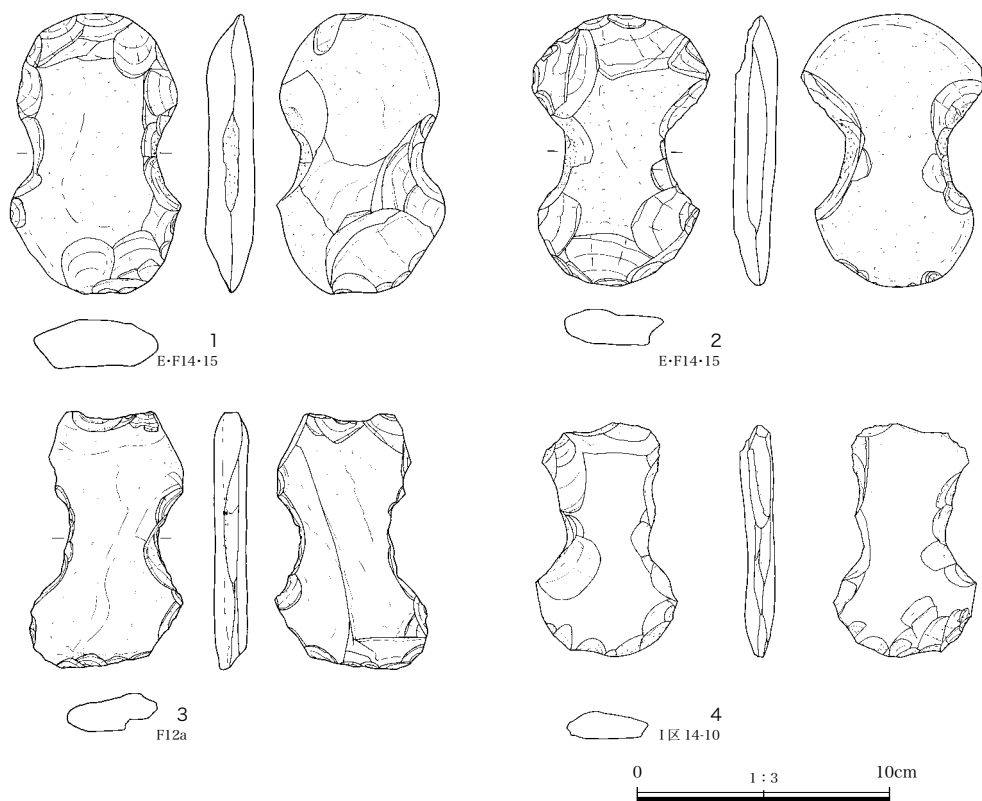
第132図 石器実測図 (13・二次加工剥片等)



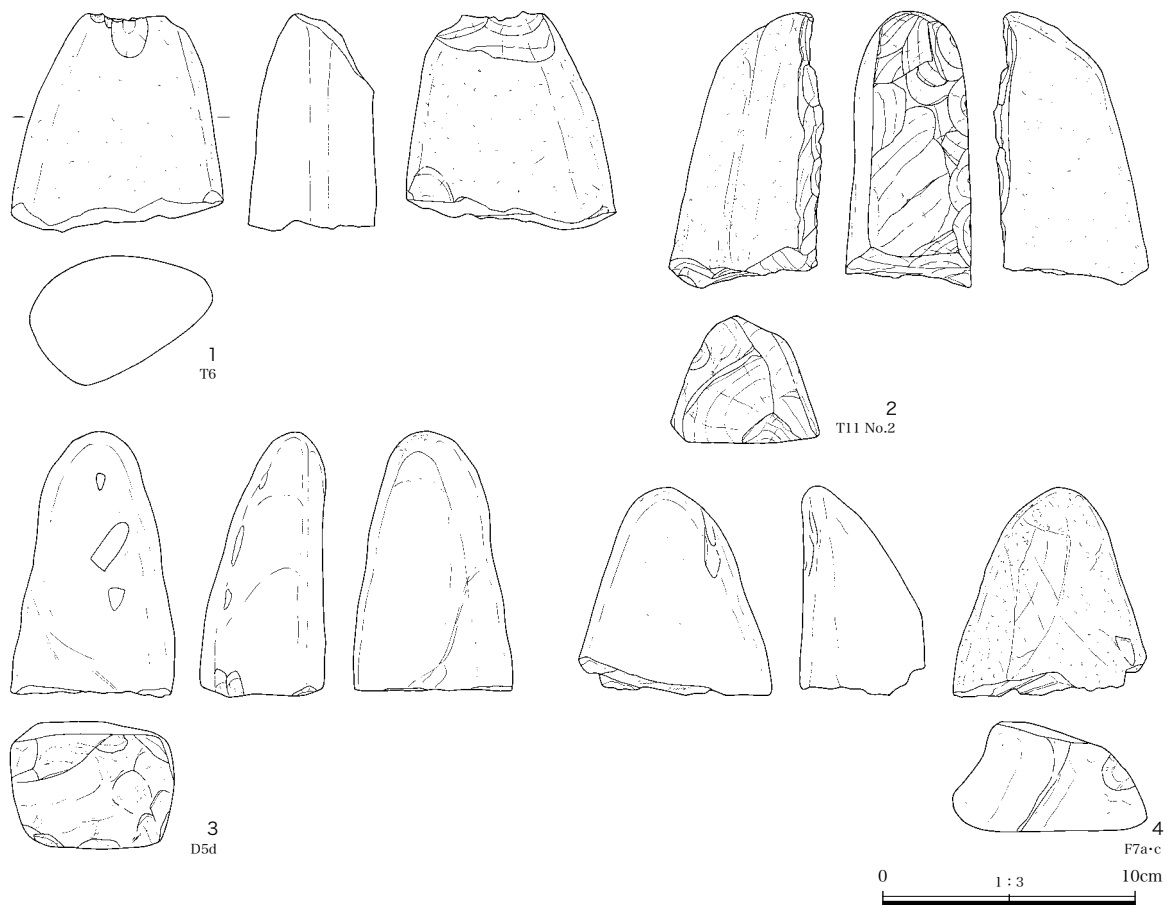
第133図 石器実測図 (14・打製石斧)



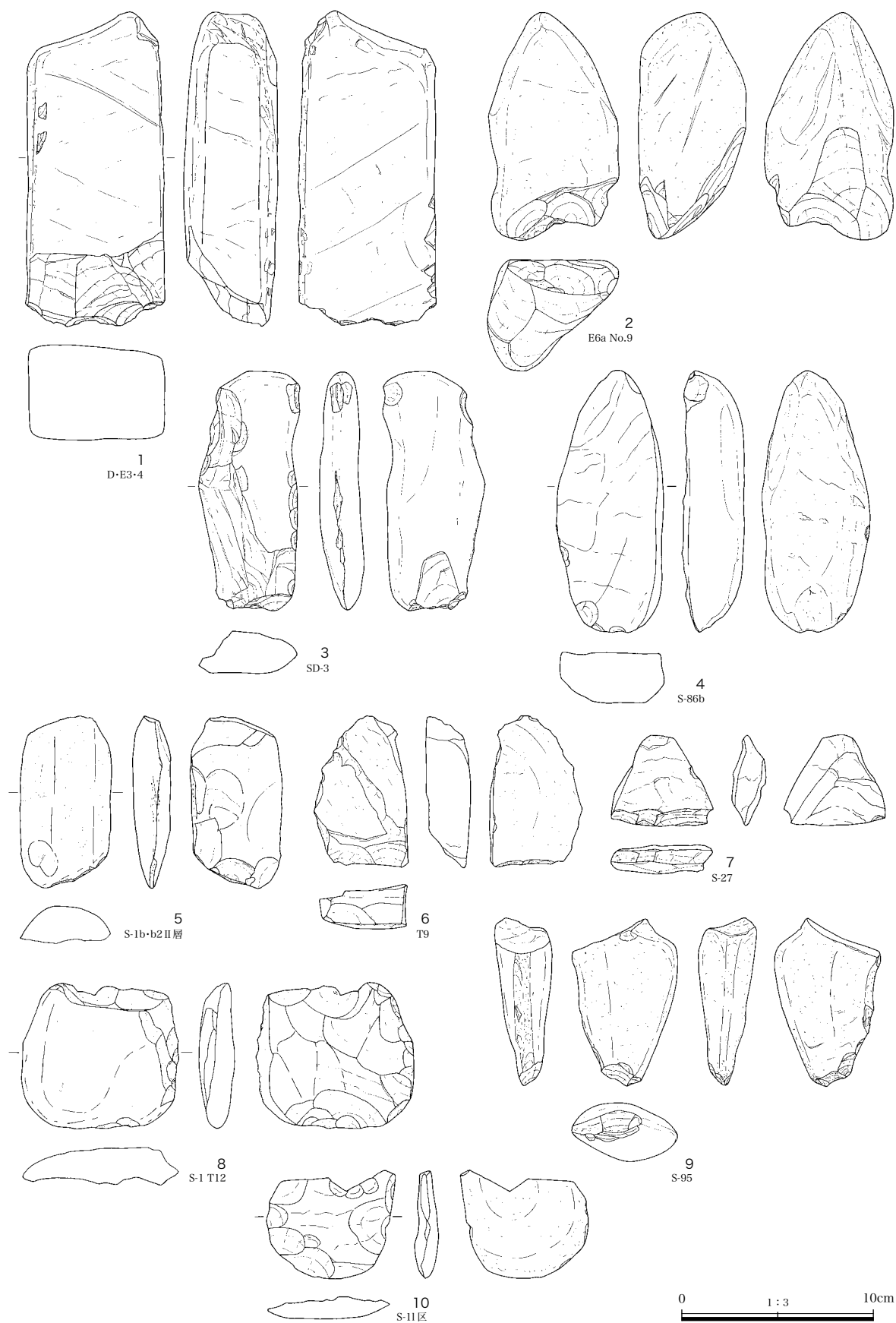
第 134 図 石器実測図 (15・打製石斧)



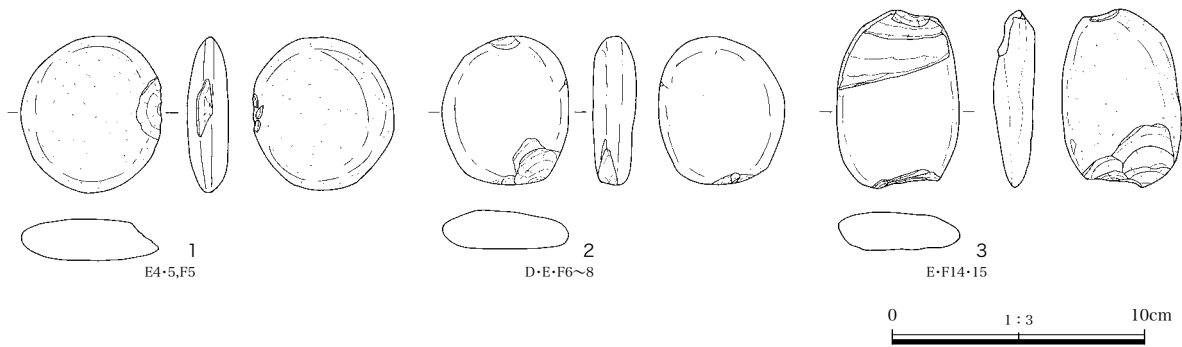
第135図 石器実測図(16)



第136図 石器実測図(17)

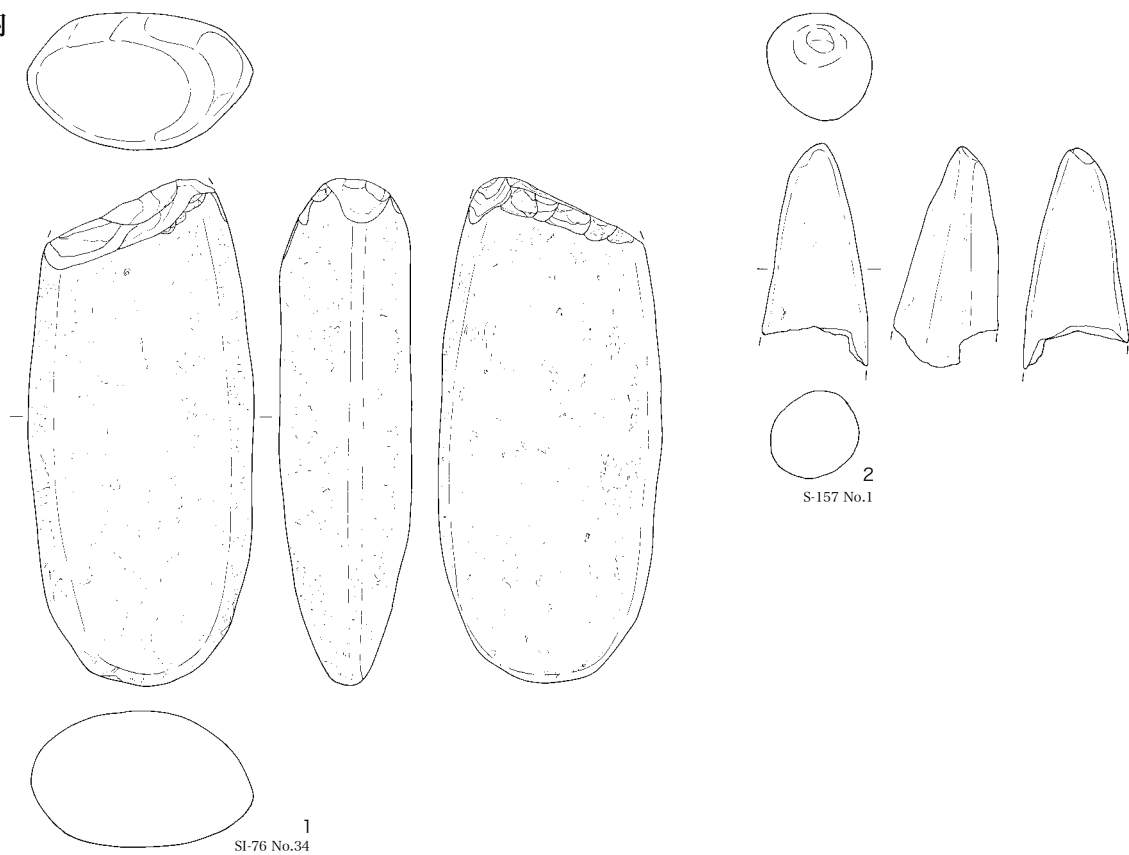


第137図 石器実測図(18)

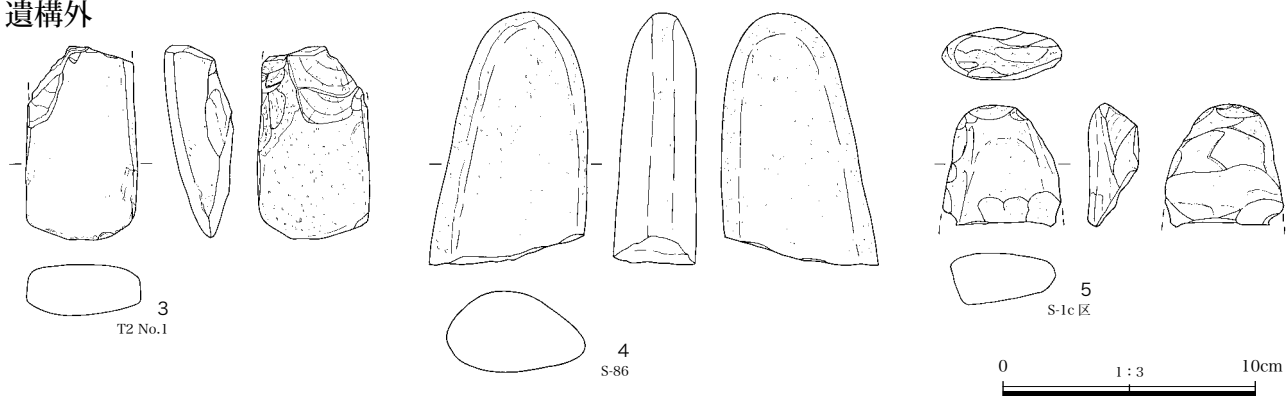


第138図 石器実測図(19)

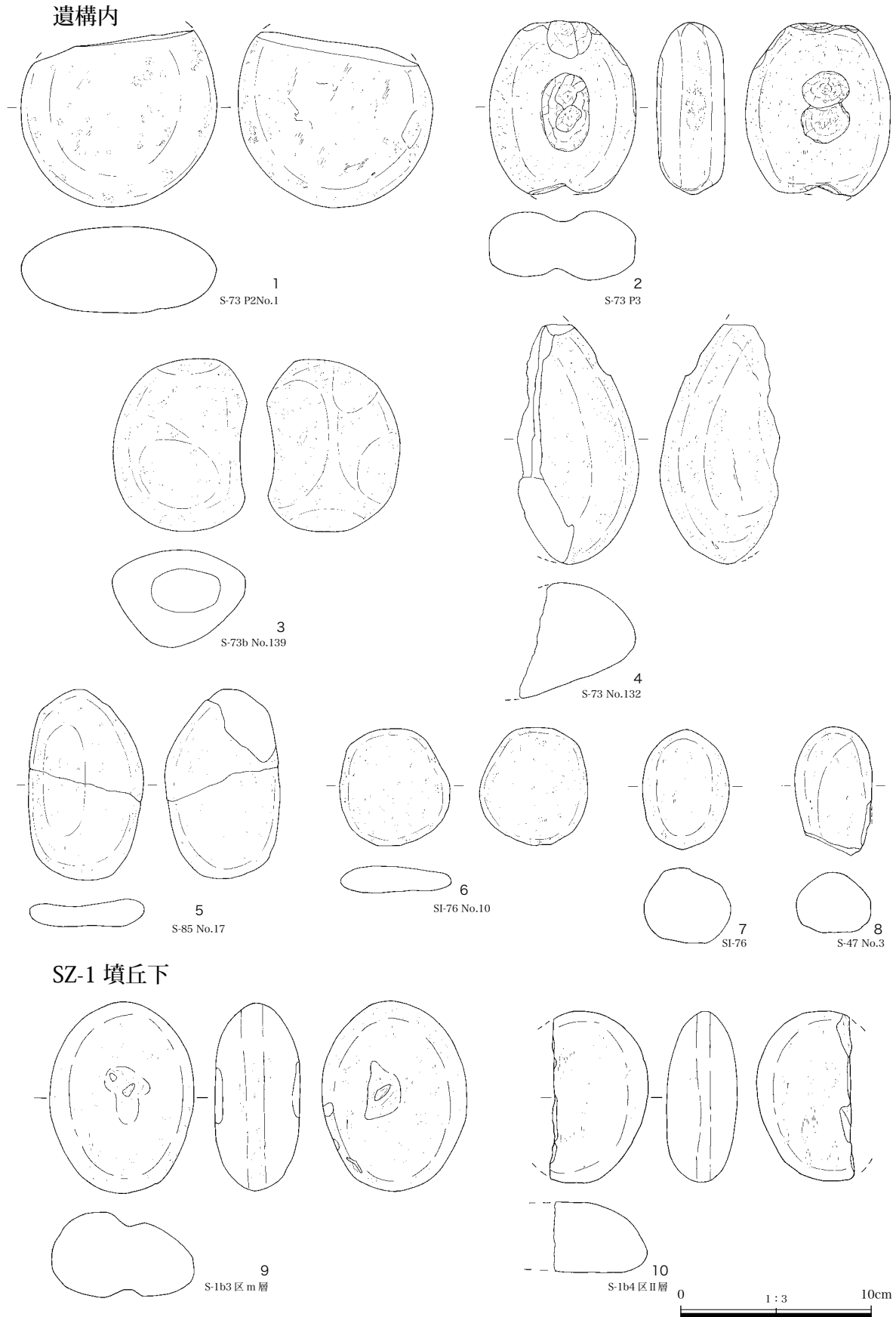
遺構内



遺構外



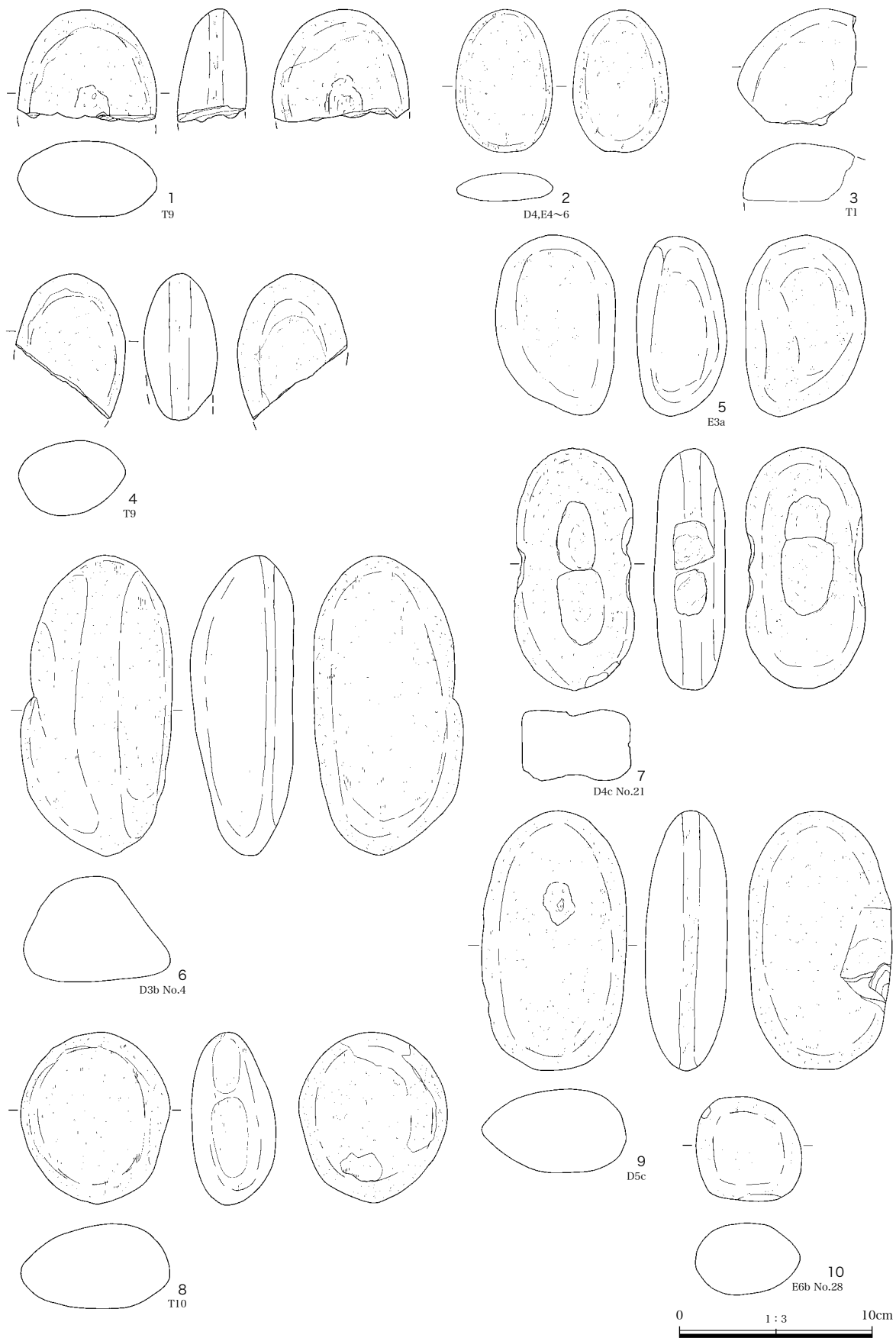
第139図 石器実測図(20)



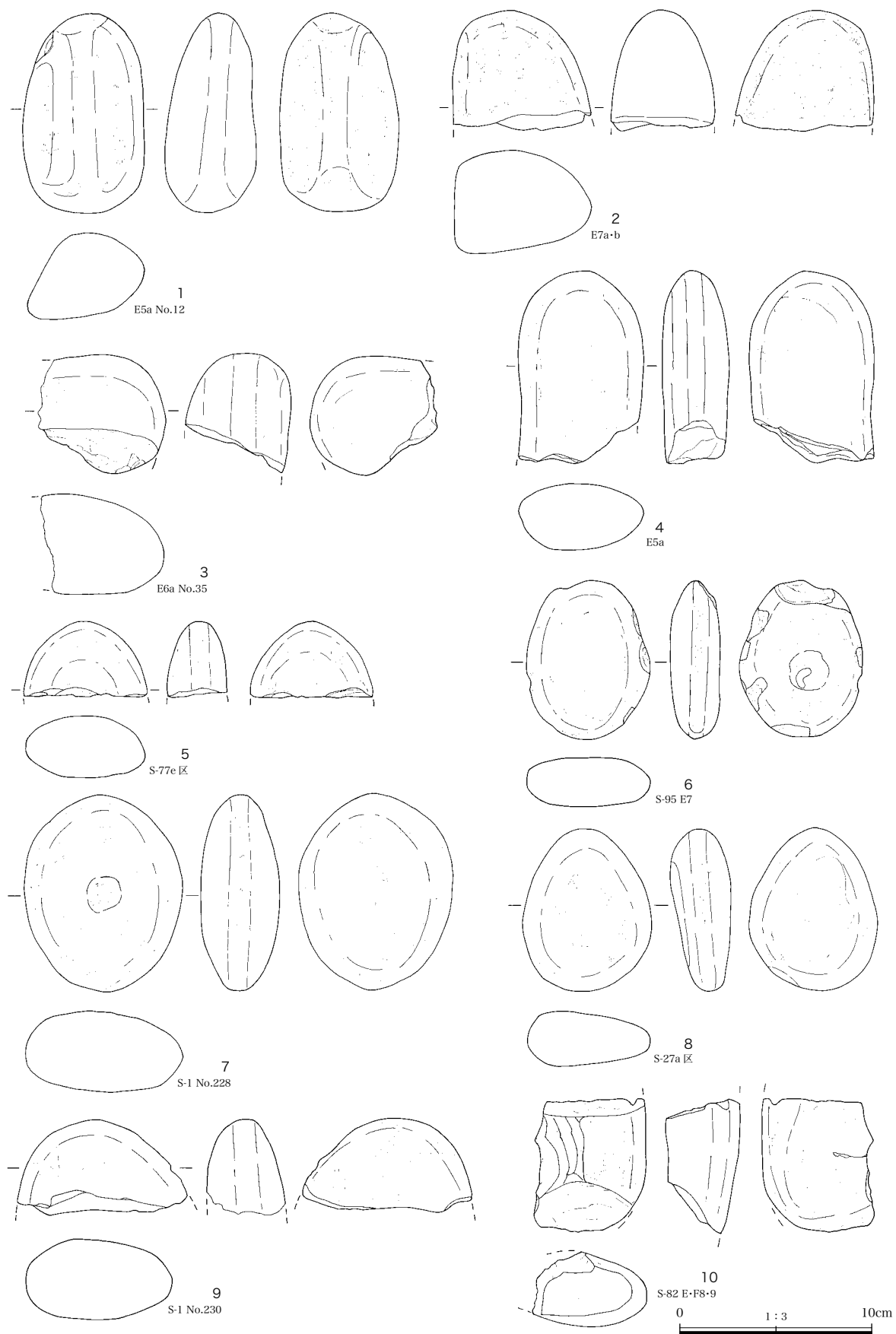
第 140 図 石器実測図 (21)



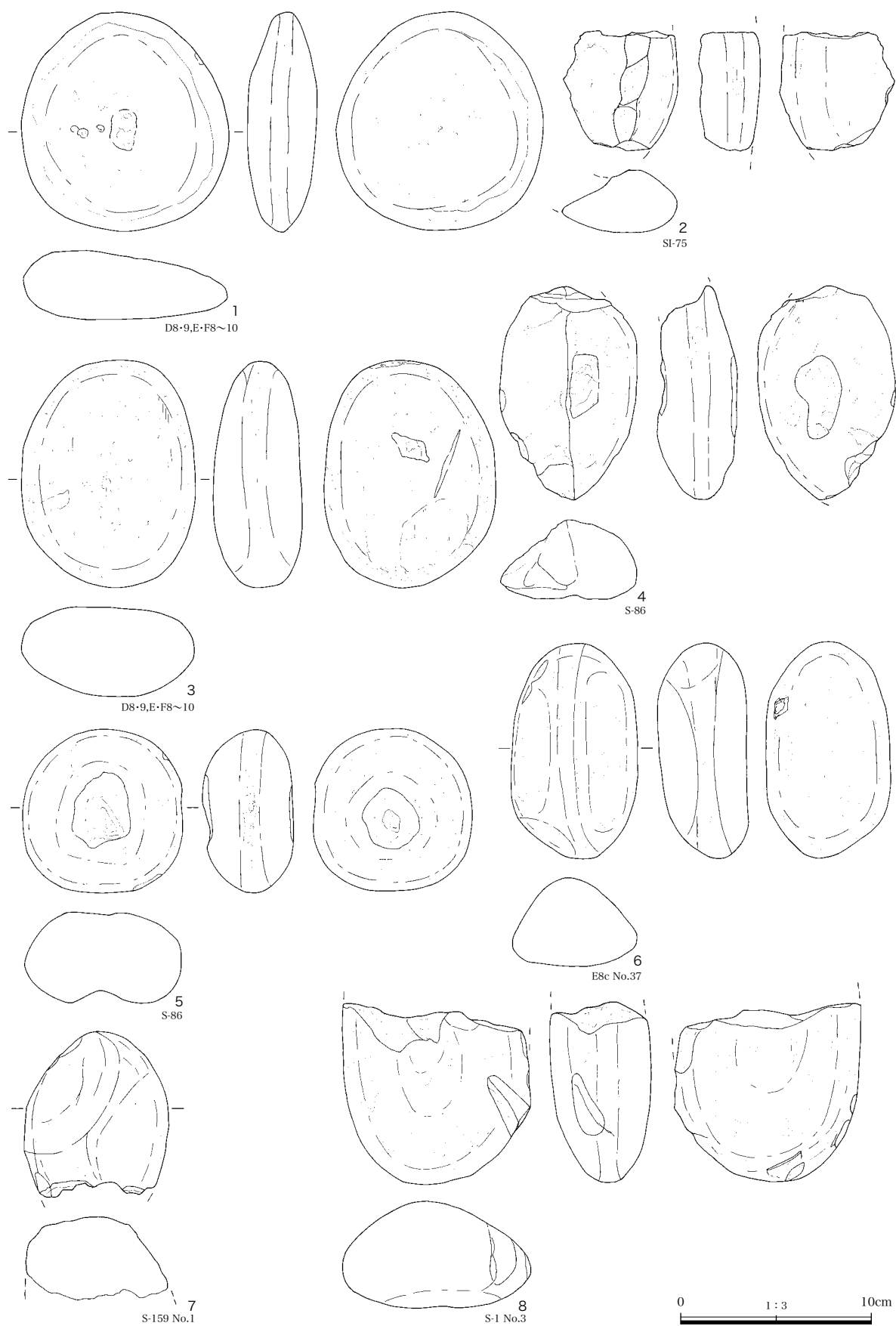
第141図 石器実測図(22)



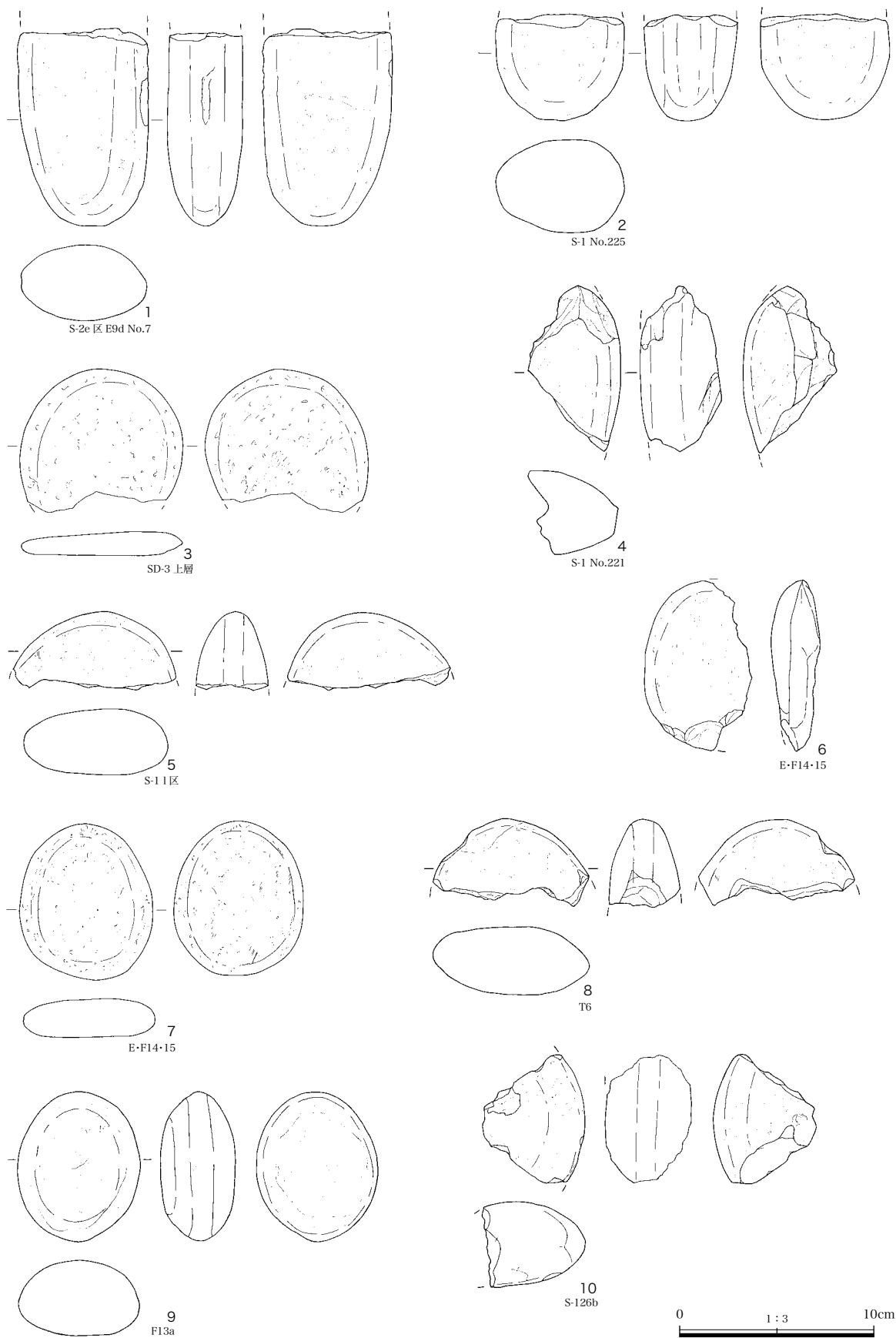
第 142 図 石器実測図 (23)



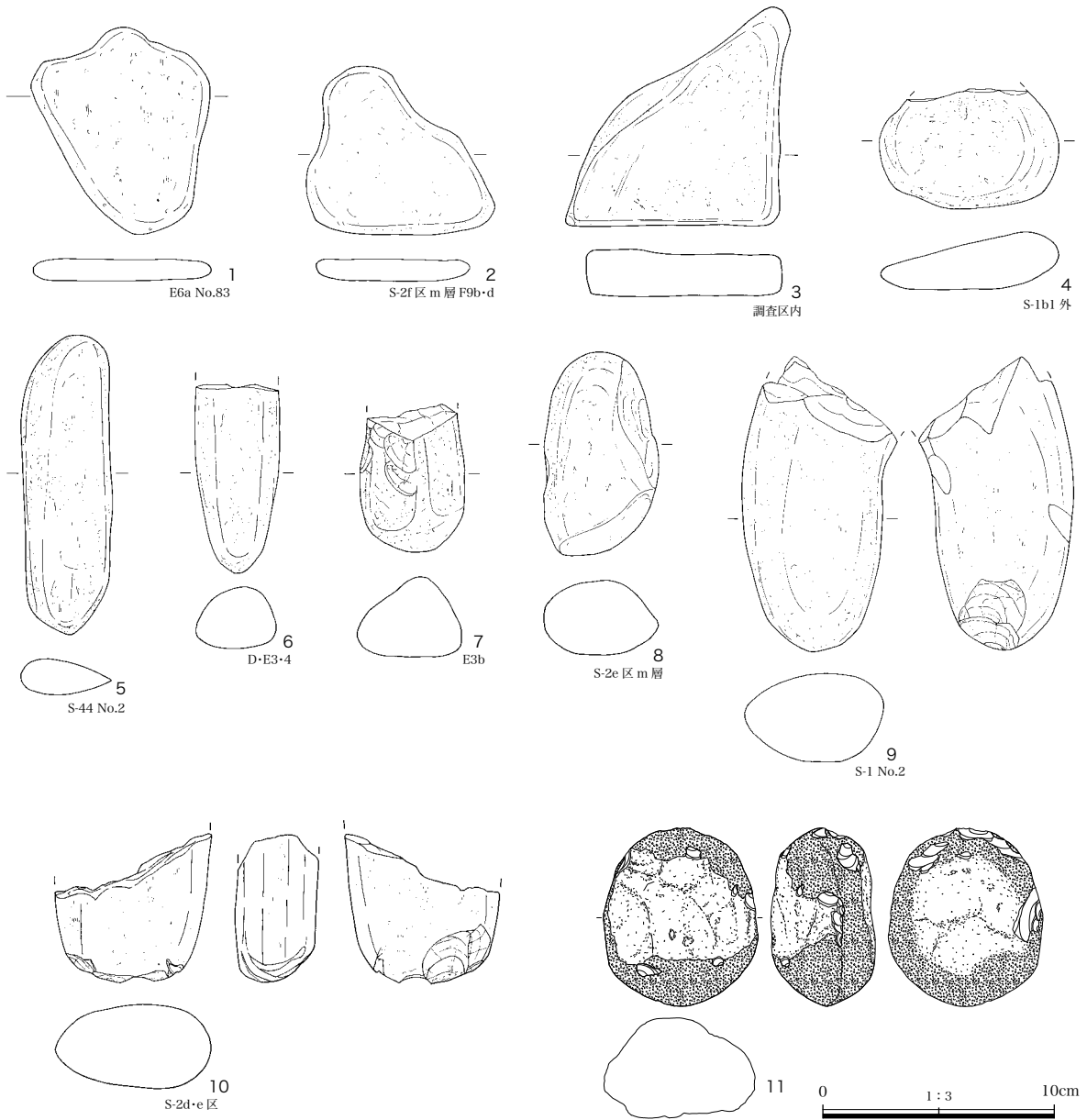
第143図 石器実測図(24)



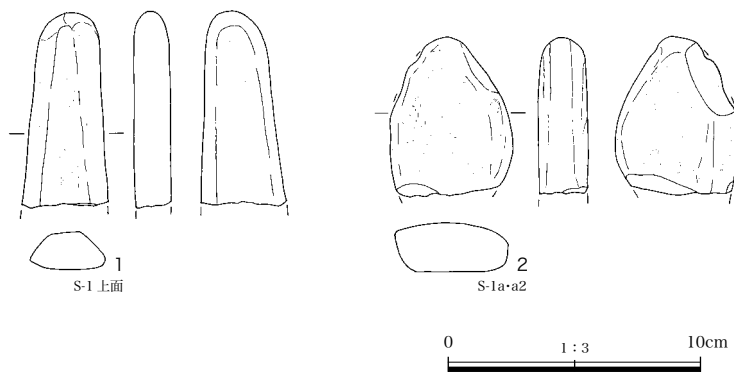
第144図 石器実測図(25)



第145図 石器実測図(26)



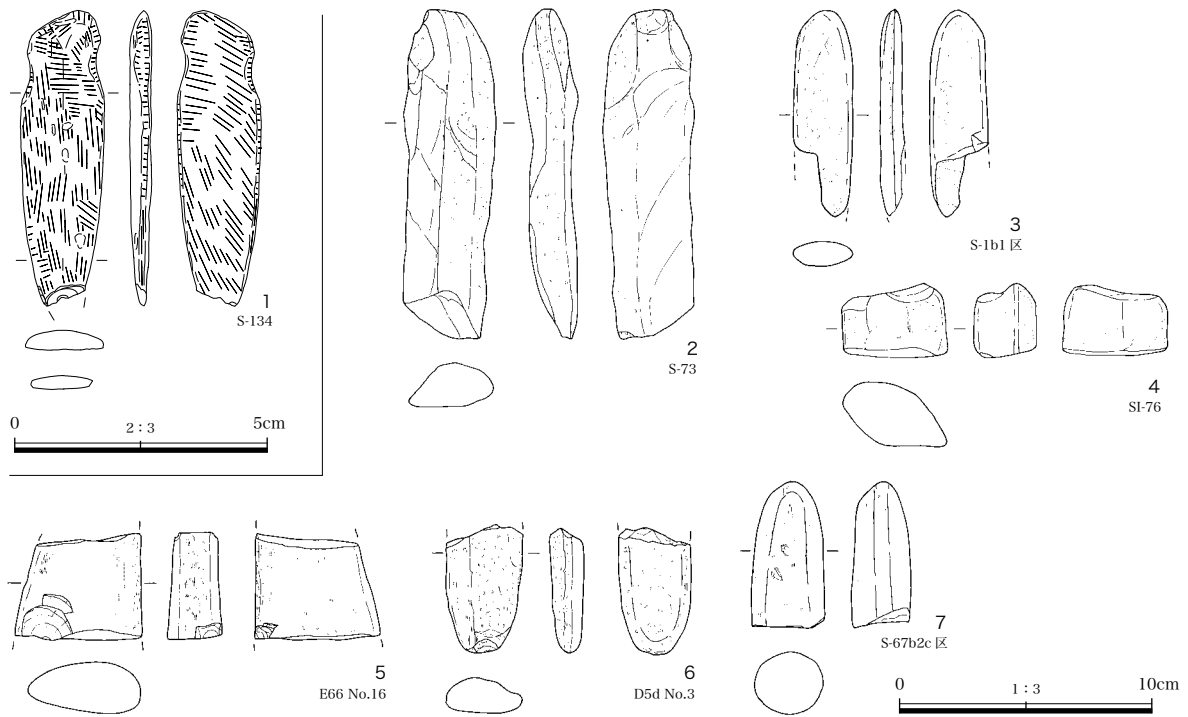
第 146 図 石器実測図 (27)



第 147 図 石器実測図 (28)



第148図 石器実測図(29)



第 149 図 石器実測図 (30)

第 9 表 石器観察表

No.	器種	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	石材・材質	出土位置	備考
第 120 図 1	石鏃	1.38	1.32	0.38	0.67	チャート	SD-3 d 区	右脚 (カエシ) 端部欠損、小形薄手。
第 120 図 2	石鏃	1.01	1.24	0.19	0.23	流紋岩	E12c	挟り深く長脚状、薄手で丁寧な作り。白色味強。
第 120 図 3	石鏃	2.20	1.15	0.40	0.85	ホルンフェルス	d 区 F9d S-2 上面	縁辺・基部のみ二次加工。
第 120 図 4	石鏃	1.54	1.47	0.25	0.53	チャート	S-1 周溝 a 区	先端・基部とも鋭角に作出。
第 120 図 5	石鏃	1.09	1.09	0.43	0.57	珪質頁岩	D3c	左側縁～下位欠損。やや厚みあり雑な作り。
第 120 図 6	石鏃	2.28	1.59	0.47	1.37	泥質チャート	S-1 周溝 c 区	左脚欠損。やや上位厚み残す。
第 120 図 7	石鏃	2.09	2.11	0.37	1.52	チャート	S-1 頂部 盛土層	先端欠損。挟り直線的。
第 120 図 8	石鏃	2.20	1.20	0.29	1.09	頁岩	F15b	平基に近いが基部加工は挟り部加工に近い。やや厚みあり。
第 120 図 9	石鏃	1.66	1.08	0.28	0.55	チャート	E6c	先端・脚欠損。やや透明感ある灰色～黒色チャート。
第 120 図 10	石鏃	1.92	1.39	0.38	0.98	チャート	E12c	左脚部・茎欠損。先端鋭角、茎基部厚みあり。
第 120 図 11	石鏃	2.36	1.98	0.72	3.19	チャート	S-2 d 区	脚部欠損? 器体中央厚みあり。未製品の可能性あり。
第 120 図 12	石鏃	2.62	2.16	0.84	3.78	チャート	D3c	表面一部礫面。器体中央剥離あるが、厚み残ったまま。未製品か。
第 120 図 13	石鏃	3.08	2.38	0.68	4.88	チャート	E9・F9	縁辺加工やや粗い。中央厚み残す。灰黄褐色。
第 120 図 14	石鏃?	1.89	1.17	0.40	0.96	チャート	F9c	下位欠損。やや粗い加工。他器種の可能性あり。
第 121 図 1	石鏃	2.98	2.31	0.66	3.43	チャート	E8・9	両極剥片? 二次加工先端部分のみ。
第 121 図 2	石鏃	2.82	2.56	1.12	4.72	珪質頁岩	E8・9	表面右風化面。器体中央の稜折断状+微小剥離。先端二次加工僅か。
第 121 図 3	石鏃?	2.60	1.69	1.18	4.18	チャート	E9	両極剥片? 上端および先端一部に二次加工。石鏃か?

第3節 縄紋時代の遺構と遺物

第122図1	石匙	4.25	2.84	1.04	13.66	玉随	S-1 T12	縦長剥片素材、つまみ部・右側縁二次加工。
第123図1	楔形石器?	2.98	2.00	0.98	5.28	チャート	F9	正面右側は風化礫面。二次加工不明、左側縁一部に微小剥離痕。
第123図2	楔形石器?	2.68	1.59	0.90	4.13	チャート	E・F10～12	図での横位方向両極剥片。裏面縁辺ほぼ全周に細かい二次加工。刃部状。
第123図3	楔形石器?	2.54	1.91	0.74	5.09	頁岩	E9b	左右側縁折断状で剥片剥離は楔形の定型例に近い。下端微小剥離痕。
第123図4	楔形石器?	2.39	2.11	0.96	5.40	チャート	S-2a区	上端・左側縁折断面状。下端および右側縁に二次加工。
第123図5	楔形石器?	2.66	1.70	0.93	4.21	チャート	E8	やや厚み残す。縁辺二次加工無しか。
第123図6	楔形石器	3.07	2.27	0.91	5.51	チャート	E4c	左右折断面状。裏下端風化礫面。表面下端二次加工で、やや鈍角だが刃部状。
第124図1	二次加工剥片	2.09	1.71	0.38	1.25	黒曜石	F12	透明感ある黒曜石。左側縁にやや細かい二次加工。
第124図2	二次加工剥片	2.01	1.79	0.53	1.78	黒曜石	F15a(S-176)	くすんだ黒色で気泡少なめ。右側縁・左側縁折断状。左上側縁二次加工。
第124図3	二次加工剥片	4.23	4.68	1.50	30.76	黒曜石(高原?)	F12c	気泡多の黒曜石。下縁辺二次加工、右側縁微小剥離痕。旧石器の可能性あり。
第125図1	二次加工剥片	2.86	2.47	0.96	7.22	チャート	S-103	右縁辺細かい剥離の二次加工。左縁辺使用痕、裏縁辺近くに薄くするような剥離。上端風化面。
第125図2	二次加工剥片	2.71	2.21	0.65	2.58	チャート	S-146	台形状の剥片素材。右下縁辺に二次加工、左側縁刃こぼれ状の微小剥離痕。
第125図3	二次加工剥片	2.68	1.81	0.67	3.15	チャート	S-2m層、E9b	良質なチャート。ほぼ全周に二次加工および使用痕。特に左右側縁刃部状の鋭角な縁辺。
第125図4	二次加工剥片	3.94	2.57	0.89	8.41	チャート	S-1、T12	良質なチャート。全周に二次加工および使用痕。左右側縁刃こぼれ状の微小剥離痕。
第125図5	二次加工剥片	3.95	2.23	1.28	7.42	チャート	E9a	やや厚みある縦長剥片。右下側縁に細かい二次加工。
第125図6	二次加工剥片	2.91	1.63	0.58	3.26	チャート	E8c	灰色で粘質あるチャート。右辺折断面状で両極剥片。上～左～下縁辺二次加工。
第125図7	二次加工剥片	2.96	3.94	1.12	12.81	チャート	D5d	左側縁二次加工、上面折断面状。裏面中央厚みとる剥離加工か。
第125図8	二次加工剥片	2.28	3.08	0.96	5.12	チャート	E9・E10	下端二次加工。左側縁鋭角、僅かに微小剥離痕あり。
第125図9	二次加工剥片	4.98	2.74	1.07	15.14	チャート	E4	右側縁の上位および下位二次加工、左側縁使用痕および一部二次加工。正面中央風化摩滅。
第125図10	二次加工剥片	3.46	4.00	1.61	24.87	チャート	E10c	上下の縁辺で二次加工。表面側下位は風化礫面。
第125図11	二次加工剥片	4.71	3.57	1.39	18.97	チャート	調査区内東	左右側縁下半および下縁辺二次加工。左右側縁では刃こぼれ状の微小剥離痕。
第125図12	二次加工剥片	2.77	4.66	1.81	17.49	チャート	D6d	左右～下縁辺二次加工。一部微小剥離痕あり。
第126図1	二次加工剥片	4.75	6.36	2.03	54.89	チャート	S-2 m層、E10c	表自然礫面、上下折断面状。下端刃部状の二次加工で搔器に近い。
第126図2	二次加工剥片	5.75	3.74	1.18	26.61	チャート	E6a	薄い青灰色チャート。ほぼ全周二次加工で一部微小剥離痕。搔器に近い。
第126図3	二次加工剥片	2.74	2.46	0.52	3.85	チャート(赤色)	S-27	右下折断面状。右上～左上縁辺二次加工、下縁辺も二次加工または使用痕。
第126図4	二次加工剥片	5.21	6.86	2.74	104.82	泥質チャート	E6c	表裏風化面でコアに近い大きめの剥片素材。下端二次加工で鈍角だが刃部状。
第127図1	二次加工剥片	3.22	2.69	0.88	8.49	頁岩	調査区内	表大半自然礫面。下縁辺および付近二次加工。中央厚みとる剥離か。
第127図2	二次加工剥片	3.61	2.70	0.89	8.08	頁岩	F7a	両極剥片?上面礫面。下縁辺二次加工、右側縁使用痕。
第127図3	二次加工剥片	3.68	2.92	0.68	8.30	頁岩	E5b	板状剥離の石材。左右折断面状。上下の縁辺二次加工。

第三章 検出された遺構と遺物

第127図4	二次加工剥片	5.18	4.42	1.33	30.86	頁岩	E8a	表自然礫面。両極剥片か下端縁辺二次加工、左～上位微小剥離痕。
第127図5	二次加工剥片	5.00	4.78	1.45	35.17	頁岩	F10a	粘性ある石材。下～左側縁・右側縁二次加工および微小剥離痕（左辺中央は後世の傷）。搔器に近い。
第127図6	二次加工剥片	4.08	5.32	1.56	37.80	頁岩	D・E・F6～8	両極剥片？表裏一部に自然礫面。下縁辺二次加工。左側縁一部微小剥離痕。
第127図7	二次加工剥片	2.86	7.74	1.22	24.19	頁岩	E5d	表礫面。上端縁辺中央より左二次加工。下端中央～左微小剥離痕。
第128図1	二次加工剥片	2.79	4.65	1.33	18.17	堇青石ホルンフェルス	E5b	表自然礫面、裏剥離面・打点あり。左側縁下縁辺二次加工。
第128図2	二次加工剥片	2.65	3.34	0.88	8.18	堇青石ホルンフェルス	D3c	上面折断面状。表面下端礫面残り。下～右縁辺二次加工（剥離不明瞭）。
第128図3	二次加工剥片	2.98	1.84	0.79	4.56	無斑晶ガラス質安山岩	調査区内	左側縁二次加工。下端折断面状。ポイント未製品の可能性あり？
第128図4	二次加工剥片	4.09	2.58	1.17	10.29	無斑晶質安山岩	S-2m層 F9b・d	上下面に礫面残り。下縁辺二次加工および使用痕（剥離不明瞭）。
第128図5	二次加工剥片	3.59	4.88	1.29	27.03	砂岩	S-27	下端や裏面一部に礫面残り。下端・右上・左上側縁二次加工（剥離不明瞭）。
第128図6	二次加工剥片	4.76	4.94	1.34	38.3	砂岩	SD-3	上下右側面狭く面状に礫面残り。左側縁に二次加工。
第128図7	二次加工剥片	4.96	4.30	1.52	20.8	安山岩質溶結凝灰岩	T14	上面礫面、裏面右側風化折断面状。右側縁二次加工および微小剥離痕。
第128図8	二次加工剥片	2.21	2.03	0.84	3.82	玉髓	S-2g区	上端以外の縁辺二次加工、一部微小剥離痕。
第128図9	二次加工剥片	4.25	4.49	1.55	26.54	溶結凝灰岩（鮮新世）	S-1c区	粘性ある石材。右側縁二次加工。下縁辺微小剥離痕。上端一部使用痕？
第128図10	二次加工剥片	4.11	2.08	1.07	7.20	流紋岩	E6d	三角錐状で中央厚みある。裏面左下縁辺二次加工。
第129図1	使用痕ある剥片	2.41	2.56	0.84	3.77	チャート	D・E・F6～8	上端除く縁辺に刃こぼれ状使用痕。裏面上端剥片剥離の打点。
第129図2	使用痕ある剥片	3.72	2.12	0.86	6.56	チャート	E8d・E9c (S-27)	上下折断面状。両極剥片か。右縁辺微小剥離痕。
第129図3	使用痕ある剥片	2.48	2.64	0.64	2.64	チャート	F7	下～右側縁刃こぼれ状微小剥離痕。裏面打点あり。
第129図4	使用痕ある剥片	2.37	3.08	1.25	7.23	チャート	E9c	上面自然礫面。下～左縁辺微小剥離痕。
第129図5	使用痕ある剥片	3.41	3.35	1.81	13.46	チャート	E11	上面折断面状。左側縁微小剥離痕。
第129図6	使用痕ある剥片	6.11	3.01	1.17	15.2	無斑晶ガラス質安山岩	E5b	縦長剥片、裏面に打点あり。左右の鋭利な縁辺に微小剥離痕。
第129図7	使用痕ある剥片	2.65	2.68	0.81	3.45	珩質頁岩	F12b	粘性ある石材。下縁辺2/3に微小剥離痕。旧石器の可能性あり。
第130図1	石核	2.49	2.44	1.79	13.92	玉髓（良質）	S-2土壘盛土 d・e区	立方体状、各面1～3剥離面。面境界縁辺の稜部分に一部微小剥離痕あり。
第130図2	石核	4.02	4.11	1.82	23.77	黒曜石（高原？）	S-1墳丘下 F11d	気泡多。剥片に近い厚さ。表裏3～4下位の剥離。
第130図3	石核	2.91	5.73	2.04	28.99	黒曜石（高原？）	S-1墳丘下 F11a	横長剥片剥離の痕跡2面。
第131図1	石核	2.30	3.61	1.86	14.9	チャート	F6b・F7a	一部風化礫面残り。最終面では大きくは6面程度の剥片剥離。剥片は2cm程度か。正面図左下縁辺微小剥離使用痕。
第131図2	石核	2.65	5.68	3.85	79.4	チャート	S-1墳頂部	やや質の悪いチャート。礫面風化面多。1～3cmの剥片剥離主か。裏面中央に多数ある剥離痕は剥片剥離を重ねて試みた結果か。
第131図3	石核	5.00	2.64	2.29	33.33	無斑晶ガラス質安山岩	E6b	剥片に近い状態。正面自然礫面か。剥離不明瞭だが、大きく5面程度とられている。
第131図4	石核	3.46	4.85	3.26	59.97	無斑晶質安山岩	SD-3a・b区	上面自然礫面。表裏で4～6回程度の剥片剥離か
第132図1	二次加工剥片	2.80	1.80	0.70	3.70	チャート	S-1b4区 墳丘下 包含層	五角形状の両極剥片、左縁辺等の一部に二次加工。石鏃未製品の可能性もあり？

第132図2	二次加工剥片	2.20	1.20	0.40	1.10	泥質チャート	S-1 a2to II層	黒味が強いチャートの剥片。左側縁および右下の縁辺および上端裏面一部に細かい二次加工。右縁辺は切断状。搔器や石鏃・石錐未製品の可能性もあり？
第132図3	二次加工剥片	3.10	1.40	0.80	2.50	チャート	S-1 a・a2 墳丘下包含層	側縁も使用縦長剥片の左側縁一部および基部に二次加工。左側縁の剥離は微小剥離で使用痕か。
第132図4	使用痕ある剥片	4.20	1.80	0.90	7.50	泥質チャート	S-1 a・a2	図正面もしくは右上面は礫面か。縦長剥片もしくは横長の両極剥片。図下の縁辺に微小な剥離痕。
第133図1	打製石斧	8.30	5.70	1.50	90.50	チャート	S-73 no.6	表裏に礫面残す。上縁辺は山形状、下縁辺は直線的だが軸に対し斜方向となる。挟り部の敲打は右側縁入念でやや丸みを帯びている。
第133図2	打製石斧	9.30	6.50	1.30	101.90	輝石安山岩	F14b SI-76	表裏に礫面残す。全体に薄手の礫素材だが若干下位の方が厚め。下端の剥離はさほど丁寧ではない。挟り部敲打は挟り部左右の狭い範囲。
第133図3	打製石斧？	(3.20)	(5.00)	1.20	23.70	輝石安山岩	SI-76	表裏自然面を残す。当初分銅形打製石斧の一部と考えここに示すが、破碎礫とすべきか。あるいは石錐の可能性も残る。明瞭な二次加工は無く、上端や左側縁の剥離も目的的な加工との判断はし得ない。
第133図4	打製石斧？	(7.00)	4.60	1.30	60.60	輝石安山岩	S-1 墳丘下 b2 盛土層 上面	表裏に自然礫面を残す。分銅形の刃部と判断したが、上端の可能性もあろうか。加工は少なめで、ほぼ片面加工。挟り部に敲打痕。
第133図5	打製石斧？	5.60	7.00	1.90	79.80	堇青石ホルンフェルス	S-1 b 区	正面礫面、図左側切断状欠損。下端も欠損と考えて分銅形の約上位半分と捉えるが、縁辺の加工は一部で、二次加工剥片の可能性も残る。
第133図6	打製石斧片	(3.10)	5.00	2.00	27.70	輝石安山岩	S-1 b2	表裏に自然礫面を残す。打製石斧下端と考えるが、不明点も残る。やや厚みがある素材で刃部表裏からの加工で平面形丸みのある刃部を作出。
第133図7	打製石斧片	(5.00)	5.70	1.20	41.80	輝石安山岩	S-1 c 区	表裏に自然礫面を残す。上下逆で頂部の可能性もある。左右非対称で下端刃部も軸と直交しない。挟り部敲打痕やや不明瞭。刃部はほぼ片面からの加工。
第134図1	打製石斧	7.70	5.90	1.70	83.50	流紋岩質凝灰岩	T3	表裏に自然礫面を残し、刃部にも一部礫面がある。厚みがある素材を用いている。刃部頭部とも細かい剥離加工ない。挟り部の敲打は左右とも入念で、とりわけ右側丸み帯びている。
第134図2	打製石斧	(5.00)	6.00	2.00	84.90	輝石安山岩	E6a	多孔質とは言えないが気泡も比較的多く磨石等にも使われる石材に類似。上下逆で刃部の可能性もある。側縁挟り部の敲打は入念で特に左側縁挟り部は磨り面に近いなめらかな面。
第134図3	打製石斧？	(3.70)	3.40	0.80	14.50	粘板岩	S-202b	打製石斧刃部の左側部分と推定したが、器種分類自体も異なる可能性がある。表裏上下も不明。右側上側が欠損の他、裏面の多くが剥離欠損。表面は礫面残す。図の下端および左側縁の加工は比較的入念。
第134図4	打製石斧	8.80	6.90	1.90	118.90	流紋岩質凝灰岩	E3d	表裏礫面を残す。右上一部を欠損としたが、剥離加工あるいは使用時剥離の可能性もある。図下端刃部加工は両面より丁寧な加工。側縁挟り部の敲打は右側の方が入念。
第134図5	打製石斧？	(6.50)	6.20	2.10	95.10	砂岩	S-11 no.1	やや緻密で重みがある石材。表面礫面を一部に残し、裏は剥離面。下端欠損、右側縁をくびれ部に至る部分、上端を頂部と考えたが、加工の剥離は不明瞭、形態的にも不定形で厚みがあり、打製石斧との判断も問題が残る。

第三章 検出された遺構と遺物

第 134 図 6	打製石斧?	(4.50)	6.70	1.40	52.40	輝石安山岩	S-2a 区盛土層	表裏面とも自然礫面を残す。図右側の剥離を挟り部にいたる部分とみて打製石斧上位部分とみたが打製石斧として良いか問題残す。
第 134 図 7	打製石斧?	(7.60)	4.50	1.40	64.10	頁岩	S-2 盛土層 E9b グリッド	緻密かつ重量感がある石材。表裏面とも自然礫面を残す。左右縁辺の剥離加工、敲打もしくは摩滅により鋭角な刃部状の縁とはなっていない。下端は刃部もしくは欠損で判然としない。側縁の狭いながらもなめらかな面を敲打によるものとして磨製石斧未製品との推定も可能か。
第 134 図 8	打製石斧	11.50	5.20	1.90	149.90	ホルンフェルス	S-2c 区盛土	下位は板状だが上位は厚みがある。裏面に自然礫面を残す。左右縁辺および刃部は連続的な剥離加工。右側縁上部の一部にややなめらかな面があり、敲打か。
第 134 図 9	打製石斧	10.90	5.20	1.10	85.10	粘板岩	E8b no.12	薄手の板状素材。裏面は礫面、表面の板状剥離面は礫面か不明。上位は欠損もしくは使用時の剥離欠損か。側縁挟り部の敲打は不明瞭だが若干の敲打か。
第 134 図 10	打製石斧	9.90	5.30	1.50	100.70	ホルンフェルス	E11a・c	やや薄手の板状礫を素材。表裏とも礫面を残している。完存。刃部は表裏から比較的丁寧な剥離加工。挟り部に敲打痕、特に左側は顕著。
第 134 図 11	打製石斧	(6.00)	5.90	1.10	54.00	ホルンフェルス	S-2b 区 土塁盛土層 E9a・c	やや薄手の板状礫を素材。表裏とも礫面を残している。完存。刃部は主に表側の加工が明瞭、側縁挟り部の敲打は左側の方が明瞭。
第 134 図 12	打製石斧	9.10	4.70	1.80	84.90	頁岩	E11a・c S-66 内側	やや厚みのある板状礫素材。左右非対称。表裏とも礫面残り、裏面上位は板状に剥離欠損。刃部から側縁にかけてに微小剥離痕。右側縁は敲打殆どみられないが、左側縁の挟り部では敲打比較の明瞭。
第 134 図 13	打製石斧片?	12.90	9.60	2.40	312.40	輝石安山岩	F11b	本遺跡内出土の打製石斧として最大。裏面は礫面を多く残り、表面は一部に残す。刃部は比較的丁寧な剥離加工により平面弧状、断面鋭角な刃部を作出。一部刃こぼれ状の微小剥離や摩滅状の擦れ。側縁挟り部敲打は左側上位で顕著。
第 134 図 14	打製石斧	10.10	6.30	0.80	98.20	輝石安山岩	E13c・d E13a	E13a グリッド出土破片(図上位部分)と E13c・d グリッド出土破片が接合。但し詳細な出土位置は不明。やや薄手の板状礫素材。表裏面とも礫面を残す。刃部は主に表側の剥離加工、一部刃こぼれ状の擦れ。側縁の挟りは深く、敲打が加えられる(左の方が顕著)。図左上は欠損。
第 135 図 1	打製石斧	10.80	6.60	1.90	179.30	輝石安山岩	E・F14～ 15	やや厚みのある礫素材。表裏とも礫面を残す。刃部、上端ともやや粗い剥離の連続加工で、比較的鋭角な刃部作出。挟り部の右側縁のみ敲打・摩滅痕。
第 135 図 2	打製石斧	10.70	7.00	1.50	136.00	輝石安山岩	E・F14～ 15	やや薄手扁平な板状礫素材。表裏とも礫面を残す。刃部・上端とも片面加工、細かい剥離もある。挟り部の敲打は、右側縁では殆どみられず、左側縁側で顕著な敲打+摩滅痕。
第 135 図 3	打製石斧	10.20	5.70	0.90	97.00	堇青石	F12a	薄手扁平な板状礫を素材。粘板岩のように剥離される石で、裏面左側は階段状に薄く剥離された面。表面はやや風化し自然礫面を多く残す。上端はやや粗い数回の剥離加工、刃部はやや細かい剥離。挟り部敲打は若干。

第3節 縄紋時代の遺構と遺物

第135図4	打製石斧	8.10	5.20	1.05	72.45	輝石安山岩	I区14-10	やや薄手扁平な板状礫を素材。表裏とも礫面多く残す。刃部は円弧状、細かい剥離加工。挟り部の敲打痕は右側縁の方が密で、一部摩滅。I区出土との記録のみで、出土グリッド不明。
第136図1	スタンプ形石器	8.30	8.40	5.00	459.60	砂岩	T6	横断面三角形に近い礫を素材。全体に焼けているが、とりわけ図での左側が焼けて赤く変色。側面は平滑な自然礫面で、磨られている可能性もある。下端部は概ね平坦だが若干の凹みあり。上端は概ね平らな面で、二次的なやや細かい剥離も一部ある。
第136図2	スタンプ形石器	10.50	(5.70)	5.00	413.60	流紋岩質溶結凝灰岩	T11 no.2	横断面三角形～台形の細長い礫素材。図での右側面はほぼ剥離加工の面、残る面は平滑だがほぼ自然礫面のまま。下端やや細かい二次加工の剥離があるが、大きくみれば自立可能な程度の平坦な面。
第136図3	スタンプ形石器	10.30	5.00	5.00	509.80	流紋岩質溶結凝灰岩	D5d	横断面長方形～台形、やや細長く重量のある礫素材。側面は4面とも概ね平滑だが素材凹凸はそのまま。下端は概ね平坦で、剥離面も含め擦れ・摩滅。
第136図4	スタンプ形石器?	8.00	7.50	4.40	294.70	デイサイト質凝灰岩	F7a・c	横断面不整形長方形～台形に近い礫素材。被熱明瞭では無い。図での正面および左側面は自然礫面、右側面は2面程度の平坦面となる剥離面(非人為的?)。下端面は大きく左右で面が異なる階段状段差(あるいは溝状の凹み)となっている。意図的な加工かは不明。この凹部以外の平坦面は平滑で磨り面状。
第137図1	礫器類	16.30	7.10	4.90	1073.50	チャート	D・E3～4 F4	横断面長方形の重量のある礫素材。下端側剥片剥離の残核とも考えられたが、鋭角な刃部状、一部にやや細かい二次加工もみられることから礫器として扱う。各面と面との間の縁部分で微小な剥離・傷がある。
第137図2	礫器類?	11.60	6.60	5.80	491.90	流紋岩	E6a no.19	平面不整形の礫素材。下端側を剥離加工し比較的鋭角な刃部作出。端部左端は若干摩滅。他の面で加工や研磨の痕跡はみられない。
第137図3	礫器類?	12.50	5.10	2.10	179.90	頁岩	SD-3	チャートに近い質感の細長い棒状～板状礫素材。左側縁～下端側を主に加工、上端や裏面では自然礫面多く残す。右側縁加工あり。下端は鋭角な刃部状で、搔器あるいは打製石斧としても良いか。微小な剥離痕もあり。
第137図4	礫器類?	13.60	5.50	2.70	332.20	頁岩	S-86b	重量がある棒状の礫素材。図正面は大きな剥離面、裏面が自然礫面。右側縁上位や下端の一部に加工が一部ある。礫器として良いか問題残す。
第137図5	礫器類?	8.60	4.70	1.90	115.40	玄武岩	S-1 b1・b2 墳丘下II層	もとは棒状の礫か。焼けて下端近くの一部は赤く変色。正面は自然礫面、裏面が大きな剥離面。下端や左右側縁が鋭角、明確な二次加工は下端の一部のみ。下端左端や左側縁一部に敲打もしくは摩滅痕。明瞭な刃部加工ではなく他器種あるいは転用の可能性もあろうか。
第137図6	搔器?	(7.70)	(4.80)	(2.20)	102.50	頁岩	T9	裏面は自然礫面、残る面は剥離面で剥片石器とも言える。下端は細かい加工で刃部作出。刃部加工の様相からは搔器ともできるか。右上の側縁一部に微小な剥離痕。
第137図7	搔器?	4.70	5.20	1.50	38.30	頁岩	S-27 b区 古墳周溝	裏面で自然礫面を残す。下端は刃部作出とも捉えられるが、石材の関係から加工痕や使用痕は不明瞭。右側縁も鋭角をなしているが加工は不明。

第三章 検出された遺構と遺物

第 137 図 8	搔器?	7.50	8.20	1.80	145.10	玄武岩	S-1T12	正面および裏面一部に礫面を残す。左右側縁～下端の鋭角な縁辺にやや粗い加工。刃部状とするには疑問な点も残り、加工痕ある剥片とすべきか。
第 137 図 9	礫器類?	(8.40)	5.50	2.90	139.30	砂岩	S-95	扁平な礫素材。上端折断状の剥離。左側縁全体に加工+敲打。右側縁は若干の敲打+磨り痕。刃部状の下端でも敲打または摩滅痕跡。搔削器や敲き石とも判断できようか。
第 137 図 10	礫器類?	5.20	6.30	1.10	52.20	無斑晶質安山岩	S-1 1区	扁平な礫素材、正面剥離面、裏面が自然礫面。上端は欠損か。側縁～下端にかけてやや細かく打ち欠き?加工痕不明瞭で刃部作出として良いか不明。二次加工剥片とすべきか。搔器や打製石斧破片の可能性も残る。
第 138 図 1	石錘?	6.20	5.40	1.60	78.10	輝石安山岩	E4・F5	打ち欠き剥離は 1カ所のみ。目的的な剥離加工ではない可能性もある。表裏の自然礫面は平滑で磨っている可能性もあるが判然としない。
第 138 図 2	石錘	5.90	5.00	1.70	72.50	輝石安山岩	D・E・F6 ～8	明確な打ち欠きは 1カ所のみ。隣接する下端中央の浅い凹みや上端中央近くの浅く小さい凹みは、目的的な剥離加工として良いか不明。表裏とも一部磨られたような平滑面。石錘との確定に問題が残る。
第 138 図 3	石錘	6.80	4.80	1.50	70.10	ホルンフェルス	E・F14・15	上下端部に明確な打ち欠き。正面上位は板状にやや大きく剥離した部分が礫面との間で階段状の段差となっている。
第 139 図 1	磨製石斧	(19.70)	9.00	5.30	1497.30	石英含有輝石安山岩	SI-76 no.34	楕円形の礫素材、長さ約 29 cmの大型石斧。上端は図裏面側で二次加工剥離あり、欠損もしくは再調整。この大きな剥離面や二次加工部分で若干の敲打痕や研磨状の摩滅、但し他の面のような平滑な面ではない。基本的に敲打研磨による成形。下端刃部は比較的鋭角で磨られたような痕跡(使用痕?)も観察される。
第 139 図 2	磨製石斧	(7.50)	4.20	4.00	177.20	変質凝灰岩 (シャルスタイン)	S-157 no.1	乳房状石斧の上端か。比較的大型となる可能性がある。敲打→研磨成形であろうが、敲打の痕跡は殆ど残されていない。
第 139 図 3	磨製石斧	7.60	4.40	2.00	127.00	輝石安山岩	T2 no.1	板状の礫素材でやや緻密かつ重量感がある。正面および左右側面はよく研磨されているが、裏面は敲打痕を残し研磨は不十分。左側縁近く上位に剥離痕。裏面側の図上端中央から右側の剥離および図正面での左上の剥離は欠損時あるいはその後の剥離か。刃部は断面鋭角、微小剥離痕(刃こぼれ)がある。
第 139 図 4	磨製石斧?	(9.70)	6.00	3.20	285.30	輝石安山岩	S-86	下位を欠損しており磨製石斧として良いか問題を残す。表裏～左側面で磨り～研磨が観察される。敲き石、磨石兼敲き石とすべきか。
第 139 図 5	磨製石斧?	4.70	4.70	2.00	58.20	輝石安山岩	S-1 c 区	緑色を呈し緻密で重量感がある。確定的ではないが、上端から側縁の剥離加工～敲打、正面の敲打～研磨からは磨製石斧の蓋然性が高い。裏面の図中央より下位は欠損剥離面、この面の左上も欠損時剥離か。右側～側面では剥離加工後の敲打が明瞭。
第 140 図 1	磨石	(8.70)	7.20	4.600	628.80	砂岩	S-73 P2	表裏磨面、側面一部敲き+磨痕。
第 140 図 2	磨石兼凹み石	9.00	7.60	3.60	396.40	角閃石輝石安山岩	S-73 P3	表裏磨面+凹み(2連)、右側面敲き+磨痕。
第 140 図 3	磨石	9.10	6.60	5.10	457.30	玄武岩	S-73b no.139	表2面+裏1面+上下端部磨面。
第 140 図 4	磨石	(12.60)	5.10	5.60	500.10	輝石安山岩	S-73b no.132	被熱、表磨面、側面一部磨痕。

第3節 縄文時代の遺構と遺物

第140図5	磨石?	10.00	6.00	1.40	116.40	輝石安山岩	S-85 no.17	扁平薄手。表裏磨面やや不明瞭、表浅く緩い傾斜の窪み。
第140図6	磨石?	6.20	5.70	1.40	66.60	輝石安山岩	SI-76 no.10	表裏磨面、多孔質の石材、磨痕は部分的。
第140図7	磨石?	6.30	4.50	4.00	82.90	スコリア	SI-76	卵状、磨面1~2面、小さな凹み敲打か?
第140図8	磨石?	(6.50)	4.00	3.20	76.00	輝石安山岩	S-47	表1面のみ磨痕、下位欠損。
第140図9	磨石兼凹み石	10.00	7.50	4.50	432.60	流紋岩質凝灰岩	S-1 b3m層	表裏+側面3/4周程度顕著な磨痕、表裏2連の凹み(やや深い)。
第140図10	磨石	9.00	(4.90)	3.70	237.70	角閃石輝石安山岩	S-1 b4 II層	表裏+側面3/4周程度顕著な磨痕、表裏2連の凹み(やや深い)。右側面磨面。
第141図1	磨石	(7.40)	9.30	6.40	563.40	輝石安山岩	S-1	表裏+左側面磨面(顕著な面状磨痕ではない)、裏面凹み1。
第141図2	磨石	(4.90)	(4.80)	(4.30)	114.50	輝石安山岩	S-1 b3区	表裏磨痕顕著、側面敲き。
第141図3	磨石	(8.40)	(4.00)	3.50	151.70	輝石安山岩	S-1	表裏+側面磨面。
第141図4	磨石?	6.50	5.60	1.50	75.00	輝石安山岩	S-1 a2 盛土	扁平薄手、多孔質石材、表裏磨面。
第141図5	磨石	(4.00)	(4.40)	3.40	82.70	輝石安山岩	S-1to d2d3m層	表裏磨面+小さな凹み。
第141図6	磨石	5.70	8.70	4.20	264.90	輝石安山岩	S-1to d2d3m層	表裏+側面一部磨痕、やや不明瞭。
第141図7	磨石	(4.80)	7.40	4.30	217.90	輝石安山岩	S-1to m層 d2d3	表裏+側面一部磨痕、被熱。
第141図8	磨石兼凹み石	(6.90)	(5.50)	4.20	217.30	輝石安山岩	S-1 b1区	表裏磨面、表凹み1、凹みは深め。磨痕明瞭。
第141図9	磨石	(5.20)	7.70	3.80	197.80	輝石安山岩	S-1 d2d3 II III層	表裏平滑な磨面。磨痕側面におよぶ。
第141図10	磨石	12.00	5.40	4.10	371.70	輝石安山岩	S-1 d3区	表裏部分的に磨痕、被熱。
第141図11	磨石	11.30	7.20	3.20	350.60	輝石安山岩	S-1to d2d3m層	表裏+左右側面磨面(磨痕明瞭)。
第141図12	磨石	2.90	3.40	2.90	33.80	砂岩	S-1 b1・b2 II層	表裏平滑な磨面、側面一部敲き。
第141図13	磨石	6.10	10.40	4.20	203.70	スコリア質安山岩	S-1 d2d3 m層	多孔質、凹み孔1、表磨痕、被熱。石皿?
第142図1	磨石	(5.60)	7.20	3.90	3.60	輝石安山岩	T9	表裏~側面平滑な磨面。表裏中央やや浅い凹み。
第142図2	磨石	7.40	5.00	1.50	79.90	輝石安山岩	D4・E4~6	表裏明瞭な磨面、扁平薄手素材。
第142図3	磨石	(6.00)	(5.90)	(3.00)	125.60	デイサイト	T1	平滑な磨面、裏欠損面、被熱。
第142図4	磨石	(6.60)	5.70	3.30	167.20	輝石安山岩	T9	表裏~側面にかけて全体に平滑な磨面。
第142図5	磨石	9.10	6.20	4.60	414.00	輝石安山岩	E3a	表裏+側面+下面磨面、特に裏面磨痕顕著。
第142図6	磨石	15.50	7.80	5.30	841.50	流紋岩質溶結凝灰岩	D3b no.4	正面2面裏面1面の磨面、磨痕やや不明瞭。
第142図7	磨石兼凹み石	12.60	6.20	3.70	353.80	輝石安山岩	D4c no.21	表裏および両側面に1~2カ所の凹み。磨面明瞭、被熱。
第142図8	磨石	8.90	7.70	4.30	398.90	輝石安山岩	T10	表2面+裏1面+左側面2面平滑な磨面。被熱、表面円周状にカーボン付着。
第142図9	磨石	13.50	7.50	4.30	672.80	輝石安山岩	D5c	ほぼ全面(表裏、側面全周)平滑な磨面。
第142図10	磨石	5.40	5.40	3.80	165.00	輝石安山岩	E6b no.28	表裏平滑な磨面、側面~上面も一部磨痕、被熱。
第143図1	磨石	10.40	6.30	4.60	4446.10	砂岩	E5a no.12	表裏側面計4面平滑な磨面、被熱。
第143図2	磨石	(6.20)	7.10	5.20	315.90	輝石安山岩	E7a・b	被熱?表裏+側面明瞭な磨面。
第143図3	磨石	(6.20)	(6.50)	(5.40)	234.70	輝石安山岩	E6a no.35	被熱赤変、表裏磨面明瞭、図上面・側面も少し磨痕あり。
第143図4	磨石	10.00	6.50	3.50	355.90	輝石安山岩	E5a	表裏+側面平滑な磨面、右側面少し敲き。
第143図5	磨石	(4.00)	6.40	3.20	103.60	輝石安山岩	S-77e区 E6	表裏磨面明瞭、被熱。
第143図6	磨石	8.20	6.40	2.60	179.10	輝石安山岩	S-95 E7	被熱、やや多孔質。表裏磨面、側面敲き顕著。
第143図7	磨石	10.20	8.20	4.20	516.80	輝石安山岩	S-1 no.228	表裏磨面明瞭、表浅い凹み。
第143図8	磨石	8.50	6.70	3.10	204.20	デイサイト	S-27 a区	表裏磨面、表は明瞭、側面も一部磨痕。
第143図9	磨石	(4.70)	8.80	4.20	190.00	輝石安山岩	S-1 no.230	やや多孔質、表裏磨面やや不明瞭。

第三章 検出された遺構と遺物

第 143 図 10	磨石	(6.80)	(5.80)	3.90	188.40	輝石安山岩	S-82 E・F8 ～9	定型例の破片。表裏磨面、表面は磨痕顕著。
第 144 図 1	磨石	11.50	10.90	3.60	533.60	輝石安山岩	D8～9 E・F8～10	表裏＋側面磨面、表面浅い凹みは敲打痕か。被熱。
第 144 図 2	磨石?	(6.20)	(6.00)	3.20	112.70	輝石安山岩	SI-75 E12F12	表裏若干の磨痕、石皿か。
第 144 図 3	磨石	11.90	9.10	4.70	701.90	溶結凝灰岩	D8～9 E・F8～10	表裏＋側面磨面、裏面の磨痕顕著で平滑。一部敲き痕。
第 144 図 4	磨石兼凹み石	11.10	(7.10)	4.10	310.70	輝石安山岩	S-86 E8～9	表裏磨面＋敲き状のやや深い凹み表裏。
第 144 図 5	磨石兼凹み石	8.50	8.40	4.70	490.70	輝石安山岩	S-86 E8～9	表裏～側面全周明瞭な磨面＋一部敲き、表裏にやや深い凹み。
第 144 図 6	磨石	11.30	6.60	4.70	510.40	石英含有デイスайト	E8c no.37	表裏計 3 面に磨面。
第 144 図 7	磨石?	(8.10)	7.50	(4.30)	212.30	輝石安山岩	S-159 no.1 F11	表二面磨面、多孔質の石材。礫器の可能性あり。
第 144 図 8	磨石	(9.00)	9.70	5.30	560.30	輝石安山岩	S-1 no.3	表全体裏広い範囲に磨面、被熱。
第 145 図 1	磨石	(10.20)	6.60	3.90	390.70	輝石安山岩	S-2c 区 E9d no.7	表裏＋側面一部磨面、多孔質。
第 145 図 2	磨石兼敲石	(5.50)	6.60	4.90	221.90	輝石安山岩	S-1 no.225	表裏＋側面一部磨面、一部敲き痕あり。
第 145 図 3	磨石	(6.30)	8.30	1.20	104.70	輝石安山岩	D 区 SD-3 上層	表裏磨痕やや不明瞭。
第 145 図 4	磨石兼敲石	(7.70)	(4.70)	4.20	139.00	輝石安山岩	S-1 no.221	表裏＋側面磨面。
第 145 図 5	磨石片	8.20	(3.90)	3.60	128.00	角閃石輝石安山岩	S-11 区	表裏平滑となる磨面。
第 145 図 6	磨石片	(8.60)	(5.50)	(2.50)	129.80	流紋岩質凝灰岩	E・F14～15	表磨面、裏は剥離面で不明。
第 145 図 7	磨石	8.00	6.80	2.00	177.30	輝石安山岩	E・F14～15	ほぼ全面磨面。側面も一部磨痕。
第 145 図 8	磨石片	(4.10)	7.90	3.60	141.00	輝石安山岩	T6	表裏平滑な磨面、左上側面敲きか。
第 145 図 9	磨石	7.70	6.30	3.90	228.20	輝石安山岩	F13a	表裏平滑な磨面。
第 145 図 10	磨石	(6.40)	(5.30)	4.40	106.50	輝石安山岩	S-126b	表裏磨面、表面に凹み 1。
第 146 図 1	磨石?	8.90	7.70	1.00	98.80	砂岩	E6a no.83	表裏磨面、磨痕は不明瞭。砥石?
第 146 図 2	砥石?	7.20	8.00	1.00	93.80	輝石安山岩	S-2 f 区 m 層 F9b・d	表裏磨面、裏研磨の細かい線状痕。砥石か。
第 146 図 3	砥石?	9.40	9.20	2.00	281.30	砂岩	oyyk 調査 区内	表裏磨面、磨痕やや不明瞭。
第 146 図 4	磨石兼敲石	(5.20)	7.70	2.30	128.90	砂岩	S-1b1 外 E11cF10d	表裏磨面、側面部分的に敲打痕。
第 146 図 5	磨石?	13.00	3.80	1.80	137.30	輝石安山岩	S-44 no.2	表裏磨面、裏は平滑な面。上下も若干磨痕。
第 146 図 6	磨石兼敲石?	(8.00)	3.60	2.60	122.20	堇青石	D・E3～4 F4	表研磨状の磨面、下端僅かだが敲き。敲打痕不明瞭だが石棒の可能性あり。
第 146 図 7	磨石	(6.30)	4.50	3.50	159.10	輝石安山岩	E3b	表裏部分的な磨面、一部敲打痕。
第 146 図 8	磨石	8.80	4.90	3.60	148.40	輝石安山岩	S-2E 区 m 層 F9b	表 3 面＋裏一部磨面、表面および下面の磨痕は顕著。
第 146 図 9	磨石兼敲石	(12.50)	6.50	4.20	454.80	輝石安山岩	S-1 no.2	表裏平滑な磨面、磨痕やや顕著。下端敲打、敲打による剥離。
第 146 図 10	磨石兼敲石	(5.40)	6.50	3.60	167.60	輝石安山岩	S-2d・e 区	表裏＋側面磨面、下端敲打顕著な敲き石。敲きによる剥離あり。被熱。
第 146 図 11	敲石	7.70	6.63	4.48	309.87	脈石英	F5	側面の稜を挟んだ左右の面はほぼ全周に敲打痕。敲きによる剥離部分もある。
第 147 図 1	砥石	(7.60)	3.30	1.50	55.10	砂岩	S-1 上面	表裏＋右側面研磨面で平滑となっている。
第 147 図 2	砥石	(6.30)	4.80	2.00	85.40	砂岩	S-1 a2b3 II 層	緻密な石材、表裏研磨面、研磨痕顕著。
第 148 図 1	石皿	5.20	6.85	5.20	516.75	輝石安山岩	S-69 no.3	表裏石皿面、図下の面磨痕顕著。
第 148 図 2	石皿	8.80	(9.50)	2.40	211.40	黒雲母片岩	S-1 b3 II 層	表石皿面、裏剥離欠損面、3 カ所浅い凹み。
第 148 図 3	石皿・多孔石	7.80	6.90	5.50	339.70	輝石安山岩	S-1 a2to m 層	表裏石皿面＋多孔石面、表磨痕やや不明瞭、被熱。
第 148 図 4	石皿	(8.00)	(7.20)	5.80	342.9	輝石安山岩	D・E3～4	表石皿面で平滑部分あり、凹みは不明瞭、側面も磨痕。
第 148 図 5	石皿?	(10.90)	(4.80)	2.40	95.00	輝石安山岩	T10	表裏磨痕、石皿面は表、裏上位の磨面は成形痕か。
第 148 図 6	石皿	(6.20)	(3.90)	4.20	145.80	輝石安山岩	E12d	表裏磨痕、表は平滑、石皿面は表のみか。

第3節 縄文時代の遺構と遺物

第148図7	凹み石	12.20	11.20	9.50	1085.30	輝石安山岩	T14 no.3	表裏一部に磨痕、多孔質石材、中央の凹み以外人為か不明。
第148図8	石皿	8.90	15.40	5.30	1142.40	輝石安山岩	S-116 no.2	両面石皿面、台石・砥石状の平滑となる磨痕、被熱。
第148図9	石皿・多孔石	(6.40)	(5.60)	2.40	62.20	輝石安山岩	oyyk 区内	表裏磨痕、多孔面6孔は表面のみ、凹みは深め。
第148図10	石皿・多孔石	(10.40)	(8.30)	5.30	344.30	多孔質安山岩	E6a	表磨痕、裏は一部のみ磨痕、表および側面に凹み、全て人為か不明、多孔質。
第148図11	石皿兼凹み石	(11.00)	9.20	5.50	390.70	多孔質輝石安山岩	S-2c 区 E9d no.2	表磨痕顕著な石皿面、裏磨面+多孔面、側面一部磨痕、被熱。
第148図12	凹み石	(4.90)	(6.00)	3.70	74.30	スコリア	S-2 c 区	多孔質、表裏磨痕、表+側面に深い凹み。
第148図13	石皿	4.20	6.70	6.00	95.70	多孔質安山岩	S-1 a 区	表磨痕やや不明瞭。
第148図14	石皿	(6.40)	(5.10)	6.70	144.00	スコリア	E6	表石皿面?磨痕不明瞭、側面の磨痕は成形痕か、多孔質。
第149図1	玉類	5.64	1.66	0.42		緑色粘板岩	S-134	下端欠損。敲打+研磨整形で、特に表面は丁寧な研磨。
第149図2	石棒未製品	(13.00)	3.60	2.00	119.70	頁岩	S-73 炉1 no.3	研磨痕はなく、剥離+敲打痕(ほぼ全面だが顕著ではない部分も多い)、上端に一部みられる平滑面は自然礫面か。下端欠損?
第149図3	石製品	8.10	2.30	1.00	24.60	頁岩	S-1 周溝 b1 区	下端欠損。表面敲打痕多、裏面の敲打痕跡はさほど顕著ではない。研磨は全体におよぶが、敲打痕も残されている。側縁は比較的明瞭鋭角な稜をなす。
第149図4	石棒?	(2.70)	4.20	2.50	41.70	砂岩	SI-76	図表面右側および裏面左側は平滑な研磨面、磨製石斧の可能性ある。
第149図5	石棒?	(4.10)	5.00	2.00	66.30	輝石安山岩	E6 no.16	表裏研磨、右側面敲打痕、表面図左下の剥離は欠損時のものか、平断面とも非対称。磨製石斧の可能性あり。
第149図6	石棒未製品?	(5.00)	2.80	1.30	29.30	ホルンフェルス	D5d no.3	表面図右は敲打痕、左は研磨面、裏は敲打+若干の研磨、上位欠損、上下逆の可能性もあり。
第149図7	石棒	5.80	2.90	2.40	43.30	砂岩	S-67 b2c 区	全体に研磨調整で平滑、3~4カ所ある小さな凹みは敲打痕か、上下逆の可能性。

第10表 不掲載石器観察表

整理番号		出土位置	種類	計測値 (cm / g)				特徴・備考	石材・材質
箱番号	仮番号			最大長	最大幅	最大厚	重量		
126	1	S-1to b2・c m層・II層	UF	3.3	3.3	1.5	17.00	一側縁に使用痕	チャート
126	2	S-1b3 II層	UF	4.0	2.4	0.9	7.80	一側縁に使用痕、一部折断状	頁岩
126	3	S-1 填丘下	RF	2.4	2.1	0.3	1.60	一側縁に二次加工痕? + 使用痕	玉髄
126	4	S-1d2・d3 II・III層	RF	1.5	2.2	0.7	2.70	両極剥片、一側縁に二次加工、別側縁に使用痕	チャート
126	5	S-1b区	RF	1.6	0.7	0.2	0.30	一側縁二次加工、別側縁折れ、欠損状	チャート
126	6	S-1b1・b2 to II層	RF	2.4	1.6	1.0	6.10	両極剥片、一側縁に使用痕	チャート
126	7	d2・d3 2層	RF	1.4	1.2	0.3	0.60	三側縁に二次加工、石鏃・石錐未製品の可能性あり	チャート
126	8	S-1b区	RF	2.0	2.2	0.7	2.60	一部二次加工、二側縁に使用痕	チャート
126	9	S-1d2・d3 to I層	RF	2.8	2.4	1.0	7.30	両極剥片、一側縁に二次加工 + 使用痕	チャート
126	10	S-1b1区	UF	2.4	1.8	1.1	5.30	両極剥片、一側縁に使用痕	チャート
126	11	S-1b区	RF	2.7	1.9	0.5	3.40	一側縁に二次加工 + 使用痕	チャート
126	12	S-1b区	UF	2.1	2.3	0.9	4.20	一側縁に使用痕	チャート
126	13	S-1b1区	UF?	3.1	2.0	0.3	3.10	裏面自然礫面、側縁一部使用痕?	頁岩
126	14	S-1b1区	UF	4.5	2.3	0.9	11.10	裏面自然礫面、二側縁使用痕	チャート
126	15	S-1g1区	UF	2.6	1.1	0.8	2.20	一側縁使用痕	チャート
126	16	S-1g1区	UF	1.8	1.8	0.8	3.00	二側縁使用痕	チャート
126	17	S-1	RF	4.2	2.0	1.1	12.20	一部二次加工 + 使用痕	チャート
126	18	S-1b1区	RF	2.6	1.2	0.5	2.50	両極剥片、一側縁二次加工、楔形の可能性あり	チャート
126	19	S-1to d2・d3 m層	UF	3.7	2.6	1.0	9.50	一側縁使用痕	デイサイト質凝灰岩 (新第三紀)
126	20	S-1b1区	UF	1.9	1.3	0.3	0.80	二側縁使用痕	チャート
126	21	S-1g1g2区	UF?	2.8	1.5	1.0	4.30	両極剥片、一部使用痕?	玉髄
126	22	S-1b2区	UF	1.8	1.1	0.4	0.70	一側縁使用痕	チャート
126	23	S-1g1区	FL	5.7	1.7	0.7	7.00		無斑晶ガラス質安山岩
126	24	S-1d2・d3 II層	UF?	1.6	1.6	0.6	1.30	一部使用痕?	チャート
126	25	S-1d2・d3 II・III層	UF	2.4	1.1	1.1	2.70	一側縁使用痕	チャート
126	26	S-1d2・d3 to I層	UF	1.5	1.9	0.9	2.20	一側縁使用痕	頁岩
126	27	S-1d区	UF?	1.5	1.5	0.5	1.00	一部使用痕?	チャート
126	28	S-1b区	FL	2.0	2.3	0.7	2.60	加工なし	黒曜石 (高原山?)
126	29	S-1d2・d3 II層	FL	1.8	1.7	0.6	2.50		チャート
126	30	S-1d2・d3 II層	FL	2.3	1.2	0.4	0.90		チャート
126	31	S-1b1区	UF	2.4	1.4	0.7	2.30	一部使用痕	チャート
126	32	S-1d3区	UF	1.3	1.7	0.6	1.90	一部使用痕	玉髄 (良質)
126	33	S-1b2区	UF	2.9	2.3	1.4	9.10	一部使用痕	玉髄
126	34	S-1d区	UF	2.2	1.7	0.8	2.60	一部使用痕	チャート
126	35	S-1d区	FL	3.4	2.8	1.0	8.40		黒曜石 (高原山?)
126	36	S-1d区	FL	2.6	1.7	1.0	4.40		黒曜石 (高原山?)
126	37	S-1d3	FL	1.6	1.1	0.4	0.80		黒曜石 (高原山?)
126	38	S-1g1区	UF	1.5	1.5	0.4	1.30	一部使用痕	玉髄 (良質)
126	39	S-1g1区	FL	4.7	1.5	0.8	5.10		無斑晶ガラス質安山岩
126	40	S-1F11d no.7	UF	2.7	2.5	1.2	9.20	台形状、やや厚手、一部使用痕	黒曜石 (高原山?)
126	41	S-1F11d no.9	UF	2.4	2.9	0.6	5.50	一部使用痕	チャート
126	42	S-1F11b no.4	RF?	2.0	0.7	0.4	0.80	一部二次加工?	チャート
126	43	S-1F11d no.4	UF	2.7	3.1	1.0	10.00	一部使用痕	頁岩
126	44	S-1F11d no.5	CH				1.70		黒曜石 (高原山?)
126	45	S-1F11d no.6	CH				0.80		泥質チャート
126	46	S-1F11d no.10	UF	1.7	1.2	0.3	0.60	一部使用痕	チャート
126	47	S-1F11d no.11	CH				0.10		黒曜石 (高原山?)
126	48	S-1b2・b3 II・III層	CH				0.10		黒曜石 (高原山?)
126	49	S-1b1・b2 to II層	CH				0.60		黒曜石 (高原山?)
126	50	S-1b1・b2 to II層	CH				0.10		チャート
126	51	S-1b2・b3	CH				0.20		泥質チャート
126	52a	S-1b3c区m層II層	CH				0.51		黒曜石 (高原山?)

第3節 縄文時代の遺構と遺物

126	52b	S-1b3c 区m層Ⅱ層	CH				0.20		黒曜石(高原山?)
126	53	S-1F11d no.3	CH				0.50		黒曜石(高原山?)
126	54	S-1d2・d3 Ⅱ・Ⅲ層	CH				0.90		泥質チャート
126	55	S-1d2・d3 Ⅱ・Ⅲ層	UF	2.0	1.2	0.3	0.80	一部使用痕	チャート
126	56	S-1d2・d3 Ⅱ・Ⅲ層	CH				0.80		チャート
126	57	S-1d2・d3 Ⅱ・Ⅲ層	CH				0.40		泥質チャート
126	58	S-1d2・d3 Ⅱ・Ⅲ層	CH				0.20		泥質チャート
126	59	S-1d2・d3 Ⅱ・Ⅲ層	CH				0.20		泥質チャート
126	60	S-1d2・d3 Ⅱ・Ⅲ層	CH				0.10		チャート
126	61	S-1d 区	CH				0.90		泥質チャート
126	62	S-1d 区	CH				0.50		泥質チャート
126	63	S-1F11d no.2	CH				0.30		黒曜石(高原山?)
126	64	S-1F11d no.12	CH				0.40		黒曜石(高原山?)
126	65	S-1b2 区	CH				0.20		チャート
126	66	出土地不明	CH				0.30		泥質チャート
126	67	S-1F11d no.1	FL	1.6	1.5	0.5	0.70		黒曜石(高原山?)
126	68	S-1T12	CH				0.20		チャート
126	69	b 区上面	CH				0.60		黒曜石(高原山?)
126	70	S-1b1 区	CH				0.80		無斑晶質安山岩
126	71	F11a no.2	FL	2.1	0.8	0.4	0.50		黒曜石(高原山?)
126	72	F11a no.3	FL	4.6	3.0	2.0	18.10		黒曜石(高原山?)
126	73	F11a no.4	FL	3.1	3.4	1.2	9.30	残核?	黒曜石(高原山?)
126	74	F11b no.2	FL	3.2	2.7	1.6	9.90	厚みあり、剥離面多方向にあり	黒曜石(高原山?)
126	75	F11b no.3	FL	1.4	2.9	0.9	2.90		黒曜石(高原山?)
126	76	T13 ローム面	FL	1.9	2.2	0.9	2.50		黒曜石(高原山?)
127	1	S-152	楔形	1.6	1.1	0.3	0.70	一部二次加工	チャート
127	2	F11	楔形	2.2	1.3	0.8	2.30	縁辺二次加工+使用痕	チャート
127	4	S-2h 区Ⅱ層・m 層	楔形	2.5	1.4	0.5	1.80	上下縁辺二次加工	チャート
127	5	SD-3e 区	楔形	1.8	1.8	0.6	2.90	一側縁二次加工+使用痕	泥質チャート
127	6	S-66b 区 E11c	楔形	2.5	1.2	0.8	3.00	上下縁辺二次加工	泥質チャート
127	7	E6b	楔形	2.5	1.3	0.5	1.80	下側縁一部二次加工	チャート
127	8	S-106D7	RF	2.3	1.4	0.5	1.90	左右の二側縁二次加工	チャート
127	9	SD3a・b 区	RF	1.8	1.1	0.3	0.60	一側縁二次加工	チャート
127	10	S-27	RF	1.5	1.6	0.4	1.00	一側縁二次加工	チャート
127	11	S-103	UF	1.8	2.4	0.4	2.40	一側縁使用痕	泥質チャート
127	12	S-162	RF	2.1	1.2	0.4	1.00	二側縁に微細な二次加工	泥質チャート
127	13	S-115E9F9	RF	4.1	2.2	1.0	11.70	一側縁に二次加工、別の側縁に使用痕	チャート
127	14	S-137・138F11	UF	3.3	2.2	1.1	9.70	一側縁使用痕	チャート
127	15	S-2d 区 m 層 E10cT15	RF	1.6	1.2	0.4	0.80	一部二次加工?	チャート
127	16	E11c	RF	2.1	1.9	1.0	3.50	二側縁二次加工+使用痕	泥質チャート
127	17	S-2c 区	RF	2.1	2.2	0.7	2.30	鋭角に尖る断面三角形の二側縁二次加工、石鏝未製品の可能性あり	泥質チャート
127	18	E11d S-66 内	RF	1.7	1.1	0.3	0.60	二側縁二次加工、石鏝未製品の可能性あり	泥質チャート
127	19	oyyk 区外	RF	1.3	1.5	0.5	1.00	一側縁二次加工	チャート
127	20	T2	UF	2.9	2.0	0.8	4.20	両極剥片、一側縁使用痕?	チャート
127	21	F7b	RF	1.9	1.1	0.4	0.80	左右側縁二次加工、石鏝未製品か?	泥質チャート
127	22	E11c・d	RF	2.6	2.5	0.6	4.70	三側縁二次加工、一部使用痕	泥質チャート
127	23	oyyk	RF	2.6	2.5	0.6	2.90	一部二次加工	玉髓
127	24	E8c	UF	1.5	2.2	0.9	2.10	一部使用痕	黒曜石(高原山?)
127	25	S-11 区	RF	1.7	1.5	0.7	1.60	両極剥片、一部二次加工	チャート
127	26	D6d	UF	3.0	3.0	0.8	7.50	礫面一部残す。縁辺一部に使用痕	無斑晶ガラス質安山岩(産地不明)
127	27	T22(?) D6d・D7c ?	RF	1.3	0.9	0.2	0.30	三側縁二次加工、石鏝未製品か?	泥質チャート
127	28	oyyk	RF?	3.5	1.9	0.8	3.50	一側縁二次加工または使用痕	黒曜石(高原山?)
127	29	oyyk	RF	1.7	1.2	1.0	1.50	三角錐状、四側縁に二次加工	玉髓
127	30	E13d	RF	1.8	1.8	0.5	1.70	三側縁に二次加工	チャート
128	1	T22	FL	3.0	2.0	0.8	5.80	打製石斧片か?	輝石安山岩
128	2	E5b	FL	3.0	2.7	1.2	16.60	打製石斧片か?	輝石安山岩

第三章 検出された遺構と遺物

128	3	S-73 炉 3	FL	2.8	2.7	0.5	4.20		輝石安山岩
128	4	S-162	FL	1.0	1.3	0.4	0.40	碎片に近い	チャート
128	5	S-149	FL	1.2	1.2	0.6	0.60	碎片に近い	チャート
128	6	S-136	FL	2.0	1.4	0.6	1.40		黒曜石(高原山?)
128	7	D・E3 ~ 4 F4	FL	3.8	2.6	1.2	12.30		ホルンフェルス
128	8	D6c	FL	5.2	3.2	1.0	19.20		砂岩
128	9	D・E・F6 ~ 8	FL	2.0	1.5	0.8	3.40		チャート
128	10	D・E・F6 ~ 8	UF	4.8	4.8	1.6	43.70	二側縁使用痕	頁岩 砂岩
128	11	D6d	RF	2.6	1.8	1.2	5.70	一部二次加工、別の側縁に使用痕	チャート
128	12	D7c	UF	2.7	2.2	0.4	3.00	一側縁使用痕	無斑晶質安山岩
128	13	E4d	RF	2.3	0.8	0.6	2.70	一部二次加工、別の側縁に使用痕	チャート
128	14	E5d	UF	1.8	1.1	0.4	0.60	一部使用痕	チャート
128	15	E6d	UF	3.0	2.7	0.5	3.20	一側縁使用痕	ホルンフェルス
128	16	E6b	UF	3.5	2.7	1.0	8.70	二側縁使用痕	無斑晶ガラス質安山岩
128	17	E6c	UF	3.3	2.3	0.8	7.00	一部使用痕	頁岩
128	18	E6c	FL	1.2	0.9	0.7	1.10		玉髓
128	19	E6c no.112	FL	2.9	4.7	0.6	10.80		堇青石ホルンフェルス
128	20	E8a	RF	2.5	1.7	0.3	1.90	一部二次加工	チャート
128	21	E8c	UF	2.4	1.8	0.7	3.10	一部使用痕	頁岩
128	22	E8c	UF?	5.8	2.0	1.7	18.40	断面三角形、二側縁使用痕?	無斑晶質安山岩
128	23	E8d	RF	3.0	2.2	0.7	4.70	一部二次加工	チャート
128	24	E12d	UF	5.3	3.5	1.0	21.00	側面礫面残す。一部使用痕	頁岩
128	25	F12(S1 周 d 外)	UF	1.8	1.9	0.4	1.60	一部使用痕	チャート
128	26	S-2b 区 m 層 E9a・c	FL	2.1	2.1	0.5	2.50		チャート
128	27	S-2b 区 m 層 E9a・c	UF	2.3	1.4	0.4	1.10	一部使用痕	チャート
128	28	S-2b 区 m 層 E9b	UF	3.1	1.8	0.5	3.00	一側縁使用痕	チャート
128	29	S-2d 区 F9bm 層	FL	1.6	1.5	0.3	0.70	透明感ある黒曜石	黒曜石(高原山?)
128	30	S-2c・d 区 E9dE9b	FL	2.3	1.7	0.9	3.50		チャート
128	31	S-2b 区 m 層 E9c	UF	1.8	1.8	0.6	1.70	一側縁使用痕	チャート
128	32	S-2c・d 区 E9d	FL	1.7	1.4	0.5	1.40		堇青石ホルンフェルス
128	33	S-2h 区 m 層・II 層	UF	1.8	1.3	0.6	1.60	一側縁使用痕	チャート
128	34	F9c	FL	1.7	1.5	0.3	1.20		チャート
128	35	F13b・d	UF	3.1	2.3	0.7	6.30	一側縁使用痕、礫面多く残す	頁岩
128	36	S-82 E・F8 ~ 9	UF	2.4	1.9	0.5	2.00	一部使用痕	頁岩
128	37	S-83 F8	UF?	2.4	2.4	1.1	6.70	一部使用痕?	脈石岩
128	38	S-86 E8・9	FL	2.1	2.7	1.2	5.50		珪化岩
128	39	S-1c 区 上面	UF	1.8	1.4	0.5	1.50	一側縁使用痕	チャート
128	40	S-11 区	UF	1.7	2.2	0.5	2.10	二側縁使用痕	チャート
128	41	S-11 区	RF	2.3	1.6	1.4	7.60	両極剥片、上下縁辺二次加工、楔形の可能性あり	チャート
128	42	T12 S-2	UF	3.4	3.6	1.0	12.20	一側縁使用痕	安山岩質凝灰岩
128	43	T14	UF	3.1	3.4	1.2	12.90	一側縁使用痕	砂岩
128	44	T14	UF	2.6	1.7	0.6	2.50	二側縁使用痕	頁岩
128	45	T18	RF	2.4	1.7	0.6	2.80	一側縁二次加工	玉髓
128	46	S-85a	UF	3.5	1.8	1.3	8.20	一側縁使用痕	珪化流紋岩
128	47	S-77b 区 E6	FL	5.0	5.0	2.0	43.70	厚みあり	ホルンフェルス
128	48	T1b	FL	4.9	3.1	1.2	15.80		流紋岩質溶結凝灰岩(鮮新世?)
128	49	T11	FL	4.3	3.0	0.9	12.50		無斑晶質安山岩
128	50	T20	FL	3.1	2.7	1.5	11.10		頁岩
128	51	T16	FL	2.4	3.0	0.8	5.80		チャート
128	52	E6b	FL	3.7	3.5	0.8	9.30		堇青石ホルンフェルス
128	53	S-85c	FL	4.6	4.5	1.1	27.10		流紋岩質凝灰岩(古期)
128	54	T7	FL	3.3	2.9	0.7	6.60		泥質チャート
128	55	S-115 E9F9	FL	3.3	2.2	0.8	7.40		チャート
128	56	S-2b 区 m 層 E9a・c	FL	4.6	3.5	1.2	16.20		輝石安山岩(新第三紀)

第3節 縄文時代の遺構と遺物

128	57	E5	FL	3.1	2.3	0.7	5.90		輝石安山岩
128	58	E9F9E10・S4・115	FL	3.4	3.7	1.2	13.40		砂岩
128	59	E6a	FL	2.3	1.7	0.4	1.40		流紋岩
128	60	D4c no.1	FL	7.3	2.5	0.9	16.70		頁岩 砂岩
128	61	SD3 a・b区	FL	2.3	2.0	0.6	4.10		頁岩
128	62	D3d no.4	FL	4.0	2.0	0.7	5.00		変質流紋岩
128	63	S-87 F9	FL	3.8	2.1	0.8	4.50		チャート
128	64	S-2 E9b	FL	2.3	2.1	0.8	4.00		チャート
128	65	D6c	FL	3.9	1.3	1.2	7.00		珪化岩
128	66	S-82 E8～9	FL	4.5	3.7	1.6	31.00		輝石安山岩
128	67	T9	FL	4.3	2.5	2.0	17.30		泥質チャート
128	68	D・E・F6～8	FL	5.5	3.0	0.7	14.80		堇青石ホルンフェルス
128	69	S-85eE8	FL	2.3	2.2	0.7	3.40		玉髓
128	70	S-201・202b	FL	2.2	2.2	0.5	2.20		変質流紋岩
128	71	S-27F8a・b	FL	2.1	1.5	0.3	0.70		チャート
128	72	S-27F8a・b	FL	1.8	1.2	0.2	0.60		玉髓
128	73	F6a	FL	2.9	1.4	1.0	3.10		頁岩
128	74	S-11区	FL	2.7	2.0	0.7	4.10		チャート
128	75	S-11区	FL	1.7	1.1	0.5	0.80		玉髓
128	76	S-11区	FL	2.7	1.3	0.7	3.20		チャート
128	77a	S-11区	FL	2.0	2.2	0.6	2.80		無斑晶ガラス質安山岩
128	77b	S-11区	FL	1.4	2.2	0.4	0.80		無斑晶ガラス質安山岩
128	78	F6b	FL	4.5	3.7	2.1	31.40		堇青石ホルンフェルス
128	79	F13a	FL	3.2	1.3	0.7	2.70		変質流紋岩
128	80	S-2h区 m層	FL	1.9	1.7	1.0	2.10		黒曜石(高原山?)
128	81	S-11区	FL	2.4	2.2	0.5	2.90		チャート
128	82	S-2 f区 m層 F9b・d	FL	4.0	2.1	1.6	12.50		頁岩
128	83	S-95 E7	FL	3.4	2.4	0.7	7.20		堇青石ホルンフェルス
128	84	SD3a・b区 E10a・c	FL	3.7	4.2	1.3	17.80		砂岩
128	85	D7c	FL	2.2	1.7	0.8	3.30		泥質チャート
128	86	S-1c区	FL	1.8	1.9	0.5	1.30		泥質チャート
128	87	S-1b区	FL	1.8	1.3	0.5	0.90		泥質チャート
128	88	SI-75 E12F12	FL	1.1	0.9	0.4	0.30		黒曜石(高原山?)
128	89	S-115 E9F9	FL	2.0	1.4	0.3	1.10		変質流紋岩
128	90	S-114 E9	FL	2.1	1.5	0.7	1.60		チャート
128	91	S-70 b区	FL	2.5	1.1	0.9	3.50	縄文石器	石英
128	92	S-2 c区	FL	2.5	1.6	0.9	7.60		堇青石ホルンフェルス
128	93	S-2 f区 F9a・c	FL	1.2	0.7	0.5	0.50		玉髓
128	94	S-77a区 E6	FL	2.5	1.6	0.4	1.70		泥質チャート
128	95	S-2b区 m層 E9b	FL	2.3	1.4	0.2	0.80		頁岩
128	96	S-2b区 m層 E10b	RF	1.6	1.0	0.7	1.50	左右二側縁+一部二次加工、石鏝未製品の可能性あり	玉髓
128	97	SD3d区	FL	3.0	3.2	0.8	6.40		堇青石ホルンフェルス
128	98	D4E4～6	FL	5.2	3.0	0.8	14.80		ホルンフェルス
128	99	E4b	FL	6.4	3.2	0.7	18.70		輝石安山岩
128	100	E5b	FL	2.0	1.3	0.7	2.50		泥質チャート
128	101	E6b	FL	2.1	1.7	0.8	2.70		無斑晶質安山岩(焼け跡有り)
128	102	E6b	FL	3.2	1.9	0.7	4.90		無斑晶質安山岩
128	103	S-96c区 E7	FL	2.6	2.0	0.5	4.00		流紋岩
128	104	E8c	FL	2.9	1.4	0.6	2.90		頁岩
128	105	S-82b区 E・F8～9	FL	4.0	1.7	1.2	5.40		無斑晶質安山岩
128	106	S-86 E8～9	FL	3.2	2.1	1.2	7.90	表剥離面、裏面礫面	流紋岩
128	107	E8c	FL	2.2	1.6	0.7	3.70		チャート
128	108	S-4 E9～10	FL	2.9	2.4	0.8	5.20		チャート
128	109	E11a	FL	1.3	1.0	0.7	1.20		チャート
128	110	E11c (S-66内)	FL	1.7	1.4	0.4	1.10		チャート
128	111	E12c E11d	FL	3.0	1.6	0.6	2.40		ホルンフェルス

第三章 検出された遺構と遺物

128	112	E12c	FL	1.3	1.0	0.4	0.30		黒曜石(高原山?)
128	113	E・F12～14	FL	1.5	1.4	0.3	0.50		黒曜石(高原山?)
128	114	F10a	FL	2.0	1.8	0.4	1.10		頁岩
128	115	F12a	FL	1.2	0.7	0.2	0.20		チャート
128	116	F13a	FL	3.2	2.6	0.9	8.60		無斑晶質安山岩
128	117	F13b	FL	2.0	1.0	0.2	0.60		チャート
128	118	T9	FL	2.1	1.2	1.0	2.20		無斑晶質安山岩
128	119	T9	FL	2.9	1.9	1.0	5.00		輝石安山岩(新第三紀)
128	120	T9	FL	3.0	1.4	1.2	7.40		砂岩(焼け跡有り)
128	121	T9	FL	2.9	1.8	1.0	6.10		チャート
128	122	T14	FL	2.3	1.5	0.7	1.90		頁岩
128	123	T14	FL	3.8	1.8	0.5	5.40		頁岩 砂岩
128	124	oyyk ハイド	FL	3.2	2.4	0.9	10.90		頁岩
128	125	oyyk	FL	3.6	4.0	0.6	9.80		頁岩 砂岩
128	126	S-85c	コア?	3.5	1.5	1.6	10.60	方柱状	チャート
129	1	S-1c区	CH				0.20		チャート
129	2	T18	CH				0.60		玉髄
129	3	S-1c区	CH				0.30		チャート
129	4	F13a	CH				0.03		黒曜石
129	5	S-67f区 E13a・c	CH				0.30		黒曜石(高原山?)
129	6	S-67b2区 E12c	CH				0.40		黒曜石(高原山?)
129	7	SD3d区	CH				0.30		無斑晶質安山岩
129	8	oyyk	CH				0.50		頁岩
129	9	SD3d区	原石	5.9	3.8	2.7	66.60	礫面のみ	チャート
129	10	SD3d区	FL	2.1	1.7	1.3	5.10		泥質チャート
129	11	SD3 no.25	コア?	8.2	4.4	2.5	100.00	礫面2面	頁岩
129	12	D7d	礫?				12.50		泥質チャート
129	13	oyyk	コア	6.6	4.6	4.3	137.90	剥離4面程度	流紋岩質凝灰岩(古期)
129	14	S-95 E7	礫?				95.90		チャート
129	15	S-67a区 E12a・c	礫?				18.60		頁岩
129	16	E12 I～III層	礫?				19.10		赤色チャート
129	17	E・F12～13 I層	コア?	4.8	3.8	2.6	52.50	やや細かい剥離面あり	頁岩
129	18	S-67f区 E13a・c	礫				149.80	3面割れ面	チャート
129	19	S-87 F9	礫				7.40		泥質チャート
129	20	F13a	礫				32.90		チャート
129	21	S-1b1区	破碎礫				3.10		輝石安山岩
129	22	S-1b2	破碎礫				36.70		石英斑岩
129	23	S-1b2区	破碎礫				6.10		流紋岩
129	24	S-1 頂部	礫				22.50		輝石安山岩
129	25a	S-1d区	FL	2.4	1.9	0.8	3.70		無斑晶ガラス質安山岩
129	25b	S-1d区	礫				0.50		スコリア
129	26	S-2b区 m上層 E10b	コア?	3.5	2.1	1.5	11.40		玉髄
129	27	S-2d区 F10a	礫				53.20		泥質チャート
129	28	S-2d・e区	コア?	1.9	1.8	1.3	5.30	残核状だが剥離は不明瞭	玉髄
129	29	S-2 T14m層	礫				31.30	剥離2面	頁岩
129	30	T10	コア	6.2	3.2	2.7	59.80	縦長剥片の残核か	チャート
129	31	T14	コア	2.5	2.1	1.5	8.00		玉髄
129	32	T17	破碎礫				16.50		頁岩 砂岩
129	33	T18 北T	コア?	2.9	2.8	1.5	14.90	剥離面?	玉髄
129	34	S-1no.224	礫				553.90	立方体状、1面のみ自然礫面	泥質チャート
129	35	F15a(SI-76)	破碎礫	3.7	4.7	2.6	42.10		赤色チャート
129	36	S-152	破碎礫	2.0	1.8	1.6	7.90		泥質チャート
129	37	S-1	破碎礫	2.8	3.0	0.7	5.10		砂岩
129	38	S-103	破碎礫	3.0	2.8	2.3	27.70		チャート
129	39	S-103	破碎礫	2.5	2.1	1.8	14.50	ガイ截埋積	チャート
131	1	S-209	石皿片	4.6	3.5	2.1	14.80		多孔質安山岩
131	2	S-73 b	礫				117.60		砂岩
131	3	包含層	石皿類	5.6	2.9	1.8	28.80	2面磨面・砥面状	砂岩
131	4	T9	礫				34.20		流紋岩質溶結凝灰岩
131	5	D4d	磨石類	7.1	6.8	1.6	118.30	表裏若干の磨面、扁平薄手の類	砂岩

第3節 縄文時代の遺構と遺物

131	6	S-27(F8a・b)	打製石斧	4.7	3.4	1.0	19.40	縁辺の剥離加工痕一部	輝石安山岩
131	7	F5 no.4	磨石片	5.5	4.6	3.2	73.90	一面磨痕	流紋岩質溶結凝灰岩(古期)
131	8	包含層	FL	4.9	4.6	1.8	44.18	剥離、加工か不明	葦青石ホルンフェルス
131	9	S-1 b3区	礫				549.90		流紋岩質凝灰岩(古期)
131	10a	S-1	礫				158.00		流紋岩質(古期)
131	10b	S-1	礫				67.00		溶結凝灰岩(古期)
131	11	S-1	石皿類?	7.3	3.8	2.2	41.20	表裏磨面、中近世?	輝石安山岩
131	12	S-1	礫				6.60		スコリア
131	13	S-1	礫				13.00		輝石安山岩
131	14	S-1	礫				4.90		流紋岩(新第三紀)
131	15	S-1	礫				70.40		輝石安山岩
131	16	S-1	礫				42.80		葦青石ホルンフェルス
131	17	S-1	FL	2.5	1.8	0.5	1.90		チャート
131	18	S-1	礫				10.10		頁岩
131	19	S-1	FL	1.4	1.3	0.4	0.90		泥質チャート
131	20	SZ-1?	FL	1.9	1.6	0.5	1.00		黒曜石(高原山?)
131	21	S-1	礫				45.40		石英斑岩
131	22	S-1	礫				77.40		スコリア
131	23	S-1	礫				17.00	石皿片の可能性あり	スコリア
131	24	S-1	FL	4.8	3.9	1.3	23.90		無斑晶ガラス質安山岩(産地不明)

凡例

RF	二次加工剥片
UF	使用痕ある剥片
FL	フレイク
CH	チップ

第4節 弥生・古墳時代の遺構と遺物

本調査区は横倉戸館古墳群の北端部にあたり、調査区の南東に小山市指定史跡である横倉戸館1号墳が隣接する。今回の調査では、方墳1基（横倉戸館8号墳）・円墳2基（横倉戸館9・10号墳）・方形周溝墓1基（SZ-66）・壺棺墓1基（ST-72）・溝跡1条・性格不明遺構1基が調査された。すべての遺構が、調査区の中央付近で斜面に近い台地端部に位置している。

今回の調査・報告では、以下の基準によって方墳と方形周溝墓を分けている。本来、詳細な検討が必要であるが、規模等も勘案しての便宜的な区分である。即ち、明瞭な墳丘盛土と盛土中に主体部があるSZ-1を方墳、明瞭な墳丘盛土が無いまたは薄く、ローム面を掘り込む主体部を有するSZ-66を方形周溝墓とした。

1. 方墳

SZ-1（横倉戸館8号墳）（第150～166図、第11～13表、図版一九～二二・六三～六七）

位置 調査区中央から東寄りのE10d・F10・E11c・E11d・F11・F12a・F12cの各グリッドに位置する。横倉戸館1号墳から北西3.8mに位置する。

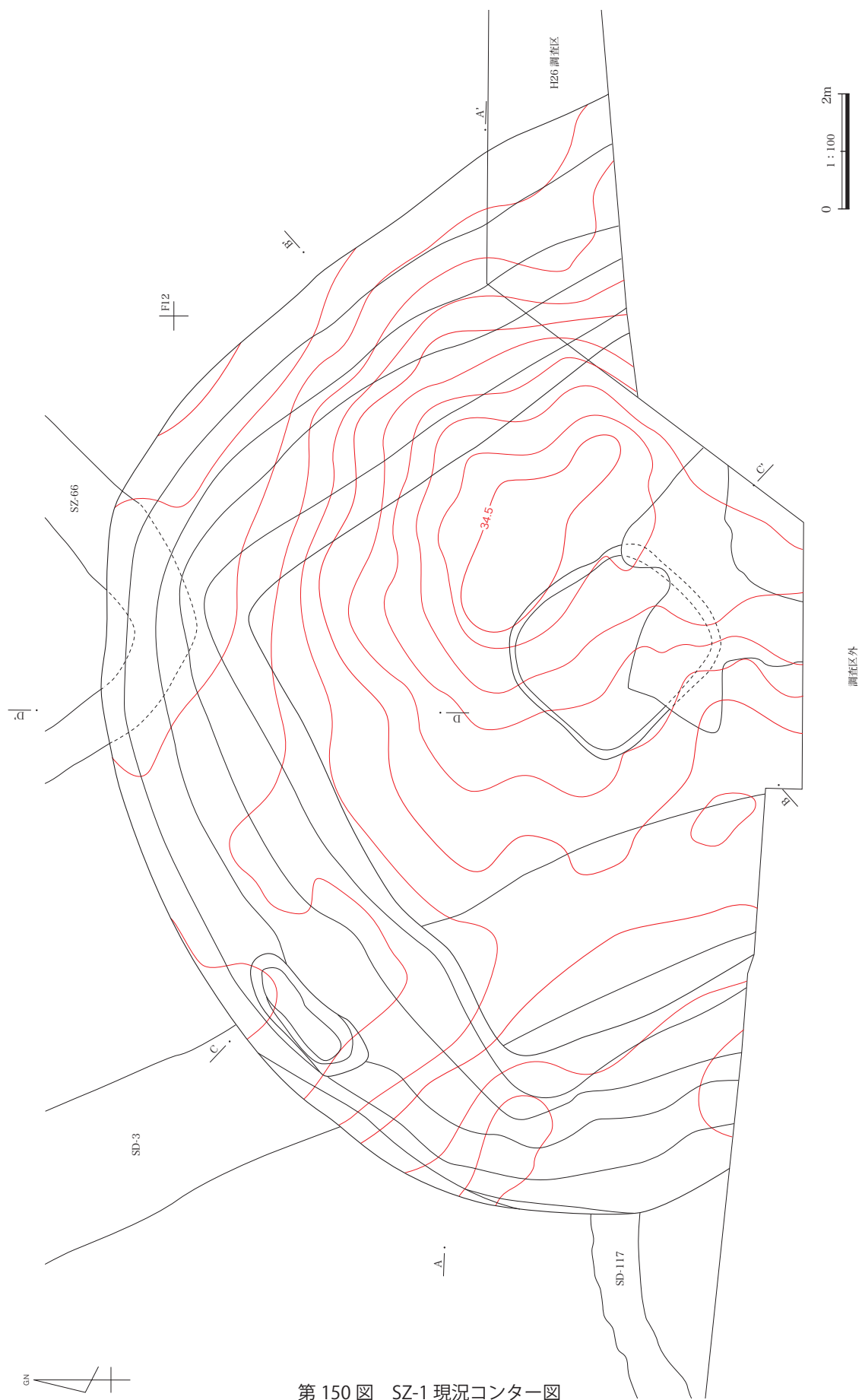
経緯 本古墳の位置には、調査前から高まりが確認できたが、後の調査で判明した近世の土塁であるSA-2や堀跡であるSD-3、本墳の墳頂部にて確認された推定稲荷社跡等によって周辺の地形が改変されていることもあって、遺構の規模・内容、築造時の形態がはっきりしなかった。現況での観察では確定し得なかったが、古墳である可能性を考慮して、現況地形測量を実施した。その上で、径9m程度の高まり部分の中心をもとに主軸を設定し、放射状にトレンチを設けて（T12・T13・T19・T20）、高まり・周溝・形態の把握を進めた。このトレンチ調査により、周溝の範囲・形態が次第に明らかとなっていった。その後、トレンチ間の周溝部分についても掘り下げを進めていったところ、当初想定していた円墳ではなく、方墳となること、周溝内の遺物から前期古墳となる可能性が高いことが判明してきた。これらのことから、墳頂主軸についても再設定し、周溝の掘り下げを進めた。一部土塁・堀跡との重複も判明し、西側の一部は土塁調査後の掘り下げとした。北西側では、周溝掘り下げの最中に、周溝内土坑を確認し、調査を行っている。周溝からは土師器をはじめとして、縄紋土器や弥生土器等の多数の土器が出土している。

完掘後、航空写真撮影および測量を行った。頂部周辺を精査したが、この時点では主体部は確認できなかった。その後、墳丘盛土の除去を進めたところ、その過程で主体部が確認され、調査を行ったものの、攪乱もあり、範囲等の不明な部分が多く残された。最後に墳丘下の遺構も調査を行ない、縄紋時代に帰属する土坑・ピット等を確認した。

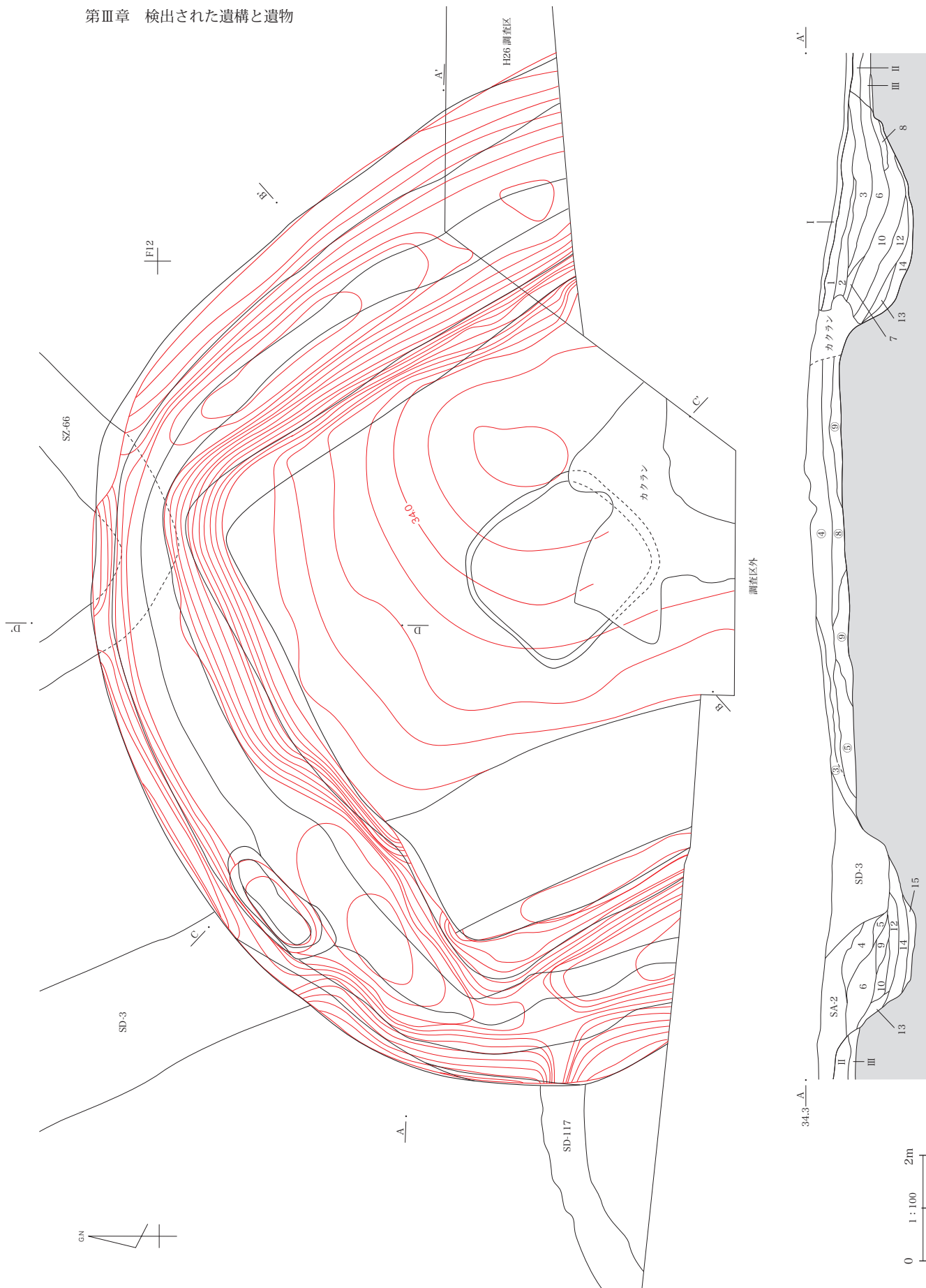
なお、平成26年度の調査区にも墳丘・周溝の一部がかかり、ここの調査も行った。

規模・形状 隅丸方形の方墳である。60%程が調査されたが、南側は調査区外となる。全面の調査を行うことができた周溝北辺で規模を測ると、周溝外縁で15.5m、墳丘内縁での幅は9.3mとなる。全体の規模は推定で17.5mである。墳頂部の標高は第150図の現況コンター図では34.500mで、第151図の掘り上がった状態でのコンター図では34.000～33.500mで周溝へと至る。本墳の南西側は、近世の堀跡であるSD-3によって大きく壊されている。残存する盛土も大きく改変されており、東側に偏ってみられる。本墳の主軸はN-37°-Wである。

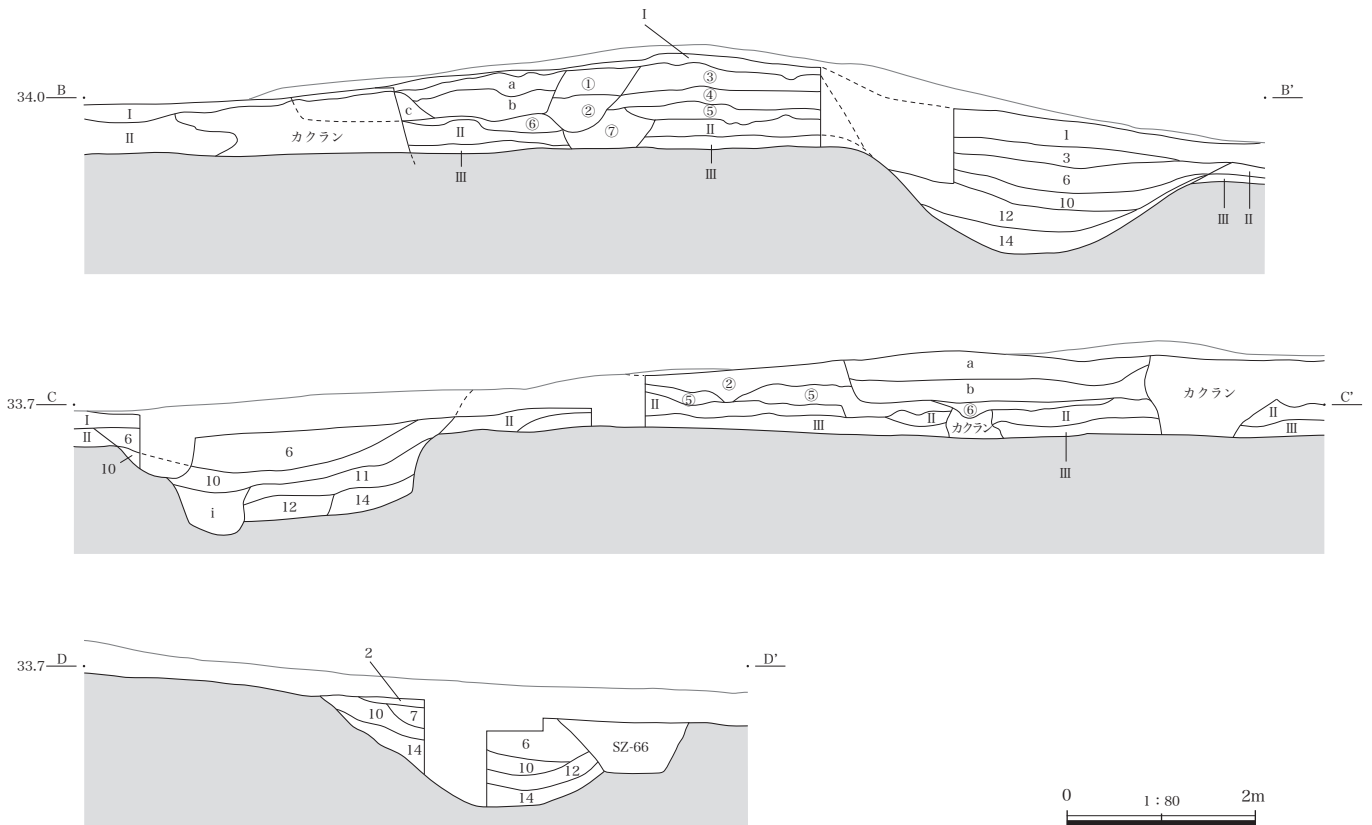
周溝の断面形は「U」字状である。幅は、西側で3.1m、東側で4.1m、北側で3.6mである。コーナー部の幅は北西部で2.65m、北東部では2.55mである。周溝底面の標高は、西側32.265m、東側32.330m、北側32.001mであり、コーナー部北西では32.605m、北東では32.507mの深さで、周溝コーナー部が狭く、



第150図 SZ-1 現況コンター図



第151図 SZ-1遺構実測図(1)



SZ-1 土層説明

周溝覆土

- 1 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量、炭化粒微量。しまりやや強。
- 2 灰褐色土 ローム粒・ロームブロックやや多量、白色粒微量。しまりやや強。
- 3 黒褐色土 ローム粒やや少量、ロームブロック・炭化粒少量、白色粒微量。しまり弱。
- 4 黒褐色土 ローム粒やや多量、白色粒少量、ロームブロックやや少量、炭化粒微量。しまりやや弱。
- 5 灰褐色土 ローム粒・ロームブロックやや多量。しまりやや強。
- 6 黒色土 ローム粒・炭化粒やや多量、白色粒やや少量、ロームブロック微量。しまりやや強。
- 7 暗灰褐色土 ローム粒・ロームブロックやや少量、炭化粒微量。しまりやや弱。
- 8 淡灰褐色土 ローム粒・ロームブロックやや多量、炭化粒微量。しまり強。
- 9 淡灰褐色土 ローム粒やや多量、ロームブロック・炭化粒微量。しまりやや弱。
- 10 暗灰褐色土 ローム粒やや少量、炭化粒少量、ロームブロック微量。しまりやや強。
- 11 黒褐色土 ローム粒・炭化粒少量、ロームブロック微量。しまり強。
- 12 暗灰褐色土 ローム粒・ロームブロック・炭化粒微量。しまり強。
- 13 淡灰褐色土 ローム粒やや少量、ロームブロック微量。しまりやや強。
- 14 暗黄褐色土 ローム粒多量、ロームブロック少量。しまり強。
- 15 暗灰褐色土 ローム粒・ロームブロック多量、炭化粒微量。しまりやや弱。

周溝内土坑

- i 暗褐色土 ロームブロック微量。しまり強。上層わずかに黒色ブロック有。

墳丘盛土

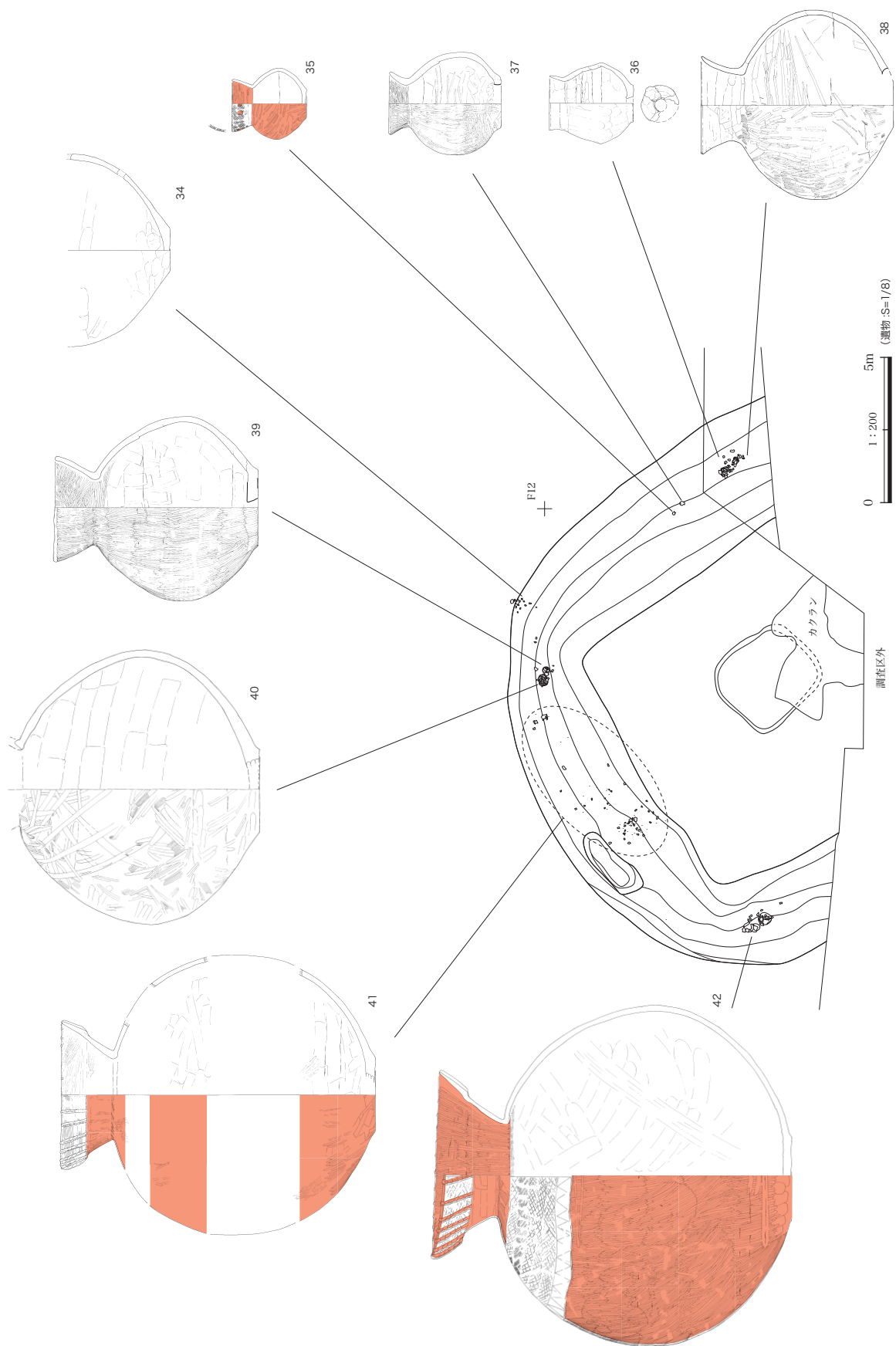
- ① 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。しまり弱。
- ② 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少量。しまり弱。
- ③ 暗黄褐色土 ローム粒多量、ロームブロックやや多量、黒色ブロック少量、白色粒微量。しまりやや強。
- ④ 淡灰茶褐色土 ローム粒・黒色ブロックやや多量、ロームブロック少量、白色粒微量。しまりやや弱。
- ⑤ 黒褐色土 ローム粒・ロームブロックやや多量、白色粒・黒色ブロック少量。しまりやや弱。
- ⑥ 灰褐色土 ロームブロックやや多量、ローム粒少量。しまりやや強。
- ⑦ 灰褐色土 ローム粒多量、ロームブロックやや多量、白色粒微量。しまり強。鹿沼土粒を少量含む。
- ⑧ 淡灰褐色土 ローム粒やや少量、ロームブロック・炭化粒微量。しまり強。
- ⑨ 黒褐色土 ローム粒微量、白色粒少量。しまりやや弱。

主体部覆土

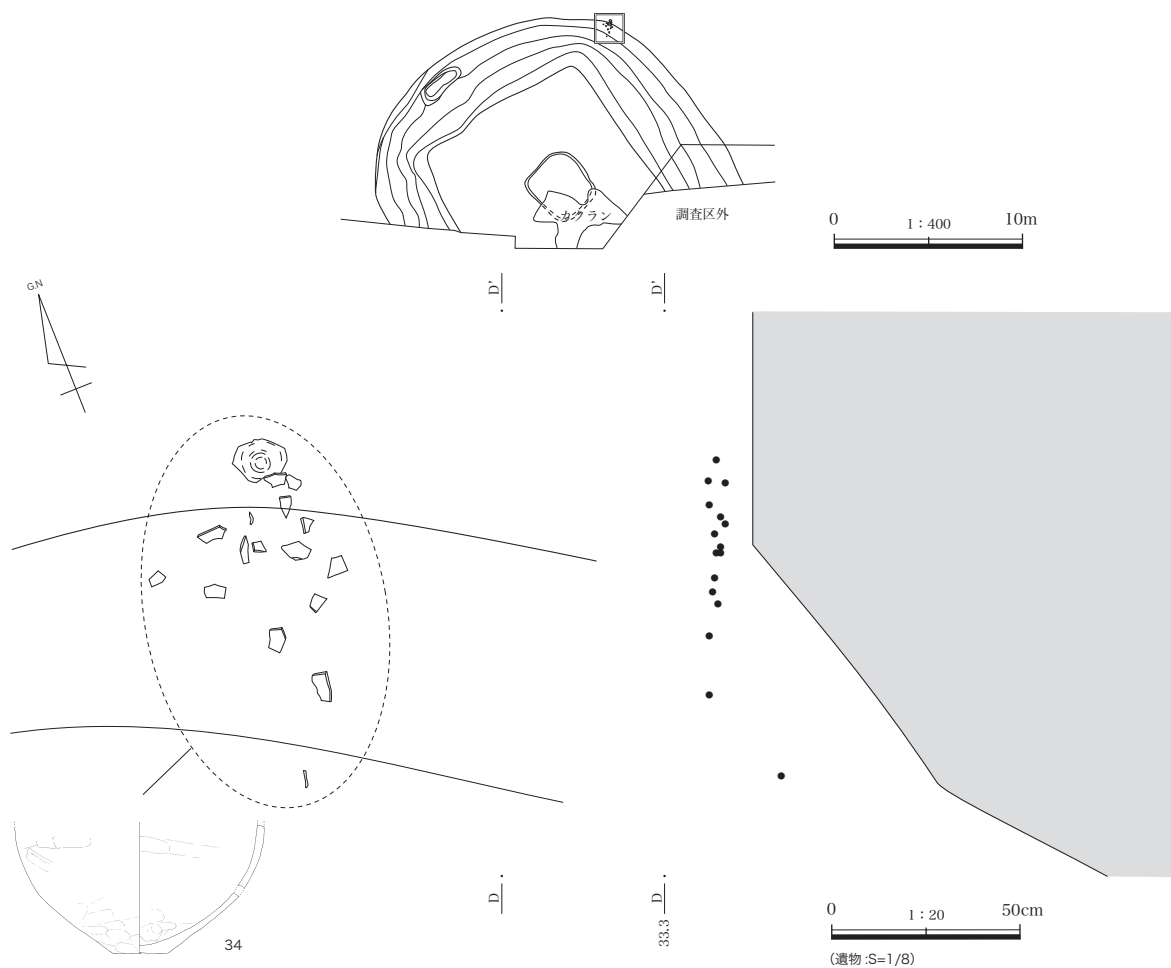
- a 暗褐色土 ロームブロックやや多量、ローム粒やや少量。しまりやや強。
- b 暗灰褐色土 ロームブロック多量、ローム粒やや多量、炭化粒微量。しまりやや弱。
- c 黒褐色土 ローム粒少量、ロームブロックやや少量。しまりやや強。

第152図 SZ-1 遺構実測図(2)

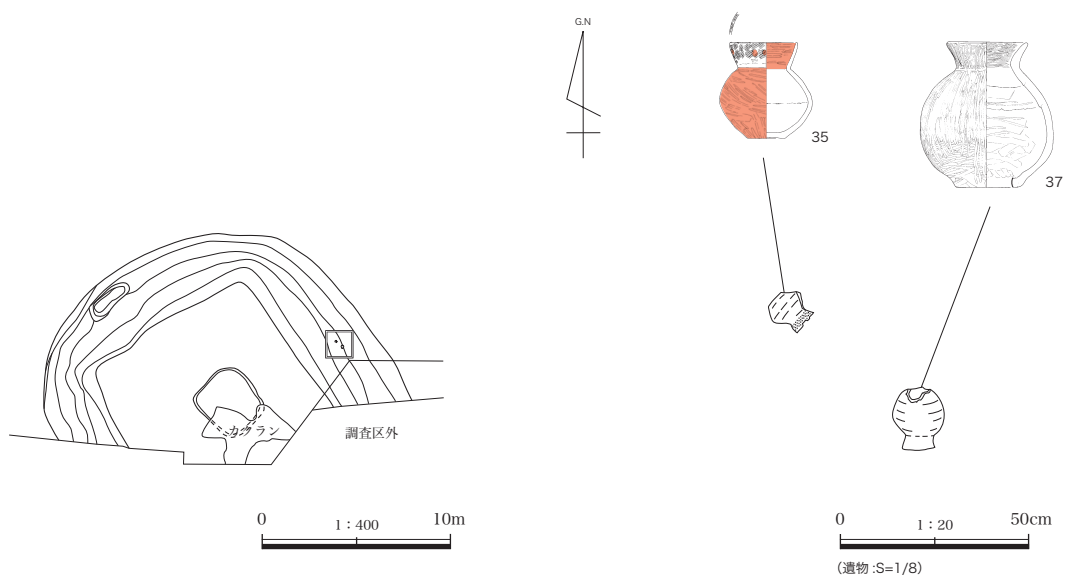
やや浅い掘り込みである。平面形からみると内縁は直線的だが、外縁は弧状を呈する。周溝外縁は主としてローム面での確認だが、調査中に確認した周溝外側の包含層を含むベルトの土層観察では、旧表土と考えられる標準土層のII層を切って周溝が作られていることが観察されており、より上位からの掘り込みであったことは推定できよう。本古墳の周溝は、鹿沼軽石層を掘り込んで構築されており、周溝中端付近で鹿沼軽石層が確認された。鹿沼軽石層の上面標高は、西側で32.600m付近、北側では32.560m付近で確認した。東側で



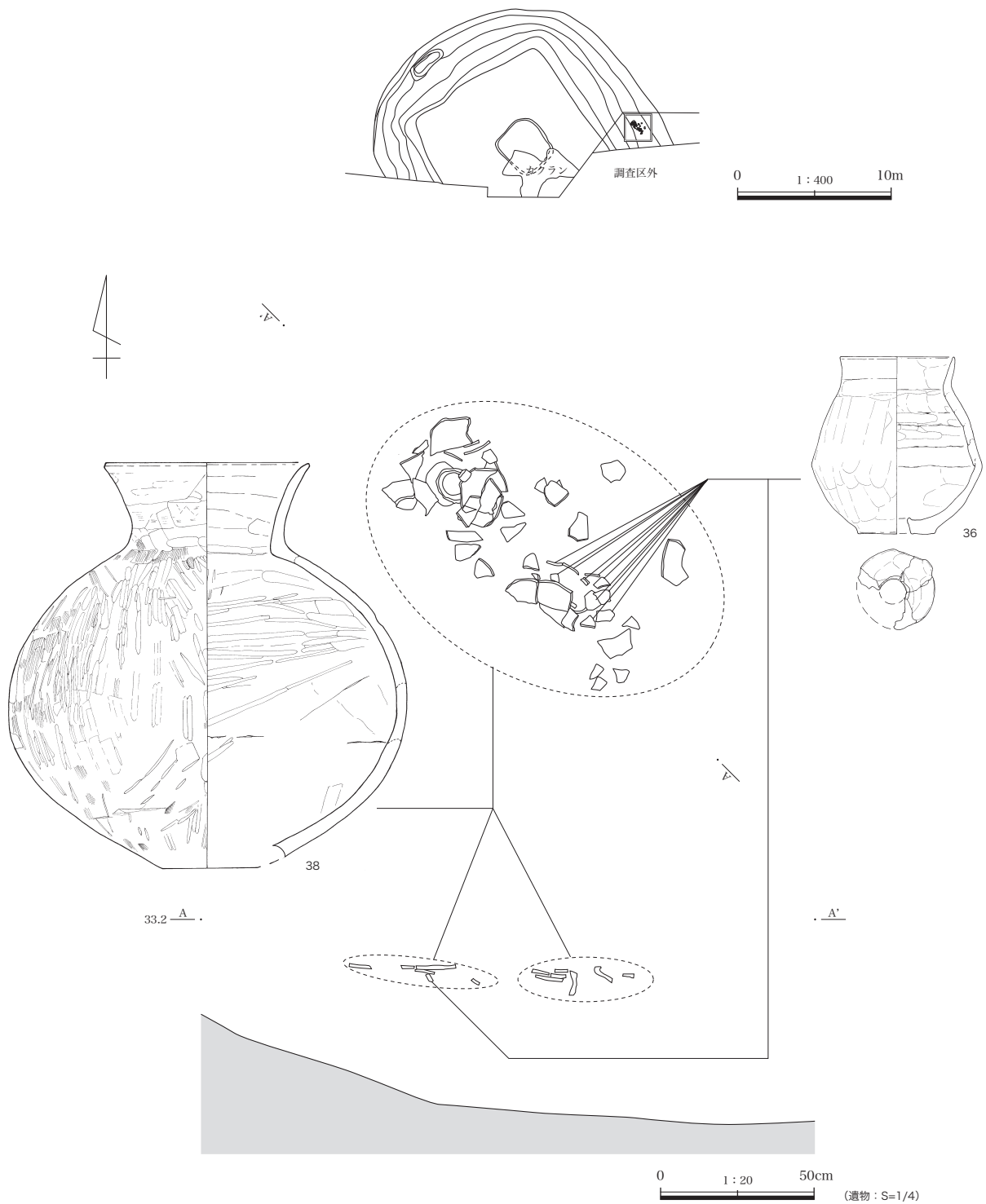
第153図 SZ-1 遺物出土状況図（全体図）



第154図 SZ-1 遺物出土状況図(1)



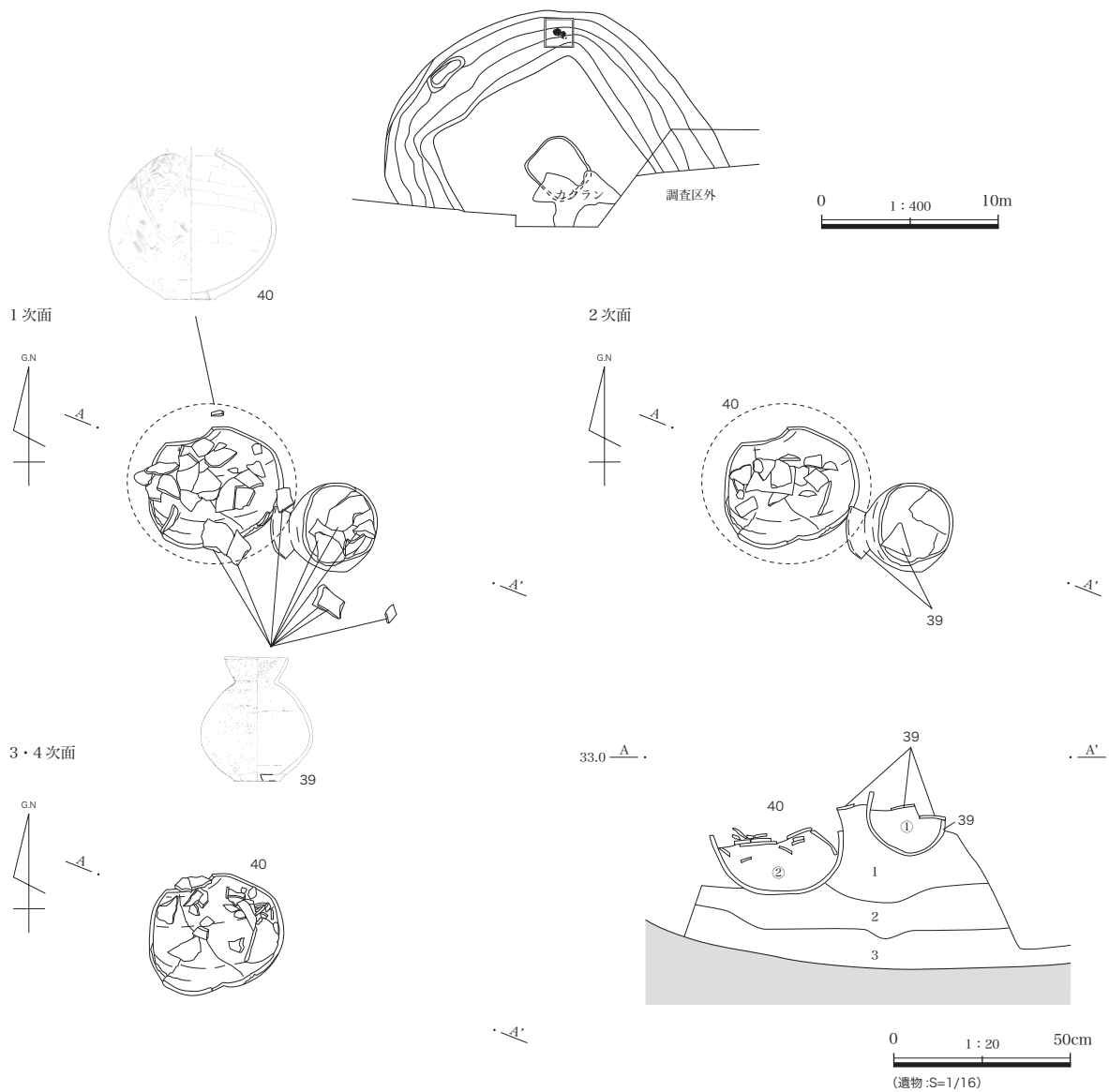
第155図 SZ-1 遺物出土状況図(2)



第156図 SZ-1 遺物出土状況図(3)

は周溝底面に近い位置で確認でき、標高 32.400m であった。また、北東のコーナー部では 32.510m 前後で確認できている。

覆土は自然堆積であろうと思われるが、覆土下層の 11・12・14・15 層は墳丘側からの流入が考えられ、盛土の崩落・流入を主とする堆積層と考えられる。また、SZ-1 の周溝覆土は火山灰分析を行っており、A-A'



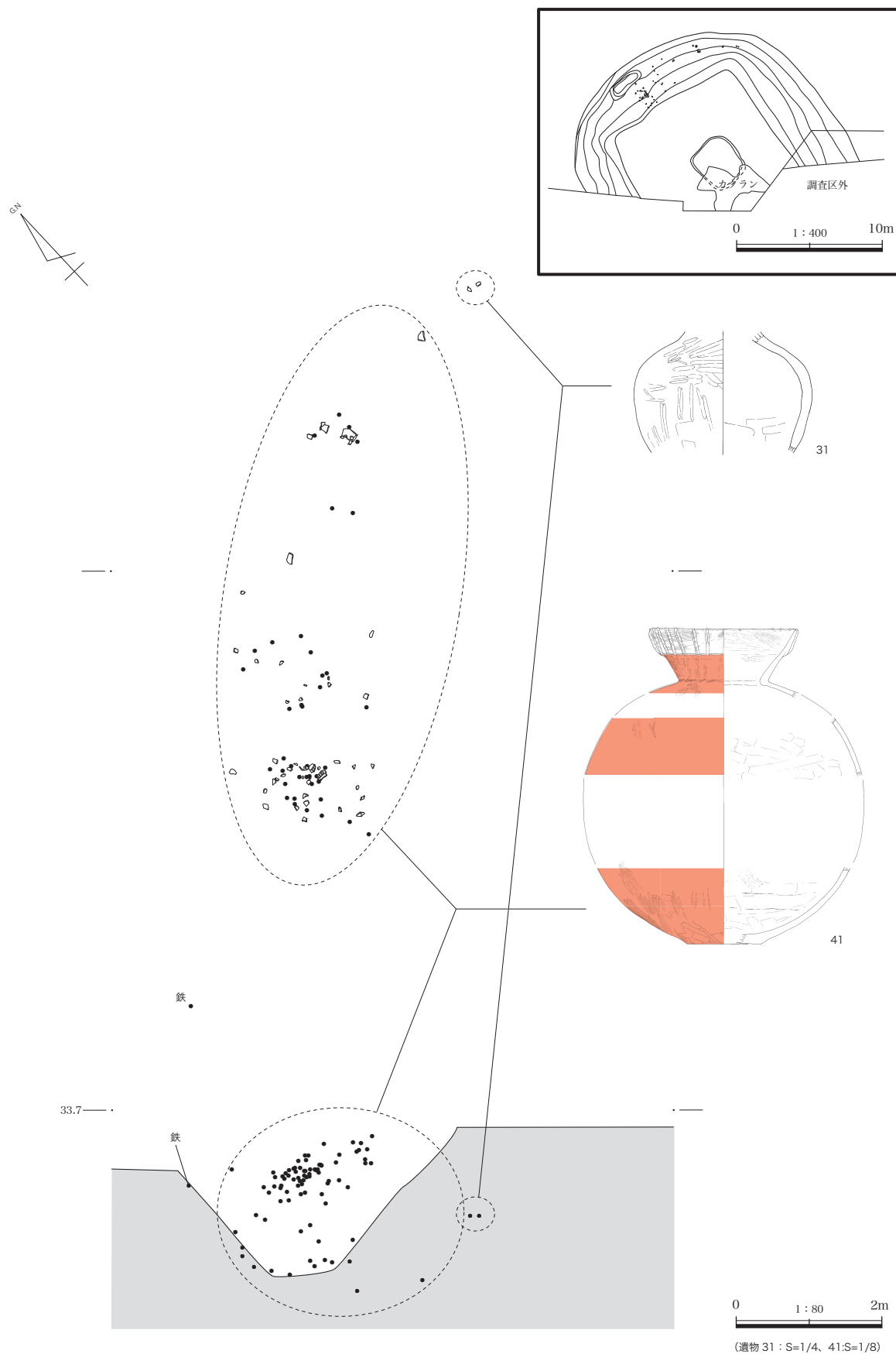
SZ-66 土層説明

- | | | | | | |
|---|-------|---|---|-------|-----------------------|
| 1 | 暗灰褐色土 | ローム粒少量、ロームブロック微量。しまりやや弱い。 | ① | 暗灰褐色土 | ローム粒少量、白色粒微量。しまりやや強い。 |
| 2 | 黒褐色土 | 白色粒少量(不均一)、ローム粒微量。しまりやや弱い。
(ローム粒が斑状に混じる) | ② | 黒褐色土 | ローム粒微量。しまりやや強い。 |
| 3 | 暗褐色土 | ローム粒・ロームブロックやや多量。しまりやや強い。 | | | |

第157図 SZ-1 遺物出土状況図(4)

セクションの周溝西側覆土の5・6・9・10・12・14・15層を試料として行った。詳細な結果は第IV章を参照していただきたい。分析結果で、6層から榛名ニツ岳渋川テフラ(Hr-FA)が、9層からは浅間C軽石(As-C)が検出されている。

墳丘盛土は40～70cm程残存しており、黒色土と褐色土をやや乱雑に積み上げて構築している。基本的には標準土層のⅡ層である黒色土の上に盛土を行う。③～⑤層は安定した層で、墳丘積み上げ土といえるが、6・7層は、旧表土を切るように、下位で堆積をする(第152図)。これが主体部に関連する掘り込みなのか、別遺構なのかは判断できなかった。Ⅱ層は平坦な面ではなかった可能性や、古墳築造時に一度整地を行った上で盛土を行っている可能性も考えられる。

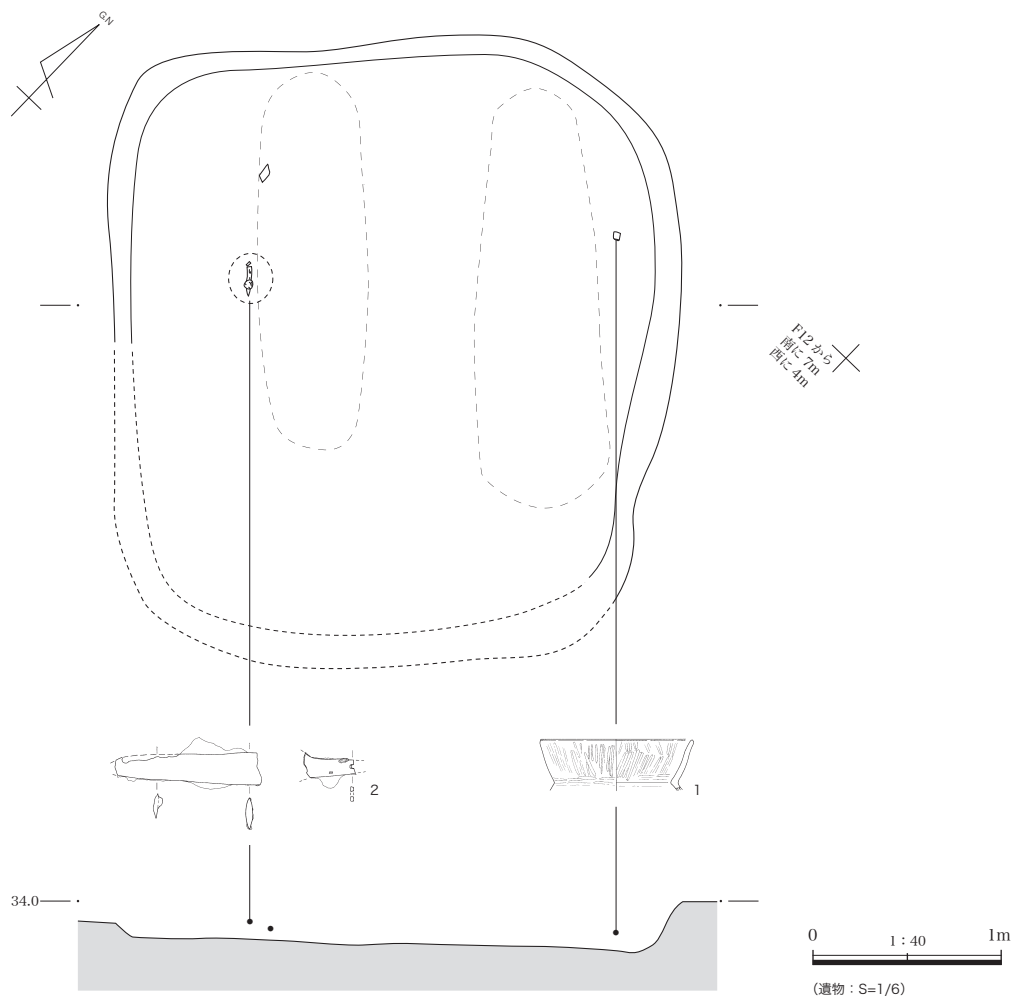


第158図 SZ-1 遺物出土状況図(5)

(遺物 31 : S=1/4、41:S=1/8)



第159図 SZ-1 遺物出土状況図(6)



第 160 図 SZ-1 主体部実測図

遺物出土状況 本墳の周溝内からは、土師器の坏や高坏、壺が出土している。それらのうち、出土地点および出土した状況が判明するものは9個体である（第 153～159 図）。

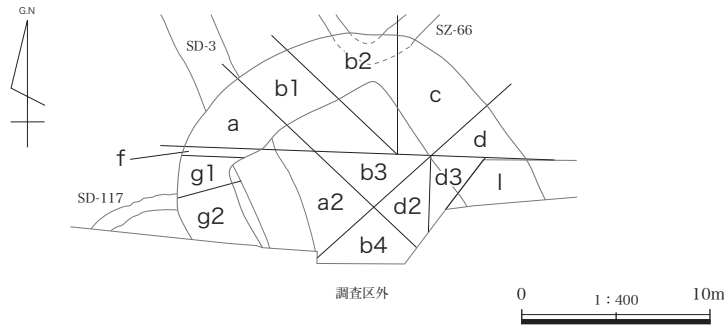
31 は北東コーナー部より、やや南西方向から出土する（第 158 図）。周溝中位からの出土である。

34 は周溝北東側のコーナー部から出土する（第 154 図）。ほぼすべての破片が同じ高さで出土しており、底部以外は比較的小破片での出土が目立つ。SZ-66 との重複地点であり、SZ-66 から流入した遺物とも考えられる。

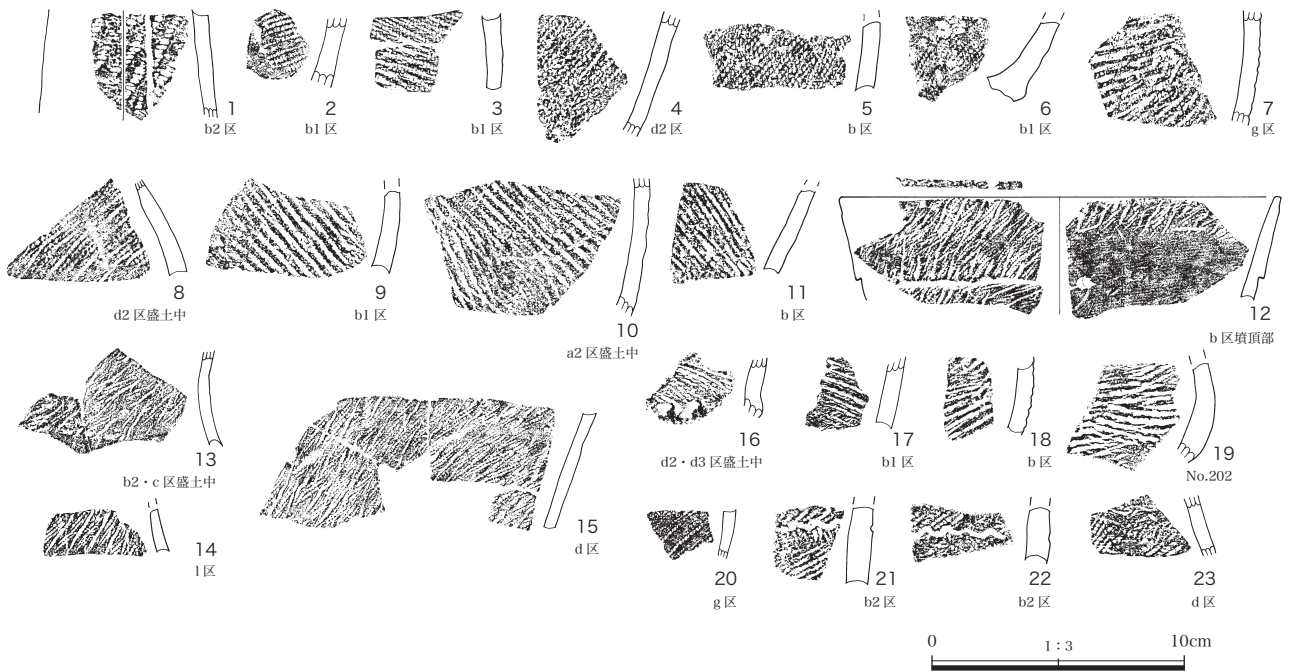
35・37 は東辺の周溝底面付近から出土する（第 155 図）。35 は口縁を南東方角へ、37 は口縁をほぼ真南へ向けた、横位の状態で出土する。35 は周溝底面から約 10 cm、37 は 15 cm 程の高さで出土しており、周溝覆土第 12 層中に相当する。

36・38 は東東南側の覆土上位で、周溝底面から 45 cm の高さより出土した（第 156 図）。殆どの破片が近い距離で、ほぼ同じ高さでまとまって出土しており、36 は大破片での出土がやや目立つ。

39・40 は北東コーナー周辺から、隣り合った状態で出土している（第 157 図）。平面の位置では、SZ-66 周溝内または近接する位置となるが、レベルや周辺土層の観察から、SZ-1 に伴うと判断される。39 は周溝底面から 32 cm、40 は 18 cm の高さで比較的完形に近い状態で出土している。39 は底部を東に向けて横位の状



第161図 SZ-1区分図



第162図 SZ-1遺物実測図(1)

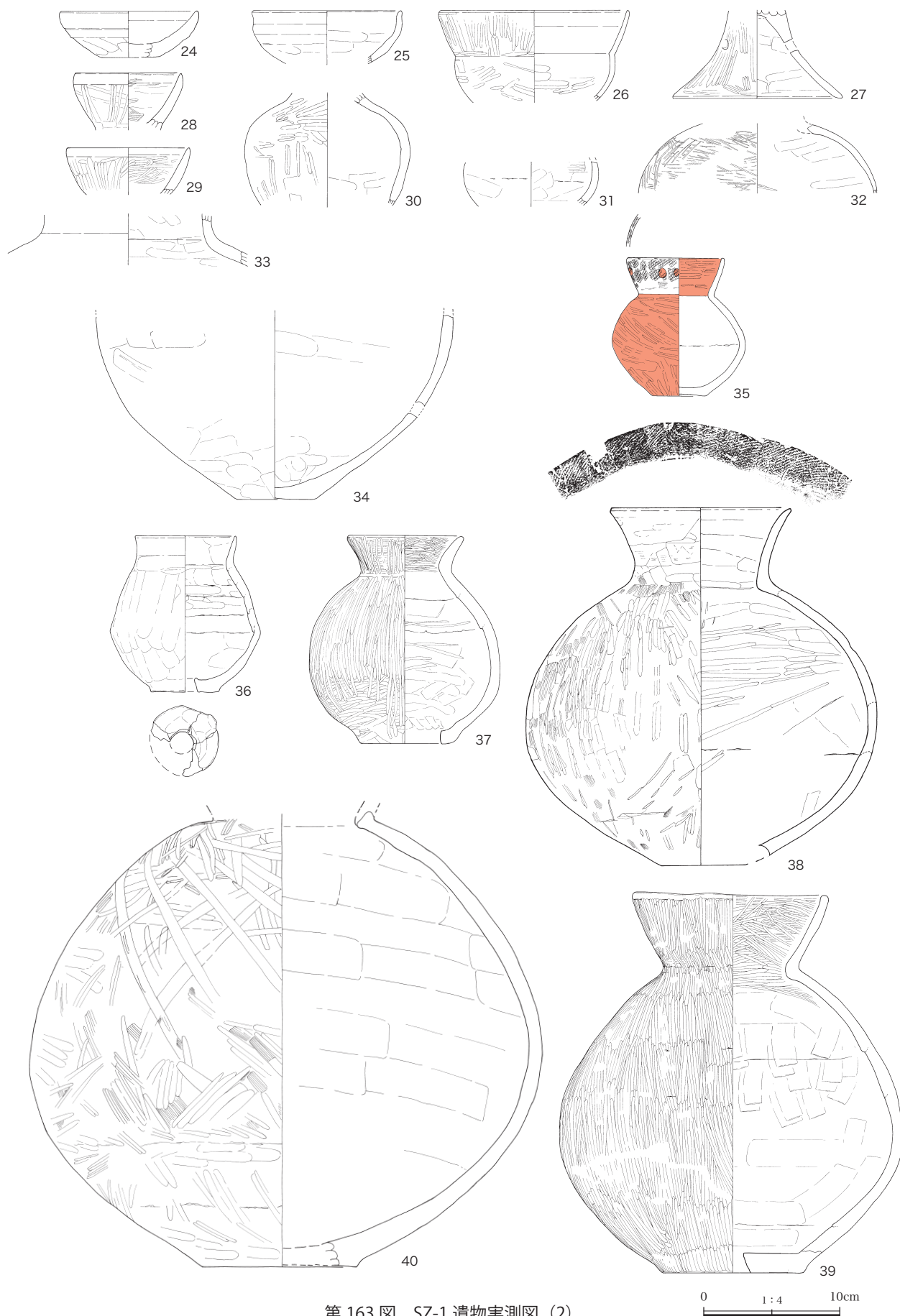
態で出土した。40も同様に横位の状態であったが、底部は南東方向へ傾いていた。

41は北辺中央の周溝やや上位で、小破片が北辺部周溝の一带から広範囲に出土した(第158図)。殆どの破片が周溝上層から中層にかけて出土しており、特に周溝中層にかけて、標高33.107～33.300m付近での出土が非常に多い。また、口縁部は北西部からの出土が多くみられた。遺存状況は悪く、すべて小破片に割れている状況である。

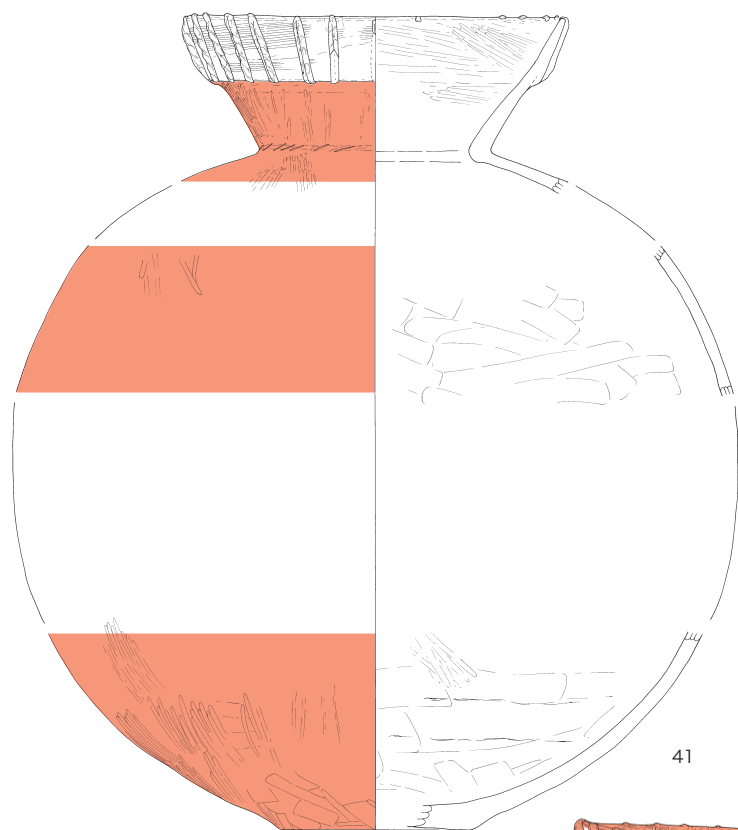
42は北西コーナーの周溝底面より30cm程の高さで出土した(第159図)。口縁部と体部が分かれて出土しており、意図的に切断されたようにも捉えられる。口縁部側は逆位で、体部は斜位で置かれたような状況である。設置と考え、掘り込み等はないか観察を行ったが、分からなかった。内部の土も際立った特徴は認められていない。

口縁部については、周溝壁面の斜面に近い位置での出土となるため、底面からは15cmの位置で出土している。土器内部の破片や周辺に散らばった破片もほぼ1個体に接合・復元できた。また、口縁部破片に一部重なる状態で、底部周辺の大破片がややまとまった状態で出土している。

重複 近世の土塁であるSA-2、堀跡のSD-3および方形周溝墓のSZ-66、古墳時代の溝跡と推定するSD-117



第163図 SZ-1 遺物実測図 (2)

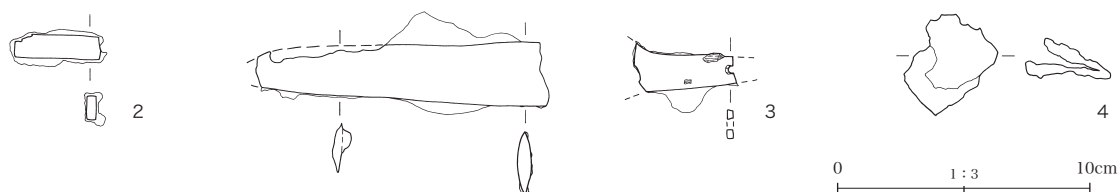


0 1:4 10cm

第164図 SZ-1 遺物実測図(3)



第 165 図 SZ-1 主体部遺物実測図



第 166 図 SZ-1 主体部金属製品実測図

と重複している。第 151 図の A-A' セクション図に示した部分（当初の調査区壁面）で、SA-2 および SD-3 との切り合いが観察できた。SA-2 は周溝覆土の 4・6 層より上位を土塁盛土が覆う状況である。SD-3 は、SZ-1 の墳丘盛土と周溝の境を壊しており、墳丘盛土の③層および周溝覆土の 4・5・12・15 層を掘り込む様子が観察された。

SZ-1 と SZ-66 は、SZ-1 の北東コーナー部と SZ-66 の南西コーナー部が重複する状況であった。平面上では、はっきりとした前後関係をつかむのは難しかったが、第 151 図の D-D' セクション部分で、SZ-1 の周溝覆土である 6・12・14 層を掘り込んでいる状況が観察された。このセクションでの SZ-1 の周溝底面の標高は 32.220m、SZ-66 の周溝底面の標高は 32.540m であった。

SZ-1 の 6 層と SZ-66 の 2 層の差異は明瞭で（図版二三）、掘り込みの壁ラインと考えてよいセクションを認めることが出来たことから、SZ-66 は SZ-1 より新しいと判断した。SZ-1 が完全に埋没した状態での掘り込みかは定かではないが、A-A' セクションおよび B-B' セクションと比較し、ある程度上層まで埋没していた段階で掘り込まれたと考えられる。

以上から、新旧関係は SD-117 → SZ-1（8 号墳）→ SZ-66 → SA-2、SD-3 である。また、SZ-1 の墳丘下層より、縄紋時代に帰属すると考えられる溝跡 1 条・土坑 20 基・ピット 14 基が、SZ-1 墳丘直上には近世の稲荷社跡と推定される遺構が確認されている。SD-117 については後述する。

周溝内土坑 本墳の北西側コーナー部から北東 2.5m の地点に周溝内土坑が確認された。長軸 2.5m・短軸 90cm の隅丸の長方形を呈する。主軸は N-48° -E である。

壁面はやや急角度で立ち上がる。SZ-1 の周溝が 30cm 程埋没した時期（C-C' セクション 11 層および 12 層堆積後）に、46cm 掘り込んで構築する。SZ-1 の周溝底面より深く、最深部で標高 32.308m である。本土坑に伴う遺物は出土していない。

主体部（第 160 図） 本墳の中心部より、墳丘盛土を掘り込んだ、方形の主体部と考えられる掘り込みを確認した。南側は攪乱のため正確なプランは確認できなかったが、規模は短軸 3.0m 程で、長軸はセクションから 3.3～3.5m 程であったと思われる。棺の痕跡と思われる長方形の黒色土を底面で確認できたが（第 160 図破線範囲）、確定的な判断はできない。

主体部からは、土師器と鉄製の剣が出土している。西側の底面からは、切先を南東方向へ向け、底面から8 cm上位で鉄剣が出土した。東側の壁際底面から南西20 cm、底面上8 cmで土師器埴の口縁部が出土している。また、小片のため図示していないが、主体部西側端部周辺で、土師器埴の体部と思われる薄手の土師器片がややまとまって出土している。

出土遺物 周溝覆土からは弥生土器23点、土師器18点が出土する。弥生土器は周溝北辺・周溝西辺・墳頂部・墳丘盛土等から出土している。やや周溝北辺からの出土が多い。個別の詳細な出土位置は不明である。

第162図1～23は弥生土器である。1は頸部の破片と考えられる。単節縄紋を地紋とし、深い縦位の単沈線を施す。原体は0段多条かあるいは前前段反撚と思われる。b2区より出土。2は細かく端正な縄紋がみられる。前前段反撚LRRあるいは0段多条の原体の可能性もある。b1区より出土。3の施紋原体は直前段反撚3段RRLで、横位に施紋している。b1区より出土。4・5はいずれも直前段反撚3段LLRを横方向施紋したものであろうか。4はd2区、5はb区から出土。6は底部破片である。底部外面には木の葉の圧痕が認められる。胴部下端は直前段反撚3段LLRを横方向に施紋している。b1区出土。7・8は附加条1種2段LR+2Rの縄を横方向に施紋する。7はg区、8はd2区の墳丘盛土内から出土。9～11の施紋原体は附加条1種2段RL+2Lと考えられる。胎土には砂粒（石英粒子・長石粒子）を多量に含む。9はb1区、10はa2区の墳丘盛土内、11はb区からの出土。12は複合口縁の土器。直前段反撚の縄を口辺部外内面および口縁端部に施す。施紋原体は3段LLRか。b区の墳丘墳頂部から出土。13は原体末端の回転圧痕がみられる。また破片上端部は無文部が認められる。b2・c区の墳丘盛土内からの出土。14・15は胴部破片である。15の破片上端および下端はいずれも接合部から剥離している。14は1区、15はd区から出土した。16はやや厚肥した複合口縁の下端部に、棒状工具による刺突が巡る。縄紋原体は、軸縄に1段Rの縄を絡めた撚糸紋あるいは直前段反撚3段LLRと考えられる。d2・d3区の墳丘盛土内より出土した。17・18は附加条1種2段LR+2Rの縄を横位施紋している。17はb1区、18はb区から出土。19は、丸みを帯びる胴部中位の破片。軸縄（原体不明）に0段Rまたは1段Rの縄を絡めた撚糸紋と思われる。b1区（No.202）出土。20は胴部の小破片で、地紋の縄紋は附加条1種2段LR+Rと考えられる。g区出土。21と22は2段LRを横位施紋したのち、横位の深い結節紋を施している。21は結節紋の下部に沿うように細かな刻みを連続して施している。両者ともb2区出土。23は胴部の破片である。2段LRを横位施紋したのち、細めの原体で結節紋を施している。d区からの出土。

24～42は土師器で、すべて古墳時代に帰属する。第163図24・25は土師器の坏。24はb区、25はc区から出土。26は土師器碗で、丁寧なミガキが施される。すべて小破片が接合し、b区・1区およびSZ-1の主体部から出土している。27は高坏の脚部で、緩やかに外反する。b区からの出土で、すべて小破片で出土している。

28～41は土師器の壺類である。28・29は小形壺の口縁部。両者とも比較的丁寧にミガキが施される。1区から出土した。30は小形壺の肩部～体部。体部外面にやや太めの工具によるミガキが全面に施される。出土位置は第158図を参照。31は小形の壺の体部破片。外面はヘラケズリ調整が施される。1区出土。

32はやや中形の壺の肩部破片。薄手の作りで、外面には細かいミガキが施される。b区・1区および主体部から出土した小破片と接合した。

33・34は同一個体の可能性がある。33は頸部片、34は胴部～底部。外面が荒れており、詳細は不明だがミガキを施していた可能性が高い。一部に赤彩が残存している。胎土は他に比べると若干砂質である。33は1区から、34はb2区からc区にまたがって出土する（第154図）。

35は口縁部に縄紋を施す小形の壺である。口縁部は、ヘラ状工具を用いて横方向のナデ整形を最初に行い、単節2段LRの縄紋を施す。頸部付近には結束紋と考えられる痕跡が確認できる。口縁端部も同時に行った可能性がある。次にヘラ状工具を用いてヘラミガキを行い、赤彩を施している。しかし、焼成前（乾燥段階）に口縁部の一部が縦2.0×横4.5cmの範囲で何らかの原因によって破損し、その範囲に新たに粘土を貼り付けて補修している。この部分には、口縁部の施文に使われた縄紋原体は使用せず、新たに0段1もしくは1段Lの網目状撚糸紋を使用する。口縁部外面には円形の赤彩が3カ所認められる。おおよそ3cm間隔で彩色されている。全周に施されていた可能性があるが、磨滅のために断定できない。体部のヘラミガキは全面に行われており、上位は左方向、下位は縦方向へと磨かれる。また、底部もヘラミガキを行う。体部外面には全面に赤彩が施されるが、黒色の部分は赤彩が失われている。焼成段階での影響によるものか。口縁部内面にも赤彩が施されるが、外面と違い赤彩後にヘラミガキを行っているようにみえる。また、補修箇所はヘラミガキを行わずに赤彩を施す。胎土は白色できめ細かい。出土位置はd区（第155図）。

36は小形の壺。全体に粗い作りとなっており、ヘラミガキは行われていない。ヘラケズリによって器面を整えており、内面の中位から上位にかけては輪積痕が明瞭に確認できる。焼成前に底部穿孔を行っている。1区から出土する（第156図）。

37は小形壺である。口縁端部は外反する。全体的にヘラミガキが行われ、非常に丁寧に製作されている印象をもつ。口縁部は横方向にヘラ状工具を用いてのナデ整形を行い、縦方向へやや間隔の広いヘラミガキを施す。体部のヘラミガキ前の状態の詳細は不明ではあるが、底部付近でヘラケズリの痕跡がみられた。ヘラミガキは、底部側からやや幅広の横方向のミガキを行い、次に縦方向のミガキを細かく行う。口縁内面にも横方向の細かいヘラミガキが行われる。内面はヘラ状工具を用いてのナデ整形を行うが、上位には僅かながら輪積痕が残る。焼成後に底部穿孔を行っている。35から南東30cmの地点で出土する（第155図）。

38は口縁端部が外反する中形の壺である。体部にはハケ目状工具によるナデ整形が行われ、その後にヘラミガキを行う。口縁部は内外面共にヘラミガキはあまり行われず、ナデ整形のみとなる。焼成後に底部穿孔が行われている。36と混在して出土する（第156図）。

39と40は隣接して出土している。b2区にあたる（第157図）。39は中形の壺。口縁部から体部下端まで、縦方向のヘラミガキを体部上位から下位に向かって施しており、6単位にもおよぶ。口縁部は体部のヘラミガキ後に行われた可能性があり、最後に頸部の縦方向へのヘラミガキが行われる。口縁内面から頸部内面にかけては、斜め方向にややランダム気味にヘラミガキが行われている。体部内面はヘラ状工具を用いてナデ整形を行う。焼成後に底部穿孔が行われている。また、出土位置は不明であるが、底部片が出土しており、接合することが出来た。

40はやや大形の壺。口縁部は打ち欠いてあり、周辺からの出土は認められなかった。体部は、ハケ状工具を用いてのナデ整形を行った後に、ややランダム気味にヘラミガキが行われている。体部内面はヘラ状工具を用いて横方向のナデ整形を行う。また、体部外面には赤彩が施されており、上位には籠目文が残る。

第164図41はSZ-1の周溝北西部の上層から多数の小破片の状態出土した、棒状浮文をもつ大形の二重口縁壺である（第158図）。内外面共に磨滅が著しい。口縁部は、粘土を貼り付けて成形し、ハケ状工具を用いた横方向のナデ整形を行った後に、粘土紐を指で摘みながら貼り付ける。有段部下位は縦方向のヘラミガキが、また体部から底部までヘラミガキが行われる。底部下端はヘラケズリ調整が行われた痕跡が僅かながらだが確認できた。口縁部内面は横方向のヘラミガキを行い、体部内面はヘラ状工具によるナデ整形が行われている。

42は口縁部および胴部上位に文様が施文される大形の二重口縁壺である。口縁部は、棒状浮文および撚糸紋の施紋がみられる。最初に網目状撚糸紋による施文が行われ、口縁端部を赤彩する。均等かつ平行に彩色されていることから、彩色の際には工具を用いて押し引いている可能性もある。次に41同様、粘土紐を指で摘みながら貼り付ける。しかし、貼り付け後に赤彩を施す点は41とは異なる。内面はハケ状工具を用いて横方向のナデ整形を施し、その後に縦方向に細めにヘラミガキを行う。また、赤彩後にも大きく放射状にやや太めのヘラミガキを行う。

胴部上半に施される文様は、網目状撚糸紋・縄紋・網目状撚糸紋・鋸歯文が施文される。また、頸部および胴部下半は全面にわたって赤彩が施されている。施文の順序として、網目状撚糸紋→縄紋→横位沈線→鋸歯文である。但し、部分的に鋸歯文を切って横位沈線を施しているところがある。最初に肩部から胴部中位にかけて、縄紋による施紋を行う。まず、網目状撚糸紋は0段1もしくは1段Lの、角棒状の軸部に巻き付けて製作したと考えられる網目状撚糸紋を用いた施文を3段分施文し、更に一区画あけて1段分施文する。上位で空白とした1区画には、1段Rもしくは2段RRの縄紋を施紋する。その後、上下に沈線で幅8～9cmの区画をし、下の区画線から2cm程上位にも線を引き、区画する。鋸歯文は、先端鋭角なヘラ状工具による沈線の鋸歯文を施文する。

施文後には、胴部の文様面以外の全面に、細かいヘラミガキを上位から下位に6単位分行う。胴部の中央部付近では、さらに上からミガキを行う箇所がある。接合位置の補強のためであろうか。口縁部と体部の接合部分は、接合面周辺で赤彩後にヘラミガキを行ったと考えられる部分が見受けられる。ヘラミガキの後に文様面以外に赤彩を施し、焼成を行っていたと考えられる。また、35と同様に黒色の部分は赤彩が失われている。g1区から出土した(第159図)。

主体部から土師器1点、鉄製品3点が出土した(第165・166図)。1は土師器埴。比較的丁寧な、細かいヘラミガキを行う。主体部東側から出土する。2は刀子と思われる鉄製品。詳細な出土位置は不明である。3はやや薄手の剣である。切先が欠けており、身が11.1cm、茎部が3.9cm残存する。茎部には目釘穴が確認でき、木質が穴に沿って残存していることから、木製の目釘であった可能性がある。主体部の西側から出土した。4は板状の不明鉄製品で、正確な出土位置は不明である。

第11表 SZ-1 遺物観察表

掲載番号	種類器種	計測値 (cm)	色調 (内・外)	胎土	焼成	残存率	技法 (内・外)	特徴・備考	出土位置
24	土師器坏	口径：(10.0) 底径：(4.0) 器高：3.4	内：10YR5/2 灰黄褐 外：10YR5/3 にぶい黄褐	緻密、黒色粒・白色粒・赤褐色粒・透明粒微量	硬質	口縁から底部 1/5	内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ナデ、底部切り離し不明・ナデ		b区
25	土師器坏	口径：(11.0) 底径： 器高：(3.2)	内：5YR6/6 橙 外：5YR6/6 橙	緻密、黒色粒・透明粒少量、白色粒やや多量	硬質	口縁から体部破片	内：口縁～体部ナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部ナデ	体部外面粘土紐痕あり。	c区
26	土師器碗	口径：(14.0) 底径： 器高：(6.6)	内：5YR4/8 赤褐 外：5YR5/6 明赤褐	緻密、黒色粒・白色粒・透明粒少量	硬質	口縁部 1/2 弱 体部一部	内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外：口縁～頸部ミガキ、体部ケズリ後ミガキ	同一片にSZ-1主体部出土の破片がある。	d区・1区
27	土師器高坏	口径： 底径：(12.4) 器高：(6.4)	内：5YR6/6 橙 外：5YR5/6 明赤褐	緻密、黒色粒・透明粒少量、白色粒やや多量	硬質	台部 1/2	内：台部ナデ 外：台部ヘラミガキ	透かし穴2。台部内面裾部ヨコナデ。また、SZ-66 出土品とも接合。	b区・b1区
28	土師器壺	口径：(8.0) 底径： 器高：(4.2)	内：10YR6/4 にぶい黄橙 外：10YR6/4 にぶい黄橙	緻密、透明粒微量、黒色粒・白色粒少量	硬質	口縁部から頸部破片	内：口縁～体部ナデ後ミガキ 外：口縁部ヨコナデ、頸部ミガキ		1区
29	土師器壺	口径：(9.0) 底径： 器高：(3.4)	内：10YR6/4 にぶい黄橙 外：10YR6/4 にぶい黄橙	緻密、透明粒微量、黒色粒・白色粒少量	硬質	口縁部 1/3	内：口縁部ヨコナデ、頸部ミガキ 外：口縁部ヨコナデ、頸部ミガキ		1区
30	土師器壺	口径： 底径： 器高：(8.2)	内：10YR6/4 にぶい黄橙 外：10YR7/6 橙	緻密、黒色・白色粒・黒色ガラス質粒やや多量	硬質	胴部 1/4	内：体部ナデ 外：体部ヘラミガキ	体部外面一部赤彩。	b2区
31	土師器壺	口径： 底径： 器高：(3.2)	内：10YR7/3 にぶい黄橙 外：10YR7/3 にぶい黄橙	緻密、透明粒・白色粒微量	やや硬質	体部破片	内：体部ナデ 外：体部ナデ		1区
32	土師器壺	口径： 底径： 器高：(5.1)	内：7.5YR6/6 橙 外：5YR5/6 明赤褐	緻密、黒色粒・白色粒・透明粒少量	硬質	胴部片	内：体部ナデ・ミガキ 外：体部ミガキ	外面一部赤彩。また、主体部内1層や盛土内からの出土品とも接合。攪乱によるためか。	a2区・墳頂
33	土師器壺	口径： 底径： 器高：(3.8)	内：10YR5/3 にぶい黄褐 外：10YR5/3 にぶい黄褐	緻密、黒色粒少量、白色粒・透明粒やや多量	硬質	頸部から体部破片	内：頸～体部ナデ 外：頸～体部ナデ	体部外面は荒れが著しい。	1区
34	土師器壺	口径： 底径：5.8 器高：(14.9)	内：10YR6/3 にぶい黄橙	緻密、黒色粒少量、白色粒・透明粒やや多量	やや硬質	胴部片 底部完存	内：体～底部ナデ 外：体～底部ナデ	底部内面中心部に赤彩。SZ-66 出土品とも接合。	b区・b2区
35	土師器壺	口径：7.2 底径：4.8 器高：10.2	内：5YR6/3 にぶい橙 外：7.5YR6/3 にぶい褐	緻密、透明粒・白色粒微量	硬質	ほぼ完形	内：口縁～頸部ヨコナデ、体～底部ナデ 外：口縁～頸部ハケ目調整後文様施文、体～底部ヘラミガキ	口縁～頸部にかけて、4.5×2.0 cm程の範囲に粘土を貼り付け、口縁端部まで網目状捺糸文を施す。補修痕と思われる。口縁部内面から頸部内面に赤彩(2.5YR5/6 明赤褐)。頸部外面にも3カ所円形の赤彩。肩から体部中程まで赤彩(2.5YR5/4 にぶい赤褐)。	1区
36	土師器壺	口径：(7.4) 底径：(4.4) 器高：11.5	内：5YR5/6 明赤褐 外：10YR5/4 にぶい黄褐	緻密、黒色粒少量、白色粒・透明粒やや多量	硬質	口縁部 1/2 弱 胴部一部 欠損 底部 1/2	内：口縁～頸部ヨコナデ、体～底部ナデ・ミガキ 外：口縁～頸部ヨコナデ、体部タテナデ、底部ナデ	体部内面中位～上位に輪積み痕が明瞭に残る。体部外面赤彩。	1区

37	土師器壺	口径：8.5 底径：6.4 器高：15.4	内：7.5YR6/4 にぶ い橙 外：7.5YR6/4 にぶ い橙	緻密、透明粒・白 色粒微量	硬質	ほぼ完形	内：口縁～頸部ヘ ラミガキ、体部ナ デ 外：口縁～頸部ハ ケ目整形後ヘラミ ガキ、体～底部ヘ ラミガキ	体部内面上位に輪積み 痕。焼成後、底部穿孔。	1区
38	土師器壺	口径：13.3 底径：6.0 器高：26.5	内：7.5YR6/4 にぶ い橙 外：7.5YR6/4～5/1 にぶい橙～褐灰	緻密、黒色粒・透 明粒少量、白色粒 やや多量	硬質	ほぼ完形 底部穿孔	内：口縁部および 体部ナデ整形。 外：体部ハケ目状 工具によるナデ整 形後ヘラミガキ。	胴部上半に一部 10YR4/6(赤橙)あり。 焼成後、底部穿孔。	1区
39	土師器壺	口径：13.4 底径：(10.0) 器高：27.7	内：10YR5/4 にぶ い黄褐 外：10YR7/3 にぶ い黄褐	緻密、黒色粒・透 明粒少量、白色粒 やや多量	硬質	口縁部 3/4 胴部一部 欠損 底部 1/2 弱	内：口縁～頸部ハ ケ目調整後ヘラミガ キ、体～底部ナデ 外：口縁～頸部ハ ケ目調整後ヘラミ ガキ、体部ヘラミ ガキ、底部ナデ	焼成後、底部穿孔。	b1・b2区
40	土師器壺	口径：(13.0) 底径：11.8 器高：33.4	内：10YR7/4 にぶ い黄橙 外：7.5YR7/3 にぶ い橙	緻密、透明粒・黒 色粒・白色粒・赤 褐色粒少量	硬質	体部破片	内：体～底部ナデ 外：体部ハケ目調 整後ヘラミガキ、底 部ケズリ後ミガキ	口縁～頸部を打ち欠 く。体部外面上位か ら中位にかけて籠目 痕。体部内面は全体 的に荒れる。体部外 面も剥落が多い。焼 成後、底部穿孔か。	1区
41	土師器壺	口径：(20.2) 底径：10.1 器高：(43.0)	内：7.5YR7/3 にぶ い橙 外：7.5YR7/3 にぶ い橙	緻密、黒色粒・透 明粒少量、白色粒 やや多量	硬質	口縁部 2/3 底部 2/3 体部一部 (破片多 数あり)	内：口縁部ハケ目 調整後棒状浮文貼 り付け、頸部ナデ 後ヘラミガキ、体 部ナデ 外：口縁～頸部ナ デ後ヘラミガキ、 体部ヘラミガキ、 底部ケズリ後ナデ ヘラミガキ	口縁部内外面赤彩。 周溝覆土上位より破 片でばらけた状態で 出土。同一個体で破 片が 181 辺片出土し ている。	a・b区
42	土師器壺	口径：25.9 底径：11.6 器高：49.0	内：7.5YR7/4 に ぶい橙 外：2.5YR4/4～ 10YR7/4 にぶい赤褐～にぶ い黄橙	緻密、黒色粒・透 明粒少量、白色粒 やや多量	硬質	ほぼ完形	内：口縁～頸部ナ デ後ヘラミガキ、 体部ナデ 外：口縁部網目状 擦糸紋施文後棒状 浮文貼り付け、体 部縄紋および擦糸 紋・線鋸歯文施文 後ヘラミガキ、底 部ケズリ後ナデ・ ヘラミガキ	口縁部内外面および 端部、棒状浮文、頸 部～体部にかけて赤 彩。胴部文様面は赤 彩をしない。	g1区 No.251(口 縁部) No.252(体 部)

第12表 SZ-1 主体部遺物観察表

掲載 番号	種類 器種	計測値 (cm)	色調 (内・外)	胎土	焼成	残存率	技法 (内・外)	特徴・備考	出土位置
1	土師器壺	口径：(12.2) 底径： 器高：(4.0)	内：5YR4/6 赤褐 外：5YR4/4 にぶ い赤褐	緻密、黒色粒・黒 色ガラス質粒少 量、白色粒やや多 量	硬質	口縁部 2/5	内：口縁～頸部ミ ガキ 外：口縁～頸部ミ ガキ	内外面赤色彩。口縁 端部にスス付着。	

第13表 SZ-1 主体部金属製品観察表

掲載 番号	種類	鍛冶関連遺物 構成表No.	出土位置
2	鉄製品 (刀子)	43	主体部
3	鉄製品 (剣 (細身))	45	主体部No.2
4	鉄製品 (滓状不明品)	44	主体部

2. 方形周溝墓

SZ-66（横倉戸館1号方形周溝墓）（第167～171図、第14～16表、図版二二～二四・六三・六八）

位置 調査区中央東寄りのE10b・E10d・E11・F11a・F11bグリッドに位置している。

規模・形状 本古墳は、ローム漸位層からローム層で、比較的明瞭に確認された。北側が調査区外となるため、北西辺・北東辺の半分近くおよび北コーナーが未確認であるが、やや南北が長い長方形を呈する。軸をN-38°-Wとした場合、周溝外縁を含めた主軸長は推定で9.40m、直交する短軸長は8.32mとなる。周溝幅を除いた内側の規模は、主軸長で推定7.12m、直交する短軸長は6.30mと、主軸長に対してやや長い形態をする。

周溝の掘り込みは明瞭で、壁の断面からⅡ・Ⅲ層を掘り込んでいることが明らかである。盛土がなされていた可能性もあるが、表土・Ⅱ層が薄いこともあり、平断面いずれでも確認できなかった。周溝幅は、確認面において南西辺で0.78m、南東辺で1.20m、北東辺で0.68mである。周溝底面の標高は、南西辺で32.840m、南東辺で32.519m、北東辺で32.372mである。周溝形状は断面「U」字型を呈するが、一部においては断面逆台形状に掘り込む。また、一部では周溝内側の壁の途中で、一段の段差のあるところも見受けられる（A-A'セクション）。周溝西側に張出部を持ち、確認面での周溝幅は1.36mで、底面の標高は32.690mである。断面逆台形を呈し、底面はおおよそ平坦である。

周溝覆土は、1層から3層まで分層でき、2層がやや厚く堆積する。SZ-66の周溝覆土のうち、C-C'セクションからⅠ層および1～3層を採集してテフラ分析を行った。詳細は第IV章を参照としていただきたいが、結果として3層から浅間C軽石が検出されている。

主体部（第171図） 本周溝墓の中央やや南西寄りに長軸2.3m×短軸1.0mの楕円形を呈する主体部を確認した。調査当初は、周溝墓に伴わない別の土坑かと考えたが、覆土・形態・遺物等から主体部と判断した。

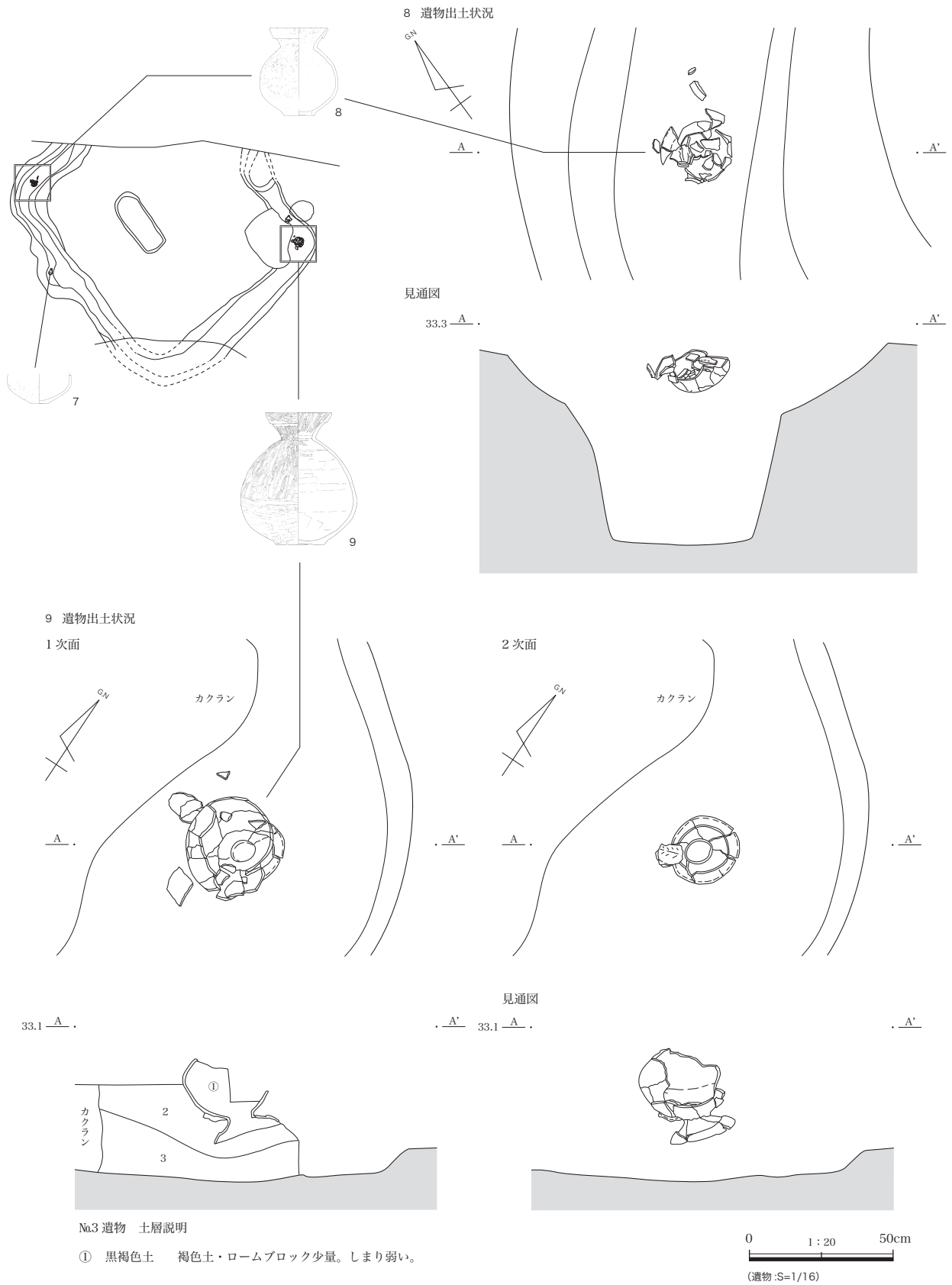
確認面から20cm程掘り込み、壁面は傾斜をつけて立ち上がる。床面はおおよそ平坦である。軸はN-37°-Wで、南西辺・北東辺とほぼ平行する。

棺等の痕跡ははっきりとは確認できなかったが、覆土の第1層にみられるしまりの強い黒褐色土は棺痕跡の可能性もある。また、長軸北西側約60cmの地点から、剣が1点出土した。床面から5cm浮いた状態で、黒褐色土中からの出土である。概ね軸に沿って切先を南東側に向けた状態であった。

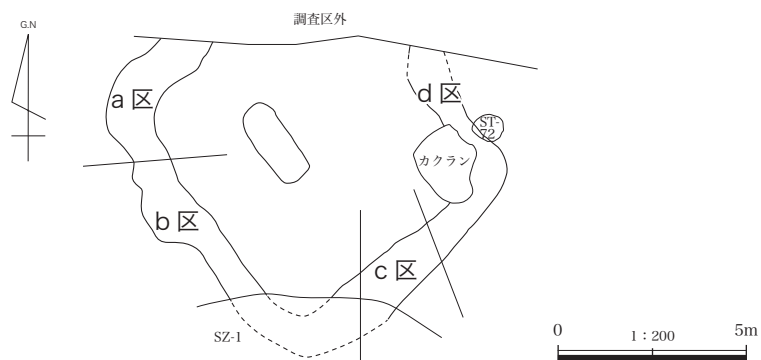
重複 D-D'セクションでSZ-1およびSZ-66の周溝覆土の観察を行ったところ、SZ-1の周溝覆土を掘り込んでいる状況が観察された。また、SZ-66北東辺の周溝掘り上げ後に、周溝底面よりST-72の平面プランを確認している。これらのことから、SZ-1、ST-72→SZ-66となる。

出土遺物 主体部から剣が1点出土した。土圧の影響か定かではないが、刃部の中央部から大きく膨らみ、歪む。茎部には目釘穴が確認でき、柄と思われる木質片が残る。

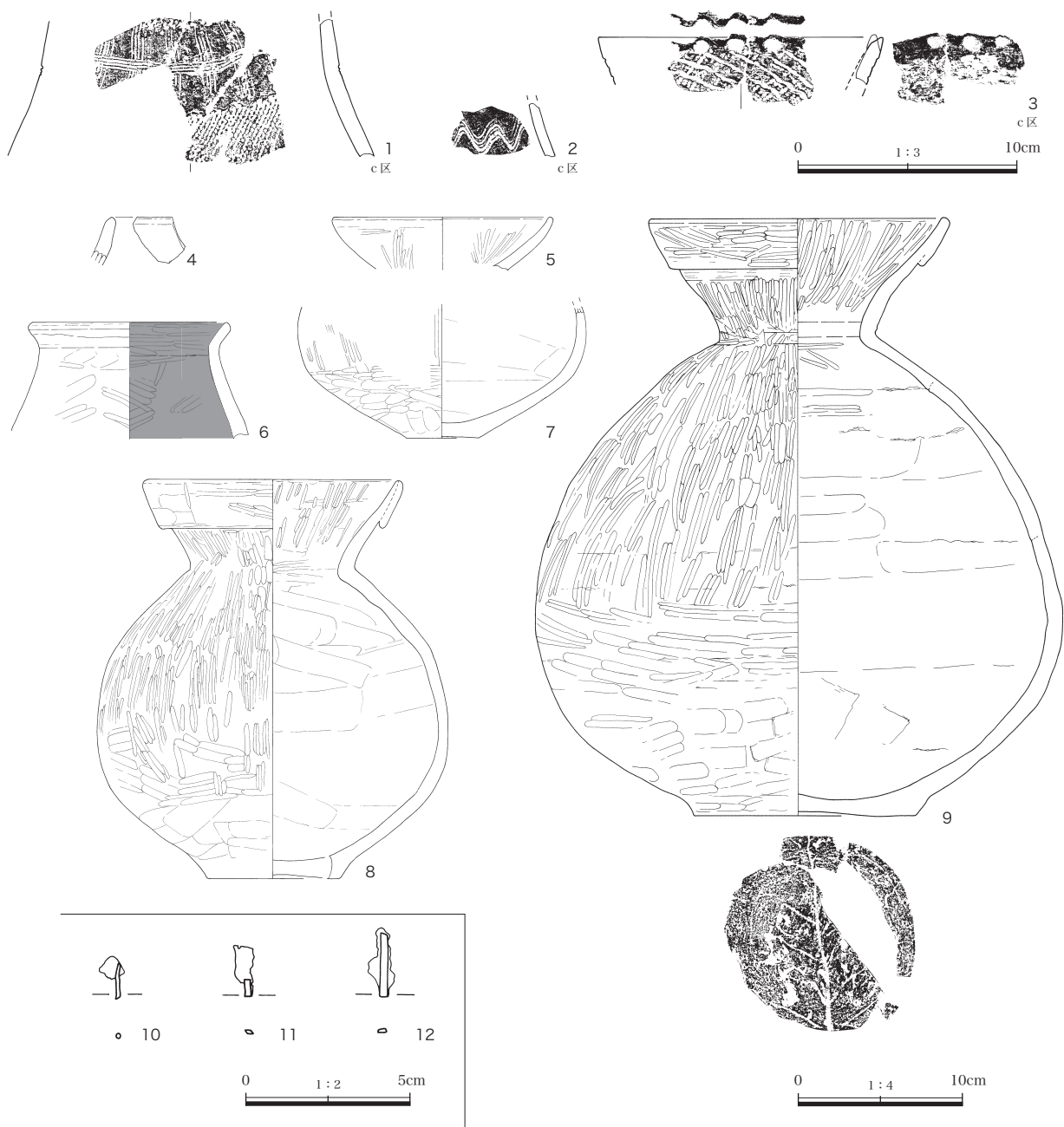
周溝からは、弥生土器片が3点・土師器が6点出土している（第170図）。第170図1～3は弥生土器である。1は頸部から肩部の破片で、計4点が接合した。無文の頸部には4本一単位の櫛歯状工具による櫛描文を描く。施紋順は、縦位に文様を描き、その後同一工具により横位の櫛描文を描いている。縄紋原体は直前段反撚3段LLRか。c区から出土し、SZ-1のT13出土遺物と接合する。2は頸部付近の破片である。無文地に横位の櫛描波状文を施す。3の口縁端部は、棒状工具で内外面を交互に押圧しており、上面からみると小さな波状を呈している。縄紋原体は附加条2種2段LR+2Rと考えられる。1～3はすべてc区からの出土である。また、1についてはSZ-1のT13出土遺物と接合をする。



第 168 図 SZ-66 遺物出土状況図



第169図 SZ-66 区分図

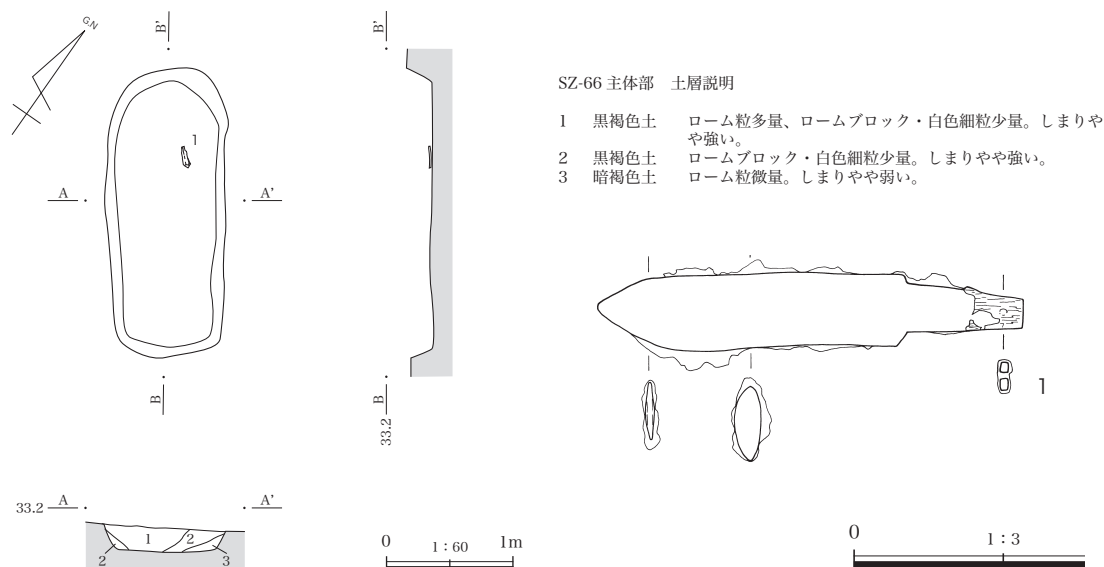


第170図 SZ-66 遺物・鍛冶関連遺物実測図

4は土師器の坏と考えられる。小片のため、詳細不明である。a区からの出土。5は土師器高坏の坏部。内外面共に丁寧なミガキが施される。a区出土で、F11c グリッド出土遺物と接合する。

6～9は土師器壺。6の壺は、内面は横方向に丁寧なヘラミガキが施され、黒色処理が行われている。また、内面にはコゲが付着している。外面は、口縁部～体部にかけての剥落が顕著であるが、ミガキが確認できる。また、一部に赤彩が残り、ススが付着する。周溝覆土からの出土。7は西辺周溝の張り出し部から出土。底部から胴部下半まで残存する。底部周辺は磨滅する箇所が見受けられるが、全体に渡って丁寧なヘラミガキを行っている。周溝張出部から出土。

8・9は二重口縁の壺である。8は西側の周溝コーナー部から出土し、底面より50cm程浮いた位置で横位の状態で出土した。上面は潰れており、やや大きめの破片となっていた。整理作業によって残存率75%程の個体に復元できた。9は東側の周溝コーナー部から、逆位の状態で、底面より15cm程浮いて出土した。焼成後に底部穿孔を行っており、底部が壺の肩部に沿って出土している。整理作業によって約70%の個体に復元できた。



第 171 図 SZ-66 主体部遺構実測図・鍛冶関連遺物実測図

第 14 表 SZ-66 遺物観察表

掲載番号	種類器種	計測値 (cm)	色調 (内・外)	胎土	焼成	残存率	技法 (内・外)	特徴・備考	出土位置
4	土師器坏	口径： 底径： 器高：(2.8)	内：10YR6/4 にぶい黄橙 外：10YR6/4 にぶい黄橙	緻密、透明粒・黒色粒・赤褐色粒微量、白色粒少量	硬質	口縁部破片	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ		a区
5	土師器高坏	口径：(13.4) 底径： 器高：(3.2)	内：5YR5/6 明赤褐 外：5YR6/6 橙	緻密、透明粒・黒色粒・白色粒・赤褐色粒少量	硬質	口縁部破片	内：ミガキ 外：口縁部ヨコナデ、頸部ミガキ		a区
6	土師器壺	口径：(11.8) 底径： 器高：(7.0)	内：10YR2/1 黒 外：10YR6/4 にぶい黄橙	緻密、透明粒・白色粒・赤褐色粒少量、黒色粒やや少量	硬質	口縁部破片	内：内面黒色処理、口縁～体部ミガキ 外：口縁部ナデ、体部ミガキ	内面にスス付着。外面は剥落が多く、荒れている。外面の一部に赤彩が残る。	S-66
7	土師器壺	口径： 底径：4.4 器高：(8.0)	内：7.5YR7/6 橙 外 5YR6/6、10YR7/4 橙 にぶい黄橙	緻密、黒色ガラス質粒・透明粒・黒色粒・白色粒・赤褐色粒やや少量	硬質	底部完存 体部 1/3	内：体部ナデ 外：体部ミガキ、底部ナデ		b区

8	土師器	口径：15.8 底径：8.2 器高：24.4	内：5YR5/4 にぶ い赤褐 外：7.5YR7/4 にぶ い橙	緻密、透明粒・黒 色粒・白色粒少量	硬質	口縁部 1/2 体部から 底部 3/4	内：口縁～頸部ハ ケ目調整後ヘラミ ガキ、体～底部ナ デ 外：口縁ヨコナデ 後ヘラミガキ、頸 部ハケ目調整後ヘ ラミガキ、体部上 位～中位ヘラミガ キ、体部下位ナデ、 底部ナデ	体部上半から肩部にか けて赤彩が施される が、遺存状態は悪い。 焼成後底部穿孔の可能 性あり。	a区
9	土師器	口径：18.4 底径：13.6 器高：36.5	内：5YR5/6 明赤褐 外：2.5YR4/6 赤褐	緻密、黒色ガラス 質粒・透明粒・黒 色粒・白色粒少量	硬質	口縁部完 存 体部から 底部一部 欠損	内：口縁～頸部ヘ ラミガキ、頸部ヨ コナデ後一部ヘラ ミガキ、内面ナデ 外：口縁部ナデ後 ヘラミガキ、頸部 ヨコナデ後ヘラミ ガキ、体部ヘラミ ガキ、底部未調整	底部に木葉痕。逆位の 状態で出土しており、 口縁付近に底部が並列 して出土している状態 から焼成後に底部穿孔 を行っている可能性が ある。	d区

第15表 SZ-66 鍛冶関連遺物観察表

掲載 番号	種類	鍛冶関連遺物 構成表No.	出土位置
10	鉄製品（針?）	52	d区
11	鉄製品（釘状不明品）	53	d区
12	鉄製品（釘状不明品）	54	d区

第16表 SZ-66 主体部鍛冶関連遺物観察表

掲載 番号	種類	鍛冶関連遺物 構成表No.	出土位置
1	鉄製品（鍛造品、含鉄、 金色）	85	主体部No.1

3. 円墳

SZ-27（横倉戸館9号墳）（第172～174図、第17表、図版二四）

位置 調査区中央部のE8d・F8a・F8b・F8d・E9c・E9d・F9グリッドに位置する。

経緯 本古墳は、近世の土塁であるSA-2の盛土除去後に全体の平面形が確認できた。しかし、地下式坑であるSK-82等との重複が多いため、地下式坑の調査と一部並行して調査を行った。平成26年度調査にも周溝の続きを調査している。

規模・形状 やや大形の地下式坑であるSK-82・87に周溝底面・壁面等を大きく壊されている。平面形は円形であり、周溝外縁での径は13.60m、墳丘内縁で10.64mである。

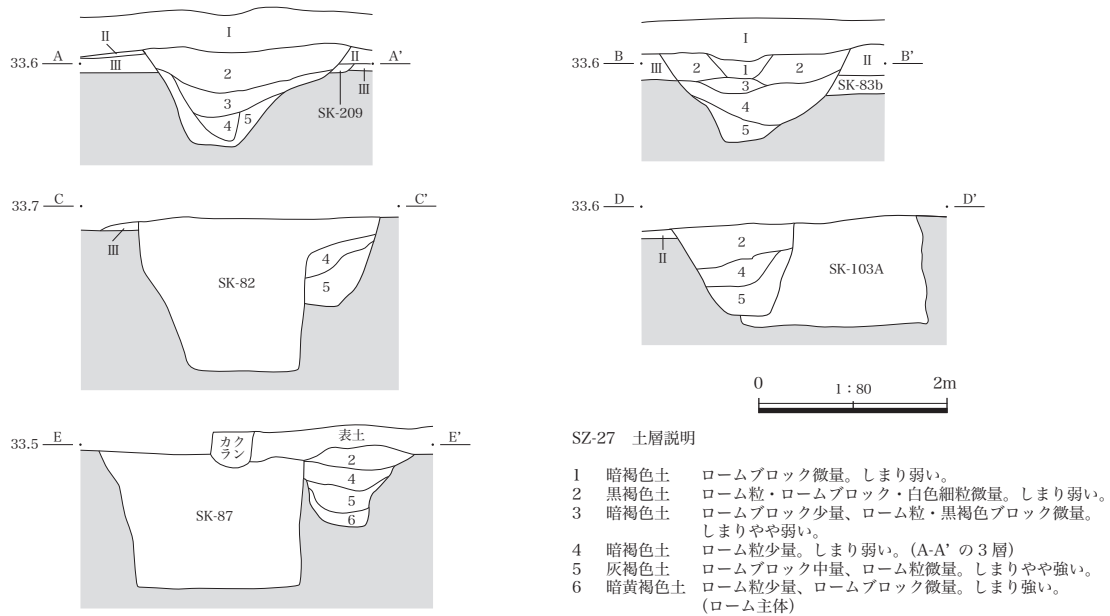
確認面での周溝幅は、西側で1.84m、東側では1.48m、北側では1.12mであった。但し、第173図A-A'セクションおよびB-B'セクションから確認される、概ね築造時の旧地表となるⅡ層上面での周溝幅は、A-A'セクションで2.20m、B-B'セクションで2.04mであった。

周溝底面の標高は西側32.811m、東側32.835mである。北側は32.525mと最も低くなる。断面は逆台形状を呈し、底面はおおよそ平坦である。覆土は5層に分層されたが、2・4・5層が広い範囲でやや厚く堆積をする。FA等のテフラは確認されていない。

第173図のA-A'セクション・B-B'セクションで示したように、周溝はⅡ層・Ⅲ層を掘り込んで作られており、底面では鹿沼軽石層がみられた。なお、ここでの土層観察でも墳丘盛土は認められていない。また、本古墳では埋葬施設の痕跡は確認できなかった。

重複 縄紋時代の土坑であるSK-103や中世の地下式坑であるSK-82・85・115等と重複する。SK-103a～c、128a・b、83b、209→SZ-27→SK-114→SK-82・87・115、SK-102・133→SA-2と複雑である。

出土遺物 本墳に伴う出土遺物は極僅かであり、周溝内覆土から小形甕の体部と思われる土師器片が1点出土した。外面はヘラケズリ調整を、内面にはナデ整形を行う。小片であるため、本古墳に伴うかは不明である。



第173図 SZ-27 遺構実測図(2)



第174図 SZ-27 遺物実測図

第17表 SZ-27 遺物観察表

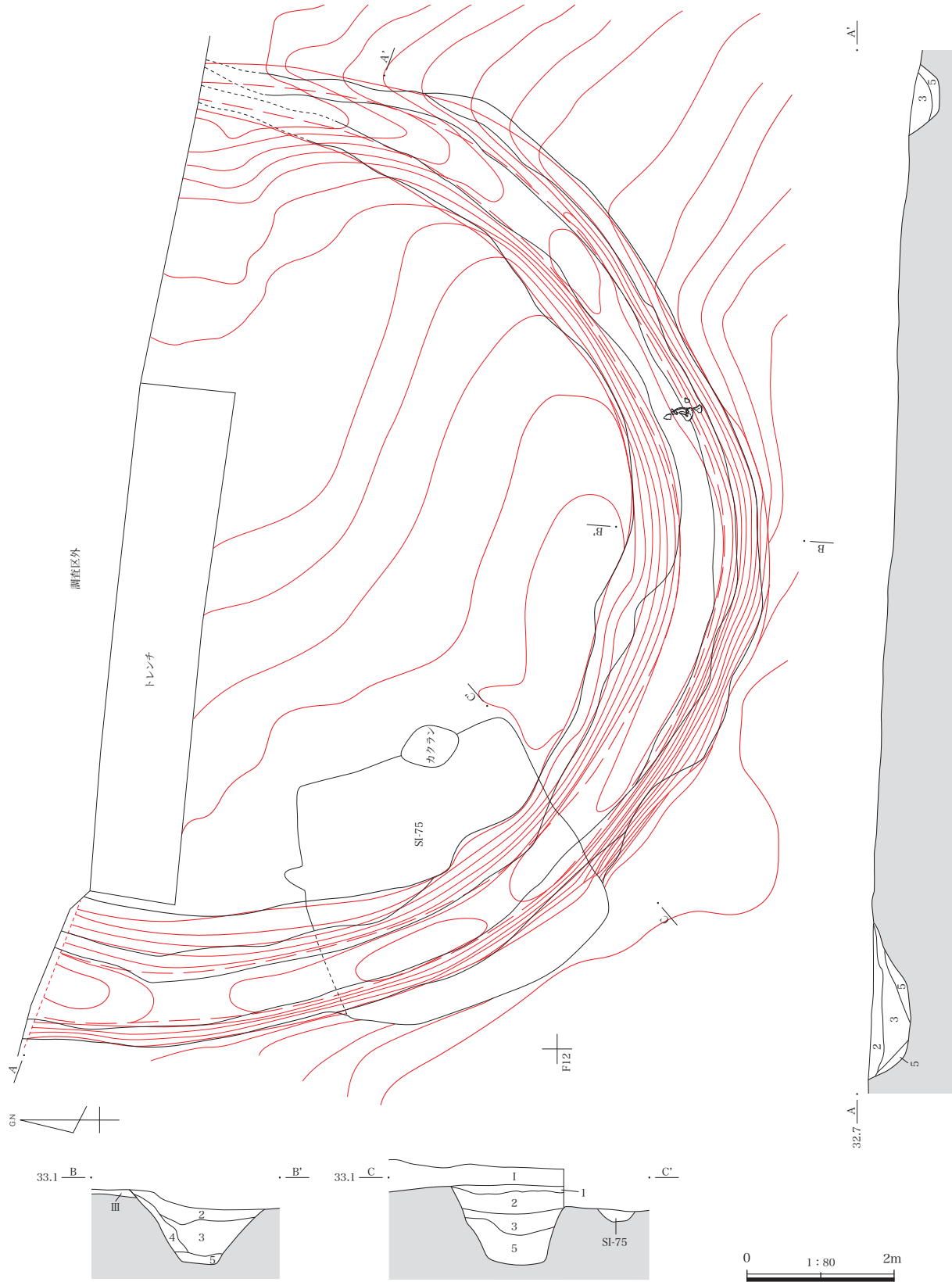
掲載番号	種類 器種	計測値 (cm)	色調 (内・外)	胎土	焼成	残存率	技法 (内・外)	特徴・備考	出土位置
1	土師器	口径： 底径： 器高：(2.2)	内：10YR5/4 にぶ い黄褐 外：10YR6/4 にぶ い黄橙	緻密、黒色粒・透 明粒・赤褐色粒少 量、白色粒やや多 量	硬質	破片	内：ナデ 外：ケズリ	高坏脚？小形甕？	S-27

SZ-67 (横倉戸館 10 号墳) (第 175 ~ 179 図、第 18・19 表、図版二五・六三・六九)

位置 調査区東寄りの E12・F12a・F12b・E13c・F13a グリッド、SZ-1 の北東 0.27m、横倉戸館 1 号墳の北西 0.73m の緩い斜面に位置する。現状では本古墳群の中で最北端に位置する古墳となる。

経緯 SZ-67 の位置する区域は、基本層序Ⅲ層～ローム漸位層近くまで表土除去を行い、その後の精査でプランが確認された。周溝以外は確認できず、遺物も僅かではあるが、古墳と判断した。周溝掘り下げの際に、調査区を a～f 区の 6 区に設定し掘り下げを行った(第 177 図)。b 区では古代の土師器や鉄滓の出土が目立った。当初は古代の竪穴建物跡 SI-75 を確認できず、周溝を先に掘り下げているが、後に精査を行い、古代の竪穴建物跡 SI-75 との重複が判明した。

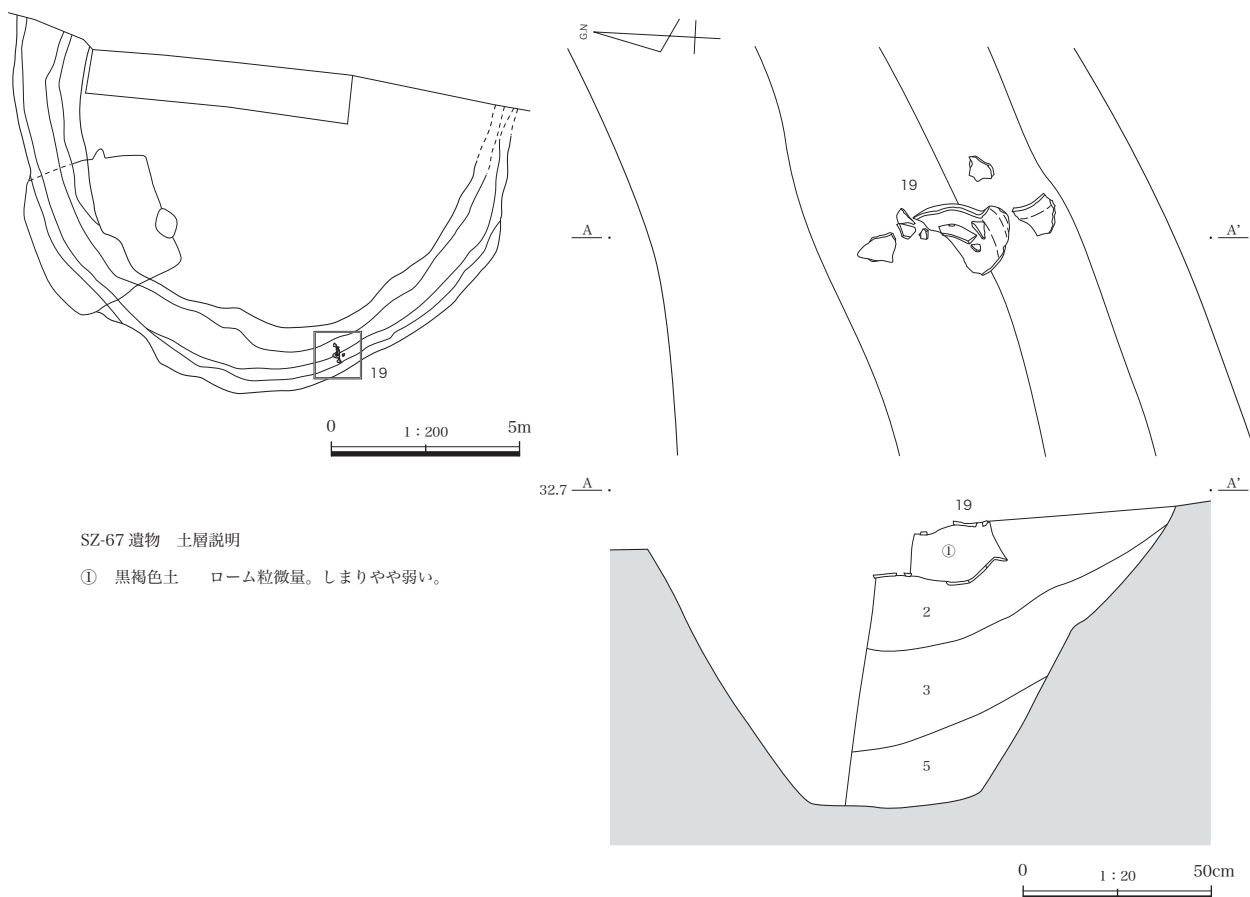
規模・形状 北側の一部が調査区外となるため明確ではないが、正円を呈しておらず、やや縦長な楕円形の円墳となる可能性がある。周溝外縁での東西径は 13.76m、周溝内縁では 11.68m で、南北は周溝外縁での推



SZ-67 土層説明

- | | | | |
|---------|---------------------------|--------|---------------------------|
| ① 黒褐色土 | ローム粒微量。しまりやや弱い。 | 3 黒褐色土 | 白色粒少量、ローム粒微量。しまりやや弱い。 |
| 1 灰褐色土 | ローム粒やや多量、白色粒微量。しまりやや弱い。 | | (ローム粒が斑状に入る) |
| 2 暗灰褐色土 | ローム粒少量、ロームブロック微量。しまりやや弱い。 | 4 暗褐色土 | ローム粒・ロームブロック多量。 |
| | | 5 暗褐色土 | ローム粒・ロームブロックやや多量。しまりやや強い。 |

第 175 図 SZ-67 遺構実測図



第 176 図 SZ-67 遺物出土状況図

定で 14.8m となる。

確認面での周溝幅は、西側で 1.92m、南側で 2.16m、東側では 0.84m であった。周溝底面の標高は西側で 31.977m、南側で 31.950m、東側では 31.515m であり、B-B' セクション付近では 31.900m 前後で、この周辺から東へ向かうにつれ深くなる。東側の周溝幅が極端に狭いのは、ローム漸位層での確認となっているため、本来は西面および南面と同じ規模であったと思われる。断面は逆台形状を呈し、底面はおおよそ平坦。周溝壁面は、東西側は緩やかに立ち上がり、南側は傾斜をつけて立ち上がるといった差異が見受けられる。

覆土は、2・3・5 層がすべての土層観察面で確認できる。

土層から観察すると、Ⅲ層を掘り込むことが確認されているが、おそらくⅡ層も掘り込んでいると思われる。特に、東側ではより上位での掘り込みであった可能性があろう。

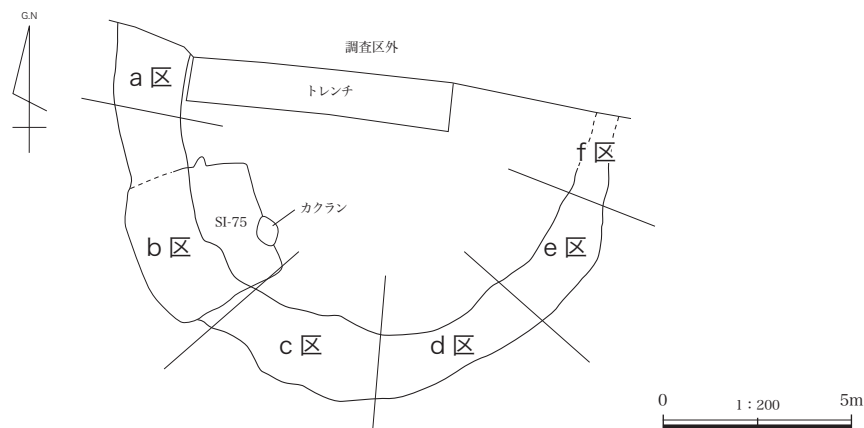
盛土および埋葬施設は確認できなかった。

遺物出土状況 南側周溝からは、土師器の甕が周溝底面から 60 cm 程浮いて横たわる状態で出土した。上面は殆ど残存しておらず、下面も口縁部～体部の上位までしか残っていなかった。整理段階で復元したところ、全体の約 40% が復元できた。土器の内部には周溝覆土とは異なる、ややしまりのない黒褐色土が入っていた。

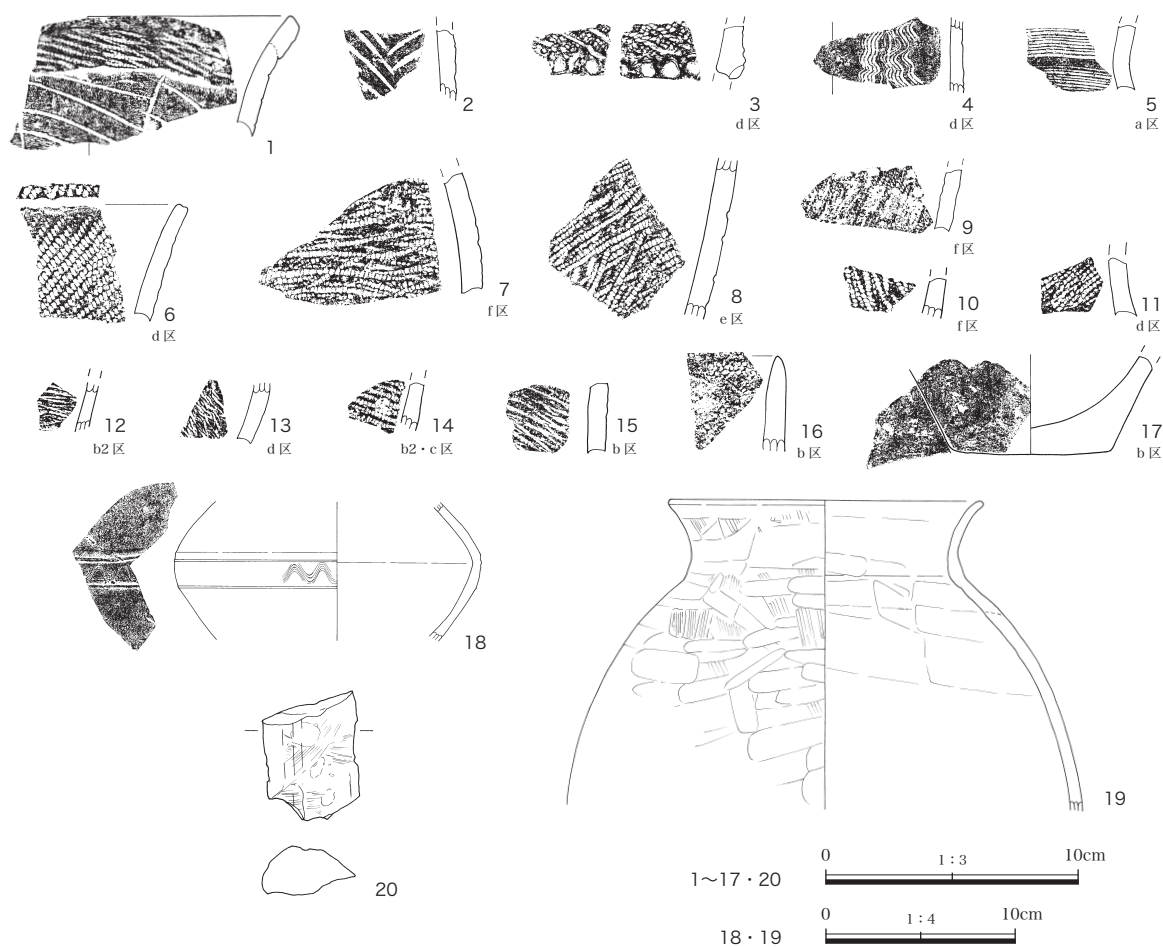
重複 周溝南西部で古代の竪穴建物である SI-75 と切り合っており、SZ-67 → SI-75 となる。

出土遺物 周溝覆土から、弥生土器片 18 点、土師器 1 点、須恵器 1 点が出土している。この他、縄紋土器が多数出土しているが、弥生土器も含め本古墳に伴うものではない。

第 178 図 1～17 は弥生土器である。1 は複合口縁の土器。口辺部には原体不明の軸縄に 1 段 L の縄を絡めた附加条縄紋を施す。頸部には一本描きの鋭い斜位の沈線がみられる。出土地区不明。2 は頸部破片か。



第177図 SZ-67区分図



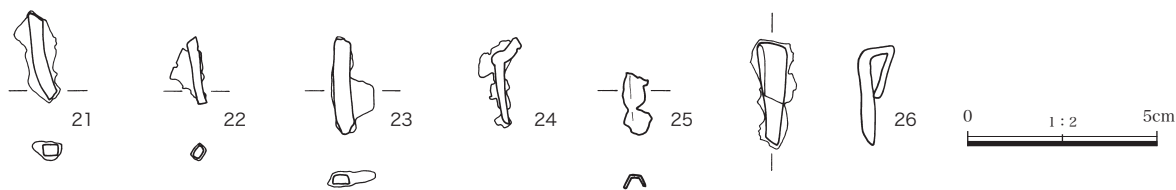
第178図 SZ-67遺物・鍛冶関連遺物実測図

鋸歯状あるいは稜杉状を呈する鋭い沈線文がみられる。出土地区不明。3は同一個体と思われる口辺部の破片2片である。施紋原体は附加条2種2段LR+2Rの縄を使用し、口辺部下端には棒状工具による連続刺突が巡る。d区出土。4は頸部破片と考えられる。無文地に7本一組の櫛描状工具を用いた縦位の波状文を施す。d区出土。5も頸部破片か。9本一組の工具による横位の櫛描文がみられる。a区出土。6は外反気味に立ち上がる口縁部破片である。口縁端部および口辺部には2段LRの縄を横位に施す。d区出土。7・8の施紋原体は附加条1種2段LR+Rと考えられ、同一個体の可能性が高い。7はf区、8はe区から出土。9～11は、

いずれの施紋原体も直前段反撚3段LLRと考えられる。9の原体は非常に細い。11は頸部の破片か。9・10はf区、11はd区からの出土。12は1段Lを絡めた撚糸紋あるいは直前段反撚2段LLの縄を施している。b区出土。13は細めの原体を用いた直前段反撚2段RRを横方向に施紋している。d区出土。14の原体は不明瞭だが、附加条1種2段RL+2Lの可能性もある。15は棒状工具または原体不明の軸縄に0段rの縄を絡めた撚糸紋と考える。16は断面が先細り状の口縁部破片。摩滅が顕著で不明瞭だが、2段LRまたはオオバコ文の可能性もある。17は無文の底部破片である。土師器の可能性もある。14～17はすべてb区からの出土である。

18は須恵器の長頸壺で、肩部～胴部の破片である。肩部には一重の凸線で区画された中に波状文が施文される。E12a・bグリッドからの出土であり、本古墳に帰属する可能性が高い。また、SZ-66出土遺物とも接合している。19は土師器の甕で、口縁部～胴部にかけて残存する。外面には、口縁部～体部にかけてハケ目状工具による整形が行われた後、胴部はケズリ調整を、肩部～口縁部にかけてはヨコナデ整形を施す。内面は全面にナデ整形がみられる。また、体部外面の一部に赤彩がみられる。20は砥石片で、石材はスコリア（輝石）。古代に帰属する可能性が高い。

周溝内からは、鉄製品が出土している。第179図21～25は釘状の鉄製品で、26は棒状を呈する鉄製品である。残念ながらすべて用途不明である。21・23～26がf区で出土し、22のみb区からの出土である。本墳のb区には古代の鍛冶に関連する竪穴建物跡が重複しており、これらも古代に帰属する可能性が高いが、判断が難しいためここに掲載する。



第179図 SZ-67 鍛冶関連遺物実測図

第18表 SZ-67 遺物観察表

掲載番号	種類 器種	計測値 (cm)	色調 (内・外)	胎土	焼成	残存率	技法 (内・外)	特徴・備考	出土位置
18	須恵器長頸壺	口径： 底径： 器高：(6.9)	内：5YR5/1 灰 外：5YR5/1 灰	緻密、白色粒少量	硬質	体部破片	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	体部上面に自然釉付着。体部外面中位には、2条の凸線の区画内に7条の波状文を施す。SZ-66出土品と接合。	E12a・b SZ-66
19	土師器甕	口径：(16.6) 底径： 器高：(16.3)	内：7.5YR5/4 にぶい褐 外：7.5YR5/4 にぶい褐	緻密、白色粒・透明粒少量	硬質	口縁部1/3 頸部から胴部上4/5周	内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部ハケ調整後ケズリ・ナデ	体部外面の一部にスス付着。	d区(no.1)

第19表 SZ-67 鍛冶関連遺物観察表

掲載番号	種類	鍛冶関連遺物構成表No.	出土位置
20	砥石	73	f区
21	鉄製品 (釘状不明品)	67	f区
22	鉄製品 (釘状不明品)	68	b2区
23	鉄製品 (釘状不明品)	69	f区

掲載番号	種類	鍛冶関連遺物構成表No.	出土位置
24	鉄製品 (釘状不明品)	70	f区
25	鉄製品 (釘状不明品)	71	f区
26	鉄製品 (鉄片状不明品)	72	f区

4. 土器棺墓

ST-72 (第 180 ~ 182 図、第 20 表、図版二六・二七・六三・六九)

位置 本遺構は E11b に位置する。

経緯 本遺構は、方形周溝墓である SZ-66 の周溝掘り下げ後、周溝北東部の底面より検出された。最初に、蓋部であった壺形の弥生土器 (第 182 図 1) が検出され、平面プラン確認のため周辺の精査を行い、土坑状の掘り込みを確認した。その後、土坑部分の掘り下げを行い、土師器の壺 (第 182 図 4) と合わせ口になることが確認され、土器棺墓であることが判明した。

規模・形状 土坑状の掘り込みは確認面で南北 0.74m・東西 0.82m の不整形円で、底面付近になると隅丸方形気味になる。深さは 0.33m 程である。底面には凹凸があり、北・西・東壁は緩やかに、南壁はやや垂直気味に立ち上がる。

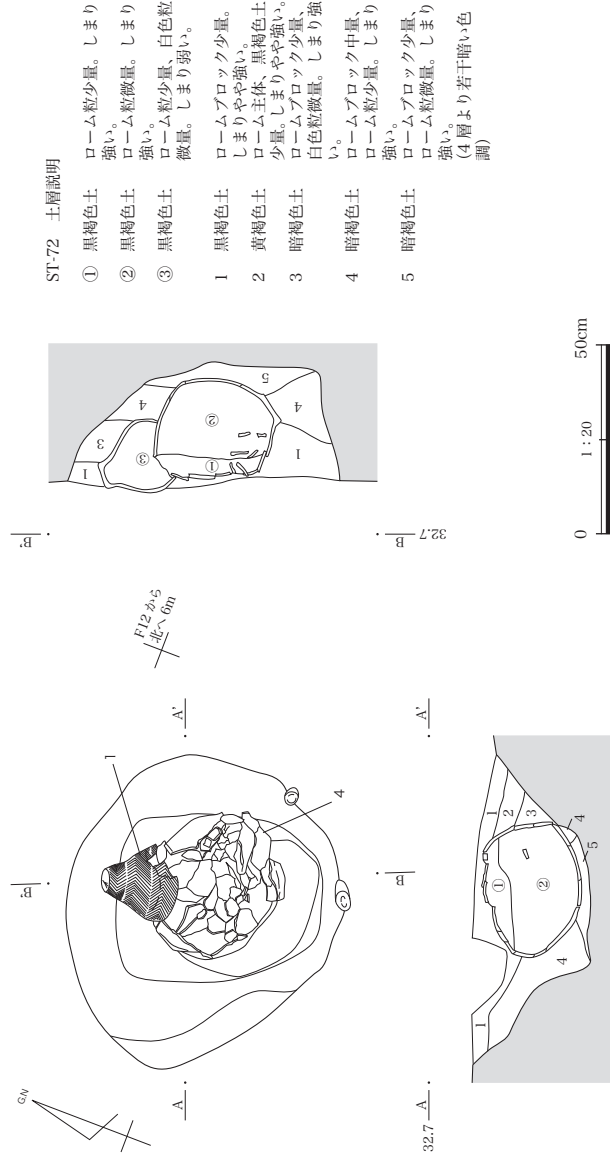
重複 SZ-66 によって壊される。

覆土 ローム主体である第 2 層を除いて、ロームブロックを少量～中量含む黒褐色土・暗褐色土で、すべて人為堆積と考えられる。

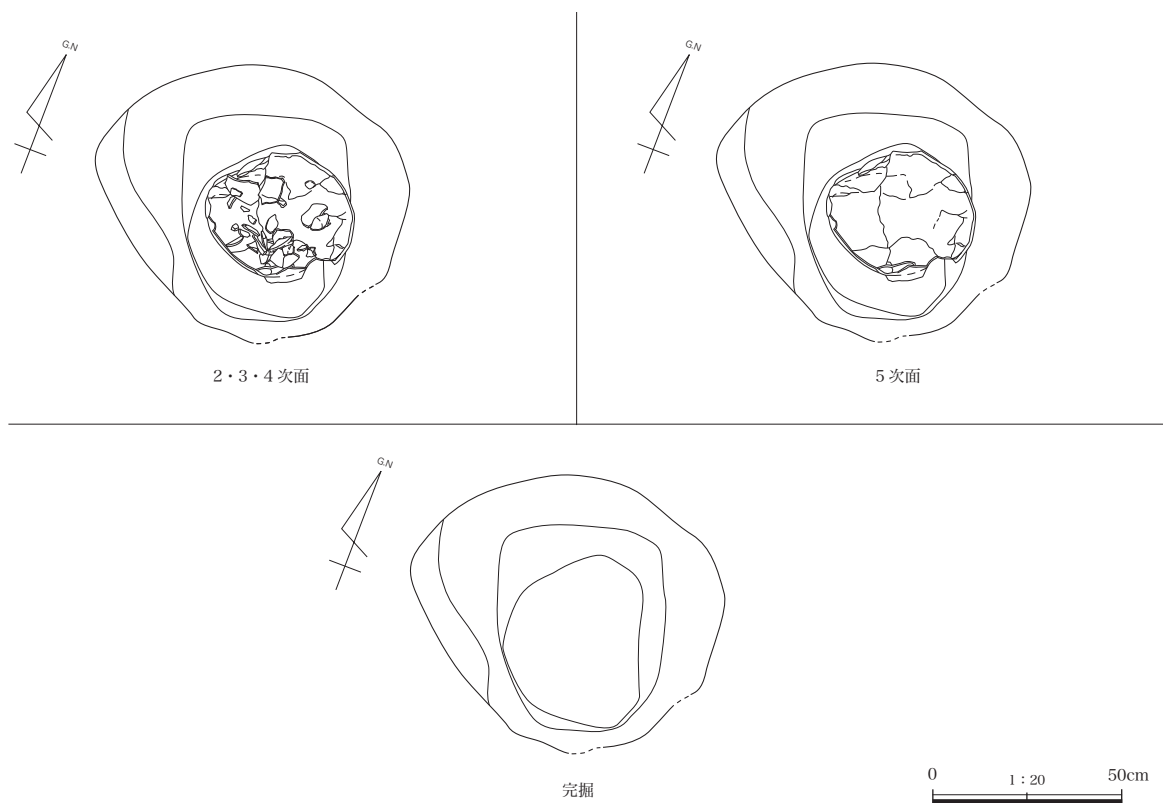
理化学分析 B-B' セクションにおいて、土器の覆土②層および③層を対象としてリン・カルシウム分析を行った。採取位置は、②層は縦軸で 3 分割し、南から A1・A2・A3 と設定し、さらに上層を A1 上・下層を A1 下というように細分した。③層は、覆土を 4 分割した。南側を B1 上・B1 下、北側を B2 上・B2 下と設定した。検査結果は、土師器壺の A1 上・A1 下・A2 上、すなわち土師器壺の底面付近から 1% を超えるリンが検出され、底面付近に遺骸があった可能性が判明した。詳しい分析内容は第 IV 章を参照して頂きたい。

出土遺物 土坑中心部から北北西側へ向かって、横位から斜位に近い掘え方で出土している。本遺跡での例は、弥生土器壺を「蓋」、土師器壺を「身」として使用している。土師器壺の上位は潰れて破片化していた。

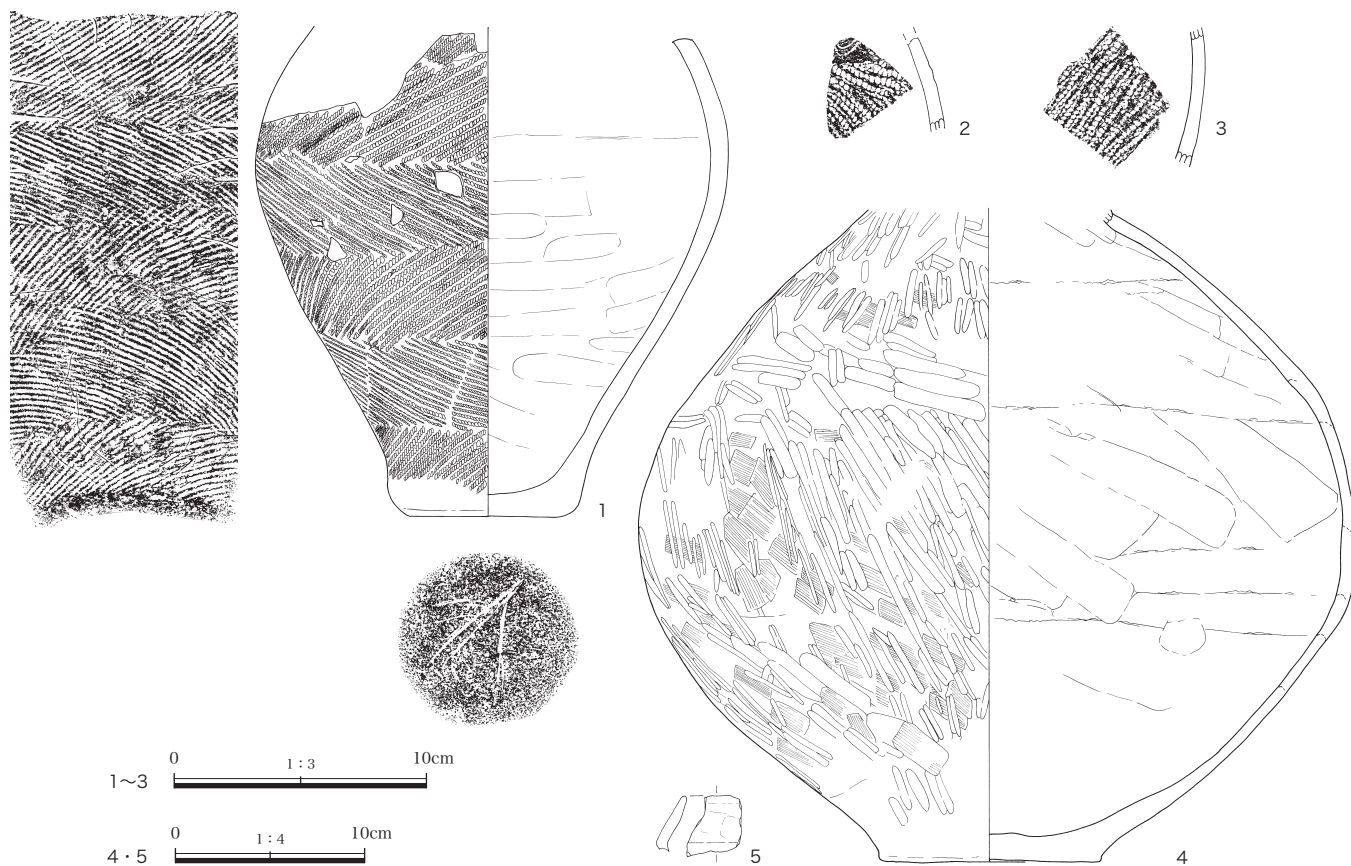
1 は胴上部から上が欠損する壺型土器である。頸部は出土しておらず、全体は不明である。外面と内面上



第 180 図 ST-72 遺構実測図



第181図 ST-72 遺物出土状況図



第182図 ST-72 遺物実測図

位に径3～10mmの斑状の剥落が認められる。残存する法量は、器高194mm、胴部最大径187mm、底径60mmである。

調整・施文は、外面に上から下にかけて縄紋が施されている。内面は、底部から胴部中段にかけてハケ状工具でのヨコナデ、胴部上段には縦方向のヘラ状工具によるケズリもしくはカキトリ状の調整痕が認められる。縄紋は、附加条1種の縄紋が胴部上部からみて2段LR+2R→2段RL+2L→2段LR+2R→2段RL+2L→2段LR+2Rと、5回に分けて施文されている。基本的には上から下へ施文しているが、一部下から上へ施文されていると思われる箇所が見受けられる。底部には木葉痕が認められ、底部周縁が磨滅している。胴部破損面に一部磨滅している箇所があり、使用の際に破損面を調整した可能性がある。

胎土は1～3mm程の白色粒を多量に、石英粒をやや多く含む。色調は外面がにぶい黄褐色で、内面はにぶい黄褐色～灰黄褐色である。比較的焼成の良い個体である。

2は破片上端部に櫛描波状文の一部が残ることから、頸部から肩部の破片と考えられる。原体は直前段反撚3段RRLであろうか。3は胴部破片である。原体は直前段反撚3段RRLか。2と同一個体と考えられる。

4は頸部から上が欠損する土師器壺である。頸部より上位は出土しておらず、全形は不明である。外面と内面の上位に径3～10mmの斑状の剥落が認められる。外面にはハケ状工具によるナデの後、縦方向にヘラミガキが施されている。内面はナデを施すが、荒れが目立つ。

5は土師器壺の口縁部で、1の壺型土器の内部より出土したが、1・4の土器とは別個体である。

第20表 ST-72 遺物観察表

掲載番号	種類器種	計測値 (cm)	色調 (内・外)	胎土	焼成	残存率	技法 (内・外)	特徴・備考	出土位置
4	土師器壺	口径：(13.0) 底径：11.8 器高：(34.6)	内：2.5Y7/2 灰黄 外：10YR7/2 にぶ い黄橙	緻密、黒色粒・白色粒・透明粒やや多量	硬質	体部4/5 底部ほぼ 完存 口縁から 頸部欠損	内：体～底部ナデ 外：体部ハケ目調整後ヘラミガキ、 体部下端ナデ、底部未調整	口縁から頸部欠損。体部外面の一部に赤彩。底部に木葉痕。全体的にやや歪んだ形態をする。	
5	土師器壺	口径： 底径： 器高：(3.0)	内：2.5Y4/2 暗灰 黄 外：2.5Y6/4 にぶ い黄	緻密、黒色粒・白色粒・透明粒微量	硬質	口縁部破片	内：口縁～頸部ナデ 外：口縁～頸部ナデ		蓋部の弥生土器内より出土

5. 溝

SD-117 (第183図、図版二七)

位置 調査区中央部のF9b・E10c・E10dグリッドに位置する。

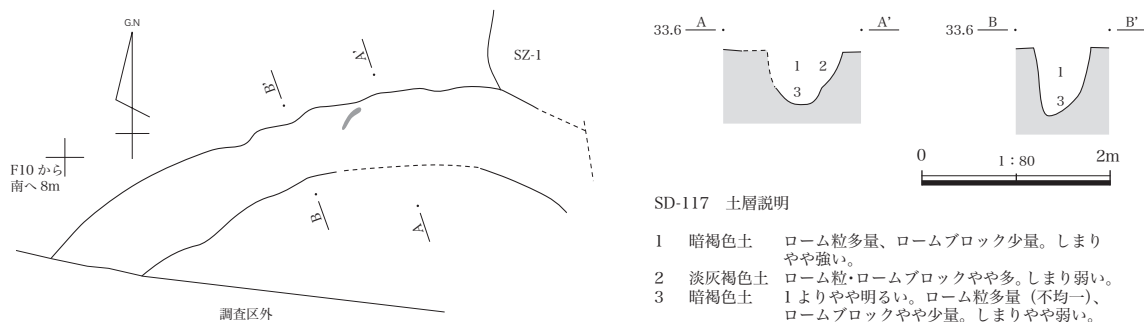
経緯 SA-2土壘盛土除去後およびSZ-1の調査中に、この周辺のプラン確認により、確認された。

規模・形状 東西方向へ弧を描くようにめぐる溝跡で、幅60～80cm、深さ60～70cm程である。比較的掘り込みは明瞭で、壁は垂直に近い傾斜をし、断面逆台形状に近い形態である。溝の底面の標高は、調査区と接する地点で32.766m、SZ-1と接する地点で32.736m、両者の中間地点で32.710mであり、SZ-1の周溝より浅く掘り込まれている。

重複 直接的な切り合いの土層観察はなし得ていないが、先にSZ-1覆土を確認できたことから、SD-117がSZ-1より古い可能性が考えられる。

覆土 覆土中にローム粒を多く含む等の特徴はあるが、SZ-1の覆土とさほど大きな差異は認められない。

出土遺物 本遺構に伴う遺物は出土していない。古墳周溝の可能性もあるが、遺物が無いため不明である。



第183図 SD-117 遺構実測図

6. 性格不明遺構

SX-119a (第184～186図、第21表、図版二七・六九)

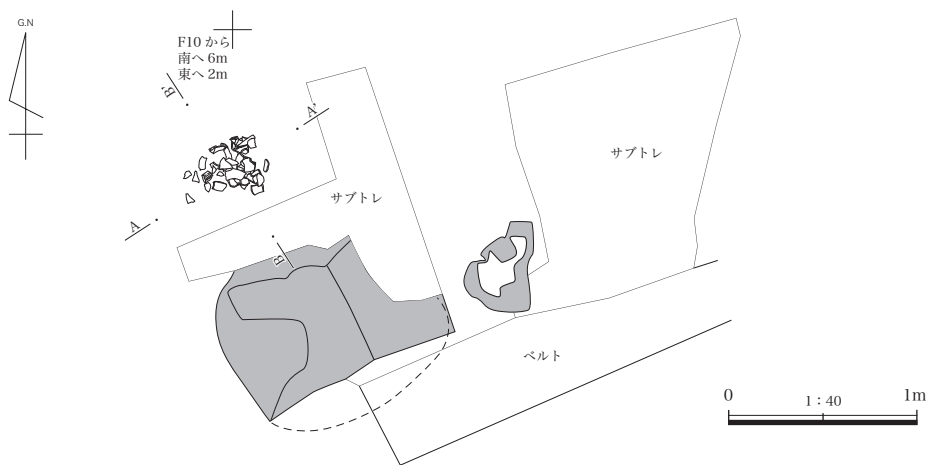
位置 調査区中央下寄りのF10cグリッドに位置する。

規模・形状 焼土と土器の関係性は不明であるが、便宜的に同じSX-119aとして扱う。焼土の範囲は、東焼土は長軸0.49m×短軸0.33m、西焼土は長軸1.12m×短軸0.72mの範囲にみられる。掘り込み等は確認できなかった。

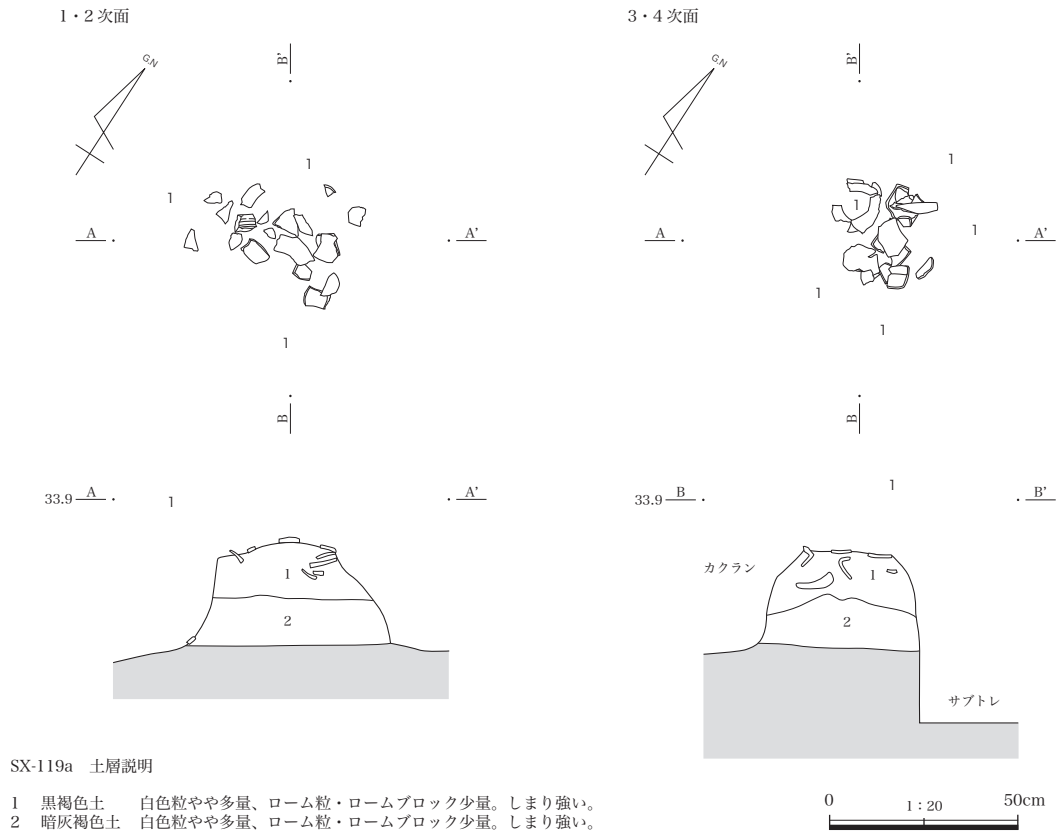
西焼土の北側約50cmの場所から土師器壺の大形破片が集中して出土した。殆どが1層の黒褐色土層内から出土している。整理での復元で、約60%遺存する個体に復元できた。

土層 2層に分層することが出来た。1層は黒褐色土で土層中に焼土ブロックが多量に混入する。2層は暗灰褐色土。両者ともローム粒・ロームブロックを少量含み、白色粒がやや多量に含まれていること等、標準土層のⅡ層およびⅢ層とは様相が異なる。掘り込み等は確認できなかったが、遺構覆土の可能性はある。また、2層の下はローム漸位層となるため、標準土層のⅡ層を掘り込む可能性がある。

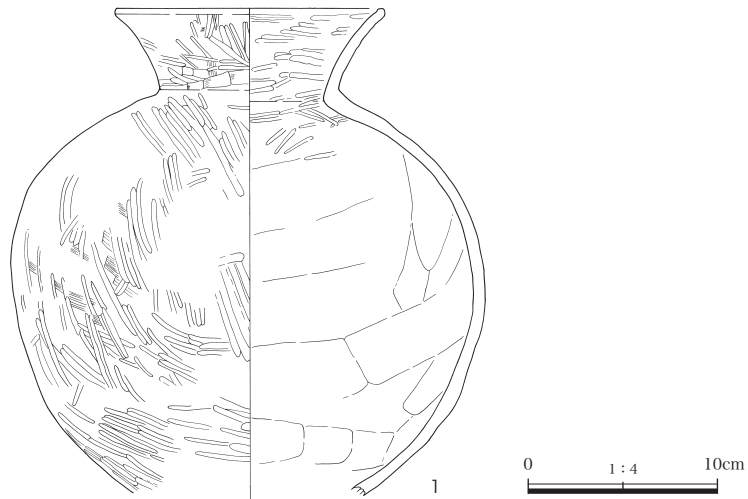
出土遺物 焼土からの出土遺物は認められなかった。1の焼土北西側で出土した土師器壺は、外面にハケ目状工具を用いた調整が行われた後にナデ整形を行い、ヘラ状工具でのミガキを行う。内面はナデ整形を行う。口縁部から胴部の破片が多いが、底部の破片は一片も出土しなかった。



第184図 SX-119a 遺構実測図



第 185 図 SX-119a 遺物出土状況図



第 186 図 SX-119a 遺物実測図

第 21 表 SX-119a 遺物観察表

掲載番号	種類器種	計測値 (cm)	色調 (内・外)	胎土	焼成	残存率	技法 (内・外)	特徴・備考	出土位置
1	土師器壺	口径：14.2 底径： 器高：(25.8)	内：5YR4/4 にぶい赤褐 外：5YR4/6 赤褐	緻密、黒色粒・白色粒・白色透明粒やや少量	硬質	口縁から胴部 2/3	内：口縁～頸部ナデ後ヘラミガキ、体部ナデ 外：口縁～頸部ハケ目調整後ナデ・ミガキ、体部ハケ目調整後ミガキ	SA-2 の f 区、g 区、h 区および盛土内出土品と接合。	

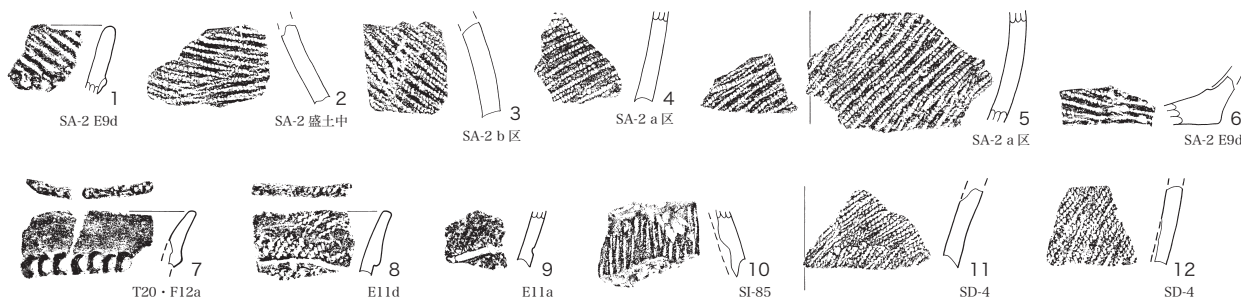
7. 弥生・古墳時代遺構外遺物

今回の調査では、弥生時代の遺構は確認できなかったが、調査区内からは土器片が比較的多くみられた。古墳の周溝覆土や盛土内から出土したものは、古墳の項目に含めて掲載している。ここでは、古墳時代の遺構外および調査区内から出土した遺物について提示する(第187図)。なお、いずれの遺物も、集中的な出土等、注意すべき出土状況は認められなかった。遺構外出土遺物については、縄紋時代での調査区の区分であるゾーン①～ゾーン③を踏襲している。弥生土器について、ゾーン①からの出土は認められず、ゾーン②とゾーン③から出土している。

ゾーン②では、SA-2から6点、それ以外から6点の12点を第187図に掲載した。第187図1は複合口縁の土器。摩滅のため不明瞭だが、原体は附加条1種2段RL+2Lか。口辺下端部に原体末端の刺突がみられる。2は肩部の破片か。地文は附加条1種2段RL+2L、および2段LR+2Rを横方向に施す。3はやや丸みを帯びた胴部破片である。附加条1種2段RL+2Lを横方向に施す。4は附加条1種2段LR+2Rを横方向に施す。外面に炭化物が付着する。5は丸みを帯びた胴部破片。地文は附加条1種2段LR+2Rを横方向に施す。外面に炭化物が付着する。6は底部破片である。底部外面には木葉痕が認められる。地文は附加条1種2段RL+2Lを横方向に施す。これらはSA-2盛土内から出土した。

7は外反する口縁部破片。口縁端部は2段LRを回転施文する。無文の口辺下端には棒状工具による密接な

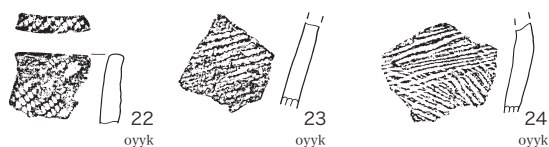
ゾーン②



ゾーン③



区内一括



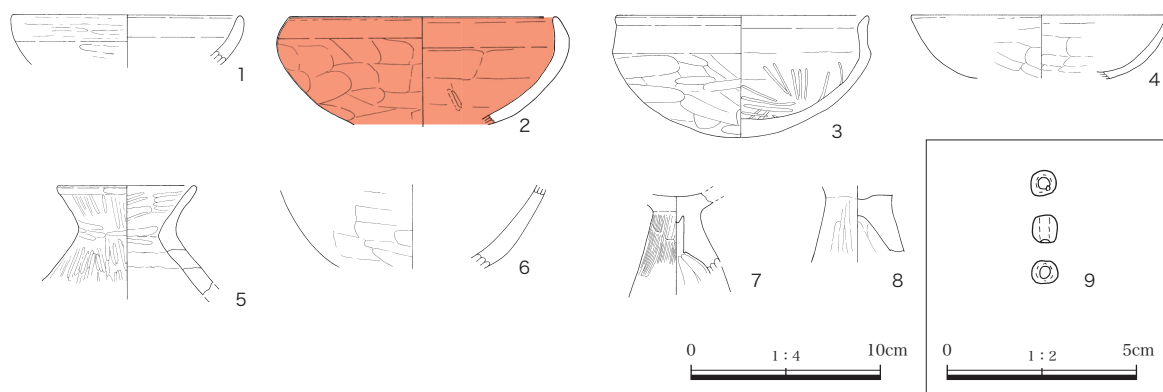
第187図 弥生・古墳時代遺構外遺物実測図(1)

連続刺突を施す。8は外反する口縁部破片。口縁端部および口辺部には附加条1種(2段LR+R2か?)の縄を横方向に施す。9は波状の太めの沈線文を施す。器面は摩滅が顕著で縄紋原体は不明である。10は頸部から口縁部の破片。附加条1種2段LR+2Rを斜め方向に施紋したもののか。11は頸部付近の破片である。施紋原体は直前段反撚3段LLRか。12は胴部の破片。地紋は直前段反撚3段LLRを横方向に施文している。

ゾーン③からは8点掲載する。13は頸部から肩部の破片。無文地に鋭い斜位の沈線を施しており、SZ-67-1(第178図)の土器と同一個体と考えられる。14は頸部から肩部の破片か。8本一組の櫛歯状工具による縦位の波状文を施す。SZ-67-4(第178図)と同一個体の可能性がある。15は体部破片。原体は2段LRまたはLLRの縄紋を斜方向へ施す。16は口縁部付近まで縄紋を施す。施紋原体は2段LLか。17~19は胴部破片である。17は摩滅が顕著で不明瞭だが、原体は附加条2種2段RL+2Rか。18の施紋原体は軸縄あるいは棒状工具に1段Rの縄を絡めた撚糸紋と考えられる。19は軸縄あるいは棒状工具に1段R(あるいは0段R)の縄を絡めた撚糸紋か。20は器面の摩滅・剥落が顕著である。直前段反撚り3段RRLを横位施紋したものと考えられる。21は体部の破片で、2段LRと思われる原体を横方向に施紋する。

また、出土地点不明の破片として3点を掲載する。22は縄紋のみが施される口縁部破片。口縁端部および口辺部には2段LRを横位に施している。23・24はいずれも胴部破片。23の原体は2段LRを横位施文したものである。24は、軸縄あるいは棒状工具に1段Lの縄を絡めた撚糸紋と考えられる。

古墳時代以外の遺構から出土した遺物やグリッドでの出土遺物のうち、古墳時代と判断したものを図示する(第188図)。1~4は土師器坏。1は、内外面に横方向のナデ整形を施したのちに、ヘラミガキを行う。内外面共に黒色で、漆を塗布している可能性がある。地下式坑であるSK-82から出土。2は、底部はヘラケズリ調整を行い、口縁部から内面にかけてはナデ整形を行う。内外面の全面に赤彩を施す。地下式坑であるSK-87から大部分が出土しており、小片ではあるが、円墳であるSZ-67出土遺物と接合するため、SZ-67に帰属する可能性がある。3は、底部のヘラケズリ調整を行った後にナデ整形、一部ヘラミガキを行う。内面はナデ整形後にヘラミガキを5方向より放射状になるように行う。中世の土坑であるSK-96bより出土。4は内外面の全面にナデ整形を行う。SA-2の盛土内より出土。5は小形壺で、口縁~肩部にかけて残存する。外面は比較的丁寧なヘラミガキを行う。内面はナデ整形を行うが、頸部との接合面に粘土紐の輪積み痕が残る。口縁部から頸部にかけては細かいヘラミガキを行う。E12グリッドからの出土。6は甕の底部近くで、外面は全面にヘラケズリ調整を行う。SA-2の盛土内より出土。7・8は高坏の脚部。7は内面中心部に棒状工具



第188図 弥生・古墳時代遺構外遺物実測図(2)

での刺突痕があり、しぼり目がある。脚部外面には縦方向にハケ状工具によるハケ目調整が行われている。SA-2の盛土内より出土。8は磨滅が著しく、詳細が不明であるが、外面は縦方向のケズリ調整を行っている可能性がある。F7a・cグリッドからの出土である。9はガラス製の小玉である。近世の堀跡であるSD-3の北側覆土中より出土しており、どの古墳時代の遺構に伴うかは不明である。

第22表 弥生・古墳時代遺構外遺物観察表

掲載番号	種類 器種	計測値 (cm)	色調 (内・外)	胎土	焼成	残存率	技法 (内・外)	特徴・備考	出土位置
1	土師器 器環	口径：(2.2) 底径： 器高：(2.5)	内：10YR5/2 灰黄褐 外：10YR5/2 灰黄褐	やや緻密、白色粒少量	硬質	口縁部破片	内：ナデ後ミガキ 外：ナデ	鬼高平行期。内外面漆塗カ。	SK-82
2	土師器 器環	口径：(14.0) 底径： 器高：(5.7)	内：2.5YR4/4 にぶい赤褐 外：2.5YR4/4 にぶい赤褐	やや緻密、黒色粒少量、白色粒・透明粒やや多量	硬質	口縁から体部上半2/3弱	内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外：口縁部ナデ、体部～底部ケズリ	内外面赤彩。	SK-87 および SZ-67
3	土師器 器環	口径：13.4 底径： 器高：6.5	内：7.5YR6/4 にぶい橙 外：10YR6/4 にぶい黄橙	やや緻密、黒色粒少量、白色粒・透明粒やや多量	硬質	口縁部2/3 体部一部欠損 底部完存	内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ後ミガキ 外：口縁部ヨコナデ、体部～底部ケズリ一部ミガキ		SK-96b
4	土師器 器環	口径：(18.4) 底径： 器高：(4.3)	内：5YR5/6 明赤褐 外：7.5YR6/6 橙	緻密、透明粒・黒色粒・赤褐色粒少量、白色粒多量 白色粒やや多量	硬質	口縁部破片	内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部ケズリ		SA-2b 区盛土内
5	土師器 器壺	口径：(7.4) 底径： 器高：(5.8)	内：10YR5/4 にぶい黄褐 外：10YR6/4 にぶい黄橙	緻密、少礫微量、黒色粒・透明粒・白色粒少量	硬質	口縁部1/5 体部一部	内：口縁～頸部ミガキ、体部ナデ 外：口縁端部ヨコナデ、口縁～体部ミガキ	内面粘土紐輪積み痕。内面1～5mmの円形剥離あり。	E12 グリッド
6	土師器 器甕	口径： 底径： 器高：(4.4)	内：10YR7/3 にぶい黄橙 外：10YR7/3 にぶい黄橙	やや緻密、透明粒・黒色粒やや多量、赤褐色粒微量	やや硬質	体部破片	内：ナデ後ミガキ 外：多方向のケズリ	底部に窪み。	SA-2 h 区盛土内
7	土師器 高環	口径： 底径： 器高：(5.5)	内：7.5YR6/6 橙 外：7.5YR7/6 橙	緻密、黒色粒・透明粒・白色粒少量	硬質	脚部上半	内：底部内面ナデ、脚部内面しぼり目、中心部棒状工具での刺突 外：脚部ハケ目		
8	土師器 高環	口径： 底径： 器高：(3.0)	内：2.5YR5/6 明赤褐 外：2.5YR6/6 橙	緻密、黒色ガラス質粒・透明粒少量、白色粒やや多量	やや硬質	脚部上1/3	内：ナデ 外：タテケズリ後ミガキ	全体に磨滅。	F7a・c 区

第23表 弥生・古墳時代遺構外ガラス玉観察表

掲載番号	種類 器種	材質	色調	特徴	重量 (g)	最大径 (mm)	最大高 (mm)	最大孔 (mm)	備考
9	小玉	ガラス	コバルトブルー		0.41	7.35	7.15	3.03	SD-3 覆土中より出土

8. 横倉戸館 1 号墳の調査

1. 調査成果

横倉戸館 1 号墳（第 189～192 図、第 23・24 表、図版二八・二九・六四・七〇）

経緯 第 1 章 1 節に記述したように、平成 25・26 年度に行われた本調査に先立ち、道路予定地内に位置する横倉戸館 1 号墳の確認調査が平成 24 年度に実施された。調査では、横倉戸館 1 号墳の範囲を確認するために、道路事業予定地内に 4 カ所トレンチを設定した。現況の墳丘の中心点を設定し、西側に 1 トレンチ、北西に 2 トレンチ、北側に 3 トレンチ、1 トレンチと 2 トレンチの間に補助的に 4 トレンチを設定し、墳丘立ち上がり（墳端）部分と周溝底面、および周溝外側の立ち上がり部分と周溝外縁部、周溝の深さの確認を行った。なお、2 トレンチは道路の路線に対しほぼ直交する方向に設定した。周溝部分の表土は重機によって除去し、周溝埋土については、深さ・土層を確認するために人力で掘り下げた。以下、調査結果について平成 24 年度の実績報告をもとに記述していく。

平成 25 年度および平成 26 年度に実施した本調査時に設定したグリッドでは、G12～14・H12～14 グリッドに位置し、本調査区の南東部と接する。

横倉戸館 1 号墳の現況は、墳丘東部に墳頂部の稲荷社へ向かう階段が設置されており、また、南部は一部破壊されているため若干窪む。現況では、南西側へやや伸びる不整形円形を呈しており、盛土は 1.5m 残存している。

各トレンチでの結果は下記の通りである。

1 トレンチ 現表土から 1.4 m 下で周溝底面を確認した。墳丘立ち上がりは、現況の墳端より内側で確認され、土層観察結果からも、完全に現況墳丘の下に位置することが判明した。そのため、現況墳丘の西側は墳丘頂部の削平土等を後世に盛ったものであり、本来の墳形が西側にふくらんで変形していることが明らかになった。

周溝断面は底部の広い逆台形で、外側の立ち上がりは中位で角度を変えて緩くなる。周溝底面の幅は 4.0 m で、中央がやや凹む。周溝の幅を墳端部分の屈曲点から周溝外縁の距離と考えると、5.8 m である。

埋土下層より、土師器埴の破片が出土した。

2 トレンチ 現表土から 1.35 m 下で周溝底面を確認した。墳丘立ち上がりは、1 トレンチ同様に、現況の墳端より内側で確認され、土層観察結果からも、現況墳丘の上に盛り土がなされ、墳形が変形していることが明らかになった。

周溝断面は底部の広い逆台形で、外側の立ち上がりは中位で角度を変えて緩くなる。周溝底面の幅は 3.2 m で、中央がやや凹む。周溝の幅は、墳端部分の屈曲点を確認できなかったが、5.5 m 前後と推測される。

周溝底面に接して、土師器壺が 1 点出土した。

3 トレンチ 現表土から 1.0 m 下で周溝底面を確認した。墳丘立ち上がりは、現況墳端から僅かに内側に位置し、1・2 トレンチで確認された後世の盛り土は存在しなかった。東側では現況の墳丘が、当初の墳丘の形状をよくとどめているものと推測される。

周溝断面は底部の広い逆台形で、外側の立ち上がりは中位で角度を変えて緩くなる。周溝底面の幅は 3.9 m で、ほぼ平坦である。周溝の幅は、5.8 m である。

4 トレンチ 現表土から 1.1 m 下で周溝底面を確認した。墳端確認は行わなかったが、周溝外側の立ち上が

り部分と、周溝外縁部を確認した。周溝埋土の上に、後世の盛り土から流入したと考えられる土層が確認された。

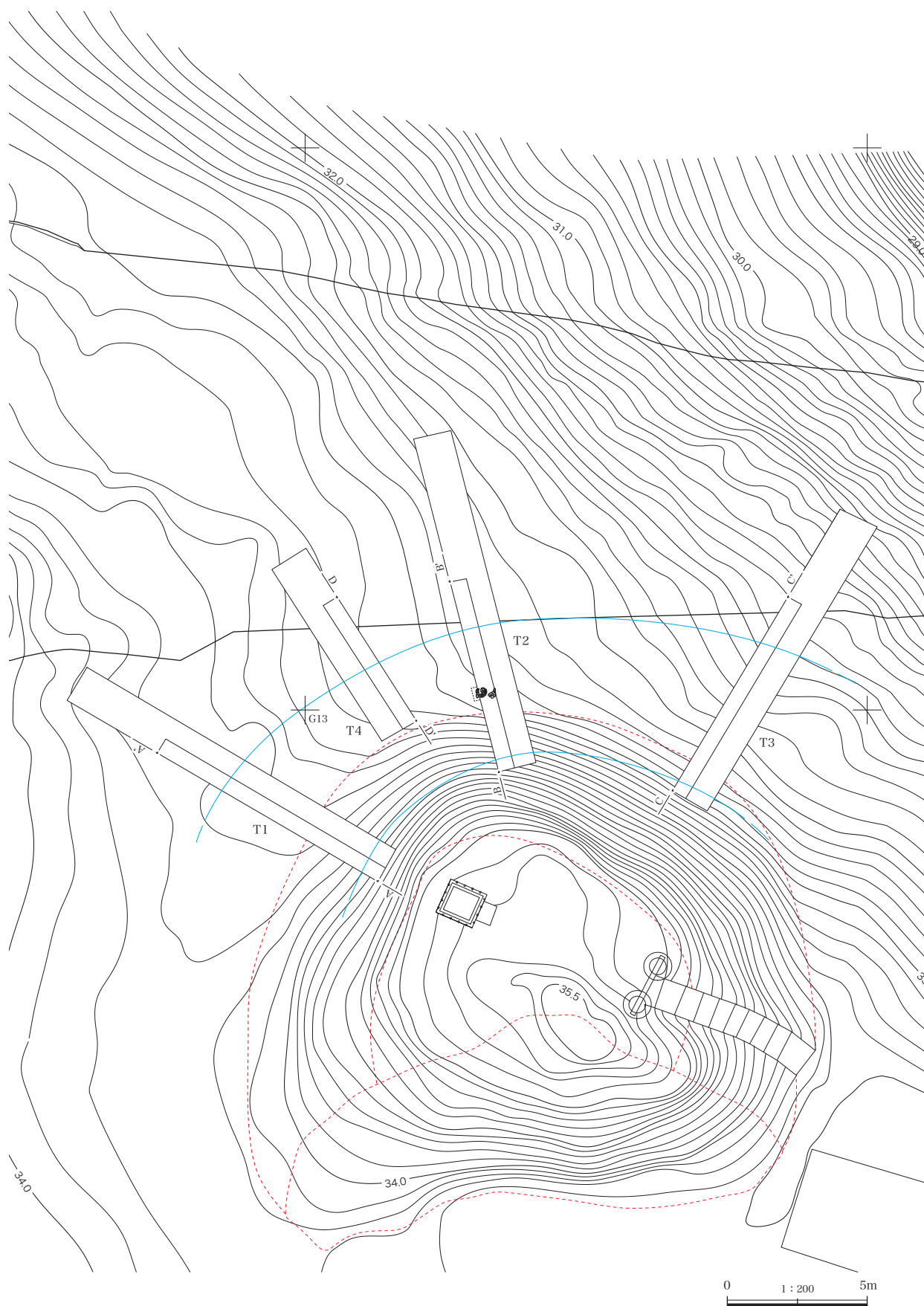
出土遺物 4カ所のトレンチ内からは、縄紋土器10点、弥生土器4点、土師器6点、瓦質土器1点、陶器1点、石器1点、金属製品1点を実測・掲載する。なお、縄紋土器については第Ⅲ章3節の縄紋時代の土器の項目に記載する。

1～4は弥生土器片で、すべて体部片。1の地紋は、直前段反撚3段LLRあるいは撚糸紋の原体を使用する。2は横位に2段LRと思われる原体を使用しての施文。3の原体は直前段反撚RRまたは3段RRと思われる。4は6条の櫛描波状文を施文する。これらは、すべての胎土に細かい砂粒が含まれている。

5～9は土師器で、いずれも古墳時代に帰属し、5～9はすべて1トレンチからの出土で、10は2トレンチからの出土である。4は甕と思われる頸部の破片である。外面にはハケ目状工具での成形が認められる。内面は横方向のナデが全面に確認できる。表面はやや黄色味を帯びている。

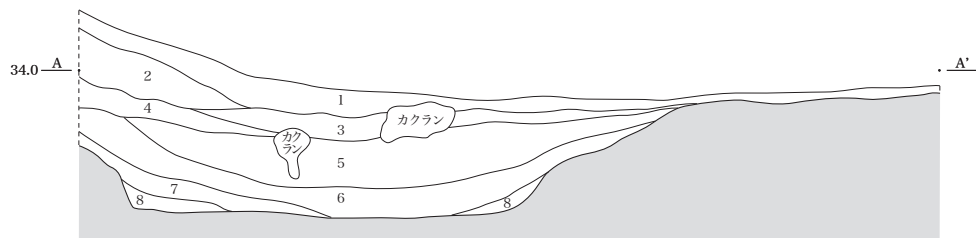
6～8はいずれも小形壺または罎と思われる。6は口縁部の破片で、内外面共に細かく磨かれており、単位の判別が難しい。7は肩部。外面は全面に細かいヘラミガキを行い、丁寧な印象をもつ。内面は、ナデ整形を行っており、指頭痕が残る。8は体部片。7と同様に、丁寧な印象をもつ。外面は丁寧なヘラミガキを行い、内面は斜め方向のナデを行う。また、内面には指頭痕が残る。9は壺の底部と思われる。外面にはハケ目状工具での整形を行い、一部ナデを行う。内面は磨滅が著しく、詳細は不明である。10は複合口縁の壺。外面は全面にわたって磨滅が著しいが、全面にハケ目状工具を用いて整形を行っている。口縁部は横方向、頸部は口縁部～肩部に向かっての縦方向、体部はナナメおよび横方向にややランダムに行う。また、体部の一部にナデやミガキを行ったと思われる箇所も見受けられた。内面は口縁部～体部までヘラ状工具によるナデ整形が行われる。底部は破損しており、焼成後に底部穿孔を行っている可能性がある。

11は瓦質土器の焙烙底部。外面は横方向のナデを行い、内面はナデ整形を行う。4トレンチからの出土。12は陶器で、徳利の体部片と思われる。外面は藁灰釉が全面にかかる。4トレンチからの出土。13は縄紋時代の石棒と思われる石製品。半分に割れており、上端部および下端部が破損している。表面は丸みを帯びており、加工している可能性も残る。側部には加工痕とも思える剥離面が確認できる。石材は頁岩。2トレンチ出土。13は青銅製の銭貨。文久永宝で、裏面には波文がある。4トレンチ出土。

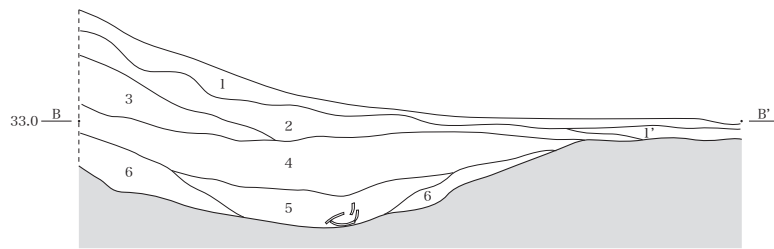


第189図 横倉戸館1号墳実測図(1)

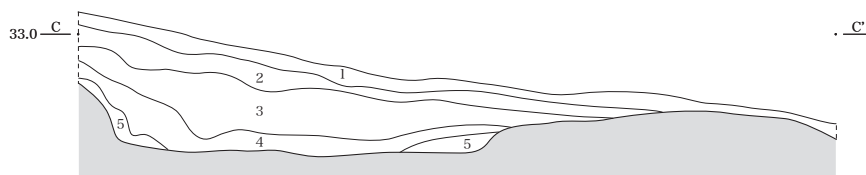
1 トレンチ



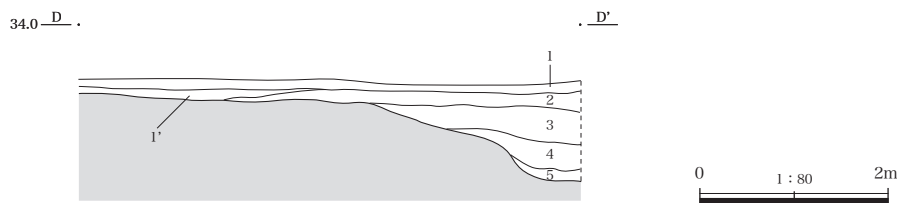
2 トレンチ



3 トレンチ



4 トレンチ



戸館1号墳 土層説明

1 トレンチ

- 1 暗褐色土 黒褐色土ブロック含む。しまり弱い。(1・2層表土)
- 2 明褐色土 ロームブロック少量。しまり弱い。
- 3 褐色土 ローム粒やや少量、ロームブロック微量。しまり弱い。(3・4層墳丘崩落土)
- 4 褐色土 3層に類似するが、ローム粒多量。しまり弱い。
- 5 灰褐色土 暗褐色土ブロックやや多量、ロームブロック少量。しまりやや強い。(5~8層埋土)
- 6 暗褐色土 褐色土粒やや少量、ローム粒微量。しまりやや強い。
- 7 暗褐色土 6層に類似するが、褐色土粒少ない。しまりやや強い。
- 8 暗黄褐色土 ローム粒主体、褐色土粒少量。しまり弱い。

- 5 褐色土 ローム粒やや多量、ロームブロック微量。しまり弱い。
- 6 明褐色土 ローム粒多量、ロームブロック微量。しまりやや弱い。(6層壁崩落土)

3 トレンチ

- 1 暗褐色土 しまり弱い。(1・2層表土)
- 2 明褐色土 ローム粒・褐色土多量。しまり弱い。
- 3 灰褐色土 ローム粒少量、ロームブロック微量。しまり弱い。
- 4 暗褐色土 ローム粒やや少量。しまりやや強い。
- 5 褐色土 ローム粒やや多量。しまり弱い。
- 6 褐色土 暗褐色土少量。しまり弱い。

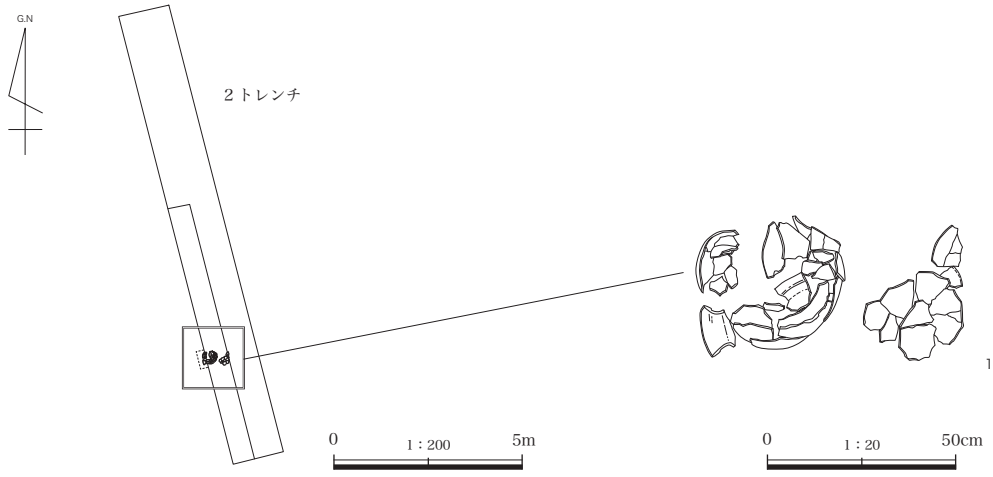
2 トレンチ

- 1 黒褐色土 ローム粒少量。しまり弱い。(1・1'層表土)
- 1' 黒褐色土 ローム粒やや少量。
- 2 明褐色土 ローム粒多量、褐色土少量、ロームブロック微量。しまり弱い。(2・3層墳丘崩落土)
- 3 褐色土 ローム粒多量、暗褐色土少量、ロームブロック微量。しまり弱い。
- 4 灰褐色土 黒褐色土ブロックやや多量、ローム粒・褐色土少量。しまりやや強い。(4・5層埋土)

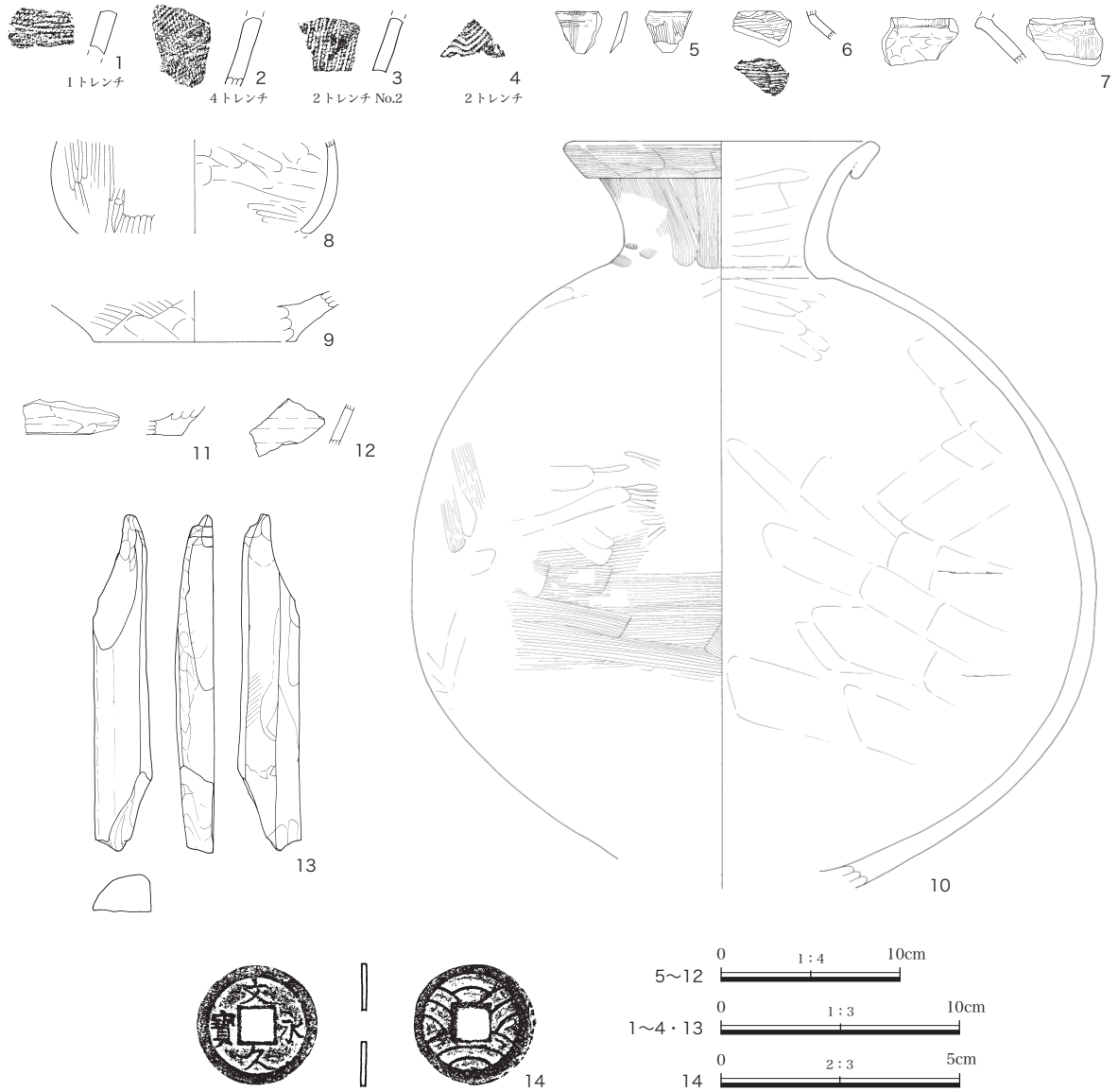
4 トレンチ

- 1 暗褐色土 ローム粒少量。しまり弱い。(1・1'層表土)
- 1' 暗褐色土 ローム粒やや少量。しまり弱い。
- 2 明褐色土 ローム粒多量、暗褐色土少量。しまり弱い。(2~5層埋土)
- 3 灰褐色土 暗褐色土ブロック少量、ロームブロック微量。しまり弱い。
- 4 褐色土 ロームブロックやや多量。しまり弱い。
- 5 黄褐色土 ロームブロック主体、褐色土少量。しまり弱い。

第190図 横倉戸館1号墳実測図(2)



第191図 横倉戸館1号墳遺物出土状況図



第192図 横倉戸館1号墳遺物実測図

第24表 横倉戸館1号墳遺物観察表

掲載番号	種類 器種	計測値 (cm)	色調 (内・外)	胎土 (石材)	焼成	残存率	技法 (内・外)	特徴・備考	出土位置
5	土師器壺	口径： 底径： 器高：(2.2)	内：7.5YR4/6 褐 外：7.5YR4/6 褐	緻密、黒色粒・白色粒・赤褐色粒少量	硬質	口縁部破片	内：口縁部ヨコナデ、頸部ヘラミガキ 外：口縁部ヨコナデ、頸部ヘラミガキ		1トレンチ
6	土師器 甕？	口径： 底径： 器高：(1.6)	内：10YR7/4 にぶ い黄橙 外：10YR7/4 にぶ い黄橙	緻密、黒色粒・白色粒・赤褐色粒少量	硬質	頸部破片	内：頸部ヨコナデ 外：頸部ハケ目調整		1トレンチ
7	土師器壺	口径： 底径： 器高：(2.6)	内：7.5YR7/4 にぶ い橙 外：7.5YR6/6 橙	緻密、黒色粒・白色粒・赤褐色粒少量	硬質	頸部から 胴部破片	内：頸部腹ミガキ、 体部ナデ 外：体部腹ミガキ		1トレンチ
8	土師器壺	口径： 底径： 器高：(1.6)	内：7.5YR7/4 にぶ い橙 外：7.5YR6/6 橙	緻密、少礫微量、 黒色粒・白色粒・ 赤褐色粒少量	硬質	胴部片	内：体部ナデ 外：体部ヘラミガキ	体部外面に縦方向の ヘラミガキ。	1トレンチ
9	土師器壺	口径： 底径：(11.2) 器高：(2.8)	内：7.5YR6/3 にぶ い褐 外：2.5Y7/3 浅黄	緻密、少礫微量、 黒色粒・白色粒・ 赤褐色粒少量	硬質	胴部から 底部片	内：磨滅のため不明 外：体部ハケ目調整 後ナデ、底部ナデ		1トレンチ
10	土師器壺	口径：17.6 底径： 器高：(41.8)	内：5YR5/6 明赤 褐 外：2.5YR5/8～ 5YR6/6 明赤褐～ 橙	緻密、少礫微量、 黒色粒・白色粒・ 赤褐色粒少量	硬質	4/5	内：体部ナデ 外：口縁部～体部 ハケ目調整、一部 にナデ・ミガキ。	焼成後底部穿孔。	2トレンチ
11	瓦質土器 焙烙	口径： 底径： 器高：(1.7)	内：5YR5/6 明赤 褐 外：10YR2/2 黒褐	緻密、黒色粒・白色粒・透明粒微量、 金色雲母やや多量	硬質	体部から 底部破片	内：ナデ 外：体～底部ナデ	体部外面にスス付着。 常陸産。	4トレンチ
12	陶器 德利	口径： 底径： 器高：(2.3)	素地：5Y8/3 淡黄 釉：5Y7/4 浅黄	緻密、黒色粒極微量	硬質	体部破片	ロクロ整形		4トレンチ
13	石棒	最大長：14.2 最大幅：2.4 最大厚：1.6		頁岩				重量：78.1g	2トレンチ

第25表 横倉戸館1号墳金属製品観察表

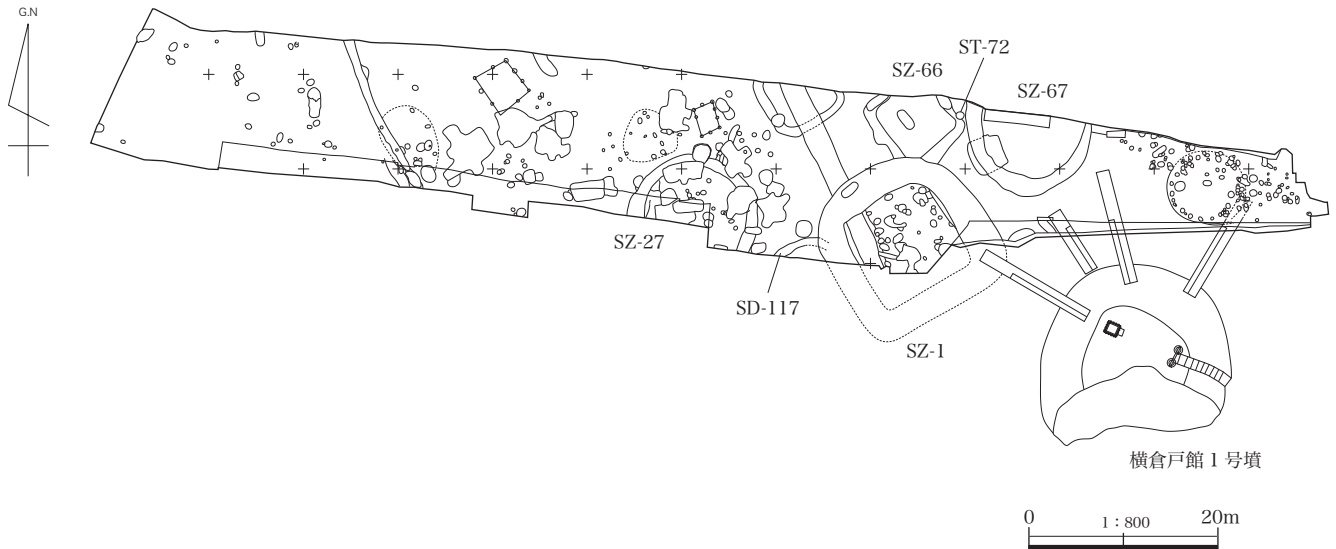
掲載番号	種類 器種	径 (cm)	孔径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	材質	特徴・備考	出土位置
14	銭 銅製品	縦：2.59 横：2.56	0.66	0.18	2.36	銅	文久永宝	4トレンチ

2. 小結

この調査では、現況の墳丘の北西部約1/4を部分的に確認したことになる。その結果、墳端を結ぶと、半径約8.1mの円弧を描くことが可能で、径16.2mの円墳であると復元される。また、周溝外縁も円形になり、5.5～5.8mの幅で墳丘を巡る。周溝外縁の復元直径は、約28.0mである。周溝外側の立ち上がりは中位で角度を変えて、傾斜が極端に緩くなる。今回の調査において、現周溝の土層は、1・2・4トレンチに、墳頂部を削平したとみられる土が被い、3トレンチではこれが確認できなかった。このため、墳頂削平土は古墳の北側・西側に移したと想定される。

2トレンチ内より、周溝の底面に接する状況で、土師器壺が潰れた状態で出土した。底部が出土しておらず、焼成後に底部穿孔を行った可能性が高い。また、墳形が方墳の可能性も指摘されており、仮に方墳であったならば、この壺の出土位置が周溝コーナー部付近となることは重要な点となる。

古墳時代



第 285 図 横倉遺跡・横倉戸館古墳群 遺構変遷図（古墳時代）

集落遺跡である下犬塚遺跡や結城市善長寺遺跡から出土した壺があげられる。これらはいずれも複合口縁の壺で、羽状縄紋の施紋後に棒状浮文を貼り付ける。

SZ-1（横倉戸館 8 号墳）出土のような、網目状捺糸紋での施紋例は現在栃木県内での報告例は下犬塚遺跡出土の破片および横倉戸館遺跡での採集資料（進藤 1991）等があり、横倉遺跡に近い遺跡でやや多くみられている。今回の調査で出土した壺は、口縁部に網目状捺糸紋や棒状浮文、円形朱文を施し、胴部上位には網状捺糸紋や鋸歯文が施文され、文様面以外に赤彩を多用しており、南関東における弥生時代終末期の様相をとどめていると言える。これらの特徴をもつ土器は、いわゆる南関東系とされており、本遺跡出土例も南関東系に相当するものであろう。

本墳の主体部は、南側が攪乱を受けており遺存状態は悪く、形態も不明瞭なところがある。主体部からは、やや薄手の剣と小形の罌の破片が底面から 8 cm 浮いた状態で出土し、主体部に伴うものと判断した。剣は切っ先が南東方向へ向いており、被葬者の頭部は北西方向へ向いていたと考えられる（第 160 図）。

周溝内および主体部から出土した土器は、栃木県内の古墳時代前期における研究を精力的に進めている今平利幸氏による編年（今平 2009）を参照すれば、今平編年での 0 段階（前期初頭）に属する土器群であると考えられる。

また、SZ-1（横倉戸館 8 号墳）の墳丘上面からは第 163 図 26 の椀、第 163 図 27 の高坏が細片となって出土している。高坏は脚部のみ残存しており、やや脚部が膨らむ。椀は、口縁部が内湾気味になることから、今平編年Ⅱ期（前期中頃）に相当すると考えられる。周溝内および主体部から出土した土師器とは時期が異なる点に注意される。

小山市域および近接する結城市西部における前期の古墳および集落と比較すると、牧ノ内 17 号墳・寺野東遺跡方形周溝墓・冶松遺跡・下犬塚遺跡・溜ノ台遺跡・結城市善長寺遺跡等の時期に概ね相当すると思われる。中村享史氏の編年案（中村 2015）では、SZ-1（横倉戸館 8 号墳）を小山市域で最古の古墳とし、3 世紀末に位置づけている。

第5節 古代の遺構と遺物

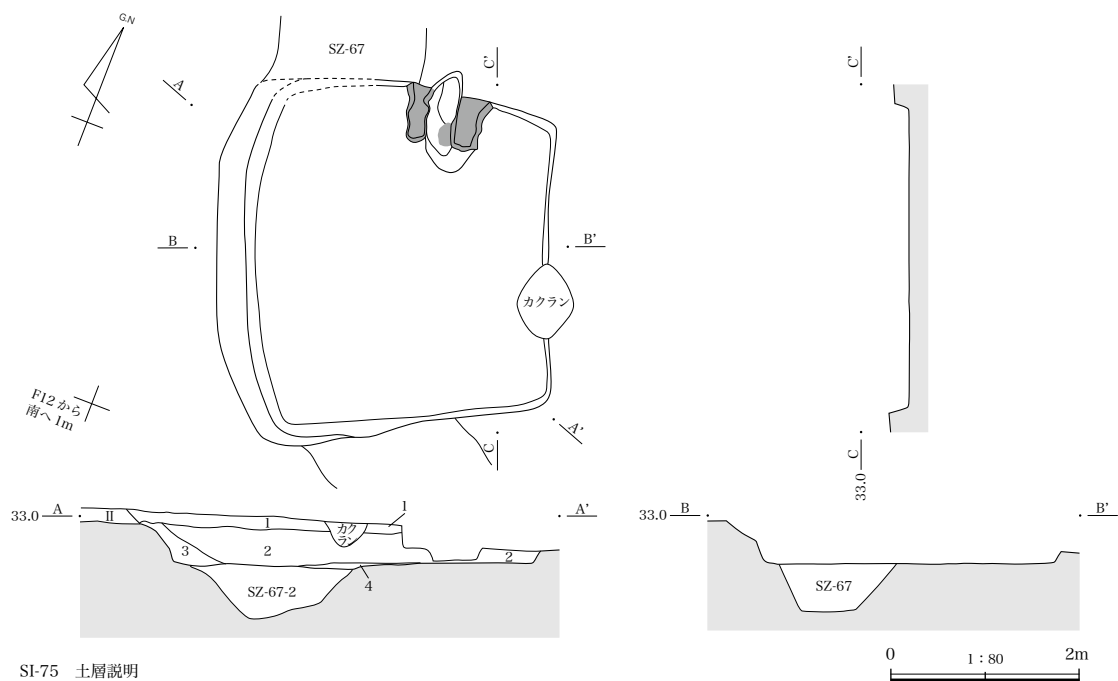
1. 竪穴建物跡

SI-75 (第193～196図、第26・27表、図版三〇・七〇・七一)

位置 台地の端部にあたる、E12c・F12a グリッドに位置する。

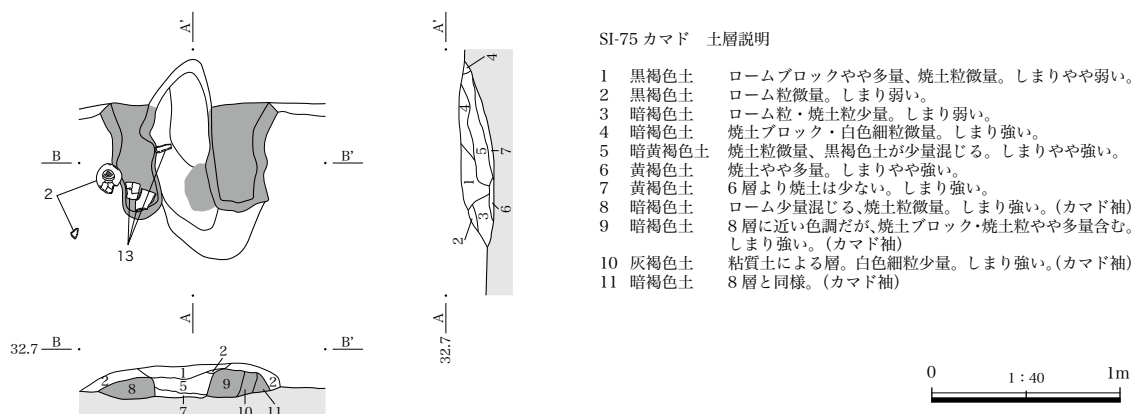
経緯 本建物跡は、重複するSZ-67の周溝掘り下げ時に確認された。周溝覆土に、内面に黒色処理が施された土師器坏や椀形鍛冶滓等の鍛冶関連遺物が多量に出土したため、周囲のプラン確認を行った。その結果、北側にカマドとの関わりが推定できる焼土および粘土を確認できたため、竪穴建物跡であるとの判断に至り、周溝掘り下げを中断し、SI-75の調査を進めた。

規模・形状 本建物跡は、おおむねローム漸位層で確認した。平面形は南北3.62m・東西3.56mの、西辺が緩やかに膨らむやや歪んだ方形を呈する。主軸の振れはN-22°-Wである。標準土層Ⅱ層を掘り込んでおり、



SI-75 土層説明

- | | | | |
|--------|----------------------------|--------|-----------------------------|
| 1 黒褐色土 | ローム粒少量。しまりやや弱い。 | 4 暗褐色土 | ローム粒多量、ロームブロックやや多量。しまりやや弱い。 |
| 2 黒褐色土 | ローム粒やや少量、炭化物粒・白色粒微量。しまり弱い。 | | |
| 3 暗褐色土 | ローム粒・ロームブロックやや多量。しまり弱い。 | | |



SI-75 カマド 土層説明

- | | |
|---------|---|
| 1 黒褐色土 | ロームブロックやや多量、焼土粒微量。しまりやや弱い。 |
| 2 黒褐色土 | ローム粒微量。しまり弱い。 |
| 3 暗褐色土 | ローム粒・焼土粒少量。しまり弱い。 |
| 4 暗褐色土 | 焼土ブロック・白色細粒微量。しまり強い。 |
| 5 暗黄褐色土 | 焼土粒微量、黒褐色土が少量混じる。しまりやや強い。 |
| 6 黄褐色土 | 焼土やや多量。しまりやや強い。 |
| 7 黄褐色土 | 6層より焼土は少ない。しまり強い。 |
| 8 暗褐色土 | ローム少量混じる、焼土粒微量。しまり強い。(カマド袖) |
| 9 暗褐色土 | 8層に近い色調だが、焼土ブロック・焼土粒やや多量含む。しまり強い。(カマド袖) |
| 10 灰褐色土 | 粘質土による層。白色細粒少量。しまり強い。(カマド袖) |
| 11 暗褐色土 | 8層と同様。(カマド袖) |

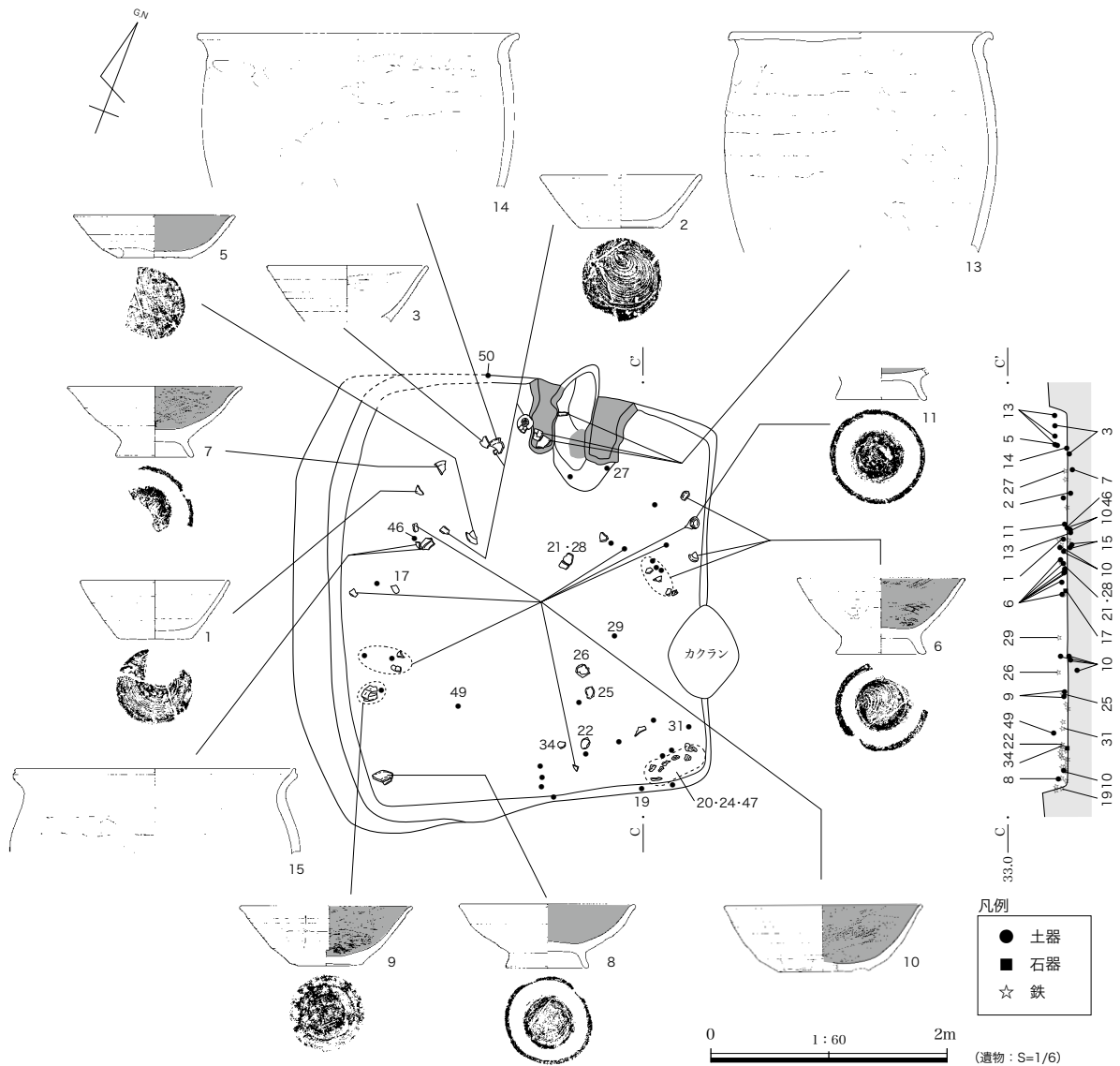
第193図 SI-75 遺構実測図

壁は全体的にやや不明瞭であった。西壁は中位～上位にかけてやや緩やかに傾斜をつける。北・東・南側は壁高が低く、浅い。本来的には壁の高さはもう少しあったと推定される。残存する壁の高さは、西壁 0.44m、東壁 0.08m で、外傾して立ち上がる。床面は全体的に軟質なローム面であり、硬化面は確認できなかった。貼床も認められず、壁溝・柱穴は確認できなかった。

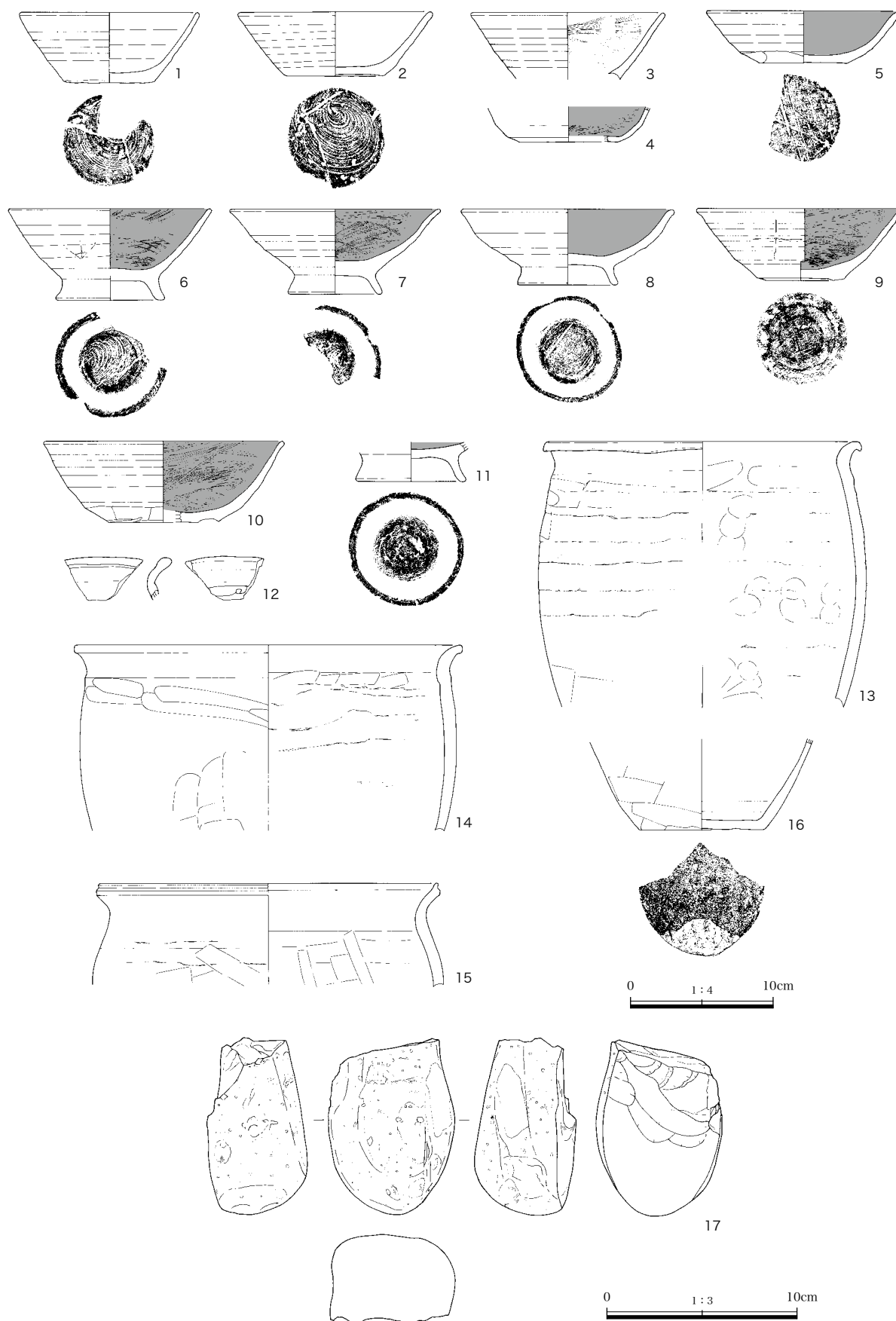
重複 SZ-67 の周溝北西部を一部壊している。

覆土 覆土は黒色土と暗褐色土の4層に分けられる。1・2層はローム粒の混入は少なく、ロームブロックも含まれない黒褐色土である。壁際の3層にはローム粒・ロームブロックをやや多量に含むが、壁面の崩落土と推定される。自然堆積と考えられる。

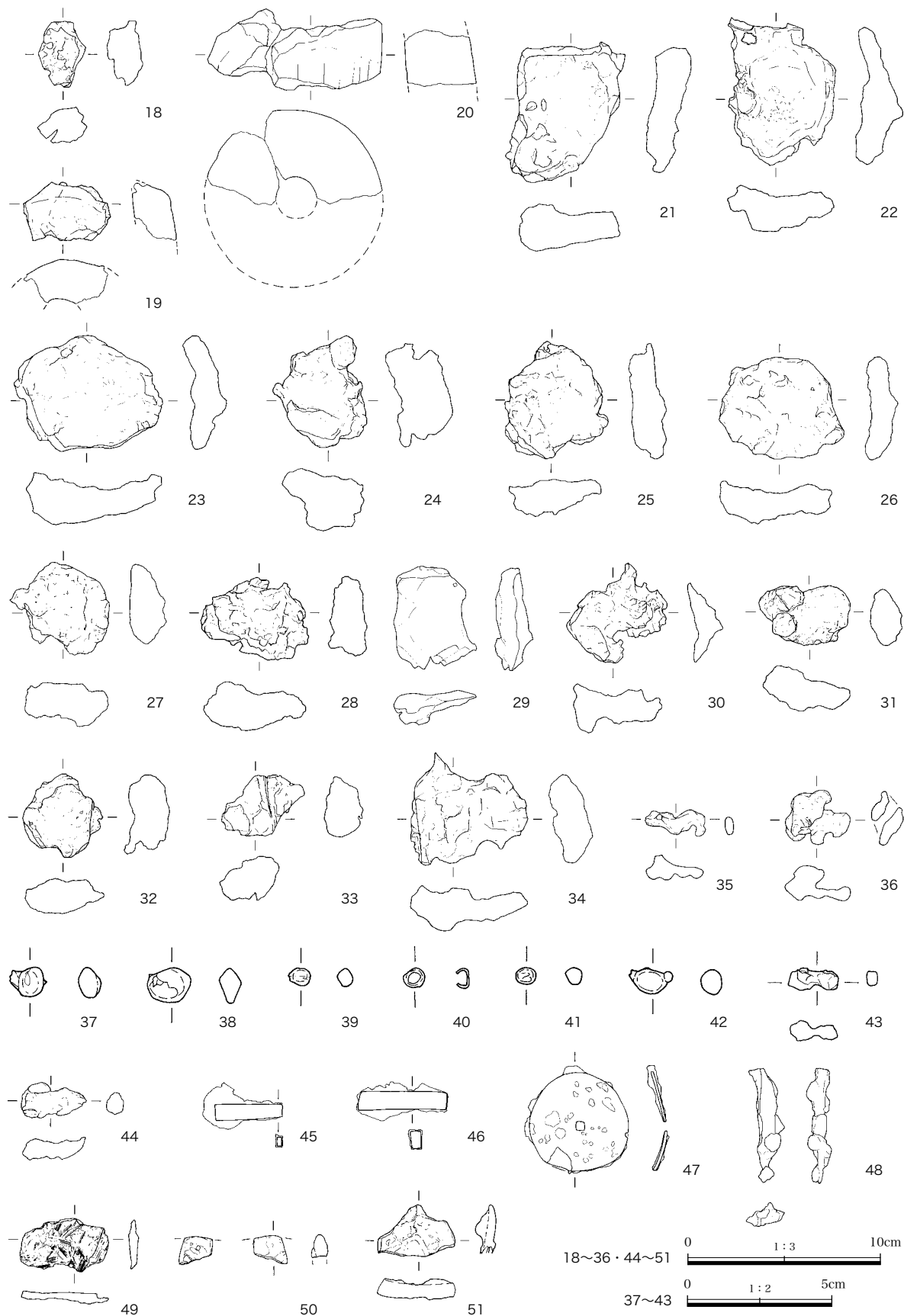
カマド カマドは北壁のやや東寄りに構築される。天井部は崩落しており、遺存状態は悪いが両袖が残存していた。右袖幅 0.33m・長さ 0.59m、左袖幅 0.29m・長さ 0.60m で、両袖幅は 0.95m、北壁への突出は 0.28m である。袖は粘土質の土が混ざる暗褐色土を用いて構築される。火床面は床面から 5 cm程掘り込み、煙道端部にかけて緩やかに立ち上がる。焼土面は右袖部周辺にのみみられ、他ではほぼ焼土面はみられない。長期



第194図 SI-75 遺物出土状況図



第195図 SI-75 遺物・鍛冶関連遺物実測図



第196図 SI-75 鍛冶関連遺物実測図

間使用されていないものと推定される。

出土遺物 カマド周辺から床面全体にかけて多量の土器類および鍛冶関連遺物が出土している。第 195 図 1～5 は土師器坏である。2 は内面全面に横方向の指ナデが施されている。3 は内面にヘラミガキを施すが、磨滅している。4・5 は内面に黒色処理が施された坏である。内面にヘラミガキが施されるが、5 は内面が磨滅している。2 はカマド左袖上部に伏せた状態で出土している。第 195 図 6～11 は土師器高台付坏。6 の体部に「▽」、9 には「十」の記号が認められる。浅く、粒子の動きもみられないことから、焼成後に針状工具で線刻されたと思われる。9 は高台部接合箇所を磨いている。高台破損後に補修を行い、再利用したと考えられる。これら高台付坏はすべて内面に黒色処理を施す。第 195 図 12～16 は土師器甕。13 はカマド左袖前面に貼り付いた状態で出土し、一部カマド内部より出土する。16 はカマド内からの出土である。

本建物跡出土の鍛冶関連遺物は以下のとおりである。第 195 図 17 は自然石を利用した砥石。第 196 図 18～20 はフイゴ羽口。20 はやや太めの羽口である。21～34 は椀形鍛冶滓。21 の中型のもの以外は小型・極小が主体である。35～38 は鍛冶滓、39～42 は粒状の滓、43・44 は鉄塊系遺物。45～48 は鉄製品。45 は棒状の不明品。46 は刀子の破片と思われる。47 は紡錘車の円盤部である。48 は釘状の不明品である。49 は再結合滓。50・51 は被熱・発泡する土器片である。これら鍛冶関連遺物の詳細は、本章 9 節および第 IV 章 6 項に示したので参照されたい。

第 26 表 SI-75 遺物観察表

掲載番号	種類 器種	計測値 (cm)	色調 (内・外)	胎土	焼成	残存率	技法 (内・外)	特徴・備考	出土位置
1	土師器坏	口径：(12.6) 底径：6.4 器高：5.0	内：2.5Y8/3 淡黄 外：2.5Y8/2 灰白	緻密、透明粒・黒色粒・赤褐色粒少量、白色粒多量	硬質	口縁から体部 1/6 弱 底部 1/4	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、底部回転糸切り離し		SI-75 SI-75 no.18 T20 T20 no.2
2	土師器坏	口径：13.6 底径：7.0 器高：4.5	内：5Y7/1 にぶい黄橙 外：10YR7/4 にぶい黄橙	緻密、白色粒・赤褐色粒・透明粒やや多量、黒色粒多量	硬質	完形	内：ロクロナデ、底部一部ミガキ 外：ロクロナデ、底部回転糸切り離し	内面一部にスス付着。灯明皿カ。	SI-75 カマド no.1
3	土師器坏	口径：(13.6) 底径： 器高：4.7	内：10YR8/3 浅黄橙 外：2.5Y8/4 淡黄	緻密、透明粒・黒色粒・赤褐色粒少量、白色粒多量	硬質	口縁部 1/4 体部 1/5	内：ロクロナデ後ヘラミガキ 外：ロクロナデ		SI-75 no.15 ,16
4	土師器坏	口径： 底径：(6.8) 器高：(2.4)	内：2.5Y2/1 黒 外：10YR6/4 にぶい黄橙	緻密、黒色粒・赤褐色粒・透明粒やや多量、白色粒多量	硬質	体部から底部片	内：黒色処理、ヘラミガキ、ロクロナデ 外：体部ロクロナデ後体部下端回転ヘラケズリ、底部ヘラケズリ		S-67c 区
5	土師器坏	口径：(13.6) 底径：(6.2) 器高：3.6	内：2.5Y3/1 黒褐 外：7.5YR6/4 にぶい橙	緻密、透明粒・黒色粒・赤褐色粒少量、白色粒多量	硬質	口縁から体部 1/2 弱 底部 1/2	内：黒色処理、ロクロナデ 外：体部ロクロナデ後体部下端手持ちヘラケズリ、底部ヘラケズリ		SI-75 no.23 SI-75 S-67b2 区
6	土師器高台付坏	口径：(14.2) 底径：(7.6) 器高：6.4	内：2.5Y2/1 黒 外：7.5YR7/4 にぶい橙	緻密、透明粒・黒色粒・赤褐色粒少量、白色粒多量	硬質	口縁部 1/10 体部 1/3 高台部 2/3 周 底部ほぼ完存	内：黒色処理、ロクロナデ後ヘラミガキ 外：ロクロナデ、底部回転糸切り離し、高台部貼り付け後ナデ	体部内面に微量の鉄滓付着。体部外面に線刻「▽」	SI-75 no.3 ～ 8
7	土師器高台付坏	口径：(14.8) 底径：(6.6) 器高：5.9	内：2.5YR2/1 黒外：10YR7/3 にぶい黄橙	緻密、透明粒・黒色粒・赤褐色粒少量、白色粒多量	硬質	口縁から体部 1/7 弱 高台から底部 1/2	内：黒色処理、ロクロナデ後ヘラミガキ 外：ロクロナデ、底部回転糸切り離し、高台部貼り付け後ナデ	破損面に若干の被熱痕。	SI-75 no.17

8	土師器 高台付坏	口径：14.8 底径：7.0 器高：5.3	内：2.5Y1/3 黒褐 外：10YR6/3 にぶ い黄橙	緻密、透明粒・黒 色粒・赤褐色粒少 量、白色粒多量	やや 硬質	口縁から 体部 3/4 弱 高台から 底部ほぼ 完存	内：黒色処理、ロ クロナデ後ヘラミ ガキ 外：ロクロナデ、 底部切り離し不明、 高台部貼り付け後 ナデ	内外面著しい磨滅。1 ～8mm程の円形の剥 離がみられる。	SI-75 no.31 SI-75 T20
9	土師器 高台付坏	口径：(14.6) 底径：6.2 器高：5.0	内：2.5Y2/1 黒 外：10YR8/3 浅黄 橙	緻密、透明粒・黒 色粒・赤褐色粒少 量、白色粒多量	硬質	口縁から 体部 1/2 弱 底部完存	内：黒色処理、ロ クロナデ後ヘラミ ガキ 外：ロクロナデ、底 部切り離し不明、高 台部破損後ミガキ	体部外面に線刻「十」。 高台部破損後に一部 ミガキを行い、再利 用する。高台部は、 貼付後にナデを行う。	SI-75 no.29 no.30 S-66d 区
10	土師器 高台付坏	口径：16.8 底径：(7.6) 器高：5.6	内：2.5Y2/1 黒 外：7.5YR6/4 にぶ い橙	緻密、透明粒・黒 色粒・赤褐色粒少 量、白色粒多量	硬質	口縁部 3/4 体部 3/5 底部 1/4 弱	内：黒色処理、ロ クロナデ後ヘラミ ガキ 外：ロクロナデ後 体部下端手持ちヘ ラケズリ、底部切 り離し不明	高台部破損。	SI-75 SI-75 no.2,9,10, 13,19,24, 25,28 S-67b2 区
11	土師器 高台付坏	口径： 底径：7.7 器高：(2.7)	内：2.5Y2/1 黒 外：10YR8/2 灰白	緻密、透明粒・黒 色粒・赤褐色粒少 量、白色粒多量	硬質	高台部完 存	内：黒色処理、ヘ ラミガキ 外：底部切り離し 不明、高台部貼り 付け後ナデ		SI-75 no.12
12	土師器 甕	口径： 底径： 器高：(3.0)	内：10YR8/3 浅黄 橙 外：2.5Y6/3 にぶ い黄	緻密、黒色粒・赤 褐色粒・透明粒や 多量、白色粒多 量	硬質	口縁部破 片	内：口縁部ロクロ ナデ 外：口縁部ロクロ ナデ		E12c
13	土師器 甕	口径：(22.0) 底径： 器高：(18.7)	内：10YR6/4 にぶ い黄橙 外：10YR6/3 にぶ い黄橙	緻密、白色粒・赤 褐色粒・透明粒や 多量、黒色粒多 量	硬質	口縁部 1/7 胴部上半 1/4	内：口縁部ヨコナ デ、体部ナデ 外：口縁部ヨコナ デ、体部ヘラケズリ	胴部内面に指頭圧痕 多数。	SI-75 カマド SI-75 カマ ド no.2,3,4 S-1c 区 上面 S-1 T20
14	土師器 甕	口径：(27.0) 底径： 器高：(13.0)	内：7.5YR7/3 に ぶい橙 外：10YR6/4 にぶ い黄橙	緻密、黒色粒・赤 褐色粒・透明粒や 多量、白色粒多 量	硬質	口縁部 1/5 胴部一部	内：口縁部ヨコナ デ、体部ナデ 外：口縁部ヨコナ デ、体部ナデ		SI-75 no.16 E12d I・ III層
15	土師器 甕	口径：(23.8) 底径： 器高：(7.2)	内：7.5YR6/4 に ぶい橙 外：7.5YR6/4 にぶ い橙	緻密、黒色粒・赤 褐色粒・透明粒や 多量、白色粒多 量	硬質	口縁部 1/5 胴部一部	内：口縁部ヨコナ デ、体部ナデ 外：口縁部ヨコナ デ、体部ヘラケズリ	カマド心材の土師器 甕と同一個体カ。	SI-75 no.20,21
16	土師器 甕	口径： 底径：8.8 器高：(6.4)	内：5YR5/6 橙 外：10YR5/6 橙	緻密、黒色粒・赤 褐色粒・透明粒や 多量、白色粒多 量	硬質	体部から 底部 底部 3/4	内：胴部ヨコナ デ、 底部ロクロナデ 外：胴部ヘラケズ リ、底部ナデ		SI-75 カマ ド S-1d 区

第27表 SI-75 鍛冶関連遺物観察表

掲載 番号	種類	鍛冶関連遺物 構成表No.	出土位置
17	砥石	35	No.62
18	羽口	1	覆土中
19	羽口	2	No.58
20	羽口	3	No.60
21	椀形鍛冶滓	4	No.48
22	椀形鍛冶滓	5	No.41
23	椀形鍛冶滓	6	覆土中
24	椀形鍛冶滓	7	No.60
25	椀形鍛冶滓	8	No.45
26	椀形鍛冶滓	9	No.46
27	椀形鍛冶滓	10	No.52
28	椀形鍛冶滓	11	No.48
29	椀形鍛冶滓	12	No.47
30	椀形鍛冶滓	13	覆土中
31	椀形鍛冶滓	14	No.55
32	椀形鍛冶滓	15	覆土中
33	椀形鍛冶滓	16	覆土中
34	椀形鍛冶滓	17	No.40
35	鍛冶滓	18	覆土中

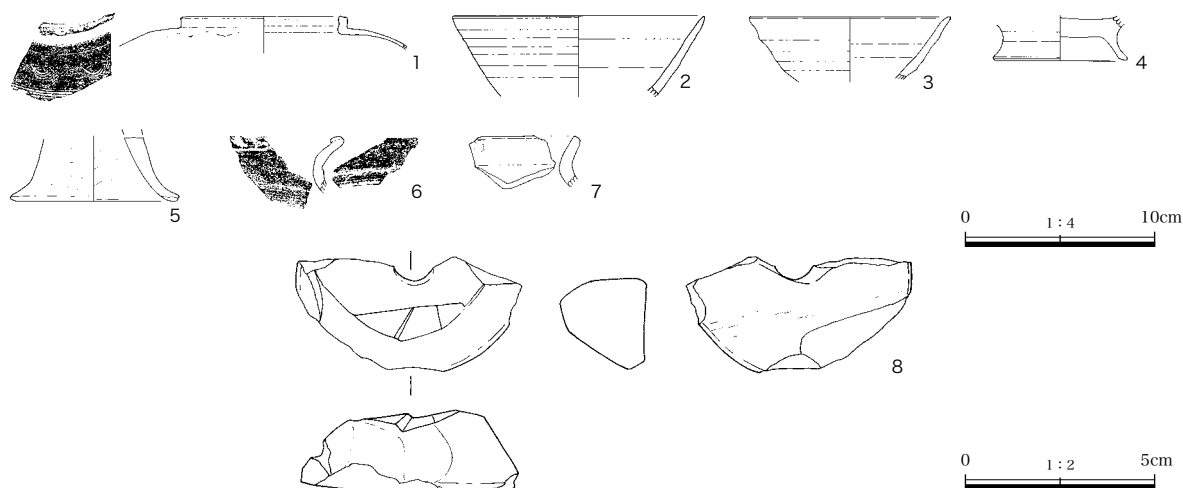
掲載 番号	種類	鍛冶関連遺物 構成表No.	出土位置
36	鍛冶滓	19	覆土中
37	鍛冶滓	20	覆土中
38	鍛冶滓	21	覆土中
39	粒状の滓	22	覆土中
40	粒状の滓	23	覆土中
41	粒状の滓	24	覆土中
42	粒状の滓	25	覆土中
43	鉄塊系遺物	26	覆土中
44	鉄塊系遺物	27	覆土中
45	鉄製品 (棒状不明品)	28	覆土中
46	鉄製品 (刀子?)	29	No.34
47	鉄製品 (紡錘車円盤部)	30	No.60
48	鉄製品 (釘状不明品)	31	覆土中
49	再結合滓	32	No.33
50	土師器坏	33	No.32
51	土師器坏	34	覆土中

2. 古代遺構外遺物

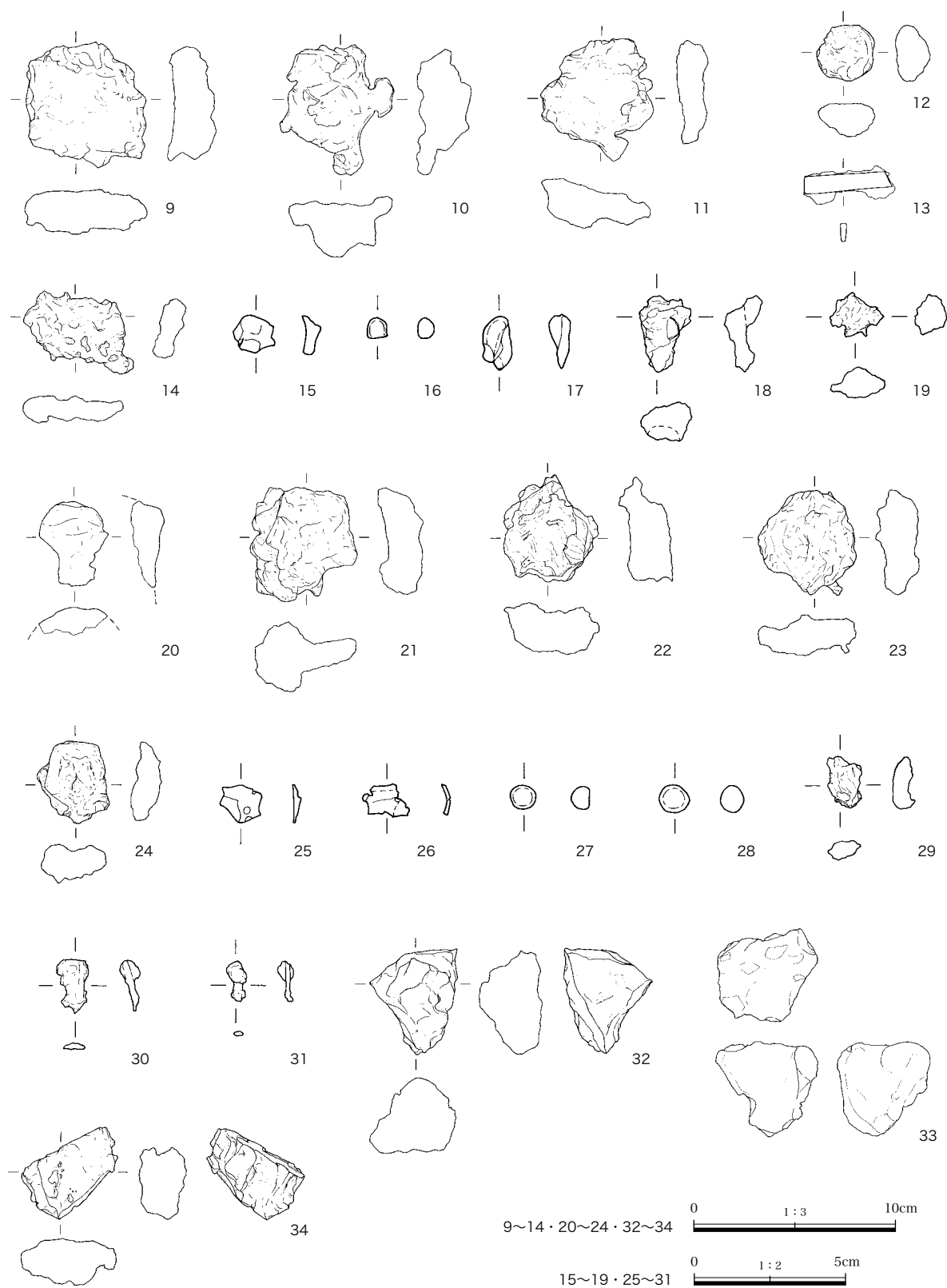
古代以外の遺構から出土した遺物や、グリッドでの出土および周辺での採集遺物で、古代のものを図示する。

第 197 図 1 は調査区内出土の須恵器の短頸壺。口縁から肩部にかけての破片で、肩部外面に波状文・横方向の沈線を施す。2・3 は土師器坏である。両者とも内外面口クロナデ。口縁部の形態は、2 が直線的で、3 はやや外反する。2 は F14d 周辺から、3 は SA-2 から出土した。4・5 は土師器高台付坏。4 は SA-2 の盛土内部からの出土で、高台部から坏部内面の一部が残存し、坏部内面には黒色処理が施される。5 は本調査区の北方の畑からの表採品で、高台部のみ残存し、やや粗い作りである。6・7 は土師器甕。6 は T24 から出土。頸部でやや段差が付く。7 は F12a から出土し、屈曲部から大きく外反する。8 は F13b から出土した土製の紡錘車である。外面にはヘラ状工具によるケズリの痕跡が確認できるが、両面は比較的丁寧に磨かれている。

鉄滓等を多数出土した SI-75 以外からも鍛冶関連遺物が出土している（第 198 図）。SZ-1 からは、周溝から椀形鍛冶滓 4 点（第 198 図 9～12）・刀子片 1 点（第 198 図 13）が出土する。これらのうち、椀形鍛冶滓は 3 点が c 区からの出土である（第 198 図 9・11・12）。SZ-66 の周溝からは、椀形鍛冶滓 1 点（第 198 図 14）・工具付着滓 1 点（第 198 図 15）・粒状の滓 1 点（第 198 図 16）・鉄塊系遺物 2 点（第 198 図 17・18）が出土しており、工具付着滓以外は d 区からの出土である。d 区は SI-75 と重なる位置に設定しているため、これらは SI-75 に帰属する可能性が高い。SZ-67 からは、鉄塊系遺物 1 点（第 198 図 19）・羽口 1 点（第 198 図 20）・椀形鍛冶滓 4 点（第 198 図 21～24）・工具付着滓 2 点（第 198 図 25・26）・粒状の滓 2 点（第 198 図 27・28）・鉄塊系遺物と思われるもの 3 点（第 198 図 29～31）が出土している。すべて周溝覆土からの出土であるが、20 の羽口、21・22 の椀形鍛冶滓、29 の鉄塊系遺物と思われるもの以外が f 区からの出土である。本古墳は台地の落ち際に位置しているので、これらの遺物は SI-75 の流れ込みの可能性が推定される。近世の堀跡と考えられる SD-3 の覆土中からは、炉壁が 2 点出土している（第 198 図 32・33）。また、調査区やや西側の D8c グリッドから炉壁が 1 点出土している（第 198 図 34）。



第 197 図 古代遺構外遺物実測図



第198図 古代遺構外鍛冶関連遺物実測図

第 28 表 古代遺構外遺物観察表

掲載番号	種類 器種	計測値 (cm)	色調 (内・外)	胎土	焼成	残存率	技法 (内・外)	特徴・備考	出土位置
1	須恵器 短頸壺	口径：(8.8) 底径： 器高：(1.6)	内：10YR5/3 にぶ い黄褐 外：10YR5/2 灰黄 褐	緻密、白色粒・透 明粒微量	硬質	口縁部破 片	内：口縁～体部ロ クロナデ 外：口縁～体部ロ クロナデ	口縁部の端部と内面 が凹む。体部外面に は、ロクロナデの後 に 6 条の波状文・横 方向に 4 条の沈線を 施す。	oyyk
2	土師器 器環	口径：(13.2) 底径： 器高：(4.2)	内：7.5YR6/4 にぶ い橙 外：7.5YR6/4 にぶ い橙	やや緻密、黒色ガ ラス粒・透明粒や や多量	硬質	口縁部 1/6 体部一部	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ		F14c・d F13c トダテ 1号 4T
3	土師器 器環	口径：(10.4) 底径： 器高：(3.3)	内：7.5YR6/4 にぶ い橙 外：7.5YR6/4 にぶ い橙	やや緻密、黒色ガ ラス粒・透明粒や や多量	やや 軟質	口縁部片	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ		S-2h 区 m 層
4	土師器 高台付環	口径： 底径：(7.0) 器高：(2.4)	内：10YR1.7/1 黒 外：10YR6/3 にぶ い黄橙	緻密、透明粒・黒 色粒・黒色ガラス 粒少量、赤褐色粒 微量	やや 硬質	高台から 底部片	内：底部黒色処理、 ミガキ 外：底部高台部貼 付け、ナデ		S-2h 区 m 層
5	土師器 高台付環	口径： 底径：(11.8) 器高：(4.4)	内：10YR5/4 にぶ い黄褐 外：7.5YR6/6 橙	緻密、黒色粒少量、 透明粒・白色粒や や多量	硬質	脚部裾部 から下半 1/4	内：ナデ 外：ナデ		oyyk 北 P
6	土師器 器環	口径： 底径： 器高：(3.1)	内：10YR7/4 ～ 6/1 にぶい黄橙～褐灰 外：10YR6/3 にぶ い黄橙	緻密、透明粒・黒 色粒・赤褐色粒少 量、白色粒多量	硬質	口縁部破 片	内：口縁部ヨコナ デ 外：口縁部ヨコナ デ		F12a
7	土師器 器環	口径： 底径： 器高：(2.6)	内：7.5YR6/4 にぶ い橙 外：10YR7/4 にぶ い黄橙	緻密、透明粒・黒 色粒・赤褐色粒少 量、白色粒多量	硬質	口縁部破 片	内：口縁部ヨコナ デ 外：口縁部ヨコナ デ		T24
8	土製紡錘 車	長径：5.9 短径：2.9 孔径：1.0	5YR5/4 ～ 3/1 黒褐	やや粗雑、白色粒・ 赤褐色粒・透明粒 多量	硬質	1/2 弱	外周ヘラケズリ。 上面・下面ミガキ	重量：30.8g	F13b

第 29 表 古代遺構外金属製品観察表

掲載 番号	種類	鍛冶関連遺物 構成表No.	出土位置
9	椀形鍛冶滓	36	SZ-1 c 区上面
10	椀形鍛冶滓	37	SZ-1
11	椀形鍛冶滓	38	SZ-1 c 区
12	椀形鍛冶滓	39	SZ-1 c 区
13	鉄製品 (棒状)	41	SZ-1
14	椀形鍛冶滓	46	SZ-66 d 区
15	工具付着滓	47	SZ-66 f 区
16	粒状の滓	48	SZ-66 d 区
17	鉄塊系遺物? (鉄片状)	49	SZ-66 d 区
18	鉄塊系遺物? (釘状)	50	SZ-66 d 区
19	鉄塊系遺物 (小塊状)	51	SZ-67 d 区
20	羽口	55	SZ-67 b2 区
21	椀形鍛冶滓	56	SZ-67 b1 区

掲載 番号	種類	鍛冶関連遺物 構成表No.	出土位置
22	椀形鍛冶滓	57	SZ-67 b 区
23	椀形鍛冶滓	58	SZ-67 f 区
24	椀形鍛冶滓	59	SZ-67 f 区
25	工具付着滓 (扁平)	60	SZ-67 f 区
26	工具付着滓 (角棒状)	61	SZ-67 f 区
27	粒状の滓	62	SZ-67 f 区
28	粒状の滓	63	SZ-67 f 区
29	鉄塊系遺物? (角棒状)	64	SZ-67 b2 区
30	鉄塊系遺物? (鉄片状)	65	SZ-67 f 区
31	鉄塊系遺物? (鉄片状)	66	SZ-67 f 区
32	炉壁	79	SD-3
33	炉壁	80	SD-3
34	炉壁 (製錬炉)	86	D8c

第6節 中世の遺構と遺物

1. 掘立柱建物跡

SB-108 (第199図、図版三一)

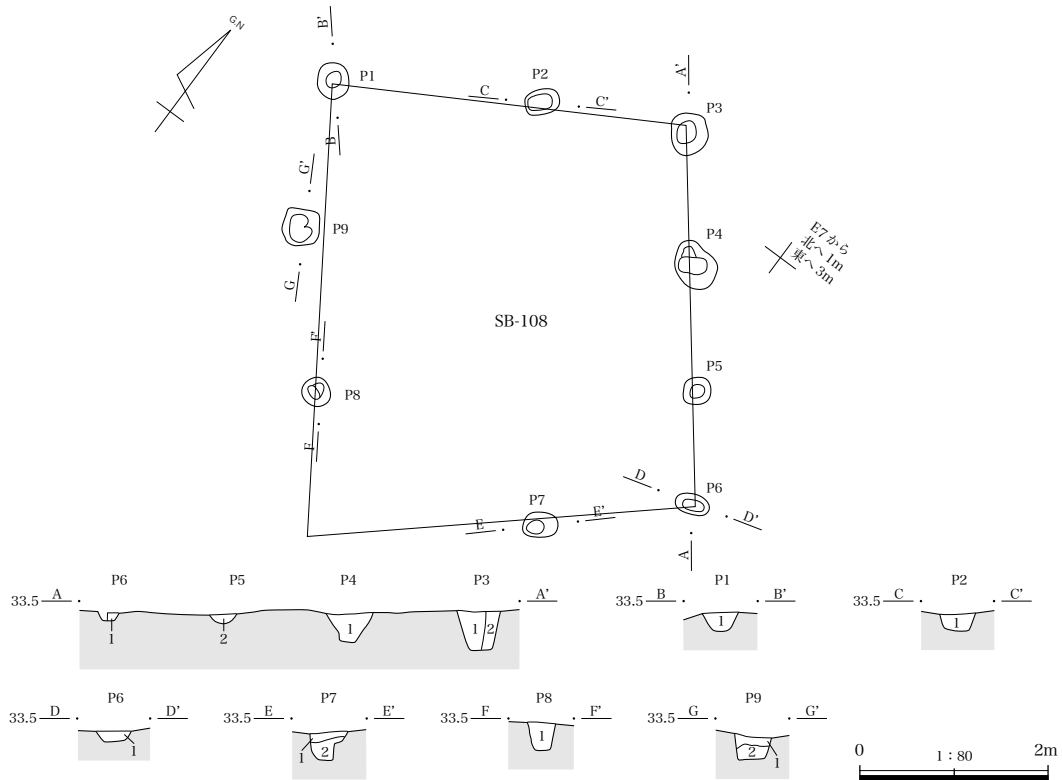
位置 D6d・D7c・E6b・E7a グリッドに位置する。

規模・形状 桁行3間、梁行2間の台形を呈する南北棟である。ピットの平面形は円形・方形・楕円形とばらつきが認められ、確認面での規模は20cm程のものと40cm程の2種に分類できる。柱穴掘方の深さをみると、P1・P2は20cm、P3が44cm、P4は30cm、P5・6が8cm、P7は30cm、P8は28cm、P9は24cmである。P1～3・6・9は断面台形、P5は底面が丸底であり、P8は円柱状である。P4の壁は北西側に緩やかな傾斜をもち、P7の壁は北東側に段をもつ。本遺構は、明瞭な柱痕跡・あたりは確認できなかった。南西コーナーの柱穴は未確認であるが、桁行総長4.2m・梁行総長3.8mの建物跡である。

重複 南西端の柱穴がSK-95によって壊されている。

覆土 ピットの覆土は暗褐色土が主体で、黒褐色土や黄褐色土を含むピットも見受けられる。掘方覆土・柱穴跡は確認できなかった。

出土遺物 SB-108で4点、SB-108P3で1点縄紋土器が出土しているが、本遺構と関わる遺物は無い。



SB-108 土層説明

P1	1 暗褐色土	ロームブロック極微量。しまりやや強い。	P6	1 暗褐色土	白色細粒・ローム粒微量。しまりやや強い。
P2	1 黄褐色土	地山ロームより暗い色調。ロームブロック・ローム粒微量。しまり強い。	P7	1 暗褐色土	ロームブロック多量、白色粒微量。しまり強い。
P3	1 黒褐色土	ロームブロック中量、ローム粒微量。しまりやや弱い。	2 暗褐色土	ロームブロック多量。しまり弱い。	
P4	1 暗褐色土	ロームブロック微量。しまり強い。	P8	1 暗褐色土	白色細粒極微量。しまりやや強い。
P5	1 灰褐色土	黒色ブロック多量。しまりやや強い。	P9	1 黒褐色土	ロームブロック・ローム粒少量。しまり弱い。
P9	1 暗褐色土	白色細粒微量。しまりやや強い。	2 黄褐色土	P2の1層に似る色調。P9・1層の黒褐色土がブロック状に微粒。しまりやや強い。	

第199図 SB-108 遺構実測図

SB-120 (第 200 図、図版三一)

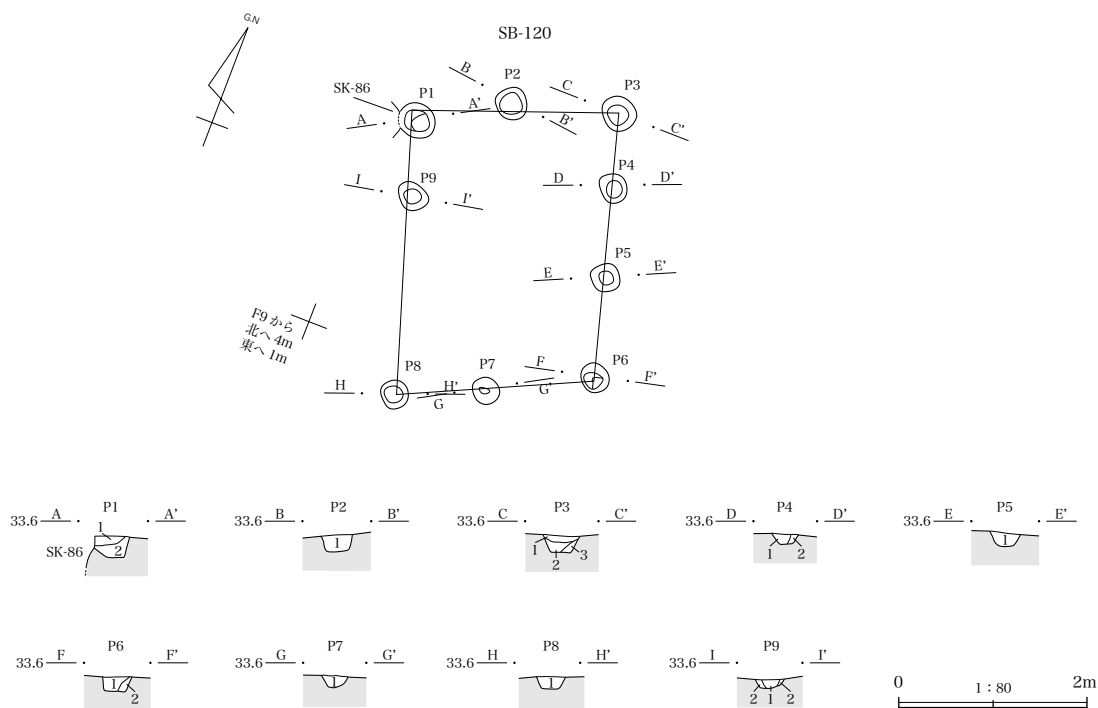
位置 E9a・E9c グリッドに位置する。

規模・形状 桁行 3 間、梁行 2 間の台形～平行四辺形を呈し、北面の P2 がやや北側へ張り出す南北棟である。柱穴掘方は円形で、確認面での平面規模は P3 の 38 cm を除き、すべて 20 cm 程である。柱穴掘方の深さは 10 cm 程の浅いものと、20 cm 程のもの 2 種に分類できる。本遺構のピットはすべて断面は台形である。すべての柱穴において、明瞭な柱痕跡・あたりは確認できなかった。桁行総長 3.16m・梁行総長 2.4m である。

重複 P8 と P9 の間に有していたであろう柱穴が SK-86 によって壊されている。

覆土 暗褐色土が主体で、黄褐色土や灰褐色土を含むピットも見受けられる。

出土遺物 SB-120P1 で縄紋土器 1 点・土師器 1 点が出土しているが、本遺構に伴う可能性は低いいため、ここでは図示していない。



SB-120 土層説明

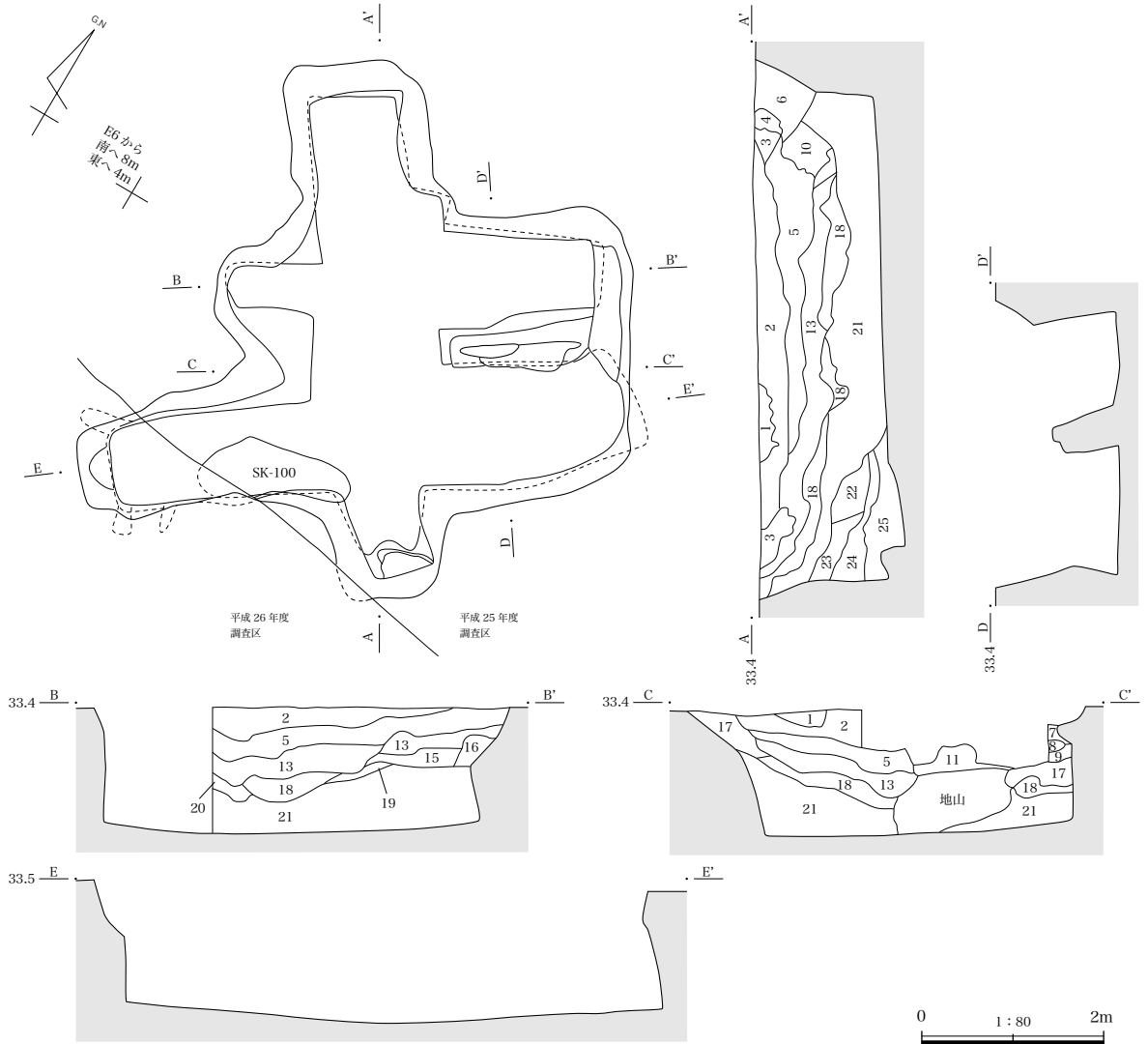
- | | | | | | |
|----|--------|----------------------------------|----|--------|----------------------------------|
| P1 | 1 灰褐色土 | ロームブロック微量。しまり強い。 | P6 | 1 暗褐色土 | ロームブロック中量、ローム粒少量、白色細粒微量。しまりやや弱い。 |
| | 2 暗褐色土 | ロームブロック・白色細粒微量。しまりやや強い。 | | 2 暗褐色土 | 1層よりやや暗い色調。ロームブロック多量。しまり強い。 |
| P2 | 1 暗褐色土 | ローム粒微量。しまり強い。 | P7 | 1 暗褐色土 | ロームブロック少量、ローム粒・白色細粒微量。しまり強い。 |
| P3 | 1 暗褐色土 | ローム粒微量。しまり強い。 | | 2 暗褐色土 | 1層よりやや明るい色調。ローム粒・白色細粒微量。しまりやや弱い。 |
| | 2 黄褐色土 | ローム粒少量、白色細粒微量。しまり強い。 | P8 | 1 暗褐色土 | ローム粒中量、白色細粒微量。しまりやや弱い。 |
| | 3 暗褐色土 | ローム粒中量。しまり強い。 | P9 | 1 暗褐色土 | ローム粒微量。しまりやや弱い。 |
| P4 | 1 暗褐色土 | ローム粒微量。しまり強い。 | | 2 黄褐色土 | 暗褐色土がブロック状に少量混じる。しまりやや弱い。 |
| | 2 黄褐色土 | ローム主体だがやや暗褐色気味な色調。暗褐色土混じる。しまり強い。 | | | |
| P5 | 1 暗褐色土 | ロームブロック中量、白色細粒微量。しまり強い。 | | | |

第 200 図 SB-120 遺構実測図

2. 地下式坑

今回の調査で、地下式坑を9基調査した。SK-106を除き、すべて複室構造の地下式坑である。本報告書では、地下式坑の計測は、以下の基準で行っている。

- 竪坑部から、対面する壁面まで直線的に引く軸を主軸とし、それに直交する最大幅の部分で副軸とする。
- 竪坑部と部屋に分け、両者の間にある区域を連結部とした。



SK-77 土層説明

1	暗褐色土	ローム粒多量、ロームブロックやや多量。しまりやや強い。	14	暗褐色土	ローム粒多量、ロームブロックやや多量、白色粒少量。しまりやや強い。
2	淡灰褐色土	ローム粒・白色粒やや多量。しまりやや強い。	15	黒褐色土	ローム粒多量、ロームブロックやや多量、白色粒少量。しまりやや強い。
3	淡褐色土	ローム粒多量、白色粒やや多量、ロームブロック少量。しまりやや強い。	16	暗褐色土	ローム粒多量、ロームブロック少量。しまりやや強い。(天井崩落土)
4	暗褐色土	ロームブロック多量、ローム粒やや多量、白色粒少量。しまりやや強い。	17	黒褐色土	ローム粒・ロームブロック多量、白色粒少量。しまりやや強い。
5	暗灰褐色土	ローム粒・白色粒やや多量。しまりやや強い。	18	黒褐色土	ローム粒・白色粒やや多量、ロームブロックやや少量。しまりやや強い。
6	淡褐色土	ローム粒やや多量、白色粒やや少量、ロームブロック少量。しまりやや強い。	19	暗褐色土	ローム粒多量、ロームブロックやや多量。しまりやや強い。
7	暗褐色土	ローム粒多量、ロームブロックやや少量、白色粒少量。しまりやや強い。	20	暗褐色土	ローム粒・ロームブロック多量、白色粒少量。しまりやや強い。
8	ローム (天井崩落土)		21	暗褐色土	ローム粒多量、ロームブロックやや多量、白色粒少量。しまりやや強い。(天井崩落土)
9	黒褐色土	ローム粒・ロームブロックやや多量、白色粒少量。しまりやや強い。	22	暗褐色土	ローム粒・ロームブロック多量。しまり強い。(天井崩落土)
10	淡褐色土	ローム粒多量、ロームブロック・白色粒やや多量。しまりやや強い。	23	暗褐色土	ローム粒・ロームブロックやや少量。しまりやや強い。(天井崩落土)
11	ローム (天井崩落土)		24	黒褐色土	ローム粒・ロームブロックやや多量。しまり強い。
12	黒褐色土	ローム粒多量、ロームブロックやや多量、白色粒やや少量。しまりやや強い。	25	暗褐色土	ローム粒・ロームブロックやや多量。しまりやや強い。(天井崩落土)
13	黒褐色土	ローム粒・白色粒やや多量、ロームブロック少量。しまりやや強い。			

第201図 SK-77 遺構実測図 (1)

SK-77 (第 201 ~ 203 図、第 30 表、図版三一・三二・七一)

位置 調査区中央西寄りの、E6d グリッドと F6b グリッドに位置する。

規模・形状 平面形は北に 1 室、東西にそれぞれ 2 室の計 5 室と連結部、竪坑部をもつ、歪んだ「キ」字状を呈する複室構造の地下式坑である。主軸を N-35° -W として、主軸長が約 5.9m・直交する副軸長約 6.1m、確認面からの深さ 1.5m である。上端平面は崩落のためか一部大きく変形している。底面はほぼ平坦だが、主軸直交軸でみると中心へ向かって緩やかに傾斜する。また、壁面はローム層で、遺構確認面から 60 cm 程下位の標高 32.710m 付近から、厚さ 15 cm 程の鹿沼軽石層の堆積がみられた。底面は固くしまったローム層である。

竪坑と想定されるものは南東方向に位置し、主軸よりやや東へ傾く。壁はほぼ垂直であり、40 cm 程ロームを掘り残す。底面は掘り残りローム直下が深く、ここから主軸方向へ、長さ約 80 cm、スロープ状に傾斜して主軸底面に至る。

便宜的に各部屋を主軸北部から時計回りに 1 室・2 室・3 室・4 室・5 室とする。各部屋の平面形は長方形を呈するが、3 室の南東辺・軸線が湾曲し、奥壁のラインも北西方向へ緩やかに向きを変えている。

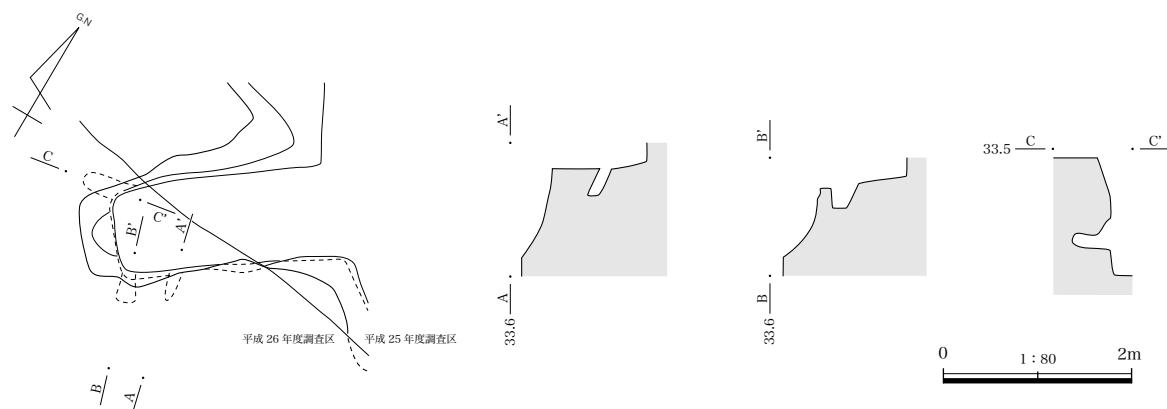
1 室は、ほぼ正方形に近い形態をしており、主軸長 1.04m・副軸長 1.04m である。2 室は途中で幅が狭まり、奥壁へと至る。主軸長は 1.72m、副軸長は 0.92m である。3 室は、主軸方向の壁面がオーバーハングし、直交軸方向にはやや緩やかに傾斜する。主軸長 2.28m・副軸長 1.36m である。4 室が全部屋で一番奥行きがあり、主軸長は 2.64m で、副軸長は 0.96m である。

5 室は、SK-77 の中で一番小さい部屋で、主軸長は 0.95m・副軸長は 0.48m である。西壁の平面プランは他の部屋とは異なり、歪んだ半円形を呈する。連結部は、主軸長 3.22m で副軸長は 1.40m である。

4 室の西壁隅には不整形の横穴が 3 カ所確認された (第 202 図)。第 202 図 A-A' に示した横穴は奥行き 30 cm、直径 10 cm で、底面より 38 cm の高さに位置している。B-B' に示す横穴は奥行き 20 cm、直径 24 cm で、底面より 50 cm 程の高さに位置する。C-C' で示す横穴は奥行き 38 cm である。横穴自体は直径 14 cm であるが、壁面側をやや広く掘り、その直径は 32 cm である。底面より 28 cm 程の高さに位置する。これらはすべて斜め上方へ傾斜しているが、A-A' に示した横穴は特に傾斜がつく。

重複 浅い不定形円形土坑である SK-100 が 4 室の覆土上位、確認面近くで重複しており、SK-77 → SK-100 である。

覆土 竪坑部の下位では、全体的にロームブロックを多く含む暗褐色土を主体とする 22 ~ 25 層がスロープ

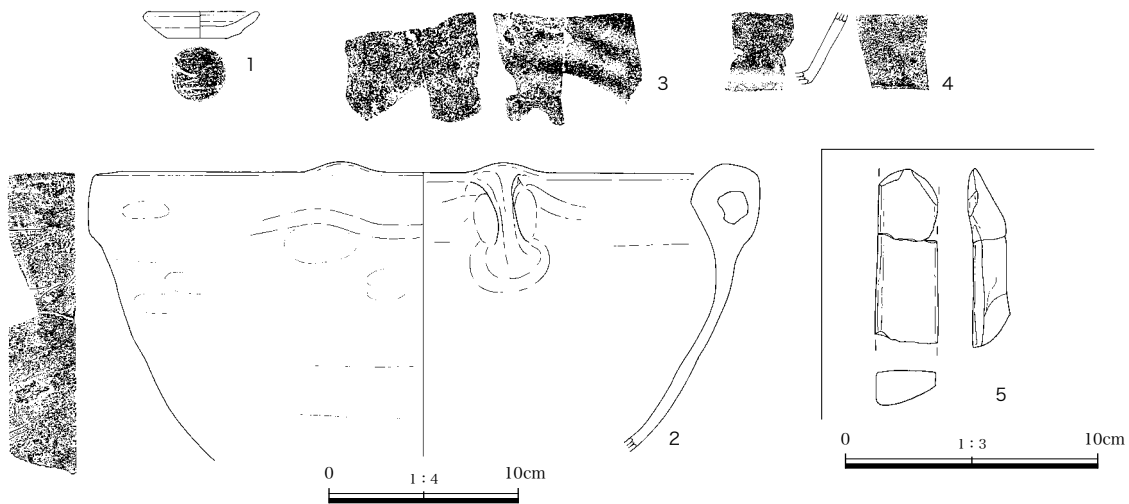


第 202 図 SK-77 遺構実測図 (2)

と思われる傾斜面まで堆積する。連結部～各部屋にかけては遺構底面を全面覆うようにローム粒・ロームブロックを多く含む暗褐色土の21層が最大で1m近く堆積しており、これが天井部の崩落土と思われる。それより上位になると黒色土や暗褐色土を中心とした層がレンズ状に堆積する。遺物はこれらの層からの出土が多い。全体的に白色粒を含む。即ち、最初に竪坑部からの自然堆積で埋没し、次に天井部が大きく崩壊、更にその後は残存していた天井や壁が崩落しながら埋没したと思われる。

出土遺物 すべて覆土上層から中層にかけてと、やや高い位置から出土している。第203図1は口縁部を一部欠くが、ほぼ完形のかわけである。底面から118.8cmの高さから出土する。2～4は内耳土器。外面にはススが多量に付着する。金雲母片を多く含む。すべて底面から90.1～115.7cmの高さから出土した。5は砥石である。底面から96cmの高さから出土する。

その他、図示できていないが縄紋土器491点・土師器2点・石器5点が出土している。



第203図 SK-77 遺物実測図

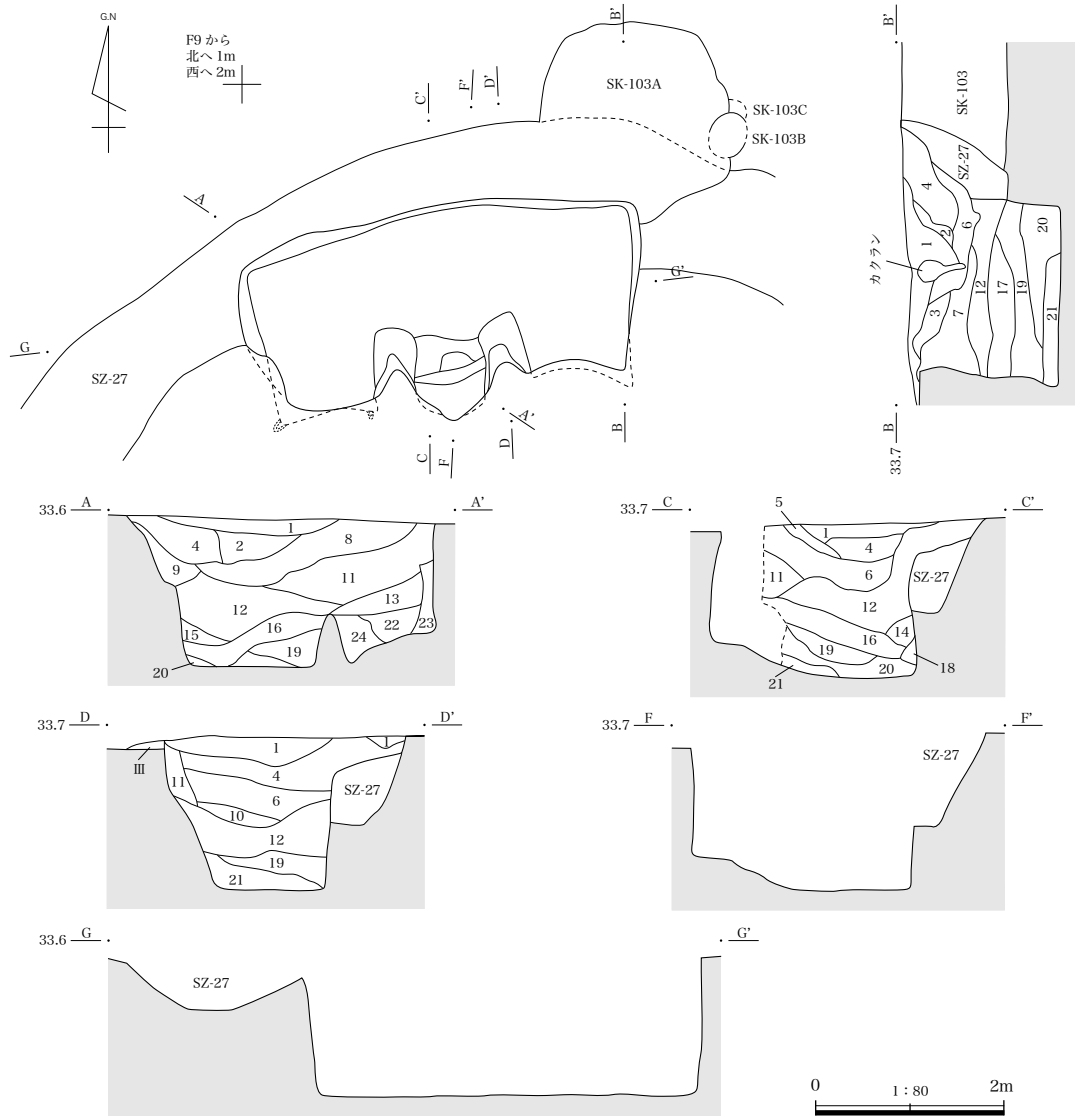
第30表 SK-77 遺物観察表

掲載番号	種類 器種	計測値 (cm)	色調 (内・外)	胎土 (石材)	焼成	残存率	技法 (内・外)	特徴・備考	出土位置
1	土師質 土器皿	口径：6.1 底径：3.1 器高：1.4	内：10YR6/3 にぶ い黄橙 外：2.5YR6/2 灰黄	緻密、黒色ガラス 質粒・透明粒・白 色粒やや多量	硬質	ほぼ完形	内：ロクロナデ、 底部ヨコナデ 外：ロクロナデ、 底部回転糸切り離 した後ヘラ削り	口縁内側から外側へ スス付着。灯明皿カ。	S-77 no.16
2	内耳土器	口径：(35.8) 底径： 器高：(15.5)	内：7.5YR4/4 褐 外：7.5YR3/3 暗褐	やや粗雑、黒色ガ ラス質粒微量、透 明粒・金雲母・少 礫多量	硬質	口縁部 1/2 体部一部	内：口縁部ヨコナ デ、体部ナデ 外：口縁部ナデ、 体部ナデ	内耳2カ所。内面一 部、外面全体的にス ス付着。外面体部に 押しつけるような強 いナデ。常陸産。	S-77a・b区 no.1,2,4, 11,15, 17,18
3	内耳土器	口径： 底径： 器高：(3.8)	内：7.5YR4/4 褐 外：7.5YR3/3 暗褐	やや粗雑、黒色ガ ラス質粒微量、透 明粒・金雲母・少 礫多量	硬質	体部から 底部破片	内：ナデ 外：ナデ、底部ナ デ	底部ナデ後、底部周 縁ミガキに近いナデ。 内面底スス付着。常 陸産。	S-77 no.7
4	内耳土器	口径： 底径： 器高：6.5	内：7.5YR4/4 褐 外：7.5YR3/3 暗褐	やや粗雑、黒色ガ ラス質粒微量、透 明粒・金雲母・少 礫多量	硬質	体部破片	内：ナデ 外：ナデ	拓本のみ。外面押し つけるような強いナ デ。外面にスス付着。 常陸産。	S-77 b 区 no.8
5	砥石	最大長：6.9 最大幅：2.4 最大厚：1.4		流紋岩				片面・両側面使用。 裏面破損。 重量：27.0g	S-77 no.5

SK-82 (第 204 ~ 206 図、第 31 表、図版三二・三三・七一)

位置 調査区中央、E8d・F8b・E9c・F9c グリッドに位置する。

規模・形状 長方形南辺中央の張出部分を竪坑部、この北側の長方形～台形部分を連結部、この左右を部屋



SK-82 土層説明

1 暗灰褐色土	ローム粒・白色粒少量、ロームブロック・炭化粒微量。しまりやや弱い。	12 黒色土	ローム粒・ロームブロック少量、炭化粒微量。しまり弱い。
2 灰褐色土	ローム粒・ロームブロック・炭化粒やや多量、白色粒少量。しまりやや弱い。	13 淡褐色土	ローム粒・ロームブロックやや多量、炭化粒微量。しまりやや弱い。
3 暗褐色土	ローム粒・ロームブロック多量、黒色ブロックやや多量。しまり弱い。	14 暗灰褐色土	ローム粒・ロームブロック少量。しまりやや強い。
4 黒褐色土	ローム粒・炭化粒微量。しまりやや弱い。	15 暗灰褐色土	ロームブロック少量、ローム粒やや少量、炭化粒微量。しまり弱い。
5 暗灰褐色土	ロームブロック少量、ローム粒やや少量、炭化粒・白色粒微量。しまりやや強い。	16 暗灰茶褐色土	ローム粒・ロームブロック少量、炭化粒微量。しまりやや弱い。
6 黒褐色土	ローム粒・炭化粒やや多量、ロームブロック少量、白色粒微量。しまりやや強い。	17 淡灰褐色土	ロームブロック多量、ローム粒やや多量。しまり弱い。
7 暗褐色土	ローム粒多量、ロームブロックやや多量。しまり弱い。(壁崩落土)	18 暗褐色土	ローム粒多量、ロームブロックやや多量。しまりやや弱い。
8 暗褐色土	ローム粒多量、ロームブロックやや多量、炭化粒微量。しまりやや強い。	19 黄褐色土	ローム粒やや多量、ロームブロック少量。しまりやや弱い。(壁崩落土)
9 暗灰褐色土	ロームブロック少量、ローム粒やや少量、炭化粒微量。しまり弱い。	20 暗褐色土	ローム粒・ロームブロックやや多量。しまり弱い。(崩落土)
10 灰褐色土	ローム粒多量、ロームブロックやや少量。しまりやや弱い。	21 暗黄褐色土	ロームブロック多量、ローム粒やや多量。しまりやや弱い。
11 暗灰褐色土	ローム粒少量、ロームブロック・炭化粒微量。しまりやや弱い。(一部黄褐色土を多量に含む)	22 灰褐色土	ローム粒・ロームブロック多量、炭化粒少量。しまり弱い。
		23 暗灰褐色土	ローム粒・ロームブロックやや多量。しまり弱い。
		24 淡灰褐色土	ローム粒・ロームブロック多量。しまり弱い。

第 204 図 SK-82 遺構実測図 (1)

とし、東側を1室、西側を2室とする。全体の平面形は、北側が弓張状になる長方形～「E」字状を呈する。主軸をN-10°-Wとして、主軸長が2.3m・直交する副軸長4.2m、確認面からの深さ1.6mである。壁面はローム層で、確認面から65cm程下層、標高32.800m付近で厚さ15cm程の鹿沼軽石の層を確認した。竪坑部の底面は他より若干浅く、南端には南北0.48m・東西0.68mの平場状部分がつくられている。ここから連結部底面に向かっては緩やかな傾斜となっている。

1室および2室は両者とも概ね長方形を呈し、南北軸の幅が1.7mであり、東西軸の幅は1室1.3m、2室1.2mである。いずれも片袖状の部屋で、南壁はオーバーハングし、両隅が大きく突出して南辺が弓状となる等、線対称に近い作りとなっている。また、底面は両者ともほぼ平坦である。連結部は主軸長1.4m、副軸長は1.48mである。

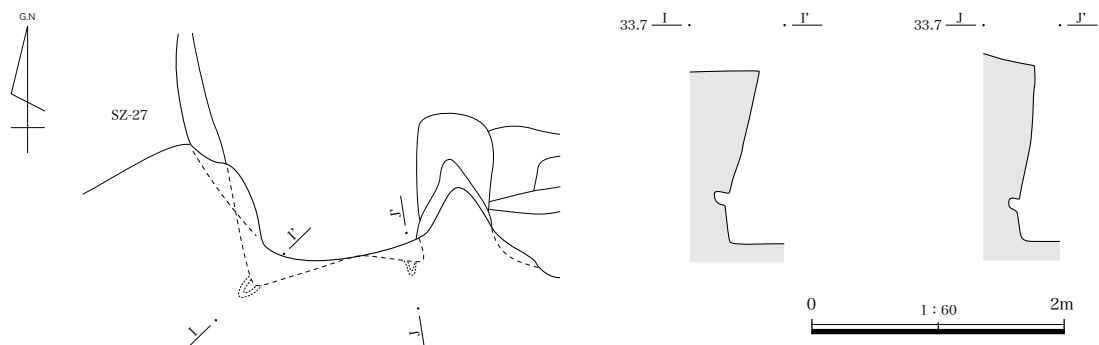
また、2室のみ南壁角に直径12cm、奥行き10cm程の斜め上方へ傾斜する横穴が、底面より20～30cmの高さから2カ所確認された。

重複 SZ-27、SK-103aと重複しており、新旧関係はSK-103a→SZ-27→SK-82である。

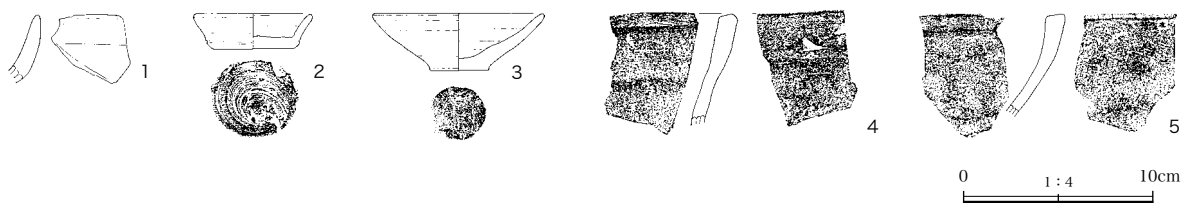
覆土 覆土は自然堆積と思われるが、7・11・19層から24層にかけては、ローム粒やロームブロック主体の黄褐色土や暗黄褐色土・褐色土が堆積しており、これらが天井および壁の崩落土を含む層と思われる。このことから天井部が存在していたと思われる。北側の堆積土は黒褐色～黒色土の層が目立つ。これは、本遺構の埋没過程で、重複するSZ-27（横倉戸館9号墳）周溝覆土の崩落・堆積によるものと考えられる。

出土遺物 出土遺物は、すべて覆土上層～中層の、全体的にやや高い位置から出土している。第206図1～3は土師質土器の皿である。1は軟質で、細かい粘土を使用している。2は小形の皿で、内面にスガが付着しており、灯明具として用いられたと思われる。胎土には金雲母片を多く含む。3は中形の皿。若干内湾気味に立ち上がる。4・5は内耳土器で、外面にはスガが多量に付着する。底面からの出土位置は、2は81cm、3は55cm、5は140cmの高さから出土する。

また、図示していないが、縄紋土器277点・石器5点・中近世の土師質土器2点・鉄・被熱礫等が出土している。



第205図 SK-82 遺構実測図(2)



第206図 SK-82 遺物実測図

第 31 表 SK-82 遺物観察表

掲載番号	種類器種	計測値 (cm)	色調 (内・外)	胎土	焼成	残存率	技法 (内・外)	特徴・備考	出土位置
1	土師質土器皿	口径： 底径： 器高：(3.6)	内：2.5Y8/2 灰白 外：2.5Y8/2 灰白	緻密、黒色ガラス質粒・赤色粒量	軟質	口縁部破片	内：磨滅のため不明 外：ロクロナデカ	内外面磨滅が著しい。	S-82
2	土師質土器皿	口径：(6.2) 底径： 器高：(1.9)	内：10YR5/3～4/1 褐灰 外：10YR5/2 灰黄褐	緻密、白色粒微量、金雲母多量	硬質	底部ほぼ完存 口縁から体部 1/4	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、底部回転糸切り	内面に多量のスス付着。灯明皿。底部内面剥離。常陸産。	S-82 no.6
3	土師質土器皿	口径：(9.0) 底径： 器高：(3.0)	内：2.5Y7/3 浅黄 外：2.5Y8/3 淡黄	やや緻密、黒色ガラス質粒・白色粒少量、赤色粒微量	やや硬質	底部完存 口縁から体部 1/2 弱	内：口縁～体部ロクロナデ、底部一方向にナデ 外：ロクロナデ、底部回転糸切り後ナデ	底部内面を一方に 4 回ナデ。底部の 1/3 だれる。	S-82 no.8
4	内耳土器	口径： 底径： 器高：(6.2)	内：7.5YR5/4 にぶい褐 外：7.5YR3/1 黒褐	やや粗雑、黒色ガラス質粒微量、金雲母多量、少礫やや多量	硬質	口縁部破片	内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部ナデ	胴部外面にスス付着。常陸産。	S-82 no.5
5	内耳土器	口径： 底径： 器高：(5.8)	内：5YR4/4 にぶい赤褐 外：5YR3/1～1.7/1 黒褐～黒	やや粗雑、黒色ガラス質粒微量、金雲母多量、少礫やや少量	硬質	口縁部破片	内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部ナデ	胴部外面にスス付着。常陸産。	S-82 b2 区

SK-86 (第 207・208 図、第 32・33 表、図版三三・三四・七二)

位置 調査区中央の、E8b・E8d・E9a・E9c グリッドに位置する。

規模・形状 北に 1 室、東西にそれぞれ 1 室の 3 室と、竪坑部からなる「十」字状を呈している。各部屋の間で十字の中心部を連結部とする。主軸を N-2° -E として、主軸長が 4.5m・直交する軸長 3.4m、確認面からの深さ 1.5m である。ローム層・鹿沼軽石層を掘り込んで作られており、鹿沼軽石層は、確認面から 50 cm 程下位の標高 32.840m 付近で、10～15 cm 程堆積する状況が確認された。底面はローム層で、硬くしまっている。

竪坑部の平面形は楕円形を呈している。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は 1 段の段差がつき、連結部へ向かって緩やかに傾斜している。また、竪坑部南側にはスロープ状の遺構が確認された。スロープ状遺構は東西の幅 3.14m の浅い掘り込みで、主軸から若干東へ寄る位置に、深さ 1.1m 程のピットが付属する。これらのスロープ状遺構およびピットは、別遺構の可能性もあるが、竪坑入口に係る施設の可能性を考える。

各部屋だが、北側から時計回りに 1 室・2 室・3 室と仮称する。1 室の主軸長は 1.6m・幅は 2.3m。2 室の主軸長は 1.2m・幅は 1.0m。床面は中心に向かって緩やかに傾斜をする。3 室は主軸長が 0.9m・幅が 1.2m。奥壁に 1 カ所の窪みがある。また、1・3 室の隅はオーバーハングをする。連結部は主軸長 1.12m、副軸長が 1.16m である。

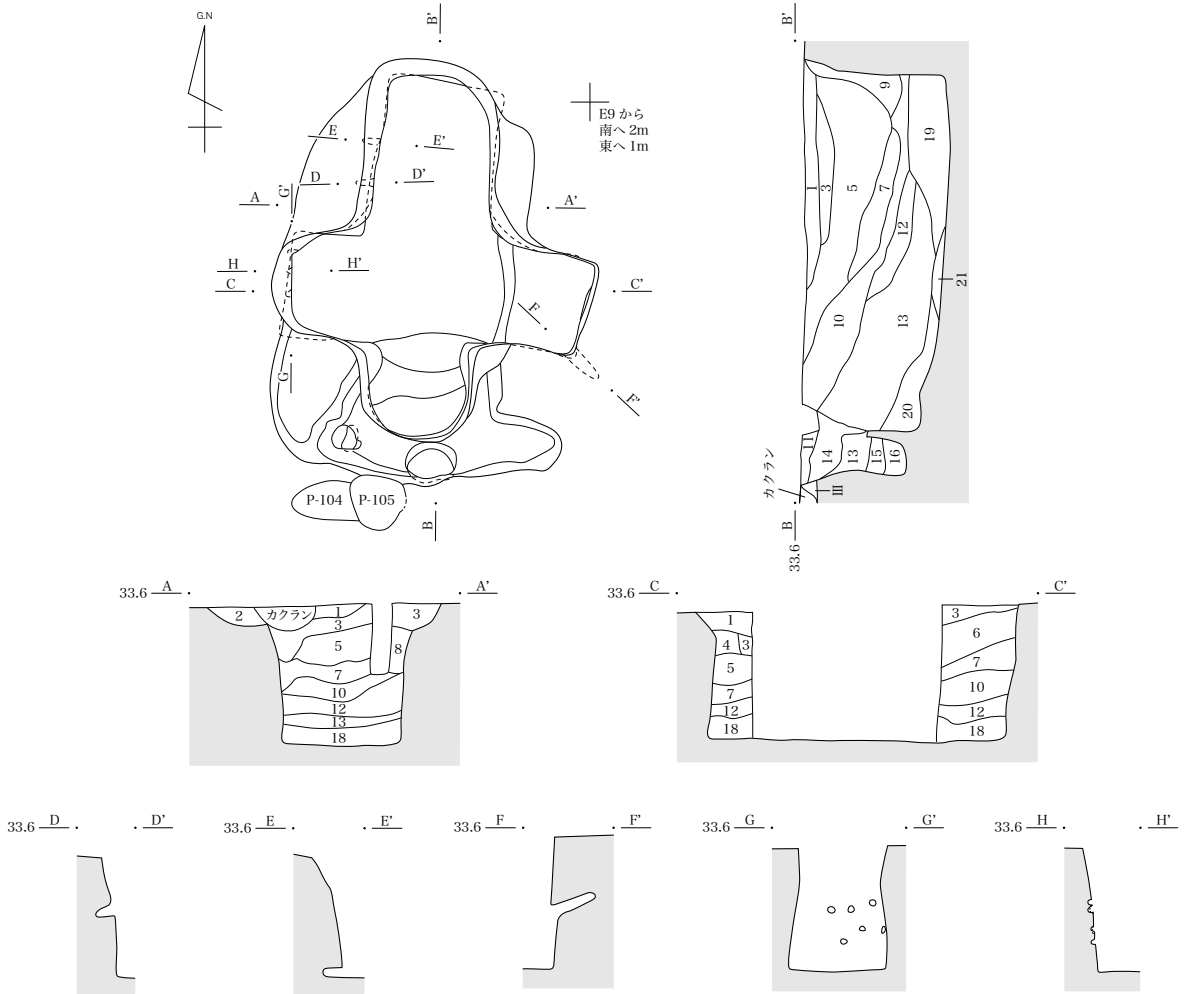
本遺構の壁面には多数の横穴が確認された (第 207 図)。1 室は西壁に直径 10 cm、奥行き 20 cm 程の横穴が 2 カ所ある。第 207 図 D-D' に示す横穴は底面から 65 cm の高さ、E-E' に示す横穴はほぼ底面と同じ高さに掘られる。2 室には南東隅に 1 カ所横穴が掘り込まれる (F-F')。直径 10 cm、奥行き 40 cm の細長い横穴で、上方へ傾斜をする。3 室には、直径 7 cm 程、奥行き 5 cm 程の小形の横穴が 6 カ所確認された (G-G')。底面から 30～70 cm までの間に位置しており、一部は横一列に並ぶようにもみえる。

重複 SI-85、P-104・105、SB-120 と重複し、新旧関係は SI-85 → P-104・105、SB-120 → SK-86 となる。

覆土 覆土は、自然堆積と思われる。4・6・14 層をはじめとするロームを多く含む層は、埋没の過程で壁等が崩落していったものと考えられる。天井部の大きな崩落は 12・13 層と考えられる。

出土遺物 覆土中から出土した土師質土器の皿1点・瓦1点を図示した。第208図1の土師質土器の小形皿はロクロを使用している。2の瓦は、凸面の一部が黒色になっている。焼きが甘く、磨滅が著しい。砥石として転用された可能性もある。3は炉壁片。古代に帰属する可能性が高いが、ここに図示する。

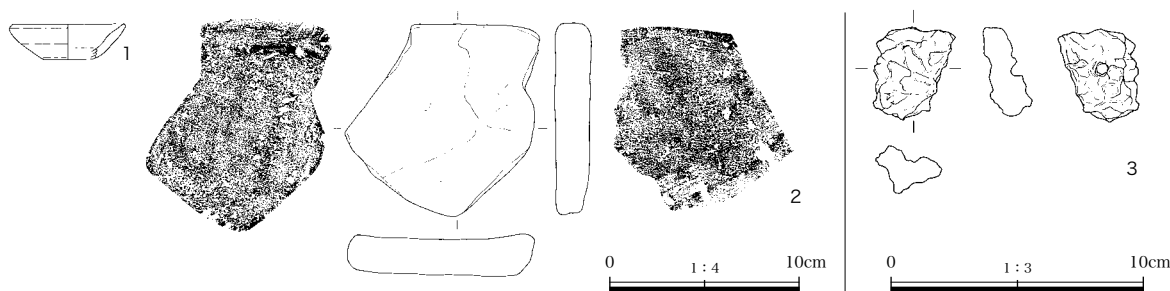
また、図示してはいるが、本遺構からは縄紋土器241点・土製品2点・石器9点が出土している。



SK-86 土層説明

- | | | |
|---|--|--|
| <p>1 暗灰褐色土 ローム粒・白色粒少量、ロームブロック・炭化粒微量。しまり強い。</p> <p>2 暗灰褐色土 ロームブロック少量、ローム粒・炭化粒微量。しまりやや弱い。</p> <p>3 灰褐色土 ローム粒少量、ロームブロックやや少量、炭化粒・白色粒微量。しまり強い。</p> <p>4 暗褐色土 ローム粒多量、ロームブロック・黒土ブロック少量。しまり強い。(壁崩落土)</p> <p>5 暗灰褐色土 ローム粒やや多量、炭化粒・白色粒少量、ロームブロックやや少量。しまりやや強い。</p> <p>6 黄褐色土 (天井崩落土)</p> <p>7 黒褐色土 ロームブロック少量、ローム粒やや少量、炭化粒微量。しまりやや弱い。</p> <p>8 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。しまりやや弱い。</p> <p>9 暗灰褐色土 ロームブロック多量、ローム粒やや多量、炭化粒微量。しまり弱い。</p> <p>10 暗灰褐色土 ローム粒・ロームブロックやや多量、KPブロック少量、炭化粒微量。しまりやや弱い。</p> | <p>11 灰褐色土</p> <p>12 暗褐色土</p> <p>13 黄褐色土</p> <p>14 淡黄灰褐色土</p> <p>15 暗灰褐色土</p> <p>16 黒褐色土</p> <p>17 黒褐色土</p> <p>18 褐色土</p> <p>19 暗黄褐色土</p> <p>20 暗灰褐色土</p> <p>21 暗褐色土</p> | <p>ローム粒やや多量、白色粒微量。しまりやや強い。ローム粒・ロームブロック多量。しまり弱い。(ローム主体崩落土)</p> <p>ローム粒・ロームブロック多量。しまり弱い。(ローム主体崩落土)</p> <p>ローム粒多量、ロームブロック微量。しまりやや強い。ローム粒やや多量、ロームブロック少量、炭化粒微量。しまり弱い。</p> <p>ローム粒・ロームブロックやや多量、炭化粒少量。しまり弱い。</p> <p>ローム粒・ロームブロック多量。しまり弱い。</p> <p>ローム粒・ロームブロックごく多量。しまり弱い。(ローム主体崩落土)</p> <p>(天井崩落土)</p> <p>ローム粒やや多量、ロームブロック・黒土ブロック少量。しまり弱い。</p> <p>ローム粒・ロームブロック多量、黒土ブロック少量、炭化粒微量。しまり強い。</p> |
|---|--|--|

第207図 SK-86遺構実測図



第 208 図 SK-86 遺物・鍛冶関連遺物実測図

第 32 表 SK-86 遺物観察表

掲載番号	種類 器種	計測値 (cm)	色調 (内・外)	胎土	焼成	残存率	技法 (内・外)	特徴・備考	出土位置
1	土師質 土器皿	口径：(6.2) 底径：(2.4) 器高：(1.8)	内：10YR7/3 にぶい 黄橙 外：10YR8/3 浅黄色	やや緻密、黒色ガラス質粒・赤褐色粒・白色粒微量、黒色粒やや多量	やや硬質	口縁部から体部 1/4	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ		S-86
2	平瓦	口径： 底径： 器高：(10.2)	凹面：5Y4/1 灰 凸面：2.5Y8/3 淡黄	緻密、黒色ガラス粒・透明ガラス粒やや多量、赤褐色粒・白色粒微量	やや軟質	破片	凹：ナデ 凸：ナデ	一部磨滅痕あり。砥石転用カ。	S-86

第 33 表 SK-86 鍛冶関連遺物観察表

掲載番号	種類	鍛冶関連遺物 構成表No.	出土位置
3	炉壁	74	覆土中

SK-87 (第 209・210 図、第 34 表、図版三四・七二)

位置 調査区中央やや東側の、F9a・F9b・F9c グリッドに位置しており、SA-2 盛土除去後に確認した。

規模・形状 平面形は部屋を 2 室と各部屋の連結部、竪坑部をもつ「干」字状を呈している。主軸を N-8°-E として、主軸長 4.2m・直交する軸長 2.6m、確認面からの深さ 1.4m である。壁面はローム層で、確認面から 70 cm 程下位、標高 32.700m 付近で、厚さ 10～15 cm 程堆積する鹿沼軽石の層を確認した。

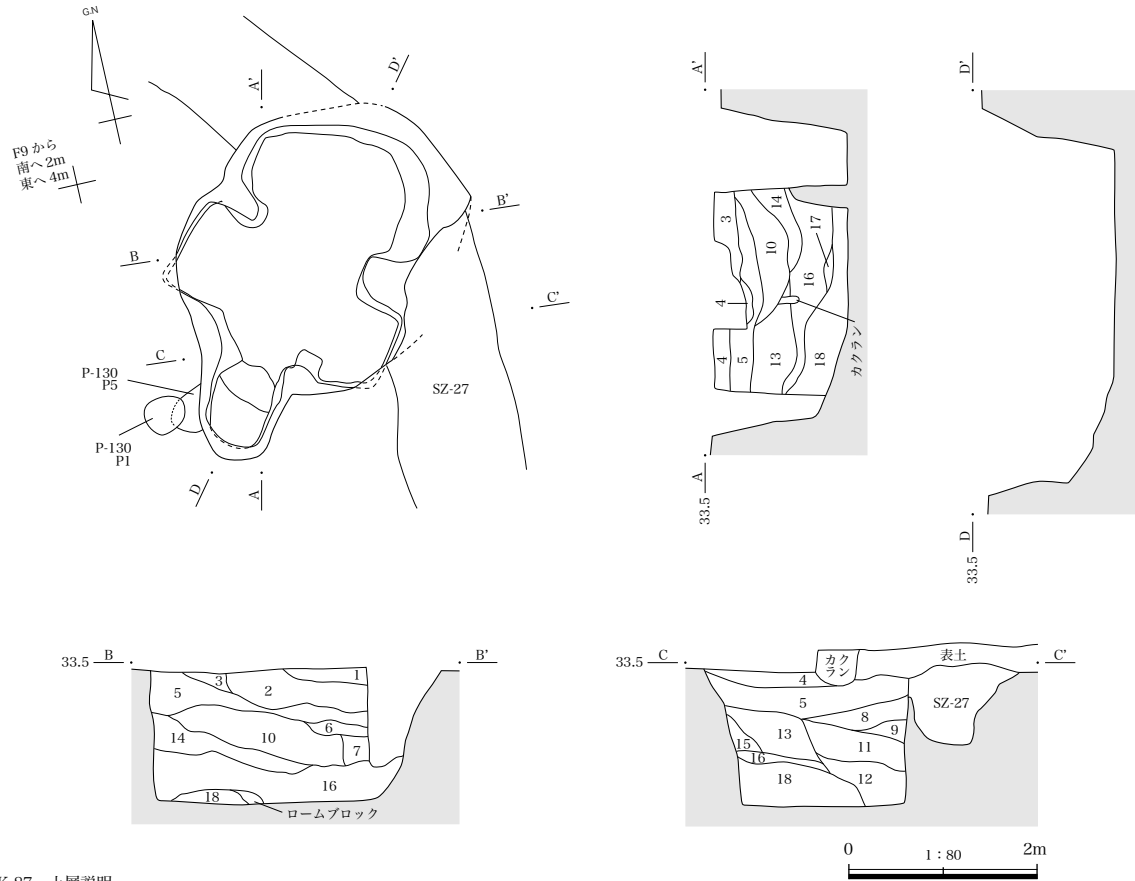
底面は全体的に硬化が著しく、竪坑部の底面は地山を掘り残して北側の部屋に向けて傾斜をつけている。竪坑部からみて、奥の部屋を 1 室、手前の部屋を 2 室とし、真ん中の空間地を連結部とする。1 室はやや丸みを帯び、長方形にはならない。主軸長 1.04m で、副軸長は 1.64m である。2 室は主軸からみた両側とも、奥へ向かって広がる、台形状の平面形を呈するやや歪んだ方形である。主軸長は 0.96m で、副軸長は 2.44m である。連結部は主軸長 0.4m で副軸長は 1.2m と、副軸に細長い形状となる。竪坑部と 1 室南端との間に仕切り状にロームを掘り残す部分がある (C-C' ライン、図版三四)。基本的に壁面は垂直気味に立ち上がるが、上端では崩落のためか一部傾斜が付く。本遺構では、他の地下式坑にみられる壁面の小穴は確認できなかった。

重複 SA-2、SZ-27、S-131P5 と重複し、新旧関係は SZ-27、S-131P5 → SK-87 → SA-2 となる。

覆土 覆土は、上層からローム粒やロームブロックを主体とする黄褐色土や暗褐色土、黒褐色土が堆積する。特に 16・17 層はロームが主体的で、天井および壁の崩落土と思われる。また、最下層に堆積する 18 層は、竪坑部では厚く堆積し、奥壁に向かうにつれて薄くなる様相から、竪坑部から流入した自然堆積の可能性がある。SZ-27 (横倉戸館 9 号墳) 周溝を掘り込んで壁面とする箇所では、壁としていた周溝覆土が崩落していると思われる。

出土遺物 遺物はすべて覆土上層から中層にかけて出土しており、特に上層からの出土が多いとの調査所見がある。第 210 図 1 は内耳土器。外面に多量のススが付着する。胎土に金雲母片を多量に含む。

図示してはいないが、縄紋土器 135 点・石器 2 点・土師器 3 点が出土している。



SK-77 土層説明

- | | |
|---|--|
| <p>1 暗褐色土 ロームブロック多量、ローム粒少量。しまりやや強い。</p> <p>2 黄褐色土 ロームブロック・黒色ブロック多量。ローム主体。しまり強い。(天井崩落土カ)</p> <p>3 黄褐色土 ローム主体。黒褐色土が少量混じるロームブロック微量。しまり強い。</p> <p>4 黒褐色土 ローム多量、ローム粒・ロームブロック中量、白色細粒微量。しまりやや強い。</p> <p>5 黒褐色土 ローム粒多量、ロームブロック・白色細粒少量、炭化物粒微量。しまり強い。</p> <p>6 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック中量。(ローム粒全面にまばら)しまりやや弱い。</p> <p>7 黒褐色土 ローム粒多量。しまり弱い。</p> <p>8 暗褐色土 黒褐色土と暗褐色土の混土。ローム粒・ロームブロック中量。しまりやや強い。</p> <p>9 暗褐色土 ロームブロック多量。しまり弱い。</p> | <p>10 黒褐色土 ローム粒少量、ロームブロック・白色細粒微量。しまり強い。</p> <p>11 黄褐色土 ローム主体に黒褐色土混じる。ロームブロック・黒褐色ブロック少量。しまりやや弱い。</p> <p>12 明褐色土 ローム粒・ロームブロック少量。しまりやや弱い。</p> <p>13 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少量。しまり強い。</p> <p>14 暗褐色土 ローム粒微量。しまりやや弱い。</p> <p>15 黒褐色土 ローム粒多量、ロームブロック少量。しまり強い。</p> <p>16 黄褐色土 1層より明るい色調。黒褐色土がブロック状に含まれる。(ローム主体)ローム粒・ロームブロック少量。しまり強い。(天井崩落土カ)</p> <p>17 黄褐色土 ローム主体。7層より若干明るい色調。ローム粒微量。しまり弱い。(天井崩落土カ)</p> <p>18 暗灰褐色土 ローム粒少量。黒褐色土2~5cm大のブロック状に少量含む。しまり強い。</p> |
|---|--|

第209図 SK-77 遺構実測図



第210図 SK-77 遺物実測図

第 34 表 SK-87 遺物観察表

掲載番号	種類器種	計測値 (cm)	色調 (内・外)	胎土	焼成	残存率	技法 (内・外)	特徴・備考	出土位置
1	内耳土器	口径：(34.0) 底径：(23.8) 器高：(17.0)	内：7.5YR6/4 にぶ い橙 外：7.5YR5/3 にぶ い橙	やや粗雑、黒色ガラス質粒微量、少 礫やや多量、金雲母多量	硬質	1/4	内：口縁部ヨコナ デ、体部ナデ、底 部ナデ 外：口縁部ヨコナ デ、体部ナデ、底 部ナデ	内面は比較的丁寧な ナデだが、外面は全 体的に凹凸が残る荒 めのナデ。内面一部、 外面にスス付着。底 部外面周縁ミガキに 近いナデ。	S-87

SK-95 (第 211・212 図、第 35・36 表、図版三五・七二)

位置 調査区中央西寄りの、E7 グリッドに位置する地下式坑である。

規模・形状 北から北東部にかけて扇状に広がる部屋を 1 室、南西の部屋を 2 室、両部屋の間を連結部とし、南南東方向に竪坑部をもつ。また、東から北東方向へ延びる、長さ 2.08m・幅約 50 cm の細長い形状のスロープ状遺構が付随する。

主軸を N-29° -W として、主軸長が 4.3m・直交する軸長 4.1m、確認面からの深さ 1.3m である。上端平面は南から南東にかけて大きく崩落しており、歪である。底面はほぼ平坦。壁面はローム層で、確認面から 70 cm 程下層、標高 32.690m 付近で、厚さ 15 cm 程の鹿沼軽石の層を確認した。

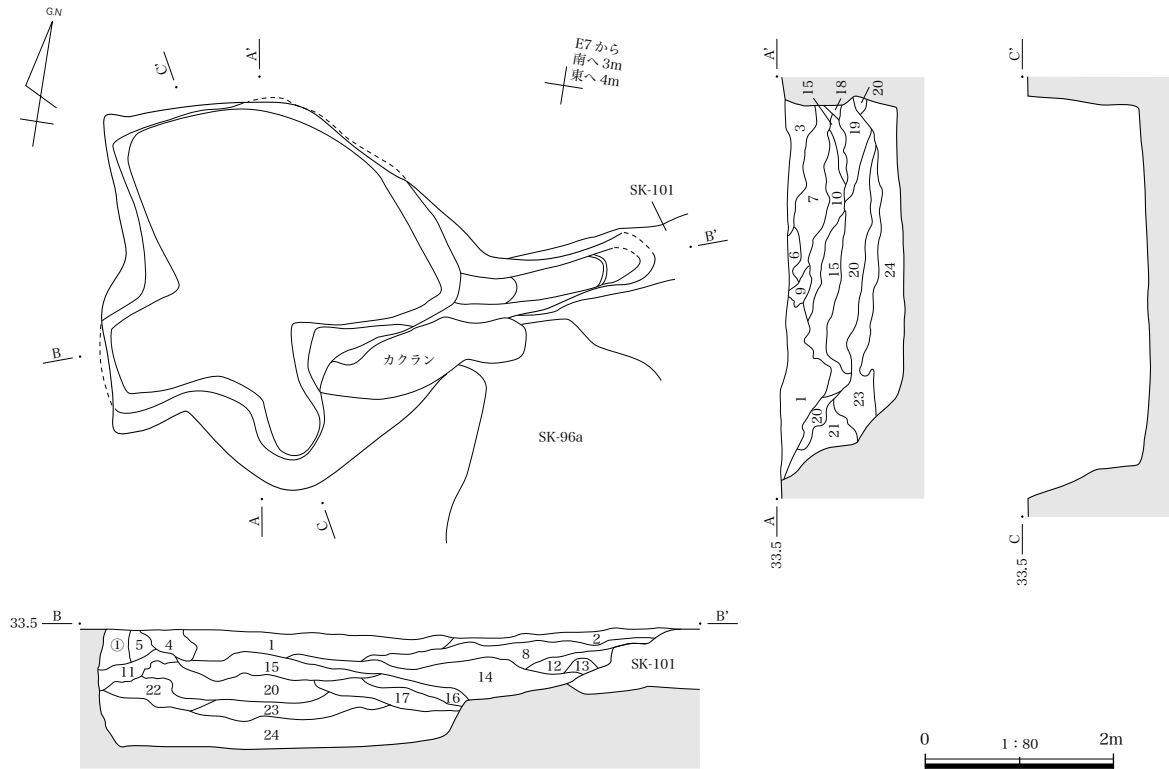
竪坑部は南南東へ向いており、平面形は楕円形である。底面にはロームの掘り残し等はみられず、概ね連結部や 1 室と同じ深さである。1 室は北東側へ扇状に膨らみ、主軸長は 2.0m で、副軸長は 3.6m である。2 室の壁面はやや緩やかな弧状を描き、主軸長 0.94m・副軸長 0.90m である。一部天井が残存していたが、調査段階で崩落したため平面図では表現できていない。両部屋間の連結部は、平面形態は三角形で、1 室側の辺が 1.28m、2 室側の辺は 1.06m、竪坑部側の辺は 1.00m と二等辺三角形に近い形状である。スロープ状遺構は数カ所の段差をもっている。1 室の底面とは 40 cm 程の比高差がある。

重複 東側で SK-101、北西で SB-108 と重複している。SK-101 と SB-108 についての前後関係は不明である。また、南東で SK-96a と隣接しており、重複しているようにも見えるが、攪乱が大きく入るため関係は不明である。

覆土 大多数の層がローム粒・ロームブロックを多く含む。5・23・24 層は天井崩落土の可能性があり、24 層は底面を全面覆った状態で堆積している。また、5 層を除くすべての層に白色粒がみられる。

出土遺物 本遺構に伴うと想定される遺物は、第 212 図 1 の挿鉢のみである。14 本の工具で挿目を整形する。竪坑部付近から、底面より 1m 程上位で出土している。

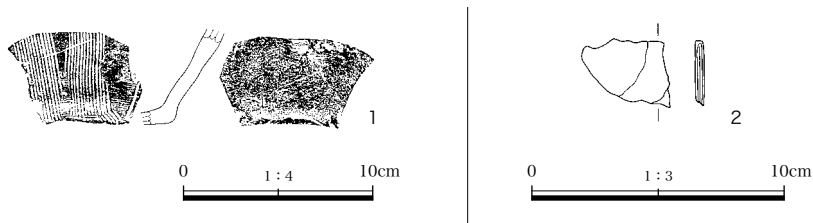
図示してはいないが、縄紋土器 133 点・土師器 5 点・石器 5 点・土製品 1 点が出土している。



SK-95 土層説明

- | | |
|--|--|
| <p>1 灰褐色土 白色粒多量、ローム粒やや多量、ロームブロックやや少量。しまりやや強い。</p> <p>2 暗灰褐色土 ローム粒・白色粒多量、ロームブロックやや多量。しまりやや強い。</p> <p>3 淡灰褐色土 白色粒多量、ローム粒・ロームブロックやや多量。しまり強い。</p> <p>4 黒褐色土 白色粒やや多量、ロームブロック少量、ローム粒やや少量。しまり強い。</p> <p>5 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。しまり強い。</p> <p>6 暗褐色土 ローム粒多量、ロームブロックやや多量、白色粒やや少量。しまりやや強い。</p> <p>7 暗灰褐色土 ローム粒・ロームブロック・白色粒やや多量。しまりやや強い。</p> <p>8 黒褐色土 ローム粒・白色粒やや多量、ロームブロックやや少量。しまりやや強い。</p> <p>9 淡灰褐色土 ローム粒多量、ロームブロック・白色粒やや少量。しまりやや強い。</p> <p>10 暗褐色土 ローム粒多量、ロームブロックやや多量、白色粒少量。しまりやや強い。</p> <p>11 暗灰褐色土 ローム粒多量、ロームブロックやや多量、白色粒少量。しまりやや強い。</p> <p>12 暗褐色土 ローム粒・ロームブロックやや多量、白色粒やや少量。しまりやや強い。</p> <p>13 黒褐色土 ローム粒多量、ロームブロックやや多量、白色粒少量。しまりやや強い。</p> | <p>14 暗褐色土 ローム粒多量、ロームブロックやや多量、白色粒少量。しまりやや強い。</p> <p>15 黒褐色土 白色粒やや多量、ローム粒・ロームブロックやや少量。しまりやや強い。</p> <p>16 暗灰褐色土 ローム粒・ロームブロックやや多量、白色粒少量。しまりやや強い。</p> <p>17 暗褐色土 ローム粒・ロームブロックやや多量、白色粒やや少量。しまりやや強い。</p> <p>18 暗褐色土 ローム粒多量、ロームブロック・白色粒少量。しまりやや強い。</p> <p>19 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量、白色粒少量。しまりやや強い。</p> <p>20 黒褐色土 ローム粒・白色粒やや多量、ロームブロックやや少量。しまりやや強い。</p> <p>21 暗褐色土 ローム粒・ロームブロックやや多量、白色粒やや少量。しまりやや強い。</p> <p>22 暗褐色土 ローム粒・ロームブロックやや多量、白色粒少量。しまりやや強い。</p> <p>23 淡灰褐色土 ローム粒・ロームブロックやや多量、白色粒少量。しまりやや強い。(天井崩落土カ)</p> <p>24 暗褐色土 ロームブロックやや多量、ローム粒・白色粒少量。しまり強い。(天井崩落土カ)</p> <p>① 天井残存部 (後に崩落)</p> |
|--|--|

第 211 図 SK-95 遺構実測図



第 212 図 SK-95 遺物実測図

第 35 表 SK-95 遺物観察表

掲載番号	種類器種	計測値 (cm)	色調 (内・外)	胎土	焼成	残存率	技法 (内・外)	特徴・備考	出土位置
1	土師質土器播鉢	口径： 底径： 器高：(5.0)	内：7.5YR6/4 にぶい橙 外：7.5YR6/6 橙	やや緻密、黒色粒・白色粒・透明粒少量	硬質	体部から底部破片	内：ナデ後播面成形。体部下半～底部内面播面成形 外：体部ナデ、底部粗いナデ後外周に丁寧なナデ	14本のハケ状工具による播面成形。	S-95 no.1

第 36 表 SK-95 金属製品観察表

掲載番号	種類	鍛冶関連遺物構成表№	出土位置
2	鉄製品 (滓板状不明)	75	覆土中

SK-96a (第 213 ～ 215 図、第 37・38 表、図版三五・三六・七二)

位置 査区中央西寄りの、E7c・E7d グリッドに位置する。

規模・形状 長方形の部屋を 2 部屋と竪坑部をもつ、いびつな「十」字状を呈する。また、南東方向へは本遺構に付随すると思われる土坑状の掘り込みが確認されている。規模は、主軸を N-60° -W として、主軸長が 3.8m・直交する副軸長 3.0m、確認面からの深さ 1.3m である。確認面から 55 cm 程下がった、標高 32.700m 付近で、厚さ 15 cm 程の鹿沼軽石層を確認した。

竪坑部は長楕円形の平面形を呈する。竪坑部底面および周辺が各部屋より低く、2 室底面より 22 cm 程低い。上端平面は、北・南・西側が大きく崩落している。1 室は主軸 1.16m・直交する副軸で 3.00m である。2 室は主軸 1.00m・副軸 1.62m の規模である。

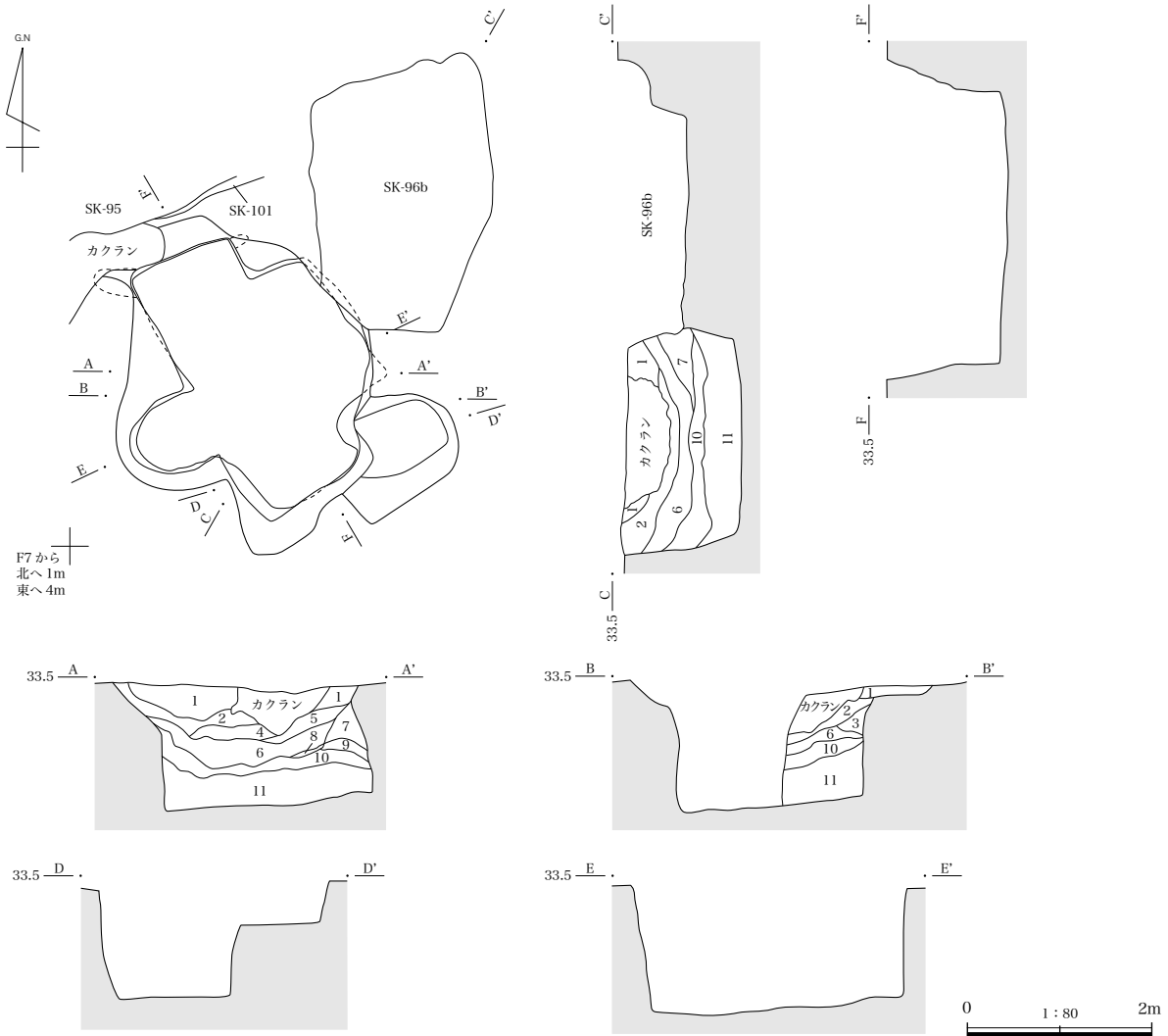
1 室北壁隅に横穴が 2 基確認された。それぞれ、第 213 図 A-A' に示す横穴が高さ 25 cm・奥行き 40 cm で、奥に上に向かって傾斜する。同図 B-B' に示す横穴が高さ 25 cm・奥行き 15 cm で、底は平坦である。2 室の北東方向の壁は一部オーバーハングする箇所が見受けられる。

1 室の南東端に接する位置に長方形の土坑が付随する。SK-96a の主軸とほぼ同じ方向に主軸をもつ。規模は、主軸で 0.96m、主軸に直交する副軸では 1.04m、深さは確認面から 40 cm 程である。SK-96a の底面からは 80 cm 程の比高差がある。土層は B-B' セクションにて示す。上層を 1 層が覆う状況が観察されたのみで、詳細な確認ができなかったため、別遺構の可能性や部屋との考えもあろうが、便宜上 SK-96a に付随する施設とする。

重複 中世の土坑と考えられる SK-96b と重複し、SK-96a → SK-96b となる。

覆土 覆土は、11 層が底面を覆い、天井の崩落土の可能性はある。

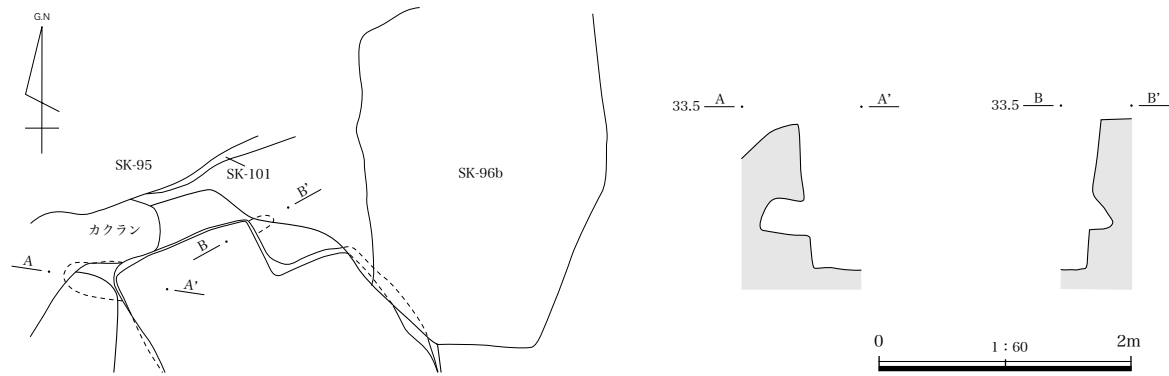
出土遺物 出土遺物は、砥石 1 点・石製品 1 点が出土する。第 215 図 1 は自然石を利用した砥石である。遺構底面から 75 cm 上で出土。2 は被熱痕のある用途不明の石製品。3 は滓板状の不明鉄製品。2 および 3 は覆土中からの出土である。また、図示してはいないが、縄紋土器 371 点・石器 1 点・鉄製品 5 点・礫 3 点・剥片 1 点・炭化材 1 点が出土している。



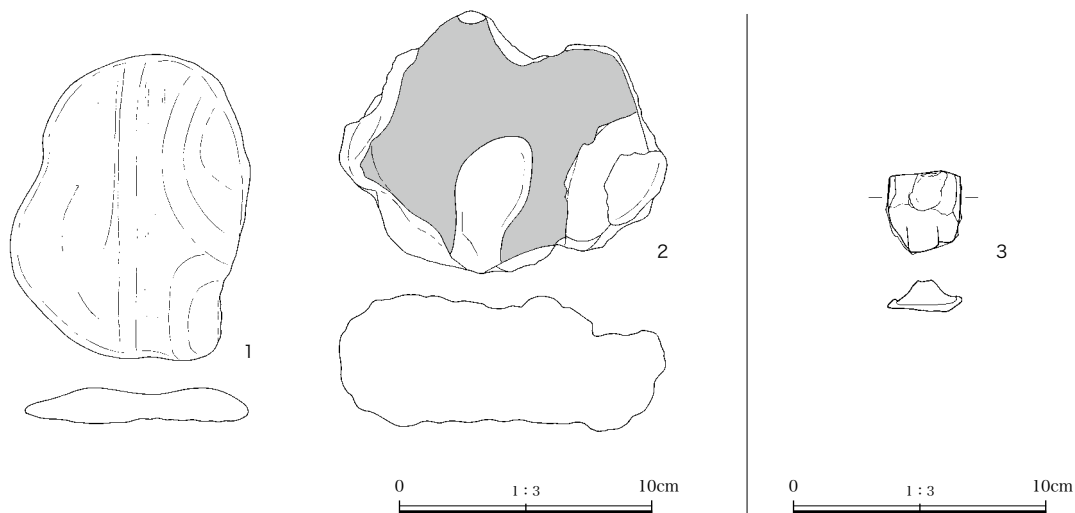
SK-96a 土層説明

- | | |
|---|--|
| <p>1 淡灰褐色土 ローム粒多量、白色粒やや多量、ロームブロック少量。しまりやや強い。</p> <p>2 暗灰褐色土 ローム粒・白色粒やや多量、ロームブロック少量。しまり強い。</p> <p>3 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック・白色粒少量。しまりやや強い。</p> <p>4 淡灰褐色土 ローム粒・白色粒やや多量。しまり強い。</p> <p>5 淡黒褐色土 ローム粒・白色粒やや多量。しまり強い。</p> <p>6 黒褐色土 ローム粒やや多量、ロームブロック少量、白色粒やや少量。しまり強い。</p> | <p>7 暗灰褐色土 ローム粒やや多量、ロームブロック・白色粒少量。しまりやや弱い。</p> <p>8 淡褐色土 ローム粒やや多量、ロームブロック・白色粒少量。しまり強い。</p> <p>9 黒褐色土 ロームブロックやや多量、ローム粒・白色粒少量。しまりやや強い。</p> <p>10 暗褐色土 ローム粒多量、ロームブロックやや多量、白色粒やや少量。しまり強い。</p> <p>11 暗褐色土 ローム粒多量、ロームブロック・白色粒少量。しまり強い。</p> |
|---|--|

第 213 図 SK-96a 遺構実測図 (1)



第 214 図 SK-96a 遺構実測図 (2)



第 215 図 SK-96a 遺物・鍛冶関連遺物実測図

第 37 表 SK-96a 遺物観察表

掲載番号	種類器種	計測値 (cm)	色調 (内・外)	胎土 (石材)	焼成	残存率	技法 (内・外)	特徴・備考	出土位置
1	砥石	最大長：12.1 最大幅：9.1 最大厚：1.3		砂岩				扁平な石。一部を砥面（磨面）で使用か。重量：199.0g	S-96a no.9
2	石製品	最大長：10.3 最大幅：13.0 最大厚：5.2		軽石凝灰岩				両面やや平らに整形している。表面ほぼ全面にコゲ有。裏面一部コゲ。	S-96a

第 38 表 SK-96a 鍛冶関連遺物観察表

掲載番号	種類	鍛冶関連遺物構成表No.	出土位置
3	鉄製品（滓板状不明）	77	覆土中

SK-106（第 216 図、図版三六）

位置 調査区中央西寄りの、D7c・D7b・E7b グリッドに位置する。

規模・形状 本遺構の北側は、調査区外となるために全体の形状は不明であり、竪坑部も想定できない。A-A'ラインを主軸とした場合、N-45° -W となり、主軸長が 2.9m・直交する副軸長は 1.3m となる。壁面はローム層で、確認面から 65 cm 程下位の標高 32.900m 付近で、厚さ 10 cm 程の鹿沼軽石層を確認した。底面もローム層で、硬くしまっている。

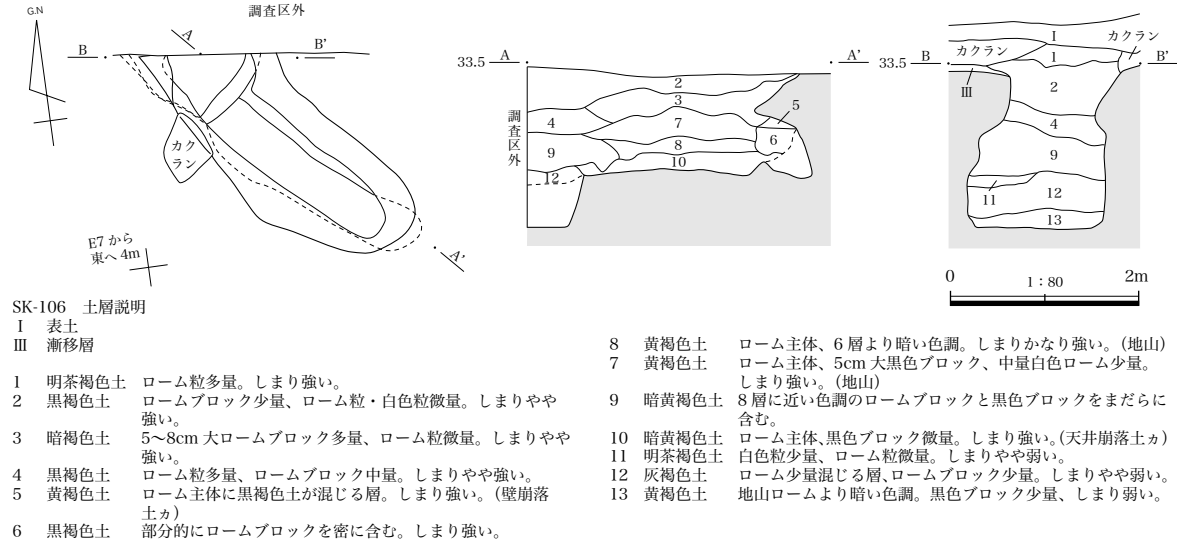
本遺構では、調査区際の部屋と、北西から南東方向へ伸びる部屋の 2 部屋を確認しており、北側の部屋を 1 室、南側の部屋を 2 室とする。1 室は北西隅で僅かに屈曲部と思われる箇所を確認できたが、平面形態は不明である。調査区際の壁面にて確認できた土層の、1 層からの深さは 2m にもなる。2 室は、長軸 2.4m・幅 0.6m、確認面からの深さは 1.1m である。部屋の奥から 0.5m 手前で、壁を 0.16m 程掘り残す。1 室底面との比高差は 0.56m である。

重複 重複する遺構は無い。

覆土 1～4 層および 11・12 層は自然堆積と思われる、7～10 層にかけて天井が大きく崩落したものと思わ

れる。また、5・6層は壁面および天井部が崩落しつつ堆積したものと考えられ、13層も天井の崩落土と推定する。

出土遺物 縄紋土器 85点・石器 2点が出土しているが、本遺構に帰属する遺物は出土していない。



第216図 SK-106 遺構実測図

SK-115 (第217・218図、第39表、図版三六・三七・七二)

位置 調査区中央やや東寄りの、E9c・E9d・F9a・F9b グリッドに位置しており、SA-2 盛土除去後に確認できた。

規模・形状 平面形は北西・北東・南西へそれぞれ1室の3室と、十字中央の連結部、南東に竪坑部をもつ、やや歪んだ「十」字状である。主軸南部を竪坑とし、主軸ライン北部の部屋から時計回りに1室・2室・3室とする。また、各部屋と接する中央部の空間地を連結部とする。規模は、主軸をN-41°-Wとして、主軸長が4.25m・直交する副軸長3.40mである。但し、副軸長は南西側の上端を調査の段階でSZ-27の周溝を先に調査していたため、推定となる。確認面からの深さは1.3mである。壁面はローム層で、確認面から55cm程下層、標高32.750m付近で、厚さ15cm程の鹿沼軽石層を確認した。底面はローム層で、硬くしまっていた。

各部屋は、1室が平面台形で、長軸1.0m・短軸0.8m。2室および3室は長方形で、2室は長軸1.5m・短軸1.2m。3室の規模は長軸1.1m・短軸1.0mである。連結部の規模は、主軸長1.2mで副軸長は1.0mである。

1室の北西隅に横穴を1基確認した。高さ0.64m・幅0.80m・奥行き0.60cmで若干奥へ向かって傾斜をする。他の地下式坑ではみられない大型の横穴である。

重複 SA-2、SZ-27、SD-114、S-124ピット群、P-128と多くの遺構と重複しているが、土層断面による直接的な新旧関係は確認できてはいない。本遺構はSA-2の盛土除去後に確認できた遺構である。

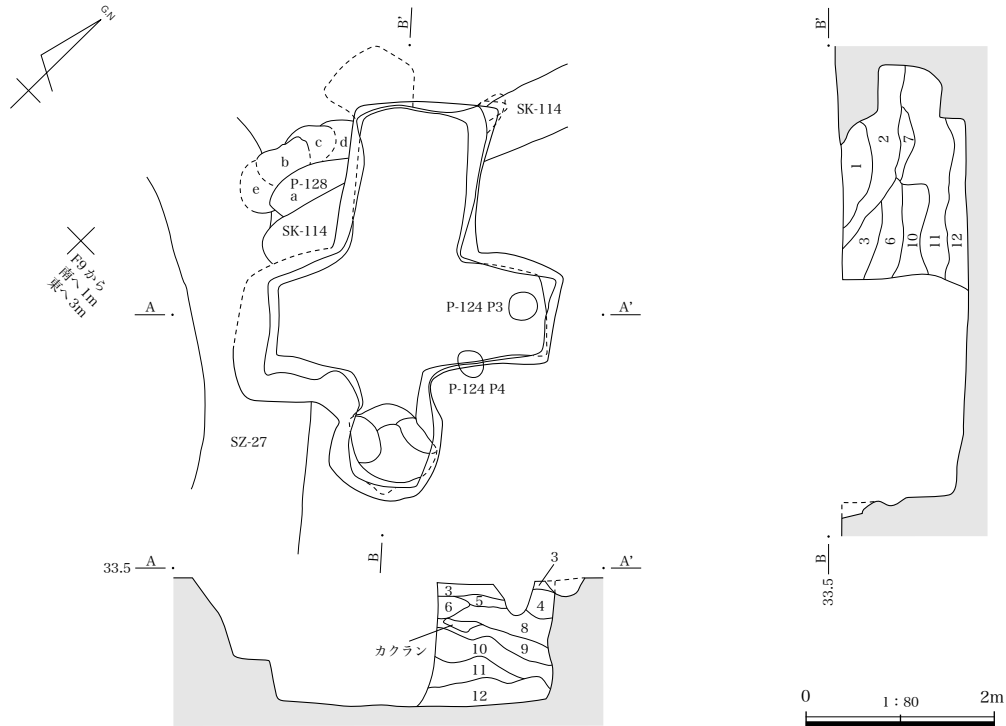
SK-115の平面プラン確認時に、S-124P3およびS-124P4を確認した。このピットは、SK-115覆土とは異なっていると判断をしたため、SK-115を掘り込む遺構とし、調査を行った。SK-114、P-128は、SK-115を先に調査できたことから、SK-115よりも古い遺構である可能性がある。SZ-27は、SK-115がSZ-27周溝覆土を掘り込む状況がセクション面で確認できたため(図版三七)、SK-115の方が新しい遺構であると判断する。

覆土 覆土は、暗灰褐色土・暗褐色土を主体とする自然堆積である。ロームを多く含む黄灰褐色土の4・7・

第三章 検出された遺構と遺物

12層は天井崩落土と考える。

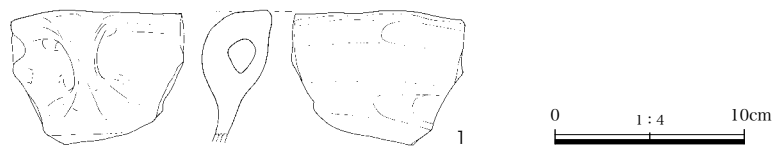
出土遺物 図示できた遺物は1点で、内耳土器の口縁部である。内面および外面はやや粗目のナデ整形が行われており、内面には内耳が残存する。外面にはススが多量に付着する。また、図示してはいないが、縄紋土器68点・石器5点・弥生土器1点が出土する。



SK-115 土層説明

- | | | | |
|---------|---|----------|---|
| 1 暗灰褐色土 | ロームブロック・白色粒少量、ローム粒やや少量、炭化粒微量。しまりやや強い。 | 7 黄灰褐色土 | ローム粒やや多量、ロームブロックやや少量、白色粒・炭化粒微量。しまりやや強い。 |
| 2 暗褐色土 | ローム粒多量、白色粒やや多量、ロームブロック少量、炭化粒微量。しまりやや強い。 | 8 暗褐色土 | ローム粒・ロームブロック多量、白色粒やや多量、炭化粒微量。しまりやや強い。 |
| 3 暗灰褐色土 | ローム粒多量、白色粒少量、ロームブロックやや少量、炭化粒微量。しまりやや強い。 | 9 暗灰褐色土 | ローム粒やや多量、ロームブロック・白色粒やや少量、炭化粒微量。しまりやや強い。 |
| 4 黄灰褐色土 | ローム粒・ロームブロックやや多量、白色粒微量。しまり強い。(天井崩落土カ) | 10 黒色土 | ローム粒多量、ロームブロックやや少量、白色粒少量、炭化粒微量。しまりやや強い。 |
| 5 灰褐色土 | ローム粒多量、ロームブロック・白色粒少量。しまりやや強い。 | 11 淡灰褐色土 | ローム粒・ロームブロックやや多量、白色粒微量。しまり強い。 |
| 6 黒褐色土 | ローム粒・ロームブロック・白色粒やや多量、炭化粒微量。しまりやや強い。 | 12 黄灰褐色土 | ロームブロックやや多量、ローム粒少量、白色粒微量。しまり強い。(天井崩落土カ) |

第 217 図 SK-115 遺構実測図



第 218 図 SK-115 遺物実測図

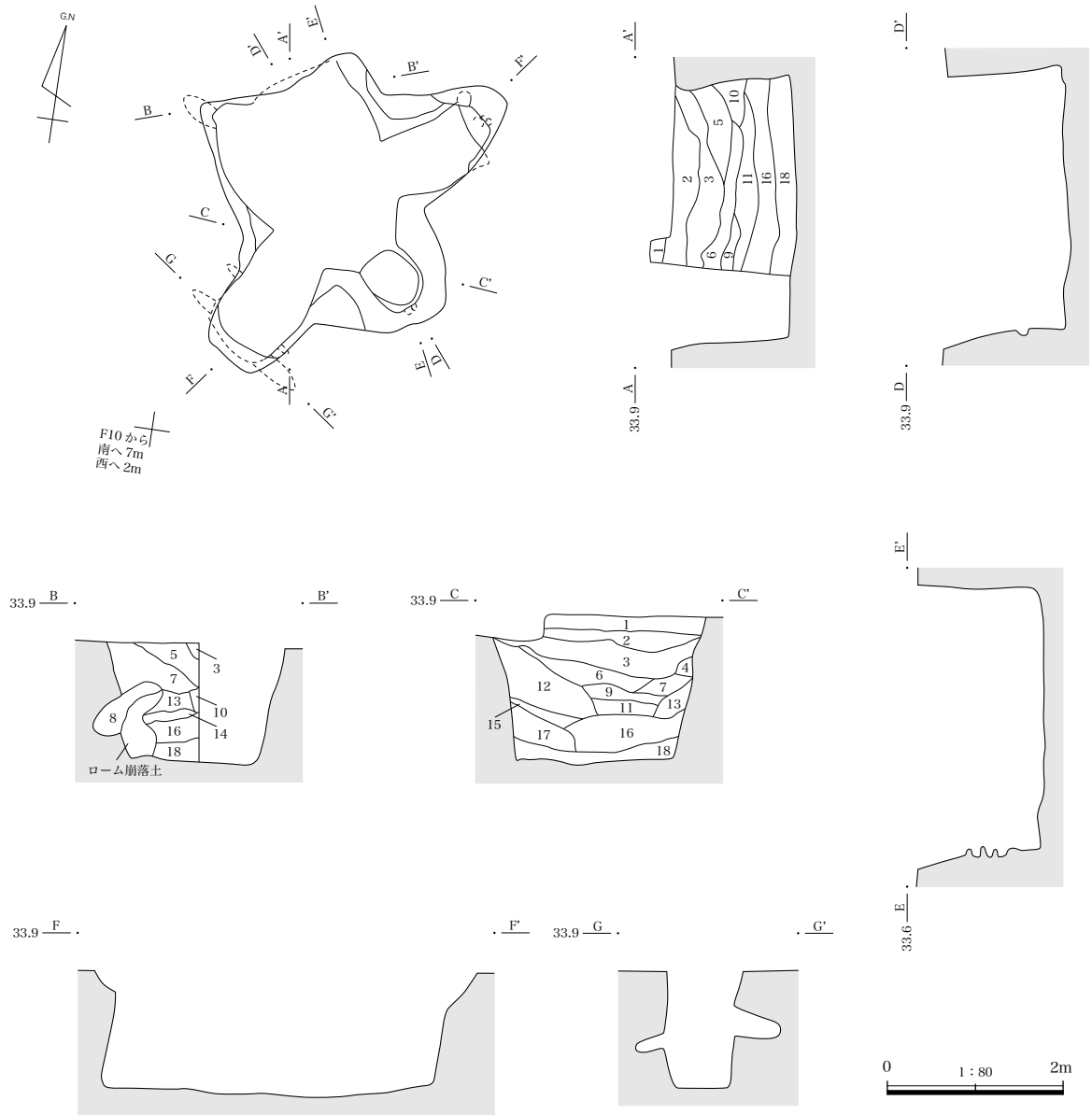
第 39 表 SK-115 遺物観察表

掲載番号	種類 器種	計測値 (cm)	色調 (内・外)	胎土	焼成	残存率	技法 (内・外)	特徴・備考	出土位置
1	内耳土器	口径： 底径： 器高：(7.0)	内：5YR4/3 にぶい赤褐 外：5YR4/3 にぶい赤褐	やや粗雑、黒色ガラス質粒微量、金色雲母多量、少礫やや多量	硬質	口縁部破片	内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部ナデ	内耳1カ所。内側口縁部および内面スス付着。常陸産。	S-115

SK-116 (第219～221図、第40表、図版三七・七二)

位置 調査区中央西寄りの、F9b・F9d・F10a・F10c グリッドに位置している。

規模・形状 北西方向を主軸とする。南東側の半円状張出部を竪坑とし、主軸北部の部屋から時計回りに北



SK-116 土層説明

- | | | | |
|---------|---|----------|----------------------------------|
| 1 明茶褐色土 | ローム粒多量、ロームブロック少量。しまりやや弱い。 | 10 黄褐色土 | ローム主体。7層に近い灰褐色土混じる。しまり強い。 |
| 2 暗褐色土 | ローム粒・ロームブロック多量、白色細粒中量。しまりやや強い。 | 11 黒色土 | ローム粒・ロームブロック少量。しまりやや強い。 |
| 3 黒褐色土 | ローム粒・ロームブロック少量。しまりやや強い。 | 12 褐色土 | ローム粒・黒色ブロック少量。しまりやや強い。 |
| 4 黄褐色土 | ローム主体。黒褐色土少量混じる。しまりやや強い。 | 13 黄褐色土 | ローム主体。しまり強い。 |
| 5 黒褐色土 | ローム粒・ロームブロック(2～3cm大)多量、ロームブロック(5cm大)少量。しまり強い。 | 14 黄褐色土 | ローム主体。12層より暗い色調。しまり強い。 |
| 6 暗褐色土 | ローム粒・ロームブロック層状に含む。白色細粒微量。しまりやや弱い。 | 15 茶褐色土 | 黒褐色土とロームの混土。しまり弱い。 |
| 7 灰褐色土 | ロームを層状に含む。しまり強い。 | 16 暗褐色土 | ローム粒・ロームブロック中量。しまりやや弱い。 |
| 8 黒褐色土 | ローム粒・ロームブロック・黒色ブロック少量。しまり強い。 | 17 暗褐色土 | 黒褐色土とロームの混土。14層よりロームの割合多い。しまり弱い。 |
| 9 黒褐色土 | ロームブロック少量、ローム粒微量。しまり弱い。 | 18 明茶褐色土 | ロームブロック(5cm大)中量。しまりやや弱い。 |

第219図 SK-116遺構実測図(1)

西の1室・北東の2室・南西の3室とする。また、各部屋と接する中央部の空間を連結部とする。全体ではいびつな「十」字状を呈しており、規模は、主軸をN-39°-Wとして、主軸長が3.1m・直交する副軸長4.3m、確認面からの深さ1.4mである。壁面はローム層であり、確認面から55cm程下位、標高32.750m付近で、厚さ15cm程の鹿沼軽石層を確認した。

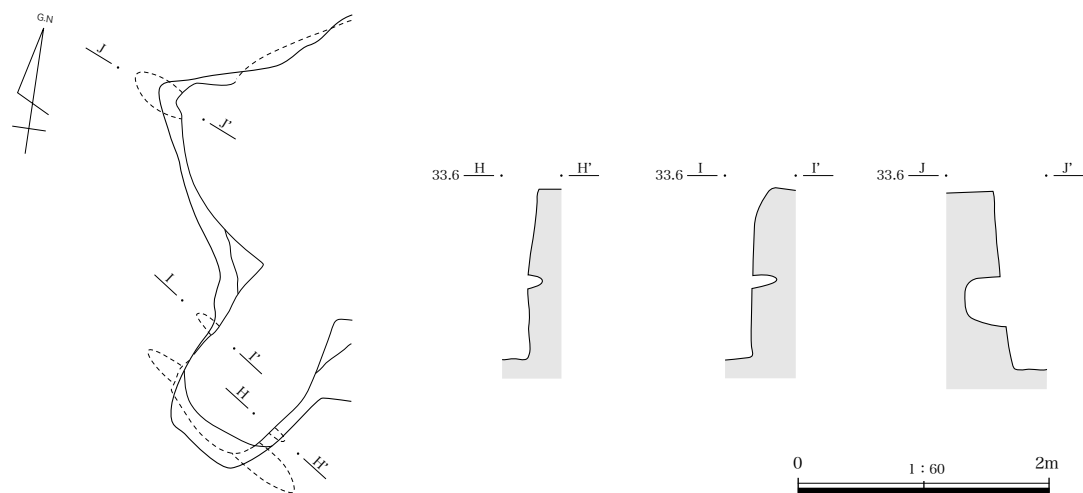
竪坑部は周辺が大きく崩落しており、本来の上端の平面形ははっきりとしない。連結部から1室にかけて台形状に広がり、奥壁はやや狭くなる。主軸長1.3m・横幅1.8mである。2・3室は平面長方形で、それぞれ2室は主軸長1.0m・横幅0.8m、3室は主軸長1.3m・横幅0.9mである。連結部の規模は主軸長0.96mで、副軸長は1.30mである。竪坑部から奥へ向かって緩やかな傾斜をもつ。

壁面には横穴状の多数の窪みが確認された(第219図D-D'・E-E'・G-G')。1室は北西端に1基確認された(第220図J-J')。J-J'の横穴の規模は、直径52cm、奥行き40cmのやや大形で、底面から44cmの高さで掘り込まれる。

3室には横穴が4カ所確認できた(第219図G-G'、第220図H-H'・I-I')。第219図G-G'の北横穴の規模は直径16cm、奥行き28cmで、底面から44cmの高さに位置し、下方に傾斜する。南横穴の規模は、直径36cm、奥行き50cmで、底面から60cmの高さに位置し、やや下方に傾斜をつける。第220図H-H'の横穴は、直径14cm、奥行き16cmで、底面からの高さ74cmに位置し、底面に対しほぼ水平に掘り込まれている。I-I'の横穴は、直径16cm、奥行き26cmで、底面からの高さ74cmに位置し、底面に対しほぼ水平に掘り込まれている。

竪坑部にも主軸上に1カ所(第219図D-D')、主軸からやや東に3カ所(第219図E-E')、計4カ所の横穴が確認された。主軸上の横穴の規模は直径12cm、奥行き8cmで、底面から40cmの高さに位置する。E-E'では、直径6cm・奥行き10~12cmの横穴が、底面から40~80cmの高さの間に3カ所掘り込まれる。これらも底面に対しほぼ水平に掘り込まれる。

重複 SA-2 および中世の土坑であるSK-126bと重複しているが、土層断面での判断はできていない。但し、SK-116の方がSK-126bよりも先に平面プランを確認できていることから、SK-116の方が新しい遺構の可能性はある。SA-2の盛土除去後に確認できていることや、SA-2の盛土が、第230図のD-D'セクションでSK-116を覆っている状況が確認されていることから、SA-2より古い遺構であることが判明している。

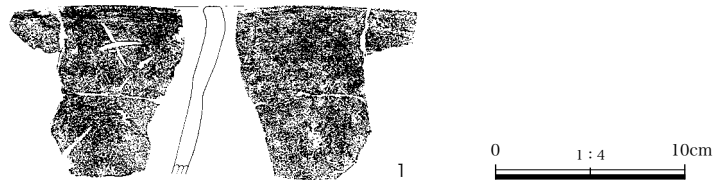


第220図 SK-116遺構実測図(2)

覆土 覆土は、自然堆積である。全体的にロームブロックを含み、天井部が崩落しつつ埋没していった過程が想定できる。特に、7・10・13・14層はローム主体であり、7層は全体的の広がりがみえることから、天井部の崩落土の可能性が考えられる。

出土遺物 内耳土器の破片が覆土中から出土している。図示できたのは第221図1の内耳土器の口縁～体部の破片である。内側にはへら状工具による線刻「×」が確認できる。口縁の外面にはススが付着する。体部にも若干ながらススの痕跡が認められる。

図示していないが、本遺構からは縄紋土器79点・土師器1点・石器2点（うち1点は中近世の可能性あり）・弥生土器1点が出土する。



第221図 SK-116 遺物実測図

第40表 SK-116 遺物観察表

掲載番号	種類器種	計測値 (cm)	色調 (内・外)	胎土	焼成	残存率	技法 (内・外)	特徴・備考	出土位置
1	内耳土器	口径： 底径： 器高：(8.9)	内：10YR6/4 にぶい黄橙 外：7.5YR4/6 褐	やや粗雑、黒色ガラス質粒微量、金色雲母多量、少礫やや多量	硬質	口縁部片	内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部ナデ	内面口縁部寄りにヘラ記号「×」。外面口縁部にスス付着。常陸産。	S-116 S-116 no.1

3. 土坑・ピット

本遺跡には、中世に属すると考えられる地下式坑を除く土坑は 10 基あり、形状は方形・長方形のもの等がある。土坑は調査区やや西寄りの、E8・F8・E9・F9 グリッド周辺に多い傾向がある。ピットは 4 基を確認し、それらは密集している。

土坑

SK-78 (第 222 図、第 44 表、図版三八・四〇)

位置 調査区中央西寄りの、E8d グリッドと F9a グリッドに位置する。

規模・形状 東西軸の長方形を呈する。規模は、長軸 3.3m×短軸 1.3m を測る。底面は中央部がやや低くなっており、最深部は 1.8m である。旧表土であるⅡ層を掘り込む。

また、北方に 6 基のピットが検出されている。径 0.3～0.5m 程、深さ 0.18～0.36m の土坑である。本遺構との関連は不明ではあるが、周辺遺構としてここで扱う。また、P1・2 は SK-78 および SK-78P3 と重複するが、土層による観察が出来なかったため、新旧関係は不明である。

平成 26 年度にも調査しており、平成 26 年度調査時には S-201 として新たに番号をつけていたが、同一遺構であり、SK-78 として扱う。

重複 中世の土坑である SK-202 と重複しており、第 222 図の SK-78B-B' セクションから、SK-202 を切っている状況が確認出来たため、本遺構は SK-202 より新しい遺構であると判断する。

覆土 堆積状況から、自然堆積と考えられる。

出土遺物 縄紋土器が 11 点出土しているが、本遺構に伴う遺物は出土していない。

SK-83a (第 222 図、第 44 表、図版三八)

位置 E8d グリッドに位置する。

規模・形状 長軸 1.2m×短軸 1.1m の歪んだ方形形状を呈する土坑である。底面はおおむね平坦で、最深部で 0.75m である。旧表土であるⅡ層を掘り込む。

重複 縄紋時代の土坑である SK-83b および中世の土坑である SK-202 と重複しており、いずれよりも新しい。

覆土 堆積状況から自然堆積と考えられる。

出土遺物 SK-83 として、縄紋土器 11 点・石器（石英剥片）1 点・中近世の土器 1 点が出土しているが、本遺構に伴う遺物と判断し得なかった。

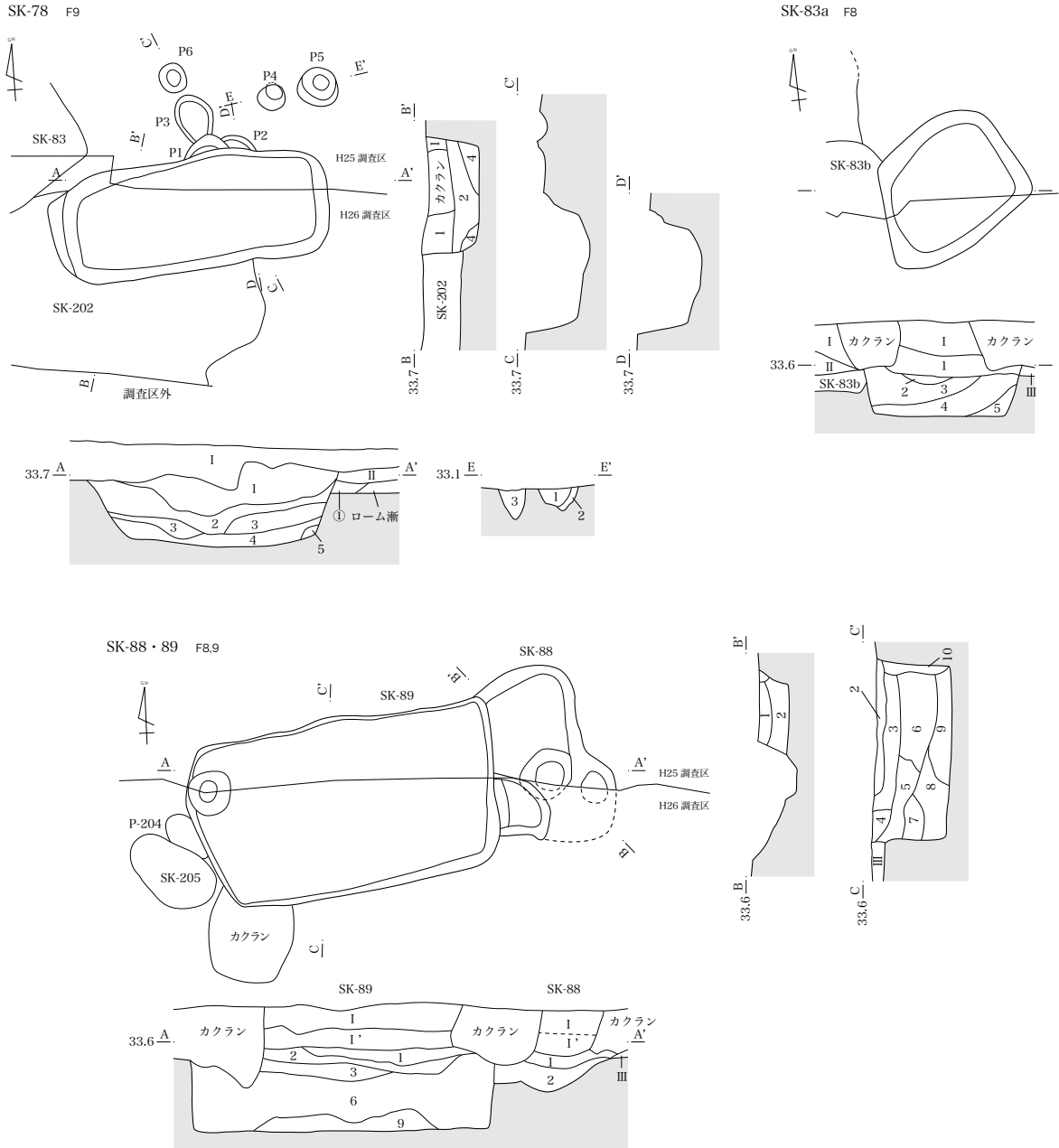
SK-88 (第 222・225 図、第 41・44 表、図版三八)

位置 F8a グリッドに位置する。

規模・形状 長軸 2.0m×短軸 1.4m の歪んだ方形形状の土坑である。遺構南側および東側のピットについては、平成 26 年度の調査では確認できなかった。旧表土であるⅡ層を掘り込む。底面は平坦で、A-A' セクションで当時の掘り込み面と想定できる高さから計測し、0.36m の深さであった。

土坑南東側にはピットを 2 基検出した。底面にはやや浅めの P1 があり、径は 0.6m、掘り込み面からの深さは 0.4m 程である。また、南東端の P2 は浅く、僅かな段差が付く程度の状況であった。

重複 中世の土坑である SK-89 と重複する。第 222 図 SK-88・89A-A' セクションから、SK-89 に掘り込まれている状況が観察できたため、SK-89 より古い遺構であると判断する。



SK-78 土層説明
 ① 黒褐色土 ローム粒少量、ロームブロック微量。しまりやや弱い。
 1 暗灰褐色土 ローム粒やや多量、ロームブロック少量、炭化粒・白色粒微量。しまりやや強い。
 2 暗褐色土 ローム粒多量、ロームブロックやや多量。しまりやや弱い。
 3 暗黄褐色土 ローム粒やや多量、ロームブロック・炭化粒やや少量。しまり弱い。
 4 暗灰褐色土 ローム粒多量、ロームブロック・炭化粒やや多量。しまり弱い。
 5 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。しまり弱い。

SK-83a 土層説明
 1 暗褐色土 ロームブロック (5cm 大) 少量。しまり弱い。
 2 暗褐色土 ローム粒微量。しまりやや強い。
 3 暗灰褐色土 暗褐色土にローム・ロームブロック・黒色ブロック多量。しまりやや弱い。
 4 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック中量。しまりやや弱い。
 5 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒少量。しまり弱い。

SK-88 土層説明
 1 暗褐色土 ローム粒多量、ロームブロック少量。しまりやや弱い。
 2 淡灰黄褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。しまり強い。

SK-89 土層説明
 1 暗灰褐色土 ローム粒少量、ロームブロック・白色粒微量。しまり強い。
 2 暗褐色土 ローム粒・ロームブロックやや多量、白色粒微量。しまり強い。
 3 暗灰褐色土 ローム粒多量、ロームブロック・白色粒少量。しまりやや強い。
 4 暗褐色土 ローム粒多量、ロームブロックやや多量。しまりやや弱い。
 5 暗灰褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。しまり弱い。(黒色土ブロック多)
 6 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック・炭化粒少量。しまりやや弱い。
 7 暗褐色土 ロームブロック極多量、ローム粒多量。しまり弱い。(KPブロック多、黒色ブロック多。崩落土)
 8 淡灰褐色土 ローム粒・ロームブロックやや多量。しまりやや強い。
 9 黒色土 ローム粒・炭化粒微量。しまり弱い。
 10 黄褐色土 ロームブロック極多量、ローム粒多量。しまり弱い。(崩落土)

第 222 図 中世土坑遺構実測図 (1)

覆土 堆積状況から自然堆積と考えられる。

出土遺物 本遺構からは、外面を粗く削る土師質土器の体部片が1点出土した(第225図1)。

SK-89 (第222・225図、第41・44表、図版三八・三九・七二)

位置 F7d・F8a グリッドに位置する。

規模・形状 長軸3.5m×短軸2.1mの、やや歪な長方形の土坑である(平成26年度に調査を行った際、SK-89bと呼称したが、同一遺構である)。底面はおおむね平坦で、最深部で1.0mである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。北西壁際に径0.6m程のごく浅い円形の窪みがある。東辺外側南東にかかる浅い落ち込みについては、別遺構の可能性やSK-88との関わりも想定されるが、根拠に乏しいため、便宜上はSK-89として扱う。浅めのピットであり、僅かな段差が付く程度である。

重複 SK-88、P-204と重複している。第222図SK-88・89のA-A'セクションおよび第262図のP-204・205A-A'セクションから、それぞれの重複関係をみることができ、本遺構はSK-88を掘り込み、P-204が本遺構を掘り込む状況が観察されている。よって、SK-89はSK-88より新しく、P-204よりは古い遺構であると判断できる。

覆土 堆積状況から、自然堆積と考えられる。

出土遺物 88・89b出土で、縄紋土器52点・中近世遺物16点が出土した。このうち、本遺構から出土し、図化できた遺物は、土師質土器5点・内耳土器3点・播鉢1点・鉄製品1点である。第225図2～6は土師質土器の小皿で、6は口縁を一部欠くがほぼ完形。ロクロ整形で、底面に回転糸切り痕が残る。それ以外は口縁から体部までの破片である。2は口縁端部に刻みを施す。5は体部に3mm程の穿孔が円形状にされている。7～9は内耳土器で、すべて胎土に金雲母を含む。10は播鉢。内面に黒色処理が施される。16は鉄釘。

SK-96b (第223・225・226図、第42・44表、図版三九・七二)

位置 E7b・E7d グリッドに位置する。

規模・形状 長軸2.8m×短軸1.8mの、南へ向かって細くなる、歪な長方形の土坑である。底面は概ね平坦で、最深部で0.8mである。壁は、傾斜がかかる場所、垂直に近いところ、オーバーハングするところがある。

重複 中世の地下式坑であるSK-96aと、中世の土坑であるSK-101と重複しており、両者を壊している。

覆土 堆積状況から、自然堆積と考えられる。

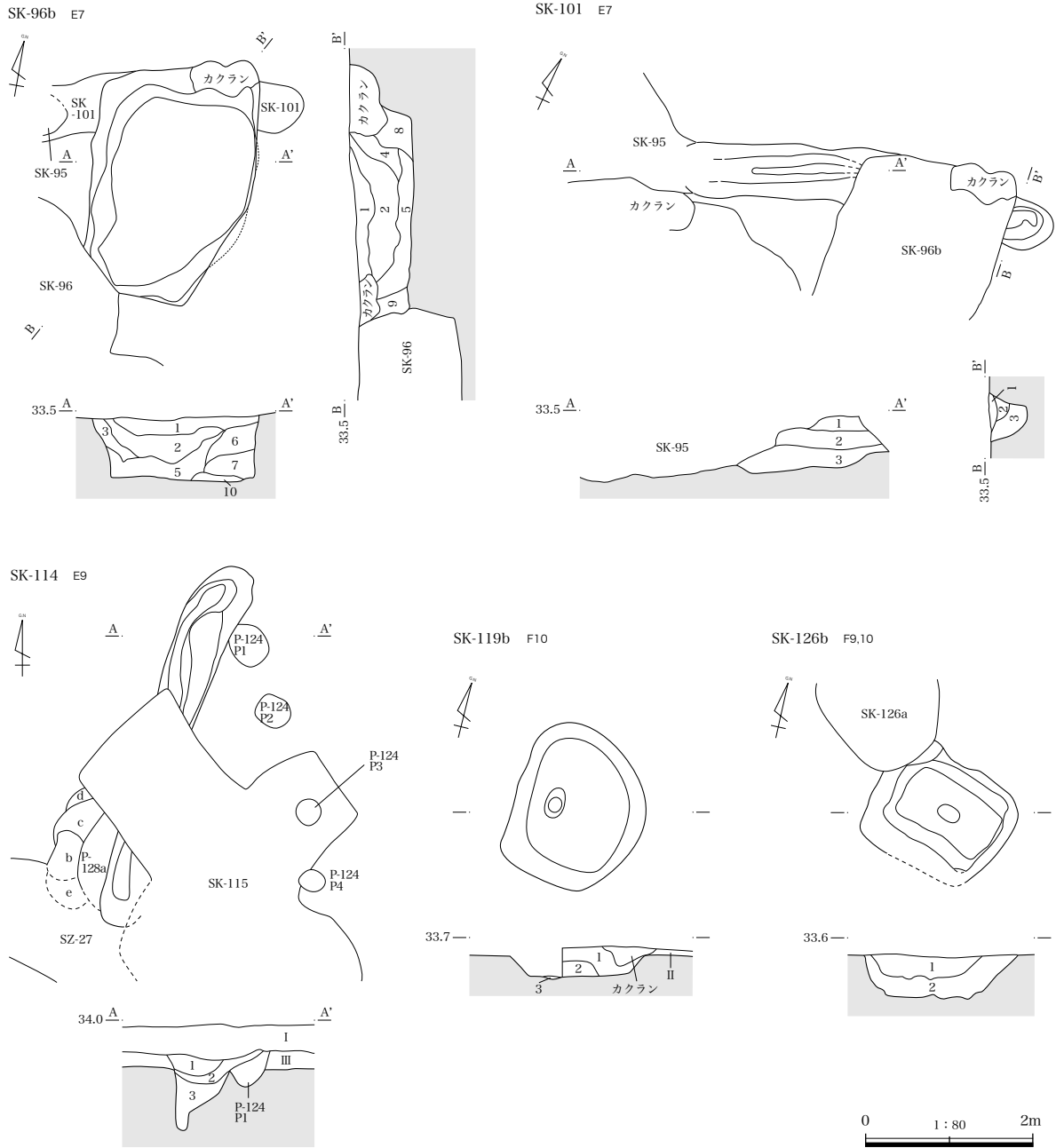
出土遺物 第226図16の刀子が1点出土している。小形で、全体的に砥ぎ減りが著しい。また、本遺構には伴わないが、縄紋土器が43点出土している。

SK-101 (第223図、第44表、図版四〇)

位置 E7 グリッドに位置する。

規模・形状 長軸4.5m×短軸0.6mの、長楕円形の土坑である。溝とすべき形態だが、調査時名称のまま土坑として扱う。底面は西へ向かうにつれて深くなり、最深部では0.64mである。壁は傾斜をつけて立ち上がる。

重複 中世の地下式坑であるSK-95と、中世の土坑であるSK-96bと重複する。SK-95とは、土層観察によって、SK-95の東側に位置するスロープ状遺構がSK-101を掘り込んでいる状況が確認できたことから(図版三五)別遺構としたが、同軸・同形態である点から掘り直し等による同一遺構の可能性もある。また、SK-95のスロープ状遺構の標高はSK-101と接する付近で32.860m、SK-101は土坑底面の立ち上がり部で32.740mである。SK-96bとは、第223図のSK-96bB-B'セクションにおいてSK-101の覆土が観察できなかったことから、SK-



SK-96b 土層説明

- 1 黒色土 白色粒やや多量、ローム粒やや少量。しまり強い。
- 2 黒褐色土 白色粒やや多量、ロームブロック少量、ローム粒やや少量。しまり強い。
- 3 黒褐色土 ローム粒多量、ロームブロックやや多量、白色粒少量。しまり強い。
- 4 黒褐色土 ローム粒多量、白色粒やや多量、ロームブロックやや少量。しまり強い。
- 5 暗灰褐色土 ローム粒やや多量、白色粒少量、ロームブロックやや少量。しまり強い。
- 6 淡灰褐色土 ローム粒・ロームブロック少量、白色粒やや少量。しまりやや強い。
- 7 淡灰褐色土 ローム粒・白色粒少量。しまり強い。
- 8 黒褐色土 ローム粒多量、ロームブロック・白色粒やや多量。しまり強い。
- 9 褐色土 ローム粒・ロームブロック多量、白色粒少量。しまり強い。
- 10 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック・白色粒多量。しまり強い。

SK-101 土層説明

- 1 黒褐色土 白色粒やや多量、ロームブロック少量、ローム粒やや少量。しまりやや強い。

- 2 暗褐色土 ローム粒・白色粒やや多量、ロームブロックやや少量。しまり強い。
- 3 黒褐色土 ローム粒・白色粒多量、ロームブロックやや少量。しまり強い。

SK-114 土層説明

- 1 灰褐色土 ローム粒やや多量、ロームブロック・炭化粒少量。しまりやや強い。
- 2 暗黄褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。しまりやや弱い。
- 3 暗灰褐色土 ローム粒多量、ロームブロックやや多量。しまりやや強い。

SK-119b 土層説明

- 1 暗灰褐色土 ローム粒少量、白色粒微量。しまり強い。
- 2 淡灰褐色土 ローム粒やや多量、ロームブロック少量。しまりやや強い。
- 3 黒褐色土 白色粒少量、ローム粒微量。しまりやや弱い。

SK-126b 土層説明

- 1 黒褐色土 ローム粒・白色粒やや多量、ロームブロック少量。しまり弱い。
- 2 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック多量、白色粒微量。しまりやや強い。

第223図 中世土坑遺構実測図(2)

101 が SK-96b より古い可能性がある。

覆土 堆積状況から、自然堆積と考えられる。

出土遺物 覆土中からは縄紋土器が 37 点出土するが、本遺構に伴う出土遺物は無い。

SK-114 (第 223 図、第 44 表、図版四〇)

位置 E9c・E9d グリッドに位置する。

規模・形状 長軸 4.5m×短軸 0.6m の、長楕円形の土坑である。溝とすべき形態だが、SK-101 同様、調査時の名称のまま土坑として扱う。底面は西へ向かうにつれて深くなり、最深部で 0.9m である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

重複 本遺構は、SA-2 盛土除去後に確認できた。直接の断面観察はしていないが、SK-115 のプランが明確に確認されたことから、SK-114 は SK-115 より古い遺構であると判断する。また、SZ-27、S-124P1、128P1 等を壊している。

覆土 堆積状況から、自然堆積と考えられる。

出土遺物 出土遺物は無い。

SK-119b (第 223 図、第 44 表、図版四〇)

位置 E9c・E9d グリッドに位置する。

規模・形状 長軸 2.0m×短軸 1.6m の、断面逆台形状を呈する、長楕円形の土坑である。底面はおおよそ平坦で、最深部で 0.35m である。標準土層 II 層を掘り込む。

底面中心部から西側に長軸 0.35m×短軸 0.2m 程の楕円形の窪みがある。深さは土坑底面から 0.1m 程である。

重複 SA-2 盛土除去後に確認。

覆土 堆積状況から、自然堆積と考えられる。

出土遺物 縄紋土器が 17 点出土しているが、本遺構に伴う遺物は出土していない。

SK-126b (第 223・225 図、第 41・44 表、図版四〇・七二)

位置 F9b・F10a グリッドに位置する。

規模・形状 長軸 1.7m×短軸 1.4m の、長方形の土坑である。底面は凹凸が激しく、最深部で 0.5m である。西壁は傾斜をつけて緩やかに立ち上がり、東壁はやや斜め方向の直線的な立ち上がりである。

重複 SA-2 の盛土除去後に確認できた。SK-126a との直接の断面観察が出来ず、詳細は不明である。

覆土 堆積状況から、自然堆積と考えられる。

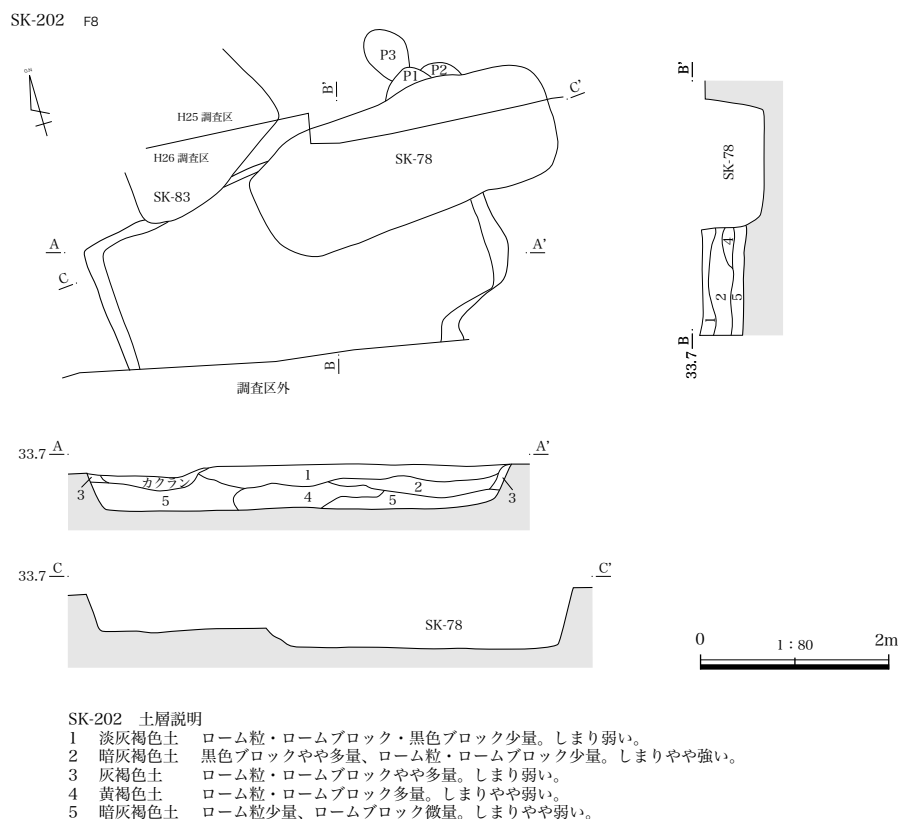
出土遺物 覆土中より播鉢 1 点と、火鉢 1 点、平瓦が 1 点出土する。第 225 図 11・12 は片口の播鉢である。13 は常陸産の火鉢で、口縁端部の磨滅が著しい。14 は平瓦で、凹・凸面ともに黒色処理がされている。

図示した遺物の他には、縄紋土器 6 点・石器 1 点が出土している。

SK-202 (第 224～226 図、第 41・43・44 表、図版四〇)

位置 F8b・F8d・F9a・F9c グリッドに位置する。

規模・形状 南側は調査区外で全形は不明だが、長軸 4.1m×短軸 2.2m 以上の、大形の長方形基調の土坑と推定される。南東端部では屈折部が確認され、東側の張出部へと至る。底面はほぼ平坦で、断面は逆台形状



第224図 SK-202 遺構実測図

を呈する。確認面からの深さは、最深部で0.5mである。

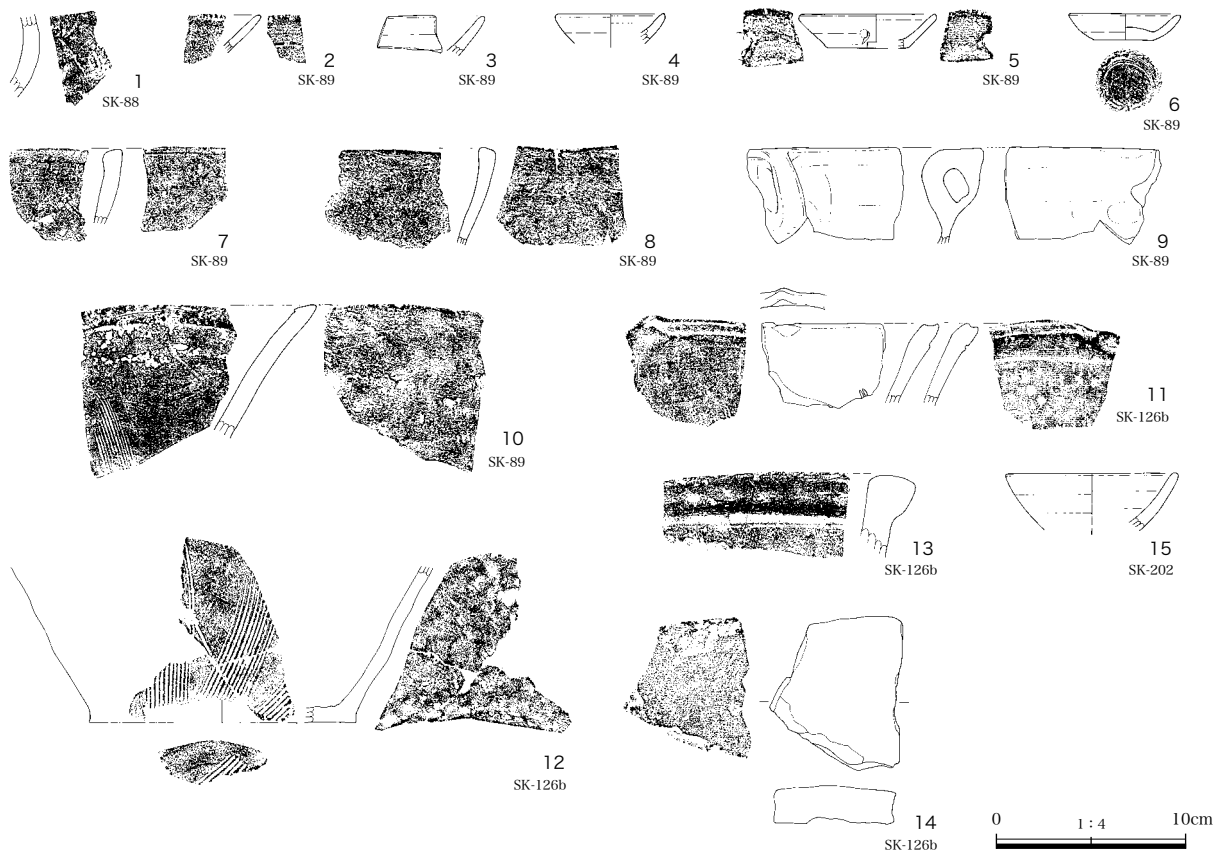
重複 本遺構は、中世の土坑であるSK-78およびSK-83aと重複している。SK-202のB-B'セクションおよび第222図のSK-78B-B'セクションから、両者の切り合い関係を見ることが出来る。これから、SK-202が1層まで、つまり確認面の高さまで埋まった後にSK-78がこれを掘り込んでいる。両者の底面の標高は、SK-202が33.140m、SK-78が32.940mである。

SK-83とは、断面観察をしていないため、両者の前後関係は不明である。

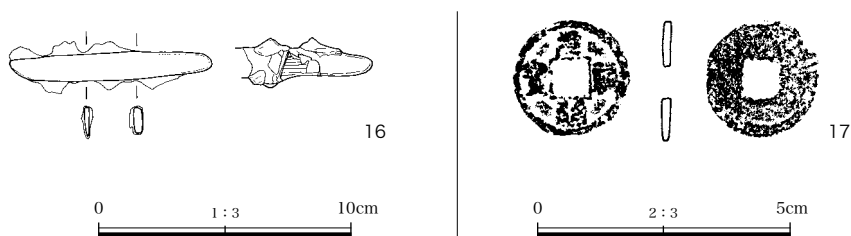
覆土 堆積状況から、自然堆積と考えられる。

出土遺物 図示していない遺物には「202a」・「202b」・「202」・「201・202」の注記がされている。「201」については、平成26年度の調査においてSK-78をSK-201とし、遺物の取り上げ時にもこの番号で扱ったものである。「202a」・「202b」・「202」については、調査時にSK-202において分けられていた可能性もある。詳細は不明であるが、同一遺構からの出土遺物と考える。「202a」・「202b」・「202」注記の遺物は、縄紋土器22点・石器1点・炭化材1点・内耳土器1点・銭貨1点が出土する。「201・202」注記の遺物は、縄紋土器78点・石器2点・礫1点・土師質土器1点・内耳土器1点・瓦1点が出土する。

これらの出土遺物より、土師質土器1点と銅銭1点を図示する。第225図15は小皿である。注記は「S-201・202a」となっており、SK-78に帰属する可能性もある。第226図17は元祐通宝。注記では「S-202」とされており、SK-202出土遺物と考える。周縁および裏面の磨滅が著しい。



第 225 図 中世土坑遺物実測図



第 226 図 中世土坑金属製品実測図

第 41 表 中世土坑遺物観察表

掲載番号	種類 器種	計測値 (cm)	色調 (内・外)	胎土	焼成	残存率	技法 (内・外)	特徴・備考	出土位置
1	土師質 土器碗?	口径： 底径： 器高：(4.2)	内：7.5YR7/4 にぶ い橙 外：7.5YR6/4 にぶ い橙	やや緻密、透明粒・ 白色粒・赤褐色粒 少量	硬質	体部破片	内：ナデ 外：ナデ	外面は粗いナデを施 す。	S-88
2	土師質 土器皿	口径： 底径： 器高：(2.2)	内：10YR7/3 にぶ い黄橙 外：10YR7/3 にぶ い黄橙	緻密、黒色ガラス 質粒・黒色粒・白 色粒・赤褐色粒や 少量	やや 硬質	口縁部 破片	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	口縁部刻み。	S-89b
3	土師質 土器皿	口径： 底径： 器高：(2.0)	内：10YR6/2 灰黄 褐 外：10YR5/2 灰黄 褐	緻密、黒色ガラス 質粒・白色粒・赤 褐色粒・透明粒少 量	硬質	口縁部 破片	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ		S-89b
4	土師質 土器皿	口径：(5.8) 底径： 器高：(1.5)	内：10YR7/3 にぶ い黄橙 外：10YR7/3 にぶ い黄橙	緻密、黒色ガラス 質粒・黒色粒・白 色粒・赤褐色粒や 少量	やや 硬質	口縁部 破片	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ		S-89

5	土師質 土器皿	口径：(7.2) 底径：(4.0) 器高：2.3	内：10YR6/2 灰黄 褐 外：10YR6/2 灰黄 褐	緻密、黒色粒・白 色粒・赤褐色粒少 量、黒色粒やや多 量	やや 硬質	口縁部 破片	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、 底部糸切り離し	体部中心に穿孔。	S-89
6	土師質 土器皿	口径：5.9 底径：3.0 器高：1.4	内：10YR7/3 にぶ い黄橙 外：10YR7/3 にぶ い黄橙	緻密、黒色ガラス 質粒・透明粒・白 色粒・赤褐色粒や や多量	硬質	ほぼ完形	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、 底部回転糸切り離 し	口縁部一部スス附着。 灯明皿。	S-89b no.2
7	内耳土器	口径： 底径： 器高：(3.9)	内：7.5YR5/2 灰褐 外：7.5YR5/2 灰褐	やや粗雑、黒色ガ ラス質粒微量、透 明粒・少礫やや多 量、金雲母多量	硬質	口縁部 破片	内：口縁部ヨコナ デ、体部ナデ 外：口縁部ヨコナ デ、体部ナデ	口縁部2回ヘラナデ。 常陸産。	S-89
8	内耳土器	口径： 底径： 器高：(5.1)	内：7.5YR5/3 にぶ い褐 外：7.5YR5/2 灰褐	やや粗雑、黒色ガ ラス質粒微量、透 明粒・少礫やや多 量、金雲母多量	硬質	口縁部 破片	内：口縁部ヨコナ デ、体部ナデ 外：口縁部ヨコナ デ、体部ナデ	常陸産。	S-89b
9	内耳土器	口径： 底径： 器高：(5.0)	内：7.5YR4/6 褐 外：7.5YR4/2 灰褐	やや粗雑、黒色ガ ラス質粒微量、透 明粒・少礫やや多 量、金雲母多量	硬質	口縁部 破片	内：口縁部ヨコナ デ、体部ナデ外： 口縁部ヨコナデ、 体部ナデ、内耳接 合箇所指頭押圧 状のナデ	内耳1カ所。体部外 面スス附着。常陸産。	S-89b
10	土師質 土器搦鉢	口径： 底径： 器高：(7.2)	内：2.5Y7/2 灰黄 色 外：2.5Y7/2 灰黄色	緻密、黒色ガラス 質粒・白色粒・赤 褐色粒少量、透明 粒やや多量	硬質	口縁部片	内：ナデ後内面黒 色処理 外：体部ケズリに 近いヘラナデ後、 口縁部ヨコナデ。	内面ヨコナデ後に 12条の櫛歯状工具 で搦目を成形。口縁 部荒れが著しい。体 部外面指頭痕有。	S-89b no.1
11	土師質 土器搦鉢	口径： 底径： 器高：(4.5)	内：7.5YR6/6 橙 外：7.5YR6/6 橙	やや緻密、黒色粒・ 白色粒・透明粒少 量	やや 硬質	口縁部 破片	内：口縁部ヨコナ デ、体部ナデ 外：口縁部ヨコナ デ、体部ナデ、一 部ハケ	片口。口縁に2条の 沈線。	D8～9 E・F8～ 10
12	土師質 土器搦鉢	口径：(22.0) 底径：(14.0) 器高：(8.2)	内：7.5YR6/6 橙 外：5YR6/6 橙	やや緻密、黒色粒・ 白色粒・透明粒少 量	やや 硬質	体部から 底部片	内：ナデ後搦面成 形 外：ナデ、底面ナ デ	内面に12本のハケ状 工具による搦面成形。 外面は粗いナデ。指 頭圧痕多数。SA-2出 土破片と接合。	T12 S-2 S-2g 区 S-126b
13	瓦質土器 火鉢	口径： 底径： 器高：(4.3)	内：10YR5/3 にぶ い黄灰 外：10YR4/1 褐灰	やや粗雑、黒色ガ ラス質粒微量、金 雲母多量、少礫や や多量	やや 硬質	口縁部片	内：口縁～体部ナ デ 外：口縁部ナデ後 ミガキ、体部ナデ	口縁部剥離。常陸産。	S-126b
14	平瓦	口径： 底径： 器高：(8.2)	凹：5Y2/2 オリー ブ黒 凸：5Y2/2 オリー ブ黒	緻密、黒色ガラス 粒・透明ガラス粒 やや多量、赤褐色 粒・白色粒微量	やや 軟質	破片	凹：ナデ 凸：ナデ	凸面一部砂粒附着。	S-126 S-2 II層
15	土師質 土器皿	口径：(9.1) 底径： 器高：(3.0)	内：7.5YR6/4 にぶ い橙 外：7.5YR6/4 にぶ い橙	やや緻密、黒色ガ ラス質粒・白色粒 少量、赤色粒微量、 黒色粒やや多量	硬質	口縁部 破片	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	内面および外面の口 縁部付近にスス微量。 灯明皿カ。	S-201 S-202

第42表 中世土坑鍛冶関連遺物観察表

掲載 番号	種類	鍛冶関連遺物 構成表No.	出土位置
16	鉄製品 (刀子)	76	No.1

第43表 中世土坑金属製品観察表

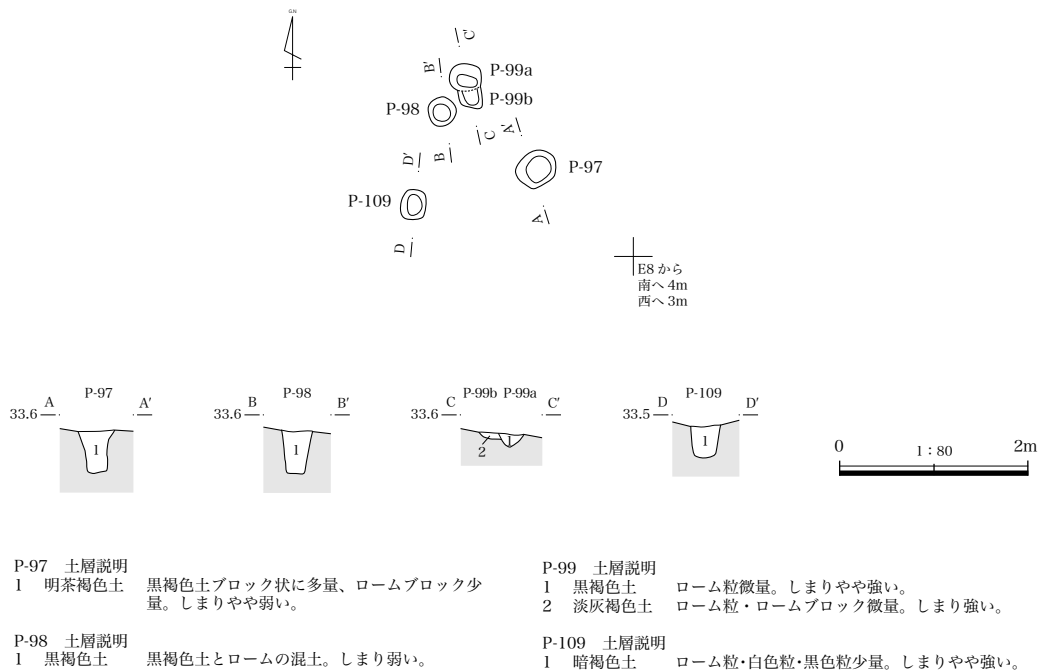
掲載 番号	種類 器種	径 (cm)	孔径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	材質	特徴・備考	出土位置
17	銭 銅製品	2.3	0.7	0.1	2.4	銅	元佑通寶	S-202

ピット

P-97～99b・109はE7a・E7bグリッドにまとまって位置している。北2mの地点には中世の地下式坑であるSK-106、西へ1.5mの地点には中世の掘立柱建物であるSB-108、南には中世の地下式坑であるSK-95が位置しており、覆土の類似等も含め考えて、これらの第227図に示したピットも中世に帰属する可能性が高いと判断した。但し、近世の可能性も残る。掘立柱建物跡の復元には至らないが、深いピットがみられることもあり、何らかの建物跡の柱穴である可能性も考えられる。

形状は円形のもの、方形のもの、不整形のものがある。

円形のもの、方形のものはP-97・98の2基で、直径はP-97で0.3m、P-98で0.4mである。深さは両者とも0.4m程である。方形のピットはP-109のみで、長軸0.3m・短軸0.27m、深さは0.34mである。不整形のピットは、P-99a・99bが該当する。両者は重複しており、断面観察からP-99aがP-99bより新しい。P-99aの規模は長軸0.31m・短軸0.28mで、深さは0.14mと浅い。P-99bは、長軸0.25m・短軸は残存部で0.18mである。深さは0.07mとごく浅い。これらのピットからは遺物は出土していない。



第227図 P-97～99b・109遺構実測図

第44表 中世土坑計測表

遺構No.	調査 グリッド	規模 (m)			形状	長軸方向	出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ				
SK-78	F9	3.25	1.30	0.84	隅丸長方形	N-84° -E		
P1	F9	0.35	0.17	0.21	不明	N-50° -E		
P2	F9	0.44	0.13	0.16	不明	N-68° -W		
P3	F9	0.53	0.42	0.11	楕円形	N-24° -W		
P4	F9	0.30	0.29	0.34	円形			
P5	F9	0.47	0.44	0.26	円形			
P6	F9	0.35	0.29	0.14	円形			
SK-83a	F8	2.04	1.55	0.75	方形	N-64° -E		
SK-88	F8	1.41	1.04	0.43	不明	N-19° -W		
SK-89	F8,9	3.55	2.09	1.0	長方形	N-7° -W		
SK-96b	E7	2.73	1.95	0.77	不整長方形	N-9° -W		
SK-101	E7	4.56	0.57	0.64	円形			
SK-114	E9	4.52	0.53	0.92	不整長方形	N-30° -E		
SK-119b	F10	2.02	1.58	0.38	不整形	N-20° -W		
SK-126b	F9,10	1.66	1.35	0.26	方形	N-71° -W		
SK-202	F8	4.16	2.06	0.24	不整長方形	N-85° -E		

第45表 中世ピット計測表

遺構No.	調査 グリッド	規模 (m)			形状	長軸方向	出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ				
P-97	E7	0.43	0.35	0.44	円形			
P-98	E7	0.31	0.29	0.45	円形			
P-99a	E7	0.51	0.28	0.14	不整形	N-31° -W		
P-99b	E7	0.25	(0.18)	0.07	不整形	N-90° -E		
P-109	E7	0.30	0.27	0.34	方形	N-5° -E		

4. 中世遺構外遺物

中世以外の遺構やグリッドでの出土遺物を図示する。

第 228 図 1～3 は SZ-27 の周溝覆土中から出土した土師質土器の小皿である。3 は底部に回転糸切り離し後にヘラ状工具によるケズリ調整が施される。

4～12 は内耳土器で、1～10 は口縁部片、11・12 は底部片である。4 は F8a グリッド出土の内耳土器の口縁部。口縁端部がシャープに整形されている。5～7・12 は SD-3 覆土中からの出土遺物である。6 は SD-3 と SK-116 からの出土遺物が接合しており、SK-116 に伴う可能性もある。器面の内外面の荒れが目立つ。8・9・11 は SA-2 盛土内から出土した。11 の外面下端部は全面剥離する。10 は F9c グリッド出土の内耳土器である。内耳部の破損面が激しく磨滅しており、破損後に研磨された可能性がある。また、体部には直径 1.5 cm の孔が穿たれている。これらの内耳土器は、いずれも外面にススが付着し、11・12 の底部片は内面底にもススが付着する。また、胎土には金雲母を多量に含むことから、茨城県筑波山麓周辺での製品と考えられる。

13 は SA-2 盛土内から出土した瓦質の播鉢の底部片。内面には 9 条の櫛歯状工具を用いて播目を施している。

14 は調査区内より出土した、志岐系のこね鉢である。内外面および体部破損面が磨滅しており、破損後に砥石として再利用か。15 世紀前半以前の可能性がある。15 は口縁端部に鉄釉がかかる碗の破片。皿の可能性もある。瀬戸窯産で、大窯の前半期、15 世紀中頃～後半に相当する。

16 は SA-2 の盛土内より出土した青磁の端反皿の破片で、15 世紀中頃～後半ごろの貿易陶磁器である。



第 228 図 中世遺構外遺物実測図

第46表 中世遺構外遺物観察表

掲載番号	種類器種	計測値 (cm)	色調 (内・外)	胎土	焼成	残存率	技法 (内・外)	特徴・備考	出土位置
1	土師質土器皿	口径： 底径： 器高：(2.7)	内：10YR7/3 にぶい黄橙 外：10YR7/3 にぶい黄橙	やや緻密、黒色ガラス質粒・赤褐色粒・白色粒微量、黒色粒やや多量	やや硬質	口縁部破片	内外面ロクロナデ		S-27a 区
2	土師質土器皿	口径：(10.0) 底径： 器高：(3.0)	内：5YR6/6 橙 外：7.5YR7/4 にぶい橙	やや緻密、黒色ガラス質粒・赤褐色粒・白色粒微量、黒色粒やや多量	やや硬質	口縁部破片	内外面ロクロナデ		S-27a 区
3	土師質土器皿	口径： 底径：2.8 器高：(2.1)	内：10YR6/4 にぶい黄橙 外：10YR6/4 にぶい黄橙	やや緻密、黒色ガラス質粒・赤褐色粒・白色粒微量、黒色粒やや多量	やや硬質	体部から底部片 底部 1/2	内外面ロクロナデ、底部内面ナデ、底部外面ヘラ切り離し		S-27 b 区
4	内耳土器	口径： 底径： 器高：(4.5)	内：7.5YR4/3 褐 外：7.5YR4/3 褐	やや粗雑、黒色ガラス質粒微量、金雲母多量、少礫やや多量	硬質	口縁部破片	内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部ナデ	外面スス附着。	F8a
5	内耳土器	口径： 底径： 器高：(3.7)	内：7.5YR5/3 にぶい褐 外：7.5YR5/4 にぶい褐	やや粗雑、黒色ガラス質粒微量、金雲母多量、少礫やや多量	硬質	口縁部破片	内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部ナデ	外面スス附着。	SD-3d 区
6	内耳土器	口径： 底径： 器高：(6.4)	内：7.5YR6/4 にぶい橙 外：7.5YR4/3 褐	やや粗雑、黒色ガラス質粒微量、金雲母多量、少礫やや多量	硬質	口縁部から体部破片	内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部ナデ	外面スス附着。全面が磨滅気味。	S-116 SD-3c 区
7	内耳土器	口径： 底径： 器高：(77.4)	内：7.5YR5/4 にぶい褐 外：7.5YR4/2 灰褐	やや粗雑、黒色ガラス質粒微量、金雲母多量、少礫やや多量	硬質	口縁部から体部破片	内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部ナデ	外面スス附着。	SD-3d 区
8	内耳土器	口径： 底径： 器高：(5.0)	内：5YR5/4 にぶい赤褐 外：5YR5/1 褐灰	やや粗雑、黒色ガラス質粒微量、金雲母多量、少礫やや多量	硬質	口縁部破片	内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部ナデ	外面スス附着。	S-2 T14 m 層
9	内耳土器	口径： 底径： 器高：(7.0)	内：7.5YR4/6 褐 外：7.5YR5/4 にぶい褐	やや粗雑、黒色ガラス質粒微量、白色粒・少礫やや多量、金雲母多量	硬質	口縁から体部片	内：口縁～体部ナデ 外：口縁～体部ナデ、体部外面指頭押圧状のナデ。	内耳1カ所。体部外面にスス附着。常陸産。	S-2g 区 m 層 F10c
10	内耳土器	口径： 底径： 器高：(3.9)	内：10YR5/4 にぶい黄褐 外：7.5YR5/4 にぶい褐	やや粗雑、黒色ガラス質粒微量、金雲母多量、少礫やや多量	硬質	口縁部破片	内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部ナデ	内耳1カ所。磨滅著しい。体部に1カ所穿孔。外面スス附着。常陸産。	d 区 F9d
11	内耳土器	口径： 底径： 器高：(3.3)	内：7.5YR5/4 にぶい褐 外：7.5YR3/1 黒褐	やや粗雑、黒色ガラス質粒微量、金雲母多量、少礫やや多量	硬質	体部から底部破片	内：体部ナデ、底部ナデ 外：体部ナデ、底部ナデ、底部周縁部ミガキ。	体部外面・底部内面にスス附着。体部外面下半剥離。常陸産。	S-2f 区 m 層 F9b・d
12	内耳土器	口径： 底径：(16.8) 器高：(3.4)	内：7.5YR5/4 にぶい褐 外：7.5YR4/2 灰褐	やや粗雑、黒色ガラス質粒微量、金雲母多量、少礫やや多量	硬質	体部から底部片	内：ナデ、底部ナデ 外：ナデ、底部ナデ	外面スス附着。外面底部丁寧なナデ。常陸産。	SD-3d 区
13	瓦質土器播鉢	口径： 底径：(6.3) 器高：(0.7)	内：7.5YR6/6 橙 外：5YR6/6 橙	やや緻密、黒色粒・白色粒・透明粒少量	やや硬質	底部片	内：ナデ後播面成形 外：底面ナデ	内面に8本のハケ状工具による播面成形。	S-2 I 層 F9d、S-2f 区 m 層 F9b・d、 F9c・d
14	陶器こね鉢	口径： 底径： 器高：(6.3)	内：7.5Y7/1 灰白 外：7.5Y7/1 灰白	やや緻密、少礫微量、黒色粒・白色粒やや多量	硬質	体部破片	内：自然釉 (10Y6/2 オリーブ灰) 外：ナデ	瓷器系陶器。外面および破損面磨滅。砥石に転用カ。	OYYK
15	陶器鉢?	口径： 底径： 器高：(2.3)	素地：2.5Y6/2 灰黄 釉：7.5YR3/4 暗褐	緻密、混入物無し	硬質	口縁部破片	ロクロ整形	口縁部のみ施釉。鉄釉。瀬戸窯産。	F5a E5c
16	陶器輪花皿	口径：(10.1) 底径： 器高：(2.8)	素地：2.5Y7/2 黄灰 釉：10GY6/1 緑灰	緻密、黒色粒・白色粒少量	硬質	口縁部片	ロクロ整形	大きく外反する口縁をもつ。	S-2 F10c・d m 層

第7節 近世以降の遺構と遺物

1. 土塁・堀跡

SA-2、SD-3（第229～239・243図、第47～51・53～55表、図版四一・四二・七三～七六）

位置 調査区中央部から西側のE9・F9・E10a・E10c・F10グリッドに位置する土塁と堀跡で、並行して構築されている。一連の遺構であるが、調査では土塁をS-2、堀跡をSD-3として調査を進めた。ここでは、SA-2、SD-3として報告する。台地端部にある。

規模・形状 調査を行う前の現況からも、土塁が遺存している状況が確認でき、調査区内の北北西から南南東方向に延びる高まりが確認できた。北側は、調査区北端から北西6m程まで高まりを確認できるが、それより先ははっきりとしない。南側は明確に土塁が確認でき、調査区南端から南東約7mでほぼ直角に折れ曲がり南東隅となる。それより12m程南西方向で約1m土塁が途切れる開口部がある。さらに11m程先で緩やかに屈曲し、22m程西進した先からは高まりは確認できなくなる。また、調査区外になるが、土塁南辺の外側では、堀跡の落ち込みを確認することが出来る。

本調査区においては、南北約25m程の調査となった。SA-2およびSD-3は地形の傾斜に沿う方向に構築されている。主軸をN-25°-Wとして、直交する軸長における最大幅はSA-2で10.54m、SD-3で3.08mの13.62mである。最短幅はSA-2で8.86m、SD-3で2.94mの11.80mであった。

土塁盛土（SA-2）表土除去後に確認した土塁の傾斜は、盛土が流れている可能性も考えられるが、東西方向に向かって緩やかに傾斜する。形態は、西側端部ははっきりしないが、SD-3に接する地点からは傾斜がやや急になる。現況では南東側が高く、標高34.025m。北西端は低く、標高33.545mである。

盛土は一部表土化が進んでおり、黒土とロームブロックを含む土等が乱雑に積み上げられて構築されている。最大で56cmの盛土が残存し、堀跡底面と盛土上面の比高差は2.24～2.80mである。また、E9c・E9dグリッドの盛土表面には、他と異なる土層が確認されたところがある。

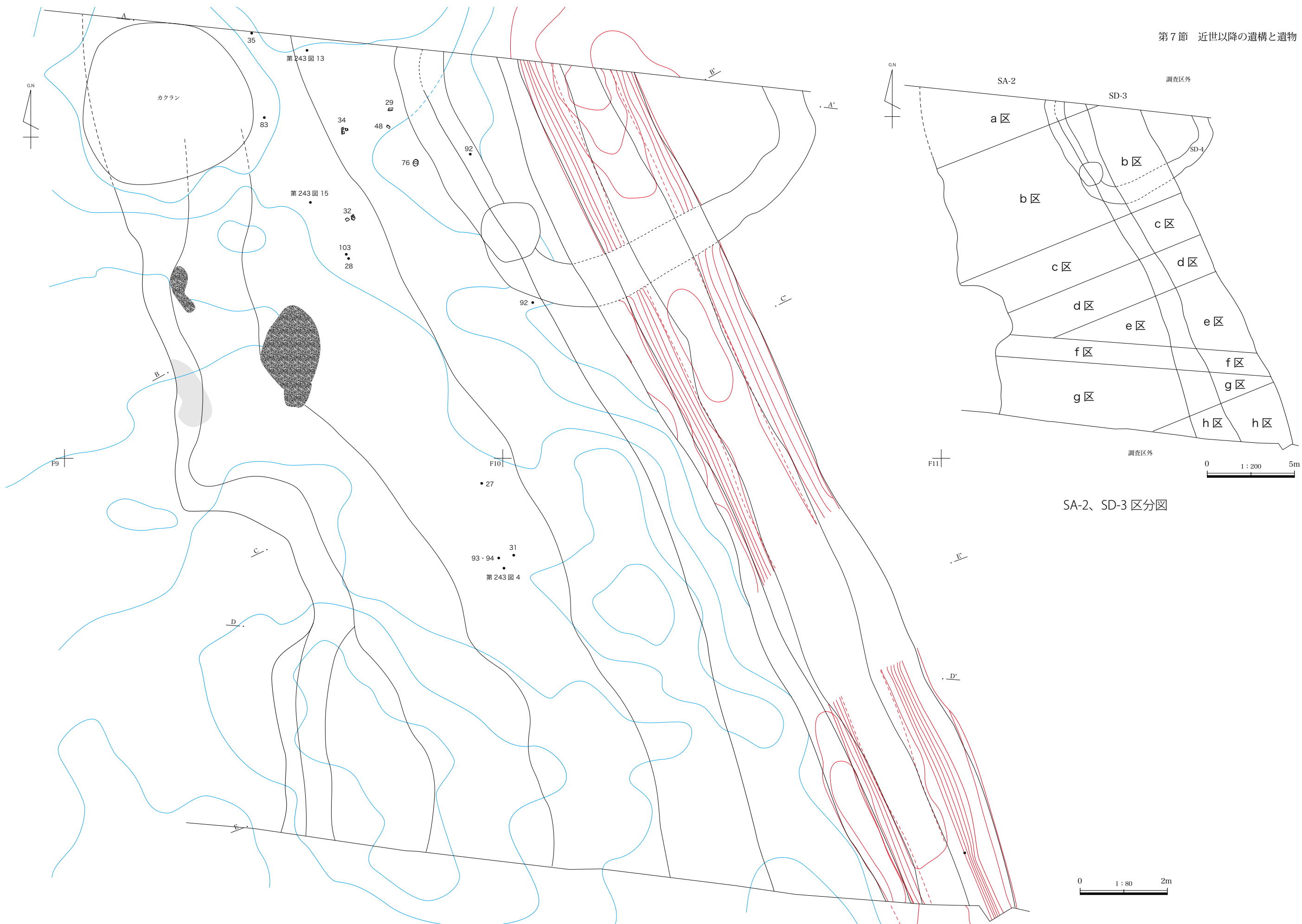
E9cグリッドで長軸1.08m×直交軸0.4m、E9c・E9dグリッドでは長軸2.32m×直交軸1.36mの粘土部2カ所、更にE9cグリッドにおける長軸1.64m×短軸0.78mの砂層1カ所では、砂を混ぜていると思われる土層が平面的に確認できた。

SD-3東側にも若干の盛土がなされた可能性もあるが、僅かであろう（第230図A-A'4層）。また、SD-3東側の断面では、Ⅱ層およびSZ-1盛土層の掘り込みが確認される（第230図D-D'）。

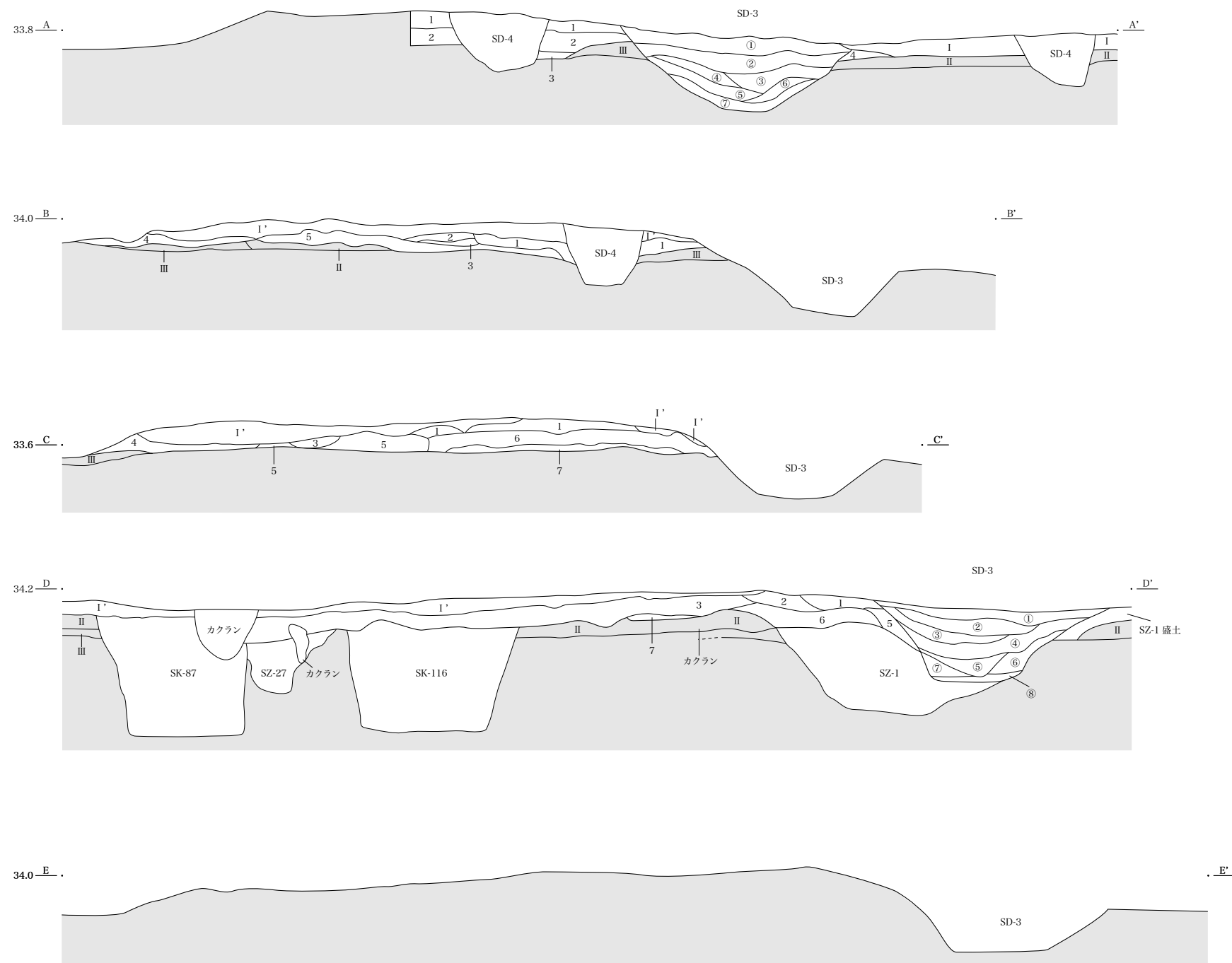
土塁の基底部は、第230図D-D'ラインの中央付近、F10aグリッドあたりでは、旧表土であるⅡ・Ⅲ層が明瞭に確認できるが、地下式坑が集中するF9bグリッド（D-D'ライン西端近く）では、Ⅱ層は殆どみられない。堀跡（SD-3）SA-2盛土に並行する堀跡であるSD-3は、断面逆台形を呈するが、北側のA-A'セクション周辺での断面は「U」字状である。SA-2へは緩やかに立ち上がるが、第230図B-B'ラインは東側へやや急に立ち上がる。底面の標高は北側で32.580m、D-D'セクション周辺は32.855m、南側で32.965mであり、北側でやや急に深くなる。

覆土は、①～⑦層までが全体に確認できる、自然堆積である。また、D-D'セクションにみられる⑧層は、ロームブロックをやや多く含んでおり、しまりも強い。この部分は、SZ-1の周溝覆土を切っている地点であり、SD-3底面に施した貼土（・整地層）の可能性が考えられる。

重複 南東部で、SZ-1の墳丘および周溝を壊して構築されている状況が、D-D'セクションおよび同地点の



第229図 SA-2、SD-3 遺構実測図 (1)



SA-2 土層説明

A-A'

- 1 暗茶褐色土 ローム粒やや多量、ロームブロック少量。しまりやや強い。
- 2 黒色土 ロームブロック多量、ローム粒・白色粒やや多量。しまりやや強い。(全体的に不均一)
- 3 暗褐色土 ローム粒多量、ロームブロックやや多量。しまりやや弱い。(全体的にローム質)
- 4 暗茶褐色土 ローム粒やや多量、ロームブロック少量。しまりやや強い。(畑上土カ)

B-B'

- 1 暗灰褐色土 ローム粒・ロームブロック多量、炭化粒・粘土粒やや多量、粘土ブロックやや少量。しまりやや弱い。
- 2 灰褐色土 ローム粒・ロームブロック・粘土粒多量、粘土ブロックやや多量、炭化粒少量。しまり弱い。
- 3 黒褐色土 粘土粒やや多量、ロームブロック・粘土ブロック少量、ローム粒・炭化粒やや少量。しまり弱い。
- 4 黒褐色土 ローム粒多量、ロームブロックやや多量、粘土粒少量、炭化粒微量。しまりやや強い。
- 5 暗灰褐色土 ロームブロック多量、粘土粒少量、ローム粒やや少量、炭化粒・粘土ブロック微量。しまりやや弱い。

このセクションでは、周辺に粘土を用いての整地が行われている。そのため、他のセクションでは見られない粘土が混ざる層が確認できる。

C-C'・D-D'

- 1 暗褐色土 ローム粒やや多量、ロームブロック少量。しまり弱い。(表土化)
- 2 暗褐色土 ロームブロックやや多量、ローム粒やや少量。しまりやや強い。
- 3 暗灰褐色土 ローム粒やや多量、ロームブロック少量、炭化粒・白色粒微量。しまりやや弱い。
- 4 灰褐色土 ローム粒・ロームブロック少量、白色粒微量。しまりやや弱い。
- 5 淡灰褐色土 ローム粒多量、ロームブロックやや多量。しまりやや強い。
- 6 灰褐色土 ローム粒・ロームブロック・白色粒少量、炭化粒微量。しまり強い。(黒色土が混ざる)
- 7 淡灰褐色土 ロームブロック少量、ローム粒やや少量。しまり強い。

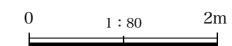
SD-3 土層説明

A-A'

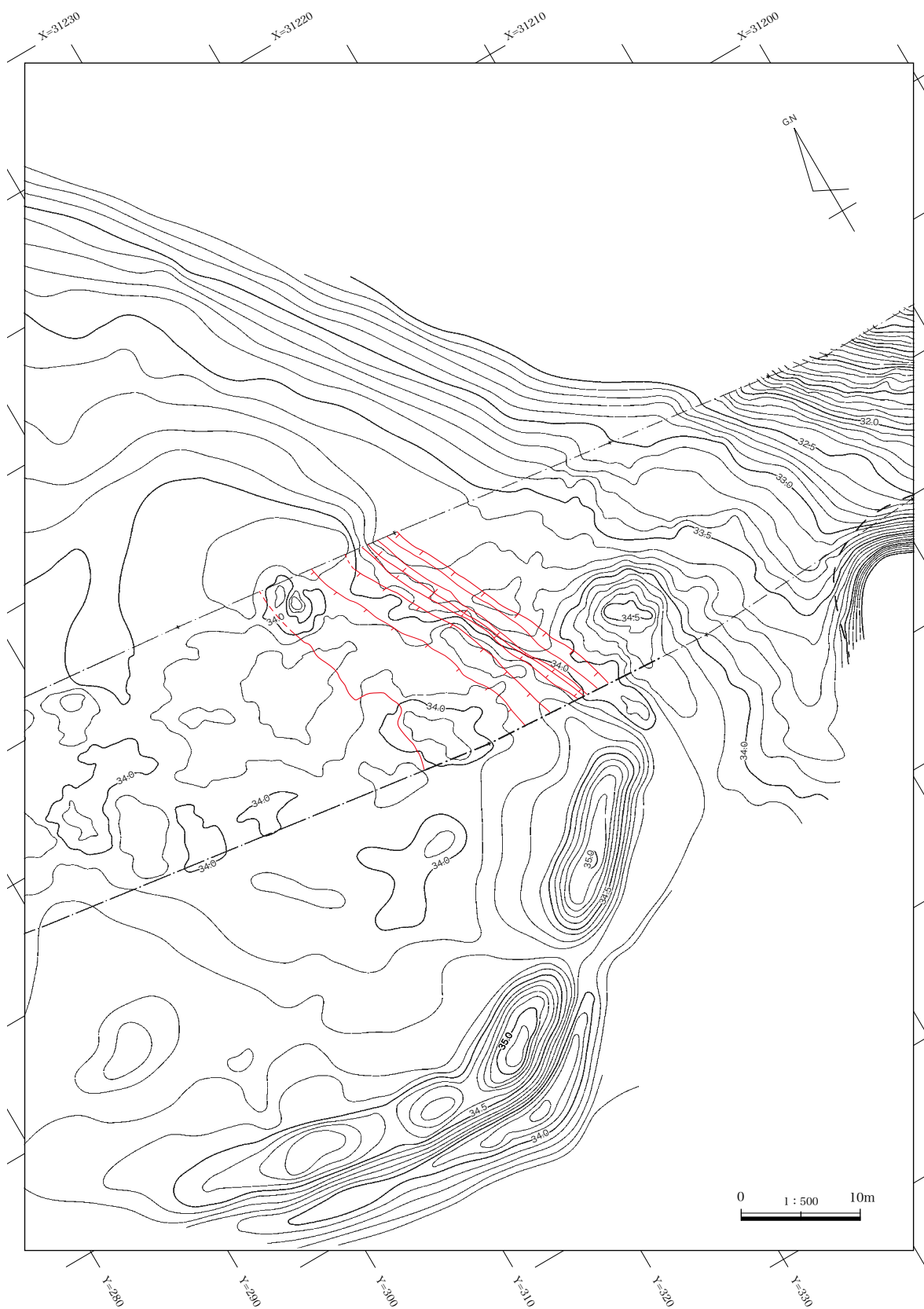
- ① 茶褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。しまり強い。
- ② 暗茶褐色土 ローム粒・ロームブロック少量。しまり強い。
- ③ 茶褐色土 ロームブロック多量、ローム粒やや多量、白色粒少量。しまりやや強い。
- ④ 暗茶褐色土 ローム粒多量、ロームブロック少量。しまり強い。
- ⑤ 茶褐色土 ローム粒やや多量、ロームブロック・白色粒やや少量。しまりやや強い。
- ⑥ 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量、白色粒やや多量。しまり強い。
- ⑦ 暗黄褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。しまりやや弱い。

D-D'

- ① 灰褐色土 ローム粒・ロームブロック少量。しまり弱い。(表土化)
- ② 暗茶褐色土 ローム粒やや多量、ロームブロック・炭化粒・白色粒微量。しまりやや弱い。
- ③ 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量、白色粒やや多量、炭化粒微量。しまりやや強い。
- ④ 黒褐色土 ローム粒・白色粒多量、ロームブロックやや多量、炭化粒少量。しまり強い。
- ⑤ 暗灰褐色土 ローム粒やや多量、ロームブロックやや少量、炭化粒微量。しまりやや強い。
- ⑥ 淡灰褐色土 ローム粒・ロームブロックやや多量、炭化粒少量、白色粒微量。しまり強い。
- ⑦ 黒褐色土 ロームブロック少量、ローム粒やや少量。しまりやや弱い。
- ⑧ 暗灰褐色土 ロームブロック多量、ローム粒やや多量。しまり強い。(粘土カ)



第230図 SA-2、SD-3 遺構実測図(2)



第231図 SA-2、SD-3位置図

SZ-1 の A-A' セクションで観察できた。古墳周溝の 4・5・12・15 層を掘り込んで構築されており、古墳周溝が上層まで埋没した段階であったと考えられる。

北部では、近世以降の方形溝状遺構である SD-4 および近世以降の土坑である SK-127 に切られている。SD-4 との関係は、第 230 図 A-A' セクションおよび B-B' セクションで観察ができた。SA-2 盛土の 1～3 層を掘り込む状況が確認された。また、SD-3 覆土とは堆積の状況が異なる点からも（第 240 図 D-D' セクション）、SD-3 よりも新しい遺構であると判断した。SK-127 は、SD-4 を切る状況が確認されていることから（第 240 図 C-C' セクション）、SA-2 よりも新しい遺構であると考えられる。

また、SZ-1 周溝の一部、SZ-27・66、SK-115 等の遺構は SA-2 盛土除去後にプランが確認できた。

出土遺物 SA-2 の表面から盛土内、SD-3 の覆土中から瓦質土器や陶磁器をはじめとする土器類や石製品・金属製品等が多量に出土した。これらの遺物の中には、SA-2、SD-3 と別遺構との間で遺構間接合をするものもある（第 243 図）。また、近世以降の溝である SD-4 の覆土中からの遺物と接合する例もある。本項では遺構間接合をしない遺物を掲載する。

本遺跡からは、近世の内耳土器が多量に出土している。本報告書では、胎土に金雲母を多量に含み、色調が赤褐色を呈し、胴部が薄手で深底になるもの、つまり本遺跡における地下式坑等から出土するものを「内耳土器」と呼称する。一方、近世の項目で扱っている、厚手で浅く、一部瓦質となる内耳土器を本報告書では「焙烙」と呼称する。

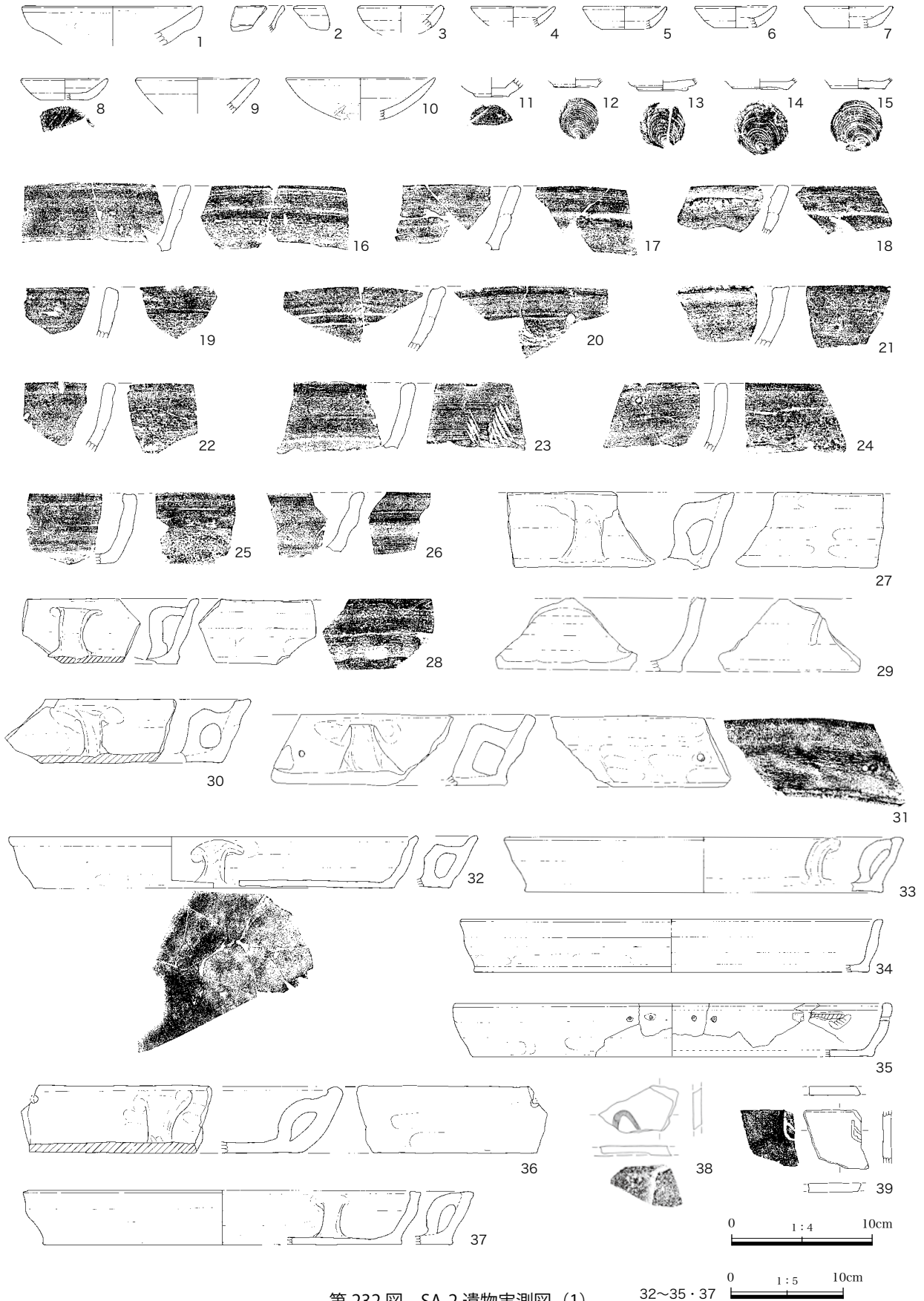
SA-2 出土遺物のうち、図化できた資料は、土師質土器 23 点、内耳土器 26 点、陶器 40 点、磁器 16 点、瓦 1 点、石製品 20 点、金属製品 4 点、ガラス製品 1 点である。第 232 図 1～15 は土師質土器の皿類である。1 はロクロを用いず製作されており、外面はヘラケズリを施す。2～15 はすべてロクロを用いて製作されており、12～15 の底部には回転糸切り離し痕が明瞭に残る。盛土内から出土するものは、1・2・6～11・14b である。その他では、3 が F10c グリッド、4 が d・e 区、5 が e 区、12 が b 区、13 が a 区、15 が d 区 I 層から出土している。

16～42 は内耳土器の焙烙である。殆どの焙烙は外面にススが付着する。21・26 は全体的に丁寧なナデを施す。23 の口縁部は磨ぎに近い、丁寧なナデを施す。38 の底部内面には判読不明の墨書が書かれる。39 は底部内面に判読不明の印判が押印されている。第 233 図 40・41 は他の焙烙と異なり、かなり浅めで胎土が赤褐色である。42 は胎土が赤褐色であることから、40・41 と同一個体の可能性がある。

31・35・36 の焙烙は、体部に径 3～5 mm 程度の穴が穿孔されている。31 および 36 は、穿孔部の外面に粘土の剥落痕が認められ、穿孔時に剥落したものと考えられる。35 は内面側の穿孔径が外面側よりも広がっている。これらの穿孔は、焼成後に行われている可能性がある。

これらの焙烙のうち、28・31 は盛土の上面からの出土である。盛土内からは 19～22・25・27・29・30・32～34・37～40・42 が出土している。その他は、a 区から 41、b 区から 16・18、d 区から 23・24・26、35 は T23 からの出土である。また、17 は b～d 区から、36 は d・e 区からの出土である。43 は小片のため、詳細は不明であるが、他の焙烙とは様相が異なる。鉢類の可能性が考えられる。d 区からの出土。44～50 は土師質土器の火鉢である。44～47 は内外面に丁寧なナデ整形を施す。48～50 は内面の剥離が顕著で、胎土には金雲母が混入する。44・49 は e 区、45 は T18、46 は盛土上面から、47 は T4、48 は盛土内、50 は c～e 区からの出土である。

陶器は、坏類や碗類、皿類等の飲食関係から、灯明具や香炉等の生活用品が出土している。第 234 図 51～54 は小坏。51 は藁灰釉が施釉される。瀬戸・美濃系の可能性がある。51 は a 区、52 は g 区、53 は d・



第232図 SA-2 遺物実測図 (1)

32~35・37

e区、54はe区から出土した。55～58は小碗。57は美濃系。58は全面に光沢のある錆釉が施釉されている。55はb区、56は土塁上面から、57はe区、58はc区から出土した。59・60は鎧茶碗。両者とも美濃窯産である。59は盛土内から、60はd・e区から出土した。61～63はやや大きめの碗である。外面にはほぼ均等な幅で円弧上の白色帯がみられるが、内面はランダムな白色線によって文様面となす。3点とも小破片で、盛土内から出土した。64は尾呂・多治見系の碗類底部。e区からの出土。65は瀬戸系の向付。F9c・F9dグリッドから出土した。

66・67は輪花皿で、両者とも瀬戸窯産である。内面には蕊状の文様がみられる。66は盛土内から、67はE9bグリッドから出土した。68は瀬戸系の皿で、内面に梅と思われる文様が描かれている。d区からの出土。69・70は瀬戸・美濃系の鉢。69はF9cグリッド、70は盛土内からの出土である。71・72は挿鉢で、71は美濃窯、72は常滑の可能性ある。71・72ともに盛土内からの出土である。

73～76は徳利。73は瀬戸・美濃、74・76は美濃系、75は在地産と思われる。75の内面には強くロクロ目が残り、頸部に鉄釉を施す。76の底部外面はヘラ状工具による回転ヘラケズリ調整が行われる。外面には一部鉄釉が残る。73・75・76は盛土内から出土しており、74はb・f区からの出土である。

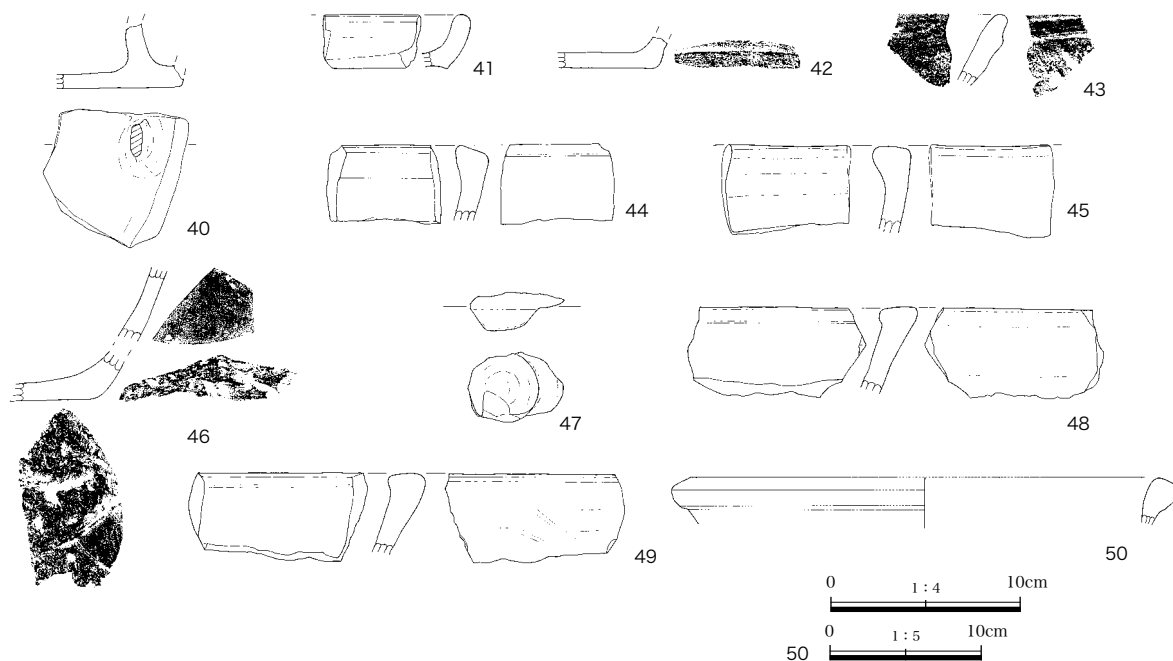
77・78は壺類の底部で、両者とも尾呂・多治見系と考えられる。77は鉄釉、78はあめ釉を施す。出土位置は、77は盛土内からで、78はT18および北東部の攪乱から出土する。

79～84は灯明受け皿。80のみ美濃系と考えられ、他は不明である。81のみススが多量に付着する。82の受け部は、他の灯明受け皿より細身で、シャープな印象を与える。83は他よりやや厚手。79はg区、80～82は盛土内からの出土で、83は土塁上面から出土した。84は北西部の攪乱からの出土。85・86は鬚だらいで、同一個体であろう。文様面が弓張状になる形態をしている。85は盛土内、86はe区からの出土である。87・88は香炉。87は美濃系と思われる。87の釉は光沢が強いが、88はややくすむ。87は盛土内、88はE9a・E9bグリッドからの出土である。89は風呂で、茶器の一種である。盛土内から出土。90は不明陶器で、徳利とも考えられる。瀬戸系で、オリーブ灰色の釉が施釉される。盛土上面からの出土である。

磁器は肥前系が主体で、器種は碗類が多い。第235図91～96は丸形碗ですべて肥前系である。91～94は厚手で、体部外面には雪輪・梅文・一重圏線がみられる、いわゆる「くらわんか碗」と称される碗である。95・96は薄手の作りで、前述の碗とは様相を異にする。体部外面の文様は、95は半菊花文、96は燕子花文で、両者とも内面に圏線を施文する。95の内面には五弁花文と思われる文が手描きで施文される。91はa区から、92・93は土塁上面から、94は土塁上面および盛土内からの出土遺物と接合した。95はc区から出土した。96は盛土内からの出土である。

97～102は筒形碗。97は厚手で、体部外面に雪輪と思われる文様がみられることから、前述した91～94の丸形碗と同系統の個体と思われる。98～100は体部外面に菊花文を施文する。98・99は花卉端部を弧状に表現するのに対し、100は花卉の形態が失われている。101は体部外面に格子内に縦線を施文する文様である。98～101の、内面の口縁端部には1～3条の圏線を施文する。102は外面は無文で、内面の口縁端部に四方襷文を施文する。97・99・102は盛土内から、98はd区、100はE9dグリッド、101はg区から出土している。103は広東碗で、土塁の上面から出土した。104は盛土内から出土した碗類で、外面に草文を施文する。

105は肥前波佐見系と思われる皿である。外面に唐草文、内面には扇文や雪輪等が描かれる。内面の見込みには五弁花文が施文される。厚手で、重みのある皿である。a区から出土した。106は輪花皿で、口縁端部に口紅を施す。b区出土。



第233図 SA-2 遺物実測図 (2)

第236図107は瓦片。盛土内から出土した。石製品は砥石が主体的である。108～124が砥石で、124を除きすべて流紋岩である。124は頁岩で、片面に九字文が刻まれる。これらの砥石の出土位置は、盛土内からは109～111・118・120・122が出土する。その他は、108はT18、112・123がe区から、113・116がd・e区、114・121がd区、115がf区、117がa区、119・124がb区から出土する。

125～127は不明石製品。125は方形状に加工されている石製品で、表面の一部に熱を受けた痕跡や工具痕と思われる痕跡が確認できる。126は加工痕のある礫で、石臼の破片の可能性がある。127は扁平なやや厚みのある礫で、基石と思われる。ただし、両者ともはっきりとはしない。125はE9bグリッド、126はa区、127はc区からの出土である。

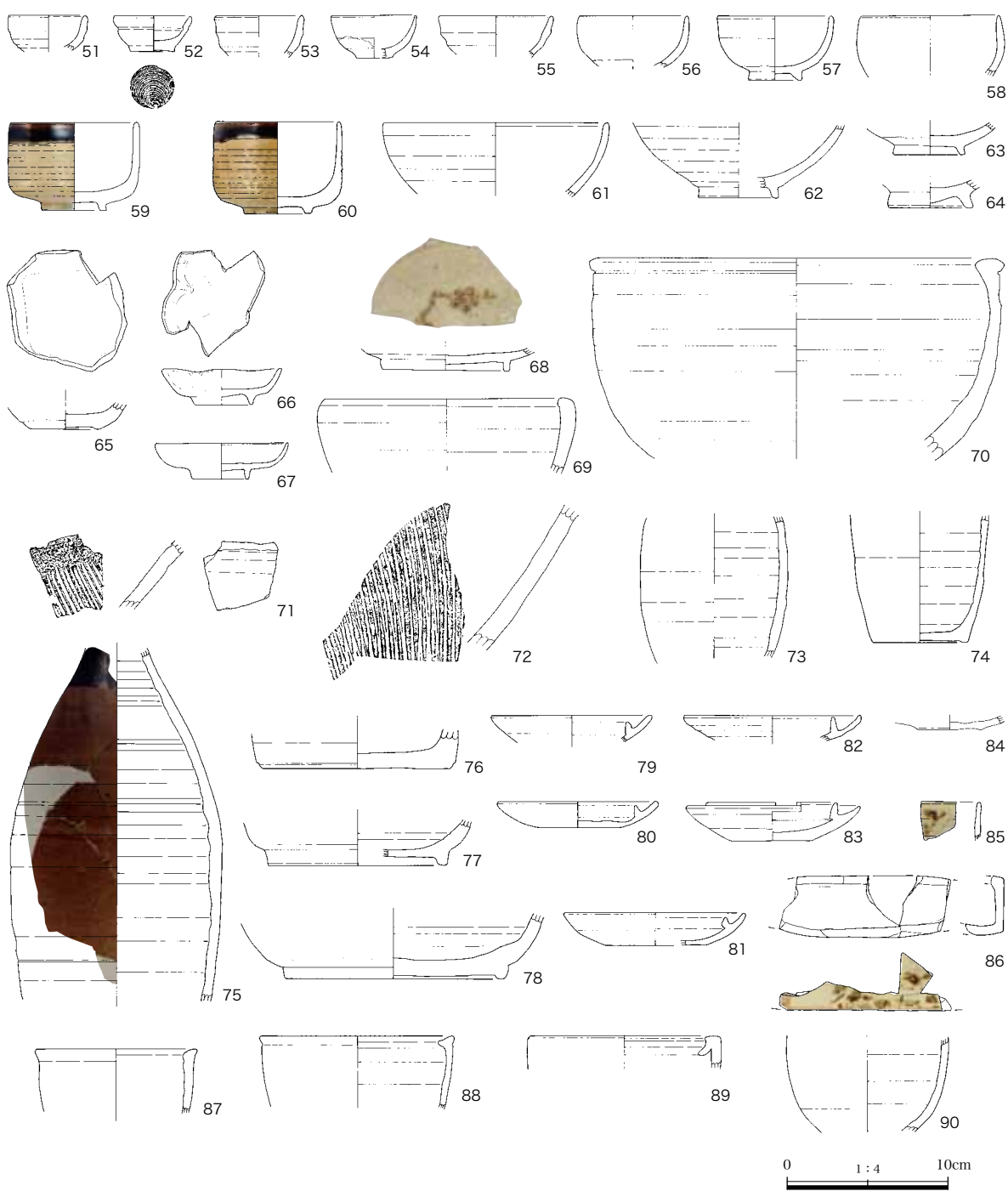
第237図128・129は青銅製の煙管。130はリング状の青銅製品である。131は銅銭で、寛永通宝である。128・130はd・e区から、129は盛土内から出土する。131は盛土上面から上、つまり表土からの出土である。132はガラス製小瓶。底面の厚みは均一になっていない。a区からの出土。

SD-3からは焙烙1点、陶器2点、土製品1点、石製品3点、鉄製品4点が出土している。第238図1は焙烙片である。スガが殆ど付着していない。a区から出土。2・3は陶器で、2は小坏。瀬戸・美濃系の可能性がある。e区から出土する。3は播鉢で、内面は底部から立ち上がり部にかけて磨滅が著しい。c区からの出土遺物であり、SK-115出土遺物とも接合した。4は不明土製品で、1カ所孔を穿つ。c区からの出土。

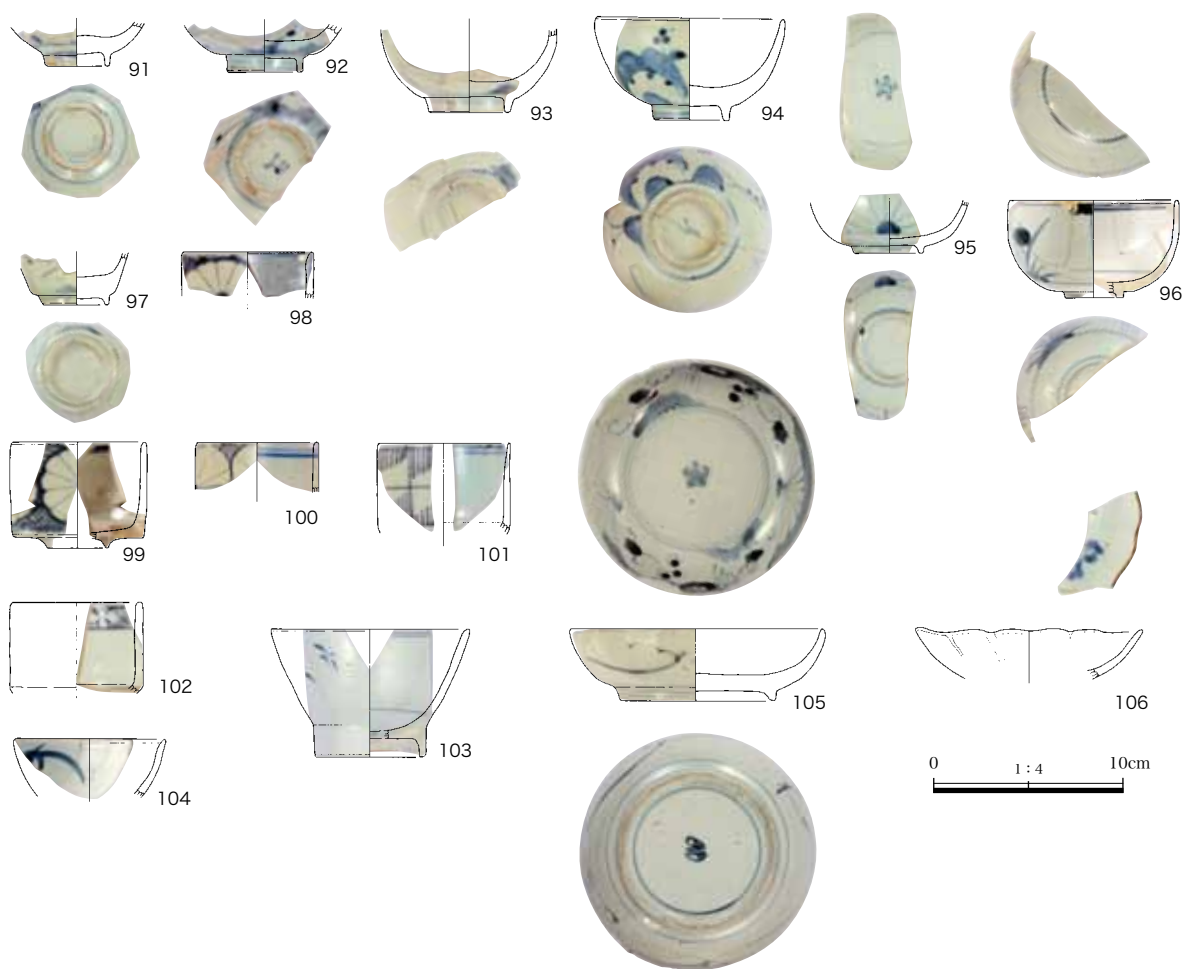
5～7は石製品で、5は硯である。陸の中心部の使用が著しく、大きくくぼむ。頁岩を使用している。6・7は砥石で、両者とも流紋岩である。5・7はd区からの出土で、6はa・b区から出土した。

第239図8～11は鉄製品。8は板状を呈しており、左側で折り返す。9～11は不明棒状製品。10は一部、弧状を描く。11は断面長方形で、角棒状である。すべて覆土中からの出土である。

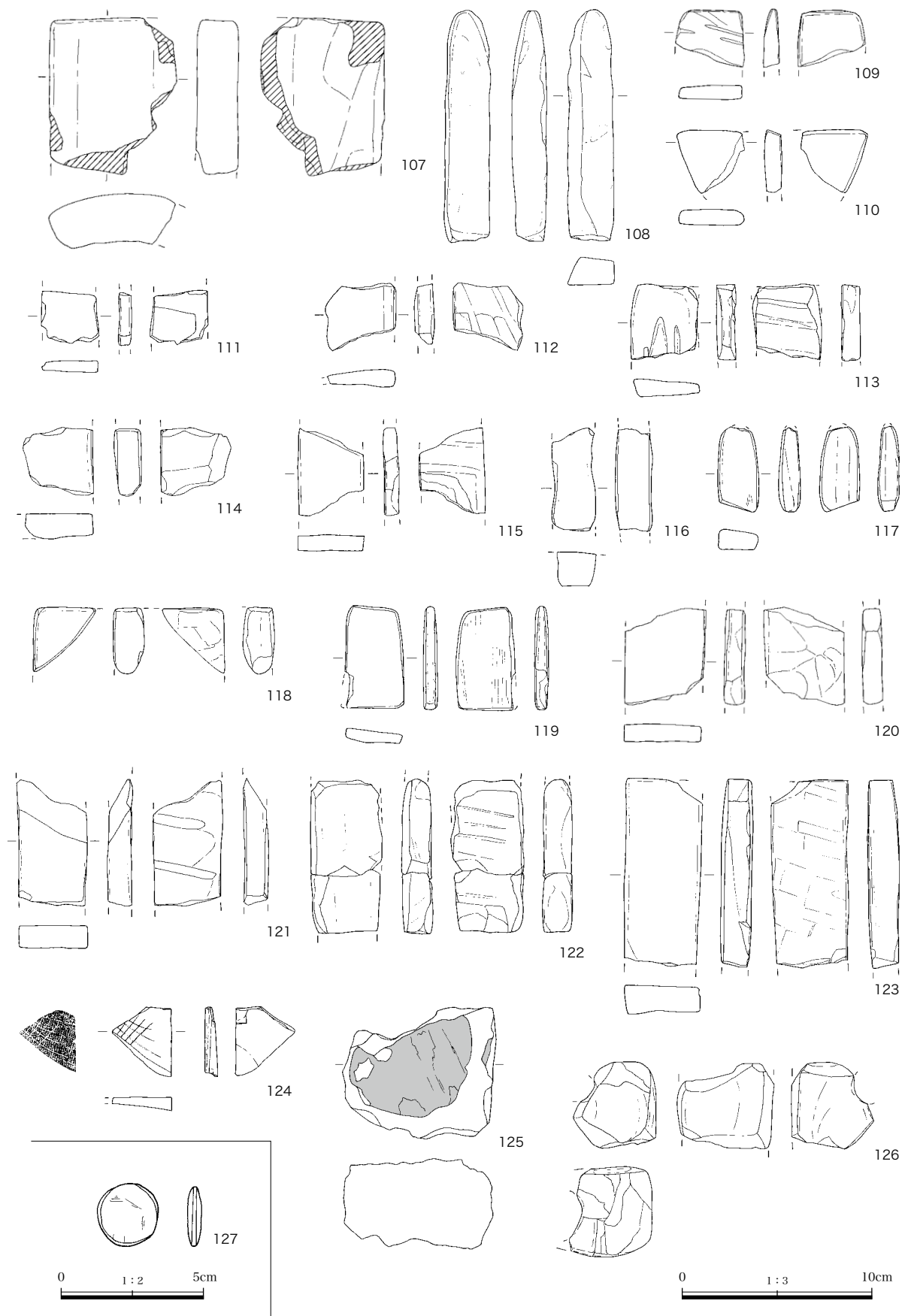
以上の掲載遺物を含めて、SA-2からは縄紋土器514点、石器30点、土製品7点、内耳土器236点、土師質土器皿50点、その他の中近世の遺物が46点出土している。SD-3からは、縄紋土器789点、石器18点、弥生土器2点、近世の遺物3点、木製品1点、炭1gが出土している。



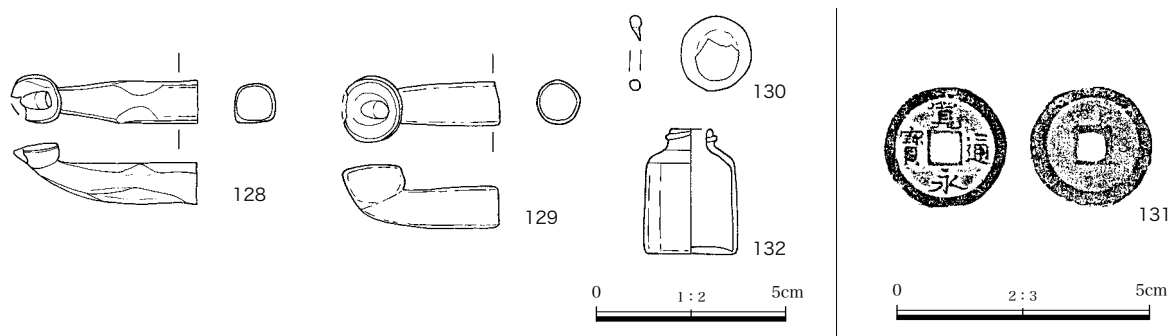
第234図 SA-2 遺物実測図 (3)



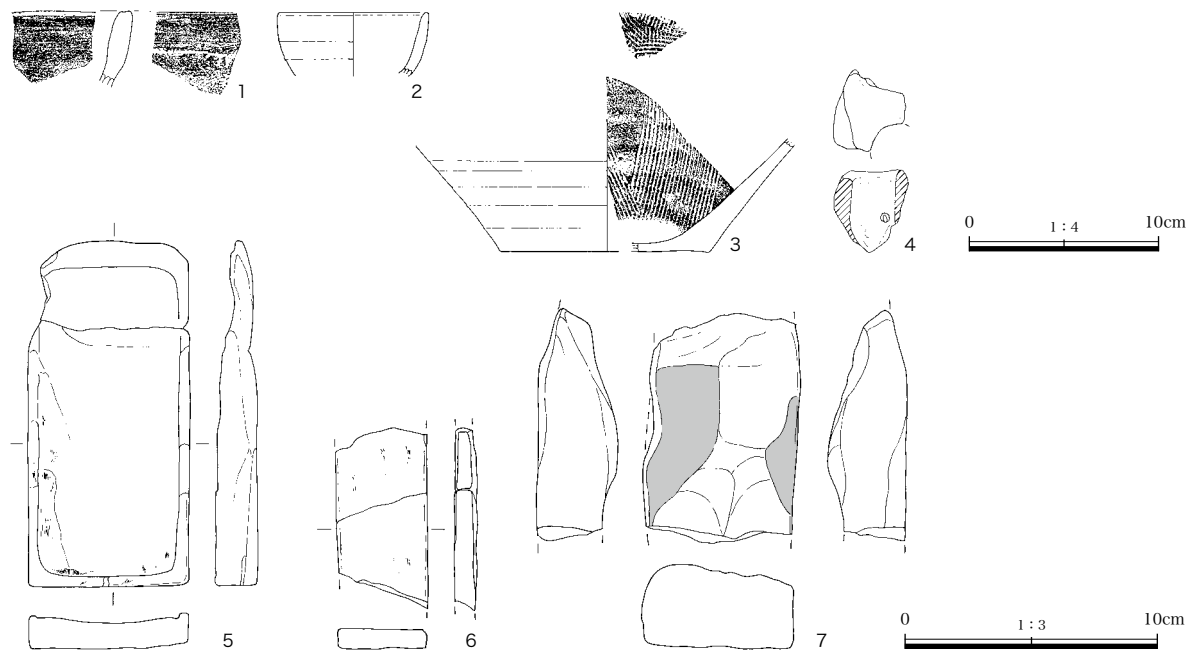
第235図 SA-2 遺物実測図(4)



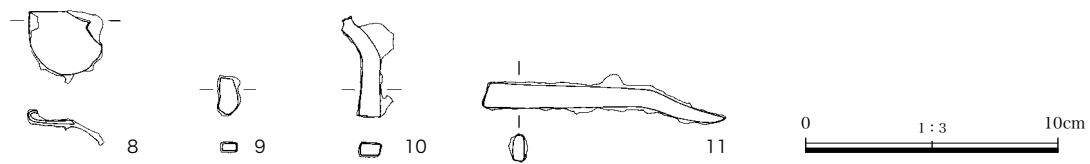
第236図 SA-2遺物実測図(5)



第 237 図 SA-2 金属製品・ガラス製品実測図



第 238 図 SD-3 遺物実測図



第 239 図 SD-3 鍛冶関連遺物実測図

第 47 表 SA-2 遺物観察表

掲載番号	種類 器種	計測値 (cm)	色調 (内・外)	胎土 (石材)	焼成	残存率	技法 (内・外)	特徴・備考	出土位置
1	土師質 土器皿	口径：(12.8) 底径： 器高：(2.8)	内：10YR6/2 灰黄 褐 外：10YR6/2 灰黄 褐	緻密、黒色粒・黒 色ガラス粒少量、 透明粒・金雲母微 量	やや 軟質	口縁部 破片	内：ナデ 外：口縁部ヨコナ デ、体部ナデ	手づくね。外面一部 にスス附着。常陸産 か。	h 区盛土内
2	土師質 土器皿	口径： 底径： 器高：(1.7)	内：10YR7/3 にぶ い黄橙 外：10YR7/3 にぶ い黄橙	緻密、黒色粒・白 色粒・透明粒微量、 金雲母やや多量	やや 硬質	口縁部 破片	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	常陸産。	a 区盛土内
3	土師質 土器皿	口径：(6.0) 底径： 器高：(1.7)	内：10YR7/4 にぶ い黄橙 外：10YR7/4 にぶ い黄橙	緻密、白色粒・黒 色ガラス質粒・透 明粒・赤褐色粒や や多量	やや 硬質	口縁部 破片	内：ロクロナデ後 ナデ 外：ロクロナデ後 ナデ		F10c グ リッド
4	土師質 土器皿	口径：(6.0) 底径： 器高：(1.4)	内：10YR7/4 にぶ い黄橙 外：10YR7/4 にぶ い黄橙	緻密、黒色粒多量、 白色粒少量	やや 硬質	口縁部片	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ		d・e 区
5	土師質 土器皿	口径：(6.0) 底径：(3.0) 器高：1.5	内：10YR7/3 にぶ い黄橙 外：10YR7/3 にぶ い黄橙	緻密、黒色粒多量、 黒色ガラス粒やや 多量、赤褐色粒微 量	やや 硬質	口縁から 底部片	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、 底部ナデ	切離し不明。	e 区
6	土師質 土器皿	口径：(5.8) 底径：(3.0) 器高：1.5	内：10YR7/2 にぶ い黄橙 外：10YR7/2 にぶ い黄橙	緻密、黒色粒多量、 黒色ガラス粒やや 多量、赤褐色粒微 量	やや 硬質	口縁から 底部片	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、 底部ナデ	器内 10YR3/1 黒褐。 切り離し不明。	f 区、 g 区盛土内
7	土師質 土器皿	口径：(6.2) 底径：(3.8) 器高：1.5	内：10YR7/3 にぶ い黄橙 外：10YR7/3 にぶ い黄橙	緻密、黒色粒多量、 黒色ガラス粒少 量、赤褐色粒微量	やや 硬質	口縁から 底部片	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、 底部ナデ	切り離し不明。	h 区盛土内
8	土師質 土器皿	口径：(6.2) 底径：(3.4) 器高：1.5	内：10YR7/3 にぶ い黄橙 外：10YR7/3 にぶ い黄橙	緻密、黒色粒多量、 黒色ガラス粒少 量、透明粒・赤褐 色粒微量	やや 硬質	口縁から 底部 2/5	内：ロクロナデ、 底部ナデ 外：ロクロナデ、 底部糸切り離し後 ナデ		h 区、 F10c・ F10d 盛土 内
9	土師質 土器皿	口径：(8.8) 底径： 器高：(2.5)	内：2.5Y7/2 灰黄 外：2.5Y7/2 灰黄	緻密、黒色粒多量、 黒色ガラス粒少 量、透明粒・赤褐 色粒微量	やや 硬質	口縁から 体部片	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	11 と同一個体カ。	h 区盛土内
10	土師質 土器皿	口径：(10.6) 底径： 器高：(2.9)	内：10YR7/3 にぶ い黄橙 外：10YR6/4 にぶ い黄橙	やや粗雑、黒色粒 微量・透明粒少量、 砂粒やや多量	やや 軟質	口縁部片	内：ナデ 外：ナデ、底部押 圧状ナデ		f 区盛土内、 F9b・d グ リッド
11	土師質 土器皿	口径： 底径：(2.4) 器高：(1.3)	内：2.5Y7/3 浅黄 外：2.5Y7/3 浅黄	緻密、黒色粒多量、 黒色ガラス粒少 量、透明粒・赤褐 色粒微量	やや 硬質	底部 1/2 体部一部	内：磨滅のため不 明 外：ロクロナデ、 底部へら切り離し	9 と同一個体カ。	S-2h 区 m 層
12	土師質 土器皿	口径： 底径：3.1 器高：(0.6)	内：10YR6/3 にぶ い黄橙 外：2.5YR6/2 灰黄	緻密、黒色粒・白 色粒少量、透明粒 微量、金雲母やや 多量	硬質	底部完存	内：底部ロクロナ デ 外：底部回転糸切 り離し	常陸産。	S-2b 区
13	土師質 土器皿	口径： 底径：3.4 器高：(0.9)	内：10YR7/3 にぶ い黄橙 外：10YR7/3 にぶ い黄橙	緻密、黒色粒多量、 透明粒・赤褐色粒 微量、金雲母やや 多量	やや 硬質	底部完存	内：底部ロクロナ デ後ナデ 外：ロクロナデカ、 底部回転糸切り離 し	高台状。常陸産。	S-2a 区 E9a
14	土師質土 器皿	口径： 底径：3.8 器高：(0.8)	内：7.5YR6/4 にぶ い橙 外：7.5YR6/4 にぶ い橙	緻密、黒色粒多量、 透明粒・赤褐色粒 微量、金雲母やや 多量	やや 硬質	底部完存	内：底部ロクロナ デ 外：ロクロナデ、 底部回転糸切り離 し	常陸産。	S-2b 区 m 層 E9b
15	土師質土 器皿	口径： 底径：3.8 器高：(0.7)	内：10YR4/1 褐灰 外：10YR5/3 にぶ い黄褐	緻密、透明粒・黒 色粒微量、白色粒 多量	やや 硬質	底部完存	内：底部ロクロナ デ 外：体部ロクロナ デ、底部回転糸切 り		S-2d 区 I 層 F9d

16	焙烙	口径： 底径： 器高：4.7	内：10YR7/3 にぶ い黄橙 外：10YR2/1 黒	やや緻密、透明粒・ 黒色ガラス質粒・ 白色粒・黒色粒・ やや多量	硬質	口縁から 体部破片	内：口縁～体部ヨ コナデ 外：口縁～体部ヨ コナデ、体部下 半指頭圧痕状のナデ	口縁～体部外面ス ス附着。	S-2b 区
17	焙烙	口径： 底径： 器高：4.6	内：10YR6/2 灰黄 褐 外：10YR2/1 黒	やや緻密、透明粒・ 黒色ガラス質粒・ 白色粒・黒色粒・ やや多量	硬質	口縁から 体部破片	内：口縁～体部ヨ コナデ 外：口縁～体部ヨ コナデ、体部下 半に押圧状のナデ	口縁～体部外面ス ス附着。	S-2b 区 S-2c・d 区
18	焙烙	口径： 底径： 器高：(3.5)	内：10YR4/1 褐灰 外：10YR2/1 黒	やや緻密、透明粒・ 黒色ガラス質粒・ 白色粒・黒色粒・ やや多量	硬質	口縁部 破片	内：口縁～体部ヨ コナデ 外：口縁～体部ヨ コナデ	内耳接合痕1カ所。 体部外面スス附着。	S-2b 区
19	焙烙	口径： 底径： 器高：(3.6)	内：10YR4/1 褐灰 外：10YR4/2 灰黄 褐	やや緻密、赤褐色 粒少量、透明粒・ 白色粒・黒色粒・ やや多量	硬質	口縁部 破片	内：口縁～体部ヨ コナデ 外：口縁～体部ヨ コナデ	体部外面上半スス付 着。	S-2b 区 m 層 E9b
20	焙烙	口径： 底径： 器高：(4.4)	内：7.5YR3/1 黒褐 外：7.5YR2/1 黒	やや緻密、赤褐色 粒少量、透明粒・ 白色粒・黒色粒・ やや少量	硬質	口縁部 破片	内：口縁～体部ヨ コナデ 外：口縁～体部ヨ コナデ、体部下 半に粗いナデ	口縁部中心やや窪む。 体部外面上半スス付 着。	S-2a 区 m 層 E9b ハイド
21	焙烙	口径： 底径： 器高：(4.2)	内：10YR4/1 褐灰 外：10YR4/2 灰褐	やや緻密、黒色粒・ 白色粒・少礫やや 多量、金雲母多量	硬質	口縁から 体部破片	内：口縁～体部ヨ コナデ 外：口縁～体部ヨ コナデ	体部外面スス附着。 常陸産。	S-2b 区
22	焙烙	口径： 底径： 器高：(4.9)	内：10YR6/4 にぶ い黄橙 外：10YR4/3 にぶ い黄褐	やや緻密、赤褐色 粒少量、透明粒・ 白色粒・黒色粒・ やや多量	硬質	口縁から 底部破片	内：口縁～体部ヨ コナデ 外：口縁～体部ヨ コナデ	口縁部～体部外面上 半スス附着。	S-2E10b・ dm 層
23	焙烙	口径： 底径： 器高：(4.7)	内：7.5YR5/1 褐灰 外：7.5YR4/1 褐灰	やや緻密、白色粒・ 黒色粒やや少量、 透明粒やや多量	硬質	口縁から 体部破片	内：口縁～体部ヨ コナデ、口縁部ミ ガキに近いナデ 外：口縁～体部ヨ コナデ	口縁部～体部外面上 半に微量のスス附着。	S-2d 区
24	焙烙	口径： 底径： 器高：(4.9)	内：10YR4/1 褐灰 外：10YR7/3 にぶ い黄橙	やや緻密、黒色ガ ラス質粒・赤褐色 粒・白色粒微量、 黒色粒やや多量	硬質	口縁から 体部破片	内：口縁～体部ヨ コナデ 外：口縁～体部上 半ヨコナデ、体部 下半ケズリ	体部内面スス附着。	S-2d 区 I・II 層
25	焙烙	口径： 底径： 器高：4.9	内：10RY5/2 灰黄 褐 外：10YR5/3 にぶ い黄褐	やや緻密、透明粒・ 白色粒・黒色粒・ やや多量	硬質	口縁から 底部破片	内：口縁～体部ヨ コナデ 外：口縁～体部ヨ コナデ、体部下 半に押圧状ナデ	口縁部中心やや窪む。 体部外面上半スス付 着。	S-2b 区 m 層 E9b
26	焙烙	口径： 底径： 器高：(4.2)	内：10YR5/2 灰黄 褐 外：10YR3/1 黒褐	やや緻密、白色粒・ 黒色粒・透明粒や や少量	硬質	口縁から 体部破片	内：口縁～体部ヨ コナデ 外：口縁～体部ヨ コナデ	体部外面微量のスス 附着。	S-2d 区
27	焙烙	口径： 底径： 器高：(5.3)	内：10YR3/1 黒褐 外：10YR3/1 黒褐	やや緻密、透明粒、 白色粒、黒色粒少 量	硬質	口縁から 体部破片	内：口縁部ヨコナ デ、体部ナデ 外：口縁部ヨコナ デ、体部ナデ	内耳1カ所。口縁部 中心に浅い窪み1条。	T15 no.1
28	焙烙	口径： 底径： 器高：4.6	内：10YR6/3 にぶ い黄橙 外：10YR3/2 黒褐	やや緻密、黒色ガ ラス質粒・赤褐色 粒・白色粒微量、 黒色やや多量	硬質	口縁から 底部片	内：口縁部ヨコナ デ、体部ナデ 外：口縁部ヨコナ デ、体部ナデ、体 部下半に指頭押圧 状のナデ。	内耳1カ所。	SA-2 no.7
29	焙烙	口径： 底径： 器高：5.3	内：10YR5/3 にぶ い黄褐 外：7.5YR2/1 黒	やや粗雑、黒色粒・ 白色粒・少礫やや 多量、金雲母多量	硬質	体部から 底部破片	内：体部ナデ、底 部ナデ 外：口縁部ナデ、 体部ナデ、底部ナ デ	体部外面スス附着。 常陸産。	E10b S-2b 区 m 層
30	焙烙	口径： 底径： 器高：4.5	内：7.5YR4/1 灰褐 外：10YR2/1 黒	やや緻密、赤褐色 粒少量、透明粒・ 白色粒・黒色粒・ やや多量	硬質	口縁から 底部片	内：口縁～体部ヨ コナデ、底部ナデ 外：口縁～体部ヨ コナデ	内耳1カ所。体部外 面にスス附着。	S-2E9b no.1

第三章 検出された遺構と遺物

31	焙烙	口径： 底径： 器高：5.1	内：2.5Y6/3 にぶ い褐 外：2.5Y3/2 黒褐	やや緻密、黒色ガ ラス質粒・赤褐色 粒・白色粒微量、 黒色やや多量	硬質	口縁から 底部片	内：口縁部ヨコナ デ、体部ナデ 外：口縁部ヨコナ デ、体部ナデ、体 部下半に指頭押圧 状のナデ。	内耳1カ所。体部に 1カ所穿孔。体部外面 にスス附着。底部外 面に短冊状の圧痕。	SA-2 no.3
32	焙烙	口径：(38.8) 底径：(34.0) 器高：4.9	内：10YR6/4 にぶ い黄橙 外：7.5YR1.7/1 黒	やや緻密、赤褐色 粒少量、透明粒・ 白色粒・黒色粒・ やや多量	硬質	口縁から 底部1/5	内：口縁～体部ヨ コナデ、底部ナデ 後ミガキ 外：口縁～体部ヨ コナデ、体部下半 指頭押圧状のナデ	内耳1カ所。体部外 面・底部内面にスス 附着。底部外面縮目。 平底。	S-2 E9b no.7,8 S-2a・b区
33	焙烙	口径：(37.8) 底径： 器高：5.3	内：10YR4/1 褐灰 外：10YR3/5 にぶ い黄褐 底部外：7.5YR5/4 にぶい褐	やや緻密、黒色粒・ 白色粒・少礫やや 多量、金雲母多量	硬質	口縁から 体部1/7	内：口縁～体部ヨ コナデ、底部ナデ 外：口縁～体部ヨ コナデ、底部周縁 ナデ	内耳1カ所。体部外 面にスス附着。常陸 産。	S-2b区 m 層 E9b S-2b区 m層 E10b T4
34	焙烙	口径：(40.0) 底径：(37.2) 器高：5.0	内：2.5YR5/1 黄灰 外：2.5YR1.7/1 黒	やや緻密、透明粒・ 白色粒・黒色粒・ 赤褐色粒やや多量	硬質	口縁から 体部1/4	内：口縁～体部ヨ コナデ、底部ナデ 外：口縁～体部ヨ コナデ、体部下半 指頭押圧状のナデ	外面スス附着。	S-2E9b no.4,5 S-2c・d区 T4
35	焙烙	口径：(41.6) 底径：(38.0) 器高：(5.0)	内：10YR5/3 にぶ い黄褐 外：10YR5/4 にぶ い黄褐	やや緻密、赤褐色 粒少量、透明粒・ 白色粒・黒色粒・ やや多量	硬質	口縁から 体部1/5	内：口縁～体部ヨ コナデ 外：口縁～体部ヨ コナデ、体部下半に 指頭圧痕状のナデ	体部外面スス附着。 内耳接合痕1カ所。 体部に2カ所穿孔。	S-5no.2 T22,T23
36	焙烙	口径： 底径： 器高：4.8	内：7.5YR4/3 褐 外：7.5YR4/2 灰褐	緻密、黒色粒・白 色粒少量、金雲母 多量	硬質	口縁から 底部片	内：口縁～体部ヨ コナデ、底部ナデ 外：口縁～体部ヨ コナデ、底部ナデ	内耳1カ所。体部口 縁寄りに1カ所穿孔。 体部外面にスス附着。 常陸産。	S-2d・e区
37	焙烙	口径：(37.8) 底径：(33.8) 器高：5.1	内：10YR2/1 黒 外：10YR6/4 にぶ い黄橙 底部外：7.5YR5/4 にぶい褐	やや緻密、黒色粒・ 白色粒・少礫やや 多量、金雲母多量	硬質	口縁から 底部1/6	内：口縁部～体部 ヨコナデ、底部ナ デ 外：口縁～体部ヨ コナデ、底部ナデ	内耳1カ所。体部外 面・底部内面にスス 附着。常陸産。	S-2b区 SD-3 no.12 S-2b区 m層 E10b
38	焙烙	口径： 底径： 器高：0.7	内：10YR5/3 にぶ い黄褐 外：10YR5/3 にぶ い黄褐	緻密、透明粒・赤 褐色粒・白色粒・ 黒色粒やや少量	硬質	底部破片	内：底部ナデ 外：未調整	底部内面に不明墨書。	S-2a区 m層
39	焙烙	口径： 底径： 器高：(0.7)	内：7.5YR5/3 にぶ い褐 外：7.5YR5/3 にぶ い褐	やや緻密、黒色ガ ラス質粒・赤褐色 粒・白色粒微量、 黒色粒やや多量	硬質	底部破片	内：ナデ 外：ナデ	内面に不明押印。	E10b S-2b区 m層
40	焙烙	口径： 底径： 器高：(3.4)	内：10YR6/3 にぶ い黄橙 耳部 10YR2/1 黒 外：5YR6/6 橙	やや緻密、黒色ガ ラス質粒・赤褐色 粒・白色粒微量、 黒色粒やや多量	硬質	底部破片	内：底部ミガキに 近いヨコナデ 外：体部ナデ、底 部一部ナデ。	内耳1カ所。	E10b S-2b区 m層
41	焙烙	口径： 底径： 器高：2.8	内：5YR4/6 赤褐 外：5YR4/2 灰褐	やや粗雑、黒色ガ ラス質粒・赤褐色 粒微量、黒色粒・ 白色粒やや多量	硬質	口縁部 破片	内：口縁部ナデ、 底部ナデ 外：口縁部ナデ、 体部下半ケズリ後 ナデ、底部ナデ	内面口縁部から外面 にスス附着。	S-2a区
42	焙烙	口径： 底径： 器高：(1.7)	内：5YR5/6 明赤 褐 外：5YR1.7/1 黒	やや緻密、透明粒・ 赤褐色粒・白色粒・ 黒色粒やや少量	硬質	底部から 体部立ち 上がり部 破片	内：体部ナデ、底 部ナデ 外：体部ナデ底部 一部ナデ	全面にスス附着。	S-2a区 m層
43	鉢類	口径： 底径： 器高：(3.7)	内：10YR7/2 にぶ い黄橙 外：10YR6/2 灰黄 褐	やや緻密、黒色ガ ラス粒・白色粒多 量、透明粒・赤褐 色粒少量	やや 硬質	口縁部 破片	内：口縁部ヨコナ デ、体部ナデ 外：口縁部ヨコナ デ、体部ナデ	火鉢カ	d区 F9c・ d
44	土師質 土器火鉢	口径： 底径： 器高：(3.9)	内：10YR5/2 灰黄 褐 外：10YR6/3 にぶ い黄褐	緻密、黒色粒・赤 褐色粒微量、白色 粒・透明粒やや多 量	硬質	口縁部 破片	内：口縁ナデ後ミ ガキ、体部ナデ 外：口縁ナデ、体 部ナデ	内面コゲ附着。	S-2e区 F9b
45	土師質 土器火鉢	口径： 底径： 器高：(4.6)	内：7.5YR5/4 にぶ い褐 外：7.5YR6/6 橙	緻密、黒色粒・透 明粒・赤褐色粒少 量	硬質	口縁部 破片	内：口縁部ヨコナ デ後ミガキ、体部 ヨコナデ 外：体部ナデ		S-5 T18

46	土師質 土器火鉢	口径： 底径： 器高：(6.6)	内：7.5YR6/4 にぶ い橙 外：7.5YR6/4 にぶ い橙	緻密、白色粒・黒 色粒・赤褐色粒少 量、透明粒やや多 量	硬質	底部一部 体部破片	内：ナデ 外：ナデ	外面底部に脚部剥落 の痕跡。	SA-2 no.4
47	土師質 土器 火鉢脚部	口径： 底径： 器高：(2.0)	内：7.5YR6/4 にぶ い橙 外：7.5YR6/4 にぶ い橙	緻密、黒色粒・透 明粒・赤褐色粒少 量	硬質	脚1片	内：剥離の為不明 外：脚部貼付け、 ナデ		T4
48	土師質 土器火鉢	口径： 底径： 器高：(4.6)	内：5YR5/4 にぶ い赤褐 外：7.5YR6/4 にぶ い橙	やや粗雑、白色粒・ 金雲母・少礫多量	やや 硬質	口縁部 破片	内：口縁剥離、体 部ナデ 外：口縁剥離、体 部ナデ	全体的に荒れが目立 つ。常陸産。	S-2 E9b no.2
49	土師質 土器火鉢	口径： 底径： 器高：(4.3)	内：5YR5/4 にぶ い赤褐 外：5YR5/4 にぶ い赤褐	やや粗雑、少礫や や少量。白色粒・ 金雲母多量	やや 硬質	口縁部 破片	内：口縁端部ミガ キに近いナデ、体 部ナデ 外：口縁ナデ、体 部ナデ	口縁部荒れ。外面ス ス付着。常陸産。	S-2e 区 F9b
50	土師質 土器火鉢	口径：(36.0) 底径： 器高：(3.3)	内：剥離 外：2.5Y3/2 黒褐	やや粗雑、白色粒・ 金雲母・少礫少量、 透明粒やや多量	やや 硬質	口縁部片	内：剥離の為不明 外：ミガキに近い ナデ	内面全面に荒れ。常 陸産。	S-2d・e 区 S-2c 区
51	陶器 小坏	口径：(4.8) 底径： 器高：(2.2)	素地：5Y8/3 浅黄 釉：5Y6/4 オリー ブ黄	緻密、黒色粒・白 色粒微量	硬質	口縁から 体部1/5 弱	ロクロ整形	51と同一個体カ。瀬 戸・美濃系。	S-2a 区
52	陶器 小坏	口径：4.8 底径：2.7 器高：2.2	素地：2.5Y7/4 浅 黄 釉：5Y7/4 浅黄	緻密、黒色粒・白 色粒微量	硬質	ほぼ完形	ロクロ整形、底部 外面回転系切り離 し	内面から体部外面上 位まで施釉。体部外 面上位に1条の沈線。 瀬戸・美濃系。	S-2g 区
53	陶器 小坏	口径：(5.6) 底径： 器高：(2..5)	素地：5Y7/3 浅黄 釉：5Y6/4 オリー ブ黄	緻密、黒色粒・白 色粒微量	硬質	口縁から 体部片 口縁部 1/5	ロクロ整形	体部外面上半より下 位は無釉。58と同一 個体カ。瀬戸・美濃系。	S-2d・e 区
54	陶器 小坏	口径：(5.3) 底径：(2.2) 器高：2.6	素地：5Y6/1 灰 釉：7.5Y6/3 オリー ブ黄	緻密、黒色粒・白 色粒微量	硬質	口縁から 底部1/2 弱	ロクロ整形、底部 外面回転系切り離 し	外面底部付近まで施 釉する箇所有。瀬戸・ 美濃系。	S-2e 区 F9b
55	陶器 小碗	口径：(7.0) 底径： 器高：(2.5)	素地：5Y7/2 灰白 釉：5Y6/4 オリー ブ黄	緻密、黒色粒・白 色粒微量	硬質	口縁から 体部片 口縁部 1/4 弱	ロクロ整形	体部外面に釉。強い ロクロ整形の痕跡有。 瀬戸・美濃系。	S-2b 区
56	陶器 小碗	口径：(6.8) 底径： 器高：(3.2)	素地：7.5Y8/2 灰 白 釉：10Y6/2 オリー ブ灰	緻密、黒色粒・白 色粒微量	硬質	口縁から 体部1/3	ロクロ整形	体部外面下半無釉。 瀬戸・美濃系。	S-2 no.1
57	陶器 小碗(丸 碗)	口径：7.2 底径：3.3 器高：4.0	素地：5Y8/2 灰白 釉：7.5Y6/2 灰オ リーブ	緻密、黒色粒・白 色粒微量	硬質	口縁部 1/2 体部2/3 底部完存	ロクロ整形	高台部および周辺無 釉。	S-2e 区 F9b
58	陶器 小碗	口径：(8.6) 底径： 器高：(3.7)	素地：5YR8/2 灰 白 釉：5YR4/6 赤褐	緻密、黒色粒・白 色粒微量	硬質	口縁から 体部片	ロクロ整形		S-2c 区
59	陶器 鎧茶碗	口径：(8.0) 底径：4.0 器高：5.5	素地：2.5Y7/1 灰 白 釉：7.5YR2/2 黒褐 (内) 2.5Y7/4 浅黄(外)	緻密、黒色粒・白 色粒微量	硬質	底部完存 口縁部 1/6 体部1/5	ロクロ整形	内面から外面口縁部 まで鉄釉。体部外面 には連続刺突文。高 台端部は磨滅。高台 内中央部に2mm程の 窪み。美濃系。	T14 no.6
60	陶器 鎧茶碗	口径：7.8 底径：4.2 器高：5.7	素地：7.5Y7/1 灰 白 釉：7.5YR2/2 黒褐 (内) 2.5Y7/4 浅黄(外)	緻密、黒色粒・白 色粒微量	硬質	口縁から 体部一部 欠損 底部完存	ロクロ整形	内面から外面口縁部 まで鉄釉。体部外面 には連続刺突文。高 台端部は磨滅。高台 内中央部に2mm程の 窪み。美濃系。	S-2e 区 F9b S-2d・e 区
61	陶器 刷毛目碗	口径：(14.0) 底径： 器高：(4.5)	素地：5Y8/4 淡黄 釉：5Y6/4 オリー ブ黄(透明釉)	緻密、黒色粒・白 色粒極微量	硬質	口縁部 破片	ロクロ整形	内外面刷毛目。白泥 +透明釉。瀬戸・美 濃系？	S-2c・d 区 S-2b 区 S-2b 区 m 層 E9b
62	陶器 刷毛目碗	口径： 底径：(5.0) 器高：(4.5)	素地：5Y8/4 淡黄 釉：5Y6/4 オリー ブ黄(透明釉)	緻密、黒色粒・白 色粒極微量	硬質	体部から 底部片	ロクロ整形	底部外面のみ無釉。 内外面刷毛目。白泥 +透明釉。瀬戸・美 濃系？	S-2a 区 E9a・E10b S-2b 区 m 層

第三章 検出された遺構と遺物

63	陶器 刷毛目碗	口径： 底径：4.4 器高：(2.0)	素地：5Y8/4 淡黄 釉：5Y6/4 オリーブ黄(透明釉)	緻密、黒色粒・白色粒極微量	硬質	底部一部 欠損 体部一部	ロクロ整形	底部外面のみ無釉。 内外面刷毛目。白泥 +透明釉。瀬戸・美濃系？	S-2b 区 m 層 E9b S-2E9b
64	陶器 碗類	口径： 底径：5.3 器高：(1.7)	素地：5Y8/3 浅黄 釉：2.5Y4/6 オリーブ褐	緻密、白色粒やや少量	硬質	底部完存	内：ロクロナデカ 外：ロクロナデ	内面のみ施釉。尾呂・多治見系。	S-2e 区 F9b
65	陶器 向付	口径： 底径：4.2 器高：(1.7)	素地：5Y8/2 灰白 釉：7.5Y6/3 オリーブ黄(透明釉)	緻密、黒色粒・白色粒・少礫微量。	硬質	底部完存 体部一部	ロクロ整形	底部外面のみ無釉。 外面に微量のスス附着。瀬戸系。	S-2 外 F9c d 区 F9c
66	陶器 輪花皿	口径：(7.4) 底径：3.7 器高：2.3	素地：5Y8/3 淡黄 釉：7.5Y6/3 オリーブ黄	緻密、黒色粒・白色粒少量	硬質	口縁から 体部 1/4 弱 底部ほぼ 完存	ロクロ整形	内面には、型押しにより、しべを表現した文様が表出する。高台部のみ無釉。瀬戸系。	S-2b 区 S-2b 区 m 層 E9a・c
67	陶器 輪花皿	口径：(8.2) 底径：3.5 器高：2.2	素地：2.5Y7/1 灰白 釉：7.5GY6/1 緑灰	緻密、黒色粒・白色粒少量	硬質	口縁から 体部 1/7 底部完存	ロクロ整形	内面には、型押しにより、しべを表現した文様が表出する。高台部のみ無釉。瀬戸系。	S-2 E9b
68	陶器 皿	口径： 底径：(8.0) 器高：(1.4)	素地：5Y8/3 淡黄 釉：10Y6/2 オリーブ灰	緻密、黒色粒・白色粒少量	硬質	底部 1/2 弱	ロクロ整形	外面無釉。内面草花文。瀬戸系。	S-2d 区
69	陶器 片口鉢	口径：(15.6) 底径： 器高：(4.6)	素地：2.5Y8/3 淡黄 釉：7.5Y8/3 淡黄(透明釉)	緻密、黒色粒・白色粒微量。	硬質	口縁部 破片	ロクロ整形	瀬戸・美濃系。	S-2 外 F9c
70	陶器 片口鉢	口径：(25.8) 底径： 器高：(12.5)	素地：2.5Y7/3 浅黄 釉：透明釉	緻密、黒色粒・白色粒微量。	硬質	口縁から 体部片	ロクロ整形	底部内外面のみ無釉。瀬戸・美濃系。	S-2 E10b 区 m 層 T4
71	陶器 すり鉢	口径： 底径： 器高：(4.3)	素地：5Y8/3 淡黄 釉：5YR4/4 にぶい赤褐	緻密、黒色粒微量	硬質	体部破片	ロクロ整形	美濃系？	S-2f・g 区 m 層
72	陶器 すり鉢	口径： 底径： 器高：(10.1)	素地：2.5YR5/6 明赤褐 釉：2.5YR2/2 極暗赤褐	緻密、透明粒少量、白色粒やや多量	硬質	体部片	ロクロ整形		T14 no.4
73	陶器 徳利	口径： 底径： 器高：(8.7)	素地：5Y8/2 灰白 釉：7.5Y5/3 灰オリーブ	緻密、白色粒やや少量	硬質	体部片	内：ロクロナデ外：ロクロナデ	内面には薄く、外面にはやや多量に施釉される。瀬戸・美濃系？	E10b S-2b 区 m 層 S-2 E9b
74	陶器 徳利	口径： 底径：5.8 器高：(7.9)	素地：2.5Y6/2 灰黄 釉：5Y6/2 オリーブ灰	緻密、黒色粒・白色粒少量	硬質	体部から 底部 底部 2/3	ロクロ整形	外面一部素地。美濃系。	S-2f 区 F10a 区 S-2b 区
75	陶器 徳利	口径： 底径： 器高：(22.0)	素地：7.5YR5/4 にぶい褐 釉：7.5YR3/4 暗褐(体部)、7.5YR3/1 黒褐(頸部)	緻密、黒色粒・白色粒微量	硬質	体部 1/4	ロクロ整形	内面にロクロナデの痕跡顕著。	T4 S-2b 区 m 層 E9b
76	陶器 徳利カ	口径： 底径：11.5 器高：(2.4)	内：2.5Y8/2 灰白 釉：5YR4/4 にぶい赤褐	緻密、黒色粒極微量	硬質	底部完存	ロクロ整形	鉄釉。底部外面無釉。美濃系。	S-2E9b no.10
77	陶器 壺	口径： 底径：(11.2) 器高：(2.8)	素地：2.5Y8/4 淡黄 釉：7.5Y4/6 褐	緻密、黒色粒極微量	硬質	底部 1/2 周 体部一部	ロクロ整形	鉛釉。尾呂・多治見系。	S-2a 区 m 層 E9b
78	陶器 壺	口径： 底径：13.8 器高：(4.0)	素地：5Y8/3 淡黄 釉：2.5Y4/6 オリーブ褐	緻密、黒色粒極微量	硬質	底部完存 体部一部	ロクロ整形	鉛釉。尾呂・多治見系。	S-5 no.3,4 S-5 T18
79	陶器 灯明受皿	口径：(11.0) 底径： 器高：(1.5)	素地：2.5Y7/3 浅黄 釉：5YR2/3 極暗赤褐	緻密、黒色粒微量	硬質	口縁から 体部破片	ロクロ整形	鉄釉。受口磨減。外面に一部スス附着。	S-2g 区
80	陶器 灯明受皿	口径：(10.0) 底径：4.9 器高：1.6	素地：5Y7/2 灰白 釉：5YR3/3 暗赤褐	緻密、黒色粒微量	硬質	口縁から 体部 1/2 底部 2/3	ロクロ整形	鉄釉。ハケを使用したの施釉か。美濃系。	S-2b 区 E9d m 層

81	陶器 灯明受皿	口径：(11.2) 底径：(6.2) 器高：2.0	素地：5Y6/1 灰白 釉：5YR4/3 にぶ い赤褐	緻密、黒色粒微量	硬質	口縁から 体部 1/4 弱 底部一部	ロクロ整形	鉄釉。受口磨滅。内 外面にスス付着。	S-2b 区 m 層 E9b
82	陶器 灯明受皿	口径：(10.0) 底径： 器高：(1.6)	素地：5Y8/1 灰白 釉：5YR3/3 暗赤 褐	緻密、黒色粒微量	硬質	口縁から 体部破片	ロクロ整形	鉄釉。受口磨滅。外 面に一部スス付着。	E10b S-2b 区 m 層
83	陶器 灯明受皿	口径：10.8 底径：5.0 器高：2.4	内：N7/0 灰白 釉：5YR4/3 にぶ い赤褐	緻密、黒色粒微量	硬質	ほぼ完形	ロクロ整形	内外面に微量のスス 付着。鉄釉。	S-2 no.10
84	陶器 灯明受皿	口径： 底径：(4.0) 器高：(0.9)	素地：5Y7/2 灰白 釉：5YR4/3 にぶ い赤褐	緻密、黒色粒微量	硬質	底部 2/3 体部一部	ロクロ整形	鉄釉。	S-5 no.1
85	陶器 鬘水入れ	口径： 底径： 器高：(2.4)	素地：2.5Y7/1 灰白 内：7.5Y7/1 灰白 外：7.5Y7/1 灰白 釉：10Y6/2 オリー ブ灰	緻密、黒色粒微量	硬質	口縁部 破片	染付：7.5Y5/3 灰 オリーブ・5YR3/3 暗赤褐	体部外面に不明文様。 美濃窯。86 と同一個 体。	S-2b 区 m 層 E9a・c
86	陶器 鬘水入れ	口径： 底径： 器高：(3.7)	素地：5Y8/2 灰白 釉：10Y7/2 灰白	緻密、黒色粒微量	硬質	体部から 底部片	染付：7.5Y5/3 灰 オリーブ・5YR3/3 暗赤褐	底部外面のみ無釉。体 部外面に不明文様。美 濃窯。85 と同一個体。	S-2e 区 F9b
87	陶器 香炉	口径：(10.0) 底径： 器高：(4.0)	素地：5Y8/3 淡黄 釉 2.5Y7/6 明黄褐	緻密、黒色粒極微 量	硬質	口縁部 破片	ロクロ整形	美濃系。	S-2F・G 区 m 層
88	陶器 香炉	口径：(12.0) 底径： 器高：(4.5)	素地：2.5Y8/4 淡 黄 釉：2.5Y6/8 明黄褐	緻密、黒色粒少量	硬質	口縁から 体部破片	ロクロ整形	口縁部および外面に 釉。体部外面に削り 花文様。美濃系。	E9a F9b
89	陶器 風呂	口径：(12.0) 底径： 器高：(2.0)	内：5Y7/2 灰白 釉：5Y6/2 灰オリー ブ(透明釉)	緻密、黒色粒・白 色粒微量。	硬質	口縁部 1/4	ロクロ整形	口縁受け部のみ無釉。 体部外面口縁よりに 持ち手接合箇所。	S-2b 区 m 層 E9b
90	陶器 徳利	口径： 底径： 器高：(6.0)	素地：5Y8/3 淡黄 釉：2.5Y4/4 暗オ リーブ	緻密、白色粒微量	硬質	体部破片	ロクロ整形	体部外面ハケ目状工 具による施文。内面 に漆付着。瀬戸系？	d 区 S-2 上 位 F10d
91	磁器 丸形碗	口径： 底径：(3.4) 器高：2.3	素地：N8/0 灰白 釉：7.5GY7/1 明緑 灰(透明釉？)	緻密、黒色粒微量	硬質	体部一部 底部 1/2 周弱	染付：10BG6/1 青 灰(呉須)	内面無地。外面雪輪・ 梅文カ・一重圏線。 高台部に一重圏線。 高台端部のみ無釉。 肥前系。	S-2a 区 E9b
92	磁器 丸形碗	口径： 底径：4.0 器高：(2.5)	素地：N8/0 灰白 釉：透明釉	緻密、黒色粒少量	硬質	底部 4/5 体部一部	染付：10BG6/1 青 灰(呉須)	体部内面無地。体部 外面雪輪・梅文。高 台外面に二重圏線。 高台端部のみ無釉、 砂目付着。	S-2 no.6
93	磁器 丸形碗	口径： 底径：4.3 器高：(4.4)	素地：N8/0 灰白 釉：7.5Y8/1 灰白	緻密、黒色粒微量	硬質	体部から 底部片 底部 1/2	染付：10BG5/1 青灰(呉須)	体部内面無地。体部 外面雪輪・梅文・一 重圏線。高台部外面 に二重圏線。高台端 部のみ無釉。肥前波 佐見系？	S-2 no.1
94	磁器 丸形碗	口径：10.0 底径：4.0 器高：5.3	素地：N8/0 灰白 釉：7.5GY8/1 明緑 灰(透明釉)	緻密、黒色粒極微 量	硬質	ほぼ完形 口縁から 体部にか けて一部 欠損	染付：10BG4/1 暗 青灰(呉須)	体部内面無地。体部 外面雪輪・梅文・一 重圏線。高台部外面 に二重圏線。外面高 台見込みに不明記号。 高台端部のみ無釉。 砂目付着。肥前波佐 見系。	S-2 no.1 S-2e 区 m 層 F9b
95	磁器 丸形碗	口径： 底径：(3.6) 器高：(2.8)	素地：N8/0 灰白 釉：透明	緻密、黒色粒微量	硬質	体部から 底部 底部 3/5	染付：10BG6/1 青 灰(呉須)	内面一重圏線。内面見 込み手書き五弁花文。 外面菊花文。高台部二 重圏線。肥前系。	S-2c 区
96	磁器 丸形碗	口径：(9.0) 底径：(3.0) 器高：5.1	素地：N8/0 灰白 釉：透明		硬質	口縁部 1/5 弱 体部 1/3 底部 1/4 周	染付：10BG4/1 暗 青灰(呉須)	内面口縁部二重圏線。 内面見込み一重圏線。 外面口縁部一重圏線。 外面体部燕子花文・ 二重圏線。高台部に 一重圏線。高台端部 のみ無釉。内面僅か に発泡。肥前系。	S-2b 区 m 層 F10c

第三章 検出された遺構と遺物

97	磁器筒形碗	口径： 底径：(3.4) 器高：(2.7)	素地：N8/0 灰白 釉：7.5GY7/1 明緑 灰(透明釉?)	緻密、黒色粒微量	硬質	体部一部 底部1/2 周	染付：10BG5/1 青 灰(呉須)	内面無地。外面草花文・ 一重圏線。高台部に二 重圏線。高台端部のみ 無釉。肥前系。	E10b S-2b 区 m 層
98	磁器筒形碗	口径：(7.0) 底径： 器高：(2.4)	素地：2.5Y7/1 灰 白 釉：透明釉	緻密、黒色粒微量	硬質	口縁部 破片	染付：藍(呉須)	口縁内部一重圏線。 体部外面菊花文。	S-2d 区
99	磁器筒形碗	口径：(7.2) 底径：(3.2) 器高：5.6	素地：2.5Y7/1 灰 白 釉：透明釉	緻密、黒色粒微量	硬質	口縁から 底部片	染付：10BG3/1 暗 青灰(呉須)	口縁内部二重圏線。 体部外面菊花文。底 部外面一重圏線。	S-2f・g 区 m 層 S-2a 区 E9a
100	磁器筒形碗	口径：(6.5) 底径： 器高：(2.6)	素地：N8/0 灰白 釉：透明釉	緻密、黒色粒微量	硬質	口縁部 破片	染付：淡藍(呉須)	口縁内部二重圏線。 体部外面菊花文。	S-2 E9b
101	磁器筒形碗	口径：(7.0) 底径： 器高：(4.8)	素地：N8/0 灰白 釉：透明釉	緻密、黒色粒極微 量	硬質	口縁から 体部破片	染付：淡藍(呉須)	内面口縁部二重圏線。 外面格子内に縦線。	S-2g 区 F10c
102	磁器筒形碗	口径：(7.0) 底径： 器高：(4.8)	素地：5Y8/1 灰白 釉：10GY7/1 明緑 灰(透明釉)	緻密、黒色粒極微 量	硬質	口縁から 体部片	染付：淡藍(呉須)	内面口縁部四方襷。 外面無地。	S-2a 区 m 層 E9b
103	磁器 広東碗	口径：(10.4) 底径：(5.8) 器高：6.8	素地：N8/0 灰白 釉：透明釉	緻密、黒色粒少量	硬質	口縁部か ら底部片	染付：10BG7/1 明 青灰(呉須)	口縁部内面に二重圏 線。底部内面に一重 圏線。内面見込みに 不明文様。体部外面 には草花文。高台端 部のみ無釉。肥前系。	S-2 no.8
104	磁器 丸形碗	口径：(8.0) 底径： 器高：(3.0)	素地：N8/0 灰白 釉：透明釉	緻密、黒色粒微量	硬質	口縁から 体部片 口縁1/4	染付：5B4/1 暗青 灰(呉須)	内面無地。外面草花 文。肥前系。	S-2b 区 m 層 E9b
105	磁器皿	口径：13.4 底径：8.2 器高：3.8	素地：N8/0 灰白 釉：透明	緻密、黒色粒少量	硬質	完形に近 い 口縁から 体部一部 欠損	染付：10BG4/1 暗 青灰(呉須)	内面扇文・唐草文。内 面見込みに二重圏線・ こんにやく印五弁花 文。外面に唐草文・一 重圏線。高台部二重圏 線。高裁部見込み一重 圏線内五弁花文。高台 端部のみ無釉。肥前波 佐見系。	S-2a 区
106	磁器 輪花皿	口径：(12.0) 底径： 器高：(2.6)	素地：N8/0 灰白 釉：透明釉	緻密	硬質	口縁から 体部片	染付：10BG6/1 青 灰(呉須) 口縁部 7.5YR4/4 褐(鉄釉)	外面無地。口縁端部 口紅。内面植物文。 肥前系。	S-2b 区
107	丸瓦	口径： 底径： 器高：(8.1)	凹：N4/0 灰 凸：N4/0 灰	緻密、白色粒・透 明粒微量、黒色粒 やや多量	硬質	破片	凹：ナデ整形、一 部布目痕 凸：縦方向のヘラ 削り 端部・側部：ケズ リ調整		T14 no.1
108	砥石	最大長：12.1 最大幅：2.4 最大厚：1.8		流紋岩				重量：77.3 g	T18
109	砥石	最大長：3.0 最大幅：3.5 最大厚：0.8		流紋岩				全面的に使用。 重量：11.8 g	S-2b 区 m 層 E9d
110	砥石	最大長：3.4 最大幅：3.2 最大厚：0.9		流紋岩				両面使用か? 重量：13.4 g	S-2b 区 m 層 E9d
111	砥石	最大長：2.6 最大幅：2.8 最大厚：0.65		流紋岩				片面・側部使用。裏 面切り出し痕有。重 量：8.8 g	S-2 F10 c・d m 層
112	砥石	最大長：3.2 最大幅：3.6 最大厚：1.0		流紋岩				片面・側部使用。裏 面切り出し痕跡明瞭。 重量：13.5 g	S-2e 区
113	砥石	最大長：3.9 最大幅：3.4 最大厚：1.0		流紋岩				片面・側部使用。使 用面にくぼみ有。裏 面切り出し痕明瞭。 重量：19.9 g	S-2d・e 区

114	砥石	最大長：3.5 最大幅：3.4 最大厚：1.3		流紋岩			片面使用。 重量：24.9 g	S-2d 区 I・II層
115	砥石	最大長：4.5 最大幅：3.4 最大厚：0.85		流紋岩			片面および両側面使用。裏面切り出し痕明瞭。重量：16.8 g	S-2f 区 F10a 区
116	砥石	最大長：5.4 最大幅：2.2 最大厚：1.8		流紋岩			片面のみ使用。 重量：36.0 g	S-2d・e 区
117	砥石	最大長：4.2 最大幅：2.1 最大厚：1.1		流紋岩			全面的に使用。 重量：13.1 g	S-2a 区 E9a
118	砥石	最大長：3.3 最大幅：3.2 最大厚：1.6		流紋岩			片面・側面使用。割れ後使用。 重量：18.0 g	S-2b 区 m層 E9b
119	砥石	最大長：5.3 最大幅：3.1 最大厚：0.7		流紋岩			全面使用。裏面線状痕有。 重量：20.3 g	S-2b 区
120	砥石	最大長：4.5 最大幅：4.2 最大厚：1.0		流紋岩			片面・側部使用。 重量：32.3 g	E10c S-2b 区 m層
121	砥石	最大長：6.3 最大幅：3.6 最大厚：1.3		流紋岩			全面的に使用。表面片減り著しい。裏面切り出し痕跡明瞭。 重量：43.5 g	S-2d 区
122	砥石	最大長：8.1 最大幅：3.7 最大厚：1.0		流紋岩			表面使用。裏面および側部切り出し痕跡明瞭。端部摩滅。そのまま再利用か。 重量：76.4 g	S-2f・g 区 m層
123	砥石	最大長：9.8 最大幅：4.0 最大厚：1.5		流紋岩			片面使用。切り出し痕跡明瞭。 重量：108.5 g	S-2e 区
124	砥石	最大長：3.6 最大幅：3.1 最大厚：0.7		頁岩			両面・側面使用。表面に線刻有。 重量：8.4 g	S-2b 区
125	不明石製品	最大長：6.4 最大幅：7.9 最大厚：4.6		軽石凝灰岩			表面に被熱痕。 重量：195.3g	S-2 E9b
126	転用砥石	最大長：4.5 最大幅：4.3 最大厚：5.0		スコリア質安山岩			石白片カ。両面・側部磨滅。貫通穴と思われる部分確認できるが摩滅により不明瞭。 重量：68.6 g	S-2a 区
127	不明石製品	最大長：2.1 最大幅：2.0 最大厚：0.45		粘板岩			浅い線状痕有。よく磨かれている。碁石カ。 重量：3.1 g	S-2c 区

第48表 SA-2 金属製品観察表

掲載番号	種類器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	素材	特徴・備考	出土位置
128	煙管	4.9	1.2	1.1	5.8	青銅		S-2 d・e 区
129	煙管	4.0	1.6	1.5	0.9	青銅	盛土内より出土	S-2 h 区 盛土中
130	リング状銅製品	1.9	1.8	0.3	1.2	青銅		S-2 d・e 区
131	銅銭	2.4	0.6	0.1	2.7	青銅	寛永通寶	S-2 b 区 上面より上

第49表 SA-2 ガラス瓶観察表

掲載番号	種類器種	計測値 (cm)	色調 (内・外)	胎土	焼成	残存率	技法 (内・外)	特徴・備考	出土位置
132	ガラス瓶	口径：1.2 底径：2.2 器高：3.3	濃緑			完存		化粧瓶	S-2a 区

第 50 表 SD-3 遺物観察表

掲載番号	種類器種	計測値 (cm)	色調 (内・外)	胎土 (石材)	焼成	残存率	技法 (内・外)	特徴・備考	出土位置
1	焙烙	口径： 底径： 器高：(4.0)	内：10YR6/3 にぶい黄橙 外：10YR6/3 にぶい黄橙	やや緻密、黒色ガラス質粒・白色粒微量、黒色粒やや多量	硬質	口縁部破片	内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部ナデ	口縁部中央に1条の沈線。	SD-3 a 区
2	陶器小坏	口径：(8.0) 底径： 器高：(3.4)	素地：5Y8/3 浅黄釉：10Y6/2 オリーブ灰	緻密、黒色粒・白色粒微量	硬質	口縁から体部片 口縁部1/4	ロクロ整形	瀬戸・美濃系？	SD-3 e 区
3	陶器播鉢	口径： 底径：(11.0) 器高：(6.0)	素地：10YR7/4 にぶい黄橙 釉：5YR3/6 暗赤褐	緻密、黒色粒やや少量	硬質	底部から体部片	内：ロクロナデ外：体部ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	全面に鉄釉。内面に22条の工具で播目を成形。内面磨滅。	S-115 SD-3 c 区
4	不明土製品	最大長：4.1 最大幅：3.2 最大厚：4.2	2.5YR4/2 にぶい黄橙	緻密、白色粒・黄褐色粒多量	やや硬質	破片		貫通穴と思われる部分が確認できるが摩滅により不明瞭。	SD-3 c 区
5	硯	最大長：13.7 最大幅：6.4 最大厚：1.7		粘板岩		陸ほぼ完存 縁右下以外破損		陸中心部使用による窪み。一部に墨が残る。裏面半分剥離。重量：193.7 g	SD-3 d 区 F10d
6	砥石	最大長：6.9 最大幅：3.5 最大厚：0.8		流紋岩				片面・両側面使用。端部破損面調整。裏面切出し痕。重量：30.9 g	SD-3 a・b 区
7	砥石	最大長：9.1 最大幅：6.1 最大厚：3.1		流紋岩				両面破損、両側面使用。被熱のため黒化。重量：260.8 g	SD-3 d 区

第 51 表 SD-3 鍛冶関連遺物観察表

掲載番号	種類	鍛冶関連遺物構成表No.	出土位置
8	鉄製品 (鍛造品、含鉄、滓板状不明)	81	覆土中
9	鉄製品 (鍛造品、含鉄、棒状不明)	82	覆土中
10	鉄製品 (鍛造品、含鉄、棒状不明)	83	覆土中
11	鉄製品 (鍛造品、含鉄、棒状不明)	84	覆土中

2. 溝跡

SD-4 (第 240 ~ 243 図、第 52・55 表、図版四三・七五・七六)

位置 調査区中央東寄り、E9b・E9d・E10 グリッドに位置する。

規模・形状 北部が調査区外となるため、詳細は不明であるが、溝が方形に巡る遺構である。SA-2 土塁盛土除去の掘り下げ時にプランが確認できた。

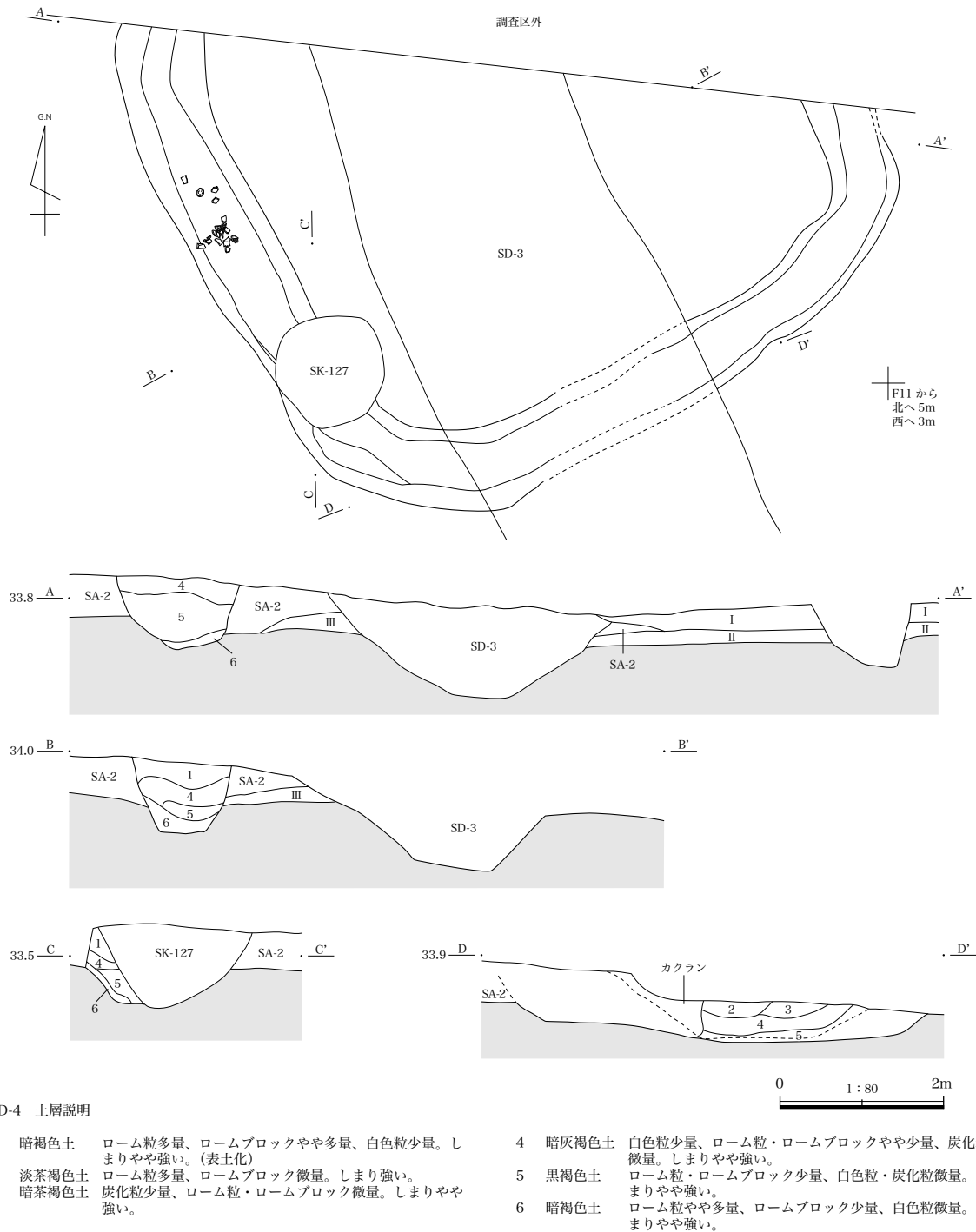
推定での周溝遺構の主軸は N-25° -W で、主軸での外縁長 8.0m、主軸に直行する軸長は 8.2m である。平面図で示したローム面での溝幅では 0.7 ~ 1.1m である。断面で上位からの掘り込みが確認され、ここでは幅 1.2 ~ 1.4m と確認できる。

断面は「U」字状を呈しているが、一部逆台形状になる。表土 I 層を掘り込んでいる様相からも、近代以降の可能性が高い。覆土の堆積状況から、自然堆積であろう。

重複 SA-2、SD-3、SK-127 と重複しており、SA-2、SD-3 → SD-4 → SK-127 となる。

SD-3 とは、平面的に重なる部分で土層の断面観察ができた。第 240 図 D-D' において、SD-3 覆土がみられず、SD-4 覆土のみ観察できたことから、SD-3 → SD-4 は確実である。

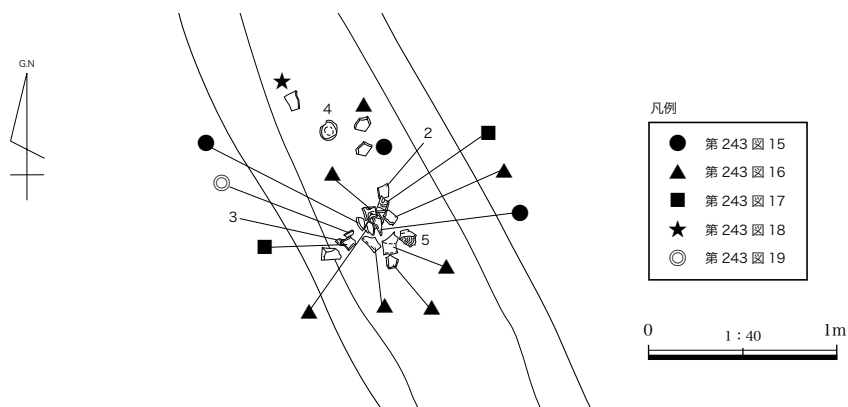
出土遺物 すべて覆土中からの出土となるが、SA-2 や SD-3 出土遺物と遺構間接合するものが見受けられる。また、第 241 図に示したように、西辺中央部、E9d グリッドでやや遺物集中箇所が認められた。本項では、SD-4 出土遺物のみを掲載するが、これらの遺物も SA-2、SD-3 に帰属する可能性がある。



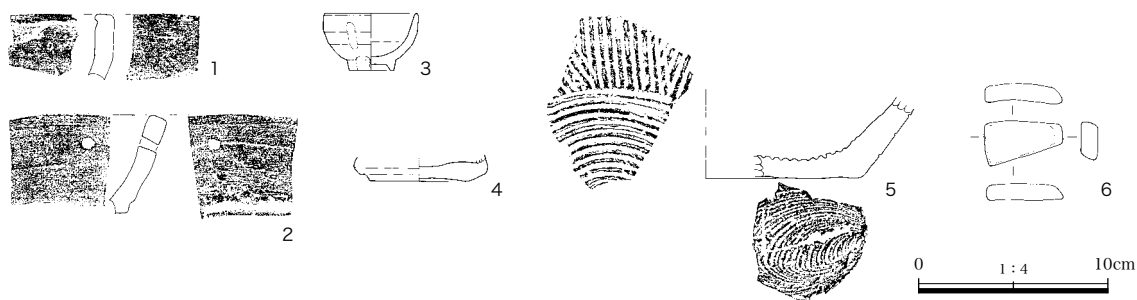
第 240 図 SD-4 遺構実測図

第三章 検出された遺構と遺物

1・2は焙烙である。1は胎土に金色雲母を含んでおり、常陸産と推定できる。2は、体部に1カ所、穿孔されている。3は陶器の小坏。4は陶器の壺類の底部。底部外面には回転糸切り離し痕が明瞭に残る。また、底部はナデ整形を行い、高台状に仕上げる。5は陶器の挿鉢。底部外面に回転糸切り離し痕が確認でき、体部外面は横方向のヘラケズリ整形が行われる。内面は使用による磨滅痕が著しい。6は焙烙の破片を再利用した砥石である。全周および外面を砥面として使用している。



第241図 SD-4 遺物出土状況図



第242図 SD-4 遺物実測図

第52表 SD-4 遺物観察表

掲載番号	種類 器種	計測値 (cm)	色調 (内・外)	胎土	焼成	残存率	技法 (内・外)	特徴・備考	出土位置
1	焙烙	口径： 底径： 器高：(3.5)	内：7.5YR3/1 黒褐 外：7.5YR4/3 褐	緻密、白色粒・黒色粒少量、金雲母やや多量	硬質	口縁部破片	内：口縁部～体部ヨコナデ 外：口縁部～体部ヨコナデ	常陸産。	S-4
2	焙烙	口径： 底径： 器高：5.2	内：10YR5/3 にぶい黄褐 外：10YR3/1 黒褐	やや緻密、黒色ガラス質粒・赤褐色粒・白色粒少量、黒色粒やや多量	硬質	口縁から底部破片	内：口縁部～体部ヨコナデ 外：口縁部～体部ヨコナデ	体部に1カ所穿孔。口縁～体部上半スス付着。体部下半やや粗いナデ。	S-2 E9b no.24
3	陶器 小坏	口径：(5.0) 底径：(2.4) 器高：3.0	素地：5Y7/2 灰白 釉：10Y6/2 オリーブ灰	緻密、黒色粒・白色粒微量	硬質	口縁から底部 1/3	ロクロ整形	瀬戸・美濃系？	S-2 E9b no.30
4	陶器 徳利	口径： 底径：5.1 器高：(1.3)	素地：5Y8/3 浅黄 釉：5YR5/3 にぶい赤褐	緻密、黒色粒・白色粒微量	硬質	底部存存	ロクロ整形、底部回転糸切り離し	鉄釉。底部外面のみ無釉。底部内面にも釉付着。	S-2 E9b no.2
5	陶器 挿鉢	口径：(16.0) 底径： 器高：(4.3)	素地：5Y8/3 淡黄 釉：5YR4/3 にぶい赤褐	緻密、黒色粒微量	硬質	体部から底部片	ロクロ整形、底部回転糸切り離し	内面はやや斜方向に、底部は円状に溝を成形する。内面全体的に磨滅。	S-2 E9b no.26
6	転用砥石	最大長：2.0 最大幅：4.1 最大厚：0.8	2.5YR6/2 灰黄	緻密、黒色粒・白色粒微量	硬質	体部破片	内：ヨコナデ 外：不明	焙烙体部を砥石として転用。破損面と外面を研面として使用。	T4 SD-4

近世遺構間接合遺物

調査区中央に位置する、SA-2、SD-3 および SD-4 の出土遺物において、これら3遺構での遺構間接合をする遺物がみられる。本項では、これらの遺物を遺構間ごとに掲載する（第243図）。また、SD-4 と遺構間接合する遺物は、第241図のSD-4 遺物出土状況図も参照していただきたい。

SZ-1、SA-2 での接合遺物は磁器が3点ある。第243図1・2は菊花文の筒形碗。2は簡略化された菊花文が描かれている。両者とも肥前系。1はSA-2b区盛土内から2点、SZ-1 墳丘上面から1点出土した破片と接合する。2は、SZ-1 上面、SZ-1b区、SA-2E9b グリッド、SA-2a区、SA-2b区盛土内からそれぞれ1点ずつ出土した破片が接合する。3は皿で、肥前波佐見系と思われる。SZ-1d区、SZ-1d2・d3区I層、SA-2c区、SA-2f区からそれぞれ1点ずつ出土した破片が接合する。

SA-2、SD-3 との遺構間接合遺物は焙烙3点、陶器2点、磁器5点、砥石1点がある。4～6は焙烙。4は内耳部が口縁部寄りに接合する。SA-2 盛土上面、SD-3a区、T12からそれぞれ1点ずつ出土した破片が接合する。5は胴部に2カ所穿孔されており、この孔間をつなぐ銅線が残っていた。穿孔箇所の外面に剥離痕がみられることから、内面から穿孔されたと思われる。底部内面は一部にミガキが施されており、ススが付着している。SA-2a区盛土内から2点、SA-2b区盛土上面から1点、SD-3a区から1点出土した破片が接合する。6は体部に2カ所穿孔されている。6も5と同様、穿孔箇所の外面に剥離痕が認められる。口縁部は丸みをもっている。SA-2a区盛土内、SA-2b区、SA-2E9b グリッド、SD-3a区からそれぞれ1点ずつ、SA-2b区盛土内から8点出土した破片が接合する。

7・8は陶器である。7は広口の碗で、口縁は緩やかに立ち上がる。SA-2 盛土内から2点、SD-3e区から1点出土した破片が接合する。8は輪花皿で、瀬戸系の可能性がある。T15から出土。9～13は磁器の丸形碗で、すべて肥前系である。9～12はいわゆる「くらわんか碗」で、すべて内面は無地で、外面には雪輪・梅文がみられ、殆ど同じ文様構成である。13は前述の碗より薄手で、体部外面には半菊花文が描かれる。9はT14、10はT15からの出土である。11はSA-2h区盛土内、SD-3e区からそれぞれ1点ずつ出土した破片が接合する。14は砥石で、流紋岩を使用している。E10c グリッドからの出土である。

SA-2 と SD-4 の遺構間接合遺物は焙烙3点、陶器1点、磁器1点である。

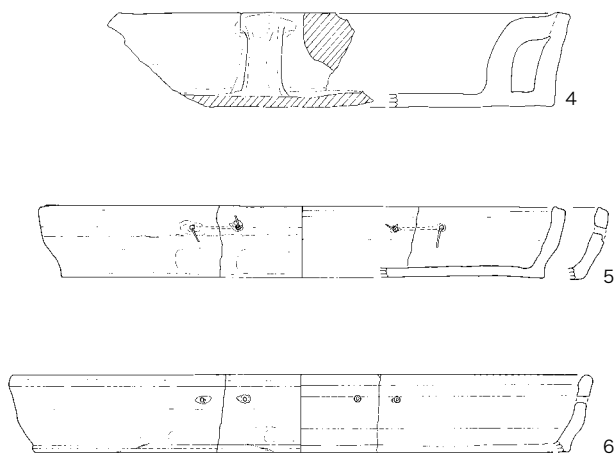
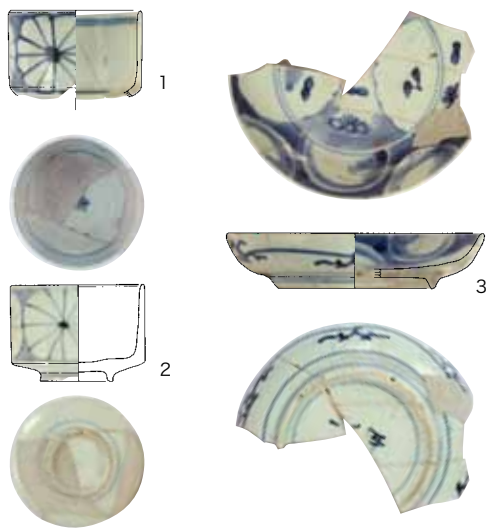
15～17は焙烙で、内耳部の接合位置は15・17より16が若干低い。また、17は他の焙烙と比べ、口縁部の成形や底部からの立ち上がりシャープな印象がある。15は胴部および底部に、16は底部に穿孔が行われている。両者とも、穿孔は内面から行われているとみられる。また、16の底部には、穿孔途中で放棄されたと思われる痕跡が確認できる。

15は多くの破片が接合する。SA-2からは、b区盛土内から4点、b区、c区、d・e区からそれぞれ2点ずつ、c・d区から3点、e区、e区盛土内から2点ずつ、SA-2注記が1点出土している。SD-4からは2点出土している。トレンチからは、T4から1点、T12から2点出土の遺物が接合する。また、接合はしなかったが、同一個体の破片も多量にある。SA-2からは、盛土上面、b区盛土内、e区からそれぞれ1点ずつ、b区、d区からは2点ずつ出土している。トレンチからは、T12から3点、T15から2点出土している。SD-4からも同一個体と考えられる破片が2点出土している。

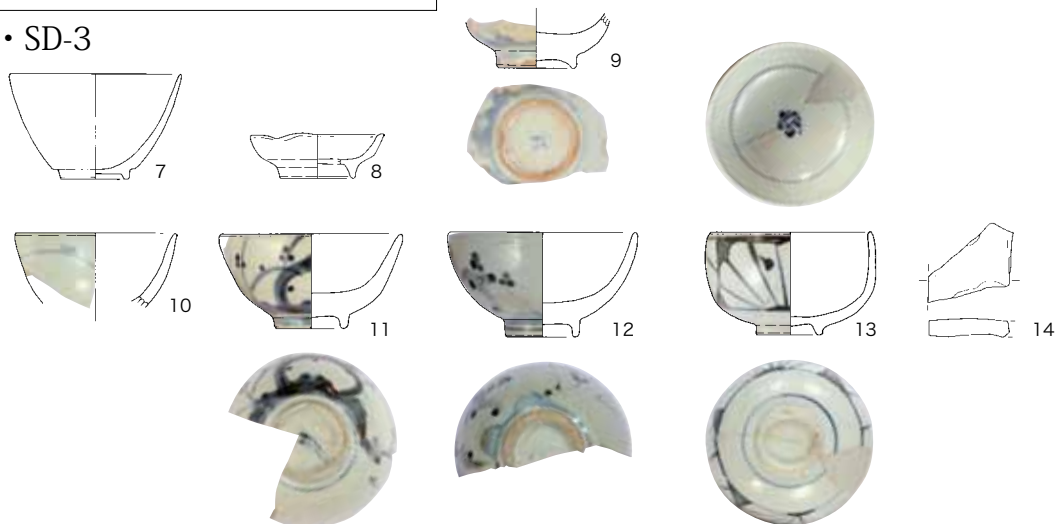
16も比較的多くの破片が接合する。SA-2からは、a区盛土内、b区盛土内から1点ずつ、a区から2点、E9b グリッドから3点出土した破片と接合する。SD-4からは6点出土した破片と接合する。また、接合しなかったが、同一個体の破片がSD-4から1点出土している。

17の焙烙は、SA-2からは、b区盛土内から4点、E9b グリッド盛土内から1点、c・d区から1点、E9b

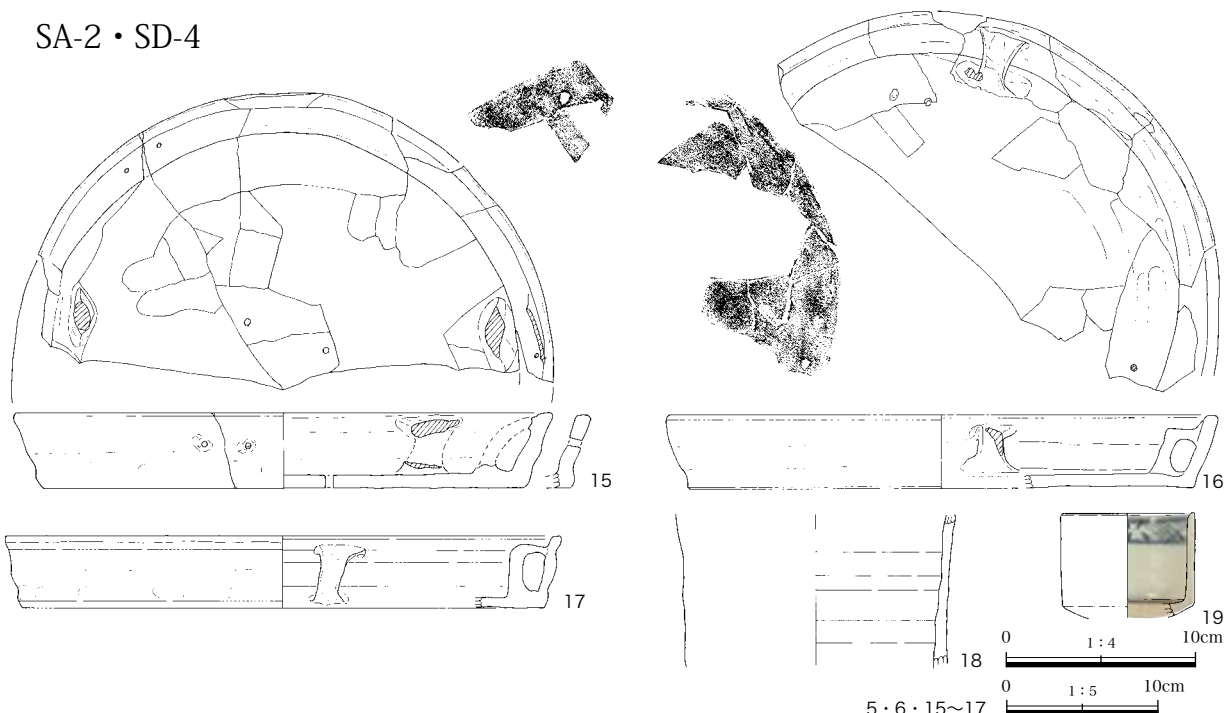
SZ-1・SA-2



SA-2・SD-3



SA-2・SD-4



第 243 図 SZ-1、SA-2、SD-3・4 遺物実測図

グリッドから2点出土した破片が接合する。SD-4から2点出土した破片と接合をする。接合し得なかった遺物としてSA-2b区盛土内から2点、SA-2b・c区、SA-2c・d区、SD-3a区からそれぞれ1点ずつ、トレンチではT18から1点出土している。

18は陶器の徳利。外面には光沢をもった鉄釉が施釉されている。SA-2a区、SA-2a区盛土内、SD-4からそれぞれ1点ずつ出土した破片が接合する。19は磁器の筒形碗。外面は無文で、内面の口縁部に四方襷文が描かれる。SA-2b区盛土内、SD-4からそれぞれ1点ずつ出土した破片が接合する。

第53表 SZ-1、SA-2 遺物観察表

掲載番号	種類 器種	計測値 (cm)	色調 (内・外)	胎土	焼成	残存率	技法 (内・外)	特徴・備考	出土位置
1	磁器 筒形碗	口径：(8.0) 底径： 器高：(4.5)	素地：7.5Y8/1 灰 白 釉：透明釉	硬質、黒色粒微量	硬質	口縁から 体部 1/2 弱	染付：呉須	口縁部内面に二重圏線。底部内面に一重圏線。体部外面には菊花文。肥前系。	S-1 no.1 S-2 E10b・ dm層 E10b S-2b区 m層
2	磁器 筒形碗	口径：7.0 底径：3.8 器高：5.1	素地：N8/0 灰白 釉：透明釉	硬質、黒色粒微量	硬質	口縁から 体部 3/4 底部 1/2	染付：10BG6/1 青灰 (呉須)	口縁部内面に二重圏線。底部内面に一重圏線。内面見込みに手書き五弁花文。体部外面には菊花文。底部外面におよび高台部に一重圏線。高台端部のみ無釉。肥前系。	S-1 上面 S-1b区 E10b S-2 E9b S-2a区
3	磁器 皿	口径：(13.6) 底径：8.3 器高：2.9	素地：N8/0 灰白 釉：透明釉	硬質、黒色粒微量	硬質	口縁から 体部 1/3 底部 3/5	染付：5B7/1 明 青灰 (呉須)	内面草文、体部外面唐草文・一重圏線。高台部二重圏線。高台部見込み一重圏線内に文字 (「大明年製」カ)。高台端部のみ無釉。肥前有田系。	S-1d区 S-2c区 E9d no.6

第54表 SA-2、SD-3 遺物観察表

掲載番号	種類 器種	計測値 (cm)	色調 (内・外)	胎土 (石材)	焼成	残存率	技法 (内・外)	特徴・備考	出土位置
4	焙烙	口径： 底径： 器高：5.0	内：10YR4/1 褐灰 外：10YR5/3 にぶ い黄褐	やや緻密、黒色ガラス質粒・透明粒・白色粒・黒色粒少量	硬質	口縁から 底部片	内：口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ 外：口縁～体部ヨコナデ、体部下半に指頭圧痕状のナデ。	内耳1カ所。体部外面にスス付着。	S-2 no.2 SD-3a区 S-2 T12
5	焙烙	口径：(37.0) 底径：(33.8) 器高：5.0	内：10YR6/4～1/3 にぶい黄橙～黒褐 外：10YR5/4～ 1.7/1 にぶい黄褐 ～黒	やや緻密、黒色ガラス質粒・赤褐色粒・白色粒少量、黒色粒やや多量	硬質	口縁から 体部 1/5 底部一部 残存	内：口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ 外：口縁～体部ヨコナデ、体部下半に指頭押圧状のナデ。	体部に2カ所穿孔あり。穿孔部に銅線あり。体部外面スス付着。	S-2b区 m層 E9b S-2a区 E9a SD-3a区 S-2b区 m層 E10a・c S-2b区 m層 E10b
6	焙烙	口径：(41.0) 底径：(37.6) 器高：5.4	内：7.5YR6/6 橙 外：7.5YR6/6 黒	やや緻密、黒色ガラス質粒・赤褐色粒・白色粒少量、黒色粒やや多量	硬質	口縁から 体部 1/5	内：口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ 外：口縁～体部ヨコナデ、底部一部ナデ、体部下半に指頭押圧状のナデ。	体部に2カ所穿孔あり。体部外面スス付着。	S-2a区 m層 E9b E10b S-2b区 m上層 SD-3a区
7	陶器 碗	口径：(9.0) 底径：3.6 器高：5.5	素地：2.5Y8/1 灰 白 釉：10Y6/2 オリーブ 灰	緻密、黒色粒・白色粒微量	硬質	口縁から 底部片 底部 2/3	ロクロ整形	高台部および周辺無釉。美濃系カ。	SD-3e区 S-2c区 E9d no.8

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物

8	陶器 輪花皿	口径：(7.0) 底径： 器高：(2.3)	素地：5Y8/3 浅黄 釉：7.5Y6/3 オリーブ黄	緻密	硬質	底部から 体部片	ロクロ整形	内外面無地。高台部のみ無釉。瀬戸系。	T15
9	磁器 丸形碗	口径： 底径：4.2 器高：(2.9)	素地：N8/0 灰白 釉：7.5Y8/1 灰白	緻密、黒色粒少量	硬質	底部完存 体部一部	染付：10BG7/1 明青灰(呉須)	体部内面無地。体部外面雪輪。高台部外面に二重圏線。高台端部のみ無釉。	T14
10	磁器 丸形碗	口径：(8.5) 底径： 器高：(3.9)	素地：N8/0 灰白 釉：7.5Y8/1 灰白	緻密、黒色粒微量	硬質	口縁から 体部片	染付：10BG5/1 青灰(呉須)	体部内面無地。体部外面梅文。肥前波佐見系。	T15
11	磁器 丸形碗	口径：9.7 底径：3.9 器高：5.0	素地：5Y7/1 灰白 釉：透明釉	緻密、黒色粒微量	硬質	口縁から 底部 3/4	染付：5G4/1 暗 緑灰(呉須)	体部内面無地。体部外面雪輪・梅文・一重圏線。高台部外面に二重圏線。外面高台内不明記号。高台端部のみ無釉。砂目付着。肥前波佐見系。	SD-3e 区 S-2 h 区 F10b m 層
12	磁器 丸形碗	口径：10.0 底径：3.9 器高：5.5	素地：N7/0 灰白 釉：透明釉	緻密、黒色粒微量	硬質	口縁から 底部 1/2	染付：10GY5/1 緑灰(呉須)	体部内面無地。体部外面雪輪・梅文・一重圏線。高台部外面に二重圏線。外面高台内不明記号。高台端部のみ無釉。砂目付着。肥前波佐見系。	S-2f・g 区 m 層 SD-3e 区
13	磁器 丸形碗	口径：8.6 底径：5.5 器高：5.4	素地：N8/0 灰白 釉：10BG7/1 明青 灰	緻密、黒色粒微量	硬質	口縁から 体部一部 欠損 底部完存	染付：淡藍～ 2.5GY3/1 暗オ リーブ灰(呉須)	内面口縁部二重圏線。内面見込み一重圏線・手書き五弁花文。外面体部半菊花文・一重圏線。高台端部のみ無釉。肥前系。	S-2b 区 SD-3 no.11 SD-3a・b 区
14	砥石	最大長：3.3 最大幅：4.2 最大厚：1.0		流紋岩				両面使用。両側面線状痕。 重量：20.0g	E10c

第 55 表 SA-2、SD-4 遺物観察表

掲載 番号	種類 器種	計測値 (cm)	色調 (内・外)	胎土	焼成	残存率	技法 (内・外)	特徴・備考	出土位置
15	焙烙	口径：38.0 底径：34.0 器高：5.3	内：5Y4/1 灰 外：10YR6/6 明黄 褐 内底：2.5Y6/6 明 黄褐 外底：5YR6/6 橙	やや緻密、黒色ガラス質粒・赤褐色粒・白色粒少量、黒色粒やや多量	硬質	口縁から 底部 1/2	内：口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ 外：口縁～体部ヨコナデ、底部一部ナデ、体部下半に指頭押圧状のナデ	内耳 2 カ所接合箇所あり。体部に 3 カ所・底部に 2 カ所穿孔あり。体部外面スス付着。	S-2 d・e 区 S-2c・d 区 S-2c 区 b 区 m 上層 S-2e 区 m 層 F9・10 S-2e 区 F 96, S-2b 区 m 層 E10a・c, E10b,E9b, F18,T4,T12
16	焙烙	口径：(39.0) 底径：(35.6) 器高：5.2	内：7.5YR5/2 灰褐 外：7.5YR6/4 にぶ い橙	やや緻密、黒色ガラス質粒・赤褐色粒・白色粒・黒色粒やや多量	硬質	口縁から 体部 1/3 周 底部一部 残存	内：口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ 外：口縁部～体部ヨコナデ、体部下半に指頭押圧状のナデ	内耳 1 カ所。底部に 2 カ所穿孔、1 カ所穿孔途中。体部外面にスス付着。	S-2 E9b S-2 E9b no.28.13. 20,17,27, 25 E9a,E9b S-2b 区 m 層
17	焙烙	口径：(39.2) 底径：(36.8) 器高：5.0	内：10YR6/4 にぶ い黄橙 外：10YR5/4 黒	やや緻密、黒色ガラス質粒・赤褐色粒・白色粒少量、黒色粒やや少量	硬質	口縁から 体部 1/3 底部一部 残存	内：口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ 外：口縁部～体部ヨコナデ、体部下半に指頭押圧状のナデ	内耳 1 カ所。体部外面にスス付着。	S-2 E9b S-2 c・d 区 S-2 E10b S-2b 区 m 層 S-2a 区 m 層 E9b S-2 E9b no.6,16,23
18	陶器 徳利	口径： 底径： 器高：(8.1)	素地：N8/0 灰白 釉：5YR4/4 にぶ い赤褐	緻密、黒色粒微量	硬質	体部片	ロクロ整形		S-2a E9a S-2a 区 m 層 E9b S-2E9b no.11
19	磁器 筒形碗	口径：(7.0) 底径： 器高：(5.5)	素地：5Y8/1 灰白 釉：10GY7/1 明緑 灰(透明釉)	緻密、黒色粒極微量	硬質	口縁から 体部 1/3	ロクロ整形 染付：淡藍(呉須)	内面口縁部四方襷。内面見込み一重圏線。外面無地。	E10b S-2b 区 m 層 S-2E9b no.29

3. 土坑・ピット

SK-121 (第244・245図、第56表、図版四三・七六)

位置 E9a・E9b グリッドに位置する。

規模・形状 南北軸にやや長く、西側へ張り出す南北0.35m・東西0.34mの不正楕円形の土坑である。掘方の最大深度は0.22mで、内部から焙烙の大形破片がまとまって出土し、土坑底面から底部の大破片が出土した。

重複 SA-2 盛土除去後にプランを確認したため、SA-2 より古い遺構である可能性が考えられる。

覆土 3層に分層でき、すべての層にローム粒が全体的に多く含まれ、堆積状況等から自然堆積であると考えられる。

出土遺物 焙烙が1点出土。体部に6カ所穿孔されており、直径0.8mm前後の銅線を用いて、2対を3組結んでいた。1カ所は整理時に破損により孔から外れ、とどまっていない。銅線は、図版三四・七六で示すように2カ所は3重に、1カ所は2重に巻き付けている。結び目は3カ所ともらせん状に外側で結んでいた。

底部内面には「ヤマジョウ(山+上)小泉屋」と押印がみられ、一部に判読不明の墨書が確認できる。部分的ではあるが、ススが付着する。また、底部には径3mmの円形状の穴が2カ所穿孔されている。

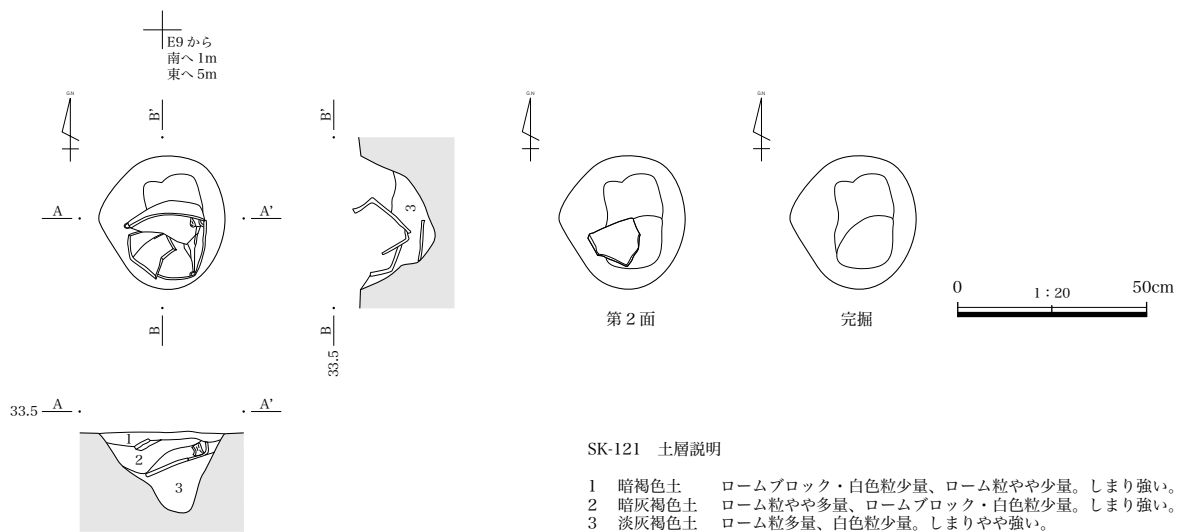
体部の穿孔は、外面に剥離痕がみられることから、内面から穿孔を行っている可能性が考えられる。底部も、外面に剥離痕と思われる痕跡がみられる。これらの穿孔は、すべて焼成後に行われていると考えられる。

SK-130 (第246・247図、第57表、図版四三・四四・七六)

位置 F9c グリッドに位置する。

規模・形状 本遺構は調査区の南へと延びており、今回の調査では全体を把握できていない。確認できた規模は南北0.35m・東西1.40mの方形土坑で、深度は遺構掘り込み面から0.76mある。北東隅には床面から0.08mの楕円形のピットが掘り込まれる。本遺構は、SA-2の盛土外側に位置している。

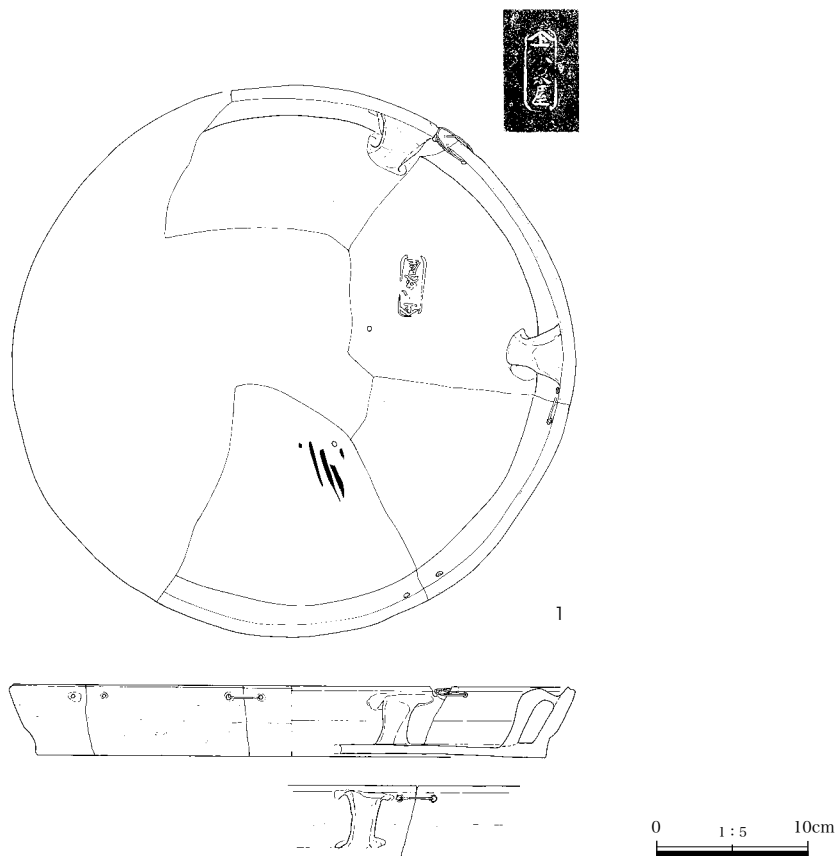
重複 重複遺構は無い。



第244図 SK-121 遺構実測図

覆土 4層に分層でき、3層および4層にはロームブロックが多く含まれている。堆積状況等から人為的堆積の可能性も考えられる。

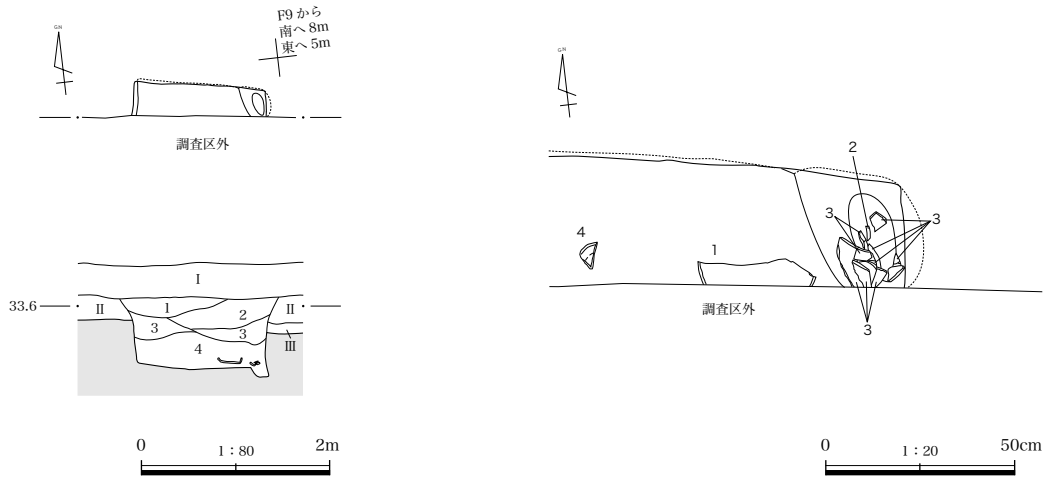
出土遺物 土坑底面からは、焙烙や火鉢の大形破片、磁器片が出土する。1は焙烙で、1/2程残存する。2・3は火鉢である。3の内外面にはススが付着する。4は肥前系の丸型碗で、SA-2、SD-3出土品と接合する。



第 245 図 SK-121 遺物実測図

第 56 表 SK-121 遺物観察表

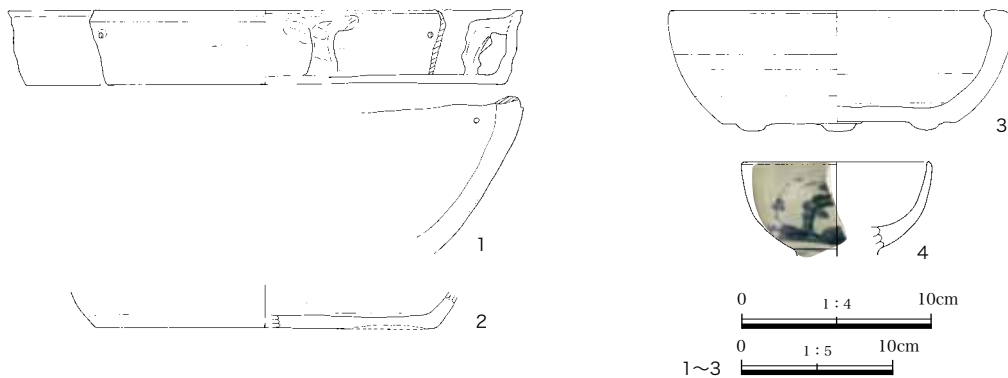
掲載番号	種類器種	計測値 (cm)	色調 (内・外)	胎土	焼成	残存率	技法 (内・外)	特徴・備考	出土位置
1	焙烙	口径：39.6 底径：35.6 器高：5.0	内：5Y4/1 灰色 内底：2.5Y6/2 灰黄色 外：5Y4/1 灰色 外底：10YR6/4 にぶい黄橙	やや緻密 石英・角閃石・雲母微量	やや硬質	2/3 弱	内：口縁部ヨコナデ、底部ナデ・一部ミガキ 外：口縁部ヨコナデ、口縁部下位押圧状のケズリ、底部ナデ	口縁部 3カ所を銅線で結ぶ（整理時に 1カ所破損）。内面底部に部分的にスス付着。押印「小泉屋」。一部に墨書とみられるものあり。内耳 2カ所。細めの棒状で、口唇部よりやや下った位置に接合。接合部に指ナデあり。底部に 2カ所穿孔。内面から工具を使用しての穿孔とみられる。底部外面は荒れが目立つ。	SK-121 no.1 ~ 3



SK-130 土層説明

- | | |
|--|---|
| <p>I 暗褐色土 白色粒やや多量、ローム粒微量。しまりやや強い。(表土)</p> <p>II 暗灰褐色土 ロームブロック少量、白色粒微量。しまりやや強い。(旧表土)</p> <p>III 明茶褐色土 ロームブロック多量、白色粒微量。しまり強い。(漸移層)</p> | <p>1 淡灰褐色土 ローム粒やや多量、ロームブロック・白色粒少量。しまりやや強い。</p> <p>2 暗茶褐色土 ローム粒・ロームブロック・白色粒少量。しまりやや強い。</p> <p>3 黄褐色土 ロームブロック多量、ローム粒少量、白色粒微量。しまり強い。</p> <p>4 黒褐色土 ローム粒・ロームブロックやや多量、白色粒微量。しまり強い。</p> |
|--|---|

第246図 SK-130 遺構実測図



第247図 SK-130 遺物実測図

第57表 SK-130 遺物観察表

掲載番号	種類器種	計測値 (cm)	色調 (内・外)	胎土	焼成	残存率	技法 (内・外)	特徴・備考	出土位置
1	焙烙	口径：(36.4) 底径：(33.8) 器高：6.2	内：10YR3/1 黒褐 外：7.5YR3/1 黒褐 内底：10YR6/4 にぶ い黄橙 外：7.5YR5/4 にぶ い褐	やや緻密、黒色ガラス質粒・赤褐色粒・白色粒少量、黒色粒やや少量	硬質	口縁から 底部 2/5	内：口縁～体部ナデ、底部ナデ 外：口縁～体部上半ナデ、体部下半ケズリ、体部外面中位に押圧状のナデ後ヨコナデ	内耳1カ所。体部中位・底部に1カ所ずつ穿孔。内面の一部、体部外面全面、底部外面全面にスス附着。	S-130 no.2
2	土師質 土器火鉢	口径： 底径：(24.0) 器高：(2.8)	内：5YR6/6 橙 外：5YR6/6 橙	やや緻密、赤褐色粒・白色粒・黒色粒やや少量、透明粒多量	硬質	底部 1/5	内：体部ヨコナデ、底部ナデ後ミガキ 外：底部ナデ	体部外面・底部外面磨滅。底部外面に1カ所脚部剥落痕。	S-130 no.6 S-130 no.13 南壁
3	土師質 土器火鉢	口径：24.3 底径：16.5 器高：8.5	内：5YR5/6 明赤褐 外：5YR5/6 明赤褐	やや緻密、赤褐色粒・白色粒・黒色粒やや少量、透明粒多量	硬質	口縁から 体部 2/3	内：口縁部ヨコナデ後ミガキ、体部ヨコナデ後多方向のナデ 外：体部ヨコナデ、底部回転ナデ	内面全体的に薄く、体部外面・底部外面の一部にスス附着。脚部2カ所、貼付後周縁ナデ。	S-130 no.3・4・7・8・10～12
4	磁器 丸形碗	口径：(7.8) 底径： 器高：(5.3)	素地：N8/0 灰白 釉：7.5GY8/1 明緑灰	硬質、黒色粒微量	硬質	口縁から 体部 1/4	染付：5B4/1 暗青灰 (透明釉)	内面無地。外面雪輪・梅文。高台部に二重圏線。肥前系。	S-130 no.1 SD-3a 区 S-2b 区

4. SZ-1 墳頂部集石遺構

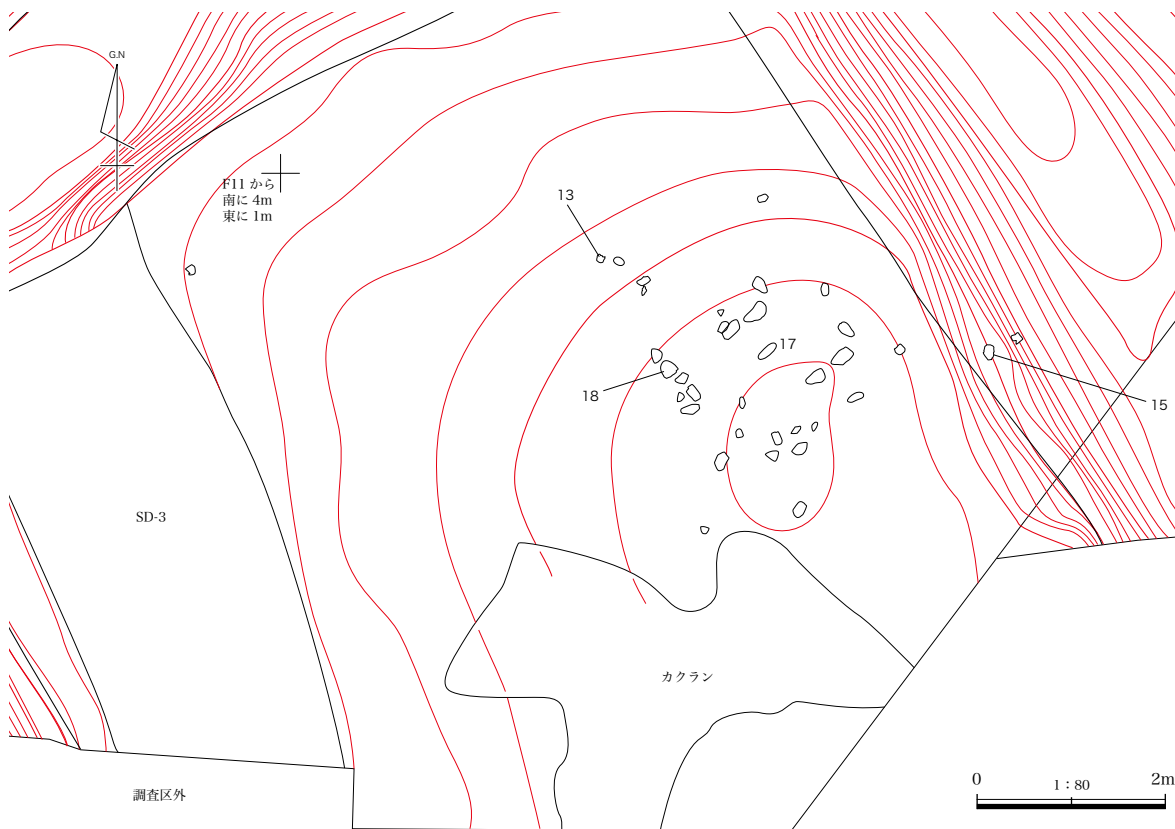
SZ-1 墳頂部集石遺構 (推定 稲荷社跡) (第 248 ~ 252 図、第 58・59 表、図版四四・七六)

位置 F11 グリッドに位置する。

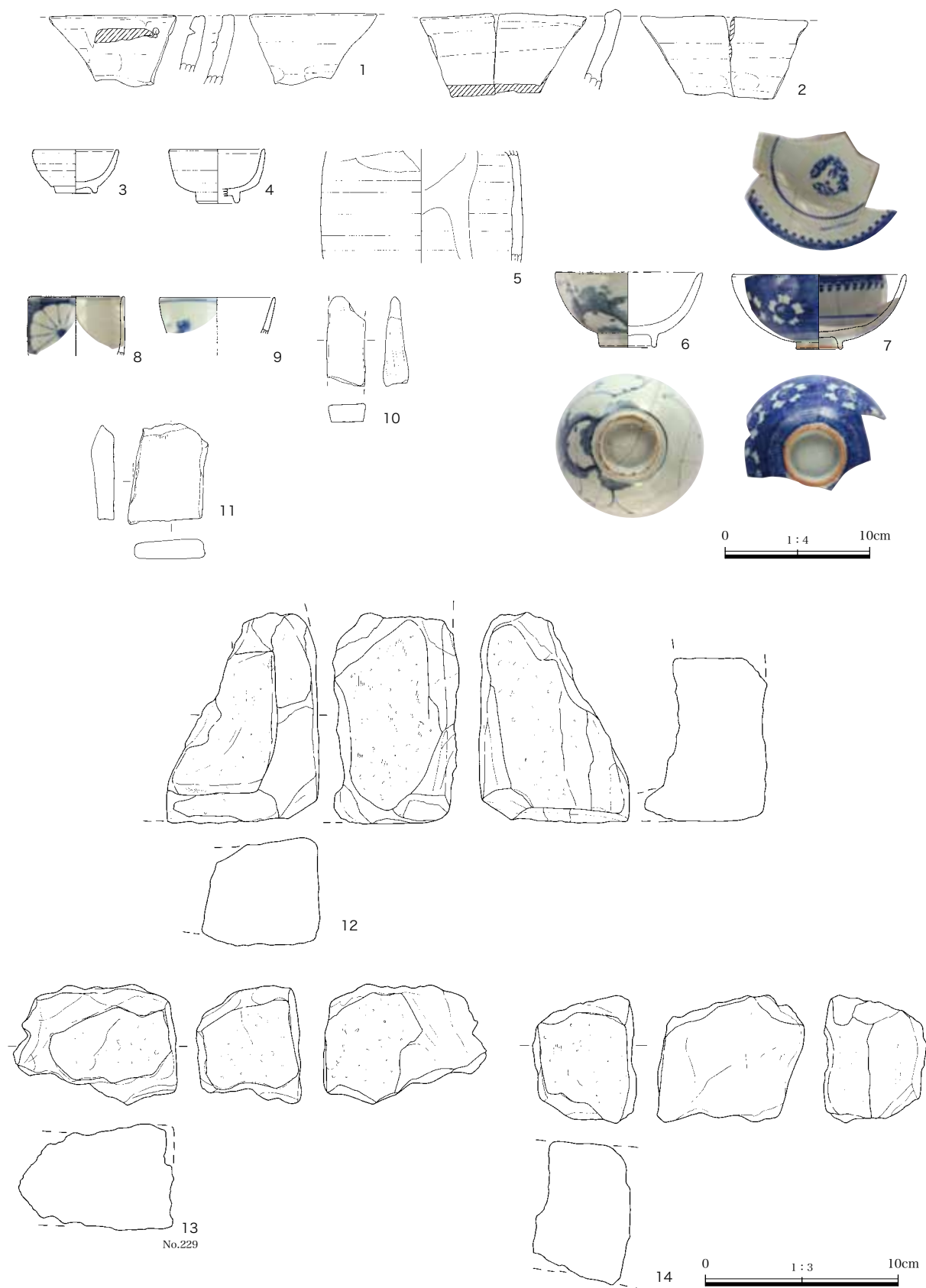
規模・形状 横倉戸館 8 号墳の頂部に位置しており、表面を加工したと思われる 7 ~ 17 cm の凝灰岩や川原石が、北西方向を軸とすると 3.8m、それに直交する軸で 3.4m の範囲に集中的にみられた。等高線からみると、34.100 ~ 34.200m 周辺に集中的にみられ、南西・南東方向では直線的に並ぶようにもみえる。その際、南西辺は 1.4m、南東辺は 2.0m である。横倉戸館 8 号墳頂部付近に稲荷社があったと地元住民からの指摘があり、本遺構および遺物は稲荷社に伴うものと考えられる。

出土遺物 第 249 図 1・2 は焙烙である。1 は内面に穿孔途中で放棄された窪みが 1 カ所見受けられる。2 は 2 片が接合した資料だが、色調が左右で異なる。3 ~ 5 は陶器で、小坏 2 点と徳利 1 点である。3・4 が小坏で、両者とも高台部をもつ。4 は大堀相馬焼の可能性がある。5 は徳利で、体部外面には全面に鉄釉が施釉される。6 ~ 9 は磁器で、6・7 は丸形碗。6 は肥前波佐見系と思われる。7 は印判手の碗で、型紙を使用する。8 は筒形碗。体部外面には花卉端部を弧状に表現する菊花文。9 は体部外面に草文を描く碗類。10・11 は石製品で、砥石である。10 が頁岩、11 が流紋岩である。

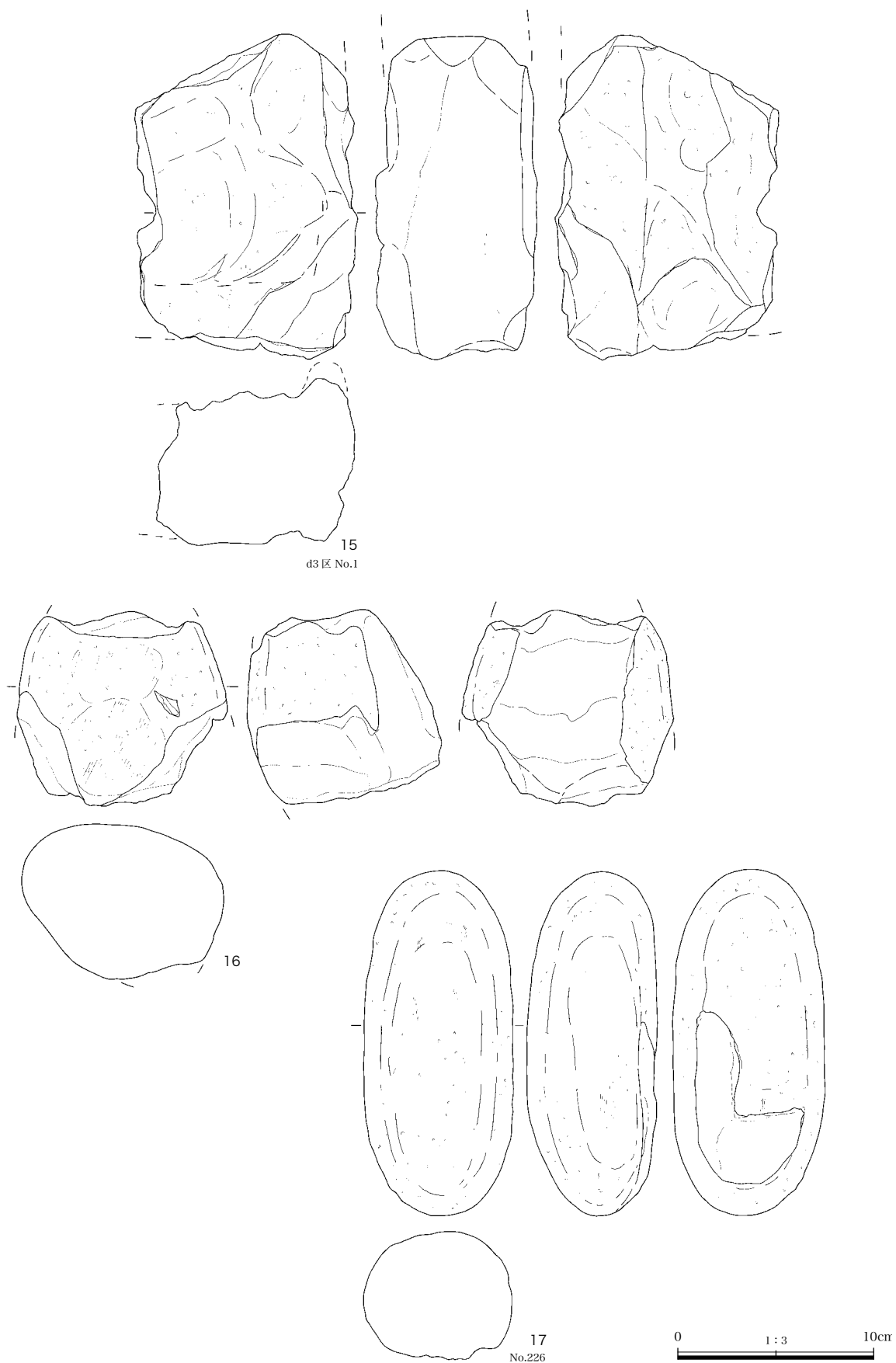
墳頂部に配されていたと推定される石は、加工石と自然礫の両者を併用していたと考えられる。完存に近いものはなく、加工が明瞭なものにおいても、いずれも全形は明らかでない。12 ~ 15 は軽石凝灰岩を使用している。12 は表面の内側を一辺約 9.5 cm の方形に削り、周縁部を削り出している。側面および裏面はおおよそ平坦であるが、内面は凹凸が激しい。裏面はやや凹凸が目立つ。周縁部は 2 cm 程残存しており、傾斜



第 248 図 SZ-1 墳頂部集石遺構実測図



第249図 SZ-1 墳頂部集石遺構遺物実測図 (1)

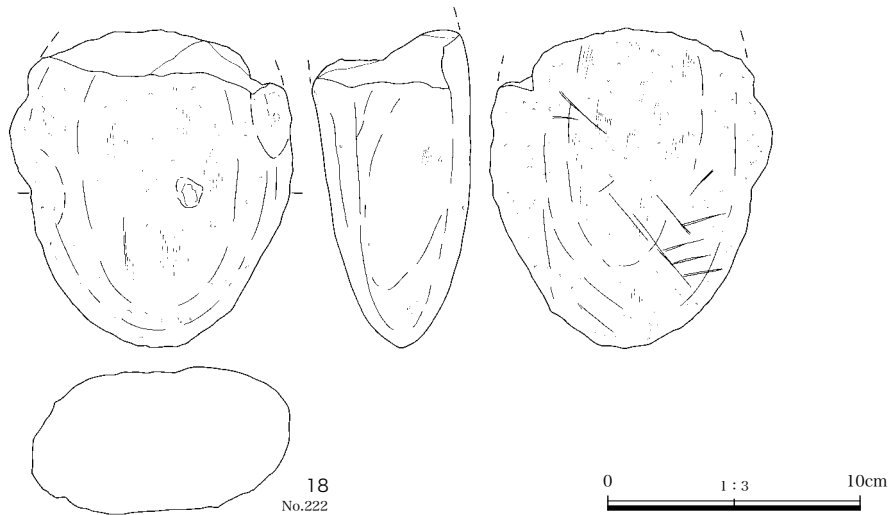


第250図 SZ-1 墳頂部集石遺構遺物実測図(2)

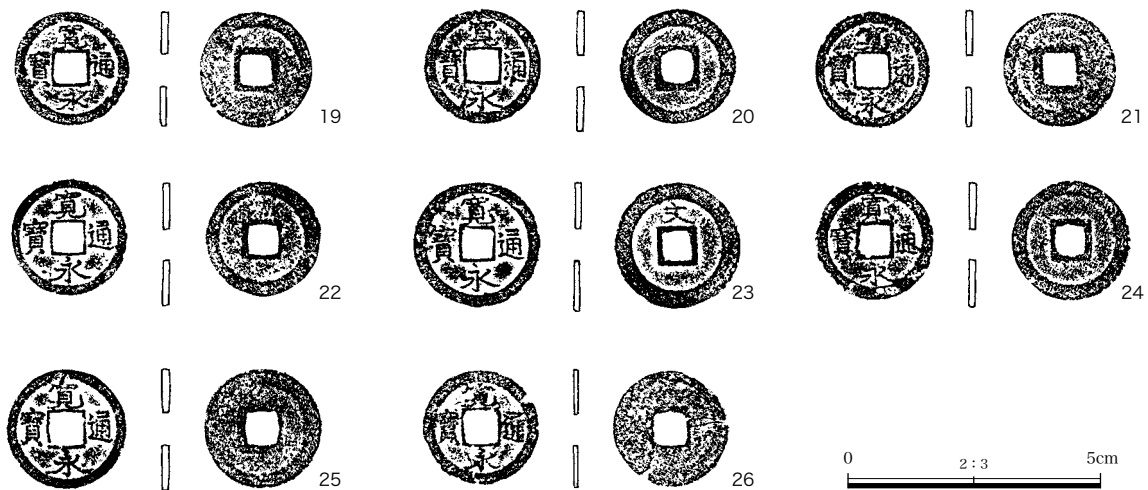
がつく。13は、平面形が台形状で、全面的に凹凸も激しく、明確な加工の痕跡は見当たらないが、下面の一边は粗いながらも整形を行っている可能性がある。14は側面および裏面が平坦に加工されており、表面は中心部へ向かって緩やかな傾斜をつける。表面がやや黒ずんでおり、被熱している可能性もある。15は、表面のみ平坦に加工されている。両側面が破損しているが、右側面は滑らかになっており、破損後に整形が行われている可能性が考えられる。裏面も大きく破損しているが、一部残存しており、平坦に加工されている。

16～18は自然礫または自然礫に近いものを利用している。16は残存する表面および両側面がやや滑らかになり、裏面と両端部は破損している。石材は多孔質安山岩である。17は長楕円形を呈しており、表裏面に磨り痕がみられる。石材は輝石安山岩である。18は、礫を含む多孔質安山岩で、上端部が破損する。残存面は全面に磨り痕がみられる。16～18は縄紋時代の磨石類（石皿力）を転用している可能性がある。

19～26は銅銭で、すべて寛永通宝である。



第251図 SZ-1 墳頂部集石遺構遺物実測図 (3)



第252図 SZ-1 墳頂部集石遺構金属製品実測図

第 58 表 SZ-1 墳頂部集石遺構遺物観察表

掲載番号	種類器種	計測値 (cm)	色調 (内・外)	胎土 (石材)	焼成	残存率	技法 (内・外)	特徴・備考	出土位置
1	焙烙	口径： 底径： 器高：(4.8)	内：7.5YR7/6 橙 外：7.5YR6/4 に ぶい橙	やや緻密、黒色粒・ 白色粒・透明粒や や多量	硬質	口縁部 破片	内：口縁部ヨコナデ、 体部ロクロナデ 外：口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	口縁部中心に浅い窪 み。内耳1カ所接合 痕あり。体部内面に 未貫通の穿孔。	SZ-1 上面
2	焙烙	口径： 底径： 器高：(5.5)	内：7.5YR6/6、 2.5Y3/1 橙 黒褐 外：7.5YR7/6 (橙)、 2.5Y5/2 ~ 1/2 (暗 灰黄~黒)	やや緻密、黒色粒・ 白色粒・透明粒や や多量	硬質	口縁部 破片	内：口縁部ヨコナ デ、体部ロクロナ デ、外：口縁部ヨコ ナデ、体部ロクロ ナデ後ナデ	口縁部中心に浅い窪 み。	SZ-1b 区 上面
3	陶器 小坏	口径：(5.8) 底径：2.9 器高：3.0	素地：2.5YR6/2 灰黄 釉：10Y6/2 オリー ブ灰	硬質、黒色粒・白 色粒微量	硬質	底部完存 口縁から 体部 1/4 弱	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	体部外面中位より下 は無釉。	SZ-1c 区 上層
4	陶器 小坏	口径：(6.6) 底径：(3.0) 器高：3.7	素地：5Y8/3 浅黄 釉：10Y6/2 オリー ブ灰	硬質、黒色粒・白 色粒微量	硬質	口縁から 底部 1/3	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、体 部中位ヘラケズリ	底部無釉。	SZ-1b 区
5	陶器 徳利	口径： 底径： 器高：(7.5)	素地：N8/0 灰白 釉：5YR4/4 にぶ い赤褐	緻密、黒色粒・少 礫微量	硬質	体部片	ロクロ整形	内側の一部にも釉。	F11c
6	磁器 丸形碗	口径：10.2 底径：4.0 器高：5.1	素地：N8/0 灰白 釉：透明釉	緻密、黒色粒少量	硬質	ほぼ完形	ロクロ整形、染付： 5BG4/ 1 暗青灰 (呉須)	体部内面無地。体部外 面雪輪・梅文・一重 圏線。高台部外面に二重 圏線。高台端部のみ無 釉。砂目付着。肥前波 佐見系。	SZ-1b 区 上面
7	磁器 丸形碗	口径：(12.0) 底径：3.2 器高：5.2	素地：N8/0 灰白 釉：透明釉	硬質、黒色粒微量	硬質	底部完存 口縁から 体部 1/3	染付：5BG6/1 コ バルト	口縁部内面に瑠璃繁 文。底部に一重圏線。 内面見込みに松竹梅 文。体部外面に熨斗繁 文・花文。高台端部 のみ無釉。型紙転写。	SZ-1 a2 区 周辺 c 区上面
8	磁器 筒形碗	口径：6.5 底径： 器高：(4.0)	素地：N8/0 灰白 釉：透明釉	硬質、黒色粒微量	硬質	口縁から 体部破片	染付：呉須	口縁部内面に一重圏 線。体部外面には菊 花文。	SZ-1b 区
9	磁器 丸形碗	口径：(8.0) 底径： 器高：(2.6)	素地：N8/0 灰白 釉：透明釉	硬質、黒色粒微量	硬質	口縁部 破片	染付：淡藍 (呉須)	口縁外面に一重圏線。 体部に植物文カ。	SZ-1c 区
10	砥石	最大長：6.7 最大幅：5.0 最大厚：1.5		流紋岩				両面使用。浅い線状 痕有。硯転用カ。 重量：77.7 g	SZ-1
11	砥石	最大長：5.8 最大幅：2.6 最大厚：1.7		流紋岩				片面・側部使用。裏面・ 両側面浅い線状痕有。 重量：32.4 g	SZ-1b 区
12	石製品	最大長：14.2 最大幅：10.4 最大厚：8.6		軽石凝灰岩				加工痕あり。内部を 方形状に削り出す。 重量：911.8 g	SZ-1 墳頂 部
13	石製品	最大長：6.2 最大幅：8.5 最大厚：5.4		軽石凝灰岩				被熱痕あり。 重量：200.7 g	SZ-1 墳頂 部 no.229
14	石製品	最大長：6.4 最大幅：5.0 最大厚：7.2		軽石凝灰岩				加工痕あり。 重量：193.2 g	SZ-1 墳頂 部
15	石製品	最大長：16.2 最大幅：11.1 最大厚：8.2		軽石凝灰岩				白く変色している。加 工しているようだが劣 化・磨滅で判断不能。 重量：1226.1 g	SZ-1 墳頂 部 d3 区 no.1
16	磨石?	最大長：9.8 最大幅：10.5 最大厚：9.7		多孔質安山岩				残存面に磨り痕あり。 磨石転用カ。 重量：1167.8 g	SZ-1 墳頂 部
17	磨石?	最大長：23.5 最大幅：10.1 最大厚：8.7		輝石安山岩				被熱している。残存 面に磨り痕あり。磨 石転用カ。 重量：2896.4 g	SZ-1 墳 頂部 no.226
18	石皿?	最大長：16.8 最大幅：14.8 最大厚：8.8		多孔質安山岩				磨り痕および線状痕あ り。縄紋石皿の転用カ。 重量：1830.6 g	SZ-1 墳 頂部 no.222

第59表 SZ-1 墳頂部集石遺構金属製品観察表

掲載番号	種類器種	径 (cm)	孔径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	材質	特徴・備考	出土位置
19	銭銅製品	2.3	0.6	0.1	2.6	銅	寛永通寶	SZ-1 頂部 b3 区
20	銭銅製品	2.4	0.6	0.1	2.4	銅	寛永通寶	SZ-1 頂部 b3 区
21	銭銅製品	2.3	0.6	0.1	1.9	銅	寛永通寶	SZ-1 頂部 b3 区
22	銭銅製品	2.4	0.6	0.1	2.7	銅	寛永通寶	SZ-1 頂部 b3 区
23	銭銅製品	2.5	0.6	0.1	2.6	銅	寛永通寶	SZ-1 頂部 b3 区
24	銭銅製品	2.4	0.6	0.1	2.4	銅	寛永通寶	SZ-1 頂部 b3 区
25	銭銅製品	2.4	0.6	0.1	2.8	銅	寛永通寶	SZ-1 頂部
26	銭銅製品	2.3	0.7	0.1	1.4	銅	寛永通寶	SZ-1 頂部 盛土内 d2・3

5. 近世以降遺構外遺物

近世以外の遺構やグリッドでの出土遺物を図示する。

第253図1～8は焙烙である。1は口縁部寄りに直径6mm程の穿孔がされる。F8(T11)グリッドからの出土。2は調査区内からの表採品で、ロクロナデが強い個体である。口縁部がかなりシャープで、丁寧に作られている。3は地下式坑であるSK-86出土。4は調査区外からの表採品で、口縁部を大きく折り曲げる。5・6も平底の焙烙と考えられる口縁部片。5は地下式坑であるSK-96aからの出土。後世の流入品と考えられる。6はF6bグリッドからの出土。白色粒を多量に含む。7・8は丸底の焙烙である。両者ともF6・F7グリッド出土で、7はT10から、8は一部がSK-77からの出土。7の口縁部片は、内耳部が口縁端部に直接接合される。8は口縁部と底部内面にススが付着する。同一個体の可能性がある。

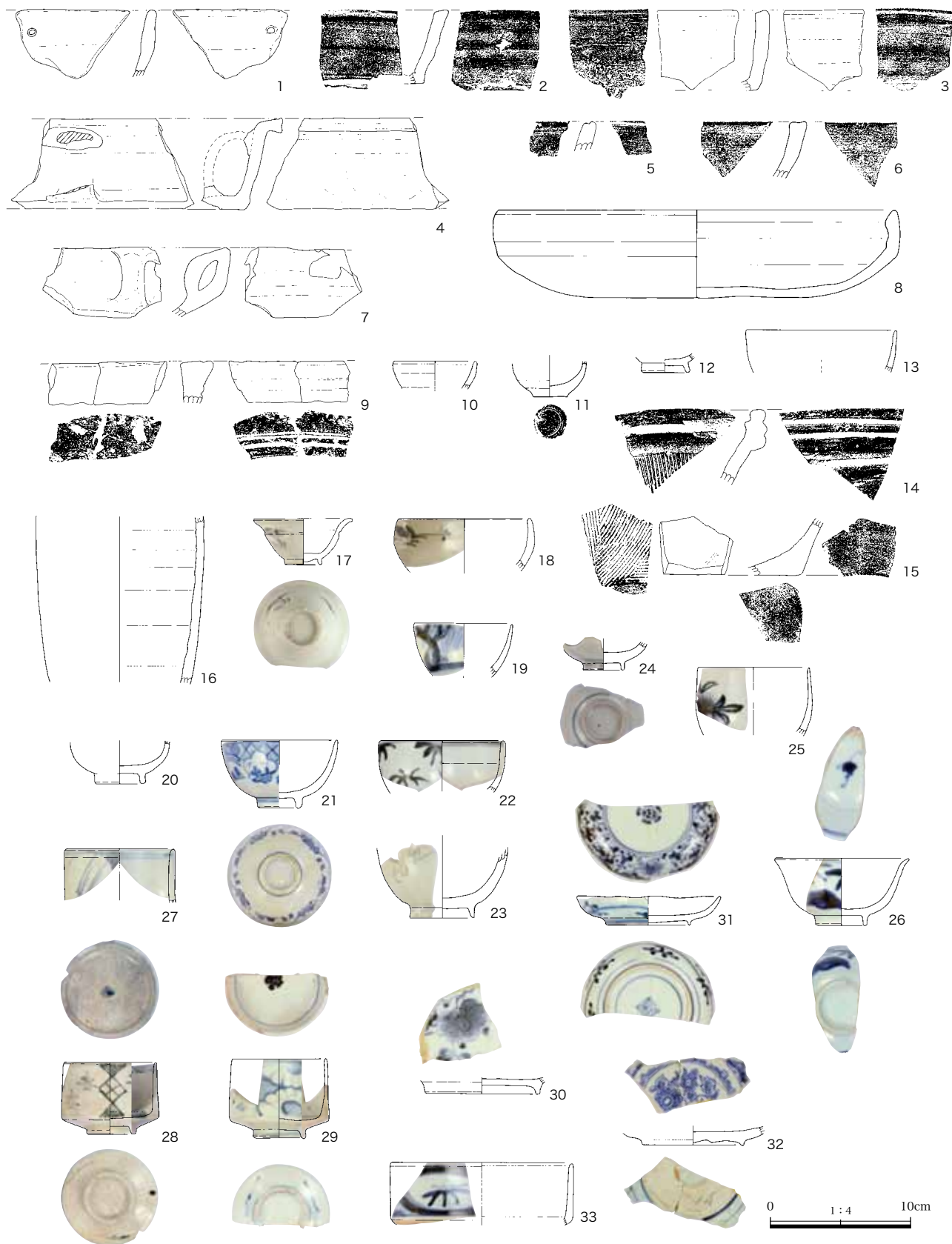
9は火鉢の口縁部片で、体部外面に2条の沈線を施す。調査区外での表採である。

10～16は陶器である。10～12は小坏。10は瀬戸美濃系の可能性がある。12は高台部が付く。10は調査区内、11はF9cグリッド、12はT11からの出土である。13は碗類。内外面共に無文である。F7aグリッドからの出土。14・15は播鉢。両者とも内面は全面にわたって櫛歯状工具により成形される。14はT11から、15は調査時に駐車場として利用した場所からの表採遺物である。16は徳利の体部片で、外面は全面に施釉される。瀬戸美濃系である。D8dグリッド出土。

17～33は磁器である。17は口縁が端反する小形の坏で、肥前系。T11からの出土。18～24は丸形碗。18はやや大形の丸形碗である。F7dグリッド出土。19はやや小ぶりの丸形と思われる碗。坏類の可能性もある。20は内外面が無文の底部。21は完形の碗である。外面は型紙転写で文様が写される。

19～21は調査区内からの出土。22は残存する外面の全面に草文がちりばめられる丸碗で、D・E・Fの6～8グリッドからの出土である。23は残りが悪いが、いわゆる「くらわんか碗」である。やや白みがかかる釉が施釉される。調査区内からの出土。24はSK-96aから出土した、丸形碗である。23と異なり、透明度のある釉が施釉されている。25は筒形の丸碗である。外面には草文を濃いめの呉須で描く。26は口縁端部が反る碗。25・26ともに調査区内出土である。

27～29は筒形碗である。3点とも文様構成に差異が見受けられる。27は、内面の口縁端部が2重圏線であるが、28・29は四方禪文を描く。体部外面は、27は詳細な文様構成は不明だが、草文であろう。28



第253図 近世以降遺構外遺物実測図(1)

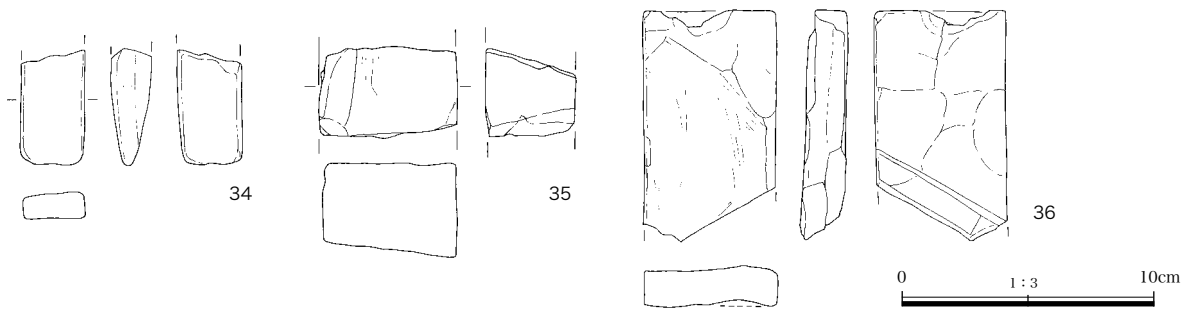
は格子文と草文で、29は半菊花文と菱文・格子文が描かれている。27はSK-96a、28はF9cグリッド、29は調査区内からの出土である。

30～32は皿類である。30の調査区内出土の皿は、内面の文様がやや丁寧描かれる。31は口縁端部がやや輪花状になる皿である。文様は草花文であるが、文様の抽象化が顕著である。D～Fの6～8グリッドから出土した。32は型紙転写の皿で、コバルトを用いる。D4グリッド・E4～6グリッドの出土である。

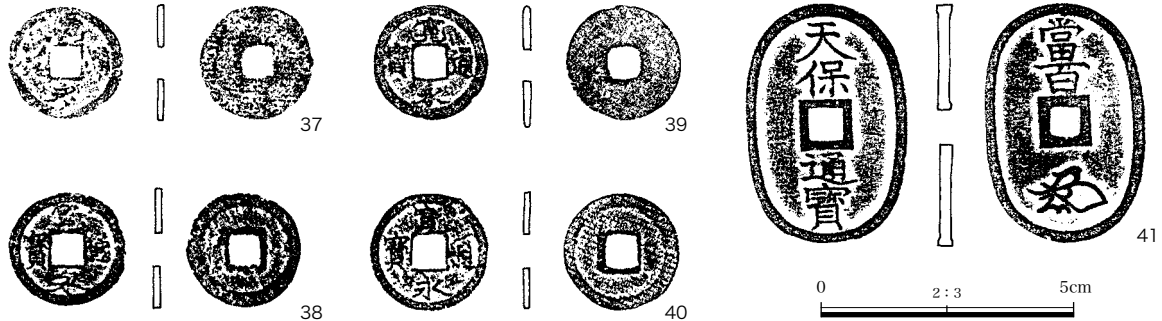
33は鉢類で、外面に草文が描かれる。口縁端部に釉がかからない。F8aグリッド出土である。

第254図 34～36は砥石である。34はD8グリッド、35はF8(T11)グリッドから、36はD～Fの6～8グリッドの範囲から出土した。石材の材質は、34・35が流紋岩で、36のみ頁岩である。

第255図 37～41は銅銭で、37～40はすべて寛永通宝、41は天保通宝である。



第254図 近世以降遺構外遺物実測図(2)



第255図 近世以降遺構外金属製品実測図

第60表 近世以降遺構外遺物観察表

掲載番号	種類 器種	計測値 (cm)	色調 (内・外)	胎土 (石材)	焼成	残存率	技法 (内・外)	特徴・備考	出土位置
1	焙烙	口径： 底径： 器高：(4.8)	内：10YR3/1 黒褐 外：10YR6/4 にぶ い黄橙	やや緻密、透明粒、 白色粒、黒色粒少 量	硬質	口縁部 破片	内：口縁部ヨコナ デ、体部ナデ 外：口縁部ヨコナ デ、体部ナデ	体部外面下半縮目。 体部上端に1カ所穿 孔。平底。	T11
2	焙烙	口径： 底径： 器高：5.2	内：10YR5/2 黒褐 外：10YR3/1 黒褐	やや緻密、透明粒、 白色粒、黒色粒少 量	硬質	口縁から 底部破片	内：口縁部ヨコナ デ、体部ナデ 外：口縁部ヨコナ デ、体部ナデ	口縁中心部浅い窪み あり。	ハイド
3	焙烙	口径： 底径： 器高：5.7	内：5Y4/1 灰 外：2.5Y2/1 黒	やや緻密、黒色ガ ラス粒・透明粒、 白色粒、赤褐色粒 少量	硬質	口縁から 体部片	内：口縁部ヨコナ デ、口縁～体部ヨ コナデ 外：口縁部ヨコナ デ、体部ナデ、体 部下半押圧状ナデ	口縁部中心にくぼみ あり。外面に粘土紐 痕。外面下半から底 部にかけて荒れ目立 つ。	S-86

第三章 検出された遺構と遺物

4	焙烙	口径： 底径： 器高：6.6	内：2.5YR6/2 黒褐 外：7.5YR5/4 にぶ い褐	やや緻密、黒色ガ ラス質粒・赤褐色 粒・白色粒微量、 黒色粒やや多量	硬質	口縁から 底部片	内：口縁部ヨコナ デ、体部内外面ナ デ、底部内面ナデ、 体部外面押圧状ナ デ	内耳1カ所接合痕あ り。	OYYK 区外
5	焙烙	口径： 底径： 器高：(2.0)	内：10YR5/1 褐灰 外：10YR4/1 褐灰	やや緻密、黒色ガ ラス粒・透明粒・ 白色粒・赤褐色粒 少量	硬質	口縁部 破片	内：口縁部ヨコナ デ、胴部ナデ 外：口縁部ヨコナ デ、胴部ナデ	口縁部中央に沈線。 口縁部外面にスス付 着。	S-96a
6	焙烙	口径： 底径： 器高：(4.0)	内：2.5Y3/1 黒褐 外：2.5Y3/1 黒褐	やや緻密、透明粒、 白色粒、金色雲母 少量	硬質	口縁部 破片	内：口縁部ヨコナ デ、体部ナデ 外：口縁部ヨコナ デ、体部ナデ	口縁部中央に浅い窪 みあり。外面スス付 着。	F6b
7	焙烙	口径： 底径： 器高：(5.0)	内：5YR4/8 赤褐 外：10YR4/3 にぶ い黄褐	やや緻密、黒色粒・ 白色粒・赤褐色粒 少量	硬質	口縁部 破片	内：口縁部ヨコナ デ、体部ナデ 外：口縁部ヨコナ デ、体部ナデ	内耳1カ所。口縁部 から体部外面にスス付 着。丸底。	T10
8	焙烙	口径：(28.6) 底径：15.3 器高：6.2	内：5YR4/8 赤褐 外：5YR3/1 黒褐	やや緻密、黒色粒・ 白色粒・赤褐色粒 少量	硬質	口縁から 体部一部 底部 1/3	内：口縁部ナデ、体 部～底部複数ナデ 外：口縁部ナデ、体 部2回ナデ、底部 縮目	口縁内側から外側へ スス付着。底部内面 磨滅、一部スス付着。 丸底。	S-77F6b F7a・c F6・7 h2b
9	土師質 土器火鉢	口径： 底径： 器高：(3.0)	内：5YR5/4 にぶ い赤褐 外：10YR4/2 灰黄褐	やや粗雑、少礫や や少量。白色粒・ 金色雲母多量	やや 硬質	口縁部 破片	口縁部荒れ、体部 内面ナデ・外面ロ クロナデ	体部外面に2条の沈 線。常陸産。	OYYK
10	陶器 小坏	口径：(6.0) 底径： 器高：(2.0)	素地：N7/1 灰 釉：10Y6/2 オリー ブ灰	緻密、黒色粒・白 色粒微量	硬質	口縁から 体部 1/6	ロクロ整形	内面に一部鉄分付着。 内外面僅かに発泡。 瀬戸・美濃系。	OYYK
11	陶器 小坏	口径： 底径：2.5 器高：(2.5)	素地：2.5Y6/1 黄灰 釉：5Y6/2 灰オリー ブ	緻密、黒色粒・白 色粒微量	硬質	体部から 底部 底部完存	ロクロ整形	体部外面下半から底 部外面まで無釉。底 部回転糸切り離し。	D区 F9c
12	陶器 高台付 小坏	口径： 底径：3.5 器高：(1.3)	素地：5Y8/2 灰白 釉：5GY7/1 オリー ブ灰	緻密、黒色粒・白 色粒微量	硬質	底部完存	ロクロ整形	底部外面のみ無釉。 瀬戸・美濃系？	T11
13	磁器 碗類	口径：(10.8) 底径： 器高：(2.9)	素地：10YR6/1 褐灰 釉：2.5GY6/1 オ リーブ灰(透明釉)	緻密、黒色粒白色 粒極微量	硬質	口縁から 体部破片	ロクロ整形	内外面無文。	F7a
14	陶器 播鉢	口径： 底径： 器高：(5.3)	素地：2.5YR5/6 明 赤褐 釉：2.5YR2/2 極暗 赤褐	緻密、透明粒少量、 白色粒やや多量	硬質	口縁部片	内：口縁部ヨコナ デ、全面にすり目 外：口縁部～体部 ナデ整形、口縁部 に2条の沈線	内面をハケ目状工具 で播目成形。	T9
15	陶器 播鉢	口径： 底径： 器高：(4.1)	内：5YR4/1 褐灰 外：5YR4/2 灰褐	緻密、赤褐色粒多 量、白色粒やや少 量	硬質	体部から 底部破片	内：全面にすり目、 底部中央部にナデ 外：体部、底部ナ デ整形	内面に21条以上のハ ケ目状工具で播目成 形。	OYYK
16	陶器 徳利	口径： 底径： 器高：(11.9)	素地：5Y8/2 灰白 釉：5Y8/4 淡黄	緻密、白色粒微量	硬質	体部破片	ロクロ整形	体部外面に釉。瀬戸・ 美濃系？	D8d
17	磁器 端反小坏	口径：7.0 底径： 器高：3.2	素地：N8/0 灰白 釉：10GY8/1 明緑 灰(透明釉)	緻密、黒色粒微量	硬質	ほぼ完形	ロクロ整形、 染付：5Y4/2 灰オ リーブ(呉須)	内面無地。体部外面 草花文・鳥文。高台 端部のみ無釉。肥前 系？	T11 no.1
18	磁器 丸形小碗	口径：(9.6) 底径： 器高：(4.2)	素地：7.5Y7/1 灰白 釉：7.5Y6/2 灰オ リーブ	緻密、黒色粒微量	硬質	口縁から 体部破片	ロクロ整形、 染付：5Y3/2 オ リーブ黒	内面無地。外面草文。	F7b
19	磁器 丸形碗	口径：(7.0) 底径： 器高：(3.8)	素地：N8/0 灰白 釉：透明釉	緻密、黒色粒微量	硬質	口縁から 体部片	染付：藍(呉須)	内面無地。外面植物 文。肥前系。	OYYK
20	磁器 丸形碗	口径： 底径：2.9 器高：(2.0)	素地：2.5Y8/1 灰白 釉：透明釉	緻密、黒色粒少量	硬質	底部ほぼ 完存 体部一部	染付：7.5GY4/1 暗 緑灰(呉須)	体部内面無地。体部 外面一重圏線。高台 外面二重圏線。高台 端部のみ無釉。内面 僅かに発泡。	S-96a no.4
21	磁器 丸形碗	口径：8.3 底径：3.2 器高：4.8	素地：N8/0 灰白 釉：透明釉	緻密、黒色粒極微 量	硬質	完形	染付：コバルト	内面無地。外面口縁 部に一重圏線。外面 菱繋文・波状文・鳥文・ 舟文・松文・花型窓 に植物文。高台外面 に二重圏線。高台見 込み一重圏線。高台 端部のみ無釉。	OYYK
22	磁器 丸形碗	口径：(9.0) 底径： 器高：(3.7)	素地：N8/0 灰白 釉：透明釉	緻密、黒色粒少量	硬質	口縁部 1/4	染付：10BY5/1 青 灰(呉須)	口縁部内面に二重圏 線。体部外面に草文。	D・E・F6 ～8

23	磁器 丸形碗	口径： 底径：(4.6) 器高：(5.0)	素地：N7/0 灰白 釉：7.5Y8/1 灰白	緻密、黒色粒微量	硬質	体部から 底部片	染付：10BG5/1 青灰（呉須）	体部内面無地。体部 外面草文・一重圏線。 高台部外面に二重圏 線。高台端部のみ無 釉。砂目付着。肥前・ 波佐見系？	OYYK
24	磁器 丸形碗	口径： 底径： 器高：(3.0)	素地：5Y8/1 灰白 釉：10GY7/1 明緑 灰（透明釉）	緻密、黒色粒微量	硬質	底部完存 体部一部	ロクロ整形	内外面無釉。高台端 部のみ無釉。	OYYK
25	磁器 筒形丸碗	口径：(8.0) 底径： 器高：(4.8)	素地：N8/0 灰白 釉：透明釉	緻密、黒色粒微量	硬質	口縁から 体部片	染付：10BG3/1 暗青灰（呉須）	内面無地。外面草文。	OYYK
26	磁器 端反形碗	口径：(9.6) 底径：3.6 器高：4.7	素地：N8/0 灰白 釉：透明釉	緻密、黒色粒微量	硬質	口縁から 底部片 底部 4/5	染付：濃藍（呉須）	内面口縁端部に一重 圏線。内面見込みに 二重圏線・不明文。 外面口縁端部に一重 圏線。体部植物文・ 一重圏線。高台部二 重圏線。高台端部の み無釉。	OYYK
27	磁器 筒形碗	口径：(8.0) 底径： 器高：(3.8)	素地：N8/0 灰白 釉：透明釉	緻密、黒色粒少量	硬質	口縁部破 片	染付：10BG5/1 青灰（呉須）	口縁部内面に二重圏 線。体部外面に草文。	S-96a
28	磁器 筒形碗	口径：(6.6) 底径：3.5 器高：5.1	素地：5Y8/1 灰白 釉：透明釉	緻密、黒色粒極微 量	硬質	底部完存 口縁から 体部 1/3	染付：2.5GY4/1 暗オリーブ灰（呉 須）	内面口縁部四方襷。 外面に格子文・草文。	F9c
29	磁器 筒形碗	口径：(6.8) 底径：3.8 器高：5.7	素地：N8/0 灰白 釉：透明釉	緻密、黒色粒微量	硬質	口縁から 体部 1/4 底部 3/5	染付：淡藍（呉須）	内面口縁端部に四方 襷。内面見込みに一 重圏線・こんやく 印五弁花文。外面半 菊花文・菱文。底部 一重圏線。高台外面 一重圏線。高台端部 のみ無釉。肥前系。	OYYK
30	磁器 皿	口径：(10.3) 底径：6.0 器高：2.0	素地：N8/0 灰白 釉：透明釉	緻密、黒色粒少量	硬質	口縁から 底部 1/2	染付：10BG5/1 青灰（呉須）	内面草花文。内面見 込み二重圏線・五弁 花文。外面唐草文・ 一重圏線。高台内面 に一重圏線・銘あり。 高台端部のみ無釉。 肥前系。	D・E・F6 ～8
31	磁器 皿	口径：(1.3) 底径： 器高：(7.2)	素地：N8/0 灰白 釉：透明釉	緻密、黒色粒少量	硬質	底部 1/3 体部一部	染付：コバルト	体部見込み花文。外 面二重圏線。底部蛇 目釉剥ぎ。	D4・E4～ 6
32	磁器 皿	口径： 底径：(8.2) 器高：(1.2)	素地：N8/0 灰白 釉：透明釉	緻密、黒色粒微量	硬質	底部 1/4	染付：淡藍（呉須）	内面草花文。外面無 文。高台部のみ無釉。	OYYK
33	磁器 鉢	口径：(13.0) 底径： 器高：(4.4)	素地：N8/0 灰白 釉：透明釉	緻密、黒色粒微量	硬質	口縁から 体部片	染付：濃藍（呉須）	内面無文。外面植物 文。口縁端部・底部 無釉。肥前系。	F8a
34	砥石	最大長：4.5 最大幅：2.6 最大厚：1.4		流紋岩				両面使用。両側面線 状痕。 重量：20.7g	D8 北外
35	砥石	最大長：3.6 最大幅：3.6 最大厚：5.4		流紋岩				片側面のみ使用。裏 面線状痕。 重量：100.7g	T11
36	砥石	最大長：8.7 最大幅：5.2 最大厚：1.7		頁岩				片面使用。両側部線 状痕。 重量：122.7g	D・E・F6 ～8

第61表 近世以降遺構外金属製品観察表

掲載 番号	種類 器種	径 (cm)	孔径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	材質	特徴・備考	出土位置
37	銭 銅製品	2.3	0.6	0.1	1.7	銅	裏面が無紋であることから、一文銭の寛永 通宝である。	E8b
38	銭 銅製品	2.3	0.6	0.1	1.7	銅	裏面が無紋であることから、一文銭の寛永 通宝である。	OYYK
39	銭 銅製品	2.4	0.6	0.1	2.3	銅	寛永通寶	T11
40	銭 銅製品	2.3	0.6	0.1	2.4	銅	寛永通寶	調査区内
41	銭 銅製品	縦：4.8 横：3.2	0.7	0.3	21.3	銅	天保通寶	T7

第8節 時期不明の遺構

1. 溝跡

SD-70a（第256図、図版四四）

位置 本遺構は D5c・D5d・E5b・E5d・E6c・F6a の各グリッドに位置する。

規模・形状 調査区を北西から南東へ横断する溝である。長さ 17.30m、溝幅は検出面で 0.50～1.85m 程度、深さ 0.48～0.79m、断面は逆台形を呈する。平成 25 年度調査区際のセクションで、本来の溝の幅および深さが観察できた。北側は、攪乱によって東側の幅が不明であるが、2.00m 前後となり、深さは 0.45m である。南側では幅 1.43m、深さ 0.44m である。断面 2 段の逆台形で、A-A' セクションで壁面が西側へ大きく広がる様子が確認できる。

平成 26 年度調査区内で調査された SK-206 は、別遺構としたが本遺構の一部と考えられる。また、調査区中央部に位置する SA-2 と軸が概ね並行するが、関係性については不明である。

重複 SI-73 と重複し、SI-73 より新しい。SK-206 は同一遺構と考えられる。

覆土 3 層からなり、自然堆積であろう。覆土には白色粒を含む。テフラ分析を行っており、3 層から浅間 B テフラ (As-B) が検出されている。最堆積や攪乱の影響が無いとすれば、古代末の遺構となる可能性が高い。詳細は第四章を参考としていただきたい。

出土遺物 縄紋土器が 216 点出土しているが、本遺構に伴う遺物は出土していない。

SD-70b（第256図、図版四四）

位置 E5d・F5b・F6a グリッドに位置する。

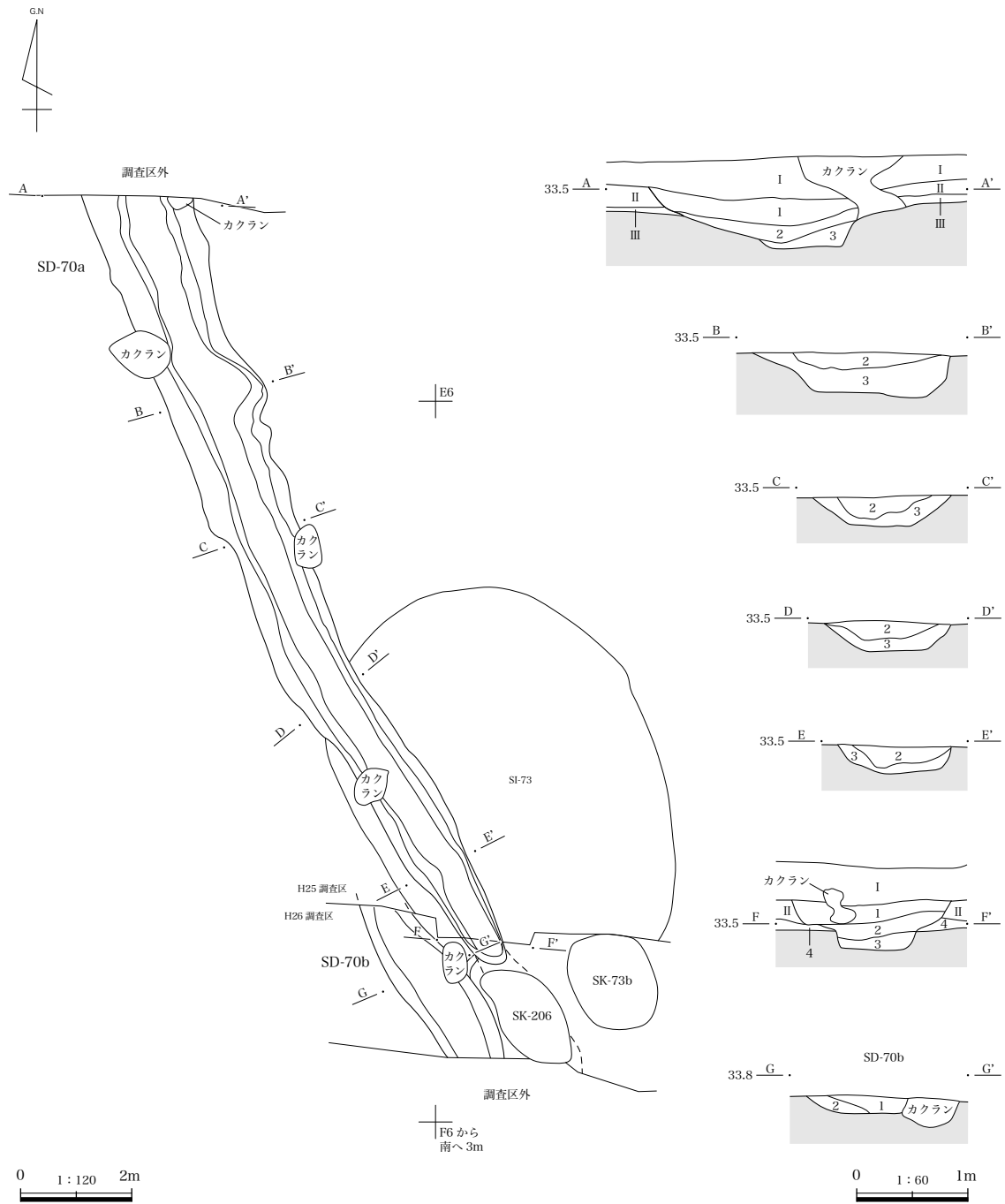
規模・形状 平成 26 年度の調査で確認され、SD-70a の西側へ近接する溝である。長さは 3.00m、溝幅は検出面で 0.65～1.10m、深さ 0.16m 程度で、断面逆台形を呈する。

本遺構は、SD-70a と並行するが、関係性については不明である。但し、覆土も SD-70a、SK-206 と大きな差異はなく、また、平成 25 年度調査区では未確認だが、SD-70a の分岐や、溝の幅が広がっている部分との解釈も可能かもしれない。

重複 SI-73 の南西端と重なるが、覆土相互の土層観察はなし得ていない。

覆土 2 層からなり、自然堆積と考えられる。

出土遺物 本遺構に伴う遺物は出土していない。



SD-70a 土層説明

- 1 暗灰褐色土 白色粒やや多量、ロームブロック少量、ローム粒やや少量。しまり強い。
- 2 黒褐色土 ローム粒・白色粒やや多量、ロームブロックやや少量。しまり強い。
- 3 暗褐色土 ローム粒多量、ロームブロックやや多量。しまり強い。
- 4 暗褐色土 ローム粒多量、ロームブロックやや多量。しまり強い。(SI-73 覆土)

SD-70b 土層説明

- 1 暗褐色土 ローム粒少量。しまりやや強い。
- 2 淡灰褐色土 ローム粒・ロームブロックやや多量。しまりやや弱い。

第 256 図 SD-70a・b 遺構実測図

2. 集石遺構

SU-118 (第 257・258 図、第 62 表、図版四四・七七)

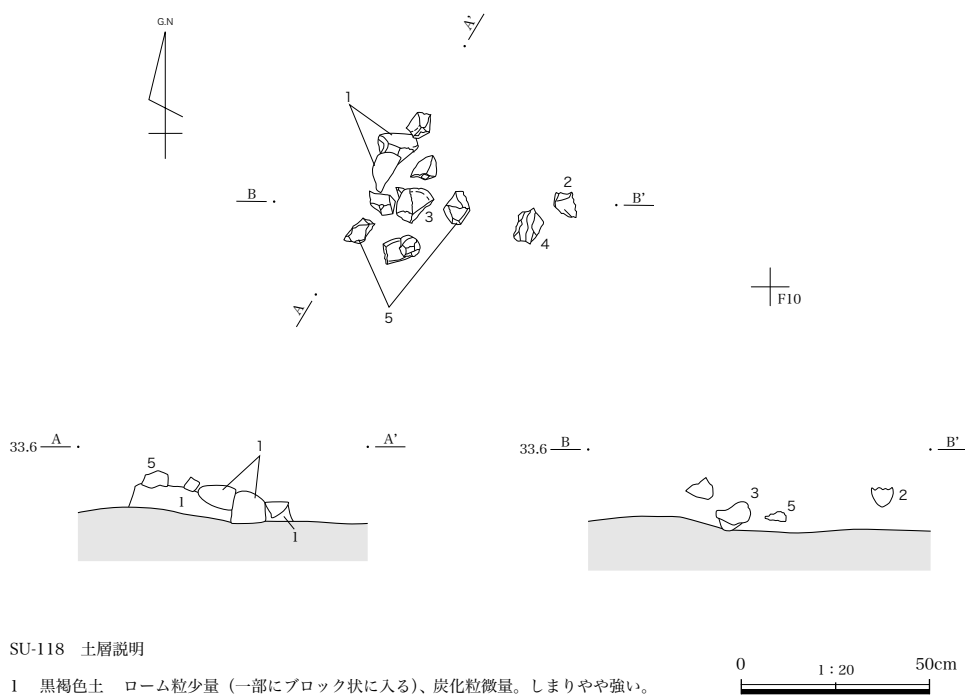
位置 E9b グリッドに位置する。

規模・形状 南北 0.40m・東西 0.65m の範囲内に 13 個の礫がまとまった状態で出土した。遺構の掘り込み等は確認できなかった。また、本遺構周辺に焼土等も確認できなかった。

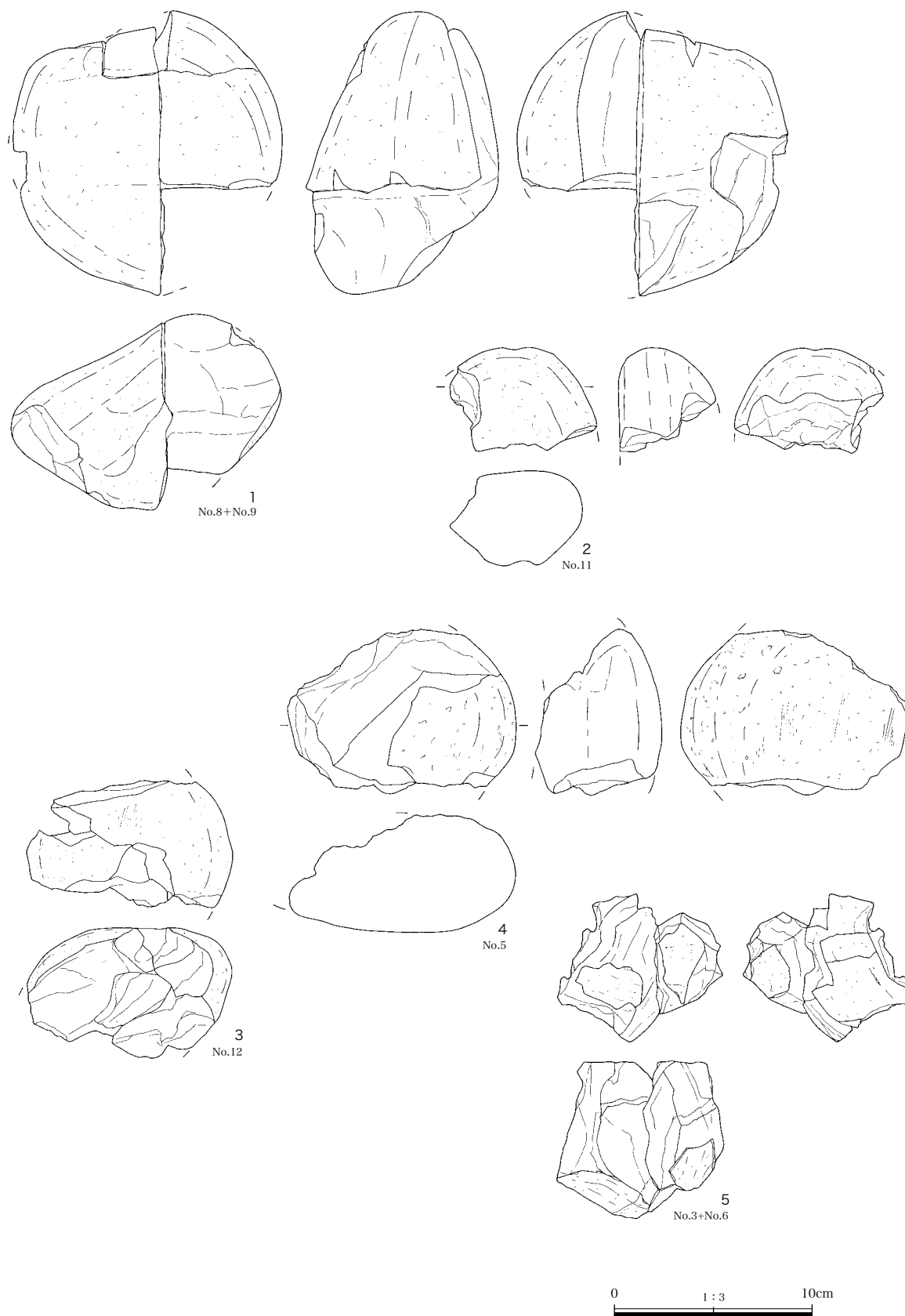
土層断面で確認した 1 層は、基本土層のⅢ層と大きな差異は認められない。

重複 SA-2 の盛土除去後に確認できたため、新旧関係としては SU-118 → SA-2 となるであろう。

出土遺物 本遺構で出土する礫の中には、被熱しているものがみられる。特に、1 は全体的に強く被熱している。2～4 には磨痕と思われる痕跡が認められ、定型的な例ではないが、縄紋時代の磨石の可能性はある。遺構も、縄紋時代の所産となる可能性があるであろう。



第 257 図 SU-118 遺構実測図



第258図 SU-118 遺物実測図

第 62 表 SU-118 遺物観察表

No.	器 種	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	石材・材質	出土位置	備考
1	磔	12.1	13.6	9.2	1244.0	流紋岩質溶結凝灰岩 (古期)	S-118 no.8 S-118 no.9	大きく 2 片に割れたものが接合。全 面被熱。
2	磨石?	(5.1)	(6.8)	4.9	198.0	輝石安山岩	S-118 no.11	若干の磨り面あり。全面被熱。
3	磨石?	(7.7)	11.5	6.2	479.3	多孔石質輝石安山岩	S-118 no.5	若干の磨り面あり。
4	磨石?	(6.1)	10.4	(6.5)	451.3	輝石安山岩 (新第三期)	S-118 no.12	若干の磨り面あり。
5	磔	(7.4)	(7.8)	8.0	392.0	流紋岩質溶結凝灰岩 (古期)	S-118 no.3 S-118 no.6	2 片が接合。

3. 土坑・ピット

本項では、時期の判別がつかない土坑について扱う。時期不明とした土坑は 42 基で、土坑の平面形状は円形 10 基、不整形円形 7 基、楕円形 9 基、方形 2 基、隅丸正方形 1 基、不整形方形 6 基、不整形楕円形 4 基、不整形 3 基である。ピットは 37 基確認した。土坑について個別に概要を記していく。

土坑

SK-11 は D4 グリッドに位置する円形の土坑である (第 259 図)。直径 0.44 ～ 0.48m で、深さは 0.15m、断面は逆台形状である。覆土は黒褐色土の単一層で、ロームブロックをやや多く含む。図示していないが、縄紋土器 5 点、石器 1 点が出土する。

SK-13 は E4 グリッドに位置する不整形円形の土坑である (第 259 図)。長軸 0.63m、短軸 0.56m で、深さは 0.17m、断面は逆台形状である。覆土は黒褐色土の単一層で、ローム粒を多く含む。図示していないが、縄紋土器が 2 点出土する。

SK-14a および SK-14b は D4・E4 グリッドに位置する不整形方形の土坑である (第 259 図)。SK-14a の規模は、長軸 0.58m で、短軸は 0.58m、深さは 0.14m である。覆土は暗灰褐色土の単一層である。SK-14b の規模は、長軸 0.58m で、短軸は 0.44m、深さは 0.30m である。覆土は暗褐色土の単一層である。両者とも断面は逆台形状である。第 259 図に示した SK-14a・b の土層断面で、SK-14a が SK-14b を切る状況が確認できたため、SK-14a → SK-14b となる。図示していないが、両遺構あわせて縄紋土器が 1 点出土する。

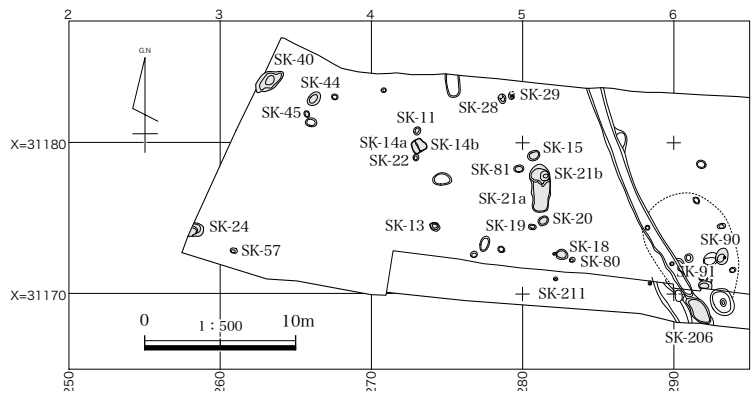
SK-15 は E5 グリッドに位置する円形の土坑である (第 259 図)。直径 0.64 ～ 0.71m で、深さは 0.10m、断面は皿状を呈する。覆土は暗灰褐色土の単一層で、ローム粒を多量に含む。図示していないが、縄紋土器が 7 点、土師器 1 点が出土する。

SK-18 は E5 グリッドに位置する円形の土坑である (第 259 図)。直径 0.66 ～ 0.82m で、深さは 0.06m と浅い。断面は皿状である。覆土は黒褐色土の単一層で、ローム粒を多量に含む。図示していないが、縄紋土器が 1 点出土する。

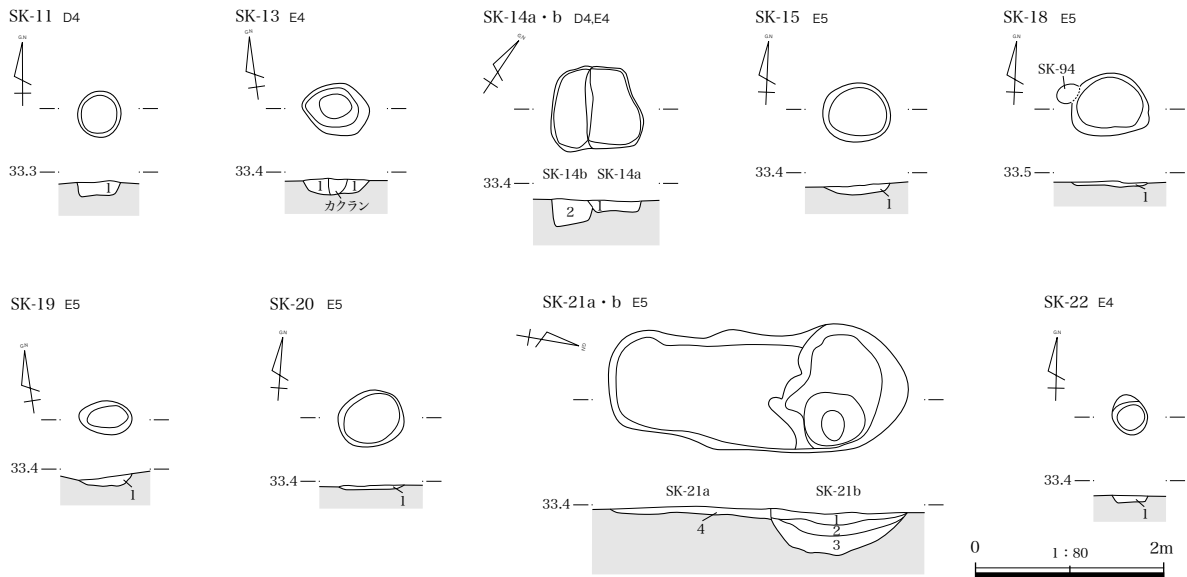
SK-19 は E5 グリッドに位置する楕円形の土坑である (第 259 図)。長軸 0.56m、短軸 0.34m で、深さは 0.11m、断面は逆台形状である。覆土は黒褐色土の単一層で、ローム粒を多量に含む。図示していないが、縄紋土器が 2 点出土する。

SK-20 は E5 グリッドに位置する円形の土坑である (第 259 図)。直径 0.61 ～ 0.71m で、深さは 0.06m と

部分図



SK-11・13～15・18～22・24・28・29・40・44・45・
57・80・81・90・91・206・211



SK-11 土層説明
1 黒褐色土 ロームブロックやや多量、ローム粒少量。しまりやや強い。

SK-13 土層説明
1 黒褐色土 ローム粒多量、ロームブロックやや少量。しまりやや強い。

SK-14 土層説明
1 暗灰褐色土 ロームブロック少量、ローム粒やや少量。しまり強い。
2 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少量。しまり強い。

SK-15 土層説明
1 暗灰褐色土 ローム粒多量、ロームブロック少量。しまりやや強い。

SK-18 土層説明
1 黒褐色土 ローム粒多量、ロームブロック少量。しまりやや弱い。

SK-19 土層説明
1 黒褐色土 ローム粒多量、ロームブロック少量。しまりやや弱い。

SK-20 土層説明
1 黒褐色土 ローム粒多量、ロームブロック少量。しまりやや弱い。

SK-21 土層説明
1 暗灰褐色土 ローム粒やや少量。しまりやや弱い。
2 暗褐色土 ローム粒やや多量、ロームブロック少量。しまり強い。
3 黒褐色土 ローム粒多量、ロームブロックやや多量。しまりやや強い。
4 明灰褐色土 ローム粒やや多量、ロームブロック少量。しまりやや強い。

SK-22 土層説明
1 暗褐色土 ローム粒やや多量、ロームブロック少量。しまり強い。

第259図 時期不明土坑遺構実測図(1)

浅い。断面は皿状である。覆土は黒褐色土の単一層で、ローム粒を多量に含む。図示していないが、縄紋土器が2点出土する。

SK-21a および SK-21b は E5 グリッドに位置する (第 259 図)。SK-21a は不整楕円形の土坑である。長軸 1.85m、短軸 1.35m で、深さは 0.11m、断面は皿状である。覆土は明灰褐色土の単一層で、ローム粒をやや多く含む。図示していないが、縄紋土器が4点出土する。SK-21b は不整円形の土坑である。長軸 1.33m、短軸 1.22m で、深さは 0.41m である。断面はやや丸底で、壁面は緩やかに立ち上がる。覆土は3層に分けられ、全体にローム粒を含んでいる。特に3層はローム粒が多く、ロームブロックもやや多量に含む。自然堆積と考えられる。図示していないが、縄紋土器が8点、弥生土器が1点出土する。第 259 図の SK-21a・b の土層断面で SK-21a が SK-21b に掘り込まれる状況が確認できたため、SK-21a → SK-21b となる。

SK-22 は E4 グリッドに位置する楕円形の土坑である (第 259 図)。長軸 0.43m、短軸 0.34m で、深さは 0.09m、断面は逆台形状である。覆土は暗灰褐色土の単一層で、ローム粒をやや多量に含む。図示していないが、縄紋土器が1点出土する。

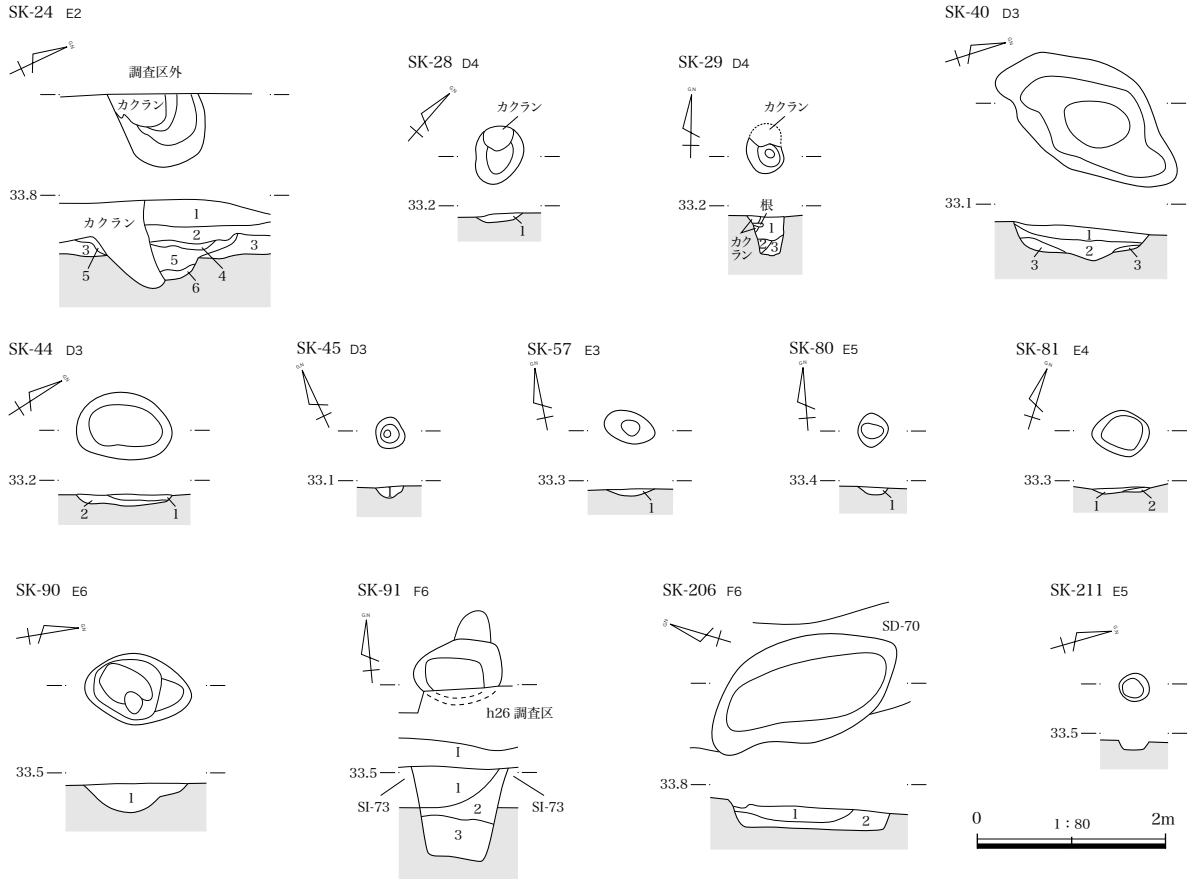
SK-24 は E2 グリッドに位置する不整形の土坑である (第 260 図)。西側が調査区外となるため、全形は不明である。長軸は調査部分で 0.84m、短軸は 0.88m で、深さは 0.85m となる。本遺構の断面形態は、南西方向が大きく攪乱を受けているが、ほぼ垂直に立ち上がり、確認面からは外傾する。基本土層Ⅲ層を掘り込む。覆土は3層に分層できる。2層はローム粒をやや多量に含み、3層にはロームおよびロームブロックがやや多量に含まれる。自然堆積と考えられる。本遺構からは、図示していないが縄紋土器が4点出土する。

SK-25 は F7 グリッドに位置する不整円形の土坑である (第 267 図)。長軸 0.70m、短軸 0.62m で、深さは 0.12m、断面は逆台形状である。覆土は黒褐色土と暗褐色土の2層に分層でき、両層ともローム粒を多く含み、ロームブロックをやや多量に含む。また、1層には白色粒がみられたが、火山灰かは不明である。自然堆積である。図示していないが、弥生土器が1点、土師器が1点出土する。

SK-26a および SK-26b は F7 グリッドに位置する (第 267 図)。SK-26a の平面形態は不整形の土坑である。長軸 1.4m、短軸 1.09m で、深さは 0.43m、断面は逆台形を呈する。覆土は暗灰褐色土と暗褐色土の2層で、両層ともにローム粒・ロームブロックは少なめである。自然堆積と考えられる。SK-26b の平面形態は不整形の土坑である。長軸 1.4m、短軸 1.09m で、深さは 0.43m、断面は逆台形を呈する。覆土は暗褐色土の単一層で、ローム粒・ロームブロックを少量含む。両遺構から出土した遺物のうち、1点を図示する。第 263 図 1 は SK-26a から出土した須恵器片と思われる遺物で、外面にススが多量に付着している。調査区内出土の須恵器の短頸壺と同一の可能性もあるが、不明である。この須恵器については、遺構に伴わない可能性も高く、本遺構も時期不明としておく。図示していないが、縄紋土器 36 点、土師器 1 点が出土する。SK-26b からは、図示していないが、縄紋土器 4 点、土師器 1 点が出土する。また、SK-26 として取り上げているものもあり、縄文土器 13 点、石器 1 点が出土している。

SK-28 は D8 グリッドに位置する楕円形の土坑である (第 260 図)。長軸 0.63m、短軸 0.51m で、深さは 0.09m、断面は逆台形状である。覆土は暗褐色土の単一層で、覆土にはローム粒をやや多量に含む。図示していないが、縄紋土器が1点出土する。

SK-29 は D4 グリッドに位置する楕円形の土坑である (第 260 図)。形態としてはピットともいえる。長軸 0.52m、短軸 0.37m で、深さは 0.41m である。断面形は、壁がほぼ垂直に立ち上がり、底面もおおよそ平坦である。覆土は3層からなり、全体的にローム粒・ロームブロックの量は少ない。自然堆積と思われる。本遺構からの出土遺物は無い。



SK-24 土層説明

- 1 暗淡褐色土 ローム粒少量。しまり強い。
- 2 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック少量。しまり強い。
- 3 暗褐色土 ローム粒多量、ロームブロック少量。しまり強い。
- 4 暗灰褐色土 ローム粒やや少量。しまり強い。多
- 5 暗褐色土 ローム粒やや多量、ロームブロック少量。しまり強い。
- 6 明灰褐色土 ローム粒・ロームブロックやや多量。しまり強い。

SK-28 土層説明

- 1 暗褐色土 ローム粒やや多量、ロームブロックやや少量。しまりやや弱い。

SK-29 土層説明

- 1 黒褐色土 ロームブロック少量、ローム粒やや少量。しまり強い。
- 2 暗褐色土 ローム粒・ロームブロックやや少量。しまり強い。
- 3 暗灰褐色土 ローム粒やや多量、ロームブロックやや少量。しまり強い。

SK-40 土層説明

- 1 暗灰褐色土 ローム粒やや多量、ロームブロック少量。しまり強い。
- 2 暗褐色土 ローム粒・ロームブロックやや少量。しまり強い。
- 3 明褐色土 ロームブロック多量、ローム粒やや多量。しまり強い。

SK-44 土層説明

- 1 暗灰褐色土 ローム粒やや多量、ロームブロックやや少量。しまり強い。
- 2 暗褐色土 ローム粒・ロームブロックやや多量。しまり強い。

SK-45 土層説明

- 1 明褐色土 ローム粒やや多量、ロームブロックやや少量。しまりやや強い。

SK-57 土層説明

- 1 暗褐色土 ローム粒やや多量、ロームブロック少量。しまり強い。

SK-80 土層説明

- 1 黒褐色土 ローム粒・ロームブロックやや少量。しまりやや強い。

SK-81 土層説明

- 1 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック・白色粒少量。しまりやや強い。
- 2 暗褐色土 ローム粒・ロームブロックやや多量。しまりやや強い。

SK-90 土層説明

- 1 黒褐色土 ローム粒・ロームブロックやや多量、白色粒少量。しまりやや強い。

SK-91 土層説明

- 1 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少量、炭化粒微量。しまりやや強い。
- 2 暗灰褐色土 炭化粒少量、ローム粒微量。しまりやや強い。
- 3 淡褐色土 ローム粒少量、ロームブロック・炭化粒微量。しまりやや強い。

SK-206 土層説明

- 1 明灰褐色土 ローム粒・ロームブロック少量。しまりやや弱い。
- 2 明褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。しまりやや強い。

第 260 図 時期不明土坑遺構実測図 (2)

SK-40はD3グリッドに位置する不整形の土坑である(第260図)。長軸2.15m、短軸1.16mで、深さは0.35mである。土坑中心部が窪み、壁面はやや急に立ち上がる。覆土は3層に分層でき、1層はローム粒をやや多量に、3層はロームブロックをやや多量に含む。自然堆積と考えられる。図示していないが、縄紋土器が15点出土する。

SK-44はD3グリッドに位置する楕円形の土坑である(第260図)。長軸1.0m、短軸0.71mで、深さは0.12m

である。断面は逆台形状を呈し、土坑底面にはやや凹凸がみられる。覆土は、ローム粒をやや多く含む暗灰褐色土の1層と、ローム粒・ロームブロックをやや多量に含む暗褐色土の2層が堆積する。自然堆積と考えられる。図示していないが、縄紋土器2点、石器1点が出土する。

SK-45はD3グリッドに位置する不整形の土坑である(第260図)。長軸0.32m、短軸0.29mで、深さは0.12mである。断面形は土坑底面が丸底状になる。覆土は、ローム粒をやや多量に含む、明褐色の単一層である。本遺構からの出土遺物は無い。

SK-57はE3グリッドに位置する楕円形の土坑である(第260図)。長軸0.53m、短軸0.32mで、深さは0.07mである。断面形は皿状を呈する。覆土は暗褐色土の単一層で、ローム粒をやや多量に含む。本遺構からの出土遺物は無い。

SK-80はE5グリッドに位置する円形の土坑である(第260図)。直径0.31～0.35mで、深さは0.07mである。断面は逆台形状を呈する。覆土は、黒褐色土の単一層である。本遺構からの出土遺物は無い。

SK-81はE4グリッドに位置する不整形の土坑である(第260図)。長軸0.59m、短軸0.49mで、深さは0.06mである。断面は逆台形状を呈し、底部中央付近が突出する。覆土は黒褐色土と暗灰褐色土の2層で、1層の黒褐色土には、火山灰とは判断できなかったが、白色粒が少量含まれる。自然堆積と考えられる。本遺構からの出土遺物は無い。

SK-84はD8グリッドに位置する方形の土坑である(第261図)。長軸0.62m、短軸0.28mで、深さは0.52mである。基本土層Ⅲ層を掘り込み、覆土上面にはⅡ層が覆う。壁面はやや急激に立ち上がる。覆土は、黒灰褐色土・淡灰褐色土・暗灰褐色土の3層が堆積する。すべての層はローム粒・ロームブロックが少量混じり、1層には、火山灰か判断できなかったが、白色粒が微量に含まれていた。自然堆積と考えられる。本遺構からの出土遺物は無い。

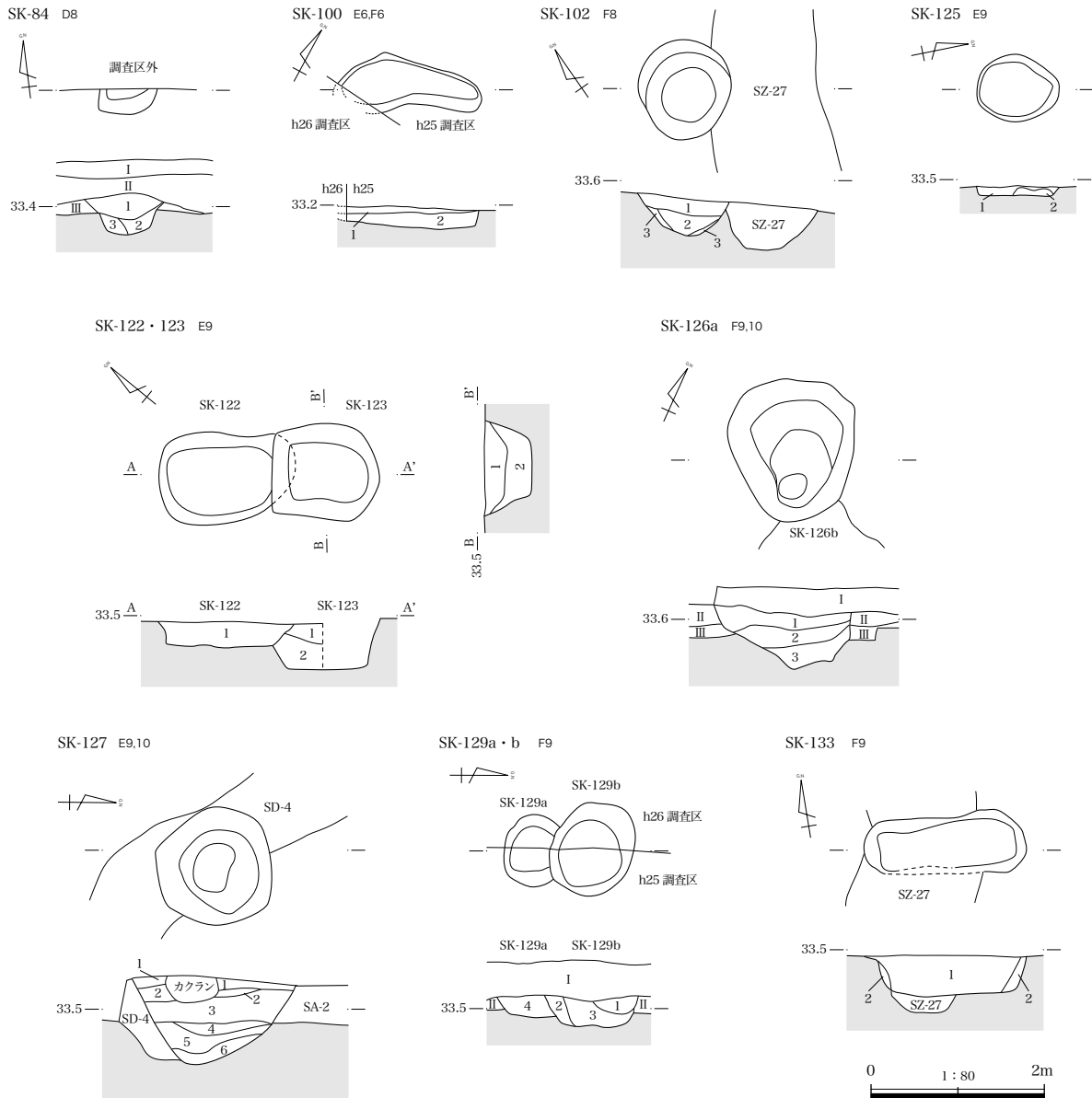
SK-90はE6グリッドに位置する楕円形の土坑である(第260図)。長軸1.09m、短軸0.75mで、深さは0.30mである。土坑の底面は丸底状を呈し、北壁は段差をつけて立ち上がる。覆土は、黒褐色土の単一層で、ローム粒・ロームブロックをやや多量に含む。図示していないが、縄紋土器が15点出土する。

SK-91はE6グリッドに位置する不整形の土坑である(第260図)。長軸0.92m、短軸0.53mで、深さは0.84mである。断面形は逆台形状である。本遺構は、SI-73覆土を掘り込んでおり、本遺構の上面を基本土層Ⅰ層が覆う。覆土は2層に分層でき、両層には炭化粒が微量に含まれる。自然堆積と考えられる。図示していないが、縄紋土器が2点、土師器が1点出土する。

SK-100はE6・F6グリッドに位置する不整形の土坑である(第261図)。長軸1.69m、短軸0.49mで、深さは0.29mである。断面形は逆台形を呈し、北東方向へ緩やかに傾斜が付く。覆土は、暗灰褐色土の1層と黒褐色土の2層が堆積し、両層ともに白色粒をやや少量含む。図示していないが、縄紋土器が16点出土する。

SK-102はF8グリッドに位置する円形の土坑である(第261図)。直径1.06～1.18mで、深さは0.44mである。土坑底面は丸底を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は3層が堆積し、1層・2層には白色粒が微量に含まれている。但し、この白色粒が火山灰かは判断できない。自然堆積と考えられる。図示していないが、縄紋土器が1点出土する。

SK-122はE9グリッドに位置する不整形の土坑である(第261図)。長軸1.57m、短軸1.02mで、深さは0.30mである。断面形は逆台形を呈する。覆土は、暗褐色土の単一層で、火山灰かは不明だが、白色粒を少量含む。SK-123と重複しており、第261図SK-122・123のセクション図で、SK-123を掘り込む状況が観察されている。本遺構から出土した遺物のうち1点を図示する。第263図4は、陶器の碗類と思われる。



SK-84 土層説明

- I 淡褐色土 ローム粒・ロームブロック・白色粒少量。しまり強い。(表土)
- II 淡灰褐色土 ローム粒・ロームブロック少量、白色粒やや少量。しまり強い。(旧表土)
- III 暗褐色土 ローム粒少量。しまりやや強い。
- 1 黒灰褐色土 ローム粒やや多量、ロームブロック少量、炭化粒微量。しまりやや強い。
- 2 淡灰褐色土 ロームブロック少量、ローム粒やや少量。しまりやや強い。
- 3 暗灰褐色土 ローム粒やや少量。しまりやや強い。

SK-100 土層説明

- 1 暗灰褐色土 ロームブロック少量、ローム粒・白色粒やや少量。しまりやや強い。
- 2 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック少量、白色粒やや少量。しまりやや強い。

SK-102 土層説明

- 1 暗灰褐色土 ローム粒やや少量、白色粒微量。しまりやや弱い。
- 2 灰褐色土 ローム粒やや多量、白色粒微量。しまりやや弱い。(黒色土ブロックを多く含む)
- 3 暗灰褐色土 ローム粒少量、ロームブロックやや少量。しまりやや強い。

SK-122 土層説明

- 1 暗褐色土 ローム粒・ロームブロックやや多量、白色細粒少量。しまりやや強い。

SK-123 土層説明

- 1 暗褐色土 ローム粒・白色細粒微量。しまりやや弱い。
- 2 暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒微量。しまり強い。

SK-125 土層説明

- 1 暗灰褐色土 炭化粒少量。しまりやや強い。
- 2 暗黄褐色土 炭化粒微量。しまり強い。

SK-126a 土層説明

- 1 淡褐色土 ローム粒やや多量、ロームブロックやや少量、白色粒微量。しまりやや強い。
- 2 黒褐色土 白色粒やや多量、ローム粒・ロームブロックやや少量。しまりやや強い。
- 3 暗褐色土 ロームブロック・白色粒少量、ローム粒やや少量。しまりやや強い。
- 4 淡灰褐色土 ローム粒やや多量、ロームブロック少量、白色粒微量。しまりやや強い。
- 5 暗灰褐色土 ローム粒やや多量、ロームブロックやや少量、白色粒微量。しまりやや強い。
- 6 黒褐色土 ローム粒多量、ロームブロックやや多量、白色粒少量。しまりやや強い。

第261図 時期不明土坑遺構実測図(3)

全面に釉がかかり、やや強めの光沢を放つ。立ち上がりやや緩く、丸みをもっている。また、図示していないが、縄紋土器が8点出土する。

SK-123はE9グリッドに位置する不整形の土坑である(第261図)。SK-122と重複している。長軸は推定で1.36m、短軸1.09mで、深さは0.54mである。断面形は逆台形である。覆土は1・2層ともに暗褐色土である。1層はローム粒と白色粒を微量に含み、2層はローム粒を微量、ロームブロックを少量含む。但し、1層の白色粒が火山灰かは不明である。自然堆積と考えられる。図示していないが、縄紋土器が11点出土する。

SK-125はE9グリッドに位置する楕円形の土坑である(第261図)。長軸0.93m、短軸0.76mで、深さは0.11mである。断面形は逆台形状である。覆土は、暗灰褐色土の1層と暗黄褐色土の2層が堆積し、両層には炭化粒が含まれる。自然堆積と考えられる。図示していないが、縄紋土器が6点出土する。

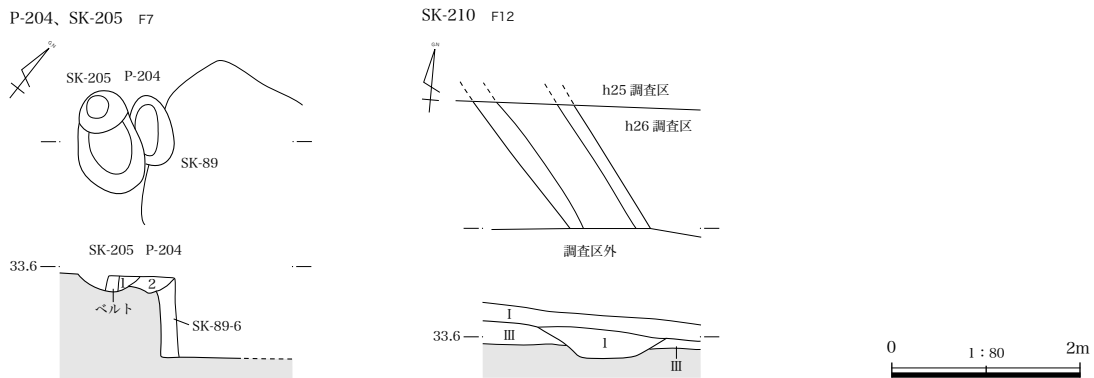
SK-126aはF9・F10グリッドに位置する楕円形の土坑である(第261図)。長軸1.62m、短軸1.37mで、深さは0.62mである。北壁はほぼ垂直に立ち上がり、南壁は緩やかに立ち上がる。覆土は、淡灰褐色土の1層、暗灰褐色土の2層、黒褐色土の3層が堆積する。すべての層にローム粒が多く含まれており、また、火山灰かは不明だが、白色粒もすべての層に含まれる。SK-126bと重複しているが、直接的な土層断面による観察はなし得ていないため、前後関係は不明である。SK-126aからは1点を図示する。第263図5は陶器の小皿である。口縁整形で、底部には回転糸切り離し痕が明瞭に残る。ほぼ全面に黄褐色の付着物がみられる。また、図示していないが、縄紋土器が28点出土する。本遺構は、Ⅱ層を掘り込むことと、第263図5の出土は整合的で、この時期の遺構となる可能性もあろう。

SK-127はE9・E10グリッドに位置する円形の土坑である(第261図)。直径1.34～1.37mで、深さは1.04mである。土坑底面は丸底で、壁面は緩やかに立ち上がる。覆土は1～6層に分層でき、すべての層に火山灰かは判断できなかったが、白色粒がみられた。自然堆積と考えられる。本遺構は、SA-2盛土およびSD-4覆土を切っており、近世以降となる可能性が高い。図示していないが、縄紋土器29点、土師器3点が出土する。

SK-129aおよびSK-129bはF9グリッドに位置する(第261図)。両者とも円形の土坑で、基本土層Ⅱ層を掘り込む。SK-129aの直径は0.70～0.81mで、土層断面で確認できた深さは0.25mである。断面形は逆台形状である。覆土は、黒褐色土の単一層である。覆土中には火山灰かは判断できなかったが、白色粒を含む。SK-129bは直径0.93～1.11mで、土層断面から確認できた深さは0.32mである。断面形は逆台形状を呈する。覆土は、3層に分層でき、3層とも白色粒を含む。白色粒が火山灰かは判断できなかった。第261図に示したSK-129a・bセクションから、SK-129bがSK-129aを切る様子が確認できたため、新旧関係はSK-129a→SK-129bとなる。

出土遺物は、SK-129aからは3点図示する。第263図2は内耳土器の口縁部。外面にススが微量に付着し、胎土に金雲母を多量に含む。6は不明土製品である。内外面はナデ整形を行い、外面は被熱のためか発泡している。第264図1は不明鉄製品。木質部内に、芯が抜けた鉄製品が残る。木製品等に打ち込まれた釘の可能性もある。SK-129bからは1点図示する。第263図3は内耳土器の体部片で、体部外面にススが付着し、胎土には金雲母を含む。また、図示していないが、S-129注記で縄紋土器が2点、SK-129bからは縄紋土器が2点出土する。両遺構から出土する内耳土器片が遺構の時期を示すとすれば、中世の遺構となる可能性が高い。

SK-133はE9グリッドに位置する不整形の土坑である(第261図)。長軸1.84m、短軸0.65mで、深さは0.48mである。断面形は逆台形状で、壁面はやや急に立ち上がる。覆土は、黒褐色土の1層、暗褐色土の2層が堆積する。自然堆積と考えられる。図示していないが、縄紋土器が7点、石器が1点出土する。



SK-127 土層説明

- 1 明灰褐色土 ローム粒多量、ロームブロックやや多量、白色粒やや少量。しまりやや強い。(表土化している)
- 2 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック・白色粒やや多量。しまりやや強い。
- 3 淡灰褐色土 ロームブロック・白色粒少量、ローム粒やや少量。しまりやや強い。
- 4 暗灰褐色土 ローム粒多量、ロームブロック少量、白色粒微量。しまりやや弱い。
- 5 暗褐色土 ローム粒多量、ロームブロックやや多量、白色粒微量。しまりやや弱い。
- 6 黒褐色土 ロームブロック多量、ローム粒・白色粒やや多量。しまりやや強い。

SK-129a・b 土層説明

- I 暗褐色土 白色粒やや多量、ローム粒微量。しまりやや強い。(表土)
- II 暗灰褐色土 ロームブロック少量、白色粒微量。しまりやや強い。(旧表土)

- 1 淡灰褐色土 ローム粒やや多量、ロームブロック・白色粒少量。しまりやや強い。
- 2 暗茶褐色土 ローム粒・ロームブロック・白色粒少量。しまりやや強い。
- 3 黄褐色土 ロームブロック多量、ローム粒少量、白色粒微量。しまり強い。
- 4 黒褐色土 ローム粒・ロームブロックやや多量、白色粒微量。しまり強い。

SK-133 土層説明

- 1 黒褐色土 ローム粒少量、白色粒微量。しまりやや強い。
- 2 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量、白色粒微量。しまりやや強い。

P-204、SK-205 土層説明

- 1 灰褐色土 ローム粒少量。しまりやや強い。
- 2 暗灰褐色土 ローム粒やや多量、白色粒微量。しまり弱い。

SK-210 土層説明

- 1 黒褐色土 ローム粒やや多量、ロームブロック少量。しまりやや強い。

第 262 図 時期不明土坑遺構実測図 (4)

SK-205 は F7 グリッドに位置する不整楕円形の土坑である (第 262 図)。長軸 1.12m、短軸 0.72m で、深さは 0.22m である。断面形は皿状である。覆土は灰褐色土の単一層である。P-204 と重複しており、土層断面の観察から、SK-205 が P-204 を掘り込むことが判明している。本遺構からの出土遺物は無い。

SK-206 は F6 グリッドに位置する不整楕円形の土坑である (第 260 図)。長軸 1.83m、短軸 1.12m で、深さは 0.23m である。断面形は逆台形を呈する。覆土は明灰褐色土の 1 層、明褐色土の 2 層からなり、2 層覆土はローム粒・ロームブロックが多量に含まれる。図示していないが、縄紋土器が 17 点出土する。

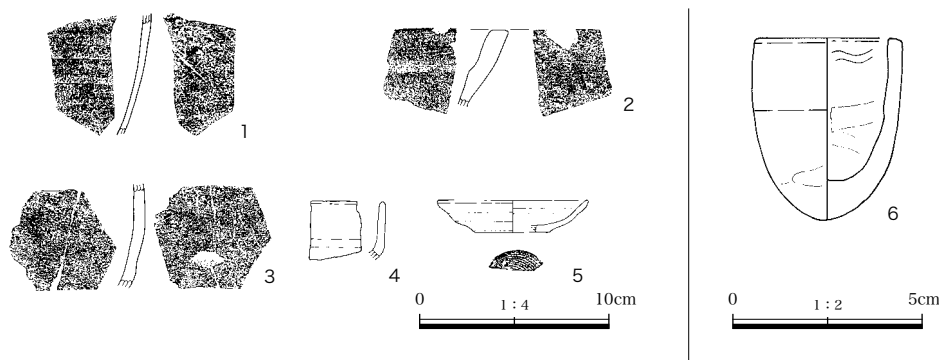
SK-208 は F7 グリッドに位置する不整楕円形の土坑である (第 267 図)。長軸 0.87m、短軸 0.62m で、深さは 0.22m である。土坑底面は丸底で、壁面は緩やかに立ち上がる。覆土は黒褐色土の 1 層と、暗灰褐色土の 2 層が堆積する。1 層には焼土粒・焼土ブロックが多量に含まれており、ロームブロックもやや多量に含まれる。2 層にも焼土粒・焼土ブロックが含まれるが 1 層よりは少ない。図示していないが、縄紋土器が 2 点出土する。

SK-210 は F12 グリッドに位置する不整形の土坑である (第 262 図)。溝となる可能性もあるが、平成 25 年度の調査区では確認できていない。長軸 1.64m、短軸 0.82m で、深さは 0.32m である。断面形は逆台形である。覆土は黒褐色土の単一層で、ローム粒をやや多量に含む。図示していないが、縄紋土器が 6 点出土する。

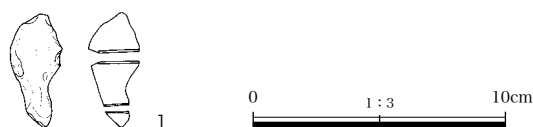
SK-211 は E5 グリッドに位置する円形の土坑である (第 260 図)。土坑のまま扱うが、浅いピットとすべき形態である。長軸 0.31m、短軸 0.28m で、深さは 0.11m である。断面形は逆台形である。覆土は記録作成前に掘り上げてしまったため、堆積状況は不明である。本遺構からの出土遺物は無い。

SK-215 は F7 グリッドに位置する、ほぼ隅丸正方形を呈する土坑である (第 267 図)。一辺が 0.81 ~ 0.88m

で、深さは 0.31m である。断面形は逆台形である。覆土は 3 層からなり、1 層には炭化粒が少量、火山灰かは不明だが、白色粒が微量に含まれる。3 層にはローム粒が多量に、ロームブロックがやや多量に含まれている。P-217 と重複しており、土層断面の観察から、本遺構が P-217 より古い関係が確認できた。本遺構からの出土遺物は無い。



第 263 図 時期不明土坑遺物実測図



第 264 図 時期不明土坑金属製品実測図

第 63 表 時期不明土坑遺物観察表

掲載番号	種類 器種	計測値 (cm)	色調 (内・外)	胎土	焼成	残存率	技法 (内・外)	特徴・備考	出土位置
1	須恵器?	口径： 底径： 器高：(6.3)	内：2.5Y4/1 灰黄 外：2.5Y3/1 黒褐	緻密、透明粒・白色粒微量	硬質	体部破片	内：ロクロナデ 外：ナデ	外面スス附着。	SK-26 No.1
2	内耳土器	口径： 底径： 器高：(4.5)	内：7.5YR4/6 褐 外：7.5YR2/1 黒	やや粗雑、黒色ガラス質粒微量、金色雲母多量、少礫	硬質	口縁部破片	内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部ナデ	内面口縁部深くナデ。外面スス附着。	SK-129b
3	内耳土器	口径： 底径： 器高：(5.5)	内：7.5YR4/6 褐 外：7.5YR3/2 黒褐	やや粗雑、黒色ガラス質粒微量、金色雲母多量、少礫	硬質	体部破片	内：ナデ 外：ナデ	外面凹凸の残る荒いナデ。外面スス附着。	SK-129a
4	陶器 碗	口径： 底径： 器高：(3.1)	素地：7.5Y8/2 灰白 釉：7.5Y7/3 浅黄	緻密、黒色粒極微量	硬質	口縁から体部破片	ロクロ整形	内外面無地。瀬戸?	SK-122
5	陶器 小皿	口径：(8.0) 底径：(4.0) 器高：1.7	素地：5YR5/3 にぶい赤褐 釉：5YR2/1 黒褐	緻密、黒色粒・白色粒微量	硬質	口縁から底部 1/3	ロクロ整形	内外側スス附着・黄褐色の附着物あり。	S-126a T15
6	不明土製品	口径：(3.9) 底径：器高： (4.9)	内：5Y6/1 灰 外：5Y5/2 灰オリーブ	やや緻密、白色粒多量	硬質	口縁部 1/2 弱 体部 2/3 底部完存	内：ナデ 外：ナデ	外面被熱、一部発泡。鉄滓状遺物附着。	SK-129a

第 64 表 時期不明土坑金属製品観察表

掲載番号	種類	鍛冶関連遺物 構成表No.	出土位置
1	鉄製品 (釘)	78	SK-129a

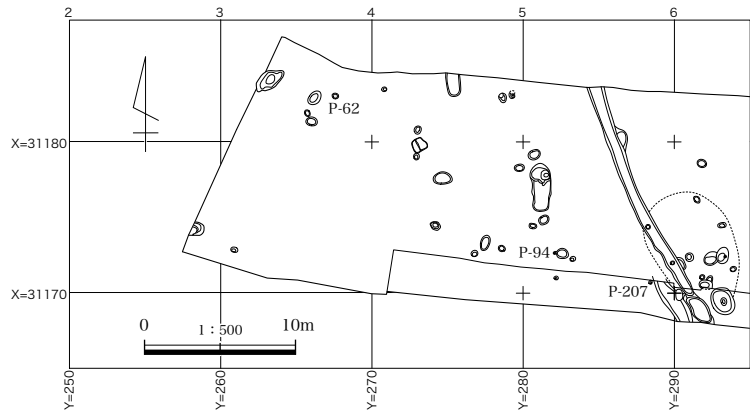
ピット

今回の調査において、時期判別が難しいピット状遺構は 37 基である。これらのうち、4カ所でまとまってピットを検出している箇所がある。ここでは、最初に単独の各ピットの記述を行い、集中する箇所についてはピット群として扱い記述する。

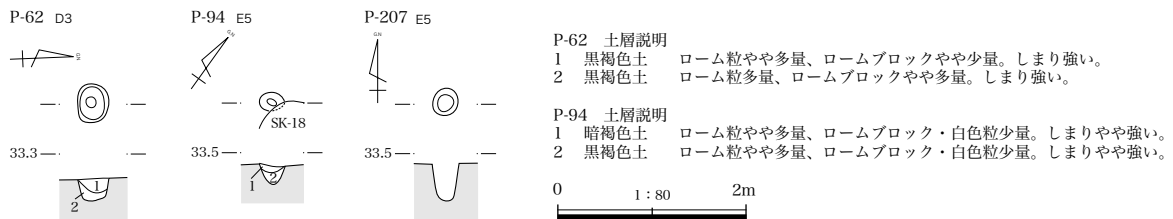
P-62 は D3 グリッドに位置する、平面楕円形のピットである（第 265 図）。規模は、長軸 0.38m、短軸 0.33m で、深さは 0.23m である。形態は、底面にやや丸みを帯びる円柱状を呈する。覆土は 2 層からなり、2 層はローム粒・ロームブロックを多く含む。本遺構からの出土遺物は無い。

P-94 は E5 グリッドに位置する、円形のピットである（第 265 図）。規模は直径 0.20 ～ 0.25m で、深さは 0.20m である。形態は、底面にやや丸みを帯びる円柱状を呈する。覆土は 2 層からなり、両層はローム粒を

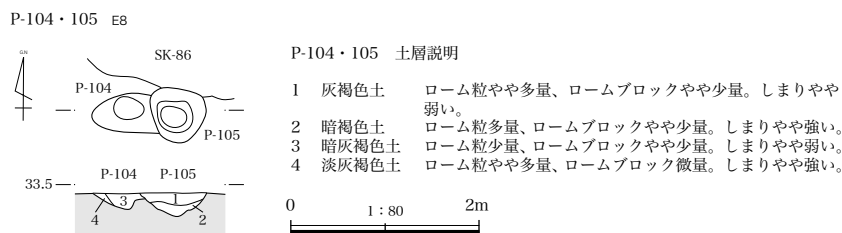
部分図



P-62・94・207



第 265 図 時期不明ピット遺構実測図 (1)



第 266 図 時期不明ピット遺構実測図 (2)

やや多く含む。また、火山灰かは判断できなかつたが、覆土には白色粒が含まれている。SK-18と重複をするが、直接的な土層観察をなし得ていないので、新旧関係は不明である。本遺構からの出土遺物は無い。

P-104・105はE8グリッドに位置する(第266図)。P-104は平面楕円形のピットである。規模は、長軸0.52m、短軸0.36mで、深さは0.17mである。形態は、西側は緩やかに立ち上がるが、東側に段がつく歪な形状である。覆土は2層からなり、P-104・105セクションの3・4層に相当する。4層はローム粒をやや多く含む。P-105は円形のピットである(第266図)。規模は、直径0.57m、深さは0.26mである。断面形は、壁面がやや急に立ち上がる形状を呈する。覆土は2層からなり、P-104・105セクションの1・2層に相当する。両層はローム粒をやや多く含む。P-104およびP-105は重複しており、P-104・105セクションでの土層観察によってP-105がP-104を切る状況が確認された。出土遺物は、P-104からは図示していないが、縄紋土器14点、石器2点、土師器1点が出土している。P-105からの出土遺物は無い。

P-128aはE9グリッドに位置する(第268図)。重複するP-128b～eについては、縄紋時代のピットとして第44図に掲載する。平面形は、中世の土坑であるSK-114や、中世の地下式坑であるSK-115等との重複によって判断が出来ない状態であった。楕円形となる可能性が考えられる。P-128aは残存する規模が、長軸1.08m、短軸0.45mで、深さは0.17mである。断面形は逆台形である。覆土は暗灰褐色土の単一層で、ローム粒や白色粒をやや多量に含み、また、炭化粒も微量ながら含まれる。この層に含まれる白色粒は、火山灰かは判断はつかなかつた。第268図に示したA-A'セクション図では、SK-114・115、P-128bとの切り合いが認められ、P-128b→P-128a→SK-114→SK-115となることがわかる。第268図B-B'セクションからP-128d→P-128c→P-128a→SK-114が示される。図示していないが、P-128として縄紋土器が3点出土している。

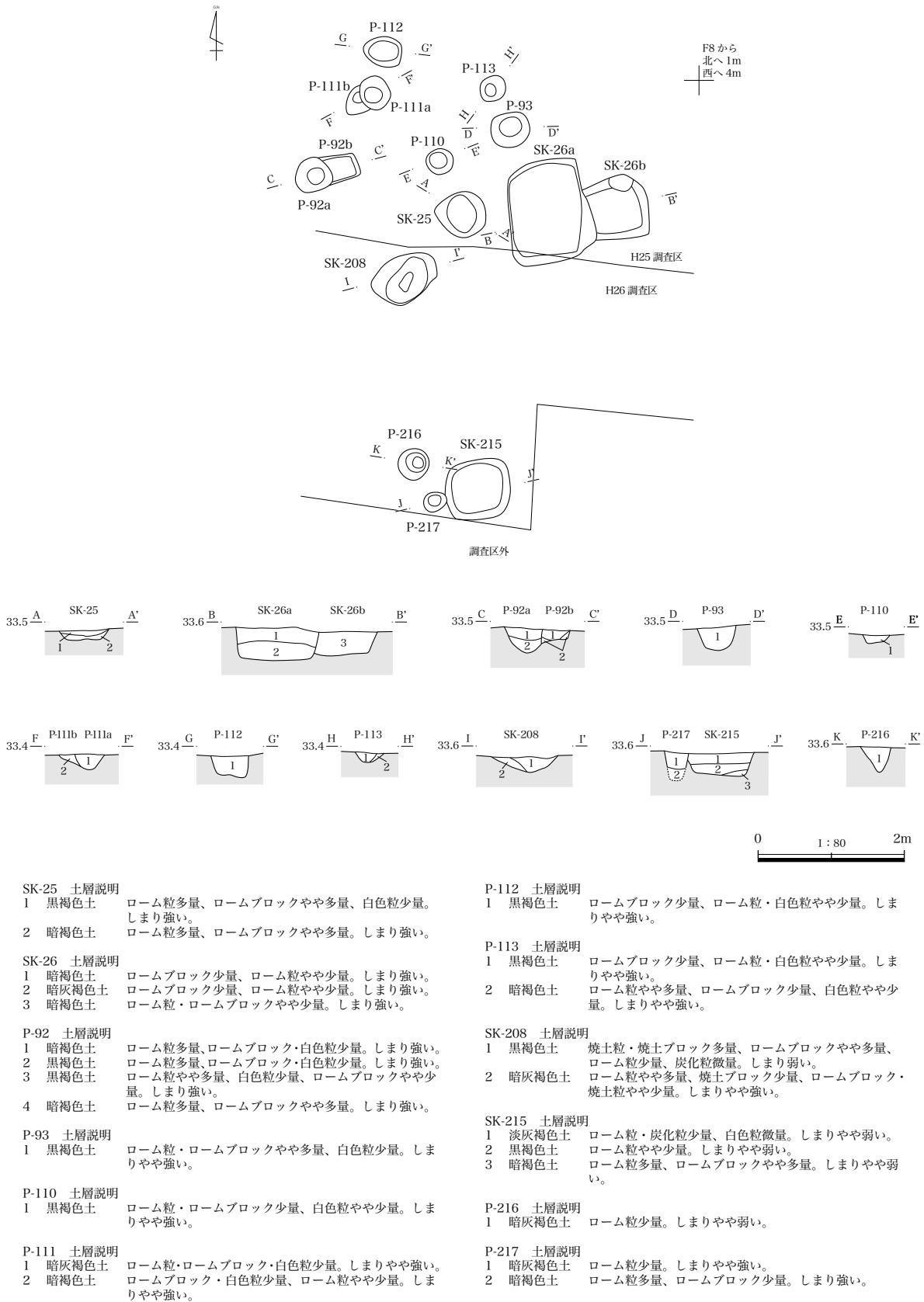
P-132はF9グリッドに位置する、円形のピットである(第268図)。規模は直径0.43～0.44mで、深さは0.21mである。断面形は逆台形を呈する。覆土は2層からなり、2層の黒褐色土はロームブロックを多量に含む。また、火山灰かは判断できなかつたが、1層および2層の覆土には白色粒が含まれている。本遺構からの出土遺物は無い。

P-204はF7グリッドに位置する楕円形のピットである(第262図)。規模は長軸0.76m、短軸0.36mで、深さは0.16mである。断面形は、壁が緩やかに立ち上がり、底部は中心部が窪むやや歪な形状を呈する。覆土はローム粒をやや多量に含む暗灰褐色土の単一層である。また、覆土には火山灰かは判断できなかつたが、白色粒が微量に含まれる状況が確認できた。中世の土坑であるSK-89・205と重複しており、土層断面の観察から、本遺構がSK-89を切り、SK-205が本遺構を切ることが判明している。よって、新旧関係はSK-89→SK-204→SK-205となる。本遺構からの出土遺物は無い。

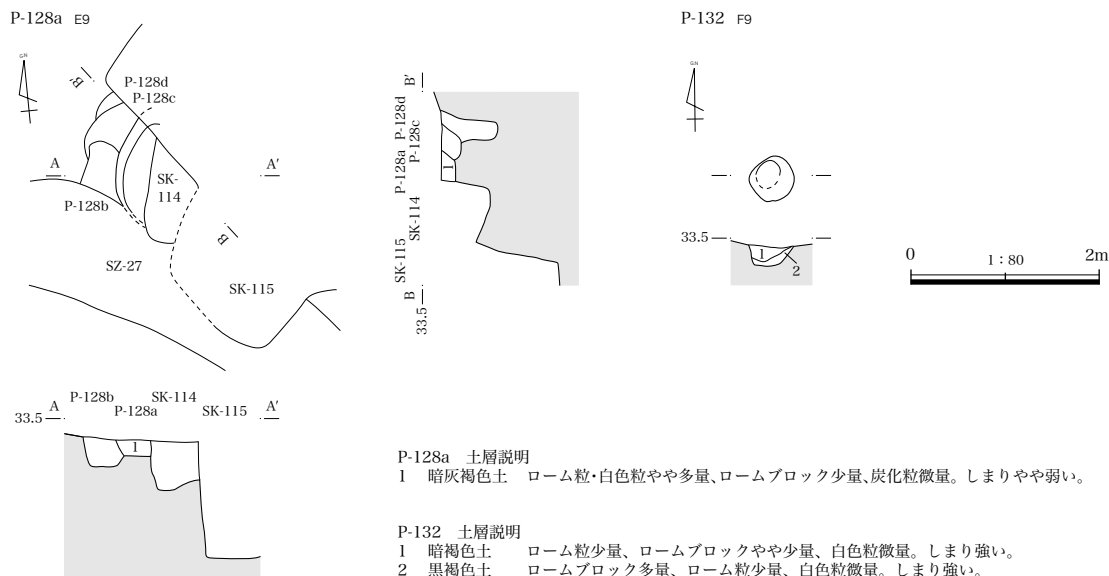
P-207はE8グリッドに位置する円形のピットである(第260図)。規模は直径0.26～0.28mで、深さは0.39mである。断面形は壁がやや垂直に立ち上がり、底面は丸底状を呈する。覆土は不明である。本遺構からの出土遺物は無い。

P-216はF7グリッドに位置する、円形のピットである(第267図)。規模は直径0.41～0.44mで、深さは0.34mである。形状は円錐状を呈する。覆土は暗灰褐色土の単一層である。本遺構からは、図示していないが陶磁器が1点出土している。

P-217はF7グリッドに位置する、楕円形のピットである(第267図)。規模は長軸0.32m、短軸0.26mで、深さは0.37mである。形状は円柱状を呈する。覆土は2層からなり、2層の暗褐色土はローム粒を多量に含む。北側でSK-215と重複しており、土層断面の観察から、P-217の方がSK-215より新しい遺構であると判断できる。本遺構からの出土遺物は無い。



第 267 図 時期不明ピット遺構実測図 (3)



第 268 図 時期不明ピット遺構実測図 (4)

ピット群

S-107 ピット群 (第 269 図、第 67 表、図版五一・五二)

E8 グリッドで 6 基が集中して検出された。台地の平坦面に位置しており、北東には縄紋時代の SI-85 が位置している。

ピットの平面形はいずれも円形である。すべて小形のピットであり、最小径は 0.21m、最大径は 0.36m。深さは浅いもので 0.11m、最も深いもので 0.42m である。P2・3 の壁はやや急な傾斜の立ち上がりで、底面は平坦である。P1 は円錐状を呈する。P4 は円柱状を呈するが、底面は北東方向に傾斜する。P5 はやや緩やかな逆台形を呈し、底面は平坦である。P6 は断面形が漏斗状を呈する。遺物は出土しなかった。

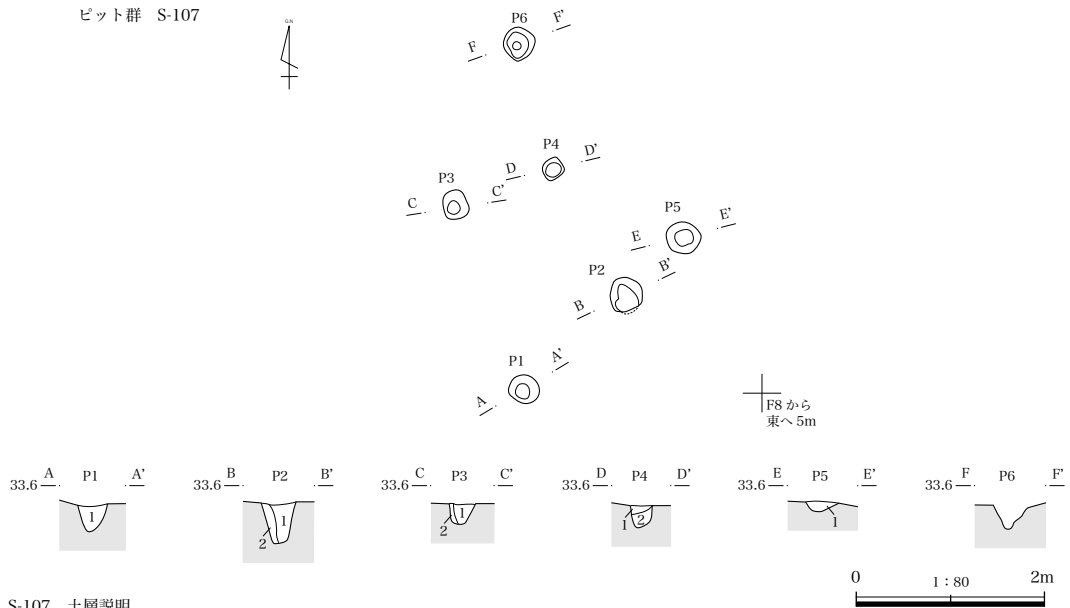
このピット群については、いくつかの建物跡もしくは柵列跡であった可能性が残る。P2・4・6 が南北に並びようにもみえ、あるいは P1・2・5 も北東～南西で並んでいる点は注意されよう。

S-124 ピット群 (第 270 図、第 67 表、図版五二・五三)

E9 グリッドで 7 基のピットが集中して検出された。台地平坦面に位置しており、S-124P1 と SK-114、SK-115 と S-124P3・S-124P4 が重複する。S-124 ピット群は、SA-2 盛土除去後の精査で確認された。

ピットの平面形はいずれも概ね円形である。最小径は 0.25m、最大径は 0.54m で、殆どのピットは小形のピットだが、中にはやや中規模のピットも見受けられる。深さは浅いもので 0.13m、最も深いもので 0.30m である。断面形態は、S-124P2・S-124P4・S-124P5～S-124P7 が逆台形状を呈し、S-124P3 は円柱状、S-124P1 は底面丸底のピットである。遺物は出土しなかった。

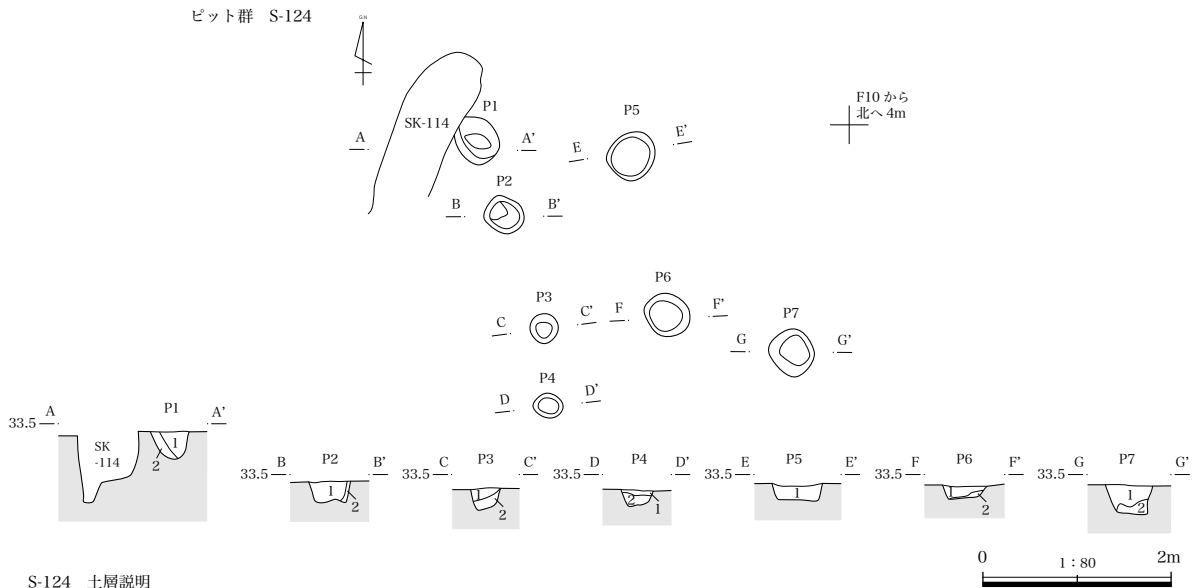
このピット群は、建物跡または柵列跡であった可能性を残す。P1～3 が南北に並び、あるいは P5・6 も概ね同じ方向で並びようにもみえる。但し、1 間 × 1 間の建物跡を復元するには、ピット間の距離や方向が不定で、整った形とはならず、建物跡となる可能性は低いと考えられる。



S-107 土層説明

- | | | | |
|---------|-------------------------|---------|--------------------------|
| P1 | | 2 暗灰褐色土 | ローム粒・ロームブロック微量。しまりやや弱い。 |
| 1 暗灰褐色土 | ローム粒微量。しまりやや弱い。 | | |
| P2 | | 1 暗褐色土 | ロームブロック多量。しまりやや強い。 |
| 1 暗灰褐色土 | ローム粒微量。しまりやや弱い。 | 2 暗褐色土 | 黒色土少量、ロームブロック微量。しまりやや弱い。 |
| 2 暗褐色土 | ロームブロック少量、ローム粒微量。しまり弱い。 | | |
| P3 | | P5 | |
| 1 暗灰褐色土 | ローム粒微量。しまりやや強い。 | 1 黒褐色土 | ロームブロック少量。しまりやや強い。 |

第 269 図 S-107 遺構実測図



S-124 土層説明

- | | | | |
|---------|-------------------------------------|---------|-----------------------------------|
| P1 | | P4 | |
| 1 黒褐色土 | ロームブロック・白色粒少量、ローム粒やや少量。しまり強い。 | 1 暗灰褐色土 | ローム粒・白色粒やや少量。しまり強い。 |
| 2 黒褐色土 | ローム粒・ロームブロックやや多量、白色粒少量。しまり強い。 | 2 暗褐色土 | ローム粒やや多量、白色粒やや少量。しまり強い。 |
| P2 | | P5 | |
| 1 黒褐色土 | ローム粒やや多量、ロームブロック・白色粒やや少量。しまりやや強い。 | 1 暗褐色土 | ローム粒・ロームブロックやや多量、白色粒やや少量。しまりやや強い。 |
| 2 暗褐色土 | ローム粒やや多量、ロームブロック少量、白色粒やや少量。しまりやや強い。 | P6 | |
| P3 | | 1 暗灰褐色土 | ローム粒やや多量、ロームブロック・白色粒少量。しまり強い。 |
| 1 黒灰褐色土 | ローム粒少量、白色粒やや少量。しまりやや強い。 | 2 暗褐色土 | ロームブロック・白色粒少量、ローム粒やや少量。しまり強い。 |
| 2 暗灰褐色土 | ローム粒少量、白色粒やや少量。しまりやや強い。 | P7 | |
| | | 1 黒褐色土 | ローム粒やや多量、ロームブロック・白色粒やや少量。しまりやや強い。 |
| | | 2 暗褐色土 | ローム粒やや多量、ロームブロック・白色粒少量。しまりやや強い。 |

第 270 図 S-124 遺構実測図

S-131 ピット群（第 271・272 図、第 65・67 表）

F9 グリッドで 5 基のピットが集中して検出された。台地の平坦面に位置しており、中世の地下式坑である SK-87 が近接し、SK-87 と S-131P5 が重複する。S-131 ピット群は、SA-2 盛土除去後の精査で確認された。

ピットの平面形は円形、楕円形、不整形のものがある。それぞれの平面形態ごとに記述していく。円形のピットは P1・3・4 が該当する。最小径は 0.26m、最大径は 0.43m の小形のピットである。深さは浅いもので 0.16m、最も深いもので 0.41m である。断面形態は、P1 が円錐状、P3 は底面が丸底状の円柱状を呈し、P4 はやや円錐状となるピットである。

不整形のピットは P2 が該当する。長軸 0.56m、短軸 0.25m で、深さが 0.28m である。断面での観察では、東側の壁がほぼ垂直に立ち上がり、西側の壁は緩やかに立ち上がる様相がみられ、歪である。

P5 は、SK-87 と P1 と重複する。土層断面での観察はなし得なかったが、SK-87 および P1 が先に調査されたことから、両者より古い遺構である可能性も考えられる。残存する規模は、長軸 0.40m、短軸 0.44m で、深さ 0.44m である。断面の形状は逆台形を呈し、底面は平坦である。

出土遺物は、P5 の覆土中から砥石が 1 点出土している。石材は流紋岩を使用する。

これらのピット群は北東方向に面して緩やかな弧状に巡るように見え、柵列跡等の可能性を残す。

E7・F7 グリッド地点ピット群（第 267・272 図、第 65・67 表）

E7・F7 グリッドには南北 4.0m×東西 3.2m の範囲内に 8 基のピットが集中してみられる。台地の平坦面に位置しており、周囲には時期不明の土坑である SK-25・26a・26b・215 が、時期不明のピットである P-216・217 が位置する。また、北側・西側・北東側には中世の地下式坑が分布する。調査時に個別に付した番号を踏襲し、P-92a・92b・93・110・111a・111b・112・113 と呼称する。

これらピットについては、平面形態で分類して説明する。円形のピットは 6 基あり、P-92a・93・110・111a・111b・113 が該当する。最小径は 0.31m、最大径は 0.52m である。深さは、浅いもので 0.11m、最も深いもので 0.34m である。断面形態でみると、逆台形のピットは P-110・111a・113、底面丸底で壁がやや急に立ち上がるものは P-92a・93 が該当する。P-111b は底面が北東方向へ傾斜をする。

平面が方形状を呈する土坑は P-92b が該当する。西側を P-92a によって壊されており、全体は不明である。残存する規模は長軸 0.37m、短軸 0.35m で、深さは 0.18m である。断面形態は逆台形を呈する。

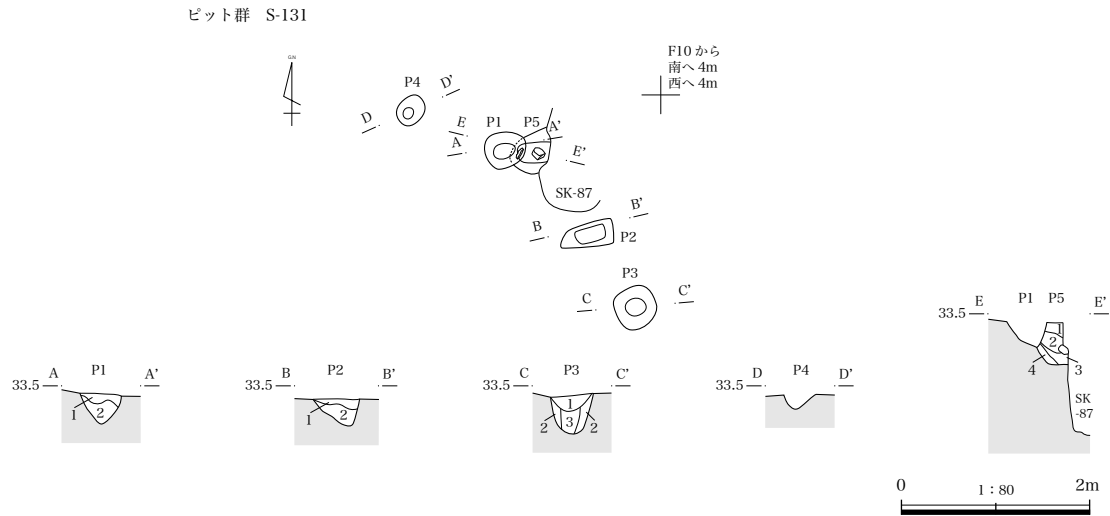
平面楕円形を呈する土坑は、P-112 が該当する。規模は、長軸 0.52m、短軸 0.40m で、深さは 0.29m である。

断面形態は、壁がほぼ垂直に立ち上がり、底面は中央部がやや高くなる形状である。

ピットの配置を観察すると、建物跡や柵列跡には復元できなかったが、組み合わせによって、建物跡または柵列跡であった可能性を残す。P-92a・111a・112 の 3 基が北東～南西軸で並び、概ね平行して P-93、SK-25・208 の 3 基や、P-110・113 の 2 基が並ぶようにみえる。

P-92a・111a・112 の 3 基は、覆土に黒褐色土が主体的に含まれている点や、形や平面規模が概ね類似している点は注意すべきであろう。P-93、SK-25・208 も、主体的な覆土は黒褐色土と共通するが、平面規模や断面の様子等、少々異なる点もみられる。P-110・113 の覆土は黒褐色土が主体的であり、平面形態および断面形態もかなり近似する。以上の検討から、1 間×2 間の建物跡等の復元が可能であろう。

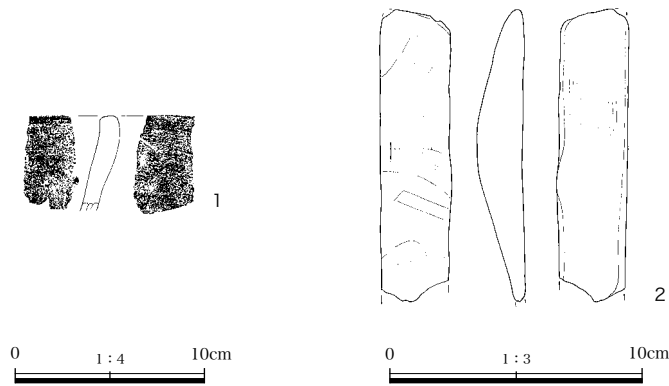
出土遺物について記載する。P-92a・92b・93 からは、図示してはいないが、縄紋土器が 2 点出土する。P-110・111a・111b・112 からの出土遺物は無い。P-113 からは、第 272 図 1 の口縁部から体部にかけての内耳土器の破片が 1 点出土する。外面にススが微量に付着する。胎土に金雲母を多量に含む。



S-131 土層説明

- | | | | |
|----|-------|-----------------------------------|--|
| P1 | | | |
| 1 | 黒褐色土 | ローム粒やや多量、白色粒微量。しまり強い。 | |
| 2 | 黄褐色土 | ロームブロック多量、白色粒微量。しまり強い。(ローム) | |
| P2 | | | |
| 1 | 黒褐色土 | ローム粒やや多量、ロームブロック少量、白色粒微量。しまりやや強い。 | |
| 2 | 黄褐色土 | ロームブロック多量、白色粒微量。しまり強い。(ローム) | |
| P3 | | | |
| 1 | 黒褐色土 | ローム粒やや多量、白色粒微量。しまりやや強い。 | |
| 2 | 黄褐色土 | ロームブロック多量、白色粒微量。しまり強い。 | |
| P4 | | | |
| 3 | 明茶褐色土 | ロームブロックやや多量、ローム粒少量、白色粒微量。しまりやや強い。 | |
| P5 | | | |
| 1 | 淡灰褐色土 | 白色粒少量、ローム粒微量。しまり強い。 | |
| 2 | 暗灰褐色土 | 白色粒少量、ローム粒・炭化粒微量。しまり強い。 | |
| 3 | 暗灰褐色土 | ローム粒やや多量、ロームブロック・白色粒・炭化粒微量。しまり強い。 | |
| 4 | 黒褐色土 | ローム粒少量、ロームブロック・白色粒・炭化粒微量。しまり強い。 | |

第 271 図 S-131 遺構実測図



第 272 図 時期不明ピット遺物実測図

第 65 表 時期不明ピット遺物観察表

掲載番号	種類 器種	計測値 (cm)	色調 (内・外)	胎土 (石材)	焼成	残存率	技法 (内・外)	特徴・備考	出土位置
1	内耳土器	口径： 底径： 器高：(4.9)	内：5YR5/6 明赤褐 外：5YR4/6 赤褐	やや粗雑、黒色ガラス質粒微量、金色雲母多量、少礫やや多量	硬質	口縁部破片	内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部ナデ	胴部外面および内面にスス付着。常陸産。	P-113
2	砥石	最大長：11.6 最大幅：2.8 最大厚：1.7		流紋岩				片面のみよく砥面として使われており、平滑になっている。切り出しの痕跡明瞭。重量：79.6g	S-131 P5

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物

第 66 表 時期不明土坑計測表

遺構No	調査 グリッド	規模 (m)			形状	長軸方向	出土遺物
		長軸	短軸	深さ			
SK-11	D4	0.48	0.44	0.15	円形		石器 1、加 E1、堀 1、無 2、条 1
SK-13	E4	0.63	0.56	0.17	不整円形	N-56° -W	加 E1、無 1
SK-14a	D4,E4	0.58	0.54	0.30	不整方形	N-39° -W	無 1
SK-14b	D4,E4	(0.36)	0.36	0.14	不整方形	N-40° -W	
SK-15	E5	0.71	0.64	0.10	円形		土師 1、無 4、小片 3
SK-18	E5	0.82	0.66	0.06	円形		条 1
SK-19	E5	0.56	0.34	0.11	楕円形	N-78° -W	黒 1、無 1
SK-20	E5	0.71	0.61	0.06	円形		条 1、無 1
SK-21a	E5	(1.85)	1.35	0.11	不整楕円形	N-0°	無 2、小片 2
SK-21b	E5	1.33	1.22	0.41	不整円形	N-28° -W	称 1、無 2、小片 6
SK-22	E4	0.43	0.34	0.09	楕円形	N-63° -E	加 E1
SK-24	E2	0.86	(0.77)	0.85	不整方形	N-20° -E	加 E1、条 1、小片 2
SK-25	F7	0.70	0.62	0.12	不整円形	N-84° -W	称 1、小片 1、土師 1
SK-26a	F7	1.40	1.09	0.43	不整方形	N-14° -W	加 E6、称 1、堀 2、縄 6、無 12、小片 9、土師 1 [S26] 加 E2、称 3、縄 1、無 4、小片 3、石器 1
SK-26b	F7	0.85	(0.77)	0.32	不整方形	N-15° -W	無 3、条 1、土師 1
SK-28	D4	0.63	0.51	0.09	楕円形	N-37° -W	称 1
SK-29	D4	0.52	0.37	0.41	楕円形	N-2° -E	
SK-40	D3	2.15	1.16	0.35	不整形	N-48° -E	加 E1、称 1、堀 2、縄 1、無 2、小片 8
SK-44	D3	1.00	0.71	0.12	楕円形	N-37° -E	加 E1、堀 1、石器 1
SK-45	D3	0.32	0.29	0.12	不整円形	N-18° -E	
SK-57	E3	0.53	0.32	0.07	楕円形	N-60° -W	
SK-80	E5	0.35	0.31	0.07	円形		
SK-81	E4	0.59	0.49	0.06	不整方形	N-70° -E	
SK-84	D8	0.62	0.28	0.52	方形	N-81° -W	
SK-90	E6	1.09	0.75	0.30	楕円形	N-15° -E	称 5、無 2、条 1、小片 7
SK-91	E6	0.92	0.53	0.84	不整方形	N-84° -W	称 2、土師 1
SK-100	E6,F6	1.69	0.49	0.29	不整形	N-66° -E	称 4、縄 1、無 2、条 2、小片 7
SK-102	F8	1.18	1.06	0.44	円形		無 1
SK-122	E9	1.57	1.02	0.30	不整円形	N-46° -W	黒 1、堀 3、縄 1、無 1、小片 2
SK-123	E9	1.06	1.09	0.54	不整円形	N-30° -W	加 E1、縄 2、無 2、小片 6
SK-125	E9	0.93	0.76	0.11	楕円形	N-23° -E	黒 3、縄 1、小片 2
SK-126a	F9,10	1.62	1.37	0.62	楕円形	N-37° -W	黒 3、加 E6、縄 3、無 5、小片 11 [S126・S2 II層] 小片 1
SK-127	E9,10	1.37	1.34	1.04	円形		加 E2、称 7、堀 3、縄 3、無 4、小片 10、土師 3
SK-129a	F9	0.81	0.70	0.25	円形		
SK-129b	F9	1.11	0.93	0.32	円形		無 1、小片 1 [S129] 縄 1、小片 1
SK-133	F9	1.84	0.65	0.48	不整円形	N-84° -W	黒 1、加 E1、堀 1、無 2、小片 2、石器 1
SK-205	F7	1.12	0.72	0.22	不整楕円形	N-58° -W	
SK-206	F6	1.83	1.12	0.23	不整楕円形	N-31° -W	称 6、堀 3、縄 1、無 2、小片 5
SK-208	F7	0.87	0.62	0.22	不整楕円形	N-45° -E	堀 1、縄 1
SK-210	F12	1.64	0.82	0.32	不整形	N-35° -W	
SK-211	E5	0.31	0.28	0.11	円形		黒 1、堀 1、縄 1、無 1、小片 2
SK-215	F7	0.88	0.81	0.31	隅丸正方形	N-86° -E	

第 67 表 時期不明ピット計測表

遺構No	調査 グリッド	規模 (m)			形状	長軸方向	出土遺物
		長軸	短軸	深さ			
P-62	D3	0.38	0.33	0.23	楕円形	N-84° -W	
P-92a	F7	0.49	0.49	0.34	円形		称 1、無 1
P-92b	F7	(0.37)	0.35	0.18	長方形	N-72° -E	称 2
P-93	F7	0.52	0.46	0.31	円形		称 1、無 1
P-94	E5	0.25	0.20	0.20	円形		
P-104	E8	0.52	0.36	0.17	楕円形	N-83° -W	黒 1、称 3、縄 2、無 3、条 1、小片 4、土師 1、石器 2

P-105		E8	0.57	0.57	0.26	円形		
S-107	P1	E8	0.32	0.29	0.28	円形		
	P2		0.36	0.35	0.42	円形		
	P3		0.30	0.26	0.22	円形		
	P4		0.22	0.21	0.23	円形		
	P5		0.35	0.35	0.11	円形		
	P6		0.34	0.32	0.26	円形		
P-110		F7	0.35	0.34	0.11	円形		
P-111a		E7	0.34	0.40	0.21	円形		
P-111b		E7	0.31	(0.44)	0.12	円形		
P-112		E7	0.52	0.40	0.29	楕円形	N-78° -W	
P-113		E7	0.34	0.34	0.13	円形		
S-124	P1	E9	0.54	0.45	0.29	円形		
	P2		0.45	0.35	0.22	円形		
	P3		0.28	0.28	0.23	円形		
	P4		0.39	0.25	0.18	円形		
	P5		0.52	0.46	0.17	円形		
	P6		0.48	0.43	0.13	円形		
	P7		0.48	0.44	0.3	円形		
P-128a		E9	1.08	0.45	0.17	不明	N-12° -E	<128> 黒 1、加 E1、小片 1
S-131	P1	F9	0.43	0.37	0.32	円形		
	P2		0.56	0.25	0.28	不整形	N-75° -E	
	P3		0.43	0.43	0.41	円形		
	P4		0.33	0.26	0.16	円形		
	P5		(0.44)	0.42	0.46	不明	N-73° -E	称 1、無 1、石器 2 (うち 1 点中近世砥石)
P-132		F9	0.44	0.43	0.21	円形		
P-204		F7	0.76	0.36	0.16	楕円形	N-40° -W	
P-207		E8	0.28	0.26	0.39	円形		
P-216		F7	0.44	0.41	0.34	円形		陶磁器
P-217		F7	0.32	0.26	0.37	楕円形	N-73° -E	

出土遺物 凡例

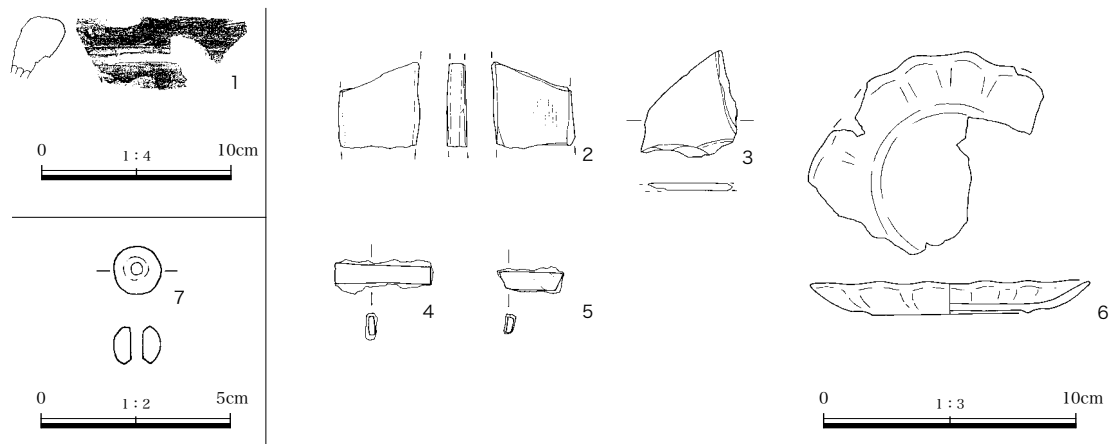
黒 黒浜式、加 E 加曾利 E、称 称名寺式、縄 縄紋のみ、条 条線文、無 無文の縄紋土器、小片 縄紋土器小片、土師 土師器

4. 時期不明遺構外遺物

時期の判別が困難な遺構およびグリッドからの出土遺物を図示する。第 273 図 1 は F9 グリッドから出土した、火鉢の口縁部片である。外面は丁寧なナデ整形を施し、棒状工具を用いて段を作り出す。内面は口縁部から体部にかけて全面剥離する。胎土に金色雲母を多量に含むことから、茨城県筑波山麓周辺での製品と考えられる。また、中世の土坑である SK-126b から、類似する火鉢が 15 世紀末頃の播鉢と共伴して出土していることから、中世に帰属する可能性がある。2 は砥石で、表面および両側面を使用している。表面は光沢を放つ程に研磨されている。石材は流紋岩である。3 は不明石製品で、薄い板状を呈する。表面には細かい擦痕が認められる。石材は頁岩。2・3 はともに近世の可能性が高い。

4～6 は不明鉄製品。4 は両側面が破損しており、断面は長方形状を呈している。F11 グリッドから出土した。5 は SZ-1 から出土した両側面が破損する鉄製品。刀子の可能性はある。6 は SZ-1 の上面から出土した鑄造鉄製品の輪花皿である。内外面ともに文様はなく、底部に低い高台部をもつ。第 III 章 9 節の鍛冶関連遺物の整理・分析を委託した穴澤義功氏は、外観的特徴から中世に帰属する可能性があると指摘する。

7 はガラス製の丸玉。不透明で、光沢はやや強い。穴の直径は 3 mm 程で、両端部で広がり、径 6.2 mm となる。調査区内からの出土である。



第 273 図 時期不明遺構外遺物・金属製品実測図

第 68 表 時期不明遺構外遺物観察表

掲載番号	種類 器種	計測値 (cm)	色調 (内・外)	胎土 (石材)	焼成	残存率	技法 (内・外)	特徴・備考	出土位置
1	瓦質土器 火鉢	口径： 底径： 器高：(3.4)	内：剥離 外：2.5Y3/2 黒褐	やや粗雑、白色粒・ 金色雲母・少礫少 量、透明粒やや多 量	やや 硬質	口縁部 破片	内：剥落の為不明 外：口縁部ナデ後 ミガキ、体部ナデ	口縁部接合箇所には棒 状工具痕有。口縁部 内面から内面全面剥 離。常陸産カ。	F9a・c
2	砥石	最大長：(3.2) 最大幅：3.1 最大厚：0.7		流紋岩				表面および両側面を 使用。切り出し痕明 瞭に残る。 重量：12.2g	d 区 F 9c
3	不明石製 品	最大長：(4.1) 最大幅：(3.5) 最大厚：0.3		頁岩				両面が光沢を放ち、 線刻状の擦痕がみら れる。薄く剥がれた ものか。 重量：5.9g	d 区 F 9c・ d

第 69 表 時期不明遺構外金属製品観察表

掲載番号	種類	鍛冶関連遺物 構成表No.	出土位置
4	鉄製品 (棒状不明品)	87	F11
5	鉄製品 (刀子?)	40	SZ-1

掲載番号	種類	鍛冶関連遺物 構成表No.	出土位置
6	鉄製品 (輪花皿)	42	SZ-1

第 70 表 遺構外遺物観察表

掲載番号	種類 器種	材質	色調	特徴	重量 (g)	最大径 (mm)	最大高 (mm)	最大孔 (mm)	備考
7	丸玉	ガラス	橙	気泡やや目立つ	2.86	12.11	10.45	3.30	調査区内の出土

第9節 横倉遺跡・横倉戸館古墳群出土鍛冶関連遺物について

今回の調査では、遺構内外および調査区内から羽口や鉄滓、炉壁等の鍛冶関連遺物や鉄製品が出土している。鍛冶関連遺物および鉄製品の整理にあたっては、分類・選別および観察について穴澤義功氏に委託し、その他の図化や作表についても穴澤氏の指導の下に整理を進めた。

第274～278図に示した鍛冶関連種別の構成表以外の出土遺物を含めた、本遺跡全体での出土総量は6,126.2gで、その大半が椀形鍛冶滓(4938.4g)であった。次いで砥石449.0g、鉄製品421.6g、炉壁184.0g、鍛冶滓58.1g、再結合滓30.3g、鉄塊系遺物29.6g、粒状の滓8.9g、工具付着滓3.5g、鉄製品付着土砂1.9gが確認された。椀形鍛冶滓は中型から極小までのサイズが出土しており、主体となるのは極小の椀形鍛冶滓であり、中型は1点のみであった。サイズ別にみた椀形鍛冶滓の重量は、中型376.0g、小型1,345.8g、極小2,254.4g、小片のため詳細不明の椀形鍛冶滓が962.2gである。

鉄製品は、鍛造品と鋳造品の2種類がある。鍛造品が主体で、81点中63点を占める。鉄剣2点・針1点・釘1点・刀子4点・紡錘車円盤部1点・不明品54点である。鋳造品は、輪花皿1点・不明17点であった。但し、鋳造品の不明17点は輪花皿の破片である可能性がある。

構成表に掲載されている鉄剣は、古墳時代前期の遺構であるSZ-1主体部およびSZ-66主体部からの出土である。今回調査で確認された鍛冶関連遺物は、概ね平安時代に帰属する可能性が高いため、直接的には伴わないと考える。また、鋳造品についても、本遺跡では鋳造に係る遺構・遺物は確認できていないため、搬入品である。





























遺構別にみても、古代の竪穴建物跡であるSI-75からの出土遺物が主体であり、総重量は4,050.9gであった。SI-75からは羽口や椀形鍛冶滓・鉄塊系遺物・粒状の滓・砥石等が出土しており、ほぼ鍛冶関連遺物のセットが出土している。また、本遺構からは土師器坏を転用した埴塙の破片が出土している。転用埴塙破片に関して、穴澤氏の観察では、古墳時代後期の土器が使用されており、鉄鍛冶ではなく、非鉄(銅関係か)の小規模な加工を疑わせるものと指摘されている。

古墳時代の遺構からも鍛冶関連遺物および鉄製品が出土しており、SZ-1から713.0g、SZ-66から171.9g、SZ-66の主体部から39.0g、SZ-67から927.7g等となる。但し、鍛冶に関する遺物以外に、副葬品も構成表に組み込まれている。SZ-1およびSZ-66・67等から出土する椀形鍛冶滓等は古代に帰属する可能性が高い。中世の遺構から出土した鉄製品としては、SK-96bから出土した刀子がある。近世の遺構からは釘や炉壁等が出土しており、古代に帰属すると考えられる炉壁以外の鉄製品は近世に帰属する可能性が高い。SZ-1の確認面からは、鋳造で作られた輪花皿が出土している。

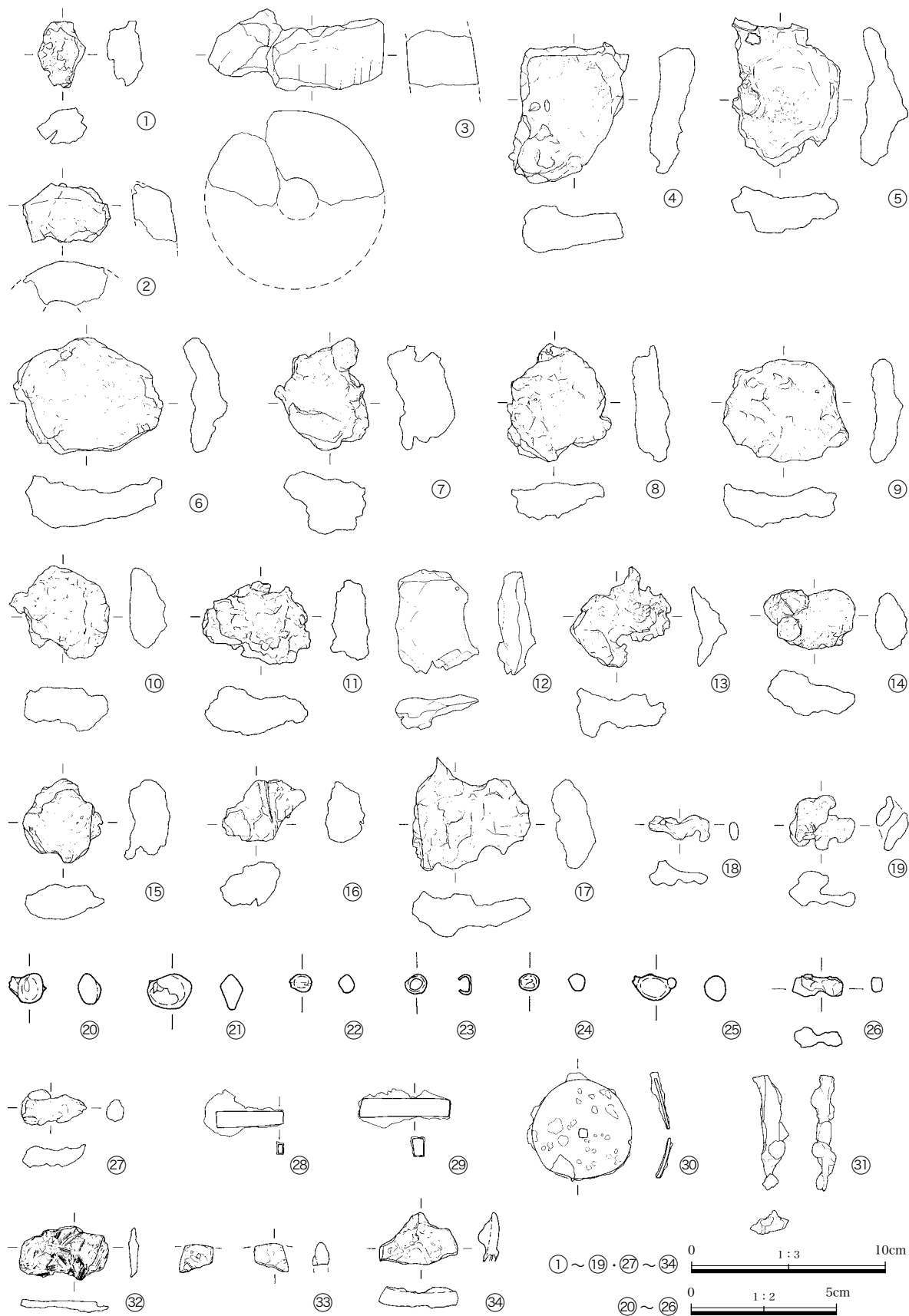
調査区内の包含層や表土からも多数の鍛冶関連遺物が出土しており、鍛冶滓や鉄製品、炉壁等で構成されている。調査区全体では、SI-75周辺や中世の遺構が集中するE8グリッドからE13グリッドにかけて多く出土する傾向がある。特にSI-75に近接するT20からは鍛冶滓が多数出土しており、本来はSI-75に帰属する遺物と考えられる。調査区内から出土する椀形鍛冶滓は、SI-75出土品と類似しており、極小の滓がほとんどである。但し、No.55の羽口先の破片は、SI-75出土品よりやや細身で、古墳時代後期～奈良時代前半に多い細身のものの可能性が高いと穴澤氏は指摘する。また、穴澤氏は調査区内から出土した鉄製品について、時期がまちまちであるが全体の傾向は古代から中世主体とみられ、一部は中世後半～近世さらにはその後の資料も含まれていると推察されている(第5表)。炉壁に関しては、製錬炉の炉壁であると判断される。したがって、本遺跡内に製錬炉の炉壁が僅かながらではあるが出土していることは、周辺に製錬を行った製鉄遺跡が存在する可能性が高いことを示すものであろう。

SI-75				SZ-1			
羽口(鍛冶) 先端部、滓付き	①	⑩	④	粒状の滓	②②	②⑧	④①
	②	⑪	⑤		②③	②⑨	⑤⑥
羽口(鍛冶) 先端部、体部	③	⑫	⑥	鉄塊含置物(含鉄) 含鉄(△)	②④	③⑩	④②
	④	⑬	⑦		②⑤	③⑩	④③
榊形鍛冶滓 (中・含鉄)		⑧	⑭	⑧	②⑥	③①	④④
	⑨						
①		⑯	⑰	⑨	②⑦	③③	④⑥
榊形鍛冶滓 (小・含鉄)	②	⑱	⑱	再結合滓	③③	③④	④⑦
	⑤	⑲	⑱				④⑧
榊形鍛冶滓 (極小・含鉄)	⑥	⑲	⑱	土器(被熱の発泡)	③⑤	③④	④⑨
							⑧
榊形鍛冶滓 (小、含鉄、工具頭付き)	⑧	⑲	⑲	鉄製品(鍛造品)	③⑤	③⑤	④⑩
							⑨
榊形鍛冶滓 (極小、含鉄)	⑨	⑲	⑲	M(○)	③⑥	③⑥	④⑫
							⑩
分析	⑩	⑲	⑲	I(分析資料No.1)	I(分析資料No.2)		

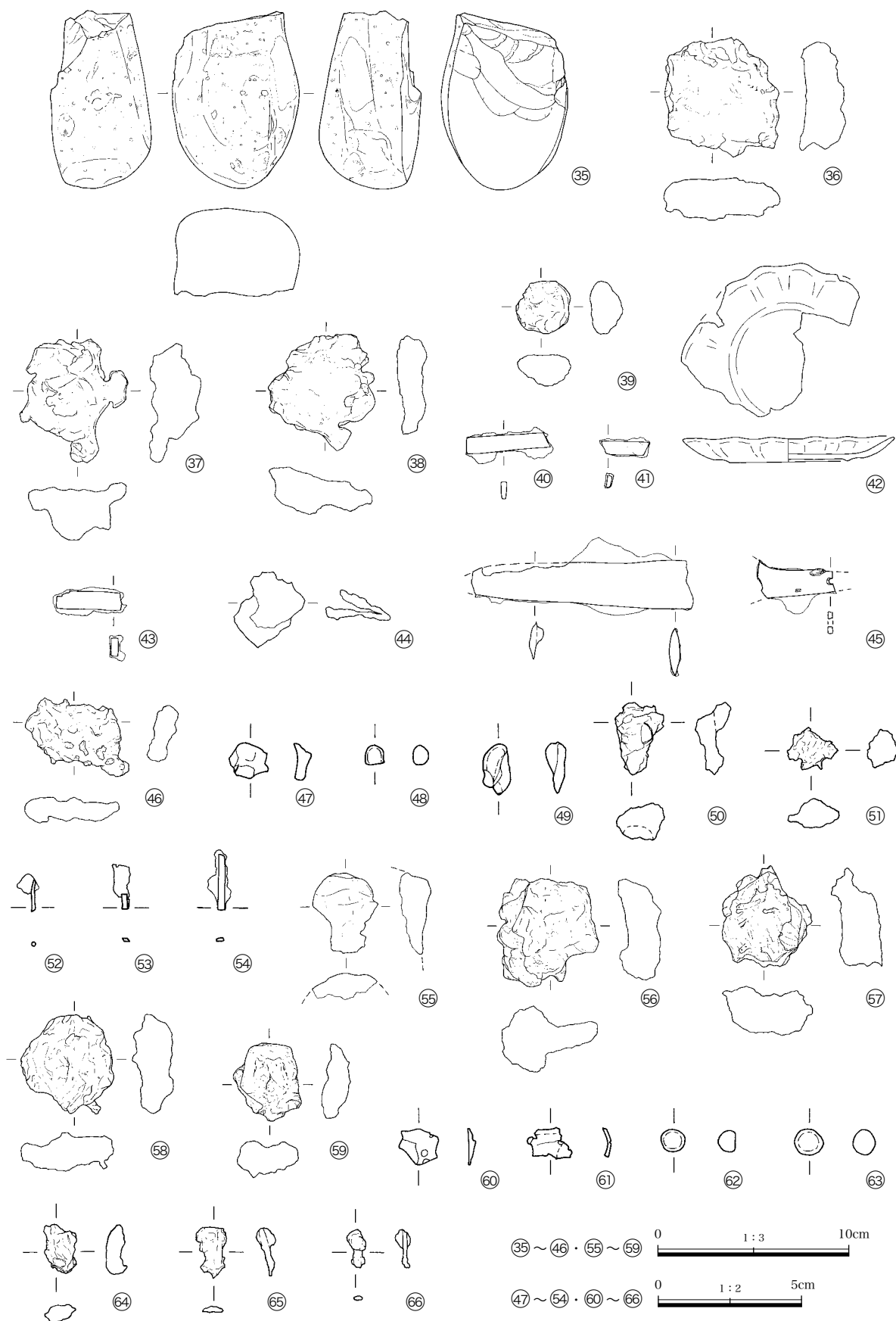
第 274 図 鍛冶関連遺物構成図(1)

SZ-66 d 区		SZ-67			SK-86	SK-96a	SD-3	SZ-66 主体部
梔形鍛冶滓 (極小)		梔形鍛冶滓 (極小・含鉄)	粒状の滓	鉄製品 (鍛造品)	再結合滓	鉄製品 (鍛造品)	鉄製品 (鍛造品)	鉄製品 (鍛造品)
								
工具付着滓		工具付着滓			SK-129a 鉄製品 (鍛造品)	鉄製品 (鍛造品)	鉄製品 (鍛造品)	D8c 炉壁 (製練炉)
								
粒状の滓			鉄塊系遺物? (含鉄)		SK-96b 鉄製品 (鍛造品)	鉄製品 (鍛造品)	L (●)	鉄製品 (鍛造品)
			錆化 (△)					
鉄塊系遺物? (含鉄)	錆化 (△)	工具付着滓			SD-3 炉壁 (製練炉、滓付き)	鉄製品 (鍛造品)	F11	鉄製品 (鍛造品)
H (○)					SD-3 鉄製品 (鍛造品)	鉄製品 (鍛造品)	L (●)	鉄製品 (鍛造品)
分析					I (分析資料No.3)	鉄製品 (鍛造品)	L (●)	鉄製品 (鍛造品)
					I (分析資料No.3)	鉄製品 (鍛造品)	L (●)	鉄製品 (鍛造品)
								

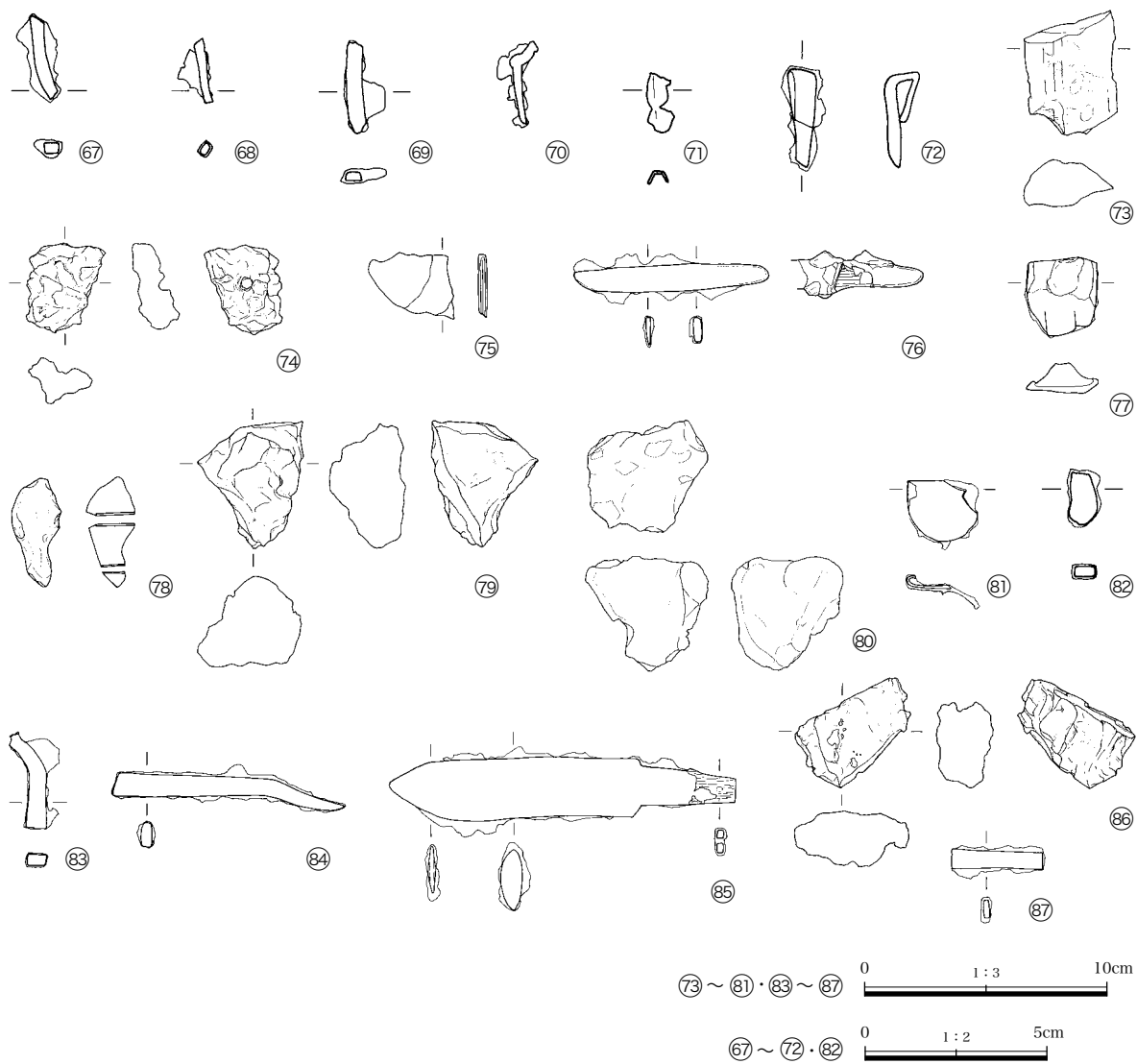
第275図 鍛冶関連遺物構成図(2)



第276図 鍛冶関連遺物実測図(1)



第277図 鍛冶関連遺物実測図(2)



第 278 図 鍛冶関連遺物実測図 (3)

第71表 横倉遺跡・横倉戸館古墳群鉄関連遺物観察表（まとめ）

No.	遺物名	地区名	計測値 (cm)			重量 (g)	磁着度	メタル度	備考	図版番号
			長さ	幅	厚さ					
1	羽口(鍛冶、滓付き、含鉄、先端部)	SI-75	2.3	3.1	1.7	15.0	2	錆化 (△)	上面右側に羽口先端部寄りの顎部が残る、極小の椀形鍛冶滓破片。上面に残る羽口顎部の厚みは7mm程度を測る。滓は左側の肩部が残り、右側部上手側から裏面の中央部が破面になっている。	第196図18
2	羽口(鍛冶、先端部)	SI-75	3.5	4.0	2.1	24.0	2	なし	上面の中央部右寄りに通風孔部を残す、羽口の先端部破片。外面は羽口肩部から体部にかけてが残り、左側部と短軸側の両側部が破面になる。胎土はスサや粉殻も混じえ、やや密度が低い。残存部位は羽口正面から見て左下の顎部。	第196図19
3	羽口(鍛冶、体部)	SI-75 SI-75A	3.2	8.4	3.7	89.0	1	なし	二片が接合する羽口先端部寄りの体部破片。内面には通風孔部壁面の一部を残し、身厚は約3.4cmを測る。外面には長軸方向の削りに加えて、一カ所、スマキ痕状の筋目が認められる。胎土は前者とほぼ同様。細破片別途あり。	第196図20
4	椀形鍛冶滓(中、含鉄)	SI-75	5.2	6.4	1.9	155.0	2	錆化 (△)	上下面と右側部が生きている中型の椀形鍛冶滓破片。全体に扁平気味で、上面には短軸方向に伸びる弧状の窪みあり。工具痕の可能性も残る。上面の下手寄りには磁着が強く、下手寄り端部と下面の一部に錆膨れあり。本遺跡出土の椀形鍛冶滓中では唯一となる中型の資料である。	第196図21
5	椀形鍛冶滓(小、含鉄)	SI-75	5.1	6.5	1.3	98.0	3	錆化 (△)	左側部が大破面になった、小型で扁平な椀形鍛冶滓破片。上面は浅く窪み、肩部は丸みをもっている。左下手寄りの上面から側部にかけては、羽口先からの粘土質滓が落ち込んでいる。一方、左上手側の側部は含鉄部で、黒錆の滲みと放射割れあり。	第196図22
6	椀形鍛冶滓(小、含鉄)	SI-75	7.1	5.6	1.5	118.0	3	錆化 (△)	平面形が不整楕円形をした、ほぼ完形の小型椀形鍛冶滓。上面は浅く窪み、肩部にはやや出入りあり。下面は浅い椀形で、左側の中央部は厚みをもっている。透過X線像は外面の特徴と一致し、左側中央部の密度が高い。含鉄部は上面右側の表層。	第196図23
7	椀形鍛冶滓(極小、含鉄)	SI-75	4.5	5.6	2.3	76.0	1	錆化 (△)	肩部から側部の出入りが目立つ、極小の椀形鍛冶滓の完形品。側部中央に不規則な段を生じており、一見、重層気味になっている。上面は浅く窪み、肩部は出入りが強め。含鉄部は表層の滓の表面寄り。滓量は下層部分に比べて上層が二倍程度となる。	第196図24
8	椀形鍛冶滓(極小、含鉄)	SI-75	4.7	5.6	1.8	75.0	2	錆化 (△)	扁平で比較的まとまりの良い極小の椀形鍛冶滓。左側部上手側に小破面を残すが、ほぼ完形品。上面は不規則な皿状で、肩部には木炭痕による窪みを点々と残す。下面の左下手側には灰色の炉床土が固着する。	第196図25
9	椀形鍛冶滓(極小、含鉄)	SI-75	5.9	4.9	1.3	73.0	2	錆化 (△)	不整楕円形の平面形をもち、扁平でまとまりの良い極小の椀形鍛冶滓。左右の側部に小破面あり。左側の端部寄りが肥厚して滓の密度が高い。なお、上下面とも、左寄りに含鉄部が確認され、下面では長さ3cmほどの棒状に伸びている。内部に鉄製品の破片を巻き込んでいる可能性もあろう。	第196図26
10	椀形鍛冶滓(極小、含鉄)	SI-75	4.6	4.0	1.7	63.0	3	錆化 (△)	小さいがまとまりの良い極小の椀形鍛冶滓。左側の肩部と下面の突出部に小破面を残すが、ほぼ完形品。上面は平坦気味で、右寄りの側部から下面は椀形を示す。右寄りの芯部に含鉄部が広がり、放射割れも右側部を中心に発達し始めている。	第196図27
11	椀形鍛冶滓(極小、含鉄)	SI-75	4.8	3.8	1.8	36.0	1	錆化 (△)	左上手側の側部に小破面を残す、完形に近い極小の椀形鍛冶滓。左寄りの側部中段には隙間を生じており、右側では滓が一体化している。上面は浅く窪み、側部の出入りも加わって密度が低めとなる。透過X線像にも不規則なスポンジ状の滓層が確認できる。	第196図28
12	椀形鍛冶滓(極小、含鉄)	SI-75	3.5	5.0	1.1	32.0	2	錆化 (△)	分析資料No.1 詳細観察表参照。	第196図29
13	椀形鍛冶滓(極小、含鉄)	SI-75	4.6	4.0	1.1	36.0	2	錆化 (△)	平面形の乱れや側部の出入りが激しい、極小の椀形鍛冶滓。左側部に小破面を残しながらも、ほぼ完形品。上面の中央部が浅く窪み、肩部2カ所がこぶ状に盛り上がる。右側部中央には段を生じ、側部全体が不規則となる。透過X線像も滓の外観と一致する。滓密度の異なる小塊状の滓が一体化しつつある特徴が読みとれる。滓量が少なく椀形鍛冶滓を形成し始めている段階であろう。	第196図30

第三章 検出された遺構と遺物

14	腕形鍛冶滓 (極小、含鉄)	SI-75	4.3	2.8	1.5	33.0	2	錆化 (△)	別単位の滓が左上部で一体化した形態と透過 X 線像を示す、極小の腕形鍛冶滓。下半右寄りの滓部分は完形かつ、まとまりの良い腕形鍛冶滓で、左側部と左側の肩部 2 カ所に別単位の滓片が固着する。磁着は肩部の滓周辺が強め。	第 196 図 31
15	腕形鍛冶滓 (極小、含鉄)	SI-75	4.1	3.4	1.9	30.0	2	錆化 (△)	側部 2 カ所に小破面を残す極小の腕形鍛冶滓。破面は弧状に途切れており、工具痕の可能性大。腕形鍛冶滓としてはほぼ完形品で、側部中央に段を生じている。上面は浅く窪み、皿状の下面には炉床土が固着する。	第 196 図 32
16	腕形鍛冶滓 (極小、含鉄)	SI-75	3.0	3.1	2.0	22.0	2	錆化 (△)	左側部が破面になった小塊状の極小腕形鍛冶滓。芯部と右寄りの 2 カ所に含鉄部由来の貝殻状の錆膨れが発達している。酸化土砂に覆われて不明瞭ながらも、上手側の側部が破面の可能性をもち、一回り大きめな含鉄の腕形鍛冶滓の肩部破片かもしれない。透過 X 線像にも芯部 2 カ所の錆膨れが明瞭である。	第 196 図 33
17	腕形鍛冶滓 (極小、含鉄)	SI-75	5.8	4.4	1.5	70.0	2	L (●)	左側部が直線状の破面になった極小の腕形鍛冶滓。上面は浅く窪み、肩部は出入りのため凹凸がやや目立つ。上面中央部から上手側にかけては黒錆が滲み、下面側にも放射割れが繋がっている。透過 X 線像には滓内部に長さ 2 cm 前後の小塊状を示す鉄部が確認できる。加工途上の鉄部が滓中に落ち込んだものか。	第 196 図 34
18	鍛冶滓	SI-75	2.8	1.0	0.6	4.0	1	なし	長さ 3 cm 程度を測り、不規則な流動状の形態をもつ鍛冶滓。左側面に小破面を残すが、ほぼ完形品。表面は平滑気味で、小さな木炭痕が残る。木炭層の隙間で生成されたものと推定される。	第 196 図 35
19	鍛冶滓	SI-75	3.2	1.8	1.7	13.0	1	なし	前者と同様、表面に小ぶりの木炭痕が無数に残る鍛冶滓。完形品で、上下二段気味の形態を示す。表面の 1/2 程度は錆に覆われているが、含鉄部はなし。鍛冶炉中の粉炭層に潜り込んだ滓か。	第 196 図 36
20	鍛冶滓 (含鉄)	SI-75	1.0	1.0	1.2	1.3	2	錆化 (△)	径 1 cm 強の大きさをもつ、やや扁平な塊状の含鉄鍛冶滓。上半部は丸みをもっており、下面は炉床土の圧痕様。芯部は含鉄部で、木炭層に落ち込んだ小鉄塊の表面が滓化したものか。	第 196 図 37
21	鍛冶滓 (含鉄)	SI-75	1.4	1.2	1.2	2.0	1	錆化 (△)	扁平塊状を示す含鉄の鍛冶滓。完形品で、上面には木炭痕が、下面は圧痕様となる。含鉄部は小さく、滓部が主体。	第 196 図 38
22	粒状の滓	SI-75	0.7	0.6	0.5	0.3	1	なし	径 7 mm 大の小塊状をした粒状の滓。左側面に突出部があり、全体形状は不規則な楕円形。	第 196 図 39
23	粒状の滓	SI-75	0.7	0.6	0.1	0.2	1	なし	表面が平滑で緻密な粒状の滓。下面から上手側の側部には炉床土が小範囲で固着し、小さく窪んでいる。	第 196 図 40
24	粒状の滓 (含鉄)	SI-75	0.7	0.6	0.5	0.2	1	錆化 (△)	径 6 mm 大前後の不整塊状をした粒状の滓。完形品で、下面や側面に僅かな木炭痕を残す。それ以外の表面は平滑。	第 196 図 41
25	粒状の滓	SI-75	1.5	0.8	0.7	0.4	1	なし	長楕円形で扁平塊状の形態をもつ粒状の滓(鍛冶滓)。右側部には径 3.5 mm 大の別単位の球状の滓が結合する。下面側はやや平坦気味で、圧痕様。側部から上面は平滑で全体に丸みをもっている。	第 196 図 42
26	鉄塊系遺物 (含鉄)	SI-75	1.6	0.3	0.5	1.0	2	錆化 (△)	長さ 1.7 cm 程の外形をもつ鉄塊系遺物。表面は酸化土砂に覆われており、不規則な細い棒状を示している。透過 X 線像では内部に 3.5 mm 程度の鉄片が含まれている。鉄部に鍛造の痕跡は無く、小鉄塊の可能性が高い	第 196 図 43
27	鉄塊系遺物 (含鉄)	SI-75	3.0	1.1	0.8	7.0	2	錆化 (△)	長さ 3.2 cm 程の楔状の形態を示す鉄塊系遺物。左側部が直線状に飛び出して、右方向に向かい幅が狭まっていく。加工途上の鍛造の甘い鉄製品未成品の可能性を残す。磁着は強く、全体が錆化して表面には錆膨れがみられる	第 196 図 44
28	鉄製品(鍛造品、含鉄、棒状不明)	SI-75	4.0	1.2	1.0	6.0	2	錆化 (△)	左側部から下面にかけてが大きな錆膨れとなった、棒状の鉄製品破片。断面形は長方形で、右方向に向かい徐々に細くなっている。左側部も破面の可能性あり。本来の幅は 7 mm 程度と推定される。鉄鏃の可能性も残るが、はっきりしないため棒状不明品としておく。	第 196 図 45
29	鉄製品(鍛造品、含鉄、刀子?)	SI-75	4.6	1.4	1.1	10.0	2	錆化 (△) M (◎)	左右の側部が破面になった鉄製品破片。断面形から見てやや刀子の刃部の様にもみえるが、厚みがあり鍛造途上の鉄製品かもしれない。左半分が錆膨れにより大きく変形している。厚みはやや不均一で、より鍛造途上を窺わせる。未成品とすべきかもしれない。	第 196 図 46

第9節 横倉遺跡・横倉戸館古墳群出土鍛冶関連遺物について

30	鉄製品 (鍛造品、 含鉄、紡錘 車円盤部)	SI-75	5.2	5.4	0.2	10.0	2	錆化 (△)	X線No.14 径5cm大前後の鉄製紡錘車の円盤部。右上手側の外周部が小さく欠けているが、ほぼ完形品。中心部には径5.5mm大前後の円形の穴が穿たれている。厚みはごく薄く、1mm弱と推定される。上手側2/5程度の部分から折れ曲がって、斜め上方を向く。透過X線像では厚みの薄さと錆化の激しさが目立つ。	第196図 47
31	鉄製品 (鍛造品、 釘状不明、 未成品?)	SI-75	0.8	5.6	0.7	10.0	2	M (◎)	X線No.19 分析資料No.2 詳細観察表参照。	第196図 48
32	再結合滓	SI-75	4.3	2.3	0.4	4.0	1	なし	X線No.13 厚さ5mm以下の薄板状の外観をもつ再結合滓破片。側部全周が破面で、圧縮されたような形で内部には密に木炭痕が広がっている。下面は左右方向に伸びるごく浅い舟底状で、灰褐色の土砂が面的に固着する。鍛冶工房の床面に貼り付いた状態で生成か。	第196図 49
33	土器(被熱 発泡、転用 ルツボ)	SZ-67	1.6	1.0	0.6	0.9	1	なし	左右の側部と下手側の側部が破面になった、被熱・発泡した土器小破片。厚みは7mm程度で、上手側の端部が薄くなって収束するため、土器の口唇部破片が母体であろう。外面は2/3程度が剥離して発泡した気孔が露出する。胎土は微細な砂粒を混じえている。土器転用ルツボの破片の可能性あり。	第196図 50
34	土器(被熱 発泡、転用 ルツボ?)	SI-75	3.8	2.5	1.0	6.0	1	なし	左右の側部と、下手側の側部の三面が破面になった被熱・発泡した土器破片。内面全体と、右上の破面から外面の半分以上がガラス質になっており、強い二次被熱が窺える。外面の下端部寄りに一線をなす段が認められるため、須恵器模倣坏が母体の可能性をもっている。部位としては、坏の口縁部と推定され、上端部は口唇部のためか薄くなって収束する。古墳時代後期の土器を転用した転用ルツボの可能性が高い。	第196図 51
35	砥石(自然 石砥石)	SI-75	5.6	8.3	4.1	415.0	1	なし	下面と上手側の側部がシャープな破面になった、自然石砥石破片。上面上手側と右側部上手側の二面が砥面になっており、左側部上手側の端部も砥面の可能性をもっている。また、表面の各所に錆色が確認されるため、鍛冶工房で用いられた砥石と考えられる。石質は礫岩。	第195図 17
36	椀形鍛冶滓 (小、含鉄、 工具痕付 き)	SZ-1 C区 上面	5.6	5.4	2.0	122.0	2	錆化 (△)	径6cm大前後を測る定型の小型椀形鍛冶滓。含鉄で、上面の中央からやや左手に面をなす工具痕が残されている。上面は皿状に窪み、肩部から下面にかけては木炭痕による凹凸が残されている。右下手側の下面の一部が炉床に接している。含鉄部は上面や肩部に加えて、上手側の芯部にやや広め。	第198図 9
37	椀形鍛冶滓 (極小、含鉄)	SZ-1	5.0	4.5	2.2	75.0	1	錆化 (△)	肩部2カ所がこぶ状に突出する極小の椀形鍛冶滓。左上手側の側部に小破面を残すが、ほぼ完形品。滓量が少ないためか下面側には凹凸が目立ち、透過X線像にも複数単位の滓が集まって椀形滓となっている様子が窺える。含鉄部は上面表皮寄り。	第198図 10
38	椀形鍛冶滓 (極小、含鉄)	SZ-1 C区 E12C E11d	5.0	5.0	1.9	66.0	1	錆化 (△)	上手側の肩部に小破面を残しながらも完形に近い、極小の椀形鍛冶滓。左側が2cm程の厚みをもつ椀形となっており、右側は裾広がりに滓は伸びている。また、右半分は厚みが薄く側部にも出入りが生じている。透過X線像は全体的にスポンジ状で、含鉄部はごく僅か。	第198図 11
39	椀形鍛冶滓 (極小、含鉄)	SZ-1 C区 E12C E11d	2.8	2.7	1.5	18.0	1	錆化 (△)	径3cm大のやや扁平塊状をした、完形の極小椀形鍛冶滓。小さいながらも椀形で、形態は整っている。含鉄部は僅かで、透過X線像からみても滓部主体。	第198図 12
40	鉄製品(鍛 造品、含鉄、 刀子?)	SZ-1	2.5	1.0	0.5	4.0	2	錆化 (△)	X線No.11 左右の側部が破面になった鉄製品破片。断面形は厚さ4mm弱の扁平棒状で、僅かに左側が薄くなっている印象を受ける。右寄りの上下面には錆膨れあり。	第273図 5
41	鉄製品(鍛 造品、含鉄、 棒状不明)	SZ-1	4.4	0.8	0.3	2.0	2	錆化 (△)	X線No.11 前者と似た断面形をもつ鉄製品破片。左右の側部が破面で、断面形が幅8mm×厚さ2.5mm前後を測る扁平な棒状鉄製品。前者と同一個体の可能性もあり。	第198図 13

第三章 検出された遺構と遺物

42	鉄製品（鋳造品、含鉄、輪花皿）	SZ-1	6.5	7.7	0.4	71.0	2 3 4	錆化（△） 特L（☆）	高さ1cm程度の鋳鉄製の輪花皿。径の1/3程度の残存状態で、波状の口唇部と低い高台が特徴である。厚みは4mm前後を測り、高台部周辺が2mm程度と薄くなっている。透過X線像によれば内部気孔の存在が目立つ。高台部の高さは1mm程度と低い環状となっている。錆化が進行中で、放射割れも発達してきている。鋳造の鉄製品としては一般的ではなく、時期や性格について注目されよう。（本遺跡では中世の地下式坑が検出されており、墳墓に副葬されたやや高級な鋳造鉄製品の可能性もあり）細破片が別途あり。	第273図 6
43	鉄製品（鍛造品、含鉄、刀子）	SZ-1 主体部	3.7	1.6	0.7	6.0	2	錆化（△）	X線No.3 表裏面に黄褐色の酸化土砂が固着した鉄製品破片。左右の端部は破面で、左側の下面には錆膨れあり。断面形は扁平な長方形で、基本的には構成No.44・45と似る。	第166図 2
44	鉄製品（鍛造品、含鉄、滓状不明品）	SZ-1 主体部	3.3	3.4	0.9	14.0	3	L（●）	X線No.1 左右の側部から上手側の側部にかけてが破面になった薄板状の不明鉄製品。錆化のためか左半分が上下二枚に分離しかけている。右下手側の側部は徐々に薄くなって収束気味のため、構成No.45の鉄剣の関部寄り破片の可能性をもっている。但し、保存処理前のためか身幅が本資料の方が広い印象をもつ。上面は中央部が鎗状に盛り上げる形で、錆化由来の外形の変化のために、より分かりにくくなっている。	第166図 4
45	鉄製品（鍛造品、含鉄、剣（細身））	SZ-1 主体部	刃部 11.0	刃部 2.4	刃部 0.5	55.9	5	錆化（△）	3片に割れた小型の鉄剣。身の部分は2片が接合され、切先と関部が欠落する。茎部分の破片には上手側の関部と目釘穴が確認できる。細身の剣で鎗部分も低い。身の下面には土砂主体の錆膨れが残されている。長軸方向の右側の断面形がやや緩やかな弧状となっているのは土圧の影響か。透過X線像によれば右側の鍛造痕は剣の切先側では長軸方向に対して斜め方向を示している。そのため、切先側での研ぎ減りが疑われる。茎部側の鍛造痕はやや雑で、素延べに近い状態を示す。（保存処理済み）	第166図 3
46	椀形鍛冶滓（極小）	SZ-66 d区	4.7	2.9	0.7	29.0	2	なし	平面形が不整五角形をした極小の椀形鍛冶滓。完形品で、左側の端部下面が重層気味となる。上面は浅い皿状で、左右で色調が異なっている。左半分は青光りする。右半分は濃茶褐色の酸化物に覆われており、下面もやや類似した色調。酸化物に覆われた範囲は磁着も強く、下面には錆膨れも確認されるため、含鉄部由来であろう。滓量の少ない鍛冶鍛冶の最終工程にともなう滓か。透過X線像には僅かに含鉄部が確認される。	第198図 14
47	工具付着滓	SZ-67 f区	1.3	1.2	0.3	1.1	1	なし	上面に浅い楕状の工具痕を残す、工具付着滓破片。側部には厚さ2mm以下の破面が全周し、外面には長さ6mm程度のイガイガした滓部が突出する。工具本体の先端部寄り圧痕か。	第198図 15
48	粒状の滓	SZ-66 d区	0.7	0.7	0.6	0.3	1	なし	径7mm大前後の粒状の滓。表面は微細な凹凸に覆われており、左側部中央が僅かに突出する。表面の凹凸は内部のガスの抜けによる。	第198図 16
49	鉄塊系遺物？（含鉄、鉄片状）	SZ-66 d区	0.8	1.4	0.6	1.0	2	錆化（△）	酸化土砂に覆われた鉄片状の鉄塊系遺物。右側部からみると厚さ1.5mm程度の薄板状で、短軸方向に僅かに反り返っている。透過X線像では、長さ1.5cm×幅7mm程度の鉄部が確認できる。多少成形された鉄製品の端部が、鍛冶炉中で欠け落ちて熱変化したものか。	第198図 17
50	鉄塊系遺物？（含鉄、釘状）	SZ-66 d区	1.5	1.8	0.8	3.0	2	H（○）	小さな釘頭状の外観を示す鉄塊系遺物。表面は微細な錆膨れと酸化土砂に覆われており、透過X線像からは鍛造痕を確認できない含鉄部が確認できる。従って、鉄製品ではなく、やや異形の鉄塊系遺物と推定される。	第198図 18
51	鉄塊系遺物（含鉄、小塊状）	SZ-66 d区	1.4	1.1	0.8	2.0	2	H（○）	表面が黒錆に覆われた小塊状の鉄塊系遺物。やや扁平で上手側の側部は破面。残る側部には錆膨れが露出する。透過X線像によれば、芯部はまとまりの良い鍛造初期の鉄片様である。	第198図 19
52	鉄製品（鍛造品、針？）	SZ-66 d区	0.7	1.3	0.2	0.2	1	錆化（△）	径1.5mm大の細い棒状の鉄製品破片。両端部は破面で、上手側には錆膨れが広がっている。残りの良い下手側からみれば、断面形は隅丸方形に近い。鉄針の破片かと推定される。	第170図 10

第9節 横倉遺跡・横倉戸館古墳群出土鍛冶関連遺物について

53	鉄製品（鍛造品、釘状不明品）	SZ-66 d区	0.6	1.5	0.6	0.4	1	錆化（△）	上手側に滓部が確認される棒状の鉄製品破片。滓部はイガイガした鍛冶滓様で、内部には幅1.5mm程度の細い棒状の鉄製品が含まれている。但し、錆化も進み全体的には不明瞭。	第170図 11
54	鉄製品（鍛造品、釘状不明品）	SZ-66 d区	0.7	1.8	0.3	0.4	1	錆化（△）	表面にイガイガした滓部が固着した鉄製品破片。透過X線像からみると、内部に長さ1.8cm×幅2.5mm程度の細い棒状の鉄製品が含まれている。鉄部には明瞭に鍛造痕が確認され、細身の釘の体部破片か。	第170図 12
55	羽口（鍛冶、先端部）	SZ-67 b2区	3.9	2.6	1.2	12.0	1	なし	羽口の先端部から体部にかけての表面破片。外面は生きているが通風孔部は欠落して、裏面全体が破面になっている。羽口としては外径などからみて小型品である。SI-75出土の鍛冶関連遺物が9世紀後半の資料と推定されているのに対し、本資料は羽口としては細身で、時期的にやや遡る可能性もあろう。胎土は粉殻とスサ入りで密度は低い。	第198図 20
56	椀形鍛冶滓（極小、含鉄）	SZ-67 b1区	5.0	5.1	3.3	90.0	3	錆化（△）	左側部上手側の上半に小破面を残す、ほぼ完形の極小椀形鍛冶滓。左側部下半が下方に向かい大きくこぶ状に突出し、側部からみると上中下の三段の滓から形成されている。最上部の滓は綺麗な椀形で、右方向に向かい広がる形を示す。含鉄部は上面寄りの滓部に点在している。透過X線像にも滓の重なりが示されている。	第198図 21
57	椀形鍛冶滓（極小、含鉄）	SZ-67 b区 E12C	4.3	4.3	1.9	67.6	2	錆化（△）	側部の立ち上がり強い極小の椀形鍛冶滓。下手側の側部は工具により突き崩された不規則な破面で、残る側部は重層気味の滓部となる。上面は浅く窪み中央部側の表裏が脱落する。また、短軸方向に筋状の工具痕が残されている。重層気味の滓ではあるが、透過X線像では内部がほぼ均一な滓になっている。	第198図 22
58	椀形鍛冶滓（極小、含鉄）	SZ-67 f区	4.5	4.8	1.5	64.0	3	錆化（△）	平面形が不整形をした、小さくまとまりの良い完形の極小椀形鍛冶滓。上面は全体的に平坦気味で、若干の凹凸あり。下面は浅い椀形で、側部の立ち上がりはやや強め。また側部からみると、滓層が上中下の三単位になっており、前者と類似する。上面中央部は含鉄部と見られ、滓部の透過X線像はスポンジ状になる。	第198図 23
59	椀形鍛冶滓（極小、含鉄）	SZ-67 f区	3.0	4.0	1.3	30.0	2	錆化（△）	右下手側の肩部が小破面になった、ほぼ完形の極小椀形鍛冶滓。小さいながらも椀形で、下面が突出する。含鉄部は上面表皮寄り。透過X線像では滓の密度がやや高めになる。	第198図 24
60	工具付着滓（扁平）	SZ-67 f区	1.2	1.2	0.2	0.5	1	なし	薄皮状の工具付着滓破片。上面はごく浅い皿状で、表皮は光沢をもつ。側部は基本的に破面で、外面は木炭痕からなる。厚さも最大1.5mm程で、ガラス質の工具付着滓である。	第198図 25
61	工具付着滓（角棒状）	SZ-67 f区	1.2	0.9	0.2	0.7	1	なし	上面が浅い楕状から甘いL字状を示す、工具付着滓破片。工具本体が方形気味の断面形をもつためか。側部全周は破面で、厚みは2mm程度と薄い。外面はザラザラした滓表面で、上面の工具痕自体にもひび割れが生じている。滓質は鍛冶滓的。	第198図 26
62	粒状の滓	SZ-67 f区	0.8	0.7	0.6	0.3	1	なし	表面が平滑で扁平塊状をした粒状の滓。完形品で上面から側部は丸みをもっており、下面の中央部は木炭痕のために平坦気味。	第198図 27
63	粒状の滓	SZ-67 f区	1.0	0.9	0.8	0.5	1	なし	基本的には前者と類似した完形の粒状の滓。上面から側部は丸みをもっており、側部下半から下面には微細な木炭痕あり。下手側の側部には微かに工具痕の窪みあり。	第198図 28
64	鉄塊系遺物？（含鉄、角棒状）	SZ-67 b2区	1.0	1.3	0.6	1.0	2	錆化（△）	酸化土砂に覆われた不定形小塊状の鉄塊系遺物。外観からは鉄滓様に見えるが、透過X線像では全体が鉄部で、未鍛造の鉄塊系遺物と推定される。表面には木炭痕と錆膨れが共存する。一見、短軸方向に伸びる角棒状の鉄製品様。	第198図 29
65	鉄塊系遺物？（含鉄、鉄片状）	SZ-67 f区	0.5	1.7	0.2	1.0	2	錆化（△）	上手側の端部が錆膨れとなった扁平な小鉄片。透過X線像には鍛造痕が確認されている。幅5mm×厚さ1mm前後の薄板状の鉄片で、上手側の端部がバチ形に広がって、先端は直線状に途切れている。下手側は錆膨れ主体の破面。	第198図 30
66	鉄塊系遺物？（含鉄、鉄片状）	SZ-67 f区	0.3	1.2	0.2	0.3	2	錆化（△）	前者をこぶ状にした様な外観を示す鉄塊系遺物。表面は錆膨れと滓に覆われている。透過X線像では最大幅3mm程の細身で、薄い鉄部が確認される。鍛造痕は不明瞭ながら、本体から脱落した鉄片とみられ、表層が錆化した資料か。	第198図 31

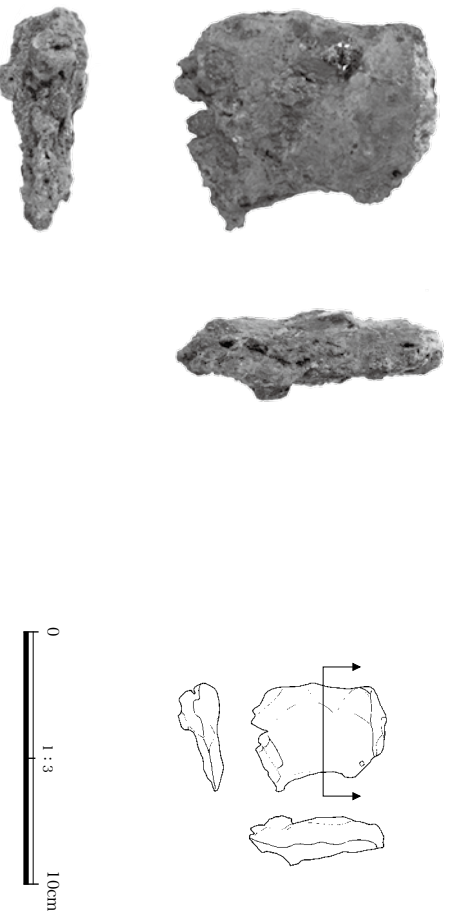
第三章 検出された遺構と遺物

67	鉄製品（鍛造品、含鉄、釘状不明品）	SZ-67 f区	0.7	2.3	0.6	2.0	3	錆化（△）	表面が錆膨れや滓層に覆われた鉄製品の小破片。外観だけではなく、透過X線像からも細身の棒状の鉄製品が芯部に確認できる。透過X線像では幅4mm弱の棒状で、方形断面の可能性をもっている。両端部が破面様。	第179図 21
68	鉄製品（鍛造品、含鉄、釘状不明品）	SZ-67 b2区	0.8	1.7	0.7	0.9	2	錆化（△）	方形断面をした細身の鉄製品破片。側部から下面には錆膨れが発達する。鉄部は上手側の端部が破面で、下手側は収束した形で滓化しているが、透過X線像では破面と見られる。幅3mm程の棒状の鉄製品である。	第179図 22
69	鉄製品（鍛造品、含鉄、釘状不明品）	SZ-67 f区	1.1	2.4	0.3	1.0	2	錆化（△）	上手側の端部と右側部に貝殻状の錆膨れが生じた鉄製品破片。断面形は幅4mm×厚さ2.4mm前後を測り、長方形気味の断面形。下面は上下二枚が接しているようにもみえる。短軸方向は両端部とも破面。小さな棒状の鉄製品2個体が融着したものか。	第179図 23
70	鉄製品（鍛造品、含鉄、釘状不明品）	SZ-67 f区	0.3	2.0	0.3	0.8	2	錆化（△）	上手側の端部が小さく折り曲げられている棒状の鉄製品。下面側が体部と推定される。釘のような明瞭な頭部形状ではなく、端部はL字状に折れ曲っている。	第179図 24
71	鉄製品（鍛造品、含鉄、釘状不明品）	SZ-67 f区	0.4	1.6	0.3	0.4	2	錆化（△）	幅4mm前後を測る細身の鉄製品破片。両端部が破面とみられ、上面の中央部は細い溝状に窪んでいる。意図的な形態か、錆化による脱落かのどちらかであろう。性格は不明。	第179図 25
72	鉄製品（鍛造品、含鉄、鉄片状不明品）	SZ-67 f区	0.6	2.7	0.3	2.0	3	錆化（△）	上手側が折り返されている扁平な棒状鉄製品。断面形は薄板状で、幅7mm前後×厚さ2mm以下を測る。加工された鉄製品ではなく故鉄であろうか。外観は錆膨れにより不明瞭ながら、透過X線像では明瞭に読み取れる。	第179図 26
73	砥石（自然石砥石）	SZ-67 f区	1.5	4.2	3.2	22.0	2	なし	右側部が破面と推定される自然石砥石の表面破片。上面にも僅かな面が生じており、破面かもしれない。残る側部は新旧の破面が4面数えられる。石質はスポンジ状で火山岩か。砥石としては、荒砥から中砥相当であろう。硬く大ぶりの砥石の肩部小破片と推定される。	第178図 20
74	炉壁（製錬炉、滓付き）	SK-86	3.4	2.6	1.3	18.0	1	なし	内面側が黒色ガラス質滓化した炉壁破片。側部4面と外面が破面になっている。内面には1cm大前後の木炭痕と微細な垂れに加えて錆膨れも混在する。内面左下のこぶ状の部分は僅かに含鉄気味の滓部である。炉壁胎土は微細な礫を混じえるやや硬質土。	第208図 3
75	鉄製品（鍛造品、含鉄、滓板状不明）	SK-95e	3.0	2.3	0.4	7.0	3	錆化（△）	X線No.15 側部4面が破面になった、厚さ3~4mmを測る薄板状の鉄製品。上面左上の部分には大きな錆膨れがみられる。右側部の新しい破面には薄皮状の鉄部が露出しており、表面や破面の様相が古代の鉄製品とは異なっている。近世以降の鉄製品破片の可能性を残す。右破面側からは上手側の側部が生きているようにもみえる。性格不明。	第212図 2
76	鉄製品（鍛造品、含鉄、刀子）	SK-96	8.0	1.2	0.6	9.0	3	錆化（△）	短い刀子の完形品。背側の中間部に低い関が確認される。茎部は3.6cmと短く、刃部は4.5cmと減っている。（砥ぎ減り？）刃部側を中心に表裏面は錆膨れが連続する。茎部の先端は丸みをもって収束し、身厚は関付近が4mm前後と最も厚い。茎部の長さから小型の刀子ではあるが、刃部が特に短い資料といえる。茎部の下面一部に木質様の痕跡あり。	第226図 16
77	鉄製品（鍛造品、含鉄、滓板状不明）	SK-96a	2.9	3.0	0.3	7.0	3	錆化（△）	X線No.16 上手側の端部が直線状で、左右の側部が小さく折り曲げられた鉄製品破片。下手側は不規則な割れとなる。飾り金具様の鉄製品であるが、用途は不明。上面上手側の膨らみは錆膨れによる。錆化の状態が古代の鉄製品とはやや異なっており、中世以降の資料か。	第215図 3
78	鉄製品（鍛造品、含鉄、釘、木部付き）	SK-129a	1.8	4.1	0.9	5.0	1	錆化（△）	X線No.17 表面が木質と土砂に覆われた不明鉄製品。左右の側部には方形断面をもつ鉄製品が芯部抜けの状態ですき抜けており、短軸方向に伸びる木部は芯まで木質で、鉄部は左右に突き抜けた中空部のみの可能性が高い。釘の打ち込まれた木材の破片であろうか。	第264図 1
79	炉壁（製錬炉、滓付き）	SD-3	4.8	3.1	2.9	54.0	1	なし	側部三面と外面が破面になった炉壁破片。炉壁胎土は全体が黒色ガラス質滓化気味で、もとの胎土は認められない。内面はスポンジ状の滓化が進み、黒褐色と茶褐色の混在状態となる。一部に木炭痕あり。製錬炉の炉壁破片であろう。	第198図 32

80	炉壁（製錬炉、滓付き）	SD-3	4.4	4.3	3.7	85.0	2	なし	分析資料No.3 詳細観察表参照。	第198図 33
81	鉄製品（鍛造品、含鉄、滓板状不明）	SD-3	2.9	2.4	0.2	3.0	3	錆化（△）	X線No.8, X線No.8-3 構成No.77とやや類似した外観をもつ鉄製品。一見、鎌様の外観を示し、下手側の側部が半円形に途切れている。左側部は小さく折り返されており、右側部は欠け落ちて錆膨れが発達する。上手側の端部は直線状に途切れており、右側の折り返し部を除けば完形に近い鉄製品であろう。厚みは1mm前後とごく薄い。刃部様の部分を除けば、構成No.77と似た鉄製品といえる。錆の状態も古代の資料とは異なり、中世～明治初年までの鉄製品に近い状態を示す。	第239図 8
82	鉄製品（鍛造品、含鉄、棒状不明）	SD-3	0.9	1.5	0.3	1.0	1	錆化（△）	X線No.8, X線No.8-4 扁平棒状の鉄製品破片。上手側の端部は明瞭な破面で、下手側は弧状に成形されている。左側部はほぼ生きており、右側部はやや破面様。厚みは3mm前後を測り、用途不明。	第239図 9
83	鉄製品（鍛造品、含鉄、棒状不明）	SD-3	1.0	3.6	0.6	5.0	2 3	錆化（△）	X線No.8, X線No.8-2 2片に割れている金具様の鉄製品。半環状の薄板状で、武具または農具の締具様の鉄製品となる。幅は8mm前後、厚みは9mmから4mmと変化が激しい。短軸方向の両端部が内側に向かってゆるやかに折り曲げられている。	第239図 10
84	鉄製品（鍛造品、含鉄）	SD-3	9.5	1.0	0.6	15.0	3	錆化（△） L（●）	X線No.8, X線No.8-1 左端部が破面になった棒状不明品。右方向は茎状に先が尖った形で細く成形され、厚みも薄くなっている。右側の本体部分の断面形は長方形で、角棒状を示す。幅1cm×厚さ6mm前後を測る。刃部が認められないため、何らかの工具破片か。体部と茎部の間は小さくL字状に折れ曲がっている。また、茎様の部分全体が捻れた形となる。鉄部がしっかりしており、近世～近代の鉄製品か。	第239図 11
85	鉄製品（鍛造品、含鉄、金色）	SZ-66 主体部	13.7	2.5	0.6	39.0	4	錆化（△）	X線No.26 左右の端部が上方に反り返った形態を示す小型の鉄剣。一見、槍刀様の外観を示すが、各部の特徴からみると短剣であろう。切っ先は三角形に尖り、上下面には錆が確認される。関は両関で、狭い羽子板状の茎に至る。身の長さは10.2cm前後×茎部は4.15mm前後を測る。身幅は切先寄りか最も広く2.3cm程度で、関側は1.7cm前後を測る。刃部の断面形は錆膨れや酸化土砂のためやや不明瞭ながら、薄いレンズ状に見える。但し、切っ先側は膨らみが弱い。長軸方向に反り返っており、土圧等（意図的？）の影響も考えられる。透過X線像では微かに鍛造痕が確認されるが身が薄く、錆化も進んでいるために9割以上が不明瞭である。茎部の先端寄りに径3mm弱の円形目釘穴あり。また、茎部の表面には、薄皮状の木質が一部酸化土砂中に残されている。	第171図 1
86	炉壁（製錬炉）	D8C	3.5	4.1	1.9	22.0	1	なし	側部両面と外面が破面になった炉壁破片。内面はガラス質に滓化・発泡して、二次的な風化のためか灰白色になっている。僅かに木炭痕も混在する。内面寄りの表層のみが滓化した程度で、全体の被熱としては弱い。胎土は僅かにスサや籾殻を混じえる粘土質。被熱色は灰褐色である。製錬炉の炉壁片と推定され、部位は炉体の上部破片であろう。（中段上半辺りか）	第198図 34
87	鉄製品（鍛造品、含鉄、棒状不明）	F11	3.8	0.9	0.3	3.0	2	錆化（△）	左右の側部が破面になった扁平棒状の鉄製品。断面形が幅9mm×厚さ2.5mm程度の長方形断面となる。表面には錆膨れが生じており、刃部はなし。	第273図 4

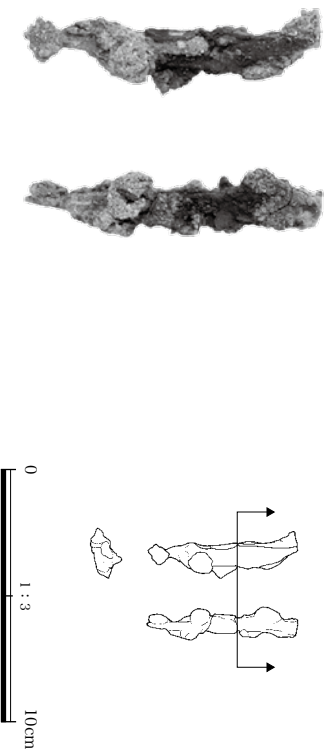
第 72 表 横倉遺跡・横倉戸館古墳群鉄関連遺物観察表 (1)

出土状況	遺跡名 出土位置	横倉遺跡・横倉戸館古墳群		遺物 No.	12			項目	滓	メタル	
		SI-75			時期：根拠	9世紀後半～10世紀前半；出土土器					
試料記号	検 鏡： 化学：YOK-1 放射化：	長径	5.3 cm	色 調	表：茶褐色～黒色～褐色	遺 存 度	ほぼ完形	検 鏡 硬 度 C M A	◎		
	測定	短径	3.3 cm		地：灰黒色～黒色・灰褐色						破 面 数
遺物種類 (名称)		楕形鍛冶滓 (極小・奇数)	厚さ	1.6 cm	磁着度	2	前 含 浸	—	カオリー 放射化		
	重量		32.0 g	メタル度	錆化 (△)	断面樹脂					—
観察所見	<p>上手側の側部が小破片になった、薄手の楕小楕形鍛冶滓のほぼ完形品。左側部が直線状に途切れており、上面には羽口頸部から垂れ落ちた黒色ガラス質滓が僅かに乗っている。右側部は弧状に窪んでいるが自然面とみられる。下手側の側部は徐々に薄くなって収束する。上面は低い波状の面をなし、一部に木炭痕が認められる。下面は浅い楕形で、左側がやや厚くなる。左側部下半と右側部中段に隙間を生じており、原料単位が2単位の疑いをもつ。透過X線像では滓内部が中小のヌボンジ状で、密度は低め。上下面ともごく弱い磁着傾向を示す。下面の大半は灰床土の圧痕によりサラサラした質感をもち、右上手側の下面のみ、灰色の灰床土の痕跡を残す。表面の色調は上面の8割方が酸化土砂により茶褐色で、ガラス質滓部のみ黒色となる。側部から下面は褐色基調。地は灰黒色から黒色で、破面の一部は風化のためか灰褐色となる。</p>										
分析部分	<p>短軸端部 1/2 を直線状に切断し、滓部を中心に分析に用いる。残材返却。</p>										
備 考	<p>きわめて僅かな含鉄部をもつ滓部主体の完形に近い楕形鍛冶滓。SI-75 住居跡出土の楕形鍛冶滓としてはやや小振りな個体で厚みが薄い特色をもっている。鍛錬鍛冶工程に伴う楕形鍛冶滓と推定される。SI-75 出土資料から構成した楕形鍛冶滓の比率は中型が1点、小型が1点、楕小サイヌの118g～30g弱までが12点というパランスで本遺跡としては中心的な楕形鍛冶滓のひとつである。その他の鍛冶関連遺物としては、羽口片に加え不定形な鍛冶滓や粒状の滓がある。鉄塊系遺物が2点、鍛冶系の鉄製品が分析資料No.2を含めて4点、工房床面で生成したと推定される再結合滓、転用ルツボの可能性をもつ被熱・発泡した土器片2点と自然石底石1点という全体の組み合わせになっている。従って、出土量はそう多いとは言えないが、鍛冶関連セットとしてはほぼ理解できる内容をもっている。なお、構成資料には含まれていないが、現場で作業員が中空の粒状滓を拾ったという情報も担当者には伝えられている。</p>										



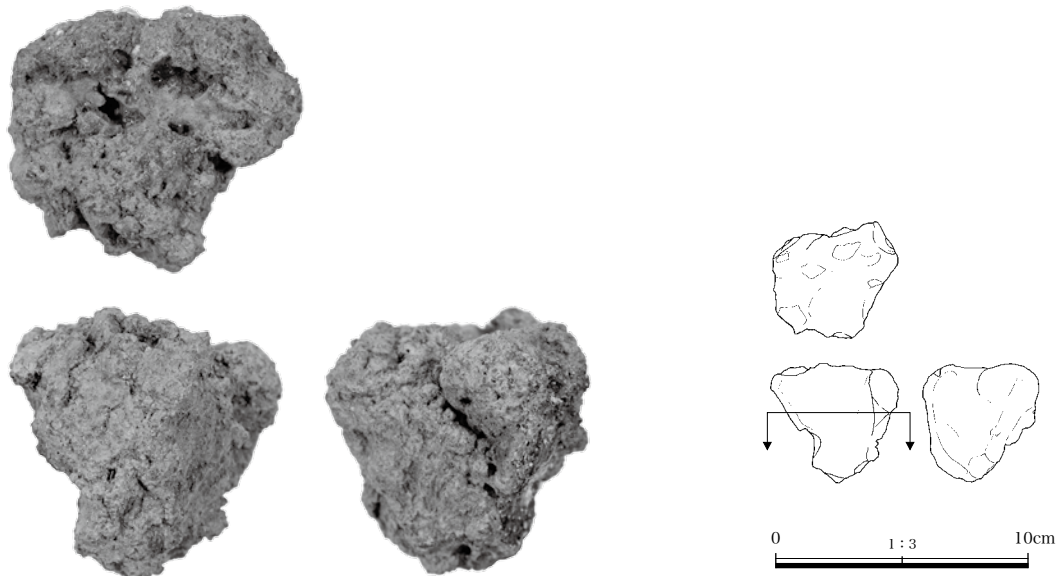
第73表 横倉遺跡・横倉戸館古墳群鉄関連遺物観察表 (2)

出土状況	遺跡名 出土位置	横倉遺跡・横倉戸館古墳群		遺物No. 31	時期：根拠			項目	滓	メタル	
		SI-75 1B			9世紀後半～10世紀前半；出土土器						
試料記号	検鏡： 化学： 放射化：	YOK-2 — —		色調	遺存度	ほぼ完形？	メタル度	滓	メタル		
	計測	長さ 短径 厚さ	5.9 cm 0.9 cm 1.1 cm							表：褐色～濃茶褐色 地：濃茶褐色～黒褐色	破面数
遺物種類 (名称)	(鍛造品、釘状不明、未成品?)	重量	100 g	磁着度	前含浸	断面腐蝕	M (◎)	析	耐火度	X線回折	X線透過
観察所見	<p>表面各所に錆跡が生じ、残りの良い体部からは黒錆の滲む釘未成品状の鉄製品。上手側の端部は平坦に途切れており、釘としては頭部が未完成である。下手側の足部は、尖った形で収束しており、足部としてはほぼ完成形である。体部の断面形は、径7mm程度の方形断面に加工されており、頭部以外はほぼ完成された釘様である。平面形は頭部側が短く折れ曲がっており、上下面も同時に緩やかな波状うねっている。含鉄部はメタル度M (◎) で、見掛けの割りには表層の錆化が進んでいる鉄製品と言える。分析資料に選択した理由は、全体の折れ曲がりやねじれに加え、含鉄部が一定量残存すると推定されることによる。また、鍛打加工が進むと錆化も進みやすい事も副次的な条件である。表面の色調は酸化土の砂部分が褐色で、錆化部分は濃茶褐色が主体となる。地は濃茶褐色から黒褐色。釘体部からは錆の滲みと放射割れも発達しつつある。</p>										
分析部分	<p>短軸端部2/5を直線状に切断（仮接合部より分離）し、メタル部を中心に分析に用いる。体部中央で割れたものをセメダインで軽く接着していることに留意。残材断面に樹脂塗布。残材返却。</p>										
備考	<p>分析資料No.1とセットを成す、SI-75住居跡からの出土品である。小型から極小の砲形鍛冶洋のセットに対して、鍛冶工房で加工された鍛造の鉄製品の代表資料として分析用に選択されている。含鉄部の状態と釘未成品の疑いをもつ点も補助的な条件である。</p>										



第 74 表 横倉遺跡・横倉戸館古墳群鉄関連遺物観察表 (3)

出土状況	遺跡名	横倉遺跡・横倉戸館古墳群		遺物 No.		80		項目	滓	胎土	
	出土位置	SD-3		時期：根拠	18世紀後半～19世紀前半：出土土器						
試料記号	検鏡： YOK-3	計測値	長径	4.6	色調	表：褐色～茶褐色～灰色	遺存度	破片	マクロ	○	○
	化学： -		短径	2.2		地：茶褐色～黒色					
放射化： -	厚さ		4.4	磁着度	2	前含浸	-				
遺物種類 (名称)	炉壁 (製錬炉、滓付き)		重量					85.0			
観察所見	内面の小範囲が生きている炉壁破片。側面4面と外面が剖面になっており、割面数は4を数える。炉壁としての平面形は内面側が緩やかな弧状を示す。側面から外面をみると炉壁が残る部分は外面寄りの1cm程度の厚み部分で、灰黒色に被熱している。残る内面側は、厚さ3cm近い、ふ厚い黒色ガラス質となっている。内面の表層や右側部寄りには薄皮状の滓層に覆われており、茶褐色を示す。滓層の表面には木炭痕やイガイガした滓表面が認められる。炉壁胎土は7mm大以下の小礫や粗い砂粒を含んでおり、僅かに短いスサも交えられている。炉壁胎土は灰黒色で、内面寄りには黒色ガラス質、炉壁内面の滓部分は銹化気味のためか茶褐色を示す。										
分析部分	短軸端部1/2を直線状に切断し、炉壁として分析に用いる。残材返却。										
備考	SI-75住居跡を中心に構成した報告書掲載の鉄関連遺物点数は、55点である。内わけは、構成された本遺跡出土の鍛冶関連遺物87点の内、半数強がSI-75住居跡出土品で、残る半数弱はSZ-1やSD-3からの出土品となる。製錬炉の炉壁は、SD-3出土の2点(構成No.79～80)と、D8c出土の1点(構成No.85)の都合3点とごく少ない。従って、横倉遺跡・横倉戸館古墳群として調査した今回の調査区内では、僅かな製錬炉の炉壁片とSI-75住居跡を中心に数多い鍛冶関連遺物が検出されたことになる。また、出土位置や量からみれば構成資料の内容は同時期ではない可能性もあるものと判断される。										



第75表 横倉遺跡・横倉戸館古墳群鍛冶関連遺物主用要素一覧表（まとめ）

項目	主要素	横倉遺跡・横倉戸館古墳群（よこくらいせき・よこくらとだてこふんぐん）									
調査	調査概要	平成25年度（2013年度）調査組織：（公財）とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター									
遺構情報	鉄関連遺構	SZ-1 SA-2 SD-3 SK-66 SZ-66 主体部 SK-67 SI-75 SK-82 SK-95 SK-96a SK-96b SK-129a									
遺物情報	鉄関連遺物出土遺構と遺物（鉄製品除く）	SZ-1	713.0g	SZ-66 主体部	39.0g	SK-86	18.0g	SK-129a	5.0g	T20	251.0g
		SA-2	95.2g	SZ-67	927.7g	SK-95	7.0g	T14	5.8g	T25	6.8g
		SD-3	164.0g	SI-75	3,978.5g	SK-96	9.4g	T15	26.0g	グリッド	137.5g
		SZ-66	171.9g	SK-82	1.0g	SK-96a	7.0g	T18	1.0g		
	鉄関連遺物全体構成	全金属関連遺物 6,126.2g / 梶形鍛冶滓全体 4,938.4g（中 376.0g、小 1,345.8g、極小 2,254.4g、不明 962.2g）、鍛冶滓 58.1g、鉄製品 421.6g（鍛造品 345.9g、鋳造品 78.7g）、工具付着滓 3.5g、再結合滓 30.3g、鉄塊系遺物 29.6g、砥石 449.0g、粒状の滓 9.8g、炉壁 184.0g、鉄製品付着土砂 1.9g									
	梶形鍛冶滓（含鉄）構成	（極小）・L（●）70.0g、（極小）・銹化（△）886.6g、（極小）・なし 1297.8g、（小）・銹化（△）338.0g、（小）・なし 1007.8g、（中）・銹化（△）155.0g、（中）・なし 221.0g、不明・なし 962.2g									
	羽口構成	羽口総数：262点 414.2g									
	鉄製品構成	鉄製品総数：81点 鍛造品（剣2点 94.9g、針1点 0.2g、釘1点 5.0g、刀子4点 29.0g、紡錘車円盤部1点 10.0g、不明54点 206.8g） / 鋳造品（輪花皿1点 71.0g、不明17点 4.7g）									
分析	分析点数	●金属学的分析：3点 ◎梶形鍛冶滓（1点）、鉄製品（1点）、炉壁（1点） ◎分析項目 / マクロ組織・顕微鏡観察・ピッカース断面硬度・EPMA・ ・分析（解析）：日鉄住金テクノロジー（株）（大澤正巳・鈴木瑞穂）									
	工程／遺物種類	鉄製錬（TiO ₂ ）	精錬鍛冶（TiO ₂ ）	鍛錬鍛冶前半（TiO ₂ ）	鍛錬鍛冶後半（TiO ₂ ）	鋳造関連（TiO ₂ ）					
分析資料3点中	（ ）内はTiO ₂ 値。（-）は分析せず。	-	-	-	YOK-1：梶形鍛冶滓（0.30%） YOK-2：鉄製品（4.9%）	-					
鉄種別	鉄系遺物種別動向（分析資料3点中）	YOK-1：砂鉄を始発原料とする鍛錬鍛冶滓。 YOK-2：砂鉄を高温製錬してつくられた鉄塊を鍛冶原料とする、鍛打加工された鍛造製品（または未製品）。 YOK-3：砂鉄を製錬した製鉄炉の小破片。製鉄炉の小破片。									
年代	推定年代	●考古資料：出土土器による遺構の年代観は、SI-75が9世紀後半～10世紀前半で、SD-3が18世紀後半～19世紀初頭と推定される。但し、羽口や梶形鍛冶滓は平安時代の可能性が高い。									
保存	保存・活用区分	遺構			遺物						
		遺構は記録保存を目的とした発掘調査のため保存せず。			全金属関連遺物 総重量 6,126.2g						
					A 保存：金属学的分析資料 : 3点 (127.0g)						
					B 保存：報告書掲載資料 : 84点 (2,303.7g)						
			C 保存：屋内管理資料 : 938点 (3,695.5g)								
			D 保存：野外管理資料 : (0g)								
総括	遺構・遺物	平安時代（9世紀後半～10世紀前半頃）の竪穴建物跡であるSI-75から、羽口・梶形鍛冶滓・鍛冶滓・粒状の滓・砥石などが多量に出土。									
	整理・解析	整理方法は、保存・活用までを視野に入れたA～Dランク、個票付け方式で行い、全体量（A～D保存）は6,126.2gとなる。この内、報告書には87点を掲載した。内訳は、A保存を3点（127g）、B保存を84点（2,303.7g）、C保存を938点（3,695.5g）として、D保存はなしとした。									
	分析関係	金属学的結果によれば、SI-75出土の梶形鍛冶滓は、砂鉄系の原料を用いた製鉄炉で作られた素材を元にした鍛冶の後半段階にあたる鍛錬鍛冶滓であることが判明した。鉄製品については、いわゆる軟鉄であることが判明し、原料は砂鉄と判断され、かつ高温製錬炉であることが読み取れ、製鉄炉は竪形炉であったと推定できる。したがって、SI-75出土品の分析結果から、背景には竪形炉と砂鉄原料を用いた製鉄工程があり、それらから供給された原料を元にした鍛錬鍛冶の工程を行っていたと推定できる。SD-3出土の炉壁に関しては顕微鏡組織により、砂鉄原料を用いた製鉄炉の炉壁破片と判明した。時期的には、竪形炉の炉壁と考えてもほぼ矛盾はない。									
	時期	大半は平安時代以降の段階。一部に、古墳時代の鉄製品が含まれる。									
その他	平安時代の竪穴建物跡であるSI-75は羽口や梶形鍛冶滓・鉄塊系遺物・粒状の滓・砥石等、ほぼ鍛冶関連遺物のセットが出土している。また、製鉄炉の炉壁が僅かながらではあるが混入する事実があることは非常に注目されよう。特殊な資料としては、古墳時代後期と推定される、須恵器模倣坏を用いた転用坩堝の破片が含まれている。										

第IV章 理化学分析

1. 横倉遺跡・横倉戸館古墳群のテフラ分析

(株)火山灰考古学研究所

1. はじめに

関東地方北部に位置する栃木県域とその周辺には、男体山をはじめとする日光火山群、赤城、浅間、榛名など北関東地方とその周辺に分布する火山のほか、中部地方や中国地方さらには九州地方など遠方に位置する火山から噴出したテフラ（火山碎屑物、いわゆる火山灰）が数多く降灰している（町田・新井，1992，2003，2011）。とくに後期更新世以降に降灰したそれらの多くについては、層相や年代さらに岩石記載的な特徴がテフラ・カタログなどに収録されており、考古遺跡などで調査分析を行いテフラを検出することで、地形や地層の形成年代さらには考古学的に遺物や遺構の年代などに関する研究を実施できるようになっている。

そこで、小山市横倉戸館古墳群の発掘調査でも、地質調査を行って土層層序を記載するとともに、高純度で試料を採取し、発掘調査担当者により採取された試料を合わせて、実験室内でテフラ分析（テフラ検出分析、火山ガラス比分析、火山ガラスの屈折率測定）を実施して、すでに年代が明らかにされている指標テフラの検出同定を実施することになった。分析の対象地点は、SZ-1・A-A' セクション（墳丘部）、SD-3・D-D' セクション、SZ-1・A-A' セクション（周溝）、SZ-66・C-C' セクション、SD-70・F-F' セクション、SK-77・A-A' セクション、E13d グリッドの7地点で、ほかにSZ-67・C-C' セクションにおいて発掘調査担当者により採取された試料についても分析を行った。

2. 土層の層序

(1) SZ-1・A-A' セクション（墳丘部）

SZ-1の墳丘断面では、下位より色調がとくに暗い暗灰褐色土（層厚21cm, ⑨層）、暗灰褐色土（層厚21cm, ⑤層）が認められる（図1）。その上面はいわゆる旧地表面で、その上位にやや灰色がかかった褐色土からなる墳丘の盛土（層厚20cm, ④層）がのる。また、その上位には灰褐色土（層厚7cm, ③層）が形成されている（図1）。

(2) SD-3・D-D' セクション

SD-3・D-D' セクションで認められたSD-3溝状遺構の覆土は、下位より黄色土ブロックに富む灰褐色土（層厚6cm, ⑧層）、黒灰褐色土ブロック混じりで色調がとくに暗い暗灰褐色土（層厚17cm, ⑦層）、色調がとくに暗い暗灰褐色土（層厚9cm, ⑥層）、暗灰褐色土（層厚23cm, ⑤層）、黄色土ブロック混じりでやや色調が暗い灰褐色土（層厚9cm, ④層）、灰褐色土（層厚12cm, ③層）、やや色調が暗い灰褐色土（層厚17cm, ②層）、灰褐色土（層厚14cm, ①層）からなる（図2）。

(3) SZ-1・A-A' セクション（周溝）

SZ-1・A-A' セクションで認められたSZ-1周溝覆土は、下位より黄色土ブロック混じり灰褐色土（層厚6cm, 15層）、暗灰褐色土（層厚9cm, 以上14層）、淡い灰褐色土（層厚15cm, 13層）、白色粗粒火山灰を少

し含み黒みがかった暗灰褐色土（層厚 16cm, 12 層）、暗灰褐色土（層厚 27cm, 10 層）、淡い灰褐色土（層厚 12 cm, 9 層）、黒灰色土（層厚 47cm, 6 層）、暗灰褐色土（層厚 16 cm, 5 層）、やや色調が暗い灰褐色土（層厚 23cm, 4 層）からなる（図 3）。

（4）SZ-66・C-C' セクション

SZ-1 より新しいと推定されている SZ-66・C-C' セクションでの覆土は、下位よりやや色調が暗い灰褐色土（層厚 18cm, 3 層）、やや褐色がかった暗灰色土（層厚 25cm, 2 層）、色調がとくに暗い暗灰褐色土（層厚 19cm, 1 層）、灰褐色表土（層厚 17cm, 1 層）からなる（図 4）。

（5）SD-70・F-F' セクション

SD-70・F-F' セクションにおける遺構覆土は、下位より灰褐色土（層厚 6 cm, 3 層）、暗灰褐色土（層厚 18cm）、灰褐色土（層厚 9 cm, 以上 2 層）、やや色調が暗い灰褐色土（層厚 17cm, 1 層）、灰褐色表土（層厚 20cm, 1 層）からなる（図 5）。

（6）SK-77・A-A' セクション

SK-77・A-A' セクションでの遺構覆土は 25 層に分けられている。このうち、A-A' セクションと B-B' セクションとの交点近くの層を試料として採取した。下位からやや灰色がかった褐色土（層厚 36cm, 21 層）、暗灰褐色土（層厚 9 cm, 10 層）、黒灰色土（層厚 18cm, 9 層）、色調がとくに暗い暗灰褐色土（層厚 23cm, 5 層）、暗灰褐色土（層厚 29cm, 2 層）からなる（図 6）。

（7）E13d グリッド

E13d グリッドでは、本遺跡斜面部の基本的な土層断面を観察できた（図 7）。ここでは、下位より黄色土（層厚 12cm 以上, VII 層）、灰色土（層厚 37cm, VI 層）、黄色土（層厚 19cm, V 層下位）、やや灰色がかった黄色土（層厚 22cm, V 層上位）、やや灰色がかった褐色土（層厚 12cm, IV 層）、暗灰褐色土（層厚 24cm, III 層）、黒褐色土（層厚 27cm, II 層）、暗灰褐色土（層厚 13cm, I 層）が認められる。これらのうち、上位より 4 層目のやや灰色がかった褐色土（IV 層）と、その上位の暗灰褐色土は、縄文時代早～中期の遺物包含層と推定されている（図 7）。

3. テフラ検出分析

（1）分析試料と分析方法

SZ-1・A-A' セクション（墳丘部）、SD-3・D-D' セクション、SZ-1・A-A' セクション（周溝）、SZ-66・C-C' セクション、SD-70・F-F' セクション、SZ-67・C-C' セクション、SK-77・A-A' セクション、E13d グリッドにおいて採取された試料のうち、76 試料を対象にテフラ粒子の特徴を定性的に把握するテフラ検出分析を行って、指標テフラの検出同定を実施した。分析方法は次のとおりである。

- 1) 試料 7 g を秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 恒温乾燥器により 80℃で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下で観察。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1および表2に示す。SZ-1・A-A' セクション(墳丘部)では、試料5、試料3、試料7、試料5' にスポンジ状に良く発泡した灰白色軽石型ガラスが認められる。これらの中では、試料5' で比較的多くのこのタイプの火山ガラスが認められる。また、試料1および試料7' に淡灰色、また試料5' に淡灰色のスポンジ状軽石型ガラスが含まれている。

SZ-1・A-A' セクションのSZ-1周溝部では、スポンジ状に良く発泡した灰白色軽石型ガラスが、試料48、試料44、試料42、試料38、試料36で少量ずつ認められる。試料38や試料36にはさほど発泡の良くない白色軽石(最大径2.1mm)や、その細粒物である白色のスポンジ状軽石型ガラスが比較的多く含まれている。軽石の斑晶には、斜方輝石や角閃石が認められる。試料34より上位では、淡灰色、淡褐色、褐色のスポンジ状軽石型ガラスが比較的多く認められる。このタイプの火山ガラスは、量に違いはあるものの、SD-3の覆土の試料のいずれにも含まれている。なお、褐色のスポンジ状軽石型ガラスには光沢がある。

SZ-66・C-C' セクションでは、試料16から試料6にかけて、スポンジ状に良く発泡した灰白色軽石型ガラスが認められる。また、試料6より上位では、さほど発泡の良くない白色軽石(最大径2.2mm)や、その細粒物である白色のスポンジ状軽石型ガラスが認められ、とくに試料4に多い。また、軽石の斑晶には、斜方輝石や角閃石が認められる。試料2には、このほか、淡灰色、淡褐色、褐色のスポンジ状軽石型ガラスが多く含まれている。そのうち、褐色のスポンジ状軽石型ガラスには光沢がある。鉄鉱物以外の鉱物としては、斜方輝石、単斜輝石、角閃石が認められるが、さほど発泡の良くない白色軽石や、その細粒物である白色のスポンジ状軽石型ガラスが多く認められる試料では、角閃石が占める割合が高い傾向にある。

SD-70・F-F' セクションでは、分析対象となったいずれの試料からも、淡灰色、淡褐色、褐色のスポンジ状軽石型ガラスが検出された。これらのうち、褐色のスポンジ状軽石型ガラスには光沢がある。これらはとくに試料12、試料10、試料8で多い傾向にあるが、より下位の試料14にも比較的多く含まれている。これらの試料には、ほかに白色のスポンジ状軽石型ガラスも少量含まれている。

SZ-67・C-C' セクションでは、試料16および試料14で、スポンジ状に良く発泡した灰白色軽石型ガラスが少量ずつ認められる。また、試料12より上位で、白色のスポンジ状軽石型ガラスが少量ずつ含まれている。さらに、とくに試料8に淡灰色、淡褐色、褐色のスポンジ状軽石型ガラスが多く含まれている。これらのうち、褐色のスポンジ状軽石型ガラスには光沢がある。

SK-77・A-A' セクションでは、試料19にスポンジ状に良く発泡した灰白色軽石型ガラスが少量含まれている。試料17には、白色のスポンジ状軽石型ガラスが比較的多く含まれており、それより上位でも少量ずつ認められる。とくに、試料13や試料3には細粒の白色軽石も含まれている(最大径2.2mm)。

遺跡斜面部の基本的な土層断面であるE13dグリッドでも、試料28をのぞくいずれの試料からも火山ガラスが検出された。このうち、試料26から試料16にかけては、無色透明のバブル型ガラスが連続的に検出される。このタイプの火山ガラスは、試料24から試料18にかけて比較的多い。

それより上位では、試料14～12に分厚い中間型ガラス、試料4に白色のスポンジ状軽石型ガラスが少量ずつ含まれている。さらに、試料2では、淡灰色、淡褐色、褐色のスポンジ状軽石型ガラスが比較的多く認められ、これらのうち褐色のものには光沢がある。

4. 屈折率測定（火山ガラス）

（1）測定試料と測定方法

テフラ検出分析により、特徴的な火山ガラスが検出された試料のうち、SZ-1・A-A' セクション（周溝）の試料 42、試料 38、試料 30、SZ-66・C-C' セクションの試料 14、SZ-67・C-C' セクションの試料 16 と試料 8、E13d グリッドの試料 24、そして SZ-1 墳丘部の試料 5' に含まれる火山ガラスを対象に、温度変化型屈折率測定法（壇原，1993）により火山ガラスの屈折率測定を実施し、指標テフラとの同定精度の向上を図った。

屈折率の対象は、SZ-1・A-A' セクション（周溝）の試料 42 および試料 38 と E13d グリッドの試料 24 が、テフラ検出後に篩別によって得られた 1/8-1/16mm 粒子中の火山ガラス、SZ-1・A-A' セクション（周溝）の試料 30、SZ-66・C-C' セクションの試料 14、SZ-1 墳丘部の試料 5' が、>1/4mm 粒子中の軽石型ガラスを軽く粉砕して得たものである。

（2）測定結果

屈折率測定の結果を表 3 および表 4 に示す。この表には、後期旧石器時代以降の代表的な指標テフラの火山ガラスの屈折率特性も示した。

SZ-1・A-A' セクション（周溝）の試料 42 に含まれる火山ガラス（34 粒子）の屈折率（ n ）は、1.498-1.509 である。この range は実際には trimodal 組成となっており、 n :1.498-1.504（28 粒子）と、 n :1.506（2 粒子）、 n :1.509（4 粒子）からなる。試料 38 に含まれる火山ガラス（30 粒子）の屈折率（ n ）は、1.498-1.512 である。この range は実際には bimodal 組成となっており、 n :1.498-1.506（25 粒子）と、 n :1.509-1.512（5 粒子）からなる。さらに、試料 30 に含まれる軽石型ガラス（33 粒子）の屈折率（ n ）は、1.526-1.530 である。

SZ-66・C-C' セクションの試料 14 に含まれる軽石型ガラス（31 粒子）の屈折率（ n ）は、1.516-1.519 である。また、SZ-67・C-C' セクションの試料 16 に含まれる火山ガラス（30 粒子）の屈折率（ n ）は、1.514-1.521 である。試料 8 に含まれる火山ガラス（30 粒子）の屈折率（ n ）は、1.522-1.534 である。

E13d グリッドの試料 24 に含まれる火山ガラス（30 粒子）の屈折率（ n ）は、1.498-1.500 である。さらに、SZ-1 墳丘部の試料 5' に含まれる火山ガラス（30 粒子）の屈折率（ n ）は、1.515-1.521 である。

5. 考察

（1）指標テフラとの同定

ここでは、テフラ検出分析により検出されたテフラ粒子の起源と指標テフラの降灰層準について考える。SZ-1・A-A' セクション（周溝）の試料 42（9 層）および SZ-66・C-C' セクションの試料 14（3 層）に含まれる軽石型ガラスで検出された灰白色のスポンジ状軽石型ガラスは、その岩相および後者の屈折率特性から、3 世紀後半に浅間火山から噴出した浅間 C 軽石（As-C，荒牧，1968，新井，1979，町田・新井，1992，2003，坂口，2010）に由来すると考えられる。したがって、SZ-1 墳丘部の墳丘盛土やその下位で認められた灰白色のスポンジ状軽石型も、岩相および屈折率特性（別報）から As-C に由来すると考えられる。

なお、SZ-1・A-A' セクション（周溝）の試料 42（9 層）では、その含有率が低いために、ルーティンの屈折率測定では、測定対象にできなかったようである。屈折率特性から、この試料には約 2.4～2.5 万年前*1 に始良カルデラから噴出した始良 Tn 火山灰（AT，町田・新井，1976，1992，2003 など）や、約 1.3～1.4 万年前*1 に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石（As-YP，新井，1962，町田・新井，1992，2003 など）をはじめとする浅間系テフラなどが混在していると推定できる。

SZ-1・A-A' セクション（周溝）の試料 38（6 層）に多く含まれる白色の軽石や軽石型ガラスは、その岩相から、6 世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ層（Hr-FA, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992, 2003）、あるいは 6 世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ（Hr-FP, 新井, 1962, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992, 2003）に由来すると推定される。今回の測定で得られた $n:1.498-1.506$ の火山ガラスの存在は、前者に由来する可能性が高いことを示唆している。

SZ-66 方形周溝墓の周溝覆土から検出された白色の軽石やその細粒物である白色のスポンジ状軽石型ガラスについても、岩相から Hr-FA に由来すると考えられる。

また、SZ-1・A-A' セクション（周溝）の試料 30（SA-2 土壘盛土 6 層）に多く含まれている淡灰色、淡褐色、褐色の軽石型ガラスは、その岩相や屈折率特性から 1108（天仁元）年に浅間火山から噴出したと推定されている浅間 B テフラ（As-B, 荒牧, 1968, 新井, 1979）と考えられる。したがって、SD-3・C-C' セクションのほとんど、また、SZ-66 の周溝覆土の試料 6（1 層）より上位の試料に含まれる同様のテフラ粒子も、As-B に由来すると考えられる。

屈折率測定の対象となった試料のうち、SZ-67・C-C' セクションの試料 16（3 層上部）に含まれるスポンジ状に良く発泡した灰白色軽石型ガラスは、その岩相や屈折率特性から、As-C に由来すると考えられる。また、SZ-1 の墳丘盛土下位にあって、テフラ検出分析により As-C の可能性が高いと考えられた、SZ-1 墳丘部の試料 5'（1b 層：墳丘盛土下部）に含まれる、スポンジ状に良く発泡した灰白色軽石型ガラスについても、屈折率特性から As-C であることが確かめられた。このことにより、SZ-1 の層位が As-C より上位で、Hr-FA より下位にあることがより確かになった。古墳など盛土構造をもつ遺構の層位を把握する場合には、このように、周溝などの覆土のほかに、墳丘盛土下位のいわゆる旧地表面を構成する土層の分析も合わせて行われると良い。

SZ-67・C-C' セクションの試料 8（1 層基底部）に多く含まれる淡灰色、淡褐色、褐色のスポンジ状軽石型ガラスは、その岩相や火山ガラスの屈折率特性から、As-B と考えられる。

E13d グリッドのローム層中の試料 24 に比較的多く含まれる無色透明のバブル型ガラスは、その岩相や屈折率特性から AT と考えられる。この試料の採取層準から上位で、AT 起源の火山ガラスが比較的多く検出されることから、試料 24 付近に AT の降灰層準があると考えられる。一般的に、より土層が厚い群馬県域における旧石器時代遺跡などでは、AT 降灰層準のあたりに、AT およびその直上の約 1.9～2.4 万年前*1 に浅間火山から噴出した浅間板鼻褐色軽石群（As-BP Goup, 新井, 1962, 町田・新井, 1992 など）最下部の室田軽石（MP, 森山, 1971, 早田, 1990）を挟んで、AT 下位の暗色帯と AT 上位の暗色帯と呼ばれる土層の存在が知られている。したがって、E13d グリッドにおいて、試料 24 が採取された比較的暗色の土層は、これらの土層に対比されよう。

また、E13d グリッドのローム層最上部付近の試料 14 に含まれる中間型ガラスは、層位や岩相から約 1.7 万年前*1 に浅間火山から噴出した浅間大窪沢第 1 軽石（As-Ok1, 中沢ほか, 1984, 早田, 1996）に由来する可能性が高く、この降灰層準があると考えられる。それより上位の試料の中に含まれる無色透明の中間型ガラスや繊維束状軽石型ガラスは、層位や岩相などから、As-YP に由来するものが多いと推定される。これらローム層中の指標テフラに関しては、今後、後期旧石器時代遺物などが検出された際などに、火山ガラス比分析により定量的に降灰層準が議論されると良い。

E13d グリッドの黒ボク土から検出されたテフラ粒子のうち、試料 4 に含まれる白色のスポンジ状軽石型ガラスは、層位や岩相から、Hr-FA あるいは Hr-FP に由来すると推定される。テフラの分布と本遺跡との位置

関係を考えると、前者に由来する可能性がより高い。また、試料2に多く含まれる淡灰色、淡褐色、褐色のスポンジ状軽石型ガラスは、その岩相や火山ガラスの屈折率特性から、As-Bと考えられる。

(2) 遺構の層位について

SZ-1・A-A' セクション（墳丘部）では、墳丘盛土の下部から採取された試料5'（◎層）からAs-Cが比較的多く検出されており、同じ粒子が検出されはじめる試料5（◎層）付近にAs-Cの降灰層準があると考えられる。また、SZ-1・A-A' セクション（周溝）では、テフラ粒子の濃集の程度から、試料38（6層）にHr-FA、試料30（SA-2土塁盛土6層）にAs-Bの降灰層準があると推定される。したがって、SZ-1の層位は、As-Cより上位で、Hr-FAより下位と考えられる。また、SZ-1周溝より上位のSD-3の層位はAs-Bより上位にある。

SZ-66 方形周溝墓に関しては、分析対象となった周溝覆土のいずれの試料からもAs-Cが検出され、とくに顕著な濃集は認められなかった。また、試料6（1層）より上位ではHr-FAやAs-Bが認められた。墳丘部の分析ができなかったことから、層位認定精度はとくに高いとはいえないものの、この遺構の層位もAs-Cより上位で、Hr-FAより下位の可能性がある。

SD-70の層位は、覆土最下部の試料14（3層）にも比較的多くのAs-Bが含まれていることから、遺構構築後に堆積物の流失や人為による除去がない限り、As-Bより上位と考えられる。このことは、考古学的な見地から中世の可能性が考えられていることと矛盾しない。

また、SZ-67の層位は、周溝覆土中の試料16（2層下部）付近にAs-Cの降灰層準がありそうなことから、As-Cより下位の可能性がある。ただし、As-Cの検出量が少なく、濃集の程度も良くないこと、また試料16より下位の土層が墳丘部や周溝壁などから崩落し急速に形成された土層の場合にはAs-Cの粒子の含有率が非常に低いこともあることから、その層位の認定には墳丘盛土下位の土層も合わせてテフラ分析を実施するなど慎重さが必要である。もちろん、出土遺物の考古学的検討も必要になる。

SK-77に関しては、遺構覆土最下部からAs-Bが検出されず、それより上位からAs-Bが検出された。このことから、As-B降灰を遡る時期の可能性が考えられる。しかしながら、As-Bが検出されなかった試料19（18層下部）は明色の土層で、遺構壁からの崩落土の可能性が十分に考えられる。SK-77からは中世後半の遺物が検出されたこと（栃木県教育委員会文化財課・とちぎ未来づくり財団，2013）を考えると、後者の可能性が高いと推定される。

6. まとめ

小山市横倉戸館古墳群において、地質調査とテフラ分析（テフラ検出分析および火山ガラスの屈折率測定）を実施した。その結果、下位より始良Tn火山灰（AT，約2.4～2.5万年前*1）、浅間大窪沢第1軽石（As-Ok1，約1.7万年前*1）、浅間板鼻黄色軽石（As-YP，約1.3～1.4万年前*1）、浅間C軽石（As-C，3世紀後半）、榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA，6世紀初頭）、浅間Bテフラ（As-B，1108年）などに多くの指標テフラに由来するテフラ粒子を認めることができた。

発掘調査で検出された遺構のうち、SZ-1およびSZ-66の層位は、As-Cより上位でHr-FAの下位と考えられる。また、SZ-1方墳より上位のSD-3、SD-70、SK-77は、As-Bより上位にある。さらに、SZ-67については、As-Cより下位の可能性が考えられるものの、引き続き検討が必要である。

*1 いずれも放射性炭素（¹⁴C）年代。ATおよびAs-YPの暦年較正年代は、約2.8～3.0年前と約1.5～1.65万年前と考

第IV章 理化学分析

えられている(町田・新井, 2011)。なお, おもに浅間火山を起源とする後期旧石器時代の指標テフラの年代推定に関する諸問題については、関口ほか(2011)に詳しい。

文献

- 新井房夫(1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年. 群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.
- 新井房夫(1972) 斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロロジーの基礎的研究. 第四紀研究, 11, p.254-269.
- 新井房夫(1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層. 考古学ジャーナル, no.53, p.41-52.
- 新井房夫(1993) 温度一定型屈折率測定法. 日本第四紀学会編「第四紀研究試料分析法2」, p.136-149.
- 荒牧重雄(1968) 浅間火山の地質. 地団研専報, no.14, p.1-45.
- 壇原 徹(1993) 温度変化型屈折率測定法. 日本第四紀学会編「第四紀試料分析法2」, 東京大学出版会, p.149-158.
- 町田 洋・新井房夫(1976) 広域に分布する火山灰—始良 Tn 火山灰の発見とその意義—. 科学, 46, p.339-347.
- 町田 洋・新井房夫(1992) 「火山灰アトラス」. 東京大学出版会, 276p.
- 町田 洋・新井房夫(2003) 「新編火山灰アトラス」. 東京大学出版会, 336p.
- 町田 洋・新井房夫(2011) 「新編火山灰アトラス(第3刷)」. 東京大学出版会, 336p.
- 森山昭雄(1971) 榛名火山東・南山麓の地形—とくに軽石流の地形について—. 地理学報告, no.36・37, p.107-116.
- 中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦(1984) 浅間火山, 黒班～前掛期のテフラ層序. 日本第四紀学会講演要旨集, no.14, p.69-70.
- 坂口 一(1986) 榛名二ツ岳起源 FA・FP 層下の土師器と須恵器. 群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.
- 坂口 一(2010) 高崎市・中居町一丁目遺跡周辺集落の動向—中居町一丁目遺跡 H22 の水田耕作地と周辺集落との関係—. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編「中居町一丁目遺跡3」, p.17-22.
- 関口博幸・早田 勉・下岡順直(2011) 群馬の旧石器編年のための基礎的研究—関東地方北西部における石器群の出土層位、テフラ層序、数値年代の整理と検討—. 群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要, 29, p.1-20.
- 早田 勉(1989) 6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害. 第四紀研究, 27, p.297-312.
- 早田 勉(1990) 群馬県の自然と風土. 群馬県史編さん委員会編「群馬県史通史編1 原始古代1」, p.35-129.
- 早田 勉(1996) 関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴—とくに御岳第1テフラより上位のテフラについて—. 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, 7, p.256-267.
- 早田 勉(2014) 渋川市有馬寺畑遺跡におけるテフラ分析. 渋川市教育委員会編「有馬寺畑遺跡」, p.197-211.
- 栃木県教育委員会文化財課・(公財)とちぎ未来づくり財団(2013) 横倉遺跡・横倉戸館古墳群. 現地説明会資料, 4p.

表1 テフラ検出分析結果 (1)

地点名	試料	軽石・スコリア			火山ガラス			重鉱物	備考
		量	色調	最大径	量	形態	色調		
SZ-1・A-A' セクション(墳丘部)	1	*			pm (sp)		淡灰, 淡褐, 褐	opx, cpx, am	褐色軽石型ガラスに光沢.
	3	*			pm (sp)		灰白, 淡灰	opx, cpx, am	
	5'	**			pm (sp)		灰白, 淡灰	opx, cpx, am	
	7'	*			pm (sp)		灰白, 淡灰, 灰	opx, cpx, am	
	9'	*			pm (sp)		透明	opx, cpx, am	
	5	*			pm (sp)		灰白	opx, cpx, am	
	7	*			bw		透明	opx, cpx, am	
SD-3・D-D' セクション	2	*			pm (sp)		淡灰, 淡褐, 褐	opx, cpx, am	褐色軽石型ガラスに光沢.
	4	**			pm (sp)		淡灰, 淡褐, 褐	opx, cpx, am	褐色軽石型ガラスに光沢.
	6	**			pm (sp)		淡灰, 淡褐, 褐	opx, cpx, am	褐色軽石型ガラスに光沢.
	8	***			pm (sp)		淡灰, 淡褐, 褐>白	opx, cpx, am	褐色軽石型ガラスに光沢.
	10	***			pm (sp)		淡灰, 淡褐, 褐>白	opx, cpx, am	褐色軽石型ガラスに光沢.
	12	**			pm (sp)		淡灰, 淡褐, 褐>白	opx, cpx, am	褐色軽石型ガラスに光沢.
	14	*			pm (sp)		淡灰, 淡褐, 褐	opx, cpx, am	褐色軽石型ガラスに光沢.
	16	**			pm (sp)		淡灰, 淡褐, 褐>白	opx, cpx, am	褐色軽石型ガラスに光沢.
	18	**			pm (sp)		淡灰, 淡褐, 褐>白	opx, cpx, am	褐色軽石型ガラスに光沢.
	20	**			pm (sp)		淡灰, 淡褐, 褐>白	opx, cpx, am	褐色軽石型ガラスに光沢.
	22	**			pm (sp)		淡灰, 淡褐, 褐>白	opx, cpx, am	褐色軽石型ガラスに光沢.
	24	*			pm (sp)		淡灰, 淡褐, 褐>白	opx, cpx, am	褐色軽石型ガラスに光沢.
26							opx, cpx, am		
27	*			pm (sp)		淡灰, 淡褐, 褐	opx, cpx, am	褐色軽石型ガラスに光沢.	
SZ-1・A-A' セクション(周溝)	28	***			pm (sp)		淡灰, 淡褐, 褐	opx, cpx, am	褐色軽石型ガラスに光沢.
	30	***			pm (sp)		淡灰, 淡褐, 褐>白	opx, cpx, am	褐色軽石型ガラスに光沢.
	32	**			pm (sp)		白, 淡灰, 淡褐, 褐	opx, cpx, am	褐色軽石型ガラスに光沢.
	34	**			pm (sp)		白, 淡灰, 淡褐, 褐	opx, cpx, am	褐色軽石型ガラスに光沢.
	36	**			pm (sp)		白>灰白	opx, am, cpx	
	38	*	白	2.1	pm (sp)		白>灰白	opx, am, cpx	軽石斑晶 : opx, am.
	40	**			pm (sp) >md, bw		灰白>灰, 透明	opx, cpx, am	
	42	**			pm (sp)		灰白	opx, cpx, am	
	44	*			pm (sp)		灰白	opx, cpx, am	
	46	*			pm (sp), md		白, 灰	opx, cpx, am	
	48	*			pm (sp)		灰白	opx, cpx, am	
	50	*			md, pm (sp)		灰	opx, cpx, am	
52	*			pm (sp)		透明	opx, cpx, am		
SZ-66・C-C' セクション	2	*	白	2.2	***	pm (sp)	淡灰, 淡褐, 褐>白	opx, am, cpx	軽石斑晶 : opx, am.
	4				***	pm (sp)	白, 淡灰, 淡褐, 褐	opx, am, cpx	褐色軽石型ガラスに光沢.
	6	*			pm (sp)		白, 淡灰, 淡褐, 灰白	opx, cpx, am	
	8	**			pm (sp)		灰白	opx, cpx, am	
	10	*			pm (sp)		灰白	opx, cpx, am	
	12	*			pm (sp)		灰白	opx, cpx, am	
	14	**			pm (sp)		灰白	opx, cpx, am	
16	*			pm (sp)		灰白	opx, cpx, am		

**** : とくに多い, *** : 多い, ** : 中程度, * : 少ない.

最大径の単位は, mm. bw : バブル型, md : 中間型, pm : 軽石型, sp : スポンジ状, fb : 繊維束状.
重鉱物 (鉄鉱物以外) は, opx : 斜方輝石, cpx : 単斜輝石, am : 角閃石.

表2 テフラ検出分析結果 (2)

地点名	試料	軽石・スコリア			火山ガラス			重鉱物	備考
		量	色調	最大径	量	形態	色調		
SD-70・F-F' セクション	6				*	pm (sp)	淡灰, 淡褐, 褐	opx, cpx, am	褐色軽石型ガラスに光沢.
	8				***	pm (sp)	淡灰, 淡褐, 褐, 白	opx, cpx, am	褐色軽石型ガラスに光沢.
	10				***	pm (sp)	淡灰, 淡褐, 褐, 白	opx, cpx, am	褐色軽石型ガラスに光沢.
	12				***	pm (sp)	淡灰, 淡褐, 褐, 白	opx, cpx, am	褐色軽石型ガラスに光沢.
	14				**	pm (sp)	淡灰, 淡褐, 褐, 白	opx, cpx, am	褐色軽石型ガラスに光沢.
SZ-67・C-C' セクション	2				**	pm (sp)	淡灰, 淡褐, 褐>白	opx, cpx, am	褐色軽石型ガラスに光沢.
	4				**	pm (sp)	淡灰, 淡褐, 褐>白	opx, cpx, am	褐色軽石型ガラスに光沢.
	6				**	pm (sp)	淡灰, 淡褐, 褐>白	opx, cpx, am	褐色軽石型ガラスに光沢.
	8				***	pm (sp)	淡灰, 淡褐, 褐>白	opx, cpx, am	褐色軽石型ガラスに光沢.
	10				*	pm (sp)	淡褐, 白	opx, cpx, am	
	12				*	pm (sp)	白	opx, cpx, am	
	14				*	pm (sp)	灰白	opx, cpx, am	
	16				*	pm (sp)	灰白	opx, cpx, am	
	18							opx, cpx, am	
	20				*	pm (sp)	透明	opx, cpx, am	
SK-77・A-A' セクション	3	*	白	2.2	***	pm (sp)	淡灰, 淡褐, 褐>白	opx, cpx, am	褐色軽石型ガラスに光沢.
	9				**	pm (sp)	淡灰, 淡褐, 褐>白	opx, cpx, am	褐色軽石型ガラスに光沢.
	13	*	白	2.0	***	pm (sp)	淡灰, 淡褐, 褐>白	opx, cpx, am	褐色軽石型ガラスに光沢.
	17				**	pm (sp)	白, 淡灰, 淡褐, 褐	opx, cpx, am	褐色軽石型ガラスに光沢.
	19				*	pm (sp)	灰白	opx, cpx, am	
E13d グリッド	2				**	pm (sp)	淡灰, 淡褐, 褐>白	opx, cpx, am	褐色軽石型ガラスに光沢.
	4				*	pm (sp)	白, 褐	opx, cpx, am	褐色軽石型ガラスに光沢.
	6				*	bw, pm (sp)	透明, 淡灰	opx, cpx	
	8				*	pm (sp) >bw	透明	opx, cpx	
	10				*	pm (fb), md	淡灰, 灰	opx, cpx>am	
	12				*	md	淡灰, 透明	opx, cpx>am	
	14				*	md	透明	opx, cpx>am	
	16				*	bw, pm (sp)	透明	opx, cpx>am	
	18				**	bw	透明	opx, cpx, am	
	20				**	bw	透明	opx, cpx>am	
	22				**	bw	透明	opx, cpx, am	
	24				**	bw	透明	opx, cpx, am	
26				*	bw	透明	opx, cpx, am		
28							opx, cpx, am		

****: とくに多い, ***: 多い, **: 中程度, *: 少ない.

最大径の単位は, mm. bw: バブル型, md: 中間型, pm: 軽石型, sp: スポンジ状, fb: 繊維束状. 重鉱物 (鉄鉱物以外) は, opx: 斜方輝石, cpx: 単斜輝石, am: 角閃石.

表3 屈折率測定結果 (1)

試料・テフラ	火山ガラス		文献
	屈折率 (n)	測定粒子数	
SZ-1・A-A' セクション (SA-2 土壘盛土 6 層)・試料 30	1.526-1.530	33	本報告 *1
SZ-1・A-A' セクション (周溝)・試料 38	1.498-1.512 (1.498-1.506, 1.509-1.512)	30 (25, 5)	本報告 *2
SZ-1・A-A' セクション (周溝)・試料 42	1.498-1.509 (1.498-1.504, 1.506, 1.509)	34 (28,2,4)	本報告 *2
SZ-66・C-C' セクション・試料 14	1.516-1.519	31	本報告 *1
〈小山市域周辺の指標テフラ-AT 降灰以降〉			
浅間A (As-A, 1783 年)	1.507-1.512		1)
浅間B (As-B, 1108 年)	1.524-1.532		1)
榛名二ツ岳伊香保 (Hr-FP, 6世紀中葉)	1.501-1.504		1)
榛名二ツ岳渋川 (Hr-FA, 6世紀初頭)	1.500-1.502 1.498-1.505		1) 3)
榛名有馬 (Hr-AA, 5世紀)	1.500-1.502		4)
浅間C (As-C, 3世紀後半)	1.514-1.520		2)
浅間D軽石 (As-D, 約 4,500 年前 *1)	1.513-1.516		2)
鬼界アカホヤ (K-Ah, 約 7,300 年前)	1.506-1.513		1)
浅間藤岡軽石 (As-Fo, 約 8,200 年前 *1)	1.508-1.516		2)
浅間総社 (As-Sj, 約 1.0 ~ 1.1 万年前 *1)	1.501-1.518		2)
男体七本桜・今市 (Nt-S・Nt-I, 約 1.4 ~ 1.5 万年前 *1)	Nt-S: 1.500-1.503		1)
浅間草津 (As-K)	1.501-1.503		1)
浅間板鼻黄色 (As-YP, 約 1.5 ~ 1.65 万年前)	1.501-1.505		1)
浅間大窪沢2 (As-Ok2, 約 1.6 万年前 *1)	1.502-1.504		1)
浅間大窪沢1 (As-Ok1, 約 1.7 万年前 *1)	1.500-1.502		1)
浅間白糸 (As-Sr)	1.506-1.510		1)
浅間萩生 (As-Hg, 約 1.9 万年前 *1)	1.500-1.502		2)
浅間板鼻褐色 (群) (As-BP Group)	上部 1.515-1.520 中部 1.508-1.511 下部 1.505-1.515		1) 1) 1)
始良 Tn (AT, 約 2.8 ~ 3万年前)	1.499-1.500		1)

1) 町田・新井 (1992, 2003), 2) : 早田 (1996), 3) 早田 (2014), 4) 町田ほか (1984).
 本報告および 3) : 温度変化型屈折率測定装置 (MAIOT・RIMS2000). *1 : MAIOT, *2・3) : RIMS2000.
 そのほか : 故新井房夫群馬大学名誉教授による温度一定型屈折率測定法.
 *1 : 放射性炭素 (14C) 年代.

表4 屈折率測定結果 (2)

試料・テフラ	火山ガラス		文献
	屈折率 (n)	測定粒子数	
SZ-67・C-C' セクション・試料 8	1.522-1.534	30	本報告
SZ-67・C-C' セクション・試料 16	1.514-1.521	30	本報告
E13d グリッド・試料 24	1.498-1.500	30	本報告
SZ-1・A-A' セクション (墳丘部)・試料 5'	1.515-1.521	30	本報告
〈小山市域周辺の指標テフラ -AT 降灰以降〉			
浅間A (As-A, 1783 年)	1.507-1.512		1)
浅間B (As-B, 1108 年)	1.524-1.532		1)
榛名二ツ岳伊香保 (Hr-FP, 6世紀中葉)	1.501-1.504		1)
榛名二ツ岳渋川 (Hr-FA, 6世紀初頭)	1.500-1.502		1)
	1.498-1.505		3)
榛名有馬 (Hr-AA, 5世紀)	1.500-1.502		4)
浅間C (As-C, 3世紀後半)	1.514-1.520		2)
浅間D軽石 (As-D, 約 4,500 年前 *1)	1.513-1.516		2)
鬼界アカホヤ (K-Ah, 約 7,300 年前)	1.506-1.513		1)
浅間藤岡軽石 (As-Fo, 約 8,200 年前 *1)	1.508-1.516		2)
浅間総社 (As-Sj, 約 1.0 ~ 1.1 万年前 *1)	1.501-1.518		2)
男体七本桜・今市	Nt-S: 1.500-1.503		1)
(Nt-S・Nt-I, 約 1.4 ~ 1.5 万年前 *1)			
浅間草津 (As-K)	1.501-1.503		1)
浅間板鼻黄色 (As-YP, 約 1.5 ~ 1.65 万年前)	1.501-1.505		1)
浅間大窪沢2 (As-Ok2, 約 1.6 万年前 *1)	1.502-1.504		1)
浅間大窪沢1 (As-Ok1, 約 1.7 万年前 *1)	1.500-1.502		1)
浅間白糸 (As-Sr)	1.506-1.510		1)
浅間萩生 (As-Hg, 約 1.9 万年前 *1)	1.500-1.502		2)
浅間板鼻褐色 (群) (As-BP Group)	上部 : 1.515-1.520		1)
	中部 : 1.508-1.511		1)
	下部 : 1.505-1.515		1)
始良 Tn (AT, 約 2.8 ~ 3万年前)	1.499-1.500		1)

1) 町田・新井 (1992, 2003), 2) : 早田 (1996), 3) 早田 (2014), 4) 町田ほか (1984).
 本報告・4) : 温度変化型屈折率測定法 (壇原, 1993), 1) ~ 3) : 温度一定型屈折率測定法 (新井, 1972, 1993).
 *1 : 放射性炭素 (14C) 年代.

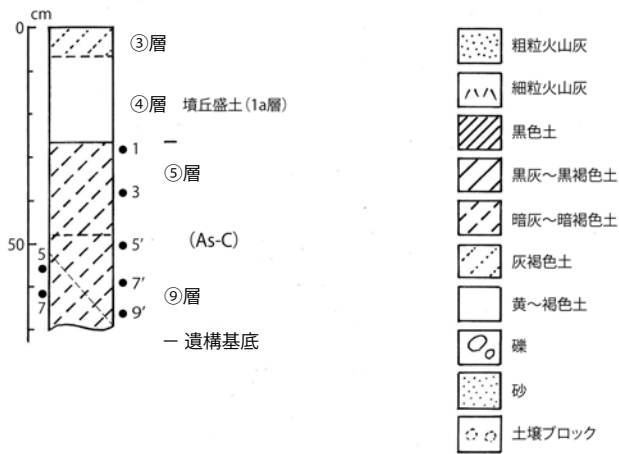


図1 SZ-1・A-A'セクション(墳丘部)の土層柱状図
 ●: テフラ分析試料の層位. 数字: テフラ分析試料番号.
 試料 5', 試料 7' は墳丘盛土下部 (1b 層)

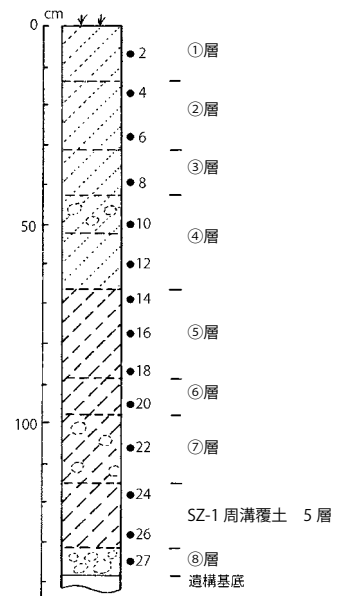


図2 SD-3・C-C'セクションの土層柱状図
 ●: テフラ分析試料の層位. 数字: テフラ分析試料番号.

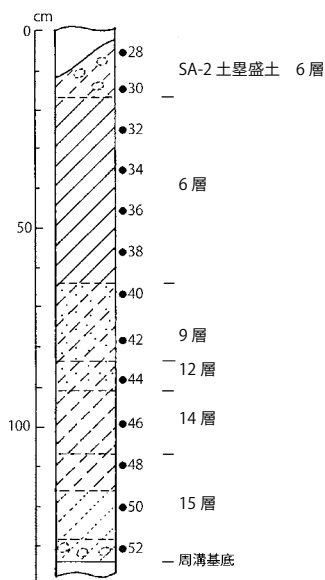


図3 SZ-1・A-A'セクション(周溝)の土層柱状図
 ●: テフラ分析試料の層位. 数字: テフラ分析試料番号.

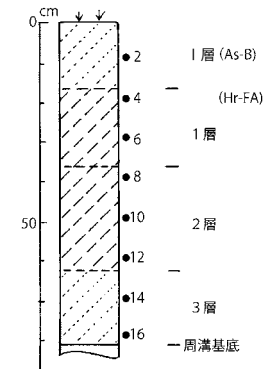


図4 SZ-66・C-C'セクション土層柱状図
 ●: テフラ分析試料の層位. 数字: テフラ分析試料番号.

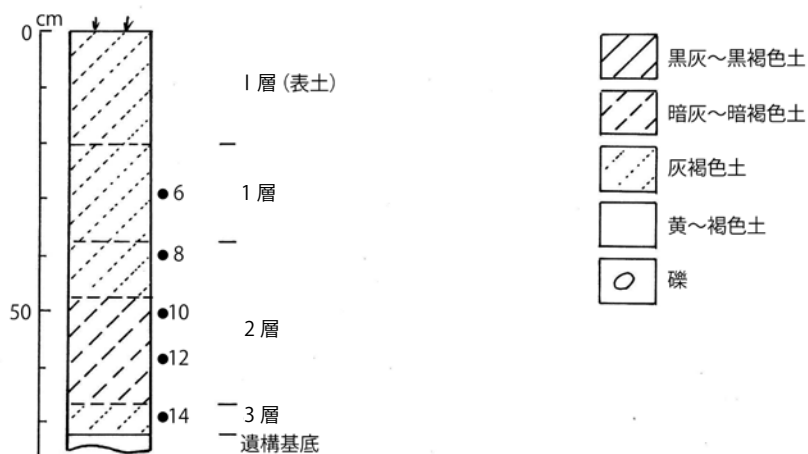


図5 SD-70・F-F'セクションの土層柱状図
●:テフラ分析試料の層位.数字:テフラ分析試料番号.

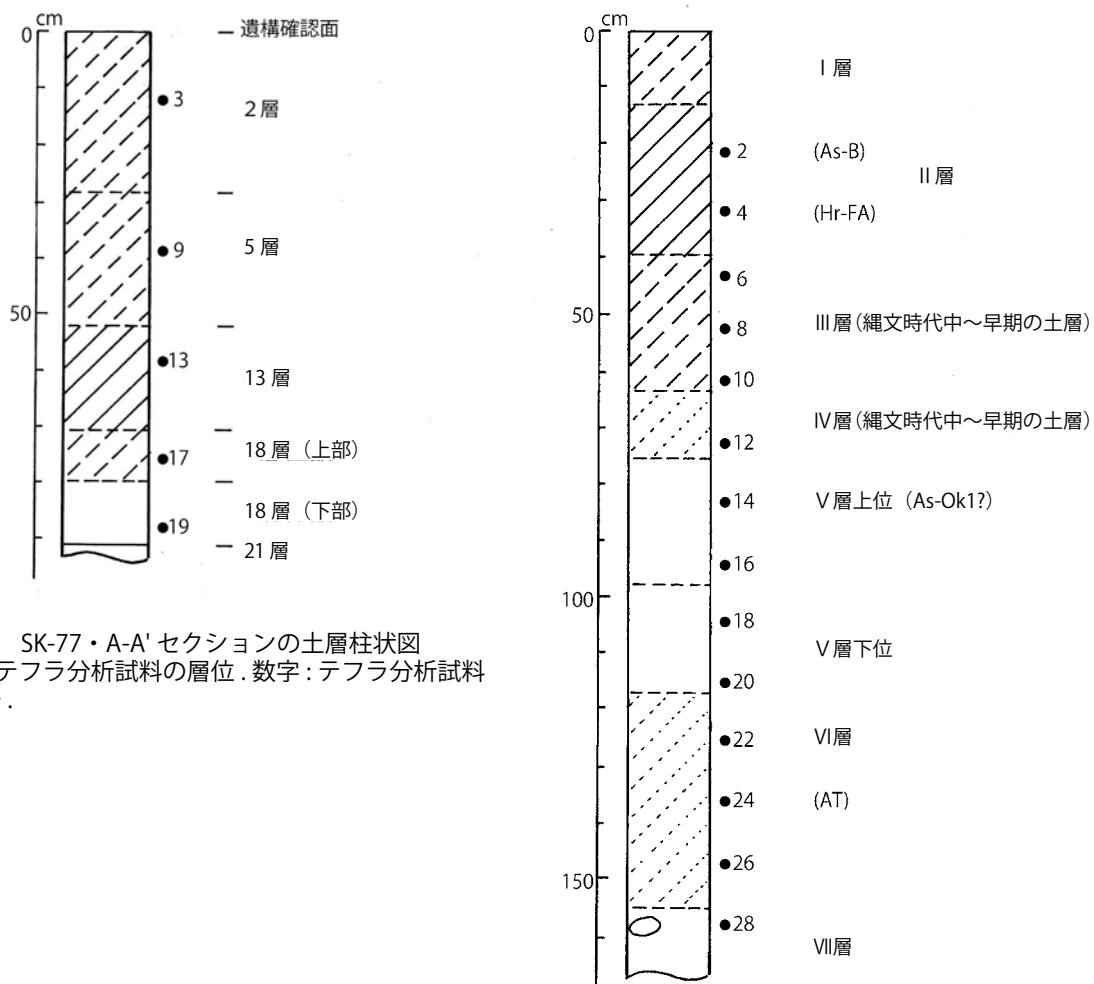


図6 SK-77・A-A'セクションの土層柱状図
●:テフラ分析試料の層位.数字:テフラ分析試料番号.

図7 E13dグリッドの土層柱状図
●:テフラ分析試料の層位.数字:テフラ分析試料番号.

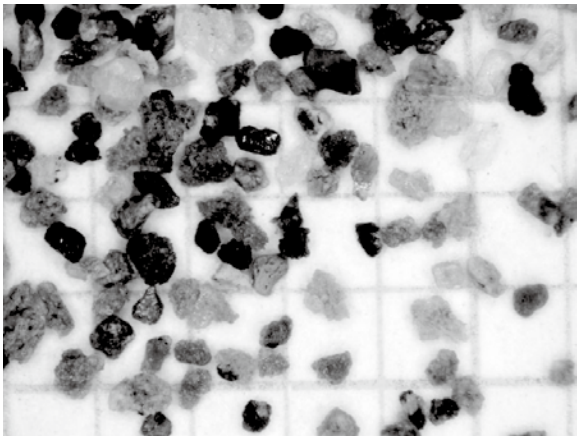


写真1 SZ-1・A-A' セクション (SA-2 土塁盛土)・試料 30
As-B 起源の淡灰色，淡褐色，褐色の軽石
質火山灰が多く含まれている。背景は
1 mm メッシュ。

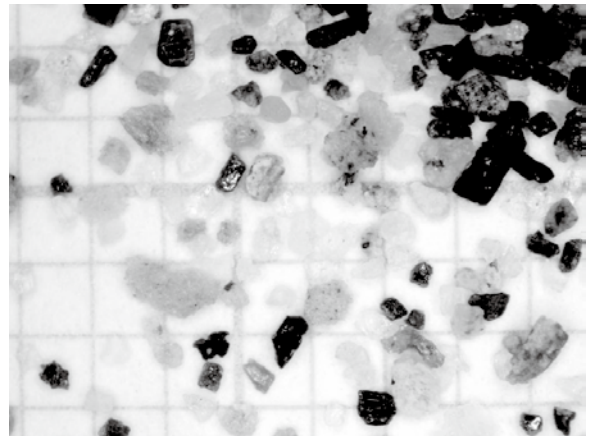


写真2 SZ-1・A-A' セクション周溝・試料 38
As-C 起源の灰白色スポンジ状軽石型ガラ
ス (左下) のほか，Hr-F 起源の白色軽石型
ガラス (右下) が認められる。背景は 1 mm
メッシュ。

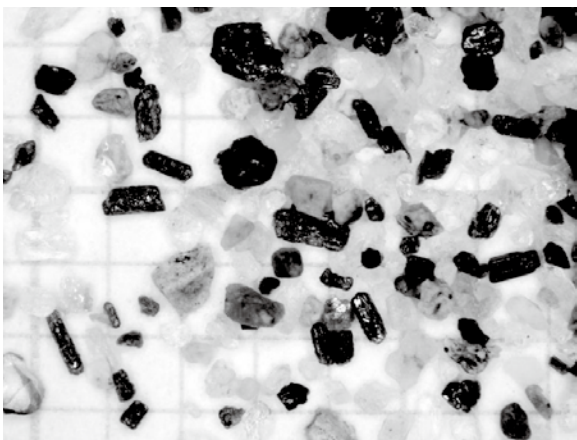


写真3 SZ-1・A-A' セクション周溝・試料 42
As-C に由来する灰白色スポンジ状軽石型
ガラスがわずかに含まれている。背景は
1 mm メッシュ。

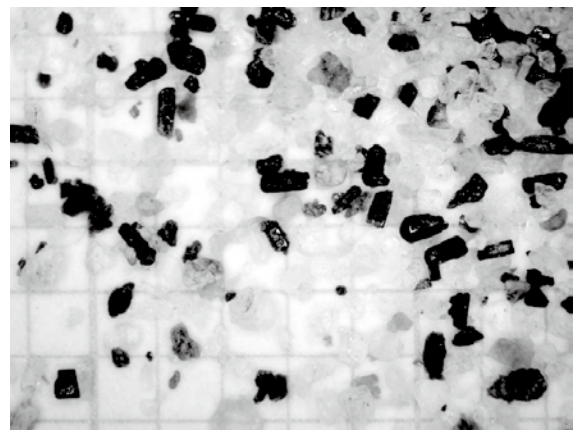


写真4 SZ-66C-C' セクション・試料 14
As-C に由来する灰白色スポンジ状軽石
型ガラスが認められる (左下)。背景は
1 mm メッシュ。

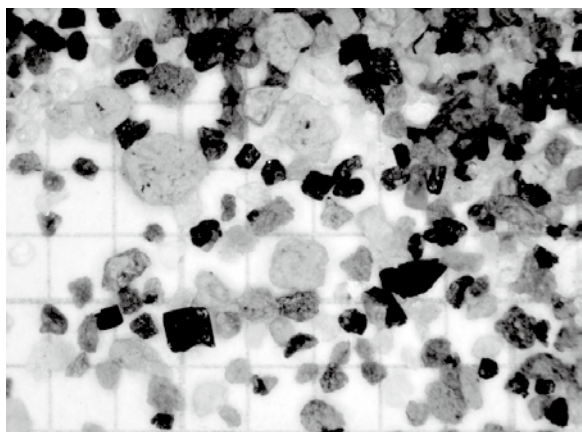


写真5 SZ-67・C-C' セクション・試料8
As-B 起源の淡灰色，淡褐色，褐色の軽石
質火山灰が多く含まれている。左上に比較
的粗粒の白色軽石（Hr-FA）も認められる。
背景は1mm メッシュ。

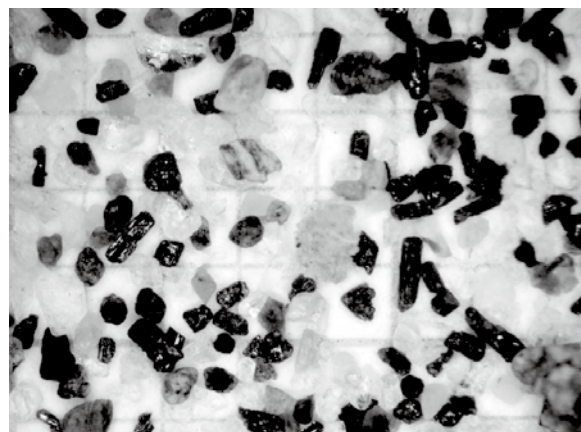


写真6 SZ-67・C-C' セクション・試料16
As-C に由来する灰白色スポンジ状軽石型ガ
ラスが認められる（中央）。
背景は1mm メッシュ。

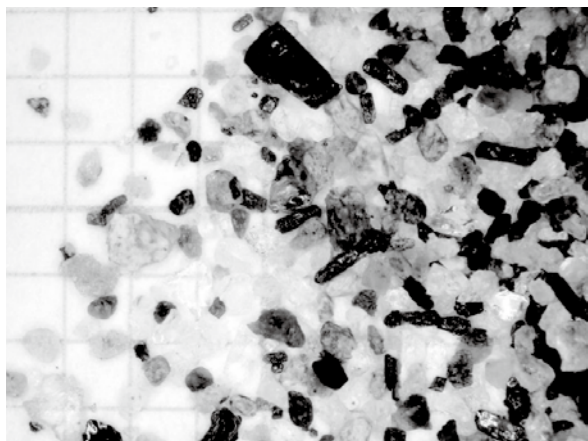


写真7 SZ-1・A-A' セクション墳丘部・試料5'
As-C に由来する細粒の灰白色スポンジ状軽
石型ガラスが少量含まれている。
背景は1mm メッシュ。



写真8 E13d グリッド・試料24
AT 起源の無色透明のバブル型ガラスが多く
含まれている（中央ほか）。中央左下の黄色
の鉱物は斜方輝石。

2. 横倉遺跡・横倉戸館古墳群から出土した炭化種実

佐々木由香・バンダリ スダルシャン (パレオ・ラボ)

1. はじめに

横倉遺跡・横倉戸館古墳群で検出された縄文時代の炉や古墳時代の土器棺墓などから、土壌が採取された。ここでは、土壌中の炭化種実を同定し、当時の利用植物や植生について検討した。なお、一部の試料については放射性炭素年代測定や植物珪酸体分析、リン・カルシウム分析も行われている。(各分析の項参照)。

2. 試料と方法

試料は、竪穴住居跡である SI-76 の炉と炉外、ピット (P7)、覆土から採取された 6 試料と、SI-73 の炉 3 から採取された 2 試料、竪穴住居跡である SI-73 の埋設土器から採取された 1 試料、土器棺墓である ST-72 から採取された 10 試料、SZ-1 の g1 区出土土器内 (No.251) から採取された 1 試料、同区土器内 (No.252) から採取された 2 試料、SK-116 から採取された 1 試料の、計 24 試料である。遺構の時期は、SI-73 と SI-76 が縄文時代後期前半、ST-72 (土器棺墓) と SZ-1 の g1 区出土の土器 (No.251 と 252) が古墳時代前期、SK-116 が中世である。ただし、SI-73 で測定した種実は、縄文時代中期後半の暦年代を示した。

水洗は、最小 0.5mm 目の篩を用いて行った。水洗量は、最初に各 300cc を水洗し、得られた種実数が少なかったため、最終的に各 500cc を水洗した。ただし、採取土壌が少ない試料については、ほぼ全量を水洗した。炭化種実の抽出・同定・計数作業は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても 1 個体とみなせるものは完形として数え、1 個体に満たないものは破片とした。試料は、栃木県埋蔵文化財センターに保管されている。

3. 結果

同定した結果、木本植物ではオニグルミ炭化核とキハダ炭化種子の 2 分類群、草本植物ではイヌタデ属炭化果実の 1 分類群、計 3 分類群が見いだされた。この他、科以下の識別点が残存していない一群を同定不能炭化種実とした。種実以外には、炭化した虫えいと子囊菌がわずかにみられた (表 1・2)。遺跡の立地から当時の生の種実は残存しないと考えられるため、タケニグサ属種子とイネ籾殻は現生として扱った。なお、全試料から炭化材片が得られ、SI-76 の炉 1 層と覆土 3 層、ST-72 の A2 上と B2 下、A3B1 上から焼骨片が得られた。

以下、得られた炭化種実について遺構別に記載する (虫えい、子囊菌は除く)。

表 1 横倉遺跡・横倉戸館古墳群から出土した炭化種実 (1) (括弧内は破片数)

遺構名	SI-76						SI-73		SI-73		
	炉		炉外	SI覆土		P7	炉3		埋設土器		
採取遺構	1層	9層	-	2層	3層	-	-	-	2層		
層位	① (炉内)	② (炉外)	③ (炉下)	南覆土	④	⑤ (床面)	②③ の間	南東焼土+ 粘土(ブロック)	南西焼土+ 粘土(ブロック)	ブロック	
採取位置	縄文後期前半						縄文中期後半～後期前半		縄文後期前半		
時期											
分類群	水洗量 (cc)	500	500	500	500	500	500	500	500	500	500
オニグルミ	炭化核							(2)	(4)	(8)	
イヌタデ属	炭化果実	1									
同定不能	炭化種実	(11)	(5)	(5)	(5)	(3)	(8)	(7)	(5)	(8)	(132)
虫えい	炭化								(2)		
子囊菌	炭化子囊	3									1

表2 横倉遺跡・横倉戸館古墳群から出土した炭化種実(2)(括弧内は破片数)

遺構名	ST-72										SZ-1 g1区			SK-116
	土器棺墓										No. 251	No. 252	-	
	土器内										土器内	土器内	17層	
採取位置	A1上	A1下	A2上	A2下	B1上	B1下	B2上	B2下	A3B1上	A3B1下	①	④	⑨	-
時期	古墳前期										中世			
分類群	水洗量(cc)	500	500	500	500	130	150	90	500	500	300	400	500	500
オニグルミ	炭化核	(1)										(1)		
キハダ	炭化種子	(3)					(1)		(1)			(1)	(2)	(1)
同定不能	炭化種実	(7)		(6)	(1)	(7)	(3)	(3)	(5)	(6)	(14)	(5)	(13)	(2)
虫えい	炭化		1 (2)	1 (1)		(1)			1 (1)	(2)	1	1 (4)	1 (1)	
子嚢菌	炭化子嚢	(1)	1	3		55	1		10	3	1		1	1
タケノグサ属	種子													(1)
イネ	籾殻						(1)	(1)						

SI-76：炉外からイヌタデ属 1点 が得られた。すべての試料から、同定不能炭化種実がわずかに得られた。

SI-73 (炉 3)：オニグルミの破片と同定不能炭化種実がわずかに得られた。

SI-73 (埋設土器)：オニグルミの破片がわずかに得られた。同定不能炭化種実が多く得られた。

ST-72：A1 上からオニグルミの破片、A1 上と B2 上、A3B1 上からキハダの破片がわずかに得られた。A1 下と B1 下を除く試料から同定不能炭化種実がわずかに得られた。

SZ-1 の g1 区 No.251 土器内：同定不能炭化種実が少量得られた。

SZ-1 の g1 区 No.252 土器内：オニグルミとキハダの破片がわずかに得られた。同定不能炭化種実が少量得られた。

SK-116：キハダの破片と同定不能炭化種実がわずかに得られた。

次に、炭化種実の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。

(1) オニグルミ *Juglans mandshurica* Maxim. *sachalinesis* (Komatsu) Kitam. 炭化核 クルミ科

すべて小破片である。完形ならば側面観は広卵形。表面に縦方向の縫合線があり、浅い溝と凹凸が不規則に入る。壁は緻密で硬く、ときどき空隙がある。断面は鋭角で光沢があり、角が尖るものが多い。最大の破片で、残存長 5.9mm、残存幅 2.8mm、残存厚 1.8mm。

(2) キハダ *Phellodendron amurense* Rupr. 炭化種子 ミカン科

すべて破片である。完形ならば上面観は両凸レンズ形、側面観は偏楕円形。表面には、やや大きく高さのほとんどない網目模様がある。壁は、やや薄い硬い。最大の破片で、残存長 2.4mm、残存幅 1.4mm。

(3) イヌタデ属 *Polygonum* (広義) sp. 炭化果実 タデ科

上面観は円形、側面観は楕円形。先端は突出し、ややすぼまる形状を呈す。基部にはわずかに突出した円形の着点がある。表面は平滑で光沢がある。長さ 1.3mm、幅 0.8mm。

(4) 虫えい Gall

上面観は円形、側面観は扁平で、中央がゆるやかに凹む。幅 3.2mm、厚さ 2.6mm。

(5) 子嚢菌 Ascomycota 炭化子嚢

球形で、表面は平滑。径 0.6mm。

4. 考察

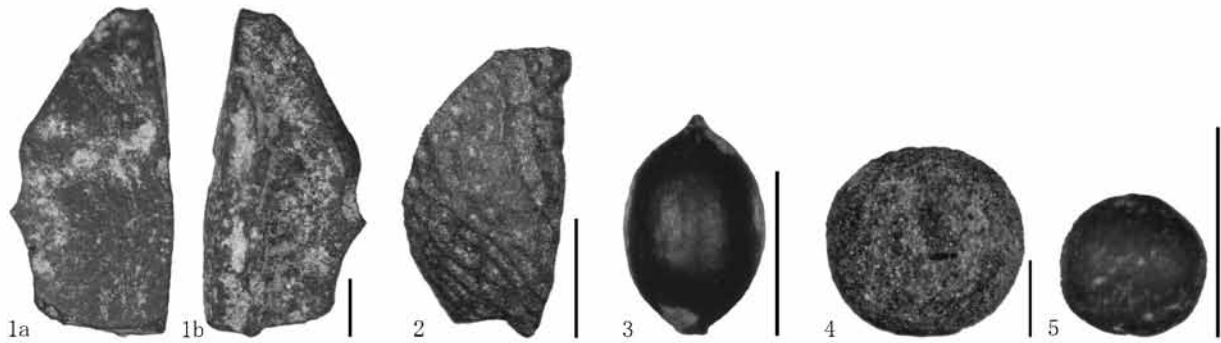
縄文時代から中世の遺構の覆土土壌を水洗して得られた炭化種実について検討した。以下、時期別に考察を行う。

縄文時代後期の竪穴住居跡である SI-76 では、炉や炉外、覆土、ピット (P7) の土壌を水洗したが、同定可能な種実 は炉外から得られたイヌタデ属 1点のみであった。イヌタデ属は種によっては食用可能であり、種子あるいは種子付きの植物が竪穴住居内に持ち込まれた可能性があるが、住居跡の屋根や周辺に生育していたものが何らかの要因で炭化して堆積した可能性もある。SI-73 埋設土器と炉 3からは、食用可能なオニグ

ルミの破片が得られた。オニグルミは核の破片が炭化している状況から、食用にならない核の部分割った後、炉で燃やされた可能性などが考えられる。埋設土器にオニグルミが伴っていたかは不明であるが、埋設土器内に大量の同定不能炭化種実が含まれている状況から、土器内で種実が燃やされるなど何らかの人間の行為と関連している可能性がある。

古墳時代前期の土器棺墓である ST-72 からは、食用可能なオニグルミとキハダの破片が得られたが、分類群が特定できる炭化種実はすべて覆土の上層から得られた。周囲で利用された種実が堆積過程で流れ込んだ可能性があり、土器棺墓に伴っていた可能性は低い。SZ-1 の g1 区出土の土器 (No.251 と 252) からは、No.252 からのみオニグルミとキハダの破片が得られた。産出数がごくわずかなため、土器に伴うかどうかは不明である。

中世の SK-116 からは、最下層の 17 層からキハダがわずかに得られた。産出数が 1 点のため、遺構に伴うかは不明である。



1. オニグルミ炭化核 (SI-73、埋設土器、第 2 層)
2. キハダ炭化種子 (SZ-1 g1 区、No. 252、土器内 - ⑨)
3. イヌタデ属炭化果実 (SI-76、炉外、南覆土)
4. 炭化虫えい (SZ-1 g1 区、No. 252、土器内 - ④)
5. 子囊菌炭化子囊 (SI-73、埋設土器、第 2 層)

図版 1 横倉遺跡・横倉戸館古墳群から出土した炭化種実

3. 横倉遺跡・横倉戸館古墳群の植物珪酸体分析

米田恭子（パレオ・ラボ）

1. はじめに

横倉遺跡・横倉戸館古墳群で検出された炉や土器棺墓などから、白色物混じりの土壌が採取された。ここでは、白色物の由来や土壌に含まれるイネ科植物を調べる目的で、植物珪酸体分析を行った。なお、すべての試料について炭化種実同定も行われており、一部の試料についてはリン・カルシウム分析も行われている。（各分析の項参照）。

2. 試料と方法

試料は、遺構から採取された6点と基本土層から採取された2点の合計8試料である。遺構採取の試料は、竪穴住居跡であるSI-76の炉（1層）から採取された分析No.1と床面から採取された覆土（3層）である分析No.2、SI-73の炉3から採取された南東焼土+粘土（ブロック）の分析No.3と南西焼土+粘土（ブロック）の分析No.4、土器棺墓であるST-72内に堆積した土壌の下層部であるA1下から採取された分析No.5とA2下から採取された分析No.6である。また、比較試料として基本土層の北壁2層の下層から採取された分析No.7と1層から採取された分析No.8の分析を行った。遺構の時期は、竪穴住居跡(SI-76)が縄文時代後期前半、SI-73炉3が縄文時代中期後半から後期前半、土器棺墓(ST-72)が古墳時代前期である。また、基本土層のⅢ層（分析No.7）の時期は縄文時代中期～後期、Ⅱ層（分析No.8）は古墳時代以前とみられている。

分析試料を実体顕微鏡で観察したところ、いずれの試料も土壌に含まれる白色物は微細であり、直接抽出するのは困難であった。そこで、以下の手順にしたがって処理を行い、土壌試料に含まれる植物珪酸体の抽出を試みた。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約1g（秤量）をツールビーカーにとり、約0.02gのガラスビーズ（直径約0.04mm）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーを用いて試料を分散させ、沈降法により0.01mm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定および計数は、機動細胞珪酸体を中心とした植物珪酸体をガラスビーズが300個に達するまで行った。

3. 観察の結果

観察された植物珪酸体個数を表1に、植物珪酸体分布図を図版1に示した。

分析 No.1 [SI-76：炉 - ①（炉内）]

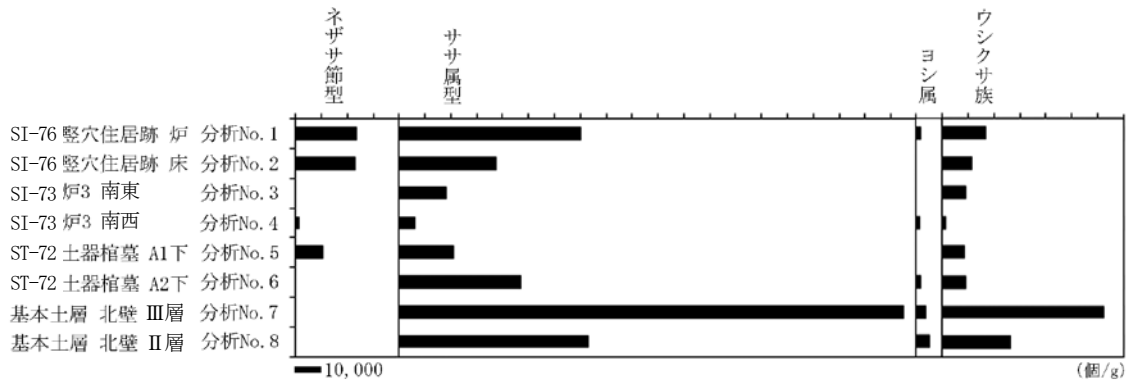
ササ属型の機動細胞珪酸体が最も多く、70,300個得られた。次いでネザサ節型の機動細胞珪酸体が23,400個、ウシクサ族の機動細胞珪酸体が16,700個、ヨシ属の機動細胞珪酸体が1,700個観察された。このほかに、棒状型の不明植物珪酸体が観察された。棒状型の不明植物珪酸体は、すべてのイネ科植物に類似した形態の植物珪酸体が出現するため（近藤，2010）、形態による分類は困難である。

分析 No.2 [SI-76：SI 覆土 - ⑤（床面）]

ササ属型の機動細胞珪酸体が最も多く、37,500個得られた。次いでネザサ節型の機動細胞珪酸体が22,800個、ウシクサ族の機動細胞珪酸体が11,400個観察された。このほかに、棒状型の不明植物珪酸体が観察された。

表1 試料 1g あたりの植物珪酸体個数 (個/g)

分析 No.	遺構名	採取遺構	層位	採取位置	遺構の時期	機動細胞珪酸体				不明植物珪酸体
						ネザサ節型	ササ属型	ヨシ属	ウシクサ族	棒状型
1	SI-76	炉	1層	① (炉内)	縄文時代後期前半	23,400	70,300	1,700	16,700	15,100
2		SI 覆土	3層	⑤ (床面)		22,800	37,500	0	11,400	21,200
3	SI-73	炉 3	-	南東焼土+粘土 (ブロック)	縄文時代中期後半～ 後期前半	0	18,000	0	9,000	3,000
4			-	南西焼土+粘土 (ブロック)		1,500	6,100	1,500	1,500	1,500
5	ST-72	土器棺墓	-	A1 下	古墳時代前期	10,400	20,800	0	8,700	8,700
6			-	A2 下		0	47,200	1,800	9,100	0
7	基本土層	北壁	Ⅲ層	下層	縄文時代中期～後期	0	194,700	3,600	62,500	16,100
8			Ⅱ層	-		古墳時代以前	0	73,100	5,200	26,100



図版1 横倉遺跡・横倉戸館古墳群の植物珪酸体の分布図

分析 No.3 [SI-73：炉 3 - 南東部焼土+粘土 (ブロック)]

ササ属型の機動細胞珪酸体が 18,000 個検出された。次いでウシクサ族の機動細胞珪酸体が 9,000 個得られた。このほかに、棒状型の不明植物珪酸体が観察された。

分析 No.4 [SI-73：炉 3 - 南西部焼土+粘土 (ブロック)]

ササ属型の機動細胞珪酸体が 6,100 個検出された。次いでネザサ節型とヨシ属、ウシクサ族の機動細胞珪酸体が各 1,500 個得られた。このほかに、棒状型の不明植物珪酸体が観察された。

分析 No.5 [ST-72：土器棺墓 - A1 下]

ササ属型の機動細胞珪酸体が 20,800 個検出された。次いでネザサ節型の機動細胞珪酸体が 10,400 個、ウシクサ族の機動細胞珪酸体が 8,700 個得られた。このほかに、棒状型の不明植物珪酸体が観察された。

分析 No.6 [ST-72：土器棺墓 - A2 下]

ササ属型の機動細胞珪酸体が 47,200 個検出された。次いでウシクサ族の機動細胞珪酸体が 9,100 個、ヨシ属の機動細胞珪酸体が 1,800 個得られた。

分析 No.7 [基本土層：Ⅲ層 (下層)]

ササ属型の機動細胞珪酸体が最も多く、194,700 個得られた。次いでウシクサ族の機動細胞珪酸体が 62,500 個、ヨシ属の機動細胞珪酸体が 3,600 個観察された。このほかに、棒状型の不明植物珪酸体が観察された。

分析 No.8 [基本土層：Ⅱ層]

ササ属型の機動細胞珪酸体が最も多く 73,100 個得られた。次いでウシクサ族の機動細胞珪酸体が 26,100 個、ヨシ属の機動細胞珪酸体が 5,200 個観察された。このほかに、棒状型の不明植物珪酸体が観察された。

4. 考察

横倉遺跡・横倉戸館古墳群の遺構から採取された白色物混じりの土壌 6 点と基本土層の土壌 2 点の計 8 試料について、植物珪酸体分析を行った結果を遺構ごとに述べる。

縄文時代後期前半の住居跡である SI-76 の炉覆土（分析 No.1）と床面覆土（分析 No.2）は、植物珪酸体の検出数に多少の差は見られるものの、ササ属型を多く含み、ネザサ節とウシクサ族を伴う植物珪酸体組成が類似していた。一方、縄文時代中期から後期の堆積層である基本土層の 2 層（分析 No.7）の分析結果をみると、ササ属型が突出して多く、ウシクサ族も比較的多く含まれており、ヨシ属を伴うという植物珪酸体組成であった。縄文時代中期から後期の遺跡周辺には、スズタケやミヤコザサなどのササ類や、ススキやチガヤなどのウシクサ属が多く存在していたと推察される。炉覆土（分析 No.1）と床面覆土（分析 No.2）には、基本土層の 2 層からは検出されなかったネザサ節が比較的多く検出されており、何らかの目的で住居内に持ちこまれた可能性が考えられる。また、床面覆土と比較して炉の土壌にはササ属が約 2 倍量含まれており、燃料材としてササ属が利用されていた可能性がある。

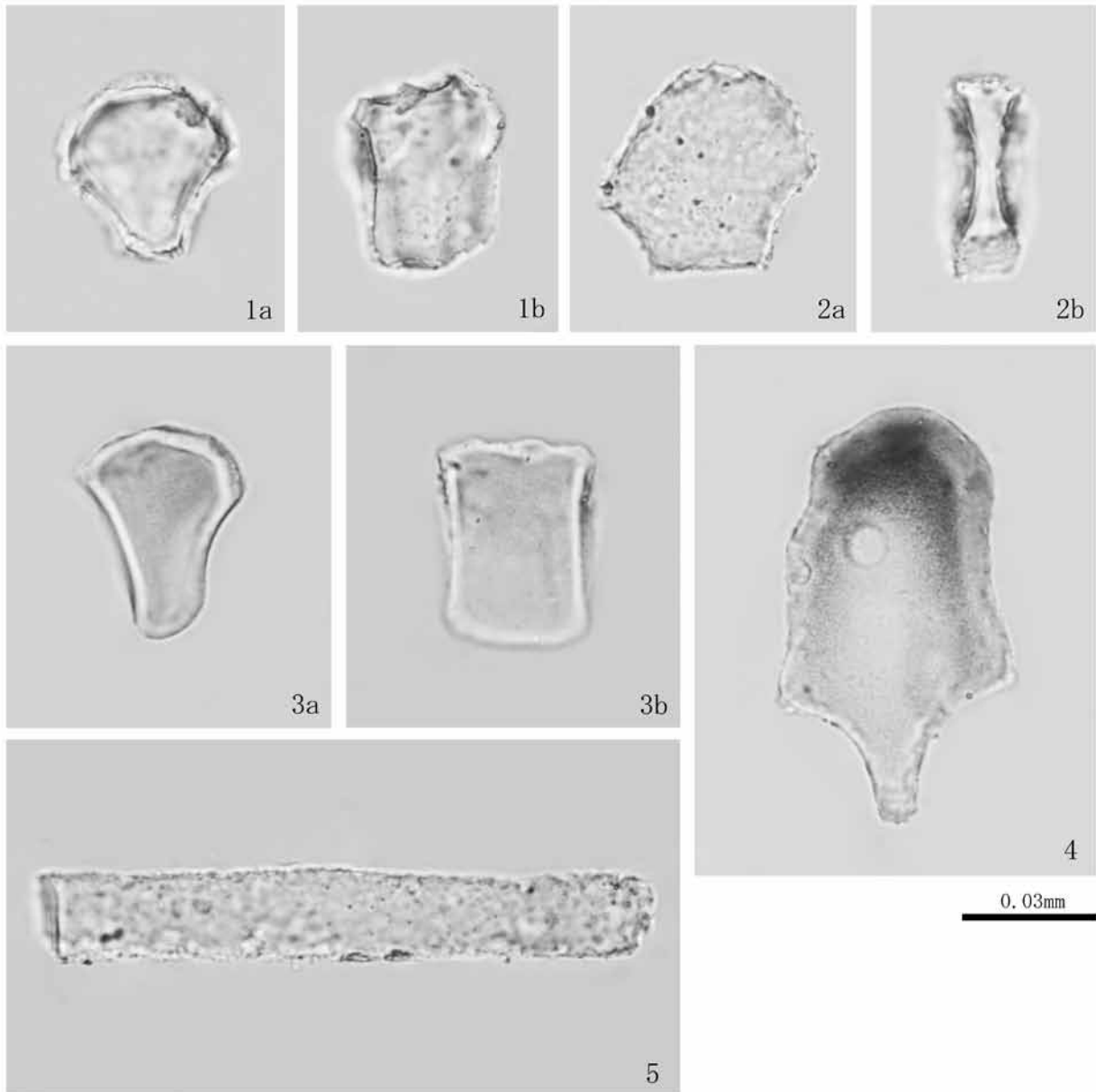
縄文時代中期後半から後期前半の SI-73 炉 3 は、ササ属型が最も多いという点で、南東部焼土 + 粘土（分析 No.3）と南西部焼土 + 粘土（分析 No.4）は類似した結果であった。しかし、分析 No.3 にはササ属型のほかにウシクサ族が比較的多く含まれたのに対し、分析 No.4 ではササ属型に次いでネザサ節型とヨシ属、ウシクサ族が若干含まれている状況であり、同じ炉内でも南東部と南西部で植物珪酸体組成に違いが見られた。両試料は炉から採取された焼土混じりの粘質土であり、得られた植物珪酸体は燃料材に由来する可能性がある。

古墳時代前期の土器棺墓の覆土である A1 下（分析 No.5）は、ササ属型がやや多く含まれ、ネザサ節とウシクサ族を伴う植物珪酸体組成であった。また A2 下（分析 No.6）は A1 下と比較してササ属型が多く、ウシクサ族とヨシ属を含む植物珪酸体組成であった。両試料は土器棺墓の底部の比較的近い位置から採取された試料であるが、植物珪酸体の組成には少々違いが見られた。リン・カルシウム分析の結果によれば、土器棺墓の底部に骨や歯が存在した可能性があり（リン・カルシウム分析の項参照）、本分析で得られたイネ科植物の植物珪酸体は、埋葬の際に土器内部に敷かれたり、何らかの目的で土器棺墓に入れられたイネ科植物の灰に由来する可能性もある。

また、古墳時代以前の堆積層である基本土層Ⅱ層（分析 No.8）については、ササ属型が最も多く、ウシクサ族もやや多く含まれ、ヨシ属を伴うという植物珪酸体組成であった。縄文時代中期から後期の堆積層であるⅢ層（分析 No.7）と比較すると、ササ属型とウシクサ族が 1/2 程度に減少しており、遺跡周辺のイネ科植物に変化がみられた。

引用文献

近藤鍊三（2010）プラント・オパール図譜. 167p, 北海道大学出版会.



1. ネザサ節型機動細胞珪酸体（分析No.1）、2. ササ属型機動細胞珪酸体（分析No.1）、3. ウシクサ族機動細胞珪酸体（分析No.6）、4. ヨシ属機動細胞珪酸体（分析No.8）、5. 棒状型不明植物珪酸体（分析No.2）
a：断面、b：側面

図版2 横倉遺跡・横倉戸館古墳群の植物珪酸体

4. 横倉遺跡・横倉戸館古墳群出土遺構より採取した土壌のリン・カルシウム分析

竹原弘展（パレオ・ラボ）

1. はじめに

小山市横倉地内に所在する横倉遺跡・横倉戸館古墳群で検出された縄文時代～中世の遺構より採取した土壌について、蛍光 X 線分析によるリン・カルシウム分析を行い、骨・歯が存在した可能性を検討した。

2. 試料と方法

分析対象となる試料は、縄文時代～中世の遺構より採取した土壌計 18 点である（表 1）。縄文時代後期前半の住居跡 SI-73 の埋設土器からは、土器内下層（第 2 層）の埋土を 1 点採取した（No.1）。古墳時代前期の ST-72 土器棺墓では、2 個の土器が組み合わされていた。南側の土器を A、北側の土器を B とし、土器埋土について、A は南北方向に 3 分割（南から 1～3）、上下に 2 分割の計 6 分割、B は南北方向に 2 分割（南から 1、2）、上下に 2 分割の計 4 分割し、合計 10 点を採取した（No.2～No.11）。古墳時代前期の方墳 SZ-1 の g1 区から出土した土器 No.252 からは、土器埋土を 4 点（上から②～④・⑨）採取した（No.12～No.15）。SZ-1 については、周溝内土坑 i 層（①・②）からも、それぞれ 1 点ずつ採取した（No.16・No.17）。中世の土坑 SK-116 からは、最下層（17 層）より 1 点採取した（No.18）。

分析は、藤根ほか（2008）の方法に従って行った。この方法は、元素マッピング分析によりリン、カルシウムを多く含む箇所を面的に検出し直接測定できるという利点がある。測定試料は、乾燥後、極軽く粉碎して塩化ビニル製リングに充填し、油圧プレス機で 20t・1 分以上プレスしたものを作製、使用した。

分析装置は、エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置である（株）堀場製作所製分析顕微鏡 XGT-5000Type II を使用した。装置の仕様は、X 線管が最大 50kV、1.00mA のロジウム（Rh）ターゲット、X 線ビーム径が 100 μ m または 10 μ m、検出器は高純度 Si 検出器（Xerophy）で、検出可能元素はナトリウム（Na）～ウラン（U）である。また、試料ステージを走査させながら測定することにより元素の二次元的な分布画像を得る、元素マッピング分析も可能である。

本分析では、まず元素マッピング分析を行い、元素の分布図を得た上で、リン（P）のマッピング図において輝度の高い箇所を選び、ポイント分析を行った。測定条件は、元素マッピング分析では 50kV、1.00mA、ビーム径 100 μ m、測定時間 2000s を 5 回走査、パルス処理時間 P3 に、ポイント分析では 50kV、0.10～0.40mA（自動設定）、ビーム径 100 μ m、測定時間 500s、パルス処理時間 P4 に設定して行った。定量計算は、装置付属ソフトによる標準試料を用いないファンダメンタル・パラメータ法で行っており、半定量値である。

表 1 分析対象一覧

No.	遺構名	時期	採取位置
1	SI-73 埋設土器	縄文時代 後期前半	第 2 層 (ブロック)
2	ST-72 土器棺墓	古墳時代 前期	A1 上
3			A1 下
4			A2 上
5			A2 下
6			B1 上
7			B1 下
8			B2 上
9			B2 下
10			A3B1 上
11			A3B1 下
12	SZ-1 g1 区土器 No.252		土②-B
13			土③-B
14			土④-B
15			土⑨-B
16	SZ-1 周溝内 土坑		周溝内土坑①
17			周溝内土坑②
18	SK-116	中世	17 層

3. 結果

試料のリンおよびカルシウムの各マッピング図にポイント分析を行った各5ヶ所の位置を示した図を図版1～4に、ポイント分析結果より酸化物の形で表した各元素半定量値を表2、3に示す。なお、元素マッピング図は、元素ごとに輝度を相対的に比較できるように、各試料のブライトネスとコントラストを調整した。

分析の結果、SI-73 埋設土器ではリン (P_2O_5) が0.02～0.32%、カルシウム (CaO) が0.32～1.55%、ST-72 土器棺墓ではリン (P_2O_5) が0.00～7.67%、カルシウム (CaO) が0.15～6.64%、SZ-1g1 区土器 No.252 ではリン (P_2O_5) が0.00～0.58%、カルシウム (CaO) が0.22～1.60%、SZ-1 周溝内土坑①と②ではリン (P_2O_5) が0.00～0.26%、カルシウム (CaO) が0.21～2.09%、SK-116 ではリン (P_2O_5) が0.06～0.35%、カルシウム (CaO) が0.23～0.53%の値を示した。

4. 考察

骨や歯は、ハイドロキシアパタイト $Ca_5(PO_4)_3OH$ が主成分であり、すなわち蛍光 X 線分析ではリン (P) とカルシウム (Ca) が共に高く検出される。ただし、土壌中のリンとカルシウムは鉱物由来の可能性も考慮する必要があり、特にカルシウムは一般的にもともと土砂中に多く含まれている元素で、注意を要する。さらに、貝殻はもちろん、炭化材なども蛍光 X 線分析では高いカルシウム含有量を示す。このように、カルシウムのみを検出では骨由来であるか骨以外のもの由来であるかを判断し難いため、分析ではリンを中心に検討した。また、埋没した時には骨が存在していたが、埋没中に分解拡散が進行し、現状ではほとんどリンが検出されない場合や、骨からビビアナイト $Fe_3(PO_4)_2 \cdot 8H_2O$ が析出しているケースのように骨由来のリンが多く検出される箇所でもカルシウムが少ないという場合もある。

今回分析した試料のうち、ST-72 土器棺墓の A1 上 (No.2)、A1 下 (No.3)、A2 上 (No.4) から採取した試料より、リンが1%を超える箇所が検出された。これらはいずれもカルシウムを伴っていないものの、骨・歯に由来する可能性がある。ST-72 土器棺墓の他の位置の試料 (No.5～No.11) からはリンが明らかに多い箇所は検出されておらず、すなわち、土器 A の底部の方に埋葬されていた可能性がある。

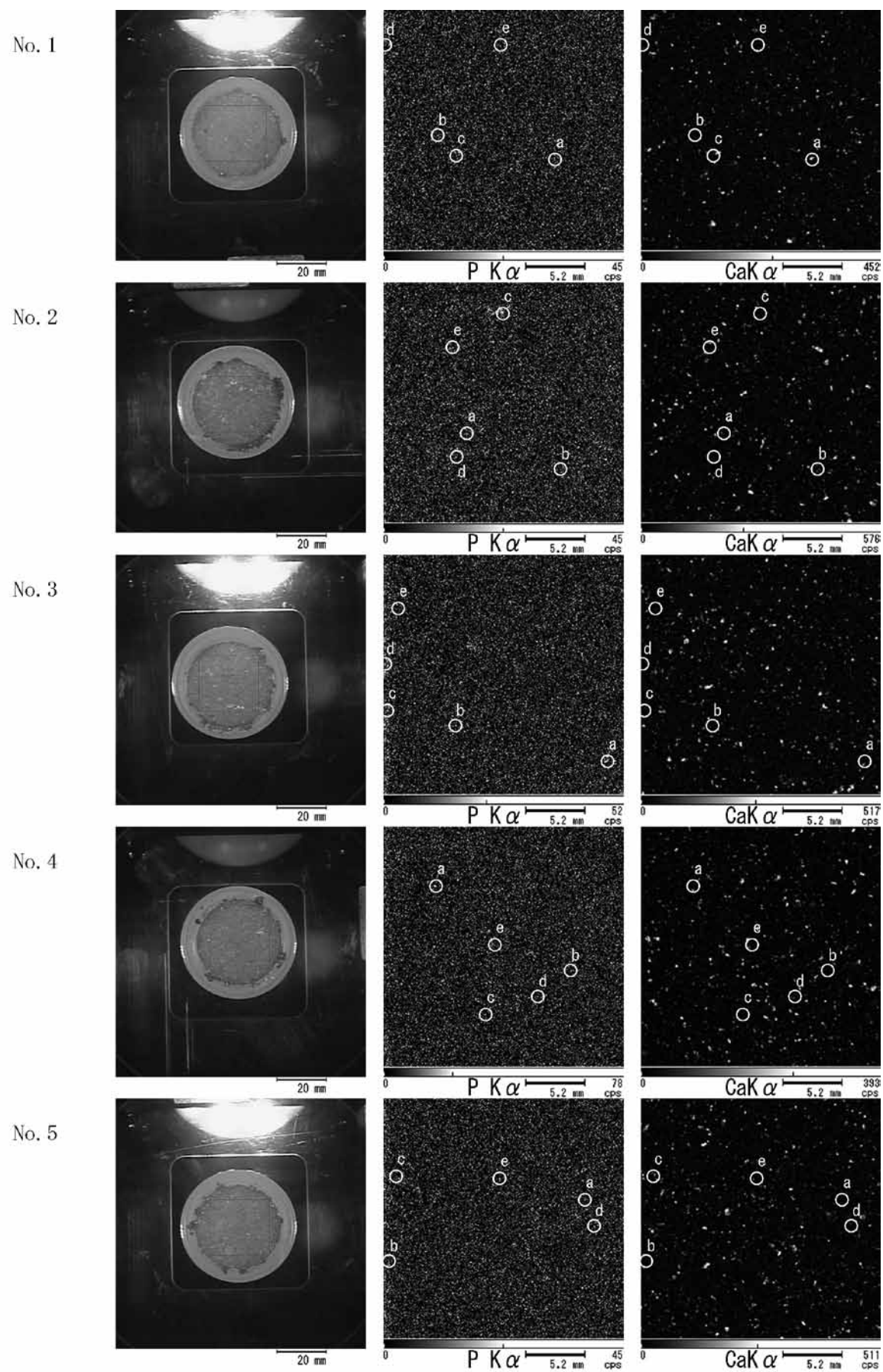
SI-73 埋設土器、SZ-1g1 区土器 No.252、SZ-1 周溝内土坑 i 層①、同②、SK-116 については、いずれもリンが明らかに多い箇所は検出されなかった。

5. おわりに

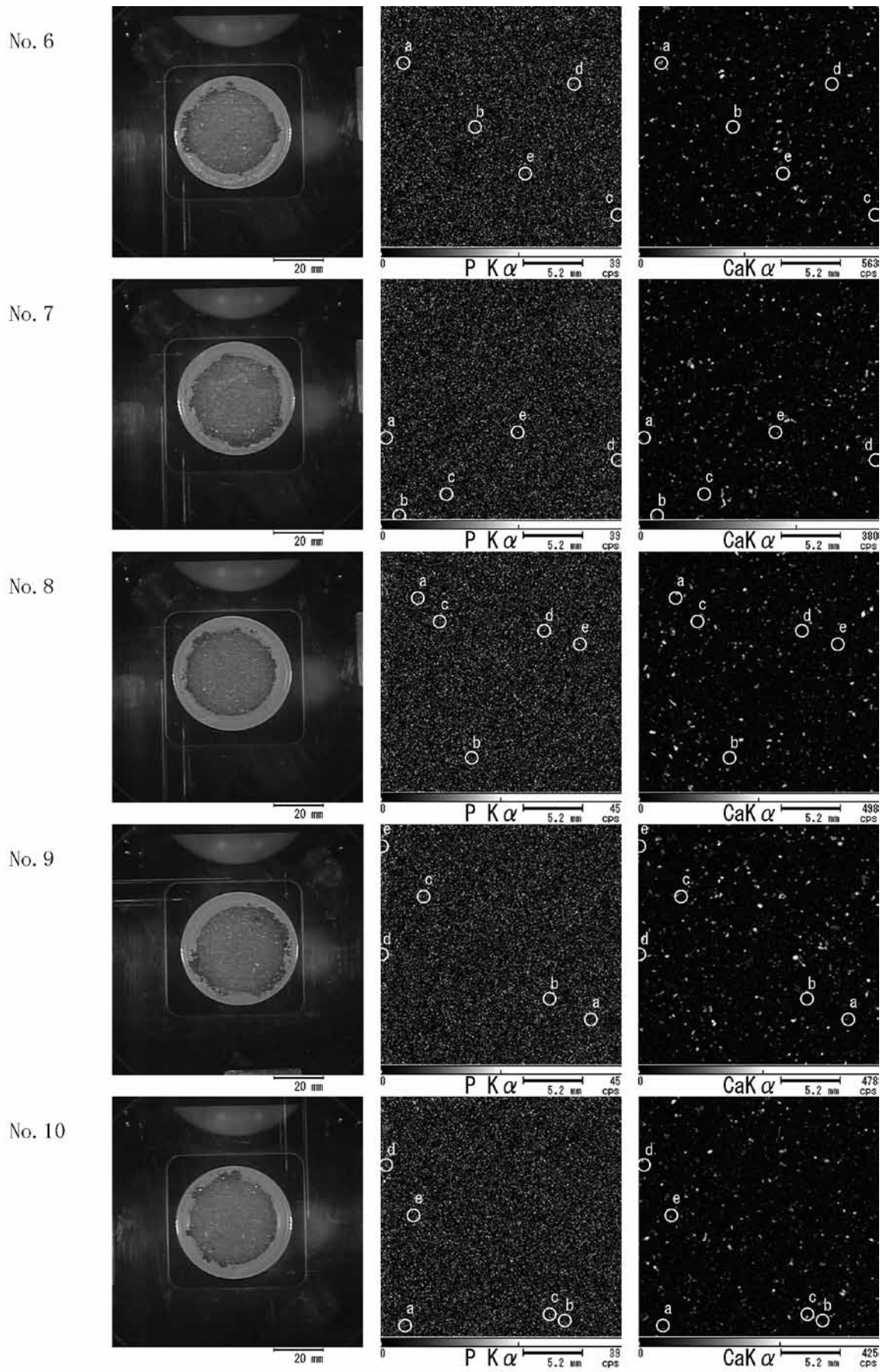
横倉遺跡・横倉戸館古墳群より検出された縄文時代～中世の遺構採取の土壌について分析を行った結果、ST-72 土器棺墓の土器 A 底部よりリンを多く含む箇所が検出され、骨・歯の存在した可能性を示唆する結果を得た。その他の遺構からは、リンが明らかに多い箇所は検出されなかった。遺構の性格については、他の自然科学分析の結果および遺物の出土状況や類例など考古学的所見も併せた総合的な判断が望まれる。

引用文献

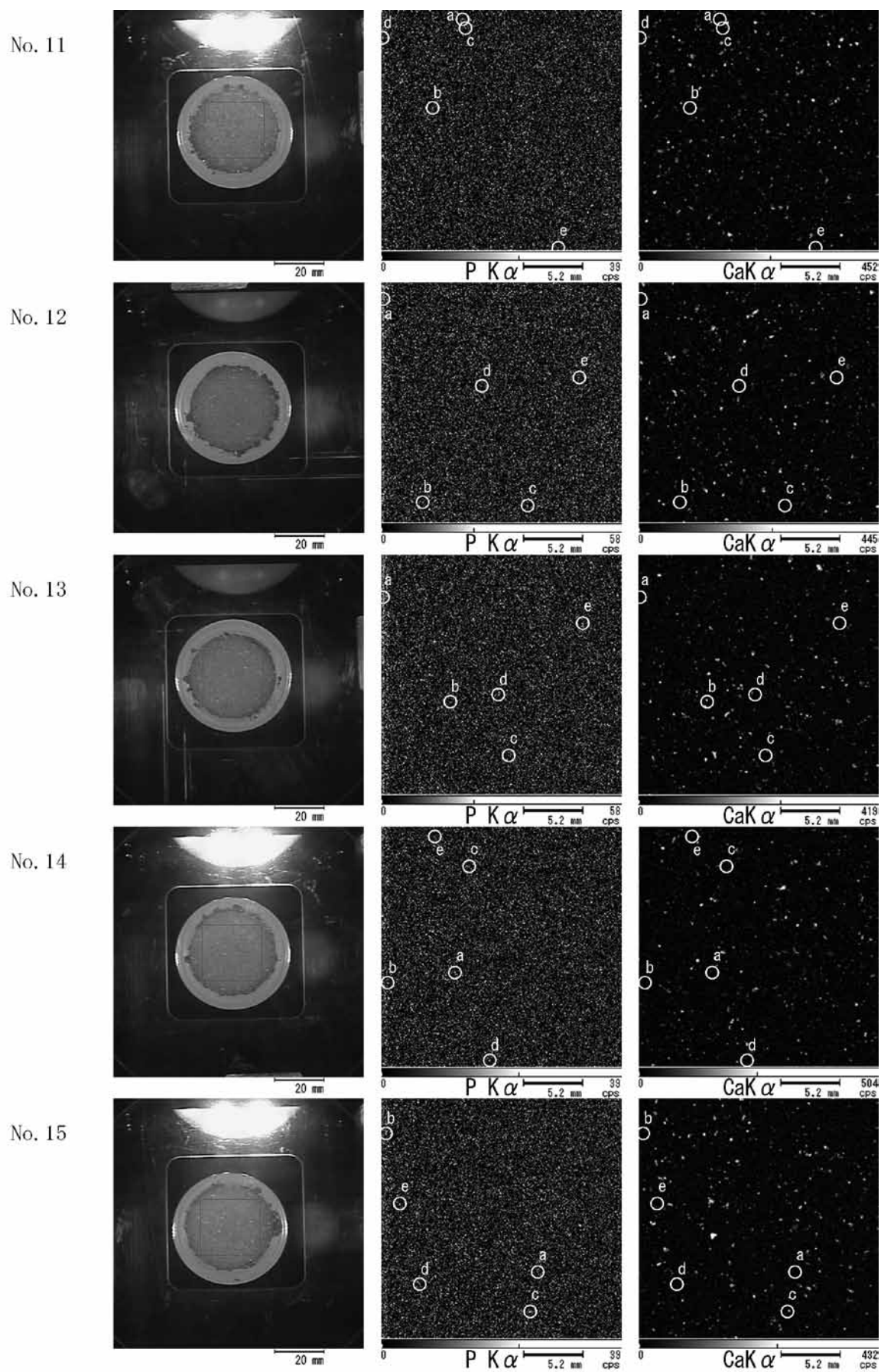
藤根 久・佐々木由香・中村賢太郎 (2008) 蛍光 X 線装置を用いた元素マッピングによるリン・カルシウム分析. 日本文化財科学会第 25 回大会研究発表要旨集, 108-109.



図版1 プレス試料およびリンとカルシウムの元素マッピング図 (1)

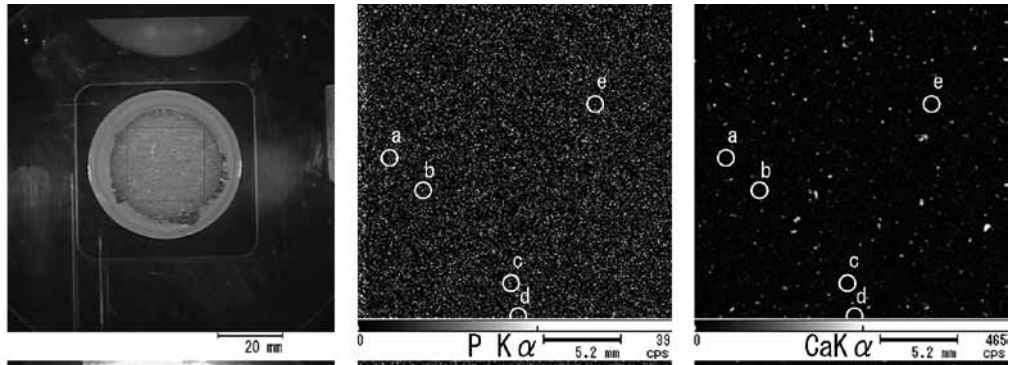


図版2 プレス試料およびリンとカルシウムの元素マッピング図 (2)

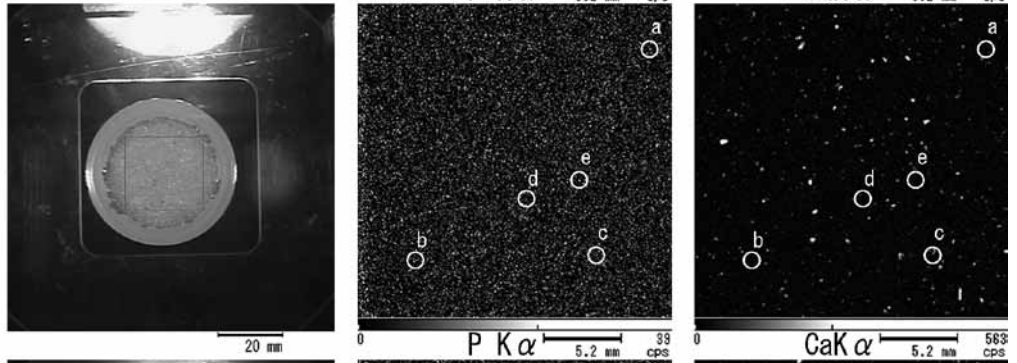


図版3 プレス試料およびリンとカルシウムの元素マッピング図 (3)

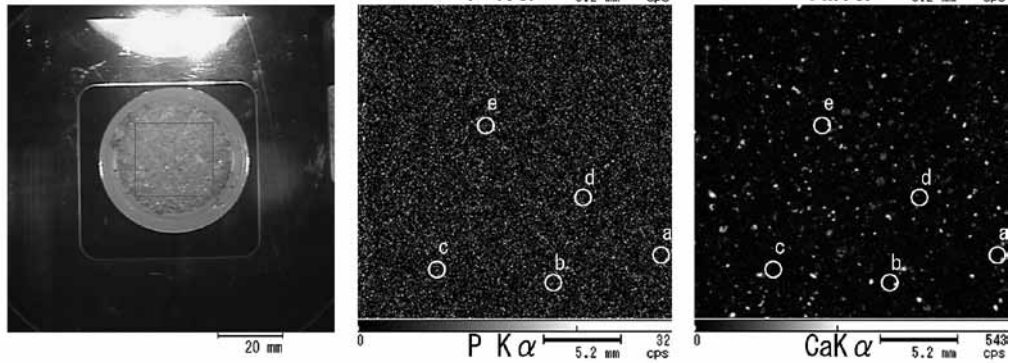
No. 16



No. 17



No. 18



図版4 プレス試料およびリンとカルシウムの元素マッピング図 (4)

表2 半定量分析結果 (mass%) (1)

No.	遺構	サイト	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	SO ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO ₂	Fe ₂ O ₃	Rb ₂ O	SrO	Y ₂ O ₃	ZrO ₂
1	SI-73 埋設土器	a	2.00	28.59	51.66	0.32	0.99	1.05	1.00	1.42	0.19	12.71	0.02	0.01	0.00	0.04
		b	0.71	25.17	56.85	0.05	0.59	0.89	1.55	1.14	0.21	12.78	0.01	0.01	0.01	0.03
		c	0.61	27.51	49.08	0.02	0.87	0.79	0.46	1.72	0.33	18.53	0.02	0.01	0.01	0.03
		d	1.36	29.11	48.53	0.07	0.92	0.99	0.35	1.56	0.40	16.65	0.01	0.02	0.01	0.03
		e	0.63	27.74	50.62	0.22	0.92	0.85	0.32	1.57	0.78	16.27	0.01	0.01	0.01	0.04
2	土器	a	0.00	29.98	52.67	0.31	0.92	1.24	0.88	1.46	0.44	11.97	0.01	0.07	0.01	0.04
		b	0.27	27.03	52.67	0.22	0.63	0.87	0.67	1.42	0.38	15.72	0.01	0.05	0.02	0.04
		c	0.89	10.49	61.54	1.81	0.19	0.18	0.15	4.66	0.07	19.97	0.00	0.01	0.01	0.04
		d	0.43	23.81	60.95	1.07	0.29	1.93	0.24	2.20	0.26	8.72	0.02	0.01	0.01	0.07
		e	0.00	29.00	52.82	0.44	0.76	0.99	0.31	1.62	0.25	13.68	0.00	0.10	0.01	0.03
3	ST-72 土器	a	0.63	28.23	54.14	3.68	0.43	1.11	0.19	2.02	0.23	9.24	0.02	0.02	0.00	0.04
		b	0.65	27.17	53.18	0.22	0.60	0.95	0.24	1.62	0.44	14.88	0.01	0.01	0.01	0.02
		c	1.10	27.61	52.18	0.03	0.57	1.05	0.46	1.45	0.28	15.20	0.01	0.01	0.01	0.04
		d	0.61	29.26	49.94	0.13	0.61	1.03	0.27	1.87	0.24	15.94	0.01	0.04	0.01	0.05
		e	0.66	27.06	54.45	0.14	0.42	0.95	1.12	1.20	0.32	13.58	0.01	0.02	0.01	0.04
4	墓	a	0.14	26.37	48.50	7.67	0.45	0.99	0.21	2.34	0.35	12.91	0.01	0.01	0.01	0.04
		b	0.58	27.73	50.50	0.06	0.70	1.22	0.22	1.42	0.22	17.30	0.01	0.01	0.00	0.03
		c	0.54	30.08	46.89	0.18	0.70	1.05	0.16	2.05	0.44	17.84	0.02	0.01	0.01	0.04
		d	0.02	26.70	55.17	0.00	0.59	0.71	2.78	1.17	0.23	12.56	0.01	0.02	0.01	0.03
		e	0.31	21.02	58.49	0.00	0.55	0.98	0.57	1.69	0.22	16.11	0.01	0.02	0.01	0.03
5	墓	a	1.43	28.22	50.16	0.25	0.66	0.88	0.28	1.41	0.43	16.19	0.01	0.01	0.01	0.05
		b	0.58	27.46	49.07	0.54	0.67	0.95	0.38	1.59	0.68	18.05	0.01	0.01	0.01	0.02
		c	0.75	22.49	58.55	0.25	0.55	0.86	0.37	1.46	0.31	14.33	0.01	0.02	0.01	0.04
		d	0.36	27.97	51.10	0.40	0.72	0.83	0.22	1.54	0.40	16.40	0.01	0.01	0.01	0.03
		e	0.65	27.86	52.51	0.18	0.66	0.83	0.17	1.60	0.35	15.09	0.01	0.07	0.01	0.03
6	墓	a	0.68	24.59	62.32	0.00	0.30	0.47	6.64	0.51	0.15	4.24	0.00	0.06	0.01	0.03
		b	1.10	27.70	52.91	0.40	0.64	0.79	0.25	1.46	0.40	14.28	0.01	0.01	0.02	0.03
		c	0.61	25.46	54.62	0.48	0.67	0.91	0.22	1.43	0.44	15.09	0.01	0.01	0.02	0.03
		d	0.57	28.01	48.15	0.44	0.63	1.19	0.32	1.27	0.56	18.81	0.01	0.01	0.01	0.02
		e	0.16	28.01	50.81	0.29	0.80	0.85	0.41	1.61	0.36	16.63	0.01	0.01	0.01	0.04

(→ P398)

5. 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一

Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani・黒沼保子

1. はじめに

横倉遺跡・横倉戸館古墳群から出土した試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

試料は、SI-73の炉3から出土した炭化種実が1点（PLD-27324）と、SI-76のP7から出土した炭化材が1点（PLD-27325）の、計2点である。PLD-27325の炭化材は、半径0.7cmのみかん割り状で、最終形成年輪が残存していた。発掘調査の所見によると、遺構の時期はいずれも縄文時代後期前半と推測されている。

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS:NEC製1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

表1 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-27324	遺構：SI-73 位置：南東焼土+粘土（ブロック）	種類：炭化種実（オニグルミ核） 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-27325	遺構：SI-76 位置：P7	種類：炭化材（広葉樹） 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）

3. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代を、図版1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代（yrBP）の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い（¹⁴Cの半減期5730 \pm 40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正にはOxCal4.1（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2

σ 暦年代範囲は 95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表 2 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-27324	-25.80 \pm 0.15	4190 \pm 22	4190 \pm 20	2879BC(15.6%)2863BC 2806BC(47.8%)2759BC 2717BC(4.8%)2711BC	2888BC(22.7%)2850BC 2814BC(55.2%)2740BC 2730BC(16.7%)2693BC 2686BC(0.8%)2680BC
PLD-27325	-26.59 \pm 0.16	69 \pm 17	70 \pm 15	1708AD(11.5%)1719AD 1826AD(6.0%)1833AD 1886AD(50.7%)1912AD	1696AD(19.9%)1725AD 1814AD(13.8%)1836AD 1845AD(1.1%)1851AD 1876AD(60.6%)1919AD

4. 考察

試料について、同位体分別効果の補正および暦年較正を行った。各試料について 2 σ の暦年代範囲に注目して結果をまとめる。

SI-73 の炉 3 から出土した炭化種実 (PLD-27324) は、2888-2850 cal BC(22.7%)、2814-2740 cal BC(55.2%)、2730-2693 cal BC(16.7%)、2686-2680 cal BC(0.8%) であった。小林 (2008) によれば、この暦年代は縄文時代中期後半に相当する。

SI-76 の P7 から出土した炭化材 (PLD-27325) は、1696-1725 cal AD(19.9%)、1814-1836 cal AD(13.8%)、1845-1851 cal AD(1.1%)、1876-1919 cal AD(60.6%) であった。これは、江戸時代中期から大正時代に相当する。

種実試料の測定結果は種実の結実年代を示すため、SI-73 の a 区から出土した炭化種実 (PLD-27324) は種実の結実年代を示している。木材試料では、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる (古木効果)。SI-76 の P7 から出土した炭化材 (PLD-27325) は最終形成年輪が残存しているため、得られた年代は木材が枯死もしくは伐採された年代を示していると考えられる。

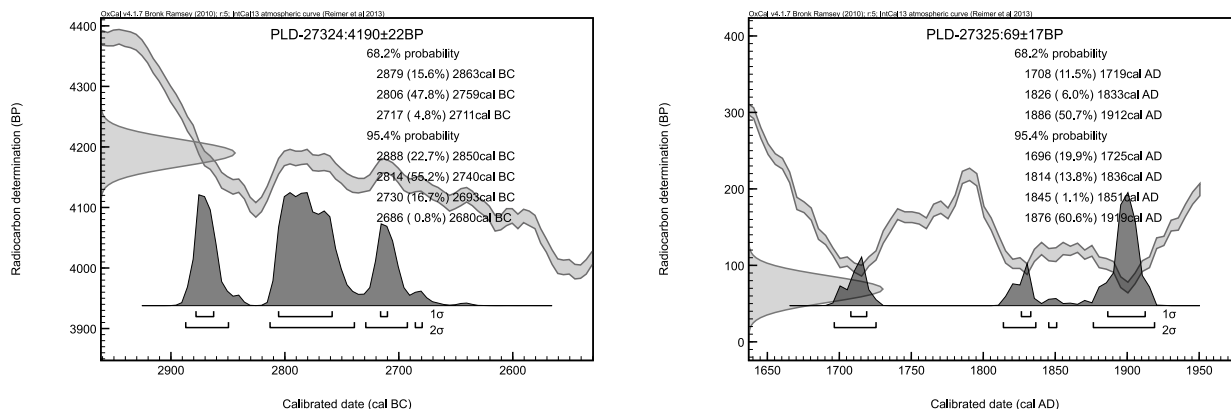
引用・参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.

小林謙一 (2008) 縄文時代の暦年代. 小杉 康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和同・矢野健一編「縄文時代の考古学 2 歴史のものさし—縄文時代研究の編年体系—」: 257-269, 同成社.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafliadason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55(4), 1869-1887.



図版 1 曆年較正結果

(P395 →表 2)

7	a	1.30	28.11	48.28	0.06	0.69	1.04	0.18	5.48	0.34	14.48	0.01	0.01	0.00	0.02
		0.57	26.70	53.33	0.00	0.58	0.97	0.32	1.57	0.28	15.56	0.02	0.02	0.01	0.05
		0.60	25.64	50.78	0.04	0.55	0.81	0.33	2.07	0.30	18.82	0.01	0.01	0.01	0.03
		0.23	27.35	55.02	0.08	0.57	1.23	0.40	1.36	0.20	13.47	0.01	0.01	0.01	0.06
		0.34	24.54	56.58	0.00	0.61	0.98	0.46	1.39	0.57	14.42	0.02	0.04	0.01	0.04
8	b	0.99	27.96	53.46	0.20	0.89	1.02	0.32	1.43	0.43	13.13	0.01	0.11	0.01	0.04
		0.62	25.38	54.76	0.27	0.65	0.90	0.44	1.93	0.43	14.55	0.01	0.02	0.01	0.03
		0.57	28.26	51.97	0.09	0.60	0.93	0.20	1.46	0.31	15.55	0.02	0.01	0.01	0.04
		0.00	25.26	56.04	0.41	0.70	0.88	0.29	1.57	0.16	14.63	0.01	0.01	0.01	0.03
		0.63	27.76	51.60	0.07	0.73	1.00	0.23	1.60	0.36	15.95	0.01	0.01	0.01	0.04
9	c	0.66	24.12	56.96	0.23	0.55	0.86	0.18	1.38	0.61	14.35	0.01	0.03	0.01	0.04
		0.00	29.43	49.92	0.32	0.60	0.95	0.39	1.52	0.25	16.56	0.01	0.02	0.01	0.03
		1.47	28.74	48.71	0.20	0.59	0.97	0.65	1.54	0.39	16.63	0.02	0.01	0.01	0.07
		0.63	26.14	55.19	0.12	0.61	0.94	0.29	1.46	0.22	14.32	0.01	0.01	0.01	0.04
		0.02	25.63	58.05	0.08	0.64	0.99	0.34	1.25	0.19	12.75	0.01	0.01	0.01	0.03
10	d	0.00	27.41	54.89	0.08	0.68	1.00	1.37	1.28	0.33	12.89	0.01	0.02	0.01	0.03
		0.38	29.33	50.78	0.06	0.70	1.13	0.31	1.46	0.26	15.53	0.02	0.01	0.01	0.04
		0.61	26.55	55.62	0.08	0.60	0.86	3.01	1.41	0.24	10.88	0.00	0.08	0.01	0.03
		0.66	26.94	60.84	0.00	0.68	1.77	0.68	1.02	0.12	7.22	0.01	0.03	0.00	0.03
		0.09	23.79	58.32	0.11	0.33	0.63	4.61	0.73	0.25	11.07	0.00	0.02	0.01	0.03
11	e	0.62	29.60	49.86	0.16	0.72	0.99	0.27	1.63	0.30	15.77	0.02	0.01	0.01	0.03
		0.75	23.47	57.55	0.36	0.68	0.74	0.23	1.38	0.53	14.26	0.01	0.02	0.01	0.03
		0.64	28.51	53.54	0.08	0.61	0.92	0.15	1.48	0.27	13.73	0.01	0.01	0.01	0.03
		0.71	25.28	55.31	0.00	0.49	1.35	0.33	1.69	0.35	14.44	0.01	0.01	0.01	0.03
		1.45	26.91	48.23	0.00	0.66	0.84	0.73	1.94	0.48	18.66	0.02	0.01	0.01	0.05

表 3 半定量分析結果 (mass%) (2)

No.	遺構	層位	MgO	Al2O3	SiO2	P2O5	SO3	K2O	CaO	TiO2	MnO2	Fe2O3	Rb2O	SrO	Y2O3	ZrO2
12	SZ-1	a	0.32	25.16	53.43	0.30	0.64	0.86	0.40	1.60	0.37	16.58	0.01	0.02	0.01	0.30
		b	0.58	27.76	51.66	0.24	0.53	0.88	0.35	1.68	0.37	15.88	0.01	0.02	0.01	0.03
		c	0.00	25.57	56.65	0.31	0.53	0.80	1.60	1.47	0.30	12.70	0.00	0.01	0.01	0.04
		d	3.61	23.71	53.66	0.19	0.51	0.77	0.96	1.62	0.37	14.54	0.01	0.01	0.01	0.03
		e	0.68	25.93	62.07	0.40	0.59	2.25	0.52	1.06	0.19	6.21	0.01	0.07	0.01	0.01
13	g1	a	0.31	27.32	51.89	0.17	0.44	0.98	0.25	1.58	0.24	16.69	0.01	0.01	0.01	0.09
		b	1.06	25.97	54.41	0.20	0.53	0.86	0.38	1.48	0.38	14.67	0.01	0.01	0.01	0.04
		c	0.61	26.37	51.19	0.40	0.37	0.79	0.32	1.57	0.31	18.02	0.01	0.00	0.01	0.03
		d	0.04	24.76	50.97	0.05	0.40	0.85	0.41	1.78	0.40	20.30	0.01	0.01	0.00	0.02
		e	0.64	25.31	55.77	0.08	0.41	0.77	0.42	1.70	0.69	14.12	0.01	0.01	0.01	0.05
14	土器 No. 252	a	0.65	27.29	52.18	0.29	0.49	0.94	0.33	1.58	0.30	15.89	0.02	0.01	0.01	0.03
		b	0.79	27.56	52.17	0.27	0.53	0.97	0.54	1.61	0.30	15.17	0.01	0.02	0.01	0.03
		c	0.64	27.63	50.49	0.21	0.66	0.95	0.41	1.79	0.35	16.80	0.02	0.00	0.01	0.04
		d	0.61	29.66	49.68	0.33	0.76	0.87	0.26	1.62	0.39	15.73	0.01	0.01	0.01	0.04
		e	0.76	22.20	60.29	0.29	0.55	0.71	0.69	1.24	0.31	12.89	0.01	0.01	0.01	0.03
15	土器 No. 252	a	0.00	27.58	50.19	0.58	0.52	0.94	0.36	1.60	0.36	17.78	0.02	0.03	0.01	0.04
		b	0.63	27.53	51.05	0.08	0.50	0.92	0.22	1.57	0.19	17.26	0.01	0.01	0.01	0.02
		c	0.62	28.17	50.22	0.17	0.57	1.10	0.54	1.50	0.37	16.67	0.02	0.02	0.01	0.03
		d	0.65	27.00	51.60	0.44	0.54	1.04	0.28	1.56	0.33	16.50	0.02	0.01	0.01	0.03
		e	0.55	21.52	69.75	0.00	0.34	1.12	0.30	0.88	0.05	5.45	0.00	0.01	0.00	0.01
16	SZ-1 周溝内土坑	a	0.62	25.76	54.65	0.02	0.53	0.82	0.21	1.48	0.50	15.30	0.01	0.01	0.01	0.07
		b	0.63	27.13	57.96	0.08	0.62	1.12	2.09	1.32	0.17	8.76	0.00	0.11	0.01	0.02
		c	0.52	29.91	48.22	0.00	0.75	0.83	0.21	1.71	0.29	17.49	0.01	0.01	0.01	0.04
		d	0.60	27.44	53.04	0.15	0.43	0.95	0.47	1.37	0.33	15.16	0.01	0.01	0.01	0.03
		e	0.64	24.50	54.56	0.00	0.53	1.44	0.32	1.46	0.23	16.27	0.01	0.01	0.01	0.03
17	土坑	a	1.17	29.92	48.30	0.11	0.62	0.84	0.24	1.49	0.25	16.99	0.01	0.01	0.01	0.04
		b	0.74	23.10	59.18	0.02	0.50	1.01	0.50	1.27	0.18	13.44	0.01	0.01	0.01	0.03
		c	2.37	29.27	49.16	0.07	0.49	1.02	0.36	1.67	0.26	15.25	0.01	0.02	0.01	0.04
		d	0.62	28.92	51.22	0.02	0.58	0.78	0.21	1.51	0.21	15.87	0.01	0.02	0.01	0.03
		e	0.64	25.72	52.37	0.26	0.59	0.75	0.22	1.31	0.46	17.62	0.01	0.01	0.01	0.03
18	SK-116	a	0.68	25.86	53.03	0.35	0.47	0.59	0.23	1.72	0.29	16.71	0.01	0.01	0.01	0.03
		b	1.52	28.92	55.52	0.17	0.68	1.15	0.34	1.25	0.32	10.07	0.02	0.01	0.01	0.02
		c	0.71	24.63	56.07	0.06	0.61	1.00	0.45	1.58	0.29	14.54	0.01	0.01	0.01	0.03
		d	0.00	30.23	49.03	0.18	0.66	1.11	0.31	1.67	0.24	16.49	0.01	0.02	0.01	0.04
		e	0.65	28.07	52.29	0.15	0.66	1.01	0.53	1.57	0.37	14.64	0.01	0.01	0.01	0.03

6. 横倉遺跡・横倉戸館古墳群出土鉄関連遺物の分析調査

日鉄住金テクノロジー（株） 大澤正己・鈴木瑞穂

1. いきさつ

横倉遺跡・横倉戸館古墳群は栃木県小山市に所在する。平安時代と推定される住居跡（SI-75）からは鉄滓等の遺物が複数出土している。またごく僅かであるが、溝（SD-3）などからは製鉄炉の炉壁片と推定される遺物も確認されている。このため遺跡周辺での生産の実態を検討する目的から、調査を実施する運びとなった。

2. 調査方法

2-1. 供試材

Table1 に示す。出土鉄関連遺物 3 点の調査を行った。

2-2. 調査項目

(1) 肉眼観察

分析調査を実施する遺物の外観の特徴など、調査前の観察所見を記載した。

(2) マクロ組織

本稿では顕微鏡埋込み試料の断面を、低倍率で撮影したものを指す。当調査は顕微鏡組織よりも、広範囲で組織の分布状態、形状、大きさなどが観察できる利点がある。

(3) 顕微鏡組織

鋳滓の鋳物組成や金属部の組織観察、非金属介在物の調査などを目的とする。

試料観察面を設定・切り出し後、試験片は樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の #150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の $3\mu\text{m}$ と $1\mu\text{m}$ で鏡面研磨した。また観察には金属反射顕微鏡を用い、特徴的・代表的な視野を選択して写真撮影を行った。

(4) ビッカース断面硬度

ビッカース断面硬度計（Vickers Hardness Tester）を用いて硬さの測定を行い、文献硬度値に照らして、鋳滓中の晶出物の判定を行った。

試験は鏡面研磨した試料に 136° の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除いた商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用し、荷重は 50～200gf で測定した。

(5) EPMA（Electron Probe Micro Analyzer）調査

日本電子(株)製 JXA-8800RL（波長分散型 5 チャンネル）にて含有元素の定性・定量分析を実施した。定量分析は試料電流 2.0×10^{-8} アンペア、ビーム径 $3\mu\text{m}$ 、補正法は ZAF に従った。反射電子像（COMP）は、調査面の組成の違いを明度で表示するものである。重い元素で構成される個所ほど明るく、軽い元素で構成される個所ほど暗い色調で示される。これを利用して、各相の組成の違いを確認後、定量分析を実施している。また元素の分布状態を把握するため、反射電子像に加え、特性 X 線像の撮影も適宜行った。

(6) 化学組成分析

出土遺物の性状を調査するため、構成成分の定量分析を実施した。

全鉄分（Total Fe）、金属鉄（Metallic Fe）、酸化第一鉄（FeO）：容量法。

炭素（C）、硫黄（S）：燃焼容量法、燃焼赤外吸収法

二酸化珪素 (SiO_2)、酸化アルミニウム (Al_2O_3)、酸化カルシウム (CaO)、酸化マグネシウム (MgO)、酸化カリウム (K_2O)、酸化ナトリウム (Na_2O)、酸化マンガン (MnO)、二酸化チタン (TiO_2)、酸化クロム (Cr_2O_3)、五酸化燐 (P_2O_5)、バナジウム (V)、銅 (Cu)、二酸化ジルコニウム (ZrO_2) : ICP (Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer) 法 : 誘導結合プラズマ発光分光分析。

3. 調査結果

YOK - 1 : 梘形鍛冶滓

(1) 肉眼観察 : やや小形で偏平な梘形鍛冶滓 (32.0g) である。上面には黒色ガラス質滓が付着しており、羽口先端の溶融物と推定される。表面には広い範囲で黄褐色の土砂や茶褐色の鉄錆化物が付着するが、特殊金属探知器での反応はみられない。下面側は木炭痕による細かい凹凸があり、一部淡褐色の鍛冶炉床土が付着する。

(2) 顕微鏡組織 : Photo.1 ①~③に示す。白色粒状結晶ウスタイト (Wustite : FeO)、淡灰色柱状結晶ファヤライト (Fayalite : $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$) が晶出する。鉄チタン酸化物の結晶はなく、鍛錬鍛冶滓の晶癖といえる。

(3) ビッカース断面硬度 : Photo.1 ③の白色粒状結晶の硬度を測定した。硬度値は 417Hv、431Hv であった。風化の影響かうスタイトの文献硬度値 (注 1) 450 ~ 500Hv よりもやや軟質の値を示すが、色調・形状などの特徴からウスタイトと推定される。

(4) 化学組成分析 : Table 2 に示す。全鉄分 (Total Fe) 48.56% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.07%、酸化第 1 鉄 (FeO) 48.70%、酸化第 2 鉄 (Fe_2O_3) 15.21% の割合であった。造滓成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) 30.51% とやや高め、このうち塩基性成分 ($\text{CaO} + \text{MgO}$) は 4.63% である。主に製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO_2) は 0.30%、バナジウム (V) が < 0.01% と低値であった。また酸化マンガン (MnO) は 0.05%、銅 (Cu) も < 0.01% と低値である。

当鉄滓は熱間での鍛打加工に伴う鍛錬鍛冶滓に分類される。主に鉄酸化物と炉材粘土 (SiO_2 主成分) の溶融物からなり、製鉄原料の砂鉄起源の脈石成分 (TiO_2 、V) の低減傾向が顕著であった。

YOK - 2 : 鉄製品

(1) 肉眼観察 : 棒状の鍛造鉄器または未成品 (10.0g) と推定される。頭部が欠損し、体部がねじれた状態の鉄釘破片の可能性も指摘されている。表面は全体が茶褐色の土砂または鉄錆化物に覆われる。錆化に伴い表面の剥離も部分的に生じているが、特殊金属探知器の反応もあり、内部には金属鉄が残存すると考えられる。

(2) マクロ組織 : Photo.1 ④に示す。基部側の縦断面を観察した。内部には金属鉄が良好に残存する。3% ナイタルで腐食したところ、素地部分は比較的高炭素域で (黒色部 : 共析組織で、表層では部分的に低炭素域 (白色部 : 亜共析組織) が確認された。

(3) 顕微鏡組織 : Photo.1 ⑤~⑦に示す。⑤は④左上、⑦は④下側の表層低炭素域 (亜共析組織 : $\text{C} < 0.77\%$) の拡大である。最も炭素含有率の低い部分では、素地が白色のフェライト (Ferrite : α 鉄) で、少量黒色のパーライト (Pearlite) が析出する。パーライトの面積率から⑤上側部分の炭素含有率は 0.1% 以下と推定される。また内側に向かって徐々にパーライトの面積率が高くなり、素地部分はほぼ全面パーライトの共析組織 ($\text{C} : 0.77\%$) を呈する。⑥は高炭素組織部分の拡大である。

(4) ビッカース断面硬度 : Photo.1 ⑤~⑦の金属鉄部の硬度を測定した。低炭素域 (亜共析組織部分) の硬度値は 88 ~ 229Hv であった。表層側ほど軟質である。これに対して、高炭素域 (共析組織部分) の硬度値

は 305Hv、307Hv であった。パーライトの層間が細かいため硬質の値を示している。

(5) EPMA 調査：Photo.2 ①②に鉄中非金属介在物（暗色部）の反射電子像（COMP）を示す。ともに鍛打に伴って展伸した形状を呈しており、内部に微細な淡褐色結晶が晶出する。この淡褐色結晶に対応して、特性 X 線像ではチタン（Ti）に強い反応がある。定量分析値は 3.3%FeO - 77.8%TiO₂ - 4.9%SiO₂ - 7.3%Al₂O₃ - 7.2%MgO（分析点 1）、23.5%FeO - 69.0%TiO₂ - 13.0%SiO₂ - 4.7%Al₂O₃ - 6.8%MgO（分析点 3）であった。結晶が微細なため、周囲のガラス質滓や鉄部の影響を受けた値となっているが、チタン酸化物（TiO₂）主体の結晶と判断される。砂鉄を高温製錬した際にみられる晶癖である（注 2）。また介在物の素地部分（暗色部）の定量分析値は 50.4%SiO₂ - 20.0%Al₂O₃ - 9.6%CaO - 4.7%MgO - 4.7%K₂O - 6.3%TiO₂ - 2.9%FeO（分析点 2）、72.6%SiO₂ - 13.4%Al₂O₃ - 2.3%CaO - 3.4%K₂O - 2.2%TiO₂ - 1.6%FeO（分析点 4）であった。非晶質硅酸塩である。

当鉄器は熱間で鍛打加工された鍛造製品（または未製品）であった。表層部には若干低炭素域がみられるが、素地部分はほぼ全面パーライトの共析組織（C：0.77%）で、鉄釘としては高炭素材である。また非金属介在物中にはチタン酸化物（TiO₂）主体の結晶が確認された。砂鉄を高温製錬してつくられた鉄塊が鍛冶原料であったと推定される。

YOK - 3：炉壁

(1) 肉眼観察：熱影響を受けて内面が黒色ガラス質化した、製鉄炉の炉壁の小破片（85.0g）と推定される。内面表層には滓の付着や木炭痕が観察される。炉壁部分は淡褐色で砂粒やスサが混和されている。

(2) 顕微鏡組織：Photo.2 ③～⑤に示す。③左上は付着滓部分で、④はその拡大である。淡茶褐色多角形結晶はウルボスピネル（Ulvöspinel：2FeO・TiO₂）とヘルシナイト（Hercynite：FeO・Al₂O₃）を主な端成分とする固溶体（注 3）と推定される。また淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。砂鉄製錬滓の晶癖である。また③の暗灰色部は炉壁内面が熔融して生じたガラス質滓で、⑤はその拡大である。滓中には炉壁粘土に混和された砂粒（⑤左上および右下）が多数散在する。

(3) ビッカース断面硬度：Photo.2 ④の淡茶褐色多角形結晶の硬度を測定した。硬度値は 821Hv であった。ウルボスピネル（Ulvöspinel：2FeO・TiO₂）としては硬質であり、ヘルシナイト（Hercynite：FeO・Al₂O₃）との固溶体の可能性が高いと考えられる。

付着滓の鉍物組成から、当炉壁は砂鉄を製錬した製鉄炉の小破片と推定される。

4. まとめ

横倉遺跡・横倉戸館古墳群の出土鉄関連遺物を調査した結果、次の点が明らかとなった。

〈1〉平安時代住居跡（SI-75）から出土した鉄関連遺物のうち、今回分析調査を実施した鉄滓 1 点（YOK - 1）は鍛錬鍛冶滓に分類される。鉄素材を熱間で鍛打加工して、鉄器が製作されたことを示すものといえる。

また棒状鉄器（YOK - 2）は、熱間で鍛打加工された鍛造製品（または未製品）であった。表層部には若干低炭素域がみられるが、素地部分はほぼ全面パーライトの共析組織（C：0.77%）で、鉄釘としては高炭素材である。また非金属介在物中にはチタン酸化物（TiO₂）主体の結晶が確認された。砂鉄を高温製錬してつくられた鉄塊が鍛冶原料であったと推定される。

なお小山市内では大境遺跡で、9 世紀後半と推定される製鉄関連遺物が多数出土しており、地域周辺で砂鉄製錬が行われた可能性が指摘されている（注 4）。こうした地域の砂鉄製錬による生産物（製錬系鉄塊）が鍛冶原料と仮定しても、鉄器（YOK - 2）の非金属介在物は矛盾のないものといえる。

〈2〉溝 (SD-3) から出土した炉壁片 (YOK - 3) は、内面に砂鉄製鍊滓が付着する。製鉄炉の炉壁片であることが確認された。

(注)

(1) 日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968

ウスタイトは 450 ~ 500Hv、マグネタイトは 500 ~ 600Hv、ファイヤライトは 600 ~ 700Hv の範囲が提示されている。ウルボスピネルの硬度値範囲の明記はないが、マグネタイトにチタン (Ti) を固溶するので、600Hv 以上であればウルボスピネルと同等している。それにアルミナ (Al) が加わり、ウルボスピネルとヘルシナイトを端成分とする固溶体となると更に硬度値は上昇する。このため 700Hv を超える値では、ウルボスピネルとヘルシナイトの固溶体の可能性が考えられる。

(2) J.B. Mac chesney and A. Murau : American Mineralogist, 46 (1961), 572

[イルミナイト (Ilmenite : $\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$) の晶出は $\text{FeO} - \text{TiO}_2$ 二元平衡状態図から高温化操業が推定される。]

(3) 黒田吉益・諏訪兼位『偏光顕微鏡と造岩鉱物 [第2版]』共立出版株式会社 1983

第5章 鉱物各論 D. 尖晶石類・スピネル類 (Spinel Group) の記載に加筆

尖晶石類の化学組成の一般式は XY_2O_4 と表記できる。X は 2 価の金属イオン、Y は 3 価の金属イオンである。その組み合わせでいろいろの種類のものがある。

(4) 『大境遺跡』栃木県教育委員会 1993

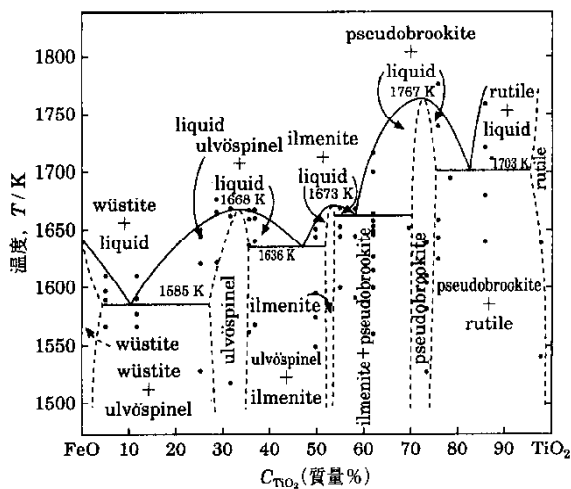


表 1 供資材の履歴と調査項目

符号	遺跡名	出土位置	遺物 No.	遺物名称	推定年代	計測値		調査項目						備考		
						大きさ (mm)	重量 (g)	磁着度	メタル度	マクロ組織	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	X線回折		EPMA	化学分析
YOK-1	横倉遺跡 横倉戸館古墳群	SI-75	12	楕形鍛冶滓	9 c後半～ 10 c前半	53×33×16	32.0	2	錆化 (△)	○	○			○		
YOK-2		SI-75 IB	31	鉄製品		59×9×11	10.0	2	M(◎)	○	○					
YOK-3		SD-3	80	炉壁	18 c後半～ 19 c前半	56×22×44	85.0	2	なし	○	○					

表 2 供資材の化学組成

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe ₂ O ₃)	二酸化珪素 (SiO ₂)	酸化アルミナ (Al ₂ O ₃)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化カリウム (K ₂ O)	酸化ナトリウム (Na ₂ O)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO ₂)	酸化クロム (Cr ₂ O ₃)	硫黄 (S)	五酸化リン (P ₂ O ₅)	炭素 (C)	ハニノウム (V)	銅 (Cu)	二酸化ジルコニウム (ZrO ₂)		注		
																							造滓成分 Total Fe	造滓成分 TiO ₂			
YOK-1	横倉遺跡 横倉戸館古墳群	SI-75	楕形鍛冶滓	9 c後半～ 10 c前半	48.56	0.07	48.70	15.21	17.35	6.20	3.26	1.37	1.96	0.37	0.05	0.30	0.04	0.022	0.45	0.23	<0.01	<0.01		30.51	0.628	0.006	

表 3 出土遺物の調査結果のまとめ

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織	化学組成 (%)						所見		
						Total Fe	Fe ₂ O ₃	塩基性成分	TiO ₂	V	MnO		造滓成分	Cu
YOK-1	横倉遺跡	SI-75	楕形鍛冶滓	9 c後半～ 10 c前半	金属鉄部：亜共析～共析組織、非金属介在物：R	48.56	15.21	4.63	0.30	<0.01	0.05	30.51	<0.01	鍛錬鍛冶滓
YOK-2	横倉戸館古墳群	SI-75 IB	鉄製品	18 c後半～ 19 c前半	金属鉄部：UとHの固溶体+F、ガラス質滓 (被熱砂粒混在)	-	-	-	-	-	-	-	-	鍛造鉄器 (始発原料：砂鉄、高温製鉄)
YOK-3		SD-3	炉壁	18 c後半～ 19 c前半	金属鉄部：UとHの固溶体+F、ガラス質滓 (被熱砂粒混在)	-	-	-	-	-	-	-	-	製鉄炉の炉壁片 (製鉄原料：砂鉄)

W:Wüstite (FeO)、F:Fayalite (2FeO·SiO₂)、R:Rutile (TiO₂)、U:Ulvöspinel (2FeO·TiO₂)、H:Hercynite (FeO·Al₂O₃)

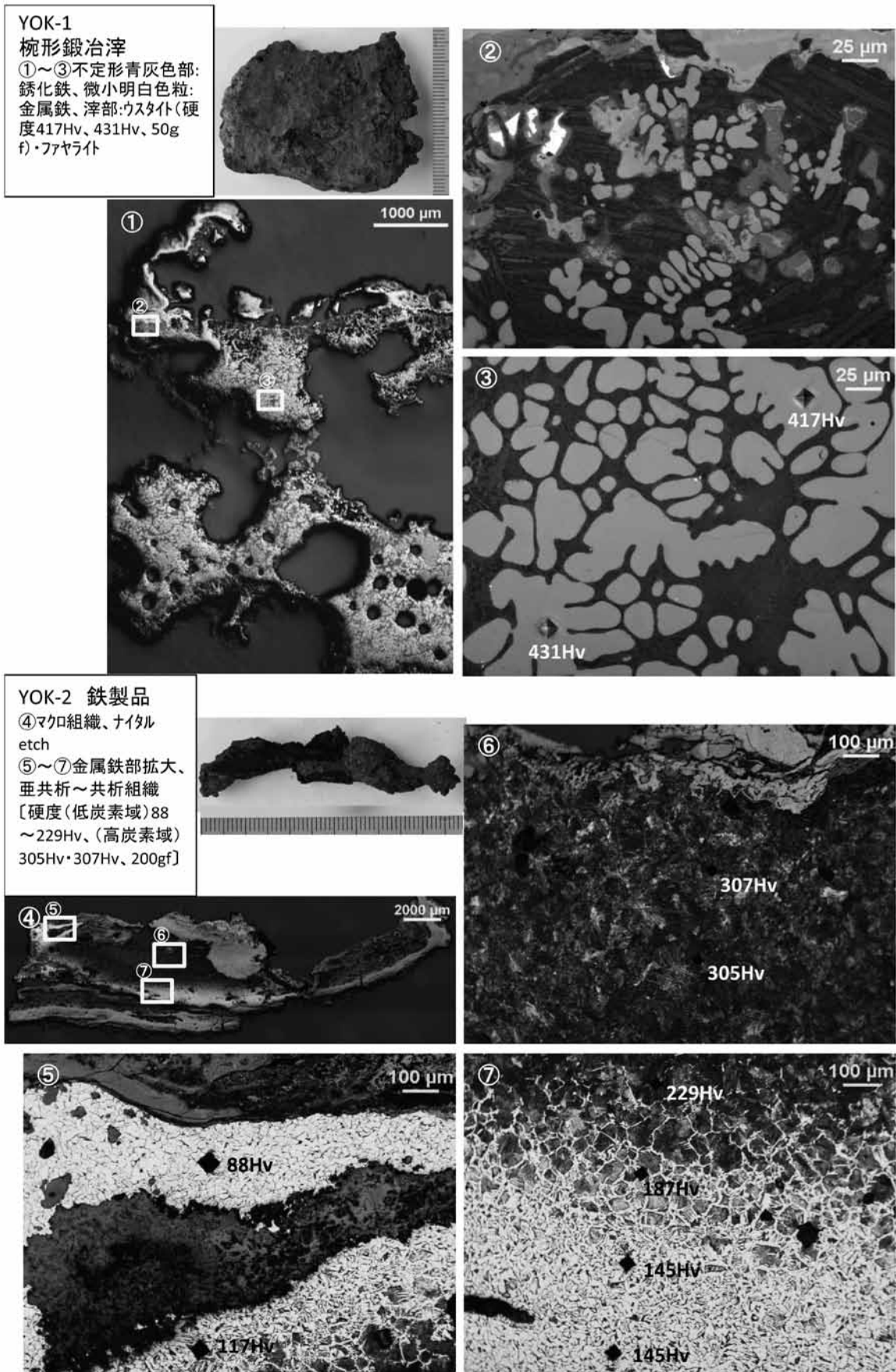
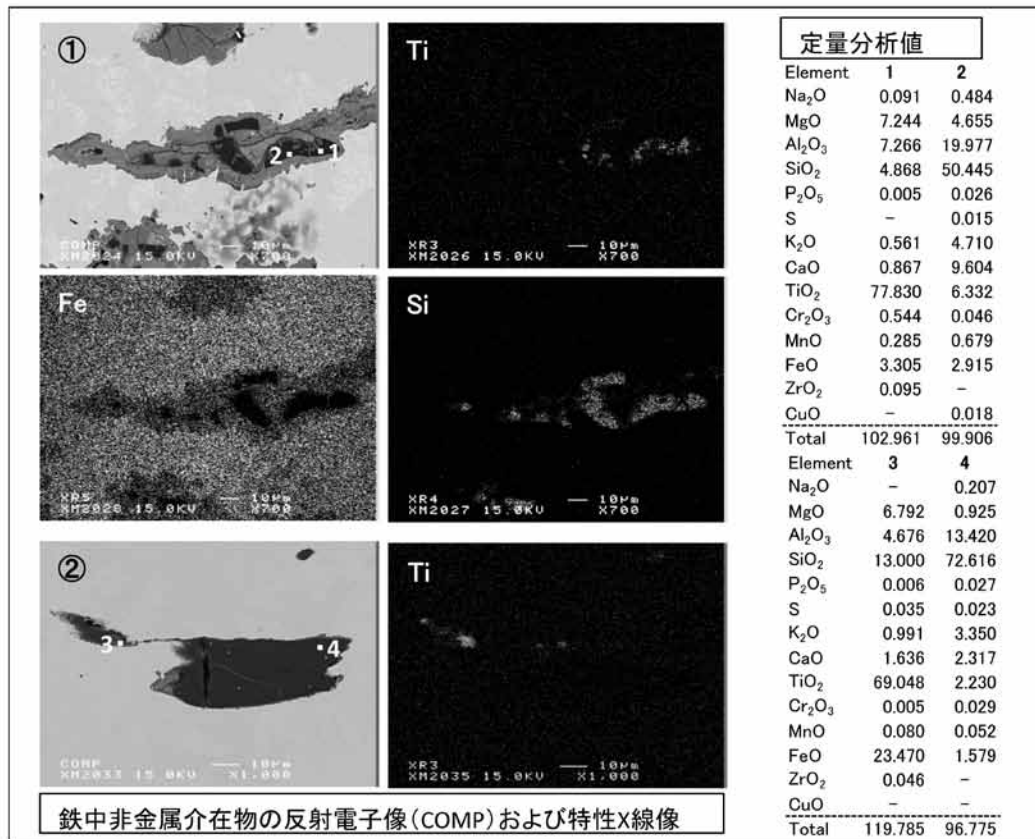


写真1 椀形鍛冶滓・鉄製品の顕微鏡組織



YOK-3 炉壁
 ③ 明色部: 砂鉄製錬滓、
 暗色部: ガラス質滓 (被熱
 無色鉱物混在)
 ④ 製錬滓: カルホスピネルと
 ヘルシナイトの固溶体 (硬度
 821Hv、50gf)・ファヤライト
 ⑤ ガラス質滓

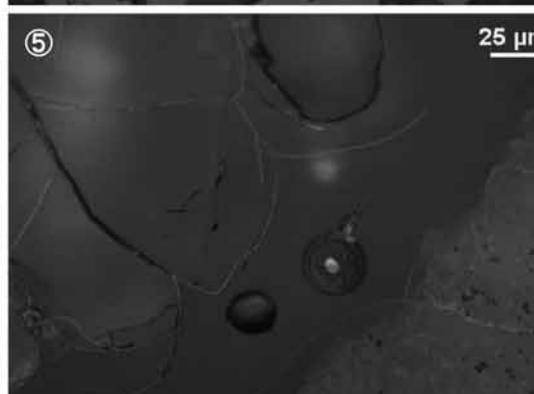
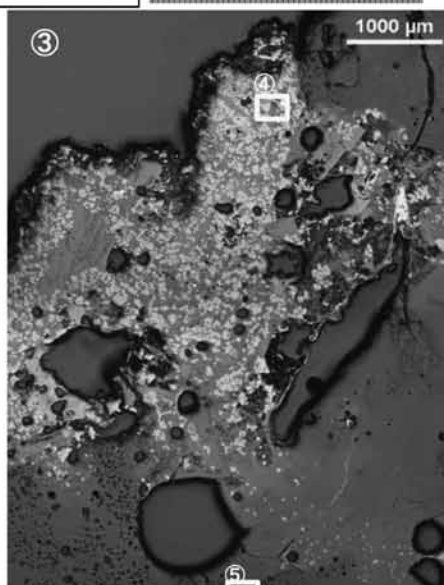
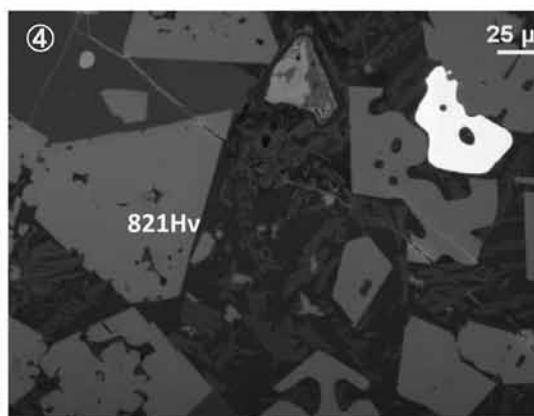


写真 2 鉄製品の EPMA 調査結果・炉壁の顕微鏡組織

7. 横倉遺跡出土試料の ^{14}C 年代測定と較正年代

小林謙一（中央大学）・坂本稔（国立歴史民俗博物館）

1. はじめに

小山市横倉遺跡（略号を TGMBY とした）出土炭化材（試料番号に C を付した）及び土器付着物サンプルに対して、加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定をおこなった。測定した試料は、図 1 に示す。栃木県埋蔵文化財センターにて小林謙一が 2015 年 1 月に試料採取をおこない、国立歴史民俗博物館年代実驗室にて前処理をおこなった。

2. 試料と方法

試料情報は下記の通りである。TGMBY-1（a：内面・b：外面）とした 1 個体から内外面付着炭化物 2 試料、炭化材試料として TGMBY-C1・C2 を採取した。他に別個体の土器付着物として TGMBY-2 を採取したが、炭素量が不足で AMS 測定ができなかったため、以下には測定結果を得た 4 試料について記す。TGMB-1 は住居ピット 11 内に強いてあった土器破片で、土器破片 3 の内外の付着物をそれぞれ採取したものである。

TGMBY-1a SI-76 住 ,P7, 土器敷No.43 土器付着物胴内面 焦げか 堀之内 2 式中段階

TGMBY-1b SI-76 住 ,P7, 土器敷No.43 土器付着物口縁外面 吹きこぼれか 堀之内 2 式中段階

TGMBY-C1 SI-76 住 ,P4 炭化物（材） 広葉樹数年輪分 クリ樹幹か

TGMBY-C2 SI-76 住 ,P10 炭化物（材） 広葉樹 1 年輪分 クリ樹幹か

試料の AAA による前処理は、国立歴史民俗博物館年代実驗室で小林が以下の手順でおこなった。

アセトン中で 5 分間の超音波洗浄を行った後、クロロホルムとメタノールを容量 2 対 1 で混合した溶媒（CM 混液）による 30 分間の還流を 2 回おこなった。次いで、アセトン中で 5 分間の超音波洗浄を 2 回行った。この操作で、油分や接着剤などの成分が除去されたと判断できる。

酸 - アルカリ - 酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/l （1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では 1M の水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用いる。C1・C2 の炭化物試料の前処理は、坂本稔が設計した自動処理機を用いた 1）。

TGMBY-C1 は 118mg を前処理し、64.15mg が回収された。うち 27.79mg を炭素 14 年代測定用とした。TGMBY-C2 は 38mg を前処理し、23.96mg が回収された。うち 7.97mg を炭素 14 年代測定用とした。年代測定に適した良好な状態であった。

TGMBY-1ab の土器付着物試料の AMS 測定はベータアナリスティック社に委託した。C1・C2 の炭化物試料の以下の作業は山形大学へ委託した。それぞれの測定試料は、元素分析計、質量分析計、ガラス真空ラインより構成されるグラファイト調整システムにてグラファイト化をおこなった。この際の EA 使用量（処理で使用した量）は、-1 は mg を用い、ガラスラインで回収した炭素量（回収した CO_2 量より計算）は、mg であった。M-C1 は mg を用い、ガラスラインで回収した炭素量（回収した CO_2 量より計算）は、mg であった。

その後、山形大学高精度加速器測定センター総合研究所 1 階に設置した加速器質量分析計（YU-AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて放射性炭素年代を測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

3. 結果

土器付着物である TGMBY-1ab について、質量分析計による炭素・窒素安定同位体比、炭素量、窒素量を SI サイエンス社に委託して測定した。 $\delta^{13}\text{C}$ は内外面ともに陸性の由来である可能性が高いことを示すが、C/N 比 (mol 比) ではやや差異があり、内面の 1a は動物性の由来が比較的高いことを示すのに対し、外面の 1b は燃料材のススなど植物性の由来の可能性が高いことを示唆している。

試料番号	$\delta^{13}\text{C}$	$\delta^{15}\text{N}$	窒素量	炭素量	C/N 比
TGMBY-1a	-27.1‰	3.9‰	5.6%	47.4%	9.9
TGMBY-1b	-26.5‰	8.9‰	3.3%	48.2%	17.0

次に、サンプルの放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果を示す。各結果には、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、 ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲を示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正をおこなうため記載した。

AMS- 炭素 14 年代測定値

試料番号	測定機関番号	$^{14}\text{CyrBP}$	較正用 $^{14}\text{CyrBP}$
TGMBY-1a	Beta-404302	3845±25	3845±24
TGMBY-1b	Beta-404303	3685±25	3683±24
TGMBY-C1	YU-3412	3750±20	3751±20
TGMBY-C2	YU-3413	3710±20	3710±20

暦年較正年代確率分布 (IntCal13,OxCal2013)

試料番号	2 σ 較正年代 cal BC	
TGMBY-1a	2456-2418 cal BC (8.2%)	2407-2375 cal BC (9.9%) 2367-2362 cal BC (0.8%) 2351-2205 cal BC (76.5%)
TGMBY-1b	2142-2011 cal BC (89.9%)	2001-1978 cal BC (5.5%)
TGMBY-C1	2274-2258(3.1%)	2208-2128(80.6%) 2088-2048(11.7%)
TGMBY-C2	2195-2172 (7.8%)	2146-2032 (87.6%)

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。 ^{14}C 年代の暦年較正には較正曲線データ: IntCal132) を使用し、OxCal4.23) または OxCal4.2.4) を用いて算出した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ 暦年代範囲は 95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す (図 1)。

4. 年代的考察

年代測定結果の較正年代であるが、2013年に較正曲線が水月湖の湖底堆積物などのデータにより後期旧石器時代5万年前までをカバーするIntCal13に更新された2)。特に1万2千年より以前の較正年代については、これまでに測定されてきた結果も含めてIntCal13を参照することが推奨されている。縄紋時代後期はIntCalのバージョンによる大きな齟齬はないが、以下ではIntCal13による較正年代を2σの有効範囲で計算した結果による。

SI-76住柱穴出土の炭化材であるTGMBY-C1較正年代で紀元前2208-2128年前のいずれかの年代の可能性が高く、同一住居の別のピット出土炭化材のC2は紀元前2146-2032年前のいずれかの年代の可能性が高い類似した較正年代であり、両者はおおむね同じ年代の所産である可能性が高い。縄紋後期堀之内2式前葉から中葉ころの年代である4)。それに対し、土器付着物であるTGMB-1は内外面で年代に差があり、外面の1bは共伴炭化物であるC1・C2に近い較正年代である紀元2142～2011年前のいずれかの可能性が高いが、内面付着物は外面付着物や柱穴出土炭化材と齟齬がある紀元前2351-2205年前の可能性が最も高く、数十年から100年ほど古い年代となっている可能性が高い。 $\delta^{13}\text{C}$ 値はともに-26～-27‰と陸性由来の炭化物である可能性を示しているが、内面付着物はC/N比が高くかつ年代が古いとすると海産物の煮焦げを含んでいるために海洋リザーバー効果の影響を受けている可能性も考えられる。検討が必要である。

本稿で用いた年代測定は、日本学術振興会科学研究費助成基盤研究(B)「炭素14年代測定による縄紋文化の枠組みの再構築 - 環境変動と文化変化の実年代体系化」(課題番号25284153, 研究代表小林謙一, 平成25～29年度)および国立歴史民俗博物館共同研究「年代情報に基づく木材の利用・活用に関する横断的研究」(研究坂本稔, 平成25～27年度)によるものである。グラフィット作成からAMS測定は、山形大学高感度加速器質量分析センターに委託した。資料については栃木県埋蔵文化財センター江原英、炭素回収率については、山形大学、較正年代の計算については国立歴史民俗博物館今村峯雄の教示を得た。

1) Minoru Sakamoto, Sachi Wakai, Hiroyuki Matuzaki, Akira Kodaira 2010 Design and performance tests of an efficient sample preparation system for AMS-14C dating Nuclear Instruments and Methods in Physics Research B 268 p.935-939

2) Paula J Reimer • Edouard Bard • Alex Bayliss • J Warren Beck • Paul G Blackwell • Christopher Bronk Ramsey • Caitlin E Buck • Hai Cheng • R Lawrence Edwards • Michael Friedrich • Pieter M Grootes • Thomas P Guilderson • Hafliði Hafliðason • Irka Hajdas • Christine Hatté † • Timothy J Heaton • Dirk L Hoffmann • Alan G Hogg • Konrad A Hughen • K Felix Kaiser* • Bernd Kromer • Sturt W Manning • Mu Niu • Ron W Reimer • David A Richards • E Marian Scott † • John R Southon • Richard A Staff • Christian S M Turney • Johannes van der Plicht, 2013 INTCAL13 AND MARINE13 RADIOCARBON AGE CALIBRATION CURVES 0-50,000 YEARS CAL BP, RADIOCARBON, Vol 55, Nr 4, p 1869-1887, the Arizona Board of Regents on behalf of the University of Arizona

3) Bronk Ramsey, C. 2009. Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, vol.51, Nr-1, p. 337-360.

Christopher Bronk Ramsey, Sharen Lee. 2013. Recent and Planned Developments of the Program OxCal. Radiocarbon, Vol 55, No 2-3

4) 小林謙一 2008「縄文土器の年代(東日本)」『総覧縄文土器』小林達雄編, アムプロモーション



TKMB-1a 試料付着状態



TKMB-1b 試料付着状態



TGMBY-C1



TGMBY-C

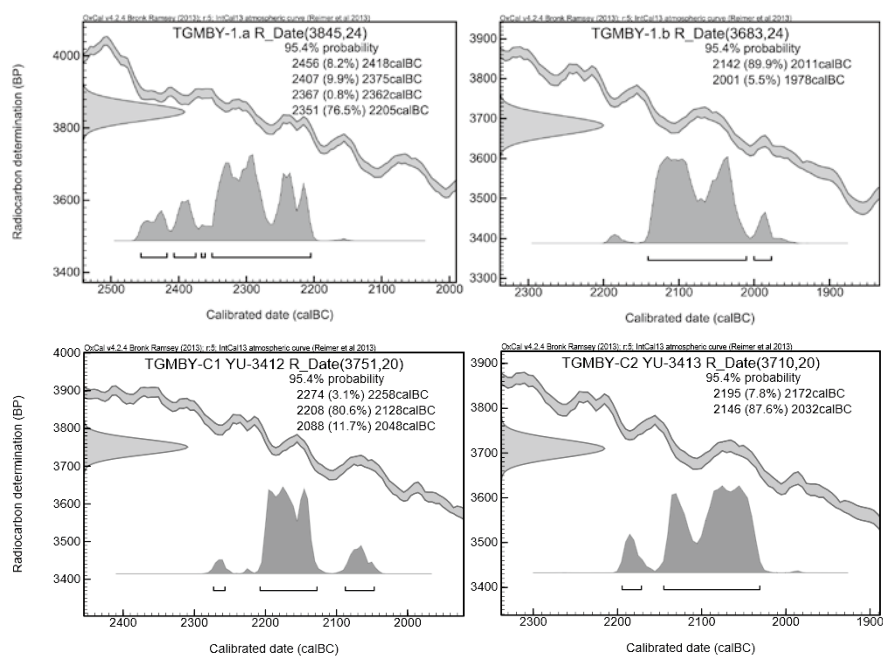


図1 横倉遺跡出土試料の較正年代確率分布

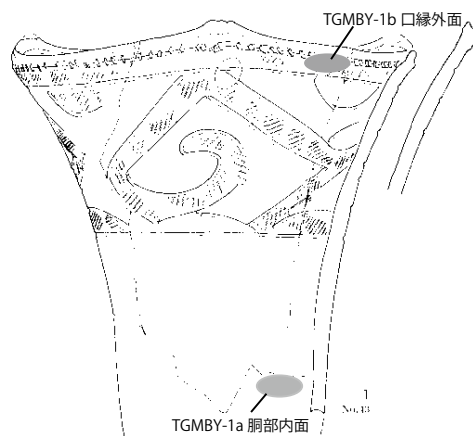


図2 横倉遺跡出土試料 TGMBY-1 の採取位置

8. 横倉遺跡・横倉戸館古墳群発掘調査に係る岩石肉眼鑑定業務

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. はじめに

横倉遺跡・横倉戸館古墳群では、旧石器時代から近世にかけての時期の石器や石製品などが出土している。本分析調査では、縄文時代の石鏃や磨石、中世～近世の硯などを中心として、岩石肉眼鑑定を実施し、石材の産地について検討した。また、時代別の石材利用についても検討を行った。

2. 試料

鑑定の対象とした試料は、旧石器時代の石器が 14 点、縄文時代の石器・礫が 517 点、古代の石器が 2 点、中世～近世の石器・石製品・礫が 43 点、時代未詳の礫が 11 点の計 587 点である。

3. 分析方法

平成 27 年 12 月 15 日に当社技師二名、16 日に当社技師一名が栃木県埋蔵文化財センターに赴き、石材鑑定を行った。石材鑑定は、野外用ルーペを用いて行い、石材表面の鉱物や組織を観察し、五十嵐（2005）の分類基準に基づき、肉眼で鑑定できる範囲の岩石名を付した。なお、正確な岩石名の決定には、岩石薄片作成観察や、蛍光 X 線分析、X 線回折分析などを併用するが、今回は実施していないため、鑑定された岩石名は概査的な岩石名である点に留意されたい。

4. 結果

時代別の鑑定結果を表 1～5 に示した。縄文時代および中世から近世の石器・石製品・礫については、試料が多く得られており、器種別の石質組成を表 13・4 に示した。

旧石器時代の石器は、楔形石器 2 点、チップ 1 点、フレイク 6 点、二次加工剥片 5 点の計 14 点を観察した。各器種でチャートが使用されている他、フレイクおよび二次加工剥片で黒曜石（高原山？）が使用され、二次加工剥片では、流紋岩、頁岩（新第三紀）、珪質頁岩が認められる。

縄文時代の試料が最も試料数が多く、517 点を観察した。出土石器の器種は石鏃（石鏃未成品含む）、楔形石器、スクレイパー、剥片類、石核、磨製石斧、打製石斧、磨石類、石皿類、石棒、礫などである。石質は、石鏃などの剥片石器はチャートが大半を占め、二次加工剥片や使用痕のある剥片を含む剥片類は泥質チャート、チャート、頁岩および黒曜石（高原山？）が多く、玉髓を含む。磨製石斧や打製石斧などの石核石器では、輝石安山岩が目立ち、砂岩及び頁岩を含む。磨石や石皿などの礫石器は比較的まとまった試料数を観察した。石質は輝石安山岩、多孔質安山岩、多孔質輝石安山岩などの安山岩類が大半を占める。石棒は輝石安山岩、堇青石ホルンフェルス、砂岩及び頁岩が見られ、玉類では緑色粘板岩、変質蛇紋岩（滑石）が用いられている。礫には石英斑岩、輝石安山岩、流紋岩およびチャートがみられる。

古代では砥石 2 点を観察した。それぞれ溶結凝灰岩（古期）、スコリア（輝石）が使用されている。

中世～近世の試料数は 43 点で、砥石が多く、次いで石製品、礫がある。砥石は、流紋岩が多用され、石製品は、輝石安山岩、軽石凝灰岩などが使用される。礫は多孔質安山岩、軽石凝灰岩がみられる。

時代未詳の試料として礫 11 点を観察した。石英斑岩、輝石安山岩、多孔質輝石安山岩、流紋岩質溶結凝灰岩が認められる。

5. 考察

遺跡出土の石器や礫の由来としては、鬼怒川水系に分布する地質が考えられる。以下の鬼怒川水系の地質の概略は、20万分の1 地質図幅「宇都宮」(須藤ほか,1991) および 20万分の1 地質幅「日光」(山元ほか,2000) にもとづく。

(1) 地質概略

鬼怒川流域には、白亜系 - 古第三系、新第三系、第四紀火山などの地質が分布している。上流域では、前期白亜紀 - 古第三紀にかけて活動した珪長質火砕岩類が分布する。これらの活動時期は、前期白亜紀、後期白亜紀末から古第三紀前半の2つに分けられる。

前期白亜紀の珪長質火成岩類としては、松木型花崗閃緑岩が栃木県足尾町に分布する。

後期白亜紀末から古第三紀前半の珪長質火成岩類は、中禅寺湖周辺から南東部の栃木県塩谷町周辺に分布する奥日光流紋岩類と各地に分布する花崗岩、花崗閃緑岩、花崗斑岩および花崗閃緑斑岩などの貫入岩からなる。奥日光流紋岩類は膨大な流紋岩 - デイサイト溶結火砕流堆積物からなり、流紋岩溶岩、礫岩および砂岩を伴っている。花崗岩や花崗閃緑岩の岩体としては、沢入型花崗岩が挙げられる。

新第三系としては、下部中新統の地質が認められ、栃木県塩原町周辺から宇都宮市周辺にかけてと、群馬県沼田市周辺に分かれて分布する。この時代の地層は、大部分は珪長質の溶岩・火砕岩からなり、少量の玄武岩 - 安山岩火砕岩と非火山性の礫岩、砂岩および泥岩を伴っている。

第四紀火山は、鬼怒川流域に数多く分布し、女峰赤嶺火山、男体火山などの日光火山群や、高原山といった、玄武岩 - 安山岩 - デイサイト溶岩・火砕岩を構成物とする火山が点在している。他方、群馬県下では、赤城火山や武尊山の活動が知られている。赤城火山は、輝石安山岩およびデイサイトからなり、武尊山は前期更新世の安山岩溶岩・火砕岩からなる。

(2) 時代別の石材利用

前項で示した地質概略にもとづき、各時代別の出土石材について、産地の考察を行う。

1) 旧石器時代

旧石器時代の石器は楔形石器2点の他、剥片類12点が得られている。チャートが多く、各器種で認められるほか、剥片類で流紋岩、頁岩、頁岩(新第三紀)、珪質頁岩、黒曜石(高原山?)が使用されている。流紋岩は、鬼怒川水系に分布する新第三系の地質に由来し、堆積岩のチャート及び頁岩とともに在地性の石材である。頁岩(新第三紀)および珪質頁岩は、鬼怒川水系には認められない石材で、新潟県から青森県下にかけて日本海側に分布する新第三系の地質に由来すると考えられる。黒曜石(高原山?)は、斑状のスフェルライトが散在し、褐色の粘土が認められ。このような様相は、栃木県高原山に分布する黒曜石と酷似しているが、正確な産地の特定には成分分析を実施してデータを蓄積することが望ましい。

2) 縄文時代

縄文時代の石器は比較的まとまった数量の試料が得られている。表3では、前項の地質概略に基づき在地性と非在地性の石材に分類して示した。また、比較的広範な器種組成が認められたことから、図1に石器素材別の石質組成を円グラフで示した。石質組成は、器種別に見た場合に少数となる試料もあり石器素材別にまとめて図示したが、剥片類を除いて全て数十点ほどのデータである。このため、百分率で示す資料として不適切ではあるが、石質組成の概要を示す資料として提示した。以下に在地性の石材と非在地性の石材とに

分けて石材利用状況を述べる。

・在地性の石材

在地性の石材は、鬼怒川水系に分布する地質に由来すると考えられる。縄文時代の石器のうち、点数比では3/4以上が在地性の石材で構成されている。出土点数が多い石質として、多孔質輝石安山岩、輝石安山岩、流紋岩、砂岩、頁岩、泥質チャート、チャート、ホルンフェルス、堇青石ホルンフェルスが認められる。

多孔質輝石安山岩および輝石安山岩は、剥片、磨製石斧、石錘、打製石斧、敲石、磨石類、石皿類に使用されており、石核石器や礫石器で多く出現する。特に打製石斧では28点中15点と、過半数で本石材が使用される。散含する斜長石斑晶が新鮮で、火山ガラスが認められる岩相であり、第四紀火山に由来すると考えられる。角閃石を含有するものがわずかに使用されている(図版1-3)。また、輝石安山岩のうち、新第三紀と記したものについては、石基が緑色を帯びており、斜長石斑晶が変質を受けている岩相を示す(図版1-4)。鬼怒川中流域の前期-中期中新世の安山岩類に由来すると推測される。

流紋岩は点数が少ないものの、石鏃、剥片類、礫器、礫に使用されている。本石材は、鬼怒川中流域の新第三紀の地質に由来すると推測される。

砂岩や頁岩、チャートなどの堆積岩類は各器種を通して試料数が比較的多い。砂岩は、スクレイパー、剥片類、打製石斧、スタンプ形石器、敲石、磨石類、石皿類、砥石、石棒に使用され、点数は比較的少ないものの、広い用途に利用されている。頁岩は、石鏃、スクレイパー、剥片類、石核、磨製石斧、打製石斧、礫器、石棒などに使用され、特に剥片石器で多く用いられている。泥質チャートおよびチャートは、石鏃(石鏃未製品を含む)、楔形石器、石錘、剥片類、石核、打製石斧、礫器に認められ、剥片類で多く出現する(図版1-5,6、2-7)。砂岩、頁岩、チャートは、堅硬緻密質な岩相を示しており、足尾帯の主要な構成岩体である古期堆積岩類に由来すると推測される。

ホルンフェルスおよび堇青石ホルンフェルスは、石鏃、剥片類、石錘、打製石斧、敲石、石棒に使用されている。ホルンフェルスは、花崗岩などの貫入岩体により、泥質岩に接触変成作用が進行して生じる岩石で、堇青石ホルンフェルスは、堇青石と呼ばれる鉱物が散含する様子が認められることが特徴である(図版2-8)。足尾山地には、沢入花崗岩などの花崗岩体の分布が知られており、花崗岩体の周縁部に由来すると推測される。

・非在地性の石材

非在地性の石材としては、黒曜石、無斑晶ガラス質安山岩、脈石英、玉髄、珪質頁岩、緑色粘板岩、変質蛇紋岩(滑石)、変質凝灰岩(シャルシュタイン)、黒雲母片岩(筑波)などが挙げられる。剥片類で黒曜石が比較的多く認められるほか、磨製石斧、玉類にも非在地性の石材の使用が認められる。

黒曜石及び無斑晶ガラス質安山岩は、二次加工剥片を含む剥片類、石核に使用される。黒曜石の比較的大きな試料では、斑状スフェルライトが散含する様相を示しており、褐色の粘土が生じている様子が認められ、高原山に分布する黒曜石と酷似する様相である(図版2-91)。無斑晶ガラス質安山岩は、斜長石斑晶が極めて微量認められる岩相を示す(図版2-10)。無斑晶ガラス質安山岩の分布として、群馬県下の武尊山や、長野県-群馬県境の八風山が知られているが、それらの産地の岩石とは岩相が異なっており、本遺跡出土の石材の産地は不明である。

脈石英は、剥片類で2点、敲き石で1点が認められた。本石材は流紋岩の晶洞部に生じる鉱物で、鬼怒川水系では新第三系の地質を構成する流紋岩類に伴って産すると推測される。

玉髄は、剥片類や石核の他、石鏃未製品、石匙で認められた。微細な石英からなる鉱物で、透明度が高い良質のものが石匙に使用されている(図版3-15)。玉髄は、一般には、流紋岩などの晶洞部に生じる鉱物で、

産地としては福島県大子町が知られている。

珪質頁岩は、石鏝、石錐、使用痕ある剥片に使用されている。新潟県から青森県下にかけて日本海側に分布するに分布する新第三紀の地質に由来すると推測される。

緑色粘板岩及び変質蛇紋岩（滑石）は、玉類に使用されている（図版 2-11、3-13）。緑色粘板岩は、足尾山地には分布が認められない石材で、遠方からの移入と推測される。産地としては、茨城県東部に分布する堆積岩、低度変成岩～変成岩類から構成される日立変成岩類が推測される。変質蛇紋岩（滑石）は、蛇紋岩が変質して生じた岩石で、蛇紋岩の産地が知られていない鬼怒川水系以遠の産地からの移入が推測される。本遺跡周辺の産地としては、埼玉県長瀨地区、茨城県常陸太田市が挙げられる。

変質凝灰岩（シャルシュタイン）は、磨製石斧に使用されている（図版 3-14）。玄武岩質の塩基性凝灰岩が変質を受けて生じた岩石で、一般には赤色～緑色を帯びることが多い。鬼怒川水系には産地が知られておらず、遠方からの移入が推測される。産地としては、茨城県東部に分布する堆積岩、低度変成岩～変成岩類から構成される日立変成岩類が推測される。

黒雲母片岩（筑波）は、石皿類に使用されている（図版 2-12）。黒雲母と呼ばれる鉱物が片理を示しており、岩相から、茨城県筑波山に分布する結晶片岩類に由来すると推測される。本遺跡と筑波山は距離的には比較的近いものの、鬼怒川下流方に位置しており周辺の河川で筑波山に由来する石材を採取することはできないため、非在地性石材としてまとめた。

3) 古代

古代の試料として砥石 2 点を観察した。それぞれ溶結凝灰岩（古期）、スコリア（輝石）が使用されている。溶結凝灰岩（古期）は、鬼怒川上流域の白亜紀に噴出した奥日光流紋岩類に由来する石材で、堅硬緻密質のため、本遺跡周辺において採取が容易であると考えられる。スコリアは、有色鉱物として輝石が観察された（図版 3-16）。玄武岩 - 安山岩質の溶岩を噴出する火山に由来すると推測され、鬼怒川水系では女峰赤嶺火山、男体火山、高原山が安山岩質の噴出物が認められており、いずれかの火山に給源を求めることができる。

4) 中世～近世

中世～近世の試料として砥石が多く、ついで石製品や礫が認められる（表 4）。

砥石には、流紋岩が多用される。水酸化鉄による汚濁が認められ、やや軟質の岩相を示す（図版 3-17）。流紋岩の産地は、鬼怒川水系の中流 - 上流域にかけて分布する新第三系の地質に由来すると考えられる。この他、砂岩や頁岩が用いられており（図版 4-19）、産地は足尾山地に広く分布する古期堆積岩類に由来すると考えられる。

石製品や礫には、多孔質安山岩、輝石安山岩、軽石凝灰岩および頁岩が認められる。軽石凝灰岩は、軟質で、軽石に富み、栃木県宇都宮市大谷地区に分布するいわゆる大谷石に酷似する岩相を示す（図版 3-18）。使用される軽石凝灰岩は、大径を有しており、遺跡近傍の河床礫としては採取が困難であり、原産地付近において採取されたと考えられる。

磨石は輝石安山岩、石臼はスコリア質安山岩、硯、碁石は粘板岩がそれぞれ使用されている。硯や碁石に使用される粘板岩は、東北地方において太平洋側に分布する二畳系の地質に由来すると推測される（図版 4-20,21）。

5) 時代未詳

時代不明の試料として礫 11 点を観察した。石英斑岩、輝石安山岩、多孔質輝石安山岩、流紋岩質溶結凝灰岩が使用される。流紋岩質溶結凝灰岩は、石英の斑晶が散含し、堅硬緻密質で、軽石の溶結部が認められる。石英斑岩は、石英の斑晶が散含し、基質は脱ガラス化して堅硬緻密質である。輝石安山岩は、第四紀および新第三紀の地質に由来する。新第三紀の輝石安山岩は、縄文時代の磨石と同様の岩相を示す。多孔質輝石安山岩は、輝石安山岩より孔質で、斜長石斑晶が新鮮であることから第四紀火山の噴出物に由来すると推測される。

引用文献

五十嵐俊雄,2006,考古資料の岩石学.パリオ・サーヴェイ株式会社,194p.

須藤定久・牧本 博・秦 光男・宇野沢 昭・滝沢文教・坂本 亨・駒澤正夫・広島俊男,1991.20 万分の 1 地質幅「宇都宮」.地質調査所.

山元孝広・滝沢文教・高橋 浩・久保和也・駒澤正夫・広島俊男・須藤定久,2000,20 万分の 1 地質幅「日光」.産業総合研究所地質調査総合センター.

表 1 岩石肉眼鑑定結果（近世・SZ-1 墳頂部集石遺構）

出土位置	種類	石材・材質	備考
S-1 d3 区 no. 1	石製品	輝石安山岩	
S-1 頂部平面 no. 226	石製品	輝石安山岩	
S-1 頂部平面 no. 222	石製品	多孔質安山岩	
S-1 to	礫	多孔質安山岩	
S-1 to	礫	軽石凝灰岩	
S-1 to	礫	軽石凝灰岩	
S-1 no. 229	礫	軽石凝灰岩	
S-1 no. 228	磨石	輝石安山岩	

表 2 岩石肉眼鑑定結果（時代未詳・集石遺構）

出土位置	種類	石材・材質	備考
S-118 no. 1	礫	流紋岩質溶結凝灰岩（古期）	
S-118 no. 2	礫	輝石安山岩	
S-118 no. 4	礫	石英斑岩	
S-118 no. 7	礫	石英斑岩	
S-118 no. 10	礫	流紋岩質溶結凝灰岩（古期）	
S-118 no. 13	礫	流紋岩質溶結凝灰岩（古期）	
S-118 no. 8 S-118 no. 9	礫	流紋岩質溶結凝灰岩（古期）	
S-118 no. 11	礫	輝石安山岩	
S-118 no. 12	礫	輝石安山岩（新第三紀）	
S-118 no. 3 S-118 no. 6	礫	流紋岩質溶結凝灰岩（古期）	
S-118 no. 5	礫	多孔質輝石安山岩	

表3 縄文時代の石質組成 (1)

推定される水系産地	石質	器種	石鏃	石鏃未製品	石匙	石錐	楔形石器	スクレイパー	二次加工剥片	使用痕ある剥片	アシ	チツ	石核	磨製石斧	石錘	打製石斧	石器	スタンプ形石器	敲石	磨石類	石皿類	砥石	玉類	石棒	鏃	合計
	石英斑岩																								2	2
	玄武岩						1							1						1						3
	スコリア質安山岩																			1						1
	角閃石輝石安山岩																			2						2
	角閃石輝石安山岩 (新第三紀)																			1						1
	多孔質安山岩																				3					3
	多孔隙輝石安山岩																			4	3					7
	輝石安山岩								4						1	2	15			2	41	5		1	4	75
	輝石安山岩 (新第三紀)								2					2						4						8
	石英含有輝石安山岩													1												1
	石英含有デイサイト (新第三紀)																				1					1
	デイサイト (新第三紀)																			2						2
	流紋岩 (新第三紀)																									1
	流紋岩		1						1																	1
	スコリア												1								2					6
	安山岩質溶結凝灰岩								1																	1
	安山岩質凝灰岩									1																1
	デイサイト質凝灰岩 (新第三紀)																									1
興怒川水系	流紋岩質火山礫凝灰岩 (古期)																									2
	流紋岩質溶結凝灰岩 (新第三紀)																									2
	流紋岩質溶結凝灰岩 (鮮新世?)																									1
	流紋岩質溶結凝灰岩 (古期)																									2
	流紋岩質凝灰岩 (新第三紀)															2										4
	流紋岩質凝灰岩 (古期)																									1
	溶結凝灰岩 (高原山?)																									1
	溶結凝灰岩 (鮮新世)																									1
	砂岩 (新第三紀)																									2
	砂岩																									1
	砂質頁岩																									23
	頁岩																									5
	泥質チャート																									43
	チャート																									2
	粘板岩																									37
	ホルンフェルス																									5
	重晶石ホルンフェルス																									140
	珪化岩																									2
	珪化流紋岩																									2
	変質流紋岩																									1
	計		13	1	0	2	11	4	97	16	81	19	14	5	3	28	5	4	4	69	15	2	0	7	26	428

表4 縄文時代の石質組成 (2)

推定される 水系産地	器種	石質																	合計								
		石質	石鏃	石鏃未製品	石起	石錐	楔形石器	ふるしやハ	二次加工剥片	使用痕ある剥片	アノイ	ちゆう	石核	磨製石斧	石錘	打製石斧	機器	スナノシ形石器		敷石	磨石類	石皿類	砥石	玉類	石棒	礫	
産地不明	黒曜石							3			1																4
高原山?	黒曜石 (高原山?)			3				3		16	12	3															34
鬼怒川水 系?	脈石英			1				1		1										1							3
	無斑晶ガラス質安山岩			1				3		3		2															9
	無斑晶質安山岩			2				1		8	2	1															14
大子町	玉髓		1					6		5	4																17
	玉髓 (良質)									2	1																3
東北地方	珪質頁岩		1						1																		3
	緑色粘板岩																							1			1
長瀬、福島 県	変質蛇紋岩 (滑石)																										1
	変質凝灰岩 (シャルスタイン)																										1
栃木県外 筑波山	黒雲母片岩 (筑波)		1	1	1	1	1	16	4	35	15	11	1	1	0	0	0	0	1	0	1	0	2	0	0	0	91
	計		14	2	1	3	11	5	113	20	116	34	25	6	3	28	5	4	5	69	16	2	2	7	26	517	
合計																											

表5 中世～近世の石質組成

石質	器種						合計
	磨石	石臼	石製品	礫	砥石	硯	
流紋岩					25		25
多孔質安山岩			1	1			2
輝石安山岩	1		2				3
スコリア質安山岩		1					1
軽石凝灰岩			2	3			5
砂岩					1		1
頁岩			1		3		5
粘板岩						1	1
合計	1	1	6	4	29	1	43

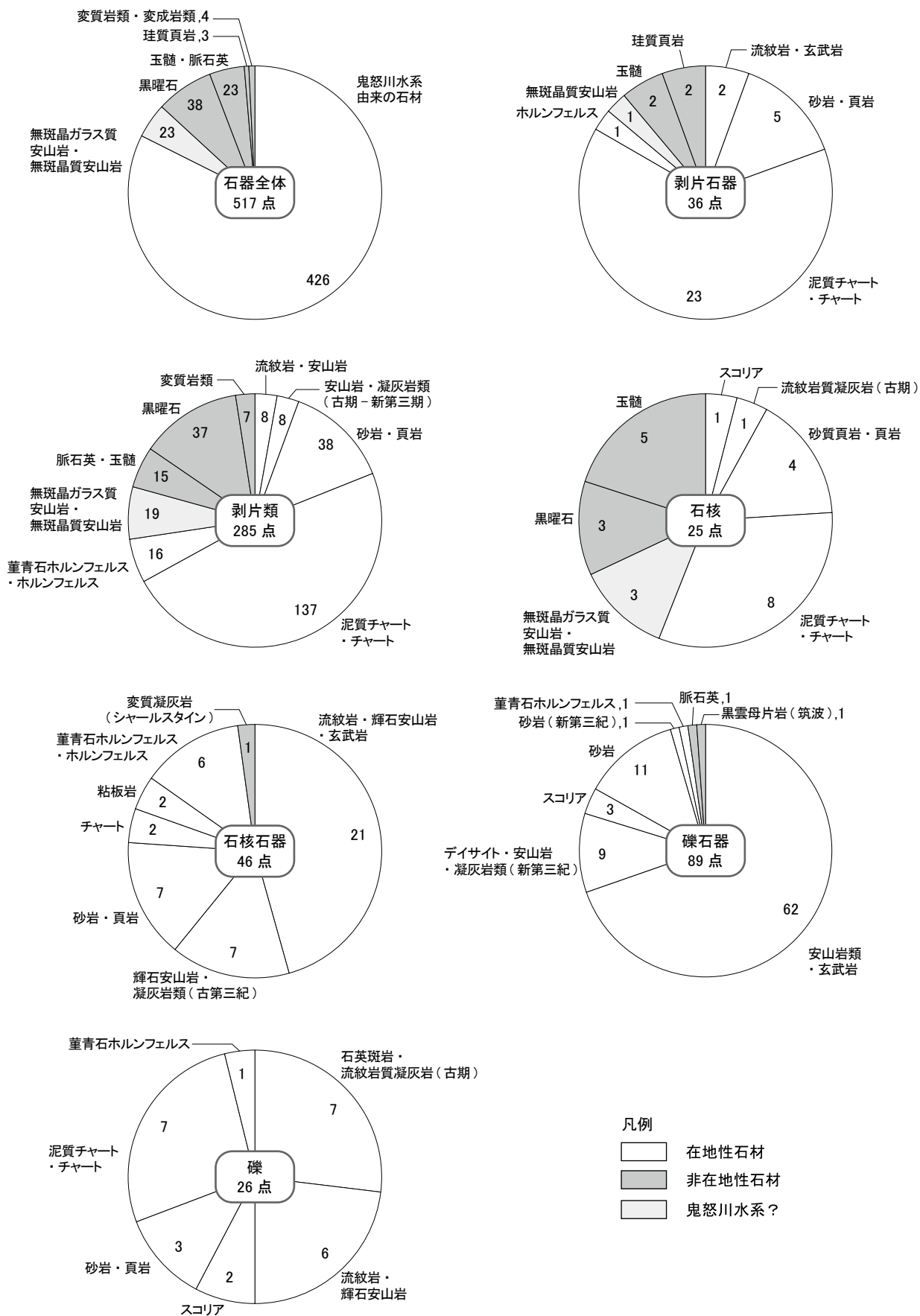


図1 縄文時代の石器素材別石質組成

図版1 石材(1)



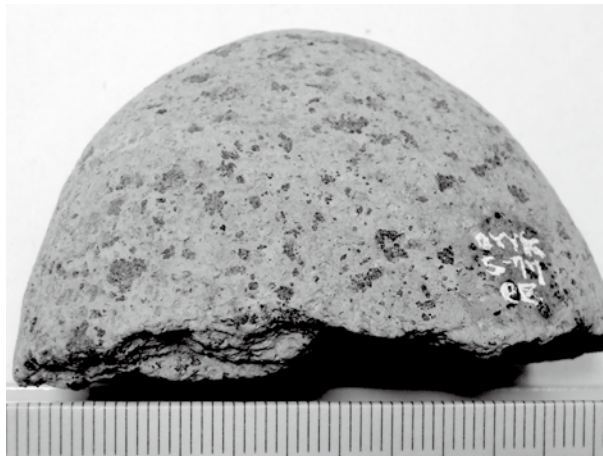
1. 縄文 SZ-1b2 礫 石英斑岩



2. 縄文 SK-73b no.139 磨石類 玄武岩



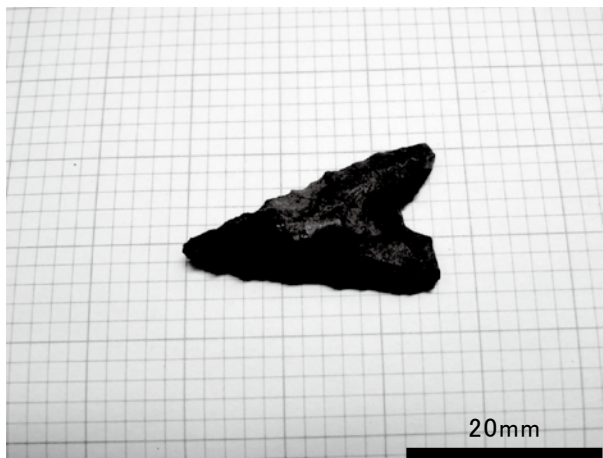
3. 縄文 SI-73 P3 磨石類 角閃石輝石安山岩



4. 縄文 SK-77e区E6 磨石類 輝石安山岩(新第三紀)

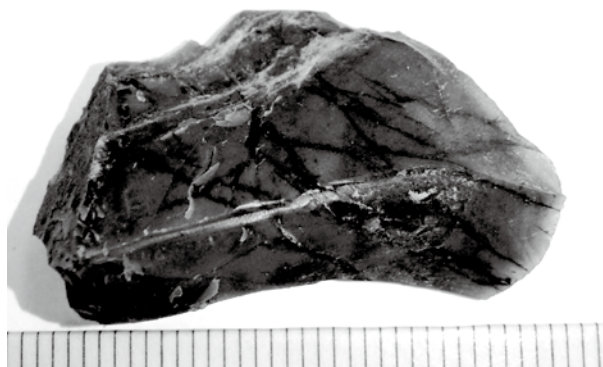


5. 縄文 E12 I~III層 石核 チャート(赤色)



6. 縄文 SZ-1 c区 石鏃 泥質チャート

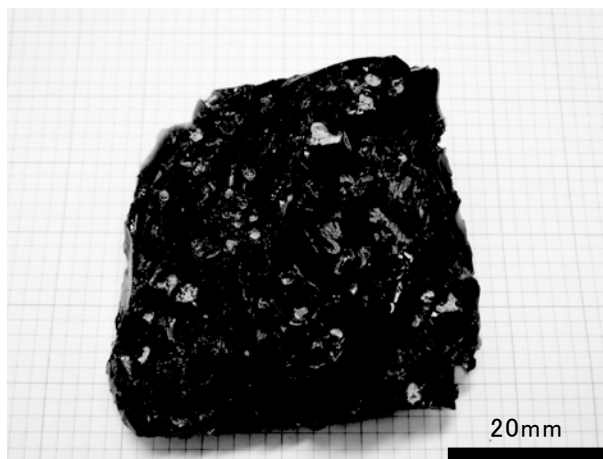
図版2 石材(2)



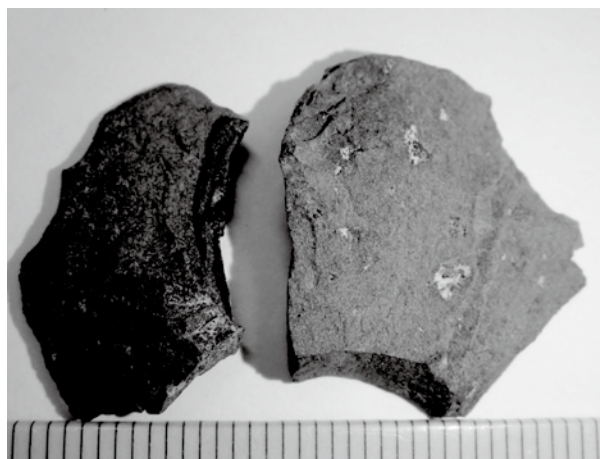
7.縄文 T9 二次加工剥片 チャート



8.縄文 SD-3d区 剥片 堇青石ホルンフェルス



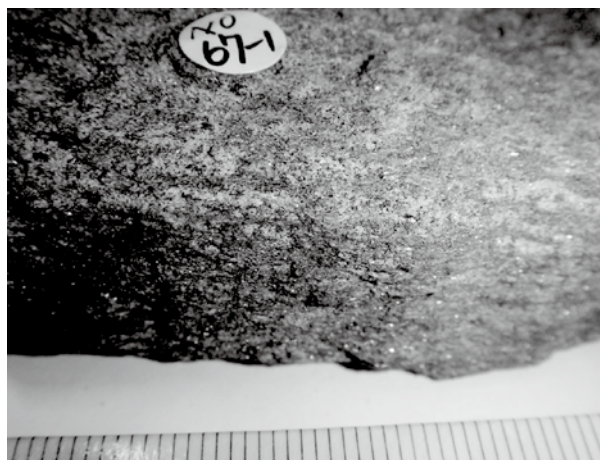
9.縄文 F12c 二次加工剥片 黒曜石 表



10.縄文 SZ-11区 剥片 無斑晶ガラス質安山岩



11.縄文 SK-134 玉類 緑色粘板岩



12.縄文 SZ-1 b3 II層 石皿類 黒雲母片岩 側面

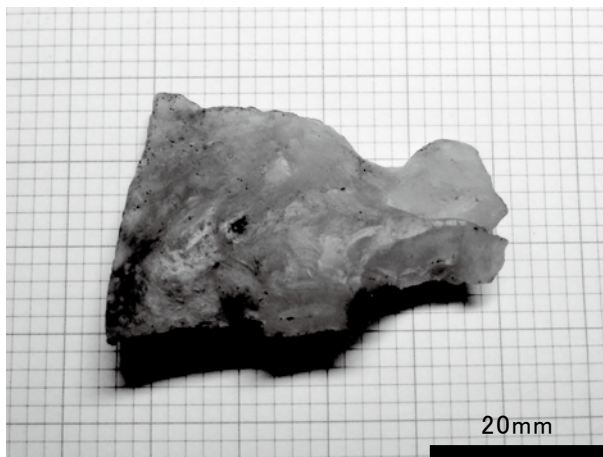
図版3 石材(3)



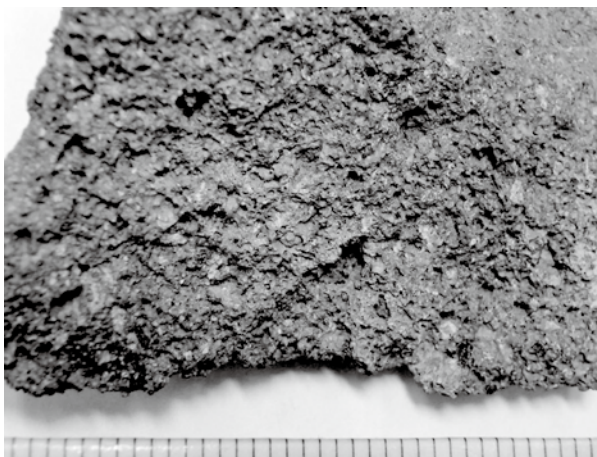
13.縄文 SI-76 No.22 玉類 変質蛇紋岩(滑石)



14.縄文 S-157 no.1 磨製石斧 変質凝灰岩 (シャルシュタイン)



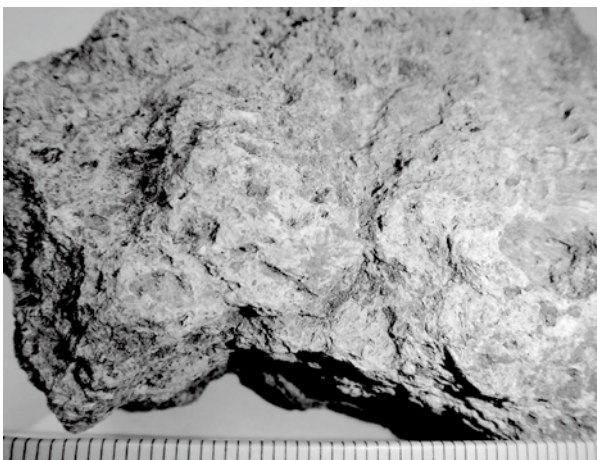
15.縄文 SZ-1 T12 石匙 玉髓



16.古代 SZ-67f区 砥石 スコリア(輝石)

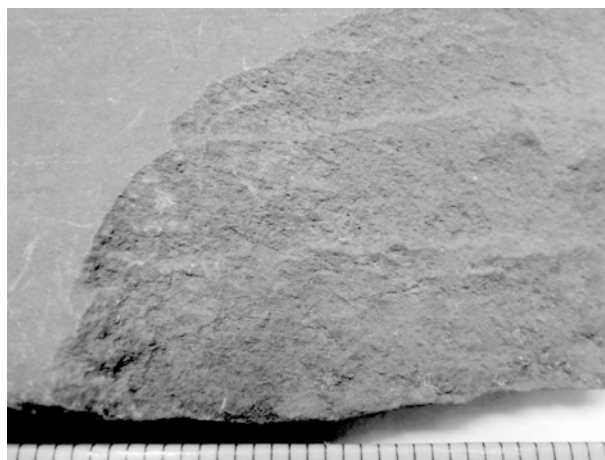


17.中世～近世 S-5 T18 砥石 流紋岩

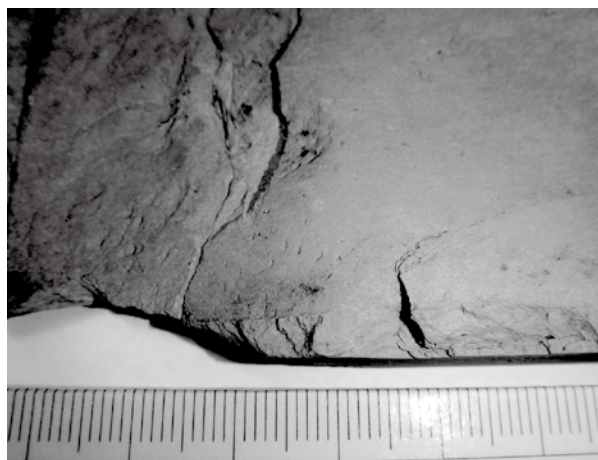


18.中世～近世 SA-2 E9b 不明石製品 軽石凝灰岩

图版4 石材(4)



19.中世~近世 SZ-1 砥石 頁岩



20.中世~近世 D区SD-3 F10d 硯 粘板岩



21.中世~近世 SA-2 c区 碁石 粘板岩

第V章 総括

旧石器時代

本遺跡では、平成2年度に実施された発掘調査においても旧石器時代の遺物が出土しているが、ローム層を掘り下げた調査ではなく、調査区内からの出土であるため、層位はいずれも判明していない。また、同年度に実施された横倉戸館遺跡の調査においても同様であった。今回、5地点に旧石器時代の調査地区を設定し、E12c・E12d グリッドでは基本層序のVI層である暗色帯より下層まで掘り下げを行った（第10図）。調査の結果、V層より黒曜石製の剥片が2点、チャート製の剥片が6点、頁岩製の剥片が1点出土している。V層の下位からは赤みを帯びたチャートを用いた二次加工剥片が1点出土した。また、調査区内からも二次加工剥片が出土しており、頁岩・流紋岩を用いている。第IV章に示した岩石肉眼鑑定の結果、黒曜石は高原山産の可能性が高いことが判明し、他の頁岩や流紋岩についても、栃木県内の石材を用いている可能性があることが指摘された。

これら石器および剥片が出土したV層について、E12d グリッド調査地点より東へ6m地点のE13d グリッドで行ったテフラ分析の結果を第IV章に掲載した。分析結果では、V層上位から浅間大窪沢第1軽石(As-Ok1)が検出されており、V層より下層のVI層からは始良 Tn 火山灰(AT)が検出されている。ATは約2.4～2.5万年前、As-Ok1は約1.7万年前の年代が示されている。

石器の出土レベルを確認すると、第12図4はV層でも下位の位置であり、その他の剥片類はV層の上位からの出土であった。火山灰検出レベルとの確実な対比は難しいものの、少なくともATより上位の層準からの石器の出土と言える。ブロックの確認もなく、ナイフ形石器等のツール(製品)の出土も認められなかったが、横倉遺跡の台地端部において旧石器時代の活動痕跡が認められたことの意義は改めて注目しておきたい。

縄紋時代

1. 横倉遺跡の縄紋時代遺構・遺物について

今回の横倉遺跡調査で確認された縄紋時代の遺構は、住居跡3軒、溝跡1条、土坑38基、ピット34基である。調査成果を簡単にまとめておきたい。

a) 住居跡および土坑について

住居跡のうちSI-85については床面や炉跡、掘り込み・壁が不明瞭であり、住居跡との判断も確実性が弱い。後世の遺構構築等により遺存状況が悪くなったことも想定されるが、元来しっかりとした作りではなかった可能性もある。とりあえず称名寺式期の住居跡と判断しカウントしておくが、形態等の検討はし得ない。

SI-73についても、包含層調査過程で炉跡や埋設土器が確認されたことから住居跡と判断したものの、床面・掘り込みの範囲については不確実な部分を残している。後世の溝であるSD-70a等により遺存状況が悪くなっていることも考えられる。とはいえ、柱穴の配置も不定であり、SI-73も定型的な住居形態ではなかった可能性がある。平成26年度に調査した部分においても、掘り込みや床面・柱穴等、明瞭な住居痕跡を見出せなかった。一方、概ねこのSI-73範囲内のSK-73bとした遺物の集中部が平成26年度調査区で確認され、浅い掘り込みを伴うことが確認された。ここからは多量の遺物がまとまって折り重なるようにして出土したが、整理により複数の大形破片～図上復元個体となった(第33～35図)。土器の観察からは他時期の混入資料は少ないようであり、概ね称名寺式終末～堀之内1式初頭のもので占められる。SI-73埋設土器(第30

図)、SI-73 出土土器 (第 31 図) と比較すると、概ね同じ段階・時間幅と考えられる。これらの遺物群について、位置的には住居跡覆土を切る土坑に帰属する可能性が高いものの、覆土相互の関係は不確実であり、土坑の方が古く住居跡覆土内の遺物集中部とする考えも残されている。

出土土器では第 35 図 8 の個体が T10 出土片と接合する個体であること、また SK-101 の出土破片 (第 279 図 SK-101-1) とも接合することに注意しておきたい。この個体は体部に称名寺式の意匠を保ちつつ、口縁部および内面に刺突を伴う隆線+やや太い沈線 (杵状) で明瞭に口縁部文様が描かれている。この資料群中では新しい要素を示す個体として注目される。また第 33 図 1 は注目される意匠を有する。縦位区画、横長長方形~杵状文、という意匠表現は、この地域の称名寺式~堀之内 1 式の中では見出すことができない。西日本系との関係も指摘されたが、検討し得ておらず、今後の課題としておきたい。

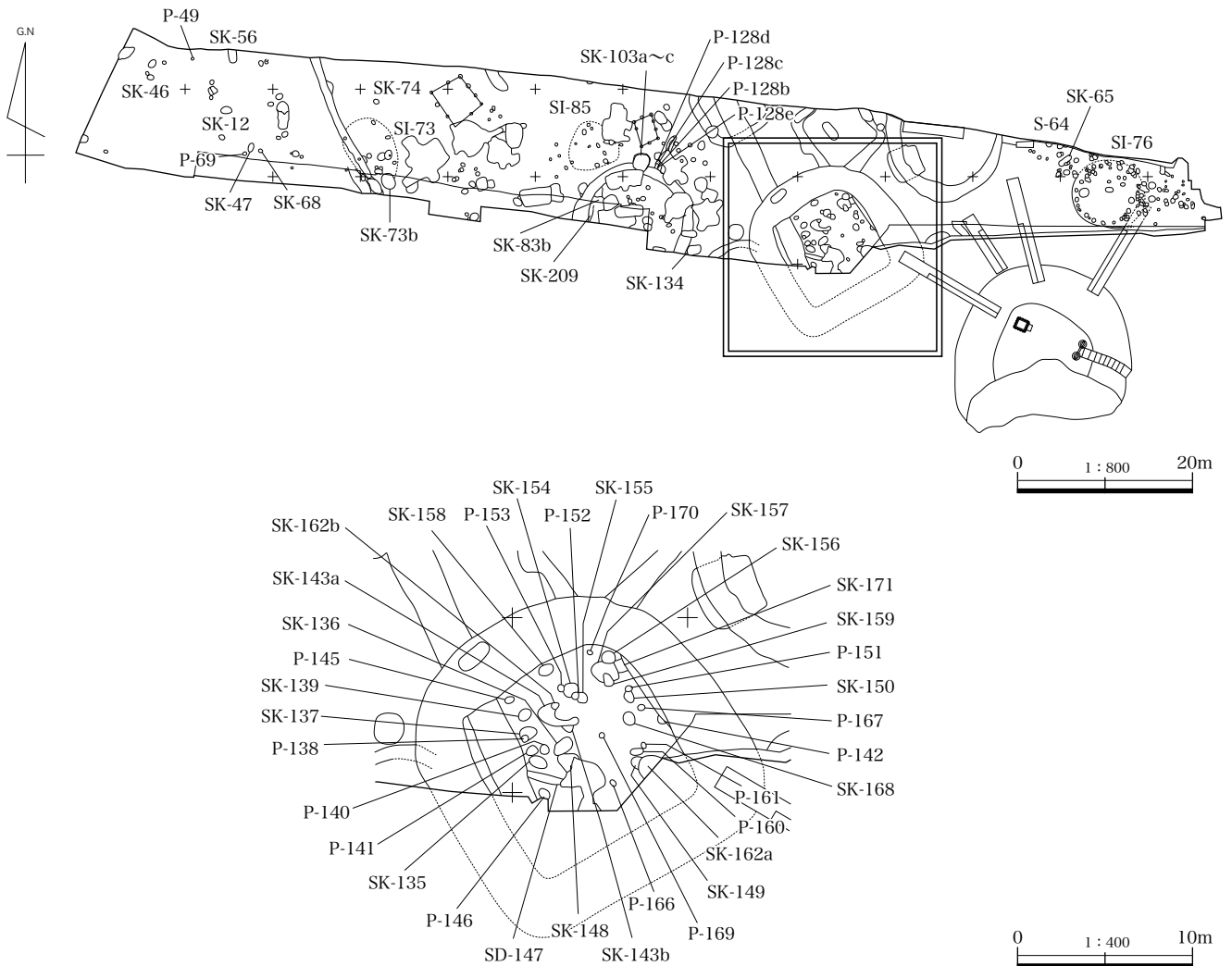
土坑については 38 基確認され、円形~楕円形の浅い土坑が多い。層位や覆土の特徴からの時期判断は難しく、基本的には出土遺物からの判断によっている。従って出土土器小片から時期を判断したものについては、確実性は弱いものとなる。一方、墳丘下で確認された土坑・ピット (第 279 図下段) については概ね縄紋時代のものとして良いが、細別時期についてはやはり問題を残す。ここでの土坑の多くは、この上位の包含層出土土器も勘案して、多くを縄紋前期のものと思定したが、称名寺式以降の土器出土が認められる例もあり、更なる検討が必要となる。墳丘下の検出状況からはより積極的に「群在化」とみることも不可能ではないが、この区域の外側では古墳周溝・土塁と壕、更に土塁下も含む西側では古墳時代より後の遺構が比較的集中しており、また南側が調査区外となることもあって、土坑分布の粗密について積極的に言及することはできない。とはいえ、包含層での遺物出土状況や他遺構内での縄紋期遺物の出土等からは、未調査区部分での広がりや、今回確認された以上に、本来的には黒浜式期や称名寺式期の遺構が一定数存していた可能性は充分考えておくべきであろう。なお斜面下方のピット群および SI-76 については、両者の関連も含め次項で触れる。

b) SI-76 について

SI-76 の特徴と評価

SI-76 は本遺跡の縄紋時代を特徴づける遺構である。あらためて形態を確認すると、東側斜面下方に入口張出部を有すること、斜面上方では明瞭な掘り込みを有すること、壁直下からプラン際を巡る柱穴では 60 cm を超える良好な深さの柱穴があること、床面、特に西側では硬化が顕著であること等の特徴がある。柱穴同士の重複もあることから、単純 1 軒ではない可能性がある (第 13 図)。張出部柱穴群について、いずれの範囲のピットまで本住居跡関連と捉えるのか、判断の難しい部分がある。P85 とした辺りまでは住居軸に近い軸方向で 2 列のピット群があり、大きく柄鏡状の張出部とする復元案も考えられるところではある。一方接続部 (基部) 辺りから南側へ P21・22 へ向かうピットの重複をハの字状に開く形態案として考えることもできる。但しこの場合、北側で良好なピットの検出に至っていないことが問題となる。また、住居軸と概ね直交するラインで P70・71 すぐ東の P72・73 から南北各方向にピットが並んでおり、これら L 字対向状の部分を入口部関連の柱穴群とみることもできる。南関東では堀之内式期の住居跡でこのような張出部柱穴群も比較的多く確認されている (横浜市華蔵台南遺跡 4 号住等)。或いは当初考えたやや北東よりの P47、P35・55 周辺や更にその西側でやや集中するピット群を入口部とする案等も考えられる。これら東側のピット群については、住居跡確認以前に調査したこともあり、関連も確実とは言いがたいとは言え、関東地方における堀之内式期の住居形態を考慮してみれば、これらの多くを入口部関連の遺構とみて良いであろう。とはいえ、帰属させることが難しいピットもあることから、SI-76 以外の建物跡群も考慮する必要はある。

縄紋時代



第 279 図 横倉遺跡・横倉戸館古墳群 遺構変遷図（縄紋時代）

住居跡東側の現地でピットを確認した面はかなり急な斜面である。炉の構築面についても一部黒色土となっているように、当時としては斜面下方にある程度の土が堆積していたことが想定されることから、ピットの掘り込みもより上位からであった可能性は高い。とはいえ、それでも当時、住居構築の時点ではかなりの斜面であったことが想定され、住居に関わる出入り・活動を考えると住居構築時に斜面下方をかなり大きく手を加えた入口部施設をつくり、或いは面を整えたことが推定される。つまり、床面および入口部周辺に土を移動させ、或いは土を置いて整えるという所作、更には土以外のものを用いての施設構築さえ想定されよう。入口部側が斜面下方、谷へ向かう方向にあることも示唆的で、より下方の位置における遺物の出土等も鑑みれば、谷或いは谷に近い位置での活動との関わりから、この住居跡の占地を評価することすら可能であろう。堀之内 2 式の土器自体が台地平坦面で希薄であることは、横倉縄紋集落において、それまでの、つまり堀之内 1 式期までとは谷との関わり方が大きく変化している可能性すら想定させよう。

なお SI-76 の北側～北西側でも一定数のピットが確認されている（S-64 ピット群）。これらのうち、SI-76

円形プラン範囲外のものについては、基本的に別遺構との判断をなしている。S-64P2・3・8およびSI-76P37・38・41等が列状・弧状に並ぶように観察できることから、SI-76とは別の住居跡1軒を考えたとしても良いかもしれない。このピット群或いは当該グリッドの出土土器はいずれも小片で判断が難しいが、堀之内1式または2式期の遺構となる蓋然性が高いであろう。つまり台地縁辺の斜面際に堀之内式期の遺構が展開している可能性をうかがわせる。この点は横倉遺跡・横倉戸館遺跡にかかる小山市史の記述とも概ね整合する。

堀之内2式期の住居事例について、検討を経ていないが、少なくとも栃木県内の事例からは最大級の大きさ、残りの良さを示しており、注目に値する。斜面上方での壁の高さ、明瞭に記録し得なかったが一部土を貼った安定した（硬化した）床面、深い柱穴が壁際に密に巡る様子等からは斜面下方での入口部施設の問題も含め、かなり立派で際立った大きさ、またおそらく高さもある住居であったことを考えて良いであろう。柱穴内への土器埋設、床面における遺物出土状態等も特徴的である。以上の点から、集落内でもやや突出した存在の家屋であった可能性も考えられるが、多重複の住居とまでは言えず、同時期の遺構が他に確認できないこともあって集落論的な検討は行い得ない。

なおP4とした柱穴ではない土坑状の掘り込みが床面で確認されている。住居に帰属しない可能性もあるものの、少なくとも確認面や覆土掘り下げ時での掘り込みは確認されず、床面精査時に確認された穴である。出土土器の第22図5の黒浜式を混入と捉え、小片で判断難しいが同図6を帰属遺物とすれば、住居跡遺物の時期と概ね整合する。つまりこの土坑状掘り込みが住居跡に伴う可能性もあろうか。

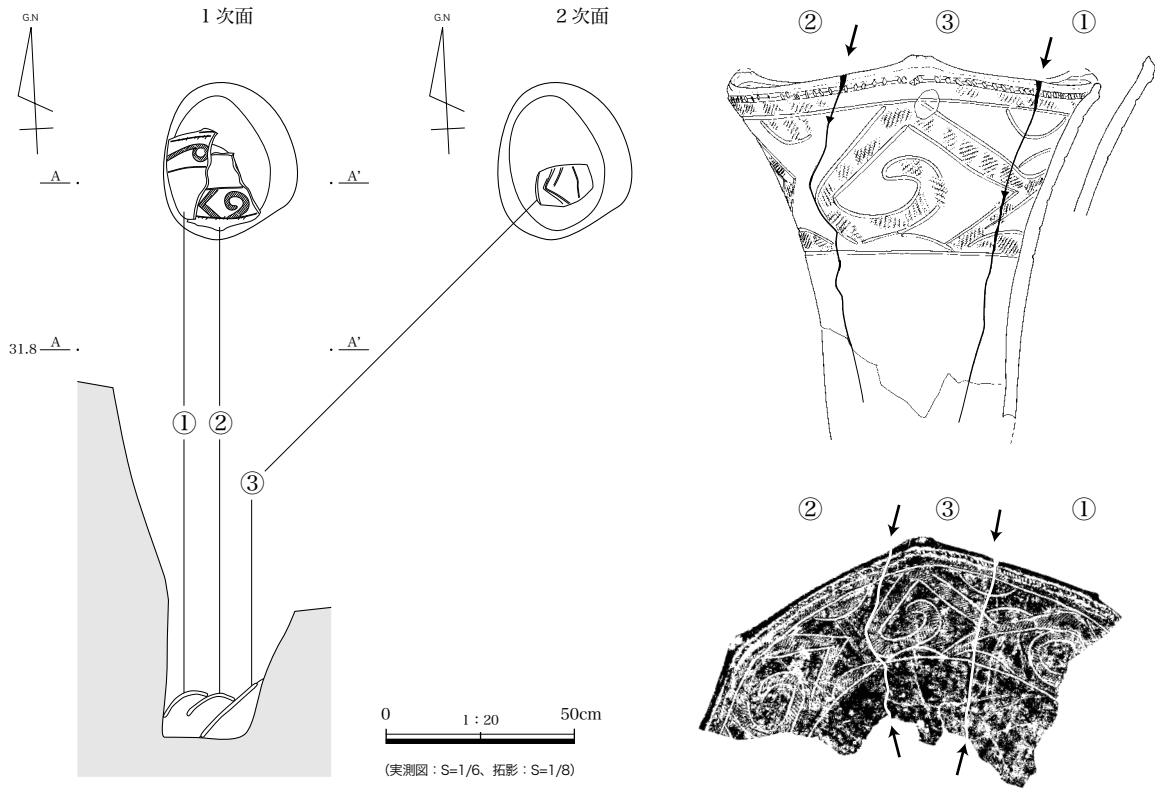
SI-76 遺物出土状態からの行為の推定

柱穴内の土器の出土状況については注目される事例であるが、あわせて注意すべき事象は注口土器および玉類の出土である。注口土器の墓坑内への埋納については近年幾つかの研究で示されているように、事例が増えつつある。それらの研究では埋葬や儀礼との関わりから考究される場合が多い。本遺跡での事例からは、注口土器と共に床面近くでの深鉢底部破片の逆位出土に注目したい。これについても類例の探索チェックを行っていないが、調査所見としては床面から若干浮いてはいるものの、土器個体設置の可能性を考えさせる出土状態であった。また土器自体も割れ口が丁寧に割られて擦られたかのような状態が観察できることから、転用を目的として打ち割った後に破断面を整えた可能性が考えられる。縄紋中期～後期では長方形～楕円形の土坑内で浅鉢が逆位で出土するような事例が良く知られているが、こうした例との相互比較も今後の課題である。ここでは検討不十分ながら、積極的に〈深鉢逆位設置＋注口土器・玉の出土〉を埋葬等の何らかの行為に伴う所産と考える方向を示したい。なお床面での事例としたが、観察できなかったものの覆土中の掘り込みがあった可能性も考えなくてはならないかもしれない。これらの行為の推定に、柱穴内の土器分割設置事例を関連させて考えるべきか、この点にかかる判断は難しい。出土土器相互（深鉢と注口土器）の比較からは概ね同じ細別段階のようであり、一連の行為である可能性もあろう。

ピット内土器設置の観察所見

既述のように、本住居跡SI-76のP7からは、深鉢個体が割られて、その破片が重ねられた状態で出土した（第280、図版八）。深鉢を意図的に打ち割って、③の破片をまず置き、これと90°角度を変えて②の破片を設置、更に180°角度を変えて①の破片を重ねる、という折り重ね状態である（第280図）。但し出土状態断面の記録でみると正位平置きというよりやや斜めに角度をもって設置していることも確認される。第280図中の写真図版で想定の状態を示すが、これよりやや角度をもっての出土状態と言える。事実記載の項で示したように、土器の観察から、分割に際しての個体を割った痕跡と推定される部分が確認されている（第280図右

P7 遺物出土状況



第 280 図 SI-76 P7 土器出土状況図

上実測図中割れ口の▼部分)。また完全な一個体に復元できず、別のところにもって行った（廃棄された）破片があるはずだが、確認できていない。少なくとも今回の調査区出土土器で確実な同一個体片を見出すことはできない。なおこの土器設置の穴を柱穴とすれば、住居廃絶後の行為となるが、若干隣接の柱穴群より浅いことも気になり、土器より下位はば直下が底面であったことも含め考えれば、柱穴ではない可能性も残る。この場合、住居機能時、或いは近接する時点での行為である可能性もあろう。もちろん柱穴であっても抜き取り直後等での設置の可能性もある。構築の住居であることも考慮しておく必要がある。

縄紋中期以降の土器の個体或いは破片の設置・埋納は、炉や入口への個体の設置や墓坑への埋納供献事例

がよく知られており、更に近年では土器塚での土器個体の置き方等についても分析が行われている。ここでみられたような土器破片の意図的な分割設置例について、類例の確認等を行って得ていないが、少なくとも関東縄紋後期集落で顕著にみられる事例ではないようである。今のところ、このような土器個体の分割設置にかかる性格・意味についても所見・考えをもち得ていない。ある種の儀礼的側面による行為の結果であろうことを考えたいところではあるが、類似する事例等を探索した上であらためて考えることとし、今回は問題提起としておきたい。なお本個体は¹⁴C年代分析も行って概ね堀之内2式の事例として整合的であることも確認しておく(第IV章)。

2. 包含層および遺構からの遺物出土状態・数量、組成の確認・検討

次に包含層や遺構内の土器出土状態について確認してみよう。

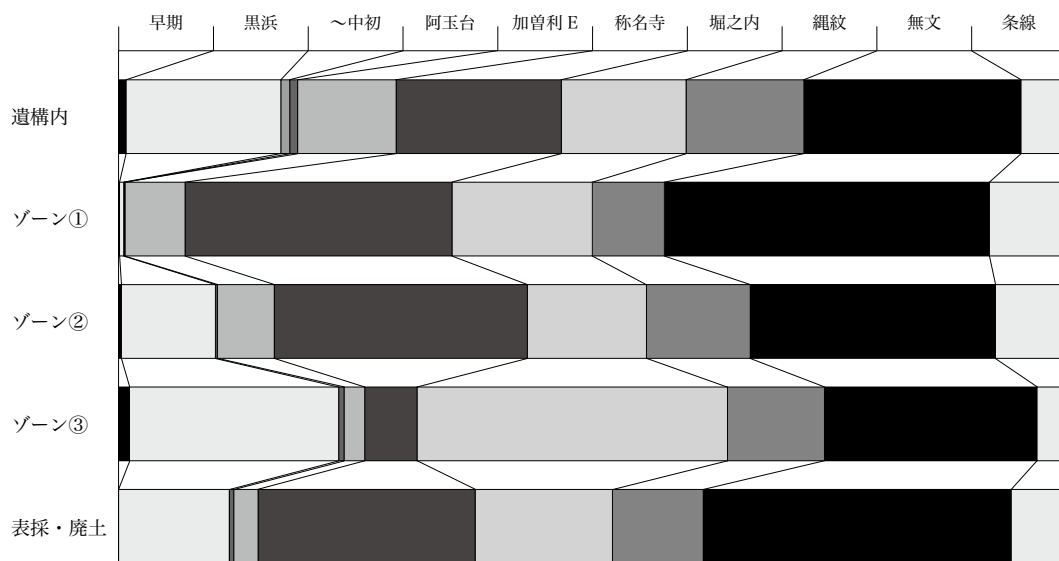
全体の傾向について触れると、調査区内ほぼすべてのグリッドから縄紋土器の出土があることを確認しておく。多くの遺構はローム漸移層ほぼ上面で行ったが、これより上位に10～50cm程度堆積している包含層(基本土層Ⅲ層)およびこの上位の古墳時代包含層(Ⅱ層)・表土Ⅰ層から土器の出土があり、原則として、Ⅲ層を縄紋時代の包含層として捉えた。古墳や中世の地下式坑、近世の土塁・溝があるところではこの包含層は攪乱され、或いは失われており、また調査区西側では竹による攪乱も多く、必ずしも純粋にプライマリーな堆積を示しているところは多くはない。表土～包含層出土土器については原則として5m単位のグリッドで遺物を取り上げ、整理時においてもこの単位で集計を行った(第76表)。

調査区内すべてから出土した縄紋土器は総計で14,387点、重量で305,697グラムである。このうち、型式判断のできない微細な破片、無文、縄紋のみ等を除いた土器は8,039点で、全体土器量からすると55.9%になる。草創期～早期が少量あるが、多い型式は黒浜式(10.1%)、加曾利E式(7.7%)、称名寺式(21.9%)、堀之内式(14.9%)であることが確認される。これらの時期が本遺跡の今回の地点における安定した集落設営期であると言えるであろう。「無文」や「縄紋のみ」と分類した破片は無繊維のもので、その特徴・質感から加曾利E式～堀之内式の範囲内となることが推定されることから、他の型式の実質的な比率は更に低くなることも考慮しておく必要がある。なお加曾利B式以降は認められない。また破片の大きさ・大形破片の出土数・接合率等も概ね出土数量比率と対応し、更にこれが地点やグリッドで大きく異なるような調査時および整理時の所見はない。

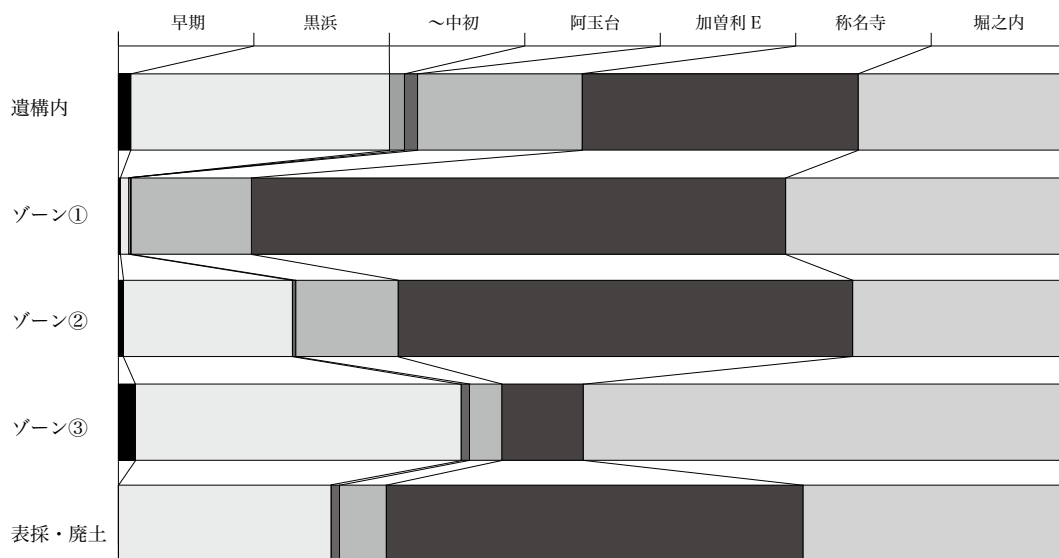
地点別にみると台地平坦面～斜面にかかる位置のゾーン②が多い。ゾーン③は包含層が厚くなるものの、調査区が狭いこともあってか、数量としてはやや少ない。後述のように、またこれまでも図版中で示したよ

第76表 型式別土器集計表

	早期	黒浜	～中初	阿玉台	加曾利E	称名寺	堀之内	縄紋	無文	条線	合計	総重量(g)
遺構内	47	987	57	50	628	1,053	795	751	1,383	290	6,041	127,980
ゾーン①	5	22	5	1	318	1,409	741	380	1,715	407	5,003	113,668
ゾーン②	6	203	0	4	123	546	257	224	529	153	2,045	40,085
ゾーン③	10	192	0	5	19	48	285	89	195	27	870	16,195
表採・廃土	0	50	0	2	11	98	62	41	139	25	428	7,769
総計	68	1,454	62	62	1,099	3,154	2,140	1,485	3,961	902	14,387	305,697
百分率(%)	0.5%	10.1%	0.4%	0.4%	7.7%	21.9%	14.9%	10.3%	27.5%	6.3%	100.0%	



第 281 図 地区別土器類別比率



第 282 図 地区別土器類別比率 (型式判断分)

うに、このゾーン③斜面における堀之内 2 式の出土はやや顕著であり、当該期における活動の場を考える上で注意される。

石器は総数 514 点で、礫・原石の類を除いた狭義の石器は 462 点となる。更に加工痕や使用痕の確認された剥片石器類を除いた、いわゆる定型的な石器は 166 点である。石器全体で特定地点・グリッドに偏在するような状況は確認されない。また特定機種が特定の地点に集中するような状況、特異な出土状況の例等も確認できない。試みにやや数の多い器種について分布の粗密を検討したが (第 284 図)、有意な状況を見出し得ない。但し、使用痕のある剥片、二次加工剥片が方墳墳丘下となる F10～12 グリッドで多い傾向は、みることができよう。

以下では土器の大別時期・型式毎に少し分布の状況を確認してみよう (第 281 図)。

草創期・早期：撚糸紋系、条痕紋系の出土については小片少量にとどまっている。沈線文系に至っては 1 片

のみの出土である。これら草創期・早期の土器は、グリッドではE15cグリッドに多いと言えようか。撚糸紋系はややゾーン③斜面下方に多い印象がある。ここでの下位包含層は草創期・早期を含む包含層であり、地点によっては比較的遺存状態が良い部分があるかもしれない。なおこの時期と推定できるスタンプ形石器が出土していることも確認しておく。

条痕紋系は有文のものが無く、詳細な時期判断ができない。1点のみ確認されている縄紋条痕土器は早期末となる。

前期：黒浜式が一定量出土しているが、顕著な集中グリッドはない。あえて言えばE・F9～12グリッドが多いか。全体での型式別比率では10.1%となる。このことは斜面に近い台地平坦面で一定の活動痕跡があったとみなして良いであろう。古墳墳丘下の包含層で比較的まとまった出土であったことは注目される。古墳墳丘下でみつまっている溝跡1条、土坑20基、ピット14基のうち、確実ではないが多くがこの縄紋前期である可能性は高い。この墳丘下包含層では黒浜式が26点出土している。さらにここでは黒曜石が比較的まとまって出土した(写真図版一六・一七)。さらにやや西方へ距離をもった位置ではあるが、垂飾品を伴う土坑がある。共伴の遺物からの時期推定は困難であり、また検討を要するが、この縄紋前期の遺構である可能性を考えている。

なお他に前期として浮島式、および無繊維で縄紋施紋のみの破片がある。後者は一定量の出土があり、前期末～中期初頭と推定される土器群である。前期・中期の区別は難しいが、縦位方向に結節施紋があるものについては中期の可能性が高いようにも思える。

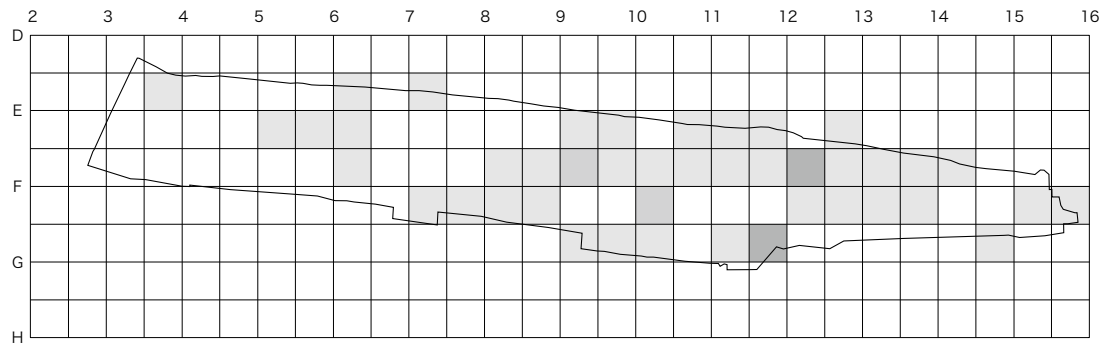
中期：阿玉台式・加曽利E式の確認がある。阿玉台式はE10・F12グリッド等、出土グリッドが限定的である。台地平坦面全体でみたときの数量はかなり少なく、阿玉台式前半の破片は第70図に示したものにほぼ限られる。阿玉台式後半についても、第102図に示した数片、第113図の横倉戸館1号墳トレンチ出土で示した2片が認められるのみである。

加曽利E式はD3・4、E4～6グリッドにやや多い。調査区全体から出土しているが、多くはゾーン①・②の台地平坦面で、この中での出土グリッドの偏りはあまりないと言えるかもしれない。全体での型式別比率は7.7%である。加曽利E式細別での傾向は検討していないが、加曽利EⅠ式新段階～同Ⅱ式を主体とし、加曽利EⅠ式古段階や同Ⅲ式以降は殆ど出土していないことは注意される。比較的時期幅の少ない集落と言えるかもしれない。明確なこの時期の遺構は確認されていないものの、この遺物量からすれば、一定程度定住的な居住のなされた集落跡を想定して良いであろう。

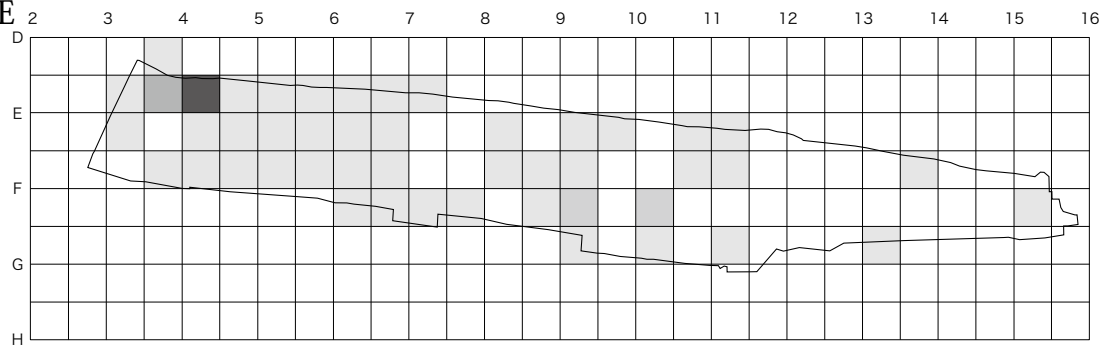
称名寺式：後期初頭称名寺式は調査区全体から出土しているが、D6・E6・E8グリッドの出土が多い。台地平坦面での住居跡検出とも概ね対応する。斜面下方ゾーン③では少量の出土にとどまっており、台地平坦面から斜面にかかる位置辺りまでが活動域と捉えられよう。ゾーン①・②における型式別出土量比は13.6%と高い比率を占めており、しかも比較的大形の破片・復原個体もみられることは一定規模の集落跡であることを示している。しかも、称名寺式細別に照らせば、7細別の第6・7段階が主体で加曽利EⅤ式を含め考えても1～5段階の出土が殆どみられないことは注意される。なお時期判断の難しい幾つかの浅い土坑で称名寺式の出土があり、この時期の土坑である可能性を示していることも注意したい。

堀之内式：堀之内1式については調査区全体から出土している。E6・E8・F12グリッド等で多い傾向はあろうか。堀之内2式についてはゾーン③斜面部に著しく偏在している。グリッドで言えばF12グリッド～F13グリッドである。これはSI-76の存している場所であり、遺構との相関、活動域との関わりを考えて良いだろう。細別していないレベルでの比率ではあるが、全体での型式別比率では称名寺式に次いで多く14.9%となる。細

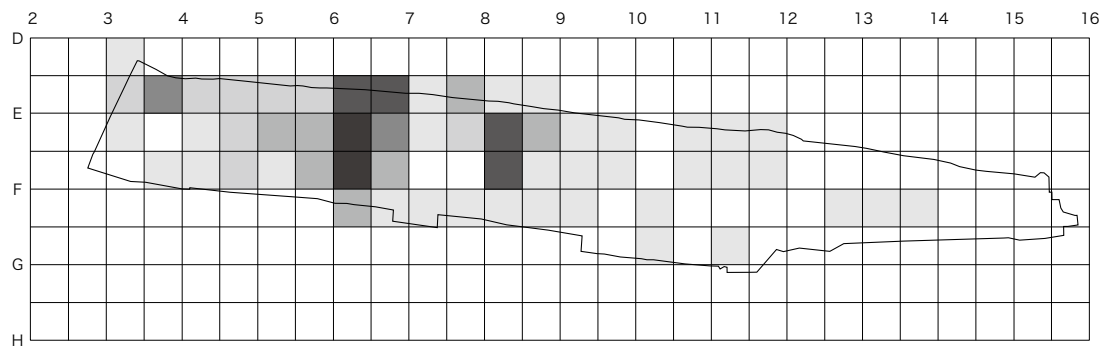
黒浜



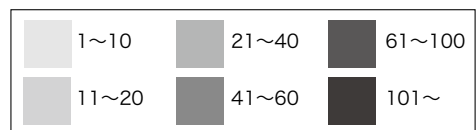
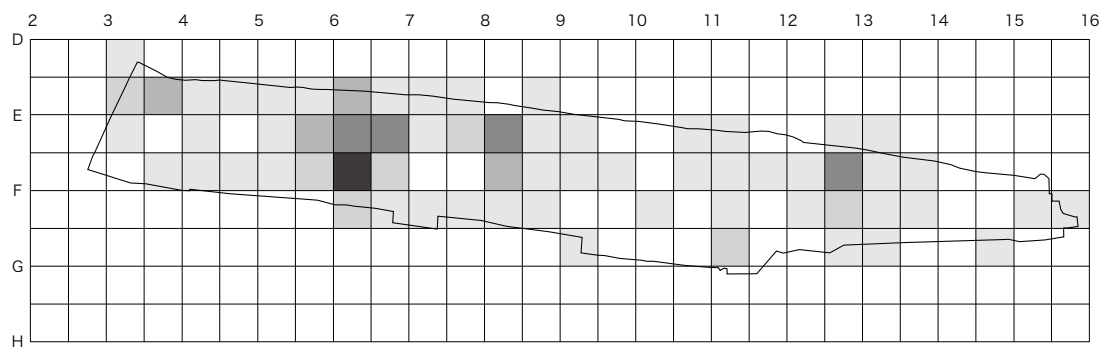
加曾利



称名寺



堀之内



第 283 図 包含層遺物分布図

別での量比は示し得ないが、ゾーン①では堀之内1式古～中段階がやや目立ち、ゾーン②では1式古段階および2式古段階がやや多いようにも捉えられる。ゾーン③では既述のように堀之内2式中段階の土器が多く認められる。ゾーン①における堀之内2式はかなり限定的であり、当該期の活動域を考える上で注意されよう。なお住居跡以外の遺構については、明瞭ではないが、SK-103aが後期（おそらく堀之内1式期？）の貯蔵穴と考えられる形態の事例であり、注意しておきたい。

3. 縄紋時代に関わる横倉遺跡周辺の様相

調査区の限定性から横倉縄紋集落全体の評価を行うのは困難であるが、周辺遺跡での調査成果、とりわけ新4号国道関連の遺跡群を確認しながら、この地域の縄紋集落の特徴を確認してみよう。

新4号国道改築時調査の横倉遺跡では、縄紋土器片約1200点が出土したとされる（小筆・岩上ほか1995）。詳細な出土位置や各分類別の数量は不明であるが、撚糸紋系・条痕紋系少量、前期黒浜式少量、中期加曾利E式（前半）やや少量、後期称名寺式、同堀之内1式やや多量、加曾利B式少量、が報告されている。称名寺式では径を復元し得る個体や大形破片が示されており、今回調査区のゾーン①・②の様相に近い。称名寺式～堀之内式の細別でも称名寺式6・7段階～堀之内1式初頭を主としており、この点でも今回調査区の様相に概ね対応し、地点も隣接することから、一連の同じ包含層出土状況と捉えられよう。堀之内2式が殆ど示されていない点もゾーン①と同じであり注目される。新4号国道調査区が東側谷の斜面下方部分にかからないことが関係している可能性もある。

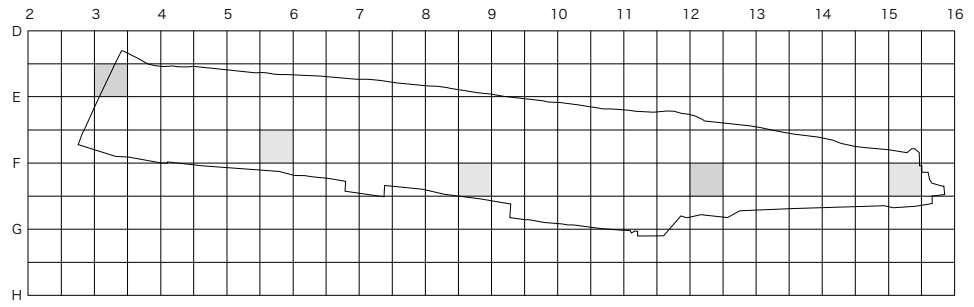
今回調査区のおよそ300m程南南西にある横倉戸館遺跡の調査（内山・亀田・岩上1997）では、土器埋設の土坑2基が確認されている。遺物は比較的多いようだが、全体および各分類別の数量は不明である。土器では草創期・早期撚糸紋系、条痕紋系、前期興津式、中期阿玉台IV式、称名寺式、堀之内式、加曾利B式（紐線文系の粗製土器）が出土している。既述の埋設土器も含め、称名寺式終末～堀之内1式初頭の土器がややまとまっており、横倉遺跡と概ね同じ様相と捉えて良いであろう。

横倉戸館遺跡の更に南に位置する横倉宮ノ内遺跡（斎藤・亀田1995）では約3,800点の縄紋土器が出土し、早期50点（撚糸紋系含む）、前期2,950点、中期～後期300点とされている。7軒の住居跡および数カ所の遺物集中地点から出土した遺物はいずれも黒浜式期のものである。草創期・早期では撚糸紋系、沈線文系、条痕紋系がある。前期では黒浜式の他、浮島式、諸磯c式、前期末～中期初頭の縄紋施紋土器、中期では阿玉台式、加曾利E式（前半）、後期では称名寺式、堀之内1式、同2式が示されている。諸磯c式の径復元個体、加曾利EⅡ式の復元個体特徴的で、称名寺式では第7段階と推定される土器が多い。堀之内1式では中～新段階の例を含むものの、やや古段階のものが多いようにもみえる。堀之内2式は小片が少量のみである。

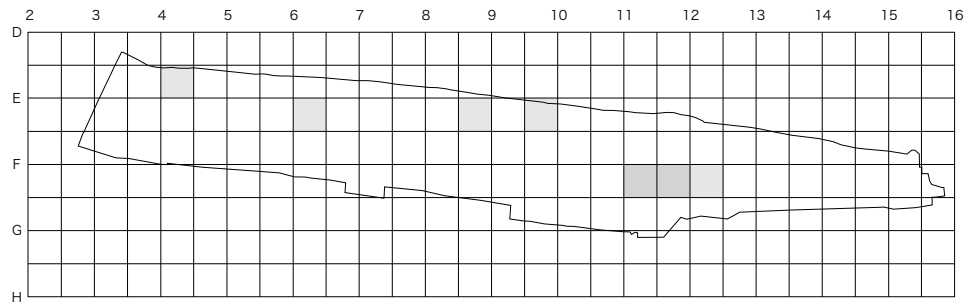
一方、本遺跡より北側の谷を隔てたところに位置する茨城県結城市小田林遺跡（横倉遺跡からは西仁連川を挟んで北側約1.3km）では、縄紋前期黒浜式の住居跡2軒、早期条痕紋系の炉穴15基（型式が明らかなものは野島式）、加曾利EⅠ式期の袋状土坑1基、阿玉台式期の浅い土坑1基、堀之内2式期の土坑1基（浅い円形土坑で復元土器1個体が横転して出土）計3基の土坑が確認されている。包含層出土土器は、早期条痕紋系3片、関山式、黒浜式、前期後葉7片＜浮島式、十三菩提式＞、阿玉台式120片、加曾利E式30片、堀之内1式9片、同2式1片が報告されている。

以上に示した新4号関連遺跡（群）では、概ね縄紋土器の出土各型式が対応することが確認される。即ち、撚糸紋系・条痕紋系が少量、前期では黒浜式が多く、浮島式が若干量、中期では加曾利EⅠ～Ⅱ式、後期では称名寺式新段階から堀之内1式初頭が多量、堀之内2式や加曾利B式は断片的で、曾谷式以降晩期末まで

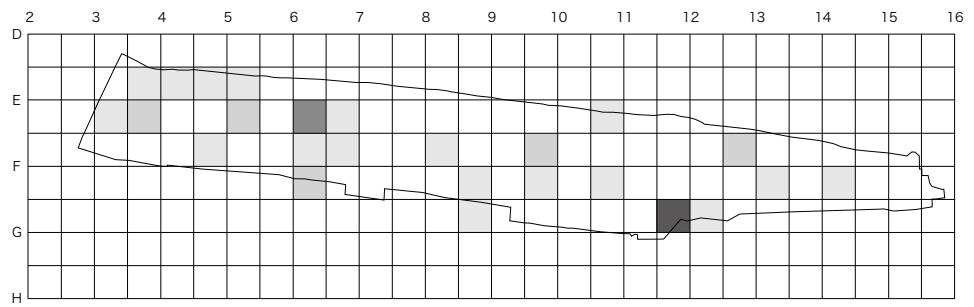
石鏃



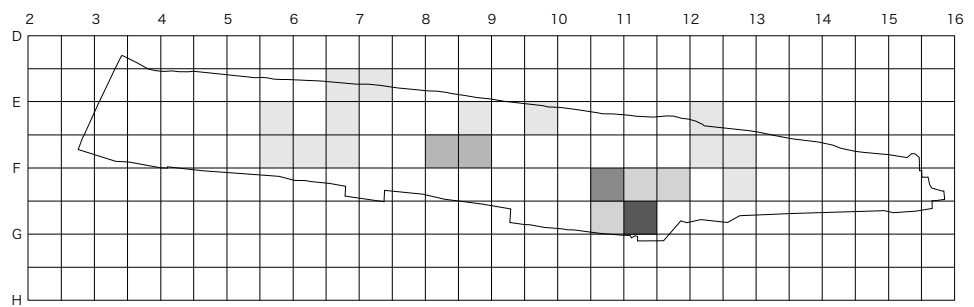
打製石斧



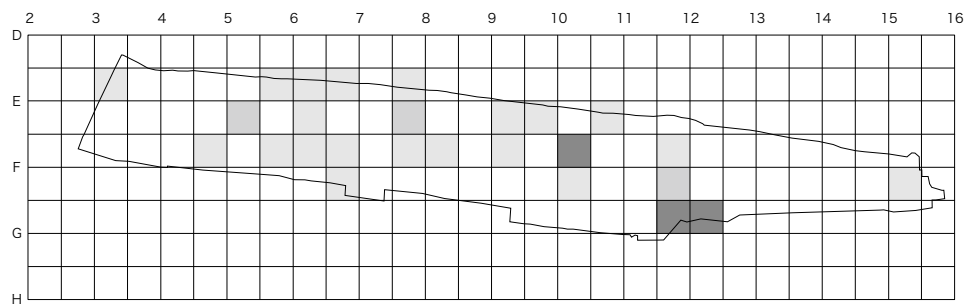
磨石類



使用痕ある剥片



二次加工剥片



第 284 図 包含層石器分布図

は認められない。という状況である。

なお『小山市史』（小山市史編さん委員会 1981）では横倉遺跡の項において、阿玉台式、加曾利E式、堀之内1式・2式（報告では加曾利B式とされている）の資料が示されている。また戸館遺跡では図示はないものの、加曾利B式の破片多数が採集されたことが記されている。市史の中で寺内敏郎氏は「松山遺跡、横倉遺跡、戸館遺跡、横倉宮ノ内遺跡の四遺跡が、中期から後期にかけて同時並行的に集落の存続がみられる」と記しており（寺内 1981）、大きくは新4号国道関連の調査を踏まえた今日においても整合する見解として注目されよう。

新4号国道関連以外では、本遺跡から1.3km西にある雨ヶ谷宮遺跡で縄紋中期～後期の集落跡が確認されている（篠原 1998）。調査により住居跡38軒、土坑147基、集石1基、埋甕4基、溝状遺構2条、性格不明遺構1基が認められている。住居跡の遺存状況は良くないが、現在でも遺跡内で多量の土器が採集でき、小山市教育委員会による調査地点でも遺構の検出がある等、縄紋時代の拠点的な集落遺跡と認めて良い。住居跡は加曾利EⅡ式～同Ⅲ式期が主体のようである。また土坑や埋設土器で称名寺式が一定数ある。SK-52の出土土器（報告第109図11）は称名寺式第3段階の可能性もある。加曾利E式系の破片も第3-4段階のようで概ね整合する。SK-40の復元個体は第4段階、SK-59からは称名寺式系3片、加曾利E式系5点があり、概ね第3段階である。SK-127は称名寺式系を含まず第2-3段階の加曾利EⅤ式、SK-142も加曾利E式系のみで第1-2段階と想定される。SK-160は浅鉢（注口付きか？）の大形破片を含む資料で、第4-5段階となろう。包含層H-4グリッドからは第3-4段階と想定される関沢類型の破片、O-5グリッドからは第4-5段階の称名寺式や加曾利EⅣ式または同Ⅴ式第1段階が出土している。つまりこの遺跡の称名寺式は主に第3-5段階とみられ、これに称名寺式系を伴わない第1-2段階が推定されるのである。確実な称名寺式6・7段階～堀之内1式初頭段階は殆どみることができない。

称名寺式以外をみると、加曾利EⅢ式新段階～同Ⅳ式は少量である。包含層では関山式？が少量、黒浜式やや多量、加曾利EⅠ式・同Ⅱ式やや多量という状況である。また安行1式が1点のみ出土している。包含層全体の遺物出土数量は不明であるが、遺構出土土器と概ね対応するようで、加曾利EⅡ式および同Ⅲ式がやや多い状況が確認される。堀之内1式もかなり限定的である。また小山市史でもほぼ同様の型式が示されているが、県埋文報告では少量であった堀之内2式が比較的多く示されている点は注目される。地点の限定性があるのかもしれない。なお隣接する雨ヶ谷西坪遺跡では、縄紋土器全体の出土量は少ないが、概ね雨ヶ谷宮遺跡と同様の型式が認められる。1片のみだが称名寺式新段階と想定される破片が示されていることは注意される。

以上を整理すると、地点による差異も考慮すべきであろうが、横倉遺跡および周辺で希薄な加曾利EⅢ式・Ⅳ式・称名寺式古～中段階が雨ヶ谷宮遺跡では一定量あること、一方横倉遺跡および周辺でかなり多い称名寺式新段階～堀之内1式初頭の土器が雨ヶ谷宮遺跡では少数にとどまること、横倉遺跡でみられた堀之内2式が雨ヶ谷宮遺跡の県道調査区ではみられないこと等の遺跡間の差異が確認される。なお早期～前期の様相についても若干の違いが予想されるがあまり明瞭では無い。とりわけ注目すべき点は、雨ヶ谷宮遺跡では称名寺式新段階～堀之内1式初頭段階がほぼみられないことで、丁度この時期に一つのピークがあり、称名寺式古・中段階が希薄な横倉遺跡とは逆の事象となっているという点である。大きくは同じ台地上と言えるものの、若干広めの谷を間に挟むこと（雨ヶ谷宮遺跡の近く東側）がこうした差異－基本的に異なる、完全に同調しない集落間関係－を示していることも推測される。また雨ヶ谷宮遺跡より更に西方でやや離れた距離になる萩山遺跡では黒浜式期の住居跡1軒、また包含層？から称名寺式末、堀之内1式の土器が示されてい

第 77 表 包含層ゾーン①出土土器集計表

グリッド名	早期	黒浜	～中初	阿玉台	加曾利E	称名寺	堀之内	縄紋	無文	条線	計	総重量 (g)
D3a						8	2	1	6	1	18	679
D3b						2		1			3	220
D3c			1		4	14	14	19	37	11	100	1,632
D3d		2			38	48	22	47	64	8	229	11,843
D4c					81	14	7	6	91	5	204	1,822
D4d					6	11	8	7	14	1	47	1,038
D4						1		2	2	1	6	122
D5c					1	13	3	8	7	4	36	709
D5d					1	14	4	3	23	3	48	909
D6c	1	1			1	75	34	4	57	12	185	3,926
D6d					2	65	6	9	37	8	127	2,054
D7c		1			1	8	4		15	2	31	811
D7d						30	4	1	15	4	54	1,716
E3a					1	5	1	2	7		16	345
E3b									1	1	2	51
E3c								2	2	1	5	111
E3d					4	9	4	2	9	1	29	617
E4a					7	4	1	14	12		38	759
E4b					10	11		4	4		29	839
E4c					3	2	3		2	1	11	195
E4d					4	19	1	6	21	3	54	1,353
E4c,d			1		4	6	5	3	6		25	592
E4b,E5a						2			2		4	41
E4,5,F5						6		1	3	3	13	380
E4		1			6	7	4	6	8	1	33	598
E5a		2			10	37	6	4	49	7	115	2,186
E5b	1	1			4	40	21	9	64	4	144	2,399
E5c					1	5	2	2	8	5	23	469
E5d					5	27	13	4	35	2	86	1,563
E5c,F5a					3	5	3	3	4	3	21	350
E5c,d,F5a,b					5	4	10		11	1	31	599
E5d,F5b					1	3	3		5	1	13	272
E5d,E6c		1			1	17		4	19	4	46	1,445
E5					2	18	13	6	30	12	81	1,482
E6a	1	2			6	155	56	25	172	49	466	11,789
E6b					6	56	44	9	63	16	194	3,729
E6c		1	3		9	122	120	30	130	41	456	10,782
E6d					3	36	19	1	28	5	92	2,190
E6						3			1		4	77
E7a,b					1				21	3	25	520
E7a						2	6	1	4		13	134
E7b						14	17	1	21	2	55	1,020
E7					2	8	6	1	6		23	287
F5									2		2	79
F6a					5	30	13		29	6	83	1,251
F6b					1	8	2		1	1	13	473
F6b,F7a						3	2	1	3	1	10	218
F6,F7						4	2		5		11	475
F7b		1			1	2	5	1	4		14	226
F7a		1			1	2	4		16	3	27	514
F7a,c		1			3	14	8	2	13	2	43	1,295
F7						2			2		4	178
D4,E4～6					9	64	37	23	76	27	236	5,311
D・E3～4,F4					10	32	23		44		109	3,152
DEF6～8		1			3	77	70	16	96	52	315	6,294
T1		1			7	52	22	8	63	18	171	3,243
T1・T1b											0	0
T2					3	62	19	7	61	11	163	2,630
T9	2	4			26	47	38	40	73	22	252	6,049
T10		1			3	77	20	11	87	37	236	5,792
T21				1	10	2	7	23	11		54	1,298
T22					1	7	3		13	1	25	374
計	5	22	5	1	318	1,409	741	380	1,715	407	5,003	113,668

第78表 包含層ゾーン②出土土器集計表

グリッド名	早期	黒浜	～中初	阿玉台	加曾利E	称名寺	堀之内	縄紋	無文	条線	計	総重量 (g)
D8c						2		1	3	1	7	193
D8d						7	5		8	2	22	360
D8c,d						5	1		5	2	13	146
D9c,E9a						1				1	2	38
E8a				1	5	80	50	2	67	61	266	4,004
E8b						26	8	6	31	11	82	1,524
E8c		3			3	63	25	3	55	15	167	3,131
E8d	1	3			3	10	8	6	8	2	41	806
E8,E7c						1	8		6	5	20	311
E8		1					5		10		16	199
E9a		2			4	16	4	6	11	3	46	776
E9b		3			8	4		9	11	2	37	666
E9c		14			6	5	4	9	18	7	63	1,378
E9d		1				1	2	3	6		13	177
E9					1		3		1		5	151
E10b		3			1	4	3	1	5		17	342
E10c		2						1	3	3	9	132
E10d		9		1	2	3	2	3	3		23	525
E10b,d					1	1	1	1	1		5	63
E10		2		1	1	3	1	3	3		14	229
E10,11		2			1			1	3		7	239
E11a	1	10			7	5	4	7	21	2	57	960
E11b		1				1					2	14
E11c		2			2	4	1	2	7	2	20	372
E11d	1	8			4	4	2	3	7		25	339
E11c,E10d		2				3	2	4	5		16	174
E11a,c		4			1	1	2		5		13	164
E11b,d		1					1	1	1		4	58
E11c,d	1	10			1		4	6	8		30	565
E11d,E12c		4			2	1		1			8	153
E11		2			2	1		1	1		7	161
F8a		2				2	4		13	1	22	389
F8b		1			4	2	3	3	5		18	310
F8							1	1	2		4	118
F9a					12	2		8	5		27	705
F9b								1	1		2	20
F9c		2			1		3	2	4	1	13	198
F9d		1									1	6
F9a,c		3			4	2	3	6	7		25	508
F9c,d					1				1		2	49
F9		1			1			2	2		6	130
F10a		11			19	3	1				34	699
F10c		1			5	1				1	8	230
F10d								13	8	1	22	471
F10c,d		2							1		3	38
F10					1	3			1		5	166
F11a							2		2		4	62
F11b											0	0
F11c	1	4			1	9	15	5	7		42	700
F11d		21									21	326
F11c,d		1		1	1				1		4	46
F11											0	0
D8,9,EF8-10		16			3	57	28	38	54	16	212	4,779
EF10-12		7			2	3	12	2	7	2	35	1,018
E11,F10-11		2			1		2	3	1		9	96
T3						24	17	5	42	7	95	1,749
T4		2			2	21		15	16	3	59	1,202
T5	1	7				3	11	3	8		33	483
T12		5			3	4		11	6		29	402
T15		9			2		2	5	4		22	286
T14		16			9	20	7	21	18	2	93	2,196
S2						138					138	4,199
計	6	203	0	4	123	546	257	224	529	153	2,045	40,085

第 79 表 包含層ゾーン③出土土器集計表

グリッド名	早期	黒浜	～中初	阿玉台	加曾利E	称名寺	堀之内	縄紋	無文	条線	計	総重量 (g)
E12b	1	3					2	1	1		8	75
E12c		28					5		1		34	297
E12d	2	8					43	10	6	2	71	2,587
E12a,b		9					4	2	3	1	19	309
E12c,d		3					5		2		10	131
E12,F12		3					4		1		8	103
E12c・d F12a・b							5	3	1		9	133
E13a							3				3	21
E13c		2					5		1		8	124
E13d		1			1		3	2	3		10	261
E13c,d		1					9	1	4		15	216
E14c		3							1		4	11
E14							1				1	37
E15c	3										3	30
F12a	2	8					2	5	7		24	365
F12b		9				1	12	2	11		35	454
F12d				1			1				2	32
F12d,F13cd		1									1	12
F12		16		1	1	3	11	1	7		40	569
F12,F13		5					3		2		10	241
F13a		10				1	8	3	3		25	355
F13b		7				1	9	5	1		23	468
F13c					1		6	1	2		10	217
F13b,d		1		1			4		2		8	223
F13c,F14cd							3	1	1		5	57
F14c									1		1	15
F14d		1					4	2	2		9	146
F14cd,F15c		3					1		1		5	109
F14d,F15c							1	1			2	17
F15a		4			1		2				7	132
F15b		1					1		2		4	43
F15c	1										1	6
F15 d								1			1	16
EF12-14	1	12			1		2	6	11	2	35	712
EF14-15											0	0
T7		17		1		4	23	5	15	2	67	1,536
T6		7		1	1		26	7	6		48	611
T16		11			4	5	19	8	12	1	60	1,237
T17		12					13	2	8	3	38	514
T18		2			3	6	11	4	18	8	52	939
T18b											0	0
T11					5	9	7	7	15	3	46	940
T8						9	11	3	20	1	44	778
T20		3					1	1	3		8	136
T23						6	6	2	11	3	28	522
T24		1			1		2		3	1	8	127
T25						2	2	3	6		13	198
T26						1	5		1		7	133
計	10	192	0	5	19	48	285	89	195	27	870	16,195

る（小山市史編さん委員会 1981）。

以上のような状況から、当地域の縄紋時代を考えるには未だ時期尚早ではあるものの、西仁連川沿いの台地縁辺に黒浜式期の集落跡、加曽利 E 式前半期の集落跡、称名寺式新段階～堀之内 1 式および同 2 式期の集落跡が展開していることが明らかになりつつあると言えよう。これ以外の時期については遺物が少量であり或いは遺構が殆ど確認されない等、安定した集落形成には至っていないと捉えられる。加曽利 B 式以降晩期までが極めて希薄である点は、これまでも指摘されているとおりであり、一定程度面的に調査した今回の調査においても加曽利 B 1 式以降の土器がみられなかったことは注意される。

新 4 号国道関連の遺跡調査は台地全体にトレンチを入れたようなものであるが、今回の調査はこれに直交する方向であり、これらによって縄紋集落の範囲や様相について少しずつではあるが解明されてきていると言えよう。なお台地平坦面となる小山市調査区（横倉戸館 6 号墳西側）では一定程度の面的調査を行ったものの縄紋時代の遺物は殆ど認められなかったとのことであり、遺跡内でも地点によりかなり様相が異なることは注意しておきたい。なお周辺には調査のおよんでいない遺跡も多くあり、今後の検討や調査に期するところが大きい。

小結

1) 横倉遺跡の縄紋時代集落では、遺構調査と遺物整理によって、遺構の存在や多量の遺物から推定される一定程度安定した居住のなされる集落形成期と、遺構の存在も確認されず遺物量も少ない安定した居住を推定し得ない時期があることが確認された。

2) とりわけ今回の調査では、後期称名寺式新段階～堀之内 1 式の遺物が多く、確認された遺構は少ないものの、この時期の安定した集落跡と認めることができる。

3) 台地斜面下方において堀之内 2 式中段階の規模の大ききな住居跡 SI-76 が確認された。住居跡は径 8 m を超える規模の主体部と入口部ピット群を擁する良好なもので、この住居跡からは玉類、ほぼ完形の注口土器等が出土した。

4) この住居跡 SI-76 のピット内から折り重なるようにして出土した土器は 1 個体に復元され、破片分割設置の事例として注目される。

5) 前期中葉黒浜式が一定量出土しており、明確な住居跡の検出は無いものの、当該期の集落域であることが推測される。土器以外でも垂飾品等前期の特徴を示すものが出土している。

6) 中期後半加曽利 E 式前半についても一定量の出土遺物があり、一定規模の集落跡と考えられる。但し加曽利 E I 式古段階や加曽利 E III 式以降は限定的であり、比較的時期幅の短い集落であった可能性もある。中期の注目すべき遺物としては、内面に沈線文様のある器台の出土がある。

7) 石器では石鏃等の剥片石器類、打製石斧、磨石等が出土した。主にチャートを用いた二次加工剥片、使用痕ある剥片等が比較的多量に出土している。後期初頭～前半の遺跡としては石鏃がやや少ないこと、石錘が極めて少ないことが特徴となる。近隣の雨ヶ谷宮遺跡と比較すると、石錘の希少さは同様であるが、石鏃が雨ヶ谷宮遺跡では 213 点と多く、若干の組成の違いがある（注）。集落設営の主体時期がややずれることも併せ考えていく必要がある。

8) 土器以外の土製品では、ミニチュア土器、土製円盤、蓋、貝輪状土製品、焼成粘土塊が確認された。いずれも少数だが、やや焼成粘土塊が多い傾向にある。

9) 近隣の遺跡調査例の検討から、本調査区のある台地上の比較的広範囲、および谷を隔てた台地縁辺に今

回の調査区での確認遺物と同様、前期中葉黒浜式、中期加曾利 E 式、後期称名寺式・堀之内式の分布が確認される。本遺跡の調査は、小山市東南部、西仁連川流域における当該期の集落・領域を考えるうえでも良好なデータの蓄積となった。

10) 西約 1 km の位置に所在する雨ヶ谷宮遺跡県埋文調査地点と比較したとき、加曾利 E 式期では集落形成期として両者が重なる時期があるが、称名寺式期については古～中段階に一定規模の集落で新段階では土器の出土が希薄な雨ヶ谷宮遺跡と対照的に、横倉遺跡では称名寺古～中段階の土器は無く、新段階に至って比較的明瞭に集落が形成されるという事象が確認された。

注：雨ヶ谷宮遺跡では石鏃 213 点、石錐 4 点、打製石斧 74 点、磨製石斧 21 点、石皿 60 点、磨石 50 点、尖頭器型石器 2 点、石核の可能性ある破片（遺構内 3 点）、フレーク 1437 点（44 点が黒曜石で残り「殆どはチャート」）、その他「使用目的、形態の判別不明の石製品」が 8 点、「使用痕と思われる形跡を残す自然石」が 24 点、「自然・人為の区別のつかない平石」が 17 点と整理されている。

また雨ヶ谷宮遺跡の土製品は土製円盤 11 点、ミニチュア土器 11 点、垂飾品 4 点、腕輪 1 点出土している。他に耳栓状土製品 1 点（中期の耳飾り）、土玉 1 点、不明土製品 1 点がある。

弥生時代

今回の調査では弥生時代の遺構は確認できなかったが、土器片が一定量出土している。これらについては、縄紋時代の項で区分したゾーンごとに掲載している。出土地点からみると、ゾーン①からは確認できず、殆どがゾーン②に集中して出土している状況であった。ゾーン③からの出土も確認できるが、ゾーン②よりは少ない状況である。

今回の調査で出土した土器は、中期末～後期後半の時期のものが出土している。中期末頃の土器は、第 178 図 1・2 および第 187 図 13 の沈線文系の土器が該当する。いずれも壺型土器の口縁～頸部にかけての資料で、いずれも頸部には沈線文が施される。

後期には、縄紋系・櫛描文系の土器があり、主体となるのは後期前半頃の土器である。後期前半に属すると思われる土器のうち代表的なものをあげる。第 162 図 20 は、浅い縄紋を施文するもので、十王台式土器によくみられるものである。第 162 図 12～15 は同一個体の可能性が高く、縄紋原体も直前段反撚り 3 段 LLR とと思われる原体を使用している。復元するとやや大形の壺となろう。第 162 図 13 の内面には植物の圧痕が確認された（図版六三）。籾殻の圧痕である可能性が考えられるが、レプリカ法等を用いての分析を行っていないため確実性はない。第 170 図 1 のように縦横に施文するものも後期前半頃と思われる。

後期後半に属すると思われる土器の多くは砂粒や少礫を含み、褐色を呈するが、一部においては赤褐色の個体や少礫を含まない個体等がみられる。縄紋原体は、附加条 1 種が主体的であるが、直前段反撚り 2 段 LR や直前段反撚り 3 段 LLR 等の原体も僅かだがみられる。櫛描文系は第 170 図 2 のように縦方向へ波状文を施文するものや第 178 図 4・第 187 図 14 の縦方向への波状文を施文するもの、第 178 図 5 の横方向へ施文するものがあげられる。第 170 図 3 にみられる、口縁部を内外面から棒状工具で押圧して波状に成形する個体は、南関東からの影響も考えられようか。また、古墳時代の土器棺墓である ST-72 の蓋には、壺型土器が転用されている。

周辺では中期末頃～後期前半にかけての集落は、溜ノ台遺跡で竪穴住居跡が 2 軒調査されているのみであるが、今回の調査でこの時期の集落が周辺に存在する可能性が考えられ、今後の調査が期待される。

古墳時代

古墳時代の遺構として方墳・円墳・方形周溝墓・土器棺墓・溝跡・性格不明遺構を調査した。これらの遺構は、台地平坦面から緩やかに傾斜をし始める、台地縁辺部に位置している様子がみられる。今回の調査で確認された古墳は、方墳1基・方形周溝墓1基・円墳2基であり、古墳時代前期と中期の古墳であることが判明した。横倉戸館古墳群の築造された時期については、これまで不明であったが、今回の調査でおおよそ把握できたことは大きな成果であろう。ここでは、古墳および土器棺墓について整理をしてまとめたい。以下、時期ごとにみていく。

1. 前期

前期の遺構として、方墳SZ-1（横倉戸館8号墳）、方形周溝墓SZ-66、土器棺墓ST-72および横倉戸館1号墳が該当する。これらの遺構は、それぞれが近接するように築造され、一部重複している状況も確認されている。調査の結果、SZ-1（横倉戸館8号墳）の周溝北辺をSZ-66が切る状況が確認できた。これにより、SZ-1（横倉戸館8号墳）埋没後に覆土を掘り込んだと考えられ、SZ-66築造段階にはSZ-1（横倉戸館8号墳）の周溝はほぼ埋没していたと推定できる。また、SZ-66の周溝掘り下げ後、SZ-66北東コーナー部の底面からST-72のプランを確認したことから、ST-72はSZ-66より古いと考えられる。これにより、SZ-1（横倉戸館8号墳）、ST-72→SZ-66の関係が判断できる。

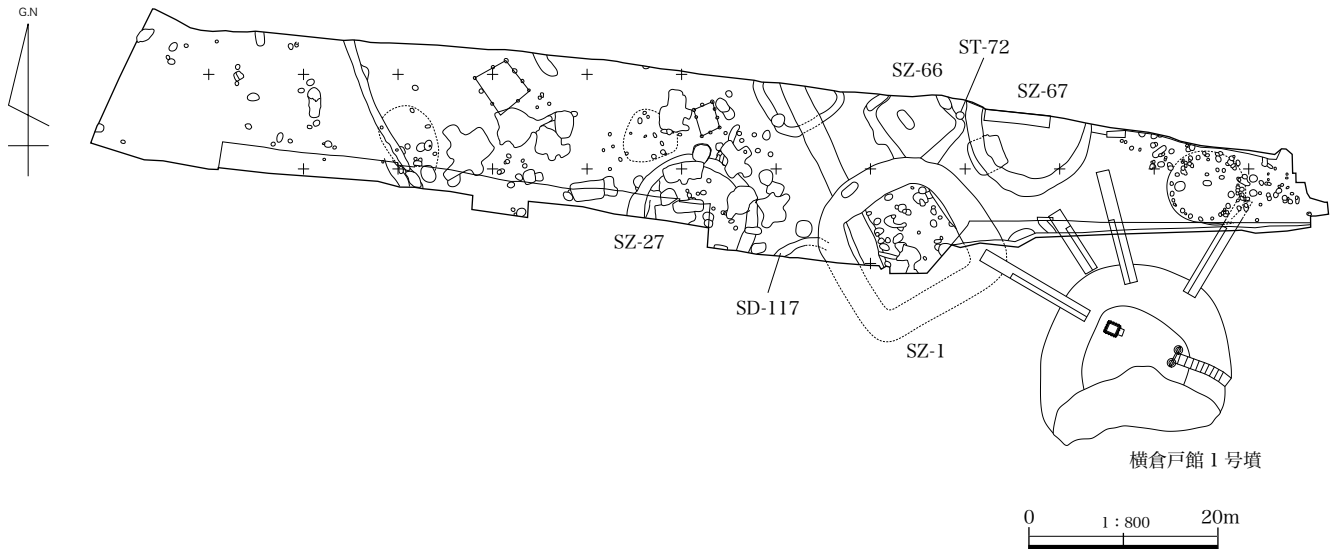
a) SZ-1（横倉戸館8号墳）

SZ-1（横倉戸館8号墳）は調査区中央で確認された一辺推定17.5mとなる隅丸方形の方墳である。周溝の幅は最大で4.1mで、確認面からの深さは1.3mである。北西および北東のコーナー部はやや浅めである状況が確認できた。墳丘盛土は最大で70cm程残存しており、墳丘盛土を掘り込んで構築された主体部が確認された。出土遺物の多くは周溝内からの出土で、坏2点・椀1点・高坏1点・壺14点が出土しており、第163図31・34～40、第164図41・42の壺10点については詳細な出土位置が記録されている。SZ-1（横倉戸館8号墳）出土の壺は周溝コーナー部周辺から出土している傾向がみられる（第153図）。またいずれも周溝底面から20～30cm程浮いた状態で出土しており、底面に接して出土した個体は無い。殆どの壺は横位で出土し、正位での出土は無かった（第154～159図）。36および38は周溝中位で、41の壺は墳丘面から周溝中位にかけて、3点とも破片となって出土しており、意図的に破碎されたと考えられる。特に41は、周溝上位から中位にかけて集中して出土する状況であり、墳丘上面で壺を破壊した後に周溝埋没の過程で流入したものと考えられる。42は口縁部を意図的に割り、並べたような状況がみられる。

これらの壺は、胴部下半部が最大径となる壺が主体的で、口縁部に棒状浮文を貼り付けるものや胴部に鋸歯文・縄紋を施文する、装飾された壺が出土したことは注目される。それらの壺は、外面調整にヘラミガキを行っているが、36のみヘラケズリ調整が行われている。また、これらの壺は底部穿孔を行うものが多く、37～40は焼成後に、36のみ焼成前に穿孔を行っている。特に、39は出土位置が不明であるが、底部片が接合している。小山市治松遺跡のSX-7から出土した壺で底部が同遺構内で出土・接合した例があり、現地で穿孔を行っていたことが想定されている（片根1998）。

SZ-1（横倉戸館8号墳）から出土した複合口縁の壺は2個体（第164図41・42）とも棒状浮文をもつ壺であり、42は口縁部および胴部に文様が施文されており、口縁部には網目状捺糸紋を、胴部には網目状捺糸痕、無節の縄紋、鋸歯文が施文される。小山市域で口縁に縄紋を施文する壺は、牧ノ内古墳群の17号墳出土例および

古墳時代



第 285 図 横倉遺跡・横倉戸館古墳群 遺構変遷図（古墳時代）

集落遺跡である下犬塚遺跡や結城市善長寺遺跡から出土した壺があげられる。これらはいずれも複合口縁の壺で、羽状縄紋の施紋後に棒状浮文を貼り付ける。

SZ-1（横倉戸館 8 号墳）出土のような、網目状撚糸紋での施紋例は現在栃木県内での報告例は下犬塚遺跡出土の破片および横倉戸館遺跡での採集資料（進藤 1991）等があり、横倉遺跡に近い遺跡でやや多くみられている。今回の調査で出土した壺は、口縁部に網目状撚糸紋や棒状浮文、円形朱文を施し、胴部上位には網状撚糸紋や鋸歯文が施文され、文様面以外に赤彩を多用しており、南関東における弥生時代終末期の様相をとどめていると言える。これらの特徴をもつ土器は、いわゆる南関東系とされており、本遺跡出土例も南関東系に相当するものであろう。

本墳の主体部は、南側が攪乱を受けており遺存状態は悪く、形態も不明瞭なところがある。主体部からは、やや薄手の剣と小形の罎の破片が底面から 8 cm 浮いた状態で出土し、主体部に伴うものと判断した。剣は切っ先が南東方向へ向いており、被葬者の頭部は北西方向へ向いていたと考えられる（第 160 図）。

周溝内および主体部から出土した土器は、栃木県内の古墳時代前期における研究を精力的に進めている今平利幸氏による編年（今平 2009）を参照すれば、今平編年での 0 段階（前期初頭）に属する土器群であると考えられる。

また、SZ-1（横倉戸館 8 号墳）の墳丘上面からは第 163 図 26 の椀、第 163 図 27 の高坏が細片となって出土している。高坏は脚部のみ残存しており、やや脚部が膨らむ。椀は、口縁部が内湾気味になることから、今平編年Ⅱ期（前期中頃）に相当すると考えられる。周溝内および主体部から出土した土師器とは時期が異なる点に注意される。

小山市域および近接する結城市西部における前期の古墳および集落と比較すると、牧ノ内 17 号墳・寺野東遺跡方形周溝墓・冶松遺跡・下犬塚遺跡・溜ノ台遺跡・結城市善長寺遺跡等の時期に概ね相当すると思われる。中村享史氏の編年案（中村 2015）では、SZ-1（横倉戸館 8 号墳）を小山市域で最古の古墳とし、3 世紀末に位置づけている。

b) SZ-66

SZ-66 は一辺推定 9.4m の方形周溝墓である。墳丘盛土は確認されなかったが、中央やや西寄りに主体部と考えられる、長軸 2.3m×短軸 1.0m の長方形の土坑が調査された。SZ-66 からは坏 1 点・高坏の受け部 1 点・壺 4 点が出土している。ここでは壺についてみていく。SZ-66 から出土した壺は、口縁から体部にかけての壺破片 1 点（第 170 図 6）、複合口縁の壺が 2 点（第 170 図 8・9）、胴部下半から底部にかけての壺が 1 点（第 170 図 7）出土している。第 170 図 6 の壺は、甕に近い形態をしており、内面は黒色処理を施す。内面にはコゲが付着しており、煮炊きに使用されたものと考えられる。周辺の集落からもち込まれた可能性がある。複合口縁壺は 2 点とも胴部下半に最大径をもつもので、胴部下半から底部にかけて残存する壺も同様に、胴部下半が最大径になると思われる。これらは、底部付近で横方向のヘラナデやヘラケズリの調整痕が残り、胴部は縦方向のヘラミガキを施す等、技法上の共通点を見出すことが出来る。

出土位置が記録されている個体は 7～9 である。7 は西辺の張出部から出土しており、ほぼ確認面の高さで出土している。周辺からは胴部上位から口縁部にかけての破片はみつかっていない。8 はやや横倒しの状態で北西コーナー部から出土した。9 は東コーナー部の底面近くから逆位の状態で出土しており、SZ-1 を含めた他の壺の出土状況とは異なる様相がみて取れることは注意される。8・9 の壺も底部穿孔を行っているが、9 は口縁部近辺から底部片が出土しており、SZ-1 の 39 や治松遺跡 SX-7 と同様の事例と思われる。また、主体部のほぼ床面直上から短めの剣が 1 点出土している。この剣は、土圧の影響または人為的かは判断が出来なかったが、両端が反っている。

本古墳は SZ-1（横倉戸館 8 号墳）との重複関係や、出土した壺の形態等から考え、今平編年 1 段階に属すると考えたい。

c) ST-72

ST-72 は弥生時代後期と思われる壺型土器を「蓋」に、土師器壺を「身」として使用している土器棺墓である（第 180 図）。「蓋」として使用された壺型土器は、胴部にススが付着していることや底部外縁が磨滅している点から、煮炊きに使用されたものを再利用している可能性が高い。「身」として使用された土師器の壺（第 182 図 4）は胴部下半に最大径が求められる。胴部にハケ目痕を多く残し、ヘラミガキはやや雑多に行なわれている点や、胎土に砂粒が多い等、やや雑な印象を受ける。

近隣では合わせ口ではないものの、下野市（旧南河内町）三王遺跡 SI-06 および SI-09 から弥生時代後期の壺型土器と土師器が共伴する例が報告されている（下谷 1998）。また、神奈川県では、古墳時代初頭まで土器棺墓が使用されていることが指摘されており（弥生時代研究プロジェクトチーム 2013）、本遺跡での例も古墳時代初頭と考えてもよいのかもしれない。今平編年の 0 段階に該当するものと考えておきたい。

d) 横倉戸館 1 号墳

横倉戸館 1 号墳は、推定径 28m のやや歪んだ円墳と考えられる。本古墳出土の壺は、ほぼ周溝底面に接して潰れた状況で出土しており、周溝底面に置かれた可能性がある。図面上での復元であるため確実には言えないが、この壺が出土した位置は北西のコーナー部付近となる。複合口縁の壺で、胴部下半が最大径となるが、器形に大きな歪みが生じている。底部穿孔を行っており、周辺からは底部はみつかっていない。詳細な検討を得ていないが、今平編年 1 段階～2 段階頃の土器となろう。

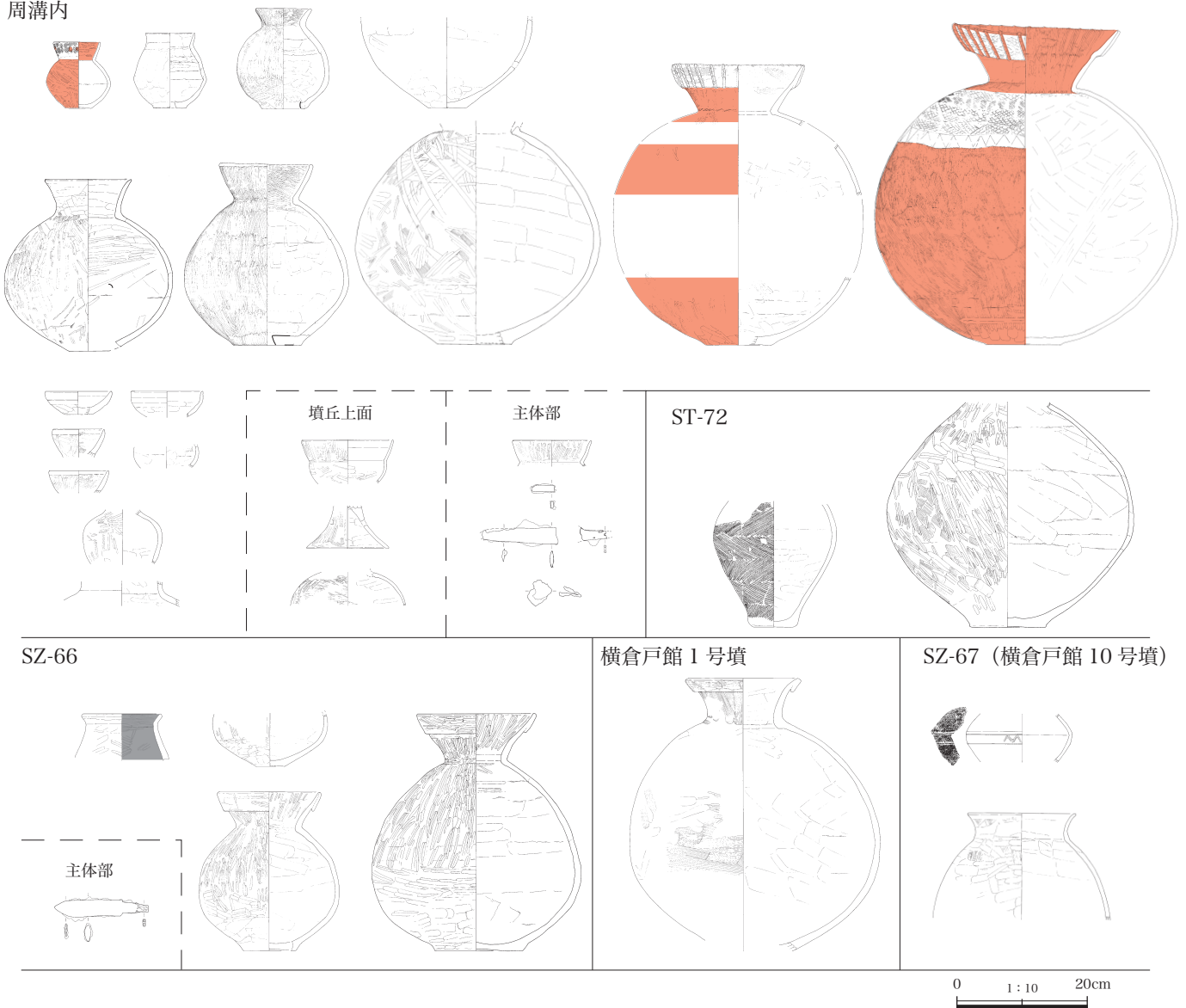
2. 中期

この時期に相当する古墳は、SZ-27・67 が該当する。両者とも円墳である。両者とも他の古墳とは重複はしない。

SZ-67 はやや縦長で楕円形となる円墳と考えられ、径は推定で 14.8m である。墳丘盛土は無く、主体部も確認できなかった。本墳南側の周溝上位から、中期前半頃に相当すると思われる、胴部がやや球状を呈する土師器の甕が横位で、遺構確認面の高さから出土している。また、やや大型のハソウが SZ-67 周辺から出土しており、本古墳に伴うものと考えられる。

また、平成 26 年度には、今回調査区の南東約 430m 地点で小山市教育委員会による調査が行われた(第 2 図)。この調査区は、横倉戸館 6 号墳に近接しており、調査の結果、直径約 22m の円墳が 2 基確認された。担当さ

SZ-1 (横倉戸館 8 号墳)
周溝内



第 286 図 古墳時代遺構出土遺物構成図

れた秋山隆雄氏のご教示によれば、横倉戸館 11 号墳および 12 号墳から中期後半～後期前半頃の土師器が出土しているとのことである。

小結

以上のことから、横倉戸館古墳群は、方墳 SZ-1（横倉戸館 8 号墳）、土器棺墓 ST-72 → 方形周溝墓 SZ-66 → 円墳と推定される横倉戸館 1 号墳 → 円墳 SZ-67（横倉戸館 10 号墳） → 円墳の横倉戸館 11 号墳・横倉戸館 12 号墳と変遷することが判明した。円墳の SZ-27（横倉戸館 9 号墳、径 13.6m）については時期判断が出来る遺物が出土していないため判断が難しいが、SZ-67（横倉戸館 10 号墳）および横倉戸館 11 号墳・12 号墳と規模や形態が近似していることから、古墳時代中期～後期頃の円墳と考えてもよいのかもしれない。

また、テフラ分析の成果により、SZ-1（横倉戸館 8 号墳）の周溝覆土中層および SZ-66 の周溝覆土最下層から As-C の堆積が判明しているが、上記の年代観と整合することも確認できる。

古代

今回の調査区内からは、古代の遺構は鍛冶関連の竪穴建物跡である SI-75 の 1 軒のみが調査された（第 287 図）。本遺構は、床面の軟弱性やカマドに長期使用の痕跡が確認できなかった。短期間しか使用されなかった可能性がある。

出土遺物は、土器の他に鍛冶関連遺物が多量に出土している。土器についてみていく。土器は坏類が主体的であり、11 点であった。それらのうち平底の坏が 4 点、高台をもつ坏が 6 点で、残る 1 点は底部が破損しているため不明である。これらの坏類は主に北西部から出土しているが、第 195 図 2 はカマドの袖に接するように、逆位で出土している。カマドの廃絶に伴う行為の可能性もあろう。

坏類の底部は、ヘラケズリ調整を行うもの（第 195 図 5・8・9）、糸切痕を残すもの（第 195 図 1・2・6・7）が確認できる。高台付坏をみると、口縁端部は外反し、高台部はやや高めで、外側に広がる形状をするものが主体的である。土師器甕は、完形の遺物は無く、やや大きめの破片がカマド周辺から出土する。特に、第 193 図 13・14 はカマド前面に貼り付くように出土していたことから、カマドの構築材であった可能性が考えられる。体部外面は前面にヘラケズリを行う個体のみが出土する。

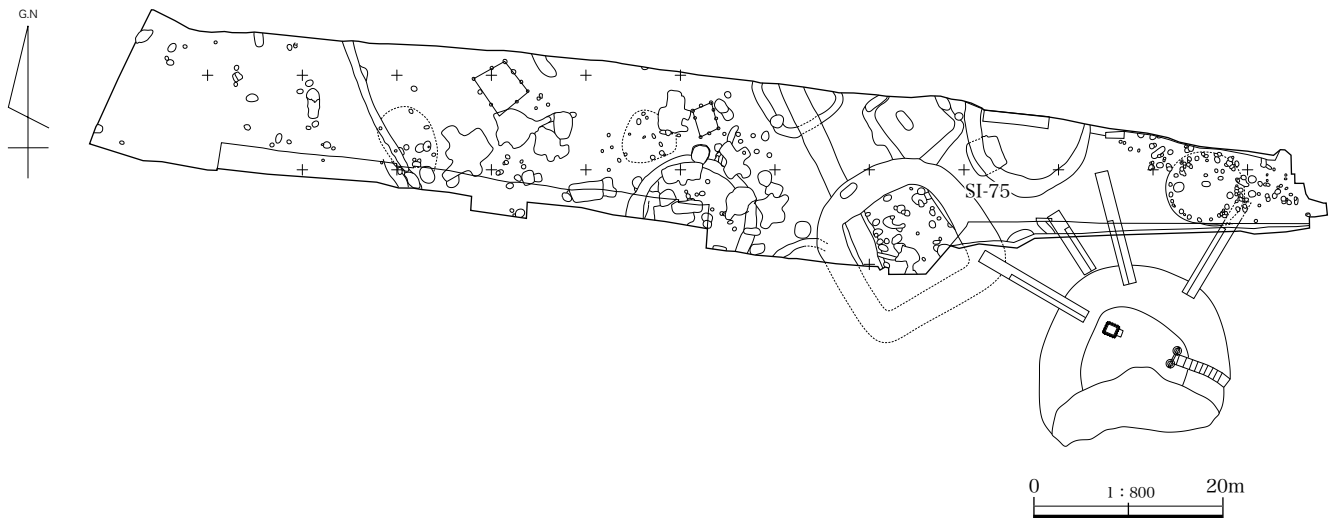
これらから、本遺構から出土する土器類は 9 世紀後半頃と考えられ、本遺構もこの時期に帰属すると考える。

鍛冶関連遺物について

鍛冶関連遺物の整理・分類を委託した穴澤義功氏の分析を再度整理する。鍛冶関連遺物は、床面直上に近い状態で羽口や鉄滓等が多量に出土した。特に、竪穴建物跡の南東隅から集中的に出土している。SI-75 からは、羽口や椀形鍛冶滓・鉄塊系遺物・粒状の滓・砥石等、ほぼ鍛冶関連遺物のセットが出土している。羽口は、平安時代的なやや太めな羽口である。椀形鍛冶滓は、構成 No. 4 の中型品を除いて大多数が極小である。鉄塊系遺物は鍛冶途上のものも含み、鉄製品は小型棒状品から形成されている。鍛冶関連遺物としてのセットとして欠けるのは鍛造剥片等、僅かである。したがって、SI-75 出土遺物は鍛冶遺構または鍛冶遺構からの比較的まとまりの良い廃棄物と推定される。

鍛冶生産について 鍛冶の工程としては、製錬鍛冶末期から最終鉄製品を作る、鍛練鍛冶工程が主体の鍛冶工房であったと推定される。したがって、本遺跡内から出土している数点の精錬炉の炉壁とは直接的な結びつきは弱いかもしれない。それは、大型や中型の椀形鍛冶滓が主体でない点からも言えるであろう。なお、転用坩堝破片に関しては、鉄鍛冶ではなく、非鉄（銅関係か）の小規模な加工を行っていた可能性がある。

古代



第 287 図 横倉遺跡・横倉戸館古墳群 遺構変遷図 (古代)

分析結果をみると、SI-75 出土の椀形鍛冶滓は、砂鉄系の原料を用いた製鉄炉で作られた素材を素にした鍛冶の後半段階にあたる鍛練鍛冶滓であることが判明した。砂鉄原料由来であることは、科学分析値の一部である TiO_2 (二酸化チタン) の値が 0.3% 高いことからわかる。もう 1 点の鉄製品は、金属組織が亜共析から共析組織をもつ、いわゆる軟鉄である。刃物ではない、釘等の金属組織としては妥当である。この鉄製品も、原料は砂鉄と判断され、かつ高温であることが読み取れた。つまり、製鉄炉は縦型炉であったと推定できる。したがって、SI-75 出土遺物の分析結果から、背景には縦型炉と砂鉄原料を用いた製鉄工程があり、それらから供給された原料鍛練鍛冶の工程を行っていたと推定できる。

中世

横倉遺跡の平成 2 年度に行われた調査では、台地平坦面で検出された溝に区画された土坑群について土壙墓群と指摘され、更に低地部分からは掘立柱建物が 12 棟調査されている。時期は戦国時代、15 世紀後半ごろと推定される。

今回の調査では、前回調査時に確認された土壙墓群および集落は確認できなかった。遺構・遺物が集中するのは、調査区中央部の E6 ~ E11 グリッドの間にかけてで、現況の標高でみると、34.0m より低い位置からは中世の遺構は確認されていない状況である (第 288 図)。また、新 4 号国道調査区との間に空白の区域があり、連続的ではない。

今回の調査では掘立柱建物跡が 2 棟確認できたが、柱穴は貧弱で柱の当たりも確認できなかった。長期にわたって使用されたものではなく、短期間の使用であったか。

地下式坑は 2 グループに分布するようにもみえる。E7 グリッドの範囲内に SK-77・95・96a、やや北側の F7 グリッドに SK-106 が位置する。E9 グリッドの周囲では、SK-82・86・87・115・116 が分布する。平面形態でみると、十字型 2 基・「キ」字型 1 基・「E」字型 1 基・変形十字型 4 基・長方形? 1 基である。各グループでみても、まとまりは無く、統一した形態をもたない。また、グループ分けをせずにもみると、各地下式坑が北側へ張り出す弧状に配置されているようにもみえる。地下式坑の出入口部と考えられる竪坑部は、SK-

106を除き、すべてが南面に作られている点は注意したい。

出土遺物は、いずれも15世紀後半ごろの内耳土器が主体的である。また、殆どの遺構が覆土上層からの出土であった。それらから考えると、本遺跡における地下式坑は15世紀後半以前のものと考えておきたい。

土坑の中でも、SK-78・89・96bは長方形状を呈しており、方形竪穴遺構または墓壇等の長方形土坑の可能性もある。だが、方形竪穴遺構でみられる長軸方向の壁際底面のピット状遺構は、これらの土坑の底面からは確認されていない。

中世の遺構は、時期不明のSD-70aから西側には遺構・遺物がみられない状態である。SD-70aは基本土層Ⅱ層を掘り込むことから、古代以降の溝であることが判明している。また、SD-70aの覆土をテフラ分析を行ったところ、最下層の3層からAs-Bが検出されている。しかし、SD-70aの東側に中世の遺構が集中的にみられることから中世の溝である可能性も考えられ、As-Bは再堆積の可能性が高い。平成2年度調査で確認されている墓域および集落との関係性については今後検討していく問題となろう。

近世以降

近世以降の遺構は土塁1基・堀跡1基・溝1条・土坑2基である(第288図)。ここでは、土塁であるSA-2と堀跡であるSD-3を中心にまとめていく。

1. 土塁(SA-2)・堀跡(SD-3)について

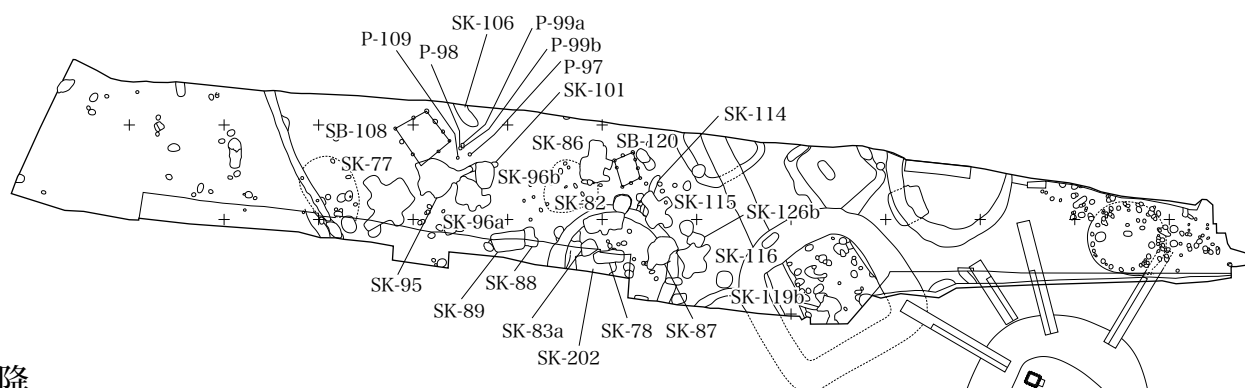
今回の調査区を南北へ貫く土塁(SA-2)と堀跡(SD-3)は、調査区外においても北北西から南南東方向に延びる高まりが確認できている(第293図)。北側ははっきりとしないが、南側では明確な土塁状の高まりがあり、コーナー部や開口部を確認できる。西側の新4号国道側へ向かうにつれて土塁状の高まりは低くなり、確認できなくなる。また調査区外の土塁南辺の外側で、堀跡と思われる落ち込みを確認することが出来る。土塁(SA-2)および堀跡(SD-3)は地形の傾斜に沿う方向に構築されており、主軸に対して直交する軸長における最大幅は土塁(SA-2)で10.54m、堀跡(SD-3)で3.08mの13.62mである。最大で56cmの盛土が残存しており、堀跡底面と盛土上面の比高差は2.24～2.8mであった。土塁(SA-2)盛土上面で粘土部分や砂を混ぜた層が確認でき(第229図)、堀跡(SD-3)はSZ-1(横倉戸館8号墳)の周溝との重複部分において、堀跡(SD-3)底面にロームを貼り付けているような状況が確認できた(第230図D-D'、図版四二)。

土塁の盛土除去後に地下式坑が確認でき、土層断面において土塁(SA-2)盛土が地下式坑を覆う状況が観察可能であった(第230図D-D')。このため、本遺構が構築される時にはすでに地下式坑は完全に埋没していた状況であったと考えられる。また、土塁盛土の火山灰分析を行っており、盛土最下層からAs-Bが検出されている(第四章参照)。さらに、周辺のⅡ層の状況をみると、凹凸が激しく、状態は悪い(第230図B-B'・D-D')。この状況から、土塁構築の際に地下式坑を含めて周辺の整地を行っている可能性が考えられる。

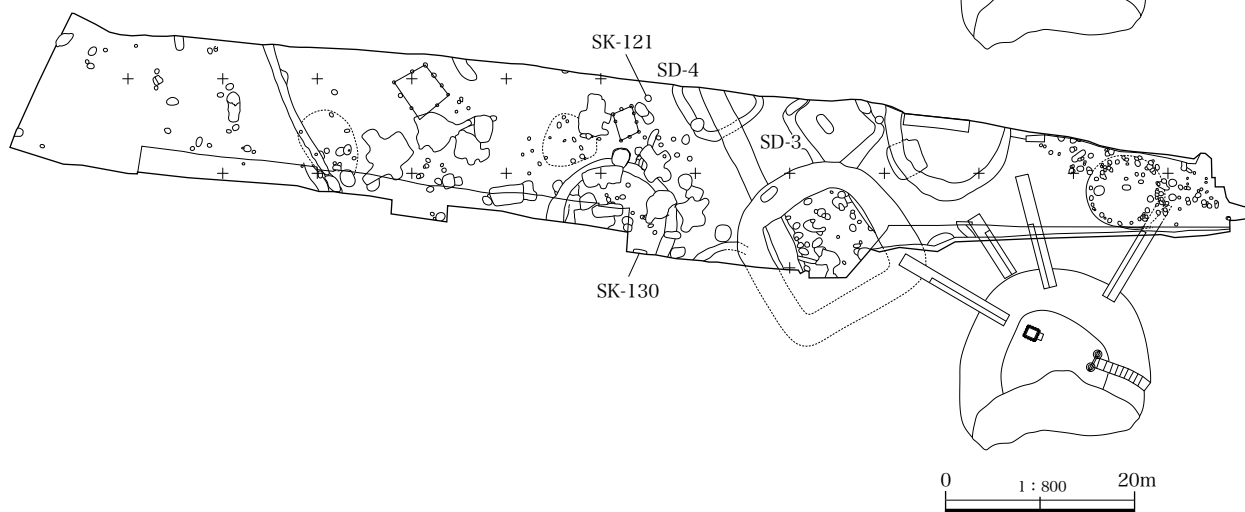
出土遺物について

今回の調査で土塁(SA-2)上面および盛土中、堀跡(SD-3)覆土中から多量の焙烙が出土している(第232図)。その殆どが平底の焙烙で、器高と口径の割合が1/6から1/7のものである。耳は口縁上端もしくは少し下がった位置に貼り付けられており、直接底部に取りつく。体部と底部の接合箇所には、殆どの個体で指頭圧痕がみられるが、ヘラケズリ調整を行うものもある。また、一部の焙烙には体部および底部に3mm程の円形の穴が焼成後に穿孔されており、銅線を巻きつける個体も確認されている(第232図35、図版四三)。修復に際して穿孔されている可能性がある。

中世



近世以降



第 288 図 横倉遺跡・横倉戸館古墳群 遺構変遷図 (中世・近世以降)

本遺跡周出土の焙烙は、茨城県内の内耳土器の編年を行った白田正子氏の分類でいうⅦ類のCに該当する個体が多くを占めている。このタイプと同類のものが近隣では結城市小田林遺跡の2号溝跡から陶磁器を伴って出土しており、白田氏は、このⅦ類Cの年代を18世紀後半～19世紀初頭頃と推定されている(白田1998)。

また、陶器・磁器等も土塁(SA-2)上面および盛土中、堀跡(SD-3)覆土中から多量に出土している(第234・235図)。土塁(SA-2)上面からの出土遺物で、出土位置が記録されている陶器・磁器は、第234図56の小坏、83の灯明皿、第235図92～94の丸形碗、104の広東碗があり、第235図94の丸形碗は盛土中から出土した破片と接合をしている。また、図示してはいないが多量の陶器、磁器の破片が盛土上面から出土している。土塁(SA-2)の盛土中から出土したことがわかる遺物で陶器は、第234図59の鎧茶碗、61～63の刷毛目碗、66の輪花皿、70の片口鉢、71・72のすり鉢、73・75の徳利、77の壺、80～82の灯明皿、87の香炉、89の風呂がある。磁器では、第235図94・96・103の丸形碗、97・99・102の筒形碗が出土している。これらの陶器・磁器のうち、陶器の鎧茶碗や磁器の丸形碗は18世紀後半～19世紀前半頃に位置づけられ、18世紀中頃の筒形碗も出土している。

出土遺物からみると、18世紀後半～19世紀前半の遺物が主体的で、それらは土塁(SA-2)の盛土中や盛土の上面、また堀跡(SD-3)の覆土中からも出土している状況である。つまり、土塁(SA-2)盛土の下位や

盛土中、上面の間および堀跡 (SD-3) 覆土間で、遺物の年代的差異は認められない。したがって、土塁 (SA-2) および堀跡 (SD-3) の構築から廃絶までの間には大きな時間差はみられないと考えられる。これらの結果から、土塁 (SA-2) および堀跡 (SD-3) は江戸時代後半の遺構であると判断することができよう。

2. その他の遺構について

SD-4はSA-2、SD-3を切る状況が確認されており、近代に帰属する可能性がある(第240図)。方形に巡る溝で、用途は不明である。出土遺物も、SA-2と遺構間接合をするものが多く(第241・243図15～19)、本遺構に帰属するとは言い難い。

土坑は2基調査されている。SK-121は銅線で繋がれた焙烙が出土している(第244・245図)。底面には押印があり、生産地の印判のようなものと思われる(図版七五)。焙烙の流通を考える点で重要な要素になると思われる。SK-130はSA-2の南西端に近接する位置にある。出土遺物は焙烙と火鉢、磁器である。すべて破損しているものであった。SA-2との直接的な関係は不明であるが、第247図4の磁器がSD-3出土遺物と遺構間接合をしている点から、SA-2に付随する廃棄土坑の可能性も考えられようか。

小結

今回調査された土塁と堀跡は中世の遺構ではないことが判明した点は大きな成果だと思われる。しかし、この土塁 (SA-2) と堀跡 (SD-3) の性格については、現状でははっきりとしない。やや離れた類例となるが、群馬県佐波郡玉村町に位置する、内田屋敷遺跡・原屋敷遺跡・上之手立野遺跡では、土塁や堀跡、掘立柱建物、井戸跡が確認されており、屋敷跡や屋敷跡の可能性が指摘されている。各遺跡では遺構に伴って土師質土器や陶器、磁器が出土しており、報告によると、内田屋敷遺跡・上之手立野遺跡は17～18世紀に、原屋敷遺跡では18～19世紀がそれぞれピークであったとされている(中島・常深ほか2004)。横倉遺跡における土塁 (SA-2) と堀跡 (SD-3) でみると、土塁 (SA-2) 内部には明確な近世の建物跡は確認されておらず、また井戸もみつかっていない等、生活に係る遺構の発見に至っていない点から、積極的に屋敷跡と考えるのは現状では難しい。とはいえ、他の性格も考えにくく、未調査区が広いことも考慮し、屋敷跡の可能性を示しておきたい。今後の考古学的調査に期待するとともに、伝承や文献も含めたこの地域の総合的な検討が必要となるろう。

引用・参考文献

秋山隆雄 1997『牧ノ内I - 方形周溝墓・住居跡編 -』小山市教育委員会

秋山隆雄・栗原 淳 2010『下犬塚遺跡II』小山市教育委員会

茨城県考古学協会中世シンポジウム実行委員会編 2011『茨城県考古学協会シンポジウム 茨城中世考古学の最前線～編年と基準史料～』茨城県考古学協会

岩上照朗・亀田幸久・斎藤 弘 1995『横倉宮ノ内遺跡』栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団

岩上照朗・小森紀男・藤田典夫編 1985『車堂』益子町史編さん委員会

内山敏行・亀田幸久・岩上照朗 1997『横倉戸館遺跡』栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団

江戸陶磁土器研究グループ 1992『シンポジウム 江戸出土陶磁器・土器の諸問題I』発表要旨・資料集

江原英・初山孝行 2007『寺野東遺跡』同成社

小山市史編さん委員会 1981『小山市史』史料編 原始・古代、小山市

小山市史編さん委員会 1984『小山市史』通史編I 自然、原子・古代、中世、小山市

- 片根義幸 1997『間々田地区遺跡群Ⅰ』栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
- 片根義幸・亀田幸久 1998『間々田地区遺跡群Ⅱ』栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
- 小筆一成・岩上照朗ほか 1995『横倉遺跡』栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
- 今平利幸 1997「栃木県における古墳時代前期の様相 - 土器を中心として -」『前方後円墳の世界Ⅱ - 那須に古墳が造られたころ -』栃木県立なす風土記の丘資料館第5回企画展、栃木県教育委員会
- 今平利幸 2009「栃木県の前期古墳 - 田川流域を中心として -」『第14回東北・関東前方後円墳研究会大会 シンポジウム 前期古墳の諸段階と大型古墳の出現 発表要旨資料』東北・関東前方後円墳研究会
- 篠原浩恵 1998『雨ヶ谷宮遺跡・雨ヶ谷西坪遺跡』栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
- 下谷 淳 1998『三王遺跡』南河内町教育委員会
- 田熊清彦・梁木 誠 1990「栃木県の黒色処理土器 - 奈良・平安時代を中心に -」『東国土器研究』第3号、東国土器研究会
- 竹澤 健ほか 1990『溜ノ台遺跡』栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
- 津野 仁 2014「横倉戸館1号墳」『栃木県埋蔵文化財保護行政年報36』平成24年度(2012)、栃木県教育委員会
- 津野 仁編 1993～1997『金山遺跡Ⅰ～Ⅴ』栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
- 寺内敏郎 1981「一二 横倉遺跡」『小山市史』史料編 原始・古代、小山市
- 中島直樹・常深尚ほか 2004『内田屋敷・原屋敷遺跡 上之手立野遺跡』群馬県佐波郡玉村町教育委員会・玉村町遺跡調査会
- 中村享史 2015「栃木県域の古墳編年」『第20回東北・関東前方後円墳研究会大会 シンポジウム 地域編年から考える - 部分から全体へ - 発表要旨資料』東北・関東前方後円墳研究会
- 白田正子 1997「茨城県における中世末から近世にかけての土師質内耳土器について - つくば市古屋敷遺跡の出土例を中心として -」『研究ノート』7号、財団法人茨城県教育財団
- 服部敬史 1997「内耳土器の研究(上)」『土曜考古』第21号、土曜考古学研究会
- 福田定信ほか 1992『下犬塚遺跡発掘調査報告書』小山市教育委員会
- 三沢正善・大塚昌彦 1987『乙女不動原北浦遺跡B地点発掘調査報告書』小山市教育委員会
- 築瀬裕一 2006「地下式坑の分類と編年試論 - 中馬場遺跡他の千葉県の事例をもとに -」『房総中近世考古』第2号、房総中近世考古学研究会
- 結城市史編さん委員会 1980『結城市史』第四巻 古代中世通史編、結城市
- 結城の歴史編さん委員会 1995『結城の歴史』結城市
- 和田雄次 1989『一般国道4号改築工事地内埋蔵文化財調査報告書2 結城地区 本田遺跡・善長寺遺跡・小田林遺跡』財団法人茨城県教育財団

写真図版



調査区モザイク写真



調査区現況全景（東から）



調査区全景（東から）



SI-76 周辺（北東から）



調査区中央部全景（直上から）



横倉戸館 8号墳 (SZ-1) および SA-2 (土壘)、SD-3 (堀跡) (東から)



SA-2 盛土下遺構群全景（北西から）



SZ-1 墳丘断ち割り状況（北西から）



平成 26 年度調査区東側全景（北東から）



平成 26 年度調査区西側全景（東から）



平成 26 年度調査区西側全景（北西から）



E13d グリッド基本土層平面状況（西から）



E13d グリッド基本土層（南から）



E11a グリッド旧石器調査区（南から）



E11a グリッド旧石器遺物出土状況（南東から）



E12c グリッド旧石器調査区（南東から）



E12d グリッド旧石器調査区（東から）



E12d グリッド旧石器調査区（南東から）



E12d グリッド二次加工剥片出土状況（西から）

図版六 縄紋時代 竪穴住居跡1



SI-76 完掘（東から）



SI-76 完掘（北東から）



SI-76 平成 26 年度調査区完掘（北東から）



SI-76F-F' 土層堆積状況（南東から）



SI-76F-F' 土層堆積状況・遺物出土状況（南東から）



SI-76 完掘 (西から)



SI-76 炉 A-A' 土層堆積状況 (北から)



SI-76 炉 B-B' 断ち割り土層堆積状況 (東から)



SI-76 炉完掘 (北から)



SI-76 遺物出土状況 (北東から)



SI-76 遺物出土状況（北から）



SI-76 遺物出土状況（東から）



SI-76 遺物出土状況（東から）



SI-76P7 土層堆積状況（南から）



SI-76P7 遺物出土状況 1（東から）



SI-76P7 遺物出土状況 2（北東から）



SI-76P7 遺物出土状況 3（東から）



SI-76P4 土層堆積状況（東から）



SI-76P5 土層堆積状況（南から）



E14c,S-64 ピット群全景（南西から）



E14c,S-64 ピット群全景（南東から）



SI-76P40 土層堆積状況（北から）



SI-76 東側ピット群全景完掘（南西から）



SI-76P73 土層堆積状況（南から）



SI-76P92・93 土層堆積状況（東から）



SK-60,SI-76P58・59 完掘（東から）



SI-73 完掘 (南東から)



SI-73 遺物出土状況 (北から)



SI-73C-C' 土層堆積状況 (北から)



SI-73 炉 1 焼土面 (西から)



SI-73 炉 2 完掘 (北から)



SI-73 炉 3 焼土面 (北から)



SI-73 炉 3A-A' 土層堆積状況西半 (北から)



SI-73 炉 3 粘土部アップ (南から)



SI-73P2 土層堆積状況（南から）



SI-73P3 土層堆積状況（南から）



SI-73P7 土層堆積状況（南から）



SI-73 埋設土器土層堆積状況（東から）



SI-73 埋設土器完掘（南東から）



SI-73b 完掘（北から）



SK-73bM-M' 土層堆積状況・3次面遺物出土状況（東から）



SK-73b2 次面遺物出土状況（北から）



SI-85 完掘 (南から)



SI-85A-A' 土層堆積状況 (南から)



SI-85B-B' 土層堆積状況 (東から)



SI-85P1 土層堆積状況 (北から)



SI-85P2 土層堆積状況 (南から)



SI-85P6・7 土層堆積状況 (南西から)



SI-85 焼土 A 土層堆積状況 (南から)



SI-85 焼土 B 土層堆積状況 (東から)



SI-85 焼土 C 土層堆積状況 (南から)



SI-85 遺物出土・焼土検出状況 (東から)



SK-12 完掘 (南から)



SK-46 完掘 (南から)



SK-47 土層堆積状況 (南東から)



SK-56 完掘 (東から)



SK-68 確認状況 (東から)



SK-68 土層堆積状況 (北東から)



P-49 土層堆積状況（東から）



P-69 土層堆積状況（東から）



SK-74 土層堆積状況（南から）



SK-83a・b, SZ-27 土層堆積状況（北から）



SK-134 土層堆積状況（北から）



SK-209 完掘（北から）



SK-103a 完掘（南から）



SK-103b 土層堆積状況（西から）



SK-103b 完掘 (南西から)



SK-103c 完掘 (南から)



S-64P11 完掘 (南から)



S-64P14 土層堆積状況 (南から)



S-64P18 土層堆積状況・完掘 (南から)



SK-65 完掘 (南東から)



P-128b ~ e 土層堆積状況 (東から)



P-128b · d 土層堆積状況 (東から)



SZ-1 墳丘下遺物出土状況（北西から）



SZ-1 墳丘下遺構群（北から）



SK-148 土層堆積状況（西から）



SK-150,P-151 土層堆積状況（西から）



P-152・153,SK-154・155 土層堆積状況（西から）



SK-156・157 土層堆積状況（南から）



SK-162a セクション（北から）



SZ-1 墳丘下東側遺物出土状況（南西から）



SZ-1 墳丘下遺物出土状況（北から）



D3 グリッド包含層遺物出土状況（東から）



D3 グリッド遺物集中地点（東から）



E5a グリッド遺物出土状況（南東から）



E5a グリッド遺物（器台）出土状況（南から）



E6a グリッド全景（北から）



E6c グリッド全景（南から）



E6c グリッド遺物出土状況（東から）



SZ-1 完掘 (北東から)



SZ-1 航空写真完掘 (北西から)



SZ-1 完掘 (北西から)



SZ-1 完掘 (北から)



SZ-1A-A' 西側周溝土層堆積状況・SD-3 重複状況 (北東から)



SZ-1A-A' 東側周溝土層堆積状況（北から）



SZ-1B-B' 墳丘盛土状況（南から）



SZ-1B-B' 土層堆積状況（南東から）



SZ-1C-C' 墳丘盛土状況（西から）



SZ-1 周溝内土坑（北から）



SZ-1C-C' 土層堆積状況（南西から）



SZ-1b2 区遺物出土状況（西から）



SZ-1d 区遺物出土状況（北から）



SZ-1g1 区遺物出土状況（北西から）



SZ-1g1 区遺物出土状況（低位置北から）



SZ-1g1 区遺物下土層堆積状況（南から）



SZ-1I 区遺物出土状況（東から）



SZ-1b2 区遺物出土状況（南東から）



SZ-1a・b1 区遺物出土状況（南から）



SZ-1a 区遺物出土状況（北東から）



SZ-1 主体部完掘（南東から）



SZ-1 主体部完掘（南から）



SZ-1 主体部 B-B' 墳丘盛土状況（南東から）



SZ-1B-B' 墳丘盛土状況（南東から）



SZ-1 主体部 B-B' 土層堆積状況（南西から）



SZ-1 主体部遺物出土状況（南東から）



SZ-1 主体部遺物出土状況（南から）



SZ-1 調査状況（北から）



SZ-66 完掘（南東から）



SZ-66C-C' 土層堆積状況（南から）



SZ-66B-B' 土層堆積状況（北西から）



SZ-66D-D' 土層堆積状況・SZ-1 重複状況（西から）



SZ-66 遺物出土状況（東から）



SZ-66 東コーナー部遺物出土状況（東から）



SZ-66 東コーナー部遺物出土状況（北東から）



SZ-66 東コーナー部遺物出土状況最下位（北東から）



SZ-66 西コーナー部遺物出土状況（南から）



SZ-66 西コーナー部遺物出土状況（東から）



SZ-66 主体部完掘（南から）



SZ-66 主体部土層堆積状況（南から）



SZ-66 主体部遺物出土状況（西から）



SZ-27 航空写真・完掘



SZ-27B-B' 土層堆積状況（北から）



SZ-27D-D' 土層堆積状況・SK-103a 重複状況（西から）



SZ-67 完掘 (南西から)



SZ-67B-B' 土層堆積状況 (南東から)



SZ-67 遺物出土状況 (南東から)



SZ-67 調査状況 (南から)



ST-72 確認状況 (東から)



ST-72 完掘（南西から）



ST-72B-B' 土層堆積状況（北東から）



ST-72 完掘（東から）



ST-72 土器内土層堆積状況（南から）



ST-72 土器内完掘（南から）



ST-72 掘方完掘 (南から)



SD-117 完掘 (北から)



SD-117B-B' 土層堆積状況 (東から)



SD-117A-A' 土層堆積状況 (東から)



SX-119a 全景 (西から)



SX-119a 焼土検出状況 (西から)



SX-119a 3・4次面遺物出土状況 (西から)



SX-119a 遺物下土層堆積状況 (西から)



調査区全景（北から）



調査区全景（北西から）



東側低地面から墳丘を臨む（東から）



1 トレンチ完掘状況（西から）



1 トレンチ完掘・土層堆積状況（北西から）



1 トレンチ完掘・土層堆積状況（北から）



2 トレンチ完掘状況（北から）



2 トレンチ完掘・土層堆積状況（北から）



2 トレンチ土層堆積・土器出土状況（北から）



2 トレンチ土器出土状態（北から）



3 トレンチ完掘状況（北から）



3 トレンチ完掘・土層堆積状況（北東から）



4 トレンチ完掘状況（北から）



4 トレンチ完掘・土層堆積状況（北から）



4 トレンチ土層堆積状況（西から）



調査風景（西から）



SI-75 完掘 (南から)



SI-75A-A' 土層堆積状況 (南西から)



SI-75 カマド A-A' 土層堆積状況 (東から)



SI-75 カマド B-B' 土層堆積状況 (南から)



SI-75 カマド完掘 (南から)



SI-75 遺物出土状況 (東から)



SI-75 南東コーナー部遺物出土状況 (北東から)



SI-75 南西部遺物出土状況 (西から)



SB-108 全景（北から）



SB-108P3 土層堆積状況（東から）



SB-108P4 土層堆積状況（南から）



SB-120 完掘（南から）



SB-120P6 土層堆積状況（南から）



SB-120P9 土層堆積状況（南から）



SK-77 完掘（北から）



SK-77A-A' 土層堆積状況（東から）



SK-77 豎坑部 (北から)



SK-77 : 2・3室 (北から)



SK-77 : 4室 (北東から)



SK-77 遺物出土状況 (北東から)



SK-77 遺物出土状況 (北東から)



SK-77 遺物出土状況 (北東から)



SK-77 調査状況 (南東から)



SK-82 完掘 (南から)



SK-82：2室（北から）



SK-82A-A' 上位土層堆積状況（南西から）



SK-82A-A' 下位土層堆積状況（南から）



SK-82D-D' 土層堆積状況（西から）



SK-82 遺物出土状況・D-D' 土層堆積状況（東から）



SK-82 遺物出土状況（南東から）



SK-86 完掘（北から）



SK-86 スロープ部（北西から）



SK-86 ピット完掘（北東から）



SK-86 ピット土層堆積状況（東から）



SK-86B-B' 土層堆積状況（東から）



SK-86：2室（東から）



SK-87 完掘（南西から）



SK-87 豎坑部（北東から）



SK-87C-C' 土層堆積状況（北から）



SK-87B-B' 土層堆積状況（南から）



SK-95 完掘（北西から）



SK-95 豎坑部（北西から）



SK-95B-B' 土層堆積状況（北西から）



SK-95 スロープ部土層堆積状況（北西から）



SK-95 遺物出土状況（南東から）



SK-96a 完掘（南西から）



SK-96a : 1・2 室（西から）



SK-96a : 1 室（南東から）



SK-96aA-A' 土層堆積状況（北から）



SK-96aB-B' 土層堆積状況（南から）



SK-106 完掘（南西から）



SK-106 北部完掘（南から）



SK-106A-A' 土層堆積状況（西から）



SK-106B-B' 土層堆積状況（南東から）



SK-106A-A' 土層堆積状況南側アップ（北西から）



SK-115 完掘（南から）



SK-115:1 室 (南から)



SK-115:1 室北西端 (南東から)



SK-115,SZ-27 重複部土層堆積状況 (南から)



SK-115B-B' 土層堆積状況 (南西から)



SK-116 完掘 (北東から)



SK-116 豎坑部 (西から)



SK-116C-C' 土層堆積状況 (北西から)



SK-116B-B' 土層堆積状況 (南から)



SK-78 平成 25 年度調査区完掘 (南西から)



SK-78B-B' 土層堆積状況 (東から)



SK-78・202 重複状況 (東から)



SK-78P3・6 完掘 (北から)



SK-78P4・5 土層堆積状況 (北から)



SK-83a 完掘 (東から)



SK-83a 土層堆積状況 (北から)



SK-88・89 完掘 (北から)



SK-89 完掘（北東から）



SK-89 土層堆積状況（東から）



SK-89 遺物出土状況（北西から）



SK-89 遺物出土状況（北東から）



SK-96b 完掘（北西から）



SK-96bA-A' 土層堆積状況（北から）



SK-96bB-B' 土層堆積状況・SK-96a 重複状況（西から）



SK-96b 遺物出土状況（西から）



SK-101 完掘 (南西から)



SK-101B-B' 土層堆積状況 (西から)



SK-114 完掘 (南西から)



SK-119b 完掘 (西から)



SK-119b 土層堆積状況 (東から)



SK-126b 完掘 (北から)



SK-126b 土層堆積状況 (北から)



SK-78・202 完掘 (東から)



SK-202A-A' 土層堆積状況（北から）



P-97 完掘（南西から）



P-98 土層堆積状況（西から）



P-99a・b 土層堆積状況（東から）



P-98・99a・99b 完掘（南から）



SK-89 調査状況（東から）



SA-2,SD-3 完掘（北から）



SA-2,SD-3 完掘（南から）



SA-2D-D' 土塁盛土状況（北西から）



SA-2C-C' 土塁盛土状況（南東から）



SA-2,SD-3D-D' 土層堆積状況・SZ-1,SA-2,SD-3 重複状況（北から）



SD-3D-D' 土層堆積状況アップ（北から）



SA-2,E10c グリッド粘土確認状況（南から）



SA-2b 区遺物出土状況（南西から）



SA-2a 区遺物出土状況（南西から）



SA-2B-B' 盛土遺物出土状況・SD-4 重複状況（南西から）



SD-4 全景 (南西から)



SK-121 土層堆積状況 (南から)



SK-121 出土状況 (西から)



SK-121 針金アップ (北西から)



SK-121 針金2アップ (北から)



SK-121 土器底部出土状況 (南から)



SK-121 掘方完掘 (南から)



SK-130 完掘 (北西から)



SK-130 土層堆積状況（北から）



SK-130 遺物出土状況（北西から）



SZ-1 頂部推定稲荷社跡（東から）



SD-70a 完掘（南から）



SD-70a A-A' ~ D-D' セクション土層堆積状況（南から）



SD-70a F-F' セクション土層堆積状況（北から）



SD-70b 完掘・土層堆積状況（北西から）



SU-118 確認状況（東から）

図版四五 時期不明 土坑・ピット



SK-11 完掘 (南から)



SK-13 完掘 (南から)



SK-14 完掘 (南東から)



SK-15 完掘 (南から)



SK-18 完掘 (南から)



SK-19 完掘 (南から)



SK-20 完掘 (南から)



SK-21 土層堆積状況 (東から)



SK-22 完掘 (南から)



SK-24 西土層堆積状況 (東から)



SK-28 土層堆積状況 (南から)



SK-29 土層堆積状況 (南から)



SK-40 土層堆積状況 (東から)



SK-44 完掘 (東から)



SK-45 完掘 (南から)



SK-57 完掘 (南から)



SK-80 土層堆積状況（北から）



SK-81 土層堆積状況（南から）



SK-90 土層堆積状況（東から）



SK-91 完掘（北から）



SK-206 完掘（北東から）



P-207 完掘（北東から）



SK-211 完掘（北から）



SK-84 土層堆積状況・完掘（南から）



SK-100 土層堆積状況（北西から）



SK-102 土層堆積状況（北から）



SK-125 土層堆積状況（東から）



SK-122・123 完掘（東から）



SK-122 土層堆積状況（南西から）



SK-123 土層堆積状況（南から）



SK-126a 完掘（東から）



SK-126a 土層堆積状況（北から）



SK-129a・b 完掘（東から）



SK-133 土層堆積状況（南から）



P-204,SK-205 セクション（北西から）



SK-210 完掘（北から）



P-62 土層堆積状況（東から）



P-94 土層堆積状況（南東から）



P-104・105 土層堆積状況（南から）



SK-25 完掘（南西から）



SK-26a・b 土層堆積状況（南東から）



P-92a・b 土層堆積状況（南東から）



P-93 土層堆積状況（南西から）



P-110 土層堆積状況（南東から）



P-111a・b 土層堆積状況（南東から）



P-112 土層堆積状況（南東から）



P-113 土層堆積状況（南東から）



SK-208 土層堆積状況（南から）



SK-215,P-216・217 完掘 (北東から)



SK-215,P-217 土層堆積状況 (北から)



SK-215,P-216・217 調査状況 (北西から)



P-128a 完掘 (東から)



P-132 土層堆積状況 (南から)



S-107 ピット群全景 (西から)



S-107P1 完掘 (南から)



S-107P2 土層堆積状況 (南から)



S-107P3 土層堆積状況（南から）



S-107P4 土層堆積状況（南から）



S-124 ピット群（南東から）



S-124P1 完掘（北から）



S-124P2 土層堆積状況（南から）



S-124P3 土層堆積状況（南から）



S-124P4 土層堆積状況（北から）



S-124P5 土層堆積状況（南から）



S-124P6 土層堆積状況（南から）



S-124P7 土層堆積状況（南から）



調査前現況（北東から）



調査前現況（東から）



調査区西側遺構確認状況（東から）



調査区東側遺構確認状況（南西から）



調査状況（南東から）



調査後現況（北西から）

図版五四 旧石器時代の遺物



旧石器



旧石器時代 不掲載遺物



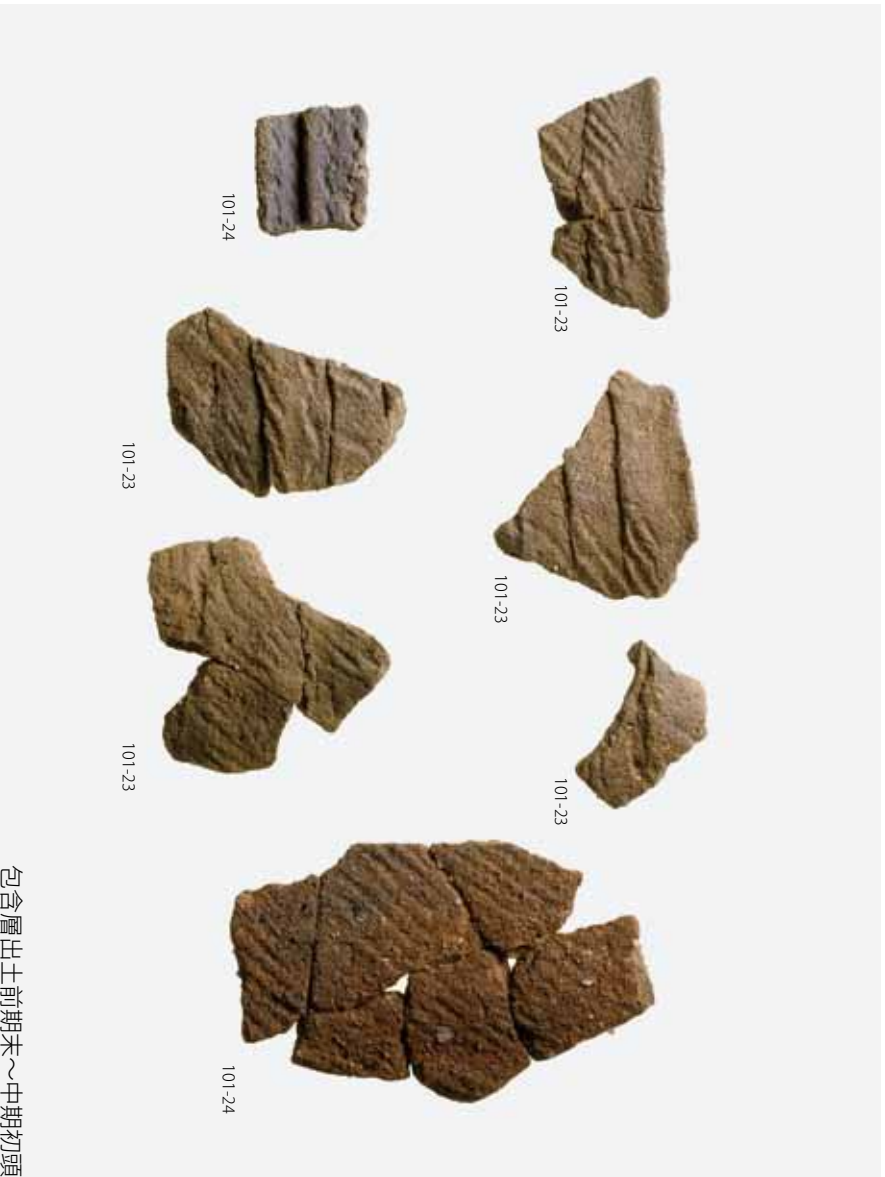
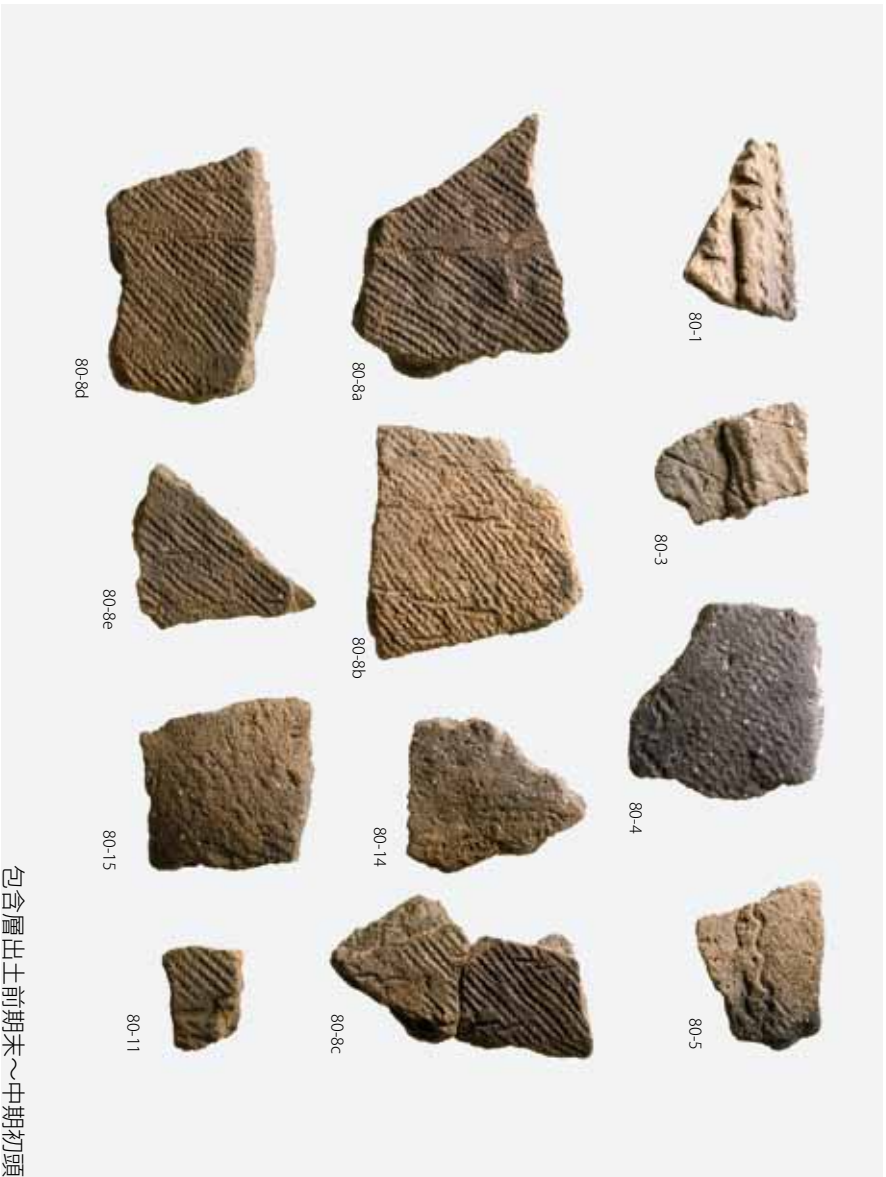


包含層出土草創期撚糸紋系



包含層出土早期条痕文系







54-2



54-3



86-2



86-3



86-5



86-5 内面



103-2



103-3



110-1

図版六〇 縄紋時代の遺物 6



器台



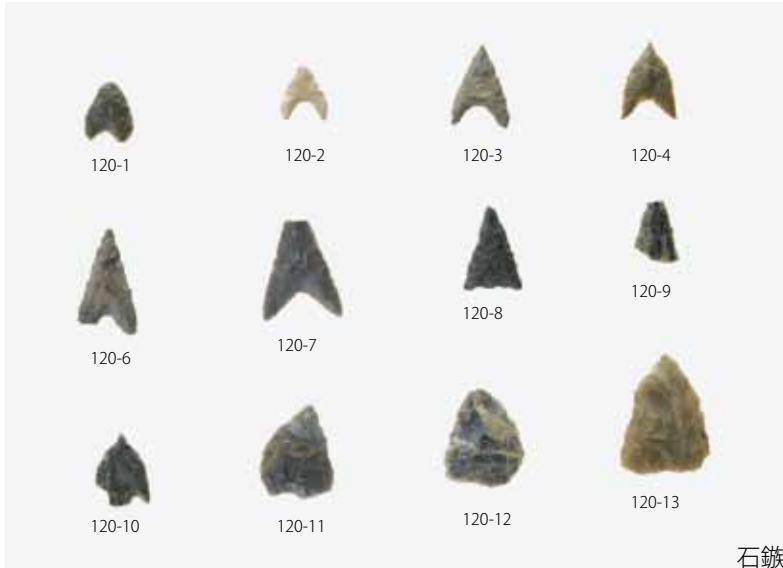
蓋



土製品



焼成粘土塊



石鏃



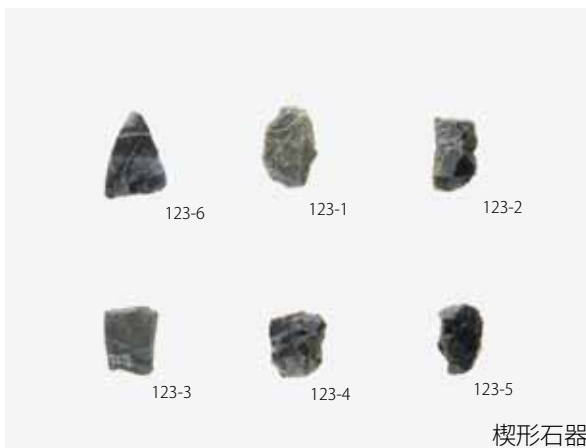
石匙



石鏃



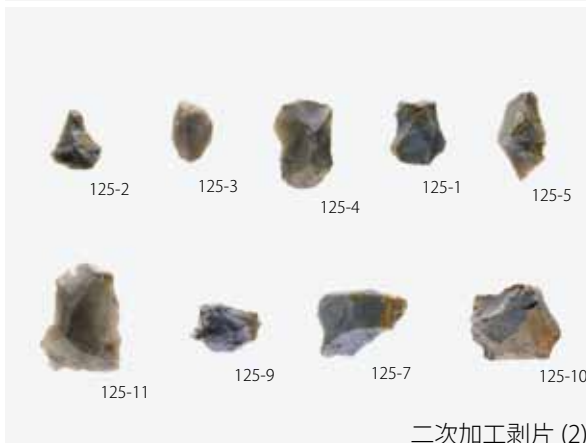
土製円盤



楔形石器



二次加工剥片 (1)



二次加工剥片 (2)



二次加工剥片 (3) 旧石器時代・縄紋時代



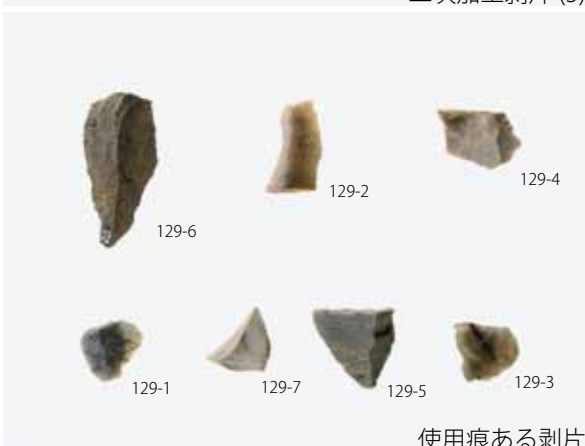
二次加工剥片 (4)



二次加工剥片 (5)



二次加工剥片 (6)



使用痕ある剥片





149-1

石製品



162-1

162-2

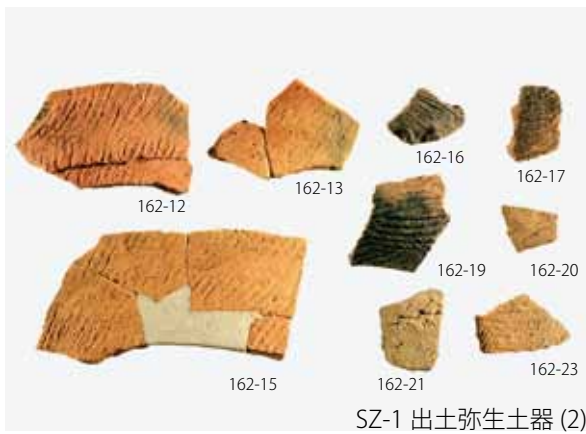
162-3

162-4

162-8

162-10

SZ-1 出土弥生土器 (1)



162-12

162-13

162-16

162-17

162-19

162-20

162-15

162-21

162-23

SZ-1 出土弥生土器 (2)



170-2

170-1

170-3

SZ-66 出土弥生土器



178-1

178-3

178-2

178-4

178-5

SZ-67 出土弥生土器 (1)



178-6

178-7

178-9

178-12

178-13

178-14

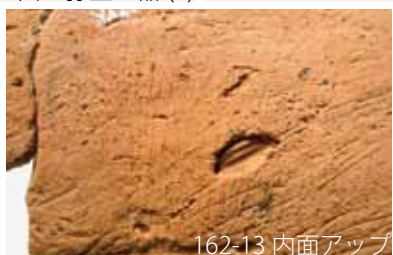
178-14

178-16

SZ-67 出土弥生土器 (2)



162-13 内面



162-13 内面アップ



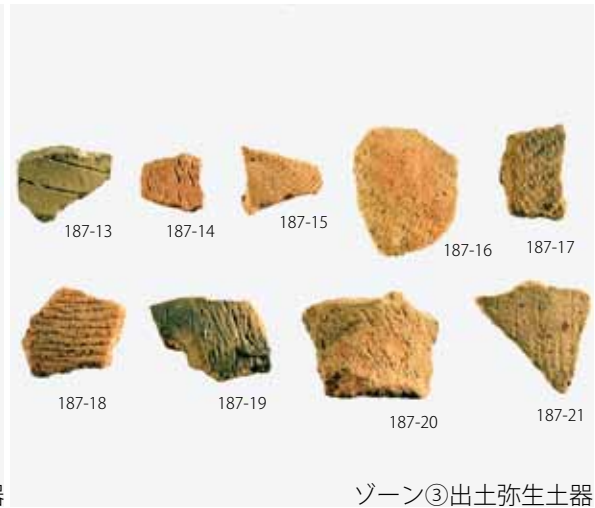
182-2

182-3

182-2・3



ゾーン②出土弥生土器



ゾーン③出土弥生土器

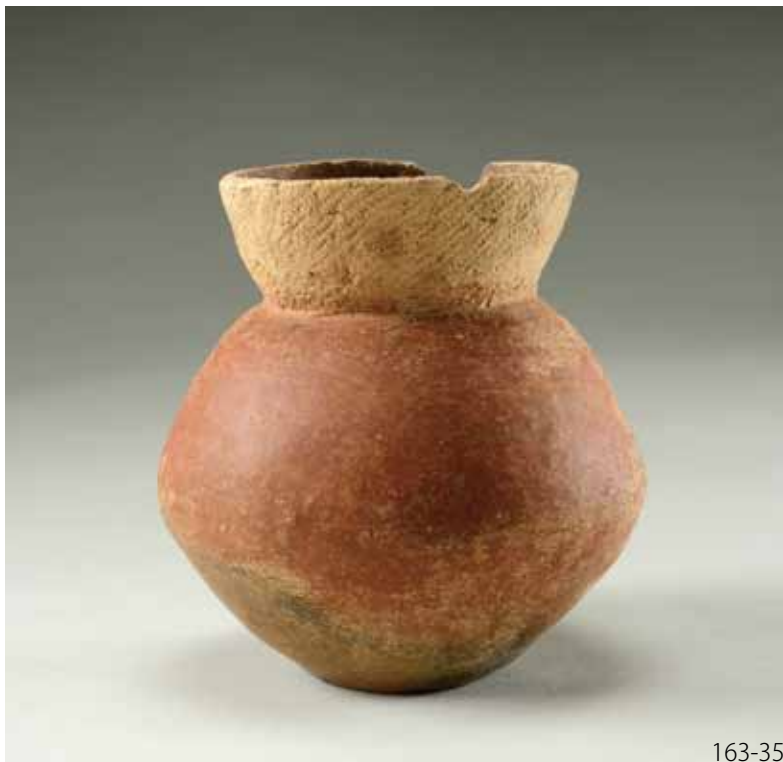


調査区内出土弥生土器



横倉戸館1号墳出土弥生土器





163-35



163-35 頸部



163-35 口縁部



163-35 口縁部アップ



163-36



163-36 底部



163-37



163-37 底部



163-38



163-38 底部



163-39



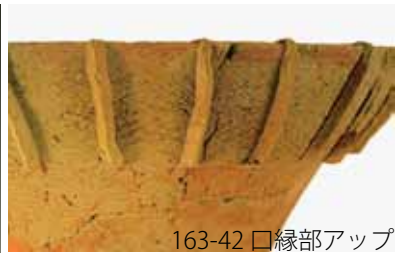
163-40



163-41



163-42



163-42 口縁部アップ



163-42 口縁部内面アップ



163-42 体部アップ



163-42 体部アップ



165-1



166-2

166-4

SZ-1 主体部出土鉄製品 (1)

図版六七 弥生・古墳時代の遺物 5



SZ-1 出土土器



166-3

SZ-1 主体部出土鉄製品 (2)



170-8



170-9



170-6 内面



170-6



170-10

170-11

170-12

SZ-66 出土鉄製品



171-1



178-18



179-21

179-22

179-23

179-24

179-25

179-26

SZ-67 出土鉄製品



178-19



182-1



ST-72 出土時復元



182-4



186-1



188-2



188-3



188-7



188-7 内面

図版七〇 弥生・古墳時代の遺物 8 古代 1



188-5



188-9



192-10



195-1



195-2



195-5



195-6



195-7



195-8



195-6 線刻アップ



195-9 底部・線刻アップ



195-9



195-10



195-13



195-14



195-15



197-8



195-17



196-20



196-21



196-22



196-23



196-30 196-31
196-32 196-33
196-30 ~ 33



196-35 196-36
196-37 196-38
196-35 ~ 38



196-41 196-42 196-43
196-44 196-49
196-41 ~ 44・49



195-17 外面



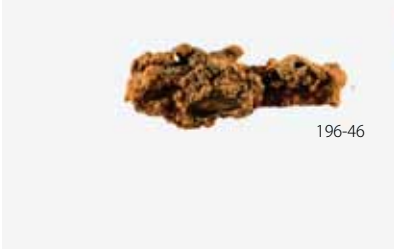
196-45



196-47



195-17 内面



196-46



196-45 ~ 47



203-1



203-2 内面



203-2 外面



206-2



206-2 内面



206-3





232-8



232-12 ~ 15



232-32



232-35



232-8



232-37



232-38



232-39



234-52



SA-2 出土火鉢内面



234-57



234-59



SA-2 出土火鉢外面



234-64



234-64 底部



234-61 ~ 63 内面



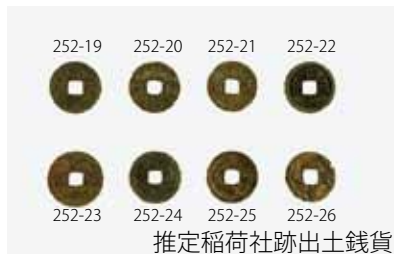
234-66・67



234-61 ~ 63 外面









253-4



253-8



253-17



253-31



258-1

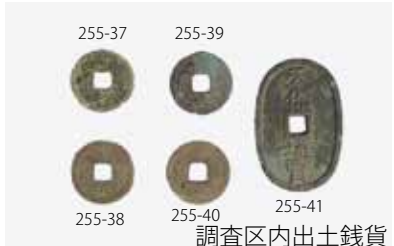
258-3



258-4

258-5

SU-118 出土遺物



255-37

255-39



255-38

255-40

255-41

調査区内出土銭貨



263-5



263-6



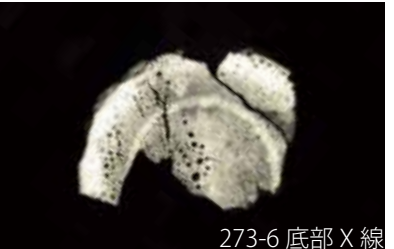
264-1



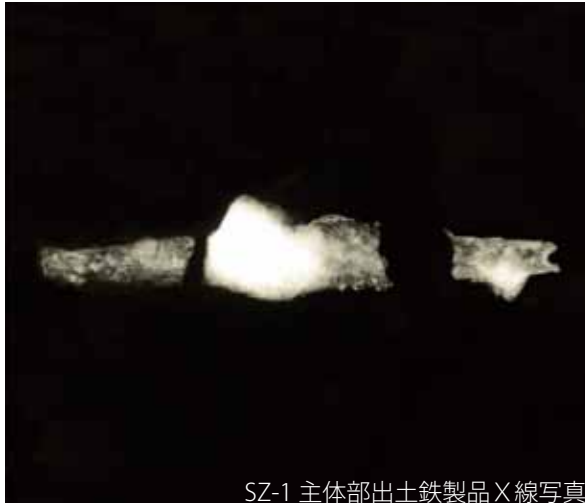
273-6



273-6 底部



273-6 底部 X線



SZ-1 主体部出土鉄製品 X線写真



SZ-66 主体部出土鉄製品 X線写真



縄紋時代の出土土器



古墳時代の出土土器



古代の出土土器

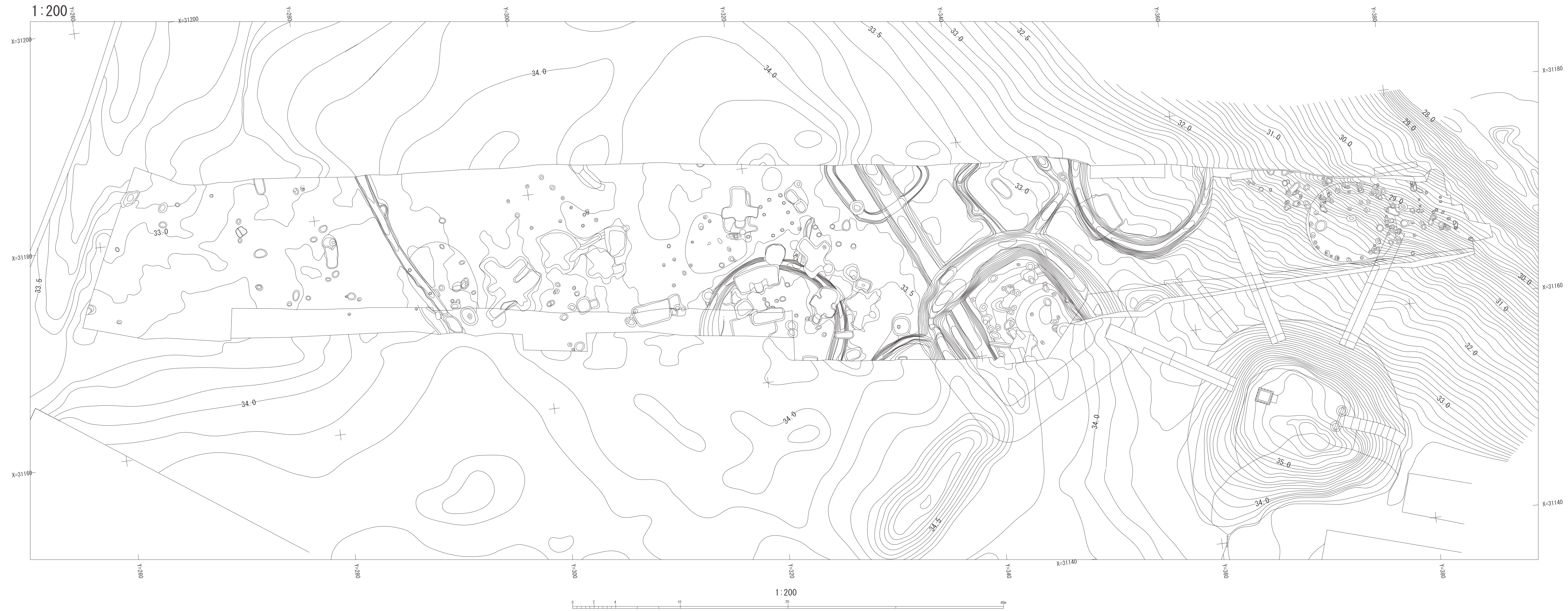


近世の出土土器



横倉遺跡・横倉戸館古墳群 調査区位置図

横倉遺跡・横倉戸館古墳群全体図



報告書抄録

ふりがな	よこくらいせき・よこくらとだてこふんぐん
書名	横倉遺跡・横倉戸館古墳群
副書名	快適な道づくり事業費（交付金）一般県道矢畑横倉新田線横倉工区に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	栃木県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第383集
編著者名	齊藤達也 江原 英
編集機関	公益財団法人とちぎ未来づくり財団 埋蔵文化財センター
所在地	〒329-0418 栃木県下野市紫474番地 TEL 0285-44-8441
発行機関	栃木県教育委員会 公益財団法人とちぎ未来づくり財団
発行年月日	西暦 2016年3月29日（平成28年3月29日）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
よこくらいせき 横倉遺跡・ よこくらとだてこふんぐん 横倉戸館古墳群	おやまし 小山市 よこくらちない 横倉地内	09411	58	36° 75' 13"	140° 12' 63"	2012.12 ～ 2013.5	2,122 ㎡	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
横倉遺跡・ 横倉戸館古墳群	集落	旧石器時代 縄文時代	竪穴住居跡	3	石器 縄文土器・石器・土製品・石製装飾品	縄紋時代の遺構のうち、台地斜面下方において確認された堀之内2式中段階の住居跡（径8m）が注目され、玉類やほぼ完形の注口土器等が出土した。またピット内から折り重なるようにして出土した土器は1個体に復元され、破片分割設置の事例として注目される。今回の調査で、横倉戸館古墳群の築造年代が古墳時代前期～中期になることが判明した。また、弥生時代後期の壺型土器の胴部と古墳時代前期の土師器壺の胴部を合口に組み合わせた土器棺墓が確認された。 調査区中央に位置する土塁と堀跡は、18世紀後半～19世紀初頭頃の遺構であると判断された。
			溝跡	1		
			土坑・小穴	73		
	集落 墓域	弥生時代 古墳時代	古墳	3	弥生土器 土師器・須恵器・鉄製品	
			方形周溝墓	1		
			土器棺墓	1		
	生産遺跡 集落	平安時代 中世	溝跡	1	土師器・鉄製品・鉄滓・羽口 土師質土器・内耳土器・陶器・金属製品	
			竪穴建物跡	1		
			掘立柱建物	2		
	屋敷跡	近世	地下式坑	9	陶器・磁器・焙烙・土師質土器・砥石・金属製品・石製品・ガラス製品	
			土坑・小穴	21		
			堀跡	1		
土塁			1			
推定稲荷社跡			1			
			溝跡	1		
			土坑	2		

要約	
	<p>旧石器時代では暗色帯より上位のハードローム層である基本層序V層上位から黒曜石製の剥片、チャート製の剥片、頁岩製の剥片が出土している。V層の下位からはチャート製の二次加工剥片が1点出土した。また、調査区内からも二次加工剥片が3点出土している。</p> <p>縄紋時代の遺構は竪穴住居跡・溝跡・土坑・ピットを調査し、特に台地斜面下方において確認された堀之内2式中段階の住居跡が注目され、径8mを超える規模の主体部と入口部ピット群を擁する。本住居跡からは玉類やほぼ完形の注口土器等が出土した。またピット内から折り重なるようにして出土した土器は1個体に復元され、破片分割設置の事例として注目される。</p> <p>弥生時代は、中期末～後期後半の時期の土器片が一定量出土しており、この時期の集落が周辺に存在する可能性が考えられる。</p> <p>古墳時代は、方墳（1基、推定17.5m）・方形周溝墓（1基、推定9.4m）・円墳（2基、13.6m・13.7m）・土器棺墓・溝跡・性格不明遺構を調査した。方墳の周溝からは、口縁部に棒状浮文を貼り付ける壺や、口縁部および胴部に文様を施す壺が出土した。土器棺墓は弥生後期の壺型土器の胴部を「蓋」に、土師器壺の胴部を「身」として合口に組み合わせたもので、古墳時代の事例としては県内唯一の希少な事例である。方墳・方形周溝墓・土器棺墓が古墳時代前期、円墳2基が古墳時代中期の古墳であることが判明した。また方墳と方形周溝墓は主体部が確認されており、両者から鉄剣が出土している。調査区内における古墳では、前期の方墳→前期の方形周溝墓→中期の円墳という変遷を確認することができ、横倉戸館古墳群の時期・内容を一部ではあるが明らかにできた。</p> <p>古代の遺構は鍛錬鍛冶工程が主体と考えられる、平安時代の鍛冶関連の竪穴建物跡が1軒調査された。</p> <p>中世では掘立柱建物跡・地下式坑・土坑・ピットが調査された。台地平坦面に地下式坑が集中してみられる状況を確認した。</p> <p>近世以降では土塁・堀跡・溝跡・土坑・推定稲荷社跡が調査された。調査区の中央で最大幅10mの土塁と最大幅3mの堀跡が平行して確認され、出土遺物から江戸時代後期と判明した。</p>

栃木県埋蔵文化財調査報告第 383 集
横倉遺跡・横倉戸館古墳群

— 快適な道づくり事業費（交付金）一般県道矢畑横倉新田線横倉工区に伴う発掘調査 —

発行 栃木県教育委員会
宇都宮市塙田 1 - 1 - 20
TEL 028 (623) 3425
公益財団法人とちぎ未来づくり財団
宇都宮市本町 1 - 8
TEL 028 (643) 1011
編集 公益財団法人とちぎ未来づくり財団
埋蔵文化財センター
下野市紫 474 番地
TEL 0285 (44) 8441
発行日 平成 28 年 3 月 29 日発行
印刷 下野印刷株式会社
